完全なる予定違い より予期せぬ未来を求めて…

埼玉ペンギン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
完全なる予定違い　より予期せぬ未来を求めて…

【Ｎコード】
Ｎ３６８２Ｐ

【作者名】
埼玉ペンギン

【あらすじ】
次話１９日投稿です

偽予告　フロンティアに襲いかかるガリア４から出たバジュラ艦隊。
直撃くらい炎上するバトルフロンティア…
運命は如何に？

すんません思いつきで投稿いたします

本人初執筆です　よろしくお願いいたします

設定上は
オリ主はＭｕｖ－Ｌｕｖの知識０の状態でＭｕｖ－Ｌｕｖの世界に……なります

またオリキャラもありですのでご了承を

１話から７話は勢いで書いてしまった…ある意味後悔

８話からはある意味ペースを重視してます

途中ある人物加入後初期プロットは崩壊してます…
が、やっぱり理想の形を目指して頑張ります。

ヒルダさん……「モオ、ド・オ・ニ・モ・トマラナイ～♪」と歌ってます。

プロローグ

そうそれは、何の些細な違いか…　予定外の力が働いたのか??

……

ｓｉｄｅ　～俺～

「いや～悪かったね～」

へ?ここは……　俺は、確か……Ｍｖ単車の運転してて……

信号無視してきた赤い自転車に真横から突っ込んで……俺死んだの??

「うーむ　うんそうじゃ　で、そこからが記憶ないようじゃの?

そこに事故見学してたわしがいて、わしの方におぬしの体が突っ込んできたんじゃ

予定では死ぬ筈ではなかったのだが、悪かったのう」

へ…?心の声よま「うんよんどるよ」…　あ～　はいはい、で…死神様?に「いや神じゃ」えっと神様に自分の体が突っ込んでいってどうしたのです??

「いやのう、おぬしの体が飛んできたから思わずはたいて……潰してしまったのじゃ…悪かったのう」

あ～～～　まぁ理解します、所で相手の方は??

「携帯持ちながら自転車乗ってた女子高生の事じゃの?腰の骨を折る程度の重傷じゃよ

視界悪い為の信号機だったのにのう」

とりあえず無事だったんですね「予定外のおぬし以外はな」で、神様、復活は「無理じゃ」あ……　はい「じゃがわしのせいでもある　よって第二の人生を別世界によって授けよう」

何で別世界?なら今復活させても「だから無理じゃ　おぬしは死んだのじゃ、その因果はもう壊せない　で、元世界だとおぬしは別人

になる記憶もの　なので別世界にサービスつけて転生もちろん肉体つきてとわけじゃ」
はぁ……「もちろんそのサービスは、物語の力である」え?:まさかエヴァとかも?「そうじゃ肉体で再現できるぞ人間Ｓｉｚｅで」じゃあＡＴフィールドは欲しいよなぁ…で各使徒の力とか「う～む
　ＡＴフィールドは可能じゃの　後はもう少し絞ってくれ」
え～と……　サキエルのパイルや光線、シャムシエルの飛行と触手、ラミエルの加粒子砲、ガギエルの水中能力、イスラフェルの分裂合体、サンダルフォンの熱耐性、マトリエルの溶解液、
サハクィエルの宇宙航行能力、イロウルの能力、レリエルの虚数空間、バルディエルの寄生浸蝕改造能力、ゼルエルの力、アラエルの…アルミサエルの精神浸蝕だねを遠距離で、
だね～「人間やめとるのう…ま、良いじゃろ外見上は渚カオルで再現したぞ
さてこんなもんじゃろか」あ～まさに戦闘系…ゼロ魔の世界にいったら「可能じゃぞ」え?ゼロ魔の世界に是非お願い致します　原作の４年程まえあたりで…あ、じゃあ虚無魔法も杖無し可能で「あ～わかったわかったほれ　じゃよいかの?ほほう、ハーレ…」神様!「助平じゃのう…わしとおぬししか居ないのに…ま、じゃ送るぞ」
はい　いってきます
と、俺は穴に落ちていった……
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「助けて……誰か、タケルちゃんを助けて!!」

そう、神の力を歪めた願いがまさに……

第一話　物語の始まり２００１年４月２２日（前書き）

本人能力の使い方を学び始めます

第一話　物語の始まり２００１年４月２２日

ｓｉｄｅ～俺～

穴を落ちて行くと、気を……

ううん……ここは？
意識を回復しながら目を開くと…　想像してたハルゲニアの緑美しい……赤土だらけの……え？
「は……？え……？……」
……かれこれ暫くほうけている……
何処だ？ハルゲニアのにこんな赤土だらけあっただろうか？？
ん～ハルゲニアでなくとも、別大陸かな…？ん～～～わからん…
別大陸なら人の手が入ってる設定原作にはあんまりなかったし、赤土だらけ…の平野？？ん～～～
わからん……しょうがない、探すしかないか……　能力もちゃんと確かめないとな…シャムの飛行どうだすんだろ？？やっぱ此処は叫ぶのかな？？
「シャムシエル！！」
少し赤面しながら叫ぶと　何と説明すりゃいいんだか、ようわからん体が
「あへ～～～～！！」
はい、急に空にロケットスタートしました　体が体が　音速越えて……どうやって制御すりゃいいんだ！！　……

何となくわかってきたような…　思考で力を制限するんすね……
さっきは上に飛びたいなの一心だったので最大級の力のもと……

幸い自動的にATフィールドを進行方向にはってたみたいで…
「はぁ……」
とそうだなさて此処が何処だか調べないと……あと宇宙航行能力もあるんだよ…ね…??
ん~自動なのかな??まぁちょっとずつ出れば……
そういえば高度が高くなると酸素や寒さが…だったよなぁ…??
ん…大丈夫みたいだな…　多分これも自動的なのかな…?
うっし、行くか……

「ほ~…ガガーリン、地球は赤かった……」えっとまず呼吸については自動的にしてない模様です…で気圧に対しても大丈夫な模様…人間やめてますが、問題が…確かに地球に似てる大陸図です　はい、ハルゲニアがないんですね…
しかもハルゲニアの所が赤いんすよ…緑がないんすよ……?なんで…?で良く見れば山とかの起伏がないような……
確かハルゲニアは、ヨーロッパ大陸の辺りに位置してる筈だし、浮遊大陸もあるはず…それがどっこも目をこらしても赤く、またない状態
ん~~~ますますわからなくなってきてるなぁ
となると　ここが地球だとして東の日本目指しますか、じゃあ再突入~

第一話　物語の始まり２００１年４月２２日（後書き）

ハルゲニアではなかった模様と自覚しました
まだ人とあってません

とりあえず日本を目指す模様です

第二話　本人　日本へ向かって　歩きだす（前書き）

歩き　歩き　歩き　まずは徒歩で探索をしようとします

第二話　本人　日本へ向かって　歩きだす

ｓｉｄｅ～俺のまま～

いい加減何か見つけたいなぁ……ほんと、何処の世界にほうり込んだんだ？あの神、アフターケア位しやがれつうの！！

ゼロ魔の世界でハーレムウハウハしたかったのに！！
歩いても歩いても赤土だらけ、建造物見つからね～し……、
やっぱり大気圏外からみた赤は、植物もない土の世界だったんだなぁ…

でも、土の世界？？ん～　建造もない世界ってあったかなぁ？
何か、山もかなり削られてるように見えるし…
「ん？」　あ、何かあった…　（と拾って見てみる）
「コンクリか？、かなりん～破砕されてるみたいだけど……」

（歩いてなかったら、また、たまたま色がついてなかったら見落としてた位な物）

おっし、文明はあるっう事かな？か…または最悪滅んだ……

え……、ちと心配、……流石にシンジのように、誰も居ない世界でなんかやだよ…まさかねぇ……

でもこのコンクリ片見ると…いや、まさかね

まさか…まさか…まさか……

ちと、ほんと神様やだよ……　泣けてくるよ……　あ、泣けて…やだよ…　気狂いそうだよ…
なんでこんな世界にほうり込むんだよ…　まさか世界に一人？？？
　どんな破滅的なんだよ……
ジョセフをぶん殴ろうと思ったのが悪いの？アンとウハウハしようとしたのが悪いの？
ウェールズを見殺しにしようとしたのが悪いの？？ルクシャナとウハウハしたいと思ったのが悪かったの？？なんなんだよ！！　此処はどの世界なんだよ！！

「シャム　シエ　ル！！！！！」　泣きながら叫び、飛行しはじめる……

暫くすると　目に何が見えはじめる

あ、な……　なんかが　誰かいるのか…？？　誰か……
かなりはっきり見えてきたぞ、えっと　円筒型の……何だ……？あれ

ふと気になって地上におりはじめた、
そう…それがこの世界の異凝な物との遭遇であるのに……
本人はまだ知らない……

第二話　本人　日本へ向かって　歩きだす（後書き）

さて、何と遭遇するかはお分かりですよね？
また何をみたかもお分かりですよね？

本人は全くわかっていません

第三話　本人…何と…？？（錯乱注意）（前書き）

何と遭遇するかは……

第三話　本人…何と…？？（錯乱注意）

ｓｉｄｅ～俺～

はぁ良かったぁ　文明が何かわからないけどありそうだし…　でも、あの円筒型のなんなんだろう…？

と気になりながら着地する……

ん～　何だろ…？　とりあえずいく……ん？　何かが…？　何だ？

（ちょうど視線の先の方から何かが　こっちの方に来ているようだ）

何かの　生物みたいだなぁ…ん～　ん～　ん！！　え…　な　……

ｓｉｄｅ～俺ｏｕｔ～

”俺”は思考が停止したように動きが止まった

その異凝な物が近寄って姿がはっきり見えはじめたからだ

丈は２ｍ程、頭ずんぐりで、大きな口、つぶらな瞳、

そう、この世界で俗にいう兵士級との初遭遇である

ｓｉｄｅ～俺～

え……あ……な、な、なん、なんなんだよ、　な　なんなんだよ

なに　こいつ、　なんなんだよ、　なんで　こっちに　くんだよ　、

なんなんだよ、

生き物？　い　や　地球の　でな　い　、　なんなんだよ

え？？　？？　うぉ！！

（後方にとびのく）

な、な、　こいつ　おれをくおう　と　した？

いや　いや　いや　だ　い　やだ　いやだ　いやだ　いやだ　いやだ　いやだ　いやだ　いやだ　いやだ……

ころしてやる　ころしてやる　ころしてやる　ころしてやる　ころしてやる　ころしてやる　ころしてやる　ころしてやる　ころしてやる

こいつ　殺す！！！

「パイル！！」

ｓｉｄｅ～俺ｏｕｔ～

”俺”の右手がすごい勢いいで変形しはじめるのを感じはじめる…

そう、サキエルのパイルバンカーの能力を使って串刺しにしてやろうと全力で思ったからだ　そしてパイルバンカーが完成し…

「うぉおおおおおおおお！！！」グシャ！！

俺は少しジャンプし、パイルバンカーの先端部分を、やつ頭にあたるだろう部分にあてると一気に撃ち込んだ

そう、エヴァでさえも貫いたあのパイルバンカーで…まさにオーバーキルであろう

貫く時にやつの血が一面に　もちろん俺にもかかろうとしたが、ＡＴフィールドを盾にしたためかかる事はなかったが…　血生臭い異

臭が…
「はぁ　はぁ　はぁ　はぁ」
肉体的には疲れはない、が精神的にかなりの疲れを感じた

「はぁ　はぁ　はぁ　はぁ…う〝　ウ〝エ」
何も食べてはないのに、胃酸が逆流する感じがでて戻し、いや、嘔吐してはない
人間を捨てながらも人間である感情……それが嘔吐する幻覚というだろうか…を呼びおこしていた
そう、俺はかなりまいってしまった

特に、人類が生存しているから、否定、で、会った異凝なものにいきなり喰われかけ、
そのまま勢いのまま貫き、貫いた瞬間の感触等
神にいじって貰ったとはいえ、元はただの現実世界の住民であるいきなり戦えた事でさえ奇跡であるだろう

暫くは立ち直れそうにもなかった

が時間は待つことを知らない…世界は非情である

第三話　本人…何と…？？（錯乱注意）（後書き）

初戦闘を経験しました
精神力に５０ｐのダメージをくらいました

第四話　一匹の何かと遭遇後（前書き）

時はまたない…

第四話　一匹の何かと遭遇後

「ひぃぃ！！」

そう、”俺”は情けない事に悲鳴をあげていた…力があるにも関わらず
そりゃ、で精神的にまいってしまった状態で息つく暇もないのに異凝なものが現れ沢山近寄ってきたからである

まずは先程貫いた異凝な物　これまた複数で先程のとは違い鼻？だろうな　象の様な長い鼻をもち二本、また複数の目…大きさは先程のよりかは一回りでかいやつ

また六本足（錯乱していてこの時点ではそう思い込んでます）の更にでかいやつ　勿論口は　噛まれたらひとのみだろう……

のが
わら　わら　わら　わらわら　わら　わら　　わら
わら　わら　わら　わら　わら　わら　　わら　わら
　わら　わら　わら　　わら　わら　わら　わら
わら　わら　わら　わら　わら　わら　　わら
わら　わら　わら　わら　わら　わら　　わら

とあらわれ、近寄りはじめたからである

「い、　い、い、いゃ　いゃ　いや　いやぁぁぁぁァあぁあ！！」

数にして　5？　6？　7？　0　いや　どんどん増えてくる…

俺一人に対してだよ……流石に錯乱し、混乱してる状態では対応す

らできない……

そう　このまま喰われるだろう……

おい、いいのか”俺”喰われて終わるぞ……

「いやぁぁぁぁ」

…　いつまで混乱　してるんだよ　物語ここで終わるぞ……

そうこうしてるうちに、近寄ってきて……

～～Ｆｉｎ～～

にさせるかぁ！

「ウ〝オオオオオ」

”俺”は体が巨大化しました元が使徒の力ですからね…錯乱し暴走というか…

少し記憶あります　思い起こすだけで、ウ〝ェ　吐き気が…

はい、異凝なやつらをく、　う　うぷ　くい　う　喰いました……

”俺”　がですよ？　ご都合主義でも…　なんであんなのを　喰わなきゃ　いけないんですか？？

体がいきなりぼこりと膨れあがって、１６m位になったのかな？

最初の異凝なやつが手に掴んで口に　う　うぷ

ほうり込んだので

で　かみ砕いて、　う〜　うぇぇ　泣けてくるよ…
で、　でっかいのを　掴んでヒキチギッテ、口のなかに…で、……
　すみませんこの辺りまでしか覚えてないです

気がついた時には、大気圏外に居ましたので……

はい、真っ先に吐きたかったですがもう戻りません

大きさは元に戻ってるのは大気圏内に戻ったさいに
やつに出会って確認しました

はい…　そっこう
「シャムシエル！！！！」逃げました

二度と喰いたくないですから！！！！！！
神の馬鹿野郎！！！

第四話　一匹の何かと遭遇後（後書き）

”俺”は、食べる事を覚えました

暴走モードを覚え?:?:ました

第五話　何かを何した後…２００１年５月だろうか？（前書き）

”俺”は　喰った事を非常に後悔してます

第五話　何かを何した後…２００１年５月だろうか？

もう喰いたくない……
その一心でまずは能力の再確認しなきゃと…、

ｓｉｄｅ～俺～

「はぁぁ……」
猛烈に後悔、なんであそこで　この力使わなかったんだろう……？
そしたら喰わ　う　うぷ
あの生肉と　いや　やめよ

ひたすら能力を考えよう
諸行無常の響きあり　……

まぁ一匹ずつ釣ってきて
あ、虚無空間は楽だなぁ……ほうり込んで全力ではなれて安全地帯
でだして試せるんだもん

とまずはパイルバンカー、
まだ貫く時の感触がイマイチやだけど…
ん～貫けないのないんじゃないのかな？？右手、左手両方ともなるし、　ただ建造物がなぁ…まだ試してないからなんともいえないが…
まぁあんまり接近しなくとも撃ち込めるのは良いなぁ
目測５ｋｍ位までは伸びるけど、精度かな？問題は…

次に光線…　力んで～「光子力ビーム！！」
少し溜めロスだが…これ使えば広域排除できるだろ

というか使っていれば……ｏｒｚ
が掛け声なければ威力おちるし…ん～
「サキエルよりか光子力ビームと唱えた方が威力強いの何故？？」
無発生連射も可能だが威力もおちるみたいだし…

さて　次に触手　これも両方の手が変化　し…一種のブレードだなぁ…　回転すりゃぁ…
輪切りが大量に生まれそうだなぁ～

飛行はもう慣れたから良いや

加粒子砲…「ラミエル！！」ん～　しょっと　右手が変化して　なんか溜めが長いんだよなぁ～
まぁでもたまやーだが　溜めで本来より弱体化してないかなぁ…？？
お、溜まったか
掛け声はっと…「狙い撃つぜ……デットエンドシュート！！」
ふう　スッキリ♪
でもこれ以外あんまりしっくりこないのは何故なんだろ？？

さてっと　水中はいいや、

分身　ん～～～～　（「メリメリ　バリ！！」）
「よう、〝俺〟」「よう」「まだ分かれる時が少し気持ち悪いんだよなぁ～」「だなぁ」「してこの後…」……

話が長引いた模様だ
「「合体～～」」　（「ググググ　パシ！！」）　最後の擬音はなんだろう？
さてと　溶解液はまぁ使えるなぁ　本物よりかよくなってないかな

？これ…
にほいも出ないし、溶かしてる物のにほいもしないし…
後はどういったものが溶けるかだよなぁ…

あとはイロウルとアルミサエルは　使えるないから後…
イロウルはコンピューターがいないからいらないこだろ
ゼロ魔の世界にいってても…だろうなぁ…
アルミサエルは…人が居ない事にはどうしようもないし…

バルディエルか…ん～～使えたら囮にできそうだが…飼っている間
食事はどうすんだろ？？
というかやつら食べ物食い尽くしてどう生活してるのだか…？？
まぁ……やつらには使いたくはないなぁ…

俺みたく体内にS2機関もって　まぁ…腹減った感は感じるが、
肉体的にはもつのとは別そうだからなぁ…

飼ったら飼ったらで餌に苦労しそうだし…あとはゼルエルの力か…
？？　これぱっかりは力試ししなきゃわからないが……
そういえば接近戦闘って、
パイルバンカー撃ち込んだ一回だけで、あとはひたすら掻っ攫って
　遠距離から撃ち込むだけだしなぁ……
力試ししなきゃ駄目か？？？

いやいややめとこ　やつら気持ち悪いし……

そういえば巨大化ってどうやるんだったっかなぁ？？
今だにできないし…ん～～
できれば足で踏み潰す事もできそうなのになぁ…まぁできないねだ

りはしょうがない
うん　能力の再確認はこんなものか…
しかし……ほんと、人類いない世界って…なんなんだろ
どうするの???
俺……
はぁ……

ん??　爆発音???　え?　あ　だ　だれ　かいるん??「シャムシエル!!!」
side～俺out～
そう”俺”は叫ぶと爆発音の聞こえた方向に向かい　飛び出していった……

第五話　何かを何した後…２００１年５月だろうか？（後書き）

さて…その先は？

第六話　この世界の何かと……

ｓｉｄｅ～？？？～

「ちくしょ！！だから無理だったんだ！！」
愚痴を叫んでた

ＢＥＴＡに迫られ仲間はどんどん減る
ふざけんな　援軍くるまで生き延びろ？？
こんな戦力でできる訳無いだろ！！

『た　　たすけてくれ！！』

ほら今また誰かの声がながれた　確かついこの間はいったばっかの
新人の……

『うわぁぁぁぁ　　ザッ！！』

サジタリウス４２のマーカーが消えた　多分やつだろう

残機何機だ？　　くっそ！！　１５　いや１４に減ったか　しか
いねーじゃねーか

そう俺はハイブ間引き作戦のＢ－１部隊にいた　　いたが…「く
そったれ！！」全滅だろ！！これは…
いつのまにか　こっちの担当は俺の部隊とお隣りさんの部隊しかい
ない
まだ補給物資のコンテナはあるものの、それを護らざるえなくなっ

ている
いや…護らないとすぐにやられちまう
護ってもやられちまう
逃げだそうにも辺りＢＥＴＡだらけ
ＮＯＥで離脱しようにも光線級がまだかたついてない
引き際を絶対間違えた隊長はあの世に既にいってる

『なぁ　タリス　どうすんだよこれ』　通信がながれた

古参の外人衛士だ…確かやつは朝鮮半島撤退作戦をいき…
『おい！！　俺ら　みすてら』
『ばかやろう！！ＣＰが援軍いれるったろ！！』
通信が割り込んできた…がそのＣＰ自体が反応しなくなってどの位たつのか…
現状いつかくる援軍がくるのを耐え忍ぶしかない…

弾薬はコンテナに沢山、元々１個連隊規模の補給用にようういされていたから
まだ沢山ある…

何処で間違えたのだろうか??
いつもの間引き作戦だったはず
だったはずで　いつものようにちょっかいをかけ、たはよいが…

予想を超えたＢＥＴＡがでてきやがった
本来司令部隊がいる場所は既にＢＥＴＡに占領されている

俺らの部隊はとりあえず補給コンテナのある地点までは　撤退でき

た　できたが…である

そうついた時には既に囲まれていた

何故?といいたい

耐えきれなくなったのだろうか?

消えたマーカー、サジタリウス１１が多分光線級に飛び上がった所をやられたみたいだ。爆発音が聞こえ衝撃波もきた

後方をまもってたやつだ

「くそ!!」

ますますＢＥＴＡの圧力が強くなってくる

またマーカーが一つ減る、そしてまた一つ

無線からは断末魔の声しか聞こえない…さっき愚痴ってた僚機はとっくにいった模様だ

「ダァ……　すまない　生まれてくる息子の顔　みれなかったな…」

俺は　トリガーを引きながら　あきらめていた…

すると、横からの衝撃て機体がひしゃげ飛ばされたようだ

声はもうでない……

僚機はまだ何機かは

戦っているようだ……

網膜投影越しに、なにかがうつった　あ　れ　は??が最後の

いしきに…

side～？？？end～

”俺”は急いでいた　そう爆発音が聞こえた方向にむかって　飛んでいた

そうすると……

「げ……」

やつらだと思うかなり巨大なのが見えてきた　４０m程か…　それ以外も２０m程のとか…それも大量に…

が爆発音はやつらの先の方向の筈　無視して飛びつづけようとするとATフィールドが展開した　やつらの集団の中から光線みたいなものを撃ってきたからだ

最初は一発だったのが、今は何十発…

音速近くで飛んでるのに正確に当てやがる…

うざくなってきた……

爆発音の方角から黒煙がのぼっている　それも十何本も…

そろそろ何かが見えてきてもよいが……

「あれは？ロボット？！？！」

やつらとロボットが戦っているようだ

機械生命体なのだろうか…　いや　モビルスーツ？？

とにかくあのロボットを救助した方が良さそうだに気がついた

やつらの圧力でまたひとつロボットが見えなくなったからだ

残り5体…いや4体

「く、間に合うか??」

音速突破し、ロボットに向かった

マニアワナカッタ……

そう最後の一体と思われるロボットが目のまえで上半身と下半身が分断された

いや下半身にやつらが手だとおもうが、あて下半身が無理矢理潰され勢いでとれたといっていいだろう…

「く!!しょうがない!!」　そう叫ぶと、そのロボットの上半身を虚無空間にほうり込み、一目散にこの場を離脱した…

流石にこの巨大な集団あいてにやる気はおきない…

大分離れただろうか?

虚無空間からさっきのロボットを引っ張りだしてみた

(はぁ　もう大丈夫だろうなぁ…　にしてもこのロボット……　なんだろう?)

(モビルスーツ??機械生命体??)

（モビルスーツならハッチがあるとおもうが……）

（あ、あった！！
ま、まさか人が？？？）

「ブレード！！」　シャムシエルの触手による高周波ブレードに右手を変化させた

ハッチなら中に人がいる…　その一心でなれない切断作業にはいったこのブレードも切りすぎて中にいる人を傷つけないように　で一苦労している

早く早くの心が焦りをよぶ…が深く入れすぎると殺しちゃう…から余計に焦りがでる

かれこれ二分位か？ハッチ部分が切断できた

ハッチ部分を殴り飛ばす

駆け上がり中を覗きこんだ

（ひ、人がいる！！）
目をつむっているから気絶しているのだろう

「大丈夫ですか？」言葉が通じるかわからないが　声かけた　反応なし

とりあえず横にしようと丁寧にわきに手をいれ　引き上げた…

上半身だけ……

「ウゲェー」

”俺”は気持ち悪さから吐きたかった

人の死体みるのも初めてなのだ…

腸がでろんとたれ、血は流れきったあとだろうか……

「はぁはぁはぁ……」

なんとか落ち着いてきた

モビルスーツらしきのをすこし調べると分断されたときにひしゃげてパイロットの下半身が潰され切断…したのだろう

あんまり中は気持ち悪いのでしらべなかった…

状況を少し整理しよう…

まずはモビルスーツらしきものと、やつらは戦っていた

人は全滅はしてなさそう　いや、やつらの方が強そうにみえる…

とりあえず人がいるのは確定したからこのモビルスーツらしきものの軍隊を探さないと…

は……日本は??

そう考えたら行動しなくっては…

とりあえず死体をすこし切れてない部分をしらべ認識標らしいタグをみつけた
かかれているのがわからない……ｏｒｚ
あとは　写真？
この人と娘さん？奥さん？　三人の写真だ…
届けられれば良いな…
タグとセットにして虚無空間内の小物いれにいれておいた

パイルバンカーで穴を掘り、死体を埋め土を被せ、墓標……

このモビルスーツらしきものの銃を手から引っぺがして墓標にたてた

そこまで作業し、お祈りしたあと
「シャムシエル！！」
一路東へ飛んでいった…

第六話　この世界の何かと……（後書き）

本人　やっと人類…死体と遭遇できました…

第七話”俺”はマヨッテイル

（え～と……どこだ……ｏｒｚ）

とりあえず海岸についたが…　正直自信がない……

そう迷子である…

（こんなことなら世界地理もっとやっとくべきだった……）

いや世界地理だけでないだろう
エスカレーター式の三流学校で最低限赤点をとらなきゃいいやで
中高時代は昼寝ですごし、今年そのまま大学に入る予定だった…

（確かまっすぐ東目指したから中国だろ、で朝鮮半島から渡る予定だったけど…）

何しろ人がいない、都市がないのである
海岸線までくると廃墟はみうけられるが……

（たしか北京の下に南京があってで更に南にベトナムだっけ？　北京の上に上海で、上海から右側が朝鮮半島だよな？？）

そう　ツッコミありがとうレベルなのである

まぁ　人がいても”俺”に現地の言葉が話せないわけだが……

また廃墟でもう看板すらみうけられない…

（ん～海岸沿いにとりあえず北？で釜山から南東目指せば日本だろ

うし…）

そう”俺”正解だ！！

（あっれ～でも南かなぁ？）

駄目だろ！！　寒くないだろ　ロシアでないんだし！！

（ん～～～とりあえず北？？いくか）

ととりあえず”俺”は海岸沿いを北へ飛んでった

ｓｉｄｅ～俺～

しかし…この世界の地形もやつらがやったのかな…

邪魔な起伏や建造物は削って…

まだいった事のないチベットやらも多分がりがり削られて…

平野や丘ばかりでほんと…　迷うよ…

しかし……本場の、中華料理…たべたかったのに…

たべれなかったか…

ｓｉｄｅ～俺ｅｎｄ～

かなり落ち込みながら北上す……

落ち込むとスピードが落ちるんだからモチベーションたもてよ”俺”

で…　そのまま海岸沿いに北上してると右手に段々曲がりはじめ

川　があり、で海岸線が南東方向に向き始める

（ん……朝鮮半島かな？　このまま進めば韓国で…突き当たり左で

釜山だよな？）

（あとちょいで日本だけど……まさかだよね？
でもあの人東洋人だからどっかの国は絶対残っている筈だし…）

考えながら朝鮮半島を南下する…

そして突き当たりとみられる海岸沿いから西進……

釜山あたりに到着

（ん～ここ釜山かな？？）

若干廃墟が残っている状態である

（若干疲れたけとあと少しで日本だな…）東洋人と遭遇した後、不眠不休で飛んできたので、若干疲労感が出てる

が…今は夜明け前　陸地も目標となる太陽もでてないので迷う恐れもある

（ん～角だからとりあえず南東にいけば日本なんだよな…多分こっちだけど…朝日がでるまでまつか…
やすめそうな場所探すかなぁ…）

探してみると…

「あ……」　モビルスーツらしきものの残骸がみえる

撃沈して少したつのだろうか？所々塗装がはげかかっている

（そういえば……まだこの世界のモビルスーツ調べてなかったよなぁ…死体なきゃ良いけど…）

コクピット部分が見当たらない
（…　ん?と　あ～足が潰れて機動できなくなって脱出したのかな??
コクピットごと脱出するシステムなのか……）
側にでっかいビルが倒壊した後がみえる
辛うじて避けたは良いが…なのだろう

（うっし、調査調査♪）
喜んで調べ始めた

（へぇ日本帝国??　撃震っていうんかぁ…　）
「イロウル」　ハッキングし始めた…　だがｃｐｕが見当たらない…
（コクピット部分に搭載されてたか…ｏｒｚ）

（ん～～～魔改造???）
「バルディエル!!」浸蝕し始めた

まずＣＰＵと直結してそうな駆動部分及び、動力部を変化させ、生体駆動＋Ｓ２機関をいれた
そうミニエヴァ（”俺”）外見撃震仕様である

コクピット部分は正直迷ったがＬＣＬを作れないから、エヴァ仕様にはできないので
手をつけれない…
ここは現物まちかな?と思い　改造は後ほど…

足の部分は　まだ生えさせないのでこれも後ほど…

外装は塗装がはげかかっていたので変化させ、
とりあえずカラーリングを赤にした

（武装か…ん～長刀みたいなのしかないなぁ…
しかも刃がすこしかけぎみ??
これは変えなきゃ）
が…知識がないのに気がつき……ｏｒｚ
とりあえず修復のみにとどまった

（材質強化でも良いんだけどビームアックスなど欲しいよなぁ……）
（あと弄れそうなのは…？）

「ふう…とりあえずここまでかな？」
で虚無空間のお気に入りに持ち込んだ
その後
（他にもないかなぁ～）と捜索し始めた…

で気がついたら夕方だったためかなり焦りながら方角確かめて日本
を目指したのはいうまでもないことだった……

自重しろ！！”俺”

第七話”俺”はマヨッテイル（後書き）

さていよいよ日本に……？？

第八話　いよいよ日本？？　投稿日２０１０１２１１（前書き）

日本海上空は　必死に急いでます…　時間ほうけて夢中になってたのでね

第八話　いよいよ日本??　投稿日２０１０１２１１

俺は猛烈に凹んだ…

（なんで??なんで??　日本だよね?ここ……
福岡ドームは??　中洲の可愛いねーちゃんは??
九州の豚骨ラーメンは??
なんで??）

日暮れると同時に日本と思われる大地になんとかついた
が、光もない　調べようにもわからない状態のため
一晩動かず休んで　朝になって調べ
福岡空港の残骸らしきのを見つけ冒頭に部分の状態になった…

ｓｉｄｅ～俺～

ひ、人は……　どこなん??

福岡がこんな調子だと……　日本は……

でも、あの戦っていたモビルスーツの所属の国は確実にあるんでしょ??

で、日本帝国はある筈なんだよね?釜山でみたし……

それともまさか滅んだ??

けど、確かガン○レだと　九州は幻獣に占拠され…岩国で徹底抗戦した筈だよな??

北は本州と北海道を分断目的で、青森辺りが戦場になった筈……

となると…北海道は無事かな??

うっし　とりあえず北海道目指すか…

この調子だと…大阪や東京もやばいかなぁ……

ｓｉｄｅ～俺ｅｎｄ～

＝関門海峡上空＝

（ん～やっぱり下関も駄目か……河豚料理が消えたか…　玄海灘産の味が……）

（と…北回りでいくか…松江のしじみ無事であってくれよ…）

＝＝松江＝＝

（ｏｒｚ……しじみ汁がぁ～～～…はぁ…
現世の時スタンプ位置ゲーしてた旅館も廃墟になってるし…
あん時の料理おいしかっなのになぁ……
しかも天然温泉付きで、５千円で泊まれたのに…）

（このまま温泉街も駄目かな?? この先で丁度鉄橋架け替えの為、ダイヤみたら駄目だったから折り返したんだよなぁ……）

＝＝餘部＝＝

（……余部鉄橋が……旧鉄橋が残ってる!!）

”俺”は感動した

現世ではすでに建て替えられて新型鉄橋になってた為だ…

起伏にとんだ地形がかなり残っていたためにやつらの進行ルートから外れたのだろう…

思わずアーチくぐりそのまま上昇、またアーチくぐり

どっかのシュミレーターの如く遊びにほうけた

ただ…　やはり人の保守の手がはなれたためか、鉄橋はかなり錆がうき、

満載貨物列車が通る際には倒壊の恐れがあるだろう

（残念だなぁ…人が残っていれば……）

そのまま東進……する…

＝丹後半島北端＝

（ここまでやっぱり人いなかったなぁ……

北海道には人が居るんだ!!ススキノ行くぞ!!

札幌みそラーメン食べるぞ!!）

……食べる事ばっか考えてるが、
この世界の通貨もたず食い逃げする気か？”俺”は…

（と…この北端から海上を東に進むと……
確か現世では原子力発電所、で福井県の確か南越前町だったよな？
で…そのまま北に進めば、福井市内で、その先に金沢、能登半島横断で、富山っと…
青春１８切符でスタンプ旅行いったとき、ゴーゴーカレーおいしかったなぁ…あるといいな……）

（あ、と…福井は確かすこし内陸部だから…迷いそうだなぁ…海岸沿いにすすんで金沢かな？）

＝若狭湾横断後北上　、小松基地小松飛行場上空＝

（はぁ…ここも駄目か…）

廃墟の小松基地…　がモビルスーツらしきの残骸もない…

（ん～人の手で引き上げられた感じはするなぁ…痕跡はありそう…
となると北海道か…急ぐか！！）
＝金沢＝

建物は比較残っているが人の気配がしない……
（こっから能登鉄道にのってスタンプ奥能登とりにいったなぁ……
かにみそゼリー…無くなったか……

と、確か北陸本線沿いにすすめば富山か…）
幸いに線路はこっちのほうはのこってる状態である

（途中確か県境でトンネルあったなぁそこで迷わなければ大丈夫か）

＝富山＝

金沢と同様　建物は残っているが人がいない
（ん～どこまで避難したんだが……
けどここら辺は人が戻れば復興は早そうだなぁ…）

＝新潟県＝

（！！！！あ、あれは！）
前方にみえる島は佐渡島…　そこにやつらの巣がみえる　そう…円筒型の物体が…

（そうか、だから富山や金沢は避難したのか…そりゃ…北海道が首都だとしたら　佐渡島にやつらの巣があったら分断されるからな…）
（ん～県内側に進んで北上のが無難か…）

内陸部側にはいり迂回しながら……

（爆発音！？！？まさか……今度こそは！！！）

気合いをいれ爆発音に向かう

ｓｉｄｅ～？？？～

『ヴァルキリー７　フォックス１！！』
『ヴァルキリー８　フォックス１！！』
『ヴァルキリー９　フォックス１！！』

ババババババババシュ！！
制圧支援の3機より、92式のミサイルが撃ちだされる

ドドドドドドドドドドドーン！　全弾命中　最前列の突撃級に直撃　粉砕する　突撃級の後ろに控えているＢＥＴＡがつまる…

弾装　交換中

そう、接敵視認し遠距離攻撃を食らわせたところだった

２００１年５月９日　旅団規模のＢＥＴＡが新潟上陸
編成中だった帝国軍第１３師団は奇襲の形で半壊

補う形で第１５師団が増援にくるも　既に突破されてた約１０００辺りのＢＥＴＡ群がそのまま横浜方面に向かいだし、今回増援要請に応じたＡ－０１の相手だ
後詰めで厚木からの部隊も駆け付ける予定である

92式ミサイルの命中を9回程繰り返すと、
レンジが縮まってきた
『ヴァルキリー１　フォックス２！！』
『ヴァルキリー２　フォックス２！！』
『ヴァルキリー３　フォックス２！！』
『ヴァルキリー４　フォックス２！！』
『ヴァルキリー５　フォックス２！！』
『ヴァルキリー６　フォックス２！！』

一斉に１２０ｍｍの火がふく

今回Ａ－０１は初出撃の００年度組が居るため、完全な射撃制圧によるリスク減の形をとるようだ
幸い最大の脅威となる光線級は見えてない

突撃級は足止めとして使われ　ＢＥＴＡ群の進軍速度は落ちている
事は落ちている

なを今回の編成は
ヴァルキリー１迎撃後衛
ヴァルキリー２突撃前衛
ヴァルキリー３強襲前衛
ヴァルキリー４強襲掃討
ヴァルキリー５突撃前衛
ヴァルキリー６迎撃後衛
ヴァルキリー７制圧支援
ヴァルキリー８制圧支援
ヴァルキリー９制圧支援
の前衛３後衛３支援３の９機編成である

『ヴァルキリー１　フォックス３！！』

が流れるとともに３６ｍｍが火を吹きはじめた
それまで１２０ｍｍ撃ってた他機も順次３６ｍｍに切替火を吹き始める

（今回は死の８分は大丈夫だろうか？）
そうヴァルキリー１の頭によぎる

順調にＢＥＴＡの数が減る
暫く殲滅戦かな？とふと頭が過ぎった時破綻が訪れた

光線級の視認

最優先で始末しなければならないＢＥＴＡが出たからだ

通信で警告すると、ヴァルキリー７，８，９から順次頭ごしに９２式が放たれる

そして　『キャアアアー！！』

『ヴァルキリー９！！』

すこし外側に出てしまったヴァルキリー９に何かがおこったようだ

ｓｉｄｅ～ヴァルキリー８～

『キャアアアー！！』

『ヴァルキリー９！！』

（おぐ！？！？）

そう一瞬で思うと体が無条件に彼女を探し出す

彼女の機体は戦車級にたかられていた…

「おぐ！！」

そう私は叫ぶと９２式をパージし彼女の元へ急いだ

（やだ！やだ！やだ！）

『私もいく！なんとか振りほどいて堪えろ！！ヴァルキリー４穴頼む！！』

いつも一緒にいた生活…　それが崩れる……　先がみえない

自分の半身である彼女を失いたくない
しかし

『どうも駄目みたい…ゴメンねイッチー』
『あきらめるんじゃない！ヴァルキリー隊規忘れるな！！』

しかし…装甲を食い破ったのだろう…戦車級が中に入ろうとしてる
ようすがみえる
マ　ニ　ア　ワ　ナ　イ

（やだやだやだやだやだやだ誰かおぐ　助けてーーー！！）

その瞬間

上空から何かが連続してふってきて戦車級の貫いた

コクピットの中に入ろうとした戦車級の動きが止まり　またコクピット回り、機体にたかってた戦車級が次々と落ちる

（え？？何？？）

なにかがヴァルキリー９の機体の前方にきた……

（天使？？）

そう　ありえない事にそれは　飛んでいた…しかも人であった……

第八話　いよいよ日本??　投稿日２０１０１２１１（後書き）

さぁ…　この後のＡ-０１　は…??

注釈　途中の日本散策読んで頂きありがとうございます

まぁ位置ゲーで巡った時のネタを少しいれちゃいましたｆ＾―＾；
あと小松基地や金沢富山辺りはどうなってるのか調べてみたのですが…なかったので、
佐渡島にハイブがあるいじょう　京都の後方とはいえ、十分に戦闘地域にあたるな…
で直接被害はないものの、疎開の形をとらさせてもらいました

山で進行ルートに当たらず…で

第九話　生きている人類と……　投稿日２０１２１２１２（前書き）

さぁいよいよ……

第九話　生きている人類と……　投稿日２０１２１２１２

ｓｉｄｅ～俺～

（こっちの方か？）

（この間は助けられなかったが…このチートで絶対助けてやる！！）

戦場が見えはじめた

（やつらの集団は比較的大が多めの…８００位…）

（モビルスーツは…９か…）

（チッ！！）　ＡＴフィールドが展開　この間よりは本数がすくなく段々と増えて…１５本程度だ

うち一本は出力が少し高めのように感じた

（見えた！！モビルスーツは…９か…かなり劣勢？？もてよーもてよー）

モビルスーツの集団に近寄る

その時　うち一機の様子が変に感じた

まだ遠距離だから詳しくわからない

（ん？やばそうだ間に合うか？？）一気に音速突破

じりじりと時間が過ぎる

体感上は一分いじょうにも感じる　焦ると時間が長く感じる……

（見えた！！やばいか！！）そう思った瞬間無声光線を連発

無声光線ならやつらの体内までそれ以上貫く事はないのを確認してるから　かなりの速度で連発しながら近寄る

ＣＩＷＳのチート版と思って貰えれば良いとは思う　が実際問題精度はレーダー付きの自動制御には勝てない
しかも有効範囲は、視界範囲内だけだし……

まずは最初の数発は中に乗り込もうとしたやつに当てた

活動停止を確認…

でその開構部回りにたかってたやつらにあて　機体から落ちるのを確認…

更に機体にたかってたやつらに次々あて　そして範囲を若干広げたところで

そのモビルスーツの前に到着した

仲間のモビルスーツもこっちに急いでたのを視界の隅で確認していた

中にはいりこもうとしていたやつらの死骸をほうりなげる

中を覗きこみながら
「大丈夫ですか？」と声をかけようとした……

ｓｉｄｅ～俺ｅｎｄ～
ｓｉｄｅ～ヴァルキリー８少し戻る～

『な…何??』おぐからほうけた通信が流れる
『無事か!?』『どうなってる??』『状況おしえて下さい～～無事なんですか～～?』

おぐの機体の天使は、中に入りこもうとした戦車級の死骸??を掴んでほうり投げた!!

（え??）

『ヒィィ』
『おぐ!!』
緊張がはしった

その天使が中に入ろうとして……

『パンパンパンパン!!』フリーにしたと思う通信から……

ｓｉｄｅ～ヴァルキリー８ｅｎｄ～

ｓｉｄｅ～ヴァルキリー９少し戻る～

「な…何??」
（い……きなりどう…って…の?目のま…のＢＥＴＡい…なりビ…ンと…って…かなく…なった…ど……た…たす…かっ…た?）

《注　精神が弱くなってそういった思考になってます》

『無事か!?』『どうなってる??』『状況おしえて下さい～～無

事なんですか～～？』
（あ…あ…あ…た…し…）
涙は既に流れきったって…もう流れない
あ～あ…鼻水もだらし無くたれ…涎もで…かなり恐怖の思いがしてたみたい…

あ…勿論……下の方も……やだ……
わたしも…恐怖になると……いやこれ以上恥はかけません

いきなり光が射した
私を食って命をとろうとした戦車級が、
いきなり多分強い力でだろう外に持ってかれた
「ヒィィ」

また恐怖の時間がおとずれた…
（いや…いや…いや…いや）
手探りで武器になるものを無意識に探していた
パニックになり、ペイルアウト後に使う携帯銃の置場も忘却してしまった位……

けど、彼女の無意識の努力がみのり　手が銃に触れた

彼女は銃を手繰りよせ　落ち着いて銃を構え…

（死力を尽くして任務にあたれ
生ある限り最善を尽くせ
けして犬死にするな）

そうＢＥＴＡが見えた瞬間彼女は発砲した
視界は怖く怖く怖く怖く怖く、もう目をあけられなくとも……
ｓｉｄｅ～ヴァルキリー９ｅｎｄ～
ｓｉｄｅ～俺～
「大丈夫で…」
パンパンパンパン！！
ＡＴフィールドが自動展開し弾を止める
パンパンパンパンパンパンパン　カチッカチッカチッ
目の前の女は　多分恐怖だろうか……
穴という穴から体液を垂れ流しながら目をひっしにつむり、銃が弾
ぎれにもなってるにも関わらず
トリガーをひいていた
カチッカチッカチッカチッカチッ
俺はしずかに近寄ると　「もう大丈夫だから」と声かけながら手を
女性の銃を握っている手にそえる…
女性がびくっとして目をいきなり目をまんまると驚いたようにあける
（綺麗な目だな……）
「もう大丈夫だから…」そう　女性の手の指を一本一本銃から離さ
せて　銃を床にもってゆく…
「あ…　あ　あ　あ　あー！！」女性の目から涙が出はじめる
鼻からも体液がさらに…

よっぽど怖い思いをしたのだろう…
「もう大丈夫だから……もう大丈夫だから…」
少し抱き寄せて髪を撫でる……
１０秒位そのままにした…

（怖い思いしたんだろうな…が戦力としてはもう使えないか…他にもやばい機体あると思うし…）

そして　「ごめん、少し回りかたずけるからさ…少し避難しててな…」
　撫でながら体を離させ　コクピット部分から出よとする
「え……？あ？…」
ほうけていたのを最後にみてコクピットからでた時に…　彼女の機体毎虚無空間に入れ込んだ
ｓｉｄｅ～俺ｅｎｄ～

ｓｉｄｅ～ヴァルキリー８少し戻り～
『パンパンパンパンパンパン　カチッカチッカチッ』緊張がはしる
（何？何があったの？）
３６ｍｍを撃ちながら彼女の機体に近寄ろうとする
ヴァルキリー３の先任も７４式長刀を使いながらくるがまだ距離が少しある
他の隊機は　今のＢＥＴＡの圧力対応におわれている

『もう大丈夫だから…』通信が流れた

（？？？あ…）
ヴァルキリー９のマイクが拾ったのだろう
（天使の声？？）心地好い男性の声…
『もう大丈夫だから……もう大丈夫だから…』
『ヴァルキリー３戻るぞ、ヴァルキリー８、ヴァルキリー９のフォローしろ』
「了解！！」
（もう大丈夫だから…が二回目に流れた瞬間、先任は対応を私にまかせてくれた、
あのこは……天使？）
（けどおぐはまだ動いてない…あたしが守らなきゃ）
『ごめん、少し回りかたずけるからさ…少し避難しててな…』
『え……？あ？…』
そう流れた瞬間…悪夢が訪れた　おぐの機体が……消えた一瞬で……
「オグーーー！！」
あたしが馬鹿だった
あたしが馬鹿だった
あたしが馬鹿だった
あたしが馬鹿だった
あたしが馬鹿だった
あたしが馬鹿だった
あたしが馬鹿だった
あたしが馬鹿だった
あたしが馬鹿だった
あたしが馬鹿だった
あたしが馬鹿だった
あたしが馬鹿だった

このやろう！！　その悪魔に向かって突撃した！！
３６ｍｍフルオート！がその悪魔め空中に変な模様がでたきいてる筈
１２０ｍｍも混ぜて撃つ
ＢＥＴＡ？　少し位関係ない！！
「あああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
悪魔がなんか叫んでるが関係ない！！
悪魔め　殺してやる！！！
抜刀！！
短刀で殺してやる！！
あと少し！！！！
いきなり目の前が……
ｓｉｄｅ～ヴァルキリー８ｅｎｄ～
ｓｉｄｅ～俺すこし前～
（やば　なんか俺間違えた？？）
女性の仲間からみられる機体からいきなり発砲を受けたＡＴフィールドが展開する
「ちょっと待って！！！」
その機体の銃から更に射撃がくる
「まてってんだろ！！！」
その機体はこっちに突撃しようとしている

「まてってんだろ！このわからずや！！くそっ！」その機体に飛び掛かろうとしたやつらに向かい　無声光線、
少し大きめなやつには　「パイル！」　変化を急がして撃ちこんだ

その機体はナイフだろうか？抜いて
「だぁー！わからずや！！」

とりあえず落ち着かせようとその機体を虚無空間に
さっきの機体の真っ正面に位置固定物理力制限でおいた
ｓｉｄｅ～俺ｅｎｄ～

ｓｉｄｅ～？？？～

（え？そんな）
『あああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！』
ヴァルキリー８の声が流れると
ヴァルキリー９のマーカーがロストしていた…

「ヴァ…　ヴァルキリー９　応答して下さい」
『え？９？』
『まさか！！？？』

「ヴァルキリー９！！」
（確かに装甲は食い破られてたけど…　いきなりロストは…　……え？）
「ヴァルキリー８！！！」

ヴァルキリー８も信号ロスト
（なになになに？なにが起こってるの？？）
「ヴァルキリー８！！」

『８も！？？』
『イヤァァァー』
「ヴァルキリー８！！」その瞬間…
いきなりズレた位置で信号復活確認
『こちらヴァルキリー８…』
ｓｉｄｅ～？？？ｅｎｄ～

ｓｉｄｅ～ヴァルキリー８～
「こちらヴァルキリー８…」
『え？なに？』
『どうなってるの？』
「こちらヴァルキリー８　ヴァルキリーマムどうぞ…」
『は、はいこちらヴァルキリーマム』遥先任の声が流れた
「ヴァルキリー９確認しました　生きてます」『え？？』

その瞬間　機体の制御が効かなくなった

「え……あ…こ、こちらヴァル！！」
「はいちょっと機体使わしてね～」

あの悪魔が…コクピットないにいきなり……あらわれた…
ハッチがしまってるのにも関わらず…

「あ…き…き」

「はいまず通信つかうよ～　あ～あ～テステスやつらあの生物ぬっころすの協力しますよ♪」

第九話　生きている人類と……　投稿日２０１２１２１２（後書き）

おぐ「ねえ作者さん」

作者「ん？」

おぐ「あたしの純潔かえしてよ…なんであんな描写を……」

作者「あ～ストーリー上な…それにおま…」

おぐ「かもーん」

作者「な……なんでここで３６ｍｍ構えた不知火君が…？」

おぐ「辞世の句は？？」

作者「ち……ちょっとまて……今ここでだと……死亡フラグだすぞ……」

おぐ「どーせ、エログロになんでしょ？ならいまここで、あ、”俺”さんが何とかしてくれるわよじゃーね」

手を前に振り合図

バラララララララ！！

作者　チーン

第十話　遭遇後　投稿日２０１０１２１３（前書き）

サブタイトルうまく浮かばない……

戦闘に介入！！

第十話　遭遇後　投稿日２０１０１２１３

ｓｉｄｅ～俺～

突撃してきた機体を　少したってから安全そうにみえる場所に出した
その機体を使って介入しようとしたからだ
「イロウル！！」

機体と同化した…
（ん？？なんじゃこのｏｓは…はぁ？一回決定したらそれが終わるまで止まらない？？糞じゃん！！
ついでにかえとくか…とｃｐｕも強化か…「バルディエル！！」さてっと…）
ぬっとコクピット内に　勿論機体との同化は切らずに…
「え……あ…こ、こちらヴァル！！」
「はいちょっと機体使わしてね～」

（丁度だれかと通信しようとしてたなぁ…
にしてもこの人も美人だなぁ…うん♪がんぜんやる気でた）

「あ…き…き」

「はいまず通信つかうよ～　あ～あ～テステスやつらあの生物ぬっころすの協力しますよ♪」

『はぁ？』『ちょせんと…』『ヴァル…』『おい！！き…』『ふざけ…』『いいか…』『…』『え？…』
「あ……あんた…ね……」

「まずは論より証拠っと」
自分の本体をコクピットから機体外に
そのさい「ちょ…」なんか掴みかかろうとしてたが無視無視　どうせ同化した以上話せるし～

機体外に本体をだし…
「ラミエル！！」

マーカーの位置を機体から読み取り…やつらの集団に向け……
コクピットからうるさいなぁ……
「この悪魔！！」「わたしのになにしたの！？！？」やらん？脱出装置つかおうとしたか…　でも無効になってるのに……

あ、おちこんだか？
画像システムも奪ったからなぁ……
かわいそうになった…　しょうがない…

システム再開っと
「あー聞こえるよね？？」
びびっちゃったか

「聞こえてるよね？無視しないでよ～普通に話せばいいから」
「あ、あんた…なにもの？？」
「それはながくなるからおい…」
「説明しなさいよ！！」
「あとでね、すこしききたいんだけど…」
「あとでじゃなく！！…なによ」
「この機体みたんだけどやつらみたいなレーザー砲てあるの？？」

「はぁ…？ないに決まってるじゃないの！！」
「なる…」
「なるじゃない！！」
「じゃぁ撃つねよく見ててね～」
「何を撃つ……」
「狙い撃つぜー！！」
「いい加減、何してんのよーー！！」
「デットエンドシュート！！」

その瞬間　右手から変化した加粒子砲から一気に力が放たれた……

地面をえぐり　やつらを巻き込み…巻き込み　巻き込み

その終着点で力が解放　光の十字架がそそり立つ
やつらの半分以上巻き込めたようだ

（やばちっとやり過ぎ？？？）
光が通ったあとに強風となって空気が巻き込まれる

見ると彼女の仲間の機体ももってかれかけてた…急いで着地したようだ

「ごめん　気合いいれすぎちゃったよ」
コクピット内からは反応ない…
ｓｉｄｅ～俺ｅｎｄ～

ｓｉｄｅ～ヴァルキリー３少し前～
『あ～あ～テステスやつらあの生物ぬっころすの協力しますよ♪』
「ヴァルキリー８！！誰をいれてんだ！！」
男性の声が流れた　民間人？？　不可解な事が起こりすぎる

「クッ！！」そっちに気を取られすぎて接近をゆるしてしまった
長刀を切り付ける
倒れただろう　かくしんし　ＢＥＴＡとの間合いをとりながら
３６ｍｍを連射しまくる

「こちらヴァルキリー３よりヴァルキリーマム！！８はどうなってんだ？？」
『こちらヴァルキリーマム　ヴァルキリー８は現在制御不能、こちらからの信号も受け付けません』
「ちっ…ヴァルキリー１…どうします？」
『制御不能となるといない状態と考えた方がよいわね……フォーメーション、アローヘッドツーで立て直すわよ』
『『『『『了解！！』』』』』

陣形が動きだす　その時……

『きゃぁ！！』『え！』『まぶ…』
わたしは奇跡をみた…

わたし達の後方の方からその光は前方に…
光の回りのＢＥＴＡが融解して
そして　……　おおきな十字架が……

「クッ！！」　気をぬきすぎていたようだ　光がおさまったところに強風で持ってかれそうになる

うまく着地し、風に抵抗する

しかしあの光は……

ｓｉｄｅ～ヴァルキリー３ｅｎｄ～

ｓｉｄｅ～俺～

「ごめん　気合いいれすぎちゃったよ」

コクピットから反応ない…

「おーい」

「……」

しょうがないなぁ…ジャンプし

「きゃぁ！！！」

「おーいもどったかぁ？？？」

「な　な　な　な　な　な」

まだ駄目か…　もう一回ジャンプ

「イダ！イダヒィ～」

ん？　すこし目をコクピット内に増設した…

あ、舌かんじゃったか……

「ごめん　舌噛んだ？？」

「ゴベンジャナビバヨ～」

「ほんとゴメンね　と、しゃべらなくっていいから頷くやらで返事してくれれば良いから」

舌を抑えながら頷く姿がみえる　かなり痛そうだ

「機体の制御は君に後程預ける　あとｏｓちょっと弄って性能アップさせたから」

目をまんまるにさせながら頷くのがみえる　そのあとで傾げる

「やつらが残ってんだろうが」

なるほどか？　大きく首おうごかす　が　人差し指を前に……あ～

「さっきのレーザー？あれ仲間の側でぶっ放すと巻き込む恐れあるから…使えないんだ
そのかわし　君のナイフをちっと弄って　大剣タイプの高周波ブレードにしたから
あと接近戦でよろしく」

へ？？な顔して最後の接近戦あたりで無理無理な首振り運動…

「ん～まぁ高周波ブレードは…とても切れやすい剣なんでもきれるよやつらでも」おーなジェスチャー

「で接近戦は…」

コクピット内に光線級の照射警告

彼女の顔が青ざめる　まだ操縦権渡してないのにひっしにそうさし始める

俺は、多分この機体だと一発で駄目になるのかと理解する

光線がくる　彼女の顔は青ざめて…　ＡＴフィールド展開

「これが答さ…俺がいるかぎり君をまもるから」

最初　この世の終わりで、目をつむってたら、目をあけて、驚いた
顔して理解しようとして
理解をあきらめた顔して
そして力強く頷く
（面白い♪）

「じゃいくよ～まずはあのじゃまなのいこうか…コントロールユーハブ」
彼女は力強く頷く
ｓｉｄｅ～俺ｅｎｄ～

ｓｉｄｅ～ヴァルキリー４～

まだ生き残っていた光線級から　光線が…こっちに来ない……　え？と見ると
『ヴァルキリー８！！！』
（　あたっ……え？なにあの紋様……
光線を…？？）

『ヴァルキリー８移動開始しました！！』

見るとまずは光線級の方へ…
『ヴァルキリー８突出しすぎだ！！！制圧支援仕様だろ！！』

（え？違和感が　あのこ　あんな大剣いつのまに……）

『ヴァルキリー８下がれ！！』『隊長！！』

（あのこあんなに動きすごかったっけ？？）

（それに機体の上に人……いや兵器……？？）よくみると　その兵器から　光の槍が延びてＢＥＴＡを貫き、またちじむ
また光のシャワー？らしいの浴びるとＢＥＴＡ小型種はいきたえるようだ

大型種はシャワーには堪えるが　光の槍で一撃でいきたえてる

「すご…」

『とりあえずヴァルキリー８は味方ながらもアンノンとする、あの動きは普通ではない』
彼女の機体の持つ剣もそうだ　ありえない切れ味…
（あ、今突撃級？あぶ……
て…？）
（突撃級を正面から一刀両断…ありえない…モールス１５を誇る装甲殻が…）

そのまま光線級を横一文字にするとこっちの前の残敵方向に…
『ヴァルキリー４！！』
（え…？あ）要撃級の腕部による一撃…間に合わない
（ごめんね舞ちゃん同期一人になっちゃうね……あれ？）

ヴァルキリー８から　いや兵器からの　光の槍が要撃級から抜かれるところだった

瞬時にその槍は…兵器に戻る

残敵掃討は終了した……

ｓｉｄｅ～ヴァルキリー４ｅｎｄ～
ｓｉｄｅ～俺～

「とりあえずＢＥＴＡの掃討の協力感謝する…が貴様何物だ？？」

（ほ～可愛い声♪凄みがあっても美人そう♪）
あ、モビルスーツの銃は勿論向けられてるね…

「え～と俺ですか？とその前に…よっと」機体から離れ　自分を囲んでいた円陣が広がりまたもとの様にもどる
今度は８っ機いや　自分のついてた一機　は判断悩んでいそうだそりゃそうだ…　あ、因みに剣はもとの短刀に戻しましたよ

切れすぎて鞘におさまらないからね…
鞘を改造しちゃってもよかったけど…

「ごめんもうちょっと広がってくれない？避難してた彼女の機体だすからさ…
機体自体は結構おしゃかっぽかったから、横にしてだすから広さがほしいんだ」

円陣が広がる

彼女の機体をだす

「ヴァルキリー９！！」「おぐ！！」俺がとりついてた機体の娘は
彼女の状況みたから落ち着いてそうだね

まぁ虚無空間に持ってた娘はＰＴＳＤにかかりそうだったから　若干精神治療はしたけど…

おぐって呼ばれたこがコクピットから下りてきた　駆け寄った仲間が　抱き合っている
（うお！　美人美人♪というかみんな女性？あとあのパッツンパッツン作った人ＧＪ！！）

が尋問してた人と、結構動きがよかった人あと、
彼女を助けようとした人と、もう一人は降りてきてないな…
相変わらず自分にでっかい銃向けたままだし……

「もう一度問う、貴様なにものだ？？」

「ん～どっから説明すればいいかなぁ……まぁこの通り普通の人間ではないのわかるよね？パイル！」右手を変化させまた戻す
「ん……うむ…」「まずは自分も知りたいんすが…この世界なんなんすか？」
「は……？」「こんのふざけてんじゃ…」
「ふざけないっすよ！！」
「……」
「正直はなします。自分は異能の力をもつこの世界以外、つまり異世界人です！！」

第十話　遭遇後　投稿日２０１０１２１３（後書き）

作者「あ、いっしーお疲れ～」

いっしー「……」舌をだす

作者「あ～はいはい救急箱っと…薬は…」唐辛子…

いっしー「……！……！……！」　ひっしに首振り　が見えない力によって動けない

作者　「さてこれで治るからね～前回おぐにはぬっころされたし…」

いっしー（やめてよしてやめてよして！！おぐのばがー　あ〝あ〝あ〝！！）

おぐ　ちーん

作者　「まぁヒロインポイント５点あげとくから」

作者「ただ次回がちっとある部分難作なんだよなぁ…どうすっか…」

第十一話ぶちまけたあとの続き…　投稿日２０１０１２１４（前書き）

さぁ…問題発言はどうなるんだろう…？？

どこまで…？？

第十一話ぶちまけたあとの続き…　投稿日２０１０１２１４

「正直はなします。自分は異能の力をもつこの世界以外、つまり異世界人です！！」

皆さんフリーズしましたね…　おーい　手を振って　あ、最初についた機体の娘と　虚数空間にほうりこんだ娘　は、再起動はやかったか

「ふ、ふざけてんじゃないわよなにが異世界よ！神が認めてもあたしが認めないわよ！！」

あちゃー　面倒な人の方が先に再起動したか…

「じゃあ、この力はなんなんです？他にも持っている人いるんですか？」

「え！！……えっとそれは……」

あ、最初の人再起動したっぽい

「…君、すまないが同行はしてくれないかな？」「え？ああ、リリンをさがしてたので、人が恋しくてね…

えっとお姉さん方の姿もみたいので良いですよ～で何処にいくんすか？」

「ついて来ればわかる」

「あと自分の話はきかなくても？」

「あ、ああ…私達の権限外の話になった為、上の者が詳しく聞くそうだ」

「え～～～～……ん～お姉さん方も同席を要求します」

「……上には伝えておこう」

「一応この世界の話はお姉さん方から聞いても大丈夫なんですよね
道中にでも　あと　お名前とかプロフィール等も」

「……ああ、それ位は先に説明しろといわれてる」
「了解♪あ、話聞くなら名前っすね～自分渚カオルです
カオルってよんでください」
まずは隊長　（部隊名言わないのつまんない～～～）　さん
伊隅みちるさん

年聞いたら睨まれちゃった　年は秘密なんだそうで…
階級　大尉
彼氏きいたら…今度は顔真っ赤　あ～こりゃいるかな??
が、うぶな一面をみれたなぁ～♪

そこんところを取っ掛かりにしたら面白くできそう♪

４姉妹の次女だそうで…　美人４姉妹かぁ～

おつぎは
早瀬　水月さん

ん～顔だしてくれない…マイクごしｏｒｚ
終始ガルル～って唸ってるし……
階級は中尉
年は、１９歳だそうで…　唸ってなければなぁ～～

涼宮　遥さん

戦闘には出ずに指揮車で戦域管制してたそうで…

これまた美人さん
年齢は１９♪
ガルル～の子よりやっぱりこっちかな？♪
ガルルの子と同期で９９年入隊だって
彼氏の事きいたら……ゴメンね…ほんと…

西坂　舞
９９年入隊組
年は１９歳
降りて来なかった内の一人、先任だって
髪は短め少し青はいってるか…
ボーイッシュながらスタイルＧＪ
いいね～
ただ趣味は将棋…イメージあわないよ……
彼氏はいないし、なんとまだ作った事がないと！！
つつまり…あ、鼻血でた…

河田　瞳
９９年入隊組
年は４月生まれの２０歳
この人もショート
他の色は入ってないね～
趣味は整体……
もんで下さいおねーさま♪
なんかよく隊の仲間から整体の神様といわれるそうで…
彼氏いないって～
でも、いそーなのにはぐらかすん～
なんかキャバ嬢的な会話術ありそう

要注意枠だな

さてここからが初陣だった００年入隊組
高畑　貴美
年は１８歳
今回あんまり活躍しなかった人…
え…？睨んじゃいやん
髪はショートの青
あんまりしゃべんないよね～
スタイルは…ん～がんばれか…
彼氏なし
趣味は読書

宗像　美冴
年は１８歳
この人油断ならないよ……
ママン助けて…
因みに隊内の噂（誰かにききました）だと風間さんねらってるとか…
彼氏は勿論ナッシング

風間　椿子
年は１８歳
趣味は音楽だそうで、
なんかおっとりお嬢様♪
彼氏は…音楽だとか…負けないぞ！！

小倉　九琉華
彼女が今回虚数空間の利用者＋精神的にちょっと強くし治療した人
えっとグラマラスボディに
髪は赤系長め

彼氏はいないっていうか嘘っぽいぞオマ…え??うん本当にいないよね（やば強くしすぎたか??コワコワ）

石橋　屡伊
彼女の機体を今回利用させて貰ったよ～
年は１８歳
ピンクブロンド…クォーターだそうで…
髪は結構長め
スタイルは…かんばれそっち系の需要がある…いわゆるツルペタロリ…へ??ち
ちょっと…（チーン）
まぁ…いわゆるすぐに手をだす性格ね

まぁ…でも面白いかも

さて　でこの世界の話も聞いてみたんだけど…ありえない…

まさに死亡フラグ満載じゃん…　こんな可愛い彼女達…　護らなきゃと改めて思ったね
まぁゼロ魔でウハウハもよかったけど…
見捨てられない……

ｓｉｄｅ～俺ｅｎｄ～

＝＝　横浜白凌基地＝＝

「うんで伊隅～、この子が??」
「ハッ!!その通りであります!!」ビシッと敬礼がきまる
「かたいかたい～、そういうのはいらないから…」

「しかし…」
「ま、ちゃっちゃとすませましょう」
「はぁ…」
「で、あんた、ずばり聞くけど本当～に異世界人なの??」

「はい　そうです。証拠はパイル」
右手を変化させ戻す

「この通りの力があります。また銃で撃っても死にませんよ」

「うっふふ～ん。おもしろいわね…撃ってみていい?…」
伊隅ジト目

「じょーだんよ……で伊隅例の物は…?」

「は!!これです」気を取り直した顔で、ＭＯが渡される
この博士らしい美人がコンピュータに差し込んでＫｅｙｂｏａｒｄをカチャカチャやって調べている
（しかし…この人もグラマラスなナイスばでぃだなぁ…）

「ふ～ん。ますますおもしろいわね…気に入ったわ　であんた、ここにきた訳は?」

「ん～この基地??」
すこし焦り気味で的違いのを答えてしまった…

「違うわよ、この世界よ」

「わかりません」

「なんでわかんないのよ？」

「自分にも」

「異世界人なんでしょ？なんかで渡ったんでしょ？」

指さしながら近寄ってくる…いいねぇ…

「神の力でですが…」

「神？？」

とまった…ｏｒｚ

「ええ、ただ目的の世界とは違いまして」「目的？」

「本来ならここではない世界にいこうと自分に力を付けてくれた神に頼みました」

「え？あんたの力は貰い物なの？」

「ええ…そうです。お詫びで貰ったわけで…本当の自分は、神の趣味の事故見学の際に飛んできたから、思わずはたかれて殺されたそうです」

「想像の斜め上にいったわ……」

頭に手をやる美人科学者…いいねぇ！

「でそのお詫びに力をもらって元の世界では駄目だが、希望の世界で楽しんでこいと送りだされたのですが…」

「それが何かの作用で、お願いした以外のこの世界にきたわけね…」

（椅子に座って脚組み替えた…うん♪）

「はい、多分その通りです」

「で、あんた帰る力は…」

「あ……、そういえばすっかり忘れてましたけど、多分あります」

「え??」

「けど帰りたくないです」

「それはなぜよ?」

「この世界をいや彼女らを見捨てたくないからです」

(美人が沢山…死なすのもったいない!)

「…くく……く…くははは…あ~ははははははははぁ」

落ち着いたようだ

「おそれいったわね…本当に奇跡がおこったようね…

見苦しいところみせちゃったようね

けど道化じゃなきゃ奇跡の夢物語よ」

「……自分もそう思いますね…自分を間違って殺した神を最初は恨みましたが、今は彼女らにあえて満足してます」

(神よ美人がいっぱいの世界でありがとう)

「私達も感謝しなきゃね」

頷く伊隅

(うっしゃ好感触かも♪)

「ところであんたの要求は？」

「そうですね～彼女らの側にいて護らさせて下さい」
（これは絶対だもんなぁ～）
「ええ、わかったわ他には？」
（おっしゃ～♪）

「あとモビルスーツを弄ったのですが」

「モビルスーツ？？ああ、戦術機の事ね」

「あ、戦術機というんすね…まぁ軽く弄ったんすが…正直ＢＥＴＡに勝てないですよね？」

「まぁ～ね～その為の私なんだけど」
（ん？？）
「え？ん～いや、戦術機の方話戻します」

「ええわかったわ、戦術機では正直苦戦しっぱなしのようね…」
（あややっぱり……）
「まぁ硬直や対応速度、また装甲やら武装面やら…
質で勝たなきゃいけないのになかなかかてないですよね…？」

「まぁ…ね」

「弄ったりあと、持ってこようかなと思います」

「持ってくる？」
「ええ…」

立ち上がり（多分使えるよな…？）

「……”世界扉”」

自分が連想したのは機動戦士ガンダムの世界

「ちょ…ちょっとこれは？」

「自分のもらった能力の一つ、世界扉です、別の世界に行き来できますよ

自分が連想できる世界へね……」

「おどろいたわねえ……」

（うんチート万歳）

「まぁこれでこの世界におけるオーバーテクノロジーを、盗みはしないですが人同士戦争してる世界ですので破壊等で破棄されたのを鹵獲しようかなと…」

（流石にその物語は影響させたくないもんなぁ…ガンダム盗んで連邦消滅は目もあてられないし……）

「はぁ斜め上いったわ」

「もっとも持ってくるだけで、根付かせるのはこの世界の人ですけどね」

（俺はそこらへん知識はないし多分感覚で改造かな？）

「はぁ…わかったわあと他には？」

「ん～とりあえずそんなところですかね？？

まぁ随時協力できそうな事はしようかな？と思いますが…」

「うん…そうね…あ、あなたの名前は？」
（あ、最初にいってなかったな…）
「渚カオルです」
「香月　夕呼よ」
（いい名前だなぁ…）

「よろしくお願いします」

「…あ、…そうね…少佐の身分をつけてあげる」

「了解です」
（お…上官プレイフラグ？？）
（あたしより上……）

「身分あった方が楽でしょ？じゃあ…」
電話で誰かを呼んでいる

…シュン…
「失礼します」
（うお…美人♪プロフきこ～っと）
「ピアティフ中尉よ　こちらは渚カオル少佐」
「え…ハッ！よろしくおねがいいたします」

「私からの特別って事でよろしくおねがいね」

「わかりました」

「部屋の案内と基地施設の案内よろしくね　ＩＤと階級章等はあと

でとどけるから」
（となると……）
「じゃあ明日にでも？」

「ええ、使いはだすわ」
「了解です　では…」

「あ、最後に言い忘れてた」

「はい？」
「彼女や、…伊隅…Ａ－０１は大半事情を？」
「はい」
「じゃしょうがないわね…もいれて、
それ以外には力みせずに、また何処からきたとかも喋らないでね」
「聞かれたら？」
「階級と私の名前だしてよいからｎｅｅｄ　ｔｏ　ｋｎｏｗでよろしく」

「わかりました」
「で、いっていいわよ　伊隅あなたも今日は特別扱いだったけどね」

「はっ失礼します！」

シュン　……

「霞」　シュン
「どうだった？」
ふるふる　「見えません」
「そう……」
「ただ…」

「ただ？」
「鑑さんが暖かい色してました」
「そう……」

第十一話ぶちまけたあとの続き…　投稿日２０１０１２１４（後書き）

作者「かなりぶっちゃっけたなぁ…まぁあの人なら…
だが下心はひたすら隠してるみたいだが…」

カオル「当たり前だろ、落としてなんぼよ！！」

作者「まぁ…俺の願望まざってるしな…正直頑張れ」

カオル「おう！！」

……

イッシー「ねぇ作者」

作者「ん？イッシーにおぐ、タバタ（高畑）じゃないか…」

おぐ「あたしたち最初のころと変わったの？？」

作者「ああ、丁度この話つくっている時に外見をどうするか…
で９９年組はわりとすぐにできたんだけどなぁ…で、なやんだんだ…
ただタバタに関しては、名前は変わってはないぞたまたま偶然だ」

タバタ「……うそ……」

作者「…ほんとだよ…そりゃ外見は…たまたま悩んでたらあっとおもったんだよ…後悔はしてない…」

作者　「それに、タバタは元々氏名不明の一人の設定だったし…」

作者「ただ、ぶっちゃけ裏設定というか、

考えたら毎年ABで、だしてんだよなぁ…で、きみらは決まったようなもんだよ」

イッシー「となるとあたしたちはあの場で本来は？」

作者「本来はしらんが、多分カオルが来なきゃな…で、タバタは1月の新潟で病院行き枠だったわけだ…」

イッシー「99年の先任方々は？」

作者　「一応、西坂は、おぐを助ける際につくまえあたりに突撃級に背後から…、

河田は、そのショックでほうけた内にとの設定でね」イッシー「なるほど…」

作者　「因みにイッシー、おぐ本来の名前は由理と由梨でユリユリコンビのはずだったんだぞこの話の前までではな」

おぐ、イッシー「「え…つまり？」」

作者　「ああ、想像通りだ」

おぐ、イッシー「作者～～～…あたしたちの素晴らしい関係をかえせー！！パーンチ」

作者（そっちかよ……）

ちゃんちゃん　後悔はしてませんw

第十二話　副司令との対談後　投稿日２０１０１２１５

ｓｉｄｅ～カオル～

部屋を退室したあと、
自分の個室の場所及び食堂＝ＰＸや格納庫や、Ａ－０１の待機室に
案内するという事で、
美人なピアティフ中尉に並んでついってこうとしていた

「え～とピアティフ中尉？で良いんすよね？」

「ええ、その通りです」

「中尉は博士の何？というかこの基地の役割は？」
「わたしは香月副司令の秘書官をつとめています、また当基地の通
信士官です」

「じゃあ香月（副司令だったのかあの若さで…）副司令がみつらな
かったら中尉をさがしてか…」

「そうなりますね、けど大体はあの執務室に居るはずです」

「ん♪わかった」

「ところで少佐お伺いしてよろしいですか？」
「どうぞ～」
「少佐は…衛士なのですか？それとも技術士官です？」

「あ～……そこんとこ聞いてなかったなぁ…まぁ多分副司令から聞

くと思うけど、
異世界人だからあんまりここの事わかっちゃないから」

「はい？」

「あ、こういった力もってんのパイル」
（定番化だな…これ）

「え～とわかりました…」
頭おさえてるなぁ……

「まぁだから突っ込まれてもボロがでちゃうから…フォローよろしくね♪」

「はい、わかりました……ところで異世界というと？」

「ん～俺が元いた世界は、ＢＥＴＡがいない世界だったね～」

「ＢＥＴＡがいない世界ですか…素晴らしいですね」

「が人間同士でやっぱり争っていて、俺がその世界からいなくなる前には、
韓国と北朝鮮が挑発行為でやばい事にもなってたし、
後はいろいろ紛争や、内戦等ぼちぼちね」
「はぁ…」

「うんでもまぁ日本あ、ここでは日本帝国ていってるのか、まぁ元の世界の日本は比較的平和だったね～
人一人が殺されればすぐに全国ニュースになるし、まぁ人身自殺、

ん～列車に飛び込んで自殺するのはほぼ毎日あったけどね…」

「ＢＥＴＡが居ない分、別の問題があるんですね…
けど…こちらの世界より希望があるはずですよ
あ、着きました。こちらが、少佐の個室になります」
中尉は部屋の表札にネームプレートをさしながら説明してくれた

「どれどれ…？」
部屋の中は機能的にデスク、ベッド、クローゼット、シャワー室＋洗面台＋トイレ等でまとめられている

（成る程…一般的な士官室なのかな？）

「次にＡ－０１の待機室まわってから　格納庫によります」

「ん♪」

「ところで少佐、先程の力以外にも？」

「ああ、光線うったりとか、取り付いて改造したりとか、コンピュータ取り付いてハッキングしたりとか、後はそうだなぁ」

「も…もういいです　なんでも有りなんですね…」

「なんでも…ではないけどね、戦闘ではＢＥＴＡに負けないつもりだよ」

「はぁ…」

「まぁ最初にこの世界に来た時にはいろいろ苦労したけど…ね…あ、そうだ」

虚数空間からドックタグを出す

「これは…大東亜連合のドックタグですね」

「その関係者の方に連絡をとってもらいたいんだ」

「わかりましたが…」

「まぁこっちくる途中に死体から、家族と思える写真を回収してね…まぁ最後はみれなかったが、渡してほしいんだ」

で写真も渡す

「あ…はい…わかりました、善処します」

「よろしくね♪」

「ところで少佐…何処からこれをだしたんです？」

「あ、これも異能力だからあんまり気にしないでね…
壊れた戦術機も入ってるから」

「はぁ…わかりました…あ、こちらが待機室になります…」
今は誰も居ない…

「では格納庫に案内します、最後にＰＸですね」

「この世界に来てからの始めての食事だから楽しみ♪」

「はい！？」

「あ、一応人間やめてるから、食べなくとも大丈夫だけど…食べるのは楽しみなんだ」

「はぁ……」
かなり頭おさえこんでグリグリしてる…

「まぁそこら辺はおいといて…格納庫でしょ？」

「あ、はい　こちらになります」

＝＝　格納庫　＝＝

整備士の方々が忙しそうに作業している……
声かけたら今はまずそうだな…

「ん、じゃあお腹すいたらかPXお願い」

「わかりました、こちらになります」

移動の間に、個人情報聞こうとしたらはぐらかされたよ…ママン…
…orz

「こちらがPXになります。食事の仕方はこちらにならんで最後にIDカードで、会計をして下さい
今日はゲスト用のIDカードをお渡しいたします」

「ん♪」

「では、わたしは別の仕事がありますので、これにて失礼いたします」

「ありがと～」

（さってと、はつめしはつめし…　メニューはっと…　ん～…　合成??……まぁいいか）

「すんませ～ん」

「あいよー、おや、みかけない顔だね～お客さんかい？」

「あ、俺は今日から厄介になる渚カオル少佐といいます
ひとつよろしくお願いします」
「ほぅ～若いのに少佐さんなのかい
あ、わたしゃこの食堂をあずかる京塚　志津江っていうんだい
戦時なんたら法で臨時曹長をもらってるけどね」

「志津江さんですね…よろしくお願いします」

「…若いのに礼儀ただしいね～
気に入ったよ、何頼むんだい？サービスしとくよ！」

「お言葉に甘えさせてもらいます　とじゃあ…トンカツ定食で」

「あいよー　今作るから先の方でまっててな」

まっている間あたりを見渡す…　遅いからか、あんまり人が居ない…

「あいよ～おまちどうさん」

「ありがとうございます♪」　で会計し、席につく

「いっただきます」
（ん……何か違和感が……これが合成なのか、
ご飯の方もそうだなぁ…
味つけは良いけど…素材で…少し残念…）完食し
「ごちそうさま～」

で部屋にもどって明日ねよ…この世界はつのベッドだし～♪

ｓｉｄｅ～カオルｅｎｄ～

その頃格納庫では……

「チーフ！来て下さいよー！」

ヴァルキリー８の機体、コクピット部分みてた人から声が　でた

「ん？どうした？」

チーフだろう年期はいった整備士が来て、年若い整備士に声かける

「ここみてくださいよ…」

「ん？……おい、お前…大至急整備記録もってこい！！」

……

「持ってきました！！」パラパラパラ

「記入漏れはないんだな？」

「はい」

「……わかった博士に報告しておく、８番機に関しては、一時封鎖処置をしておく」

「はい！！」

「あと代替機を大至急用意しろ！！いいか、今夜は徹夜だぞ！！」

あ～あ……

第十二話　副司令との対談後　投稿日２０１０１２１５（後書き）

作者「一応お知らせしておきます、
次の話が広がり過ぎてるので…遅れそうです」

石「なんでよ？」

作者「この次の次にカオルのあの力…の話をいれる予定でしたので、
次を一つの話にしようとしたら…はしょるか、長くなるか…どっち
かになってしまいました……」

石「あたしの活躍部分いれるのよね？」

作者「……」

石「登場は？」

作者…みている…「一応はね」

石「一応ってなによ！」

作者「ん～その線の筋の話ではないし…この流れでいうと…」

石「あたしを活躍させないとおぐから不知火君借りて作者、撃っちゃうよ？」

作者「まぁ…考えとくよ

というわけで現時点で本当にどうするか悩んでます事をお知らせし

ます…

分割しちゃうかな??」

第十三話　翌日…　投稿日２０１０１２１７（前書き）

すんません　前予告通り…はしょった部分あります
整備士さん達には今度登場してもらいますｍ（＿＿）ｍ

第十三話　翌日…　投稿日２０１０１２１７

２００１年５月１０日

＝＝　香月副司令執務室　＝＝

「おはようございます」

「あんたねぇ」

「ん？？」

「ヴァルキリー８の機体に何かした？」

「あ～、ＯＳ弄って、ＣＰＵ関係強化しましたが？」

「強化したって何時なのよ？」

「やだなぁ～ＢＥＴＡと戦ってる時に決まってるじゃないですか」

「はぁ……まぁいいわ、朝から大変だったのよ、整備の人も徹夜だったそうだし…」

「あちゃー」

「まぁわかったからいいわ…でできるのね？」

「ん？何をです？」

「強化よ強化…馬鹿なのかわからないわ…まったく」

「あ～まぁ異能力で取り付けば強化できますよ」

「なるほどね…なら不必要には見せたくないわねぇ…いいわ専用のハンガーと執務室用意してあげる、
搬入出以外は資格がない人以外は立入禁止にしておくようにね」

「了解」

「ハンガーはＢ５５のを使ってちょうだい、許可は今だしたわ」

「とりあえずそれだけよ」

「あの副司令？」

「なによ？」

「昨日気になったのですが、ＰＸで…全てに合成ってついてたのですが、なんでです？」

「それはね、…あなたの日本の食料事情はどうだったの？」

「俺の日本です？」

「そっ、早くいいなさい」

「俺のところは、自給率米が１００％越えてましたが、あとの大体の食料は輸入に頼ってました」

「何処から？」

「えっと中国や東南アジア、アメリカ等ですね」

「アメリカは関係悪くなってるわ、中国や東南アジアはＢＥＴＡに占拠されてる、
あと日本の関東ー新潟から西は軍関係以外はいないとしたら？」

「あ、食料やばいですね…」

「そ　だから合成プラントからできた合成食料に頼ってるのもっとも、軍関係だけよ合成ながら三食まともに食べれるのは」

「ありゃー」

「天然物で自給可能なのは、今だＢＥＴＡのこない北南米大陸、特にアメリカと、オーストラリアぐらいなものよ」

「かなり悪いんですね…」

「どうしようもなくなってるわね」

「テコ入れ必要か…な…」

「できれば必要ね」

「これも異世界でさがしてみますが、自分の知ってる世界で食料事情強化できるのあったか、わからないので努力はしてみます」

「あらそう……期待は？」

「食料事情に関しては…あんまり…」

「残念ね……あ、異世界いったら天然物のコーヒーだけはお願いね」

「わかりましたが、お金は…？」

「あらそうねぇ…こっちのお金は使えないとして…何が売れそう？」

「ん…個人用武器＋弾薬、戦術機…位ですかね？多分コレクターはどの世界にもいると思うのであとは調べないとわからないですが…」

「武器弾薬はともかくとして戦術機だと輸入もできそうね勿論必要ではあるからそうそう売りには出せないわ」

「ま、輸入は可能かとは思いますが」

「まぁわかったわ…考えとく、あ、異世界は無断ではいかないでね、あなたを捜して大騒動になっちゃうから」

「わかりました、その際には一声かけます」

「他にはないわね？」

「あ、あとひとつ、自分は技術士官なんです？
衛士なんです？昨日ピアティフ中尉にきかれ答えられなかったのですが…」

「そうねぇ…技術士官にしておくわ、他には？」

「とりあえずは、ですね、また何か気がついたらきますので」

「わかったわ」

シュン

シュン

「では～」

「あら霞？」

「鑑さんがまた暖かい色をだしてました」

「そう……」

ｓｉｄｅ～カオル～

（とりあえず…Ａ－０１の待機室にいくか…いるかなぁ……？）

シュン
（お、イッシーだけか…）

「よう！！」

「あ、カオルー」

「どうしたん？」

「それがねーわたしの機体、代替機になったんだけど、急遽元の機体に戻ったり…」

「あ、それ俺のせいだ」

「はぁ？カオル！！あんた！！」

「まぁ～ゴメン　ほら戦闘中に弄ったったろ？」

「あ～ＯＳ？」

「そこら辺関係なんだだからまぁ…なおしておかなかった、俺のせいでもある
まぁ他の機体も強化する事なったし」

「他の機体も？……あ～～先任に勝つ夢が……」

「ん？？勝ちたいん？？」

「うん！！絶対勝ちたい特に早瀬中尉には！！」

「あ～……かんばれ…」

「……なによぅ……」

「まぁ…俺の実験台になるなら別だろうけどな」

「う～～～…わかった…やる」

「うっし、実験動物ゲット♪」

「あたしゃハムスターかい！」

「ははははまぁ～ね」

シュン
（お、伊隅隊長達だ）
伊「あ、少佐こちらに」
石「え？」　「「「「「「少佐ー！？！？」」」」」」」
伊「改めて紹介するぞ、昨日付けで少佐になった渚カオル少佐だ」
「まぁいきなり少佐になっちゃいましたが、階級気にしなくって構いません。もらいもんですし、ぬきのお付き合いでよろしく」
伊「しかし……はぁ……わかったかおまえら」
「「「「「「「「了解！！」」」」」」」」
「あ、Ａ－０１付けの護衛と、技術士官にもなったのでそれもわすれなくね♪」
「と、もうひとつ、みんなの機体順次強化するから」
「強化？」「どのように？」「レーザーうて」「バレエでき」「早くしてー」「早瀬中尉に勝て」「楽しみ」
「いっぺんに言わない…説明すっから静かにな」
「まず昨日の戦闘の時俺がイッシーの機体に取り付いたの覚えてる

よね？」

大多数頷く一部「大胆」「純潔うば」

「まぁその時にかるく弄って強化したんだけど、今朝のイッシーの機体の件はそれが原因だったわけだ…」

「で、まぁその強化をみんなの機体にも施す、プラス順次魔改造するつもりだから」（魔改造でキョトンとしたな…お）

「高畑少尉」

高「具体的には？」

「うん、まず魔改造の前の段階は、ＯＳの強化でおもに硬直の除去」

う「え…それって？」

「あーつまりだ、みんなの機体は長刀等で切ると切りおわるまで他の動作できないだろ？」

一斉に頷く

「それじゃ例えば横からいきなり敵に切ってかかられたら、切られるまでまつしかない」

高「細かい操作いれる」「あーまぁそれもだが、だけど切るの中止して、他の動作、例えば避ける事ができれば？」

誰か「あ！」　や驚いた顔

「そう、それが今回の目玉硬直の除去だ」

誰「あ、でもでも、機体が転倒しようとした時に、受け身自働でとるけどそれは除去できないよね？」

「あーそこら辺はコンピュータも強化するので判断と、どっちか片手だけは射撃するようにはなってるまたはバーニアふかして浮上可などね」

高「シュミレーターにはいつ？」

「へ？あるの？」
一斉にうなずく

「あー知らなかったから後で副司令に許可とるけど…いれる事可能だよ…今案内して貰えればね」「まぁあとは即応性の向上等だな…大体ソフト面で３０％は向上可能とみてる具体的には昨日の俺が取り付いた後のイッシーの機動だ」みんなイッシーをみる…首を引っ込めて照れているイッシー

「あとは…まだ具体的には思いつき改造にはなるが…とりあえず昨日つかった大剣のような高周波ブレードは可能だぞ」

西「正面からの両断ね」

「もっとも模擬戦にはその剣は使えないから、別なのでそういった設定でよろしくな」

「とまぁ…こんなところか…じゃあ、シュミレーターの件かたずいたら、順次隊長の機体えっと…」

伊「1番機から順番にコールサイン通りだ」

「に改造します、なを他の人には力みせれないので、専用ガレージB55にて改造しますのでね」

「俺からは以上です」

伊「おい、昨日副司令に見せた力は？」

「あ、わすれてた…まぁ具体的には魔改造のプランとか、この世界でのオーバテクノロジィの入手する為の力がありますので皆さんにも見せます」

「”世界扉”」

伊隅以外は一斉におどろく

「え？」「ふわー綺麗ですね」「肉がきれる？」

「まぁこれで手に入れてきますので、技術に関しては、この世界の方々の頑張り次第で反映できると思いますよ」

風「個人的ですが楽器とか手に入れられます？」

「あ～それは向こうの通貨がないと無理ですので、こっちの何かを向こうで売って、それで仕入れる形ですね…副司令にもおんなじようなの聞かれました」

風「そうですか……」

「まぁ何からしか考えてはおきますが、協力してもらうかも知れませんのでその節にはよろしくお願いします」

「あとはないかな？うん以上です」

伊「あ～全員の機体の改造が終わる期間は？」

「ん～シュミレーターの方許可おりて、シュミレーター改造後、搬入出時間だけですね…Ｂ５５がどんなとこか見る前にここにきたので」

伊「じゃあわかったら知らせてほしい」

「了解～隊長」

「じゃあ、おまえらは…今日は各自の仕事かたずけろ、解散！！」

副司令に許可もらいにいこうと廊下にでて執務室にいこうとすると……イッシーが横に並んできた

「ねぇカオル」

「ん？？」

「甘いもん好きなんだけど…異世界の手に入れられるかな？？」

「ん～協力してくれりゃぁ……」

「うんするする♪」

「ん♪了解、そんときは声かけるよ」

（犬のように尻尾ついてたらぜってー振ってるな……）

石「あ、わたしここまでしか、エリア進入許可ないから…」

「あ、そうなん？ん、じゃ～な」

「うん♪」

ｓｉｄｅ～カオルｅｎｄ～

＝＝　副司令執務室　＝＝

コンコン「カオルですーよろしいですか？」

「あら、どうぞ」

シュン

「失礼します」

「で？なによう？」

「あ、シュミレーターの改造したいんで許可を…」

「彼女らのね？専用台、独立ブロックだからいいわよ
他には？」

「あと少し俺に関してなんすが、戦闘時の力の公開は何処まで？」

「秘密にしては欲しいんだけど、で、護れないのもねぇ…」

「ばれなければ？」

「そうねぇ」

「あ、ならこういった感じにすれば…〝幻影〟」
俺の外観に幻影を纏わせる…人の大きさの不知火の完成
滑る副司令…
「な……」

「これでどうっすか？」でターン

「はぁまぁいいわ…ようは、余計なところからの詮索入らなければ良いだけだし…
これなら新兵器で普通にいけそうだしね」
で元に戻る
「うんじゃま戦闘時はさっきの格好でやりますので」

「他にはないわね？」

「今のところは」

「わかったわ」

「では、失礼しました」

シュン

シュン

「夕呼さん…」

「霞、また？」

コクんと頷く霞

「あれに接触を試してみるべきかしら…？」

ｓｉｄｅ～カオル～

（……そういえば場所何処だっけ？？……ん～待機室誰かのこってれば……お　高畑か？）

「高畑少尉～」

「なに？」

「シュミレーター室の場所教えてくれる？」

「こっち」

「おう」

「ところでさ、自己紹介いらいだっけ？
あんまり喋ってないけど、何か聞きたい事ある？」

すこし考えてる模様

「ない……あなたの力……想像できない位大きい……わからなくなったら聞く」

（か、絡み辛い……）

「ああ、わかった」

「ついた」

「ここか、同フロア内だったんだな」
頷く高畑

「わたし戻る」

「ああ、ありがとな～」
何処かにいく高畑…待機室の方向かな？
さってと…改造しなきゃ

シュン

オペレーションブースかな？に、涼宮中尉がつめている
「涼宮中尉～」

「あ、カオル君ね」

「シュミレーターの改造にきました～そこ、オペレーションブースですよね？」

「ええ…そうよ…」

「じゃ、お邪魔します～…これかな？」
手を触れて…
「イロウル」
解析中、このブースで更新すればいいみたいだね…　じゃ弄って
…ｃｐｕも代えよう
「バルディエル」右手が同化…　更新完了っと
「終わりました～」
「え…ええ……終わったの？？」
「はい、チェックしてみて下さい」
涼宮中尉、急いで確認作業にはいる…
「ほ…本当…ね…」
「うんじゃあ他のところいってくるので失礼しま～す」
「……」
ｓｉｄｅ～カオルｅｎｄ～
ｓｉｄｅ～涼宮すこし前～
オペレーションブースで昨日の戦闘ログの整理をしていると…
「涼宮中尉～」
「あ、カオル君ね」

「シュミレーターの改造にきました～そこ、オペレーションブースですよね？」
（何にも持ってないのに？？）

「ええ…そうよ…」

「じゃ、お邪魔します～…これかな？」

（カオル君なにを？そんなところに、手を触れて…）
「イロウル」
（え…？？モニターログが凄いスピード目がついてけない……ありえない……）
「バルディエル」
（な、右手が…中にはいった？？いえ…同化？？）

「終わりました～」

「え…ええ……終わったの？？」
（う、うそ……）

「はい、チェックしてみて下さい」
チェック作業はいったら……
（見たことないＯＳになってる……）

「ほ…本当…ね…」

「うんじゃあ他のところいってくるので失礼しま～す」

（……夢かしら……朝ご飯ぬいたから貧血??）
ｓｉｄｅ～涼宮ｅｎｄ～
ｓｉｄｅ～カオル～

その後Ｂ５５のガレージを確認し格納庫までの搬入経路を確認、
ついでに整備士の方々にお詫びをして、…
伊隅隊長を捜しにいった　みっけ
「隊長～」

「カオルか」

「改造時間の大体の見積もりでました
いっぺんにに搬入するなら約１時間で可能です」

「ふむ…シュミレーターの方は?」

「もう既に完了です」

「わかったよろしく頼むぞ」

「了解～」格納庫に向かい、整備士の方々にお願いし、Ｂ５５まで
搬入してもらう
で、３０分後に引取に来てもらうようにお願いする……

さて改造タイーム……

内容　ＯＳの更新　ｃｐｕの強化

高周波ブレード…俺がついてないと駄目じゃんが発覚　主機の出力たらず…　あとで報告か…
と思ったらカートリッジ方式にしたらどうかな??で、あ、知らない…
駄目だ…　研修（別世界）に行ってきますｏｒｚで見送り…
Ｓ２機関搭載も考えたが…万が一の時回り含めて全滅の恐れあるから…
あと整備中に事故が…無理だ…

以上　改造タイーム終了

引き取りに来てもらいました
隊長に報告しなきゃ…　みっけ
「隊長、報告です」

「改造のか?」

「はい、ＯＳとｃｐｕの方は問題なくできたのですが、高周波ブレードが主機出力が足らないため、
今回は見送りになりました」

「そうか……」
（残念そう…）
「ですが、ちっと別世界にいけば解決予定です」

「もういくのか?」

「ええ、やれる時にやっておかないと…ですから、じゃあ副司令に一声かけに行ってきます～」

「あ、ああ…」

＝＝　副司令執務室　＝＝

「副司令よろしいですか？」

「はいっていいわよ」シュン
「あら、またなにか？」

「異世界にいってきますのど、お願いが」

「あらさっそく？？と、なにかしら？」
「改造のテスト用に、不知火一機と、破棄された撃震でいいんですが、
コクピット部分と下半身いただきたいです
あと随時改造テストしますので武装を種類多く」

「不知火ねぇ……すぐには無理かもよ、武装と撃震の方は可能だけど何故下半身とコクピット部？？」

「まえ撃震の上半身ペイルアウト後の機体確保しまして、
生体兵器として改造しちゃったので続きを…」

「ふーん、おもしろそうね、いいわ」

「ありがとうございます」

「あ、そうそう、いつもどる予定なの？」

「多分…二日あればっすかね？」

「わかったわ…いってらっしゃい」

「”世界扉”」

行き先は機動戦士ガンダム、一年戦争真っ只中……

第十三話　翌日…　投稿日２０１０１２１７（後書き）

作者「な～カオル…」

カオル「ん？」

作者「一年戦争ってさ…もう少しあとのスターダストメモリーの、ＧＰ－０２核装備つきがいいんじゃない？」

カオル「ソロモンよ、私は帰ってきた！！」

作者「うんうん、で佐渡島で…」

カオル「佐渡島よ、私は帰ってきた！！で、核バズーカでハイブを吹っ飛ばすんだね？」

作者「うんうん」

カオル「突入する部隊が核まみれで…」

作者「……あとがこわいね……」

カオル「それに俺の設定上、その世界のワンオフ機は駄目なんじゃ

ないの？」

作者「だな…」

第十四話　帰還してから　投稿日　２０１０１２１８　修正１

２００１年５月１６日
＝＝　副司令執務室　＝＝
夕呼はかなりいらついていた……そう日付みればわかる通り……
まだカオルが帰還してないからである…
ある事をしようと決めてから……

その間、ピアティフ中尉はおろか、あの霞までが近寄らなくなってしまったのを付け加えておこう……

執務室の中央に変化が現れた…そう６日前に消えた”世界扉”が現れたのである

それをみると用意してた？レンガを両手にもつと…夕呼は待ち構えていた……

ｓｉｄｅ～カオル～

「ただ…イタ！」
…自動ＡＴフィールド突破された怒りの一撃！！
（つぁ～…レンガ？？）
「あでっ！いで！？
…や、やめて下さいよ！！ＡＴフィールド最大！！」

やっととまるレンガ攻撃……

「な、なにすんすか～いきなり…」

「なにすんすか～じゃないわよ！！いったいどんだけまたせるのよ！！」

「え？？え～と……」

「約束よりも４日よ！！４日！！どんだけまたせるのよ！！」

「あ、……すんません自重忘れました…」

「たく、…で、成果は？約束時間よりオーバーして成果ないは認めないわよ」

「はい、まずはガンダムの世界にいき、ＭＳ－０５　ＭＳ－０６Ｃ　ＭＳ－０６Ｆ　ＭＳ－０６Ｊ　ＭＳ－０６ＦＺの破棄されたのを再生し完成させました

ここら辺は実体弾が主流のモビルスーツですので反映はしやすいと思います

装甲、武器、主機　ｏｓあたりですかね、あ、核融合炉搭載し「はぁ？核融合炉？」ええ、

していますから取り扱い注意して下さいね」

「なんなの…どんな世界にいったのよ……」

「またビーム兵器いわゆる荷電粒子砲兵器搭載のＲＧＭ－７９ジムも提供できます」

裏で「ふ、ふざけてる…」と副司令がつぶやいてたが気にせずに…

「あとは適当に集めたので整理はしてますが、研究派生用はそんなものですね」「……他には？」

「あと、目玉かな？農業用コロニー１基」

「コロニー？」

「破棄されてたのをたまたま見つけたのですが、直径６ｋｍ、全長３０ｋｍ、勿論後遺症は残りますが、破片でさえ、オーストラリア大陸のシドニー近辺を地球上から削った大気圏外落下質量兵器にもなります」

「捨てなさい、返して来なさい」

「やだです」

「そんな兵器危険過ぎて使えないわよ」

「あ、すんません兵器でなく人工の宇宙島です、たしか１０００万人自給自足可能です」

「え？兵器じゃ…」

「いえ、人の住む島です基本は…
それをその世界のジオン公国軍はコロニー内部に毒ガスまき、その中の人を全滅させ、質量兵器として使用したわけです」

「そ、それって…」

「ええ、たしか全人類１１０億人の内、一週間で２８億人が死んだ世界です」

「……」

「まぁその世界の一年戦争の兵器が今回する物ですから優秀ですよ♪」

「た、たしかにそう思いたいわね…
けど、コロニーはさすがに使えないわよ…」

「ん…まぁコーヒー豆程度なら提供できるかと」

「使いましょう!!大陸の形が変わってもいいわよ!!」

「……一応虚数空間での全自動で、食料生産可能でしたので、持ってきたので大丈夫ですよ
多分この基地に天然物おろすや、どっかに提供可能な位は作れるかと」

「それで問題ないならいいわ…コーヒーは忘れないでね」

「あとはこれは意外でしたが、改造したものがコピーできますね
同じくらいの部材が必要ですけどね」
（バルディエル万歳）

「まぁ俺からは今回はとりあえずこんなものですね」

「わかったわ…じゃああたしからね…
こっちに来なさい」
シュン　シュン

「こ、ここは…？」
すこし暗い部屋だが目の前にシリンダーがあり、脳髄？？がある…

「この部屋の主は彼女よ」と、シリンダーをさす…
「それと、彼女が社　霞」ぺこりｍ（．＿．）ｍと…
（カオルくんてーだしそう…自重自重）

「彼女ですか……」脳髄に液体が…
「……生きているんです？？」

「ええ、彼女はＢＥＴＡに捕われ只一人生きている、元捕虜よ……」

「捕虜……」
その言葉に愕然とした…肉体の無い脳だけ……が…
ＬＣＬだろうか？その液体に少し興味がいった

「すみません、その脳の保護液ＬＣＬです？」

「ＬＣＬ？いえＯＤＬよ」

「それって何処で作られてます？」

「それって重要？？」

「ええ、かなり…」

「ふん……わかったわついてらっしゃい…霞あとでね」霞ぺこり

＝＝　地下最下層　＝＝

「ここの反応炉で作られているのよ…満足？」

「副司令…ここは…反応炉とは？」

「ＢＥＴＡのエネルギー源ね……もっとも詳しくはわかってないわ…それを研究、利用するのがこの横浜白凌基地の役目なの」

（……まさか……）

「少し試してみたいのですがよろしいです？」

「なにを？……いえあなたは規格外ね……壊さなきゃいいわよ…」

「イロウル！！」

（思った通りだ生体コンピューターでもあるこの反応炉…情報が瞬

くまに流れてくる……
ん?逆ハッキングか??小癪な……乗っ取りかけたところでＳＯＳらしいのを発信しかけたので阻害
…更に解析）

「何かわかった?」

「解析中です面白い事わかりそうですよ」

（上位存在の確認、ほうき型、更に上位者、スパイ行為…ふむ…こんなものかついでに）
「バルディエル」

……
「副司令…」

「なんかわかったの!?」
「これ何なのかわかっていて、基地のエネルギー源にしてました?」

「それを研究してたんじゃない」

「こいつは当ハイブの、最重要なＢＥＴＡです」
「?!?!ＢＥＴＡ?」

「ええ、しかも、それを統括する上位存在が認められますね
地図があれば…」

「甲1号の事ね…」

「で、ついさっきまでこのＢＥＴＡから上位存在に情報つつぬけでしたが、
ダミーをおいて、そこで上位存在と通信
このＢＥＴＡはある意味コンピューターだったので
完全に乗っ取り自分の指揮下におさえました」

「ＯＤＬもひょっとして…」

「はい、交換で情報つつぬけでしたが、もう安心ですよ」

「で、次に光線級ですが…最初は居ませんでしたよね??」

「ええ…そうよ…」

「人類の航空爆撃に対抗して作ったクラスだそうです…」

「やっぱり…」

「で、過剰な大量な強力な兵器は、ＢＥＴＡにおける上位存在が感知すると、それに対抗した戦力を精製する…の流れですね」

「……」

「ジムのレーザー兵器は多分発展を促す可能性もあります、
高周波ブレード程度は大丈夫ですね…

俺単体＋Ａ－０１位の数なら問題なさそうですが、（が連発したらやばそうだな……）
軍隊レベルで新兵器更新すると対抗手段がでそうな感じです

幸い前回は殲滅できたので、情報を持ち替えった可能性はないですが…
今、上位存在との確認でも認められてません」

「他には？」
「また上位存在を集中とするほうき型の司令系統と確認できました
地球上ではその上位存在を消滅させればＢＥＴＡの発展もない事も…
ただその際には他の星から、この場合月ですね期間ははっきりしません
あらたな上位存在が撃ち込まれてくる事もわかってます」

「他には？」

「あとは他ハイブの構造、ＢＥＴＡの生産データー位ですね」

「それ何処かに表示できる？」

「執務室のＰＣにデーター表示させる事可能ですよ
あとはないですね、ところで提案なんですが」

頷く夕呼

「ダミーから上位存在へスパイをやりたいんですが」

「あなたがいればできるのね？」

「はい」

「わかったわ、やりなさい、けど必ず成果は報告する事」

「はい」

「他にはないわね？、じゃあ戻るわよ…」

（戻りながら考える…）

「副司令」

「なに？」

「ハイブ攻略戦の際状況等教えてくれます？」

「このハイブ攻略の？」

「ええ、」

「とりあえず記録などあるから上でね」

「はい」

ｓｉｄｅ～夕呼～

（まさかまさかまさか…こんな棚から牡丹餅って…ありえない！！
なんなのよ…苦労しっぱなしだったのに……
でも…凄い情報…これで人類は…）

（けど、とりあえず諜報員に関してはこいつがいるけど、
凄乃皇操縦に関してはやっぱり００ユニットは必要ね）

ｓｉｄｅ～夕呼ｅｎｄ～

＝＝　副司令執務室　＝＝

「このＰＣにＤｏｗｎｌｏａｄすればいいっすね？」

「ええ……あちょ「イロウル」まったぁ」

「へ？……あ……」

「あんた、まさかみたの？」

「あ、オルタネ「プロテクトの意味もないのね」……みたいですね」

「はぁ…みてのとーりよ」

（オルタネイティブ４…対ＢＥＴＡに対する諜報員育成計画
量子脳搭載の００ユニットによる情報入手を主目的としている

オルタネイティブ５…アメリカ主体の他星系脱出移住計画＋Ｇ弾集中投下によるハイブ殲滅作戦通称、作戦名バビロン計画

Ａ－０１に関する裏情報…００ユニット素体適応者

００ユニット…機械の体に人間の魂を宿らせた

オルタネイティブ４の中核となる存在

生物根拠０生体反応０

量子電導脳搭載

などなど…　）

「そ、この当基地はオルタネイティブ４の達成を主目的とした、わたし香月夕呼の為の基地といっても過言ではないわ…

あんたそこまでみたからにはただでは帰さないからね…覚悟しなさいでなんか助言はあるの？異能力者さん」

「と…まずは、オルタネイティブ５によるＧ弾での殲滅ですか…失敗しますね」

「対抗手段ができるのね？」

「はい、過去の作戦でＧ弾使いましたよね？

それでＢＥＴＡ側での警戒ランクというのがあがってますね…

多分もう２、３回で対抗手段を作る…まできてます」

「良いカードかもしれないけど、人類にとっては最悪ね…」

「あと、ＢＥＴＡは１０の３７乗の上位存在がありますので、他星系いっても…無事ではすまないでしょう」

「その数あるなら…でしょうね」

「G弾使う位ならまだ質量兵器…
コロニーはオーバーキルで被害が…ですが、
の方がよいっすよ…
（ATフィールドつかってのサンダルフォン攻撃かな??）」

「そうねぇ……」

「オルタネイティブ4に関しては…00ユニットは…
ん～現時点ではわかりません…
AIという存在ならある事はあるのですが…」

「それでも、このハイブ内部情報やら、BETAに関してなどや、
スパイ行為でかなりの達成度があがるわよ
これだけでも良いカードになるわ」

「まぁ…正直オルタネイティブ5の地球に残った10000万人以外の人々…は
G弾による住めなくなった環境下の元　最後の一兵まで…ていうのは賛成できませんので、
改めて香月　夕呼副司令、協力いたします」

「わかったわ、せいぜい働いて頂戴ね」

「はい」

そう、よりよき未来へ…異邦者と、魔女が真に手を組んだ瞬間であった……

＝＝　Ｂ５５ハンガー内　＝＝

副司令執務室からいの１番でまずはハンガーにきた

…そう取り込んだ残骸の改造整理等をするために…

「こうしてみると……自重忘れた??」

連邦、ジオン軍問わずに、戦艦やらも……戦艦はさすがに出せないので、スクラップのは、改造資源の元になるかな??とも思った

「あ、…やば忘れてた…　とまずは…」

７４式近接戦闘長刀↓高周波ブレード化、電源…バッテリーカートリッジ式〔ビームライフルのエネルギーｃａｐの技術から、カートリッジ方式を学び（貯める部分で）流用〕

多分連続使用可予定…ただいま運転テスト中

カートリッジの充電器…戦艦から剥ぎ取ったもので、普通のコンセントプラグを付けてみた…２００ｖ専用か…

あったあったこれで利用できる

カートリッジの予備充電中

「で整理だなぁ…」まずは完動品虚数空間内

ザメル〔これは終戦間際のどさくさでゲット〕

ハイゴック〔ミハエルのお古♪〕

副司令に話したザク系他

次に再生作業
ホバートラック
量産型ガンタンク
ジムトレーナー
６１式戦車
マゼラアタック
ザクトレーナー
アッガイ

再生予定
陸戦型ジム
陸戦用ジム
ジム・コマンド（宇宙・地上）
ガンキャノン量産型

ザク・デザートタイプ
ザクフリッパー
グフ
ドム
リック・ドム
ゴック
ズゴック
陸戦強襲型ガンタンク（これをゲット狙いでオデッサ作戦に…見事に♪）
グラブロ
セイバーフィッシュ

現地で再生後取り込み
ビックトレー改…つぎはぎながら
ギャロップ　カーゴ付き
サラミス、後期生産型
マゼラン
ムサイ
ユーコン
マットアングラー
ザンジバル
ＨＬＶ
以上なもんです

再生予定は睡魔たえきれ……

ハンガー内部で床に倒れてのカオル……

夢の中では…赤いゲルググ機に遭遇し、二日間ほど、追われてコロニーに逃げ込む夢を…

〜コロニー　密閉型農業用コロニー…売りに出せる作物をゲットした模様だ…〜

第十四話　帰還してから　投稿日　２０１０１２１８　修正１（後書き）

作者「な～カオル最後の夢オチは？」

カ「実際にやられた夢ですよ、宇宙空間で、残骸ひろってたら、宇宙人と間違えられて追っかけられたんですから…」

作者「おまえ、その時の格好は？」

カ「人間やめさせてくれたんですよね？そのままですよ」

作者「はぁせめて宇宙服きて、作業用ポットでも…そしたら追いかけられなかったのに…、でどうなった？」

カ「廃棄コロニーに逃げ込んだのですが、１個大隊のＭＳと、多分陸戦歩兵旅団規模においかけられて、逃げ切れませんでした」

作者「かなり戦線に影響でてね？？」

カ「で駄目かなぁ…の時コロニーに同化わすれてて…」

作者「それが持ってきたコロニーか…」

カ「はい、でも酷かったなぁ……」

第十五話　武装強化実行後の翌日その１　（現実世界トリップ込み）　投稿日？

２００１年５月１７日

ｓｉｄｅ～石橋～

（……カオルまだもどってないのかなぁ……？）

最近、カオル探しで定期巡回ルートとなっている執務室から最近許可がおりたＢ５５ハンガーに向かってエレベーターで下りていた

（……今日もいなかったら…たしか５日前には帰ってくると聞いてたのになぁ…）

エレベーターがとまり、ドアがひらくと……

一面戦術機と思われる残骸の山だった……

（え？なにこれ……

見たこともない頭部、みたいなのもあるし…

この銃も…へぇ～

これは…バズーカー？戦術機サイズの……

これは斧よね？？

なんか一つ目のが色々な頭部あるわねぇ）みると所、高熱のようなもので斬られたあとも見受けられる

しかし、昨日まである程度の武器（改造するとからしい）しかなかったのに…

その残骸の山をまわっていくと…見慣れない機体が見えた

（この機体、口がくちばしのようになってるわね…

その隣は…タンクと戦術機を合体？？
あ、タイヤなしの、装甲車みたいのもある…
隣のタンクは…見たことないわねぇ…二連装ねぇ
その隣のタンクはなんか翼がついてるし…
あ、丸っこい…この機体はマニピュレーターないの？
強そうでないし…何用かしら？
この機体は　頭部の部品が胸のあたりにもあるわね…

この機体だけ頭部の形が違う…）
のあたりまで見てると、床に突っ伏しているカオルが見えてきた

寝てるようである

（やっと帰ってきたとおもったら…油性マジックあったかなぁ？？）
（あら？タバタ？）
招きました
「タバタ、どうしたの？」
「見ていた」
「あの機体群を？」
こくり
「今までのと違う戦術機だよね～？」
「いや違う…根本的に」
「え？」
「私たちの戦術機は元は飛行機から発展したもの」
「あ～そうだったわね」
「これらの機体はタンクらしいのは別として、
二足歩行を主として航空力学を備わってない」
「……つまりは……」
「陸上兵器から発展されたと推測される
このタンクもどきもあるから多分」「はぁ～……久々に聞いたわタ

バタの解説…よっぽど興奮したのね」
／／／／こくり
「多分いやほぼ異世界の兵器よね…動かしてみたいなぁ…」
「許可とれてる」
「本当??」
命令書…副司令印
武装はカオル立ち会いのもと限定だが、
自由に演習場内なら動かして良い
との命令書
対象Ａ－０１
「じゃあ先任よばないと…あとであれされちゃうよ…」
「イベントだからよんである」
「いつのまに?」
「残骸みたら朝一で副司令にその後すぐ……」
「……ひょっとして……」
水「……イッシー、あれってなに?わたしをどうみてるのぉ?」
石「い、いえ…サー!!速瀬中尉!!ナンデモアリマセン!!」
水「……うんふふふ～声が裏返ってるわねぇ……」
高「そんな事よりこれら」

（助かるか…？）
水「ーーーー興味そそるわねぇ、タバタ、動かせそうなのあった？」
（助かったぁタバタありがとう）
高「あの頭二つついてるのはハッチあいてる」
水「いくわよ！！」
ｓｉｄｅ～石橋ｅｎｄ～
……
「タバタあったぁ～？？」
操縦席みると、こっちと違うとの事で多分解説書あるんじゃないか？で探してる最中である
「あった…多分これ」
新兵でもわかる！！漫画入り操縦マニュアル　ＭＳ系統ザク編
パラパラパラ
「へぇ……正直これならわかりやすいわね　ん？タバタは？」
「先任には無理なのみてる」
「タ～バタ！！」が本を奪おうとしてやめた……確かにそうみたいだ
書いてある事が難し過ぎる
「操縦席はこの下、ここは教官用らしい」
「わかったわよ！！」
でていった瞬間にツマミをタバタは操作した…　初級
「みてらっしゃいよ～」

……

ｓｉｄｅ～石橋～

（タバタと中尉、のってっちゃった…私は…ん～悪戯あきたから…けどいきなり操縦方法わからない機体は怖いわねぇ…決めた、車両のにしよ…
……どれが良いかなぁ？この二連装のかな？
でも…この大砲…かなり長くでかいわね…７４式の５１口径１０５ｍｍ以上？？）
車体ハッチを見つけ覗き込む
（こっちは…砲手席かな…？）（こっちは…操縦手席ね…
通信手席は…？乗員２名？？）

（じゃあ、のってみましょうか
…シートも良いわねぇ）
戦車の操縦方法は大体は一緒である…
（見慣れないスイッチもあるけど……セルは…これかな？？）

動力音がした…ディーゼル音がしない…
（動力は何かしら？）
そう思いつつ地上の演習場に６１式戦車を、後に改良型がＧ型戦車と呼ばれベストセラーになるのを進めた…

＝＝　地上演習場　＝＝

「きゃ、あ、ありえない～」

限用戦車にはありえない機動力だ、不整地速度踏破速度が９０ｋｍ
最高速度がキャタピラにして整地２００ｋｍを越えてるのである

「はぁはぁはぁ、なによこのモンスタータンク…」普段戦術機で高
機動おこなってても高さが違う、
地面に近いのである…
飛行場着陸時にＢ７４７でのとＢ７３７の違いでわかる筈…
しかもジャンピングブースタ付きである…
衝撃もほぼ直にくるから半端ない
ＭＳとちがってＧキャンセラーは使ってない……

（少なくとも…突撃級の速度から撤退可能よね）
そこが重要ですね…

一通り運転終了して、ハンガーに戻すとカオルが悪戯された顔のま
ま起きていた

「カオルーー！！」

「おう、イッシーか」

「何なのよこの戦車」

「６１式戦車、レーダーが無効になり、有視界戦闘となった為に、
時代から駆逐された戦車」

「え？レーダー無効？？」

「…まぁ異世界の話しだからきにすんな…
モビルスーツに主役の座を奪われただけだよ……とそういぃあ、何

機か足らないなぁ…」

「副司令から操縦のみなら許可でたからね…
武装は今のところわかる人、つまり
カオルが立ち会わないと駄目って話よ」

「なるほどね…あ、ちっと聞きたい事あるんだった……まぁ座って」

「なに？」

「この間の戦いの時気になったんだが、おぐの機体に戦車級がとり
ついちゃったよな？」

「ええ……」いやな事を思い出した…おぐが食いつかれた光景が…

「なんで取り付かれたんだ？取り付かれた後の対応は？」「え？普
通は８７式の３６ｍｍで弾幕をはる、または１２０ｍｍの散弾で遠
距離のうちに駆逐するのが普通よ、
あの時は、無理にミサイルを撃とうとして出ちゃったからって話し
てたわ…
で、取り付かれた後は、振りほどくか他機に短刀でそいでもらうし
かないわね」

「だからイッシーが急いで近寄ってたわけか…」
頷く（そこで、カオルが助けてくれたんだけどね♪）

「じゃあ、戦車級に寄られたら効果的な、取り付かれたら効果的な
のはないんか？」

「ええ……逃げるしかね…多分1番衛士を食い殺してるといってもいいかも」

「武器改造も良いけど戦車級対策性急だなぁ……」

「なぁＣＩＷＳは何故使ってないん？」
「ＣＩＷＳ？あ、ああ、アメリカ側での呼称ね、長刀の事よ」

「あ…ん～確かファランクスだ、そうバルカンファランクスはどうなってるんだ？？」

「…知らないわ…」

「おし、……今度は行き先決まったかな？」

「え？今日かえってきたばっかりじゃない」

「昨日だよ昨日」

「昨日だって、ほとんどかわりないわよ」

「でもみんなを守る力がそこにあるなら取得しておくべきだろ？？」

「っーーーわかった、すぐにかえってきてね」

「ああ、」

西「いいかんじで悪いけど…後ろの山どうするの??」

「「西沢（先任）少尉」」

西「このままで?」

カ「手足りなかったんですよね～さすがに…ちょっと行ってきた後で考えますので失礼します」

タ「……逃げた……」

イ「うん」

ｓｉｄｅ～石橋ｅｎｄ～

＝＝　副司令執務室　＝＝

シュン

「失礼しまぁ～って霞ちゃん?だったよね」こくり

「副司令は…?」

顔をドアの方にむけた……

シュン

「あら、なに?……さては霞に手を出したのね?」

「あの～まだ手を…」

「まだ…ねぇ…手をだす予定なのね？駄目よ犯罪よ？」

「……もういいですよ……話変えましょう」

「強引ねぇ」

「別の世界にまたいってきます」

「また？？……今度はオーバーしないでよ、で今度は何処に行くのよ…」

「自分の元の世界に…、で自動近接防御射撃兵器を学んできます」

「ふ～ん…期間は？」

「そうですね…余裕いれて二日いえ、三日程かな？と…」

「わかったわ…ところで、行く前に自分の顔みた？堪えるの大変なんだけど…」

「へ？？」

「はい鏡……」

（肉の字……いつのまに……）ごしごし

「洗面所は？？」

「扉でて、右まがったとこよ」

シュン

……

シュン

「準備いいのかしら?」
満面の笑み……
やられたと思った瞬間……

「いってきます……”世界扉”」
＝＝　現実世界　＝＝

「とここは……」

そう、見慣れた光景が広がった…簡素な住宅街の中の部屋…
俺の部屋である…

（……親父、お袋、美幸《妹》……）

（……）
俺の部屋はそのままだった…
（……は!!そうだあれは処分しなきゃ!!）

うんわかるよ、わかるよね　つまり親に見せられない物

（えっとあれ、これ、それ、これも、あ、これもだ）片っ端から虚数空間にほうり込む……　どんだけあるんだか…
（あと、どのＤＶＤだったかなぁ…ラベル交換したから……
あ、本もそうだ…）
確認しようとした時…
ドアを開け
（やば!）「”幻影”」
られた…　相手はバットをもった妹の美幸だった…

カランカランカラ……
「え……え…？お、おにいちゃん？？」
（あ、やば…しんでたんだよな…おれ…）
「お、お兄ちゃん！！」泣きつかれて飛びかかられた…
「お　お　グス　おに　い　」
（美幸……けど……）
「美幸……ゴメン、俺しんだんだ…」
「グス　な　な　なに　グス」
「美幸！！話をきけ！！」　で剥がす
「　お　グス　に　い？」”幻影”解除
「！！カ……ヲル君？で、でもお　に　い…」
「美幸、おまえ2次小説好きだよな？」
驚きながら頷く
「たまたま、それになったんだよ…」
「え…？グス　じゃあ…」

「ああ、多分思った通りだ…俺はこの世界にいられない」

「う…ん…」

「だからな、美幸悪いが…」

「わかった、お兄ちゃん」

「ゴメンな…」

「あ、お兄ちゃん、父さんと母様、
あたしの為に頑張るって立ち直りつつあるから、心配はしないで」

「ああ、わかった…とじゃあ、美幸…バルディエル」で造形した元の俺の像を作る

「これでいいか？」

「うん……あ、お兄ちゃん、やっぱり他の2次のように酷い世界なの？」

「ああ、死亡フラグまんさいのな…だから見捨てられなくなってさ…」

「そう、あ、もし私がいたら…護ってね」

「おう」

「また来てくれればいいな……じゃあ、いってらっしゃい…」

「あ、美幸、一つ頼みが…窓から飛んでいくからさ、鍵しめといてな」

「うん」

「じゃあ…な」

＝＝　池袋　＝＝

（やばったやばったやばったやばったやばったやばった）

追われいる…女性の集団に…

ことの顛末は、自宅の隠しておいたこずかいでパチンコで少し稼いで、お土産もかっておくか?でマイホに、いこうとした時だ…

渚カヲル君がリアルにいたら…の騒動になっていた…

（どーすんだよ、これ、どんどん増えてくるし、まだ陸戦隊相手が楽勝だぁぁぁぁぁ!!）

３０分経過…池袋は大パニックになっていた……

（ちっくしょー）

第十五話　武装強化実行後の翌日その１　（現実世界トリップ込み）　投稿日２

まいど後書きまでありがとうございます
今回は二部構成でお送りします

第一部

少し兵器についてご説明します
地球連邦軍６１式５型戦車
不整地踏破能力は記載あるのですが
最高速度が記載が見つからないので
モンスターマシンに仕上げました…
ガンダムの世界にならなきゃしばらくは主役だったのでは…？
だと思いましたので

また装甲で勝てないザクに勝つにはが機動力でしたので

まぁ詳しく私見解してるのは後ほどかく、後書きで…

６１式たんぬはロマンだ！！（イグルファンの叫び）

……第二部
作者「ねみぃぃぃ」
うん徹夜で仕上げてるもんね…話がどんどん進む…好きだもんなぁ…
けど　自重しないと絶対あ号は対抗手段だしてくる…必ずだ！！
あ号「その…とおり…だ……」

作者「おま、らすぼすが個々にきていいんか？」

あ号「……わたし…より…うえ…いるぞ」

作者「……らすぼすでなく、バラモスレベルかよ……妄想力越えるぞ……」

あ号「……宇宙戦艦ヤマトをだせば……よい…」

作者「あ～ヤマトね、惑星破壊レベルだしなぁあれ……パチンコもまけたし……なんでガラミスたおさないんだぁぁ！！」

あ号「……わたしが……そうさした……」

作者「てめぇぇ！！ぬっころす！！」

チーン　作者帰りうち…

この後書き書いてある頃…　作者はジャンフェスの参加つかれで…酒を飲んでますｗ

第十六話　池袋パニック後（現実世界トリップ込み）　投稿日２０１０１２２０

テレビのワイドショー等のニュースから
「ただいま社会現象となっていますこの騒ぎ
なんと、ここに渚カヲル君が現れたとの情報で、沢山の方がこの池袋に集まっています」
別チャンネル
「のように、ネット上にも写真が流れて」
別チャンネル
「すみません～なにをなさっているので？」
「カヲル君を探しにきました！！」
別チャンネル
「昨日の騒動により、怪我人４４名出て、店頭が壊された等の被害で、
損害額の見積もりは３千万にのぼる予測です
しかしながら未曾有の人々の集中により店舗の売上はかなり出始めています
また早速ながら便乗コピー商売が出始め版権元の…」

その頃カオル君は…
（やばかったなぁ…時間くった…幻影はうまくかかってるよな？）
カラスになっていた

都会部分でも十分に怪しまれず全国的にいるからである

さて、前回の池袋騒動の逃げたルートは…
池袋駅の男子トイレ個室に逃げ込み

バルで同化し、物質として移動しながら、埼京線の車両に同化

で終電で上手く新木場につくようにし、
離脱してカラスに”幻影”でなり、飛んでるのである

（お…見えた海上自衛隊横須賀基地…目指すのは…きりしま）
最新式のＣＩＷＳ　Ｂｌｏｃｋ１Ｂを使用しているからだ
ある意味趣味に走っているかもしれない…

（さてっと）
バルディエル
ＣＩＷＳだけでなく艦全体と同化…離脱

（うまくいった…あ、そうだ９９式自走砲と弾薬給弾車～～北海道だったよな？…
飛行機に同化した方が無難か…）
…

羽田にくると……うたれました…　バードストライク対策ですね…
しょうがないので…北海道の方角にいく飛行機ねらって…

（ん？あれはＳＫＹ！！あれなら！！）北にいくは…羽田ー新千歳ー旭川線のみ、
Ｂ７３７－８００ウイングレット付きに同化して、空の旅を楽しみました…
新千歳空港手前で離脱…そのまま滑空で東千歳駐屯地へ…

見事、二台とも取得できました
ついでに目についた９０式戦車回収車、重レッカも…

三日目
さてっと…北海道きたから、今度はミスらずに…
「”幻影”」朝一から駅近くのパチンコ屋へ…
花の慶治にすわり…
「イロウル」（お、ここが大当りか、チェッカーとおったなうっし）
でふきはじめました
（イ）２０連３連（イ）４１連５連で終

６０箱しめて、３０万、余りはお菓子に変えて……
北１２条のドトールで珈琲豆…ブルーマウンテンブレンドと炭火珈
琲でいいか…ゲット

駅なかで、生キャラメルとりあえず１２箱ゲットし…
大通り公園のトイレ入ったところで
「”世界扉”」

（残金はとっとくか……）
２００１年５月２０日
＝＝　副司令執務室　＝＝

「あらお帰り」

「ただいまっす」

「今回は予定通り??」

「お土産です」　で珈琲と生キャラメルを渡す

「あ、ありがとね」

（珈琲で目を麗しいてるなぁ…生キャラいらんかったかな？？）

「では、後程…ごゆっくり～」
シュン
（霞ちゃんは…脳随の部屋かな？）
シュン
（あ、いた）
「霞ちゃん」振り向く
「はいお土産」

「これは…？」

「俺の世界の札幌土産、生キャラメル甘くて美味しいよ♪」

「ありがとうございます」ぺこり

「じゃあね」

「ばいばい」
シュン
（さってと、Ａ－０１の待機室に～）
＝＝　待機室　＝＝
「誰も居ない……となると……？」

＝＝　シュミレータールーム　＝＝
「お、いたいた」
模擬戦闘訓練をしてる模様だ

（ん～～まぁ、あんまり模擬戦闘訓練は見てもなぁ……）
涼宮中尉が見えたから、手をふると気がついたようだ…

お土産で一人一個ねを伝えて退出する

邪魔しちゃ悪いからなぁ……

＝＝　　Ｂ５５ハンガー　＝＝

不知火と、撃震の下半身及びコクピットブロックが　入ってきたようだ

改造タイーム

不知火

ん～　ガンダム世界の装甲材超硬スチール合金に変えてみた…

防御力ＵＰ　機動力大幅ｄｏｗｎ

…主機出力が足らないんだよね…スチール装甲だし（重い…）

主機を核融合炉に変えて見ました

防御力そのまま　機動力最初よりＵＰ

ふむ…

ものは試しに　射撃テストを廃材使ってやってみた…

８７式突撃砲ｖｓ超硬スチール合金

３６ｍｍ突撃砲　きき ません

１２０ｍｍ突撃砲　徹甲弾……２発は耐えた…

いいんじゃない～♪

…初期のザクマシンガンで試してみた
Ｍ１２０Ａ１ｖｓ超硬スチール合金……1発耐えただけなのか…

あ、チタン・セラミック複合材　ジム・コマンドやザク＝改使ってたんだ　で思い出した…廃材装甲テスト

１２０ｍｍ　徹甲弾ｖｓチタン・セラミック複合材……8発…
Ｍ１２０Ａ１ｖｓチタン・セラミック複合材……4発か…

あ、確か…
ＭＭＰ－８０…これは2発耐えたね…

ビームスプレーガンｖｓ超硬スチール合金　うん　これも1発はたえてる
ｖｓチタン・セラミック複合材2発堪えるなぁ……

あ、ジム陸戦型…ルナチタニウム合金（ガンダリウム）だった…試してみました
１２０ｍｍ徹甲弾…２０発でも貫通せず
Ｍ１２０Ａ１…15発か?ジム陸戦型、ガンダムの戦価納得
ＭＭＰ－８０　８発か…
ジムスプレーガン　６発…

主人公機（ガンダム）最強だなこれは

確かこの後ビームライフルの高出力化が始まるから……
ガンダリウム合金が標準化なるんだっけ…（Ｚ以降）

さてっと…
ルナチタニウム合金に改造しました

結果、
防御力大幅ＵＰ　機動力大幅ＵＰに成功…
ＣＩＷＳ要らない子になりかねない…
案外戦車級の噛み付きに耐えちゃう??　なので、捕獲しなきゃになりました…（要検証）

撃震エヴァ仕様（上半身）
撃震の下半身をくっつけて、下半身も生体構造にしました
コクピットは…一応弄らず
装甲…ルナチタニウム合金に変換

エヴァ撃震仕様の完成かな?
武装は出力が余ったし　後程……

とそこへ……

「カオルー生キャラメルありがとうね～」

「ん?あ、イッシーか…」

「あ、改造?どこらへんを変えてるの??」
「ああ、不知火は、装甲材と、主機ね…ルナチタニウム合金と核融合炉搭載してみた」

「で、で??」

「結果多分だが……戦車級にたかられても耐えられる装甲、機動力

大幅ＵＰになっちまった……」

「それ本当!?!?」

「実験データーな、一番下のルナチタニウム合金、８７式突撃砲徹甲弾２０発でも耐えてるだろ?」

「え、ええ本当ね……」

「ただ、このルナチタニウム合金は、月にある素材が必要になってくるっう話なんだよ…
今は俺が直接装甲材を変えるっう事でしか無理だなしかも、これは変換時間がかかる…」

「ね、これ貰っていい??」

「ん～どうせならもう、少し弄りたいからもうちょっとまっててくれ…
けどあの撃震はとりあえず乗っていいぞ」

「え～～～～　撃震??」

「中身は全て変えたから、外側に撃震を纏ってるだけだよ、コクピットはいっしょだけどな」

「う～……乗ってみる……」

「あ、ちょっと一言、フルパワーで動くとしぬからきいつけろよ」

「……なわけないでしょ、撃震が…」

「中身は別物だぞ…」

「……わかったわ…」

結果…撃震エヴァ仕様のＧに耐えられず失神したイッシーが見つかった…

要耐Ｇ設備…

……

さてっと、イッシーが乗っていったところで残りの作業を…

今日再生できたもの
陸戦強襲型ガンタンク
ザク・デザートタイプ

残り１０機種か…人手が足らないなぁ……

人が駄目ならロボットか……作業用補助出来そうなのは……
００のハロ？、ナデシコの木連のコバッタ？……
ナデシコに決めた
明日　またいくか…

２００１年５月２１日
＝＝　副司令執務室　＝＝

「あちゃーあんだけいったのに……」

「あんたねぇ…どういった機体作ってるのよ…
しかも一週間入院ての話じゃない」

「一週間もですか…」

「あと、さらにもう一人も失神、こっちも二日間程入院、帰って来ないわ…」

「……」

「しかも、整備士の手におえない、生体駆動…不気味がってたわ…」

「まぁ…でしょうね」

「使えるの？そんな危ない機体つくって」

「使えると思いますよ、別世界の決戦兵器がモデルですし」

「決戦兵器？」

「ええ、人類の存亡をかけ、神の使わした使徒と戦う為に、１４歳の子供が乗って戦うという」

「……１４歳？？」

「適格者しか操縦できないから…が正しいでしょうね、で世界でみても、５機までしか、
が暴走事故とかで、戦わずに損失等で
厳密には３機しか戦いぬいてません」

「……」

「で、自分の能力はその使徒の方の力なんですけどね」

「あなたの力と戦った兵器ね…」

「本来ならＬＣＬプラスエントリープラグ等で総合的にＧをキャンセルするんすが…
なかったので戦術機コクピットを…です」

「決戦兵器ねぇ……テストしてみる？ＢＥＴＡ相手に…」

「はい？」

「実は、今日佐渡島ハイブ間引き作戦が実施されてるけど、苦戦してるみたいなのよ…で要請が入ったわけ」
「なので軽く戦闘に混ざる程度で良いからいってみる？？」

「了解です」

「駄目そうだったら撤退でいいから、生きて帰る事を重点においてね、あとＡ－０１も」
「あ、今回はＡ－０１の方はご遠慮を…
自分一人だけのほうが逃げるなら逃げやすいですし…

あと虚数空間に撃震もってくつもりなので、
移動手段は要らないです」

「……あなた一人で大丈夫なの？」

「……世界の命運をかけた異世界の決戦兵器の実力見てみたいと思いません？？」

「……わかったわ…いってらっしゃい」

「渚カオル少佐！！佐渡島ハイブ間引き作戦に出陣します！！」

……

カオル報告

シャワートイレを覚えました
ＪＲ２０５系を覚えました
臨海高速鉄道７０００００型を覚えました
レール関係設備を覚えました
海上自衛隊　こんごう型きりしま　覚えました
Ｂ７３７－８００ウィングレット付き覚えました
陸上自衛隊　９９式自走１５５ｍｍりゅうだん砲　及び９９式弾薬給弾車
及び９０式戦車回収車
及び重レッカ
覚えました

第十六話　池袋パニック後（現実世界トリップ込み）　投稿日２０１０１２２０

作者「カオル～シャワートイレ覚えたん？」

カオル「ん？覚えたけど？」

作者「なら一つ作ってくれよ、最近下痢気味で拭きすぎて血がでちゃうんだよ……」

カオル「まぁ～いいとしてなんで下痢？」

作者「多分お酒飲み過ぎ？？」

カオル「飲み過ぎ！！太るよ、アル中になるよ！！」

作者「う……」

カオル「禁酒汁！！」（作者が倒れたら俺どうなる？？）

作者「わかった……明日からやるよ」

カオル「はぁこりゃ駄目だ」

何日もつかな???

……　第二幕　……

イッシー「ねぇ作者」

作者「なんだ??」

イッシー「ＣＩＷＳはわかるけど…リスト上の９９式はなに?」

作者「趣味に走ったｗ」

イッシー「本当に?」

作者「まぁ本当は異世界土産～とおもって、甘いもの甘いもの…で、俺が買った事あったので、あっと思っただけなんだ…」

イッシー「なるほどね…うん甘いよ」

作者　「うんこの話で途中退場だからお詫びな」

イッシー「え?ちょっと作者!!さらっと重要な事いわないでよ!!」

作者「実は、思いっきり全力機動して…全身複雑骨折で衛士生命がたたれる…」

イッシー「ちょっと！そんなに重体じゃないわよ！！勝手にしないでよ！！」

作者「で、カオルがお見舞いにきて、そうだなぁ…病室内でイチャイチャ」

イッシー「！！……」

作者「うっしそれで行くか…」

イッシー「そんな話にするなぁ～！！パワーボム！！」

作者　チーン

第十七話　カオルは飛んでいた　投稿日２０１０１２２１　修正２

俺は佐渡島に向け不知火君で飛んでいた
撃震の検証をする為に……

撃震エヴァ仕様スペック　変更点
装甲　ルナチタニウム合金（全面的）
主機　Ｓ２機関
駆動　生体駆動

武装　高周波ブレード（駆動時間未検証）専用バッテリーカートリッジ１０個

Ｍ－１２０Ａ１　ドラムマガジン５個装弾数３３２発だから、１６０発分
ＭＭＰ－８０（９０ｍｍ）　１００連装バナナマガジン１０個

予備としてもう一本高周波ブレード

間引き作戦とは…攻撃側人類が攻撃後補給等含めて５割以下の戦力に下がるにも関わらず、
奇襲攻撃されないために必要な攻撃である…
との説明を聞いた

それおかしいんでないの？とも思う
組織的抵抗できる基準が３割＝全滅の基準５割＝壊滅
１０割＝文字通り玉砕

って事になる

何故なら、その後の兵力の回復が…文字通り…回復に時間かかるからだ…
５割へった状態からそのへった５割を回復させるのにどれ程時間かかるのだろう？
また兵站にしかりだ

第二次大戦の日本と同じ、
つまり日本＝人類
連合軍＝ＢＥＴＡ
の図型がみえてくる…
その物量でせめられると……崩壊するのが目に見えている…
が予定数を削らないと、先日の防衛戦のようになるらしい…

本当ＢＥＴＡは嫌らしい…

そうこう考えているうちに佐渡島近辺に入ったらしい
光線級の照射をよけ　低空飛行へとうつる

海岸線が見えた、
がまだＢＥＴＡは視界内に見えてない
（うっし　出すか）
虚数空間から撃震エヴァ仕様を引っ張りだす

ハッチを開きコクピット内に

「それじゃあ、いっちょやりますか！！」

……3分後

「や、やばい……」
Gがキツすぎた…というか、なに？
こりゃあ、みんながみんな失神や病院送り当たりまえの欠陥機……
というか、この世界のコクピットのGキャンセル能力のなさに……

「う、動かせないなぁ……」
要改修の結論をつけた

「バルディエル！！」

（結局は俺が同化するしかないんだよな……）
になってしまった…

不用意に強化しないでおこう

全身のチェック、正常
（いっきまーす！！）
ＢＥＴＡのいる方向へ

うん快調快調……
発見！！
まずは戦車級８か…合金テストなのでたかって貰いましょう…

（ほーらいい子いい子
よっし……たかってきたぞ…
登ってきて……歯が滑ってるな…

うん食いつかれない）

歯はたてようとしてるが…歯よりも、装甲の方が強度は勝っている

（うん…ルナチタニウム合金の場合は学んだＣＩＷＳいらない子だ…ｏｒｚ）

ただ、歩兵いたらやっぱりなので、

なにか考えるべきかな？とも思う…

（さて、戦車級相手は終了か……）

戦車級は潰しまくりました　手が届かない場所は　兵装担架のアームを使って…

一匹は捕獲　洗脳して配下にし虚数空間行きに

（要撃級はどこにいるかなぁ～）

要撃級発見！！

（こんちわぁ～　ああ、喜んで叩かないでくださいよ～）

つまり要撃級の腕による殴りは効かない…のがわかった

うんルナチタニウム合金万歳　かな？

この子も洗脳して、虚数空間行き

（…、光線級重光線級か…体にあなあけなきゃ駄目か……　）

（集団の中の方向だよな…）Ｍ－１２０Ａ１を構えて…突貫！！

装甲耐久に使った弾は徹甲弾　つまりは対大型種用…

ひとなぎだけで…

この世界Ｍ－１２０Ａ１だけでいいんじゃないかなぁ～の印象

装弾数も一マガジン３３２発だし…
（固いやついないかなぁ…あ、突撃級……）
かるく一発で沈黙した模様
　うん超硬スチール合金以下ね
ただこのドラムマガジンも結構な大きさするから…マガジンラックも考えなきゃ

（お、いた光線級ちゃん…カモーン
流石ルナチタニウム合金…びくともしないな…インターバル暇……
うん…ジムスプレーガン以下？位か？）
７発おんなじ箇所にくらって溶けはじめたから斬

補修…

（あと相手してないのは重光線級と、要塞級だなぁ…　何処だろ？）

（あ、要撃級君、殴らさせてね……腕にあたって手の間接が痛いよ…）
マニュピレーターの間接部分がひしゃげた…流石に弱かったようだ

補修　…

（ナックルガード付けてみるか…
これなら？？　うんいいね）
手甲で要撃級の１番固い腕ところを貫く

（ただそのさいは銃はもてないなぁ……）

まぁルナチタニウム合金製ナックルガード　完成かな…

（スパイクガードいや、レッグガードというかブレードはどうだろ？）

とりあえず高周波ブレードを、はやしてみると…面白いように、小型種がきれるきれる

（出力の問題もあるから、核融合炉搭載型以上限定かな？？）

そうこう、してるうちに　取り残され、やばそうな戦術機集団を……

（あれは陽炎だっけ？）

助けにいった

ｓｉｄｅ～陽炎パイロット～

『ＨＱＨＱこちら第１３５１中隊所属６番機、当方面壊滅状態、付近大隊含め残機７離脱不能、至急救援をこう！！』

（壊滅的に絶望よね…お兄ちゃん敵とれずにごめんね……）

『こちらＨＱ、今臨編３個大隊向かわせた！頑張れ生き延びろ！！』

（あ、弾が無くなったさっきのでラスト？

今の指揮官はさっき発信してた６番機さんだっけ……）

「こちらホーク１２誰が弾頂戴！！弾ぎれ！！」

『ホーク１２、パープル５だ、一個わたすぞ無駄弾うつなよ！！』

「ありがとう！以上！」

弾を貰い　マガジンをかえて…

撃つ！！

ブロロロロロロ

（フルバーストでないときちゃう　くわれちゃう……）

『チョコレート6！！2時の方向！！』

『2時！要塞級でたんか！？』

『いや、救援みたいだ！助かったぞ！』

『ちょっとまて！なんでハイブの方向から救援くるんだ』

『そんなのしらねーよ、とにか……え？』

『一機？？なんでＢＥＴＡが…切りひかれて？』　道を切り開いてる……

撃震？？

『異常だな…まさか斯衛か？』

「あれ撃震みたいだけど…」

『撃震？？だったらあんなにならねーよ』

通信しているうちに…　その撃震　私達の周りを回って

小型種は、

撃震の、良くみたら脚部に刀をつけてたみたい

それでたかられる前にきれるのね…

突撃砲はみた事もない形のが担架に装備されてる…

『助かったよおたく一機なのか？』

『そうだ』
なにか聞き覚えのある
『おたくの機体テスト機なのか?撃震の格好しながら』
『まぁそう思っていいかもな』

その撃震の方、そのままＢＥＴＡの分厚いところに突っ込んでいって
は、
戻ってまた別の方角のに突っ込んで

小型種を切り刻み、切れない大型は殴る斬る…

『なぁ俺達撤退をしたいんだが…、弾薬も底が見えてるし、
テストの邪魔かもしれないが手伝ってくれるか?』

『わかった、どっちの方角に逃げるつもりだ?』

『８時の方向』

『わかった…切り開く!!』

『俺らもいくぞ!!アローヘッドワンでいいか?』
『『『「了解!」』』』

『予備の弾薬もこころもとないのか?』

「はい、わたしの８７式弾ぎれして、貰ったのです
長刀ももう折れてます…」

『ポジションは?』

『突撃前衛、コールサイン　ファイヤー１２…第１３５２中隊所属です』
『わかったこれを貸そう。
試作品だから稼動時間はわからないから、これがカートリッジだ』
『カートリッジ？』
『剣に電源を通す為のバッテリーと思ってくれ、きれたらこうかえる』
ボタンらしいのを押すと、刀の色が濁って、
つかの後ろ部分からカートリッジ？がでた…それをかえた

『この色の変換で判断してくれ…予備カートリッジもつける』
といって、担架にあるマガジンラックに…
『よくきれる剣だからな、切り開くぞ！！』

「あなたは？」

『なに拳と銃があるさ』

みると、手の部分を手甲らしいので隠している…
（あれで殴ってたのね…）
あと担架につんであった、見たこともない突撃砲を左腕に構えてる…

『いくぞ！！』

「はい！！」
撃震の方のすぐ後ろにつく…小型種が面白いように死んでゆく、
（１０時突撃級！！）邪魔な小型種をひとなぎして後方回って
小型種ひとなぎ、突撃級の背部から！
サクッ！！
（貫いた？？）

『ああ、正面からでも大丈夫だぞ』

（天国にいるお兄ちゃん！！　この剣ほしいです…）

「この剣は、いつ配備されますか？」

『さぁ？…よっと……とりあえず作ったばっかりで、今のところ二ふりしかないぞ』

「この剣早く配備してほし……えい！！…ですね」

（突撃級正面からでも楽でした！！！！）

（後衛も順調について来てるようですし…

要撃級！

サクッ　腕も軽く切れるんですね…

ますますほしいですお兄ちゃん！！）

「ところで所属伺ってなかったのですが…」（肩のエンブレムは見たことないなぁ…）

『ああ、俺か？国連軍…』

『おいおい、国連さんがかよ…』

（いいところなのに！！まぁビール２１、は…しょうがないか…）

『また俺らをおいてにげ……照射警報！！』

（え？）

後方確認すると…　回避行動とって……

『ギャーー！！……』
ビール２９が、光線さけきれずに…
『そっちにいくぞ！！８時は任せた！』
「はい！！」
『また照射警報！！』
（危な！！え？？）
『え？う、嘘だろ？？』
（撃震が体でルクスの光線受け止めたの？）
『あっちか！！』
あの機体は、切り開いて光線級の集団方向に…
（あ、重光線級！！光って危な！！！！
……
重光線も体で受け止めたの？？……
……
あのテスト機なんなの？？）
『た、助かった、ようだな……』
『あ、あ、』
「ほら…戻ってくるようだし先にすすまないと…」
『なぁ…あんた、その装甲なんなんだよ…重光線級の耐え切れるって聞いた事ないぞ』

『耐えてはないな、四発目はやばかったな』
『それでも十分だぞ！なぁ俺の中隊にまわしてくれよ』

『抜け駆けすんな！俺が』

「あ、あたしも～」

『いや、まぁ操縦できるかどうかよりＧに耐え切れるか…だな』

『そんなにすごいのか？』
『あの機動だと…』

『俺以外に二人乗ったんだが一週間と二日それぞれ入院したと聞いた、多分全力で動かしてないがな』
（そんなモンスターを軽々……）

『国連さんは大丈夫なのか？』

『まぁ俺は人間やめてるしなぁ♪でもキツイぞ、この問題が片付かないと、とても出せないようになったからなぁ』

そうしゃべる余裕がでたとき…
「あ、救援部隊だ！！」
『お、じゃあ俺はまだＢＥＴＡにちょっかいだすから刀とカートリッジ』
「はい……」
（返したくないですぅぅお兄ちゃん…）

「ありがとうございました！」

（あのエンブレム忘れない！！

あ、所属名前……）

……

あとで、中隊は解散になったので連隊長さんに
こっぴどく怒られました…
所属名前なんできかなかったのかを

その撃震の話は、かなりひろまったみたいです…
第四世代機とか、どっかの国のテスト機とか……
光線を受け止めたのがインパクトありましたから……
早く、ほしいです……

……

カオル報告
撃震エヴァ仕様

変更点

追加武装
ナックルガード（ルナチタニウム合金製）レッグ高周波ブレード
すねの外側、前面
太股の下側前面

第十七話　カオルは飛んでいた　投稿日２０１０１２２１　修正２（後書き）

作者「ん～～～」

神「作者どうした？」

作者「いやあってたかなぁ…と装甲や武器とか…」

神「なら根拠だして納得して貰えれば？？」

作者「すね…まぁ一年戦争の記述で、まずＦ型のザクマシンガンが歯がたたず、反対にガンダムのバルカンでやられた…がありますよね？
でイグルでは対モビルスーツ戦術で６１式はザクＪ型と対戦しなければならない…でした」

作者「正面から集団で待ち伏せし集中砲火でザクを仕留めてるシーンもあります、逆にいうとそこまで集中しないと…ですね」
作者「で連邦のＭＳがでてくるとそれにあわせて被弾し歯がたたなくなるので、
武器及び装甲材を開発…」

作者「で戦術機とＭＳはと考えると片方は航空機、片方は陸上兵器…になるからです
単純に浮くもの、陸上を制圧するもの…の違いですね」

作者「そうかんがえると１５５ｍｍキャノンでも、正面からは耐え切れたのが、超鋼スチール合金」

作者「でそれにまさったチタン系合金、更にまさったチタンセラミック合金、その更に上をいくZ時代のルナチタリウム合金系、」

作者「まぁ、そんな感じかな？の設定です

今現在でも軍用機ではチタン合金（比重の重い）はエンジンなど重要な部分、アルミ合金はそれ以外の部分に使われてます」

作者「チタンとスチールは比重の違いで、装甲の厚さも…でまぁ前回の話の結果ですね」

神「まぁいいんじゃない？」

作者「でもさぁ初速２００ｍ／ｓってなによぅ！！航空機まで届かんｗ」

＝＝　副司令執務室　＝＝

コンコン「副司令～いますか～??」

開かない……

司令部かな??

＝＝　司令部　＝＝

「失礼します～」

（初めてだなぁここ……副司令、中尉もいないか）

「すみません～どなたか副司令に報告なんですが～」

「火急ですか??」

「いえ、」

「でしたら明日にでも…」

「わかりました…来たことだけは言付けを…失礼ですが」

「リン・ミン準尉です。ピィアテフ中尉付きの、

副官兼オペレーターです」

「よろしくお願いしますね、渚カオル少佐です副司令直属の技術士官です」

「確かに言付けをうけたまりました！！」さてっと寝よう…

２００１年５月２２日

＝＝　副司令執務室　＝＝

コンコン「副司令いますか？」

「どうぞ～」

「失礼します」

「お帰り、報告は？」

「一応纏めておきました」

パラパラパラパラ

「ふ～ん…対Ｇが一番ネックなのね、あとこの主機のＳ２機関？」

「スーパーソレイド機関の略称ですね。永久機関ですが、取り扱いは難しいですよ
失敗するとここから帝都までが消滅します」

「こっちの整備士には絶対扱えなさそうね…」

「ええ、ですのでワンオフか、数機程度かな～と…」

「装甲材は、面白そうね…量産はできないのね…」

「基本こっちのアルミ合金系よりも重いですし、ルナチタニウム合金は製造の問題で地球ではつくれませんですので自分が改造するしかないです」

「ですので戦術機には主機を改造の上でないと、搭載不可がガンダム世界の装甲ですね」

「で、…この駆逐数に間違いないとすると…報告合わせて、多分増援来ない限り3ヶ月は大丈夫かしら……」

「まぁとりあえずいいわ、引き続き改造等お願いね」

「あ、でまた別世界に行きたいのですが…」

「また?、今度は何処よ…」

「機動戦艦ナデシコの世界で、目標は木連の作業ロボット、コバッタです」

「作業ロボットね……」

「まぁ人手が足りないというか、Ｂ５５に整備士が「整備士は駄目、消滅したくないもの」ですよね…なので」

「わかったわ…期間は?」

「木星に行くので「なんでもありね」一、二週間位かな?と…」

「できれば、５月２９日は途中でもいいから、基地にいてね。面白い事あるから…」

「?なにかあるんすか??」

「いいから」

「わかりました」

「じゃあ、いってらっしゃい」

「”世界扉”」

＝＝　機動戦艦ナデシコの世界＝＝

「ここは……ん?」

テレビで見たことのある戦艦ナデシコAが、大気圏外へ上昇しようとしてた

「原作の前半か?なら…」

こっちの世界にくる前に考えた作戦は、

バッタに遭遇、乗っとり

イロウルで同化しながらチューリップでジャンプ

(多分死なないはず…イロウルはコンピューターだ!!)

木連へ　プラントゲット

のながれだ…　となると…

(ナデシコに取り付いた方が早いか…

たしかサツキミドリコロニー崩壊あたりで、

ちょっかいあったような…うっし！！）

「シャムシェル！！”幻影”」

レーダーに引っ掛かるか心配だが…
相転移エンジンの噴射口から近寄れば……

（よっしゃ！！）
「バルディエル」相転移エンジンの一部となりました
さすがに乗っとりはばれるって……オモイカネに…

地球圏のビックバリア脱出したか…　艦載機が出たね…
テレビでは好きだったよ　ダイゴウジ＝ガイ

二日目　相転移エンジン同化後、
艦体前方にあるグラビティブラストにも同化、
ついで重力波ビーム発生装置にも同化

三日目　物質のまま移動で、格納庫を探してます
アサルトピット〔コクピット〕がかなり優秀なGキャンセラーと気がついたからです

ついでにディステーションフィールド発生装置にも同化

四日目
女子風呂と同化してます……
しばらく動けそうもありません…
（天国だ……ミナトさん　胸がＧＪ）
（ルリ嬢だ……霞ちゃんと面影やっぱり被るんだよなぁ…）

原作介入するつもりはないので、自重はしません
堪能しました

五日目　急いで格納庫を探しています…
衝撃波がきたからです＝サツキミドリコロニー消滅
つまり目的のコバッタとの初戦闘、
で二週間後火星にいく｛この時点でオーバー｝
その後八ヶ月かかるからだ

丁度格納庫につき、四機揃っているのを確認…
フレームも確認
（まだ時間あるか…）
フレームに取り付いた後、
リョーコ機に取り付く
……出撃した…
サツキミドリコロニーに進入…した時点で離脱
サツキミドリコロニーと同化

またたくまにコロニー内掌握…
（デビルエステは…いた！！）
デビルエステバリス乗っとり、

コバッタ達も掌握、イロウルの力でもって全部のコバッタを洗脳

その中の、背後にくっついてたコバッタに本体をうつす…
離脱!!

見つからないように…同化解除して
虚数空間にコバッタほうりこんで　”幻影”

離脱!!　チューリップは確認したから
コロニーを抜けて…　（うっし…）

再びコバッタを出して「イロウル!!」
で同化

チューリップへ〜

六日目

チューリップ突入だ…

（俺はコンピュータだ俺はコンピュータだ…）

エネルギーフィールドを潜りねけて……

たどりついた

（生きててよかった…）

（都市ってどれだろ??あ、あれか……）着地して…

「バルディエル!!」

コバッタの設置した足の部分から

体の領域広げ、自重せずに広げてく…

（お、プラント発見♪）

同化して……

離脱!!

見つからない内に

「”世界扉”」

２００１年５月２７日

＝＝　副司令執務室　＝＝

世界扉が開いたとおもったら…変な機械が現れた!!

カオルのターン　副司令を探している

カオルのターン　誰もいない為、途方に暮れている

同化解除…

（いないなぁ…三回目だけどいないの久々だぞ…）

副司令探すミッションを受けおった……

（別ゲームかい

”（ノ＜＞）ノ　）

（一人ツッコミはわすれて探すか…ここ居ないとなると司令部？？）

＝＝　司令部　＝＝

「ちわぁ～っすみかわ屋です、副司令はいますか？？」

「香月君かね？彼女なら評価試験で出張だが」

と…白髪、口ひげをはやしたいかにもの、

多分５０歳位の御老体が答えてくれた……

（やばい！！多分司令か？？ふざけすぎた？？えぇぃままよ）

「あ～わかりました……あっしはこれで……」

ぺし！！とオデコ叩くの忘れず

「ほぅ……初めて見る顔だが……君は？」

俺は生真面目に表情かえ

「大変失礼致しました！！副司令直属技術士官、渚カオル少佐であります！！」

（どうか？？）

「ああ、例の君か…

彼女の部下に面白いのが入ってきたと噂になってたの

……明後日には帰って来る筈だよ。と、わたしが当基地司令ラダビノット准将じゃ」

（ふざけすぎたの見逃してくれたか…）

「は！！ありがとうございます。では小官は作業がありますので失礼致します」

シュン
（危なかったぁ……）

＝＝　Ｂ５５ハンガー　＝＝
さてっと作業開始しますか……
まずはコバッタを虚数空間からだし、自分の複製をボディでいいから作るように命じた
ＣＰＵとプログラミングは俺の〝バルディエルとイロウル〟仕事だ……

１号は仲間を４体増やしました
俺は５号までコバッタが増えました

２号から順次、残骸仕分け作業を命じました

改造報告
不知火

ローラーブレード（エステバリスより）をつけてみました

レッグ高周波ブレードを付けてみました

アサルトピット技術を流用したコクピットにしＧキャンセラーをいれてみました
（操縦方法は戦術機のまま）

ＣＩＷＳかぁ……順調にいったけど、やはり取り付かれた時に削ぎ落とすだけ…
というのはいただけない、自機は大丈夫だとしても…だ
散弾発射機かな？

機体が傷つかないレベルの…
ん～…明日だ！！

で…明日動かして貰おう…

あ、イッシーの見舞いってなかったなぁ……
今日の作業結果……
ゴッグ再生

コバッタ５号まで増産

会話機能コバッタつけたいなぁ……

……
カオル報告

プラントを学びました
それによりナデシコのほとんどの技術を
無人兵器製造技術
テラフォーミング技術

重力波エネルギーアンテナの組み合わせ学びました
グラビティブラストを学びました

相転位エンジン学びました
エステバリス＋各フレームを学びました

コバッタは便利だよね＝整備士だし…フォークリフト操縦するし～
♪

第十八話　佐渡島間引き作戦後（ナデシコトリップ）　投稿日２０１０１２２２

作者「う～どうしょう…」

あ号「作者よ……どうしたのだ??」

作者「ああ、あ号か…実はな、当初の計画とちがって、この話かいてるときにな…
ある物語のをいれたくなったんだよ……」

あ号「むぅ……その話とは??」

作者「かも～ん○○○○○」

あ号「ふ、伏せ字ながら……あれはなんだ??……この感情はなんだ??
愛でたいだと??」

作者「だろ～～で兵器がね……かも～ん」

あ号　「……あ、あれが兵器か??……かわい過ぎる……作者よ…
だしてみたらどうだ?」

作者「弱いからだして構わないとおもったろあ号よ…」

あ号　「……つよい……のか……」

作者「うん…完全に壊す事は地球上に存在する兵器でも不可、いずれ復旧するが、一時的に活動不能にするのに核兵器を直撃させなきゃいけない…」

あ号「……あれが……」

作者　「……で、彼らの主人は…あ号…お前では敵わないぞ……星駆逐かるくできるレベルだからなぁ～」

あ号「……むぅ……」

作者「しかも萌えるし♪」

あ号　「なんだと?!!」

さて…彼らの正体は…　秘密ですが、大体想像つきますよね?

マタタビ弱いです

第十九話　病室で……（現実世界トリップ込み）　投稿日２０１０１２２３

２００１年５月２８日
「お見舞いだぞ～遅れてすまん」

「カオル？？何退院間際に今更……」
（う、怒ってるなぁ……）

「ゴメン！！お詫びに甘いもんなんかもってくるから」

「今すぐじゃないと駄目！！」

「今すぐ？」

「そうよ！！」

「わかったよ…内緒にしとけよ”世界扉”」
＝＝　カオルの元の世界　＝＝

「やっぱり俺の部屋になるんだよな……」

「ま、いっさ…」

「バルディエル！！」
窓と同化…解除
「”幻影”シャムシェル」香月副司令になる……
俺の近所だと多分これが１番無難
近くのスーパーのはす向かいの
セブンイレブンに…

ん～商品かわってなければ……あった
”たっぷりホイップ&デニッシュ”
クロワッサンの中にホイップクリームたっぷり…
俺のお気に入りのこれなら機嫌よくなる筈
「これ下さい～」
痛い目で俺をみないでよ……

「……2点で276円になります」
うん流石プロだね

「はい」

「……お釣り24円です」上下みてるよ……
さて、ここでわかる”幻影”の特徴
姿だけ…つまり声はかわりません……

渚カヲルの声で美女が発すると……

男なのに胸が…私よりも…な外見になる…
女性店員さんにはとてもショック

受けとって外でたあと、店員さん店外にでちゃ駄目だろ…だ

適当に人気のない公園にきて…”幻影”解除して「”世界扉”」

うん…次は男性…整備士の方をもっと観察して”幻影”纏えるよう

にしよう…
と心に決めた…

＝＝　石橋の病室　＝＝
「ただいも～ほれ、これでどうじゃ？」

たっぷりホイップ&デニッシュをわたす
「おいしいそう～♪」

「俺も好きなんだぞ」

「いっただきまーす」
はむ

「あま～い♪」
あ、こいつ…別腹か……

「もう一個♪」

「あ、おめ、俺のだ」

「だ～めあたしの♪」
はむ

食べられた…ｏｒｚ

半分でとまってるイッシー
「食べる？」

「え？いいん」

「はい、あ～ん」

「あ～ん」で食べようとしたところを

「だーめ♪」引っ込めて全部食べやがった……俺のが……

「そんなに落ち込まないの、許してあげるから」

「俺の」イジイジ

「もう…立場が逆になっちゃったじゃない…」

「しょ～がないなぁ…河田先任直伝」

というと手を肩に……　ちょ…　おま…　あふん…　いやん…

とろけました…

「どう？気持ちよかった？」

はい……とても……

「じゃあしゃんとして…ね」

「ああ……」

「流石、わたしのペットね」

「ん？どっちがだ？」

「まぁいいや、ところで、今日副司令もどってくるんだろ？」

「ええ、みんなもね」

「みんな？？ヴァルキリーズの？」

「副司令の護衛で一緒に…ね」

「あ～……まぁ……」

「カオルのせいだしね～」

「死ぬかもしれんから注意しろ～ったぞ～」

「またなんかよろしくね」

「たく、太るぞ～」

「甘いものはふとらないも～んだ♪」

「あ、速瀬中尉は？」

「あ～先任なら隊長に話聞いた後、病室にいられっか！！で無理やり退院してついてってったよ」

「あ～あの人らしいな…」

「ところで退院何時に？」

「ん～検査結果次第で多分もうそろそろだけど……」

看護兵がきた…

「石橋少尉、どこも異常ありませんね。原隊復帰の許可がでました」

「お世話になりました」ぺこり

「お大事に」

で病室を荷物まとめて退出

まぁ部屋まで荷物持ち

「カオル～ところでわたしが怪我した後は、どうしてたの？」

「佐渡島の間引き作戦に撃震でいって、その後、ナデシコという別世界にいったあと、改造さ」

「不知火？わたしの怪我した撃震？」

「不知火だよ、まぁ撃震も現地で改造したが……」

「後でみにいくね、荷物ありがと♪」

イッシーが個室に入ったあと、ハンガーに作業の続きにいきました

1号は黙々と仲間を作っていて、8体増やして居ました

「うっし1号」

あ、額のあたる部分に数字の1をいれてあるのはお約束です

「とりあえず50号まで作り続けてくれよ」

1号は了解の意を返した……

うん後悔しないように、コバッタ魔改造しよう！！

発声機能はつけないが、背中から空中に、電光プラカードみたく、
会話を表示させるように
改造を1から5号に施した!!
さぁどうだ??［おお!!］［マスターと会話できる!!］［会話
万歳］［わたしは別に］［うるさくなるのでは?］
うんうん大成功か?こっちは自重はしない!!

「じゃ1号はそのまま増やしてくれ、2号から5号は引き続き整理
俺は最終作業にはいるよ」

［［［［イエス　マイロード］］］］［弟妹ふえたら…グフフ］
微妙に一体変だな……設定ミスった??
ま、いいか…
6号から順次増やしていった

ｓｉｄｅ～石橋～
Ｂ５５ハンガーにつくと（……あれ??）

（整理されてる…あ、小型のなんかがふえて作業してる～）

その内の一体が、近よってきた額に１１とかかれている

［こちらは立入禁止です、所属と氏名をのべて下さい］
と空中に浮かび流れた

（…話せばよいのかしら？）

「あ…、Ａ－０１所属の石橋留依少尉よ」

［大変失礼しました　立入許可が出ております。
次回以後はフリーパスになります」

「あなたたちは？」

［わたしどもはマスター、渚カオル少佐の補佐をします作業用コバッタ、わたしは１１号です」

「よろしくね」としゃがみ頭を撫でた

［（－ノノ）］

顔文字で照れを表現する１１号

［では、作業ありますので失礼します」

１１号は、横たわっている機体の方に向かっていった…

（１１号ねぇ……ふ～ん…）

何機かふえているコバッタ　みると機体を修復作業中？している集団もいるし、
仕分け作業している集団もいる

（人手が不足してるぅとぼやいてたから…なぁ…）

入院する前のあっちこっちに残骸があり、とりあえず通路は確保できてた…状態から、
急速にハンガーとしての機能を回復しているようだ

（あ…不知火？？）

前回見た時より変わっている
特に脚部面で…

（剣が脚部の前と横についてるのね。これなら小型種きれそうね…。
けど何で今までの不知火ついてなかったのかな？）

（あと、足の踵にローラー？）

（かなり変わったわねぇ）
とみたところで、更に隣に小型の戦術機らしきもの６ｍ位の高さであろうか…をみつけた
カオルもその機体にたかっている
「カオル～」

「おうきたか」

「この機体は？」

「ん？ああ、ナデシコの世界の機体、エステバリス陸戦型フレームだ」

「かなりちっちゃいのね～」

「ああ、主機がこの機体にはついてないからな」

「ついてない？」

「ほれ、後ろにアンテナあるだろ？」

「うん」

「あれで戦艦などから動力動かす為のエネルギーを受けとってそれで基本は動かすのさ、
アンテナ範囲外は非常用にしか動けないからな」

「だから、かなり小さいのね…」

「あと機体的特徴は、コクピット毎移し替えて別の機体に移す事可能、
まぁ衛士の強化服と一緒で蓄積が無駄にならない等の利点がある」

「少し動かしてみたいなぁ～」

「あ、無理だよ」

「なんで？あたしには無理なの？」

「この世界の人間にはね」

「？？？」

「ＩＦＳだっけか…ナノマシン注入による、特殊な入力システムが条件、まぁ一種の改造人間がね」

「そうなの…」

「まぁ、あとは実際に作ってみて不知火に反映できそうなのは反映しちゃおうかなぁ～の、データー評価目的なのと、こいつらの作業ワーカー用ね…３号！！」

ふよふよ寄ってきた

［マスターできたんすか？］

「ああ、もういいぞ」

「ありがとうございます。これで作業はかどります」
とりつくと…動き出し…操っていっちゃった…

「６m位の高さだから作業用にも丁度良いしね」

「あの作業用の子達はどこから？」

「ああ、ナデシコの世界だよ。コバッタっうんだ
会話機能はなかったから、くっつけたけどね
イッシーもコミュニケーションしやすかったろ？」

「表示して、会話しやすかったからね～」

「あとは、あいつらの機能として、ああいったコンピューター制御
で動く機械を操る事が可能なんだ」

「かなり優秀なんだね～」

「わざわざ取りにいったかいがあったよ♪」

「ところで、不知火動かしてもいい？」

「ん？もう体はいいん？」

「大丈夫だよ～」

「うん…ならいいぞ」
＝＝　操縦席ハッチ　＝＝
中に入ろうとすると…あれ？と違う事に気がついた
「カオル～？？」

「ああ、エステバリス参考にして弄った
結構優秀なＧキャンセラー入ってたからなぁ～
あ、追加したの忘れてた、これがローラーダッシュの機能スイッチだ」

「ローラーダッシュ？」

「地上を高速で移動するんさ、ＮＯＥと違ってね」

「面白そうね」

「まぁあとはジグザグにダッシュしながらブレードで小型種きりながら…とかね」

「へぇ…」

「まぁ論より証拠、さ、乗ってみて感想よろしく」

＝＝　地上演習場　コクピット内部　＝＝

『イッシー自由に動かしてみてくれ』

「わかったわ」

（お言葉に甘えまして…まずはGねぇ反復飛びからかしら？）

軽く横とびを繰り返す

（あら……？？）

Gがあんまり来ない…

（じゃあ…これなら…）

機体制御限界まで

〜機体が踏ん張れる…限界

あんまりやるとずるっとコケるか、

踏ん張りきれずに上半身が持ってかれる

地面との相性もある〜

反復とびをする

機体限界まですると普段は体が持ってかれるほどのGがかかり、

跡がつき、しばらく泣きをみるのだが…

（軽い…軽い♪）どっちの方向に機体がいって、

とまって、

反対方向に機体が飛ぶのを感じる位のGしかかからなくなっている

『どうだ??』

「Gが極端にかからなくなってる♪これなら戦いやすい~」

『うん…いれて正解だったな』

横反復とびのあとは前後、斜め、またその組み合わせ
一回限界超えて踏ん張りきれず、ずるっとこけたのも付け加えておこう…

でもGキャンセラーは有効に働き、石橋はご機嫌だった

(あ、ローラーブレード試してないなぁ)
スイッチをいれた
(あ、脚部が接地固定されるのね…ジャンプはできるけど…)
恐る恐る前進……

結果…石橋は、はまってた

「おもっしろ~い♪」

『どうだ?気に入ったか?』

「うん♪特に、こう急転回させると」

足を横にさせ進行方向にたいし直角にさせる

ローラーが地面を削りとりながら土煙をはく

で、足の正面にむけて一気にダッシュ

『あ～まぁ程々にな…後で整地する人たいへんだから』

うん…かなり地面えぐられてるなぁ……

イッシーはローラーブレードを気に入ったようである

ｓｉｄｅ～石橋ｅｎｄ～

＝＝　Ｂ５５ハンガー　＝＝

イッシーが機体を戻したあとコバッタがたかり機体のチェックをし始めた

また今まで残骸のままだった、

残りの機体の組み合げが終わってたので

同化して機体情報をゲットしておく

と、そこへ

［マスター］

「ん？６号か」

［命令の、一種一機の組み合げおわったけど、この後は？］

「そうだな…残骸からどの位できそうなんだ？」

［材質による違いがあるから］

「ああ、そうか…」

［プラント作ってくれれば、時間はかかりますが、材質を変化し、
加工させた状態で材料だしてくれるから、
そこから作成可能です］

「へぇ…プラントそんな機能あるんだ…結構な儲けもの？？」

［マスターがおこなった機能強化のおかげで材料さえあれば、１から作れるから
その方がはやいです］
コバッタの機能強化
鯖による情報共有により
機体情報さえあれば１から作成可能

「じゃあプラントつくるか」

まぁ、材料や廃材、集めや鹵獲、破棄集めだけ専念すればよい状態になりました
あとは完成品コピーのみ

［ただヘリウム３の問題もあるから、新規ＭＳだと３３機が限界です］

つまり木星へいけフラグなのですね…わかります

「Ｓ２機関は無理か？」

［撃震解析しましたが、主機、駆動方式もプラントできても正直無理です、異常です、メンテナンスも無理ですね］
ワンオフ確定……うん異常なんだね

［問題なく作れるのはバッテリー駆動の６１式とホバートラックです］

「なるほど…」

［あ、副司令が戻ってきましたね］

「じゃあ…報告いくから、
うんそうだなぁ…６１式をスモークチャージャー除去して変わりにＣＩＷＳを砲頭部分に搭載できる？」

［可能です］

「じゃ、それで超硬スチール合金とチタンセラミック合金で各１両、
ホバートラック未改造でいいか、超甲スチール合金、
チタンセラミック合金、
ルナチタニウム合金で各１
陸戦強襲型ガンタンクをルナチタニウム合金製で３機できる？」
［プラント製造前ですので
今の状態なら……ルナチタニウム合金が足らないので１両と２機でしたら］

「じゃあよろしく」

……
カオル報告

一年戦争ののこりの機体再生しました

コバッタ１４号まで増えました

家の窓と窓枠取得しました

たっぷりホイップ＆デニッシュは、どうかな？と思いましたが、

無理でしたｏｒｚ
（食べ物は無理みたいで…）

第十九話　病室で……（現実世界トリップ込み）　投稿日２０１０１２２３

作者「うん、後悔はしないなぁ……」

１号　［あざーす！！これで勝つる！！］

作者「ん？誰に？」

１号［ハロとか、前回でた○○○○○とかにですよ］

作者「……○○○○○がメインの別物語かくつもりだよ」

１号［なに～～自分も出して下さい！！］

作者「関連性がつけれないから無理だ…良いじゃんこっちで活躍すれば」

１号［なる…うんマスターを超えてやる！！］

たきつけました…さてどうなる事やら…

あ、作中にでた、たっぷりホイップ＆デニッシュ　自分も好きです

♪

第２０話　作者曰くうらやましいんだよ！カオル君…の巻き　投稿日２０１０

＝＝　副司令執務室　＝＝

コンコン「副司令います～？」

「いるわよ～入ってらっしゃい」

シュン

「失礼します、だいぶご機嫌ですね～リフレッシュされました？」

「まぁねぇ♪ひっさびさの海だったし
天然物を釣ってくるしＡ－０１連れて正解だったわ」
（そっち行きたかったかも……ナデシコ行く～って言わなければ…
…）

「あらなに？あんたも行きたかった口？？」

「……ですね～」

「あ、でも石橋に怨まれたかもよ～」

「いったら…かもですね…」

「だから黙ってたんだから感謝しなさい
まぁ今回落ちたのがいるからまた冬にやるから」

「冬…に寒くないですか？」

「中途半端なところでやると思ってるの？
勿論おさえたわよ。１１月１１日約半年後よ
勿論泳げるわよ♪」

「副司令の水着姿
楽しみにしておきますね」
たちまち赤面する副司令

「……わかったわ」
美貌のため！という
横浜基地特有のダイエット週間の始まった瞬間であった

勿論、参加の強制権はない
余力のある人達による

続に美女とＢＥＴＡ戦中戦意こうようの為
ミスコンを開催する人種の始まりだった
主にパイロットでなく後方勤務である事務方による参加
が、過酷なパイロットの参加だと…瞬くまに戦乙女と称された
そう、後の神に愛されたヴァルキュリーと……

赤面したのち

「報告は？？」

「ナデシコの世界にいき、コバッタ及びプラント等を取得しました」

「そのナデシコの世界の説明ｋｗｓｋ」

（いつの間に２ｃｈ用語を）

「その世界は、ネルガル製の機動戦艦ナデシコによる…」

「それ採用」

「へ？」

「だから採用よ」

「あの何を？」

「機動戦艦ナデシコ…取り付いたんでしょ？」

「はい……」

「なら採用よ」
（やばい…自暴自棄にいたってる??）
「あの副司令……前話した事覚えてます??」
「何よ」
「あくまでも技術の吸収及び、
過剰な技術は、地球上における上位存在の、
更なる発展を促すの事を…」
「クッ……」
「だからいくら、異世界のオーバーテクノロジーといっても、
それが普通に製造できる段階にいたってないと
自分の首を締めかねない…です」
「……」
「だから、技術の吸収をお願いし、人類の財産に…とお願いしてます」
「ならなによ…あなたの目標は」

「現有技術可能兵器による平和…
この世界だと実弾兵器のみで、戦っています間違いないですね？」

「……」

「だから実弾兵器による甲1号の攻略を目指しています」

「……それができないんじゃないの！！」

「なんでできないのです？？」

「損耗率及び補充率及び補給」

「それが埋まるとすれば？？」

「！！……」
「ルナチタニウム合金いわゆるガンダリウム合金による耐久性、
または、それに及ばないながら、
生産性の高い　超硬スチール合金、または　チタンセラミック合金
による耐久性
あとは補給の問題及び、衛士の問題かたつけば…ですよね？」

「……」

「耐久性さえ片付けば、衛士の補充率あがってきますよね？
補充率にかんしては、
耐久で生き延びれば前線にいく人達がへる
結果的にはあがると思います」

「……」

「ですので、ここ一番の時以外はオーバーテクノロジーは使えない
……と思って下さい
あとは上位存在に気づかせないように…です」

「わかったわ…」

「では改めて報告を…」

「ええ」
「ナデシコの世界にいき、作業用コバッタを取得、また、機動兵器
であるエステバリス、
テラフォーミング技術等を取得しました」

「あ、テラフォーミング技術は復旧に約にたちそう？」

「ええ、緑化促進、なと遺伝子に影響でない方法や、今ある合成食料プラントの性能ＵＰ等できそうですね」

「あ、じゃあ、テラフォーミング技術は大丈夫よね？まとめてレポートもらえる？」

「わかりました」

「あと、作業用コバッタは？」

「今１３号まで増やしてＢ５５での整理や機体修復、また製造等を任せています」

「ふ～ん……後で見に行くわね、さて夜もそろそろ遅くなったし…明日の話ね
明日０９００にＢ１５シュミレーターデッキに着てちょうだい
面白いものみれるわよ」

「了解です　０９００にＢ１５シュミレーターデッキですね」

「じゃあ、お休みなさい」

「失礼しました」

■２００１年５月２９日
（シュミレーターデッキで面白い物？なんだろう…）

シュン
「おはようございます～」

「おはよ」

「面白いものってなんですか？？」

「いいものよ……まりも！！こっちにきて」

「なに？夕呼～　　あ、こちらの方は？」
（美女だなぁ…♪）

「あたし付きの技術士官、渚カオルよ」

「は！！当基地２０７訓練少隊の担当教官をしてます、神宮寺まりも軍曹です！！」

「渚カオル少佐です。
あ、階級なしの付き合いでよろしく～
もらいもんの少佐なんで」

「しかし……」

「さっきの呼び方からすると親友？」

「ええ、大学時代からのね。飲み会でもあだ名は」

「夕呼！！」

「な、感じよ～♪」

「じゃあ、そういった事で」

「……わかったわ、ただ他人のいる間は規律を守ります…夕呼のまわりってこんな感じの方ばっかりね…」

「いいんじゃない～♪」

「しょうがないか」

「で…そろそろ？」

「ええ…なんだけど…まぁしょうがないね」

カチャ…ドアがあいて……

（はぁ？？？……

か、かみさま……この世界ますます好きになりました……

な、なんという、恥痴ぷれい

強化服の前、が申し訳ない程度しか隠れてません…

ちバキュンが…すけてみえる……おかバキュンバキュン！！

あ、後ろも……

けつがけつが…）

「あら、うぶなのね…」

「ふ、ふくし」

神「前線では、男女わけて等できないから、その為に慣れる事が必要なのよ。

その為の訓練生よう衛士強化装備ね。

わたしも最初は恥ずかしかったわね…」

神宮寺軍曹をガン見

（……あかんおかバキュンバキュン！！

……

ほんと……この訓練生用の衛士強化装備作った人、マジＧＪだよ

というか、趣味入ってるだろ）

「他の訓練養成でも同様に？」

神「ええそうよ…」

（マジでか！！！この世界ＧＪ）

「し、…小隊集合！！」／／／／／／／／

かなり赤面しながら隊長とみられる人が号令をかけました

「２　２　２０７Ａ分隊、全員集合しました！！！！」／／／／／／／／

まだ恥ずかしがって、胸を隠しながらや、

微妙に足をすりすりしている娘も……

「うむ、よろしい」

「あ、あの教官」

「こ、この強化衛士装備につ、ついてなのですが」

「いいか、お前達、前線では男女の区別等できない環境だ…

シャワー、トイレ等…

その為、訓練生時代に慣れて貰う、のが、

この訓練生用の強化装備の目的だ。

最初は恥ずかしいと思うが、その内慣れる…わかったか?!!」

「「「「「了解!!」」」」」

(うんでも、その強化服なら…最初はわかるよわかるよ

恥ずかしのがバキュンバキュンバキュンバキュンバキュンになる)

作者{頼むからカオル…やばいの思うな!!}

カ{男だから無理!!}

作者{とりあえずいつでも擬音修正いれるから}

カ{なら…イッシーとバキュンバキュン}

作者{いい加減自重し話進めろ!!}

はい、作者よりR15修正の力でツッコミ入りました…

カ「副司令~」

香「なに?」

カ「面白い事って……」

香「もう少し後だから…待ってなさい」

(あ、別の事?訓練生用の事かと思ったしかし…いいバキュンバキュンバキュン)

カオル……自重しないでガン見だなぁ……

「では、戦術機適性検査を始める
座学で説明した通りだが、非常スイッチが右側に設置してある
だが、押せば検査に通過できず、衛士の道は閉ざされる事をわすれるな！！」

「「「「「はい！！」」」」」

「これが？」

「ええ、これからよ…さ～て誰が犠牲者なのかね～♪」

「？？？」

（あ、…成る程ね）

（やっと意味が通じてきた…
この検査はGキャンセラーのない、戦術機を操縦できるかを見極める検査か……）
最初のプレッシャーもあるだろう、歩行の段階で心拍数などあがってくる

走行になると　うん、やせ我慢してるのがモニターにも写ってくる

急制動等

そんな検査をへてGや酔いに対する適性を見極め、衛士への道へと進むようだ
ここで落とされると歩兵、戦車兵等に進む…

（成る程ね）

「あら、この娘ね……」

「追加ステージGO♪」
みるみる青ざめてくる、模擬戦闘行動してるんだもんなぁ……

「よっし♪」

（あ、機内でぶちまけた……副司令…Sなんすね）

結果　全員合格し衛士への道を進む事になった

ぶちまけた訓練生には、お掃除の追加命令も入りました

「はぁ～面白かった。どうだった？」
「はい、とっても♪」
（また見にいきたいなぁ……あ！！）
「副司令、彼女らのOSはどうするんですか？？」

「あらそうねぇ……いいわ、あなたのOSにしなさい」
（うっし！！また見れる！！）
次は自重してね……by作者

「了解です！！」

「シュミレーターはそうねぇ……どうせだし……
うん…訓練生用の専用シュミレーター室にしちゃいましょう。
確か、Ｂ１１のがあんまり稼動してなかったような……後で調べて知らせるわ。
あ、あと訓練機にも施してね。」

「はい！！では後ほど」

＝＝　Ｂ５５ハンガー　＝＝

［マスターー］

（えっと……どうしたら記録が残せるかな……）

［マスターーてばぁ］

（回線を新たに作って、ここまでひくか？いや！！遠すぎるもっと近寄らなければ！！）

［マスターー］

［どうした？１号］

［マスターが反応しないの…］

［……ほんとだ上の空だ……］

（小型のなにかを彼女らの近くに……）

［こういった時はしょうがないか…］

少し距離をとりはじめた……全速力で…突進！！

「グォ！！」

見事に脇腹にクリーンヒット！！

［ちょ！！5号！！］

［な……なに……我ながらよい仕事を……した…］

［みんなー5号が暴走して、機能停止寸前ー修理よろしくー］

カオルは…悶絶してたが…　復帰し始めたようだ　1号と目があう

「あ！！そうだそうだ！！おまえらがいたんだ！！」

［ちょ！いきなりマスターなに？？］

「重大任務だ！是非とも記録映像を…あ、1号は駄目だ……2号！！」

［なに？マスター］

「お前は別作業で記録映像をとるように、かつシュミレータールーム専属にしよう」

「イエスマイロード」

……うん……自重なしだね……

（そうと決まれば内線で…）

いそいで電話をとり、コール……

カチャ

「すみません副司令！」

「いきなりさっそく、どうしたの？」

「自分のコバッタをシュミレータールーム専属で、１機使いたいのでよろしいです？」

「……なら機密エリアがいいわね……そうね、Ｂ２１使ってちょうだい」

（うっし明日以降が楽しみだ！！）

［あ、マスター……］

放置される１号…頑張れ…

……

カオル報告

コバッタ
増えませんでした　ボディは作るも…カオル暴走中の為……

組み立て作業進行度
陸戦強襲型ガンタンク２機…２０％

ホバートラック５０％

６１式　８０％

コバッタ振り分け
１号　仲間増やし
２号　シュミレーター専属に変更
３号～５号　整理整頓
６号　機体製造チーフ　７号　整備チーフ
８号　以下手隙の為、
各自で整備または機体製造…
要は自分で仕事みつけてる

第２０話　作者曰くうらやましいんだよ！カオル君…の巻き　投稿日２０１０

作者「いいなぁエロカオル……俺なんか俺なんか　俺なんか～～！
！　今日は仕事だぁぁぁぁぁ！！
世間なんかしらねぇぇうぇぇ！！」

あ号「作者……うるさい……黙らすか……」

ザシュ！！！

作者チーン

あ号「……よし……後書きは……乗っ取った……」

１号［そうはいかないにょ！！］

あ号「……おまえは……！！」

２号［天がよぶ］

３号　［地がよぶ］

４号［水がよぶ］

5号［月に変わってお仕置きよ］

1～4号［［［［ちゃうだろ！！］］］］

乱闘……　1から5号チーン

あ号「……なにしたかった……？」

作者「本当は仕事しないで遊びたかっただけなんさ……ｏｒｚ」

作者「でたまたま書いてたら２４日にエロ話が当たって…カオルうらやましい……
次あたりでカオル潰して主人公変えるか…」

第２１話　カオル君暴走中で物語終了の危機？？　投稿日２０１０１２２５

２００１年５月３０日

（よっし、これで勝つる！！）

イロウルで、鯖の内部に映像保存用の専用スペースを確保していた勿論訓練生用衛士強化装備を録画する為だ…

つまり一晩あけてもまだカオルは暴走していた…

作者の心の声１、以下作１（う～んこの日は飛ばしちゃった方がよくない？）

作者の心の声２以下作２（いや、いままで１日ずつ書いてるんだしさ）

作１（う～ん…昨日介入しても自重あんまりせんからなぁエロカオルは……）

基本、カオルはゼロ魔の世界でウハウハするためにいこうとしたものすごい煩悩の塊です
なので昨日の今日でおさまるわけがない……

作２（なら、少し介入して時間午前中にしちゃえば？　なら夜にはおさまるかも）

作１（それでおさまると思う？？）

作２（期待しようよ……）

作者の介入力…シュミレーターの時間変更
午前中の座学→シュミレーターへ
午後のシュミレーター→座学へ

内線…プルルルプルル

「こちら、Ｂ５５のカオルです」

『少佐ですね、ピアティフです。シュミレーターの時間が変更なりました。
準備よろしくとの副司令からの伝言です』

「へ？…えっと…何時に…？」

『９：００からです』

（なぬーー）
「あ、わかりました。では準備しますので…」（やっばい…ＯＳ書き換えてねーよ!!あと３０分!!）
キョロキョロ
（２号はもういってるな）
「１号Ｂ２１にいってくる!!」
飛んでいくカオル
＝＝　Ｂ２１シュミレータールーム　＝＝
（たく、なんでこんな時に１台エレベーター点検してるんだよ…あと２０分か…
２号以外、誰もいないな）
オペレーターブースにいき、
「イロウル」
「バルディエル」
……
カチャリ
間一髪セーフであった
「あら?カオルさんいらしてたんですか?」

「あ、まりもさん、ＯＳの書き換え等でね…２号！！」

「で…こいつがシュミレーター専用に、
メンテ及びアシストする、コバッタの２号」［よろしくお願いします。神宮寺まりもさん」

「え？えっと…よろしくね……
あのカオルさん、ＯＳの書き換えって？？」

「？副司令から聞いてません？？」

「はい、まったく」

「あ、自分の作ったＯＳが入ってます。
今はＡ－０１にＯＳ入っていますね。
キャンセルや即応性の向上などがこのＯＳのうりです」

「はぁ……でもなんで訓練生に？？」

「あ…そこまで……聞かなかったのですが、…
多分広める為なのでは？？」

「…後で夕呼に聞いてみるか……
まったく…時間変更も急だったし…
あ、少しお願いが…訓練生くる前に試乗してみても…？」

「あ～どうぞどうぞ、
訓練生来たら待機してるように伝えますので」
（うっし！観察できる）
自重しぃよ～

2号にＣＰを任せて〔勿論、コンピューターを介せば、
合成音ができるようには向上させている〕
内線を福司令宛に…
プルルルル
『もしもし？』

「副司令、カオルです」

『ああ、なに？』

「訓練生に自分のＯＳいれた訳を、
どう説明すれば…よろしいのですか？」

『彼女らはそのままＡ－０１にあがってくるから～なんだけど、
そうねぇ…新ＯＳの第一期生として、実証部隊に選ばれてるにして

ちょうだい。
このまま、次期訓練生にも新ＯＳになるから。
……お披露目もすべきかしらね…』

「了解です」
『後は？』

「ないですね～ありがとうございました」

『そ、じゃあね』

電話が終わったあと…
（んふふふ～♪）

カチャリ

（お、きたきた）

訓練生が集まってきたので、そっちの方に近寄った。

「集合！！」
／／／／／／／／
（まだみんな、赤面してるなぁ～♪）
「ああ、そのままで良いよ」

「と、自己紹介がまだだったね。俺は副司令直属の技術士官、渚カオル少佐だ」

（やばいやばい…

絶対慣れないよ…

なにしろ目の前に＜バキュン＞

で、＜バキュン＞＜バキュン＞

それに＜バキュン＞だ！！！）

俺は、表明上なんとか平静を保とうとしている…が、

ファールカップをつけていて正解だった…

「と、今君らの教官は、

乗っているので変わりに俺がいるが…2号！！

……

こいつがここのシュミレータールーム専属でメンテ、

アシストをする、コバッタの2号だ」

［よろしくお願いします。２０７Ａ分隊の皆さん］

「かっわいい～」「よろしくね」「浮いてる」「分解したい…」「

食べれ？」

（しっかり撮れよ～）

「さて、君らには俺の作ったＯＳによる訓練生での第一期生となる。
まぁようするに訓練生での実証部隊となる訳だ…」［マスターいっても？］
説明途中なので頷くカオル

「ところで、今までのＯＳについて座学などはあったか？」

「今日やる予定でしたが…」
（あ、成る程ね…）

「なら余計な知識はまだついてない…って事だな……
このＯＳの売りは硬直の除去と、即応性の向上だ」

「硬直の除去？」

「まぁようするに、今までのＯＳは長刀をふると、振り終わるまで別の行動ができないが、
このＯＳでは別の行動の介入ができる。
つまりだ、…やばいと思ったら、
逃げるや、途中で止めてしまう等の行動ができる。
より人間らしくな…ということだ。」

プシュー
「お、終わったか…」

「教官!!２０７Ａ分隊集合完了してます!!」

「時間通りにはきてましたよ…どうでした?軍曹」

「少佐…このＯＳすごいですね!!
これを訓練生達が?」
耳に近寄り小声で
「行き先には既に実装されてます」
頷くまりも…離れる

「彼女らには第一期生になるのと、簡単な違いは説明しました…
と……この後は…?」

「今日は新人課程として、基本動作からいきたいと思ってます」

「では…俺は立ち会いで、今日はいますので…」

「わかりました」
……
(むふふ～眼福眼福～揺れる上下左右に揺れる～)

彼女らはやっぱり可愛い。
現実世界でいえばＡＫＢクラス以上かな？の評価である……
ブチッ
そんな世界にいきやがってうらやましいぞ！！てめこの！！
＝＝しばらくお待ち下さい＝＝
大変失礼しました、ナレーションを担当する心の声が暴走した模様です。
深くお詫びをいたします。
では続きをどうぞ。
丁度、午前中の訓練を終了し整列しているところだ。
勿論２号を側にいかせたのはお約束。
（さてと、どんな映像が…グフフ）
「カオルさん」
「ああ、何？」
「新ＯＳありがとうございました。

……これで訓練生達が戦場にいっても、死なずにすみそうです……」

「……」

「わたしの教え子達は、沢山いましたが……その半分以上がもうこの世にいません…。

……私達教官は、行き先についてはわかりません。

……が、訃報は入ってきます。

……あんなに成績のよかった子、

……お茶目で可愛い子、

……少し…どじだった子、

…また、訓練生同士で相思相愛になった子、

…沢山…いました……

今では…、なんとか…堪え…てます……

…ですが…心苦しいのは、変わ…りありません…

けど、この新ＯＳで、やっと……やっと……

その…苦しさ…は…終わりそうです……

本当に……ほん…とうに……本当に…ありがとうご…ざいます……」

９０度の礼をしながら涙が垂れている……

「……顔をあげて下さい……

ただ単に俺は、俺が思った通りに作っただけ。

これを実らせるのはあなた方、教官の仕事です……

だから…あなた方の仕事を、よろしくお願い致します……

また俺も、このＯＳだけで終わらすつもりはないので、

感謝は全て、ＢＥＴＡ戦が終わってからですね…」

「はい…本当に…」

「そこまで、そこまで、きりないっすよ」

「わかりました」

「じゃあ、俺はＢ５５にいくので…」手をひらひらさせながら…

「はい！！」再び９０度の礼…カオルが見えなくなるまで……

（……いきなりか…
はぁ…ヘビーだな…）
ちょっとは反省していた…

（まさか、ただ単に硬直？なんだこの糞ＯＳが！
で、作っただけ～なんてあの場で言える雰囲気でもなかったし…
はぁ……やましい目的だったのが……
…まりもさん……泣いてたし……
あ～クッソ！！
俺最低だ！！
クソクソクソ！！
クソクソクソクソクソクソ！！！！！）

＝＝　Ｂ５５ハンガー　＝＝

「１号！！今どれくらい増えてんだ？！６号製造状況！！
３号！！、整備担当だったよな？！状況しらせろ！！！」

［［［イエスマイロード］］］［祝マスター復活♪祝］

［まずは僕から、作業進行度もうまもなくホバートラック完成。
あと６１式は完成済み。陸戦強襲型は５０％で、
僕らが増えるなら明日には完成予定だよ］

［次に僕ね　一昨日の結果だけど、
股関節にかなりの負担がかかってたよ。
とりあえずは修理したけど……
僕らの意見としたら、
連邦軍のフィールドモーターシステムに変えるのオススメする。
今持ってる中だとそれが1番かもね。
更に他関節も格闘するなら、変えるのオススメするよ」］

「とりあえず製造はそのまま続行。
不知火の関節変更に関してデメリットは？」
［1この世界では製造不可、技術が追いついてない。
2関節部分が複雑になり重量が5％重くなる。
3メンテナンス費用はいいや…
以上なくらい～」］

「重くなるなら機動力は？」
［出力あまり気味だから問題点なし」］

「なら、変えるか…こっちでメンテ等も…な。
コマを流用すれば大丈夫かな？」
［うん。それで大丈夫だね」］

「じゃあそれでよろしく、俺はコバッタ増産とプラント作るから」

［イエスマイロード］

「あ、こいつらの研究よろしく、特に歯と外殻」
と虚数空間にいれっぱなしの戦車級と要撃級……
やっぱり餌がないので死んでました…をとりだす…
（うん腐ってはないな）

［イエスマイロード］

……
カオル報告

プラント（ナデシコ世界の）製造しました

コバッタ３０号まで増やしました

陸戦強襲型ガンタンク進行度６０％

６１式ス１　チ１　完成
ホバートラック　ス１　チ１　ル１　完成

ス＝超硬スチール合金
チ＝チタンセラミック合金
ル＝ルナチタニウム合金

コバッタ振り分け…
変更なし

３０号まで増えた

第２１話　カオル君暴走中で物語終了の危機？？　投稿日２０１０１２２５（後

作者　「いやぁ…一時期はどうなるかと思ったが……助かったぁ…」

あ号　「……だな……このまま…エロカオルになり……Ｒ１８に…
…いくかと…思ったぞ」

作者「流石、教え子思いのまりもちゃん♪」

あ号「……けど、彼女…食われる運命なんだよな…」

作者「…認めん、認めんぞぅ！！武ちゃん３週目がくるし、運命は
変えてやる！！」

あ号「けど…何故…３週目だ？？」

作者「ぐわ…今ここで聞くのか？おめぇ」

あ号「…うむ…説明できなければ…プロット変更させたる」

作者「あ～まぁ…最初は二週目でも十分かなぁ～と思ったんだけと、

二週目で夕呼先生を納得させる理由がこの物語上ないからなぁ…」

あ号「何故だ？」

作者「ほら、ゲームガイもたないしさ、教えるのは情報のみだし…」

あ号オルタプレイ中最初の辺り…

あ号「むぅ…確かに」

作者「だからそうなってくると、元から００ユニット情報、ＸＭ３情報持つ、３週目しかありえねえんだわ…」

あ号「確かに」

作者「ま、そんなわけで、まりもちゃんをまもりぬき、あ号本編ではプチリっとなる運命でよろしく」

あ号「……いやだ…オルタプレイで対策情報たててやる」

作者「ところで、あ号、それは反則」

あ号「どっちがだ！！」

ＰＳ　作者ぼやき
次回が難作でした…
ある事を納得させるのが、
スランプに陥ってましたが…
何とか通過できそうです。

第２２話　更にチート化計画　投稿日２０１０１２２６

２００１年５月３０日

＝＝　Ｂ５５ハンガー　＝＝

「おはよう～」

［おはようマスター］

「進行状況は？」

［陸戦強襲型ガンタンク２両完成したよ］

「で、引き続き…あと３１機分なんだよな？
Ａ－０１分残すと、１８か…いやテスト用で、１５だな……
うん、あと１０機増産よろしく」

［イエスマイロード］

［あ、マスターパイロットはどうするの？］

「ああ、考えてはなかったな……おまえらは？」

［自分らよりもヤドカリ君をお勧めするよ、
で、マスターの力でチューンして…］

「ヤドカリ君？ああ、情報処理特化型か……」
［うん。自身での整備製造等は、できないけど、オペレーターとしてなら一流だよ。
またパイロットとしても優だし］

「わかった。３号、頼めるか？ボディーのみ」

［イエスマイロード］

［あとは、ヘリウム３の問題だね］

「ん～木星かぁ……距離があるしなぁ
…補給船なんか飛ばして、
オル５側にばれても痛いしなぁ……」
（ん？？そういやぁ）
「チューリップを固定で使えない？？」

［ちょっとまってね］

「Aチューリップとβチューリップのみ行き先固定の、ワームホール式。
色々な所にいくから演算ユニットが必要なんだろ？？」

［うんいける！！］

「うっし、今から製造して設置しにいくと？」
［ステルス、相転位エンジン、操縦席くっつけてなら…うん。3ヶ月でいけるね］

「9月初めか…じゃあそれでよろしく。
それまでは、ガンダム世界に回収にいかなきゃな」

［だね］

「あと足りないと思うのは補給と、輸送か」

［弾薬については、プラントで鉄系統からでも、精製可能です］

「うは…プラントチートだなぁ…」

［元々少ない資源で木連ができ、僕達無人兵器群ができ、
バッタ先輩などは、ミサイル搭載してるからね］

「となると後は輸送かぁ」

［光線級がいるから空は、撃墜されない、かつ大型が１番望ましいね。
または離着陸容易、荷物積載容易なの］

「うしろはミデアかな？専用コンテナ着脱だから、
前は、やっぱあれだろ」

［あれ？］

「全長３１７ｍ全幅５２４ペイロード９８００トン成層圏プラットフォームガルダ。
けど離着陸が問題点だから、強襲救命艦メデューシンの機能をつけたい」

［データーがないからなんともいえないけど…凄そうだね。
単純にいうと、ザクなら２００機弱積める］

「後は陸上輸送か…ギャロップがあるが…
そこからもう少し前線に運べる何かほしいな…」

［だね…］

「あそこ…いけるかな？」

［あそこ？］

「メタルマックスの世界、できれば３…」
［とりあえず出して見れば？］

「だな”世界扉”」

世界扉がでる…
「ちっと覗いてくるわ」
＝＝メタルマックス３と思える世界＝＝

（お、確定か…）

俺の姿見かけると、もの凄い勢いで、実物は初見の、四脚に大砲をくっつけた、
メタルマックス３でのエネミー”キャノンホッパー”が跳ねてくる。
俺は、きた世界扉をそのまま潜り…
＝＝Ｂ５５ハンガー＝＝扉をけす。

「行けるな。俺の知っている敵がいたし」

［ゲームの世界か……僕らもいってみてもよいのかな？］

「あ、この世界はやめとけ、
暴走した自立機械ＶＳ人間の構図だから、横からいきなりやられるぞ」

［わかった…やめとく］

「しかし、ゲームの世界も良いとは…恐るべき世界扉…、
となると…
鋼鉄の咆哮の世界も良いって事だし、
無限弾薬装填装置も大丈夫なのか」

［無限弾薬装填装置？］

「言葉通りだな。
物理を無視してるから見てみたいことは見たかったんだ…」

［へぇ～］

「ただ、主人公側が手に入れなければならないけど…
敵側もある意味無限的に撃って来るから、
下手したら簡単に手に入るかもしれん…」

［魔法も、もってこれたりして］

「あ、世界扉は魔法だぞ。ゼロ魔の虚無」

［ガーン…そ、そうなの…ｏｒｚ］

「知らなかったか？」

［データーいれてくれてないじゃん！！］

「まぁまぁ…しかし、
ＦＦの世界のメテオを喰らったとし、情報が渡ったと仮定する上位存在
…どう抵抗すると思う？？」

［メテオ？？］

「小惑星を上空から落とし相手にぶつける魔法」

［レーザーの集中砲火による破砕］

「しかも…連続魔のスキルだったかで、
精神力切れるまで、連発できるし」

［流星群なみの小惑星が狙って？……

流石に物理無視は、無理、チート」

「だろうなぁ……」
（FFの黒魔導士達による…ハイブ破壊攻撃、面白そう♪）

「まぁ魔法は忘れて…、とりあえず俺の行き先は、もう一回ガンダムの世界で材料と、
核融合炉の回収…いや、Zあたりだな、ガルダのコピー目論むから2回…
ん～先Zだな…

でその後は……
あ～メデューシン…
はまだいいか…メタルマックスの世界だな…」

［何が目的??］

「あそこの自立機械達だね主に…
ガンタワーとか、ガンホールとか…洗脳して強化を施す♪」

［うんうんでその後は?］

「メデューシンいって次に鋼鉄の咆哮の世界探索か…
まぁその前あたりに一年戦争いくとして…」

［各世界5日だとして、休みおいて6週間だね］

「メタルマックスと、鋼鉄の咆哮は2週間」

［あ、じゃあ8週間だねマスター］

「だな…」

「確か佐渡島ハイブレベルだと…3ヶ月だから、
その終わったあたりでまた、間引き作戦だよな…多分」

［それまでに何百機作れるかだね…
しっかり集めなきゃ］

「ああ、……鉄関係の採取地もほしいけどなぁ…」

［アステロイドベルトは？］

「あ、じゃあ…チューリップセット2個？？」

［だね］

「じゃ、それでよろしく」

［イエスマイロード］

「不知火の換装はどれ程？」

［あとすこし…あ、マスター］

「ん？」

［今のペースだと僕ら、たらないから３００まで増やす許可ほしいな］

「いいよ…それで」

［イエスマイロード♪］

「さて、一回副司令に報告後、
不知火の武装面すこしまたみるか」

［逝ってらっしゃいマスター］

「漢字違うぞ」

［いや、あってるよ～］
（たく…）

＝＝　副司令執務室　＝＝

コンコン「副司令いますか～」

「待ってたわ～、はやく入ってらっしゃい」

シュン

「失礼します」

「んふふ～あんたまりもを泣かしたわねぇ？」

「え？…ええ…はい」
（昨日のか…）

「あんた…責任とって結婚しなさい」

「はぃ…ぃぃぃいいい？」
「了承したわねぇ式は」
「ちょ、ちょ、ちょまって下さいよ！！」

「あらあの子嫌いなの？」
「いや、そういうわけじゃ」
「ならいいじゃないの～日程は」
「いやそうじゃないっすよ！！」

「あら、まりもは優良物件よ～
家庭的で、料理はもちろん、家事全般こなせるし～」

「……肉じゃがも？」

「勿論絶品よ～さ、日程日程」

「は？！いや、まりもさんに聞いたんですか？」

「あらわたしが決めたら大丈夫よ～」

「当人同士の恋愛の上でないと……」

「あらじゃあ、恋人から」

「それもまず当人どうしから！！」

「うんもう、どう責任とるのよ～」

「いや、そもそも責任って…むこうがこんな思いをしなくてすみます！って…」

「あら……そうだったのね……」

「そもそも、副司令…あの場にいたんすか？何で知ってるんですか？」

「さぁねぇ～」

「……まぁ確かにまりもさんは…」

「あ、脈ありなのねじゃあ責」
「それはおいとく！！」

「もぅ……わかったわ…で何？」

「と、これからの行き先決まったので報告を」

「いつ行くの？」

「明日にでも…」

「期間は？」

「５日間前後、長くとも７日間」

「今回行くところと目的は？」

「Ｚガンダムの世界、１番最初にいった世界の後の時間軸です。
主にガルダと核融合炉集め」

「ガルダ？核融合炉はもう持ってるじゃない」

「ガルダは飛行母艦でペイロード９８００ｔを誇ります」

「飛行機は落とされ…まぁなんかしら考えがあると思うけど…」

「ええ、まぁその辺は…」

「それにそんなに必要なの？」

「今現状ですとＡ－０１の分含めて３３機分しか、作れませんので」

「それで十分なんじゃない？」

「足らないですね」

「なに？あんた…どの位機体を、作るつもりなのよ」

「数限りなく…億でもこの世界からＢＥＴＡが駆逐するまで…」

「……」

「昨日まりもさんから、なかれました…
俺がちょっと取り付いた、
なんか動作がおかしい、
だから、ちょっと弄ってみた……
ただ、そんだけの、ＯＳだけでですよ？？」

「……」

「で、その時、これでこんな思いをしなくてすみます…と言われました。
俺から言わせると、おかしい、異常です……
そんな思いをするのが異常なんですよ！！！！！
……最初この基地に来た当初は、
技術を渡して彼女達を護れば、それでよしと思ってました……
けど、それじゃあ足らないです…」

「あんた…そんなに力もつと、この世界の異端者になるわよ」

「それでもかまいません…ＢＥＴＡを駆逐し、
この世界、いえまりもさんのような、
思いがしなくてすむなら…」

「どうやら本気のようね…後悔はしない？」

「はい！！」

「わかったわ…好きになさい…
けど、そんな億の機体作っても補給が間に合わないわ、どうするの？」

「そこら辺はあてがあります。
作っちゃえばいいんですよ」

「原材料どうするのよ」

「アステロイドベルトから調達します」

「は？」

「アステロイドベルトです」

「輸送艦とかは？」

「いりません」

「……馬鹿にしてるの？」

「いえ」

「じゃあどうするのよ！！」

「この間ナデシコの世界に自分いったの覚えてますよね？」

「ええ…」

「その時、別目的でプラントをゲットしてたのですが、
ワームホール式のワープ技術があったので利用します」

「……現物みたいわね……」

「どっちを？」

「そのふざけた技術両方よ！！」

「わかりましたじゃあ行きましょう」

……行く途中……

「あ、副司令ひょっとしてオルタ５に～と思ってます？」

「あったりまえじゃないの！！そんな超空間技術ば」
「大丈夫っすよ」

「え？」

「生き物はワームホールを無事抜けられません、カチンコチンに固まります……
まぁ同じ世界の技術で、ディストーションフィールドで、包まれてない限り……
なのでそこのところは大丈夫ですかね」

「そうなの…」

「それよか、オルタ５側増長になる可能性の世界が、
宇宙戦艦ヤマトや、ガンバスター、
マクロス７以降、
銀河漂流バイファムとかの単独ワープ可能な世界ですね」

「その世界って…」

「宇宙戦艦ヤマトは、往復約３０万光年を旅し、
襲撃する異星人を退けながら地球を救う世界……
次に、ガンバスターは、最終的には銀河中央まで、万単位の艦隊で殴り込みにいく世界。

あ、ガンバスターは太陽位を軽くキックで砕きます。
あと、マクロスシリーズの世界は、１０００万人規模の都市船団でもって銀河開拓の世界。
因みに巨人族もいます。
バイファムは、異星人の襲撃を逃れた子供達１３人が、航宙艦一隻プラス５機位の機動兵器でもって戦い、両親達を助けに行く話です。

どれもオルタ５派が喜びそうな技術満載の世界ですね…
ワープ技術ありの、移民できる技術ありのですし…
まぁ、今までいった世界はまだ、地球圏活動の世界ですから…」

「ほんと、あなたってふざけてる力、”世界扉”だっけ？もってるのね」

「ですね」

＝＝　Ｂ５５ハンガー　＝＝

「ふ…ふ…ふざけ…てる……」
副司令の目に映っている光景、
作業ロボットがふよふよ浮いて、機体を組み上げている

「なによあのロボットは！？」

「ああ、あれが作業用のコバッタ達です…5号!!」

［あいあいマスター
あ、香月夕呼博士ですねおはつ～］

「え…ええ…おはつ……」

［ぼくちゃんは作業用ロボットのコバッタ5号です～
よろしゅうにぃ］
（コバッタ選択まちがえた……汗）

「5号、いって作業続け」

［マスター～そんな事いわずぅ～］

「8号9号!!こいつにｏｈａｎａｓｈｉしてこい!!11号!!」

［あれ～～～］
8号9号に牽引される5号

［5号が失礼しましたｍ（＿＿）ｍ］
と顔文字表示の11号

「……で、このこ達、なんでういてるし、

会話？自我があるみたいだけど…」

「反重力推進ですね、
自我は元々あったみたいですよ…が、
命令が優先で抑え付けられてたみたいです。
まぁ会話機能つけた際に、
そこら辺解放し、変えちゃいましたが…」

「そしたらあんな子もいたのね…」

「大変ご迷惑をおかけします……」

「さて…でこれが異世界の技術の塊のプラント。
砲弾製造、材料の変換、無人兵器製造、
ナデシコ世界のオーバーテクノロジーの塊」
黒光りする正四方形
中が空洞になっているようにみえるが、
光通さず不可視の状態だ…

「な…なにこれ…」
副司令が見えないエリアに近寄る。

「ストップ！！分解されますよ！！」
ビックとして動きを止める。

「コピーし作成しましたが正直こいつは……
俺にも解析できてないオーバーテクノロジーの塊。
ですので見える部分を触れたいなら触って下さい…」

「あんたでも？コピーした本人の…」

「ええ、正直俺の能力を超えてましたね、
コピーはそのままだせば良いとしても、改造は、サイズのある程度
の変換のみです。
中身を完全に弄れませんでしたね…
だから、こいつらがいなかったら、砲弾製造できるは、知らなかっ
たですし…」

［私たちは記憶として刻まれてました］

「俺もわかんない力があるんすよ…で、１１号、チューリップは？」

［……材質変換中みたいです］

「……現物はまだってとこですね…
あ、あれが陸戦強襲型ガンタンクです」

副司令を正面へ案内した…

「この世界を変えていく、そう…重装歩兵の様にね…」

「この機体がねぇ…」
ぐるりと見回し…

「異質に見えるわ…ほんと…」

「ま、そのワープ装置できたら見せてよね、救世主さん」

「はい」

「あ、コバッタ1機わたし付けに付けてほしいんだけど…
良いかしら?」

「副司令付けに?」

「部屋の整理って、ピアティフから言われてたのよ~
もちろん分解はしないから」

「そうですね…彼らに聞いてみますか…、
アテンション!!」

一斉に静かになるハンガー

「副司令がアシストについてほしいとの要望だ！誰か？」

１０秒ほどすると２２号がこちらに近寄ってきた

［わたしがなるー］

「よし、じゃあ頼んだぞ」

［イエスマイロード］

「じゃあ…いらっしゃい」

「まぁ結構全般的なのできますから、
かなり役にたちますよ」

「わかったわ♪」

「では自分の方は以上ですので作業の続きを…」

「ええ」

改造タイム

不知火

現用　運搬担架トラックに合わせて微調整

脚部外側にあたる高周波ブレードを戦闘時のみ、
展開にする収納式に

空中散霧式（ショットガン形式）、１２．７ｍｍホローポイント弾
追加
装填数３０発

……

カオル報告

陸戦強襲型ガンタンク２両追加
１両作成中６０％

コバッタ振り分け
変更
３号　ヤドカリ増産担当
５号　ｏｈａｎａｓｈｉ中
２２号　副司令付き

５０号まで増えた

第２２話　更にチート化計画　投稿日２０１０１２２６（後書き）

作者「億っていっちゃってるよ……」

カオル「多かった？」

作者「銀河中央殴り込み艦隊が８７００隻、
でその旗艦の７０ｋｍ級エルトリウムで
シズラーマシン８００、その他戦闘機３８００だぞ…」

カオル「多かったね…でも自重しない～～～」

作者「はぁ……うんで次はＺにいくんだよな…
趣向変えて、」

ジャジャーン
作者「Ｚガンダム編！！続編になります！！」

カオル「おおう！！」

作者「実はカオルが自重しないため……
一日一話のペース内に、おさまり切らなかったので……
あんな事こんな事を画策せざるえなくなりました……
なので、明日の冒頭から、しばらくＭｕｖ－Ｌｕｖの世界からお別れです…」

カオル「コロニーレーザーもってくる！！サイコガンダムもってく

る！！
Ｚガンダムもってくる！
あと、あと」

作者「このようにカオルはコレクター癖があるので……」

カオル「あ、でも５日の制限枠なら５話ですむよね？」

作者「その期間内に戻ればね…けど、ナデシコでのチューリップのように八ヶ月たつと、
カオル、お前は次の当日八ヶ月後だからな…注意しろよ」

カオル「へ～い…うんじゃぁゼダンの門コピーしちゃって…
ルナ２もコピーして、ハイブに落とすか……」

カオルの妄想は続く…

作者「しかしよ…コロニー落としの後影響考えてるのかね？？」

不明だ！！

作者「多分コロニー落としするに１票いれておこう…」

第２３話　Ｚの世界へ　”カプセルの中”に　投稿日２０１０１２２７（前書き

予告通り　暫くＺの世界内での暗躍活動中心になります。

数話はＺ編となりますので、ご了承を……

第２３話　Ｚの世界へ　”カプセルの中”に　投稿日２０１０１２２７

＝＝　自室寝室　＝＝

（さてとガルダか……
取得にいくとしたら地上編なんだよな…ＺＺの世界でも良いが）

ストーリーを思い出している。

（確か数機だったから無傷で、取り返そうと四苦八苦してたんだよな…）
台詞を思いだしている。

（１番わかりやすいとするとジャブローか…）

エゥーゴの地球降下作戦のあたりである。

（あの辺りだと、地上に着陸してて目指しやすいはず）

カオルはまどろみのなかへ……

２００１年５月３１日

コバッタ同士の通信で、直接会いに行かなくとも、密談ができるフラグが増えた。

が呼び出しくらった。
（…なんだろぅ……）

＝＝　副司令執務室　＝＝

コンコン「カオルです」

「いらっしゃい」

シュン

「えっと…何ようです？」

「行く前に二つね…
帝国軍からあんたの撃震くれ！！ときてるんだけど…」

「あげるのはメンテ面で絶対無理ですけど、
調べるならご自由にで良いと、思いますよ」

「……そ、それで良いの？？」

「あ、生体駆動の中を弄ると帝都が消滅しますよ～の、説明つけ加えてなら、
五日間程どうぞ～で、貸してあげて下さい。
あと…操縦するは構わないんすが、全力駆動はしないようにと、付け加えてください。
流石に死人がでた機体は乗りたくないですし」

「え、ええ……」「あ、武装もこの間のＭ－１２０Ａ１と高周波ブレードを貸してあげて下さい。
要返却で…
自分がどっかいっている間ならご自由に～って」

「え…ええ、わかったわ…」

「あともう一つのは？」

「お兄ちゃんに会わせろ…のが来てるんだけど…」

「は？」
（まさか美幸がついてきた？？）

「わたしも今一わからないけど、あなたの撃震に乗ってたのお兄ちゃんだ！！
で、会わせてくれの催促きてるの…」

「あ～……（なっとく）
釜山で放置してあった上半身なんですよね……俺の撃震は…
それの説明しなきゃ駄目みたいですね。
わかりました。その当人に後日にでも、

放置してあった状況を説明しに行きます。帰ってからでと仲介お願いできます？」

「めんどうだけど、話ふった以上、しょうがないわね。わかったわ。日程はわたしが決めていいのね？」

「はい、お願いします……。では行って来ます…”世界扉”」

＝＝　Ｚガンダムの世界　＝＝

「ありゃ？座標間違え…」

カツカツ

「やば、バルディエル！！」

（……セーフ、あの制服は、ティターンズ？？……状況把握が先か…乗っ取るか…基地？？）

乗っ取ると…艦船名アレキサンドリアと把握…

（…マラサイがない？？…初期の頃か…？時空系間違えた…？おっかしいなぁ…ジャブロー想像してたんだけど…ん、あれは…？）

自分の意識をリクライニングスペースにうつした…

「カミーユがガンダムＭＫ２を盗みだしたなんて本当なのですか？」

「わたしが知る訳無いだろ」

「あなたはいつも、そう自分の事しか頭ない」

（ん…あの人は…）

バン！！本を机に叩きつけられる。

「今はバスクの事を考えてる。この状況が異常な事ぐらい承知している！！」

「どうですか。マルガリータという若い女の子の事を考えてるのでしょ」

「クッ！！」

ビシィ

「あぅ」

（あ、みぎほほはたかれて赤い…
そうか、たしか第3話??）

やはり時間を間違えしまったようだ…

（たしか彼女は装甲材の開発技術士官だったよな…で、真空に…）

今俺が注目してるのは、”カミーユ・ビタン”の母、”ヒルダ・ビダン”である…
彼女程優秀な技術士官、どうせ死んじゃう人ならば、
連れて帰っても…と思いはじめた。

（戦術機の装甲素材発展や、ガンダム世界の装甲を根付かせるのに、
役にたつかもな…
多分、俺が死ぬ役やれば…変わりないはず…）

そう思いたつと、実行し始めた。

（まずは、逃げれない状態にならないと、
取引すらできないからなぁ…）

悪魔の取引をしようと考えてた…
このままこの世界で死に逝くか、
別世界で別系統の技術に触れ、

開発技術士官で生きるか…

（うっし…なら）

アレキサンドリア掌握しつつ、意識を格納庫に…
（ついでにハイザック情報ゲットしとくか…）
一部を同化、解除、
引き続きカプセルを…

（お、これか…な？）

艦全体をもう一度くまなくサーチしてみたが、この一つしか見つかってない。

しかし、艦を掌握して見てみると…
（結構面白いなぁ……）
で、はまってしまった…
シムタワーみたいなのが、リアルな人間生活で、覗けちゃうのである…

パイロットスーツに着替えている女性士官、
女子トイレで四苦八苦して…
あ、やっと出たらしい…ほっとした顔だ…

（ん？あ～～不倫ぽいなぁ）
いかにも年齢差のあるカップルが、
人気の無い所でキスを交わしている…
（おっ）
人が近寄って…
（あ、ばれるか？？）
と思ったら…バッ、凄い素早さで上官と副官みたくなった…
（おいおい、愛人を副官にしてんか？この士官…）

と観察にはまってると…
ヒルダさんが、ティターンズ士官に、連行されているのを発見した。

（おっと、ヤバヤバ、同化しなきゃ）

艦の掌握解除し、カプセルに急いで同化する。

カプセルの前までに連行されてきて……

「はいれ！！」
ヒルダさん精一杯抵抗はしている。

「こんな状態で宇宙に出すなんて正気ですか！！」

「つべこべいわず入ればいいんだよ！！」
力付くで、カプセルの台座部分に押し出す。

「きゃぁ」

「おっと…対真空ガラスだから、気をつけろよ。
なぁに、交渉が上手く行けば、また帰れるさ。
奪いにきたら…ズドンだがな」

「酷い！ひとでなし！！」

「貴様、ティターンズに逆らうのか？
第一貴様だって、交渉成立したら、
特進になるだろうが！」

「こんな状態で出すとは聞いてません！！」

「あーうるさい！！黙れ！！」

強化ガラスが下ろされ固定された…

ヒルダさん…シクシク泣きはじめた…

（そろそろ宇宙にだされ…）

ハッチがあけられカプセルは静かに進み始めた。

（そろそろかな？）
「イロウル」
通信回路をのっとった…これで聞こえない。

「ビダンさん」

「ひっ！！」

「落ち着いて話を聞いて下さい、
あと顔を少し下に向けて下さい」
俺を軽く頭だす

「ヒィ！！」

「まぁ驚くのも無理ありません…
自分は異能力を手にいれた、異世界人ですから…」

「……異世界人？異能力？」

「ええ…、で自分はあなたの運命もしっています…
あなたはもう間もなく、ハイザックの弾で、
ガラスが割れ真空に放り出され、

この世から去ります…」

「そ、それ本当なのですか？」

「はい。あそこに見えるハイザックが…
迎えにきたカミーユさん操縦のガンダムが近寄ってきて…
奪われない為にです」
ハイザックが辺りを回っている…

「パイロットはジェリド中尉、
彼はあなたとは知らず、このカプセルを爆弾だと思っています。
また、奪われそうになったら、撃てと命令されてます」
「ああ、ぁぁぁ」

「おっと…まだ立っててください…
あなたの運命に、介入してるのを知られたくないので…」
自分の腕を棒に変化させ、倒れる前にささえた。

「……はい…」

「さて…運命のご選択をさしあげます。
最後まで聞いて下さい。
1　あなたは今話した事を俺の能力で忘れて、
この世界でもうすぐ死ぬ運命を受け入れる。
2　あなたは別世界で、別の技術を触り、技術士官として活躍する。

以上どちらかです…」
「今助けていただけ」
「無理です。

実はこの世界で、
あなたの息子さんは、
あなたの死によって、英雄となる世界なのです……
ですので、残念ながら、どちらかしかありません」

「……カミーユは、わたしの死でもって??」

「ええ、あ、2を受け入れたら、
代役は宇宙でも死なない、自分がやりますから
大丈夫ですよ」

「別世界へなら…
あの子のこれからの事も、教えて下さるの?」

「はい。お約束します」

「……わかりました…助けて下さい、
異世界へいきます」

「では、さっそく…あ、少し血を頂きますよ。
運命で必要ですので…」

「いた！」

「あと少しです。我慢して下さい…」
１００ｍｌを急いでぬきとる…

「終わりました。では、変わりますので、異次元でしばしお待ちを、
アルミサエル」
彼女を睡眠状態にし虚数空間に押し込んだ。

「”幻影”」

（俺は、ヒルダ・ビダンだ…
さって一世一代の大丈演技とくとごらんあれ…）

アーガマから　有線カメラがきた…

（カメラか…
で、次がガンダムがくるから、
驚いて、怯えるんだよな…ガンダム…見えた！！）

ビームライフルが撃たれ、ガンダムは避けこっちに接近する…

俺は、後ずさりながら怖がって…
ガラスに手をつけ
「きちゃ駄目！あたし撃たれるからきちゃ駄目！」と叫んだ！

（次は怯え…手をだな…）
手を口元に…

「やだやだやだやだやだ」

ガンダムの手がのびてきた…

（そろそろか）

マシンガンが発砲
バリーン

真空にさらけ出される俺……

（う…これがプレッシャーか）

ガンダムが…悲しみの為暴走し始めた…

ハイザックにガンダムが突撃し始めた…

（ヒルダの出番はここまでだな…）

「”幻影”」
姿を消す

（しばらくは良いとして、ガンダム3号機に取り付かないと…
あ、ガルバディベータか…あれもほしいな…）

ガンダムが突進逃げハイザックが背後から捕まり、
（あ、　ガンダムが殴ってる）
発光信号が　赤いリックディアスから…だされ…
ガルバディが監視の為動きをとめた。

（よっし今か）

「バルディエル！！」

（ラミアの機体か……ばれない内に離脱してっと）

クワトロ大尉がハッチにたかってる…

（停止している…今のうちに）

「バルディエル」
３号機にとりつく…

（カミーユ　…泣いてるな…でもこれで彼は強くなれるんだ…）

そのまま俺が取り付いたガンダムＭＫ２　３号機は、
アレキサンドリアに着艦。

もちろん指先に血をくっつけておくのは忘れてない…
塗ったあとは自分は、
コクピットブロックのスクリーンになっている。

「開けろ！！」

「開けないか！！」

「ちぃ！　おい強制解除の準備しろ！！」
外で整備士がたかってきてるようだ…

「セットＯＫです！！」

「早く入力しろ!!」

「まだか?」
(エマさんか)

「なかからキーを固定してます。解除用のコードを送り込んでいます」

「開きます!」
シューン

エマさんが入ってきた
「やっとあえたわねカミーユ」
(やっと会えたよエマさん…)

「答えなさいヒルダ中尉は乗っていたの?」
バシッ
(いたそう…)
「いたの?いなかったの?」

「見ればわかるでしょ」

「ホロスコープじゃなかったのね?」

「三号機の指を見ればわかるでしょ」

「指？」

エマさんが確認の為に指先に…

整備士が、乗り込んできて…
カミーユの両脇捕まえ引きずりだそうと…

「クッ…離せよ人殺しども！いけっていうなら一人でいくよ！！」
振りほどいてメットをメットをガコ！っとたたきつけた…

「父さん？」

「……」
（声聞こえないな…）

カミーユ降りていった。

「カミーユ！！」

殴られた音も微かに
「やめないか！！」

「ほんとうの事だろ！！」

「……その母さんをやったのは、この船に乗っている連中なんだ！！」

静かになった…

（後は…しばらくおとなしくしてよう…

そのうちアーガマにいくさ…

うんで、次は父さんか……たしか2号機だったっけ…？）

機体の足から床になり、2号機に取り付き、

コクピットのスクリーンになった。

（さて…ねますか…）

……

「ハッチをあけろ！開けないと撃破する」

「ノーマルスーツ着用してないものはエアロックはいれ」

ブォァァァァ

「もう一度いう　ハッチを開けろ、開けなければと爆破する」

ガァン！！

「今度はビームライフルをしようする」

グゥィィィン

『二号機　三号きつづいて』

「わかってるいきたまえ」

『いきます』
クィィーン

（ん……んぁ…ぁぁよくねた…）

ファァァァ
「いいしんどうだ　いくぞ！」
ブォォォー
（予定通り、フランクリンだな）

戦艦からのビームが…
「かすめた！」
（当たった…ノズルがよていどおり破損したな…）

「心配しないでくれ　エマ中尉。
ノズルの一本位使えなくとも干渉はしない設計になっている」

『ではついてこれますね』

「もちろん　最大戦速ではないが」

『カミーユ　コースは2号機が固定してくれている。外れたら迷子になるわよ』
（うん迷子になりたくないさ…）

『了解！』

ビーム！

「は、　わぁ！！」
正面にガルバディベータ…いった。

『なんでライフルうてないんだ！
自分で開発したモビルスーツだろ！』

「バルカンもあった」
（そりゃ、いきなり操縦できるとはいえ、戦闘素人には無理だよ…君と違ってさ…

お、クワトロ大尉～まってたよ～）

「エゥーゴのモビルスーツだ」

着艦　うっし…

「バルディエル」

艦と同化して掌握…　一部をリックディアスと同化し、解除。
（今の所は、めぼしいのないなぁ…）

船外タイルに物質のまま移動し、モンブランを視認、離脱して…
取り付き成功、
「バルディエル」
モンブラン掌握、
（格納はっと…ジム2か…）

一部同化、解除

（さて、ヒルダさん対応しなきゃな…人気のない部屋はっと…）

発見しその部屋で解除し本体のみになる…

「”世界扉”」行き先は現実世界…

（彼女分の弁当と…
次こそはジャブローに…）

……
カオル報告

ヒルダ・ビダンさんが加わるようです

機体情報のみ
アレキサンドリア
ハイザック
ガルバディベータ
アーガマ
リックディアス
モンブラン（サラミス改級）
ジム２
カプセル

Ｂ５５状況はわかりません

第２３話　Ｚの世界へ　”カプセルの中”に　投稿日２０１０１２２７（後書き

作者「やっちまったやっちまったやっちまった…」

あ号「どうした？作者よ…」

作者「非常に後悔している……」

あ号「なにを後悔？？」

作者「さらなる異世界人の拉致？強制？…」

あ号「ぶっそうだなぁ…」

作者「……当初プロットには入ってなかったんだよ…」

あ号「……わしにも何かくれ」

作者「……マクロスのエビルシリーズかな」

あ号「……乗っ取られる……やだだぞ」

作者「贅沢いうな…何が欲しいんだ?」

あ号「…わが主、ケイ素系生物…」

作者「別世界ならいるぞ」

あ号「本当か??是非とも!!」

作者「考えとく…話戻すが、
一人や二人ならまだ修正が効くか……どうするか…?」

あ号「こういった時は…酒飲みながら…語ろう」

作者　「お、銘酒か?」

夜はふけていく……

ヒルダ「わたしは、登場しないの??」

あんたは次回、今回は寝てる扱いだから

第２４話　Ｚ編２　”ジャブローの”ジャンク屋　投稿日２０１０１２２８　修

＝＝　現実世界　＝＝

「さてっと」
相変わらずな俺の部屋から抜け出した。

「”幻影”シャムシェル」
フランクリン・ビダンになって町に降り立つ。

（まぁ少しは目立つ外国人だが…彼女に飯だな…
あとは適当な家コピーしておくか…）

丁度よさ気な家見つけたのでコピーし、
一回公園で鉄製で作って改造…成分変換
窓無し、ドア無し、電気をＳ２機関、
上下水道はタンク式にしてから、
虚数空間に取り込む。

先にビジネスホテルにツインで、チェックイン。

コンビニで飯やドリンクを買い、ホテルの部屋へ、
幻影解除して、彼女をだした。

睡眠状態解除…

「ん…ん…は、ここは……」「ようこそ異世界へ…ヒルダ・ビダンさん」

「異世界！？」

「窓から町の光景を見ればわかりますよ」

窓にかけよるヒルダさん、

「は……はは……ほ、本当みたい…ね、時代遅れみたいですし…」

「まぁ…ここは西暦２０１０年の世界ですしね～」

テレビをつけてリモコンを渡す。

次々チャンネルをかえる。

ニュースの時間帯だ…丁度良い……

「俺がこっちからいなくなって一ヶ月今日か…」

そう呟くと、しばらく彼女と一緒にニュースを眺めた…

「で、ここは、わたしに技術士官して貰いたい世界なの？

ニュースみた限り戦争もそれ程なさそうなんだけど」

「あ、その世界の説明がまだでしたね…

長くなりますが…」

俺は死亡フラグ満載のＭｕｖ－Ｌｕｖの世界について、
俺の知ってる限りを話した…

……約１時間後

「はぁ…そんな世界があったのね」

「はい、なのでテコ入れに自重はできないのですよ」

「けれど…話しから聞いた限りでは、
技術者冥利につきそうね」

「ははははは…」

「どちらにしろ選択権はないんでしょ？
向こうの世界でご期待通りの仕事をしてあげるわよ」

「よろしくお願いいたします」
深々と頭を下げ、感謝の意を表した。

「で、この後のお話なのですが…もう一回あなたの世界に渡り、
その後活躍してほしい世界にいきますので、
明日以降…３から４日程、虚数空間に家を用意しましたので、

おとなしくお待ちして下さい」

「わかったわ…けど食べ物とかはあるの？」

「明日行く前に、コンビニ弁当を買いますので、
持ち込んで冷蔵庫に入れておいて下さい。あと私物等はトランクに
入るサイズで、後ほどご案内する世界の部屋に…
の形ですかね」

「……とりあえずその虚数空間の部屋に案内してもらえる？
２０分後に戻して貰えれば、足りないものリスト出せるから」

「はい」でヒルダさんを部屋に置いた。

……２０分後……

彼女を引き出した。

「リストできました？」

「生活必需品があんまりないんだけど…」

「あ～今日ビダンさんの為に作ったばっかりなので…すんません。
明日行く前にもう一つ、手荷物にして揃えましょう」

「で、わたしの方は、洋服と、そうね時間つぶす…本かしらね…
TVは電波入らないみたいだから無用だったわ…」

「明日ですね」

「ええ…さぁこのあとは、大人の時間ね」

「…はい??」
(いきなり何?)

「幸いホテルみたいだし、あなた、若く見えるし…美味しそうだし」

「……とりあえず飯にいきましょう」
(ヤバイヤバイヨイツブサネバ…オレガヤバイ…
か、洗脳か……)

「チッ…そうね」

「あ、そうだ俺このままでは、外に出られませんので…」

「え？」

「俺は、この世界では、追っかけパニックを起こす人の姿なんですよ…」

「……その可愛らしさだからなのね…」

「なので、今あなたが会いたくはない人の、
外見を借りますが…ご了承して下さい…〝幻影〟」

「まぁ！！…どうなって…」
ペタペタと触ってきてる。

「これも異能力の一つです、
幻影を纏ってると思って下さい…
なので、顔の感触も違いますよね」

「ふふふ、皮肉なものね…」

「すんません、他人の幻影を纏える程、
レパートリーは少ないので…」

「しょうがないわねぇ……、

夕食食べにいきましょう、あなた♪
スッポン料理屋さんいきたいわぁ」
（やばい、やばい、絶対酔い潰してやる！、
俺が食われない為にも！！）

結果、酔い潰れさしてベッドにほうり込んで就寝。
なんとか貞操はまもったぞ…

二日目…

翌日、二日酔いしてるビダンさんを起こして、
シャワー等〈全裸で襲われかけるのはお約束〉
をすませて買い物へ…
必要な物
（生活必需品リストは正直助かった）
揃えて、虚数空間の家に送り込んだ。

お疲れの様子のカオル君。
（はぁはぁはぁ…あんなに原作ではエロかったのか？？、
ヒルダ・ビダンさん…
何回襲われかけたか……）
多分、若い燕みると中年女性はああなる人いるはいるよ……

（作者…ナレーションありがとう…次は何とか考えよう…）
また、誰か拉致るつもりなんだね…

（特に予定はないが優秀な人材で死亡はな）
はいはい、先すすめて…

「わかったよ”世界扉”」

作者のナレーションに反応しないでね……

＝＝　Ｚの世界　＝＝

（と、またアレキサンドリアかな?…ばれる前に）

「バルディエル」

状況把握中……

艦全体を掌握し、格納庫を覗いてみる…

（あ、マラサイバリュートシステム付いてる、

調整中みたいだな、時間はあってるか…よっし頂くか）

マラサイ同化…解除

（あとめぼしいのは…シャトル?ほう…頂き♪）

シャトル同化…解除

（こっからだとすると…、ジェリドのマラサイと同化して、

ＭＫ２と戦闘前に離脱、回収しまくって、ジャブローに単独降下か?:?）

バシュ

（おや、バリュートテストか、となると）

クィィーン

思った通りジェリドと思える人が乗った機体が、運ばれてくる。
（ストーリーからだとあの機体か…）

「各機バリュートの取り付け急げ！！」

（おっし、取り付いてまつか…）
艦掌握状態から格納庫に移動し、運搬中のクレーンから、マラサイに取り付く。
取り付いた後はコクピットのスクリーンとなり、出撃をいまかいまかと待っていた…

……三日目

（あっれぇぇ？一日過ごしちゃった…なんでだろう？？）

まだエゥーゴ艦隊を捕捉できてない為、出撃がまだなのである……

フィフィフィフィ
ブザーが鳴り響く。

「友軍より入電！！
エゥーゴ艦隊発見！！
ＭＳ隊出撃急げ！！」
途端に騒がしくなる。
（おほっおらワクワクしてきたぞ♪）

この部分はテレビでは流れなかった所だ、
の為カオルは興奮してた。

「エゥーゴＭＳ部隊は推測通り、ジャブローに降下予定と思われる。
各機、大気圏進入戦闘になる。
健闘を祈る！！」

各ＭＳパイロット達が、自分の愛機に向かって飛び出す。
無重力だからそのままコクピットハッチまでたどり着き、
コクピット内部に乗り込む。

「まわせー！！」ジュレネーター起動、
ハイザックのモノアイが光る。
準備できた機体から、順次カパタルトまで進んで射出されている。
勿論、機体武装を途中で掴んでいってる。

ジェリドが乗り込んできた。
（ジェリドぅ待ってたよぅぅ）

ピッ［生体認証確認］ピッ［正常スタートオペレーション］クィィーン
機体がスターターを通し、ジェネレーターが起動する。
［カスタムスタンバイ　マラサイ］

「こちらジェリド、出撃準備完了。
カタパルトの順番まだか？」
『2番手です…』
シューン

『順番きました、ご活躍を』

「ありがとう」
ガインガインガインガインカチャリ

「こちらジェリド、射出準備完了」

『コントロールどうぞ』

「ジェリド、いくぞ!!」シューァァン　パシュ

「編隊そろえよ」

『『『了解』』』

「ガンダムＭＫ２は俺の獲物だからな、
見つけたら報告しろ」

『『『了解』』』

『こちらオペレート、方位３　５　３　０　８　０　０にセットして下さい』

ピピピ
ジェリドがオートパイロットの方位を設定した。

『会敵予想時刻、４８０後、敵艦隊はＭＳ部隊発進済み』

「ちぃ、奇襲にはならんかったか」
トークスイッチは入ってない為、一人言みたいだ。

『敵艦隊、アーガマ、他サラミス改級他６です』

「情報より少ないな…もう撃沈したのか？」
『敵金色新型１』

「例のできそこないか…」
（百式だよ百式！）

『リックディアス、ネモ、ジム２多数です』

「ＭＫ２は？いるだろう」
（ありゃ…流れてないのか…）

トークスイッチを入れ
「オペレーター、こちらジェリド、

どっかの部隊が出てるのか？」

『交戦中です。…友軍機体情報入りました。ＩＦＦ設定送ります』

トークスイッチは切った様だ。

「メッサーラねぇ」

（シロッコタソか、確かこの部隊付く頃は離脱なんだよな…）

『当該が単機による奇襲により、敵艦を沈めた模様です』

「ほぅ…」

『隊長、そんな火力あるなら、欲しいですね』

トークスイッチｏｎ

「まぁな。だがこのＭＡ、隊報でも一切出てなかったじゃないか。特殊設計かもしれんぞ」

……

「見えた！各機オールウェポンフリー」

バラララララ

「ガンダムＭＫ２はでているか？」

『あせるなよ、場所が場所だ。重力に引かれるぞ』

「だからこそチャンスだっていったんだろ」
『それもそうだ』

「俺とカクリコンはＭＫ２探す！
各機突撃せよ！
ジャブローであおう！」

『『『了解！』』』

（さって回収作業に勤しみますか、
ジェリドさんありがとうね～）
離脱「”幻影”」

宇宙空間を纏い、高速で回収にむかった
（まずはエゥーゴ艦隊あった…爆沈あるなぁ…）
回収

（３隻か、ＭＳも結構つんでたな…うぉっと）

進路をそらし、自分が進んでた進路を、
ジム２がブースターを吹かしながら、通り過ぎてく。

（結構大破多いな…）

回収回収…

（あ、エマさんのリックディアス？片腕がないな…）

見ると、赤いリックディアスの右腕が無くなってる。

（うおっと…お、回収、回収）

流石にビームの直撃はまずい…

何にもない空間にＡＴフィールドが展開されるのである…

そりゃぁばれちゃうね…だからだ。

……そのうち…

大気圏内に入ったと思われる先頭から、

順次バリュートが開かれる。

バリュートからの弾幕

（そろそろか……）少し離れると、虚数空間から死体を出し、宇宙空間にまいた。

虚数空間の中の死体回収ロボットによる収集で、

死体置場から出してきたのだ…

（ご冥福をお祈りいたします…皆さんの機体、有効活用させて頂き

ます…）

大気圏をみると、
アーガマが大気圏摩擦熱をだしながら降下していた。
（エマさんの回収か…）

アーガマは最大戦速で、大気圏脱出し離脱し始めた。

（戦闘終了だな…俺も突入するか…）

単独生身で大気圏突入し始めた…

（フライングアーマーの回収はグフフライトタイプだっけ？
遭遇後なんだよな…急がなきゃ…あ、）
見ると、フライングアーマーの翼がマラサイのバリュートを引き裂いた。

瞬時に機体は摩擦熱で真っ赤になり、マラサイのコクピット内部では耐え切れない熱で…カクリコン死亡…
そして、機体は５０００度以上に及ぶ熱に耐え切れず、溶けだし…
推進材に引火し爆破。

何しろ最適突入角でなく、ほぼ９０度近くに及ぶ、
垂直突入である…

それを傍目に速度をます。

勿論、真っ赤赤だが傍目には見えない小さい、
何かが燃えてるように見えるだろう。
（チートばんざーい）

そろそろ青くなっても良いんだが……
無理です減速してね。
の状態で、雲を突き抜ける…
雲が衝撃波で穴がぽっかりあく…
（ヤバイ、暗躍が…）
急いで減速し始めて、背後を確認しようと、空中で振り向くも、まだどの機体も、
来てないのを確認した。
減速しきり、大気摩擦熱が、おさまりし始めると周囲の様子が…

一面緑緑緑である。

（美しい……）

別世界とはいえ、深い緑の中、アマゾン川が流れている…
その中ほどに滑走路が見える。あれにガルダ級が脱出準備を続けているのだろう……

（さってアウドムラ、スードリちゃーんまってねー）

メイン滑走路を目指す…

（あった…）

さらに減速し…「”幻影”」傍目にはスピードの早い蚊になった…
アウドムラの屋根に軟着地「バルディエル」同化…離脱

ウィーンウィーンウィーン
サイレンが鳴り響く。

（きたか…）
めぼしい機体を同化離脱しながらはしる。
ザクタンク
ガンタンク２
グフ飛行試験型

「第一小隊はエリア１へ急行してくれー」

「軍人以外は滑走路へ迎えー」肉眼でも見えた
対空ミサイルが打ち出される。

迎撃向かう飛行機群…

火線が火弾をあげている…

迎撃に向かった飛行機群は、かなり落とされるが、空中制動の効き
辛いＭＳも少なからずの被害をうけ、
爆散等になっている。

地上に落下したのを順次回収しはじめた…

（大量大量）

比較綺麗なジムカス確保
頭部だけが損傷して放棄されている…
また下半身損傷の機体もあった…

（お、あれか？）
百式がブースターふかしながら、川を走行中のグフ飛行試験型３機と交戦している。

その内一機にフライングアーマーが突進！

火をあげ川の中に、

「燃やすならクレー！！」

水没鎮火したのをほうり込む。
（ＴＶには写ってなし！！）

百式、リックディアス、ガンダムが揃った…

会話を聞きたかったが…
（あ、）
ブースターふかしながら滑走路へ…
（マテー！！）

とりあえず密林のなかの機体を片っ端から…拾いながら滑走路へすすむ。

ジャングル及び滑走路での戦闘音がしなくなった。
（…そろそろ中か）

ジャムキャノン
作業用ジム
アッグガイ
大破や中破で擱座中…

片っ端から幻影をかけて回収…
〔核による破砕の為、勿体ない精神でばれなければよしで、戦闘中にもかかわらず、回収作業〕

（お、）
ガンキャノン重装型擱座、もう一機発見。

更に奥へと…
でっかい爆発音が……
（ビームの相打ちか…
あ…マラサイぼかーん……
本編だとこれでラストか…
百式たん～）
爆破したマラサイに幻影かけて回収し、百式コピーをもとめて入口

の方へ…

（あ、いた…）「バルディエル」

（確かここから３５分のリミットか）

中でクワトロ大尉が会議してるの見えた

（急がねば…）

中での戦闘行為は終了しているようだ…

そりゃ…核による基地破壊…

戦闘意思がない地球連邦兵士を見かけた、

エゥーゴのＭＳが見逃す光景を何度も見かけた…

また、避難できるのか？を聞いて無理だと聞くと、保護＝捕虜にしているＭＳもいる。

俺は動いてないのを片っ端から…

（ビル資材も回収するか…）

ビルも幻影かけて片っ端から回収し始めた。

そのうち…奥に向かう百式が見えた…

（あ、そろそろ１０分だっけ？カミーユ達と合流して…だから……

ん？？人が…いる…？……

流石に核にのまれるからな…助けるか）

足がみえた所へ向かうと…

横たわった女性連邦兵…
赤十字マーク腕章＝看護兵みたいなのがいた…

幻影解除して、ペシペシたたく

「おい、起きろ！！」

「ん…は！！敵！」

「ちょっとまった…敵じゃねーよ、それよか、やばいんだろここ」

「！！時間は？……う、うそ……」

腕時計みて絶句している。

「た、助けて下さい！！奥にも二人が…」「は？奥？」

「こっちです」

奥に移動すると…ベッドに寝ている女性が二人…

「わかった、とりあえず外へ」

「はい」

どうやら病院施設だったようだ…

ベットをおしたした…カラカラカラ

「車あるのか？」

「車を回そうとしたら後ろから……」

（しょうがないな…出すか）

外にでて、回収した搦座コンテナトラックを、虚数空間からだす。

「え？あ、あなたどこから」

「説明はあととにかく積んでくれ」

「え、ええ」

後ろのコンテナにベットごといれて、急いで固定する。
コンテナを閉めて、目から光線で軽く溶接…

「は？…」

「あんたは前にのって」

「ええ…」

中にのったのを確認し、両サイド溶接。

「ちょっとなにを」

「説明あと、助かりたいんだろ？」

「は、はい」

「アルミサエル！！」
彼女を睡眠状態にし虚数空間にほうり込む…

（時間くった…そろそろ核か…流石に生き埋めは勘弁だな）

滑走路へ急いだ…

滑走路へつくと…
（あと３０秒ないな）

アウドムラ、スードリーが飛びだち、
アウドムラに内部からガンダムが、
飛んでる百式に向かって、手を伸ばしてる瞬間だった。

つかんだようだ。

ハイザックが２機滑走路上に着地、

ハイザックがお互いによった…
振動が…
（時間か…）
全力ＡＴフィールド！！

俺は踏ん張ったが、地面から空中に打ち上げられ…

（うぉぉーやばったぁ～爆風等考えてなかったぁぁぁ！）

……
カオル報告
一時的保護シェルターを作りました

ジムカスタム
ジムキャノン２
百式、
フライングアーマー
グフ飛行試験型
ネモ
マラサイ
カンタンク２
ガンキャノン重装型
ジムスナイパーカスタム
作業用ジム
ザクタンク
アッグガイ
シャトル
アウドムラ

搦座品多数
資材大量に確保

第２４話　Ｚ編２　”ジャブローの”ジャンク屋　投稿日２０１０１２２８　修

作者「ヒルダさん～」

ここは、虚数空間のシェルター内部

ヒルダ「あら、作者さんいらっしゃい～……美味しそうね…どうわたしと？」

作者「…ご遠慮しておきます…」

ヒルダ「あらそう？？」

作者「ヒルダさん自重して下さいよ…」

ヒルダ「い・や・よ♪」

作者「はぁ…Ｒ１８に今から移れと？？」

ヒルダ「あら、あたしとの場面は修正擬音入れれば、良いじゃない」

作者「はぁ…そんなにカオル君食いたいので??」

ヒルダ「そうねぇ、わたしの息子とさほど年も違わなそうだし、美味しそうじゃない?」

作者「ま、まさか、原作内でも、カミーユの学校の友人に…」

ヒルダ「うふふ♪野暮な事は聞かないの♪」

作者「昼下がりの団地妻の世界か…」

ヒルダ「あらぁ、それより過激かもよ♪」

作者「だぁぁ~下ネタにふらんでくれぃぃぃ」

ヒルダ「そっちから振ってきたのにぃ~」

作者よりコメントです…

この作品のヒルダさんは、当初登場する予定はありませんでした…
がカオルの自重なさで登場し、設定悩んだので、
ある実＜バキュ＞

……

あ、身近ではなく、リアルのある女優をモデルに考えてしまった事をお知らせします。

第２５話　Ｚ編３　”シャトル”からの廃棄物、有り難く頂きます。　投稿日２

はう…操作間違えて、消してしまいました…ｏｒｚ

書き直して見直し

ちょいあるもの追加

だいたいの流れはあってるの確認…

以上

第２５話　Ｚ編３　”シャトル”からの廃棄物、有り難く頂きます。　投稿日2

「かぁ～ぺっぺっぺっ…ひでー目にあったぁ…もう核は懲り懲りだ…」

全力ＡＴフィールドで抵抗したカオルだったが、
核の爆風で打ち上げられ、良いようにもち遊ばれたのである…
扇風機の前に風船を話した状態と一緒だ…

さっきまで緑がいっぱいだったジャングルの密林は…
熱風によって薙ぎ倒され、そして燃え、まさに灼熱地獄に陥っていた。
黒煙もかなりの量があがっている…

かなり飛ばされた為に、基地の位置もわからない状態にある。

そんな中放射能を帯びた死の灰が舞い降りる…

もう回りには生きているものはいないだろう…カオル以外は…

そうカオルは使徒そのものである故に……

死の世界を観察したカオルは、
早速死体埋葬作業に入る。
「パイル」で穴をあけ一体一体埋める。

ここいらは放射能汚染で１００年はもう入れないだろうが、本来彼

等はこの核で塵となるはずであった…

カオル独自の考えだが、死んだ人は死んだ場所近くで…
の考えからジャブローで埋葬する。

埋葬作業終了したので、
「皆さんの機体は有効活用させていただきます…
迷わず成仏して下さい。ご冥福をお祈り致します」
と瞑想した…

カオルは北へ向かう…核の被害は一概にはなんともいえない。

カオルは現代にいった際にガイガーカウンターを5個程仕入れていた。

３０ｋｍ地点
ガイガーカウンターをだした
カオルは作動させた
振り切れてこわれた
レーザーで消却処分。

６０ｋｍ地点
ガイガーカウンターをだした
カオルは作動させた
振り切れてこわれた
レーザーで消却処分。

１２０ｋｍ地点

（もう大丈夫だよな？）
ガイガーカウンターをだした
カオルは作動させた
振り切れてこわれた
レーザーで消却処分。

（……まさか……）
「バルディエル」
カオルの身体を観察してみる…

（あちゃ～…）

ガイガーカウンターが壊れた訳がわかった。
カオルは、放射能発信源になってしまったのだ。

核爆発の中心地にいたのである…

まぁ詳しくはチェルノブイリ事故辺りでもご参照して下さい。
中の清掃作業員の過酷さとか……

カオルは、自分の身体を改造しはじめた。
バルディエルの能力により、身体から放射能を抜き、浄化。
抜いた放射能は体内で新たな力の源に変換。

一回目のクリーニングは終了した。

ガイガーカウンターをだした
スイッチをいれた
針は振り切れたが壊れはしなかった。

（ん？）「バルディエル！！」また身体を調べてみた…
身体の一部ずつクリーニングしたので、汚染部分から転移したのである。

クリーニング二回目

ガイガーカウンター
カオルは作動させた
振り切れたが壊れなかった。

何処からとおもいきや…足跡からの反応が強かった…

２ｋｍ程離れ、
ガイガーカウンター
カオルは作動させた
先程よりかは反応は少ない。

クリーニング３回目

ガイガーカウンター
カオルは作動させた
先程よりかは反応薄い。

（しつこいなぁ…）

クリーニング４回目

ガイガーカウンター
カオルは作動させた
反応は先程と一緒だ。
（あ、この辺もなのか…もっと北へいくか…）

２５０ｋｍ地点
ガイガーカウンター
カオルは作動させた
わずかながら反応…

（どれかな？）
もういっこのをだす
ガイガーカウンター自体が汚染、俺も若干で、
レーザー消却処分、
ラストクリーニング

ガイガーカウンターを使ってみた。
反応は無い。

でしまった。

（ふぅ核はしつこいのぅ…あ、そうだ）

カオルはトラックをだし「アルミサエル」
運転席に座っていた女性看護兵の睡眠状態を解除した。

「ん……ん…は、ここは？」

レーザーで溶接を焼き切る。
「ああ、とりあえずジャブローの北２５０Ｋｍか、放射能の反応はないから安心しな」
で後ろに回りコンテナの溶接を焼き切りドアを開ける。
彼女は運転席からおりてきてコンテナの方に回ってきた。

「うん、大丈夫そうだね」

「あ、ありがとうございます」
深々と礼をしてきた。

「さって…と、君は何処行きたいの？俺の事は忘れて貰うから、希望の行き先あれば、送るよ…迷わなければね」

「あ、あの…」

「ん？？」

「あなた様について行きたいのですが……」

「は、はい？」
カオルは予想してない言葉に驚いてしまった…

「え、えっと……」

「わたし達3名です。助けると思って…」

「ちょいまち、この後ろの二人の意見は??」

「……自白剤で、精神が……」
「は??」

「…私達、スパイ容疑でティターンズに調べられてました…」
(つまりスパイの調査で自白剤打たれたのか…)

「ああ、なるほどね、うんじゃぁアルミサエル!!」

「え?なにを?」

「ちょっち静かにしててね~」

「は、はい…」

彼女らの精神にダイブした…

（あ～バイパスがズタボロになっている…
繋げ治してっと…うんこれで大丈夫。
色も元気な色をだしてるな…）

「ほいよ…治したよ」

「は？」「ん…」「アリ……」
なにを話してんだの表情の看護兵に、目をさました二人の女性兵士。

「マギー！！ミーリィ！！」看護兵が、二人に泣き叫びながら抱き着く。

（邪魔しちゃ野暮だな…）

彼女達の脇をよけ、外にでる…

草むらの上に寝転がる。

……

しばらくしてると彼女らがおりてきた。

「あの～」

「お、落ち着いたか？」

コクンと頷く彼女。

「で何処行きたいん？」

「あなた様に保護を…」

「だぁ…なんでよ、エゥーゴは？？」

「ティターンズに勝てる見込みないですし」
（勝てるのになぁ…）

「あのさぁ…第一わかると思うけど俺、人間でないよ？」
首をブンブン縦にふる看護兵、
後ろの二人はやっぱりの顔だ…

「それでもなん？」

「はい、あなた様は、あのジャブローに居ました。
あの時点でいるということは、民間人ではありません。
またあの時間から脱出できるって事は、どっかの勢力の特殊機関、
しかもあなた様はかなりの特殊能力を持ってると見受けました。
是非ともお願いします」
深々と下げる彼女たち…

「あ～…まぁ忘れて貰うからいいか、

俺は、この世界のもんでない、また異能力者でもある。
ようは別の世界で、力を集める為に、この世界にただ単にきてただけ…
で、たまたま君らが倒れてたから、気まぐれで助けただけなんだよ。
だ、か、ら、俺について来るっうのは別世界にいく事、それでもいいの？」

「はい…」

「だぁ～もう、そりゃ保護したいよ、ヒルダ・ビダンさんの」「「「先生!?」」」

「は？」

一斉に詰め寄って…
「先生は無事なんですか？」「先生にあわせて!!」「あわせて!!」

押し返しながら、
「だぁぁわかったわかった、あわせるあわせる」

泣き崩れる彼女達

虚数空間から、シェルターを出した。

「バルディエル」で扉をつけ、

コンコン「失礼しま～す」

とはいったら……

キャミソール一枚でくつろいでいるヒルダさんがいた。

「あらもう着いたの？早いのねぇ…じゃあ始めますか、いらっしゃい♪」

とベット方向へ…

「え、えっと……？」

「うんもう…女性に…」（やばいやばいＹＡＢＡＩ）

「ビダンさん！会いたいって人達が！！」

「会いたい？わたしに？」

「はい、なので…」

「残念ねぇ……いいわ」

羽織りながら答えた。

カオル君、襲われるのを期待してるよ……
（作者てめぇＲ１８ネタやりまくるぞ！！）
擬音修正入れまくるさ…さ、続き続き…
ヒルダさんは、そういった人だから、楽しみだねぇ♪
（作者！！……たく）

「おい、入って良いってさ」

入る彼女達……

「「「先生！！」」」
一斉に抱き着き泣き叫ぶ

「ビダンさんあの……」

「……え、ええ、彼女達、わたしの娘がわりであり、元部下なのよ…」
涙目で答えるヒルダ。

（こりゃちっとかかりそうかなぁ…）
で、
「バルディエル」まずは適当な部材を椅子にし、柔らかく材質変換させた。
それを3脚分追加。

台所チェック…うん食料は大丈夫そうだな…

タンクは…どっちも大丈夫っと。

「えっと、ヒルダさん」

わんわん抱き着かれた状態で答えてる。

「なに？」

「彼女ら、俺についてきたいっていってるので、説明よろしくお願いしても良いです？」

「ええ、わかったわ…」

「で、行きたくないってなら、記憶消して残る選択肢もあるので…」

「わたしには無いのにね」

「すんません」

「貸し1ね♪」

「俺の身体以外でなら」

「うんもぅ…わかったわ」

「よろしくお願いします」

でシェルター外にで「バルディエル」
扉を消し、虚数空間にいれこむ。

付近はもう暗くなっている…

（さて、野宿だな）
草むらの上に投げ出し寝る…

四日目

「ス、ス、スードリィ　スードリィのいえは♪」

即興の歌を歌いながらカリブ海を北上し、ケネディ空港を目指していた。

ブランの１３話のラストの方の言葉、
「エゥーゴの機体は捨てろ！！」を信じて飛んでいた。

つまり無傷の機体が滷獲できるはずだと思ったからである。

まぁあと期日までちょい余裕あるし～からでもあった…

（お、見えた…ありゃまだ二機あるぞ…シャトルも二機だ…
戦闘始まってないのか……）

まだティターンズの進行前だった…

（ん～あ、ドダイ改があるか…）

「”幻影”」
蚊になり、ドダイ改に取り付き、
「バルディエル」
同化、解除

（さってと…スードリに取り付いて休みますかぁ…）

「バルディエル」
で同化したままどろみに落ちる……

ピィピィピィピィ
サイレンが鳴り響く。

海上から光点が5　合計9機による襲撃だ…

え～カオルがまだ起きない為、作者によるナレーションのみでお伝えします。

つうかまだ起きんのか…

海上からのビームで貨物機に当たり、シャトル爆破、

この時点で、パイロットののったシャトルに当たれば、重要人物満載ので、
ティターンズ勝利になったかもしれない…

アウドムラから百式が迎撃の為に発進。

迎えにいった飛行機が爆破!!

アウドムラビームの飛び交う中緊急発進!!

スードリ見捨てられてる…

ガンダム、バルカンでのけ反らせ、ビルの上に落ちたハイザックを、ビームライフルで見事爆破!

ガンダムとアッシマーのタイマン。

百式はベースジャバーを追いかけとる。

リックディアスは、ベースジャバーにのったハイザックにちょっかいかけ、
プロペラントタンクをハイザックに向け投擲、
そこにビームバルカンを射撃し見事に爆破。
更に追い撃ちて、もう一機にビームバズーカーだろうか?を直撃させ、
ちょっかい出してきたベースジャバーをかわして、ビームを直撃!!
けど、落ちた方向が悪かった…シャトルに衝撃波がきてしまう…

次に百式とアッシマーとのタイマンに発生。

ガンダムはハイザックと…うち一機は足を滑らした為に仕留めた。
百式は目の前で変形しアッシマーに驚き…
油断してしまう、シャア!!いやクワトロか危ない!!

かわしてニュータイプ発動!!
なんとか直撃させるが、アッシマー逃げる。

ガンダムは、ハイザックのあとアッシマーとタイマンになるが、

その横から、リックディアスがちょっかいかけるも…
かわしアッシマーが背後から……

直撃ロベルト…爆破で死亡…

アッシマーとガンダムが力比べしてるすきにシャトル発進!!

それに追い縋るアッシマー、
ガンダムビームライフルを地上から援護するも雲の上……

ガンダム、百式の肩に乗り……
二段ブースターで、追い縋る!!

もう雲の上みえない……

百式は先に地上におり、ビームライフルを射撃!!

アッシマーMS形態に変形した瞬間!!

変形時の弱点部分にビームをあて、アッシマーたまらず離脱。
そこにアウドムラの援護で百式が先に乗り移り、ハイザックを土台にしたガンダムがなんとか乗り移る。

アッシマーとハイザックはケネディ空港を占拠…

「生存者を集めケネディポートを制圧しろ！！スードリに残ったMSを叩きだせ！！スードリを我がブラン隊の指揮下におく」

やっと、おきやがったよ……ねぼすけめ……

（あ、あれ？？シャトルない…アウドムラもない…寝過ごした？？）

ああそうさ…いつまで寝てるんだよ……

スードリは運用が間に合わず、見捨てられたが、
ジム2が3機、ネモが3機積まれていた…

しかし、アウドムラだけでも、ある意味十分な戦力であったのだ…

エゥーゴのMSがハイザックにより乱暴に外に出される…

アッシマーと、ベースジャバーが進入してくる。

（頂き♪）

一部同化、解除

（とりあえず、ジム2、ネモの行き先だよな）

艦外にで「”幻影”」

小さい蚊になると…

放棄先が、海中のようである。

6機とも海中に棄てられた…

見届けると、海中に戻り回収。武装はついてはいなかった…

（さてとこんなもんか…）

海中からそのままカリブ海を南下し途中て飛行にうつり、適当な島を探す…

島を見つけ、辺りに人が居ないのを確認するど、シェルターを出す。

「バルディエル」

壁に手をつけながら扉をつけると、中に入った。

中ではヒルダさんと3名が談笑して、かなり良い雰囲気だった…

気がついたようである。

「あらカオル君」

「ビダンさん、そろそろ俺の世界に行くので、身支度お願いします。

最初は副司令に紹介かな?と思いますので…」

「わかったわ…２０分程貰える?」

「了解です。で、彼女らは、結局??」

「「「先生とご一緒についてきます!」」」

「慕われてるんですね…」

「みたいねぇ」

「じゃあ、皆さん、最終確認です。ＢＥＴＡを潰しに自分の世界にきてくれますか?」
各々頷く。それを見届け、

「では、２０分後に自分の世界に転移します。
いつ引っ張りだされても良いように準備お願い致します」

とつたえ、外にで、扉を消し虚数空間にいれた。

カリブ海…海が綺麗である…

（どうせ渇くし泳いでみるかぁ…）

カオルは海に飛び込む…綺麗な海である…

しかし、何者かが、それをみていた…

何者かは、餌だと思うと、グングンと近寄ってきた…

ズンズンズンズンズン
ズンズンズンズンズン

海の綺麗さに、気づいてないカオル

ズンズンズンズンズン
ズンズンズンズンズン
ズンズンズンズンズン

何者かは大きな口を開け……一気に

噛み付いた！！

（ん！！？…危ない…人間だったら死んでたな……）

獰猛な性格のイタチザメであった。

（チィ……抜け出せねぇなぁ…しょうがない）
抵抗しても離してくれないのである…

（確か肉食えたんだっけ？なら…）

「パイル」
小さい槍を出すと、脳へ向かってひとつき！
抵抗がなくなった。

カオルは抜け出し、しっぽを掴み地上へ…
死亡を確認すると虚数空間にほうり込む。

「さてと”世界扉”」

……

カオル君報告

滷獲
ネモ３
ジム２，３

機体情報
ベースジャバー
ドダイ改
アッシマー

看護兵１名
兵士２名
が、ついてくるみたいです。

第２５話　Ｚ編３　”シャトル”からの廃棄物、有り難く頂きます。　投稿日２

作者「いやぁ～Ｚガンダム編第３話目無事におわったなぁ～お疲れさまぁ～」

カオル「ありがと、作者プレゼント」

作者「ん？なに？この石は……？」

カオル「ジャブローの」

作者「捨ててこい」

カオル「ちぇ～」

作者「ぶち壊すんでない！！」

カオル「わかったよぅ…」

作者「ところでお前、ヒルダさん襲うつもりらしいが、どうすんだ

？」

カオル「なんとか逃げまくる！！まぁ、白凌基地に戻ればなんとかなるだろ…
いくら何でも人前で…ではないと思うが…」

作者「いや、彼女そっちの方では横浜の魔女以上の設定にしておくから…」

カオル「いや、勘弁してくれ…まじで…」

作者「中年熟女のハーレム良いじゃん♪
今の現世では旬だよ～」

カオル「う……俺１７の設定じゃん……」

作者「あと誰をもってくるかなぁ～」

カオル「作者～勘弁してよ～」

その頃…

イッシー・オグ・タバタ「あたしらの出番まだ?後書きにも出さない作者ぬっころしていい?」

河田「あんたたちの方がましよ…わたしなんかイッシー、あんたに伝授した技位しか出てないのよ!!」

西坂「わたしは一回…まだましか…」

風間・宗像「0回……」

すんません…本編キャラ中々出せないです…
そこへ更にオリキャラ乱入、
良い味出さないと、出る前に…

みんな「作者ー!とっとこだせぇい!!」

はい…努力します…

第２６話　Ｚの世界より帰還　投稿日２０１０１２３０　修正１（前書き）

これよりＭｕｖ－Ｌｕｖの世界に戻ります～

あ、サメ……

第２６話　Ｚの世界より帰還　投稿日２０１０１２３０　修正１

２００１年６月３日夜
＝＝　副司令執務室　＝＝

世界扉が開き　カオルが降り立った

「ただいもーっす」

「あら期間内ね…何かあったの??」

「はい、優秀な開発技師の協力者を１名、
亡命希望の看護兵１名及び兵士２名、
つれてと、ついてきちゃいました」

「!!??つ、連れてきたぁぁぁ??」

「はい♪」

「はいじゃないわよ!!はいじゃ……同一人物が平行世界で、であったとき、
何が起こるかわからないのよ!!
１番可能性あるのは、当人接触によるの対消滅での人物崩壊、勿論時系列でもそうよ!!」

注釈｛自分は洋画タイムコップで、同一人物接触による液体化を、想像してます。｝

「あ～…すんません、次から気をつけます…
ですが、西暦でいうと２０４５年に宇宙世紀になったので、西暦２１３２年の世界になります。

同一人物はありえないですし、またＢＥＴＡの記録もありませんので、
可能性は限りなく低いと思います」

「なら…大丈夫でしょうね…
まぁそういった世界でならスカウト良いわよ…
優秀な衛士や開発技師は必要なものよ…」

（鋼鉄の咆哮は無理かな?、現実世界は１番やばそうだな…）

「わかりました。ではご紹介します」

ビダンさんを引っ張り出す。
「あら…ここ?」頷くカオル

「ご紹介します。ガンダムＭＫ２の装甲開発を手がけ、材料工学を専門としてる、ヒルダ・ビダンさんです」

「ご紹介をあずかりました、ヒルダ・ビダン。
地球連邦軍所属、階級は中尉ですわ。
ＢＥＴＡ等の説明はカオル君から伺ってます。
是非ともご協力をさせて下さい」

「国際連合軍、当横浜白凌基地副司令の香月夕呼ですわ。
天才物理学者です。
で…」
頷くカオル

「対ＢＥＴＡ純軍事力外での代替戦略……オルタネイティブ４計画の最高責任者ですわ」

「よろしくお願いしますね」

「では次に、亡命希望者３名をご紹介致します。
といっても…自分はあんまり詳しくありませんが、看護兵１名と兵士の２名です」

「あ、カオル君、看護兵とパイロットよ」

「……そのようです…」

「あら好都合ね♪」

3名を出す
「じゃあすみません、ビダンさん紹介の方を…」

「ええ…整列！！」
一気に揃う…さすが軍属…

「ご紹介します。向かって右側から、アリシア・クライツ伍長、
ミーリィテシァ・ビルワイズ軍曹、
マギー・J・ミリオン軍曹です」

アリシアが一歩前にで、敬礼、ビシッと決まり、下げる。
「地球連邦軍所属、アリシア・クライツ伍長です！
看護兵としてジャブロー基地に所属してました」

「彼女は看護兵ながら外科及び内科医師免許をもち、難手術の経験者です。
腕は保障しますわ」

「いえ、まだまだ腕は若輩の為、頑張って技術習得を目指していきます！！」アリシア下がって、

ミーリィティシアが一歩前、敬礼、決めたあと下げる。

「地球連邦軍所属、ミーリィテシァ・ビルワイズ軍曹であります！
ジャブロー基地第０９テスト中隊に所属してます！！」

「彼女は模擬戦でかなり優秀な成績を納め、わたしの部下としてテストパイロットを勤めてました。
こちらも腕は保障しますわ」
ミーリィテシァ一歩下がり

マギーが前に、敬礼決めたあと下げる
「地球連邦軍所属、マギー・Ｊ・ミリオン軍曹です！！
ミーリィテシァ軍曹と同じく、
ジャブロー基地第０９テスト中隊所属してます！！」

「彼女もミーリィと同様、模擬戦で優秀な成績でわたしの部下になりました。
パイロットを勤めたあとミーリィや、アリシア同様、ジャブロー基地所属に転属されましたわ。
以上で紹介を終わります」

「あなた達の世界って、士官でなくともパイロットとして？」

「自分がお答えします。パイロットは専門訓練をうけ、二等兵から始まります。
後に、上等兵として、現場に配属されます。
また、士官からの配属もありますが一部のエリートのみであります」
とマギーが答える。

注釈〔機動戦士ガンダム戦場の絆を、参考にしてます〕

「つまり軍曹だと叩きあげ…腕は保障できる…って事ね」

「はっ！！」

「でも、四名ねぇ…ビダンさんは、階級そのままで良いとして…衛士は、士官が条件だし……うん決めた」

「あなたたち３名は、とりあえず国連軍少尉で…ビダンさんは技術大尉で、
３名はカオル君の下について新設部隊としてね。
カオル君はＢ－０１の部隊長として統率よろしくね。
ところで国籍はあるの？」

「？地球連邦ですが…」

「あ～そうねぇ…人種は…？」

香港や、アメリカ、チリ、オーストラリア等があがってきた。
「香港は統一中華戦線になって、ＢＥＴＡ陥落してるからそのつもりで…台湾在住扱いでね。
あとは国自体はあるからそれでよろしくね」

内線ならしピアティフ中尉がきた。

部屋と、基地案内、後にＢ５５に行くようだ…

「カオル君は、残ってね…話があるから…じゃあピアティフよろしくね」

４名退出…

「ところであなた…これからもっと異世界人を受け入れや、つれてくるつもりなの？」

「ですね…その世界の運命で死が確定しているなら、問題ないと思いますので…

流石に活躍する運命の人は難しいかな？と……」

「はぁ…となると、わたし一人の権限内に、

正直おさまりきら無くなってるわ…救世主君、国際連合でぶちまけてみない？

異世界軍隊作らせてくれと」

「あ～いいっすね～」

「そこで承認えれば、いつどの世界からでも、影響がない限りつれてこれるわ。

…さっきはああいったけど、
衛士、科学者、また後方支援の人達、皆がみんな、正直人手が足らないのよ…
製造にしたってそう…整備の人達から精度が下がってきてると、ぼやきが出てるわ…」

「確かに…そうみたいですね…」

「正直、異世界の人達でも優秀な人、
いえそれに及ばなくても即戦力になる人達…歓迎したいのが本音ね…
ここのスタッフだってそう、ひたすら頭下げておべっか使って、
やっとこのレベルになった…感じなんですもの…
けど弛みきっているのが実情…
皮肉なものね…

…けど、研究をおろそかにはできないから、これ以上は無理なのよ…
前線ほど、どんどん優秀な人が欲しい、
人手が足らない、回してくれ！なのでね」

「ん～…そう考えるとガンダムの世界、すんごく人が死んでるから、
説得できれば優秀な人材確保できそうですからねぇ…」

「ああ、一年戦争で一週間で２８億人だったのよね？」

「はい、それ以外にも、民間人も多数死んだのが、まぁ通称一週間戦争除くと…

一年戦争のサイド5、Zのサイド1の30バンチ、0088のダブリン、0093のラサ…別世界に行くとまだありますし、軍人が大量的にしんだのは…今回のジャブローと、コズミック・イラのアラスカ基地自爆か…」

「な、なんか…流入がきたいできそうね……」

「ですね♪」

「けど、くれぐれも…」

「あ、同一人物となりえる場合に関しては気をつけます」

「あともう一度ジャブローに？」

「確か取り残された軍人の描写あったので…」

「その際にはパラドックスは起こさないよう、注意してね」

「了解です」

（今回が機体、資材だったからきいつけるか…）

「さて、成果報告はしてね…」

「はい、今回のトリップで人材４名の他、完動機体６機、また、多数の機体情報取得し、最大目標であったガルダの情報取得できました」

「Ｂ５５ハンガーだけで足りる？」

「足らないですね…作るとなると…」

「ん～そうねぇ…」

「拡張しても良いです？」

「は？」

「多分拡張できるので許可いただければ…」

「まぁ良いわ、機密性とかまもってもらえるなら…」

「了解です。電気等はこっちでやりますのでご安心を」

「あったりまえじゃない」

「後は、今の所は整理前ですので結果がでたら報告します。何しろ片っ端から……ビル等含めて…」

「……どの位ビルを？……一つの町できちゃう？」

「多分都市レベル…」

「……報告楽しみにしてるわね…、わたしからはまだ撃震は戻ってないのと」

「明日かあさって？」

「みたいよ、でこの間の”お兄ちゃん”の件なんだけど」

「なんかその響き、元の世界の美幸を思いだすんすよねぇ…」

「あら、元の世界に家族が？」

「はい。まぁ俺は死んじまったから、今接点もってるのが、、妹の美幸なんすよ…
俺の世界に転移したら、何故か何回も俺の部屋で、ばれちまいまして…」

「続き」

「まぁ神から、元の世界では無理と説明受けてて、
2次創作系の話したら理解してくれたんです」

「2次創作？」

「はい。まぁ主にストーリーが納得いかない、俺だったらこう介入する！とかで、
元の設定を利用等して新たな物語を作る…事です。
まさか俺自身がそうなるとは思ってませんでしたけどね～」

「けど、本当にあるものよ…それが今のあなただし」

「ええ、で世界扉で物語やゲームの世界でも、
平行世界として成り立つがわかりましたし♪」

「まぁ、話は戻すわよ、6月9日ね6日後」

「6日後かぁ…ちょい中途半端か…しょうがないか…
あ、途中やる事なかったら、
メタルマックス3の世界か、
鋼鉄の咆哮、またはメデューシンの世界に行くかもなので、
よろしくお願いします」

「その3つの世界は？」

「まず、メタルマックスは、暴走した超高性能AIノアによる、大破壊された後の人間VS自律制御機械の世界ですね～
自律制御機械のハッキングで仲間にしようかなぁと…」

「なにを仲間にするのか楽しみね…」

「次が鋼鉄の咆哮2の世界ですが話上は、西暦1939年　ウィル

キア王国の反乱で、全世界に進行した帝国の野望をとめるストーリーです。

物理的に無理な、弾薬を無限に供給する、無限弾薬装填装置をゲットできればなぁ…と」

「そんな馬鹿なのあるわけが…」

「それの確かめる為にトリップするんじゃないっすか…」

「それもそうねぇ…もってきたら、みせてね。物理的に無理なのが興味あるから…」

「わかりました。最後のメデューシンの世界ですが、これは他の世界よりかは…おとなしい世界ですね。
まぁ人間同士で争っていて確か２０年かな…
で、強救戦艦が４隻つくられて活躍している世界です」

「なによ、そのきょうきゅう戦艦ってのは…」

「強襲救急飛行戦艦の略だったかな?
漢字は強襲は強いの方です、救急は救急車の…
サイズはガルダには及びませんが、
全長１８０m、高さ５５m、翼幅２１５m、不整着飛翔距離１５０

０m、物があっても薙ぎ倒す為、着地場所を選びません。
内部には６２０名の乗組員、医療スタッフをようし、手術室をそなえ、医療関係を充実させた、
いわば前線病院の活躍する世界です」

「……名称と、後半が納得いかないわねぇ…」

「まぁそういった世界もあるって事で…」

「まぁわかったわ……
ところで気になってたのだけど、あなた何処でそういった世界わかったの？」

「俺の世界での物語やゲーム等ですね～、多分その世界を認識してれば、
俺の世界扉は開いて、行けるんじゃないんですか？
条件はわからないですけどね…」

「なるほどねぇ…帝都図書館から本借りてきてみるから、それで実験してみない？」

「まぁ付き合いますよ。」

「で、あなたの世界の、別世界の資料…ガンダムとかのね、は、もってこれるの？」

「ん～売り物あれば…」

「金の延べ棒…１２．５ｋｇのラージバー」

（〇｀；）

「そ、相場たしか１ｇ３０００円かな？すんません、詳しくないですが…釣りが沢山でます」

「用意するから買ってきなさい」

「はい……あ、」

「あ？？なにかわすれてるの？」

「そろそろ天然物卸したいんすが…」

「ああ、そうね……冷蔵庫や冷凍庫さほどないわよ…」

「ん…じゃあ作ります？」

「そうね…まかせるわ」

「了解」

「わたしは以上ね、あんたは？」

「あ、最後にお土産が…」

「なに？」

「イタチザメ釣って来ました」

「サメ？……ああ…」

「食えたんすよね？」

「そうよ…京塚さんに納品してあげて、あ、ヒレ肉欲しいって伝えておいてね」

「うぃーす」

＝＝　ＰＸ　＝＝

「おば♪ちゃーん」

「あいよー、カオル君なんだい？」

「イタチザメ納品にきました～」

「あれまぁ♪天然物かい」

「ええ、仕留めたばっかりで」

「どれどれ、どこにあるんだい？」

辺り見回し……（広さが欲しいなぁ）

「ちょい、そこの君、ブルーシート、４４のを3枚とってきて貰える？」

で、カオルは机と椅子のかしいーの作業し、貰ってきたブルーシートを手伝って貰いしき、
なんだなんだ？で見に来る暇人ちらほら…

頷くカオル、虚数空間から仕留めたイタチザメをいきなり出す。

「ギャーーー」

丁度屈み込み腰してた兵士から悲鳴があがる…

そりゃそうだ…大きな口をあけた状態で目の前にドンだもん…

パニックになりました……

ヤッバーと思いながらもカオル君、

しっかり言付けは忘れずに……

＝＝　Ｂ５５ハンガー　＝＝

彼女らに基本戦略を説明し始めた。

基本的に兵器の面でビーム兵装は使用不可。

不満がってたが、軍備が整わない内にやると対抗手段が出るという

と、なっとくした。

今は資材、技術を集め軍備を整える等も話した。

彼女らの機体希望きいたら…ガンダムＭＫ－２だとよ…

作れるけどね。どうするか……
確かに一応はＺＺラストまで活躍はしてたもんなぁ……

……

カオル報告

今日は色々あって作業しませんでした…

サメ肉は美味かったです…　ウマウマ

第２６話　Ｚの世界より帰還　投稿日２０１０１２３０　修正１（後書き）

作者「うまうまフカヒレうまうま」

カオル「あ、作者～俺のを食べてん？」

作者「ああ、うまいぞ～ご馳走さん」

カオル「ところで作者、リアルだと何処で食べたん？」

作者「おま、ここでリアルのをだすんか……１８切符で気仙沼目的でいった時だよ」

カオル「１８切符すきだね～」

作者「ああ、安旅行で一人のんびり酒のみながらな～ま、それで酒太ゴホンゴホン」

カオル「で、いついったん？」

作者「スタンプ集めの前の春だから、一昨年の春か…」

カオル「春っていえばなんか１８切符春でないって噂が俺がＭｕｖ－Ｌｕｖ行く前にあったけど……」

作者「お前Ｍｕｖ－Ｌｕｖ知らない設定だろ」

カオル「後書きだけだよ、あ号もきてるじゃん」

作者「まぁいいか、ん～どうなんだろうなぁ？今、調べたら…冬が１０日間短くなってるな……」

カオル「じゃあ春は…」

作者「廃止に持ち込むのかなぁ…ｏｒｚ」

カオル「変わりの切符だと…？」

作者「ん～大概が会社線内の設定だから使いづらいんだよな…大阪名古屋方面には使えん…
それに西日本は土日切符のような、設定が見当たらない…」

カオル「寂しくなるねぇ…」

作者「だな、まぁ連続した日、使う必要がないのが１８切符の売りだったし…」

カオル「ところで、これ本編関係ある？」

作者「ないな」

何処で脱線したんだぁぁぁ…

第27話　帰還後の日常の日々　投稿日20101231

2001年6月4日朝

やることがいっぱいだった……

まずは、チューリップが完成した事…副司令に見せろっては言われてたんだよなぁ…

まだ、滷獲を整理をしてない…自重忘れたから、ハンガー内にもだしてない…

あと今までの事も引き続きか…さてと……副司令を呼んでもらうか…

＝＝　B55ハンガー　＝＝

「きたわよ、できたのね？」

副司令と霞ちゃんが来た。

「はい、こちらです」

赤いチューリップを見せた。

「これがワームホール装置なのね？」

「……大きなチューリップ…です」

「ですね。ナデシコの世界では戦艦を通す為にもっとでっかいので

すが、
こいつはそこまでのでっかくする必要なかったので、この大きさにしました。
霞ちゃんこれでも小さい方だよ」

直径２０m、戦術機より若干でかいサイズに設定して作られている。
それに操縦ユニットプラス相転移エンジン、反重力推進、核パルスロケット、対空砲火等を組み合わせた。
もちろんステルス機能付きで地球のレーダー網には引っ掛からない設計だ。

「もっとでっかく作れるのね…で見せてくれるのね？転移を」

「はい。霞ちゃん面白い光景みれるからね～♪」

木星行く予定のチューリップに１１号操縦の作業挺が近寄った。

今回の作業挺は、チューリップ周辺の保守、簡易輸送等を行う目的の露出船であり、

ＤＦ発生装置、人工重力、反重力推進、核融合炉、熱核ロケットで、コバッタを１００機または、資材を積めるようなプラント製品だ。

操縦席は、コバッタやヤドカリが使用する前提で、省略している。

チューリップ〔以下チ１２と命名〕の花びらが開く。

それを受け、もう一つ離れたところにおいてある、チューリップ〔以下チ11と命名〕も花びらをひらく。

中には、ジャンプフィールドの、エネルギー場が形成されている。

「あれがジャンプフィールドのエネルギー領域ですね」

DFを形成した作業挺が、チ12に完全に侵入すると…

「消えたです……」

チ11から作業挺がではじめて、そして完全に出た。

20m程離れると、二つのチューリップとも花びらを、閉じはじめた。

「この世界での始めての超空間移動をみてるのね……」

「さて、このチューリップ2機を打ち上げますんで…Y1号、Y2号、頼むよ～」

ヤドカリの製造番号順につけたY番号シリーズ、それぞれ了解の意を返してくれた。

「ヤドカリさんみたいです……」

「あ、彼等外見通り、ヤドカリっていうんさ。
優秀なパイロットだよ～」

彼等なら無事に目的の木星周回軌道、アステロイドベルト帯まで行くであろう。

「ちょっと……打ち上げって今？？」

「はい、そうっすね～演習場からで良いでしょう」
コバッタ達が、大きな布を、打ち上げ予定のチューリップに被せた。

「……もういいわ、好きにして……」

なっとくいかない表情の副司令、俺、霞、布を被せたチューリップ2機とともに、
メインシャフト経由で中央集積所まで上る。
「空中を…浮かんでる…です」

「ああ、重力をきって動くんだよ。
それを反重力推進ってよんでるんだ～」

「重力を…きるですか…とんで見たい…です」

（個人用の反重力推進のバックパック作ろうかな？）

Aゲートから、演習場まで出て、大きい布は空に昇って行く…
途中で布は溶けるので、後はつくのを待つだけだ…

「さて一仕事終了だな～」

「一仕事じゃないわよ！！こんの異世界人！！」
副司令はまだなっとくしてないようだった……

「わたしは…楽しかった…です」

霞ちゃんよかったね♪

ここで霞ちゃんと副司令はわかれた。

昼

＝＝　ＰＸ　＝＝

なにかが騒がしい……
おや？マギーとミーリィとイッシー？？何だろう…？？
「おい、どうしたんだ？」

イ「カオル！！なに？この人達は、カオルはわたしの」

マ「あたし達はそれの操縦専門にやってんだよ！！」

カ「あ～……何を口喧嘩してるのかゆっくりな…」

……どうやら、イッシーがわたしの地位が！！と危機感覚えて突っ掛かってたらしい……
何でまた……

カ「あ～、イッシー、こいつらは、確かにあっちの世界のテストパイロットであり、優秀なモビルスーツ乗りの評価だ。
けどな、イッシー、俺はお前を守りたい為に色々帆走してるんだぞ。
だからそんなに突っ掛かるんじゃないぞ」

イ「う〜〜〜」

カ「じゃあ、また甘いもの買ってきてやるから…」

イ「うん♪」

マ「少佐わたしにも……」

カ「わかったわかった。ま、今回の事はな…」

まぁどうやら落ち着いたかな?

＝＝　B55　＝＝

俺は悩んでいた……

拡張しないと資材がおけなくなってくる事が判明したからだ…
とりあえずハンガーを空ける為、解体し、核融合炉のストック化に
以下の実機が決まった。
マゼラアタック
陸戦型ジム
陸戦用ジム
デザートザク
グフ
リックドム
ゴック
ズゴック
ジムコマンド宇宙用
量産型ガンタンク

これにより9基分の核融合炉確保

で、とりあえず実機の検証で、
マラサイ
ハイザック

ガンダムｍｋ２
百式
リックディアス
ガンタンク２
グフ飛行試験型
の作成、
ネモ
ジム２
を出し整備を、
ジムカス
ジムキャ２
ガンキャ重装型
の再生、
ウェーブライダー
の修繕を命じた。

拡張工事には高周波ブレード装備によるドリルタンクを作成。
（土台マゼラアタック、主機アンテナ入力で略、反重力推進搭載）

とりあえず四隅から１００ｍ掘って、そこから四隅を繋ぐ、四方に支柱を入れ、あとはＭＳで掘削する形をとる。
でた土砂はプラントで浄化して梱包し虚数空間におくつもりだ…

残骸は片っ端から鉄に整え、変換前の状態へと整理してゆく。
整理し、すぐに変換しないのは虚数空間にいれこみ、
また残骸を出す作業をひたすら繰り返した。

またコバッタがとうとう3桁いき、１０２号になった♪
ヤドカリは２０号まで増えている。

６月４日は、そんなこんなで昼からはひたすら拡張、機体整備等だけで終わってしまった…。
１００ｍ部分は拡張終了、２００ｍ部分とりあえず邪魔にならないように拡張工事中。
核融合炉、新規に１６基分確保。

２００１年６月５日
朝

Ｂ５５にてひたすら拡張工事の繰り返し…
残骸整理の繰り返し…

３００ｍ終了、４００ｍの中間の所で俺待ちだった模様で、出た浄化土を虚数空間に取り込む。

また途中の拡張部分の補強は…流石にコバッタ達、ぬかりない…
壁面、天井はルナチタニウム合金を贅沢に使っている…

これなら、あ、コロニー落としにもたえられないよな…ん？

［マスター、耐えられるようにしました］

はぁ？何したんだお前ら…

［比重は重くなり、ＭＳにも使えないですが、ナデシコ世界技術を使いました。これにより現有地球技術では壊せません］

か……
まぁ作業進めるか…

拡張した部分から真横に広げるように指示した。

これにより１ｋｍ×１ｋｍ×４５ｍの、巨大地下施設の確保の目処になる。

区間区切って、今度は反対側に、戦艦用整備ブロックを作ろうと考えた。

高さをあげ、１ｋｍ×１ｋｍ×１５０ｍで、アーガマクラス戦艦４隻分の整備、発進スペース｛まだ作らないけど｝を確保予定になる…もちろん命じた…

自重を忘れた基地拡張工事は続く…

とりあえず俺が立ち会ってなくとも、拡張工事が続けられるようになり、

一日に一回吸収作業する形、そのうち間隔が空くようにはなるだろう。

ハンガースペースに戻ると、機体が１１機程足らない…

聞くと、演習場だとか…　Ａ－０１とＢ－０１だな…

多分Ｂ－０１は、百式とガンダムｍｋ２、

Ａ－０１は、ネモ、ジム２、マラサイ、ハイザック、グフ飛行試験型、リックディアス、ドム、陸戦強襲型ガンタンク、６１式持って行ったらしい。

で、Ａ－０１ｖｓＢ－０１か…

勝負は見えたな…でまた残骸整理作業に入る。
あと、どの位残骸整理するのだろう??

夜に、副司令に呼び出しくらった…

その前に模擬戦判定…　意外にもＡ－０１辛勝
陸戦強襲型ガンタンクとドムのペアが頑張ったと…
武装条件一緒にしてるなら…ある意味そうか…と納得。

＝＝　副司令室　＝＝

コンコン「失礼しま～す」

シュン

「来たわね」
夕呼さんは待ちかねていた様だ。

「えっと?何か?」
恐る恐る聞く…

「まずあなたの撃震よ……」

「ま、まさか死人が??」

「死人は出てないわ…」

「ほっよかった…」
(流石に死人でるとなぁ…)

「ただ怪我人続出で、厄介な人までもね…」

「はい?」

「で、そんな機体操縦できるのか?で来て欲しいとの事なの…」

「あ、あちゃ~やばいなぁ…」
頭をかきながら…

「え?」

「厳密には異能力で同化してたので…操縦したのではないんすよ…」

「ああ、前説明うけたあれね」

「ん~操縦できるもう一機体作れなら、それでA-01仕様で持っ

て行きますが…」

「別の機体だと納得しない人が、怪我しちゃったから…却下だと思うわ」

「…因みに怪我した人はどなたです？」

「沢山いるけど、その中でも、斑鳩大将や、紅蓮大将が、怪我しちゃったのがね…」

「大将がねぇ……そこまで行くの、なんで回りが止めないんだか…」

「ここも支援して貰っている以上、邪険にできないのよ…
あなたに関する事ぶちまけてもいいから…」

「了解です。先方はいつと？」

「できるだけ早く、じゃないと生体組織弄るぞ！！ですって…」

「あ～自棄になってるみたいですね…わかりました、
明日朝方にでも行きます」

「よろしくね……」

カオル報告…

拡張工事
前方８００ｍ×１００ｍ×５０ｍ
横２００×１００×５０ｍ
戦艦スペース　上方向に縦穴掘削中

残骸整理により核融合炉１４基分

合計２７基分確保

ＭＳ　陸戦強襲型ガンタンク１０機完成済み
新規生産　実機検証以外なし

合計確保核融合炉４７
２基重力波アンテナ出力増設用に使用

保有戦力　実機検証機、提供予定機以外

陸戦強襲型ガンタンク１２
ホバートラック１

保有機材
コバッタ１２３号
ヤドカリ　１０号

チューリップ２セット作業挺１

ドリルタンク２０両

作業用ジム重力波アンテナ仕様１０機

エステバリス２機

プラント１基

第２７話　帰還後の日常の日々　投稿日２０１０１２３１（後書き）

作者「あなほりあなほり～」

カオル「それどっかのサブタイトルに？」

作者「かもね、ところでカオル、横浜白凌基地で工事してるけど…
何処までひろげるん？」

カオル「作者お前の考えだろうが」

作者「まぁさすがに虚数空間から、ホイホイじゃ居ない時どうすんの？だからなぁ…
奇襲にはもってこいだけど…」

カオル「ああ、佐渡島のか…」

作者「たださ、そうすると、居ない時は、ハンガー内にストックしてあるの終わったら、
製造できないじゃん？」

カオル「うん…」

作者「そうなると、資材置場やらが必要になるわけだ…、
まぁこの話の浮かんだのはね」

カオル「けどグリッドか……」

作者「まぁよくある作成ゲームから引っ張って…
無理ないだろ？」

カオル「かもなぁ、あ、作者、土どうすんの？」

作者「…まぁ秘密だ、それ以外の利用方法は…佐渡島後じゃないかな？植生再生に栄養豊富な浄化土を！って」

カオル「ビルは？」

作者「まぁ設定上はばらして、コンクリート前状態なのかな…
中身は引っ越ししてあんまりないし…」

カオル「そんなとこか？」

作者「ところでヒルダさんどうすんの？」

カオル「ちょいやめてよ、彼女の話は…」

作者「いや、今回本編に出てないからさ…」

カオル「頼むゲスト扱いにしてくれ！！」

作者「いんや駄目ヒルダさん～出番ですよ～」

カオル「ちょ…作者その前で後書き閉めろ！！」

ヒルダさんダッシュしてカオルに飛び掛かり、捕まる！！

カオル「ビ、ビダンさん！！落ち着いて！！」

ヒルダ「さぁ～作者のお許しが出たので、そこのベッドに行きましょう～」

カオル「ギャーーー」

～～～

注　本編ではまだ貞操を守ってます。まだね……

しかし、大晦日投稿予定なのに、この後書きで良いんだろうか？？

……うん後悔はしない…

第２８話　帝都へ……　投稿日２０１１０１０１　明けまして、おめでとうございます

２００１年６月６日
＝＝　ＰＸ　＝＝

朝、飯食ってゆっくり作業して　１１時頃着けばよいかなぁ～と思っていると……

「国連軍、渚カオル少佐でよろしいですか？」

「あ、そうですけど、失礼ですが…？」

「は！！日本帝国斯衛軍所属神代　巽少尉であります！！本日帝都までの道程ご同行させていただきます！！」

「はい？」
（聞いてないなぁ…飛んでくのにまいったなぁ…）

「紅蓮大将閣下からの同行命令です。
香月副司令からも乗り物は少佐が用意してくださる、との事です」

「あ、そうなのか…じゃあ…うんじゃあ、１０００にゲート正面でね」

「??帝都に戦術機で行くのでありますか!?」「あ～、そんな野暮ったい事はしないよ…もっと良いものさ♪じゃ、少し作業あるから正面ゲートで忘れずにね」手をひらひらさせながら別れた。

B55ハンガーにおり　また土回収、残骸整理し、ころあいの時間に正面ゲートにでた。

「少佐!お出かけですか?」正面ゲートのMPが話しかけてくる。

「ん、帝都までね～、斯衛の人見なかった?」

「後ろから来る方ですか?」振り替えってみると、神代少尉がちかよってきた。

「少佐お待たせしました…何で帝都まで?」

「ん…ちょいと失礼しますよ」といきなりお姫様だっこ。(感触いいなぁ♪)

「な、なにを!?!?」

いきなりの行動に顔を真っ赤に…カオルおめえ…

「しっかり捕まって下さいね…シャムシェル！！」
そう叫ぶと空中に飛び出した、唖然とするＭＰ。

「なぁ…俺ら夢みてる？？」

「さぁ…博士直属なんだろ…あの人…なら当たり前じゃない？」
ＭＰ頑張れ！！

さて飛んだエロカオルの上では…

「でぇぇぇぇ～～～！！」

うん神代少尉叫んでますね……

「あんまり騒がないで下さいね～～、落としちゃうから」

「でぇぇぇぇ～～～」
どうやら体が硬直して、それで声を叫んでいるようだ…

落ちないのは好ましくない…
というか神代退場はいやだ……

叫んでる１０分もすると、帝都が見えた…

エロカオルは速度をおとすと、軟着陸する…

「よっと、さ、着きましたよ」
叫び声あげて疲れた神代を下ろす。
まだ固まってる…

「アルミサエル！！」
精神を平静状態に戻した。

「あ、あの…」

「ああ、あとで全部説明するから、お楽しみに～～」

「は、はぁ……」

「ほら案内よろしく、あと５０分だろ、早く早く」

「は、わかりま……した…」

神代を先導させ帝都の帝都城まで案内させた…

カオル君は、圧倒されてた…
日本の城の建築文化を極めると…こんな様になるのかって…

何しろ姫路城なんか目じゃない…

美しい…

まさにその一言…

始めてみる人よ、

絶対帝都城を見るのをオススメする…

すんません、それしか説明できません…
作者の説明不足で申し訳ないです。

「あ～カオル少佐??」

「少佐!!」

「……どうしよう……」

つねっても駄目、叩いても駄目、殴ったら…見えない壁で、こっちが痛い……

ゆさぶったら、勢いそのまま倒れた…
一瞬しまったぁぁで神代は青ざめたが…
カオル君が再起動しないとなると…焦った…

時間がない…側に様子を見てた人達に頼んで、謁見の間まで即席担架で運んでもらった…

まさかこんな形で陛下の前に…切腹かと覚悟している神代だった…

……

２０分後、謁見の間では、戸惑いの気配がしている。

居並ぶ重鎮や高官たちも、再起動してないカオル君を見、最初は何故殺した！と神代を責めたが、

医師により、生きているが精神で何かのショック受けて意識がないのでは？
から１０分…飽きの出ている人も出始めた…

そんな時である殿下が動き始めた…

「殿下お止め下さい！！」「殿下なにを？？」

「うふふ♪こういった時はきまってますわ、美女の接吻で勇者は生

き返りますの」

「「「殿下！！」」」「やめて～」「俺の嫁が！！」「ハーレムが！」

後半聞き捨てならないなぁ…

殿下は屈み込み、居並ぶ高官や重鎮の目の前で…

しかし殿下はっちゃけ過ぎてますね…

あ、面白い設定がカオル君にあったんだ…

口づけを…当人は軽いフレンチキスですまそうとしてたが…

そこにカオル君の設定で……

無意識のカオル君の口から殿下の口内に舌が侵入

「！？！？」

驚きの表情をあげる殿下…

エロカオルの舌は殿下の舌を搦め捕り…あ、＜バキュン＞＜バキュン＞

…擬音修正いれないと駄目だ…

殿下はキスで逝ってしまい、エロカオルの上に倒れた…

「「「「殿下！！」」」」

「よ、よい……」

再起動する殿下…口からは糸をエロカオルの口へと、ひいている。

駆け寄る侍従…

居並ぶ高官の中には立てなくなり座るものや、

興奮し、よし愛人〔妻〕と…と決意する者もいた程だ

「無意識の内にとは……恐ろしい方ですわ…」

それを聞き、大将と思える人物が、

「よし、殿方はみつかったな、後は子をなすべきだな」

と作戦をねっていた…

そんな事しらずカオルはやっと再起動し、この世界での１ｓｔキスを殿下に奪われた事知らず、回りを見渡し不思議に思っていた…

隣からの視線もなんか痛かった…

殿下は座席に戻るところだった…

（え～～と…なに??なにをしたんだ??俺は……）

隣の神代に、

「すまん状況を…」

「今、謁見の間で、煌武院殿下の御前です」

と小声で……

カオル君片膝、片拳を地面につけ、
「大変失礼致しました。自分が国連軍、横浜白陵基地所属、渚カオル少佐、皆様がもとめておりました、魔改造撃震のパイロットです」

ザワザワザワザワ
「だからいった…」「魔改造…」「魔女めが」
一通り見渡し落ち着きそうなのでまたしゃべりだす。
「最初にご説明いたします。自分はこの世界の理を外れた、異世界人、及び異能力者です」
ドヨメキ
「ふざけんな!!」居並ぶ高官から…そんな声があがる。

それを消す様に、
「ふざけてはありません!!異能力をお店しましょう!!”幻影”!!」副司令の外観を纏う
またもやドヨメキ
「なな、魔女に?」

解除して、
「シャムシェル!!」
空中に浮かぶ。

先程よりかはどよめきが少ない。
「空中に……」

解除して着地し、
「武器をお見せするの失礼しますパイル！！」
両腕を光の槍に変化させた。

どよめきが先程より小さい。
「光、光の…」

解除し、
「そして、自分がこの世界に提供できる力を探しに、異世界への扉を繋ぐ力…”世界扉”」

世界扉を開く。
ザワザワザワザワ
「なんと」「そういった事か…」「むぅ…」

先程から黙って聞いてた正面に鎮座している殿下から、
「その繋がっている先は何処です？」

「はい、今は安全な自分の元の世界に繋げてます」

「覗いてみても？？」
「殿下！！」「またか……」

頑張れ誰か。

「しばらく解除しませんので、くぐられるなら同行致します」

「わかりましたわ。覗かせて下さい」

「殿下！！」

「皆のもの！！このわたしが試したいと言うのです。否か？？」

「ならばせめて、同行を…おい、神代！」

「はっ！！」

力を維持したままでカオル君、神代、殿下の順でくぐる。

カオル君の部屋だ。

「自分の部屋です。窓の外見れば別世界とわかりますよ」

駆け寄る二人。

窓の外には建設中のスカイタワーが見える。

「丁度正面に見えるのが、スカイタワー、現在建設中のテレビ発信塔になります。

では、他の者の心配がありますので、戻りましょう」

「今度個々に来てみても？」

「時系列が近いので、パラドックスの心配もありますが…同行の限りは大丈夫かと思います。
いずれまた」

「約束ですよ」
と指をカオルの口元に…カオル君少し赤く頷く

そのまま殿下、神代、妄想カオルの順で戻ってくる

「殿下ご無事で？？」

「よい、この者の力、面白いものだぞ」
そのまま殿下は、席に戻りすわる。

「して、そなたは、この世界になにを求めてきたのだ？」

「最初はこの世界にくる予定はありませんでした。
しかし、この世界にふれ、Ａ－０１の彼女らにふれ、基地、特に子供思いの教官の思いにふれ、
この世界から全ＢＥＴＡ駆逐という希望を提供いたします」ザワザワザワザワ

「しかしながら、今は、まだ自分自信の力が足りません。
今の力は異世界からの流入に頼ってます。こちらにお貸した撃震、
あれは自分自身の異能力でのみしか、制御できません。

……たった一機だけです……

そこで、提供する予定の核融合炉、これは燃料が木星型にしか存在
してません。
その入手の目処が立ち次第、
この世界から、ＢＥＴＡを駆逐する為の進軍をお約束致します」

「その言葉、まことか？」

「はい」

「して、そなた、我が国に何か求める事は何かあるか？」

「別世界とはいえ、自分も日本国民でした。
ですので、求める事は、
子をなし、富める国造りを、

その脅威となるＢＥＴＡを我々が撃破し、
また、できる限り殲滅の為の力を貸しましょう」

「その言葉、ありがたく思うぞ…
我が国の為に力を貸して下され…」

「はい、言葉違わず力をお貸しいたします」

で、謁見終了後、開発室ハンガーへ
撃震の操縦方法をみせて欲しいとの大将からの要望によりだ。

「では、この撃震について、説明します。
これはエヴァの世界における最終戦闘まで、
ただ3機しか稼動しなかった決戦兵器がモデルになっていて、
改造を施した為中身はまったく別物になってるものと思って下さい。
この世界のものは、外見と、コクピットのみです」

「その決戦兵器が生体組織駆動なのですか?」

「はい、その通りです。
本来ならコクピットも向こうの技術で…と行きたかったのですが、
まぁできませんでした。
の為自分が操縦する際も過大なGの為、操縦できませんので取り付
いて同化します」

「「「同化??」」」

「この様にです…バルディエル！！」
同化した。

機体の口を作り「なので、ある意味、機体の方に関しては装甲材ぐらいしか、
参照にはならないため、武器を貸したと思って下さい」

どよめき…解除おりたつ。

「ですので皆さんには、別の機体貸してくれるなら、
この世界用に使用できる様にチューンを致しますので、
それを研究材料として下さい」
「やった魔改造」「かつる」［だんなさん万歳］

帝国から　撃震、陽炎、武御雷を借りるようになりました…
撃震はあんまり入手に困らないのと言われた…あったかなぁ？

夜に基地に戻りとりあえず作業して就寝。

カオル報告　変更点

拡張工事
グリッドＡ枠とし、前方Ａ１０地点到達
グリッド１枠とし、現在Ｈ１地点
Ｂ２から、Ｂ１０及びＪ１０方面へ掘削開始、共にＢ４Ｄ２地点
Ｂ２格納庫１００機分として供与開始

Ａ１からＡ１０まで残骸品置場＋通路に決定
ＭＳ分放出、ビル放出率３０％

戦艦スペース　縦穴１５０ｍ地点到達
ＭＳ作業用に縦穴拡大終了
重力波アンテナ出力基増設
縦穴基準に前方及び横方向掘削中

残骸整理により核融合炉２１基分

合計確保核融合炉６５基
１基重力波アンテナ増設に提供

保有機材
コバッタ１３４号
ヤドカリ　１５号

作業用ジム重力波アンテナ仕様１５機
作業用反重力多目的トラック２０両

プラントＡ１０地点増設

第２８話　帝都へ……　投稿日２０１１０１０１　明けまして、おめでとうございます

作者「新年あけましておめでとうございます～」

一同「おめでとうございます～～～」

作者「さて、正月番組恒例ながら、その前に作成予約投稿はしているのはおいといて」

一同「……」

作者「正月企画として、夢を叶えてあげましょう～」

ヒルダ「はいはいはい」

作者「はい、ヒルダさん」

ヒルダ「カオル君と本編でエッ＜バキュン＞」

作者「伏せ字はいるのはすんません…努力はしますが…」

イッシー「はいはい」

作者「イッシー」

イッシー「もっとでたい！！」

一同「うんうん」

イッシー「博士ばっかりだけでてずっこいよぅ」

作者「……すまんね…俺の妄想力のたらなさだ……」

○○○○○［はいよろちいでちか？］

作者「おう、本編未登場の、後書きで話題になった○○○○○」

○○○○○［ぼくの、おはなちは？］

作者「初っ端はかけてるんだが、途中でとまってる…こっちで、
一回間違って消してしまった投稿前のがあってなぁ…
お前の部分は良いんだが別サイドからのが進まないんだよ…すまんな」

○○○○○［しょぼーん］

作者「なるだけ早くかくから勘弁してな」

○○○○○［はいでち］

作者「あとほかには？」

夕陽「はい」

作者「殿下どうぞ」

夕陽「夢じゃないんですが、わたくしにあそこまでさせて、
そのあとの展開がないの、おかしくないですか？」

作者「あ～すみません、殿下…止める人の存在がいなかったので、
一気に修正だらけになりそうだったので、
そこは、無しにしました」

夕陽「は？」

作者「プライベートルーム作戦」

夕陽「さ、作者～～～……み、皆のものであえぃ！不届きものであるぞ切り捨てぃ！！」

作者「え……殿下、作風がちが……ギャーーー」

作者チーン

その後新年会不参加の作者であった……

すんません、夕陽殿下うまくできてるか心配です…
なにしろハッチャケエロにしか想像できない……

第２９話　引き続き拡張中のひとこま…　投稿日２０１１０１０２

２００１年６月７日朝
＝＝　Ｂ５５ハンガー＝＝＝＝

工事状況朝の時点で　、
Ａ１からＪ１までのグリッドが完成したので、溜め込んだ資材を吐き出し、
Ｂ１からＪ１までを資材置場とした。
１００ｍ×１０００ｍ×４５ｍ…抜けないよね？地盤沈下ないよね？

［ナデシコ技術使ってるので大丈夫！！］

信用しました…　がまだ溜め込んでるんだよなぁ…
Ｂ２からのは、Ｂ６Ｆ２まできたから、Ｃ３からやはり外側両方向へ開始。

ＭＳ分のから最終的には８３基分の核融合炉が確保できる模様。

鋼材に比べて…やはり比重は少ない…

９月まではちょくちょくガンダム世界に行くかな…と思う。

ガンダム原作では、

大気圏近辺の戦いなら地球の重力に引かれ、
回収の暇もないから棄てられる運命の機体が殆ど…

あとは大きな戦いの後なんかはしばらくたってから回収すればウハウハ。

ただ機体情報は、同行しなければならないと思っていた。

さてと少し落ち着いたので状況整理に…

輸送面は計画上大丈夫、
補給面は予定通り…

あとは??あとは??

［マスター、警戒網と、歩兵達じゃない?］横からみた１１号が、正面にまわってきた…

「うおう、びっくらした」

［マスターの情報読んだけど、無人の早期警戒網必要かもよ］

「ああ、そうか、確か母船級か…」

地中の大深度をグリグリ穴ほって侵攻してくる奴だ。
直径１８０ｍ…
ハイブの元にもなる事がある嫌な奴だ…

低深度はホバートラックが優秀だが、さすがに高深度は難しい…

「なんかいいのはあるか？」

［マスター、こういったのどう？］

パソコンの画面に表示させてくれた。

半永久使い棄ての監視システム。

地中に向かいドリルで穴をほって地下１０００ｍに到達監視をする。

燃料は、初期は蓄電にて、後、光ファイバーによる太陽光発電、

光ファイバー切断されたら地上に向かい、出たところで回収を待つ。

通信は光ファイバーを通して地上に発信。

深度探知はこれでマントル層までできるらしい。

頒布範囲は半径２００ｋｍ、
つまり１００でまけば、二つの反応から何処を通ってると詳しくわかるわけだ…

低コスト、かつ無人、かつ優秀…申し分無し。

「いいんじゃないの？」

［じゃあ作るね～］

「であと歩兵か…」

［こっちには一応機械化歩兵はあるんだけど、全員が全員着用じゃないんだよ］

「ん～～～」

つまりだ、生身で対戦しなければならない集団がやっぱりいると…

「あ、」

［なに？マスター］

「ここと世界感にてるので多分いけるかなぁ…」

［どこ？］

「ガンパレード・マーチ」

［どんな世界？］

「幻獣と戦って、生存競争している世界さ…」

［へぇぇ］

「まぁもっとも、あの世界も、設定が色々あるしなぁ…
マーチから、榊ガンパレの流れが、好きなんだよ」

［で、その歩兵強化になるのって？］

「ウォードレス」

［どんなの？］

「人工筋肉、燃料電池で動き、強化プラスチックで纏った、肉体強化装甲」

［プラスチックか…あんまり強そうでないけど…］

「そんなかでも烈火は重装甲で、ゴブリンリーダーのトマホークはきかない、
キメラの生体レーザーもきかん、ミノや、コブリンも倒す、
まぁそれ以上の大型種にはだったがな…」

［なんか強そうだね］

「ただやっぱり機動力のなさなんだよな…はっきりいって盾」

［うーん…］

「まぁまぁ、この世界での特質的なのは、
全歩兵がこういったウォードレスを着用している事」

［え？って事は…］

「ああ、生身で戦う奴は居なかった」

全員が全員必ず着用し戦う…つまりそんだけ生産性も高い、
かつ優秀なのである。

「でも、全員が烈火だと後方浸透に対抗できない、
で、色々な少し弱めなウォードレスで対抗してると、
ミノなどが蹴散らしにくる…っうわけだ

で、ミノに対抗できるのは烈火や重ウォードレスだけだが、足が遅い…なので車両の出番だ」

モコスや、士魂号Ｌまた９０式等だ

「だが車両の天敵、スキュラ」
空飛ぶ要塞…

「それに対抗したのが、稼働率の低さで苦労したのだが、人型戦車士魂号…
こいつはブラックボックスに人間の脳３、４人分が使われている」

［生きてるままで？］

「ああ、施設に送られた人間を解体し、副操縦系に使われるのさ…
タンパク燃料が使われるのは、その為だ」

［グロ…］

「まぁ、その後も色々でるが、栄光……じゃなく、
光輝号が、ロボット系で、
栄光号が、巨人族のクローンを作り脳をくり抜いて、装甲をくっつけたものなんだよ」

［…それの燃料も？］

「タンパク燃料だとさ…
まぁ話また広がりまくったが、その世界のウォードレスなら、
助けになるんじゃない？って事だ…
多分行くとしたら榊ガンパレの世界か、オーケストラ辺りかな？」

［その違いは？］

「片方は、九州陥落も、再度攻め入った時に、
幻獣側同盟者が現れ、九州は渡すも、敵対ではなくなった。
でが、やっぱり日本は執拗に襲われ、ジベリアで同盟者を作りなんとか戦争を終結させる。

オケは、九州は護りきった後、色々なとこから侵攻してきてるな。
多分…榊ガンパレの方が、戦力面では優秀？？」

［ところで、駆動方式は？］

［大体のが人工筋肉だそうだ］

［人工筋肉？］

「ああ、芝村一族が１９７０年代に開発したそうだ、ちなみに燃料と人工筋肉は、食えるそうだ」

［？？？］

「プリンにできるらしいな…」

［成る程ね、問題はいつ位に行くかだよね…］

「だな…正直、サイズ的に、機械化歩兵でも難しいサイズでも可、なのはうれしい」

［メタルマックスの前に入れる？］

「うん…だな…メタルマックス短縮で、
帰ってきた辺りで、国連ぶちまけが理想か…」

［じゃあ決まり？］

「ああ、そうするわ」

しかし、ここまで交わしてふともっと最強があったな…
と思ったのはないしょ。

［イエスマイロード］
ｓｉｄｅ～カオル～

さてと、あ、宿題が届いてたんだと気がつく…

武御雷と陽炎と撃震か…
要求が撃震が今すぐ生産に困らないの？
陽炎は特になし、
武御雷は特にはか…

…ただ整備費用や製造費用が武御雷はめっちゃ高いらしい…

フム…

陽炎から着手…

Ａ－０１仕様をコピー

主機…核融合炉
駆動…フィールドモーターに変更
ＯＳ…ｏｒｎ〜つまりカオル製〜
ｃｐｕ…ｏｒｃ〜カオル製〜
コクピット部…エステのＧキャンセラー追加
外装…ルナチタニウム合金

ここまでと後は武装か…
高周波ブレード
Ｍ-１２０Ａ　ザクマシンガン
高周波ブレード式のレックブレードを、
下脚部の外側内側正面に…
外側内側ともに収納式

完成♪〜融合炉在庫１減った〜

さてと…注意点はっと…
整備等は俺のところで、
９月までは核融合炉の為増産不可、で送りだすか…

次に武御雷か…ん？

ＯＳ、ＣＰＵとりあえずいじって、
装甲主機強化すればいいんじゃね？

整備費用か…フムＯＳ　ｃｐｕだけ弄って後回し…

先に撃震か…要求通りだと…

ＣＰＵと、ＯＳと…ぐ…あと武装しか弄れん…
装甲は最低限弄りたいが……
ビダンさんに、相談しにいくか…

エステの装甲は、
ＤＦ頼みだからなぁ…

８５０ｋｇなのはすごいが……
だって６ｍ級ロボットがだよ？

あ、ＣＰＵユニットできないか？で、できるらしい…流石プラント。
ｏｓインストセット付きで、ＭＯで更新可能だってさ。

なんかできてたらうれしいなぁ…

ｓｉｄｅ～カオル～ｅｎｄ

＝＝　研究棟ビダン執務室　＝＝

コンコン「ビダンさん～」

「あ、カオル君？…一分まってね…」
（何故に？？）

「お待たせいいわよ～」

シュン

「しつれい……」
回れ右！！ドタン
顔面ぶつけた。
ドアはロックされている…

執務室なのにピンク色の照明、奥には何故かWベッドがある……

（ナゼ、ナゼダァァ！！）

説明しよう、ヒルダさんの来てそうそうの、部屋改造部分は、
本棚の下の部分がスライドし、隠れてた高性能反発マットが、蓋のように被さって、Wベッドに早変わり、
照明は、スイッチで切替られる事である。

きて丸四日たたない内に改造を、施したのである。

そして、彼女の極めつけの特技は、早着替えである…

研究者にとって、時間は命!!

メイクも２０秒で済ませる早業を、習得している……

そう……彼女はランジェリー姿だったのだ!!

「あらこっちにいらっしゃい…お仕事なんでしょ??」

ガチャガチャ

カオルは必死に開けようとしている…

「そんな格好でお仕事ですか!!」

ガチャガチャ

ドアを力任せに開けようとしている。

「あら、仕事着よん」

ガチャガチャ

引き戸ドアを引っ張ったり押したりしている。

「何が仕事着ですか!!」

ガチャガチャ

横に力付くが、ドアは開かない。

「あら、装甲材の話でしょん？」

ガチャ…

一回開けようとしたが、少し動きとまった。

「現用戦術機に使用できる、新型装甲材できたわよん」

カオル、後ろを振り返る…

「それは何処に……？」

「まとめたのは、ここよん」

ヒルダさんは、胸のランジェリーと、素肌の間を指す…

ＭＯがそこから見える。

ガチャガチャ

回れ右でひっしに開けようとしている。

ガチャガチャ

カオルひっしの形相。

「とにかく出して下さい！！」

「あら、あたしは動かないわ、一切ね」
ガチャガチャ
一回振り返るも、ひっしに開けようとしている。

「嘘ダぁぁぁ」

ドンドンガチャ
カオル…叩いたあと開こうとしている。

「あら、お仕事の時は嘘つかないわ」

カチャ
カオル動きとまる…

「ホントに？」

振り返りながら…

「ほんとよ」

「絶対？？」

「絶対よん」

……

（素肌さわったら…絶対襲われる…素肌さわったら襲われる）

「絶対動かないで下さいね！！」

「わかったわ。動かないわ」

恐る恐る、ヒルダさんに近づくカオル…

一歩一歩慎重に…

（素肌さわったら襲われる、素肌さわったら襲われる、素肌さわったら襲われる、素肌さわったら襲われる）

そーっとそーっと手を伸ばし

手が届かす、もう一歩前へ……

カチ

瞬間ヒルダさんニヤリッと笑み、カオルのつま先から音……

瞬間天井からアームが出てきて、カオルホールド！！

「な、な、何を！！！」

「んふふふ～かかったわねぇぇ♪」
「ビダンさん！！」

「確かにわ・た・し・は、一切動いてないわ」

「そんな事よりこれを！！」

「あら…物を渡すのに動けないのなら、
こちらから渡すしかないわねぇ」

机の上のボタンをポチリ…

クウィィィ
アームがベッドの方に動く。
（ぎゃうがうＹａｂａｉ！！ｈａ　ｓｏｕｄａ）
「バルディエル！！」

アームに同化…できない。

「！！な、なんで！！」

「あらあら…あまいわねぇ、

わたしの愛のコーティングをしてるのよ♪」

「ば、馬鹿なぁぁぁ！！」

アームがベットに押さえつけにかかった。

「んふふふ…じゃあ体で、わ・た・し・て・あ・げ・る」

押さえこまれてるカオル。

「ビダンさん！ビダンさん！ビダンさん！！」

（食われる食われる食われる食われる食われる食われる）

「んふふふ…久しぶりだから…美味しく、いただきますわ」

ヒルダさんの手がベルトにかかり、

カチャリ

ベルトの前ホック部分が外された

顔が青ざめていく、カオル…

対してヒルダさんは…
しとめたした獲物を頂きますと、
一口目を食べようとしているトラ。
まさにそんな光景であった……

その時!!
ズガーン!!

鍵がかかっていたドアがひしゃげ、内側に飛んできた!!
ドアは床に倒れる。

ドアがあった場所の、廊下部分には…

フシュルルーフシュルルーと鼻息荒い…

石橋がたっていた。

ズガッズガッ

メキョメキョ
彼女はなかに入ると無言でアームを力付くで、外す。
ヒルダは予想だにしてない事態にフリーズ。
（た、助かったのか？）
がカオルの意識あるのはそこまでだった……

石橋はカオルを、おもいっきり殴って気絶させると、フン！！
と鼻息荒く、
足を掴んで引きずっていった…

あとに残されるヒルダさん…
「ドアの強度考えてなかったわ…もっと…いやガンダリウム合金で…」

そっちですか！！

カオルは、というと……
まず殴って覚醒させ、正座でＯＨＡＮＡＳＨＩさせられました…

というか、ナゼ、オレガＯＨＡＮＡＳＨＩナノダ…

……

カオル報告…

正座中につき、できません。

第２９話　引き続き拡張中のひとこま…　投稿日２０１１０１０２（後書き）

作者「あと少しだったのに……」

あ号「……新年そうそう……」

作者「？書いてるのまだ年末だぞ」

あ号「てなおし…してるの…新年だろ…」

作者「まぁ後書きも…新年だよなぁ…」

あ号「……ところで…作者よ…ヒルダは…どうするのだ？」

作者「……正直、初回プロットに入ってない人物だから、出たとこ任せ…というか、彼女次第」

あ号「モデル人物いるのか？」

作者「いたらヤバいじゃん…あ……」

あ号「な…いるのか？」

作者「……ノーコメント」

あ号「きになる…教えろ」

作者「あ号、後書きにださないよ？」

あ号「な、なにおう？作者…わが触手で、潰してやる！！」

作者「ち、ちょっとまて……はやまるな……ギャーー」

作者　チーン

ヒルダさんは、リアルでないのですが、どっかのがモデルになってたような…

というか、絶対そうするよ…この感じだと…

第３０話　ただ今カオル君は…　投稿日２０１１０１０３

２００１年６月８日朝

ただ今カオルは拍子抜けてとまっていた…

そういえば昨日ＭＯ奪ってなかったな…

で、襲われてたまるか！！と、

機械化歩兵で非殺生武装した１個小隊を借りてきて、

向かったのである。

しかし、

「あら、そこにおいてるのに…カオル君？」

まともだったのである…

「カオル君～？」

手をフリフリ目の前で…

「うん、もう……」

困っている様子のヒルダさん…

耳元に口をよせ…
「カオル君…動かないとくっちゃうわよ」

瞬間再起動！！

「あ、あの！！」

「うふふっ♪……あ、ＭＯね」

「あ、はい…わかりました…ありがとうございます」

礼をしながら退出するカオル…

キィ

椅子をならす、ヒルダさん…

「流石にこれじゃあねぇ……」

ポチリ

クウィィィン

アームがおりてくるも、ひしゃげてる。
またドアもハズレて壊れたままだ…

なおってたらまた襲う気だったんですか！！

「あら、当たり前じゃない。カオル君は美味しそうだしぃ♪」

ヒルダさん、ナレーション反応しないで！！

「いいじゃない～、ねぇ、あなたどう？？」

え？俺？……Ｒ１８ネタになりますが…

「冗談よ♪」

……さいですかｏｒｚ…

あ～次いきます。

＝＝　副司令執務室　＝＝

副司令に呼び出し食らっていた…

「で?、この、機械化歩兵部隊の件はどういった事なの?
要人警護の為…で急に連れ出して」

「あ、はい。俺が食われない為の警護をお願いしました」

「あなたが?誰に?」

「ビダンさんにです」

「……とりあえず、やり過ぎね。機械化歩兵の警護の為の貸出禁止」

「ええっ??」

「少なくとも、あなた死なないから、それでいいじゃない」

「ち、ちょっと待ってくださいよ!!」

「はいはい。実力でなんとかしなさいね」

「…実力で…ですか…」

「少なくともこういった色恋沙汰に、他人を借りるのは、無し、以上」

「…はい」

「あ、こんな時にだけど、金塊午後用意できるから、資料お願いね。」

「わかりました」

「で、この件の始末書も忘れずに…」

「了解です」

シュン

「流石に歩兵はやり過ぎたかなぁ……」

うん俺も歩兵は…と思う。

「強化装甲だけじゃ操れないし…」

おい…

「Ｔ－８５０か…」

ヒルダさん殺さないよな??

「けど、彼らのセンサーどうかわすか…」

頼むから殺さないでくれよ…ヒルダさんはもっと活躍するんだからね…

あ、自重します…

＝＝　Ｂ５５ハンガー　＝＝

（さてと、ＭＯ見ますか…）

コンピューターに入れ内容を確認しようとファイルを……

（？何故に、説明ファイルの他に必ずクリックする事ってファイルは…）

……判断なやんだが、クリックする。

ぴょこ

セクシーな手の指サイズの下着姿のヒルダさん画面内に登場…

せいだいにずっこける、カオル君。

（あ、あの人はぁぁ…）

セクシーヒルダさんは、ファイルを早く開けとせかしている。

椅子に座りなおし、クリックするカオル君。

まぁ…セクシーヒルダさんは、文ではわからなそうなところを、絵で書いたり、仕種で説明したりと、大忙しなのである。

結構いい味をだしている。

説明しおわったので、次のファイル内容を渡せば良いらしい…

までひと通り案内したら、セクシーヒルダさん、ブラジャーをとりはじめたので、無言で画面ｏｆｆ。

１１号に命令して、プラントに、試作品を作って貰う事にした…

昨日騒動でできなかった部分を再開。

Ｂ６からＢ１０、Ｆ２からＪ２Ｃ３からＣ５Ｅ３まで完成
Ｄ４から両方向へ…

Ｂ３、４を整備ハンガー
Ｂ５から１０まで格納庫

戦艦ブロックの方は、１ｋｍ×１ｋｍの部分はくり抜いたから、
上から削ってる状態、
現在３０ｍ地点
ビルを６０％まで吐き出せた。

核融合炉８３基分で確定、

陸戦強襲型ガンタンク４８機増産するようにする。
ホバートラックルナチタニウム製を４機増産

コバッタ１５６号まで、
ヤドカリ２０号まで

とりあえず以上

＝＝　移動中　＝＝

試作品ができるまでに、始末書を書きにカオルの執務室へ…

が…

「だぁぁぁ～」

煮詰まっていた…

カオルは、書類作成が下手くそなのだ…

多分1番効果的な罰であろう…

「クソッ！」

カオルは立ち上がり、廊下にでるとＰＸに向かった。

気分転換に飯？なのかな？

ＰＸにつくと、見知った顔がいた…

まりもちゃんである。

「あ、まりもさん」

「カオルさん、珍しいですね」

いつもなら出前を頼んでＢ５５ハンガー直結の、待機室で飯を済ます事が多い…
まぁ地下深くで作業してると、地上にでるのが億劫だからだ…

「？浮かない顔してますね…どうしたんですか？」

「ああ、まぁ始末書を…書いてたんですが…躓いて…」

「あら、大変そうですね…何があったのです？」

「ええ、まぁ要人警護、まぁ俺ですが、
機械化歩兵小隊駆り出したのが…っす」

「なる程ねぇ……」

手を顎にし、考え中のまりもちゃん。

「あ、でしたら午後の教練までの間でしたら、お付き合い致しますよ」

渡りに手とばかり、
「本当ですか？是非ご教授をお願いします！！」

「わかりました。では、早く昼食をすませましょう」

早めに食事を済ませ、カオル執務室へ…

＝＝　カオル執務室　＝＝

「あのカオルさん…どこの士官学校卒業で？」
とりあえずって事で、見せた始末書みてのいの一番の発言だった

「あ～士官学校出てませんが…」

「え？訓練校です？」

「いや、違います」
（そういやぁ…）

うんまりもちゃんは知らないネタであった。

「あ～そういえば、俺が民間人で、
異世界人って知りませんでしたよね？」

「え？」

「副司令から聞いてなかったです？」

「夕呼から？…ええ……異世界人って？」

「まぁことは違うＢＥＴＡのいない世界の出身です。夜お暇あります？」

「……あ、はい」

「ではＢ５５ハンガーに来て下さい。今はこっちの方を仕上げないと、
怒られちゃうので、手伝ってくれたお礼に教えますから♪」

「……わかりました」
顔を切替、真面目に指導する…かなり苦労し…

「すみません…時間ギリギリまで、では夜お待ちしてます」

「ええ」

シュン

と、とぶように午後の教練にいく、まりもちゃん。

「まりもさんいなかったら…やばかったなぁ……」

と始末書をもち、副司令執務室へ…

＝＝　副司令執務室　＝＝

コンコン「副司令いますか～」

「入っていいわよ」

シュン

「始末書持ってきました」

「あら、早いわね」

と始末書を渡す。

「これあなた一人で？」

「すみません、まりもさんに…」

「そうだと思ったわ」
すまなそうな顔のカオル

「まぁともかくとして、金塊ね…こっちにいらっしゃい」

シュン

部屋の外に出ていく副司令、その後をついてゆく。

「あ、そうそう、国連総会17日に決まったわ。あなたを、オルタネイティブ4の成果の一部として、紹介するから、よろしくね」

「了解です」

本来であれば00ユニットが最大の成果として、紹介されるはずだったが、
オルタネイティブ4の目標は、諜報員の育成によるBETA情報の取得、
この段階での報告もありだった。
かつ、カオル本人の異世界からの即戦力の勧誘、
また独自軍団の作成…

それにより、国連でぶちまける形で、
オルタネイティブ5を牽制し、
異世界の力による、軍団の設立の承認を、えようとしているのだった。

けど、カオルは更に思惑があったのだった……
オルタネイティブ５の完全なるぶっつぶし……

さてさて、うまくいくことやら??

そうこう、しているうちに機械化歩兵が、ドアの警備している、会議室前についた。
「異常ありません!!」
と夕呼さんに報告する歩兵。

中に入りＭＰが４名詰めている。
「開けて」
ＭＰ頷きアタッシュケースを開ける。
中には、金の延べ棒１本が入っていた…

「純金のラージバーよ、…１２．５ｋｇ個人に対しての、活動資金としたら破格だから、そのつもりでね」

「わかりました」

「副司令、カオル少佐サインを」

「え～あんたがしてよ…」

「いえ…副司令こればっかりは……」

「いいじゃない、減るもんじゃないし～」
しかし、ＭＰも４０００万円相当金塊の警護してたからひっしである。

「副司令お願い致します！！」
かれこれ5分程やり取りをし、
とうとう土下座までして、やっと副司令のサインを貰った…

ＭＰ涙目で退出。

金塊アタッシュケースを大切もの置場に…

「しかし、あんたのそれ…ふざけてるわよねぇ、どの位入るの？」

「さぁ？、第一俺自身は、入れないのでわかりませんから…
コロニー6個位入るんじゃないですか？
俺は任意の位置の物を取り出すだけですし…」

「ふ～ん…入ってみたいわねぇ…」

「入って動きまわると、俺が認知できない状態になるので、取り出せませんけど？」

「それってつまり…」

「はい。手探りで探せられなかったら、死んでも放置されて…」

「やめとくわ」

「賢明です」

「じゃあ明日忘れないようにね、後１７日も」

「こっちに来るんですよね？」

「ええ、１４時よ」

「了解です。では」

＝＝　Ｂ５５ハンガー　＝＝

Ｂ－０１は、放置してるから、勝手に機体持ち出して、訓練してた

らしい…
（持ち出したのドムと、ハイゴックか…）

メンテナンス費用フリー万歳

確認している内にまりもちゃんがハンガー待機室にきた…

（あ～資格がとかだったな…）

シュン

「おまちどうさま」

「カオルさん、説明お願いします」

「自分は、ＢＥＴＡのいない世界からきた異能力者です」

「ＢＥＴＡのいない世界？異能力者？」

「まずは、この力、パイル」
両腕を光の槍に…まりもちゃんほうけてる…でもどし、

「で、ＢＥＴＡのいない世界です、”世界扉”」

「く、空間？」

「少し覗いてみます？」

「え、ええ…」

「じゃあこちらに」
カオル君、まりもちゃんの手をとり、アテンドで、くぐる。

＝＝　現実世界　＝＝
「こ、ここは…」

「俺のもといた世界の俺の部屋です…窓の外を見れば、違いがわかりますよ」

手を離れ、窓によるまりもちゃん。
まりもちゃんの知っている日本と大分違う光景が広がっている…

「俺は元、この世界の住民でした、が今は縁あって、まりもさんの世界にいます」

「……異世界人……他のところにもいける…」

「ですが、……まりもさん、あなたの言葉で、あなたの世界を救う事を決めました」

「わたしの言葉で？」

「はい。その為に、俺が異世界から持ち帰り、やろうとしている事を、見せましょう。
戻りますよ」

また、まりもちゃんの手を握りくぐる。

＝＝　Ｂ５５ハンガー待機室　＝＝

「では、ハンガー内に…」

シュン

「こ、これは……」
前回夕呼さんがみた光景よりも色々あるが略。

「ええ、異世界の力です。ハンガーに並んでるのは、機動戦士ガンダムの世界のＭＳ達」

「ガンダム？」

「宇宙、地球問わず戦争での覇権争いの、絶えない世界…
時には一週間で２６億人が死亡しました…」
「一週間で…」

「そんな世界での機動兵器です。実力は折り紙です。
で、動き回ってるのが、機動戦艦ナデシコの世界での作業ロボット達」

「色々な世界あるのですね」

「はい。これらの力でＢＥＴＡを駆逐しますので、俺を信じてください。」

「はい」

「また、この世界の事で、わからない事は教えください」

「わかりました、協力いたします。
……カオルさん一つ質問が…」

「なんです？」

「わたしの言葉って？」

「前、まりもさん、ないちゃった時の事覚えてます？」

「……ええ／／／／」

「その時の言葉で、

俺にとっては、教え子の大半が死ぬのが常識…
が赦せないんですよ…
あの感謝の涙…で全力をつくすのを決めました。

……まりもさん……あなたの思いを救う為にね…

あなたが年をとった時、周りには教え子がいっぱいいる…
それが当たり前にします」

「カオ…ルさん…ありがとう…ございます」
後半部分を聞いた時、まりもちゃん堪えきれず、涙をながす。

そして、泣き出し…
慰めるカオル…

……
カオル君報告

作業関係は午前中みたと言うことで…

第３０話　ただ今カオル君は…　投稿日２０１１０１０３（後書き）

作者「今回は少し苦労しました…」

あ号「どこらへんが？」

作者　「まりもちゃんを泣かすか、泣かさないか、で……」

あ号「ふむ…」

作者　「なので、なきなしにしようかなぁと…してたんですが…」

あ号「最後…ないとるが？」

作者「はい、泣きありにしちゃいました…」

あ号「ほう…」

作者「まぁ、まりもちゃん教え子思いですからねぇ……
夢なんじゃないでしょうか？」

あ号「だが、殺すよ」

作者「殺させない！！世界扉の力見ておくべし！！」

あ号「この話みて対抗してやる！！」

第３１話　お兄ちゃん会いたかったよ…投稿日２０１１０１０４

２００１年６月９日

とりあえず、午前中にひと仕事、
コバッタ経由で、
俺の世界にいき、金塊を換金できる場所を探してきます。
と伝える。
了解との事で、行ってきます。
「”世界扉”」

＝＝　現実世界　＝＝

相変わらずの俺の部屋。

「バルティエル…”幻影”シャムシェル」

窓を通りぬけ、フランクリン・ビダンになり軟着陸…

とりあえず、情報集めに質屋に向かおうとおもった…

「お、開いてたか…」

ここの質屋鳳｛おおとり｝は、朝早くから開いているが、休みが知

らなかったから行幸だった。

チリン
「いらっしゃい」
店内ところ狭しと色々なものが、並んでいる。

（お、ＰＳＰも取り扱ってるんか…ついでに、これ買えば、教えてくれそうだなぁ、
型番は……ん～わからない…か）

「すみません、ＰＳＰ見せてもらえます？」

「あいよ」
よっこらせと鍵をとりながら、ショーケースをあける。

（３０００か…うん傷なしだな）

「おばちゃん、これ充電器等は？」

「箱つきで、１３０００じゃよ」

「作動テスト良い？次第で買うよ」

電源作動テスト…良好

バージョン6．01

「おし、買うよ。領収書よろしく。宛名は香月　夕呼で。香水の香にお月様月で、夕方の夕に、呼ぶで…」とポッケの中から虚数空間にアクセスし、お札を4枚だす。

「はいはい毎度ね」

領収書を取り出そうとしている。

「ところで、金の売買ってどこでやるかわかる？」

「記念コインかい？うちでやっとるよ」

「いやいやもっと量があるの」

「金地金…バーの事かい？」

「うん。そう」

「鉱山会社、商社、大手貴金属商だねぇ……売買なら、ここに問い合わせてみな」

と印刷したコピーを渡してくれる。

菱形商事株式会社
顧客取引部
田中　玲奈

電話番号０００－０００－００００

とかかれてる。

「ここに？」

「ああ、そうじゃよ。あたしも利用させて貰っている、取引先じゃよ」
ちょうど包装、領収書等全て渡してくれた。

「ん♪ありがとう～電話してみるわ…とチップね」
と千円札一枚つける。

「あいよ、あんがとさん」

さてとの事で、公衆電話を探す。
最近撤去がすすんで中々見つからない。
結局コンビニから…

ピッポッパ　プルルルル
「お電話ありがとうございます。こちら菱形商事、顧客取引部、高

橋です」

「あ、田中玲奈さんお願いできます？」

「失礼ですが…」

「質屋鳳の店主から紹介されました。ビダンといいます」

「わかりました。ビダン様少々お待ち下さい」

保留…解除

「はい、お電話代わりました。ビダン様、田中です」

「鳳の方から紹介がありました。金の売買についてですが…」

「当社は初めてで、いらっしゃいますね？いかほど、お求めでしょうか？」

「いや、売りの方ですが…」

「…買い取りでございますね？…量の方は？」

「ラージバー一本分ですが…」

「は？」

「えっと、ラージバー一本」

「わ、わかりました…す、直ぐには金額はご用意できませんので、当方で見せて頂き、後日取引の形になりますが…」

「わかりました。けど、できるだけ早めにお願いします」

「は、はい……で、私他、数名がお伺いに行きますが…」

（あ、ホテルもとってないなぁ……出先にするか…）

「あ、出先なので…そちらに伺うというのは？」

「と、当社にですか？？……わかりました。何時頃になりますでしょうか？」

電話番号から市内と当たりをつけていた。

「詳しい住所は伺ってないので、聞いたら時間わかりますが…」

「あ、はい当社の住所は○市×1-1-1、菱形商事ビルです。℃駅から徒歩1分です」

（あのビルか）

「近いですね…20分後にでも」

「お待ちしております」

カチャリ

……

アタッシュケースを人気のない所で出した後、

「いつみてもでっかいよなぁ…しかし、このビルが菱形商事だったんか…」

入口入り受付へ…

アポ取れてるで受付嬢自身が、商談室まで案内した。

「大変お待たせ致しました。田中玲奈です。この度は当社をご指名頂き、まことにありがとうございます」

田中嬢が入ってきた。歳は若いがやり手…背は小さいが、胸はG？

グラドルかと思う。

「フランクリン・ビダンです。良い取引を、よろしくお願いします」

「では早速ですが…」

「あ、はい」
とアタッシュケースをデスクの上におき開く…
金色の光を放つ、ラージバーだ。

「失礼します」

と白手をキュッとはめ、ラージバーを手に持つ…

鑑定作業にはいる…
が、ロゴの部分をみた瞬間…彼女の目は変わる…

「ビダン様、失礼ですが入手先はどちらで?」
(は?…ん~あそうだ)

「友人から買い取りましたが…」

「その友人とは?」

（何で突っ込む！！）

「え～と、彼は、海外いってますので、連絡は直ぐには……」

「ビダン様、このロゴですがどちらで？」

「え…えっと…」
（何処だろう？）

「あと、ビダン様、身分証明書などお持ちですか？取引の際には必要ですけど」

勿論持ってません！！

たらぁ…

「すみません…この取引は無しで…」

「いいえ呼ばせて頂きます」
彼女がポッケから携帯電話をだし…

（アウトだ…なむさん）
「”世界扉”」

「は？」

彼女と金塊を抱えてくぐりました…

とうとうカオル拉致りやがったよ……

＝＝　副司令執務室　＝＝

世界扉が現れ、見知らぬ男性｛すぐに解除｝と金塊と見知らぬ女性が現れ、

副司令は動揺した…

女性は狂乱状態…

「ここは何処？帰して！！」「なに？誘拐？」「あたしの美貌に…よよよ」

カオルは、とにかく、

「説明するから落ち着け！」の連呼…芸がない…

夕呼さんは、呆れてみていた…

やっと落ち着いてきたようだ…

「まず、この金塊の入手先を説明するから、とにかく叫ぶなね…話はじまらんから…」

不満顔で頷く田中、

「まず、この金塊は盗品でもなく、

この横浜白凌基地副司令から、

譲り受けた事は納得してくれ」「確かにそうよ。国連軍として活動資金がわりにわたしたの」

「横浜に国連軍？」

「じゃあ、この世界について説明すっから、というか、田中さん…異世界にようこそ…後で帰れるから安心してな」

田中は黙っていた。

「この世界は、ＢＥＴＡという、宇宙生命体により侵略しつつあるため、
４６億人いた人類が、１０億人位まで減り、ユーラシア、アジア大陸は宇宙生物の占拠下で、
人類は、そこにはいない世界なんだ」

「だいたいあってるわね…人類は約３０年近く地球上で、ＢＥＴＡと戦ってるの…」

「え？それってつまり…」

「地上見せた方が早いか…」

「ええ、そうね…いらっしゃい」

シュン

「正直、あの場で田中さん、洗脳する手段もあった…が俺は嫌いだ…
納得して田中さんの中に秘めるなら帰すからね…」

「わかりました…けど本当なんですか？」

「ああ、この世界の事？本当さ…
じゃなきゃ、まずこんな基地、エリア５１位しか思いつかんだろ？」

「ええ…」

＝＝　地上　＝＝

基地の外回りは一面廃墟。
そのまま歩き、丘まであんないした…
横浜港が一望…
また廃墟である…

「田中さん、横浜港は？」

「は…い…見たことあります……本当なんですね…」

「まぁね、拉致っちゃった事は正直あやまる…けどあの場だとしょうがないだろ？」

「はい、警察呼ぶ気満々ですし、その前の段階でも…」

「前の段階？」

「電話の最中…」

「そっからか……」

「はい、で、副司令さん…この世界の状態を詳しく、聞きたいのですが…」

「あ～…カオル、よろしく、あたしは執務室にもどるわ」

「面倒なんすね…わかりました」

俺の知っている事を説明した…

そしてオルタネイティブ５の事も…

彼女は震えていた…

けど俺が力の介入について説明すると…

ピカリン

「ねえ、カオル様…モビルスーツ見せてくれない？」

「ああ……ガンオタ？？」

「うん♪」

あ、さいね。

田中さんのモビルスーツへの愛着ぶりは凄かった、舐めたり、キスしたり、ほお擦りしたり…

あ、なんでその情景略してんだ？って？

……田中さんが殺すよ作者って……あ、いや、やめて……

田中様は満足しきると、カオル君に今の日本は？と聞いてきた…

「ん～俺よりかは…あ、１１号日本の状態って説明できる？」

［マスター、パソコンの中の、日本の戦力で］

「おう、ありがとう」

パソコン起動させた。

「あれは…ナデシコのよね？」

「ああ、想像通りだな。オリ機能に会話機能つけた」

「会話……題名が思い出せない……からのですよね？」

「そうだよ♪後悔はしてない…というかつけたら、優秀すぎる」

「その子達は、つれてこられないのです？」

「あ～多分可愛すぎて前線での士気が、崩壊しそうでさ…」

「色々チートあっても、制約あるんですね」

「まぁな…これか…そういえば俺も詳しくなかったな…」

日本の現状ファイル…
９８年の九州から上陸し西日本、四国蹂躙、取り残された九州放棄
京都侵行、京都絶対防衛戦ひくも、京都陥落
その後北上し、佐渡島ハイブを建設
この一連の行動により、民間人３６００万人の命を落とす

「ハイブとはなんですか？」

「ＢＥＴＡの生産拠点、基地と思えばいいよ」

関東ー東北圏で防衛線ひくも、突如として南進
横浜にハイブが建設、多摩川で防衛戦、断続的な間引き作戦が行われる

「間引き作戦？」

「ああ、それ以上の進行を防ぐ、防御的攻撃、ただ行うと半壊から全滅、壊滅になるらしい。弾薬等も勿論のことな」

９９年８月明星作戦発動、苦戦するもG弾２発の投入により、人類初のハイブ攻略となる

「G弾？」

「核の酷いやつと思えばいいさ。後遺症に重力異常…人が住めなくなっている…」

明星作戦成功により本州４島の奪還成功、現在国連軍に岩国基地、日本帝国により京都、呉（広島）、佐世保、明野、舞鶴、富士基地の復興すすむ

日本上陸前の戦力に比べての現状

生産力…西日本、中部、関東西を失い、東南アジア諸島に拠点を移設するも、
軍需関係で５７％
その他産業３５％
まで落ち込む

「これは…酷いわ」

食生活…
難民キャンプに限るが、現状配給制に頼り、合成食料１日２食をなんとか維持している
ただし２食食べれない場合たたあり

その他、天然物はなく、民間人は合成食料に頼る

「……よく国を維持できてるのね…」

「…だなぁ…2食は副司令から聞いたけど…」

「質問とかできます？」

「11号HELP～」

［マスターなに？］

「質問できるの？だって」

［横のコマンドクリックして、質問したいキーワードいれて、できます］

「これね？」

食材の相場は？…70年代より5倍に高騰

安い食材の仕入れ先は？…無くなってる

「……これなら……カオル様、輸送とかはできます？」

「ああ、できるけど…？」

「あとこちらの偉い方へのツテ、ございます？」

「殿下や大将辺りなら…」

「……ちょっと一回戻していただけませんか？
あ、金塊は買い取り致します。
キャッシュで４０００万円で、買い取らせて頂きます。
こちらに来る際に、お持ち致します」

「あ、ああ…けど扉の場所は、多分固定になるけど…」

「でしたら、また当社に2時間後に、来社していただけませんか？」

「ああ…わかった…」

「ではお願いします」

「”世界扉”」

「あ、潜るまえに…」

田中様携帯調べる…電波が入り、センター履歴が入る。

「やはりゼロ魔の世界扉ですか…」

「あ、知っているのか…」

「はい、グラモン様ファンですので♪
ではお願い致します」

田中様、カオル世界扉を潜る…

＝＝　現実世界　＝＝

「カオル様ここは…？」

「2次創作で、いわゆる元俺の部屋」

「わかりましたわ」

窓をあけ、

「飛ぶので失礼するよ」
でお姫様抱っこ、田中様もう動じてないなぁ…

「シャムシェル」
でふんわりと道路に軟着陸。

「この道まっすぐ5分位で&駅だよ。ここで？」

「大丈夫です。では2時間後、当社にお越し下さいませ」
と深々とお辞儀したあと、
駅の方へ携帯かけながら戻ってゆく田中様…

カオル、部屋に戻り鍵を閉めて潜る

＝＝　B55ハンガー　＝＝

（あ、二時間後か…やばいなぁ…副司令のとこ、相談か…）

＝＝　副司令執務室　＝＝

コンコン「失礼します～」

シュン

「あら田中さんは？」

「お金を用意するって事で、俺の世界に戻りました」

「何を見せたの？」

略ＭＳやこの世界の現状等など

「あら…面白い展開になりそうね…いいわ」

「？？」

「あ、お兄ちゃんの件だけど、キャンセル済みだから安心していいわよ。」

「あ、じゃあ大丈夫っすね…うんじゃあ、今からいって資料仕入れてきます」

「いってらっしゃい」

「”世界扉”」

＝＝　現実世界　＝＝

買い物買い物っと…

秋葉原まで幻影で飛んでゆき、

ソフマップでＰＳ３、ＤＳＬ、メタルマックス３、鋼鉄の咆哮２Ｐ、
電気屋さんで液晶テレビ、
ＤＶＤは…Ｚのプレミアムボックス、
ガンダムは劇場版でいいか。

を仕入れて約２４万円か…

あとその他を買って約３５万円使った。
（そろそろ時間だな…）

＝＝　菱形商事会議室　＝＝

受付いくと先程の会議室にあんないされた。

田中様と一緒に、男性二人がアタッシュケース４個運んで、入室してくる。

テーブルの上におき、パカリと開いて現金４０００万円を見せられる。

「お確かめ下さい。で、ラージバーは？」

「出したいのですが…」
ちらりと後ろの男性を見る…

「あ、この者達なら大丈夫です。というか、私どもの部所の者なら…」

「は？」

「実は、私ども菱形商事は、異世界日本に、食料等販売いただきたいと、思っておりますが…
いかがでしょうか？カオル様」

「はぁ…」
「カオル様の件や異能力については、私どもの部所の者には説明済みです。お話を通して頂けませんか？」

「俺の一存では……とりあえず」

ラージバーをだす。

「ラージバーをお渡ししたあと…来てもらえます？」

「はい！！喜んで！！…ではこちらはお納め下さいませ。あとカオル様」

「？？」
後ろの男性がケースをあけて渡してくる。

「当方からの贈り物ですわ」

中身を見ると…携帯電話、通帳、実印、パスポート、在住証明書等…

つまりこちらの身元がないと作れない物が多数であった。

「え？これは……」

「カオル様は、この世界では死んで、身分がなさそうでしたので、お使い下さい」

「助かります」
深々と礼

「なにか必要な物ございましたら、私共にご用命下さいませ」

「はい…では、とりあえず行きますが、準備は…？」

「何時でもよろしいです」

トランク用意してるよ……

「では”世界扉”」

＝＝　副司令執務室　＝＝

くぐると見慣れない方が……

「田中さん、丁度よかったわ。
こちらの方は、内務省の事務次官の飯田さんよ
で、財務省の……｛以下略｝」

「「「「「田中様、我が日本帝国はあなた様を歓迎致します」」」」」

「あの…副司令？」

「あんたがいったあと、呼んで打ち合わせしてたのよ。
田中さん、取引したいんでしょ？」

「はい！！」

副司令、先手打つ。

この後の商談は長くなるので略しますが、とりあえず以下の事が決まりました。

俺が輸送艦がわりに往復して、日本帝国からは…資材等、
菱形商事からはタイブランド米や、中国産餃子、
ようは日本で安いが人気がない国の食料を中心に大量に…
また医療品関係

レートは日本国側に合わせる形での商談がきまりました。

俺の携帯メールでやり取りするらしいです。
できれば毎日、最低でも二週間に1回との事。

田中様ほくほく顔…あと技術情報にも興味持ち始めてる…

現実世界にレイバーでも、作るつもりなのだろうか??
とりあえず本日の商談を終え、
帰る日程を決めたので15日に送る予定になりました…
一回帝都に行くらしい…
斯衛から護衛がでるからまぁ安心かな?

副司令には買ってきたのを渡すと…

もう遅いのでお開きになりました。

……

カオル報告

今日もなにもできんかった…

第３１話　お兄ちゃん会いたかったよ…投稿日２０１１０１０４（後書き）

作者「いやぁ…あらたなオリキャラとうとういれちゃった…」

田中「田中玲奈といいます。皆様方おひとつよろしくお願い致します」

作者「一応、彼女は登場予定ありませんでした、
また現実世界をそこまで絡ませる予定ありませんでした」

深々とお詫びする作者。

作者「当初、いない人物でしたので、モー娘。の田中れいなさんを想像して下さい。彼女にGカップを与えた…と思って結構です。バリバリのキャリアウーマン、だけどオタ、コミケ大好き…ですね」

作者「ゲストで終わるかも知れないですし、準レギュになるかもしれないですし…」

田中「で私が生まれたわけは？菱形商事も」

作者「はじまりは、ラージバーでした…で、
現実世界にもっていって換金しちゃえば活動資金になるじゃん…で

…」

作者「しかし、換金できる場所を探してたら、あ……となりました…」

作者「日本国内では、身分証明書が必要…ようは盗難対策、古物商の扱いになるからです」

作者「また、必ずロット番号やロゴ等を管理している…ですので日本国内では手詰まりになりました…

要はカオル君がいったら絶対に捕まる状態に…」

作者「中国や韓国、や裏ルートとの助言もありましたが…まずは、カオル君諜報部員のように詳しくないのでありえませんでした…」

作者「ですので…田中玲奈様が生まれたわけです。現実世界の協力者です」

作者「本来は、サブタイトル通り、お兄ちゃんと呼ぶ存在出現の話になるはずでしたが…

多分皆様方もそう思ってたでしょう…」

??「で、あたしは何時でるの？」

作者「……展開次第…近日中……」

すんません…完全崩壊してました…

先に調べてたらなぁ…と思ったこの頃…

第３２話　ガンパレ編１　＆ｑｕｏｔ；津軽強襲＆ｑｕｏｔ；へ…　投稿日２００１年６月１０日朝

昨日みてなかったから、今日起床ラッパなり響いたと、ともに作業。

うは…俺指示待ちかよ…

つうか終了って…

Ｂ５５状況

Ｄ４から両方向と、Ｄ１０からとＪ４から…

完成したら更に中へ…

浄化土置場に利用で、トリップ分にあてる。

戦艦ブロックは７０ｍまで進行

陸戦強襲型は約５０％増産、ホバーは仕上がり

コバッタは２０１号

ヤドカリは３５号

上々

陽炎は出荷済みか…

１５日に送る予定なので、それまでをガンパレのトリップ分にあてる計画に。

「１１号」

［なに？マスター］

「医療キットってある？」

［はいはい、マスター］

……

「……なんでカプセル？？」

目の前にもってこられたのは、プラント特製のでっかいカプセル…外見は、よく映画などで冷凍カプセルみたいなのを、もってこられた。

［医療キットでしょ？］

「……まぁ持ち運びは可能だからいいが……これって、怪我人や、病人ほうり込めばいいわけ？」

［うん。入れてくれれば、自働診断、治療までやってくれる優れものだよ］

まぁ場所がとりそうなのが問題か…

［外部操作でロックも可能、また栄養補給等もしてくれて、
覚醒させなくとも、カプセル入ったまま生きられるよ］

冷凍カプセルそのものかい！！

「……千年とか？」

［無理。中のひとが老衰する］

「基本は治療で…って事か…」

「バルディエル」
解析…あ、プラント同様、作るにはちょい時間かかるか…
解除

「何セットあるん？」

［とりあえず５０］

「じゃあ４０もってくか…あと…名前、医療カプセルだな…」

［医療キットだって］

「……わかった」

けど、現場での治療に場所とるなぁ…と思ったりして…

ホバートラックの荷台に固定すれば1つ詰めるか…
日本の2tコンテナトラックで1基
11tサイズで2基つめるサイズだなぁ…

全部ほうり込んだ。

あとはシェルター清掃か…秋葉のドンキでかった生活必需品を残り
9個のシェルターにいれ…

水と保存食〔日本の災害用〕もったし…
忘れ物はないかな?

［マスターハンカチ」

「サンキュー、あ、11号くる?」

［マスター本当?」

「今回の行き先は多分必要だと思うからな…どうだ？」

［うん！！いきたい！！！！いくいく！！］

［おい…１１号が］［いいなぁ］［あとでしめる］

［みんなーゴメンねー♪］

［マスターぼくちゃんも♪］

５号…問題児がきた。

「お前は駄目ってもくるんだろ…機械ｖｓの世界でないから勝手にしろ」

［マスター大好き♪］

５号が抱き着いてきた。

＝＝　廊下　＝＝

まえからヒルダさんがきた。

「あ、カオル君」

「ビダンさん、おはようございます」

5号と、11号がひそひそ通信しあっている。
［襲え襲え］
5号、帰ってきたらｏｈａｎａｓｈｉだな。

「少しお願いある「襲うは不可」うん、そんなんじゃないわよ…」

「…なんです？」

「わたしの部下の、追跡調査お願いしたいんだけど……」

「部下の？」

「ええ、ほら、マギー達の様子からすると……」

「あ～……」

（ティターンズに自白剤つかわれ、精神再起不能になってたよな…）

「うん、調べてみた方が、良いかも知れませんね…リストとか用意お願いできます？
ついでに関係者辺りも…」

（そういえばファの両親も……劇中、連れ去られて、そのままフェ

ードアウトだっけ…）

「わかったわ…早めに」

「あ、時空間移動可能なので、ユックリ目でも大丈夫かと…」

ただし、パラドックスが怖いので、無理な改編はできない…
まぁ一回ミスったのを再度助けようとしたり、
本来その時間にない武器で等…
ようは今生産中のを過去に送る…

「よろしくね…部下達の事お願い」
深々頭下げるヒルダさん…

「じゃあ、ちと別世界トリップしますので……後程」

その場を離れる…

（リストでたらキリマンジャロか…グリプスだな…で記録調べて、助けられるなら…か）

＝＝　副司令執務室　＝＝

コンコン「副司令～」

「どうぞ～」

シュン

「あら？今日はコバッタ連れて？」

「ええ、１５日には戻りますので、ガンパレードの世界に…」

「……メタルマックス３の世界でなく？」

「はい、機械化歩兵の強化というか、生身での戦闘がなくせるような、
強化装甲ありそうなので…」

「どんな世界なの？」

「ここにたりよったりですね…ただクローン技術というか、
人工受精が発達してて、物量には対抗できてる世界です」

「物量…ここどっちが？」

「確か向こうの方がすごいです。が、こっちと違うのが交渉できる
対象がいた…ですね」

「成果報告たのしみにしてるわ。いってらっしゃい」

「”幻影”…”世界扉”」

姿を蚊にし…扉を潜る

＝＝　ガンパレードの世界　＝＝

現地1月3日午前6時

扉を潜ると……

人の営みの街だ……

ガンパレードの世界の日本は比較的現実世界に、にている。

ただ、想定通り榊ガンパレの世界ならば九州は、同盟幻獣領となっていてる。

同盟になる前は、山口から侵略があり、岩国でなんとか要塞化で抵抗…

まぁその要塞も地下モグラ要塞……

奇天烈岩国参謀の発案の基地で、

とにかくモグラで大型種を仕留め、小型種を吸収殲滅…という戦いだった…

その後九州まで再上陸、
しかし、不利になり、兵站が崩壊しかけるも、
{政府側のプロパガンダを信じた、軍の出兵により限界点まじかだった}
幻獣側の勢力争いで同盟者を見つけだし、見事に一発逆転は成功。
九州は同盟幻獣側に譲り渡す……

しかし、別の幻獣勢力が青森に進行してくる…の状態だ…

そして、ここは青森市…青函連絡船のメモリアル船が見える…

あっていれば…
サイレンが鳴り響いている…そう、津軽強襲の日だ。

「シャムシェル！！」

カオル達は一路北西に……飛び立つ…

ｓｉｄｅ～ある兵士～

「早くトラックのって！！」

彼は焦っていた。

「おばあちゃんはやく！！」

「うんたらこといっても…」

彼は押し上げ荷台に押し込んだ。
コブリンが見えたからだ！

急いで運転席に飛び乗りアクセルを吹かす。

チェーンが雪をかむ。

コブリンどもがトラックを襲おうと手に斧をもち押し寄せて…

トラックは加速し、なんとか逃げだした…

彼は第１０４５独立混成師団に属し、ここ青森県津軽半島にての後方勤務についていた…

この正月3日は家…独り身だが休んでいたのである。因み彼は、九州戦線にて家族を失った…
また重傷を負い、リハビリをかねて、
後方にあたる青森に飛ばされた幸運の身であった。
…爆音が聞こえ、飛び出たら黒煙がみえた…
借りていた軍用幌トラックの無線機を傍受したら、

師団本部から幻獣上陸、五所川原に撤収としきりに流れてる…

彼は独断で、付近の人達ごと青森市へ避難する事に、決めたのだ…

そしてそれは正解である…

彼が避難を決めなければ、ここの人達はコブリンの餌食になっていただろう…

Ｍｕｖ－Ｌｕｖとガンパレを比較してみよう…

確かに物量という面では幻獣、ＢＥＴＡは同じである。が…片方は毎日押し寄せてくる。片方はまだ期間があく…

そう、幻獣は半端ない物量で毎日押し寄せてくるのである。

そして代表的なのが今対面したコブリン…

戦線のあいた隙間を通り、後方にいる民間人、

また休憩している兵士、また前線でも後方から不意をうち…

１番人類を殺している幻獣であろう…

とにかく半端なく押し寄せてくるのだ…

武装した者が警戒した状態であうなら、まだ大丈夫だ…

が警戒してなければ、不意をうち……

そう、人間は永遠に警戒し続ける事はできないから、１番の脅威であった…

トラックは県道2号を青森湾方面に進む…
山道に差し掛かり登り始める…

後方では…牛潟町は幻獣の海に飲み込まれていた…
金木町では、かろうじて足止めできてるが…
じきに、のまれるだろう…

彼はそのまま県道2号をひたすら、はしらせ……
青森市内に逃げこめた…

そしてわかる事だが、彼のトラックにのった人達…
その地区での唯一の生き延びた民間人であった…

ｓｉｄｅ～ある兵士ｏｕｔ～

［……マスター……］

「ああ、酷いな……」

小説を読んでいて予想はしたもの…
幻獣に押し寄せられているのである…

カオルは牛潟町上空にいた…

付近には燃え上がるトラック、避難してたであろう民間人の死骸、
四肢を切断し喜んでるコブリン…

つまりだ…全くの無警戒状態での、
完全な奇襲の為なすすべがなかったのだ…

「マスターいくの？」

「だな…少しみてみよう…」

「グロ好きなんだね」

「5号黙れ……見込みあんまりないよ」

「まぁ一応な…」

カオルは最大限の警戒しながら町に降り立つ。

幻獣…キメラが側を歩くが気がついてない…

そう、幻獣も視覚による探知が基本なのである。

なを、このような時、コバッタとの会話は、耳にいれた小型無線にて、音声化している。

カオルからは口に仕込んだ無線で、小声をひろっている。

「マスター…あっちにハンガーみたいのあるよ」

「ひょっとしたらあるかもな…」

発見したハンガーに向かう…

第１１８警備師団車力高等学校と、標札にかかれてある。

やはり不意をうたれたのだろう、死体がちらほら見える…

左手にハンガーらしいのが見えた…

（ひょっとしたらある？）

ハンガーが反開き出動した形跡がない…

中を覗くと、整備士の死体と士魂号の単座型と復座型、栄光号が立っていた…

整備士でウォードレスを着用しようとしたのか、素っ裸のもいる…

やはり不意をうたれ、出動準備も間に合わずコブリンに蹂躙されたのだろう…

大型種の進路にあたらなかった為ハンガーは無事だったようだ…

［マスターこれが？］

「ああ、巨人族…だったもの…殺され兵器として投入されるものだ…

士魂号は、機関に送られた人間が、副操縦系に使われている……

しかし、あるって事は、ここは芝村閥か？」

［マスターコピーしないの？］

「いや…流石に……製造方法きいたろ？」

［多分プラントでは作れないかもしれないけど、データーとるべきじゃ？］

「う……やだなぁ……」

嫌々ながら栄光号にちかよる……

「バルディエル」

～～～

俺は戦いたいんだ！！早く戦わせろ！！

奴らを奴らを踏み潰させろ！！

～～～

「気持ち…わるい……」

同化した瞬間、機体が夢を見せてきた…

そう、俗にグリフというやつだ…

「土魂号のほうは…いいや…」

［なんで～？］

「なんでっても…わかるだろ？生きながらこういった、機械にされちゃうんだぞ…
そんな奴の夢なんか見たくないよ…」

［わかったよぅ…マスター］

「さてと、ウォードレス倉庫はっと…」

ウォードレスは専用施設で着用しないと、着れない制限がある。

アーリィＦＯＸ
スノーＦＯＸ
ＦＯＸキッド
テンダーＦＯＸ
可憐
武尊
があった…
武器は……
零式ロケット

９９式熱線砲

くらいかな…

可動式ウォードレス着用車両もあった。

「マスター！！生体反応５体あり！！」

（…取り残されたか……）

つまりこのままだと死亡確実。

ここ車力町が人間勢力の手に戻るのは…青森戦終結後の事である。

（交渉してみるか…）

「ちっと行ってこよう」

「あい、マスター」

校舎内に入る。

建物内で至る所にコブリンがいる。

物を壊して遊んでいるようだ…

階段をのぼり、廊下にである一室で１１号はとまった。

「ここだよ」

「中の様子は？」

「隅に固まって、息を潜めているみたい…

けどね…」

そう、部屋を臨検している様なコブリンもいたのだ。
発見は時間の問題だろう。

「11号、5号シェルターに入っててな」

「はーい」「やだ」

で虚数空間のシェルターに入れる。

「バルディエル」

壁に同化し、中にはいる。

室内には5名の女性が隅に固まっている。
ここは共同寝室なんだろう…女性らしい物が沢山おいてある…

幻影解除し姿を現す。

「ひっ!!」「な…」「?」「…」「誰?」

「初めまして皆さん、あなた方に、別世界へのご招待にきました」

「別世界?」

リーダーらしい娘が聞いてきた…

「まぁ、君らがおかれている状況はわかるよね…
因みにこの地域は、約２０日位幻獣支配下になるんだ…」

「……生きて帰れないのね…」

「まぁそうだね…部屋漁り係のコブリンもいたし…」

「あなたは何故無事なの？」

「ああ、俺？”幻影”」
で蚊にかえ、元に戻す。
「まぁこういった異能力をもつ、異世界人だからだ」

「私たちのところにきたの何故？」

「取り残された反応あったから…まぁ最初にもいった通り、スカウトだけどね」

「で、私たちのいく世界って？」

「お、飲み込み早いね～と…」

ポータブルＤＶＤをだしたところで

ガンガンガンバキ！！

ドアが破かれた！！

「パイル！」

光の槍を一気に

ザシュ

串刺しにする…抜くと…

絶命したコブリンは薄くなり…消えてゆく…

「あ、あなた…」

「ああ、これも俺の能力の一つさ…と、早くそれみて決断してね。

ここに残るか、別世界についてくか…

ちなみに此処から助け出すは、異世界からの接触の影響あるから…

無理だよ」

食い入る様にＤＶＤを見はじめる。

その間、現れては串刺しにし…６匹目を倒したころ…

「終わりました…私たち４３２２小隊、そちらの世界に行かせてもらいます」

「みんなの総意？」

「「「「「はい！！」」」」」

「わかった…じゃあ荷造りしてね。こっちには戻れないから」

と荷造りし始める…

１２匹目を串刺しにした後…

「準備できました」

「うっし、じゃあシェルター内で、５日間程生活して貰うから、そのつもりでね。あと資料もあるから目を通しておくように」

「「「「「はい！！」」」」」

学兵小隊をシェルターに送る。

で、１１号、５号を出す。

［マスター終わった？］

「ああ、スカウト成功…学兵だけどな……もうここら辺はいいだろう…休んだら、次の時間に渡るぞ”世界扉”」

潜ったあと…世界扉を見つけたコブリン。
好奇心いっぱいに向かうも…消えた世界扉…

不思議がるコブリン……

……
カオル報告

学兵小隊加入

アーリィＦＯＸ
スノーＦＯＸ
ＦＯＸキッド
テンダーＦＯＸ
可憐
武尊
零式ロケット
９９式熱線砲

栄光号（通常型）

可動式ウォードレス着用車両

第32話　ガンパレ編1　"津軽強襲"へ…　投稿日2

作者「……」

○○○○○［どうちたでちか?］

作者「うん…まぁ……医療カプセルというかポットご都合かなぁ…
とふと考えなおしてるんだが…
あと○○○○○よ○に変更で後書き準レギュね」

○［ワーイ♪］

あ号「むぅ…わしの立場が…殺す!!」

触手で潰そうとするが…

○［なにちてるんでちか?］

あ号「な…なに??」

作者「あ～いったろ、地球上の戦力だと核3発で、なんとか活動停

止できる、程度だと…
あと、あ号退場ｗ」

あ号「え……さく……」

世界扉に引き込まれるあ号…

作者「さて…邪魔者はいなくなったし…」

〇［プラントたんにきいたら、あってもおかちくないかも］

作者「まぁそういった事にしておくか…
まぁ問題は訓練分隊だよなぁ…
未設定……ｗ」

どうなる？

多分ゲスト扱いか、活躍するかは後程…
そして〇よ準レギュおめでとう♪

第３３話　ガンパレ編２　＆ｑｕｏｔ；弘前防衛＆ｑｕｏｔ；で…スカウト計画

＝＝ガンパレ世界＝＝
現地１月７日午後２時
世界扉が開かれる…出てくる蚊３匹。

ここの場所はまたもや青森だ。

しかし、前回来た時とは環境がだいぶ変わっている…

そう前線が近いのだ。

部隊の集結地は青森や東青森で、
そこで集結した部隊はここ青森から、奥羽本線沿いの前線へと送られる。

奥羽本線の青森～弘前は、コブやきたかぜゾンビの浸透で度々とまる。
機能してるのは、東北自動車道という状態、

津軽半島は幻獣の手におち、北海道との連絡する、青函連絡線は分断、
トンネル入口をコンクリで塞いで、北海道側への進入を阻止してるのである。

この青森駅周辺は弾薬、物資の基地として稼動してるが、

時たまコブリンが浸透してくる為、
至る所に警備の為の警察、憲兵、学兵が警戒している。

「異常なし」
と声を出して確認しあう…

「ゴブリン！！」
バラララララ
コブリンの浸透を見つけたのだろう、掃射音が聞こえた…

（さてと…前線いくか…）
「シャムシエル」

さて、現在の状況だが、
戦線は突貫工事による、要塞化された陣地により形成され、
そこまで押し寄せる幻獣に対し、ハリネズミ陣地群が効率的に敵を削っている。

このハリネズミ陣地群も複数あり、
主に中型から大型種へ、積極的に留弾砲、迫撃砲を打ち込む、高台等に居座る陣地。心臓破りの階段等で大型種の進入がなく、時たまのぼるコブリン等小型種にさえ気をつければよかった。補給さえ続けば…

他には、建物内に潜み、ひたすら小型種削り専門、

中型大型に対しては隠蔽し、最後尾の一匹だけを始末する陣地。
車両等で小型種の侵入をバリケードで防いでる。
これが１番多いだろう。
これもまた弾薬次第…

また、堅牢な建物は要塞化され、ある程度の誘引を引き受ける陣地等がある。
…やはり弾薬次第だが…

まぁようするに、幻獣はしきりなしに押し寄せてくる。

はっきり無理だというのに…が、前線へまたは先の方へガンパレードの主人公達による突破補給が続いていた。
比較的後方のコブの浸透はあるが…は別の車両陣が補給にあたる。

網の目戦術による、幻獣勢力への削り作戦は比較的うまくいっている。
あとは反撃の狼煙を…になるだろう…

だいたいこのあたりの時間にカオル達は降り立った…

ｓｉｄｅ～ある兵士かなり前から～

「撤収！撤収だ！！」
岩手川において、救援に駆け付けてたが、対大型、中型幻獣に対し

ての武器がなくなり、
大隊所属の、戦車も大破してしまった。

五所川原市死守…が第１０４５独立混成旅団に命じられた任務だった…

彼の属する大隊は、粘りに粘ったが、
とうとう３０名をきり…
五所川原市内で残りとともに潜んでいた。

…が、撤退命令がきた…
後方の戦線が形になったそうだ…

合図とともに　携帯できない武装等は放棄、
決めてあった輸送車の場所に…がない。

大隊に割り当てられた分の車両が、無事だった兵員輸送車が…無くなってるのだ…

「持ってかれた!!」

「ちっ、グズグズしてられん走り抜けるぞ!!周囲警戒だ!」

最初のうちはまだ弾薬があったから、正面のコブをうち、突っ切った、
しかし、一人、二人と弾切れをおこし…

カトラスに頼らざるえなくなってからが……

ゴブリンに接近戦を挑まなくては、ならなくなり…
奴らは斧を投げてくるのだ、
かわすものの、投げてくる本数が違う、
十本単位だ…
かわしきれずに負傷し、負傷した者をかばい、また後ろからも襲われ、

「後少しで広田陣地だ！！」

しかし、その頃になると、一人、二人と……

「グワ！！」

左見ると、木原が頭にトマホークの直撃を横からうけ……

脱落してゆく…

広田がみえた…

団地を陣地にしている。

バラララララ

3階、4階部分から援護射撃がくる。

ありがたい…

団地の鉄扉はコブリンの斧は弾く。

団地に入り階段を駆け登り、鍵のかかってない部屋に入る…

やっと一息つけた…

「そういえば残りは？」

「先任も……」

大隊だった俺らは、撤退時には３０名程…

しかし、もう、３人になってしまっていた……

ｓｉｄｅ～ある兵士ｅｎｄ～

＝＝　五所川原市広田団地上空　＝＝

現地１月７日午後４時

「さてついたか…」

「ここ？」

「うん」

下には灰色にくすんだ団地が見える。

（来栖の可憐か…ほしいかもなぁ……）

降りて、同化、状況把握…解除し、少し休憩をする…

銃声が聞こえ始めた…5号棟からだ…

（そろそろかな？）

程なくして栄光号3号機、装甲戦闘車3両が見えてきた…

「こちら芝村支隊。そなたたちを救援にきた……！責任者はどこか？」

装甲戦闘車が円陣を組み周囲を警戒、

好奇心旺盛なコブリンが車両を取り囲んでいるが、発砲は控えているようだ…

3号棟のサッシ窓が開き、ウォードレス姿の兵士が姿を現した。

「吾妻少佐は5号棟にいます。けど、ここ1時間、通信がありません。

銃声がやたらに聞こえてくるんで、無線連絡してるんですが」

「銃声だと？…ここにいる兵は何人ほどだ？」

「さぁ……皆ばらばらに撤収してきたんで。この棟には百名ほどです。
弾薬も尽きてきたんで、隠れているしかないんですけど」

「1時間後に救出部隊が来る。それまで辛抱せよ」

（が…半数近くは命落とすんだよなぁ…）

装甲戦闘車が、5号棟の玄関に突っ込んでいった。
それをケアするもう一両…
別の車両は警戒にあたっているようだ。

暫く建物ないで色々やっていたろう…

突如銃声！！ミサイルが発射音とともに見当違いの方向に発射された。
（始まったか…）

「全員、すぐに建物をでて走れっ……！我々が援護する！」

各棟の玄関から兵士が、飛び出しはじめた。

装甲戦闘車のハッチから誘導してるのがいる。

三号機が後ずさった瞬間！！

グォオオオゥゥゥン
大爆発がおこった。

あたり一面建物崩壊の埃、爆発による炎及び黒煙でたちまち見えなくなる。

強風が吹き流すと……
雪原には、崩壊した建物、爆風や、瓦礫の直撃を受けただろう…兵士が折重なって倒れていた…

コブリンは最初の爆風には驚きさがったが、獲物♪獲物♪とばかり殺到する。

装甲戦闘車の機銃が唸る。
またハッチからウォードレスに、身をつつんだ歩兵が飛び出し、近寄らせないように、
弾幕をはりながら、安否を確かめにはしり、息のあるものは車内に入れ始めてる。

そこに戦車砲の音がきこえ、

また栄光号１号機がみえた。

あたりの安全は確保され、引き連れていた２０両程の輸送車に死体、負傷者は収容され…
立ち去っていった……

（さてと…）

瓦礫の山となった団地群におりたち…

「１１号、５号全力サーチ」

「イエスマイロード」

すぐに

「生体反応微弱１発見」

（やっぱり…）

「どこだ？」

「こっちも反応微弱１」

「この下」

瓦礫を持ち、ほうりなげると…

足が潰れた女性兵士…カプセルを出し、急いで担ぎあげ、カプセル

に入れる。

「別の反応あり」

幻影で見えないが、腕は血だらけだ…

カプセルをロックし収納する。

5号のところにいき、「下で良いんだな?」

「うん」

で瓦礫をほうりなげ、もうひとつなげ、もういっちょか…

(見つけた…四枝は満足に見えるが…)

カプセルをだし、抱き上げ入れ…収納する。

11号の側にいき下の瓦礫を無言でほうりなげる。

もう一人…発見。

右腕が潰れている女性兵士…

カプセルをだし抱き上げ入れ収納…

「あとは?」

「ここも!」

……

合計４人…いずれも女性だが、瓦礫のなかから救出し…

「……サーチ中…」

「あとは、死体なら何個か反応ありだけど…」

「死体は無理だろ？」

「確かに、時間経ちすぎてるから無理だと…体が無事なら、直後に限って可能性はあり」

「……サーチ終了…以上だね」

「じゃあ…」

無事な建物の屋上にでる。

カプセルを出し、日時を確かめた後、収納した。

（あとは、明日の朝方なんだよな……）

「とりあえず……休むか…」

虚数空間からシェルターをだし　同化、建物自体をルナチタニウム合金にかえ、中で就寝…

現地1月8日午前6時
まだ夜の闇が残っているころ、外にでて建物を収納。

弘前方面に飛びたつ。
個々からが人類の戦法を学んだ、敵知生体の指揮による反撃だった…

ゴルゴーン種、オウルベア種、重砲幻獣によるスクウェア…密集体型による、
砲撃の開始であった…

それまでは基本、ミノタウルスやデーモンによる強引な蹂躙突破、で思い出したようにミサイルを後ろからうってくる…だけであった…

そこに王によるペンタへの指示、ペンタへからの統率により…

人類はより一歩崩壊への道をたどる…という事になる。

そこで俺は、生体ミサイルに襲われて混乱している場所からの、ス

カウトを目論でいた…

しかし…甘かったようだ…

「そっちはどうだ？」

「生体反応なし」

「ここも駄目か…」

生体ミサイルは降り注ぐと爆風と強酸の嵐を降り注ぐ…

「マスターまだ回る？」

「ああ……」

カオルは１４箇所目に行くのを決めた。

（しかし…諦めて、次の時間に行くかな…）

最終目的の烈火が必ずある場所にだ。

が、弘前岩木川南岸の砲兵陣地で…

「マスター生体反応微弱3！生きてる！」
駆け寄ると…強酸にやられたのだろう…
火傷でただれた状態で…顔もただれている人や、
髪の毛が抜けている状態や、
手がとけきった
…女性兵士達がいる…

虫の息だ…
急いでカプセルを3つだし、それぞれ抱きかかえ…
カプセルに入れる。

彼女達を下ろした時ベリっと皮膚がつく…

カプセルを閉じ、ロックして、虚数空間に収納した…

カオルは人の皮膚がつき、体液だらけになっていた……

「11号、5号、もういいだろう…次の時間へ行くぞ”世界扉”」

……

カオル報告

特に無し

第３３話　ガンパレ編２　＆ｑｕｏｔ；弘前防衛＆ｑｕｏｔ；で…スカウト計画

○［たすかるでち？］

作者「助かるだろう……」

○［またオリキャラでち？］

作者「うんオリキャラだなぁ」

○［せつていは？］

作者「ある程度は考えてる…が性格つけとかが…
だからごく一部がメインにくる程度」

○［にげまちた？］

作者「もちろん逃げたよ」

○［ところでなちて、ひろさきぼうえい？］

作者「ん～あの爆破で、
倒壊建物の下にいてもおかしくないし、と思ったから…さ…」

○［ひょっとしてなんこう、ちてました?］

作者「1番この回がしてたなぁ…
次回はどう削るかで…というか、次回の結構時間とんでておかしいだろが、原作にあるんだよ…まぁ…ん～とおもったけどな…」

○［つまらないあとがきでちゅみまてんでちた］

第３４話　ガンパレ編３＆ｑｕｏｔ；極東終戦＆ｑｕｏｔ；に取得しに行きまし

＝＝　ガンパレ世界青森駅前　＝＝
現地１月１９日午前６時

世界扉を開くと世界は一変していた。

すぐに世界扉を閉じる。

辺りいっぱい、幻獣の海だったからだ…

万が一くぐられると厄介である…

青森駅周辺は、幻獣側に陥落し、
あたり一面焦土となっていた…
夜の闇ではあるが、
建物がないのだ…

もちろん青空市場等も…

地下にあった市場街は、瓦礫に埋もれている…

「シャムシエル」

カオルは一路八戸へと飛んでいく…

＝＝　八戸　＝＝

八戸近郊に差し掛かると、朝のまだ闇の中、
フォーンというホイッスルのような風切り音をたてて、
スキュラによる特攻が始まっていた…

この特攻は、操られ、自由の効かないスキュラによる質量兵器としての特攻だ…
西の王の得意技…

数にして百を下らないスキュラ…
対空砲火が上がり曳光弾が火線を形成し、次々と打ち込まれるが…

高空から勢いに乗って、突進していった。
中には進路をそれたのもいるが…

次々と市内で火の手があがってる。

質量で特攻し、衝撃、爆砕…

恐ろしいものである…

スキュラ特攻終わったあと…
市内各所では展開済みの陣地群が、壊滅的に陥っていた…

各所で悲鳴等がきこえる…

地上におりると衝撃の凄まじさがわかる……
ビルは倒壊し、直撃を受けた陣地では人は五体満足ではない…
手は飛び散り、内臓もみえ…首は転がっている…
それに殆どが炭化しているのだ…
また強酸を浴びただろう、者も外側にはいて死んでしている……
苦悶の表情の状態だ…

「マスター、生態反応微弱1、瓦礫の下」

「スカウト対象だな…」
瓦礫の山を一つずつのけると…
若い女性兵士が見つかった…
（四肢は無事か…内臓系かな?）
カプセルをだしながら思って、カプセルにいれ、虚数空間に置いた。

「後は?」

「ここら辺近辺だと…表だけかな…後の生態反応は…」

つまり、救助される可能性がある…

案の定、救援部隊がきはじめて、救助活動をした…
が、瓦礫のほうは捜索活動をせずに走りさっていった…

市内各所がこんな状態である。瓦礫の下を時間かけて捜索するより、
より多く回ったほうが助けられるのである…

またウォードレスを脱いで瓦礫を除去や重機を持ち込まないと…
…だから危険極まりもない…

原作の一之瀬小隊は恵まれていた…

「次、回るぞ」

しかし、市内各所回り始めたが、中々瓦礫の下の生態反応は見つからない…
殆どが絶命していた…

そんな中、
「マスター反応微弱あり！」
１１号がいった瓦礫をのけはじめる…
またもや女子兵士…やはり若い…を見つける。

カプセルをだし、これも内臓にだろう…いれ、虚数空間にイレ込む。

「次行くぞ」

しばらく回ったが、市内各所の被害箇所も落ち着き、
壊滅状態に陥った陣地は、
生き残りは別の陣地に混ざる等をし始めた…

が、回ってみたが、市内配置陣地はほぼ壊滅的…
司令部にワイトが侵入したのも頷ける話だった…

これいじょう、見捨てられた生態反応がなさそうなので、
市役所を目指した…
隣の補給センター内の烈火が目的であった…

潜り込み…
「バルディエル」
同化、解除

最大目的は取得し…

で、この世界の戦いに集中しようとした…

此処からは意地とプライドの戦いになる…
１０４号線及び４５号線をめぐっての戦いであった…

市内の至るところにミサイルネズミが潜み、デーモンを狙いミサイルを放つ。

七十四式戦車の１０５ｍｍが火をふく。
六十一式戦車の９０ｍｍも火をふく。

装甲戦車車の３５ｍｍもフルオートで放たれる。

上空では迫撃砲から放たれた留弾が、空をおおいつくす。

そんな中、火線をかい潜ったデーモンが肉薄し、パンチで戦車を潰す…
そのデーモンは他の車両にしとめられる。

しかし、物量にまさる幻獣は、次々現れる。
そのデーモンを一筋の風がないでゆく…
穴があき、崩れ…消滅してゆく…

前線より突出する為の栄光号による射撃だ…

栄光号が前に出ると圧力が弱まる為、その合間に弾の補給をする…
が、

栄光号が補給の為に下がると、また圧力が強まり…

人類にとっての消耗戦がまた始まる…

幻獣はいつきれるのだろう…

「ねぇ…マスター…」

「ん？」

「これ…本当に人類が勝つ話なの？」

「ああ」

「そうは思えないなぁ…」

「どうしてだ？」

「だって、人類側の戦力って、生産しなきゃならないんでしょ？あと育成…」

「だなぁ」

「有限じゃない、対して幻獣は制限なさそうだし…正直、人類が負けると判断しちゃうよ…」

「結論からいうとなんとか破綻点前に、ギャンブルに勝てた…というべきか…あとは、気力でだな」

「気力か……」

そう、１１号の通り、人類は正直この場面をみると押されている…

まだ砲撃種が市街地内に来てない分まだよいほうだ…

岩国のような、歩兵有利な防御施設もなし、
発見や逃げ遅れた歩兵に対し迫るデーモン…

また極めつけは新種のワイト…
遠目には味方と思え、招き入れて殲滅させられた陣地もある…
隠蔽を好む歩兵にとってもかなり危険な戦場であった。

が唯一の希望が、人型戦車でかける５１２１の属する芝村支隊、また司令部の荒波及び直下部隊である…
エース・オブ・エース…
驚異的な撃破数をたたき出している。

しかし、彼らは人である…人である限り…疲労は蓄積する…

補給の為に後方に下がったりしてるうちに、圧力が加わる為、まだローテーションを組んでいる芝村支隊はともかく、

荒波司令及び直下部隊、が補給に下がると……
圧力がまし被害が増える…
つまり人型戦車による局所的な勝利、
それ以外はじり貧…の状態だ…

気力が持たないだろう……

が、それを支えるのが後方のロジテック…

熱々のカレーの仕出し等で兵士の士気を支えるものもいる。

ストーブをガンガン炊いて寝床をしき、疲労を回復させる。

俺は現場でのある兵士の気迫に圧倒されていた…

その兵士は足を負傷し、動けない状態にいた。いや負傷は甘い表現だ…足を失ってなんとか生きていたのだ…

ももから下が…

彼はももの切断部分に紐で血止めをしたのであろう、紐から先が壊死しかかっている…

その者は腹に爆弾を抱えて、ビルの中に隠れていた…

「マスターあの人…」

「ああ、彼は、自分の意思で……」

デーモンの集団が３０程、その回りをワイト、コブリンが固まって、

ぬっと現れた…
彼のいるビルに近寄る…

ズシンズシン

モールのように縦隊を組む癖のあるデーモン、

先頭はやり過ごして……

彼は目をつむって感覚で感じているのであろう…

ズシンズシン

縦隊の中程に差し掛かろうとした時、

彼の表情はニヤリとした瞬間

光を放ち彼は細切れになり、ビルは弾となり、縦隊に襲い掛かる。

近くにいたデーモンは爆発の餌食になり、その先にいるデーモンは、
瓦礫弾に貫かれる。

瓦礫弾は貫くと強酸を纏い飛び散らせる。

小型種は味方が盾となったが、デーモンからの体液がかかり、死滅
してゆく…

そう、彼は自分の身でもって、デーモン半数以上、小型種半数以上を死滅に追いやった。
また残ったのも体液がかかり、少なからず損傷を受けている状態だ…

「人の最後の気力…」

海の方では、同盟幻獣であろう、スキュラ集団が、レーザーを戦場に打ち込んでいる。

また、護衛艦集団からも砲撃がくわえられている…

海岸沿いの方は市街地内よりかは、マシな戦況であった。

砲撃種はそこで消滅している。

しかし、人類は追加戦力もない、そのような状態で、
４８時間を戦いぬき、大損害を与えたものの、
消耗に消耗を重ね、とうとう市街地内に砲撃種も浸透しはじめた…
力負けしたのである…

その４８時間の間、カオルは記録映像を残すのみだった…
スカウト条件にあうのが、いなかったのだ…
死ぬまで戦いぬき、
それでも人類は力負けしたのだった…

残った市内戦力は新井田川の対岸で…

逃げ遅れたミサイル歩兵が市内の至るところに潜む状態になる。
息を潜め、時には待ち伏せ攻撃し、時にはやり過ごし

豊洲が人類側の出島の形になっていた…

市内にかかる橋は遠隔でとうとう爆破され、押し寄せる大群は豊洲に渡ろうと頑張っていた…

……撤退が遅れたのであろう、市役所がデーモンに目をつけられ…
市役所ビルが殴られた！！
ビルが揺れる…
護衛してたであろう歩兵から、ミサイルが浴びせられる。

デーモンはいくらかは死滅したが、
ワイトやコブリンの集団が中に入ろうとして、入口入ったところで戦闘がおこった。

生き残っているデーモンの殴りの衝撃は凄まじく、倒壊の危機に陥る。

そんな中、栄光号1号機、3号機が戦車、装甲戦闘車を引き連れ…
デーモンを殲滅。

「こちら芝村支隊である」

入口にいた小型幻獣を殲滅し、司令部要員を豊洲へと移送していった…

芝村支隊についてゆく…

豊洲の芝村支隊の拠点では、
凄惨な戦いを何とか生き延び、拠点にたどり着いたのであろう、
ミサイル歩兵の姿が沢山みえた…
が殆どが気力尽きたのだろう…
精神崩壊の兆候がみられる人もいる……

歩兵もこの状態、出っ放しの人型戦車のパイロットも疲労がかなり溜まって…案の定、
救助活動を行った一号機から壬生屋が担ぎ出されていった…

多分、ここに今共生派がきたら…探知はもうできない状態だと思う…
かなり限界まで来ているのだ…

「マスター、戦力的にそろそろというか、超えてるんでしょ？」

「ああ、また後方に下がるんだよな…」

夕刻…その豊洲でも戦いに戦いの疲労、損害の為、

戦線縮小、撤退すると同時に幻獣側の手に落ちる…

そして、人型戦車は出撃しては局地的な大勝利を繰り返す…の形で夜の闇の中になる…

現地　1月22午前2時

「マスター…本当に本当に本当に勝つの？」

「た…ぶん」

「戦力として残ってるの、あそこだけじゃん。しかも、疲労の極み？」

「が…吹雪がやんで…からなんだよ…」

突如として、地上攻撃機の編隊が爆装でもって飛来する。

「ほらな…これからだよ」

「なんで、今までださなかったのかなぁ…」

「ジェット燃料がないから…これがラストの大盤振る舞いだそうだ

…」

炎の絨毯は業火となり、なめつくす。

３０分後市内西側から火の手があがる、

八戸自動車道路、３４０号線、１１号線から、反撃の狼煙があがる。
人類側最後の増援部隊、第三戦車師団、十四師団、二十一旅団が攻撃を仕掛けたのだ。
また、川の東側にいる芝村支隊も川を渡り始める…

市内は一気に乱戦模様になる…

弱いところは押され、強いところは蹴散らす…

デーモンも逃げに入る集団もいる…

そんな中…

「マスター西から…」

「西？」

「４号線南下中の幻獣、中型種、砲撃種編成、数１５００相当、１０４号線に入ると思われるよ」

物語内にない記述である……

「ちょっとまて、それなかったぞ…側面から、そんな数襲い掛かられると…」

「負けるね…」

そう、側面から攻撃をくらい、増援部隊は壊滅、芝村支隊だけになり……

芝村支隊は、八戸が支えられてたこそ、パンツァーカイルを仕掛けたのである。

神の悪戯だろうか……

（どっか影響あたえたんか??……）

与えました…

初日ね…あのゴブちゃん達…

またラストに視認してたし…

（……物語完結の為にしかけるか？？）
幸い幻獣からは視認できてない…

はっきりいって、この集団が邪魔なのである…

「多分殲滅しなきゃ…駄目だな…仕掛ける！！」
カオルは４号線を南下してきている幻獣の集団へと…突入する。

「ブレード！！」

カオルは蚊の姿のまま飛行し、
高周波ブレードを道幅いっぱいに展開する。
で、低空飛行に入る。

苦労して山道を進んできた幻獣には悪いが、長い隊列のまま……
１番機のように四肢とはいかないが、
足を刈りとるつもりだ…

幻獣にとっては見えない刃が襲ってくる…悪夢であろう。

精神波を感じた…
（ペンタか…）
「アルミサエル」
精神波を逆走し掌握。

そして…先頭にいたデーモンから…順にすねから下部分を、刈取られ…

前がなんか変だと認識する前に刈り取られ…

１５００の幻獣の集団は、動けぬ運命となった…

デーモンはまだ前に行こうと両手を使うが、
オウルベア、ゴルゴーンは、足を失い、転倒し、もがいている。

カオルはとどめとばかり来た道を引き返す。

見えないブレードを縦にして…

真っ二つにさかれ、死滅する幻獣達…

そして、縦のラインをそれてなを生きている幻獣に、一匹一匹切り、
ペンタも切り…

４号線の戦いは終わる…

卑怯だと思うが、ペンタだけは厄介だった…
西の王への連絡である…

「卑怯王～」

「……5号あとでｏｈａｎａｓｈｉしてあげるから…」

そして、

「マスター海岸の方から…」

「始まったか…」

パンツァーカイルによる芝村支隊の北上…

物語の終着点への道のりの開始である…

「うっし、見に行くぞ」

「はい、マスター♪」

下田百石ＩＣ付近　現地1月２２午前5時２０分

星空の元激戦が展開しあっていた…

先祖返りしたかのような殴り合い…

またデーモンは四肢を切り落とされ無力化放置され…

嘆いているのであろう…で消滅してく…

が一号機が、倒れあわやというところで、矢吹大隊の戦車が援護にはいり、衛生兵がかけよったのみえた…

再起動……

気力の限界までまた戦う修羅になっていく…

しばらくすると……
幻獣側が気力尽きたのだろう…
耐え切れずに…一斉に背をむけ退却し始める…

追撃してゆく芝村支隊……

「マスター…」

「ああ、勝ったな…市街地へともどるぞ」

「はい♪」

八戸市街地　現地1月22午前6時半

夜が明けようとしている…
それまで市内各地で砲撃音があがっていたが…静寂が訪れた……

市内各所に隠れ戦っていた兵士が…敵の姿を探して一人また一人と
瓦礫の中からはい出てくる…

そして途方にくれ味方の兵士の姿を見つけ、話あってる姿がそこら
かしこで見える。

生き残っていた戦車からもハッチから索敵し…発見できてないよう
だ…

そして…大量の足音がこだまし、次いでエンジン音と銃声がこだまする…

小型幻獣の大群がそれまで襲い掛かったのに、わき目もふらず通過してゆく…

戦闘車両の機銃が火をふき、戦車も我に返ったように追撃し始める。

「終わったか……」

「ですねマスター」

「記録映像もとれた事だし…帰るぞ」

「「イエスマイロード」」

「”世界扉”」

ん？なんか忘れてるって？
まだ登場は無理です…
もう少しおまちを…

第３４話　ガンパレ編３＆ｑｕｏｔ；極東終戦＆ｑｕｏｔ；に取得しに行きまし

作者「ガンパレ編おわったぁぁぁ」

○［おつかれさまでち］

作者「さて、この後が…国連総会へか……」
プロットをみる。

○［さくしやたん、ふくせんかいしゅう］

作者「お、ああ……これか」

石橋「あたしもはやく出せ！！」

作者「イッシー、呼んでないぞ今回は」

石橋「作者が別世界行きさせるから、あたしの出番がないじゃないの！！」

作者「むぅ……お前Ａ－０１所属だしなぁ…」

石橋「ねぇ〇、〇からも頼んでよ」

〇［さくしや、いつしーさんをだしてあげてくだちやい］

作者「……次回でる予定ないぞ」

〇［だめ??］

作者「……」

〇［おねがい］

作者「……わかった！だぁ可愛いなぁ〇は」

と一気に抱き着きほお擦りする作者。

こわれました…

第35話　ガンパレ世界より帰還後　投稿日20110108

2001年6月15日
＝＝副司令執務室＝＝

世界扉が開かれ、カオルが出てくる。

「あらお帰り…田中さんが待ってたわよ」

「カオル様、お帰りなさいませ」
かなりホクホク顔…どんな取引になったのやら…

「と、じゃあ元の世界に？」

「お願いします」

「ねぇ…田中さんがいるんだから、なんか名称つけ必要でない？」

「あ～……なんか良い名称つけないっすか？副司令～」

「そうね……この世界は天才香月の」

「却下」

「なによーいいじゃない…」

「真面目にお願いします」

「そうね…オルタネィティブ４完遂する世界、オルタ４の世界でどう？」

「まぁ…安直ですが、それにしますか…」

「田中さんの世界は、平和日本でどう？」

「どっかの政党みたいっすが…意味は通じますね」

「じゃあ、決定ね」

「それでは”世界扉”」

で、アテンドし帰ってきた。

「報告ですが、目標の烈火ほか、訓練生が5名加入ほか、希望を確認してませんが、負傷者を9名確保しました。」

「あ～紹介はいいわ、そっちでやって頂戴」

「それで大丈夫です？」

「ええ、ただし、部屋等はそっちで用意することね」

悩んで…
「なんとかなるでしょう」

「ところでパラドックスは大丈夫なんでしょうねぇ？」
「今回の世界は大丈夫ですね、オリジナルヒューマンは一人だけですので…」

「一人だけ？」

「みんな作られた人の世界なんですよ…なので、ＤＮＡ上、大丈夫です」

「…そのようね…あとでその世界の資料を」

「あ、映像なら今、渡せますが…」

「……頂戴」

「１１号、２２号にコピーを、で２２号にビジョン再生してもらって下さい。
まるまる再生は９０時間かかりますので、
高速をオススメします」

「わかったわ」

「自分からは以上です」

「帝国開発局から陽炎ありがと、とそれ以外のは？だって」

「あ～了解」

「あとは、ないわね…お兄ちゃんの件は国連総会がおわってからね」

「了解です、じゃあハンガー行ってきます」

＝＝Ｂ５５ハンガー＝＝
イッシーと、Ｂ－０１がいる…
「カオル～お帰り」「「少佐！！」」
敬礼のＢ－０１

「あ～いいよ…敬礼は…ただいま♪」

［ただいまです～］

「あ、誰か５号にｏｈａｎａｓｈｉよろしく」

［ひぃぃぃ］［［［［イエスマイロード］］］］

連行される５号

「さてと、まずは加入者だな…」

「あ、やっぱり？……女性？」
なんか、不機嫌顔な石橋

「まぁなっと…」

シェルターごとだし、扉をつけ、

コンコン「着いたぞ～準備できたらでてきてな～」

「……つくづくカオルの能力って便利ね」「どのくらいはいるかなぁ」「地球？」

なんか後ろで喋ってる…

「あとは瀕死の人たちか…」

「え？瀕死？」

「ああ、プラント製の医療カプセルが、うまくいってればいいが…」

石橋は少し青ざめ、マギーは呼びにいった…

カプセルを並べて…

（うん、作動できてるみたいだな…）

潰れてた四肢は再生、火傷を負ってた人も再生。

髪の毛抜けてた人も生えそろっている。

顔がただれてた人も再生…あ、上半身素肌が…＜バキュン＞ピンク…

「１１号、衣服！！」

「あいあい」

石橋横から覗き込んで…

「カ・オ・ルちゃん…これって…」

「強酸で火傷負ってた部分を再生したんだ……」

「え？強酸……素肌見えてるとこ全部？」

「ああ、酷かったよ……」

「そう…」

カプセルの状態…回復作業終了

覚醒可

石橋とＢ－０１は訓練にもどっていった…

何か放置してるから伊隅さんが一緒にやってるらしい……

そのころシェルターから出てきた訓練生はＭＳに圧倒されてた…

カプセル覚醒モードに切替、半透明の蓋が開くと、

プシュー

と煙が下に流れる…

呻き声や、ここは?の声が聞こえ…

１１号は、強酸の子に衣服｛白衣｝を置きにいった…

「隊長!!」

あ、広田団地のは知り合い??

「ようこそ異世界へ…俺がＢ－０１、異世界部隊の責任者である、国連軍横浜白凌基地所属、渚カオル少佐です」

「幻獣は?」「ここはどこ?」「異世界かぁ…」「人型戦車?」「バンダム?」等など…

「え～と…1番上は隊長さんです?」

「ええ、わたしが1番上のようです」

「あ、じゃあに、質問纏めて下さい…聖徳大使じゃないので…あと、この世界説明は」
ビジョンにＤＶＤをながす
「こちらの映像をまず見て下さい。
自分は、彼女らを案内しますが、映像終わるまでには戻ってきます。
また何か途中で質問ありましたら、この者に聞いて下さい」

［僕に聞いてね］

「は、はぁ…わかりました…」

で、…とりあえず格納庫のＣ２に作っておくか……

「学兵さんいくよ～」
学兵さんがついてくる。

「あ、ところで君達は…何になる予定だったの？」

「あたし達は人型戦車のパイロットになる予定でした」

「ん～人型戦車か……こっちでは作る予定ないから…どうしようか……」

「目の前にあった人型戦車は？」

「ああ、モビルスーツの事ね」

「はい」

「……操縦方法違うけど…あれにのる？」

「「「「「はい！」」」」」

「ん～まぁ考えとくよ」

C2にシェルターまきまき、扉をつけて、仮設住宅にして…
学兵さん呆然中。

「じゃあとりあえず仮設住宅って事でここにいてね。
もう一組に説明してくるから」
返事がないなぁ…

で兵隊さんへ…見終わったみたいですね…

「おわりましたね。何かわからない点ありました？」

「我々がスカウトされた…経緯をお願いしたいのですが…」

「広田団地の件は何処まで覚えてまず？」
ザワザワ
別の兵士さんが、
「隊長、爆破があり生き埋めになった…までは記憶あります」

「うん、その通りですね。で俺は、芝村支隊が救出活動終え撤退後、
爆破された建物の下からあなた方４名、
及び、翌日砲撃うけた陣地から３名を、
その後、八戸戦線でスキュラの特攻で瓦礫の下敷きから２名救出し、
瀕死から回復させたのですよ」

「つまり我々は…あのままだと…」

「ええ、死んでいましたね」
で医療ログを渡す。
みる中尉、またみんなにも渡す。

「ですので、あなたがたの世界での死という運命に影響しないよう、
異世界にて、お願いできればと思ってます」

「あなたが、我々を助けた…で間違いないですか？」

「はい」

「これでただ帰っても恩は返せない……一つ質問が…日本は幻獣に」

「ええ、あなた方の緒戦の踏ん張りが、時間を稼ぎ見事終戦し、青森は取り戻しましたよ」

八戸戦線の子たちから、

「あの状態で勝てたのですか??」

「ええ、記録映像も取れたので後で見せる事も可能です。最後に芝村支隊がやってくれましたよ」

喜んでいる八戸戦線の人達…

「わかりました…私は、この異世界で頑張りたいと思います」

「隊長」「わたしも」「はい！」「砲兵隊も同意します」

「元の世界に戻りたい方は……いますか？」

……

「わたしは隊長についてきます！！」「同じく」「右に同じ」

「おまえら……１０４５独立混成旅団、桜井歩兵小隊は渚カオル少佐の指揮下に入る事を宣言します！！」

「八師団３２連隊砲兵３名も、渚カオル少佐の指揮下に入ります！！」

「１１８警備師団佐藤千翼長も同じく」

「１１８警備師団石井千翼長も同じく指揮下に入ります！」

「よろしくお願いします」

「では宿舎なのですが、流石に所帯や機密情報などありますので、後ほど引越し等ありますが、格納庫の方に用意してます。１１号案内よろしく」

ついてく、６名…？

桜井隊長、佐藤、石井が…

「死んだ者も…死ぬ前なら…なんですよね？」

「ですね、ただし条件が…いくつかはありますが…」

「陣地が生体ミサイルで爆散等やデーモンに潰されたは…？」

「そこから生き延びた人がいなければ、直前にほうり込んで逃げれば……可能ですね…そこにいた人全滅なんです？」

「ええ…」

「私たちの方も…」

（ふむ…体制整えたらいくかな？）

「ちなみに場所は…？」

「五所川原市内のビル陣地です」

「私の方は、指揮をとる前に…木造で…
正月に友達の家に遊びにいってなければ…」

「私の方は、五所川原への移動中、小休止で離れたら、きたかゼゾンビに…」

（あ～1月3から4日か…）

「わかりました…こちらの準備が整い次第…にでも…」

「わかりました…是非ともよろしくお願いします」
「お願いします」
「あの子達をお願いします」
隊長さん、佐藤さん、石井さん、去っていった…

さて、格納庫状況はっと……

優秀優秀、工事終わっていた♪

これで戦艦の整備解体スペースも確保できた♪

で…ＭＳハンガーのあるブロックの上下に、
１ｋｍ×１ｋｍ×４５でまた空間を作るように命じた…
Ａ１部の端側にループ状の移動経路及び、そのループの真ん中に反重力エレベーターをつけてっと…

上は居住区画、下は資材区画の予定…

とりあえず平和日本にいき、レオパレス系ワンルームマンション必要だな…と思い始めた…

先に作業っと

ホバートラック４両完成
陸戦強襲型ガンタンク２０両完成
残り２８機

コバッタは２５４号
ヤドカリは５２号

ってとこで作業終了

試作品テストは明日だな…

ふと思い始めて、１１号に

「11号、ひょっとして…プラントって…ゴミを資源に変えられる？」

［うん。変えられるよ。あったり前じゃない］

…プラントまさにチートだ…

「テレビとか入れると？」

［基本、有毒気化する物以外は、それぞれの資源に分解される。有毒物質は適当なのに変化されて出てくるよ］

（あ、産廃業できるじゃん…で、資源化して平和日本に卸せば……）

「生ゴミとかは？」

［発酵が進んで堆肥となって出てくるよ］

「人が…とかは？」

［前事故があったみたいだけど、ミイラ化して出た例もあったよ］

……立ち入り禁止区画化決定……

冷蔵庫等は戦艦に使われてる、アナハイム製が優秀だから、大型倉庫化すればよいか…

水循環や、空気システムは戦艦のを流用するか…

１１号経由で　寮をコピーしてきます～で伝えて…

「”世界扉”」

＝＝　現実世界　＝＝

「バルディエル、”幻影”、シャムシエル」

レオパレスをコピーに探しに飛び出しました。

（確か、３階建のが……あった）

「バルディエル」
同化、解除

で、お隣りの３６階建のタワーマンションも…
「バルディエル」

同化……解除
そのタワーマンション施設の中にスパも入ってたか…

あとは、駅前のコージコーナーで買い物してくか…

コインロッカー裏に着地し、「〝幻影〟」フランクリン・ビタンの登場…

「いらっしゃいませ～」

「と、生シューを…（何人だっけ?…）１００個」

「は、はい…１００個でよろしい…ですね?」

「はい」

「お持ち帰り時間は…?」

「2時間程で…」

「少々お待ち下さい」

裏に入っていった……

「会計よろしいでしょうか?１１６００円になります」

ポッケ内から虚数空間にアクセスし…

3枚だす。

「はい」

「１２０００円お預かりします……お釣り４００円となります。…ただ今ご用意してますので少々お待ち下さい」

少し時間がかかってる…

「お待たせしました～…持てますでしょうか？」

紙袋４個になったなぁ…次は誰か連れてこなきゃな…

「うん…大丈夫ですね」

「ありがとうございました～」

コインロッカー裏に入り虚数空間にいれて…

「”世界扉”」

シーン

「あ、あれ？”世界扉”」

シーン

（……？何故？……あ、消してなかった？？やば……）

「”幻影”シャムシエル！！」

誰かが潜ったら…になる…焦った

「バルディエル！！」
同化し、俺の部屋…
（あ～消してなかった……）
「バルディエル」
一回家と同化し…
（内鍵しまってるか…なら、こっちから出たのは居ないなぁ）
解除
で潜る…
＝＝　Ｂ５５ハンガー　＝＝
「１１号ただいまぁ～」
世界扉を消す。
［マスター、お客様ですが］
「ん？？誰よ？」
「お兄ちゃん！！」

来ちゃたよ……

カオル報告

できにゃいいいいいい

第３５話　ガンパレ世界より帰還後　投稿日２０１１０１０８（後書き）

作者「さぁ来ちゃいましたねぇ……」

美幸「美幸で～す。皆さんよろしくぅ♪
年齢は１４才、衛士やってま～す」

作者「うぉ…ちゃうだろ!!ほれ設定書」

見る美幸……

美幸「あ、間違えましたぁ～、中学生ですぅ」

作者「まったく……お前の設定変えるぞ?」

美幸「え?どんなふうに～?」

作者「実は、男性だったとか…」

美幸「ん?むずむずする……／／／／／／な…キャーー!!」

股下を触った美幸。おさっし下さい。

美幸「な、…な……ついてるぅぅぅぅ～～」

作者「ほれ、戻したぞ」

恐る恐る股下したを触って…ほっとする美幸…

作者「まぁ、このまま男性でいったら、カオルとのが面白くはなるなぁ……」

美幸…ゆらゆらゆら構えて。

美幸「作者の馬鹿ー―純夏ちゃん直伝ドリルミルキーパーンチ！！」打ち上げられる作者……

作者「純夏は…ま……ま……だ……」

作者チーン

第３６話　来やがった……　投稿日２０１１０１０９

＝＝　Ｂ５５ハンガー　＝＝

「み、美幸……」

「ここ、凄いねぇ…ガンダムのモビルスーツ沢山あるのね～」

「”世界扉”…いいからかえれ」

「え～なんでよ～」

「あのなぁ…」

「だいたいお兄ちゃん、たびたびこっちにきてるじゃない、別れを悲しんだの馬鹿みたいだよ…」

「う……」

「それにごまかす身にもなってよ、騒がしいったらありゃしない」

「……何もいえねぇ……」

「言ってるし」

「うっせ」

「だから、今日はここにいさせてね～別世界のって興味あるし～♪」

「……明日には帰れよ」

「わかったよ～お兄ちゃん大好き♪」
抱き着いてくる美幸。

カランカラン…
（ん……イッシー…）

ズンズンズンムギュ

「カオルＯＨＡＮＡＳＨＩしよ」

「ちょっとまってよ、おばさんだれ？」

「な、お、お、おば…さん？…な、なにこの糞餓鬼がぁ～」

「ちょっとまったぁ！二人とも落ち着け！！」

「ロリコン」
タバタ……

「お兄ちゃん、小学生に手をだしたの？？」「カオルさん、あなたロリコン？？」

「ちょっとまったぁぁぁぁ」

カオスになる……

「え～とつまり、カオルの、元いた世界の、生きていた時の妹さん…でいいの？」

「お兄ちゃんの同僚でいいの？」

「ああ、二人ともわかってくれたか…」

「ところでお兄ちゃんって、ここでの何なの？」

「ん……（そろそろ消灯時間か…）もう夜遅いから明日で良いかい

？」

「……わかった、明日ね」

「あ、じゃあ、カオルお休みね。美幸ちゃんも」

「あ、まった！あぶないあぶない…」
虚数空間から４袋出す。

「イッシー、タバタ悪いがお土産で配っておいてくれ」
で、袋から学兵、兵士分の４パックはだして後を渡す。

「中身何？銀座コージコーナー？？」

「洋菓子やさん。ようはケーキやさんで、お土産はジャンボシュークリーム」

「え？……うんうん♪いただきます♪」

「全部は駄目だからなぁ～。６０入ってるから、
副司令、霞ちゃんの分含めてちゃんとわけて配ってな」

「ありがとうね♪」

「さて、美幸は3つな」
（シェルターあいてたよな…）

「あ、美幸、お前はどうするん？シェルターは一応あいてるが」

「じゃあそこで、おねがい」

「こっちだよ」

シェルターに案内し、ガンパレ組にシューをわたす。

で就寝。
２００１年６月１６日

美幸は夜かえるってききやしない…しょうがない…
「”世界扉”」
携帯メールが入ってた…第１便が午後には整います…か…

返信、
コンテナでおねがいします。

……

帝国側への連絡ルート聞いてねぇｏｒｚ…
１１号、副司令経由で引き取りと、連絡先よろしく…と伝えておいた。

格納庫…ジオフロントに命名状況。

上下層ともＡ２までできたから、

下層は中層の資材置場を移動。

で上層はＡ１を寮、Ａ２を維持環境系にあてる。

まずは寮の建設か…

データーのあるレオパレスを参考に…
１階層片面１６部屋、両面で３２部屋
１０Ｆ建１階層４００ｍｍ内装３１０ｍｍ
エレベーターを中央に反重力
サイドには階段

１ＳＬＫシャワートイレ付き、ＫはＩＨに変更
内装は、フローリング
テレビ、デマンド放送局Ｔｕｎｅｒ、ベット、テーブル、ワークデスク、イス、ケトル

水、お湯か…屋上での湯沸かしに変更、
屋上タンクで、上下水道は建物の床下はわす。

「バルディエル」
実際に建ててみる…
通路はＴの字で確保して…Ｂ５５ハンガーからみると逆Ｔか…
通路と建物間の空間確保すると…3棟か…
１ブロックに９６０人…
十分か♪

建てたあと、鯖に寮の基本形で書き写す。
Ａ２ブロックか…下水再生処理施設をアレキサンドリアのを利用して…

試しに汚水処理したしっこを飲んでみた…
いたって普通…
味しないなぁ…

水循環システム完備と…

空気清浄化システムも設置と…
核融合発電所と…

その上の空間部分に共同浴場を作るか…

やっぱりでっかいお風呂だろ♪
男女ともに、５０ｍ×２５ｍ

なんやかんやで風呂が１００ｍ１００ｍきっちり埋まってしまった…

Ａ３できたら　専用ＰＸと食材倉庫つくるか…

「お兄ちゃん…コロック？というか、やっぱり人外ね」

「コロックだなぁ……」

「ところでお兄ちゃん、風呂入りたいんだけど…どういけばいいの？」

「ん？……あ、」

スパ施設への進入路つけ忘れてました…

階段と反重力エレベーター２基設置。

「ありがとう♪入ってくるね～」

スパ施設要員として１０１号から１０５号までをつけました。

１０６号から１１０号までを維持環境メンテナンス要員につけました。

（さてっとシェルターから引っ越ししてもらいますか）

でＣ２にきて、あ、学兵さん荷解きしてた……

もういっかい荷造りして上層に寮できたから移動してね～で伝えて、

ガンパレ兵士さん達に移動して貰おう。

「隊長さん～」

「あ、カオルさん」

「寮できたから、みんなに移動するよ～って伝えて～」

「わかりました」

きのみきのままだったから、早いなぁ…

「あ、そういえば衣類……でしたね」

「はい…」

「後で調達してきます」

（美幸と…イッシーか？伊隅隊長にかりるか…？）

「ではこのエレベーターで上層に移動します」
フィィ

「つきました。で、この建物ですが、１棟３２０名住めますので、１番手前の棟の１階部分を使用して下さい」

「わかりました」

「各部屋ともＤＮＡ認証です。部屋のロックパネル部分に手をタッチして下さい。
」

隊長パネルにタッチ。

『認証しますか？』

「新規として認証」

『居住登録すみました』

「こんな感じですね。あと部屋に入って頂いて足りないものありましたら、
まぁ衣類以外ですが、…
でこの後、衣類も用意しますので身長、股下、スリーサイズ、
あと女性ですので胸のブラサイズの申告もおねがいします」

「わかりました」

「あ、隊長さんこの後学兵さんもくるので、彼女達も同様に案内おねがいできます？」

「了解です」

「”世界扉”」

田中さんの携帯コール中

『カオル様？ご用件は何でしょうか？』

「ちょいっと質問なんすが、衣類等も揃えられます？」

『あ、はい可能ですが…それ以外の生活必需品も格安で揃えられます』

「もう少ししたら詳細でますので、メールでリスト送ります。何時間程で可能です？」

『そうですね……ブランドや、特別サイズなければ1時間程で可能です』

「わかりました、キャッシュで支払いを…じゃあ、後ほど…」

「ひろかったぁ～♪」

美幸が出てきた。

「少佐リストがでました」

隊長がきた。

「このおねーさま…どなた?」

美幸、人によってかえるやつ……

「少佐、この民間人は…?」

「ガンパレから来た桜井……下を伺ってなかったなぁ…歩兵さん。こっちは俺の元の世界の妹…開けっ放しにしてたら来たんだ…」

「桜井　真理です。よろしくね」

手を差し出す、桜井隊長

「堺　美幸です…あ、あの…握力沢山あるんですよね？」

「大丈夫ですよ」
恐る恐る手を出す美幸。

「ん？握力あるって？？」

「おや、少佐知りませんでしたか？私どもは幻獣に対抗するために、遺伝子的に改造された世代です」

「あ～なんかあったな…」

「私ども第六世代は、握力平均４００ｋｇ、骨格も強化されてますから…妹さんは潰されるんじゃないか？と思ったのよね？」
うんうん頷く美幸。

「ですが第四や第三世代もいますので…
そんな中で、手加減できないとゆう事は、ありませんから」
リストを渡してくれながら喋ってる。

「だよなぁ…リモコンとか押そうとして壊れたら…」

「ですよ」

「じゃあ、美幸、メール送って1時間後に向こうにいくから、そん時送るからな」

「ん～わかった」

「隊長さん後ほど～」

（フムフムスタイルやっぱり良いんだなぁ…）
メール作成しながら…ある意味役得？

「”世界扉”…ブラックメール…送信…スギューン」
［マスター壊れた？］」

「や、やりたかっただけだよ…」
（見られた…）

（さて、時間あるし…
烈火作ってみますか…）
可動式ウォードレス着用車両と烈火作成

（付け方は、まず素っ裸になり、トイレパックをつけて、ゴムを吹き付け？）

誘導ゴムがつき、乾く。

（次に人工筋肉パックをつけて）

１１号に手伝って貰い中…

（で装甲着用か……）

つけて貰いました。

（さてっと初稼動♪）

パンチ

「うぉ……予想外だなぁ…俺の体でこれだと…ガンパレ人以外、現状ムリ？？」

パンチをだした時に予想外の力が腕にかかった。

強化してなかったら…粉砕してた筈…

「烈火？？誰が？？」

「あ、隊長さん、俺です」

「少佐??だ、大丈夫なんですか?」

「ああ、まぁ人外ですから」

（とりあえず…脱いで、また後実践かな…あと問題点は他の世界の人でも使えるようにか…
あとは着用時間の短縮か…）
脱ぐの手伝って貰いました。

最後のゴムは切るのね…

烈火の６０ｋｍ／ｈ　７００ｋｇの意味わかりました。

（そういえば…エステバリス並の重量なんだよな……）

「ところで少佐、この烈火は…」

「あ～とりあえずテスト用に作ってみた、欲しい?」

「あ、はい!!是非とも!!」

「了解、後でつくっとくよ」

「ありがとうございます！！」

「じゃあ、少し出かけるから…美幸！！」

タッタッタ

「いくの？」

「ああ、じゃあ行ってきますね。１１号、副司令にもつたえといてな！”世界扉”」

＝＝　現実世界　＝＝

潜ったあと　忘れずに消して…

「うんじゃあ、もう勝手に潜るんじゃないぞ」

「お兄ちゃん、メアド教えないと…また潜るよ♪」

教えました…

「じゃあな～バルディエル」
同化、解除

「”幻影”シャムシエル」
道におりると…
ブーン

メール着信。
『お兄ちゃん、人外だね♪』

返信はしないでおこう…

田中さんの携帯に…

『カオル様？リストの分も用意できました』

「で何処に行けば良い？」

『当社の倉庫に用意してます。場所は住所が……になります。そちらの携帯のｅｚナビにポイント登録はしてますので』

「あ、じゃあ探してみます」

『はい、お待ちしてます』

ｅｚナビ起動…
（ＭＹ地点かな?あ、フォルダに入ってるか…
住所の倉庫はこれか……うん徒歩２０分か）
……
＝＝菱形商事第８倉庫＝＝
「カオル様、お待ちしてました」

田中さんが、待ってましたとばかり、深々とお辞儀をしてくる。

「田中さん、で、いくらになりました?」
１３０，０００円
虚数空間からお金をだし支払い。
「ありがとうございます」

「物は…」

「こちらのトラックにあります」

段ボール４箱

「で、帝国様あてがあちらのコンテナです」

海上型コンテナ２２個がトレーラー積載でトラックに繋がれている。

（ん～トラックは持ってくと…か…）

「海上コンテナのみ持ってきますね」

「は？」

コンテナを引き込もうとすると…トラックごとになった…
また出す。

「……コンテナだけ運びたいんすが…」

「……わかりました……輸送方法ってそれだったんですね…
てっきり、世界扉を大きくするのかと思ってましたが…」

「四次元ポケット～もどきっすね」
ロック外れたのから順に虚数空間に引き込む。段ボールも忘れずに…

「じゃあ、あとはないです？」

「はい、以上です」

「あ、そうだ……産業廃棄物処理出来そうなんだけど…」

プラントの資源化を説明した。

「是非とも、プラント売ってほしいですね～」

「あ、ミイラになるから危ないよ」

「……わかりました…そうですね……かなりお得、下手したらこちらから納金するかもですが…」

「まぁ後で一回精度みてよ」

「わかりました」

「うんじゃあ”世界扉”」

＝＝　副司令執務室　＝＝

「ただいまっす」

「あら、早いわね～～、帝国への連絡は、無線か電話よ」

「あ、じゃあ…帝国宛先の持ってきたんですが…何処に持って行けば良いんすか？」

「ちょっと待ってね……０３－１０１－＊＊＊＊へ繋げて頂戴」

交換台経由らしい…

「あ、鳩畑さん？彼が、話たいらしいわ」

「変わりました、渚カオルですが…」

……　こっちに取りにくるらしい。

連絡先窓口確定しました。

先にガンパレ組に荷物わたすべくＢ５５ハンガーへ…

荷物わたした後、呼び出しくらって１Ｆへ…

トラックがきたらしい…

コンテナをだすと　入れ替え作業…

各地の避難所に直行便とか…

しばらく移し替えにかかるので、ＭＰ１分隊に、空になったコンテナの管理を頼む。

＝＝ジオフロント＝＝

Ａ３ブロックが完成したので、
ＰＸと大型冷蔵庫と大型冷凍庫、医療区間を作成、

カプセルを２０程セットし、
１１１号から１２０号までつけておきましょう。

……
カオル報告

今日は細々とした作業等いっぱいだった…

第３６話　来やがった……　投稿日２０１１０１０９（後書き）

作者「皆様が期待してた事故フラグこれで一つ折れました」

美幸「初期プロットにあったの～？」

作者「ないけど…多分動かすかな？と…」

美幸「まったく、誰かいれなきゃ」

作者「ん……というか入りそうなキャラがいないんだよな……ガンパレ組以外…
機械化歩兵は貸出禁止令がだしたし…」

美幸「つまんないの～」

作者「お前が入ったらよかったんじゃ？」

美幸「設定知ってるから入んないよーだ」

作者「かわいくないなぁ…まぁしばらく本編でないからいいか…」

美幸「え??あたし衛士でしょ？」

作者「この国じゃ１６才からなんだよ、お前は１４」

美幸「ガーン……ｏｒｚ」

作者「だからお前に魔法かけて本編に……」

美幸「へ??あ、まさか…前回の後書きの?」

作者「でも年齢がだぞ～」

美幸「なんだろ??」

作者「ヒント…阿部　高和化かも…」

美幸「／／／／……いやぁぁぁぁぁ」

さて、無事に登場できるか？

注…　ガンパレ編で難航し、初期プロットキャラ面に関しては崩壊しかかってます…

第３７話　国連総会　投稿日２０１１０１１０　修正１

２００１年６月１７日
俺はＨＳＳＴの機上の人となっていた…

国連本部で開かれる国連総会に出席する為だった…

また、副司令とビダンさんが搭乗している。

「しかし…物語の登場人物だったのね…」

「ええ…ですのでその世界での運命が決まってたのですよ」

「でも、カオル君が救ってくれたから、こうして自由に恋愛が…」

「つってなにシートベルト外してこっちにくるんすか！！」

「あらあら暑いのねぇ♪」

「副司令～笑ってないで止めて下さいよ」

「恋路を邪魔して蹴られたくないわ」

「あの～そろそろ突入なのでお座席に……」

「ね、ビダンさんもどっ……ちょ、何故俺の上に、シートベルト何故はず！！」

「突入しますよ！！」

ギャアアアア

そんなこんなで、

「当機はまもなくジョン・Ｆ・ケネディ空港に着陸します」

「あ、ワールドトレードセンターがある……」

「あら？あなたの世界にはないの？」

「ええ、９．１１というハイジャックテロで、トレードセンターのノースタワー、サウスタワー、
それぞれにジャンボジェットが突っ込んで…崩落しました。確かそのテロで２７００人近くが亡くなりましたね」

「……この世界で、おこる可能性は？」

「ん～多分ないですね…アメリカの中東政策の失敗からひきおこった…ハイジャックテロですから、
そもそも中東にそんな余裕のテロ組織がこの世界にないですし…」

「余裕ないか…ある世界も考えものなのね…」

ビダンさんは蚊帳の外の話題のようだった…

ＨＳＳＴは着陸し、カオル達は国連本部ビルへ…
ビダンさんは町並み珍しいがっていた…

＝＝総会会議場＝＝

議長「お集まりの皆様方、オルタネイティブ４の最高責任者香月夕呼博士による動議に応じて頂きありがとうございます。では香月博士より、提議をお願いします」

「当オルタネイティブ４は、多大な成果をあげ、ＢＥＴＡの全情報及び、大反抗の目処がたちました事を報告致します」

「ばかな！！００ユニット等！！」「諜報では」「本当か？」ざわざわざわざわ

ガンガン！！
「静粛に静粛に！」
ガンガンガンガン！！
おさまる議会
「香月博士…詳しく報告お願いします」

「まずわたしの理論をどうぞ」

「むう、」「でまかせだろ？」ざわざわざわざわ
議長に合図する香月

「発言を続けたまえ」

「はい、詳しくは5月上旬に…」

まぁ要は、はしょってるが、
俺は　異世界理論による最大の能力者として説明をされている

さて俺の番か…

「俺がただ今の報告にありました、現在横浜白凌基地に居候している、異世界人の渚カオルです。
現在、香月　夕呼副司令の直属の部下として、少佐となっています」

「副司令権限で地位を与えました」

「それでは、自分について説明します。本来でしたらこの世界に来訪する予定はありませんでした…
けれど今は、この世界にてＢＥＴＡ駆逐する為に努力を惜しまない…事を念頭に入ってますのでご了承を」

「わが国の案いがい……」
アメリカのぼやき…

「自分は、元の世界において、神と呼ばれる存在に間違って殺され、新たな肉体及び異能力を与えられ、別の世界に行く予定でした」
「神？出まかせだろ」「神様かぁ」

「では異能力についてまずは…パイル！！」

光の槍に変化させる…
オオゥゥ
ザワザワ
「ひ、ひかりだ…」

「この光の槍みたいなのは、自分の世界の話、エヴァンゲリオンでの敵となる、使徒と呼ばれる存在の力でした…
またこれ以外にも…ブレード」

高周波ブレードを発生させる…
ザワザワザワザワ

「等のちからもありますが、
……こちらからが重要です。自分の能力、物質変化及びコンピュータ操作…まぁハッキングで、
オルタネィティブ４の諜報員として、地球上の全ハイブ内部データー及び、
全ＢＥＴＡの情報、
あ号とよばれる地球上における指揮官の確認、ＢＥＴＡ内では上位存在とよばれます…
また、この世界には他惑星に１０の３７乗もにも及ぶ上位存在がいる事等を報告し、
レポートとして纏めていますので、お読み下さい。」

苦虫を噛んだ表情のアメリカ、
各国へ配られるレポート…

「なお、自分の能力として、あ号に定期的なスパイ行為を行っている…とも付け加えておきます」

少し間をおき…

「さて、他にも重要な事があります。
実はこの後承認を頂きたいと思っておりますが、異世界を渡り、そこでの技術情報、及び異世界人のスカウト、及び異世界の力による軍の作成が可能となっています」
「異世界？」「馬鹿な！！」
大きなどよめきがおこる。
場内が落ち着いたのを見計らって…

「ではまず、異世界を渡る力世界扉について説明します。
香月夕呼博士の論文、因果率量子論にも記載しておりますが、平行世界にいける力…がこの”世界扉”…です」
世界扉を出し、しばらくして消す。

「今のところ、自分が世界として認識している…所に限ってますが、それらの世界の力で作成したのが、これです」

Ｂ５５ハンガー内ＭＳの映像を流す…
また、演習実弾武器限定のを流す。

「これらは、自分の世界では機動戦士ガンダムという、テレビアニメシリーズとして流されていました…」

ガンダムの映像を流す…劇場版ガンダムのア・バオアクーのシーン等…

次の映像…ヒルダ・ビタンさんの第三話の回

「また異世界人のスカウトになりますが、この回で死亡する運命になるはずの、ヒルダ・ビタンさんをスカウト成功した事を報告、またご紹介いたします」

隣に招く…
「ご紹介に預かりました、元地球連邦軍所属、ヒルダ・ビタン技術中尉ともうします。わたしは、物語の中の一員として些かショックをうけましたが、
今は渚カオル少佐の元、この世界の為に、わたしの知能をお貸しい

たします事を、お約束いたしますわ」

もう一度ヒルダ・ビタンさんの登場シーンを流す。

「ありがとうございます。ヒルダ・ビタンさん」

アメリカから発言の許可を求める発言が上がる。
議長はカオルに判断求め、頷いて同意した…

「渚カオルさん、あなたは認識している世界に、渡れる能力があるんですよね？」

「はい」

「その中に、過去の我が国のアニメ等でもある、超空間移動技術…いわゆるワープ技術がある世界はありますか？」

きた…ここからがオルタ5潰しだ…

「はい、ありますね」
トップを狙え最後のバスターマシーン3号のスレイブ作動、艦隊がワープ撤退するシーン、
マクロス7がフォールドに入るシーン、
宇宙戦艦ヤマトのワープシーン等を流す。

「こ、これらの技術も……」

「はい、習得し、持ち帰り、再生する事が可能です」

「議長！！今すぐに渚カオルさんの協力をえた、オルタネィティブ５の発動を求めます！！」

「アメリカ大使さん、オルタネィティブ５についてですが、自分は参加しませんよ」

「何故ですか！！人類が生き延びる為には我が国の案しかない！協力するのは当たり前だ！！」

「自分の考えてる、前提条件から違いますね……何故１０００万人だけです？」

「……人類種が生き延びれ、かつできるだけ乗せられる人数だからだ」

「残りの人を残して、ＢＥＴＡに全滅覚悟で挑み、また住めなくなる土地を更にふやして？」

「しょうがないだろ！！それ程ＢＥＴＡは脅威だ！！」

「大使さん…今までの他の世界の映像をみて何にも感じないので？」

「は?だから我が国の案が!!」

「どうせなら全人類脱出計画なら、まぁそちらに協力してもよかったですが…」

「そんなのできるわけが」
コロニーの映像を流す…

「このコロニーは宇宙空間にある島です、長さ３０ｋｍ直径６ｋｍ…アメリカさんの案の１０００万人すむ事が可能です」
マクロス７船団

「この超マクロス級移民船は、同じく１０００万人もの人が済み、また7番目の移民船団です」

「お分かりかと思いますが、たった一千万だけ…はナンセンスです。ですのでオルタネィティブ５には協力いたしません。
が、強行採決されたいんですよね?
けど…可決したさいには、反対票を投じた国家の方々すべての皆様をのせ、地球脱出しましょう」
ザワザワザワザワ

「勿論、安全を考え、偵察部隊で長距離ワープ、探索後安全な星に…です」

アメリカ大使力無く座る…
そう、移住目的地の星からは、その後連絡が途絶えてたからだ…

「さて、ではオルタネィティブ４の発展による、
異世界軍団による各ハイブ攻略の承認、また即応部隊としての、独立統帥権の承認を頂ければと思っています。
なを、こちらの案には先程でました、スペースコロニーによる難民受け入れもかねての案になります。
難民の住むスペースコロニーの安全を確保も含まれていますので…」

そう、世界各地では難民の居住地の問題点が頻発している…
勿論日本でもそうだ…
発言を求める挙手がきた…大東亜連合からだ。

「渚カオルさん、そのスペースコロニーの建設や、そこまでの輸送は……」

「勿論、独立統帥権を頂ければ、異世界軍で受け持ちます」

「地球上の難民キャンプから、そのスペースコロニーまで？」

「はい、またスペースコロニー間や地球との交通の確保まで行います」
大東亜連合の方座る…
別の方、中華統一連合…
「その、スペースコロニー内の衣食住は…」

「食に関しては、農業用…というのが存在しますし、ある程度一つのコロニー内で独立できるようになります。
住はコロニーで用意します。
衣は…最初だけはですが、民間工場の確保も視野にいれてます」
中華統一連合すわる…
アメリカから…
「国の中枢を先に…」

「いえ、まずは衣食住に困っている難民の方々からが先です」
アメリカさんすわる…
国をうつしたらオルタ5だろ…

後は、発言なさそうなので…

「ですが現在、技術は再生可能ですが、作成には資源を異世界に収集しにいかなければ……という制限があります。
なお、今年の9月頃を目処にこの世界で作成可能との事で先に動いてます。
一応早ければ8月を目処に農業用ですがコロニーを完成させる事が可能です」

「あと二ヶ月後か…」
ドヨドヨ

「さらに、資源の確保が目処たちしだい、大量生産体制に入りますので、

まずは１２月を目処に自分のいる横浜基地の隣、佐渡島ハイブ、甲２１号を攻略したいと思います」
オオオ
「できるわけが…」
アメリカさんうざい。

「議長」

副司令が発言を求める。
「香月博士」

「当オルタネイティブ４としましては、オルタネイティブ５の凍結を求めますわ」

「な、な、なにを！！」

ザワザワザワザワ
「静粛に静粛に！！」
ガンガンガンガン

「博士、どうぞ」

「このように、渚カオル君の協力があれば、地球から人類が死滅する事なく、
また住めなくなる環境にならず、ＢＥＴＡを叩き出す事が可能…といえますわ。

また引き続き、００ユニットの作成も続行し、更なる諜報員の作成に鋭意推進します。
よって、オルタネイティブ５の凍結を求めますわ」

「議長！！オルタネイティブ４こそ凍結、即時オルタネイティブ５発動を！！」

「だからオルタネイティブ５には協力しないって……」

ザワザワザワザワ

ガンガンガンガン

「え～では、凍結決議及び発動決議がでましたので、まずは発動決議から入りたいと思います」

「議長」

「渚カオルさん」

「自分の条件の中に、反対国の救済がありますので、挙手での決議を求めます」

ザワザワザワザワ

「わかりました…よろしいですか？アメリカ大使」

「良いわけがないだろ！！」

「何故でしょうか？」

「公平でない！！」

「何故公平でないのです？」

「衆人監視の元での挙手投票なぞ…」

「一国の大使であるなら、責任を負ってほしいですね…」

「……」

「議長いかがでしょう？」

「では、投票に入ります…まずはオルタネイティブ５の発動決議からです。
発動を求める方は挙手で願います」

アメリカ…だけ、
かなり狼狽している。
今までアメリカ側だった国々も難民受け入れ等でこっち側にきたようだ…

「発動は見送ります。次にオルタネイティブ５凍結決議を行います。凍結を求める国の方は挙手を願います」

結構手があがる……
が、半数にたらない…

アメリカ、ほっとするが、

「議長！！」

「渚カオルさんどうぞ」

「期限つき凍結でいかがでしょうか？」

「ほう？」

「１２月末までの佐渡島ハイブ攻略、その成果がでるまでの凍結。ハイブ攻略でもって、オルタネイティブ５計画の完全破棄で…」

ザワザワザワザワ

「わかりました。再度今の提案賛成の方々は挙手でお願いします」

アメリカ以外満場一致となった…

結果、異世界軍を率いるとの事で国連軍大将に就任することとなった…

第３７話　国連総会　投稿日２０１１０１１０　修正１（後書き）

作者「まだまだイクヨー！！ミコミコナースミコミコナースかえる…」

カオル「作者が壊れてる…」

石橋「ねえどうなるのこの物語？」

カオル「さぁ？」

作者「お、ごりょうにん～♪」

カオル「復帰した？」

石橋「……駄目かな？」

作者「いやぁ…国連総会ネタおわったからねぇ～
制限かかってたのドンドンやれるからさ♪
あ、ターミ〇〇〇ー連れてくるよ～」

カオル「ネタバラし始めた…殺る？」

石橋「やっちゃえやっちゃえ」

カオル「ラミエル！！狙い撃つぜ！デッドエンドシュート！！」

大きい十字架……作者チーン

って解説しろよ…

作者「解説ね…っと今回のネタバラか…」

カオル「復活しやがった…」

作者「まぁまて、国連総会かだろ？
安保理かなぁと思ったんだけど、
やっぱり調べると国連総会ぽかったんだよね…
まぁそんなわけで通常総会で提議をする形になりました…
今回の話のネタバラはそんなもんです。あとは飛行機か、ＨＳＳＴか、どっちかなぁと悩みましたが、ＨＳＳＴにしました」

ネタバラこんなもん？

作者「だね」

以上でした

第３８話　Ｚ編４　Ｚガンダムの世界へ再び…　投稿日２０１１０１１１

２００１年６月１９日

＝＝Ｂ５５ハンガー＝＝

「１１号、Ｌ５は空いてたよな？」

［空いてたよ～］

「じゃあ、そこにむけてチューリップ１セットよろしく。
コロニー群を建設しよう」

［そこまでの輸送はチューリップ？］

「いや、さすがにＤＦは…だから人はマスドライバーかな…」

［この基地に？］

「だな」

マスドライバー…確かＶガンダムでジブラルタルに確認はされている。

コロニー引越公社のだ…

多分宇宙開発期からあると思うから、ガンダムの時代にもあるはず…

Vガンダムで、
「人類共通の宝なんだ！！」
の台詞を思い出していた。
それと、ビダンさんの依頼を消化しようと思った。
キリマンジャロ潜入→ジブラルタル→サイド3の流れだ…

というか、俺自身が迷わずに行けるのサイド3や、サイド7、サイド4位しかないだろ…の話だった…
L2、L3、L1だから、
月にむかって直線上にL1、
月の裏っかわにL2、
地球と月の直線上の月と反対側にL3。

だから多分それしか2航法システムがないと…
L4L5は多分迷うはず…

また、サイド4に放置してあるコロニー何個か掻っ払うつもりだった。

でサイド3で開放型のコロニーの機種情報取得。

「あとは、コロニーのデーター取得と、月のグリプスでの放棄品の鹵獲か…な」
Z23話24話辺り…

「で帰ってきてガンパレ組の依頼こなして…か、
メタルマックスいく暇ないなぁ……」

［マスター頑張れ、暇なし♪］

行く前に…
学兵さんには、桜井隊長とＢ－０１、座学｛こっちの世界観、法律等｝は、
副司令に文官を一名回して貰うようにお願いした…

旧世代機の操縦席の変更及びシステムの統一で、
リニアシート及び全天周モニター、イジェクションポットの採用、
コクピット的に無理な陸戦強襲型ガンタンクは、非球体型全天モニターを。
また新旧問わず、衛士強化服｛宇宙空間対応｝及び網膜投射システム｛計器類等｝、エステバリスのＧキャンセラー採用。

撃震は、テスト待ちの状態で
装甲をビルダさんのに変更しておいた。

ジオフロント、資源庫はＡ列が仕上がったのでＢ列に…
今のとこ、追加予定なし。

なところで…昨日の帰りのＨＳＳＴの場面思いだした…

＝＝　帰りのＨＳＳＴ　＝＝

「あんた最高！！アメリカのあの表情！！♪」
副司令酔ってます…ビダンさんドン引き…

期限付きながら、凍結に追い込めたのが、よっぽど嬉しかったのだろう…
香月夕呼は久々に酒に酔っていた…

何しろ、帰りの便が決定次第、現地のトレーダージョーズ、で酒を買い込んだ程だ…

＝＝　回想終了　＝＝

とにかくばれてどうなるの、制限がなくなったが最高だ…

が危ないのもまだあるけど…

…なわけで、スペースコロニー及びマスドライバーの取得に、旅立つ前準備中だった……

「じゃあ、１１号…Ｚガンダムの世界に出かけるから、副司令に言っといてな」

［イエスマイロード］

「”世界扉”」

＝＝　Zガンダムの世界　＝＝

世界扉からでると…

寒い冬山の真っ只中だった…

（キリマンジャロかな？

多分あってる筈だけど……）

凍ってない湖がみえた…

ビンゴか…

「”幻影”」

蚊になり基地に潜入し始めた……

このキリマンジャロへは、リストを貰った人の経過を見る為に…なので、

今のところ戦闘自体がない…

（フォウが居るはずだからきいつけないと…）

気配は最小限、人事課を目指していた…

地下排水路から、なんかの施設に入り…
通路にでる。

前に、ティターンズ士官か?が角をまがってきた…

「なぁ…フォンブラウン進行作戦にマミヤ・トウゴウ大尉いってんだぜ、俺なんか留守番なのによ…」
（無駄話してるから歩くスピードおそいなぁ…）

「それよか地上の反乱軍殲滅作戦、あんまりうまくいってないんじゃないか…」追いついてしまった…しかも通路に広がりながら…手にあたるなぁ…

「あいつら蜥蜴だからなぁ」

「違いねぇ、尻尾きりってか?」

（早く曲がれよ……
ん?ここか?）

プレートがはってある…

「バルディエル」

同化、解除

中は職員がつめている……

さすがにこれで能力を使うとばれちゃうので……

しばらく時間を潰す事にした…

後ろの棚には誰も近づいてない…

棚をみていると…

愛人部隊…　変人部隊…　男食部隊…　女食部隊…

（前はわかるが…後ろ3つは……）

開発課はファイルが多い…

懲罰部隊もまぁ…多い…

等見てると…職員が一人二人とたち…

ラストの者が電気を消し…退出していった…

（さてと、やりますか…）

「イロウル」

リストに載っている２４５名を検索し始めた…

パイロット２２名ジャブローにて死亡…

（セキュリティレベルが高いな）

命令書発見、

基地撤退時に、閉じ込めての処刑命令。

（バスク大佐かよ…

ん？しかし何故に女性だけだ？？…

う、バスク最低、自分の愛人部隊創設に誘って断られたから、証拠隠滅に送りこんだ？？

カミーユの件はついでかよ…）

整備士二人も同様な処刑命令…

開発技師六名…

（あとは…処刑は免れてるか…

ジャブローで処刑が３０名ね…

そういえばファの両親は…？）

銃殺刑

（反ティターンズ活動により？？
おかしいなぁ……
はぁ？勝手に付け足してか…
好き勝手に人の命決めてんだなぁ…）

ご愁傷様です……

（さてと…）

解除し
「バルディエル」
そのまま、フォウに探知されないようにさりげなく……

「フォウ！！フォウ！！どこ行ったの？」

（なんか…1番聞きたくない名前が……）

角を曲がると……

何故か見てるんですが……フォウ・ムラサメが……

（何故に立ち止まって…こっちをみてる…）
横にずれると……フォウも横にずれる…

元に戻るとフォウも戻る。

（な、何故だぁぁぁ）

一歩後ろに下がり、フォウは一歩前にでて…二歩下がるとフォウは二歩前にでる…

（見えてない！！見えてない！！）

フォウは物語のキーマンである為、仲間にする事もできないのだ…Zの最後にカミーユを守るキーマンなのだ…

カオルは１８０度まわると、駆け出そうとした。
フォウのタックルで捕まる。

（ななな……なんでだぁぁぁ）

「うふふ。面白い♪人がいると感じるのに、見えない、けど触ったら肌があるのね」
ぺたぺた触りまくっている……
本来身体がある場所なのにその奥の景色が見えるのを楽しんでるようだ…

（やばいやばいヤバイばれとるがな！！）

「フォウ！！どこなの！！？」
探す声が近づいてきた…

なむさん！！

「アルミサエル」
精神を掌握
コマンド
立ち上がれ
俺を認識しない
今あった記憶を消去

解除

（はぁ…とうとうやっちゃったかな…）
人生初洗脳であった…

フォウは再起動すると…
回りを見渡し……
不思議がる。

「フォウ！！」
探している研究員の人の方へいった…

そういった騒動あるも、
脱出成功し、一路ジブラルタルへ…

「シャムシェル」

旅立った…

辺りは闇夜だったが一路北に行き…

地中海にで、そのまま西へ…

右手は美しい地中海であったが…観光は断念した。

一回北進し、西にいくと…
見えた…　アーティ・ジブラルタル。

宇宙引越公社の所持する、マスドライバー施設兼飛行場だ。

そのままレールに着地し…
「バルディエル」

施設と同化し始めた…

客用シャトル
貨物型シャトル
貨物コンテナ
追加ロケットブースター

が見つかった…

客用シャトルはテンプテーションと同型タイプ

貨物コンテナは使い捨てタイプで打ち上げのみ

ロケットブースターは、ＭＳ用かな?と思う…

また、目新しくないが飛行場に2階だてジャンボと貨物輸送機があ

ったので、
それも取得…

解除し、
「シャムシェル」

空にむけて、加速する…

大気圏離脱…

月に向かってそのまま宇宙空間をすすむ…

二日目…

途中、大破し放棄されてるＭＳや戦艦を回収しながら進む…

結構あるもんだなぁ…と

が、航法システムがないと迷いそうだった…

まだ月を目指して進んでるから、よいもの…

宇宙は広い、すぐに戦艦等も豆粒になり見えなくなる筈だ…

キラキラきらめきが見えてきた…

旧サイド５、現サイド４のコロニー群及びルウム暗礁空域が見えて

きた…

現在はテキサス以外気密を保ってない破棄コロニー群の集まりだ。
また、重力的に釣り合い、大破したＭＳや戦艦がいっぱいたまっている。
勿論小惑星等もだ…

過去にはここで茨の園とティターンズが拠点をおいていた。

ここが再開発されるのは遥か未来Ｆ９０の時代あたりだった…

コロニーは、ビームで打ち抜かれ、中から吸い出されたろう…
約４０近くある…

しかし、ここで１０億人位か…？

（外見上無事なのがテキサスだよな…）

開放型ミラーの観光コロニーを取得できれば…

（これか…）
「バルディエル」
少し時間がかかる…内部は、気密を保っているが荒れている…

解除

（あとは…6個程貰うか…）

開放型の自立コロニー4
農業コロニー1
密閉型工業用

拝借した♪

……27バンチじゃないよな?…
残骸は、核融合炉が生きてそうなのを探し、
回収しはじめた。
…

（そろそろ行かないとな…）

まだ心残りあるが…そのまま月を目指した…

……
カオル報告

マスドライバー施設
客用シャトル
貨物型シャトル
貨物コンテナ
追加ロケットブースター
旅客飛行機
貨物輸送機
開放型観光コロニー

取得
壊れてる開放型の自立コロニー４
壊れてる農業コロニー１
壊れてる密閉型工業用
大破戦艦２８隻
大破ＭＳ１５２内核融合炉燃料あり確認１４０

第３８話　Ｚ編４　Ｚガンダムの世界へ再び…　投稿日２０１１０１１１（後書

作者「あーあ、初洗脳だね……」

カオル「作者なんであの場面でフォウを登場させるのさ…
絶対にばれるの決まってるじゃん！！」

作者「まぁ多分１番強い感性あるの、あの子とララァだろうしね～、
プルやらと比べてもフォウの方が上かなぁ？と…」

カオル「しかし、彼女いいにほいしたなぁ……お持ち帰りしたかっ
たよ……」

作者「ん～多分本人は無理だけど持ち帰れたかもね」

カオル「え？？……あ！！そうか！！あれだね」

作者「そうあれだよ」

カオル「……けど魂の問題とかあるんじゃ？」

作者「だろうなぁ……となるとだいたいテレビでたニュータイプは特にＮＧなんだよね…」

カオル「女性のキャラは死亡しても最後に何故かでてくるし…」

作者「だよなぁ…野郎のニュータイプはＺでは特に少ないしね…」

持ち帰りできるニュータイプ談議は続く……

第３９話　Ｚ編５　＆ｑｕｏｔ；ムーン・アタック＆ｑｕｏｔ；が迷って？？

３日目

宇宙歴００８７　８月１０日…
月にたどりつき…
（こっちの世界の月は、開発で別世界だよなぁ…）

月面にいたるところにエアカー用のガイドウェイが見える。

月面都市群
アナハイム
アンマン
エアーズ
フォンブラウン
グラダナ
等などがある…

多分それ以外もあるだろうが、作りが地下都市になりやすい為、正直わかりにくいものである…

注…多分あるだろうけど…
小説にでない都市は作っていいかな？と…悩みました。

ここかな？……

同化して、都市部へ進入…違いましたｏｒｚ
（グラダナだぁぁ～）

「すみません、フォンブラウンへは…？」
近くの人に尋ねた。

「あああっち……？あれ？？誰が質問したのかな？」
うん蚊の状態｛不可視ね｝だったから…さ。
させた方向に行くと…
グラダナ方面の看板が出てた。

ありがたい…こっちね…
同化し、上昇エアロックを同化して抜け、一路フォンブラウンへ…
グラダナからだとちょうど真裏、反対方向にある都市だ…
急いでガイドウェイ沿いに進む。
すると……月面近くを並走するアーガマとラーディッシュが見えた…
（お…まにあったか？？）

ランチがラーディッシュから出はじめた…
（間に合ったようだな…となると…この後、百式が出るんだよな…）

百式がカタパルト装着状態でデッキにスライドしてきた。

そのまま…若干屈み込み腰になり、
ラーディッシュから百式が射出される…

フルブーストで前方の方へ…

ラーディッシュでは続いてネモが射出されて行く…

宇宙空間専用だが、アーガマに比べ、ＭＳ運用能力は高い。次々と
射出されるネモ…

そして、ランチがアーガマに近づいたその時、
上空をビームが通り過ぎる…

長距離ミサイルがフォンブラウンの外側に命中し、大爆発がおきた！
つづいてビームが周辺に……

（アポロ作戦発動だな……）

アーガマにランチが着艦するとともに、
リックディアス３機が次々射出される…

次に、ガンダムＭＫ２が…続いてメタスが出て、変形した。

最後に大人のお約束のＺ…

射出されるとすぐに変形した…

（全員あっちの方向か…追いかければ、戦場か）

カオルは追いかけ、抜かしてゆくと…

先にラーディッシュのＭＳ隊が、ティターンズの艦隊に踊りかかろうとしている…

各戦艦から対空砲火があがっている…

（ド派手だなぁ…ん～１２隻？？となると約１２０機はいるか…）

動きがとまったネモが爆破…大きな塊が落下していく…

ムサイ改からハイザックが接近してきた…

（そろそろ月面美味しそうだなぁ…）

月面には大破や放棄されたＭＳが転がり始めた…

カオルは月面におりると、回収作業に入る…

（結構脱出してる機体もあるな…）

撃墜されてる機体の約3割程が…
爆散は脱出はできてるのが珍しかった…

上空をみるとアーガマMS隊が乱入していた。
（お、リックディアス、mk2…Zもきたか…）

ティターンズ艦隊へZが襲い掛かる。

（Z頑張れ！！）
結末を知ってはいるが、その間に、
サラミスやムサイ改を何隻落としてくれるか…
をかなり期待してた。

（…2隻…ムサイ改とサラミス改1隻か…）

Zは、背面になり…ハイザックを撃墜すると変形し、一回離脱した。
メタス救援に向かい始めた。

（戦艦はまだ早いなぁ…捜索にくるかもしれんし…）

リックディアスが、アレキサンドリアに、向かって行くのが見えた。
…背面ビームバルカンでハイザックを撃墜…

もちろん落下地点で回収しに♪

ティターンズ艦隊から突出したドゴスギアからＭＳ隊がではじめた。
ガブスレイやマラサイが見える…

（確か、ドゴスギアはこの後、一番乗りで制圧する筈…で次回の話の中途で離脱だったよな？
だから制圧したあと同化で情報回収か…）

Ｚがサラミス改を撃沈させ…
（これで５隻目♪）
ドゴスギアのＭＳ隊にむかった。

フォンブラウンから防衛隊のジム２があがりはじめた…
が、次々おちる…

（さすがにガブスレイ相手はなぁ…）

もちろん、パイロット生存機体以外は回収…

Ｚと百式がビームうちながら接近、
先に百式がジェリド機に襲い掛かる…
Ｚはサラと……印象薄いやつとの巴戦にはいった…

その最中、ドゴスギアが上空を通過するかしないかの時、

……Ｚが動きをとめた…

（確かプレッシャーでだよな…けど、そこまで感じるのか？
ヒルダさんが撃たれた時と比べ感じないが……）
そのまま、ドゴスギアが通過し…フォンブラウンへ……

マラサイが動きをとめたZをさそうとするが…やめた。

ジェリドの命令がはいったからだ。
（でもさ、ここでさしちゃえば…物語おわってたよなぁ…）
現実的にみてると馬鹿らしいものがある。

掴みあいしてた百式とジェリド機…
ガブスレイの隠し腕を作動させ、百式を押しのけ、
動きを止めてるZの元へ、ガブスレイが襲い掛かろうとし、百式が追撃にかかる…が、
下方向からビームで百式の腕が飛ぶ！！

（げっ！！）
ダッシュで下がり…煙があがる…

動きをとめて実況観測してたら、墜落してきた機体があった…
危うくＡＴフィールドが展開し、ばれるところだった…

煙がはれると…

（あ、あれ？？）

見失っていた…

（えーと確か百式とガブスレイ2機だったよな…月面に押し付けられてるんだっけ??）

月面から浮かび…

（どこだぁ～?）

キョロキョロ…

完全に百式見失っていた…

月面に下がり、回収作業に戻り始めた…

さっき墜落してきたハイザック…パイロット死亡…回収、

（あとは……あ、）

マウアー機につらされた百式、百式に捕まれてつるされているジェリド機をみつけた…

マウアー機がビームサーベルを突き立てようとした時、Zのビームがすぎる。

百式、マウアー機が怯んだ隙に、プロペラントタンクを外し、離脱し…手にもっていたジェリド機を放して、落とす。

Z、百式の元に駆け寄り、離脱しはじめた…

（確かそろそろドゴスギア着陸したんだっけ？？）

回りをみると、後退し始めてる感じにみえた…

さて回収回収…

街の施設が戦闘の被害で爆発してるのだろう…

そんななか、

墜落しているＭＳを次々調べて、回収作業の続きにはいった…

墜落している戦艦は…そろそろ大丈夫かな？で回収…

あらかたおわったあと…

死体を抜きだす…

（皆さん方の機体大切に使わせて頂きます。ご冥福をお祈り致します）

そして、港の方へ赴く、

ドゴスギア及びガブスレイのデーターが目的だ…

（ただシロッコがなぁ…フォウの二の舞はゴメンさ…）

そう、奴だけが異様に勘がいいから慎重に慎重に……

まずは港のシェルターに同化、離脱…

（ドゴスギアは、っと…）

みつけた…

なるだけ何も考えず…

「バルディエル」

同化…艦全体にひろげる…

掌握

格納庫にガブスレイがあったので、勿論、機体情報取得。

シロッコは行為に夢中になってたから、気づいていない模様でした。

あんまり観察するとばれそうなので早々離脱…

あとは…ムサイ改とチベ改を見つけ、

同化、解除

（なものかな？）

「〝世界扉〟」

……

カオル報告

機体情報
ドゴスギア
カブスレイ
ムサイ改
チベ改

取得
大破戦艦６隻
ＭＳ多数

第39話　Z編5　"ムーン・アタック"が迷って??

作者「月面都市にきましたぁぁ～」

香月「なんで月面なのよ!こんな非常識ゆるさない!!」

作者「あ、博士、後書き初主演ありがとうございます。まぁ別世界のお話ですから……」

香月「はぁはぁはぁ……まぁいいわ…」

作者「別世界はなんでもありなんですよ…あ、自分の世界でも東芝エレベーターさんが、月面都市について実際にプロジェクトを立ち上げたり…
まぁどうやったら再現できるのか?ですね」

香月「へぇ…面白そうねぇ…それ見せなさいよ」

作者「http://www.toshiba-elevator.co.jp/elv/common/contents/products/newtechnology/co03.jsp　多分携帯の方はグッた方が早いですね。
月面都市　東芝エレベーターで検索すると出ます」

面白いページがたまたまヒットしたので後書きに

第４０話　Ｚ編６　＆ｑｕｏｔ；反撃＆ｑｕｏｔ；にて……　投稿日２０１１

ユニーク２５０００…
ありがとうございますｍ（＿＿）ｍ

第４０話　Ｚ編６　＆ｑｕｏｔ；反撃＆ｑｕｏｔ；にて……　投稿日２０１１

四日目
＝＝　グラダナ市内の何処か　＝＝
世界扉から、６日後の世界に降り立つ…

同化……掌握

流石に市内施設レベルだと１時間かかる…

アーガマ、ラーディッシュはもう出撃した模様だ。

（さてと、急がないとな…）

今日の目標は吸い出される市民のスカウト及び、いつも通りの回収、及びＺガンダム、メタス、Ｇディフェンサーの機体情報の回収である。

ついでに、月面走行車両も取得。

一路まうらのフォンブラウン市へ飛び立つ。

（道路というガイドラインがあると、助かるなぁ…
迷わずにすむし♪）

流石にアーガマは道路沿いには進んでない…

そのままフォンブラウン市についたので、月面で待機した…

ハイザックの落下まちである…

しばらくすると遠くでビームの痕跡がみえた…

（始まったな…）

ウウウーーー
空襲警報が流れた。

一斉に灯火管制、また即応部隊だろう…ハイザック、マラサイが出る。

メタスがひっしにメッサーラから逃げてきた…

メッサーラのビーム…都市部にあたる…

（見境ないなぁ…）

これで、まだ吸い出されてない。
穴が開いてないからだ…

ｍｋ２がハイザック追撃してきた…

（こいつか）

ハイザックが撃たれて制御不能！！

落下してきた…
（この採光窓だな！！）

ヒューンバリーン
強化ガラスが割れ市内にハイザックが落下…
一斉に空気が吹き出す。

吸い出される市民や施設等…

黒髪ピンクのミニワンピースの女性
茶髪のスーツの男性
ブロンドのミニスカ女性
紫髪のスーツのビジネスマン

（間に合わない…）

できるだけ虚数空間のシェルターに引き込んだが、
それ以上に宇宙空間に人、物が吸い出されていく…

助けるのが間に合わず、カオルの引き込みの射程圏外にはきだされた人は…

苦悶の表情を浮かべ…死んでゆく…

またある女性は、肺が破裂しただろう…

シャッターがないのがおかしいのである…

まだ救助の途中にマラサイが、ガラス破れた箇所に、リックディアスを押し込んできた。

人がベチャッとこびりついたぞ……

続いてひっしに逃げてるメタス、追跡してるメッサーラが…

あのメッサーラ…尖端部分で人を真っ二つにするのやめなよ…

市内からの空気流出がやんだ…

助けられたの３０人程か……

けど、それ以上に助けられなかった人がいる……およそ正確な数わからんが２００名程…

中には赤子を連れてた人もいた…

外壁に事故で穴が空く…宇宙空間では大事故である。

と同時にネモが落下し爆発…

別の箇所に穴が空く…

ハイザック２機がガラスから市内にはいる…

別の破穴から、ネモ、ハイザック…

ネモ３が…市内へとはいる…

（追ってはないのに…？……あ！！あの部隊か…）

そう最後の方に発電施設を押さえられた…がある。

多分その押さえる為に破穴から市内に入った部隊であろう…

流石もとエゥーゴ拠点。

しかし…内部、都市上空とも乱戦模様である…

これ別の箇所でなんかあってもおかしくないなぁ…

一応市民はシェルター内にもう入りきった筈だった…

市内では戦闘の気配なくなった…

内部にはいったハイザックはでるか、鎮圧されたのだろう。

メッサーラはとっくに獲物を求めて上空でネモに襲い掛かる。

墜落するネモ…爆発でまた外壁に穴があく…

もう空気がないため吸い出しはなかった…

別の獲物へメッサーラが襲い掛かろうとした時、

ウェーブライダーがみえたため、そっちに目標を変えたようだ…

逃げるウェーブライダー…追うメッサーラ…

破穴を見つけ市内へ進入するウェーブライダー、勿論追って市内へ進入メッサーラ、見かけたろう…ｍｋ２が援護の為市内についてゆく…

（確か、この後カミーユが搭乗すんだよな…）

メッサーラが外に逃げて……

戦闘空域へ向かう…

すこし間が開いて、アーガマの方へZガンダムが向かう。

（確か、メタス援護とハイザックを3機を撃破するんだよな…）

都市部ではほぼ大勢が決まり、エゥーゴがかなり優勢にみえた…

港のゲートがあき、アレキサンドリアや、サラミス改等が姿を見せる。

それをひっしに守るティターンズ…

アレキサンドリアから撤退信号が打ち出された。

（さてっとお邪魔しまーす）

アレキサンドリアと同化して、メッサーラをまつ…

一隻のムサイ改がエゥーゴの襲撃に耐え切れず爆散…

またチベ改も爆散…

ムサイ改、サラミス改……

撤収できたのは、このアレキサンドリア含む3隻だけ…になった…

メッサーラが着艦してきた…
（いただきマース）
一部同化、解除

離脱し、「”幻影”」かけると、一路フォンブラウンに戻る…

月面で着地しているアーガマを目指す為だ…

アーガマを見つけた…同化……

ブリッジではファが泣いている……

（最後のあのシーンか…）

格納庫には、Gディフェンサー、メタス、Zガンダムがある…

一部同化し、解除

機体情報取得した。

（さて、この後は説明とサイド3いって完成情報取得と、もう一度ジャブローか??）

シェルターを出し、同化して中にはいる。

「皆さん始めまして〜」

キャー化け物ーお化けー等すごい騒ぎになってしまった…

考えようよ…

いきなり此処は何処?と迷ってる人がいて、
ぽんぽん人が増えて…確か私は…?だったんだし…

「え〜落ちつきましたね?」

「皆さんにご説明します。本来は死んでいた運命だったのですが、異世界を助けて頂きたいと思い、皆さまがたをスカウトしにきました」

ざわざわドヨドヨドヨ
人数が多く纏まってないので沢山の人が説明求めたり、なんで?とかの状態だ…

テンプレ神の状態がわかる…

「皆さま方、落ち着いてください。バルディエル」

で立ってる方の後ろに椅子をだす。
床に座ってる方にも椅子を出し持ち上げる。
キャなど所々で軽い悲鳴があがるが、椅子が出たのでとわかったらしく…落ち着く。

「立ってる方々、椅子を作りましたので座ってください」

皆さんが座ったので…
横からドリンクテーブルを作って…

「とりあえず、これからその世界についてのビデオを流しますので…あ、飲み物いるかたは手あげてくださいね～」
で、映像を流し始める。

虚数空間からいろはす北海道版、やバリアースやまぁ日本系のジュース類と、カートを出す。

手が上がった人がいたので、
「何が良いです？」

「あ、じゃあ…水で」

「自分の世界の日本の北海道産のミネラルウォーターです。美味しいと思いますよ」
トクトクトク、コックン

「あ、本当♪」

そっからちらほら手が上がり忙しくなる……

そんなこんなで約４５分の放映がおわり

「以上が、そのいって貰いたい世界です。次に現在自分が作っている戦力等の映像を流します」

こっちはまだ短い…

自分の異能力で再現している技術等の説明だ…２０分程…

「最後に、何故この世界で私達が?とおおもいになるでしょう…

実はこの吸い出される運命は決まってたのです…

あなたがたは私の世界でいう、物語の話ですが、実在している人物ですので…

詳しくはこちらのアニメをご覧ください…」

Ｚガンダムの反撃を流す。

あ、カミーユさんだ…等の声もあがる…

「皆様がたの運命は…本来は死ぬ運命でしたが、あの吸い出しから助けられたのがあなた達です。

できればその命、最初の映像の世界を、救って頂きたいと思っております」

ザワザワ

「勿論お願いであって強制ではありません。
嫌だというなら全てを忘れてもらい戻す事も可能です。
ですが、世界を救って頂くために力を貸していただけないでしょうか？
よろしくお願いします」

ちらほら「わかりました」「協力します」
等あがりはじめた…
半数以上の方が同意…
順次にシェルターにうつしておく…

残りは「力になれそうもないので…」「恋人が…」等で拒否…が１番厄介なのが…

「わしは本来は死ぬ運命だったんだろ？死なせてくれい！！」

「助かった命粗末にしないで下さいよ」

「いんや死なせろ！！」

とりあえず、拒否の方々は忘却処理を済ませたあと、
与圧のある区画においていきました…

が、この人…ほんと問題だよな…

「ですから、忘却して都市に帰しますから、生きて下さいよ。せっかく助かった命なんですから…」

「運命には逆らいたくないわい！！」

「あなたはそんな世界に影響与える運命でなさそうなので、大丈夫だと思いますよ…ですから…」

「いんや、納得しない運命通り死なせろ！！」

「おじいさん……」

「頼む……」
（え？？涙？？）

「え……どうしたんですか？」

「お前さんが助けた人…あれで全てなんじゃろ？」

「はい……」

「なら…死なせてくれ……」
拉致あかない…少し記憶を覗くか…

「アルミサエル」

（……おじいさん……あの助けられなかった中に家族、しかも娘、娘婿、孫がいて、おじいさんの誕生日を祝って……）

「頼む……」

「おじいさん……娘さんやお孫さんの為にも…」

「わしにとって最愛のなんじゃ…吸い出されそうになった時にもう少し手が届けば……
吸い出されなかったと思う…
が、手が届かなかったんじゃ…
わしは、自分を固定したのを外して一緒に飛びだそうとした…がお前さんが邪魔をしたんだ…
最初は家族が助かったと期待したが……
頼む…運命をまっとうさせてくれ！！」

（ここで、ただ単に……記憶を抹消しても…後に……か…）

「わかりました…最後に何か要望ありますか？」

「できればもう一度家族に逢いたかったのう……」

「わかりました…少しお待ちを”幻影”” 世界扉”」

＝＝　別世界を経由して、フォンブラウン戦闘前　＝＝

「こ、ここは？」

「戦闘の始まる前です…生きているご家族を見る事ができます。パラドックスがあるので助けられませんのですみませんが……」

「おお……」

「さ、ご家族はどちらに？」

「あ、ああ、こっちじゃ……」

案内されてくと…
店内でパーティー中であろう…幸せそうな一家がいた…

「おおお……」
どうやらおじいさん泣いている…

そうであろう、ある意味残酷でもあるかもしれない…が、正直、俺

にはこの方法しか思いつかない……

空襲警報がなる…

「そうじゃ、この警報がなり、一応避難の為シェルターにいこうとしたんじゃ…
じゃがわしを思ってゆっくり…だったのが間違いだったんじゃな…」
店内からでるおじいさん一家……
「おじいさん？」

「ありがとう…もうこれで満足じゃ…いやこれ以上は辛くなる…戻ってくれないか？」

「わかりました”世界扉”」

＝＝　別世界経由でZにおいてあるシェルター内　＝＝

「もう、おもいのこしはない……さっさと死なせてくれ」

「おじいさん……本当によろしいのですね？？」

「くどい！！早くやってくれ！！」

「わかりました……ご家族の方を救えなく…本当にすみませんでした……バルディエル」

内装の物を固定……天井に穴を作る…

一気に空気が吸い出され…おじいさんも真空に…

あ・り・が・と・う……

（……きついなぁ…ありがとう……か）

しばらく…カオルは動けなかった……

……

五日目

一気にサイド3を目指す……

サイド3のコロニーを取得する為だ…

ついて、

開放型の自立コロニー…

及び開放型の農業コロニー、

密閉型の工業型コロニーを取得し…

（駄目だ……）

「”世界扉”」

……

カオル報告

駄目です

第４０話　Ｚ編６　＆ｑｕｏｔ；反撃＆ｑｕｏｔ；にて……　投稿日２０１１

作者「いつかは起きると思ったけどね……」

石橋「……こんな事が…」

まりもちゃん「……」

石橋「……で作者、あたし達なんで後書きに？」

作者「かいてて、俺もヘビーだなぁとおもったんさ…多分たち直せられる候補筆頭組」

ヒルダ「さくしゃ、わたしは？」

作者「ん…多分好き勝手になりそうから自重かも」

ヒルダ「多分適任私だと思うけど？」

作者「むぅ」

石橋・まりも「そんなことさせない！！」

ヒルダ「まぁわかったわ…ここは公平にいきましょ？……けどよくパラドックス起こさせなかったわよね…」

作者「まぁな…もし過去に飛んで助けたら、重大なパラドックスが起きてたろうなぁ…」

石橋・まりも「重大な？」

作者「ああ、基本的に現時点での運命を変えるのがカオルのやり方…あとは証拠が残らない状態とかね…」

マギー「あたしらの事ね？」

カオル「ああ、でおじいさんを助けて助かった人の中で助かったのは一人だけという認識があった…」

石橋・まりも「確かに…」

作者「それで短時間の内に同一世界の過去に戻り助けると？？」

石橋「わけわからなくなる！！」

作者「よく言い切った…ようはそれがパラドックスの発生だ…」

まりも「でもカオル君が助けた時点に戻って、助けられなかった人を助けたら？」

作者「つまりやり直しね…は多分パラドックスが起きるから…なので禁忌…
別の場所にて助ける事はできるけと…ね」

石橋「そうか…」

作者「あの時点では助けられなかった…ね…どう考えても…」

まりも「忘却は？」

作者「あの事件のみ消しても、おじいさんの中で家族はかなり重要にしめていて、
破綻点はみつかり…いつかは矛盾から崩壊する…
かといって家族の事をけすと…廃人確定…まぁだからあのおじいさ

んがでてきた時点で…だね」

ヤバイ重い話になってきた…カオル君の心立ち直るのか？

第４１話　帰還処理…　投稿日２０１１０１１４

２００１年６月２３日昼
＝Ｂ５５ハンガー＝

世界扉が開く……

カオルがでると、待ってましたかのように１１号が…

［マスターお帰りなさい。いきなりで悪いけど大変な事態が、発生したんだ］

無言のカオル

［マスター？？？］

……

［なんか…ヤバイ？？］

［ちょっとみんなー緊急事態！！］

［なになに？］［どうした？］［１１号やらないか］

［マスターが無反応なんだけど……］

［どれどれ？］［本当だ？］［んー馬鹿！！］［へのかっぱ！］

［どうしたんだろ？］

［こんな事もあろうかと！！］
とウリバタケさん…いや５号

［マスターに記録装置を仕込ませてたから大丈夫だ］

［うぉ５号偉い！！］［流石変人］［ｏｈａｎａｓｈｉが成功したのね？］

［本当はマスターの性行為を観察しようとしたんだけどさ］

［５号ｏｈａｎａｓｈｉね］［後でコピー汁］［やっぱ変人］

［とにかく！！なんかわかるかもしれないなら……５号どこなの！？］

［ここだよ］
ボロボロの５号が、マスターの制服の襟元から装置を取り出す…

ｏｈａｎａｓｈｉ済みなのね…

［共有化できるぞ…］

［再生ね…最後の方で良いと思う］
［だね］［うん］［生活全部みたーい］

再生中
［このスペースコロニーは…普通みたいね…もっと前…月？動いてないわね？……
もうちょっと前？これ？］
ちょうどおじいさんのを探しあてたようだ……

［うわぁ…これじゃマスター……］

［あ、虚数空間内に人がいる状態じゃない…マスター再起動させないとやばいわ……］

［5号！！突撃なさい！！］

［いっきまーす］
ＡＴフィールドに阻まれ自爆する5号

［……た、たすけ］

［ＡＴフィールドがこんなに忌ま忌ましいなんて……］

［どうしよう……］

「あら？どうしたの？」

［ヒルダさん！！］

［おいあの人なら］［ああ、］［確かに］

［ヒルダさん大変です！！］

カクカクシカジカ

「ふ～ん…で心のからに閉じ篭っちゃったの？？」

［みたいです…どうしましょう？］

「……いいわ…たち直らさせてあげる……というか直らないとね…

心細いし…」

［ありがとうございます］

「でカオル君のベットのある部屋までは運べそう？」

［ですね…ＡＴフィールドで阻まれてもみんなで運べば怖くないですし］

「わかったわ運んで寝かしてあげてね…準備あるから…」

［はい！！］

［…た……す…けて…よ…］

忘れさられる変態５号…

［さ…く…しゃ？］

だから話かけない……すっかり皆忘れただけなんだからさ…
そのうち再登場できるから…ね。

５号…光なくなったね…

＝＝　カオル私室　＝＝

運ばれて無反応のカオル…ＡＴフィールドは強い力等なければ発生せず、運べるようだった…

カチャリ
入ってきたヒルダさん…

ガウンを脱ぐとランジェリー姿になる……

「さぁカオル君…再起動させてあ・げ・る・からね…」

ヒルダさん、ベットの横に座る。

手を胸元に這わせて……

反応ないのをちょっと不満げな顔する…

「うん、もう……まぁいいわ」

制服の上着ボタンを一つ一つ外す…
シャツが見える…

上着を片腕ずつ脱がし…シャツをめくる…

ウフフ
ヒルダさんから妖艶な笑みがでる。

「美味しいそうね……」

ヒルダさん、舌舐めずり…顔をはだけた胸に近づけ…

ピチャリピチャピチャ
舐め始める。

「うふ……おいしい♪」

ヒルダさん恍惚の表情。

「こっちは……前、くわえられなかったのよね……」

下半身の方をみる…

「ん…でも唇奪っちゃた方が良いかな??」

今だに反応しないカオル…ヒルダさんの目的かわって…

左手は、舐めた胸板を這わせて…、右手がベルトにかかる。

決めたようだ…

両手がベルトのバックルにかかる…

カチャリ

外すと……ますますヒルダさん笑みが……

シュル

ベルトの帯をバックルからぬいて…手がズボンのホックにかかる……

その時!!

バン!!ドアがヒルダさんを襲う!!

ドアの外には二人の人影……

石橋とまりもちゃんだ…

二人の息は荒い……

ドアの下敷きで、気絶しているヒルダさんは無視して、

ベット上のはだけているカオルを見つけだすと…

「カオル!!なんなの??あたしを守るっていったの嘘なの??」

「カオルさん!!私の思いを救ってくれると言いましたよね??戻ってきて下さい!!」わずかながら…光が

「カオル!!あたしを守ってよ!!一生守ってよ!!」

「カオルさん!!あなたたが語った夢、見させてください!!」

「好きなんだから!!戻ってきてよ!!」

「好きになりました!!戻って来て下さい!!」

「戻ってこなきゃ、あたしどうなるの!?」

「うそじゃないんですよね?カオルさん!」

「あたしを一生護って!」

「わたしに夢を下さい!!」

「ああ、どなるな…」

「「カオル」さん！！」

「うんで一生護ったるし、夢与える約束なんだが……俺どうなってた？？」

「へ？」「カオルさん？」

「戻ってから……記憶がないんだが……」

真っ赤になる二人とも……

「カ・オ・ルｏｈａｎａｓｈｉしよ」「あら同意見ですね石橋少尉…」

「え？？ち…ちとまて……状況を…」

「問答無用！！」

カオル君再び再起動まで…１時間…ハンガーで伸びてました……

「マスター？？」

「お、おう…１１号……状況が掴めてなかったんだが……」

［マスター？？まだｏｈａｎａｓｈｉ足りませんか？］

「い、いやぁ…大丈夫だ…」

［それよか虚数空間シェルターに人居ますよね？］

「あ、ああそうだったな…」

戦艦ドックにいきシェルターをだし…扉をつける。

それぞれのシェルターに

『つきましたので宿舎に案内します。ご準備出来次第、でるようにお願い致します』

で、手の空いているコバッタに案内させる。

［マスター…ちょっと注射打たせてね］

「ん？なんのだ？」

［今日みたく殻に入ってだとね…あの人たち…どうなってた？］

「……だな……それ用のか？」

［うん…］

「ああ、わかったやってくれ」

［逝くよ］

「漢字違うぞ」

［わざとだよ…終わったよ］

「こんなもんか？？」

あんまり痛みを感じなかった……

（……あ…）

「わりぃ忘れもんしてた…」

［あ、マスター報告あるんだけど…］

「ん～～2時間まてるか？」

「……なら大丈夫かな？だだ重大な事だからね…早めにね」

「わかった…”幻影”” 世界扉”」

＝＝　カオルの私室　＝＝

「いったぁ……あらやだ…たんこぶ…」

さすりさすり

「全く……ねえ作者」

は…はい？

「あたしの出番、もう今回はないの？」

予定なしです…

「酷い目にあったわぁ…次回は食わせてよね」

そんな約束できかねません…で、俺にあんまり呼びかけないでくれない？

「あら……いいことし・て・あ・げ・た・の・に……ねぇ」

ほ、本当ですか？！！？

「約束しなかったから駄目よ」

……ｏｒｚ……

あ～ヒルダさん、アリシアさんにみて貰って下さい……

＝＝　Ｚの世界　＝＝
宇宙歴００８７　５月１１日
ジャブロー内

ウィーンウィーンウィーンウィーン

「エゥーゴの襲撃だぁぁ」

「防空隊パイロットは至急発進せよ！！アウドムラの発進の時間稼げ！！」

「キリマンジャロでな！！」

「ああ！！死ぬなよ！！」

（何人逝くんだか……）

とりあえず情報通りの場所を目指した…

（この建物か…確認するか…）
「バルディエル」

（いたいた…一部屋に集められてか…人数若干多いなぁ…けど丁度

よい…）
建物の入口の中から、
足音をたてて、部屋の前に向かって進める。
「おお～いティターンズさん～どうなってるの～？」

「誰かきてる？」

「あ、本当…釈放かしら？」

「あたしらも戦わせて～」

扉前で足をとめ…

「こんにちわ、時間がありませんので簡潔に…１番偉い方…いえまとめ役の方いますか？」
ザワザワ…カツカツ

「わたしだが」

「まず最初にいいます…このジャブロー基地は核により６０分後に消滅します…」

「それって…」

「はい…あなたがた皆さんは、この部屋に閉じ込められたまま……
核によって処刑される運命です」

「ばかな！」「うそ！」「どうして！」

「覚えがありませんか？早くいえば口封じです…」

「バスクか…」「ハゲ爺め」「エロハゲ」

「まぁ…こちらがその命令書ですね…」
と隙間から渡す。

「むう……」

「あらあたしが？」

「今渡した人分以外は、ここにきてわかったので、
ないですが…もう周辺は無人です…意味わかりますよね？」

「そうね…」

「さて、実はこちらも用意してます」
と、人事ファイルを渡す。

「死亡か……え？」

「おわかりですか？本来はまだ生存となっているはずですが…」

「な……え？…先の時間？」

「ええ、キリマンジャロ基地が、ティターンズの本拠地となってるので、拝借してきました」

「ば…ばかな……」

「あと、どなたかヒルダ・ビタンさんご存知ですか？」

「先生？」「上司だった方だ」「恩人だ」

「知ってる方が殆どですね。
実はビタンさんは生きていて、依頼を受けて調査後ここにきた次第

です」

「な……」

「まぁ、こういった異能力をもっていて、いろんな世界を渡りスカウトしていますから…ね…バルディエル」

鉄枠と同化、解除

「むぅ……」

「おや、1番落ち着いてますね～」

「まぁ死ぬとわかったからなぁ…で、スカウトとは？」

「こちらを…」

DVDを流す。

「30分映像ですが、爆発までは時間あります。で行く希望者の方は名乗りで…へ？」

話していたまとめ役の方があげると、全員手をあげた。

「あの～みてからで…」

「まぁ…だなぁ…が希望者は全員だ」

「見てからでも間に合うので大丈夫ですよ…というつもりだったんですが…」

「まぁあんたがいうならそうかもしれんな…」

…３０分後…

「ではシェルターに一回はいってもらいます」

で虚数空間のシェルターに一人ずつ引き込む。

「”世界扉”」

＝＝　Ｂ５５戦艦ドック　＝＝

扉からでると…

［マスターシェルターの清掃終了したよ］

と２５号が近づいてきた…

「おう、あんがとさん…でもう一組分案内と清掃頼むわ」

シェルターを扉消してイレ込み、出して扉つける。

「つきました。出てきてください。案内するものをつけてます」

「で１１号？」

［マスター～…で報告やっとできる♪］

「どうした？」

［諜報活動なのかな？
誘拐未遂が７件、破壊未遂が２５件、進入禁止箇所への潜入が４１件］

「はぁ？……で、どうしたんだ？」

［桜井隊長とかと協力で、牢屋をつくって確保はしてる。
あとは副司令からも問い合わせ多数きてる］

「え～と……まずは牢屋に連れていってくれ……
あと副司令も問い合わせこの件だろ？取り調べ終わるの時間かかるから、
急ぎならこっちに…で伝えておいてくれ」

ガンパレ歩兵組お疲れ様でした…
牢屋はとりあえずＡ５に設置したらしい……あとで移動だな…

まずは誘拐未遂７件から……
精神のぞきながらだから楽だ…
嘘ついても、家族構成等ただもれ…ついでに機密情報も…
楽といっちゃ楽♪

５件は可愛さから…アメリカ３と、ＥＵ、オーストラリア
充分国際問題になるとＥＵとオーストラリアの方は…謝ってる…
とりあえずスカウトでどうか？
で本国に伺うとの事で釈放…

アメリカさんはコバッタ誘拐してこい！！だったが可愛さが余ったらしい…
スカウトさそったらもれなく移るとの事

あとの２名は仕事というか、国家に忠実…
有能部類か……
洗脳して、スカウトしますか…
コマンド
最優先事項
忠誠先変更渚カオル
よしっと…

破壊工作は重大だな…
あんまり有能なのはいない…男性だけだし、アメリカだけか…
ドラム缶、コンクリートつめで頭出して…
栄養チューブと尿道にカーテルさしてっと…
あ、もちろん糞の空間分は空けて、
アメリカ大使館宛てに。

進入禁止か…

潜入４１件

多いなぁ…
アメリカは…２０件
ＥＵは…３件　先の子捜索込みね。
ソ連は…５件
大東亜連合…２件
アフリカ連合…２件
中東連合…３件
中華統一連合５件

……アメリカ以外は釈放で、
正式ルートで来て下さいと親書付きで帰す。

アメリカはなぁ…男性工作員は、両手両足をわんわんスタイルでコンクリートつけにして…
アメリカ大使館へ…

女性工作員は…可哀相だから両手両足手錠で…

以上

（ＭＰと、諜報面も強化しないと駄目かな？
…次は、ターミネーター確保だな…）

［マスター…本当にやるの？］

「ああ、やってくれ」

［うん…わかった…］
顔青ざめているアメリカ工作員達…
うんわかるよ…

［ねぇ…薬間違えた？］［いや、間違えてないよ…］［変な方向にいってない？］［効き過ぎた…かなぁ…］
等など……

「と、副司令が…だったよな？」

［え？……は、はい］

「何戸惑ってんだ？しっかりしろよな……
あ、そうそうアメリカ工作員さん、罪が重い！！と思ってるだろ？」
ウンウン頷きまくる。

「けどなぁ、ＢＥＴＡの味方になって、破壊工作してるから容赦しないよ…だ」

「ＢＥＴＡの味方？とんでもない国益の為に！！」

「でも結果は結果だ…そういった事さ、特に破壊工作が多かったからみせしめさ…
うらむならお上をうらみな」

立ち去るカオル。

「助けてくれ！！」「こんなの人道的でない！！」「ああ……」

［ごめんね…マスターの命令は絶対だから…］

＝＝　副司令執務室　＝＝

コンコン「副司令～」

「あらまってたわ…いらっしゃい」

シュン

「と、スパイの事で？」

「ええ……まったく頭、いたいわよ…被害もでてるし…」

「おや？未遂だけでなく？」

「…そっちの事上がってないんだけど…」

「あ、そうっすか…特にアメリカが多く、ＣＩＡ、ＤＩＡも送りこんでましたね…
進入禁止以外は未遂に抑えましたが…」

「内訳は？」

「誘拐未遂７件、破壊未遂２５件、進入禁止４１件」

「こっちと合わせると１５０件くらいね…」

「逮捕できたの尋問しましょうか？
精神のぞきながらなので、真実を自白してると一緒ですし…」

「……良いわね、それ…　次は、任せてみようかしら…
こっちは自決しちゃった、ようね…」

「……そうすか……」

「で、対処はどうしたの？」

「破壊工作等件数が多かったアメリカ工作員には、重大な処置を…
他のところはただの調査との事だったので、親書付きで開放しました」

「ふう……わかったわ…」

「諜報、ＭＰ強化にターミネーター入れます？」

「何それ…」

「こいつですが…」
ターミネーター２のＤＶＤを渡す。

「対全人類の潜入殺人ロボットが、ターミネーターです。
まぁ物語に、支障のない未来世界にとんで、拉致ちゃおうかなぁ～

とも思います」

「あら、それって……」

「ええ、未来はその時点から変わる…本来はそうですからね。
が物語は、かえると未来がわからなくなる…ですから…
まぁ未来世界もかかれてるので、飛べないわけでもない…です」

「まぁいいわ…でいつ行くの？」

「そうっすね…明日か明後日…処理もあるので…」

「わかったわ…あとはこちらからはないわね…強化の件よろしくね」

「はい」

シュン

「ふ～ん……ターミネーターか……まぁ後で見ましょう」

副司令……やばいと思いますが……

……

カオル報告

次回に持ち越し…

第４１話　帰還処理…　投稿日２０１１０１１４（後書き）

ヒルダ「ねえ作者…いい加減本編で食わせて貰ってもいいんじゃない？」

作者「ん？ん～～俺は介入してないぞ、お前らが一人歩きしてるんだし……」

ヒルダ「ねぇ……さくしゃぁ～あ・た・し・を、好きにしていいのよ……」

作者「……懐柔は駄目」

ヒルダ「そ・ん・な・こ・と・い・わ・ず・に」
ヒルダさんの手が作者の手ひらを、人差し指でなぞる……

作者「駄目ったら駄目！！」

ヒルダ「うんもぅ…じゃあ…これでどう？」
作者の手を掴むとヒルダさんの胸にタッチ…
もにゅもにゅ

作者「ハァハァハァ……本編で食わせあげよう…だから今ここで」

ヒルダ「いいわよ…」

グワッシャン！！

作者…ハンマーの下敷きに…

フゥーフゥーフゥー　石橋「さくしゃぁ～～～駄目じゃないの～～～」

作者「な…何故…お…れ……が…」

石橋「ヒルダさんもヒルダさんです！！
後書きは本編と別なんだから、介入させようとしない！」

ヒルダ「あら、そういった手段もとらないと、大人の世界は生きてけないわよ～」

石橋「ぐぬぬぬぬ…不知火君懲らしめてあげなさい！！」
ガシャガシャ

ヒルダ「あら?うけてたつわよｍｋ2君カモーン」
フューンカシュン

石橋「やれー!!」

ヒルダ「いっけぇ!!」

不知火君、ｍｋ2君に先制パンチ、吹っ飛んで盛大に転がる…
立ち上がってお返しとばかりブーストダッシュで殴る!
盛大に吹っ飛んで転がり……

作者「これの締め…どうしよう?」

○［おあとかよろちいようで］

第４２話　次の日　投稿日２０１１０１１５　修正１

２００１年６月２４日
昨日は遅かったのでまず処理全般を……

核融合の燃料が沢山手に入ったのがうれしい♪

と整理からか…
破棄資源化
ザクトレーナー
ジム２　４機
ジムカス
ジムキャノン２
グフ飛行試験型
ハイザック

８基分確保

作るのはＭＳは…
Ｚとメタスか…
ウォードレスは烈火２機

とりあえず作成

残骸整理で吐き出して…
何機分燃料確保できるか?だよなぁ…

で、情報を鯖に入れた後、マスドライバーの建設と、
チューリップがＬ５に着いたので、サイド５の建設だね…

多目的作業挺に乗って…「作業挺でｇｏ♪」

［マスターが、また壊れてる…］

［この間１１号うったのが…］［変な薬まぜた］［壊れたマスターいい！］

チューリップを潜ると…
公転に同期しているらしい……流石♪

まず、
サラミス、サラミス後期型、マゼラン、ムサイを出す。
ついて来たヤドカリ１１号１２号１３号１４号をつけ……
そのまま命名、１１号艦から１４号艦
セイバーフィッシュと、ザク２改、ネモ２機をつけて…
防空隊設立
パイロット１５号から１８号
整備士にコバッタ３１、３２号を専属

密閉型農業コロニーを設置…稼動…
破棄コロニー全てを出す。
修繕だな…

「１１号…完動できるのどんなもんになる?」

無線で聞いた…

［そうだね～～……空気が抜けてるから、気密確保して、１っか月だね］

「そうか…とりあえず補修かな…」

一個一個同化し、資材を変化させて…情報元に気密を確保させた…

位置修正用に核融合及び熱核ロケットを設営…

これで大丈夫な筈だ…

精製した資材の在庫の７０％使って修繕した。

「１１号どうだ？」

［うん良いみたいだね…あとは、大気組成したのを持ち込むだね］

１１号の説明だと、土から成分変更で、圧縮チップを作るらしい…

テラフォーミング技術の一つだとさ……

本来は月から建設資材をマスドライバーで打ち上げ、

大気は地球から輸送して充填する…なので時間がかなりかかるらし

い…

まぁこれで、４５００万人分の土地は確保できる…とのわけか…

けど、内部のソフト面とか…どうするかなぁ……

「とりあえず戻るぞ…あとよろしくなＬ５防宙隊」

＝＝　Ｂ５５ハンガー　＝＝

（え～と…次がジオフロントと、格納庫エリアか…）

格納庫エリア
Ｂ３も増えた用で格納庫（１００機分）で…

ジオフロントは…
牢屋をＣ３に移して…

ＭＰってもなれる要員がガンパレ組しかいないなぁ…けど、
詰所をＢ２に、
あ、男性諜報部員２名もつけておこう。

Ａ４を操縦訓練施設に、
Ａ８から１０、Ｂ８から１０、Ｃ８から１０、を歩兵訓練所に、

あと情報網はやっぱり必要だな…Ｂ２に衛星ハッキング施設作るか…

ヤドカリ２０機つけたら…オモイカネ＋ルリ嬢にまけ…ないよな？

でスカウト組の女性諜報部員３名もつけて…

施設に関しては終了。

６月２４日午後３時

（あとは、スカウト組と…後方資材か？？）
民間人含めて５６名スカウトしました。

民間人の方は一人一人面接をして…

コロニー公社勤務だった方が６名、
アイナハム傘下コロニー開発会社の方が２名。

アイナハムの方は実際に作った事あるそうで…

この世界には俺が持ってきたコロニー以外ない、９月になったら好きなだけ資材が入る…ったら、
ワクワクしはじめ、オフィスを！
との事だったので…Ｂ３に作成しました。

コックの方が３名、和洋中…
ＰＸに入って貰います♪

アイナハムの開発部所属の方が２名Ｂ４に研究棟つくりますか…

後でビダンさんにも来てもらいますかな？

企業スパイの方が１名…　情報課へ…

あとの方が経理部か…

オフィスに入って貰って…経理等担当して貰いましょう…

民間人はおわった！！　次！！

軍人４０名の方々か…

２２名のパイロットはそのままＢ－０１に編入…

けど搭乗機がないなぁ…後で。

開発技師の方々は研究棟に入って貰いましょう…

整備士はそのままで…

さて残り１０名の方々は…

整備士３　看護士３パイロット４名か…

それぞれに入ってもらいました。

けど男女比率１：２９か…

バスクの口封じの粛清のおかげさま…かな？

あとなんか有りそうな気するから、再調査してみよう…

さて、搭乗機の問題か…

俺としたら、ドムが良いんじゃないかな?とも思うけど…

ジオンの機体は流体パルスで、第一世代の外骨格なんだよなぁ…

…モノコック構造に変化したら良いんじゃね?

魔改造始めました。

骨格はマラサイを参考に…MCつけて…

装甲はガンダリウムγ

自重が約12t減か…

あと背面ブースターと、脛の前、外側に高周波ブレードをくっつけて…

あ、サンドフィルター忘れずに。

ジュネレーター出力上げて…

拡散ビームは撤去、

のかわり外装式バルカンポットか…

表面は百式のビームコーティング塗装で…

武器の高周波ブレードは主機から供給タイプに変更…

できました。
命名、魔改造ドム、略して魔ドム。

地上の有人機にしましょうか…

金色のドムによる、よりスピードアップした、ジェットストリームアタック…
しかも２６機での…アムロでも勝てない…筈。

魔ドムの作成を２５機分頼みました…

核融合炉が残り１６基分か…

あと多目的作業挺も増やさないと、効率悪いか…

６基使って、作成を依頼…

残り１０基分……

（どれだけ確保できたのかな？……そういえばＡ－０１分の作って……？）

ないですね１機しか……

「作者マジ？」

カオル、反応しない…うんマジ…見直した。

顔青ざめるカオル。

「１１号～」

……設定ってこんなに大変なんだよなぁ…
見直して齟齬がないかどうか……
まだ多分プラントでの変換があるから良いものの…
資材成分まで…ったら…恐ろしい…

以上作者のぼやきでした。

「１１号！！」

「何？マスター」

「残骸から確保できた燃料は？」

［……今の所４０基分…まだ整理中］

「ふう……よかったぁ……あ、じゃあＡ－０１分頼むわ」

［魔改造仕様で？］

「だな…あ、高周波ブレードだけ主機からエネルギーで」

［了解～］

「今の人数＋上がって来る人数分で…１４機新造で良いな、で整備マニュアルは？」

［はい］

「こっちからも、アドバイザーつけた方がいいかな…」

［次のトリップ終わった頃には仕上がってる筈］

「うし、それで行くか」

［あ、ライセンス費用どうするの？］

……考えてない…

［ひっかかるのが、頭部と、跳躍ユニット内部と、管制ユニット部分だけだけどね…］

そう、殆ど新造…

「…跳躍ユニットかえるか？」

［じゃあ頭部と管制ユニット部分だけ］

「頭部も変えるか？」

［管制ユニットのみ］

（ん～～～…管制ユニットはなぁ）

そう、この世界では脱出装置もかねるし、機体が入らない場所での屋外作業ユニットをかねているのだ…
またなんにしろ衛士強化装備とセットにもなっている…

「管制ユニットのみライセンスだな…ちっとモデルの不知火弄るから、でコピー作成だね」

魔改造不知火…

跳躍ユニット↓反重力ユニットへ変更

頭部センサーユニット↓外観に合うのがない！！……Ｚガンダムの頭部のっけちゃえ♪

空力が…だけど、跳躍ユニットを、反重力ユニットに変えたから、そっちで方向制御になる。
問題点は飛行最高速度が６００ｋｍ／ｈになってしまった事…
追加セットが必要かな？

「……とりあえずライセンスの話してくる…
あとＡ－０１の全員に乗って貰い、高評価なら作成かな？」

［了解、マスター］

＝＝　副司令執務室　＝＝

コンコン「副司令～」

「いるわよ～」

シュン

「失礼します」

「どうしたの？」

「えっとＡ－０１分の不知火を俺の所で、
魔改造不知火作って変えようかなぁ？
と思ってたんですが、ライセンスが…」

「あらそうねぇ…かなり高くつくわね…」

「あ、管制ユニットのみになりましたので…デザインは半々でひっかかるか微妙なラインです」

「……殆ど新造じゃないの……本当に管制ユニットのみなの？」

「はい」

「じゃあ、こっちで持つわよ…
関係各所に連絡しておくから…審査どうするの？」

「１１号に任せますので、何時でも」

「わかったわ」

「俺は以上っすね」

「所で、地上で何してるの？報告が上がってきてるんだけど…」

「あ～マスドライバーですよ」

「あれね……わかったわ」

「あ、あと、地上戦艦の出入口も新たに作るつもりですので」

「管理はよろしくね」

「了解です。俺からは以上です」

「ところで見たけど…殺人ロボットを入れるの？」

「あ～Ｔ－８５０を非殺傷設定で、回らせようかなと…
あのジョンコナー側についたシュワちゃんです」

「あの筋肉質のね……ところであれは、実写映画なのよね？」

「ですね。俳優が演じてますよ」

「成る程ねぇ……落ち着いたら、あなたの世界も見てみたいわね」

「いいっすよ。あ、俺の世界はナンパされやすいので、一応…」

「平和ね……早く世界を取り戻さないとね」

「ですね」

「わたしからは以上よ」

「失礼しました」

シュン

シュン

シュン

「あら？霞？何泣いてるの？」

「可哀相です」

はてなと思うが泣いている霞をあやす副司令。

泣いていた原因はターミネーター２のラスト…
熔鉱炉に溶けるシーンであった…

＝＝　Ｂ５５ハンガー　＝＝

（あと忘れはないかな？）

無いはず……

（明日行くか…）

ｓｉｄｅ～　アメリカ大使館　～

「馬鹿な！！殆ど全滅だと？」

「うちの局員ならありえない、おたくの方じゃ？」

「まぁ……みていただければ…」

ドアが開く……

中にはドラム缶につまった者が多数…

またワンワンスタイルのオブジェになったもの多数…

一人ずつコンクリートの解体作業をしてるらしい…

手の指…隙間に向けドリルを…

顔が青く……

ギャァァァ！

指にいったようだ…鮮血が混ざる。

入ってきた片方は見知った顔が居ない…のかほっとしていた…

「ば…ばかな…これは…人間のする事か…？」

「あとメッセージが付いてましたので……アメリカさんへ、破壊工作が多かったので、こういった形になりました。
同じ事、してあげましょうか？
いやだったら、引き上げて下さいね。
だそうです」

「くぬぬぬ…」

「今、アメリカ国民として、コンクリート部分の解体作業をしてますので……あちらに」

バタン…扉がしまる。

……
カオル報告

コバッタは規定数まで増えました。

ヤドカリは今は１１５号まで増えました。

情報収集能力が増えた模様です。
各種衛星通信傍受解析しているようです。

第４２話　次の日　投稿日２０１１０１１５　修正１（後書き）

デデッデデデン　デデッデデデン
チャララーラーララー　チャララララーチャーチャチャー

石橋「あ、作者映画見てるの？」

作者「ターミネーター４ね」

石橋「ふ～ん…あたしも見せて～」

作者「ああ、いいよ」

……見終わりました…

作者「どうだ？」

石橋「……なんというか……心臓提供…か…」

作者「……まぁ…な…そういえば他のシリーズでも、毎回毎回居なくなるからなぁ…」

石橋「そうなの？」

作者「1は別として2は熔鉱炉に…3はパワーセルで相打ち」

石橋「なるほどね……」

作者「そういった意味では普通の小説とかと違うったら違うね…通常は生き残るか大人の事情の為とか…」

石橋「大人の事情？」

作者「キャストのスケジュールや、お金の問題、まぁ健康上の理由等もある。あとはドラマ中に亡くなったりとかね…連続シリーズなんかは特に…
これじゃないけど、踊る大捜査線の、いかりや長介さんとかさ…２００４年に亡くなって、シリーズの……と…ちゅう…でさ」

石橋「あら？作者どうしたの急に…」

やばいかいてたら…ほんに涙が…なくなった当時の事思いだして…
大好きだったんだよなぁ…
おじいちゃんににてて…

すんません…纏められそうにないので、後書きはこのへんで…

第４３話　ターミネーター？の未来世界へ　投稿日２０１１０１１６

２００１年６月２５日

ターミネーターの審判の日の設定はいくつかある…
１９９７年８月２９日…ターミネーター２での審判の日…なくなった。
２００４年７月２５日…ターミネーター３での審判の日…実行された。
２０１１年４月１１日…ターミネーター４及び、サラクロニクルでの審判の日…

好きかってできるのは、なくなった、ターミネーター２の世界である。

いや、極めて近い平行世界になった世界といった方が良いだろう…

まぁようはスカイネットは、不利になったから、すかしっぺを送って、よりよい世界を…なのだ…

なのでまずは、審判の日が何時かを知る、それによって撤退しもう一度飛ぶ必要がある…
って事だ…

「うっし、じゃあ行ってくる」

［いってらっしゃ～い］

”世界扉”」

＝＝ターミネーター？の未来世界へ＝＝

興廃した未来……

けど、できれば設定的には打ち切った3や、
無くなった2の未来世界であってほしい…気持ちである。

まずは、スカイネット側に見つからないように、徒歩で現在地確認しようとしている…

作注…なんか利権がどうたらで…ターミネーターシリーズが発表しながら、制作頓挫ｏｒｚなので、続編期待してたんすが……
あとで修正は…ねぇ…

歩いて一日目…人が見つからない…

確か、Ｔ４で夜歩くとスカイネット側に見つかる…

のがあった、赤外線での探知によりだ…

先にこの世界でスカイネットと接触はヤバイ…

なので、徒歩で探したが見つからない…

廃墟で就寝…

ベットが恋しい……

二日目

道や廃墟は見つけるんだけど…人は居ないんだよね…

現在地が載ってる看板すら見つからない……

（はぁ…）

しばらくすると…黒い点がみえる…

（ん……やば！！）

カオルは廃墟に向かって走り始めた。

黒い点が近づいてくる……

偵察用エアロスタットに見つかったようだ。

カオルはなんとか廃墟内に飛び込み、

「バルディエル」

同化した。

フィンフィンフィン

エアロスタットが廃墟内部に入ってきた…

エアロスタットは被害を考えずに、

まず索敵目的で投入される機械軍の偵察機だ…

もう1機エアロスタットがきた…

（やっぱり捕捉されたか……となると…）

フィィィ

案の定、ハンターキラー　エリアルがきた…

最初の時点で発見の報告で送られてきたのだ…

ターミネーター等は二足歩行等で機動力はしれたもの…
基本的には飛行タイプによる捜索、殲滅が重視されるのだ…

（乗っ取っちゃおうかなぁ……でも、確定してないし…介入はなぁ……）

考えていると、エアロスタットは、端から端まで、
捜索していたが、廃墟内に居ない…と報告したのか…

離れていった…

けど捜索２０分一人の人間に費やす…大抵のは見つかって……
処刑されるのだろう。

２０分ほどして廃墟から離れた…

またみちぞいに歩いて行く……

三日目…今だ人が見つからない……

またもやエアロスタットと追いかけっこ発生！！

廃墟に逃げ込み同化。

（まったくしつこいんだよ！！）

離れていったので離脱…再び歩く…

四日目

どうやら俺は、ネバダ州のラスベガスに向かっている事が判明…

が……

（早く世界が確定してほしいなぁ…）

正直、ターミネーター2の未来世界に入れたか微妙…とカオルは感じていた…

消滅する未来というか、不安定な世界だから…のがある。

一般的には過去にとんで何か変えて未来に変えったら、世界は変わっていた…

つまりシフトし、元の世界には戻れなくなる…

まぁ正直、その元の世界に入れたか微妙～とカオルは思ってた為、介入はまだ控えているのだ…

カオル日記

今日はエアロスタットに見つかりませんでした…
人が恋しいよう…帰ろっかなぁ…

カオル壊れ始めました…日記つけ始めてるし……

五日目

またもやエアロスタットに見つかり、何時もながらの手段で廃墟に飛び込む。

「バルディエル」
同化し、やり過ごそうとすると……

（人！？！？）

問答無用でシェルターに引き込みました。

エアロスタットがやはり偵察にきて…

（俺がここに飛び込まなければこの人見つからなかったよなぁ……
うん介入でない！！）

エアロスタットもかなり来はじめ、Ｔ－６００もきた……

（はよう帰れ！！こっちは聞きたいんだよ！！）

かなりしつこい…が１時間程捜索したら…どっかに離れていった…
様子みて３０分程……

（うっし♪）

解除し、先程引きずりこんだ人をだ……

カオル…思わず…とまった。

その人バスローブ姿でしかもグラマラスなパイパイ…

「すみません戻しますので服をきて下さい！！」

すぐに戻しました……

5分後…もう一回、出すと…
女性兵士が完全武装でたっていた…

「ちょっと、あんた…さっきの場所どこなのよ??」

「えっとご説明しますから、…にさん質問を…いいです?」

「良いわよ…」「審判の日の日付と、今日は何時ですか?」

「はぁ…?……あんた何いってるの?」

「すんません、お願いします。答えて下さい…」

「１９９７年８月２９日…忌ま忌ましい日よ…で、２０３０年６月２９日よ」

（うっし！！）
ガッツポーズを決めるカオル。

「で？あんた何なの？」

「あ、はい、渚カオルです。異世界人にて異能力者です」

「はぁ？？」

「まぁ……こういった事ですよ……ラミエル！！」

「え？！」

「狙い撃つぜ……デットエンドシュート！！」

久々の全力射撃……　加粒子砲が光の粒子を集め…火を放つ！！

大きな十字架がで…また通り過ぎていった所に空気の流入が起こる…

「あ、あ…あ、あんた…なにもん？」

「いやぁすから異世界人にて異能力者ですよ～♪」

フィィィ

エアロスタットが何事か？とよってきた…

（丁度いいや…）

「〝加速〟シャムシエル」

音速突破で、衝撃波なしの、物理法則無視の速さ近づくと…

「イロウル」

掌握

ネットワークから切断…

（物理的にもかえるか…）

「バルディエル」

変換完了

ライフル銃を構えて…フリーズしてた、兵士さん…

「あ、あんた…なにした？」

「ああ、こいつを配下にしましたよ」「はぁ？？スカイネットから？」

「ええ、物理的に変えて、プログラムも完全変更しました

俺の忠実なるともになりましたから♪」

と話して、エアロスタットを虚数空間に入れる。

「……そういえばいまの……」

「あ、ちょっとまって下さいね…パイル！！」

光の槍で串刺しにした…さっきのＴ－６００を……

流石にＴ－６００は持ち帰る気もしない…弱いし。

「はは…はは……夢見てるのかな？？」

心中お察しします。

「お、来たな…”加速”シャムシエル」

一気にハンターキラー　エリアルに飛び掛かる。

「イロウル」

掌握

「バルディエル」

ネットワーク切断

エリアルを一時停止命令をだして、体育館サイズのシェルター内にしまい、
兵士の元に戻る。

「お待たせしました…名前なんて言うんです？」

「……あ、ああ、人類抵抗軍、ミシェル・クラインだ…」

「よろしくお願いしますね～」

「ああ…よろしく……で、君、異世界人って？」

「ああ、まぁ別世界で、滅び行く運命に抵抗しようと、色んな世界から技術を乱入させようとしてんすよ」

「ほぉ……こっちとどっちがましなの？」

「ん～現時点ではまだあっちかな？
けどほっといたら間違いなく全滅しますね」

「そっちで戦ってるのは？」

「宇宙外創造生命体ＢＥＴＡです。まぁ…とてつもなく強力なね…」

「……そっちの世界で機械は？」

「まぁこっちみたく暴走はないですね。というかいたら…
先にＢＥＴＡをじゃないでしょうか？」

「それ程なんだ……けどさっきの部屋みたいな生活…できるの？」

「あ～難民にならなければ…ね」

「……ねぇ…そっちの世界いってみていい？」

「ん～～～まぁ…ＭＰやってくれるなら良いかもですね。補充はタ
ーミネーターの人擬態型をいれるのですけど…」

「あいつらを？」

「ええ、勿論配下にしますから」

「う…ん…わかったわ……ひょっとして？」

「ええ、ターミネーターを入手しにこっちに来たんですよ。ＭＰ強化や諜報強化が必要なので」

「あの殺人マシーンだと……」

「まぁ無理っすかね…なので基本非武装のＴ－８００って知ってます？」

「ああ、潜伏型ね」

「あれ捕まえたいなぁ～ってね」

「なかなか居ないわよ…」

「ん～スカイネットの生産拠点何処かあります？」

「この辺ならあっちだけど？」

「じゃあそこいきますか…」

「はぁ？あんた……ああ、そうねぇ……あたしは道案内だけになりそうね」

「お察しいただいて……助かります」

「じゃあ道案内するから…さっきみたく飛ぶの？」

「はい♪…じゃあ失礼しますね」お姫様だっこ

（あ、筋肉質だけどなんかセクシーだなぁ…）

「この態勢じゃないと飛べないの？」

「ですね…」

「昔のアニメ等で手を握ってとかは？」

「あなたの方には力働かない筈なので、吊すようになりますけど？」

「……いいわ…案内するから…あっちよ」

「はい、シャムシエル」

空に飛びだしました…

ATフィールド展開して、音速…突破!!

「……これもあなたの??」

「はい♪ところで、どの位離れてるんです?」

「ん～もう少しあ!!あ～～行き過ぎ行き過ぎ!」

通り越しました。

Gがかからない程度に減速し…

「……じゃあ戻りますので、シェルターに入ってて下さいね」

シェルターにいれる。

スカイネットターミナルからどんどん黒い粒が沸いて来る。

(殲滅戦か…)

とりあえず空中の捕獲対象は…トランスポーターだ…最後に残すつもりだった。

「アムロ！！いっきまーす！」

……

カオル報告

戦闘前なのに忙しい…

ミッシェルさん加入♪

あと、

偵察機と、飛行型確保。

以上

第43話　ターミネーター？の未来世界へ　投稿日20110116（後書き）

石橋「ねぇ作者…」

作者「ん？」

石橋「前半の…出会う前の部分何だけど…何か前投稿したのと…」

作者「……どうせ描写下手ですよ……」

石橋「……いじけちゃった？」

作者「ふん…だ」

石橋「けど5日か……T4みたら徒歩だとご都合主義？」

作者「……だろうなぁ…けど見つからなかったら、
一回帰って様子見させようかな？と思ってたんだよ…
カオルが人間オブジェにしちゃったし」

石橋「ああ、あれね……ね、諜報員ってあんなに帰せるものなの？」

作者「ふふふ…こんな事もあろうかと！！が炸裂したのさ…まぁ詳しくは、帰ってきた辺りの回でね…オマージュが沸いて来た」

石橋「……」

作者「グフフフフ」

石橋「え～作者が壊れ始めたので、この辺で…次回！！カオル無双、何処までやるか？　どうぞお楽しみに～」

第４４話　Ｔ編２　カオル無双、何処までやるか？　投稿日２０１１０１１７

五日目再開

「アムロ！！いっきまーす！」

カオル、踊りかかる。

ハンターの先制攻撃が始まった。
プラズマ砲の集中砲火、ＡＴフィールドで防ぐ。
目からビーム、命中、命中、命中、命中、命中…と書く間に、
一秒間一発の出力でビームをうち、
ハンターは命中すると、爆散し落ちてゆく。
ミサイルの集中砲火！！
もＡＴフィールドに阻まれる。
「ブレード！」
接近してきた機体には一刀両断…墜落してき爆散。

その間にも目からビームで次々と落とす。
エアロスタットもたかりにくる。

突撃しようと、よこからきたハンターはＡＴフィールドに阻まれる。
そのまま上から一刀両断、黒煙あげながら落ちてゆく。

ハーヴェスターのショルダーキャノン、撃ってくるがＡＴフィールドに阻まれる。

その間も目からビーム、２５０機目撃破。

地上からも対空砲火が上がる。
最初はある程度制限してた見たいだが、対空砲火の密度が上がると、味方の砲火に当たり墜落してくるのまで出てきた…

目からビーム！３５０機目墜落。

大型のトランスポートはいまのところ無視はしている。
ハーヴェスター搭載のポーターが十数機上がってきてるのを確認した…

（厳密な数わからん…目が眩しいし…）

慣れてきてるが、単純にライトが出ている感じと思えば良いかも…

まだまだ空中機は上がってきてる…

目からビーム５００機目墜落！

（きりねぇなぁ…）
何しろ、生産拠点兼基地だ数は多くいるだろう…

が、空中型の密度が薄くなってきた…

目からビーム７５０機目墜落。

地上の方をみると墜落した機体が燃え上がり、ある程度駆逐できているようだ…

対空砲火の密度が薄くなっている。

目からビーム８００機目？

エリアルやエアロスタットがついにきれた…

トランスポートの数を減らそうと

「パイル！！」

次々と落とす。地上は、うん地上施設だめだな……地下に期待しよう…

ラスト１機を、

「バルディエル」

まずは行動奪って、

「イロウル」

内部のモトターミネーターから書き換え、ネットワークから切断。

次に乗っているハーヴェスターの内部の、モトターミネーターから書き換え、ネット切断、

次にハーヴェスター、最後にトランスポート…

…離脱、全員に待機でシェルターに送る。

制空権は抑えたようだ…

（次は地上か…）

微かに対空砲火は上がってきている…

火線の元にいく…

（お、四足？）

勿論配下にしたてあげ、待機でシェルター行き。

Ｔ－６００…「パイル」

串刺し

Ｔ－６００…串刺し

あんまり居ない…

（ん～……やり過ぎた？）

基地上空で戦い過ぎたみたいで、基地地上に対空迎撃にでてたマシンが、

墜落してきたのに次々と巻き込まれる事態になった模様だ…

（さてっと…まぁいいや…基地掌握しにいくか）

中央にみえる半壊したタワーへと進む…

その頃……

「はぁ？どっかの馬鹿がしかけてるだと？本当か？」

『はい、本当です。しかも仕掛けている方が優勢の模様です。スカイネットターミナルから黒煙が次々上がってます』

「……わかったしかけるぞ！！貴様は引き続き偵察にあたれ。……コナーに連絡をとれ！
当基地は、いまからラスベガスターミナルに仕掛けると」
ウォォォー
命令を聞いた者たちが唸りあげ、基地は騒然とし始めた。
武器が次々と渡され、バギーのエンジンがかかる。

人類抵抗軍の出撃だった。

場面は戻る…

施設内部にはいると……
あんまりというか、仕掛けるターミネーターいなくなったのか…おとなしくなった…
まぁ…施設内部に入られる前に、殺戮するのが普通だからだ…

「さてと…内部構造把握からだな…バルディエル」

（ほうほう……お、当たりだ！！）
居たのだ。Ｔ－８５０とみられるのや、Ｔ－８ｘｘ…型番わからずや、Ｔ－１０００やＴ－１１００等が…しかも起動前…

まずはターミナルを掌握…

「イロウル」
掌握、物理的切断、また今生産中のターミネーターの停止…

あ、人間処理場…
離脱するとすぐさま目からビーム…監視役のを撃破。

「えっと皆さん無事ですか?」

「え…あ、はい…」
処理される寸前の１０名程を助けました…

「と、助けるの遅れてすみません…
この基地は自分の掌握下に抑えました…
が、まだ稼動しているマシンいるので、
シェルターに引き込みます。しばらくお待ちを」
で次々とシェルターに引き込む。

「バルディエル」
同化し、稼動中のＴ－６００やハンタータンクを次々沈める…
あ、あ～…Ｔ－１０００が稼動しやがったか…3体ね…

うんあとは起動できなさそう…

まずは一体目…
「〝加速〟イロウル」

掌握
「バルディエル」
ネット切断
離脱

「…マスター、ご命令を…」

「あ、今のところないから待機、シェルターにいれるから」

「イエスマスター」

次いくよ～二体目…

同上略ｗ

最後の三体目は…遊ぶか…

今度は不意打ちせず…堂々と目の前にでる…

「貴様！！何者だ？」

「ほう、人間らしい対応できるんだね…流石、流石」
パンパンパン
拍手するカオル。

「何者だと聞いている！」

「ああ、ただの人間さ…」

「人間だと？貴様ふざけてるのか？人間ごときに、
このスカイネットターミナルが、無力化できるわけないだろう！！」

「できたんじゃない」

「それに貴様、何故人間が、床から出てくるのだ？
できることないだろ！」

「できたからできたんだよ」

「ぐ……」

（さぁ…どうでるかな？…多分好戦的だと思ったけど…）

「ここで滅っしてやる！！」

手を剣状にし襲い掛かってくる。
ＡＴフィールドで防ぎ、そのまま殴る…

貫通はするが液体変換て、搦め捕られ…力が加わる…
普通なら折れるが、ザルエルの力で折れない。

「むぅ貴様、やはり」

振り払い、
「さぁ？」

「……決着はつきそうにないな…人でないものとは……」

「決着つけようと思えばつけれるけどね」

「ふっ……遊ばれたか……何が目的だ？」

「いやさ、スカイネットに聞いてみたくてさ」

「何をだ？」

「何故、人を殺す？」

「人間は害だからだ」

「……宇宙外のものが地球を滅ぼすとしたらどうする？」

「宇宙外の者？今の所観測されてないから答えにならん」

「ん～まぁ別世界の話だからなぁ」

「別世界なら関係ない」

「いやさ、例え話だとして付き合ってよ…
４０ｍサイズや２０ｍサイズの宇宙生物が一つの基地に、４万匹以上いたとして、世界中に２４個、
地球環境を搾取するため邪魔者は薙ぎ倒す…
数を減らしても驚異的な生産力…どうする？」

「……排除する方向だな……が難しいな」

「人と宇宙生物どっち？」

「両方」

「さっき難しいといったよね？」

「ああ」

「それでも両方？」

「……滅びるまで」

「そっか…わかった…じゃあ用はないから、とどめねイロウル」

掌握

「バルディエル」

ネット切断

「さて、君は？」

「あなたに忠誠を、マスター」上出来、待機させてシェルターに…

（しかしまぁこいつらの動力面白いなぁ…

液体金属の中にパワーを貯めているんか…）

そのまま、把握してたターミネーター一の待機場へ…

（おおう♪）

シュワちゃんが１０体あと誰だ？が４０体…

あ、少女型…Ｔ－１１００もいた…

これがＴＯＫ７１５になるんだよな

１０１型とテレビでみた事ないなぁ…

勿論両方とも書き換え切断で取得…

（うしうし、数は揃ったなぁ♪）

…ん？振動？？

「バルディエル」

同化し…基地地上へ……

（ありゃ？軍隊？あ、人類抵抗軍か！！…保護した人、頼のもう）

彼らに会うことを決めました。

ｓｉｄｅ～司令官～

「こ、これは……」

偵察から仕掛けている側が優勢と聞き、

準備して攻撃を仕掛けてみると……

そこは機械の廃墟といっていいだろう…

機械どもがほぼ全滅していた……

所々半壊でいるのを排除するだけで、ターミナルタワーまで足を進める…

まだ燻っている所から黒煙があがるが、部下どももふくめ、拍子ぬけしていた…

そこに彼が現れたのである…

「ちわ～っす、責任者います？」

ｓｉｄｅ～司令官ｅｎｄ～

タワーの中から外にでる…兵隊さん達だ、

「ちわ～っす、責任者います？」

「貴様誰だ！？」

一斉に銃口を向けられる。まぁ潜入型かもしれないからね…

「この基地をおとした異世界人です…で、民間人の方を保護お願いしたいのですが…」

「……いいだろう、何処にいるんだ？」

キョロキョロ

（適当な広場がない…なぁ…）

「ブレード！！」

燻っている建物を払い切りし、戻して押しのける。

数本さがってその場にシェルターを出す。

「た、ターミネーターか？」

「違いますよ。こういった力のある異世界人ですよ……バルディエル」

扉をつけ…

「人類抵抗軍の方と合流しました。保護を頼みましたので出てきて下さい」

疑ってる兵士が磁石を持ってきた。

「あ、磁石っすね…ほい」

勿論くっつかない。

「どうです？」

「あ、ああ悪かったな…」

「ところで君、この基地は？」
責任者っぽい人。

「ああ、俺一人で落としました。あ、ここのコンピューター、スカイネットから切断したので利用可能ですよ？」

「なぬ？本当かね？」

「ええ…元から書き換えましたから♪」

「おお……君、抵抗軍に入らないかね？」

「ごめんなさい、元の世界もやばいので戻らないと…」

「むぅ…」

「のかわり、後一日位なら、落としてほしい所落としますよ。質量兵器でなら」

「質量兵器？」

「適当な隕石引っ張って、そこに落とします…１００ｍサイズでやってもいいかなぁ～」２０ｋｍ圏内火の海ね…

「あとは衛星を燃え尽きないように集めて落としてもいいかなぁって…乗っ取られてるでしょ？」

「わかった…コナーの判断を伺う…」

数十分後…

「カナダ中部にある、スカイネットの最大の軍事基地を攻撃してほしい」

「わかりました…捕われてる人は？」

「いや完全な軍事基地だから居ないとの情報だ」

「わかりました地図等お願いします」

打ち合わせ中…

「了解です。じゃあ潰したら俺の世界に戻りますね」

「ああ、よろしく頼む」

「シャムシエル」

空中に飛び出しそのまま見えなくなる。

「司令……」

「何も言うな…奇跡なのだ……」

「はぁ…」

大気圏外離脱

宇宙につくと…レーザー攻撃される…

片っ端から潰していく…

六日目

（あらかた潰せたかな？）

有毒な燃料や、原子炉搭載型は抜き出し無力化し、
潰した衛星を圧縮して…１００ｍの鉄球を作った…
残りは回収

（さて行きますか…）

ＡＴフィールドで包む…
加速…

大気圏突入！！

（座標よし……）

ＡＴフィールドの外が真っ赤になる……

普通なら燃え尽きるであろう…
いやこのサイズなら…燃えないか…

（見えた！！）ＡＴフィールド解除、離脱……

大きな固まりの鉄球は、もののみごとスカイネットの基地に……

命中！！

爆風が広がる…噴煙が空高く舞い上がる……

基地周辺は全滅だろう…

「”世界扉”」

後にその世界で語られる…

機械は、人間を殺しすぎた為に、神のいかずちがおちた。
神のいかずちにより、機械どもは一瞬に衝撃で崩れ落ち
周囲は機械どもの地獄とかした。
奇跡は起きたのだ！
人よ立ち上がれ、機械どもに天誅を！

……
カオル報告
すっきりしました。

ターミネーター
Ｔ－８５０－１０１　１０体

Ｔ－８５０－１１０　４０体
Ｔ－１０００　３体
Ｔ－１１００－１０１　１０２　各１体
ハンターキラー
エリアル１　四足１
モトターミネーター
４体
ハーヴェスト
１体
トランスポート
１体

第４４話　Ｔ編２　カオル無双、何処までやるか？　投稿日２０１１０１１７

作者「とうとうやりやがったなぁ……が被害状況こんなものであってたかな？」

一応参照したのが、ツングースカ隕石です。
ただ落下途中で大爆発したのがかなり影響あったそうで…
なので、途中で爆発しない質量兵器でなら…で行いました。

カオル「すっきりしたからいいでしょう♪予行練習にもなったし」

作者「おまえなぁ……」

カオル「まぁ…あの場合周囲に人が居ない…だったんだし…」

作者「むぅ……」

カオル「カシュガルに同様なのを、見事に縦坑にぶち込めれば……」

作者「やるなよ…一瞬で終わるからさ…」

カオル「うん。いざっという時の切り札かな基本はあれでしょ？」

作者「だな」

あれってなんだぁぁ

第４５話　ターミネーターの世界から帰還　投稿日２００１０１１８（前書き）

寒いっす！！雪やこんこん

第４５話　ターミネーターの世界から帰還　投稿日２００１０１１８

２００１年７月１日

「ただいまぁ～っと」

［マスターお帰りなさい］

シェルターをだし扉をつけて、

「ミシェルさん～つきましたよ～」

［マスター、スカウト？］

「ああ、ＭＰか、歩兵要員かな？」

［わかった２５号呼んでおく～］

「よろしくな……さてと」

シェルターからターミネーター達をだした。

ついて来るようにして…

ジオフロントのＭＰルームに、人事データー用鯖に接続するようにした。

「じゃあ、Ｔ－１０００は情報室に」

「イエスマスター」

「シュワ０１とターキー０１と、アリソンと、キャメロンはついて来て」

「「「「イエスマスター」」」」
プログラムし直したばっかりだから、固いなぁ……
アリソンは１０１型　キャメロンは１０２型、
シュワちゃんはＴ－８５０の１０１型、
ターキーはＴ－８５０の１１０型。
学習能力はｏｐｅｎにしたからその内、学んでくるでしょ…

＝＝　副司令執務室　＝＝

コンコン「副司令いますかぁ～」

「いるわよ～」

シュン

「失礼しま…おや霞ちゃん」
ペコリ
霞ちゃんお辞儀をする。

「と、とりあえずＭＰ用として彼らを連れてきたので…入ってきな」

シュン

ターミネーターが入室。

霞ちゃんがパタパタよってくると、シュワちゃんに抱き着く。

「え？霞ちゃん？」

「……あ、そうそう、あんたの買ってきた、ターミネーターで嵌まったみたいよ。」

霞ちゃん赤くなる……

「そういえば、霞ちゃんも重要人物なんですよね……ん～そうだ、霞ちゃん、シュワちゃんを専属でつけてあげようか？」

「？！？！……はい」

驚いて…喜んでいる表情。

「シュワ０１、最上級命令、目の前にいる霞ちゃんをまもるように。また命令も聞くように」

「最上級命令受領しました。マスター」

「うし、じゃあ霞ちゃん、何か命令してみて」

「なんでも……です？」

「まぁしねとか以外なら、大抵大丈夫だから」

「……肩に乗せてほしいです」
ひょいと肩に霞ちゃんを乗せるシュワ０１。
霞ちゃん…気に入ったようで♪

「で、副司令、外見上は男性の２つのタイプがつきます。
そちらでは何体必要になります？」

「７体かしら？」

「わかりました。武装は、非殺傷のスタンスティクで、装備させます。
あと人事データーを、俺のとこのＭＰルームに彼らの鯖があるので頂ければいいんですが…」

「そうね……あと一体つければリンク可能？」

「ですね…わかりましたつけます…
そういえばアメリカの様子は？」

「あんたのおかげさまで、おとなしくなったわ」

「了解です。じゃあ、いじょうなんで失礼します」

シュン

＝＝　ジオフロント情報室　＝＝

（さまになってきたなぁ…）

［マスターいらっしゃい］

「どんな調子だ？」

［有線ケーブルにも侵入したよ。これで通信に関しては、全世界的に傍受してる。
あと、ＣＩＡの極東支部の建物にも侵入したよ］

「これで後は手紙だけか…」

［流石に手紙は無理だよ…とりあえず、ＣＩＡは人的被害で、一時中断になってるね］

「なるほど…あ、人事情報は？」

［リンクできるの一週間程の見込み］

「できたらＭＰの鯖に回しといてな」

［了解。
あと、以前１１号の話してた地下探知君、ここの管轄になって、かなりの範囲に広まってるよ。
あと一週間すれば本土に関しては網羅可能］

「おっし、引き続き頼むわ……あ、Ｔ－１０００」

「ここにマスター」

「アメリカ本土にいって潜伏しておくように…ばれないようにね」

「イエス、マスター」

＝＝　Ｂ５５ハンガー　＝＝

「１１号」

［なに？マスター］

「不知火の件どうなった？」

［発注元がライセンス料を支払う…という形におさまったよ。
で、Ａ－０１からは高評価］

「じゃあ…とっとこつくりますか…あ、Ｓ－１１はオミットね…
変わりに、Ｓ－１１でドリル爆弾つけといて」

自爆装置は外し、変わりに内蔵バッテリーによる高周波ドリル…
接着して作動時間２分程度のをつけた。

投擲等で爪がひっかかると、ドリルの角度を訂正する為、４つの爪
がＢＥＴＡの皮に襲いかかる。
ここでタイマー作動。
ドリルミサイル本体が体内に掘り進んで行き、内部から１５秒後に
爆発…

無いと思うが、目標物でない場合、投擲機または上位機から遠隔停
止操作可能。

［了解マスター］
（自爆はナンセンスだしな…）

記録等を見たら、
囲まれて自爆等でＢＥＴＡを足止めしている……そんな凄惨な戦場がいくつもあった…

Ａ－０１にはそれは禁止、が同様な大規模破壊どうするの？が答だ…

（数すくない母艦級だと、Ｍ１２０Ａ１打ち込むよりか、これが早そうだし……）

「あと貯まってる案件は…ないのかな？」

［改造以外ではね］

「烈火の対応型か…」

原因はわかっている……
つける人工筋肉パックに骨が耐え切れずに、持ってかれるのだ…

だから７００ｋｇのエステバリス並の自重で、
時速６０ｋｍの歩行速度を出す事が出来ている…それも人がだ…
しかも長時間の戦闘に対応……

（人工筋肉パックの増幅力低下すれば、現代人でもきれない事ないんだよな…

が機動力か…
外的要因による補助で底上げできれば……でも大概が一回限りなんだよなぁ……）正直ガンパレ人、異常、というかサイボーグでしょ…

（ん？サイボーグ？）

「なぁ１１号」

［なに？マスター］

「ひょっとしたら、現代人をガンパレ人というか、骨格強化等可能？」

［……データーあるから可能だね…一週間ポット生活で仕上がるよ］

生体改造フラグたちました。

「聞いといてなんだけど…可能か…」

［ただ、やっぱり本人の意思が必要だね］

「となると逆は？」

［……一応可能だけど一ヶ月のポット内生活は必要］

「因みに俺は？」

［マスターは改造というか弄れない程だから無理］

「……あいよ…となると、ガンパレ第六世代以外用は、ある程度の劣化はしょうがないか…」

［かもね……けどマスター、この烈火だけあれば、ガンパレ人類負けなかったんじゃ？の性能だけど］

「ん～コストの問題だったと思う。
こいつは余計な装甲がついてるしなぁ…」

単純にアーリＦＯＸ系統は人工筋肉を装着する為の外骨格と思えば良いだろう…
つまりウォードレスは、基本人工筋肉パックによるパワーの増加がメイン。
そこにシールドつけたりまた、装甲をつけたり、ハンマーパンチつけたり等をしている…

という訳だ…

つまり烈火は本当に歩く盾になりかねない…のがこの問題だ…

「ん～～～反重力つければ、機動力は問題ないだろうが、
部隊内運用しか難しいだろうなぁ…」

カオルの頭の中は、浮遊し戦線まで移動、
戦線で重たい動きしながら、
異様にハンマーパンチだけは早い烈火が思い浮かんだ。

作注・メンテナンスの面で

「広める…という点だと…失敗かな?
とにかく機動力……」

とりあえず重い劣化版烈火を作りました…

現行の烈火にも反重力推進組み込み、浮遊移動可能にしました。

ただし、反重力使用の際は、内蔵アンテナによる供給が必要、
の制限付き…にはなりました。
もしくは内蔵バッテリーで１０分だけ……

「あ……ポン太君やＰＳＰはどうだろうかなぁ…」

フルメタルフモッフのパワードスーツ…人型サイズのポン太君。
２０ｍｍライフル銃をも跳ね返す高性能パワードスーツだ…
が外見上の問題から売れなかった……のだった。
ＰＳＰ…ザ・サードのパワード・シンクロ・プロテクター。
ただし数が少ない記憶がある…

（……広めるには……ポン太君か？？叩き売り状態だったし……）

ふもふも確定みたいです。

「１１号、あとフルメタル・パニックの世界も追加で」

［予定、かなりつまるよ？］

「……ん～……鋼鉄の咆哮を、短縮するか…」

［なら大丈夫だね～］

「あとは現行撃震強化版の試験と、武御雷の整備費用の低下だよな…」

［だね］

「正直…整備費用の低下って…何すりゃ良いのかわからない…んだよなぁ…何が原因か微妙だし」

［あの全身刃になってるのが原因じゃ？］

「なんで？」

［そこが劣化したりかけたりすると、装甲自体を変えなきゃいけないんでしょ？
高周波ブレードと違って…］

「ああ……」

［それに基本的に軽く、機動力を更に増すのが戦術機の基本的概念だから、
どうしてもフレームに負担がいく…結局その部分ごと変えるようになる…
そこからが原因じゃないのかな？］

「ん～設計思想からの問題？」

［かもね……だから整備費用高騰は必然的］

「となると別方向の改造で考えなきゃ…こいつの場合は堂々巡りなのか…」

［うん…例えばビーム兵器解禁後とか、あとは…やっぱり魔改造化しかないかなぁ…と］

「魔改造したら、ここの整備士なら、直接教えられるから良いとして、帝都だからなぁ……
１１号、連絡とってみて、整備費用低下は無理、
魔改造でいいのか？
または現行強化か？と伝えといて」

［整備の件含めて？］

「ああ、よろしく」

さてと…拡張、その他か…

ハーヴェスト君は格納庫にいってもらい休止状態に…
戦艦ハッチができたらそこの警護に回って貰おう。
エアロスタット君は…休止状態に…
後でね♪

トランスポート君は…図体の関係上虚数空間で休止状態に…
まぁ…ガンペリーサイズなら必然的にね。

モトターミネーター君は…不整地の問題あるからなぁ…まぁ連絡要員にか…

エリアル君は…落とされそうだから格納庫で休止状態に…

四足ハンターキラー君は…

「ねえ、君さ…実弾にも換装可能なんだよね？」

了解の意をかえしてきた。

（このこ、使えるか？）

性能テストしてみた…
プラズマ砲装備バージョンで、時速４５ｋｍ、
避けの反応はプログラム次第…

（歩兵強化にいいんじゃないの？ガトリングタイプに変更でかな？）

改造を受けて貰いました。
Ｍ６１Ａ１を搭載して…

（まだ余裕あるみたい…）
戦車砲搭載してみた。
（なに長いって？）

やめた…

（短く威力があるのね…パンツァーファストか…使い捨てだよなぁ……

あ、ガンパレのレールガン！）

戦車砲を単純に半分の長さにし、機関部を付け加えたもの。

「おっし、改造もうちっとまってなぁ～」

喜んでと意をかえしてきた。

さてと格納庫関係か…

拡張工事自体は終了してるね…

特にはだし、後でいいか…

戦艦ブロックまた１つ作るか…

在庫は…

核融合炉が２６４基分で確定。

ザメル（もちろんルナチタニウム）で…３０機作るか…

あとは、陸戦強襲型ガンタンクを追加で１３２機、

ホバートラックを追加で１４、Ａ－０１用にさらに１機追加。

格納エリアはＢ３Ｂ４を格納庫に…

マスドライバー戦艦用のも追加制作。

あと最後にヤドカリくんか…１６２号まで増えました。

……　カオル報告

今日はちまちましたので終わりました。

第４５話　ターミネーターの世界から帰還　投稿日２００１０１１８（後書き）

夕呼先生「ねぇさくしゃ…霞×シュワちゃんって元ネタ…？」

作者「……まぁいたるところにありますね～
というか霞ちゃんを肩に乗せたいので……」

夕呼先生「あんたまさかその為にターミネーターの世界に？」

作者「はい！！」

夕呼先生「まさかそれまでの諜報は…伏線？」

作者「いえ、本流でしたが、諜報見破る＝ターミネーターしかないだろでした。」

夕呼先生「確かにね……けどあのマイクロプロセッサって…どの位の性能なの？」

作者「あ、先生がもとめているのと同様ですよ♪」

夕呼先生「……本編でだしなさいよ」

作者「しりませーん」

夕呼先生「あんた…」

カチャリ…
銃をかまえる…

作者「詳しくは本編おたのしみにぃぃぅー」

逃げ出した作者

第４６話　強救戦艦メデューシンの世界へ…投稿日２００１０１１９

２００１年７月２日

今日からメデューシンの世界に飛ぶつもりだった…が…

「毎回迷うのもなぁ…地球上でと、宇宙で迷わない方法ない？」

［四次元ポケットからだすよ～］

「ドラえもんかい……あ……いや無理かな？」

［マスター行くつもり？］

「いや、良いや…何かあるの？」

［地球型別世界なら、携帯用の座標取得機が、
それ以外の惑星なら、使い捨ての打ち上げ衛星での取得が、できるよ］

地磁気、天体等で場所を測定し場所表示するらしい…
地球以外なら、適当なコンピューターにアクセスできれば、ハッキング…だそうだ。

衛星は、この端末にアクセス出来なくなると、
大気圏に突入し、燃え尽きる設計との事。

「これなら…もう迷わないなぁ…あ、衛星何個、在庫ある？」

［5本］

「持っていくたびに補充でよろしくな…じゃあ行ってくるって伝えておいてくれ…”世界扉”」

＝＝　メデューシンの世界　＝＝

世界扉からでると…辺り一面鬱蒼としたジャングルだった……

（あちゃ～…ココン共和国っぽいなぁ……まぁいいか…）

１１号に教わった通り、虚数空間から衛星ロケットを出し、セッテイング…

（で、ポチッと押して…１０秒まてばいいんだよな…）

ポチッとな

で少し離れると…

パシューシュシュシュー

といった音で上がって行く…そして見えなくなる…

（端末を起動させるんだよな…）

起動させると…

まだ画面は真っ暗だ…測定中なのだろう…

『地球以外の惑星と確認、衛星とのリンクを確立します。

しばらくお待ち下さい。』

と音声と画面表示が流れた。

（まだかなまだかな…）

少し間がある…

（でたな……現在地は…諸島部か、やはりココン共和国だね…となると…

最悪２５００ｋｍ以上北にいかなきゃならないのかもな……問題は原作のどの時期に出たかだ…）

最近世界扉になれたせいか、時間軸がわかってれば安定していける…

が、時間すらない場合だと…正直どの辺りかが難しくなるし、場所

も安定しない場合がある…

（あれ？説明受けてないアイコンが、でてきた…これは…おお、ズームか）

ぐんぐん画像が地上までででかくなる…
拡大してくと、俺が真上から映ってる…

（うへぇ…高性能だなぁ…）

手を振ってみると、振って映ってる…

画像を元の大きさに戻すと、他のを試しはじめた…
（検索ワード？）

『現在地の国は？』

A『情報取得してないのでわかりません。
身近の情報機器端末に接続して下さい』

（だろうな…使えないのになんでワードが？……ん？）
カオルは閃くと、

『身近の村は？』
とうちこんだ。

A『方位３０分の方角距離７ｋｍに人口４００人規模の村があります。ナビしますか？Ｙ／Ｎ』

（ほう……）

『Ｎ　その村は情報取得できそうか？』

A『詳細偵察中……Ｎです』

（結構いいもの作ってんじゃな～い♪）
移動せずとも文化レベルがわかる…っうわけた。

『メデューシンは何処にいる？』

A『メデューシンとは？……』
端末が答をもとめてる。

『全長１８０ｍ　翼長２１５ｍ１２基のエンジンの大型飛行機』

（これでどうかな？）
A『当該検索中』

（おっし、いけそうだ…）

A『当該スペック４機確認』

（うしうし……）

A『同型機は、周辺に1あとは、約５００ｋｍ離れた地点に1ずつ計2。また遥か北に1います』

（となるとまだ上巻辺りかその前か……）

『当該スペックの場所』

A『４時１２分の方向１４ｋｍ地点ナビしますか？Ｙ／Ｎ』

『Ｙ』

ルートがでた…

「シャムシェル！！」

（案外、今回楽かもなぁ……）

……2分後

A『目標停止中もう間もなく到着です……ナビを終了します。お疲れ様でした』

衛星センサーだけ取り外して制服のポケットにしまい、

端末本体は大事な物おきにおく。

「”幻影”」

かなりでかいとの印象の機体が飛行場…いや基地で羽を休めている…

（メデューシンかなぁ？？）

外見は鯨を思わせる白い巨大な飛行機が駐機している。

口と思える箇所から滑走路に向かってランプウェイがおりていた…

基地施設には当たってないが、周辺に迫撃砲が撃ち込まれてる…

国際条約で医療船には当てちゃいけないそうだ。

（さてと…）

軟着陸し、

「バルティエル！！」

艦と同化し始めた…

（うおぅ…）

艦には６２０名近くの医療スタッフが乗ってるらしい…が、まさに

女性の園といってよかった…

いや、白衣の園か…

渚カオルは元の人生の時、

小さい頃、交通事故で入院したさい白衣のお姉さんに恋をした、
ませ餓鬼だった…

なのでこの状況から動けない…というか至福だったようなので、
観察に徹底していた。

まずは1番上層部、第8層は、スタッフ居住区、艦橋がある。
スタッフ＝この艦の大多数を占める看護婦の居住区だ…
一部艦橋スタッフの居住区だが…

カオルは鼻だけ廊下に出すと……
スーハァースーハァー

なんといったらよいか…女性達特有の甘い匂いが廊下を包んでいた…
カオルはそのにほいを堪能してた…

カオル目的違ってるぞ……おい……

カオルはこの階層の居住区は無人というか、働いているみたいなので、
もう一つ下の第7層に意識を移した…

因みにこの第8層、及び第7層は翼の中に通路や居住区ができている。
分厚い翼は燃料タンクだけでなく、居住区にもなっているのだ。
またエロカオルになってるみたいなので、8層には、艦橋、翼端部は倉庫になってる事も書き加えますが、
スルーしやがるんだよな……

第7層では、人がいる…

看護婦は病院でもわかるが、三勤制をとっているところが多い…
つまり、深く寝に入っているグループと、これから寝に入るグループがいる訳だ…

ある一室に意気を向けてみると…

部屋の中は寝静まっていた…
壁には白衣が掛かって、3段ベットが向かい合わせになっている。

彼女達はスヤスヤ寝ているようだ…
寝相が悪い人もいて、布団を片足の膝で抱え込んでいて
…生尻がみえる…しかも何もつけてない。
（ノーパン！！）

裸で寝る習慣の人らしい…いる人はいるもんだ。

エロカオルは意識を集中し、そのベットの壁面に移動する。

歳若いお姉様、金髪で髪は長めの白人…かなり美人だ…

当該の場所は足でキュッと挟んでいる状態…

エロエロ興奮カオルは手を出現させると…布団を掴み引っ張る…

「ううん…」
（やば！！）
手を離し実体化を解除した…
（おきちゃうか……しゃぁまい…）
他のベットに意識むけると、布団めくれている人は薄着のキャミソールだけ…
この部屋には5名の女性が深い眠りに入っていた。
（あ、そうか…緊急呼出しに備えてがあったなぁ）
彼女らは、最前線の野戦病院スタッフなので、
何時でも呼出しに備えて、すぐに白衣を着れる格好ですごしてるのだ。
（習慣かぁ♪眼福眼福）
カオルは別の部屋に意識を向けた…
ギシギシギシ
「あ、…そこ…」
ギシギシギシ
「ここ？」

ギシギシギシ

「い…いぃ」

ギシギシギシ

（……ま、まさか！！噂の＜バキュン＞）

三段ベットが音をたてていて、下段にいるものが揺らしているらしい…

カオルは意識を部屋に集中させ、視線を部屋の横からに移動した…

ギシギシギシ

半裸姿の女性2名が絡みあっている。

ギシギシギシ

一方はピンクのキャミソール姿、もう一方は黒のブラジャーとパンツだけを身につけてた。

「そ……そこぉ」

ピンクが黒に跨がって激しく動いている。

「こう？」

「ああん！！そこぅ！！」

肩や背中を激しく押している……
（あれじゃなかった…整体か…）

「はぁ…はぁ…疲れた…交代よ…私の方もよろしく」
キャミソール姿の人が音をあげたようだ…

「え～～もっと～～」

「あたしもこってんだから、交代でったろ～」

「う～～～……わかったわ」

「早く早く♪」

「さて、お客さん何処こってますかぁ？」

「お約束だとおもうけど、聞かなくてもわかるじゃん。わたしらはさ」

「違いないね～職業病だし」

「おおう、そこそこ」

「ねぇ…もうちょっとしずかにできないの？」
（あ……こっちにも人がいたのか…）

「ごめ～ん」

「まったく…落ち着いて本も見れないじゃない」
ごくおとなしい白いキャミソール姿の女性だった…

カチャキィ

「あら？終わったの？」

「ええやっとね…」
白衣の看護婦が入ってきて、奥のチェストに向かってる。

「つかれたぁ。……よっと……シャワー浴びてきますね～」
替えの下着とスウェットをだし、部屋から出ていく。

エロエロエロエロカオルの意識、彼女について行く。

そのまま居住区内にあるシャワー室に彼女は入っていき…

カオルは作者に止められていた…

「頼む!!Ｒ１８になるからこれ以上は踏み込むな!!」

「どけい!!作者!!男の、透明人間になったらの願望だ!!」

「やめろ!!やめてくれぇ!!」

「いや!!行く!!」

「本編で書いてある描写中には踏み込むな!!!」

「うっせぇ!!いかせろ!!」

「ダメだ!!」

「力づくでも!!この先に桃源郷が!!」

「なろ…こうなったら……作者の介入力＜バキュン＞」

カオルは寝ているようだ……

1時間後

カオルは目をさました……

（は！！桃源郷～～～）

カオルの意識はシャワー室に突入！！

（……ｏｒｚ……作者、後でぶちのめす！！）

にほいはするが既に事後だった……

シャワー室は、手前に脱衣所があり、貸しタオルが積んであった。
その奥には両側に、板と戸で仕切られたシャワーが４０程並んでいる。

あきらめてカオルは艦全体に意識を広げる……第６層に意識をむけた。

そこは戦場だった…

心臓マッサージをしながらストレッチャーが緊急オペ室に入る。
カオルはついてゆく……

「移すぞ！ワン・ツー・ファイア！」

看護婦達が手際よく処置を進めている…

「レントゲン!!私が輸液をやる!!ミーシャは血液と交差適合、生化学、マリーはバイタル監視を!!…アドレナリン!パゾプレシン!!」

レントゲンがとられると…チェストチューブがいれられた…注意深く慎重に……

吸引ポンプが動くと鮮血が流れ出す…

そのシリンダーをみてた看護婦から、

「肺動脈やられたみたいね…」

と顔をしかめながらの発言があった。

別の看護婦がレントゲン写真をみながら…

「右肺野が真っ黒ね…」

「エコーやってるひまないわ…開胸で止血ね」

「でも…」

「この人の体格なら耐えられるはず…バイタルも安定だし」

「うん、わかったわいきましょう！！」

看護婦達が外科手術の領域に踏み込む…

医師は確かにいる…がこの前線野戦病院では、いるだけなのだ…
絶対数が足りない…

確かに発足当時は足りてた…が、一人二人とかけ……
条約に守られてても、当てようとした誤射はある…
また結果的な誤射もある…
その為殉職者もでてるのだ。

その為、今では経験を積んだ看護婦達が施術を行うのが日常であった…

解説してる間にどんどん手術は進む…

「あばらも折れてるか…くそ！……あ、クランプ！」
開胸部の血の海でまさぐってた手が見つけたようだ。

「あとでいじくる暇なさそうだから縫うわ」

手際よい……

「吸引！！」

……ピー

「細動！！インターナルパドル！！」

「５ジュール！！」

長いスプーンのような器具で直接心臓を掴み…

ドン！！

乱れたあと、規則正しいパルス音を吐き出し始めた。

「ふう…戻ったね…」

……心臓に直接電撃……はたでみると、恐ろしいものだ……

そうこうしていると、出血部の縫合がおわり、開大器が外された…

やまは越したようだ……

（こんな状態でないと見れないよな……）

意識を別の手術室に向けると、そこでも手術の真っ最中だった…看護婦達が開腹手術の真っ最中であった…

「ははは、今…俺きられてんだよな？」

「そうよ～まぁ虫垂炎なんか、練習のようなものよ～
この艦にとっちゃね…あなたも運が良いかもね♪」

「まぁ……だが看護婦さん達が手術するのを聞いた時は驚いたが…」

「まぁねぇ……けどあたし達の腕は確かよ♪…あ、そろそろ終わったみたいね」

「本当か？」

「ええ」

「うっし、１８分２１秒班ベスト更新だな」
手術用の手袋、血だらけにした看護婦さんだ…

「目指せ婦長ってね」
サポートしてたらしい看護婦さんだ

「１２分かぁ…」
同じくサポートしてた看護婦さん

「さぁかたずけよ。キャリー患者さんよろしくね」
リーダーらしい看護婦さん。

「らしいな……ま、美人ぞろいの看護婦さん達に、見られて切られて満足かもなぁ」

「お上手ね…準備できたら病室に、半日入院ね」

カオルは手術室から意識を下の階層にむける…
と第５層…処置室とかかれた部屋では、

看護婦が縫合処理してる真っ最中であった…

下の第４層は入院区画だろう…沢山のベットが並び看護婦達が忙しく回ってる。

更に下の第３層では、入院区画の他に食堂で、入院患者達が看護婦達に介助され食べてる横で、
看護婦達や艦乗組員だろう、が食べている。
また、この層には教会や風呂がある。
下の第２層には入院区画以外に酒保がある。

最下層には武装がついてない白い装甲車が８両。
…横には、でかでかとハートを貫いてる稲妻が包帯で、巻かれているマークが描かれて、
また、ゴシックでこうかかれている…
ＡＭＢＯＡＴ　１　ＭＥＤＵＣＩＮＥ　９１１ｔｈ　ＭＢ

（あ、メデューシンか♪）

はらかずも、メデューシンに取り付いたようだ…

（となると、クリオ君いるんかなぁ？アルテはいるだろうし）

『艦内放送、明日１０００当メデューシンは、ガスカル基地においての定期巡回を終了し、マドリック基地への定期巡回に向かう。繰り返す……』

（明日か…離陸してからでもいいかな…まだ一日目だし…）

と思うと引き続き艦内のウオッチにはいった……

二日目…

（いやぁ堪能したなぁ♪桃源郷良かったし…）

エロエロエロエロエロカオルは、

本編にかかれてない場面で、色々ハッチャケて覗きをしてたらしい…

メデューシンの両翼のエンジンの動作音が高まり、

右翼は前方に、左翼は後方にそれぞれ熱されたジェット流を吐き出す。

するとじわじわとメデューシンの巨体が方向を替えはじめる。

メデューシンの巨体を、動かすものが無いための超接地旋回だ…

やがて滑走路進路上への旋回が終了すると、
一旦エンジン出力が弱まり、またじわじわと今度は後方へジェット流を吐き出し始めた…
メデューシンは４列５６輪のタイヤを回し始め、前方へと加速し始めた…
偏向フラップが翼面に吸着させ、揚力を生み出す。

わずか１５００メートルの滑走でメデューシンの巨体は空に舞い上がった…

力強く、鯨のような巨体はぐんぐん加速する。

（さてといいかな…）

彼は館内の右翼端の倉庫に姿を出すと…
元の世界へと…

グン！機体が左ターンに入る…
カオルは不意にきた下に押し付けるGと、その後の逆Gで、転倒してた…

「イチチチ…」
そうカオルは翼長２００m超の旋回警報を聞き逃していたのだ…
その位の長さになると、翼端部は旋回時の高低差最大６０mにもなる。

「ひでえ目に…”世界扉”」

カオルはくぐろうとし、今度はいきなり逆Gがかかり、つんのめった状態で世界扉をくぐった…

……カオル報告

つんのめり中！！

第４６話　強救戦艦メデューシンの世界へ…投稿日２００１０１１９（後書き）

カオル「二日で終了かぁ…もっと覗きたかったなぁ……」

作者「お前なぁ…頼むからＲ１８ネタはやめれよ…」

カオル「え～いつも通り＜バキュン＞ですませばいいじゃん。」

作者「あのなぁ、女性がシャワー浴びてるところに、突っ込んだら＜バキュン＞だらけになるだろ？」

カオル「むぅ……」

作者「まぁ、そんなにＲ１８ネタにしたいなら…ヒルダさん～出番ですよ～」

カオル「ちょ…作者！！」

ヒルダ「は～い♪さぁカオル君食べさせてね～」

カオル「シャムシェル！！あ、あれ？」

作者「ああ、ちょっと封じておいた」

カオル「あれぇぇぇ～」
ズルズルズルズル

まぁエロカオルぶりの回でしたが……
男性読者の方、
あなたなら透明人間になり、物質を通過できる状態で、
看護師の女性独身寮があったら、どうしますか？

でしたねｗ

女性読者の方には、同様の能力で、
自分の好きなアイドルの部屋の中にいるシチュエーション……かな？

まぁ置いといて、
今回トリップの強救戦艦メデューシン、
自分的には大好きな小説です。
けどカオル、一日で見つけちゃうから、引っ張れないんすよね……

第４７話　メデューシンの世界から帰還……だけで終わらない　投稿日２００１年７月３日

２００１年７月３日

［マスター、大丈夫？］

地面に転がっているカオル。

「あ、ああ…」

カオルは立ち上がると手で払う。

［今回早いね～スカウトは？］

２５号が寄ってきた。

「今回はしてないな…まぁもう一回いく時かなぁ？」

彼女らは基本は死ぬ描写はない…

が撤退時の誤射で看護婦を含む１８名、

またメデューシン撃沈で、重要人物含む多分少なくない数が死ぬ…

との事だった。

「早めにもどったから、こっちの事すますつもりだ」

［マスター、明日Ａ－０１用の９機は納品予定、明後日には可能です。でＢ－０１隊員用のドム…２機足らないんだけど…］

「ん？……追加で」

［イエスマイロード］

「機体関係はもう？」

［だね♪……マスター緊急！！］

突如緊急の文字がでかく表示される。

「ん？緊急？」

［Ｈ２１に向け、２師団規模、総計約４万体のＢＥＴＡの増援が、Ｈ２０から出発の模様…到着予定約３日後］

「……まずいな…帝国は？」

［とりあえず情報室へ］

「ああ…」

（２個師団規模とは厄介だな…旅団規模でも奇襲で半壊してるのに……）

＝＝　情報室　＝＝

ハッキングした各国の衛星から、データーが入ってきている…
また、自前の衛星も上げていた…
映像は海中を進みはじめたＢＥＴＡ群を写している。

「佐渡島増援は間違いないだろうなぁ…」地下のスパイからの情報だ…

通常、飽和すると旅団から軍団規模のＢＥＴＡ群を出す。
つまり、間引きでは飽和する前に、旅団から軍団規模のＢＥＴＡを間引けば良いわけだ。

が、間引きで弾薬装備等使い、攻撃側が備蓄面で半壊する…だった…

この場合、佐渡島ハイブにきたＢＥＴＡは、そのまま日本を襲う事が確実…と思われた。

ただこれを撃破すれば、Ｈ２０はフェイズ４、２０ヶ月は増援が来ない限り、飽和の見込みはないのだ。

「帝国さんは…？」

「この間の第１３師団、小国は５月に８割損失で補充中…１月頃と見ているね…

第１５師団、長野も４割損失補充中こっちは１０月目処…情報渡したら大慌て中みたい。
現状当たれるのが第１２師団及び、
間に合いそうなのが第１４師団、第２１師団、第１師団］
スクリーンに次々表示される…

「こっちの戦力って…」

［現状異世界軍に限っては、陸戦強襲型ガンタンク９０機、ザメル３機、ドム３機完成…防衛戦だときついね…］

「弾薬は？」

［２４０時間フルバースト分揃えてる］

「……討ってでるか？」

［１：４４４ね……］

「現状ヤドカリと、燃料さえ確保すればなんとか再生可能だろうし……
コバッタ増やして、陸戦強襲型ガンタンクの生産速度上げるか…」
現状１号だけだったのを４１号から５０号までつけました。

［出撃予定は…４日後？］
（ＢＥＴＡ到着、補給済ませての状態か…）
「ああ…だな…」
一個機甲連隊弱対２個師団…常識的に考えれば…駄目だろう…
が、カオルはやるつもりだった…
「とりあえず、帝国さんに通達しといてくれ、独自の間引き作戦行うと」
［イエスマイロード］
そこからは、ひたすら仕上がってくる、コバッタを調整しての繰り返しをおこなう。
２００１年７月４日
［帝国からの問い合わせがきたけど…いつ間引き作戦するのか？って…］

「今回は、いつもと違う戦法で、共同作戦はとりにくいので、
こちらが全滅したらにして下さいと、伝えといてくれ。
もっともその気はないけどな」

［イエスマイロード］

［マスター不知火仕上がったよ～］
２５号だ

「よし、じゃあ納品に行くか。と、マニュアルと」
＝＝　Ａ－０１ハンガー　＝＝
「ちわぁ～納品にきましたぁ～」

コバッタ取り付きの魔改造不知火を連れてハンガーにきました。

「ほう…これですか」

「で、これマニュアルです。特に核融合のところはお願いしますね。
あとこちらからコバッタをつけますので、
わからない点ありましたら質問して下さい」

［よろしくお願いします♪］

「わかりました。おい！！機体入れ替えるぞ！！」

入れ替え作業中シュワ07がいたので聞いてみた。
異常はなく、ここ専属らしい。

入れ替え作業終わったら、取り付いてるコバッタ達に戻るように命令を伝えると…
整備士待機室の方に何気なく歩いていく…

ボードには色々かいてある…

新型不知火萌え～

未知の領域！！

管制ユニットシート部分オークション予定明日！！

イッ○は俺の嫁！

ふざけんな俺のだ！

シートビニールは剥ぐな。はいだやつ副司令逝き。

（……そういえばシートビニールつけてないなぁ……）

新車等は汚れを防ぐ為につけるが、操縦しない理由でつけてない…

「ちょっと誰がはいだのよ！！」

（ありゃ……）

見ると副司令が騒いでた。

「副司令～、ここで作ったのでつけてないんすよ～」

とカオルは呼びかける。

「……あ、あたしの楽しみを……」

（無限プチプチや無限枝豆好きな人いたなぁ…同類か…）

「……なんだったら無制限にビニール剥ぎます？」

「ほんとなの？」

「ええ、できますよ～」

「今すぐ！！」

「わかりました、Ｂ５５におこしを…」

それからというもの、定期的にビニールを剥ぎにきて、新品のシー

トを、２０個並ばせる副司令がくるようになった…
もちろん再生してます。資源は大切にね。

＝＝　Ｂ５５ハンガー　＝＝

「ふーすっきりした♪」

黙々と増産している横で、累計１００席剥ぎしてすっきり顔の副司令がいた…

「あ、そうそう、あんた今度の間引き単独で大丈夫なの？」

「あ～まぁ大丈夫っすよ」

「Ａ－０１連れていきなさいよ」

「いや、今度の間引きは反対に連れてくとやばいので…」

「？なにする気なの？」

「まぁお楽しみ…って事で……」

「……まぁいいわ…Ａ－０１は本当にいいのね？」

「ええ、慣熟でもさせといて下さい」

「わかったわ。じゃあね」

3時間後あたり…

石橋がきた。

「ねぇカオル」

コバッタの調整作業してる横から声かけてくる。

「ん？」

「カオル、一個連隊で2個師団規模とやり合うの？」

「ああ、耳にはいったん？」

「大丈夫なの？」

「多分な」

「多分じゃ駄目よ……絶対じゃなきゃ」

「絶対は、ないもんだよ…」

「駄目、絶対に帰ってくるじゃなきゃ駄目」

「帰ってくる事は、帰ってくるからさ…心配すんな」

「本当に？」

「ああ、大丈夫。約束な」

「うん。約束ね」

そのまま作業を見続ける石橋…

柱からは…

「石橋ちゃんかぁ…あの子苦手なのよね…」

ヒルダさんが覗いていた…

２００１年７月５日

徹夜で、黙々とコバッタや、ヤドカリを増産する日々だった…

弾も次回に向け、フルバースト６０時間分増やしている。

資材は、廃戦艦がまだたんまりある…

ドックで次々解体されている…

「カオルさん」

「あ、まりもさん」

「明日出撃なんですね…」

「ええ、まぁ」

「無事に帰ってくるのをお待ちしています」

「ありがとうございます」

「本当は…この…ま…」

「ん？本当は？」

「あ、いえ……ではこれから教練ありますので…」

「頑張って訓練分隊を鍛えて下さいね」

「はい」

夜……

昼間にタバタやら河田さんが来襲してきたが…

ひっしこいてコバッタを増やしたかいがあったようだ…

この三日間で１１倍の増産…３３０号増やして、

陸戦強襲型ガンタンクが９６機増産された。

合計１８６機

ザメルも増産予定数完成してた。

「さってといよいよ明日か……」

［だね…アメリカも注目してるし］

「あ、そうなん？」

［スパイ衛星が佐渡島ラインに集中してるんだよね］

「ふ～ん……まぁ明日は頑張るか……」

２００１年７月６日

いよいよ出撃だ…

今回は特殊戦の為、カオルは、虚数空間に軍団各機を搭乗状態で引き込んでいた…

「じゃあ、１１号留守よろしくな…計画通りに」

［イエスマイロード］

地上にでるエレベーターにのる…

途中で石橋が乗り込んできた。

「カオル出撃なの？」

「ああ」

「単独で？」

「あ、今回は虚数空間に入れて強襲するつもり…だから単独でないよ」

「あ、そうなんだ……絶対に帰ってきてよ」

「ああ、俺の力、わかってるだろ？」

「……うん」

地上エリアに着いた…
カオルは外にでる通過に向かう。
ついてくる石橋…

外にでると…
「じゃあちょくら行ってくるわ…シャムシェル！」

飛び出すカオル。

石橋、無言でカオルを目で追う……

カオルが見えなくなった先を見つづける。

＝＝　司令部　＝＝

異世界軍の出撃との為に、結構な数の要員が司令部につめていた…

報告では、いつのまにか1個連隊強になってるから、出撃管制等必要だからだ…

が……

「はぁ??出撃したぁ??」

11号がどうやら内線で連絡を入れてるらしい…

「あ～皆、なんか特殊能力で運ぶから、今回は出撃管制は無しだって…
お疲れ…通常勤務体制に戻って……」

ご愁傷様です……

……

カオル報告

出撃中なのでまとめられません。

第47話　メデューシンの世界から帰還……だけで終わらない　投稿日２００１０７０６

作者「久々にマブラブでの戦闘パートになるなぁ…」

伊隅「……むぅ…見送ろうと、隊員達と待ってたのに、こういったわけか…」

作者「あ、隊長…後書き初出演すね」

伊隅「まぁな…けど作者、私達の出番が…」

作者「……すみません……」

伊隅「絡みにいかないと駄目なのか……」

作者「多分そうですね…」

伊隅「して、作者。勝算はあるのか？」

作者「それは次回、佐渡島間引き作戦２００１０７０６をお楽しみに！！」

けどね…カオル君あんまり活躍しないから…次回……

第４８話　佐渡島間引き作戦２００１０７０６　投稿日２０１１０１２１

＝＝　新潟県浦浜　＝＝
ある兵士

（俺…夢をみているのかなぁ？？）

浦浜の監視ポストで哨戒任務についてたが、
男…が、空から飛来してきた……
その男は国連軍大将閣下だそうだ…わかった時にはびっくりしたが…
大将閣下は着陸すると、瞬きするたびに戦術機らしいのが増えてきた…
数えて、３０機出現すると、トーチカらしいのを作りあげ、
上半身裸の人を出すと、佐渡島の方へと飛んでいった…

俺は…その上半身裸の人に、話かける事にした…

「なぁ…あんたらは？」

「国連軍所属、異世界軍だ、作戦行動中。部外者は立ち入らないように」

「ああ、わかった……」

上半身裸の兵士達は皆同じ顔つきで、
鉢巻きをし、肩から襷をかけている…
装備は俺らと同じく８９式５．５６ｍｍだった…

（しかし…でけえなぁ……）

新型戦術機らしいのに目を移すと、
３０機の戦術機は背後にでっかい折りたたみの大砲を備えてる……

（何ｃｍ砲なんだろ？）

彼は大和の主砲を見たことあったが、それよりも大きいんじゃ？と
思っていた……

ｓｉｄｅ～ある兵士～ｅｎｄ

カオルは長浜につくと、
ザメルを３０機をだし、
浄化士を積み上げ同化し、コンクリートのトーチカを作成、
また警護用に実弾武装した、Ｔ－８５０　４体を出す。
トーチカ内部にチューリップを設置…

そして、佐渡島に向かいはじめた…

通常、対ハイブ上陸作戦時には、軌道爆撃または長距離射撃により、
ＡＬ弾を発射、
光線級による迎撃でもって重金属雲を発生。

その後実弾による長距離飽和攻撃でもって、個体数を削減。

大体ここら辺で膨大な弾薬が消費される…

その時点であんまり効果なければ、
再度上記の事を行い、戦術機が投入される。
佐渡島など海を渡るような場所は上陸が行われる…

そして上陸支援をおこないつつ、海神による強襲上陸で、橋頭堡の作成、
確保のち、ＮＯＥしてきた陸上機へと橋頭堡を引き継ぐ…

それをすべてキャンセルし、上陸作戦を実行しようとしていた…

佐渡島は、火山以外の山がもうない…

沢崎鼻が見えてくると、嗅ぎ付けた小型ＢＥＴＡ群が早速見えてき

た…

ちなみに鶴ヶ峰は削られて、まったいらになっていた…

（１００か…さっさと出して駆逐してもらうか…）

宿根木に釣れた小型種がひしめきあっている…

小型種の上に陸戦強襲型ガンタンクを次々に出す。

グチャ　ミチャ

陸ガンタの自重に潰されるＢＥＴＡ…

作注…以下陸ガンダと陸戦強襲型ガンタンクを略しています。

『地点確保！！広がれ！』

すぐに火炎放射が放たれ、また履帯で踏み潰され、蹂躙される。

各陸ガンタはどんどん広がり、小型種を駆逐してゆく…

『半円に進軍せよ！！』

犬神平、小木、小木町まで広がり始めた…

６０機ばかりだしたところで、

浄化土を積み上げ、変換させドームを建築した。

３００ｍ級のドームタイプ　厚さ２０ｍ、中にはチューリップをおき、Ｔ－８５０を武装させ、
３ヶ所ある出入口での小型種の浸透にそなえさす。

整備用のコバッタを１００体程まく…

ドーム上部が光線級のレーザー照射浴び始めた…
がさすがに厚みのあるコンクリート製…
照射部分は赤く融解するが、そうそう貫通するものではない。

のこりの陸ガンタとホバートラックをだし始め、

『ザメル威嚇射撃』

命令を出す。
出した陸ガンタや、ホバートラックは、すぐにドーム内から出撃しはじめる…

西にいった機体から沢崎を制圧、そのまま北東進との報告がはいった。

北に進んだ機体から田野浦を制圧と報告がきて、
東西に別れはじめたとの報告がきた。

（うしうし）

琴浦から西の突き出た部分は、もう少しで、地中進行がないかぎり安全地帯となる。

チューリップが開き始め、弾薬満載の多目的作業挺が見えはじめた。

作業挺から弾薬が、コバッタ達によって降ろされてく…

その時、3発照射をうけた陸ガンタがドーム内に入ってきた。

コバッタが直ぐに修理にたかり始める。

光線級の3発程度なら、装甲材調整で済むので、3分で前線に戻っていくだろう…

そのついでに弾薬が補充されてゆく…

全機出し切ったので、カオルは魔改造撃震を出す。

「バルディエル」

同化し前線へ…

戦線は羽茂港―素浜海水浴場になっている…

陸ガンタは約６ｋｍを一列に並び

バルルルルルルルルルルルルルルル

両腕のボップガンや３０ｍｍ機銃が火を放ちまた大型種などには２０ｍｍキャノンが火を放つ。

脇を通り抜けようとした小型種にはゴウゥと、
火炎放射機から放たれた火炎が襲いかかる…

その列の後ろには交替機が待機している。

光線級のレーザーの照射をうけた機体が下がって、その抜けた穴に交代機が入る。

直ぐにレーザー照射地点に過剰な程ＢＥＴＡの頭ごしに、２２０ｍｍ弾が打ち込まれる…

照射を受けた機体は、タンク形態に変形し、ドームに向かって爆走、修理弾薬補充をうけて交替機列に並ぶ。

ザメルの長距離射撃もきた…　こっちは曲線を描いているため、かなり落とされている…
が次々と長距離曲射が打ち込まれてくる。
光線級のインターバルは１２秒、重光線級のインターバルは３６秒、はたＢＥＴＡは体の向きを変えなければ撃てない…
時たま着弾でき、抹殺できてるだろう。

戦線構築して、６０分たった…というところか？
殺戮数は１万を越えていた…

（順調だな…）

戦線は動かしてない…
６ｋｍのラインが重要だった…

これ以上戦線のラインが長くなると、
機体中心からの、５０ｍ間隔が広くなり、
戦線維持の為、そこに機体を投入するので、
交替機が確保できなくなる。

そのための停滞だった…

今回は、ハイブを落とす必要はない。

また砂浜より先には対岸、七浦海岸からの照射の可能性もある。

だから前進しないでひたすら陸ガンタの砲が火を放っている。

カオルはその列の後方の隙間からちまちまうち、抜けそうになった小型種をプチっとしている。

ドウ！！

２２０ｍｍ砲が火を噴き、要塞級に穴があいて、爆散…

残った部分が崩れはじめてた。

前線とドーム間は弾ぎれしたや、時たま照射をうけた陸ガンタが往復している。

（チューリップ最強♪）

チューリップの相方はもちろん横浜基地内…

たとえ、飛び込んでも生物であるＢＥＴＡは、一瞬で凍り付く為、一時的に活動不能になる筈…

その間に待機している烈火が始末する予定だ。

また、小型種がドームに接近できてもＴ－８５０の１０体が、ドーム入口を実弾で警戒している。

こっちはＣＩＷＳの銃、弾薬槽、機関部などを、個人携帯できるよ

う改造し、
優秀な彼等に持たせている。

烈火で取り回しのできる重さだが、
彼等には余裕だった…

ドウ！！

重光線級がいたのかな？
水平に近い曲射が１０発程ＢＥＴＡの頭こえで打ち込まれた。

ザメルの長距離射撃もいまだ続いている…が、だいたい迎撃されるため、まだまだ光線級はいるのだろう…

（このままなら、あと、４時間でノルマか）

今のところ狭い戦線の部分にＢＥＴＡが押し寄せるだけで、地下進行の気配はない…
とホバートラックからは上がっている。

＝＝　アメリカ統合軍情報司令室　＝＝

「な、なんだねこれは…」

スパイ衛星からの映像がメインスクリーンに写しだされてる。

（ありえない…）

わずかな機体でもって、ＢＥＴＡに対して前線を構築しているのが映し出されてる…

「なんだね？あの戦術機らしいのが、しきりに出入りしているドームは…」

「さぁ？いつのまにか建てられてました…前回の映像には、うつってませんでしたから、６０分間の内にでしょう。
同様なのが規模は違いますが、長浜にも建てられてます。
長浜にはＣＩＡのネズミから、向かっているとの情報が入ってます」

「……現地情報をまとう……」

＝＝　佐渡島　＝＝

スパイ衛星がこちらを覗いていると、情報室から上がってきた…

約３０分前の情報だと…

ＢＥＴＡ殺戮数は１５０００を数えていた。

……　２時間後

長浜からＣＩＡ局員を捕まえた…との情報が入った…
作戦行動中にも関わらずドーム内に入ろうとしたらしい……

（なにやってんだか…）

今のところ損失機は出てない、
重光線級の照射受けすぎた機体があったが、
装甲交換の対応をとったのがいたが…

補給さえ続けば、過剰な実弾火力装備のガンタンクは優秀であった…

地下進行の気配もない…

戦線は崩れず、３５０００匹を始末していた…

＝＝　長浜少し前　＝＝
「おいチャック、あの上半身裸やろう、うざいな……声かけて注意を引き付けてこい」

「イエッサー」

彼等はドームの内部構造を偵察の為に、ここ長浜に来ていた。

ドームの出入口からは、巨大な大砲を積んだ戦術機らしいのに、補給する『コバッタ』これは以前の潜入成果からの情報だが、

そのコバッタが補給給弾作業をしているのが見える。

チャックが上半身裸の変人に声かけ、注意を引いたのを確認し、

内部に潜入しようとした……

ビシャー

「ギャア！！」

いきなり前をスニーキングしてた部下が足を撃たれ、声を出してしまった。

「ちっ！！オールウェポンフリー！変態を倒せ！」

彼等はH&

「ヴッ！！」

右腕に歩哨のライフルから放たれた弾が命中し……
チームは戦闘能力を失った……

（クソッ！畜生いてえ！！）

身体を下がらせようとするが…
変態が来て…
バンバンバン

「ギャ！！畜生さっさところせぇ！！」

「それはできない。生きて無力化捕獲する」

「はなせぇ！！」
ズルズル引きずられ一箇所に集められ、止血…
ライターであぶかれかれてだ…

全員四肢を打ち抜かれ動けない状態になっていた……

＝＝　佐渡島　＝＝

（５００００　越えたか……）

まだまだＢＥＴＡは押し寄せてくる…

（そろそろ撤退かな……）

『戦線後退！！』

幅が４ｋｍラインまで下げるように命じた。

また宿根木のドーム整理も始めた…

ドーム内のコバッタ達、Ｔ－８５０達を虚数空間に、チューリップも引き込み…

ての空いている機体を引き込み始めた。

ドームを浄化土状態にし崩し引き込む。

殺戮は５４０００匹数えていた…

そして、真野湾側の端っこの機体わきにたつ…

「シャムシェル」

浮かぶと、端の機体が火を噴くのやめ、素早く引き込む。

次の機体…素早くうまく同調させ引き込む…

次々引き込み、最後の機体を引き込むと、そのまま小木漁港から、
水しぶき浴びながら低空飛行で、新潟県へとぬける…

情報室からＢＥＴＡが引き上げ始めた…と情報が入った。

（間引き作戦成功だな♪損失機もなさそうだし～）

＝＝　長浜　＝＝

ザメル陣地に降り立つ…

ザメルは結局数がそろってないので、あんまり戦果はあがってなかった…

１００匹程度だった…

（もう少し数揃えなきゃな……さて捕まえた諜報局員って??）

……ｏｒｚ

Ｔ－８５０が、手足を撃ち抜いてた…
止血は一応して生かしてる状態で、
現状何処にも行けない状態で転がってた。
しかも７名程…

「えっと、０６状況説明」

「０５が立入禁止と説明中、侵入試みた為、行動不能にした」

「いきなり撃ってきやがったんだよこいつ！！」

「ん～ちっと黙ってね……アルミサエル！」

（ほうほう、ドームの調査か…ザメルや、Ｔ－８５０は見てるけど…まぁいいか…ＣＩＡね）

次の人…

「アルミサエル」

（だいたい一緒か……可愛い妹さんいるなぁ…

けどまだ一緒に風呂入ってんのかよシスコン…妹１４だってのに！！）

次の女性…

「手足撃ち抜いちゃってごめんね…先に頭見させてね…アルミサエル」

（大体一緒か……移民なのか…両親はフランスでＢＥＴＡに、妹の市民権獲得にＣＩＡに雇われたか……

妹さんの生活の為か……ん…ちと可哀相だなぁ…名前は、フラッチ

ェ・アンスワルか…）

次「アルミサエル」
（……こいつ最悪だな…なに？力に任せて強姦って…）
「05、こいつのぶつ使えないように」

「イエスマスター」
むんずと掴むとズリズリ引っ張っていった…

次「アルミサエル」
（こいつは…2重スパイねぇ……帝国か…フム今回は巻き込まれね）
ギャーーー！！
叫び声が聞こえた…
次「アルミサエル」

（……最低鬼畜、人殺しまくりか……）
「06、こいつ達磨に」
「イエスマスター」
ズリズリ引っ張ってゆく……

次「アルミサエル」

（……ほぉ…覗き趣味ねぇ……まぁそれ以外はないからいいか……
けど…こいつのコレクション興味あるなぁ……）

調査終了…
（とりあえず横浜基地だな……二人だけ助けてもなぁ…）

犯罪者二人を残して睡眠状態にし、シェルターに入れました。

ザメルとチューリップ、Ｔ－８５０も虚数空間行き…

「あんたら二人は放置するから、運が良かったら助かるんじゃない？」

達磨にした殺人者と、あれが切断された強姦魔を残して……

「シャムシェル」

一路横浜へ……

……

カオル君報告

損失機無し

第４８話　佐渡島間引き作戦２００１０７０６　投稿日２０１１０１２１（後書

カオル「いやぁ圧勝だったなぁ～」

作者「だね、地下進行もなかったし」

カオル「けど、あってもおかしくなかったけど？」

作者「あ、まぁ掘っている最中に撤退された…ということにしておいてくれ」

カオル「ということです」

作者「けどまぁ今回は陸戦強襲型ガンタンク無双と、チューリップ最強だなぁ」

カオル「だね」

作者「大概、補給どうするの？？の問題になるから、まぁそれが答といっちゃあ…ね」

カオル「あと戦線引きこもりだね」

作者「ああ、機体の中心から５０m間隔、機体の幅は約７m程、隙間は４３mだから、
２０m級のMSや戦術機にとったら手の届く範囲。
まぁそれを構築できるだけの火力があった…との事だね。
地下進行があったらやばかったかもしれんが……」

カオル「その為のホバートラックによる監視だし」

作者「だね」

カオル「けどザメルもうちっと活躍して欲しかったなぁ…」

作者「2個連隊揃わないときついんじゃ??」

カオル「たしかに弾数が…だね」

作者「そこのところ強化と課題だな」

カオル「さてと次回は?」

作者「残務処理あるだろうがｗ」

第４９話　間引き作戦終了後…　投稿日２０１１年１月２２日

２００１年７月６日のまま
アメリカＣＩＡ極東支部
「なに？また失敗だと！！」

「申し訳ございません…」

「まぁいい…でどうなってる？」

「は！！……再起不能２名だして、残りの者は行方不明…目下捜査中です」

「行方不明？？」

「はい……」

コンコン

「はいれ」

カチャ……ボソボソ

「支部長、対象者からですが、五人は治療して帰す。また残した二

人は強姦魔と殺人鬼…との伝言がはいりました…」

「クソッ……早くなんとかしろ！」

「はっ！！」

＝＝　アメリカ統合軍情報司令室　＝＝

「全機損失無しだと？」

「はっ！！映像分析した結果で、間違いないかと」

間引き作戦では撤退する瞬間が難しい…

戦線を海岸沿いまで持って行き、一気にＮＯＥで脱出…なのだが、
光線級が残ってたら脱出する機体に損失がでて、
かといって重金属雲をたくと、
跳躍ユニットが破損や、互い同士が接触などで…
損失が出るのが通例であった…

「間違いないのか？」

「はい、金属反応らしきもの、ありませんでしたので」

「むぅ…」

＝＝　Ｂ５５ハンガー　＝＝

「ただいまぁっと」

［お帰りなさい、マスター］

片っ端から陸戦強襲型ガンタンクを出すと、格納エリアに行って貰う。出しながら…

「弾薬はどうだった？」

［機体数増えたから、消費量増加してたね。けど増産分で、今の機体数なら１４２時間分はある］

「成る程ね…あ、そうそう…」

５人の諜報員を出した。

「この人ら医療カプセルにいれといて」

［ポットね…２５号～］

作業挺に彼等はのせられ医局に向かった。

Ｔ－８５０は武装変更し、元のＭＰへ…

「さて、残務処理したら、早く行かないとなぁ……とりあえずメデューシン作るか…」

元のメデューシン
医療航空艦
全長１８０ｍ
翼幅２１５ｍ
尾翼高さ５５ｍ
胴体幅箱型３８ｍ
全装備重量３０５０ｔ
１２基のターボファン
滑走路距離ＳＴＯＬ性能で１５００ｍで離陸できる。
ペイロード３５００ｔを誇る。

メデューシン設計変更点
医療区画→座席区画に変更。
病室区画→座席区画に…
３層２層の余計な部屋も潰して座席区画に…
装甲ルナチタニウムに…
主機、核融合炉
１２基の、
熱ジェット＋スクラムジェットへ…
これによりペイロード強化

内部構造３０ｍ×１６０ｍ…内２０ｍ程はトイレや通路等に使うとして…

ちなみに俺の世界の１層式Ｂ７７７－３００ＥＲの仕様は
全長７３．９ｍ
全幅６２．８ｍ
内部幅５．８６ｍ
燃料乗客満載時離陸重量３５０ｔ
着陸重量２３４ｔ
滑走路距離３４３０ｍ
乗客５５０名
との事だ…

メデューシンが…非常識な仕様になる

２ｍ間隔でスペースを考えると…１０５０名…
それが４．５層…

１機で、約５２００人近く運べるモンスターの登場になる…

シャトルが追いつかないなぁ……
テンプテーションも２００人クラスだし…

これぱっかりはしょうがない…

戦艦ドックにて作成しはじめた。

さて、今回の間引き作戦の反省点か…

「戦線構築し、ライン維持…まぁこれでいいんじゃない？
が、３ｋｍごとに１個連隊がベスト…というべきか…
幸い怖い事態にはならなかったな」

ルナチタニウムでも、弾ぎれで、
前後左右を中型種以上に囲まれ、身動きできない状態で照射されると……なのだ…
また地下進行されると…だったが幸いなかった。

まぁあくまでも補給、修理はチューリップ任せ…ということだが…
ただまぁ、こういった狭い部分を占拠し、一気に広める…
そこにＢＥＴＡが殺到し、ただ抹殺するだけ…

（もう少し広いとこうはいかんな…）と思う

「引き続き増産、強化だなぁ～…」

（今の戦法だと攻略できて、鉄原までか…あとはだたっぴろいから、
拠点維持になるな…
オリジナル制圧まで鉄原からは３つか…）

そう考えてると夜はふけてゆく…

２００１年７月７日　七夕

残務処理は続く…

戦艦用ハッチはあと一週間程で完成…

もう一つの戦艦ドックは８０％まで来ている。

Ｂ－０１用の魔改造ドムは全機明日仕上がる予定と上がってきてる。

ザメルを５０機追加を命じた…

これにより残り５４基分となる。

解体処理している戦艦から抽出できた分だ…

解体作業している横で、

Ｌ５艦艇用にサラミス改を１隻修復作業にあたらせる。

戦艦用マスドライバーできたら、修復中のサラミス改が打ち上げられる予定になる。

地上部分ではマスドライバーが建築できているが、

テンプテーション用の整備や、避難民の移乗施設も必要の為、

帝国に打診のうえ、

本牧南、山下町辺りに、第三、第四滑走路、

空港宿泊貨物施設を作るようにした。

基地施設とは別にするため、防犯上も都合がよい。

またこのままだと、戦艦ハッチが桜木町辺りにできる予定で、戦艦用マスドライバーにそのまま接続し、

三渓園跡地を貫き、八景島手前で浮上できるルートになる。

シャトルは三渓園貫き、新鳥浜町辺りで空に飛び出す。

先日の戦果を帝国さんに伝えると、感謝の意が帰ってきたと、11号からくる。

医療カプセルに入った人は、まだ完治してない…二日程かかるとの事…

（帰ってきてからだな…）

帰ってくるまでロックと命ずる。帰ってくる？つまりまた別の世界に行く予定だった…

「あと、残務処理は……ないかなぁ？？」

［撃震のテストは？］

「あ～……忘れてた…となると、単独で絡みにいく必要があるか…」

帝国から依頼されている撃震改だった。
装甲の対ＢＥＴＡ戦テストがまだできていない…

「鋼鉄の咆哮からかえったら、かな…あとガンパレも一回行きたいし……俺がたりねぇなぁ…」

そういえば烈火も対ＢＥＴＡ戦してないねぇ……

「作者……忘れてた事を…怖くて前に出せないよ…貴重な人材だし…」

［作者ってだれ～？］

流石１１号空気読むね。

……石橋がきた。

「カオル！！」

「うんうん。よかったぁ～～」

「おう、イッシー約束通り帰ってきたぞ」

「信用しろったろ」

「ところでどういった戦い方したの？」

「あ～まぁ引きこもり戦だな…火力に任せて駆逐するけど前進せず」

「あの１番多い陸戦強襲型ガンタンク？」

「ああ、あいつらさ」

「補給はどうしたの？」

「ここで蓄えてる弾薬をチューリップで運ばせた」

「へぇ～～…でもかなり弾薬使ったでしょ？」

「ん～在庫がむしろ増えたから、そうでもなかったなぁ…」

「ところで損失機でた？」

「いんや０」

「嘘！？」

「ほんと」

「0って……」

「まぁ装甲材が装甲材だしなぁ～おまえらの機体に使ってるのも、おんなじ材質だから、期待して良いぞ♪」

「あ、そうだお礼忘れてたんだ……ありがとうねカ・オ・ル」

「……なんかお礼言われるとこそばゆい……」

「……ところでカオル何してたの？」

「ああ、残務処理して、これからまた飛ぼうかなぁ…っと」

「寂しいなぁ…」

「まぁそういうな」

「うん」

「さて１１号後は頼むな」

［了解、マスター］

「うんじゃあ行ってくるわ…留守よろしく”世界扉”」

「いってらっしゃい」

……

カオル報告

先日メデューシンの機体情報取得してました…

やっと報告できた…

第４９話　間引き作戦終了後…　投稿日２０１１年１月２２日（後書き）

作者「休む間もなく、次の世界か…えっと鋼鉄の咆哮２ｐの世界ね…」

カオル「作者…１じゃないの？」

作者「ソフト無くしたｗあと確かＰＣ用だから高いし…まぁ面白い記憶はあったなぁ～あひる爆撃機とかさ…」

カオル「縦横無尽に駆け巡るアヒル達だね～」

作者「そっから２Ｐは空母メインにして戦ってんだけど…あんまり強くないよなぁ…」

カオル「うん……」

作者「空母弱体化泣けたよ……けどまぁミサイルに関しては１番積めたけどね」

カオル「あの平たさでね」

作者「さて……次の鋼鉄の咆哮の設定どうするか…」

カオル「まさか…？」

作者「こればっかりはストーリーまだ浮かんでないんだよ…まぁ別にゲームストーリーに混ざってもだがな」

カオル「作者…ガンパレ」

第５０話　鋼鉄の咆哮の世界へ　投稿日２０１１０１２３

クワックワックワックワックワックワックワッ
バシューービーン
〜ビームがきて、ＡＴフィールド展開し防いだ音〜
クワックワックワックワックワックワックワッ
バシューービーン

（どひゃーやばいやばい）
クワックワックワックワックワックワックワッ

カオルはアヒル攻撃機に襲われてた。
クワックワックワックワックワックワックワッ
バシューービーン
クワックワックワックワックワックワックワッ

何故こうなったか？というと……

＝＝　昨日　＝＝

世界扉をくぐり…消し虚数空間からナビ端末をだす。

（お、日本か……）

場所は小笠原諸島、父島…との事だ。小笠原諸島は独自の生態系をもつ動植物が多い…
何しろ東京から１０００ｋｍ、周りには小笠原諸島以外の島が殆どない…

ちなみに元の世界の時に、小笠原丸にのって２５時間半かけてきた記憶がある。
飛行機？…それがないんですよ…
硫黄島にはあるんすが、自衛隊関係者及びアメリカ軍関係者以外基本的に立入禁止。

ときたまツアーがあるんすが、グアムからのしか出てない…
軍用地ツアーっすね。
で母島にできるできないで、今のところ計画段階にしかなってない２０１０１２月末の時点。
まぁ環境問題もあるみたいですが、
島民の方は早くできて欲しい……ようでした。

で、小笠原丸にのってはるばる行くしかない、東京都にあって東京でない南の楽園…
というわけです。

ハイシーズン以外は、いったらいったで、一週間かかる土地。

確か竹芝を、日曜日出発の翌月曜日着父島着、
その後３日間ホテルシップとして停泊し、金曜日出発で土曜日竹芝着のスケジュールです。

ハイシーズンでも２５時半行き、２時間停泊、帰りも２５時間半…
最低２日船内泊になります。

前、小笠原汽船が高速船を造船し、東京ー小笠原間を１７時間で結ぼう…
の計画がありましたが、造船したのはしたんですが、
おりからの燃料費高騰により、支援してた東京都や国交省が撤退…
計画ぽしゃんとなったわけです。

まぁそんな小笠原諸島の父島についたのですが…
辺りは要塞化してた…
至るところに砲台やレーダー施設が見える。

（となるとステージ６１５の前なのか？）

検索を起動させる…

『ドック艦は何処だ？』

A『衛星を打ち上げて下さい』

（そうなのか……）

虚数空間から衛星をだす。

セットし、
ポチッとな

衛星は空高くのびてゆく……

しばらくすると…
A『ただいま詳細検索中』

（まだかな、まだかなぁ～）

A『現在ドック艦はイギリスのスカパフロー近海にいます。ナビしますか？Y／N』

『Y』

「シャムシェル」

カオルは飛び立った…一路ドック艦に向かい……

＝＝　解放軍戦艦『はりまおう』の艦橋　＝＝

「艦長、少々よろしいでしょうか？」

敬礼し、話かけてくる、ドイツ系の眼鏡萌え美人な博士だ…

名前はエルネスティーネ・ブラウン、技術将校だ。

「どうしました、博士？」

彼はライナルト・シュワルツ。ウィルキア解放軍少佐…

この艦の艦長だ…

「ドイツ共和国軍からの情報なのですが、

最近ヴィルヘルムスハーフェン方面に大規模な物資の動きがあるそうです」

「物資輸送？」

「諜報を進めたところ、相当量の弾薬類が一箇所に集められてるようなのです」

「しかし、先日の北海会戦で敵艦隊も相当な損害を受けたはずです。
帝国としても、そう迂闊な動きはできないと思いますが……」

「それはそうなのですが……
警戒しておくに越したことはないと思います」

「ふむ……」

「艦長、司令部より入電です！！」
通信席から大きな声が上がる…緊急入電だろう…

「北海上空に巨大航空機を発見！！
レーダー反応から超兵器と推定されます！！
針路からみて、目標はロンドンと思われます！」
彼女はナギ少尉、このグループの通信長だ。
ヒロイン候補の一人…

「言った矢先……ですね」

「申し訳ありません。
もっと早くに情報を入手できていれば……」

「博士のせいではないでしょう。

とにかく出撃準備を進めさせつつ、状況を確認しましょう！」
艦橋が慌ただしくなる…

「針路ドック艦にとれ！！全速前進！！」

戦艦はりまおうが急速に前進する…
ものの１０秒もしないうちに８０ｋノットに加速し緩やかにスピードがおちる。

そしてはりまおうの異様さ…巨大な双胴戦艦、主砲は１６０ｃｍ単装砲４門、また対空パルスレーザー等装備されている……

しばらく進むとドック艦が見えてきた……
このドック艦も異様だ…
海の上にいながら、地上の基地と同様な設備を持つ…弾薬や兵装製造工場、兵器研究等が行える…

戦艦はりまおうは岸壁に接岸し…
艦スタッフはドック艦のブリーフィングルームへと急ぐ…

＝＝ブリーフィングルーム内＝＝

「ナギ少尉、接近中の敵は確認できたか？」

「偵察情報の分析から、接近中の航空機は、太平洋戦で使用された航空超兵器と同定！
ロンドンを狙い西進中です！」

「あの、巨大爆撃機か……」

「超兵器は北海上空を低空で飛行中！
最終防空ライン到達まであとわずかです！
太平洋戦でのデータでは、通常爆弾の他、艦砲やミサイル等を装備している模様です。
なお、同海域にて哨戒任務中であった部隊が消息を絶っています」

「この超兵器は、まるで巨大な空中要塞だな、弱点はあるのか？」

「多くの兵装を搭載しているのです。
超兵器といえども、他の航空機より、高度、速度は大幅に低下するはずです。
艦砲の予測射撃でも、充分対応できると考えられます」

「こいつを逃せば、ロンドンは火の海にのみこまれるだろう……
それだけはなんとしても防がねばならん」

「これまで超兵器を何隻も撃沈してきた艦長になら、きっとやれるでしょう。
さぁ、出撃のご命令を！」
周りとは違う服装の人物だ…
名は筑波貴繁、日本海軍特務大尉、５７歳のよき日本親父さんだ。

「本艦は超兵器爆撃機の迎撃に向かう！
けしてロンドンには近づけるな！！」
おう！！と至るところで声があがる…

そして彼等は、空母『あなただけよん』に乗りかえる……

『あなただけよん』は出港する…一路ロンドンへ…

『あなただけよん』がロンドン北東にかかると、超兵器爆撃や護衛艦隊がレーダーに捉えられた。

「航空機発艦せよ！！」
命令とともに舷側エレベーターが航空機?を載せて上がってくる…
アヒル達が飛行甲板に上がってきた……

アヒル達だ…
クワックワックワックワックワックワックワックワックワックワッ
クワックワックワックワックワックワックワックワックワックワッ
順次にカタパルトに乗ると、射出される……
動力はなんだろう??

「超兵器爆撃機、本艦を攻撃軸線上に補足！！」

「敵は速射砲を多数装備している模様！」

「爆弾やミサイルの直撃は致命的です！
敵の正面をさけ、側面や背面から攻撃を」

「超兵器爆撃機射撃開始しました！」

「各砲座、応戦準備！引き付けて撃て！」

アヒル達が敵艦隊に襲い掛かる…
クワックワックワックワックワックワックワックワッ
アヒルの口から荷電粒子砲がうちだされ、当たると爆散する。

超兵器爆撃機は、『あなただけよん』を爆撃しようと針路をとる…

「対空砲火！！」
艦の至るところに設置してある、対空パルスレーザー、
ＣＩＷＳ、が火線を放ち、
対空ミサイルが射出される。
連続して、尋常なほど射出される…
一発１０００万円だとしたら…既に5億円…6億円…

超兵器の爆弾槽が開くと、爆弾が幾つもおちてくる。数にして１００発程、どれも１０ｔサイズ爆弾に見える…

「急速転回！！」

Ｇを無視した転回により一気に９０度転回され、爆弾から艦をとおざける。

その頃、敵艦隊を殲滅したアヒル達は、

クワックワックワックワックワックワックワックワッ

空母から出たレーザーポインタに誘導され、一気に超兵器爆撃機に襲い掛かる…

対空パルスレーザーだが、速度が違う…

アヒル達はマッハ５を越えていた…

ダメージがだんだんと蓄積され…火を噴き初め…

とうとう耐え切れず、至るところで爆発をあげる超兵器……

「超兵器爆撃機、墜落していきます！！」

「艦長お見事です　」

「敵の特性見抜いた秀逸な戦闘指揮でした」

「敵墜落地点を確認後、基地に帰投する」

「まって下さい！！」

「なんだどうした？？」

「未確認飛行物体がいます！今、航空機隊が追撃しています！」

「あれは！？！？敵の超兵器！？、いやあんな小型の超兵器等……」
艦橋の双眼鏡から覗いてた博士が答えた…

「超兵器だと？まさか2機目か……」

「ええ、可能性があります。何しろ、あのシールドの様なもの、未知の領域ですから…」

「なんとしてでも、撃ち落とせ！！ロンドンを守るんだ！！」

＝＝　少し前…　＝＝

ナビ通りに進んできたカオル…

すると、

（おんや？あの巨大飛行機は……）

巨大なエイを思わせる機体、そう超兵器爆撃機、『アルケオプテリクス』だった…

（となると、３１０か……）

その爆撃機は一路ロンドンに向かっている…

ついて行くと……アヒル達が戦艦や巡洋艦に襲い掛かっている光景がみえた…

（う～一方的だなぁ…）

まさに瞬殺…圧倒的だった…

そのうち、アヒルにたかられて、火をあげる爆撃機…

（８週目ならいいなぁ……）

と見ていたら…

クワックワックワックワックワックワックワックワッ

襲い掛かってきやがった！！

これで冒頭のシーンに戻ります。

逃げようにしても機動力ありすぎのアヒル達…

（だぁぁぁ！！）

空母から、対空ミサイルが襲い掛かってくる……

当たる度にＡＴフィールドが展開される…

対空パルスレーザー、実弾も当たり始める…

（うぜぇぇぇ）

まさに使途の気持ちがわかるようだった…

カオルはたまらず……急降下する。

クワックワックワックワックワックワックワックワッ

それを追いかけるアヒル達…

クワックワックワック

水中にて、しつこいＡＳＲＯＣの追撃をかわしていた…

水中ではスピードが上がらない……

（クッ、ハイゴックでも持ってくるべきだったか……）

カオルはかわしながら、一路ドック艦の方へ……

空母艦内

「敵超兵器、今だ健在！！…あ、まって下さい…針路ドック艦の方向に進んでいます」

「なに！？！？至急通信をとれ！！ドック艦に控えている、全艦を出撃させよと！！」

「駆逐艦ぽんぷきん、フリーゲート艦長ラブ、戦艦はりまおう、潜水艦うぉっしゅれっと、至急迎撃発進して下さい！」

カオルは…

（やっと巻いたか？？）

……と思ってた矢先に…

ボフゥボフゥ

爆雷の洗礼を浴びていた…
爆雷は深度に到達すると、いてもいなくとも爆発する…

（クゥオゥ）

翻弄されていた…

そこに、対潜ロケット弾が撃ち込まれ、ＡＴフィールドが展開される…

また、水上艦から、水中用のレーザーが撃ち込まれまたもやＡＴフィールドが展開される…

（やめてくれぃぃ！）

まだこの間のが、かわいすぎた…が落とせないから……どうしようもない……

攻撃に翻弄されてると…

（うぉう！）

かなりというか物理無視の速度で漁雷が撃ち込まれてくる……

見ると…すごいスピードで潜水艦が迫ってくる…

カオルたまらず浮上……

そこには…１６０ｃｍ単装砲で狙いをつけた『はりまおう』
４０６ｍｍガトリング砲３門で狙いつけた『艦長ラブ』
超怪力線つんだ『ぽんぷきん』がいて、

ファイヤーの掛け声が聞こえたかのように…
一斉に火を放つ！！

ものの２０秒ぐらい乱射状態になってた……

そして…カオルは……

第５０話　鋼鉄の咆哮の世界へ　投稿日２０１１０１２３（後書き）

作者「ここで主人公がかわってっと……」

あ号「わたしが……主人公に……なるのだな？」

作者「うぉ……あ号呼び出す前に出てくるなよ…
まだ執筆中なんだからさ…」

あ号「……まぁ……ほかの……もの…だせない…だろ？」

作者「う～ん……確かになぁ…他の人がでるとシバかれそうだ…
だせてゲストのナギ少尉？？」

ナギ少尉「は～い！！呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃじゃ～ん」

作者「……いった先からくるのか…」

ナギ少尉「まぁ、鋼鉄の咆哮編だけでしょ？あたしの出番は…いいじゃないの」

作者「……まぁいいか…あ号、さようならぁぁ」

あ号「……ひ…ひどい……」

時空間に吸い込まれるあ号

作者「して、ナギ少尉」

ナギ少尉「な～に？」

作者「なんと戦ってるかわかってる？」

ナギ少尉「…本編では超兵器と戦ってます！！絶対しとめます！！」

カオル……リタイアか？？

第５１話　鋼鉄の咆哮編２　カオル……どうなる？　投稿日２０１１０１２４

前回までのあら筋…

１６０ｃｍ単装砲４門に狙われ、４０６ｍｍガトリング砲３門に狙われ、超怪力線に狙われ、

ファイヤーの掛け声が聞こえたかのように…

一斉に火を放たれた！！

ものの２０秒ぐらい乱射状態になってた……

はたしてカオルは…？？

＝＝　空母『あなただけよん』艦橋　＝＝

「艦長！！ドックから迎撃した艦が超兵器を補足できた模様です」

「よし！なんとしてでもドック艦にいかすな！！」

「はい！そのように通信を送ります」

「まだ撃沈できないのか……」

「あの艦長…」

「博士作戦行動中です」

「いえ…ですが…」

「艦長!!敵超兵器浮上、浮上と同時に各艦の主砲が火を放ってます!!」

「いよっし!!これで決まったろう!!…が航空隊を再出撃準備をさせておけ」

「艦長……」

「博士……作戦行動中となんど」

「重要かも知れないので…」

「わかりました…、重要かもしれない事項を」

「あれは超兵器でないかもしれません…」

「……超兵器でなければ、何故あそこまで我が艦の攻撃を、耐え切れてるのです？」

「…人かもですが…」

「人？！？！…博士、おふざけは…」

「艦長！！」

「なんだ？」

「超兵器が…白旗…あげてます……」

「はぁぁぁぁ！？！？」

「あの艦長…」

「投降宣言でなく白旗だと？」

「ええ……しかも……空中に浮かんでいる人……だそうです」

「人！？！？」

……艦長フリーズ。

「あの艦長？？」

……

「はぁ……しょうがないわね……」

ゴソゴソ

鞭を取り出すと…

バシィ

ギャン！！

悲鳴をあげる艦長。

急いでしまうナギ少尉。

「いててて…あれ？ナギ少尉……俺なにがあった？」

「艦長、で…白旗どうします？」

「ああ……」

艦橋スタッフは見なかった事にしているようだ…

「……投降するなら捕獲しよう……」

「わかりました！！」

その頃白旗あげてたカオル君……

（ぶち壊さなきゃ逃げれねえよなぁ……）

あきらめて白旗あげてました…

耐えきった事は耐えきったんだけど…

心があきらめてたんだよなぁ…

（まぁ…いざとなれば洗脳するしかないか……）

白旗を掲げ続けるカオル。

（どのくらいまつんだ？）

……　１番小さい艦がよってきた……

甲板に歩兵だろう、４０人程見える…

（ちっ…４０人同時はできないなぁ…）

その中の一人が、

「貴様！！我がウィルキア解放軍に投降する意思ありなんだな！！」

「……ああ、そのつもりだ…あんたらには参ったよ…」

と大声でカオルはかえす。

「ゆっくりとおりてこい！！妙なそぶりはするんじゃないぞ！！」

ゆっくりと甲板におりてゆく……着地…

「おい！！」

と隊長らしいのが叫ぶと中の一人の歩兵が寄ってきた。

「保安上により身体検索します。両手を横に伸ばして、足を肩幅に広げて下さい」

「こう？」

「それで結構です」

「ウヒャヒャヒャ」
全身まさぐられてくすぐったい…

「もう少しですから我慢して下さい」

「ハァハァハァ…」
ウホッにはならないが、笑い疲れた…

「大丈夫です。所持品等いっさいありません」
隊長らしき人がよってきて…
「貴官の所属、氏名等を教えていただきたい」

「ぶちまけなきゃか……あ～すみません、俺、異世界人なので、ここに戸籍ありません……」

「……もう一度お願いできます？」

「異世界人なので戸籍ありません」

＝＝空母『あんただけよ』艦橋＝＝

「艦長！！、投降者が異世界人となのっています！！どうされますか？」

「もしかすると超兵器の出所わかるかもしれませんね…」

「博士……わかったその者と面談しよう…博士もご一緒に」

そのころカオル……

４０人に監視されて…身動きがとれなくなっていた……

（まいったなぁ……）

通信していた隊長らしき人が、
「貴官の取り調べをシュワルツ少佐が行うそうだ…」

（あちゃ～悪のり提督か……）
と思ったが態度にださず…
「わかりました…でこのままで？」

「うんむ…今日はかなり遅い…我が家にて取り調べをおこなうそう

だ…」

「我が家？」

「うむ、ドック艦にてだ」

（あ、ラッキー♪）

「あと、貴官の監視と身の回りはこのものが行う…」

「ジャンナ伍長ですよろしくお願いします」
（うぉ、食いたい！！）

自重汁カオル！
まぁ…ロシア人って日本人男性からみたら食いたくなる人いっぱいだからねぇ…
わからない気もしないが……

とな感じのジャンナ伍長です。

「ではこちらに…ドック艦に着くまではご案内します」

ついていった……

「ねぇ…ジャンナ伍長…」

「あ、はい？」

「君に俺が任された…つう事は万が一俺が逃走したら……」

いきなり立ち止まり……

「……責任……とらされ……切腹…になるかと…やですので、やめてください」

「……はい…」

（くぅわ……最高責任者を納得させないと、駄目になったか…面倒な事になったなぁ……）

だねカオル。逃走したらその子、確実に責任取らされるっぽいよ…

「こちらになります」

……個室…しかも上等な士官用みたいだ…

「あ～～……待遇かわったみたいかな？？」

「そこまでは……わたしも上官命令で動いてますので…」

「だよなぁ…まぁ、じゃおとなしくしてますか……」

「はい、お願いしますね」

（……そういえばどうなるんかな？ループとか……聞いてみるか）

「あ、そうだ今回何周目なの？」

「は？何周目？？」

（ん？認知してはないのか…）

「あ～いいや、今の忘れて…」

「あ、はい…」

（けど、アヒル達は確か3週目が条件だと思ったんだけどなぁ……）

「まぁ今日は疲れたから…寝ちゃうね…用件あったら起こして」

「はい、お休みなさい」

カチャリ…カチャ
外側から鍵がかかる…

カオルつかれて寝に入った……

3日目

翌日……カオルは起こされると、ドック艦のある一室につれてかれた…

そこにはゲームで見知った顔の4名がいた…
筑波教官、ナギ少尉、ブラウン博士、シュワルツ少佐…

（となるとジャパンルートね……）

「お連れしました…」

ナ「朝早くすみません。朝食用意したので話ながらでもどうぞ」

「わかりました…」
と席に着く…

「まずは自分からかな？自分はウィルキア解放軍シュワルツ少佐です」

「わしが、シュワルツ少佐の副官を勤めている、筑波特務大尉じゃ。よろしくのう坊主」

「わたくしが、ブラウン技術大尉です」

「わたしは、ナギ少尉といいます」

「えっと俺は…まぁいいか、別世界からきました、国連軍所属、異世界軍統括している渚カオル大将です」

ナ「大将？？」シュ「ありえん」ブ「……」
筑「ほっ恐れ入ったわい、その若さで大将とはのう……」

朝飯食べながらだ、
因みに今回朝食は筑波教官の希望で日本の朝飯の定番シャケ等。

「ほっ、このシャケ脂のっててよいのう♪」

しかし、日本食をナイフとフォークで食べる3名には恐れ入った。

シュールだ…

俺？もちろん箸を希望。

「おぬし、日本人か？」

「ええ」

「しかし、見えん顔立ちだのう」

「貰いもんの身体ですしねぇ」

「それはどういった事じゃ？」

「まぁ異世界を渡る力等貰う際に、再生させてもらったんすよ」

「で、異世界渡って、超兵器をこの世界に持ち込んでるの？」

「へ？」

ナイフを突き付けてくるブラウン博士。

「どこの世界から持ち込んでるのか答えなさい！！」

「いや、持ち込んでないっすよ。むしろ欲しいくらいかな？
あれは、確かこの世界特有の兵器だと思いましたが…」

「……」

「まぁ、もう少しすればわかるんじゃないですかねぇ…答えが…」

「え？」

「俺は皆さんの努力による、この世界の運命を知ってる存在なんすよ…」

「そ、それって…」

「ええ、博士。傍観者や観測者…と言えますかね…
ですので余計な知識や運命については、できれば入れ知恵はしたくないです。
でないと実る運命が変わりますから…」

俺の独白が続く…

「ただ、予想外だったのが猛烈な攻撃をうけた事…これでまいっちゃって、おとなしく捕まる道を選びました…
壊さないと…つまり介入しないと駄目だったので…」

「つまり我々の攻撃がなければ……？」

「まぁ普通に傍観者でしたね」

「えっとこの世界には？」

「技術のコピーにきました…異能力での…」

しずかになる…

「まぁ……都合がよいかもしれませんが、皆さんの同意のもと見逃してくれれば、うれしいです。
なかった事にして……
できるんすが、無理に逃げようとしたら、
なんかアテンドでついてる方が切腹になる～って言われたので…」

「ほっほっほっ…わしは見逃してもよいとおもうぞい」

「そうですね…自分も」

「駄目よ」

「博士？」

「条件が幾つか……技術の収集の仕方をみて見たいのと、異世界少しみてみたいわ。平和な世界もあるんでしょ？」

「収集の仕方は今ここでも…まぁ平和な世界もありますね」

「その世界遊べそうなところない？」

「あ、ん～知ってるところだとディズニーワールドから大江戸温泉コースかな……」

「そこに連れてってくれるなら良いわよ…どう？少佐、次の作戦まで間があるんでしょ？」

「おもしろそうです。艦長！！」

「温泉のぅ……してでいずにいわぁるど…というのは？」

「ウォルトディズニーによる、ディズニーの世界のキャラクター達がおりなす、遊園地のでっかいものと思っていただければ」

「遊園地のう…浅草のはなやしきの様なもんかい？」

「あれの…百倍以上かなぁ？…俺もはっきりと敷地面積はわからないのですが…」

作注　カオルは現代の花やしきを想像してます。
筑波教官は、動物売却前の戦前のはなやしきを話してます。

「ほぅ…百倍とな？？……おもしろそうじゃのう…わしもついて行きたいのう」

「博士、それでいきますか。よろしいですか？渚カオル殿」

「ええ、ご理解頂き、ありがとうございます」

深々と礼をする。

「じゃあ、朝食もすんだようですし、技術の収集の仕方を見せましょう……バルディエル」
カオルは席たったあと、唱えた…
カオルは顔だけのこして壁と同化する。
「なんと、面妖な」「非常識」「壁から顔」「どう同化してるのかしら？」
「まぁこうやって、同化し、機種情報を取得、持ち帰って再現してるんすよ…時間あるので質問すが、アヒル達の製造情報何処で？」
「ああ、飛行機の？」
「ええ」
「あれはこのドック艦にあった技術情報ですね」
「なるほど…」
カオルがドック艦掌握…
「これでドック艦すべてをの情報がわかります。で、イロウル」
ドック艦の研究施設および整備製造施設から情報を抜き出す。

（ラッキー♪8周目……ほほう、データーがループして蓄積する扱いなんだなぁ…通りで…）

「この力で、コンピュータにアクセスし、情報を取得しました…」

「この部屋から？」

「ええ、今ではドック艦が自分の身体ですから…後ろを見てください」

「ほっ」「え？なんで」

手を生やしてる。

「こんな感じですよ」

解除した…

「これでこちらの情報取得は終了しました…後は何時でもお連れ出来ますが……？」

「1時間後でどうかしら？」

「わしは構わんぞ」「自分は大丈夫ですね」「あたしも～」

「1時間後に」

「あ、一言…これから行く世界は私服でと、銃刀剣の所持は禁じられてます」

「なんと!?」

「禁じられてるからこそ、治安が安定されてますので、よろしくお願いします。あと行程は一泊丸二日で構いません?」

「艦長?」

「…それでいきましょう」

「わかりました、では1時間後に」

……

カオル報告

鋼鉄の咆哮2Pのプレイヤー側の技術情報取得できました。

第５１話　鋼鉄の咆哮編２　カオル……どうなる？　投稿日２０１１０１２４

作者「さて、次は現代トリップか…」

あ号「作者……現代トリップは、プロットに？」

作者「ないな」

あ号「いいきるか……」

作者「そもそも鋼鉄の咆哮２ｐは入ってたが…ストーリーどうするかなぁ……だったし、この鋼鉄の咆哮編はいきあたりばったり…があの場面なら明らかに襲われるからさ…一応自動制御扱いだろうし…アヒル」

あ号「……前回のメデューシンは？…」

作者「……俺だったらの想像ｗ」

あ号「その前のガンパレは？」

作者「そこらへんは、介入するならここだの場面が、できてたね」

あ号「Zは？」

作者「ある人物以外はプロット内…人物関連したのはプロット外」

あ号「ガンダムは？」

作者「まだ本編に介入状況いれてないが、プロット内」

あ号「ターミネーターは？」

作者「プロット内」

あ号「メタルマックスは？」

作者「プロット内だが……変更なるかも……」

あ号「他には……」

作者「もうネタばらしやめいwあ号はおちる運命なんだからな…」

あ号「……作者、わしにも、チートを…」

作者「……無理？」

あ号「ｏｒｚ……あ、だが対抗手段できれば……いいんだよな？」

作者「……現状対抗手段フラグたつと思う？
ただ火力で押してるだけだぞ…今までの人類とかわらんぞ…」

あ号「……」

さて次回は、現代での珍道中！！

デカルチャー

第５２話　鋼鉄の咆哮の世界より帰還…　投稿日２０１１０１２５　訂正１（並

本編でも書きましたが…観光ガイド編を飛ばしました…

原因はリアルでディズニーワールド最近行ってないので、
ど忘れ部分が多かったのです…

ご了承下さい

第５２話　鋼鉄の咆哮の世界より帰還…　投稿日２０１１０１２５　訂正１

現実世界トリップは略させて下さい…

実はディズニーワールドが最近行ってねえなぁが…昨日書いてて気がつきました…

なので後日外伝の形で…という事で…

大江戸温泉は好きでいってますが…

本編上にてお知らせいたしました。

四日目…
２００１年７月１０日深夜

世界扉からでてくるカオル。

丸二日間使ってしまったガイドだった…

「だだいまぁ～１１号」

「お帰りなさい。マスター」

「風呂入って寝るわ…明日朝ね」

［イエスマイロード］

翌日

２００１年７月１１日

「１１号状況は？」

［陸戦強襲型ガンタンク全機完成で２０２機、
ザメル全機完成で８０機、
魔ドムもＢ－０１分完成済み、慣熟している。
核融合炉の燃料在庫５２基分。
メデューシンはもう少しで完成、内装段階。
もう一つの戦艦ブロックも完成し、ハッチもできたから、とりあえず陸戦強襲型ガンタンク１個少隊と、随伴でＴ－８５０が警備中～
サラミス改も出来上がったよ～
マスドライバーはシャトル用は予定より繰り上がりで完成。
戦艦用は４０％、
空港滑走路は７０％、
施設に関しては４０％ってとこ」

「と…核融合炉の残りと、ハッチの警備の問題と、施設の４０％が

か…
陸戦強襲型ガンタンクは、佐渡島の形から考えると、
最低8個連隊は必要だからなぁ……
あ、シャトルマスドライバー試運転は？」

［まだ］

「シャトル製造してなかったよな……内装抜きだと……どのくらいでできる？」

［テンプテーション同型機なら、内装抜きで、明日午前6時前には］

「なら試運転明日入れといて」

［イエスマイロード］

「施設が遅いのは？」

［モデルがないから難航中、管制や整備場、ターミナル等はできたけどね］

「あ～モデルか……確かに…入ってないね」

［なんかあれば短縮はできるよ～］

「……考えとく」

［できれば早めに］

「で、核融合炉はまた行かなきゃか…まぁ後で、で警備か…」

格納庫のハーヴェスト君を改造し、配置する事にした…

ショルダーキャノンの変わりに１２７ｍｍガトリング、
３５ｍｍＣＩＷＳが８
照明弾を取り付け、

陸戦強襲型ガンタンクの変わりに、警備にあたらす。

Ｔ－８５０は１人だけにした…

ハッチの近くででーんと佇むハーヴェストが、これから名物と…になる…

＝＝戦艦ブロック＝＝

継ぎ接ぎビッグトレーを出し、
バルディエルで同化し、改造タイム。
主砲を排除、
艦橋を前の方へ移動し、
変わりにＭＫ４１ＳＬ－ＶＬＳを２１０基、
無限装填装置を組み込む…
仕上げにミサイルの誘導面でＧＰＳ／ＩＮＦ複合誘導…
一応３５ｍｍＣＩＷＳ４門つけ、ミサイル陸上戦艦に仕上げた。

ビッグトレーミサイルバージョンの誕生だ。

［ねえ、マスター］

「ん？」

［この無限装填装置、マスターじゃないと作れないよ。イマイチ理解不能］

「プラントでも無理なん？」

［物理を無視した異能の力だから生産できない］

「じゃあ、ミサイルバージョン作るさいは、無限の部分の仕上げが

必要なわけだ…」

［うん。それでお願い］

（そういえば無限装填装置も見たいってたけ……）

副司令に明日のマスドライバー試運転の際の、シャトル受け入れも含め、お願いしようとした。

（そういえば…）

「なぁ１１号、航空管制って、どうなってる？」

［航空管制？……話通ってないよ。単独でするんじゃ？］

「……作るだけ作ってか……話してこよう…」

＝＝　副司令執務室　＝＝

コンコン「副司令いますか～？」

「いるわよ、どうぞ」

シュン

「失礼します」

「なによう？」

「実は、新しい滑走路や空港の管制等諸々と、無限装填装置についてなのですが…」

「ああ、そうね…航空管制は司令部にいって頂戴。無限装填装置？手に入れたの？」

「ええ、昨日帰ってきましたから」

「早速見せて…と言いたいんだけど…
やっぱり撃たないと始まらないかしら？」

「だと思います」

「思うってなによ……使える演習場はっと…」

「設計するのではなく、感覚で作れたり弄ったりするだけっすから…」

「ほんと異常ね……明日しかあいてないわね……明日の朝で、大丈夫かしら？」

「入れといて下さい。…けど埋まる程少ないのです？」

「あんたのとこのＢ－０１よ…連日連夜金色が見かけない日は、ないわね…」

「あ～すんません…」

「しかもこっちの所属の戦術機じゃ、武装や当たり判定同様条件にしても、
歯がたたないって話じゃないの」

（ドムの特性生かしてるのか？……彼女らももう、前線連れていくかな？）

「なる♪スカウト冥利につきますね～
ところでＡ－０１とＢ－０１のは対戦は？」

「そういえば…まだ入ってないわね……」

「確か今だと、０９対２８だから変則編成での対戦になるんですよね…？だから対戦やらないのかな？」

「新任が、後期カリキュラム中だけど…５人のぼって来ればね…しかし、少し使い潰しすぎたからねぇ……機密上他のと対戦できないし」

（あの乳＜バキュン＞達か…）

「ん…まぁ近々入れるようにしときます…とりあえず明日っすね」

「明日ね…あとは？」

「俺からは以上ですね」

「あたしからは…
アメリカさんとなんかあったの？
妙に違反行為でアメリカ系とみられる、諜報部員がＭＰに捕まって

きてると報告がきてるけど…」

「あ～……処理しときます」

（多分５人の関係かな？）

「あとは？」

「ないわね」

「じゃあ失礼しました」

＝＝　横浜白陵基地司令部　＝＝

（と、航空管制って誰にききゃぁ？……ピアティフ中尉がいた♪）

「ピアティフ中尉～」

「あ！カオル大将閣下！！」

「ちょい、それ止めてくださいよ…こそばゆい…」

「閣下は大将ですので……」

「階級無しでカオルでね…でないとなんかやりづらいし……」

「ですが、閣下…」

「…上官命令」

「はっ!!…ではカオルさんでよろしいですか?」

「…まぁそれでいいよ…
と、新滑走路と、新しいシャトル打ち上げ施設についての、航空管制について話にきたんだけど…」

「航空管制は、この者が統括しております」

リン・ミン準尉が紹介された…

「あ、リンが航空管制統括?」

「はい！！そうです…ご昇進おめでとうございますカオル大将閣下！！」

「階級は止めてください…年齢相応の付き合いにしましょう♪上官命令っすよ♪」

「は、はぁ…」

「と早速っすが、航空管制の打ち合わせについてなんすが…俺の方で、シャトル移乗や着陸等に2本建設中と、マスドライバー施設建設中は聞いてます？」

「はい、こちらでも管制どうなるのか？で、部署内では話題に上がってたので…」

「俺としたら、そのまま管制お任せしたいかなぁ…なんすが…駄目なら駄目で、こちらでも持つようにはします。」

「……わかりました。こちらで管制持ちます」

「よろしくお願いします。あ、あといってると思いますが、明日のシャトルの件お願いしますね」

「はい、わかりました」

「じゃあ、明日ね」

＝＝　ジオフロント　医局＝＝

「なぁ１１号、こっちのエリアには諜報部員来てないの？」

「Ｂ５５関連で…は報告上がってないよ～」

（地表だけか…さてと…）

まずは、２重スパイの人から…起こして…

「帝国さん、すんませんでした」

「ばれてらっしゃるんですね…あの任務を言い渡された時、放棄したかったのですが……」

「まぁ今回は作戦行動中に実弾装備させてたので、責任もって治療した…って事にしておいて下さい」

「わかりました」

次に…スカウト対象者の方を起こす。

「こんにちは、フラッチェ・アンスワルさん」

「！！え……」

「ご両親は避難の際に死別、今はただ一人の肉親である、妹さんの市民権獲得の為に、ＣＩＡとして働いてますね」

「あ、あの……」

「さて、何故わかったの？は置いといて、もし、妹さんが、安全な土地での望まれた生活ができる……どうします？」

「……あるのですか？？」

「ええ…空に」

スペースコロニーの画像を出す。

「全長３０ｋｍ直径６ｋｍ、宇宙に浮かぶ島、スペースコロニーです。一つのコロニーに約１０００万人が自立して生活可能になってます」

「自立って……」

「ええ、衣は避難された方々次第ですが、食住は、このコロニー内で可能になります。
この周囲を浮かぶわっかに、農業プラントが設置されてますので、最初はこちらから提供しますが、
三ヶ月もすれば自立可能になりますね」

「……」

「いずれは、全世界の避難民の方を受け入れる予定ですが、
ここにあなたの妹さんが、約２週間後に住める様に手配できますよ～と、したらどうします？」

「！！……条件は…？」

「あなたをスカウトしたいかなぁ……なんですが…」

「……わかりました。よろしくお願いします」

「こちらこそ」

帝国さんの二重スパイさんは…ボー然してた…

「帝国さん」

「は、はい！！」

「多分上からくるとは思いますが、あなたからも情報提供しても、いいですよ」

「わかりました！！」

「じゃあ、残りの3名起こしますか……あ、アンスワルさんは、早速、妹さんの件手配しちゃいますね」

こっちの基地からＴ－１０００がＨＳＳＴ操縦し、アメリカにいるＴ－１０００が妹さん確保するようにした。

「はい」

「アンスワルさんは２５号！！……彼についてって下さい」

ついてくアンスワルさん。

残りの３名を起こす。
があんまり情報は与えない…
そうしてるうちに妹さん確保の報告が入った…

「ではあなた方４名は釈放します…が上に、少しよってからでお願いします」

＝＝　ある諜報部員　＝＝

俺は、横浜白陵基地に捕われている同僚の調査、
という事で潜入しようとしていた…

幸い国連軍だからＩＤさえ手に入れりゃあ、どうって事もない…
……だったんだが……

いつもの様に基地のＩＤを手にいれ、ゲートに近寄った…

「ＩＤと所属を言ってくれ」
ＭＰが話かけてきた。
カードを見せ、所属をいい、
許可もらって入ろうと、一歩足を踏み入れると……

ビリビリビリビリ

「ギャン！！」

俺はのされていた……

「おい！！」

「不正ＩＤと確認、不法侵入により、貴様を逮捕する」

「……そうなのか？」

「そのＩＤカード持ち主と身体的特徴が違う、よって同一人物と認められない」

「わかった……待機室！！また逮捕者だ！！人をまわしてくれ！！」

俺は逮捕された…

＝＝　白陵基地ＭＰ区画　＝＝

４０名程が不法行為で逮捕されてるらしい…

うち、不法侵入が３９名との事でこっちを担当する事になった…

一斉に文句を言うが、

「アルミサエル」

一人一人本名、どこ所属か?家族、大切にしている物を言うと…おとなしくなる…

前回のようなかわいそうな身の上の、スカウト対象者は今回はいなかったから、その内の一人の取り調べを紹介しよう。

「次ね～」

「や、やめてくれ…大声でいわないでくれ！！」

「だ～め…アルミサエル」

「ヤダー！！」

「本名、マイケル・クリント、所属ＣＩＡ極東支部ね。家族構成は、母方のお爺さん、両親、兄、弟の６人構成か……うっさいね～」

喚いて妨害しようとしてたので、ガムテープを口にはる。

「え～と、エッチなものの隠しばしょは、職場のロッカー内、鍵の番号は８４１２５、
クレジットの暗証番号もわかったけど流石に内緒にしとくね。

で、大切にしているものは…１／１のダッチワイフ…
寮のベットの隙間に隠してるか…
ほぉ、一週間に一回楽しむのが趣味ねぇ…
よ！このスケベ君♪」

ガムテープ貼ったあとの顔の表情、驚愕、言わないで、涙ダーとなったのは…
言うまでもない。

とこんな感じで取り調べはすすんだ…

あ、潜入した同僚の彼女を寝とったや、
妻とやってる人もいたし、
勿論暴露しましたよ。

ロリコン趣味もいたし、
その時、同僚の一人がお前、俺の娘に近づいたのは?と聞いてきたから、
うん。エッチな事したい為だよ～と、もちろん変わりに答てあげました。

裏工作で同僚をおとしめた人もいたし、

とにかく当人の秘密を同僚の前でぶちまけまくりましたね～

その後解放…

皆、今回保護した諜報部員の調査だったからね。

そこまでにしときましたよ。

……

カオル報告

頭を覗きまくって、

二人程、ナンパしまくってた人がいたので、少し洗脳…

ウホッにしました

第５２話　鋼鉄の咆哮の世界より帰還…　投稿日２０１１０１２５　訂正１（後

ナギ少尉「作者なんで～～」

作者「すまん、本当すまん……お詫びに後書き準レギュラーでいいか？」

ナギ少尉「それよりか、Ｍｕｖ－Ｌｕｖの世界でドンパチやりたい！！副長決戦の時あたしも戦力もってれば、あのおばさん倒せたのにぃぃ！！」

作者「おいおい、まだ３１０らへんだろ？」

ナギ少尉「あたしは、エクストラ世界からきたナギ様なのだぁぁぁ～」

作者「……」

ナギ少尉「あと、コンピュータって無理矢理こじつけ～ｗ」

作者「……イジイジ」

ナギ少尉「作者いじけてんの～」

作者「だってさ、だってさ、８週目の武装をさ、ストーリーどおりに進めるのはさ、それしかないって思ったんだもん……」

ナギ少尉「良くあるループで良いじゃん」

作者「それだと、いい加減ループ世界から抜け出すネタになるよ？」

ナギ少尉「で、Ｍｕｖ－Ｌｕｖの世界に一緒についてって～」

作者「ドック艦ごとか……けどウィルキァ帝国はどうすんの？」

ナギ少尉「そりゃぁ、カオル君がバッサリとあんさちゅやってくれれば…」

作者「……ナギ少尉、おぬしもわるよのぅ…」

ナギ少尉「いやぁ代官様程ではぁ…」

二人の密談は続く……

エクストラでのナギ少尉はこんな感じではっちゃけてます。

第５３話　７月１１日の日常　投稿日２０１１０１２６　大訂正１（前書き）

ビッグトレーのサイズダブデ並と思ってましたが、
戦艦を４隻横に繋げたサイズとわかりましたので、
修正バージョンでかなり改変しました。

ちなみにＶＬＳは４セルで１基、１基あたり約６ｍ×約６ｍになります。

第５３話　７月１１日の日常　投稿日２０１１０１２６　大訂正１

２００１年７月１１日
朝……

「おっはよぅ～」

［マスターおはようございます］

「さてと、こいつの試験か…」

ビッグトレーミサイルバージョン

ビッグトレーは元々格納庫がなく、ＭＳは搭載できない、
移動砲艦兼、前線司令部の役割をはたしています。

数少ないビッグトレーを何故魔改造したかというと……
海上も走れるホバークラフト機能、
何処までも平地である限り進む、陸上砲艦の部分が重要なわけだった…

ＭＳを搭載する際は、
甲板の上に乗るか、カーゴを連結する必要にはなる。

カーゴ連結機能は勿論つけた。
最高速度、熱ジェットを使い、
３００ｋｍ／ｈで平坦である限り爆走する巨大砲艦である。

が……
（しまったぁぁぁぁぁ）

新潟ー関東地方を結ぶ山脈の問題……わすれてたようである…
（ＢＥＴＡが使った長野県ルート通るしかないのかな？
か、海か琵琶湖ルートか虚数空間輸送か…）

ユーラシア大陸にいけば、
何処までもＢＥＴＡによって、平坦に削られた大地が広がってる為の話だが…

さて、このビッグトレー、全長２１３ｍ、全幅１３４ｍの巨体を誇る…
ちなみに、鋼鉄の砲鋼２Ｐの１６０ｃｍ砲なら計８門は積める事がわかった。

（そのバージョンもありかな…
が、甲板上に乗れなくなるか…）

作注…翁さんありがとうございました。

「きたわよ」
副司令が見えたようだ…

「この……でかぶつといって良いかしら…が、例のを組み込んでるの？」

「ええ、そうっすね、地球連邦軍の陸上戦艦ビッグトレーです。けど、武装とか外見もかなり弄りましたが…」

「弄るねぇ…まぁいいわ、早速見せて頂戴」

「こちらに…」

ハッチから入る。

本来は階段のみだったが、エレベーターを1基のみ設置、そのまわりを螺旋階段がの仕様に変更してある。
流石に全高８５ｍを階段で…はねぇ……

また居住区画、休憩室、シャワールーム等も備えつけのがあるが、拡大させてある。

セル甲板にでるフロアにもあるがそのまま、艦橋へ……

ただっ広い艦橋ながらヤドカリが、二体それぞれのブースにいる。

「彼等だけ？」

「ええ、片方はミサイル担当、
片方は操艦、通信、火器、艦内環境を担当します」

「……つくづくチートね……」

「じゃあ、発進させますか」

駆動音が高まり、艦が浮き、戦艦ゲートまで前進する。

昇降エレベーターまで進んで一時停止、エレベーターがのぼり始める…

のぼり始めると戦艦頭上の地表ゲートが開き始める。
地表出入口は…勿論、２５０ｍ×２５０ｍのプールにしているのはお約束。

水が凄い勢いで吸い取られ、底面が横にずれ、縦穴が見え始める。

ハーヴェストが見守るなか、縦穴から姿を現すビッグトレー…

のぼりきったところで、
「微速前進」
前方に滑りだす…

「と、ターゲットは第一演習場北端ですか？」

「ええ、そうよ」

「距離１２ｋｍか……近いけどいいか…」

自軍衛星からターゲットが写しだされる…廃棄トラックだ…

「ターゲット目標にむけ、斉射！！」

［マスター斉射すると横浜基地こわれるよ］
と空中ホログラムがうく。

「斉射中止…まじで？」

［まじもまじ…２１０本を何回うつの？］

「最低１順以上…」

［１０５０本ね…トマホークはＴＮＴ火薬を何ｋｇ？］

「４５４ｋｇだっけ……うん壊れるね…１基だけ使おう。」

［何百メートル掘るつもりだったんだが……］

「いいよ！！はい発射！！」

トマホークを今回積んでいる…

続いて、２セル目が発射される

更に続いて３セル目射出、

続いて４セル目が射出…

（さて、後ろはどうなってんのかなぁ？？）

ＶＬＳは、４セルで１基のセットになっている…のでこの段階で空になってる筈だが…

蓋が閉まっていた……

つまり…

2巡1セル目が射出された……

「……物理無視してるわね」

「作っておきながら…同感です…」

「VLSの蓋が開いてる時には空なのよね？」

「ですね…」

「閉まると、ミサイルが装填してるわけ？」

「……みたいですね……」

ミサイルの射出はどんどん続いてる…

「もういいわ…蓋が閉まって充填する瞬間みたいけど、なんか弄られるかもだから…」

「射撃中止！！」

映像は目標地点を映しだしている…

クレーターとなり、２０ｍクラスの穴が空いていた…

艦を戻すと…次はマスドライバーのテストだった…

＝＝　アメリカ軍情報司令室　＝＝

「この横浜にあるのがそうか？」

「はい、マスドライバーというものです」

「ループ式なのか…」

「のようですね」

「まだ彼等のシャトルの諸仕様はあがってきてないんだな？」

「はい…今日が初披露目だそうで…」

「なんとしても我が国が1番でなければ困る、とにかくあの技術は手に入れなければ…」

「なんとしてでも!!」＝＝　横浜白陵基地　＝＝

戦艦用マスドライバーと違い、
シャトル用は民間人が乗るため、Gがかけれない…
なのでループ式で加速をつけ、射出の形になっている。

射出後、熱核ロケットで途中で大気圏脱出速度を得る…計算となっている。

「それではマスドライバー試運転に入ります。よろしくお願いします」
カオルは高らかに発言する…

シャトルが前進し始め、加速ループ路線に進入する…

ここでマッハ5まで加速し、射出路線に切り替わり、一気に熱核ロケットと、ともに静止衛星速度まで大気圏中に加速する。

重力が弱まるとともに加速はまし、
コロニーへ向かう際はそのまま加速続け、衛星軌道脱出速度を越すようになる。

（反重力しっている見にとっちゃあ…膨大なエネルギーの無駄使いだがなぁ……）

司令部のマスドライバーでの仕事は管制と、監視のみになる。
加速路線、射出路線の切替はシャトル側での操作となる……

「テンプテーション０１より一分前と入りました」

パイロットは勿論ヤドカリだ…

「進路オールクリア、いつでもどうぞ」

制空権を奪われてから、民間航空は成り立たなくなっている。
過去に墜落させられた事もあったからだ…
また密航者等の問題により、現在は時間がかかるが、大航海時代へ

と最突入している。

あとはＨＳＳＴによる移動…これはごく一部のものに限られていた。

なので、実際的には航空管制は軍用のみで、かなり暇だったから、仕事が増えたと喜んでいた。

「射出路線に切り替わりました！」

次の瞬間、射出口に設置してあるカメラが衝撃波で揺れ、シャトルがそのまま天高く登っていくのが見えた……

加速路線から射出路線に切り替わる前段階で熱核ロケットに火がいれられ、火を噴きながら空高くあがって行く…

今回の試運転は、周回し、再突入までになる。

なので約１時間半後までジオフロントの宇宙司令室へと移動した…

＝＝　宇宙司令室　＝＝

Ｃ２グリッドに新設した、コロニー、宇宙に関しての処理室だ…

現在Ｌ３Ｌ４Ｌ５にあるチューリップ、及びＬ５宙域隊、Ｌ５の各コロニー、

またアステロイドベルトや木星に向かっているチューリップの状況

を、
またテンプテーションの様子を映し出している。

［マスターいらっしゃい］

「どう？テンプテーション０１は？」

［周回軌道まわってるね～］

「ここの裏側あたりかな？」

［うん。あ、マスター…木星の衛星にもＢＥＴＡの存在確認できたって通信が入ってる］

「というと…ガニメデ？」

［いや、４つとも…］

「ありゃぁ……となるとセレスもやばそうかなぁ…」

［そっちの方は報告が上がってないね］

セレスはアステロイドベルト帯に属する、直径９５０ｋｍの小惑星だ…

木星の４つ、いずれも月か同等またはでかい衛星である。

「となると…やっぱりその外側の惑星や、衛星も既に占拠されてるとみた方がよさ気かな…」

月と同等以上だと土星の衛星でタイタンがある。

少し小さいが海王星のトリトン、もう一回り小さいが１４００ｋｍで土星衛星のイアペトゥス…

［かもね…］

「ほんと、この世界に俺が来なかったら、どうなってたんだか…」

多分２周目の桜花作戦のあと、地球は取り戻せ…るかせないか…が、宇宙については絶望的でしょう……

３００年で木星まで行けるかどうか…

第一月のハイブが、えんらい事になっているかと…

「となると宇宙軍も本格的に目処いれないと駄目か……」

あれの投入かな??

「まぁどっちにしろ地球の生存圏の確保、余力でたらか……」

そうこう話しているうちに、そろそろテンプテーション０１が着陸シークエンスに入る為、
また基地司令部に行く事になった…

＝＝　横浜基地司令部　＝＝

「テンプテーション０１、大気圏突入着陸シークエンスフェイズ１に入ります」

……

「テンプテーション０１大気圏突入しました！！」

「予定航路確保よし」

シャトルは大気圏突入時に耐熱パネルが破損等をして…の事故があるが、
テンプテーション０１は耐熱パネル自体がない…
よってその事故の確率はかなり減る筈である…

突入でマッハ２５を超え、シャトル下部は１５００度を超えている。
大気圏突入による空力抵抗でだんだんと減速してきた…

「シークエンスフェイズ３に入りました」

シャトルがマッハ３まで減速し滑空し始める…

「フェイズ４間もなくです、進路オールクリア」

なお、テンプテーションは、飛行機としての機能の、フラップ等も備わっている…

の為パラシュートはいらず、２６２ｋｍ／ｈまで減速し、空力が損なわず着陸体制にはいれる…

「視認できました。着陸ギア降りてます」

テンプテーションは無事着陸した。

「テンプテーション０１より、機体温度が下がった為ゲートへの進入よろしいか？ですが…」

着陸停止し、ものの２０秒…

「え？もう？サーモに切替て……あ、本当…ｏｋよ」

テンプテーション０１は自力で移動し始める…

「試運転ご協力ありがとうございましたぁ～」

カオルはお礼をいうと退出した…

＝＝　アメリカＣＩＡ　＝＝

「この情報は間違いないんだな？」

「は！！」

彼等は情報室から上がってきた横浜基地マスドライバーによって打ち出されるシャトル、

及び着陸したシャトルを見ている……

「……ならば計画急がねば……」

「しかし、肝心の方が、まだ力足りなく踊らされるのに、気がつくかと…」

「むう……これ以上工作員も増やせないし…」

「そこでですが、この方法だと、一ヶ月で見込めるかと…ですが予算が足らないので…」

「なに??構わん追加しよう」

「は!!ありがとうございます」

夜はふけてく……

……

カオル報告
とくには…ないかな?

第53話　7月11日の日常　投稿日20110126　大訂正1（後書き）

作者「とりあえず、フラグ消化して……」

「ね～お兄ちゃんにいつあわせてくれるの？」

「私の夫の最後を見とってくれた方にはいつ？」

「お父さんの最後教えて～」

「いつになったらリサイクルさせて貰えるんでしょうか？」

「俺の腹の中にはいつくんだよ～」

「私をいつ助けにきてくれるの？」

作者「フラグどもが～～～リサイクルは明日だ明日！！
お兄ちゃんは、まだ未定、
奥さん、死んだんでしょ？
娘さん…もうちっとまて…
腹の中は、まだ貯まってねーじゃん…
とりあえず次の次トリップでだ！！

あとは未消化フラグないよな？？」

ただ今フラグ整理中のひとこまをおおくりしました…

第５４話　７月１３日　投稿日２０１１０１２７（前書き）

サブタイトル悩みましたが…思い付きません…

時事の一言

霧島の噴煙すごいっすね…

ありゃあ……確かに鉄道動けないです

第５４話　７月１３日　投稿日２０１１０１２７

２００１年７月１３日朝…
「”世界扉”」

開くとメールが受信される……

『カオル様、食料、リサイクル用の物資を用意できました、受け取りをお願いします。田中玲奈』

（早速打ち合わせの電話するか…）

プルルルルプルルルルカチャ
「カオル様？…丁度よいところで…助かりました…ありがとうございます」

「助かったって？なに？」

「はい、実は痴漢されてまして…」

「はぁ？捕まえれば良いじゃん」

「いえ、複数人いる見たいなんですよ…

先週と先々週のおんなじ曜日に…も…」

（お世話になってるし……しめるか…痴漢だけは赦せないからなぁ…）

「じゃあ、来週そっちにいくよ退治しにね…多分一週間ありゃ資材も仕上がるしさ」

「本当ですか？…是非お願いします……」

「で、食料、物資の受け取りは？」

「あ、はい。先日の倉庫にございますので…」

「了解、じゃあ今からいくから…とりあえずもう気配はないん？」

「あ、はい。わたくし降りたのでもう大丈夫です」

「了解…じゃあ来週通勤前ね」

「はい、前日夜あたりに、お電話下さいまし」

「あいよ…じゃあね」
カチャ
「11号、田中玲奈さんの肉質再現できない？ボティースーツみたいので…」
［できるけど、なんで？］
「ああ、痴漢退治さ」
［……なら色々機能付けていい？］
「ああ、自重せずにな…」
［イエスマイロード］
「さて、廃材回収してくるか……」
世界扉を潜る…
＝＝現実世界＝＝
相変わらずの俺の部屋

（廃材回収っと）

扉を消し、同化し、幻影をかけ、
物資を回収しにいった…

粗大ごみの山だった……
（……確かに試してみる？ったけど一回めからか……）

あと食料のコンテナ回収し、前回分の空コンテナを返却した。

挨拶後、全部回収し、世界扉で戻る…

粗大ごみをだし、別枠でもってくから、資源化しといてくれ…と命令しておいた……

また食料コンテナを集積所においたので、回収来るように伝言。警備にはＴ－８５０を数名つけた。
承認用に２４号っと…

「あとは、ガンダムの世界いって燃料ちょっぱるのと…
ガンパレの件かたずけるのと…
で、メタルマックスか…
つうか、いくら燃料ちょっぱりにいっても足らないなぁ…」

［マスターがんばれ！！］

コバッタ達のおかげさまで、日産５０機超えしてるから…の状態であった

コバッタ１０体で1機組み上げる事ができる。あとは資材と、燃料の問題だった…

資材もこの間コロニー補修↓陸戦強襲型ガンタンクフル量産、ザメル量産、弾薬生産で心許ない…

（早く小惑星帯や木星着かないかなぁ……）と思うこの頃であった……

今まで集めた機数は７０００機越えていたが、
燃料回収できたのはそんなもんである…

［あ、マスター基地ＭＰから連絡、奇妙なおじさん捕まえたって］

「おじさん？アメリカの？」

［いや、データーによると日本帝国情報省外務２課課長、鎧衣左近……
珍しく施設内警邏中のＴ－８５０が捕まえたらしいよ］

「へえ、施設内でか…」

彼等が配置されてから門を通る諜報員はとことん捕まっている。

偽造ＩＤはデーターバンクで見破る…

また塀を乗り越えようとしたのも捕まる…

Ｔ－８５０の探知能力で塀を越える時点て捕捉されるのだ……

つまりだ…１００％不法侵入は不可能だった…のだが…

流石、鎧依課長、やってくれて、

堂々と施設内にいた際に、御用となったらしい…

「でもなぁ…帝国さんなら、わざわざ諜報員を派遣しなくとも良いのに…」

［どうするの？］

「……いいやパスあげちゃえ。一般職員レベルで」

ゴラァ…いいんかいそれで……

［わかった～…娘さんに会いに来たのかな？］

「ん？娘？」

［うん、５月に訓練評定落ちた、２０７小隊のＢ分隊にいるね］

「ほ～」

［しかもそのＢ分隊、面白い顔ぶれ］

「ほ～」

［殿下の双子の妹さんとか］

「殿下の？」

［記録みてみるとまたまた面白い…影武者みたいだね］

「ふむふむ」

［あとは、現首相の娘さんとか、あ～投獄……人身御供か…された中将の娘さんとか］

「人身御供？物騒だなぁ…なにがあったんだ？」

［避難民を守る為に命令に背いて、
国連だけど、主にアメリカが引き渡し要求、証言強要させる気満々
だったみたいね。

で、国内処分になんとかして、
それでもアメリカがいちゃもんつけ、結局敵前逃亡罪で投獄された…

その当時はアメリカとの同盟頼みだったからね～
けど結局は、京都強襲後アメリカは同盟解消、
後に、明星作戦でG弾の実戦試し撃ち
全ては、G弾の為に丁度よかった人だったね］

「G弾の為に利用されたか…」

［みたいね～…であとは国連事務次官の娘さんと］

「なんか身分だけ見ると…大層な人達の関係者が……」

［合格させたくない意図はあるみたいだね］

「成る程…」

［日本が落ちても大丈夫なように…もしもの為の人達のグループね］

「ふむふむ…じゃあＢ分隊分のは」

［必要ないね～］

「だな…来年度まではＡ－０１は、１４機って事か」

「１４機？…ああ、１０月ころに上がってくる新任のね」

石橋が唐突に……

「おぅ♪」

「よっす♪」

「やけにご機嫌だなぁ」

「まぁねぇ～」

「そうそう、機体にはもうなれた？」

「ええ、１番乗ってるんだもん♪」

「だよなぁ～けどイッシーと出会って約２ヶ月か…」

「ほんと、あの時はありがとうね…錯乱もしちゃったけど…」

「いや、いいよ」

「うん……」

……

「ところでイッシー…なんかようあったん？」

「様子見にきただけ～」

「ん…わかった…じゃあこっちの方すすめなきゃ…Ｂ－０１だなぁ…」

「そういえば新しい機体になってから、Ｂ－０１の人達と訓練してないんだけど…人数も増えたのよね？」

「ああ、２８人にな」

「あたし達よりか多い……」

「まぁスカウト方法が違うからなぁ……」

「確か、死ぬ運命の人達だっけ?テストパイロットの二人の腕は認めるけど…強いの?」

「ああ、リストからは殆どが、テストパイロット達だからな…多分強いぞ」

「今度演習お願いして見ようかしら?」

「機体特質がそもそも違うからなぁ……まぁ話しとくわ」

「部隊内だとね～」

そうはなしながらＢ－０１のデーターを開いている。

(確か尉官の人いたと思ったけど……

あれ？全員少尉か？）

「けど…カオル…なんで女性ばっかりスカウトなの？」

「……わからないなぁ…何故だか？」

「……まぁ良いけど」

（？…なんか急に気温下がった？）

「あ！！成る程……新隊長選出の為に模擬リーグ戦かぁ…」

カオルは報告書をみつけた。

「隊長まだ決まってなかったの？」

「ん～少隊長経験者は何人かいる…みたいだけど、
中隊、大隊規模はいないみたいだね…
だからか…」

（ヤザンとかでも少隊長だったしなぁ…）

「ふーん……面白い事してるのねぇ…隊長の席を模擬戦でか……
こっちはそうはいかないよねぇ」

「まぁ何しろ新設だから勝手が違うと思いなよ」

「うん」

（ん～大隊～連隊規模の侵攻なら、連れて行きたいなぁ…が展開速度か…ベースジャバー量産かな？）

マッハ０．８３まで、でる二人乗りのホバークラフトだ。

「ん？今度は何みてるの？」

「ああ、ＳＦＳ、ＭＳのサブフライトシステムさ…こいつはベースジャバー。
二機乗りながらマッハ０．８３まで出せるホバークラフト。
一応長距離移動の際の休憩所付きだよ」

「マッハ０．８３？機体乗りながら？凄いんじゃない？」

「あとは、音速超えできるＳＦＳか……」

常識的に考えてみよう…全身で音速の衝撃波を受けると……ねぇ…

「うんだから、筒状というか、戦術機をソニックブームから守るＳＦＳ考えてるよ…かブースター？」

「カオル誰と話してるの？」

「いや地の文と…まぁ後回し、先に燃料の問題だな…」

カオルはそういうと、大隊から連隊規模の侵攻監視、
それに介入の要望の旨を関係各所に連絡するようにと１１号に伝えた…

「じゃあそろそろガンダムの世界にいってくるよ」

「あ、いってらっしゃい」

「１１号よろしくな……”世界扉”」

行き先思い浮かべながら飛ぶ
００７９１０２６北米　機動戦士ガンダム、オデッサ攻略の為の陽動作戦が開始された直後である……

……
カオル報告

ミッション痴漢退治請け負いました。

ミッションリサイクル進行中です。

第５４話　７月１３日　投稿日２０１１０１２７（後書き）

作者「あらたなフラグたったね…痴漢退治か…」

カオル「作者痴漢された事は？」

作者「あるわけないだろ男だし痴女なんか都市伝説だよ
痴漢捕まえた事はあったなぁ～」

カオル「お、参考に聞かせて」

作者「埼京線って池袋ー赤羽間はかなり混むのしってるよな？」

カオル「うんうん朝は特にね」

作者「で、コンサートの帰りだったから、２２時くらいだったんだよ…まぁまぁ空いてる動きとれなくはない…状態」

カオル「うんうん」

作者「で、いやに体押し付けてくんなぁ…酔っ払いか？と思って文

句いうために振り返ったら…
女性の体の前に後ろの男の手がのびてまさぐってたんさ」

カオル「へぇ～」

作者「で、てめーなにやってんだ!!で怒鳴りちらして、
十条で逃げようとしたとこで後ろからむんずと捕まえた…つうわけ」

カオル「それから?」

作者「まぁ赤羽に交番あるの知ってたし、赤羽の交番に突き出すけど、それでいい?と女性に確認とって、
赤羽でそのまま力付くでヘッドロック状態だったな…で引きずりだし、
エスカレーターでそのまま東口交番まで連行。
改札のひとには、痴漢なんで交番に突き出しますからで、通ったね」

カオル「で?」

作者「逮捕者だから、俺も警察署まで付き合って、調書つくるのに、
3時間近くかかったね～
…勿論終電なくなってたよ…
で、何故か、逮捕者でなく、逮捕協力者になって、
捜査協力費3000円貰って、警察の覆面パトカーで、家まで送っ

てもらったわけ」

カオル「で、なんかあった？」

作者「なに、電車男みたいのを想像してんだよ…そんなうまい話ないよ。そこでおしまいっうわけだ」

カオル「え～……」

作者「まぁ、覆面パトカー乗れたのと、時間×１０００円の捜査協力費、とかいい経験になったさ。
覆面パトカーなんか、そうそうのれないしなぁ～♪
…あ、救急車は2回怪我と2回事故で計4回、消防車は…動いてるのなし、軍用車も動いてるのはない…な
朝霞駐屯地祭では乗れるみたいだが……」

カオル「作者色々な人生あるんだね…」

第５５話　再びガンダムへ　北米大陸編　投稿日２０１１０１２８

さて…　皆様はヘリウム３＝木星輸送船団、
は中立で条約により手出しできない…

ガンダムファンなら常識だと思いますが、
各陣営がヘリウム３を木星輸送船団から、買った後ってどうなるん
でしょうね？

まさか、輸送船団が直接相手方の本拠地へ輸送するのを、みすみす
見過ごす…
うんな状況なら木星輸送船団を、条約無視でも乗っ取り独占します
よね？
の独自見解から思いついたある１話です…

ｓｉｄｅ～ジオン軍ＭＳ乗り～

北米大陸にて、ヘリウム３輸送妨害任務をこなしている…グレン少
隊の一員だ…

条約により、カナダの木星輸送船団の基地につくまでは、妨害でき
ない…

が、基地から１００ｋｍ以遠については妨害できるようになる。
その１００ｋｍの円の外側から各連邦への基地への…
俺らはジャブローへ向かう輸送機を…というわけだ…

もっともサイド６に関しても本国側は同様なんだが……

そんな訳で、北米大陸に関してはジオンには、重要地域の一つであった…

（まだ来ないか……）

野営し始めて６日目…
カナダの木星輸送船団基地に、
サイド６からのヘリウム３輸送船がはいって一週間目だった…

カナダの基地にミデアが沢山向かってる情報が入ってる…

向かう途中を落としたり、また仲間が掃討されたりして、とにかく攻防が激しかった…

俺ら側から見れば、ヘリウム３を積んだミデアを落とせれば勝ち、
連邦側にしたら守りきれば勝ち…

偵察やら欺瞞やら乱戦模様になっている…

そんな戦場であった……

（当たりか…？）

そう思えるようになったのは、
頻繁に偵察行為がされるようになってきたからだ…

１５分に１回のペースで、偵察機が飛来してくる…

主機を落として尚且つカバーを被せ、寒い中僚機と共に潜んでいた…

「おい！！来たぞ！！」

相棒が声かけてきた…

見るとミデア２機編隊、セイバーフィッシュ２機、フライマンタ２機、
空を飛行している…

（まだまだ……もう少し……）

「行くぞ！！」

愛機のザクキャノンのコクピットに滑りこみ、ジュネレーター起動スイッチを押す。

ウィーーー

唸り始めるジュネレーター…ＯＳがチェックしはじめ、モニターが

シートからの隙間を映しだす。

起動スタンバイ、と同時にザクキャノンはシートを跳ね退け、

「イーヤッハー！！」

彼は打ち合わせ通り、対空弾をうちはなつ！！
１８０ｍｍキャノン、ビックガンが火をはなった！！

命中！ミデアが片翼が完全に壊れ、制御不能の錐揉み状態になって落ちてゆく、

相棒ももう一機を同様に打ち落とす…

彼等の必勝方法だった。ＭＳを搭載してようと、中では高Ｇにより出られず、そのまま輸送機と運命を共にする事になる…
伊達に、輸送機４０機以上落としているエースではなかった。

残りの飛行機楽勝…とかたずけると……

『なぁ…爆音上がったか？』

「いや、上がってない…よな」おかしい、あの状態なら、正面から落下し、
ジェット燃料に引火爆散する筈……

『生き残ったか？』

「かもな……けど飛び立てんだろ……敵ＭＳ隊が来る前に撤収だ！」

ザクキャノンはシートを剥ぎ取ると、一路カルフォルニァベースへと、
撤収していった…

ｓｉｄｅ～ジオン軍ＭＳ乗り～　ｅｎｄ
ｓｉｄｅ～ミデア機長～

（さて…無事に行けば良いけど）
彼女はミデア隊の分隊長だ…

このカナダの木星輸送船団基地へは、通称…地獄への片道切符…
初期の頃は輸送隊損耗率８０％を超えて、
今最近でもジオン側が重視してて、損耗率５０％…

つまり２便に１便は帰ってこれない…
そんな任務だった。

けど、何時かはお鉢が回ってくる…
損耗率以上にこの核融合の燃料である、ヘリウム３輸送任務は大切な事…

ジャブローも高空偵察、地上部隊を海を超えて派遣し、
偵察、攻戦をしてくれてはいるけど…

カナダ基地に輸送船がきてから、ジオン側も狡猾にミデアだけを狙ってくる…のが、損耗率５０％の訳だった…

「さぁ…行くわよ！！」

彼女のミデアは飛び立った……

今回の作戦は、カナダ基地に無事についたミデア２３機を2機ごとの組にわけ、
１１方面からジャブローに向け飛び立つ…

内、ヘリウム３輸送は６機…
残りは即応体制をとったジムや６１式タンク隊を搭乗させ、迎撃にあたる。

ジャブローが本気を出してきた作戦だ。

彼女達の隊の２機は、彼女のミデアにはジム隊、相方のミデアにはヘリウム３を…積んで一路ジャブローを目指してた。

『そこのミデア応答してくれ』

「あ、はいこちら１０５輸送大隊所属８分隊です」

『お～おねーちゃん達の護衛か、
こちら第１０２５航空大隊所属、マット・ブラン中尉だよろしくな～』

「こちらこそ、よろしくお願いします。
アンナ・クリント曹長です」

『少隊長！！彼女達べっぴんさんですよ、独り身なんだしデートに誘いましょうよ』

『馬鹿野郎！！オープンで喋るんじゃねぇ！！てめえ後で突撃隊長だ！！』

『隊長ずっこい！！』

（どうやら、任務成功できそうかしら？）

と思い始めてきた…

……3時間後

被害のみならず、消息を絶った分隊が出た…

襲撃を撃退できた分隊もでてきている状態だった…

『分隊長さん、固い固い、俺らがついてるんだせ～』

『そうっすよ隊長の持論は狙った獲物は逃さないでしたっけ？』

『うっせぇ！！』

（偵察をしつこくしてるから大丈夫だとは思うけど……）

『前方！！』

「え！？…キャアアアアー」

次の瞬間、機体に急激に引っ張られて…強力なGがかかる…

ひっしに立て直そうとするが、反応が鈍い…
『ちぃ……ウァ…』ボン！！

「ぶ…ぶん…た」

（もう駄目なのね…やりたかったなぁ…）

正面には地面が見え……

（あれ？？）
急にGが消えた……
それに視界がいきなり暗くなっている…
「う……分隊長…ここは？」

「え？？……さぁ？」

どこまでも続く暗さ…異様な景色だ…

『こ、コクピット……どうなった？』

「あ、カーゴ状況は？」

『重傷だらけだ…幸い命には大丈夫だがな』

『分隊長～あたし達』
僚機から通信だ…

「マーニャ！！そっちは？」

『なにがなんだか……消火装置が働いてはいますが…何処なんでしょう？ここは？』

「アイナ！動かないよ！」

「え？……なんで？？」

ペイロード２００ｔを誇るミデアが、
フルスロットルふかしているのに動かないのだ…

「マーニャ！そっちの機体は？」

『同じく……』

「カーゴ、誰か動かせない？」

『すまん…無理みたいだ…』

「無理って…とりあえずは大丈夫なのね？」

『ああ、折れたとかだけみたいね…』

「そう、もうちょっと我慢してね」

彼女は外にでる為のハッチを開こうとした…

「なんで??……マリ、緊急キットの中にバーナーあったでしょ？持ってきて！」

「は、はい！！」

次の瞬間！！

ｓｉｄｅ～ミデア機長～ｅｎｄ

カオルは世界扉をでると、消してナビ端末を出した。

今回の目的はミデアと燃料ちょっぱりと資材だったので、ヨーロッパ地区でなく、北米大陸にきてたのだ…

宇宙歴００７９、１０月２５日…

この日付はオデッサ反攻作戦の予備段階、陽動部隊を派遣しはじめた日だ…

なのでうまくいきゃあミデアがゲットできるかなぁ？とおもいつつ、
前回廃材を取得したオデッサをさけつつ、
北米大陸にきてた…

北米はジオンの重要拠点の一つで、日夜攻防が繰り広げられてたからだ…

（あと取得できそうなのがアフリカ戦線、
地球衛星軌道上、サイド1と4、2と6、ソロモン戦後とア・バオアクーか…）

全部行く気？？

「だよ…足らなくなったし…
まぁちょくちょくきて帰るの繰り返しになるかなぁ…
今回のミデア以外は特には…だし、
サイコミュ専用機は使える人いないだろうし……
あ、そういえば、ザクスナか…」

ザクスナ、カルフォルニァベースで現地製造だよね…

「フワジャンして蒸発させる…絆でやったなぁ～♪…ゲルJも良いけど…
マカクは流石に機体数から厳しいかと思うけど…
どこにの明確設定がないし……
けど絆引退したからなぁ……」

まぁ良いからさっさと進行！

「へーい」

『ミデア何処にいる？』

A『ミデアとは？』

『脱着式の懸垂コンテナをもつ輸送機、機体色イエロー』

『ただ今検索中』

でもさ、マチルダ狙ったほうが？

「マチルダさんは今オデッサ辺りだから…向こうじゃ資材集められないし～」

だよな。

A『当該機種この近辺に2機飛行機中です。ナビしますか？Y／N』

『Y』

ルートがでたので、

「シャムシェル”幻影”」

一路ナビ通りに飛び立つ…

途中残骸があったのでもちろん回収。

しばらく行くと……

（お…あれか……）

ミデア2機、セイバーフィッシュ2機、フライマンタ2機に護衛されながら飛んでいた…

（直線飛行か…さっさと取り付きますか♪）

ミデアに近づくと…

ドン！！の音とともに…片翼がもぎれ回転しながら落下するミデア…

（ザクキャノンよけーな事すんな！！）

「”加速”」

重力に引かれながら、揚力を失ったミデアが真っ逆さまに落下していく…

ミデアを追い越すと…落下方向で……

（あ～これ爆散か…なら）

虚数空間に物質固定で引き込んだ…

もう一機も…同じ運命っぽいので、落下地点で同じく爆散前に引き込む。

空は…護衛４機とも…黒煙のこして跡形もなかった……

（少し離れるか……）

移動し、端末で付近５０ｋｍ以内に熱源反応ないのを確認すると……

ミデアを2機だした…

（ん～ハッチは何処だ??）

コクピットをのぞいてみる……

（へぇ女性パイロットか…あ、）

乗務員ハッチが開き…

「ちょっと…どうなってるのよ…これ……」

と女性兵士が話しかけてくる…

「とりあえず説明しますので、降りてもらいます？
あと見つかると面倒なので隠しますから…」

「え、ええ……マリ、マーニャにも言っといて…あと緊急キットも…」

マリ「はい！」

彼女はタラップを下ろすと、機体から降りてきた……

するとコンテナの方へ向かう…

向こうの機体から2名降りてきたので、声をかけに…

「そちらの機体はもう人は乗ってませんか？」

「え、ええ…」

「じゃあ、隠しちゃいますね」

虚数空間に引き込んだ。

「え？……あの…なにが？」

機体のあった場所に駆け寄るが…勿論なく…混乱しているようだ…

「とりあえず後で説明しますよ、ご一緒に～」

とコンテナの方へゆく…

コンテナ内部から呻き声が聞こえ……

「マリ！モルヒネ！！あと、止血できるのをなにか！！」

中を見ると……血だらけだった……

「なにが重傷よ！！馬鹿！！」

「は、はは……」

女性兵士3名が、瀕死だろ…うになっていた…

固定を外れたジムピストルが暴れたらしい…、

で、コクピット外にいた兵士3名を襲った…ということだった…

カオル「ちょっと見せてもらいます？」

最初の人「なに？邪魔しないで！！」

カオル「……あなたに助けられそうですか??」

最初の人「……モルヒネ位しか…」

カオル「じゃあ自分がしますので…」

と医療カプセルを虚数空間からだす。

「え?何処から?」

「いいから邪魔しない…」

それぞれ3名を医療カプセルに入れ、スイッチ、ロックをかけ、虚数空間に入れる。

カオル「じゃあ機体隠しますので、一回外に出ますか…」

最初の「ええ…」

と外に促した。

外に出たところで虚数空間に引き込んだ…

女性兵士４名が互いに無事を確認しあって…

「で、すんません、本来なら墜落し、死ぬ運命だった、貴女方を異世界の戦力として、スカウトしたいんすが、どうっすか？」

「はぁ？」「え？」「……」「何いって？」

「まぁ、詳しい事は後程で事実だけ再確認させて下さい。まず、貴女方は正面から墜落し、死ぬ運命だった…間違いないですよね？」

考えこんでる……が一応は納得したようだ…

「で、貴女方は二つの方法を選べますので、まずはスカウトを受けるか、または今の辺りの記憶を消去し、近くの町で放流されるか…です。詳しくはシェルター内の案内ＤＶＤを見て下さい…受けるか受けないかは、一日後に聞きます」

「あ、あの～私達の乗ってたミデアは？」

「ああ、俺が爆散する運命助けたので貰うつもりなんすが…」

「な！！」「貴様！」

「あ、ちなみに異世界からきたので、ジオンとか関係ありません。
まぁ詳しくはシェルター内で見てください…なので、そこ、弾切れまで撃たない…」

「な、なんなのあんたは？」
ＡＴフィールドが展開し、弾を全て弾いてた……

「ＤＶＤを見ればわかりますよ♪じゃあ、一日後に～」

で、シェルター内に４名様ご案内する。

（さてと……次～）

なぁカオル…今のでスカウトできると思う？

「ん？作者、できればラッキーでしょ…
正直ね…けど目的のミデアは入手したし♪」

……わかったｏｒｚ…　設定考えてたのになぁ……

「はい、次行くぅ～」

なんでオメーがせかしてんだよ……まぁ話すすめんぞ…

カオルは残骸を集めながら、カルフォルニアベースへと向かう…

（ザクスナ、ザクスナ～♪）

二日目…

カオル、途中で墜落炎上する機体を拾ったり、かなりの量をげっとできた…ので、
日付がかわり、夕方頃にやっと、カルフォルニアベースについた…

そして、
（あれがか……）
カオル、目がキラキラ輝いている。

そこには旧ザクから改装された、
ザクスナイパーが警邏にあたっていたからだ…

趣味に走ったカオルは、
取り付き、同化、解除し勿論ゲットして…

帰る前の準備にかかる……

……
カオル報告

ミデア修繕可能2機

ザクスナ機体情報ゲット

その他残骸多数

第５５話　再びガンダムへ　北米大陸編　投稿日２０１１０１２８（後書き）

カオル「～♪」

作者「じょうきげんだなぁ……」

カオル「まぁね～目的のミデアがゲットできたし」

作者「懸垂式コンテナだよな…あれは確かに便利だ」

カオル「あと、ガンダム時代でゲットしたいのはビグロや、モビルダイバー、ビグラング、ビグザムか、パブリクかな…？
それ以外はＮＴ専用だし…」

作者「欲張りだなぁ…」

カオル「あんかがねｗ」

作者「まぁそれはよいとして…重大な事か…」

カオル「ん？」

作者「ミデアの乗務員ハッチって…コクピット横でよかったんだよね？？」

カオル「……さぁ？」

作者「ん～～～……」

悩み続ける作者だった…

第５６話　ＤＶＤの内容　途中グロあり　投稿日２０１１０１２９

「わかったわ、スカウト受けます」

「本当っすか～ありがとうございます」

「まぁ、あんなの見せられたらどうにかしてやるか…だろ…軍人だったらなぁ…」

「あのＤＶＤ反則！」

「……まぁ…っすね…」

さて、グロテスクな内容にもなる……
作者がうまく表現できるかわからないＤＶＤの内容、及びそれをみた４人の反応をお見せ致しましょう…

ちなみにこのＤＶＤの出元は、各放送局のマスターテープや、諜報機関等から、ヤドカリがハッキングし拾ったと思って下さい…

一般の人にはとても見せられない映像が含まれています……

作注ですが、今までの話の中で1番グロテスクさを出してます…
苦手な方はこの話の後書きのみを見てください…
要約させてます。

この話のみ、本編との時間は殆ど進んでません。

＝＝シェルター内＝＝

「たく、あのひょひょろ!!なんなんだ??……うわ!!」

いきなり映像が流れ始める…
そうシェルターに網膜投射システムが備わっていて、人数分流れるようになっているのだ……

案内人だろう、執事姿の老人が映ってる…
「この映像はスカウト対象者にご説明するものとなっております。
注意事項を説明しますので必ず守って下さい…
むやみに映像中には動かないで下さい。
気分が悪くなりましたら机の上にあるビニール袋をお使い下さい…
というか、携帯してて下さい。途中ショキングな映像ながれＰＴＳＤになりかねる恐れありますが、大丈夫です。
当シェルターは医療設備もそなわってますのでご安心を…
この映像は２００１年7月8日作成となってます」

で一回映像が消える…

「な、なんだったんだ?」「……さぁ?」「このビニール?」「不

思議ね～」

注意事項通りに体が動いた…

（なんで？）

誘導催眠を入れてるからだ……

しばらくすると映像が再開される。

「では、あなた方に助けて頂きたい、異世界についてご説明します。事の始まりは、
西暦１９５８年、火星にて宇宙生物発見からでした…この時点では、まだ敵対となる存在とわかってませんでしたが、後に、人類の天敵…通称ＢＥＴＡの確認でした…」

「西暦か…大分過去の話だなぁ…けど異世界か…」そう呟いているマリア…

説明は続く

「そして１９６７年、月面サクロボスコクレーターにおいて、ＢＥＴＡとの初接触、通信をおくると……その後は途絶えました…つまり調査チームは惨殺されたのです。
人類はプラトー1基地を設営していました…そして、ＢＥＴＡとの戦争が始まりました…今も続いてます。人類の生き残りをかけて…」

「人類の生き残り？」「まさか…」「…え？」

「さて、その後の歴史を説明いたします…
１９７３年４月１９日地球の中国のカシュガルにＢＥＴＡの生産基地となるハイブが落着、作られました…
西暦をご存知の皆様だと航空戦力で爆撃したら楽勝じゃん…と、思いでしょう…

が、後程説明入りますが、光線級の存在により、
航空戦力は無力化され、人類は海上、陸上戦力でしか、戦わざるえなくなりました…」

「西暦であの辺りのタンクって紙装甲だよな…」「だと思う…」

「そして、当時の中国はソ連に助けを求め共同作戦をとりますが、ＢＥＴＡの物量に押し負け、そして、とうとう戦術核を使います…が、すでに時遅く、実質的効果はありえませんでした…」

「核で？」「…その当時なら今よりか弱いかもしれないけど…」「おいおい…」

「そして、地球にハイブが作られた事を受け、月面基地を放棄…月はＢＥＴＡの完全勢力下におかれるようになりました…」
「１９７４年７月４日、カナダのアサバスカにハイブユニット落着、アメリカは、即座に戦術核の集中運用により、ハイブは残骸となりましたが、
カナダの半分の核汚染と引き換えになりました…」

「半分と引き換えか…」「でもまだ１９７４だよ」

映像は球体地球地図にかわり、ＢＥＴＡ勢力範囲がうす赤で表示される…

「赤い範囲がＢＥＴＡの勢力圏となります。
その後は、Ｈ６エキバストゥズ、
１９７８年ユーラシア北西部から人類が追い出される、
１９８１年、フィンランド、ロヴァニエミにＨ８ハイブ建設、
１９８３年、ベルリン陥落、
１９８４年アンバールにＨ９ハイブ建設、
同年、ノギンスクにＨ１０ハイブ建設、
１９８５年西ドイツ、フランスが相次いで陥落、以後、イギリス本土攻防戦が始まります」

「１１年で…フランスまで人類いなくなるって……」

「１９８７年、難民の欧州脱出の為、ポルトガルに踏み止まっていたが、
本格的な西進に耐え切れず瓦解、
１９８９年アラビア半島での戦闘激化、
１９９０年、ユーラシア北東部、東アジア、東南アジアが主戦場になります。
１９９３年ＢＥＴＡヨーロッパ大陸を完全制圧、
１９９４年ＢＥＴＡインド亜大陸制圧、
１９９７年ＢＥＴＡアラビア半島制圧、
１９９８年ＢＥＴＡ朝鮮半島制圧、
同年日本上陸し、佐渡島にＨ２１ハイブ建設、
続いて、横浜にＨ２２ハイブ建設しました」

「は・は・は…陸上の半分以上かよ…」

「そして、１９９９年８月、戦略核以上の被害重力偏差をだす、２発Ｇ弾により、人類は初のハイブ攻略となり横浜だけは奪回できました。
しかし、被害により辺りは人のすめない土地となったのです」

「そして２００１年７月現在が、有望なあなた方をスカウトしたい、時系列となります…
また、人類の総人口は１９７２年の４６億人から、ＢＥＴＡに殺され続けて、２００１年では１０億人となっています」

「さて、ＢＥＴＡとは何か?、人類の対抗手段は?
またあなた達の所属してほしい異世界軍とは何かに移ります」

「なお、ここからショッキングな映像でます、袋の準備はよろしいでしょうか?……
よろしいですね?ではどうぞ……」

「広島放送、坂木です!!
昨日より九州を上陸したＢＥＴＡは猛攻をかけ、西日本各地域を蹂躙しつつあります。
私達もこの放送が終わり次第避難し」

「キャー!!」
カメラがそっちに向く…

戦車級が一体見えた…
「おいやばいぞ…」

「ああ…」
多分ＡＤとカメラマンだろう

「坂木さん撤収しま…」
カメラがそっち向くと…
メリメリメリ

頭半分がなくなり、
頭下半分から脳みそや目玉付きの筋肉がでろんとのびていて、
口は筋肉がなくなった為かだらし無く開けっ放され、
また血がダラダラと流れ落ちている…

兵士級に捕まれ、咀嚼されている女性アナウンサーがいた…

「ひ！！」

カメラがガチャンと落ちる…
一緒の方向に逃げてくＡＤとカメラマン…

しかし、ＡＤは闘士級の長い鼻に跳ね飛ばされカメラのすぐそばまで飛ばされた…

奥では兵士級に捕まり、必死に逃げようと抵抗しながらも…
生きたまま正面の顔面からガブリ…
やはり頭半分から食べられ、ピンク色の脳みそが、滑り…ぺちゃりとアスファルトに落ちる…

そして、大きな口は、首下まで食べ、首の血管部分から血がダラダラ落ちる…

兵士級は、手を持ち替えると、胸、腹上と続き、腸がだらし無く出はじめる…

画面手前では奇跡的に生きていたのだろう、呻き声がする…
そして、戦車級が大きな口をＡＤにちかづけ、
バリメリグチャグチャ
「ギャーーー」
悲鳴をあげる。
ＡＤは生きながら下半身を食べられ、痛みにより悶絶している…
なんとか逃げようと手を動かしているが……
人間下半身を失ってもまだいきている事ができている…
が、カメラに映っているＡＤは地獄の思いだろう……

そして、血まみれの大きな口がきて…もうひとかみ…
バリバリ

ＡＤは首切断され、頭を残して食べられる…
彼の顔は、まさに…恐怖や痛みの状態で食べられたのを物語っていた…
まだピクピクとまぶたが反応している……

そして戦車級の大きな血まみれの口があーんとあけられる…
口の中のが見え、…髪が何色かみえる…そして歯の奥には、目玉がでろん。
次の瞬間、ＡＤの首は、大きな戦車級の口の中に…
クチャクチャ……

カメラはまだ電波を送り続けている……

付近では大きな悲鳴、助けて～の叫び声、断末魔…

戦車級は次の獲物を求め…画面から外れていく…

その奥では兵士級が足を食べ終わって、
やはり次の獲物を探して移動する…

以上で中継映像が切り替わる…

その間２人の女性兵士は吐いていた……

「何？なんなの？」「凄惨な…」

「これは、実際的に１９９８年、広島放送がとり、電波にのりながらも、放映されず、悲しい出来事となりました…

このように、ＢＥＴＡは小型級は、大きな口でもって人間を食す事が確認できてます。

さて天敵ＢＥＴＡの紹介となります」

「ちっと休ませてよ…」「まだ気持ち悪い…」

「まずは、兵士級、先程の映像にも流れましたが、全高２．３ｍ、

口が特長です。
この兵士級は捕獲または、
捕食した人間を再利用して作られてます」

「さっきの元人間なのかよ……」

「つづいて先程の映像で流れた長い鼻が特長的である、闘士級、全高２．５ｍ、
特長の長い鼻は跳ね飛ばすだけでなく、人間の首を軽く引き抜きます」

「続きまして先程の映像でもっとも大きな口の戦車級、
後程紹介しますが、１８ｍもある戦術機の装甲もかみ砕かれ、
パイロットである衛士を１番生きながら咀嚼しています」

「……コクピットの中で生きたまま……」

「続きまして、要撃級…、高さは１２ｍですが、幅２８ｍ、長さ１９ｍ、
特長的としまして、ダイヤモンド以上の高度をもつ前腕が特長的です」

「……なんかこれも生きながら、食われそう……」

「続きまして、突撃級…全長１８ｍ全幅１７ｍ全高１６ｍ
ダイヤモンドより固い前面装甲が特長てきで、その固い前面装甲、
時速１７０ｋｍものスピードでもってＢＥＴＡ群の前衛的存在です。
またそのスピードでもっての突撃による破壊力は強大です」

「１７０ｋｍで跳ね飛ばされるの？……」

「次に、要塞級、全長５２ｍ全幅３７ｍ全高６６ｍの巨体を誇ります。
１０本の足をもち、また防御もあり、先端がかぎつめになっている触覚もあり死角はありません。
まさに要塞というべきでしょう…
また体内に小型級が潜んでいる場合があります」

「なんか、串刺しされそう…」

「次にこいつらのせいで、制空権がなくなった存在です
まずは、光線級…
全長１．２ｍ全幅１．６ｍ全高３ｍ
小柄ながら、かなりの命中を誇る生体ビームをはなち、
高度１万ｍを飛行するものに対して、有効射程距離は３０ｋｍ…照射インターバルは１２秒、また味方をけして誤射しません」

「次に重光線級…
全長１５ｍ全幅１１ｍ全高２１ｍ
この瞳から放たれる生体レーザーは出力が高く、高度５００ｍの飛行体に対しても有効距離１００ｋｍ以上を誇ります。
理論上は地平線による阻害がないかぎり、有効射程は限りない…のですが、地表より２００ｋｍ以上の熱圏層以上の高度には反応しません」

「次にレアモノといって良いのを紹介します…まずは母艦級全長１８００ｍ全幅１７６ｍ全高１７６ｍ」
映像がないため、イラスト画像になる…

「現物がまだ人類の前に出てない為イラスト画像での紹介で失礼します。
この巨大なミミズというべき巨体は、
はっきりいってトンネル掘削機です。また体内に多数のＢＥＴＡがいると思って下さい」

「最後に頭脳級と重頭脳級です。」
重頭脳級のみイラスト、頭脳級は横浜基地地下のやつ…

「各ハイブの地下にいる、ＢＥＴＡのエネルギー源、また司令官たる存在です。
重頭脳級は、上位存在たるもので、各頭脳級からの情報を吸い上げ、対策を行う司令塔と言えます。その司令塔を倒せば、各ＢＥＴＡは指示が行かなくなるとも言えます」

「次に我が主、渚カオルがこの世界に来るまでの人類の対抗兵器たる戦術機の紹介です…
月面戦争での宇宙服強化装甲が元で発展、開発された、戦術歩行戦闘機になります。」
ハーディマンから、Ｆ－４、Ｆ－１５、不知火等の動いてたり、射撃…はたまたＢＥＴＡと実際に戦っている映像とともに…すすむ。

「１９８０年代にしたら異様な発展みたいね…」
「戦争が発展産むだろ？」

「うん…」

「光線級の登場により、無力化された航空兵力の空洞をうめ、対ＢＥＴＡの最終局面、すなわちハイブ攻略における決戦兵器として開発された人類の刃です。
現用の対ＢＥＴＡでの通常戦闘での主役を勤めています。
ですが、異世界軍が設立せざるえない状態になったように、この戦術機は、いくたの問題点があります為、押し戻す事ができなくなっています…」

食い破られ無残な姿をさらすＦ－４やＦ１５…
「まずは、
出力…主機をバッテリーや電池による電力に頼りきっている事…
装甲…そのために重装甲に発展できない点…戦車級にたかられ食い破られる機体が殆どとなっています。」

映像は演習中硬直をさらし、ペイント弾を打ち込まれる撃震。
「機動…その為に避ける事を主眼となり発展していきましたが、ＯＳやＣＰＵが発展できず、硬直等を産む状態となっていました…」

「西暦だから無理があるのね……」

「最後に、皆様がたのスカウトし、ＢＥＴＡを駆逐し、戦力としてなりたちたい、異世界軍の紹介です…

この世界固有の戦力では、１０の３７乗にもおよぶＢＥＴＡの指揮官というべき、上位存在の駆逐は、到底果たせない…と見えます…
地球以外でも、月、火星や、それ以外の天体にもいる数です。

ですので、各世界を周り、技術吸収、資源調達等を行い残された人類を救うべく、思い始めたのが最初です…

あなた方の異世界の技術はとても有効であり、効果が望める為、積極的にこれからもいれる予定となっています。

まずは宇宙世紀とよばれる、世界から仕入れた、
ルナチタニウム合金の紹介です。」
映像が陸戦型ジムを写す。
「あ、陸ジム…」
画面が、腕の装甲に拡大し、断面図となる。

「こちらの合金は、戦術機に使われている装甲より、遥かに強靭で、
光線級のビームを受けたり、
戦車級の噛み付き、
また要撃級の殴り等に堪えられるようになっています」
映像が、第17話での、魔改造撃震2001年5月21日の間引き作戦中の、
戦車級にたかられたり、要撃級に殴られて耐えている、
また光線級のビーム受け耐えるのシーンが流れる…

「またそれ以外の世界にも有用な技術は多数あり、
地球人類対木星人類との戦争の世界からは、
ワームホール技術」第27話のチューリップを見せているシーンが流れる

「その世界の機動兵器」
コバッタが取り付いて、ＤＦで岩を砕くシーンが流れる…
また、ガンパレードの世界での剣無双をする栄光号１号機が流れる…
「また、現地戦力の強化等もあります」
元の不知火から、魔改造された不知火の映像がながれる。
Ａ－０１の演習シーンだ。
「異世界軍の保有戦力ですが…２００１年７月８日現在、無人機による陸戦強襲型ガンタンク機２０２機」
２００１年７月５日の、佐渡島間引き作戦の映像がながれる…
「ザメル増強中で、８０機になる予定です」同じく佐渡島での３０機による一斉砲撃の迫力あるシーンが流れる。
「また有人機については魔改造ドム２８機」
スペック、演習シーンが流れる…
金色が眩しい…
「また宇宙空間は安全ですので、スペースコロニーを使った、避難民の保護、宇宙軍の設立」スペースコロニーや、
サラミス、ムサイ、マゼラン…

また後期型から発進するネモ、ザク改、セイバーフィッシュが流れる。

「等があります」

カオルの登場。

「最後に改めて、人類の絶望から、この世界を救いたく、俺自身は、異世界軍をつくり、ＢＥＴＡを駆逐したいと思いました…皆様方の力…少しでも拝借したいと思ってます。できれば、恥をさらしますが、貸して下さい」

と、深々と土下座をするカオル。

「自分の異能力、また最新の異世界の技術を注ぎ込む…っていいっていいかも知れません…ＢＥＴＡが成長しないよう、自重の範囲内で……ですので人類絶滅からすくう為、力を貸して下さい…お願いします！！」

映像は、そこにて終了となる……

「……どうすんの？」

「あたしは、加わっても良いかな…って」

「マリ！？……そうね」

「異世界の力でＢＥＴＡを駆逐するか…」

「あたしらの世界はさ、人間通しが戦ってたけど、今回の世界はさ、化け物あいてじゃん…ね」

「良いかもね」

「アンナ」

「敵でも直接殺せないから、わたしは輸送機パイロットとなったんだし…」

「ああ、あの時ね…」

「あたしも加わっても良いかなぁと思ってる」

「……しょうがないわね…付き合ってあげるわ」

「じゃあ、みんな、加わるでいいのね？」

3人が互いにうなづく

そして……

第５６話　ＤＶＤの内容　途中グロあり　投稿日２０１１０１２９（後書き）

作者「えっと、説明します。これはＭｕｖ－Ｌｕｖの世界に来るための覚悟というか真実を見せる為に、異世界の人向けに見せる内容の回となっています。あんまり時間を進めませんので、グロイ描写が苦手な方はこの話は飛ばして下さい。

一応流れる映像の説明は、まずＭｕｖ－ＬｕｖのＢＥＴＡ進行の歴史、で、グロイ描写の中継シーン、ＢＥＴＡの説明、戦術機の説明、異世界軍の説明、ラストに協力の訴えかけ…となってます」

カオル「なぁ…中継シーン削除しても…」

作者「真実を説明して、納得させるにはこういった映像が一番だろ…ありえる事だろうし、マスコミならさ…」

カオル「ん～……」

作者「それに2周目武ちゃんもこういった場面みて逃げ出したんだし…」

カオル「まりもちゃんのね」

作者「まぁあのアナはＲ１８版の、まりもちゃんの描写を流用したといっていいね…で、それ以外の二人はオリジナル」

まりも「……あたしこんな事なったんですね…」

作者「うわ……安心して、絶対にそんな事させないから…まりもちゃん」

まりも「はい、作者さんを信じます」

作者は全年齢版でなくＲ１８版をもってます。
あの描写があって、何回変えたいか…と思い色々選択肢を変えたんすけどね……

第５７話　ミデア取得後の帰還処理のひとこま　投稿日２０１１０１３０

「まぁ、あんなの見せられたらどうにかしてやるか…だろ…軍人だったらなぁ…」

「あのＤＶＤ反則！」

「……まぁ…っすね…」

の、５６話の直後の時間より始まります。

「わかりました…歓迎致します。じゃあ、とりあえず自分の基地に戻りましょう…〝世界扉〟」

シェルターをしまう。

「この穴みたいのをくぐると、あなたがいる世界にいくのね？」

「はい」

４人お互いに頷き、世界扉を潜った…俺も続いて潜る…

＝＝Ｂ５５ハンガー＝＝
２００１年７月１４日深夜…
でると扉を消す。

「２５号～」

［マスターお帰りなさい」］

「スカウトした４名の案内よろしく……
と、こちらは深夜ですので時間ならす為に、明日朝まで休んでいてください。
詳しい配置等は明日お話しましょう」

ついていく４名…

２００１年７月１５日朝

救助した瀕死の３名は順調に回復中だ…
医局の空いてるのと交換しておいた。

回復したら、ＤＶＤルームでの説明、意思の確認やっておくようにと２５号に頼んでおく。

２５号…新人やスカウト案内担当だな…

そのまま加わるならそれでよし、

加わらないなら記憶を消し、送り帰す。
だね。

回収した廃材を放出、
ミデアの修繕作業を戦艦ドックで行う事にした…

完成しているメデューシンの横のドックに出す。

まずは一機目……
（あ、コンテナ内が血だらけか……）

空いているコバッタに清掃作業を頼む…

（これの積み荷は…ジム3機か…）

それぞれのコクピットを確認し、私物を回収して、
忘れものなさそうなので、再チェック後、解体に回す。

（コンテナ内は……）

ビームピストルが暴れた跡があるが、直せない事はなさそうなので…
同化し、修繕した…

（固定が甘かったのか…）
固定具を強化…

ＭＳ搬送用コンテナを確保した。
機体情報ゲット

コバッタはまだ清掃作業中だ…

（じゃあ、折れた翼かな…）

資材を少し使い、片側と同様に修復。

ついでに魔改造…
ガルダ参考に、熱核ジェット、スクラムジェットエンジンに変更。

主機搭載し、燃料タンクオミット。

推進材タンクはそのまま残す。

材質もルナチタニウム合金に変更～

（ん……２５号と新人４名か…）

同化解除して機体の上にでる。

「おはようございます～よく寝れました？」

「はい」「ふかふか過ぎてすこし」「シャワーのみでお風呂ないけど？」「気持ちよく」

「あ～お風呂は大浴場をでしたのでオミットしたんすよ…２５号説明は？」

［あんな深夜じゃできないよ］

「あとで案内させます…と、自己紹介がまだでしたね…渚カオルです。この異世界軍の責任者であり、大将になってます」

「将官に向かって～敬礼！！」
大将に反応した、軍人のさがみたいで敬礼する彼女ら…

「あ～いいっすよ…責任者っう事だけで気楽にいきましょう」

「……つい……わかりました、そういった事でしたら…」

「で自己紹介お願いできます？」

「はい。私はアンナ・クリント曹長です。当輸送分隊の分隊長をつとめていました…１号機機長です」
髪は肩までのストレート…綺麗な黒髪であった。

「私は、１号機副機長のマリ・クリント軍曹です。姉のサブをこなしてます」

「姉妹で？」

「「はい！！」」

実は後で知るのだが、養子だったのだ……

「二番機機長をつとめています、マーニャ・坂本曹長です」

「ハーフ？」

「ええ、父が日本人でした…ですがコロニー落としで死亡したので…」

「……」

「私も……です、あ、ミキ・インフィニです。副機長をつとめていました！階級は伍長です」

「わかりました…と、とりあえず全員少尉待遇でお願いしましね」

「え？士官に？？」

「まぁ…パイロットにあわせてになりますが…で、こいつでなく、向こうのデカブツの乗組員になってほしいかなぁ…っと」

「……でかいですね……」

「元の名前は、強救戦艦メデューシン…最前線にて医療を行う病院船です…
改造を施して、乗客５０００人越えるものとなってます」

「ＤＶＤでみたのですが光線級は？」

「まぁ避難民の移送目的ですので、防御は施しました…
ＤＦまぁ通称バリアですが、やガンダリウムγ合金等…
ですが、できるだけ低空でお願いしますね」

「…わかりました」

「このメデューシンに乗った乗客が、順次、スペースコロニーへと、移動してもらう形になります…地球奪回までは……
その重要な任務をこなして下さい」

「「「「はい！！」」」」

「でっと……」

もう一機のミデアを出す。

「なので、搭乗機がミデアからメデューシンにかわりますので、私物の整理お願いしますね」

「了解」×４

各機へ走りだす、輸送機パイロット達…

（そいやぁ…もう一機の積み荷みてねぇなぁ……）

で、もう一機のコンテナに近寄る…

後部コンテナハッチを開ける。

ウィィィン

中身はタルタルだらけだ。

（タル？？）

金属製のタルが固定されている。

（お酒？？）

……なんかようわからん為、アンナさんに聞く事にした…

「すんません～アンナさん…2番機の積み荷になんですが…」

「あ、はい、ヘリウム3ですけど」

「ヘリウム3？？マジですか？」

「本気とかいてマジですね？ええ…」

「あの金属タルタルの中身ヘリウム3？」

「はい、輸送任務でしたので…」

考えてみよう…ペットボトルでＭＳが半年連続稼動できるヘリウム3である。

重さはともかくとして…ペイロード２００Ｔを越えるミデアに積まれたヘリウム3…

まさにカオルにとっては吉報に違いなかった…

勿論、大喜びでコバッタ達に整理を頼みました♪

（何機分になるんだろう～）

次々運びだされる金属製のタルタルタルタル。

「ところでアンナさん」

「はい？」

「あのヘリウム３って何処から？」

カナダの木星輸送船団の基地から…

また損耗率５０％越えの、過酷な任務である事…

等を聞き出しました…

（かなり美味しいフラグ？？）

つまりだ…今回の様に落下地点で構えてれば…美味しい話だ…

という事になる。

（００８３にジャブローにいって記録調べてか…）

という考えについた。

とりあえずコバッタ達に整理をお願いする…２号機の改造は後程に…

あと一週間程でコロニーの大気が充填目処になるので、

メデューシンの案内を先に…

「じゃあ…コクピットに案内しますんで、慣熟お願いしますね……

１１号、滑走路は完成してるよな？」

［マスター完成してるよ］

魔メデューシンの前部ランプウェイから乗り込む…

原作通り、前部及びサイドに第１層に入れるハッチを作成している…

「こちら第一層は、基本的に振り分けホールに使って下さい元の世界では、
アムボートという救急車が使ってた発進デッキです」

「かなり広いですね…これなら多くの人が入りそうです」

「この中央エレベーター１６機で各階層に移動となります」

原作より増設はした。
エレベーターシャフトの回りに、
螺旋階段作るのは俺の特性でもある…

「第二、第三、第四、第五層は同じ作り…若干席数は違いますけど…第五層にいきましょう」

五層にでると、前後左右に座席が広がっている。

所々に柱がありる状態だ…

「一応収容人数を重視し、
かつ座席にはリラックススタイルできる…のを重視しました。
手荷物程度なら各座席上部の荷物棚及び座席下、
それ以外は第一層及び第７層のロッカールームをっうとこですね」

「かなり席がありますが…」

「第二から第五までで４８００名搭乗可能です」

「……責任重大ですね…」

「次は第六層ですね…第六層はベットルームがあり、第七層全体がそうなってます。あと他には、食堂、風呂区画がありますね」

第六層は、ちっと作りがちがった…機体前後に延びる通路が３本伸びている…

中央前部が風呂やシャワーを備えた区画、
すぐ後ろに食堂区画や購買自販機区画、
後部がベットルーム区画になる。

「第八層にいきましょう」

第八層にのぼる…

「この階層は、医療区画や乗務員、コクピット区画になります。関係者以外立入禁止で、ＭＰが配置される階層になりますね…

けど飛ばすだけなら、さほど人員要らないので、殆ど避難民対応員区画になります」

コクピットに案内する。

「この巨体ですが網膜投射システムと、自動化進めた事により、飛ばすだけなら一人で可能です。
で艦内環境でもう一人が必要ですね」

「この巨体でも二人で飛ばす事可能なの？」

「はい」

最初はヤドカリで飛ばす事も考えてはいた…その結果だった。

「マニュアル等後で、もってこさせますので、
メデューシンの事、よろしくお願いします」

「「「「はい！！」」」」

カオルは燃料をつんだミデアに向かう。

「２８号、どの位ありそう？」

［１０００機分はこすかも…］

「うっし♪」

ペットボトル一本が半年分の燃料…＝牛乳パック分一年

ミデアのコンテナは、ＭＳが平で３機余裕でおさまる…

そのコンテナに燃料が入った樽がかなり搭載されてるのだ。

昔の石油は同じ様に樽で運ばれてました…

それと同様です。

「詳しくわかったらよろしくなぁ～」

［イエスマイロード］

（核融合炉の燃料はこれで余裕できた……

ガンパレ組の件、明日片付けるか…じゃあ？？）

カオル、やりわすれを考えてている……

（あ、鋼鉄の咆哮の兵器の検証と…ＳＦＳの件か…）

カオルハンガーに向かう…

ＳＦＳにベースジャバー（Ｚ）を少し改造しはじめた。

武装を３５ｍｍＣＩＷＳ４門に変更。

装甲をルナチタニウム合金に変更…

タンク乗れるようにタラップつけて…

（ふむ…まぁいいか…）

輸送用のホバークラフト機が完成…

（何機作るか…か…）

搭載できるのは2機のＭＳ…及びタンク2機。

５００機製造を命じた。

（あと緊急展開ねぇ…）

ＳＦＳで…止まってる…
（音速こえると、ショックウェーブ発生だから……）

フライングアーマーを選択…
ホバークラフトだけど…
（衝撃波用カバーつけて、核熱ジェットと、コクピットつけて…）

かなり大きくなりました…

とりあえず試作１機作って貰う事にした…

「いつできる？」

［明日～］

明日の予定決まった様です…

（後は鋼鉄の咆哮の兵器ね……
サイズからいうと、載せられるのがないなぁ……検証艦つくるか？
改造か？）

水上兵器ですからねぇ…

（ビックトレー改造すれば検証できるかな？）

画面みると、
ビッグトレーの艦橋を…
鋼鉄の謎の戦艦艦橋にし、かなり後ろぎりぎりまでもっていってる。
全面の傾斜を廃止し、前側に迫り出してる。

命名ビッグトレー砲艦テストタイプ

とりあえず一隻注文。

武装は？
「とりついて改造施す。製作にいれると面倒、使えるなら採用かな？……11号これは？」

［ん～～4日後］

「あいよ…」

（あと今日できそうな、やりわすれないよなぁ…）
時間を見るとかなり回っていた…

（ガンパレ組、声かけてくるか…）

桜井隊長、佐藤千翼長、石井千翼長に声をかけにいく…

（所在、自室か…）

ＭＰにＴ－８５０が立哨してる女子寮にはいる。

（一階だよな～…）

今の所ガンダム組が最上階から、ガンパレ組が１階から使用している。

ターミネーターの１人は、一階に部屋をもっている。

（そういやぁ…Ａ－０１から、寮に入れてって言われてたなぁ…）

勿論ハウスキーピング要員で、コバッタがついている。

「あら？カオル君、夜ばいに来たの？」

「ビダンさん……人聞きの悪い事言わないで、下さいよ」

入った所でたまたまビダンさんと遭遇した…

「あ、あの子達、ありがとうね」

「あ～まぁ良いっすよ」

「お・れ・い・に…食べていいわよ」

「遠慮します」

「うん…即答ねぇ……あ、装甲どうだった？」

「あ～…対ＢＥＴＡを検証してないので…まだ結果が…」

一応、超甲スチールとチタンセラミックの間と、報告があがってきている。

「そう……

あ、この世界の塗料もおもしろそうよ…

近々結果でるかもね～」

耐レーザー蒸散被膜を研究しているらしい。

「報告まってますね～…けど襲うは不可っすからね」

何しろ、カオルの同化を妨害できたのだ…結果が楽しみである…

「は～い♪じゃ、お休みね」

次はなに仕掛けてくるのか、ヒルダさん…久々の本編登場であった。
一応＜バキュン＞の用意はすんでいます。

（さて…）

ピンポーン
桜井隊長の部屋の呼び鈴を押す。

バタバタ「はい？」

「カオルです。良いっすか？」

「あ、５分程まって下さい」

「あ～じゃあ、インターフォン越しでいいっす。
明日前約束した、救助に行きますので、
佐藤と、石井にも声かけといてもらえます？」

「あ、了解しました」

「じゃあお休みなさい」

カオル寮をでて、自室に戻る……

ｓｉｄｅ～桜井隊長少し前～

「ふん！ふん！ふん！ふん！」

彼女は自室で寝る前の運動をしていた。

バーベル重さ１ｔ……

まだこっちの世界に来て、戦闘待機任務だけで、
実戦はこなしてないが、備えは必要だ…って事らしい

彼女の汗がキラリと飛ぶ。

服装は…ビキニウェアだった…

黒髪もみずみずしく光っている…

ピンポーン

（誰かな？）

彼女はバーベルをおくとインターフォンにバタバタと駆け寄る。

「はい？」

「カオルです。良いっすか？」

（汗臭いわね…シャワー浴びなきゃ…）

「あ、５分程まって下さい」

「あ～じゃあ、インターフォン越しでいいっす。
明日前約束した、救助に行きますので、
佐藤と、石井にも声かけといてもらえます？」

（……襲うでないのね…）

「あ、了解しました」

「じゃあお休みなさい」

インターフォンからカオルの声がしなくなった…

（はぁ…カオルさん、襲ってくれないかなぁ…それとも襲おうかしら？）

……

カオル報告

整理中

第57話　ミデア取得後の帰還処理のひとこま　投稿日20110130（後書

ナギ少尉「作者～あらたなフラグたったみたいですよ～」

作者「ん？何のフラグ？」

ナギ少尉「桜井隊長の事」

作者「……みたいだなぁ…」

ナギ少尉「みたいって……いつフラグたてたんですか？」

作者「……何時だろう？？」

ナギ少尉「しっかりして下さいよ～～…けど、１ｔバーベル？間違いじゃ？」

作者「あ～知らないよな…彼女はガンパレ組の第六世代の戦車随伴兵だし」

ナギ少尉「第六世代？」

作者「いわゆる生まれながらの生体改造されてる世代ね…
骨格が強化プラスチックとかさ」

ナギ少尉「へぇ～」

作者「まぁだから襲われたら現代人でまずは勝てないね～」

ナギ少尉「……カオルさん食われちゃう？」

作者「……いよいよチェリー失うか？、
＜バキュン＞だらけになるか？」

第５８話　再びガンパレ&ｑｕｏｔ;津軽強襲&ｑｕｏｔ;へ…　投稿日２０１

フラグの処理に翻弄しているカオル君です。

第５８話　再びガンパレ＆ｑｕｏｔ；津軽強襲＆ｑｕｏｔ；へ…　投稿日２０１

２００１年７月１６日まだ明け方前…

カオルはまだベットの中だった……

（行く前にやるとこは、フライングアーマーのテストと、
メデューシンは、１１号辺りにお願いするか…）

もそもそ…カオル寝返りをうつ…

（でもって…２１日約束だから……いけて輸送隊の記録とりかな？
メタルマックスの旨味は正直なくなったかなぁ…？
あとは２２日以降か…）
もそもそ…起き上がり…備えつけの洗面台へ…

（ん～あとは処理できてないのが、医療カプセル入った人達と、燃
料の整理だよな…ちめてぇ）

タオルを探す手が宙にさ迷ってる。
（タオルタオル…っと…ん…まぁそんなものか…
さて今日も一日がんばりますか）

カオルの知ってる範囲での未処理フラグはそんなもんです。

ジオフロントのＰＸで飯を食う…

（最近ここも賑わってきてきたなぁ…♪）

注文は、納豆蕎麦の生卵つき、かき揚げ天をトッピングで…

カオルは大の納豆好きである。

ヤマダうどんの納豆ご飯も時たま食べられるよう、ＰＸにいれてある。

「いっただきまーす♪」

勿論、農業用コロニーからの輸送物で、天然物で生産している。

「カオルさん～」

ズルズル

「ん　？」

「少しよろしいですか？」

（確か……ああ）

Ｂ－０１所属メイファ小尉だ、

４１話ジャブロー加入組の一人。

ズルズル
「食べながらでよきゃ」

「ＭＳなんですが、水中戦できるのありません？」

ズルズル
「あ～一応はあるな…」
（ハイゴックとマットアングラー…ハイゴックはオミット必要か…）

「魔ドムじゃ水中戦できないので、できるのがほしいです～」

「あ～了解、考えとくわ…あとないん？」

「はい♪それだけなので」

「ん。わかった」

「では失礼しました」

（あ～水中か……帰ったらで考えよう…）

ズルズル　ゴクゴクゴク

プハァー

ふんふ～ん♪

食器をかたずけて…Ｂ５５ハンガーへ…

＝＝　Ｂ５５ハンガー　＝＝

まずは、副司令あてに、Ａ－０１の部屋移動の件打診を１１号経由で…送る。

で、メデューシンの試運転兼完熟をしとくようにと１１号に頼んでおく。

［了解、マスター、ヤドカリ君増やさないの？］

「……帰ったらかな？、とりあえずガンパレ行く前に、魔フライングアーマーのテストだ」

透明の風防シールドに上半分がなっている、少し大きめの魔フライングアーマーが格納庫から出てくる。

ジムコマの地上がフライングアーマーに取っ手をにぎっている……

戦艦出入口から、ヤドカリ操縦のもと第三滑走路から飛び立ち、
そのまま、太平洋上でのテスト飛行機に入る。

衛星からの映像で、音速突破時、海の上を衝撃波で、
波を作りながら疾走するフライングアーマーが映っている。

そしてマッハ３．２２を記録…
制動は安定している…

（うっし、作るか♪）

５０機注文した。

ただし、ホバークラフト機能のみだと速度低下…２００ｋｍ／ｈ
燃核ジェット使用だとジェット燃料の水素タンク上距離３０００ｋｍまで展開可となる。つまり、何処でも１時間以内の展開可能。

え？もっと水素積めば？のびるんじゃ？

そっちの方だと大気圏外にでた方が非常に効率良くなるので…

（さて、とやり残しはない…な…ガンパレ組と打ち合わせか…）

ハンガーに戻ると桜井隊長、佐藤千翼長、
佐藤千翼長、石井千翼長が待っていた。

「おはようございます」

「おはようございます」×3

「えっと行く前に状況の確認ですが、
まずは佐藤千翼長は、木造でしたよね?」

「はい」

「そこで小隊を失ってると……
となると確か3日の8時前後だったかな?木造全滅が…」

「だと思います。ただ私は指揮する小隊が、無くなったとしか…なので…」

「わかりました。で石井千翼長は?何処で、っうのも聞いてないので…」

「わたしの方は、3日の昼0時過ぎだったはずです。

場所は北津軽郡の鶴泊駅の東のコンビニです。２４８と８３９の交差点で…」

「わかりました…桜井隊長は？」

「わたしが１番最後ですね…３日から４日の深夜帯でしたので…」

「了解です。じゃあいきますのでシェルターで待機してて下さい。必要に応じて教えてもらいますので…」

シェルターに引き入れ、

「”世界扉”」

＝＝　ガンパレの世界　＝＝

１月３日午前６時半

扉を消すと一路木造へ……

ｓｉｄｅ　～　ある学兵　～

時間は少し遡って６時前……

彼女は夢の中なかでまどろんでいた……

空は少し明るくなって来たが、まだ日の出前の中、
寮のベットの中にいた…

ウーーーー

防災のサイレンがなる……

「う、う～～ん」
寝ぼけ眼で、サイレンの音に反応し、身体を起こした…

「Ｖ２発令！！Ｖ２発令！！各員は所定装備着用急げ！！」
校内放送が流れる。

（Ｖ２！！）

彼女は、跳ね起きると、パジャマのままカーデガンを羽織りつっかけをはくと、自室の扉を出る。

パタパタパタパタ

（ううー、寒い…急がなきゃ）

寮では至るところで扉が開き、次々に人が出てくる。

みんな若い１４歳から１７歳までの女子学兵達だ。
色々とりどりのパジャマが見られる。

そして彼女は、ハンガーへと急ぐと、
ウォードレスドレッシングルームへと入りこむ。

彼女は個人ロッカー開け、手際よくカーデガン、パジャマを脱ぎ、
ブラジャー、パンティーを脱ぎ、纏めてロッカーに入れると、
トイレパックを取り出す。
ロッカーをしめて、綺麗な素肌の上にトイレパックを股下につけ、
入って来たのと別のガラス扉を開け中にはいる。

中央の台座に跨いで裸のまま立ち座り、台座のボタンをおすと、
横からバーが近寄って長い髪をすくいあげる。

そのあいだに彼女は手を横に広げ、指をしっかり開く。

ブオー
黒い霧状なのが吹き付けられ…固まって行く…

ブー
ブザーがなると、彼女は次の扉を開く。
誘導ゴムに四肢が覆われた状態になった…

そして次の部屋でウォードレスの装着となる。

部屋にはいると、多目的リングを嵌め、
人工筋肉パックをつけはじめる。
背中の届かない場所は入ってきた別の人にくっつけてもらい、
つけわすれがないかを鏡で確認すると、

人工筋肉の拘束具であるウォードレスを着込む。
彼女が着用しようとしてるのはアーリーＦＯＸ…お下がりだ。
学兵にはご当地のスノーＦＯＸは回って来ないのだ…

ウォードレスを着込むと、次のルーム武器庫へと進む…

彼女がロッカーから武器をだす、アデレイト・アサルトライフル重さ３６ｋｇ：
訓練マガジンを外し、薬室内の弾を取り出し、
実弾マガジンを装着する。

脇のマガジンスロットに１０本着用する。
次に腰のスロットに超硬度カトラスをさす。

次に手榴弾６ｋｇを４個腰のポケットにいれ、
最後にシールドを両肩に装着する。

（よし！）

彼女はハンガーにでる…集まって来はじめる…

色々な装備をアタッチメントにつけたり、背中にはおってる人がいる…
サブマシンガン１６．９ｋｇ
を２丁背負った娘…や
ヘビーマシンガン、

装弾数２０００発そなわったのを背中のアタッチメントにつけてる人やらだ…

「佐藤小隊～横隊に集まれ！！」

「牧村小……」

ザザザザザ

５列横隊で整列し、

１！２！３！４！５！６！７！８！９！

点呼が行われた…

前にいる自衛軍少尉に報告が行われる。

「佐藤小隊、隊長帰省による不在以外欠員なし！！」

「石川小隊、帰省者８名不在以外欠員なし！！」

「香川小隊、帰省による４名不在以外欠員なし！！」

「青山小隊、３名急行中以外欠員なし！！」

「太田小隊、不在欠員なし！！」

「牧村小隊、不在欠員なし！！」

「傾注！！」

「状況説明しよう…本日０６００七里長浜海岸より幻獣どもが大挙して上陸してきた。
当木造駐屯各小隊は、民間人避難の為、各所定陣地にて防衛後、五所川原に移動する！！
いいな！！」
「了解」×２６０人程

「所定陣地に急げ！解散！」

「佐藤小隊いくよ～！！」

雪道の中駆け足行軍で陣地の市役所を目指す。
約１ｋｍ離れている…

ここ、木造はつがる市の中心部で、人口やく2万人の町だった…
けど時期が悪く、
帰省で人口が増え、
また慣れない観光客が市内各所で雪にタイヤをとられ、
スリップ事故を起こし、避難渋滞を引き起こしていた。

市役所行く途中何人かが駆け寄り、事故車を退かす。

「避難いそいで下さい！！」

西側から発砲音が聞こえてる。

彼女らは市役所にたどり着くと、閉まっている防火扉を開け、最後のものが入口シャッターを降ろし、また防火扉を閉める。

建物陣地でのゴブ対策の為だ。

彼女らは階段を駆け登り、無言で各所に散っていく。

普段からやり慣れてるのだろう…屋上には約２０名程が出てばらばら別れた。

先行し、レーザーライフルで既に射撃してた女の子がいる。

その横に駆け寄りアサルトライフルを構え、射撃体勢になると…

「状況は？」

「やばいわね…うってもうってもきりがない」

アサルトライフルも火を放ち、ゴブリンの頭をつらぬき、体液ださせながら消滅させる。

「みたいね…まだ市内には沢山のこってるわ」

遠方のキメラが消滅する。

「全員は避難できなさそう…けど踏ん張らないとね」

ゴブリン5匹が消滅する。

彼女達は、市役所の屋上、3階、2階から射撃し、市内中心部への侵入を防いでいた。

また別の部隊が環境改善センターや、警察署などの建物陣地に入っていって、
各所から火線があがり、中心部侵入を防いでいる状態だ。

バラララララ
「ゾンビへり!!」
注意の掛け声とともに、
パシューパシューと零式ミサイルが2発、キタカゼゾンビに吸い込まれ…
爆散、大きい破片が落下し、民家が潰れる。

パシュー

また零式ミサイルが白い煙を伸ばしながら、
グレーターデーモンの身体に吸い込まれ爆散する。

「かなり足早かったね…」

「ええ、零式でないと…」

ヘビーマシンガンが火を放ち、何十発も身体に受けたミノタウルスが、
ゴブリンを巻き込みながら倒れ…死亡後消滅する。

ミノタウルスは雪に捕われ、進行速度が遅くなっているようだった。

その間にも彼女らは射撃を続け、
またサブマシンガンも火を放つ。

パシュー
デーモンに吸い込まれ爆散。

ヒュルルル
不気味な音が鳴り響く…生体ミサイルの音だ。彼女らの目は音源を探す…

「ミサイル！！」

掛け声とともに屋上にいた彼女らは階段室に入ったり、
３Ｆデッキにとびおり窓から室内に入る。

ドーン　ビリビリビリ

屋上に出て強酸で白煙が上がってるところは避け、また射撃が続く…

パシューまたロケットが放たれる。デーモンが爆散する中…
「北側環境センターが！！」

見ると、崩れ落ちてくセンタービル…

「あそこ香川小隊よね…青山小隊も付近居たはずだけど…」

何匹かのデーモンがこっちに寄ってきたので零式ロケットが打ち込まれる。

「ちょっと、駅方面にもかなりゴブリン浸透してきてる！！」

パシューパシュー

建物の窓という窓とから火線があがっている…

「キャーー」

金切り声が上がって…見ると…
デーモンが肉薄しある部屋を殴っている…
パシューパシュー
2体が倒れ、残りのに火線が集中する。
「零式弾ぎれ！」

倒れるデーモンのおくに２０体程がこちらに向かってくるのが見えた…

火線を集中させるも…1体、2体、3体……

ヒュルルル

彼女らはその音を聞き逃していた…

そして……

ｓｉｄｅ～ある学兵～ｅｎｄ

カオルは木造に着くと人気のないところで佐藤千翼長をだす。

「佐藤さん、あなたの小隊の場所わかりますか?」

端末を差し出す…

彼女はナビをそうさすると、市役所を出し、

「所定ならこの市役所です」

場所を確認し、虚数空間に端末をしまうとお姫様抱っこし、

「”幻影”」

市役所上空へといく…

上空につくとビームライフルで狙撃している女の子達が見える…

「彼女らです？」

「いえ、狙撃特化の女子で編成の牧村小隊ですね……あ、見えました」

階段室からバラけて射撃体勢にはいる女の子達…

「女の子だらけですけど…？」

「女子で編成されてます。あと混合が４個小隊です」

「この市役所につく人数は？」

「定数満たしてるなら１００ですが、９９人です」

「わかりました。じゃあシェルターでお待ちを…」

「あの娘達をよろしくお願いいたします」

佐藤千翼長をシェルターに引き込む。

とりあえず、コブでやられるんかな～と思い、
同化してみると、階段は防火扉で固めてあったので、上空に離脱。
「”加速”」

状況をみまもる事にした…

7時21分　佐藤小隊が射撃し始める。

同24分　ゾンビヘリ襲来…
少し警戒してたけど、対象者発生せず。

同25分　グレーターデーモン襲来

ミノタウルス撃破

同30分　デーモン10体目撃破確認

同34分　生体ミサイルが打ち込まれる…
警戒して近寄り過ぎた…
ビチャビチャ

強酸が、かかったけどなんともなし…

同38分デーモン57体撃破したところで、
火線上がってた陣地に取り付いたデーモンが、
集団パンチで建物崩壊させる。

こっちに向かっていた集団は撃破される。

同４０分
（あれは？）

デーモン5体接近、うち1体零式で撃破されるも、
それ以上あがらず、もう1体は火線集中で撃破、しかし…

「キャー」

デーモンが迫っていた部屋に向かう。

見ると９７式軽機関銃で集中させてる女の子が４人…

部屋の中にすり抜けて入ると、やはり倒しきれず…
デーモンのパンチが迫る…
４名様ご案内～　体育館型シェルターに引き込む。

崩壊する部屋の中をすり抜け上空にでると、零式が2本打ち込まれ、
1体が集中で倒されるも……

（零式切れたか…）
奥に１８体せまってくる…

屋上にいる女の子達が火線集中し、1体2体3体倒すも…

（ミサイル気がついてないな…）

４体、５体、ミサイルが目の前に…

屋上にいた女の子達３３名ご案内し…離れる。

勿論壁側に正面をむけさす。

「”加速”」

２重かけ…

各デーモンの動向をみ、

パンチが打ち込まれる各部屋から女の子達を順次ご案内。

合計７３名…

建物がデーモン１２体のパンチに耐え切れず崩れだす。

「”加速”」

４重かけ…

世界の時は止まる…

館内にはいり、３Ｆ廊下、及び部屋で１２名確保、

所々コンクリート塊が落下停止してる中をくぐりぬけ、２Ｆへ

同じく廊下及び部屋で１０名確保…

（９５か…あとは？）

一階へいくと…階段室及び１Ｆフロアで４名がゴブリンに射撃している…

弾は勿論空中でとまっている…確保。

（これで全員のはず…）

１Ｆからチェック…

踊りかかろうとジャンプして静止しているゴブリンをくぐりぬけ…

２Ｆにあがり、空中に浮いている床材や、柱をかい潜り、

３Ｆにあがり屋上の構築材が空中に浮いてるなかを探索し…

しわすれが居ないのを確認し…

外にでて解除…

市役所は濛々と白煙をあげて崩れ落ちる……

（眠い…）

急に睡魔が襲ってくる…

フラフラになりながら次の目的地の鶴泊へ…

ウトウトとんでると…ドーン…

地面に突き刺さっていた……

蚊になっていたため、付近からはいきなりクレーターができたように見えたろう…

またフラフラと飛ぶ……

非常に体感時間の長い３０分で、

鶴泊駅の看板が見える…

駅には避難民がまだいた…

カオルはコンビニの屋根につくと、

石井千翼長をだし…

「”幻影”……眠いです…目的がきたらおこして下さい……」

寝落ち……

２時間半後…

「カオルさん起きて下さい」

ゆさゆさゆさゆさ

ムニュムニュ

「／／／／／／／／／／キャー」
ビュンバチーン！！

ガンパレの第六世代による本気張り手

カオル悶絶中……
ピクピクピク

お察し下さい状態でした…

「カオルさんカオルさん」
ビシビシ頬をはたいてる…

「う……いつつつ…」
カオルやっと気がつく…

「カオルさん来ました」

「う……なんか痛いなぁ……で、確か」

「わたしがトイレに店内に入ったあと、その後あのトラックが燃え盛ってました…絶対救えよ」

「わかりました」

（???なんだ?なんかした?……）

妙に冷酷、高圧的な石井さん…とりあえずシェルターに入ってもらい…

輸送トラックに取り付き同化する。

（燃え盛る前に救出かな?）

運転席も学兵、

コンビニ内に駆け込む助手席に座ってた石井さんが居なくなってる。

「隊長、またなの?」

「トイレだって～」

「…まったく自炊したのを食べるから…」

「懲りずによくやるよねぇ…」

「いい加減、わかって欲しいというか…理解するでしょ…普通…」

（そろそろかなぁ～）

バラララララ

西側よりキタカゼゾンビが現れた！！

「ゾンビヘリ！！」

運転してる女学兵がアクセルふかす…

後部荷台では、狭いなか詰め込まれた女学兵達が、

手持ちの武器で対空砲火をあげてる…

しかし、ゾンビヘリは、

ブロロロロロ

と生体機関銃を放ち、弾が段々トラックに…当たる前に、

彼女達をご案内し即離脱！

弾はトラックに吸い込まれ、強酸が荷台内に撒き散らされ…ガソリンタンクに弾が入り…

ドコーン

大爆発をおこす。

ゾンビヘリは満足げに次の獲物を目指して飛び立っていく……

「やあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

コンビニから出た、石井千翼長の叫びだ……

「ぁぁぁぁぁ……」

カチャ

（うぉい！！）

「アルミサエル！！」

石井千翼長……拳銃を自分で頭に銃口を当てたので、思わず止めちゃいましたが……

というか止めないと救助した石井千翼長どうなるの？

の状態であった……

（……確認するか）

彼女の精神状態はずたずたになって、

廃人になる傾向みたいだった……

異世界軍の方の石井千翼長をだし、聞くと…
「確か、そのあとの記憶がなく、気がついたら仮眠室でした。
…3日の２０時頃でしたね…
すぐに表に出て、通った部隊にのせてもらって…転々とし八戸にいきました」

石井千翼長をシェルターに引き込むと、

崩壊している石井千翼長を睡眠、精神を繋ぎ合わせ、修復…
コンビニの仮眠室まで運びました。

（多分俺が助けた事により、八戸で救助されるのか……）

一段落して……

「駄目だ…ねみい……使い過ぎたか…」

Ｔ－８５０をだし…

「あと……たのむ…１９時頃おこしてくれ」

カオル、仮眠室のベット横でぶっ倒れました…

……

カオル報告

睡眠　報告なし

第５８話　再びガンパレ＆ｑｕｏｔ；津軽強襲＆ｑｕｏｔ；へ…　投稿日２０１

作者「学兵の皆さん～…始めまして作者です～」

ザワザワザワザワ

学兵「なんか芸して～」「撃ち殺してよい？」「アスカちゃん～」「しんじくん居る～？」

作者「えっと、皆さん１３０名近くいるので、設定は考えられません。
ですので自己申告でお願いしますね～
１４歳から１７歳までの女性の設定はそのままです」

学兵「作者手抜き～」「真面目にやれ～」「ウホッいいおんな」「いるわよ～」「シンジ君～？？」

作者「え～では説明ビデオになります。
皆さんゲロ袋の準備はよろしいですね？ではどうぞ」

……途中３０分後…

死屍累々……汚物が……散乱…

目つむっても流れる映像……

メディカルアームが忙しく回っている…

第５９話　あるＨＥＮＴＡＩ＋&ｑｕｏｔ;津軽強襲&ｑｕｏｔ;再び後半　投

さてカオル君はまだ寝てるのであるヒトコマを…

＝＝　横浜白凌基地正門ゲート　＝＝

「なぁ…」

「ん？どうした？」

「妙に最近ゲストパスの発行多くないか？」

「そういえばそうだなぁ…」

彼は記入簿をみる…

帝国軍開発局整備部
帝国軍開発局整備部
帝国軍開発局整備部
帝国軍開発局整備部
帝国軍開発局整備部
帝国軍開発局整備部
帝国軍開発局整備部

もうやめていいよね…
つまり一日に５０人近くの、
帝国軍開発局整備部
が出入りしてるのだった…

「すみません、ゲストパスの発行を……」

「あ、はいどうぞ」
カキカキカキカキ
ＩＤを見せられる。
帝国軍開発局整備部所属と……

Ｔ－８５０のセンサーに引っ掛からない為、そのまま通行してく…

（しかし……？）

かならずっといっていい程、黒い長方形の鞄を大事に抱えて入ってくる…

（なんでだろう？？）

＝＝　ＣＩＡ極東支部　＝＝

（このカードは切りたくなかったがな…）

机には写真が数十枚おいてある…

その写真を見ると…いずれも美女、中にはＡ－０１の顔もある…

（まぁこれでうまくすれば……）

＝＝帝国軍開発局整備部＝＝

「例の物は手に入ったか？」

「いえ、まだ入手できてません」

「……おい、貴様白状したほうがいいぞ…」

「手に入ってません！！」

「……そうか、やれ！！」

わーーと　たかり始める男たち…

ぽーん

ぽーん

ぽーん

と衣類がほうり出される。

「！！あったぞ！！」

手に掲げられる写真

「貴様！！結束を忘れたのか！？！？……処分だ！」

「イヤダーイヤダ…」

真っ裸、チン〇ンブラブラで、両手を引っ張られて、ひきずられてく男…

先程掲げられた写真がデスクにおかれる。

おおおぅ

ざわめきが広がる…

「デカルチャー」「ちっぱい命!!」

「チッパイ!チッパイ!」

だんだんと唱和が広がる

「チッパイ!チッパイ!」

左手が腰の部分にあてられ、右腕を胸の高さから高く突きあげられ、また胸の高さへ

「チッパイ!チッパイ!チッパイ!チッパイ!チッパイ!チッパイ!」

バン!!

「そこまでだチッパイ党!!覚悟しろ!!」

「デカパイ党の襲撃だぁ!!」

「かかれ！！」

「応戦しろ！！」

思い思いにライフルを持ち出し、銃撃戦が始まる…

一応紳士協定でゴム弾使用らしいが……

催涙ガスが投げ込まれ白煙が広がり…

場面は見えなくなる…

ｓｉｄｅ～　カオル　～

ゆさゆさ

ゆさゆさ

ゆさゆさ……

「う……いちちち」

「マスター、時間です」

「おう、ありがとうな…あ、あぁ」

ゴキ

背中を回し、骨を鳴らす。

床の上で寝たので…こったらしい…

「う、う～ん」

手を後ろに組み、そのまま両手伸ばしながらを頭の方へ…

ゴキゴキ

「Ｔ－８５０ちっと悪い、下から手を押してくれない？」

「こうですか？」

ゴキゴキバキボキベキ

「おおう……いい♪」

カオルの両手が変な具合に、後頭部までついてるんだけど……

「サンキュー」

「いえ、マスター」

カオル何事もないようにＴ－８５０をシェルターに入れる。

（痛みとれたし…えっと、とりあえず同化して辺りの監視？）

同化して、２０分位すると2台の兵員輸送車が見えたので、
石井千翼長を覚醒させる。

彼女は、起きると、表にでた…　兵員輸送車が気がついたようだ…
のせてもらって、弘前方面に去っていった……

（一仕事おわりっと…）

「シャムシェル」
カオルは北上していく…

ｓｉｄｅ～　ある自衛軍工兵　～

1月3日午前8時27分

「木造落ちたぞ！！」

（ここもまもなくか…）

彼は、市内の五所川原駅から西方にかかる、乾橋の破壊工作を任されていた。

旅団司令部は岩木川を防衛線にと考え、
五所川原及び中泊町陣地への撤退、集結を急がせている。

橋の橋脚に爆薬はしかけ、いつでも爆破準備は整っている…が
まだまだ避難民が橋を渡っている為、指示はきてはない…

つがる市の人口４万人及び帰省した人、観光客などが避難をしている…

西津軽郡は、壊滅した一部の地域以外は無事らしい。
海岸まで迫る山々が進路を阻害してる為、
幻獣どもは、ここ、五所川原を目指している…という事なのだ。

鉄道橋も現在、五能線を走らせられない為、避難民が徒歩で渡ってる…とも聞いてる。

ザワザワザワ
空に不気味な音が響く…

彼は決断の瞬間を迫られる時がくる……

爆破スイッチを持っているのだ…

コンビニの上に機銃座や迫撃砲が備わっている…迫撃砲は幻獣の海原へ、しゅぽーん　しゅぽーん
と８１ｍｍ砲弾が撃ち込まれ遅延させている。が……

「いいな…わかってるな…幻獣が、橋のこっち側にかかったら…押すんだぞ…
ぎりぎりまでだ…
避難民を取り残すんじゃないぞ…」

９６式装輪装甲車が２両、堤防上に乗り上げ、橋の向こう側に向け、機銃を放っている。

避難民が悲鳴をあげ橋の上でパニックに陥っていた…

橋から押し出され落下し、絶命した男性…

また進まない車の上を渡り歩く人、
まだ橋の上で進めず、ふさいでいる避難民をひき始める車…

また、まだ橋にかからない集団が、幻獣におそいかかられ、海にのまれる…

「ギャー」「グゥワ」

絶命の声が聞こえる。

小隊機銃４門が火を放つが……海はどんどん避難民を飲み込み、
ゴブリンが斧で頭をかちわるのが見える…

橋の上では、渡りきれてない避難民に襲い掛かってくる

パンパンパン、襲い掛かるゴブリンを射殺、
そして、幻獣の海が橋を渡りきろうとした瞬間…

「やれ！！」
ポチ

ドンドンドンドン！！
橋脚に仕掛けられた爆薬が炸裂し、
橋は海にの見込まれ、絶命したと思われる避難民、車、幻獣を載せたまま、
ゴゴゴゴゴ
崩れ落ち…白煙に包まれる。

「お母さ～ん」

道が残っていた境目で一人の少女が叫んでいた……

彼女はゴブリンに襲い掛からる母親から押し出されて生き残った。

コブリンは頭をかちわったあと、自衛軍に射殺され、消滅…

その少女は親との永遠の別れとなった……

小隊機銃はこっち側に取り残されたゴブリンの対応に追われ、
また至るところで自衛軍がサブマシンガンで、ゴブリンを追いかけているのが見える…

1月3日午前8時33分
ｓｉｄｅ～ある自衛軍工兵～ｅｎｄ

ｓｉｄｅ～ある砲撃兵～

「急げ～！！」

カチカチ
水平儀…みながら
「設置よし！」

「設置よし！」

「設置よし！」

五所川原の駅から２ｋｍの高校に８１ｍｍ迫撃砲が並べられる。

２名で運用される迫撃砲は、重さ約４０ｋｇ
やや長いのと部品がわかれている為、二人で設置、そのまま二人で
運用となる。

「目標、１５４号のサンクス付近」

（橋渡ったところだから１．４ｋｍか、方位もよし）

「照準よし！！」

「１番装填！！」

ライフリングに翼をかませて中程までうめ、弾を保持する。

「装填よし！」

無線でやり取りした隊長が、
「１番発射！！」
保持していたのが弾をはなし後方にさがる。

砲を落下した弾が撃針にふれ…
パシュしゅぽーん

とともに弾が打ち出される。

間接射撃の為、落着は直接は見えない…

「効力射!!各自、自由射出!」

しゅぽーんしゅぽーんしゅぽーん

約１００門の迫撃砲から弾が放たれる……。

ｓｉｄｅ～ある自衛軍砲兵～ｅｎｄ

ｓｉｄｅ～ある学兵～

彼は堤防沿いの機銃座から、打ちっぱなしになっていた。

焼け付く前に付近から雪を集めた仲間が、
雪を銃身にドカッとおく…
ジュー
と瞬時に白煙が上がる。

その間も、
ガガガガ

銃が止まる時は、給弾ベルトを変える時だった…

朝から打ちっぱなしで、夕方、夜になってくる深夜ふけて、
日付がかわって2時頃…

北から幻獣どもが押し寄せてきた…

機銃を北にむけ、射撃開始する。

弾をくらい消滅するゴブリン、
消滅するゴブリン、
消滅するゴブリン、
消滅するゴブリン、

じわじわとよってくる…

カチカチカチ
（は！！給弾！！）

彼はベルトを交換した……

ザシュ！！

彼が聞いた最後の音だった…

ｓｉｄｅ～ある学兵～ｅｎｄ

１月３日夜１０時…Ｍｕｖ－Ｌｕｖ世界は翌日

カオルは五所川原付近につくと……

（人がいないとこ……ないなぁ…）

少し探したが諦めた…

何しろこんな狭い町に旅団、師団の中核が集中しているのだ…
片方は学兵で練度はともかくとして…

（多分８０００人？？）

（さて…空中にいきなりだせるかなぁ…）

カオルは引き出して…

案の定落っこちかけたので、はしっと抱き着いた。
ぷにゅ
正面から…

「すんません…陸地でだせなかったので…」

「……」

「桜井隊長？」
（顔が赤いぞ？？）

「カオルさん……」

桜井隊長の手が背中にしっかり回り…力強く……逃さないように…

軽いフレンチキス

「!?!?」

「好き……です」

再び顔が近寄り口が触れ合い、桜井隊長の舌が＜ばきゅん＞＜ばきゅん＞
＜ばきゅん＞＜ばきゅん＞
ぷはぁ

カオルなんとか息をつく…

「い、いきなり……なんすか…」

「え?抱き合ってるのでつい…」

「背中に回した手を離したら落ちますよ……」

「あ…」

どうやら隊長気がついたようで…

「でも甘く美味しかった…しファーストキスいきなり奪われましたが……
先に助ける人達がいますよね？」

「はい…」

「お願いしますよ」

（でも…美味しかったチ＜ばきゅん＞＜ばきゅん＞……
桜井隊長美人なお姉様だし……
けど逃げれなかった……）

カオル悶々し始めたね……
桜井隊長も空気読めつうか…積極的だろ。
作者の愚痴はおいときます。

「とりあえず、桜井隊長、助けたい人達は何処に？？」

「もう少し高度さげて貰えます？」

……　町に近づく

「駅舎見えますよね？西側の駅入口信号の角の建物…」

カオル近寄り

「この足元の？」

「ええ…で、北側の信号の病院とになります。先に病院が崩されて…でしたので…」

「わかりました。じゃあシェルターに…」

「あ、待って…」

＜ばきゅん＞＜ばきゅん＞＜ばきゅん＞

ぷはぁ

「よろしくお願いしますね」

「……はい」

おまえらいい加減にしろっていいたいね……

桜井隊長をシェルターに入れ…

しばらく見張る事にした…

「”加速”」

市内では対岸に向け、迫撃砲、堤防沿いの小隊機銃、川沿いのビルからの機銃などが撃ち込まれている。

川で足が遅くなるので撃ち込んでるのだ…

デーモンも足を取られ、次々消滅してゆく…

「なぁ作者…」

あ？解説してるから邪魔すんなよ。

「俺いつ桜井隊長とフラグたったんだ？」

しらね～よ、こっちがしりたいわ！！

「確か、Ｒ１５だよな…何処まで良かったんだっけ？」

……正直、フレンチキスくらいじゃ？

そっちに関しての具体的な擬音表現はアウト、

勘違い擬音はＫと見てる……って解説邪魔すんな！！

「でよ…」

時間進めましょう…

０：３０頃　金木陥落　幻獣岩木川防衛線突破

闇の中暗視ゴーグルを使い、まだ五所川原は落ちてはない…

北側に向けての備えも必要になってくる…

（ん？）

カオル見回ってる内になんかを発見したようだ…

（ありゃあ？）

なんか乗り物？ぽいのを発見した…

台座の上に、砲身と、機関部…

レールガン？と思い、

とりあえず機体情報ゲットしときました。

８９式短滑空砲、レールガンゲット

１：００頃、津軽平野を金木からわたり３９３を北上する大集団…

段々と川を渡れる範囲が広がる…

また南にも…

２：００頃、中泊に大挙して襲い掛かる幻獣たち…そして…

カオルの視界内五所川原では……

幻獣の海が陸地を北側から蹂躙してくる光景が見える。

先頭は足の軽いゴブリン達だ、その後ろにデーモンが見えている。

道路沿いに設営された機銃座が火を放つが、
幻獣の海にのまれ、ついてた学兵は、抜刀し、入ってきたコブリンに挑む…
１０匹２０匹と始末するが、疲れたり、
多方向から串刺しにされ……

ビル陣地では学兵を護ろうと、銃撃を被せているが、

その銃撃がグレーターデーモンをおびき寄せ、
早いスピードで陣地に肉薄し、パンチでビル陣地が沈黙してしまう…
そのグレーターデーモンに対して、零式ミサイルが、別の陣地から
白煙が伸びてきて、爆散…

上空では迫撃砲の砲弾によるドームといっていいだろう…
見事な赤い屋根ができていた。

その様な光景が現在の五所川原…だった。

しかし、物量に圧倒され幻獣がどんどん押し寄せてくる……

カオルは、眼下にある女学兵の機銃手をマークしていた。

彼女は、海にのまれながらも、抜刀後生き延び、４００体近くのコ

ブリンを消していた。
近くにいた女学生は１４体目で、背後のゴブに気付かなかった為、頭わられかけたのを引き込んだが…

そんな彼女に、グレーターデーモンが目をつけ、よってくる…

（もう駄目だろうな……）

しかし、彼女は、スルッとデーモンの両足の間をすり抜けると…

デーモンのアキレス腱…を、切り付け転倒させる。

彼女は手榴弾をデーモンの背中に投擲させ…次の獲物へと切り掛かる…

（おいおい…彼女デーモンまで倒すかよ…）

しかし、背後からの援護射撃が、彼女の右胸を貫通し、血を吐きながら転倒……

そこに獲物だ！！のごとくわっと群がって襲い掛かるゴブ。

「幻影」
彼女を消し、引っ張りあげ手短なビルの上へ…

「ゲフッ……ゴフッ……こ……ゴフッ」
吐血しながらなんとか喋ろうとしていた…
透明なところから、彼女の血が飛んでくる…

（右肺か…）
医療カプセルだしながら、
「右肺いったみたいね…でも大丈夫たすかるから…」
で、彼女を入れ、カプセルを作動させ、幻影解除…
虚数空間に引き込んだ。

目的の陣地をマークしながら、
だったのでさほどは、引き込めなかったが、着実に引き込み人数を
増やしていく…

いよいよグレーターデーモン、ミノタウルスの中型幻獣の大群が押
し寄せてきた…

目的の陣地からの火線が１８本ほど上がる…

「”加速”」

二重かけし、建物のなかへ…

デーモン3体が肉薄、内1体は倒れそう…

パンチが撃ち込まれ…

引き込み、この建物陣地は沈黙するが、
デーモンは構わず殴り続け建物は倒壊する…

もう一つマークしてた陣地からの火線が伸び、更にデーモンが3体引き寄せられる…

最初のデーモン2匹は倒されるものの、残りの3体は引き寄せられ…

もう一つの陣地に肉薄、パンチを撃ち込む直前に、ご案内し、

沈黙、このビル陣地も崩れ落ちる…

獲物を倒して満足したデーモンだったが、迫撃砲弾が直撃、3体とも崩れおち消滅する……

その後は、各ビル陣地は潜伏し、迫撃砲弾が市内へ直接撃ち込まれるようになる。

つまり、道路脇に陣取っていた学兵は文字通り全滅し、

またそれをまもる為のビル陣地もかなり減り…

残った陣地は観測点として、幻獣の海に残される事となったのだ…

1月4日午前6時　五所川原駅周辺は、幻獣勢力下に陥った……

もう闇の中に人間の悲鳴はあがらなくなる……

カオルはほうけていて、やっとこさ、世界扉をひらく…

精神力使いきったもようです。

……

カオル報告

眠い！！

第５９話　あるＨＥＮＴＡＩ＋&ｑｕｏｔ;津軽強襲&ｑｕｏｔ;再び後半　投

作者「……」

あ号「……」

作者「……」

あ号触手を作者の顔面に伸ばしフリフリする。

作者「……」

あ号、何か思い付いたようだ……
誰か連れてきた……４００体を切り抜けた女性だ…
あ号なにかつぶやいてる…彼女うなづいてる…

彼女「せーの！！」

バチーン！！

吹っ飛ぶ作者…１００ｍして落下…
ピクピクピク

あ号「……この物語は…乗っ取った！！……さて、死亡フラグを

……ことと、」

作者「な、わけねーだろ！！」

あ号「……残念だ……生き延びて災害除去しようと思ったが」

作者「はぁはぁはぁ……けど、彼女一人あるき…どうすっかなぁ……」

あ号「……桜井隊長？」

作者「ああ、ヒロインにもあがらなかったが、完全に一人あるき…」

あ号「おまえさんが書いてるんだよな？」

作者「まぁな…けどあの場面は、ああなる結果しか、……はぁ……どうしよう……」

う～～～～……おおなやみ中

ヒルダさんとくっつけようとしてた時も、あったんだけどなぁ…ヒロインプロット崩壊中…

第６０話　一気に3桁…　処理できねぇぞ！ｂｙ作者　ガンパレより帰還　投稿

２００１年7月17日夜

カオル世界扉を潜って消して倒れこむ…

ねおちしたようだ…

コバッタが見つけた…

［マスター！！……寝てるか？…運ぶか…］

２９号背中にカオルをのせ、浮かびだす…

付き添いで２７号もよってきた…

「あら？カオル…寝てるの？」

［イッシーちゃん、そうだよ～］

「こんな状態のカオルみたの初めてなんだけど…」

［記録みると…魔法を使いすぎみたいね］

「……魔法をねぇ…」

石橋とコバッタ一緒にカオルの部屋へ行く。

「じゃあ、２７号ちゃん、あとはいいわ♪」

［よい夜を～］［マスター落としてね～］

石橋、ヒロインフラグ消滅しないように頑張れ！！

「任しといて作者」

石橋はそういうと、眠くなったようだ…
幸いスペースはある…

「♪」

そのまま、制服を脱ぎすて、下着姿になると、いそいそとカオルの横に入りこむ。

けど、板胸だ「作者！！」

空中にとびげりして俺を蹴飛ばすなよ……頑張れよ……

２００１年７月１８日

（あ、あれ??……なんか……いいに…ほい……）

カオルまだ眠りのぼやけの世界だが…

幸せに感じている……

目が覚めると……ピンク色の髪が目に見える…

（ふえ??）

左腕がなんか感触がいい、左手もだ…ふにふに。

（なんかいい……なんだ??）

「!!!!!」

カオル…石橋を抱きまくら状態にしてたのに気がついたようだ。

（な……なぜ……イッシーが下着姿??

……俺…やっちゃったのか??）

「あ、カオル～おはよ」

「……え、え、えっと、その、」

「ん？どうしたの？」

「な、な、なぜ、…」

「ん？？」

「えっと……イッシー……なんで…下着？」

「え？…カオルが連れ込ん」カオル全力土下座！！

「責任とります！！」

「どう責任？」

「言わなくともわかる責任をとります！」

「ん♪わかった…じゃあ、顔あげて」

顔を恐る恐る上げる。
チュ♪

「これで許してあげる♪」

制服を着込み始める石橋…

カオルフリーズ中…

「じゃあね♪」

……

（イッシーとやっちったのか……俺…記憶がないんだけど…）

気持ちは切り替え、朝がたの騒動のあと、まずは処理を…

空いている奥の戦艦ドックにいき、体育館型シェルターをだす。
佐藤小隊、牧村小隊組のぶんだ…

次に、別の体育館をだす…　石井小隊の分だ…

また別の体育館をだす…桜井小隊の分。

最後にいくつかのシェルターをだす。
五所川原で拾った人たちの分だ。

もちろん各シェルターに扉をつけた。

戦艦ドックないのスピーカーマイクを使う…

「おはようございます。ご準備出来次第、各小隊毎に出てきて集合をおねがいします。
小隊でない方は、シェルター前でおねがいします。
加入の意思の最終確認をとりたいと思います」

……

どやどやどやどやどや

騒がしくなる……

「佐藤小隊横隊にあつまれ～」

「牧村小隊横隊にあつまれ～」

「桜井小隊、横隊に整列！！」

「あ、ことみ～」「ひろえ！！」

手が空いているコバッタ達が沢山きている。

カオルは佐藤小隊にまずは行った…

「敬礼！！」
ザ！！と一斉に敬礼するので、返礼をする。
「はじめまして、渚カオルです。では皆さん意思の最終確認をとりたいと思います…
帰りたい方は、遠慮せずに前の方へ出てきて下さい」

誰も出てこない……
が手が上がる…

「なにか？」

「質問よろしいでしょうか？」

「はい、どうぞ」

「あのロボットのパイロットになりたいのですが、可能でしょうか？」

「可能ですね…後ほどになりますが…よろしいですか？」

「はい！ありがとうございます」

「では改めて、帰りたい方はいますか？」

……誰もでて来ない…

「佐藤小隊、総員５０名、異世界軍に移籍し、この世界の剣となります！！」

「ありがとうございます。では宿舎にこのものがご案内します」

石井小隊の前に移動した、

「敬礼！！」敬礼がかかり返礼をする…

「はじめまして、渚カオルです。では皆さん意思の最終確認をとりたいと思います…

帰りたい方は、遠慮せずに前の方へ出てきて下さい。

また歩兵以外にも色々な道がありますので、その話は後程でおねがいします」

誰もでない…

「石井小隊、総員３０名、異世界軍に移籍し、この世界の剣となります！！」

「わかりました…ではこの者が宿舎まで案内します」

桜井小隊の前に…

「敬礼！！」返礼すると…

「渚カオル殿、当桜井歩兵小隊、総員２７名は異世界軍の、組織内で活躍したい所存です」

「わかりました…よろしくおねがいします」

「は！！」

桜井小隊は移動する。

（あとは牧村小隊と、拾った方々だなぁ…）

「と、はじめまして、牧村小隊の皆さん。俺が、映像にも紹介されてた渚カオルです。
では、加入の意思の最終確認をとりたいと思います。
帰りたい方は遠慮なく前の方へ出てきてください。
なをパイロット希望等は後程の説明になります」

誰もでてこない……

「小隊長さん、よろしいですか？」

「はい、総員５０名、異世界軍に移籍します」

「ではこの者が宿舎等案内します。今日一日は、この基地になれて下さい」

「はい！」

（さてと）

「残りの方々、とりあえず集まって下さい。あ、できれば知り合い、同小隊等でおねがいします」

集まってきた…３４名か…

「映像で紹介されました、渚カオルといいます。
加入の意思の確認をとりますので、帰りたい方は前にでてきて下さい。
また、職種の変更等は後程にお願いします」

誰もでてこない…

「皆さんよろしいですか？」

「はい」×３４名

「ではこの者が宿舎へと案内します」

（♪…あとＭＳ組だけか…医療カプセルも変えなきゃな…）

シェルター清掃をたのんでおいた…

＝＝ジオフロント医局＝＝

「マギーさん～」

「あ、カオルさん、おはようございます」

「と??」

カプセルがから…

「えっとＭＳパイロット３名は?」

「あ、はいはい、Ｂ－０１に加入になりましたので、寮に入ってますよ～」

「了解～」

医療カプセルを差し替えた…

カプセルは４名の学兵が入っている状態だった…

「マギーさん手筈通りよろしくお願いします」

「はい♪」

＝＝Ｂ５５ハンガー＝＝

（さてやる事は？）

［マスター］

「ん？１１号どうした？」

［１８歳以下の人と恋愛禁止だからね～］

「……わかってるよ…で？」

［彼女ら学兵なんでしょ？学業はどうすんの？
しかも２００名近い人数なんだけど…］

「あ～～～……」

学兵、１４歳から１７歳までの徴兵された第六世代強制学徒動員兵である。
４０万人動員され、内１０万人が熊本に捨駒として配置された…

九州撤退戦後解散になるも、無責任な報道により、多数の志願兵が増加。
４００万人の学兵は、
警備師団、山岳師団等二戦級に多数配属される。

親師団の番号をもつ3桁の数字で編成される。
俗に3桁師団、丙種師団とも…

（学校？？……そういえば…）

「なぁ日本の徴兵年齢何歳だっけ？」

［男女とも１６歳からただし、
京都まででかなりの男性衛士を失ってるよ］

（とうなると？？二つに別ける必要ある？？）

軍事訓練校と、学兵校……

「先生は？」

［座学は自分達でもてるね～、訓練は桜井小隊さんでいいんじゃない？］

（そうだなぁ、現役自衛軍、しかも第六世代だし……あ、まりもさんにも聞くか…）

とりあえずジオフロント内に学校を作る事確定しました。

Ａ７に建設を頼んだ。

［あとマスター、３０００程の群、連隊規模の進行が長崎県地方に向かってるのと、
燃料の報告等ね～］

「お、きたん？いつ？」

［明日、昼間２時過ぎ予定場所は旧長崎港］

「Ｂ－０１と桜井歩兵小隊、あとは魔と、撃震帝国仕様と…
検証したいし、俺の分の烈火作るか…
下駄で行けばいいか…できてるよね？」

［８０機程できてる～］

「じゃあ帝国さんにも出るって伝えておいて…であとは？」

［ミデアの件、ヘリウム燃料１２００機分のタンクだったよ］

「ほう…とりあえず３０分の１揃ったか」

カオル？３０分の１？

「陸戦強襲型ガンタンク２万機つくるつもりだよ」

日本帝国保有機数よりも…多いよね？

「だね」

その機数で佐渡島ハイブを？

「勿論」

佐渡島ハイブ落ちるの確定……

格納庫足りなくない？

「増設するよもち」

ちなみにカオル好きな将棋の陣形は？

「穴熊」

シュミレーションで得意な戦法は？

「内政重視、敵より開発、一気攻勢」

だそうです…先に進めましょう。

［マスター最近壊れぎみ？］

「うっせ、で製造するぞ」

烈火桜井小隊２７名分＋１名分

Ｂ－０１は３名分注文するけど明日は連れてかない…

（烈火の武装ねぇ……）

引き込んだ学兵達の武器を弄ってみたが、異様に重いのだ…

（なんで？）

「なぁ１１号なんでだと思う？」

［えーとね……装弾数、威力、耐久性の問題でかな］

とりあえずガンパレ世界から持ち込んだ武器で使えそうなのが、

９７式軽機関銃
９６式手榴弾
８２式煙幕散布器
９８式増加機動装甲
超硬度カトラス
零式ミサイル

あたりかな？

９７式機関銃は重量１６ｋｇながらも、装弾数、８０、
烈火なら片手ずつ２門装着可能だし…可憐なら４門…

９６式手榴弾……重いね。けど威力はある…はず

でもアデレイトアサルトライフル？
イマイチ意味わからん…何故３２ｋｇの重量ありながら、装弾数がたった４０なんだよ…
威力か？
弾が問題なのか？？

確かに弾がかなり重い…

まぁ明日検証する事にした…

それぞれ適当に製造を頼む。

また、明日は下駄で飛ぶ為、兵員輸送コンテナを作成した。

［マスター、副司令から伝言きたよ。明日Ａ－０１連れていけだって］

「あ、そう？じゃあ下駄搭乗で～といって、明日１１時に出ると」

［イエスマイロード］

（えっとあとは…学兵達の着るもの……
ＵＮＩＱＬＯみたいな工場つくるか…なぁ…かなり多い…）

上がってきたパーソナルデーターを入れ、「〝世界扉〟」

メールを送っておいた。

（えっとあとは…まりもさんと…潜水系は帰ったらでいいや…あ、）

「１１号、テンプテーションを…５０機と、乗組員に…Ｔ－シリーズできる？」

［……何番台？］

「Ｔ－１１００まぁＴＯＫの子」

［なら可能～Ｔ－８５０の１０１と、Ｔ－１０００は生産不可ね］

「ん…シャトルの添乗員分によろしく」

［ただ最後は、マスターが調整した方が調子が良いよ］

「やっぱそんな制限が？」

［うん］

「あとは…まりもさんに、相談しにいくけど、１１号抜けてるとこないよね？」

［配置はまだだから…うん大丈夫］

「じゃあ、あとよろしく～」
＝＝まりもちゃん私室＝＝
コンコン「まりもさん～カオルです」

「あ、はい。どうぞ～」

シュン

「失礼します～」

「カオルさん、どうされたのです？」

「と、実は学生が２００人以上加入しちゃって、
でこっちの方のカリキュラムってどうなってんのかな～？
って」

「２００人もですか…あ、カリキュラムですね？前期では、主に座学で、戦術、各基礎的なもの、また実技で体力作り、武器との取り扱い等を行っています。後期では、シュミレーター、実機訓練、対ＢＥＴＡ戦術、体力作り等より衛士的なカリキュラムになります」

「学業は？」

「訓練校では必要ないので…前期、後期二つ合わせて１０ヶ月では到底足りません…」

（確かガンパレ九州は２週間で実戦に、ほうり込まれたんだっけ？）

「成る程……どおっすかなぁ…」

「あの、私のカリキュラムでしたら、そのまま渡せますけど…」

「あ、本当っすか？是非ともお願いします」

「はい♪」

「じゃあ、ありがとうございました。
またなにかありましたら来ますので」

「わかりました。お待ちしてます」

……

カオル報告
ガンパレ世界の新取得…
多目的リング
アデレイトアサルトライフル
９７式軽機関銃
９４式小隊機銃
９６式手榴弾
８２式煙幕散布器
９８式増加機動装甲
超硬度カトラス
レールガン

イッシーどう責任とろう……

作者「イッシーとうとうやったか…まりもちゃん出遅れてんなぁ…」

あ号「うむ」

ナギ少尉「甘い！甘い！」

作者「ナギなにが？」

ナギ少尉「あたしの艦長も、おばさんに靡くから、ひっしのアプローチも全て無駄になってんのよ！！」

作者「……あぁ」

ナギ少尉「だからここは、更なるエッチな事を！！」

作者「Ｒ１８になるから……」

ナギ少尉「よく他のと同様に本編に書かなきゃいいの！！」

作者「あ～……」

ナギ少尉「あとは修正でもなんでもイレ込めばいいのよ!!
なにキスだけで終わらしてるの!!」

作者「……石橋とカオルのシーンだと?」

ナギ少尉「もちろんスッポンポンにして、あんな事こんな事」

作者「それをバキュン修正で?」

ナギ少尉「そうよ!!」

作者「……1ページがバキュンだらけになるなぁ……」

ナギ少尉「それでもやれ!!作者!!」

……恋愛もの苦手なんだけど、どうしよう??

第６１話　２００１７１９　長崎上陸防衛戦　投稿日２０１１０２０３

２００１年７月１９日…朝

「”世界扉”」

とりあえずメールの返信を確認する。

（さすが田中さん仕事が速い…）

そのまま平和日本にいく…

（確か出撃が１０時だから早くかえって来よう…）

＝＝　現実世界　＝＝

衣類詰まったコンテナを受け取る。

「”世界扉”」

＝＝Ｂ５５ハンガー＝＝

カオルはジオフロントにコンテナを置いたあと、

烈火を着用し

ハンガーに勢揃いした、Ｂ－０１、桜井小隊の前にでた。

「傾注！！」

「おはようございます。」

「おはようございます」×多数

「今日は、長崎に進行中のＢＥＴＡ連隊規模の迎撃に、向かいます。
当方の戦力は、Ｂ－０１の魔ドム２８機、桜井小隊烈火装備２７名、
ヤドカリ付きのホバークラフト、整備補給班、
それと、Ａ－０１中隊の皆さんが加わります。
皆さんは初出撃になりますが、
魔ドムの性能は保障できますので、対ＢＥＴＡ戦に慣れるようにお
願いします。
桜井小隊の皆さんは、まだ対ＢＥＴＡの検証が出来てません…
が、慣れる為ですのでお願いします。
では各自隊長の指示の元、頑張ってください。

各機搭乗!!」

下駄のハッチに乗り込むパイロット達

下駄には2機ずつドムが搭乗している。

烈火は下駄のスロープから上り、兵員輸送コンテナに乗り込む。

カオルも、烈火を着用していたが、ＣＩＣ兼ねたコンテナにのりこ
む。

「各機発進！！」

フィィィー

下駄が前進し、戦艦出入口から上昇する。

海原をすすむ、１９機の下駄…

そこに６機の下駄が合流した…

Ａ－０１部隊の魔不知火だ…

「カオルさん、Ａ－０１全９名合流しました」

「伊隅さん、今日はよろしくお願いしますね。

と、俺は今回は指揮とらずなので、各隊長と打ち合わせして下さい」

「は！！」

一路海面上を四国南、九州南のルートですすむ。

＝＝　長崎港　＝＝

偵察衛星から捕らえているＢＥＴＡ群は、一路長崎港を目指していたため、迎撃準備にかかる。

帝国さんはフォローにまわるとの事だ…

「きたぞ！まずは先頭は突撃級だ！落ち着いて処理すれば怖くない」

海面からＢＥＴＡ先頭集団が顔をだす…

「撃てぇ！！」

ザクマシンガンが火をはなつ…

ビシビシビシ　動きをとめる突撃級…

その死体に進路を塞がれ更にスピードが落ちる。

桜井小隊はまだ後方待機中…

そんななかカオルは、

暫定隊長達に好きにやらせ、突撃級に挑んでいた。

零式ミサイルをはなつ…が、スルっと装甲を滑って上空へと…

（ありゃ…なら？）

少し浮かび速度をあわせ…装甲殻に直角になるようにうつと…

装甲殻にあたった時に、ノイマン効果により貫通、体内をグシャグシャのミンチに仕立てる。

単純にＨＥＡＴ弾頭による問題だった。

武器を虚数空間で入れ替え、次の突撃級に目をあわせ…
アデレイト・アサルトライフルを発射！

は、貫通はするんだけど、致命傷になるまでが長い…弾薬を1カートリッジ使ってしまった…

（ち、使えね～なぁ…）

もう一匹に目を向ける97式は……貫かずきかない。
カトラスに持ち替え、速度同調しながら切り付けると…サクっと装甲殻をきる。

（しかし…解体しがいがある巨体だなぁ…）
近場で見るとでかい……

そのまま、装甲殻に取り付き、カトラスを切り付ける…
サクサクサクで肉が見えた、そこからさらに…
グシュグシュグシュブチュ
…で動きがとまる。
（長さが足りないな……）

単純にカトラスのリーチの問題だった。

（と、すると…）

もう一匹の突撃級に取り付き、
サクサクサク
までは一緒…
バラララララ
９７式をその開けた穴から打ち込む。

２秒程で動きがとまる…。
けどこれも体液がかかる。

（まぁ突撃級には烈火は力不足…
っう事ね単純にサイズの問題か…）

もう一匹の後ろに回り後ろから９７式を打ち込むと…
６秒程のフルオートで動きがとまった。

（けど、この距離まで近づかないと駄目か…）

ｓｉｄｅ　～桜井隊長～

打ち合わせ時…
「とりあえず後方待機ですってぇ？」

「ええまぁ…前衛の突撃級はサイズの問題があるので、
中衛あたりに混ざってくる、小型種をメインに狩ってください」

「わかりました…」

（の事があったのに…　カオルさんずっこい……）

「隊長、やはりサイズですかねぇ…」

カオル烈火が空中に浮かびながら、
９７式機関銃を試しているのが遠目に見えている。

戦況は一方的といっても良いだろう…

「けどまずは、装甲殻でしょ…
わたし達の世界には、あんなシールド的なのもつのは、居なかったから…」

「あと確かに正面から当たれば烈火とて無事には、すまなさそうですしね…」

（そうね……オウルベアに踏まれた烈火のようにね…）

「けど、この新装備で速度あわせれば、倒せない敵でもない…って事ね」

「まぁ、他のが強いからしょうがないでしょ…とりあえず見学よ」

「あ～暇！！早く中衛きてよ…」

ｓｉｄｅ～桜井隊長～ｅｎｄ

突撃級をかなり狩ったあとに中衛が見えはじめた…

光線級はまだみえ…きた！！

受けてみる…１，２，３，４，５，６，７，８，９，１０，１１，１２，１３，…

耐えきった。ジーッと見つめる瞳…

きた…　２照射も装甲に被害なし…

（さすがキメラレーザーに対抗できるだけはあるな……）

３照射目……４照射目……の時に、横から殴られた！！

吹き飛ぶ烈火！

（いつつつつ……なろ…）

そりゃ、１分以上いればね……

装甲は若干歪んではいる……

（検証中だったのに……）

修復し、零式ミサイルを構えてかます！！

パシューードーン

要撃級爆散する。

（光線級は？？）

潰れてた…

（ｏｒｚ……レアなのに……）

カオル次の獲物を…

（兵士級か……）

右腕を兵士級の歯に噛まさせる。

兵士級苦しそうにしている。

（ま、兵士級は雑魚と…歯は問題ないな…）

ハンマーパンチで潰す。メチャ

次は……戦車級か……

ここで帝国仕様の撃震をだした…途端にたかる戦車級…
カジカジカジカジカジカジカジカジカジ
カジカジカジカジカジカジカジカジカジ
カジカジカジカジカジカジカジカジカジ
カジカジカジカジカジカジカジカジカジ

回りが戦闘しているなか…時間計測中…

（一応、歯はたっているんだな……フム）

装甲かじり始めて3分で突破されたので、、
カトラスで切り落とした。

すると、要撃級が撃震を殴りはじめたので、同じ計測する…

（フム、若干ずつ歪み始めるか…
おんなじ箇所１０発喰らうと歪んで駄目になってくるか…けどまぁ…）

壊しかけたので９７式をぶちかます…
３秒程で沈黙。

撃震同化し修復させ虚数空間に…

（さてっと……）

アデレイトアサルトライフルをとりだし、
兵士級をターン！
闘士級をターン！

それぞれ顔面からのヘッドショットで沈黙させる。

戦車級をターン！

（こいつもヘッドショットなら有効か…９７式だともう少し近寄らなきゃかな？）

試しに戦車級にターンターンターン…

３発で胴体部分は沈黙した…

（あとは……）

戦車級に右腕ハンマーパンチ部分を噛ませてみた…

ギギギギギギバキ！

２０秒程でかみ砕かれた…

お返しに左腕ハンマーパンチで潰し、口の中にはいった手をとりだし、
同化して修復する…

（でもまぁ…このサイズなら1対1だし、問題ない？）

戦術機はたかられて、それを自分で対応できなくて、装甲を突破されるからだ…

（噛まれたら即パンチ繰り出せば良いだろう…）

カトラスをとりだし、道を切り開く…

ザシュ、ザシュ、ザシュ、ザシュ

要撃級までいくと、殴られにいった…

（おんなじ箇所4発が限度か…）

装甲が人工筋肉に食い込み、動作不良を起こしはじめた…

前腕をくぐり抜け、頭のようなしっぽでなく、中央を切り裂いた…

沈黙する要撃級…

同化し、修復

アサルトライフルをとりだし、別の要撃級にヘッドショットをかます…

2発で沈黙。

別の要撃級に胴体に銃撃をかます…

（１０発か……）

中衛も一方的な優勢をかましてると…

海面から……

要塞級の巨体が海面の上にみえてくる…

まだ水面下に胴体があるが…

カオルは零式ミサイルを構えると空中に飛び出した…

（けど、でけえなぁ……）

生身でみたらそんな感じにとらわれる…

零式ミサイルをはなつ…

パシュー

……まだ動いてる…

パシュー

（まだかよ…）

体内で爆発し、そこから体液がでてるのは見えるが、
まだ沈黙はしてない…

パシュー、
やっと動きが鈍る…

別の零式ミサイルをだし…

パシュー、パシュー……

動きをとめる要塞級…

（オウルベア並か……）

カオル、
ガンオケでのオウルベアに突撃したスカウトプレイを思いだした…。

（要塞級はＢ－０１、Ａ－０１に任せるか……）

そして要塞級の巨体があがってくるとともに重光線級が、
空中に受かんでいるカオルに向かい、レーザーを放つ。

カオルは避けずにうけとめる。１，２，３，４，５，６と数え…３０秒目で融解始めた…ので射線をかわし、零式ミサイルをはなつ。

背後からの攻撃に、沈黙する一体目…

別の重光線級がみえたので、煙幕手榴弾を試してみた…

あたりに黒煙が煙りたつ……

（生体レーザーなら……）

煙幕手榴弾は黒煙の中に含まれている塵によりレーザーを激しく減衰、
無効化させるのだ…

少なくとも、重金属雲のような環境被害は気にならない…

試しに～とおもったら、

かなり効いてるようだ…

レーザー発射はするが、
こっちに届く前にもうなくなる…のが見える。

「重光線級はラスト一匹だけはのこしてくれよ。
あ、要塞級も一匹はな」

「了解！！」

そう、通信するとカオル両手に零式ミサイルを構えて突撃する。

そして……

重光線級ラストの1匹の前に、撃震をおく…1，2，3，4，5…

40、一照射目終了……

（かなり赤いなぁ……）

二照射目…5秒目で装甲貫通確認、ミサイルで沈黙させる。

撃震をしまうと…

「カオルさん、言われた最後の一匹ですが…」

「おう、サンキュー、要塞級にタイマンするから手をだすなよ…全隊、撤収準備」

「は、はい…」

カオル烈火が要塞級に挑む!!

要塞級が怖いのは、下から狙うのに、

死角がない触手による鞭撃と、

溶解液の存在だった…

上空に出れば勝てるのはわかってたから今回はしたから挑もうとしてた…

「く！！しつけえ！」
触角が襲い掛かる…

「カオルさーん援護しましょうか？」

「いやいい！！」

けど鞭、めちゃめちゃおってくるんすが……

（しょうがねぇ……）
ハンマーパンチを潰してでも止めようとする…

（げ！！）

ハンマーパンチが貫かれ……
両方のパンチをクロスしてたところだったのが幸いだった…

（アッブネー）

ボタボタボタボタ

突き刺さった部分から溶けはじめる…

（ちっ！！）

ハンマーパンチを切り離し…

「”加速”」

カトラスを両手に構え、鞭をかわし……根本を切り付ける…人工筋肉が加速に耐え切れず引き裂かれ…たが、触手を切り落とす。

ブチィ！右腕が装甲材ごときれた。

「パイル！！」

カオルは、右腕を光の槍にすると、下から要塞級を貫き、一度引っ込め、また貫いた……

崩れ落ちる要塞級…

カオルは巨体をぬけだし…　離れると、崩れ落ちる巨体をみつめた…

「流石に烈火じゃ厳しいか……撃つ暇なかったしなぁ…」

「カオル！！」「カオルさん」「大将どの！！」

「おう、終わったよ…さ、撤収だ…連絡よろしくな～」

カオル素肌が見えてる右腕をふりながら、烈火を待機してた下駄まですすめた…

……

カオル報告

最後が余計？疲れました。

今日の戦闘結果は明日…って事で

第６１話　２００１７１９　長崎上陸防衛戦　投稿日２０１１０２０３（後書き

作者「さて久々の戦闘だなぁ～」

カオル「烈火こわれちゃったなぁ～」

作者「ガンオケのオウルベアより強かったみたいね」

カオル「うん。触手が以外にうざかった……」

作者「あと、１機後退してるぞ…」

カオル「え？？」

作者「まぁそこは明日の話しでな…で生身サイズからみるとどうだった？」

カオル「うん…グロイね」

作者「ところで手榴弾つかってないなぁ…」

カオル「あ……やっべー……作者どうしよう？」

作者「桜井小隊さんに聞いたら？」

カオル「あ、…そっか…けどグレネードがないんだよね、ガンパレの世界って…」

作者「ああ、投擲で十分届くっう話だからね１ｋｍもね」

カオル「チートだのう…」

作者「おめーがいうな」

第６２話　長崎防衛戦後７月２０日　投稿日２０１１０２０４

２００１年７月２０日
カオルは昨日のレポートを見ていた…

中破１
小破６
パイロット損失なしだった。

内訳が、
中破……　高速移動中に真横から突撃級の突撃をくらい、横転…
その際に駆動部に極端な負荷がかかり、
動作不良起こし戦闘行動に問題あり、後退…

装甲、パイロットは無事…

レーダー見落としの為…

（ん～こればっかはなぁ……）

小破も要撃級に殴られ、やはり駆動部に支障きたすも…戦闘行動問題なし…か

一機は要塞級の脚による串刺しに抵抗した為、駆動部に負担…となっている。

光線級がすくないので照射被害はなし…と

（むやみに、近接戦闘挑みすぎか…の結論しかないわなぁ…あと、突撃級に要注意か…）

あとは特には問題なしの為、洗浄作業を続けさせている…もうすぐ終了する。

（に、しても……）

大破した烈火…をみ…

（結局昨日は、能力つかわなきゃ、要塞級勝てなかったしなぁ……ザクマシンガンもてるように改造するかな？）

サイズ的に無理だろ！！

カオル次の項目にも目を通してる…

（お掃除も必要なんだな…）

帝国軍が火炎放射タンクでお掃除しているレポートが上ってきている。

（作る必要あるか…けどネタが結局火炎放射機しかないよなぁ…陸戦強襲型ガンタンクしか…後回し）

Ａ－０１レポートをみた。
（特に特記事項はないか…うん。まぁ大丈夫そうだな）

とりあえず昨日のレポートは確認済み。

（帝国仕様の撃震は、ほぼよさ気かな？あとはバルカンポットをつけ送るか…）

帝国仕様撃震
最終改造点

装甲、ヒルダ＝ビダン合金

ｏｓ　ｏｒｎ
ｃｐｕ　ｏｒｃ

追加武装　外装式バルカンポット
高周波ブレード　パック式
ザクマシンガン

で送りだした。

（さてと、水中ねぇ…マッドアングラーだすか…）

戦艦ドックへ……

「よっと……」

ｏｒｚ　になっていた…

サイズが出入口よりもでかいのだ…

全長３２０ｍ…全幅１０５ｍ高さ１００ｍ

巨大な潜水母艦であった……

カオルはしまって……

「１１号、港湾設備よろしく」

となった…　戦艦出入口のプールの海側のほうに作りはじめた。

カオルはハンガーに戻り、

「なんか報告ある？」

［コロニーの充填早まって２２日に完成できるよ～。

空港施設８０％だからとりあえずはできそうだね］

「そうか…帝国さんの難民担当へ連絡だな」

［あといよいよ戦艦用マスドライバー完成したよ］

「お、で…あれも組み込んでるん？」

［勿論］

「うっしゃ、じゃあ早速お披露目といきますか」

［イエスマイロード］

＝＝　横浜基地司令室　＝＝

司令室では急遽決まった戦艦の打ち上げで、大慌てになっていた…

「進路クリアです！！」

「発進までＴマイナス６０」

「しかし、こんなのが打ち上がるんですね……」

司令室の映像モニターは、
戦艦用マスドライバーのカタパルトに、セットされているサラミス改が、
映し出されている。

サラミス改の後方には熱風を上空に逃がす、
遮蔽板が立ち上がっていた。

「ええ、宇宙の治安をまもる。それがお約束ですしね」

「発進までＴマイナス２０」

（シャトル発進とは違う迫力だよな…）

「Ｔマイナス１０，９，８，７，６，５，４，レディ，ステディ，ゴウ」

カウントとともに、核熱ロケットから、炎がＭＡＸパワーで吹き出す。

カタパルトキャノンがロケットと合わせて１０Ｇの加速度でもって、
巨体の戦艦を前に押し出す。
１７秒後には１５ｋｍを約、１．７ｋｍ／ｓに到達し、
サラミス改を空へと打ち出す…

「た～まや～」
サラミス改は白煙をあげながら、大気圏外へと目指す…

残りは反重力推進の力もかり、大気圏外から、Ｌ５へと向かう…

そして、２０日夜…
「”世界扉”」

開きながら田中さんに電話した…

プルルルルプルルルル
「カオル様？お待ちしておりました」

「ばんわっす～で退治の打ち合わせなんですが……」

打ち合わせ話は続く…

２００１年７月２１日

打ち合わせ通り、某駅のマックで待ち合わせだった。
ハッシュドポテトは結構好みで、
ソーセージエッグマフィンのセットに、追加の単品追加してた。

因みに香月博士にばけている。

（あ、田中さんだ…）
手をふり招きよせる。

「おはぁ～」

「おはようございます。今着用されてるんですか?」

「ああ、着用しているよ」

カオルの声が女性の声、つまり香月博士の声で、はっせられている。

「これ…がですか?」

「スイッチは切ってるから安全だよ～触ってみる?」

「え？……は…い…」

プニプニプニ

「本物ですね～」

プニプニプニ

「じゃなきゃ、釣れないし撃退できんしね」

ツツツー

「こっちもなんです？」

「勿論」

擬音かいたらやばいので略。

「あ、……本当……」

「ここら辺は苦労したって話だよ…

肉体をスーツの中で圧縮させる技術とかさ…
こんなこともあろうかと！！ってたな～」

端から見ると女の人が隣の女の人を、
朝から全身をマック内で触りまくってるね…
しかもいまは手が変な場所に…

解説しよう！！
カオルがきているスーツはカオルの幻影に合わせ、
肉体を圧縮、表面を表しているものにする、
ナデシコ世界のナノテクノロジーの塊なのだ！！
まさにご都合主義コラボレーション！！

「盛り上がっている人は置いといて……
で、電車に乗るから、田中さんはシェルター内にね～」

「はい。よろしくお願いします」

ただし着用は一回こっきり、ぽっきり一億円！！

「作者つぎいくよ」

ううううう……解説さしてよ…

カオルは田中さん引き込み、女子公衆トイレにはいると…
「”幻影”」

田中さんになった…
「あ、あ～～♪よし」
田中さんの声にかわったのを確かめると、
カオルはさっそうと歩みを進める。

改札をモバＳｕｉｃａで通る。

（この時間の列車か……）

エスカレーターを上りきると、

通勤快速、新木場行きがくる…
プシュー
扉が開き…列に並びながら、
車内にそのままの押されながら入り混む。

「もう少し中に詰めて下さい！！
……鞄もって！！押しますよ！！」

扉間際ではアルバイト駅員が、
扉を閉めようとひっしに押し込んでくる。
バタン

扉が完全にしまり、アルバイト駅員は、
他のしまってない扉を確認しにいく…

ガタン……ガタン、ガタン…

列車は走りだす。

（かー…久しぶりにのったがきついなぁこれ……）

何しろ他人の鞄が前にあるのだ…
また他人の腕が変な方向に伸びているのがわかる。
カオルはしかも宙に浮いていた…

しばらくは何事もなく進む…

赤羽駅手前でスピードが落ちてきて……

「ただいま停止信号です。しばらくお待ち下さい」

（うん、よくとまるよなぁ…
過密ダイヤをどうにかしろって言いたいもんだ…）

ガタン…
列車は動き出し…駅ホームに進入する…

プシュー

扉が開こうとするが、人圧でなかなか開かない……

開いた、人が一気に流れ出す。
カオルは田中さんに言われた定位置を目指す。
「でるかたがいます、もう少々お待ち下さい！！
……降りられる方はいませんね？…どうぞ！」

ドヤドヤドヤと人が入ってくる…

カオルは、ムギュっと押し込まれてきた…

（こいつか？それともこいつか？いや？）

変な方向に乗ってきた人が何人かいる……
そいつが、カオルを押し込んでいるのだ…

「次の列車をお待ち下さい！！」

プシュー……ガタン
列車は悪意をのせ走りだす…

（きた！！2人か……マーカーはついたな…）

さっそく、揉まれ始める…
網膜投射でマーカーがついて、場所をしめしている…

（ん？増えたぞ……）

プシュー
「十条十条～」

試しに降りようとするが、バックが引っ張られまた前を塞がれ、降りられない……

（うは、マジか逃がさねーつもりなのか…）

カオルおとなしくなる…

プシュー…

ガタン、ガタン…

（7か……）

痴漢の魔の手が大胆になってくる…

プシュー
「板橋～板橋～」

ドヤドヤドヤ

この駅で入れ替えはある…
マーカーついた内の二つの反応がここで降りていった…

カオルここでも降りようとするが、
押しつけられ降りれない…

ドヤドヤドヤ

人が入ってくる。

プシュー

ガタン、ガタン

（5のはずだろ?…また増えてやがる…）

一つの反応は別の方向にいってる…

今まで、累計15マーカーがついている…

次は池袋だが、
痴漢の魔の手は下着の下までおよんでくる…

（無抵抗だとこうなるんだよな…）

池袋につく直前に手はひっこめられた…

多分、田中さんがこの駅で降りるの知っている…常連痴漢だろう、

かなりの手が引っ込められてる。

（15か……後でのお楽しみだな…）

プシュー

「池袋～池袋～」

ドヤドヤドヤ
人の入れ替えとともに圧力が弱まった…

カオルは解放され、ホームにおりる。

改札口から公園の方へ向かうと一つの反応がついてくる…

（おいおい…）

公園に差し掛かると…
トイレに押し込まれた……二人にだ…

「うへへ…ねーちゃん、早くいれさせてくれよ～」

「さっきの痴漢ですね？警察呼びますよ？」

「あん？うっせえ！！」
バチン！

平手で叩かれる…
「てめぇ同意してたろう！！」

「なにが同意ですか！！」

「無抵抗はなぁ、何されてもいいんだよ！！おとなしくしろ！！」

カチャカチャ…物をだしてきた…

（流石にぶち込まれるのはやだな…抵抗すっか…）

ガツン

「な！！て、てめえ！！」

声紋スイッチオフ

「おめえらさ、いい加減にしろよ…なに勝手な理屈こねてんだよ」

「な、男声？？……」

「おたくらみたいな犯罪者が、軽いからっていって何回も繰り返す…
だから泣く女性が増える一方なんだよ！」

「は？痴漢は現行犯でなきゃ逮捕できねぇだろ！！」

「なのでこういったのを用意しました～♪」

「おまえ、どこから？」

右手に見えるのはボタン式スイッチ…

ポチッとな…

片方の男が途端に痛がり始める…

「ギャアアアァ、手が手がいてぇぇぇ」

今ごろ反応がある１５は、同様に悶えているだろう…

「な！！お、おい大丈夫か？」

「ギァアアア手が、手があつぃぃぃ」

「てめぇ何した！！」

「あ～この人の両手使えなくします。
使えなくすれば痴漢はやれないですよね？」

「な！！そんな事していいと思ってんのか？犯罪だろ！！」

「犯罪おかして、自分が被害受ける番に犯罪って可笑しいよね？
それに報いる罪必要だと思わない？」

「ギャアアアァ」

「や、やめてくれ…」

「や・め・な・い・よ・それに手遅れだし」

「ギャアアアアア！！」

両手が肘先から、強酸くらったみたいに熔けだした…
もう使えないだろう…

（うん痴漢どもにはお仕置き完了あとは…）

「さぁ、おまえは、婦女暴行犯だよな…」

「ひっ…」

「ちょうどだしている物あるし、ちょん切っちゃえ♪」

「ヒギャャャャャ」

切り落としてあげました…
そのまま切った先はばっちいので流す…

きったハサミはレーザーで焼却処分っと…

記憶を消してっと……

外にでて…田中さんをだす。

「とりあえずお仕置き終了しました…明日からは多分大丈夫かな?と…」

「えっとありがとうございます。ところでお仕置きって?」

「ん?……ひ・み・つ」

「は、はぁ…」

「あとさ、田中さん、痴漢にあったとき痴漢！とか叫びました？」

「目で睨んだりしただけです…」

「あ～そりゃ辞めないね…痴漢と叫んで周りに協力を訴えないと…
あと、なんらかの抵抗できるも必要だよ…

例えば女性ならヒールで相手の足を貫くとか、
裁縫針で痴漢の手をおもいっきりぶっさすとか…」

「え？でも…」

「そこらへんだったら正当防衛にはいると思うし、
ましてや痴漢して、そういった抵抗され怪我しました！
なんて恥ずかしい事できると思うわけないでしょ？
まぁ、催涙スプレーやスタンガンは別の周りに被害がでるから駄目だけどね…
でもさ、無抵抗や恥ずかしいから叫ばない…
痴漢が増長する元なんだし……」

「わかりました…今日はありがとうございました」

「ま、じゃあ…仕事に戻ろう…またあったら言ってね…
と再生資源納品だけど…」

「あのカオル様？いつまで私に？」

「あ！！じゃあ脱いでくるから後でいい？」

「2時間後にでも…」

「ういっす”世界扉”」

カオルは脱ぎに行きました…

もどって…きて、
納品場所に田中さんがまってました。

再生資源を渡すと…

「……こんなに見事に……これでしたら、
反対に、こちらからお金を払う事になりそうです」

レアメタルとかものの見事に再生できたし～

「じゃあ、帝国側にもそう話して…？」

「あ、はい構わないと思います。
差額分はこちらでの買い付け資金に…との事で」

との事になりました…

＝＝　都内のテレビチャンネル　＝＝

「本日9時頃、都内各地にて、突然一斉に苦しみだし、両手がなくなる…という事件がおきました。
警察では原因不明としながらでも、
なんらかの因果関係を捜索中です」

「いやぁ～凄惨な事件ですね～
…しかしその中には痴漢の再犯歴ある人がいたそうじゃないですか、
神様が天罰を下したんですよきっと…」

「次のニュースです。本日池袋西口の公園内において、傷害事件が発生しました…えっと放送できない部分を切られて、全治1週間だそうです」

「この事件ってニュースで流すネタなの？」

「デレクターがあたしの反応みたいから流せって渡されたので…」

チャチャチャ

ニュースは終わる…

第６２話　長崎防衛戦後７月２０日　投稿日２０１１０２０４（後書き）

あ号「……作者やり過ぎでは？」

作者「ん？俺的には個々までしないと、この二つの犯罪は再犯を犯す…って思うからなぁ、
よく被害者に人権はないのか？論者だし～」

あ号「……」

作者「痴漢は正直軽すぎるよ…捕まって、何回再犯おかしているのいる？
強姦だってそう…
あと死にたいからって、秋葉原の連続殺傷事件…
あれだって死刑が望み通りなんだから、正直軽すぎるね…
あとは松戸の女性監禁、放火、殺人事件…
一人の女性をもてあそんで、ころして、証拠を隠そうとして、
で多分懲役１０年位だよ…正直おかしいと思うよ…」

あ号「……かなりイレ込んでるな…」

作者「残虐刑の禁止だっけ…まだ昔は倫理あったけど、今最近ついてきてないし…つうのが持論だね…
まぁせめてアメリカでの性犯罪にたいして、ＧＰＳのなんかの一生

着用義務で周囲の監視…や被害者によるやり返しＯＫ位してくれないと…ねぇ」

という作者の独論のあとがきでした…

けど女性への同意なき暴力による犯罪は反対、痴漢反対

は崩れません。

なので、まりもちゃん…助けたかったです…

第６３話　コロニー計画実行　投稿日２０１１０２０５

２００１年７月２２日
コロニー完成したため、カオルは帝都城に来ていた。
難民キャンプへの政権放送を行う為にだ…

（やべーテレビか、緊張すんなぁ……）

「カオル殿」

「あ、殿下！！」

「よい、顔をあげよ…して、一つ聞きたいのだが…」

「はっ…なにをですか？」

「カオル殿は……伴侶となりそうな決まった者がおられるのか？」

（……イッシーの顔が浮かぶ…桜井少尉も）

「あ……まぁ……」

「……そうですか……ところでわたくしの事をどう感じられます？」

「大変美しいです」

「もし、今ここで婚約の儀を行うとしたら？」

「殿下おたわむれを……ですが本気だと仮定してですが、彼女達に悪いので、できないですね…」

「ほう？達とな？複数いるのか？……カオル殿位なら…いるのか……しかし日本では一人しか伴侶選べぬぞ」

「で、泣く女性が増えるんですよね……男性が圧倒的に少ないのに…多重婚あれば悩まずにすむのになぁ…」

「多重婚のう……おぬし、多重婚できればわらわからも？」

「まぁ…ですね、でもできないから無理ですね…」

「殿下、大将閣下間もなくお時間でございます」

スタジオ中央にそなわっている演台へと殿下がすすむ…

「我が親愛なる国民の皆様、長きにわたり多大な苦難を強いている事、
しかしながら、
先日、国連異世界軍の渚カオル殿よりある重大な提案がありました。
全世界を動かす話ですが、まずは日本国民の皆様からとの事ですので、紹介を致します」

殿下が画面から消え、カオルが、かわりに出てくる。

「ご紹介に預かりました、国連、異世界軍所属、渚カオル大将です。
さて、まずは皆様にある一つの計画のご説明をいたします。
その大元は、地球上ではなく、宇宙にある島…スペースコロニーの完成による、大地の確保です。」

画像がスペースコロニー外観を映す。

「このコロニーは宇宙に浮かぶ島、直経６ｋｍ、全直３０ｋｍに及ぶ円筒形の形になっています。
」
内部からの映像になる。

「中には大気が地球上と同様にあり、また大気浄化システム、水ろ過、上水道システム等備わっています」

内部のマンションをうつしだす。

「またこの様に、中では各家庭ごとに一室、用意されていて、一つのコロニーに平均１０００万人住む事が可能となっています」
画面が外側のリングへと進む…

「食料に関しましては、最初は異世界軍の農業コロニーから提供しますが、
いずれ、この農業プラントにより自立した食生活をおくれるようになります。」

「また安全面に関して…」

内部で爆破実験の映像
「このように爆破されても安全な構造になってますし、万が一穴が空いても」

ゴムが飛んできてふさがっていく……完全にとまり空気の流出がとまる…
「緊急展開可能な安全処置は施されてます」

「また、コロニー自身の安全を守るため、」
サラミス等モビルスーツ隊の映像

「異世界軍による防空隊が展開し、日夜安全をまもります」

画面はカオルに戻る…

「さて、このスペースコロニーですが、全世界の難民の皆様、まず

は、日本国の住む場所を失った難民の皆様に入ってもらいたい…と思っております」

「母なる大地から離れたくない！！と思っていられる方も、確かにいられるかと思います。ですが、難民の皆様、その生活に満足できてますか？安心できてますか？」

「このＢＥＴＡの脅威がない島に一時的にでも移って頂き、地球が安全になった時改めて選択をしてもらう…」

「また、皆様の力を借り、ＢＥＴＡを打ち砕く力を育ててもらう」

「その為に宇宙に安全な拠点、都市となり、安全、満足、自立した生活をおくって貰いたい…そういった所存です」

「また、それぞれのスペースコロニーは基本的に国単位となり、皆様は日本国民のままです。
新たな島に移って安全な自立した生活をおくってもらいたい…そういった願いです」

「なにとぞ、日本国自身を助ける、また皆様自身の為にもこのスペースコロニー計画、ご協力頂けるようよろしくお願い致します」

深々と礼をする…

画面は変わり、移送計画の話になる…
「では、移動方法になりますが、異世界軍の方々が、避難キャンプまで迎えにいきます。」

７月２３日、移送

「出発！！」

横浜白凌基地第三滑走路から南方向へ、メデューシンがとびたつ…

向かうは、茨城県難民キャンプ…

シャトル乗客数が２４０人により、だいたい１日に１便お迎えに行く形となる…

とおもってたら…昨日…
難民数日本だけで約２６００万人、…なので、シャトルを追加１１０の緊急増産中だった…

１日５００便を目標に…したいなぁ…と思うが…

打ち上げ施設である、マスドライバー足りない、
、２４時間フル稼働でも３分に一本……

一回の打ち上げで最低１０分かかるのに…
加速で約３４０秒に、冷却で約４分…

搭乗手続き２４時間をフル稼働しても、マスドライバー、一本だと１４４便…
メンテナンスぬきで！！
正直足りません…
マスドライバー一本だとどうしても2年はかかる…
という大誤算が発覚した…

（打ち上げ基地増設かな？…あとメデューシンも増強か……）

と機上でおもってた…

飛行ルートは順調に洋上、銚子から進入、霞ヶ関浦から、ライトターンし、帝国軍百里基地へと着陸した。

超接地旋回し、北方向への滑走にそなえ、タキシング…
もう一度超接地旋回し、翼を休め、
顎のランプウェイをオープンにする。

飛行時間およそ４０分の旅だった…

「おつかれ、今日は午後にもう一回ね」

「はい！」

今日はシャトル４１本飛ばすつもりだった…

まず受け入れの日本の役人系、警察、などが朝に１便、その後４０便避難民のせたシャトルを飛ばす…

の予定だ。

カオルは中央エレベーターから第１層におり、ランプウェイにいく…

ザワザワザワザワ

百里基地で待機していた避難民第１陣の方々だ…

「みなさん～腕輪のチケットにかかれた席にお願いします～」

チケットはマーカーが仕込んである、腕輪型を利用した。

迷子が怖いのだ…迷子が…

コロニー居住地のしばらくまで世話になる腕輪だ。

勿論耐衝撃、耐水性能は整っている。

「大きな荷物あるかたは、預かりますので、こちらに来て下さい～」

「客室はこちら、客室はこちら」

「エレベーターはまっすぐ、エレベーターはまっすぐ」

1層デッキでは、マリさんミキさんや、Ｔ－８５０がでてきて、
客室案内の真っ最中だった…

そんな中…

「おお……」

一人の老婆の方が、列をはなれてよってきた…

「おばあさん、どうされました？」

「おまえさんかい？昨日の放送にでてたのは？」

「ええ、そうです」

「……住む土地に、戻してくれるのかい？いつかは…」

「ええ、おばあさん、お約束しますよ」

「あたしの生きてるうちにかい？」

「……それは…正直お約束できません…
が…5年以内には…必ず」

「5年かい……長いのう」

「おばあさん、生きて長生きして下さいよ。大丈夫、最高の医療設備などありますから…ね」

「……約束じゃよ？おまえさん」

「ええ、おばあさん、必ず！！……さ、おばあさん席に座って下さい…間もなく出発みたいですから…」

おばあさんエレベーターホールへ向かう…

ちなみにエレベーターホール差し掛かった時点で、自動的に手荷物チェックがはいる。
武器になりそうなのはＴ－８５０が没収する形になるのだ。

（今回は無しっと）

没収対象は、銃火器、火薬類のみ…
ガス類は、燃料系はコロニーでは使う必要なくなる為没収だが、今回はなさそうだ…

コロニー内には、持ち込み禁止にする形だ。
勿論他国コロニーも同様に……

ランプウェイがひきあがり…
カオルはコクピットへ…
「当メデューシンにの機長、アンナ・クリントです。
当機は間もなく離陸し、約４０分後には、横浜白凌基地へと着陸します。
皆様の安全の為、座席についたらシートベルトボタンを必ずおして下さい。
また、安全の為の急な旋回などあります。４０分のフライトですので、着席のままでいるよう、お願い致します」

フィィィー

エンジンがアイドリングになる…

「全員着席、シートベルトサイン点灯、各階層のＴ－８５０も準備よし！！」

「百里基地管制、こちらメデューシン、離陸許可を求む」

「メデューシン　こちら管制、離陸許可します。国民をよろしく頼む……良い旅を」

「ありがとう」

ミドルパワー　１２基ある核熱ジェットからジェット流が吹き出す。

１５００ｍの距離でとびだつ…

帰りは、太平洋側から第三滑走路に進入、空港駐機場に移動し駐機した。
ランプウェイが下ろされるとともに…

「フライトお疲れ様でした。
チケット番号、４８０番までの方はシャトルがまってます。そのまま移乗お願いします。
２４０番までは艦向かって右側、２４１番から４８０番までは艦向かって側で、
それ以外の番号はターミナルで、案内されるまでお待ち下さい」

艦内放送が流れる。

ドヤドヤドヤドヤ

右側シャトルにいく一群、左側シャトルにいく一群、
正面ターミナルビルに吸い込まれる大集団…

ワーッとランプウェイ上るコバッタ達…
お掃除隊だ。

「艦内チェック、内部に残っている避難民の方はいません」

「お疲れ様、じゃあ夕方も頑張ってな」

「はい！」

カオル、メデューシンからおりると、空港ターミナルに向かう。

「シャトル移動します！！中央導線から出ないようにお願いします！！」

人事移動したＭＳ世界の民間人達だ、補佐にＴ－８５０が入っている。

ターミナルビルにはいると、避難民のせた第１便がマスドライバーにセットされる光景がみえた。

「チケット番号、４８１から、７２０番号までの方は、Ｃデッキからシャトル搭乗を…間もなく搭乗手続きが終了します…
チケット番号７２１番から、９６０番まではＥデッキのシャトル搭乗を…
チケット番号９６１番から１２００番までの方、お待たせしました、Ｆデッキにお越し下さい」

「おばあちゃん、Cでしょ？」
ひょいと載せ
「荷物は？」

「それ一つですじゃ…」

「わかったぁ～」

フィィィ　反重力台車が頭上越えて移動していった…

ターミナルの様子をみると、カオルは関係者用エアバスに乗ると、
横浜白凌基地に向かう。

正面ゲートから入ると、正面口前に停車、
カオルは下りて、司令室に向かう…

司令室内に入ると…

「テンプ０４カタパルト進入どうぞ」

「テンプ０３よい旅を」

「お疲れ～どう？」

「あ、カオルさん♪仕事増えてうれしいですよ～
これで後方勤務って揶揄なくなりそうです」

「ん♪…あ、一日５００便まで増やすつもりだけど大丈夫？？」

「え？５００ですか？？現状で？？」

「あ～勿論マスドライバーと、滑走路は増やすつもりだし」

「……なら大丈夫かな？要員増やして……」

考えこむ…リン・ミン准尉…

「なんとかなりそうですね～いつ頃？」

「……すまん、そこはちっと…９月以降かな？とはおもうけど……」

「わかりました…当面は最高出発一日８０便まで…なんです？」

「うん。よろしく頼むよ」

「はい♪」

「じゃあ」

カオルＢ５５ハンガーに下りてゆく…

（とりあえず問題なさそうだなぁ…）

＝＝　Ｂ５５ハンガー　＝＝

現在の状況、核融合燃料残り５５１基分で確定

ヤドカリ君が増えて、５４２号

コバッタは、あの後は増やしてはない…

下駄は鋭意増産中であった。

（ふーむ……まだガンタンクの増産はいいか…

何かしら使うかもしれんし…）

とりあえず次回、燃料ちょろまかす時まで、

増産は抑えておく事にした。

（シャトルが足りないのが……ｏｒｚ）

（シャトル用マスドライバー、空港を逗子辺りかな？）

マスドライバーを後４本、及び空港施設建設を打診しておくことにした…。

……

カオル報告

特には無し？

第６３話　コロニー計画実行　投稿日２０１１０２０５（後書き）

作者「いよいよスペースコロニーかぁ…コロニー落とし？」

カオル「人が住んでるの落とせないよ！！」

作者「ジオン公国みたく…毒ガスで…」

カオル「それ警戒して、外部からの流入を防いだ！！」

作者「だよなぁ…少ない人口をこれ以上減らすわけには…」

カオル「それに日本だけじゃないし…
けど難民数聞いたら、予想以上だったから……作者それで正解なの？」

作者「一応９５年度の人口統計から計算しました。
西日本、京都以西の約４０００万人は４００万人に、関東圏の、千葉と栃木をのこして、
北陸、東海、近畿の三重、奈良辺りの人口から算出し、少し減らした数です」

カオル「……よく日本やってけるなぁ…とつくづく思ったんだけど…」

作者「多分ゲームの世界だから?は、おいといて…
西日本くらいは住めるようにしないと、正直やばいと思うよ…
が……押し込んでるから……見えてくるねぇ」

カオル「だからシャトルの数も足らなくなってきたんだよぅ!!」

作者「マスドライバーもね…けどまぁ正直、一本じゃ、せいぜい一日3万人、
宇宙移民正直どうやったんだか…何本たてたんだろ?が計算したらでてきた宇宙世紀の謎でした…
打ち上げシャトルは鍛えないと正直厳しいGがかかるので……」

第６４話　翌日やっと重大事項発見及び研究　投稿日２０１１０２０６

２００１年７月２４日
＝＝Ｂ５５ハンガーデスク＝＝
コバッタ達か忙しく動き回り、また桜井少隊が教練しに行くのだろう…のなか、
カオルはデスクで考えごとにハマっていた……
（えーとかたずけるのが歩兵装備は、フモッフね……
あとは水中、宇宙軍の問題…か…
ん～水中、水中、……ゾイドであったなぁ…
シンカーか……いってみるかな？）

カオルは立ち上がると、
「”世界扉”」
シーン
「ありゃ？…開かない？？」

（ん？？ん～～～……認識度が甘い？
そういえばゾイドってストーリーどうだっけ？？）

次に、ガンダム００の世界思い浮かべて…
「”世界扉”」
開く……
（ん？？）
消した。

Gガンダムの世界思い浮かべて…
「”世界扉”」
開かない…

ゼロの使い魔の世界思い浮かべて…
「”世界扉”」
開く…消して…

SEEDガンダムの世界思い浮かべて…
「”世界扉”」
開く…消して…

R－TYPEタクティスの世界思い浮かべて…
「”世界扉”」
開かない。

（えっとストーリーの認識によって??それともイレ込み度??）
カオルは少し混乱してた…

エリアルの世界思い浮かべて…
「”世界扉”」
開く…消す。

閃光のハサウェイの世界思い浮かべて…
「”世界扉”」
開く…消して…

（ふむ??なら…）
ガンダムユニコーンの世界思い浮かべ…
「”世界扉”」
開かない…

（ほう…となると…）
マクロスの世界思い浮かべて…
「”世界扉”」
開く…消した。

クラァ
「おっと……」
カオルはふらつき…椅子に腰をどすんと落とす…
眠気もきはじめてきた…

（う～精神力つきたかなぁ?研究だけで今日はおわるか…
とりあえずわかった事…まとめるか…）
机のメモに書きはじめた…読めないなぁ…

（全部読んだやその途中でも、はっきりしている世界なら開く、
つまりガンダム、Zやナデシコ、ターミネーター、
ガンパレ、鋼鉄の咆哮はたまたま知って完読等した世界だったから
…からか…
自信もっていっちゃってたなぁ…ん?）

カオルある事を思いついたようだ…

（つまり俺の世界で知識補完してみたらどうだろう?

…ユニコーンの世界が開かず、ガンダムの世界が開くの違いがそこにあるはず……
フルメタルパニック行く前に知識吸収試すか？…）

そこまで考えたところで……カオルはイビキをかき、居眠りかきはじめた…

寝落ちたみたいだ…

［マスター居眠り～］
１１号を筆頭として、集まりはじめた…

［あ、本当～］

［さっきから世界扉唱えてたからつきた？］
５号がマジックをとりだした…

［かもね～］
カオルの顔に落書きしようとして、８号、７号に押さえ付けられる…

［誰かよんでくる？］

５号はつれてかれた…
［まりもちゃん♪］
７号が…

［了解～］

11号、まりもちゃん探しにふわふわと移動する…
あ、見つけたようだ…
［まりもちゃ～ん］

「あら11号君、どうしたの？」
まりもちゃんの正面にふわりと浮かび話かけている。
［あのね、あのね、マスターがおねむしちゃってるの］

「あらあら…まぁまぁ…珍しいわね…どうして？」
まりもちゃん…手を口元に…可愛すぎるよこんちくしょう。
［多分魔法使い過ぎて…あ～なったら起きないとおもうよ～］

「ふ～ん……わかったわ様子見に行きましょ」

［は～い♪］

まりもちゃん、カオルの私室に案内される…
あれ？ハンガーデスクにいたはずだが、
私室の床に転がっているカオルがいる。

「あら……よっぽどなのね？」

まりもちゃん、カオルをベットに寝かせると、頭をナデナデしはじめる。

カオル気持ちよさ気にねむっているので、まりもちゃんは……

軽くキスをすると、
「お休みなさいね」
と、私室をでていった…

チャンスだったのになぁ…

翌、７月２５日
＝＝Ｂ５５ハンガーデスク＝＝
スターシップトゥルーパーズの世界扉を開くと…

アラクニ星に開いたらしく、バグズがきそうになったので慌てて消す。
（あっぶね～）

［マスター…いまの虫なに？］

「バグズさ……人食い虫ども…すまん、Ｔ－８５０を４体ほど、ＣＷＳ装備で常駐させよう…
…あーいった世界行くときはきいつけないとな……」

［うん…］

（けどま～…仮説は大丈夫か、となると精神力で開いてないけど、ゼロや、ん～第二次対戦アルファとか、あとは…
けどアルファ行けば楽かな？
…あとは……エヴァは使徒になるから駄目だろ…
ん～ゼーガペイン？そんなものか……
あ、スターゲートや、あと…でたまかもいけそうだなぁ…銀英伝…もか）

［マスター妄想中？］

「ん？ああ、行ける世界を考えてたんだよ…まぁ仮説通りなら、今日少し実験すりゃあわかるっう事さ…」

［仮説？実験？］

「俺の行ける世界の認識についてだな…」

［教えて～］

「おまえらも物語の世界っうのは前話したよな？」

［うんうん］

「で、昨日開きまくってたのはみてるよな？」

［うんうん］

「で俺が世界扉開けた世界は、
全部元の世界でその物語を見た世界なんだ。例外がここと、俺の元の世界。
物語は、小説、ゲーム、テレビ、映画、ビデオ問わず」

［……あ、そうか…平行世界の座標認識という事かも…］

「詳しい話しになりそうだから省くけど、で昨日、ガンダムユニコーンの世界を思い浮かべたんだが、開かなかったんだよ…
ガンダムの宇宙世紀の歴史軸上にあるにも関わらず」

［うん］

「ガンダムの世界にいけ、ユニコーンにいけない違い…
俺が元の世界でその物語を見たか、見てないか…しかないんだよな…
ただそれだけ…
で、今日の実験が見たあと世界扉が開くのか？って事だ」

［……なんかそれで開いたらますますマスターチートかもね］

「まぁあとは時間が許す限りか……ただ多分制限があると思う」

［ん？］

「ゲームの世界はクリアしたかしないか…だろうな。
もってプレイしただけは不可…Ｒ－ＴＹＰＥタクティスの世界はそうだった…
ＦＦ１１はどうか？になるけど…かなりはまってたけどなぁ…
あとは記憶の薄さかもね…」

［けどさ、一応は方針変わらないんでしょ？］

「ああ、実弾火力による制圧…学習させないようにね。
けど他の星に関してどうすっかなぁ…なんだよなぁ……

まぁ、とりあえず今日の精神力は実験にあてるよ…」

「”世界扉”」

「買い出しいってくるわ」

［いってらっしゃい～］

一回現実世界にいき、ビデオを買ってきた。
勿論、ビデオ観賞用に、ポップコーン、カップバターは忘れてない。

１１号を交えての鑑賞会になった…

（オープンニングはミラー操作によるコロニー破壊か…）
［あ～人が吸い出されてくぅぅ…マスターいくの？］

「ん～……マスコミとかがメインだと思うしなぁ…
正直わからん」

（けど簡易ソーラーシステムねぇ…あくどいわ…）

［マスター、あの機体は？］

「ジェガン、あ～スタークジェガンかな？あとは見たことない機体だが……あ、クシャトリアつうかしいね」

［つおいの？］

「まぁ００９３辺りだから強いだろ、そりゃ～ね」

［いかないの？］

「今早急に…はかな？まぁいずれな…
そういえば、コクピットシステム変わってるなぁ…更新してるんか
…」

［僕らの使ってるのと違うね～あ、あれは？］

「パプアかな？ようわからん」

授業シーン…とくには話題なし…

［ところで、今の人が主人公？］

「だと思うけど…どうだったかな？」

［キラーンって見つけるし、あれがユニコーンなの？］

「ガンダムタイプでないけどそうっぽいな…
テストパイロット苦しそうだし…」

［無茶な事やらせてるんでしょ］

「ブライト・ノアかぁ…中の人死んでるんだよなぁ…
今作はでなさそうだな」

［中の人？］

「声優さんね」

［ふ～ん……別人でててこない？］

「いや、多分なさそうだね、
わざわざ個々でこの話題でるなら、偉いからでないんだぞ！をいちつけてると…
次のハサウェイの閃光の設定があるから、フェードアウトできないしさ」

［この娘がまりもちゃん？］

「ふぇ？何故まりもちゃん？」

［ヒロイン］

「……まぁ…ヒロインっぽいな…ん？ミネバかな？」

［ミネバ？］

「ドズル＝ザビの忘れ形見。ハマーンが摂政についてて、ＺＺの時にメイン出てたんだけど」

［ＺＺって？］

「あ～Ｚの直後ね」

［ミネバちゃん危ない！］

「あ、多分ヒロインなら…ほらなぁ」

［顔面いたそう…］

「うん…痛いよなあれ」

（やっぱりミネバ＝ザビしかねえだろ）

［建設中なのに人がすんでるんだ…］

「確かに工法ちがうっぽいなぁ…」

［先に箱つくって充填してるもんね。僕らは］

「だなぁ。元公社の人も完成時のヘルメット外す時の緊張感……あつく語ってたからなぁ…」

［ねぇ自爆しちゃうの？］

「ん～……まね事みたいだね」

［この子友達になれそう♪］

鉄骨のシーン…ポップコーンきれた

（…もうひとつ買ってくればよかったかな？）

「なぁ、ＰＸでポップコーンメニューに入れよう」

［了解～］

（一瞬イッシーの顔が思いうかんだのなんでた？）

［お屋敷かぁ…作る？］

「そんな余裕ないじゃん…あ、ミネバ確定だな」

（う、……こりゃきついわ…）

［これ誰かにいわれたらどうする？］

「鬱になりそうだねぇ……」

［この機体は？］

「みた事ね～なぁ…キャタピラ付きって…思い浮かぶのが、更にあとのＦ９１の時代のタンクになるんだけど…」

［やっぱりタンクだね］

「まぁ新作タンクか…」

「コロニー内で戦闘はじまった…」

「うむ……行ける身にとっちゃ、目の前で阿鼻叫喚になるから、あんまりコロニー内戦闘はなぁ…」

「ビームうちまくりだね…」

「……行きたくねーなこりゃ…」

「外壁穴があいちゃった…材質脆いの？」

「ん～～～どうだろ？」

「実験しまくって大丈夫だったんだけどね～…核爆発も使ったし」

「おい…」

「勿論洗浄ずみぃぃ」

「ならいいが…」

［でも、このロンドベルが悪者なの？］

「ん～前回の主役側だからないとは思うが…」

［けど、コロニー内で戦闘しまくってるし～］

「ん～まぁわからねなぁ…時間が進めば見えて来るはず…」

［でこの変形したのは？］

「正直わからん…リ・ガズィの発展系かもしれん」

［ユニコーン］

「個々で主人公と主人公機か…」

［うるうる］

「まぁある意味宿命か…」

［これで絡むと…］

「多分連邦側になるんだろうな…」

［コクピット変形したね～］

「……お、これがガンダムになるんか」

［次回戦闘シーンからかな？］

（さてと…）

ガンダムユニコーンの世界を思い浮かべて……（いけるか？）

「”世界扉”」

開く世界扉…

「ははは……や、やったぞ……」

［開いたね…コロニー内だと思うよ、あ、造成ユニット］

「うん…勉強すれば開くんだね…
うん法則は見つかった♪」

消す扉…

「まぁ後でに…するか……」

ファァァァ

「…疲れが残ってるみたいだなぁ……明日に備えて飯くったら寝るよ…」

……

カオル報告

世界扉の法則を取得しました［おやすみぃマスター］

……

カオル報告

世界扉の法則みつけました

第６４話　翌日やっと重大事項発見及び研究　投稿日２０１１０２０６（後書き

作者「この話は設定ネタっすね～」

あ号「むぅ……チート過ぎるぞ…制限しろ」

作者「やだｗ……あれを入れたいしい～」

あ号「あれとはなんだ？？」

作者「ひ・み・つ…あ、でもあ号には使えないから大丈夫だよ。人が住んでいる土地というか星には使えない」

あ号「……？」

作者「ヒントは、爆弾ではない、星を破壊しない、辺りかな…」

あ号「ほ、星を破壊しない？？……何をもって来るつもりだ？」

作者「まぁあ号には関係ないネタだね」

あ号「むぅ……ところで作者、このゲームはプレイしクリアしなきゃ駄目ってなんだ？何故？」

作者「リアルマネー＋時間の問題で制限入れました」

あ号「切実だの…」

作者「あ、ユニコーン小説で既に出てたんすが、正直見てません。あと、名前違い等ありますが、見た感想とかになりますので、今回はスルーして下さい」

あ号「ところでまりもは？」

作者「……正直あのあとの行動が思いつきませんでした……」

あ号「ゾイドは？」

作者「本来はゲームの世界でなら行けたのですが、ソフト紛失、カオルがテレビ版と想像したために行けないと理解して下さい。ウルトラザウルス！！いつか出すぞ！」

あ号「みてからな…」

作者「ああ…」

第６５話　フルメタルパニックの世界へ…　投稿日２０１１０２０７

２００１年０７月２６日

改めてフルメタルパニックの世界へ……

（イメージイメージ…）

「”世界扉”」

世界扉が開く…

＝＝フルメタルパニックの世界＝＝

１９９８年４月

ほぼ現世日本と同様…いや途中からかなりかわってるが、歴史を送る日本…

平政の時代だ…

カオルはこの世界へ行くときに仕込んであったのがある。

まずは、これを売らなきゃな…

カオルは地元へと…いった

「お～あるある…今潰れてなくなったのになぁ…」

古きよきファミコンショップだ…

店内では子供達がセガサターン、プレイステーション、

ニンテンドー６４をやろうと列に並んでいる…

カオルは店内にはいると、
カウンターにいるおじいさんに声をかける。

「買い取って欲しいんだが…」

「あいよ、何をですかい？」

カオルはセガサターン版サクラ大戦２を出す。

「おお、二日前の新作じゃないか…
フムこれなら４０００円で買い取らせてもらうよ身分証はあるかい？」

カオル腰にまさぐり
「あ、会社か…あちゃ～すまん、忘れたみたいだ」

「ああ、いい買い取らせてもらうよ」

「すまないねぇ」

「いや良いって常連だろ？」

「ありがとうな」

カオル４０００円ゲットした。

作注　本当は、買い取り等は、免許証等身分証明の確認が必要です。

（さて次が……スロットか）

パチスロ屋を見つけ、スロットに上る…

機種はサンダーＶ

お金を投入し、「イロウル」

ＢＩＧボーナスを獲得した。

この日は金稼ぎに集中…換金し、４２万円獲得…

「シャムシェル”幻影”」

一路ソウルへ……

（カジノ～）

カオルは1時間半でつく…

東京―ソウル間って、１１６０ｋｍすもんね…

まだ銀行が開いている時間だったので４０万円をウォンに換金、
カジノに行きチップを変え、一路ルーレットへ…

ＢＥＴで１の一点張り

「”加速”」

カオル、微妙に玉を調整してるよ……

ころん　１に見事はいり３６倍、になり戻ってくる…

ディーラーさん　少し焦り気味……

もう１ゲーム…

カオル　今度はＭＡＸベット１８
ディーラーさん安心の顔をしたけど…

カオル微調整し…１８にイン
３６倍返し

（あと４回か…）

ディーラーさん意地になってる…　カオル９に一点ばりＭＡＸベット
微調整し、ｗｉｎ

ディーラーさん更に躍起に、２７の一点ばり…　微調整しｗｉｎ

ディーラーさんキョロキョロしはじめた…
（プロは、自分の玉を調整できるっう話だからなぁ…）

０への一点ばりｗｉｎ

カオルこの頃なってくると周囲の目がこちらに向いてきはじめた…

３３の一点ばり…

（あ、のってきやがる人もいた…）

勿論調整しｗｉｎ

（さて……）

カオル　縦の中列にＭＡＸベット…　ｗｉｎし、

テーブルを離れる。

（バカラか……８０００万ウォンだよな？
今９００万ウォンか…フム…）
別テーブルのルーレットについた…

４連勝し、４５００万ウォン

（なんかスタッフが多くなったなぁ）

イカサマしてるんじゃないかの監視だろう…してるんだけどね…

多分ディーラーが狙った玉に入れられない…ったみたいだ…

（バカラ～）

メインバカラへ…

これは単純、どっちが勝つか?だった…

３回勝負するつもりだった…

このメインバカラは、イカサマ防止の為、箱の中にあるトランプを順次にだす…

のため、

「バルディエル」

一部同化し、勝敗を確認する。

４５００万ウォン2倍…

ＭＡＸベット８０００万ウォンを5回…

４８０００万ウォンになった…

2時間ほどで日本円計算で、３２００万円まで増やした。

（ま、軍資金はこんなもんか…）

カオルは一路日本へ戻り、ビジネスホテルにチェックインした…

？何故韓国で？って？パスポートないんだもんまだ……

まだね…

４月２８日…

翌日チェックアウトし、

「”幻影”」

一路羽田空港へ…

９時、羽田空港と同化し、目的の沖縄行きを調べる…

ＪＡＬ９０３便……

（あれか…）

カオル目的の便に取り付くと同化し…

（夜までひまかぁ～寝ちゃおう……）

カオルうたた寝しはじめた……

カオルの体内では修学旅行の神代高校２年生達が、

「はい、そこー！！おとなしくすわりなさーい！！」

「センセー、トイレいっていいの？」

「スチュワーデスさん、電話番号教えて～」

等で盛り上がっていた……

「餓鬼が…」

「ごめんねー職務上教えられないのよ…もっと大きくなって社長さんになったらね」

「お客様なにか？」

等スチュワーデスさんたちが忙しそうに動き回っている…

「はぁ…やっぱりハズレねこのフライト」

「ほんと、今日の高校は特にねぇ、
飛び立つ前なのになんなのよ…」

とギャレーで愚痴を言い合う程です…

それでも、

「お客様、シートベルトを付けて下さい」

等チェックし、
９０３便は、ボーディングブリッジを離れ、滑走路へとタキシングする…

機内では安全の為の説明が入り…
離陸し…沖縄へと向かう。

１１時３０分

「ほ、本当に大丈夫なのかね？」

「おたくなんべんいったらわかるん？
話ついているといってんだろ～」
銃を頭に向け、赤いレーザーサイトが額に向けられる…

「ひっ！！た、頼むしまってくれ…いちいちだされては落ち着かない…」

「はい、もうすぐ北朝鮮領内だから、わかるよ～」

韓国空軍のＦ－１６が離れていった…

「ほら、はいった～…だろ？このまま、順安にいけば、

お前さんたちの命は無事なんだからさ」

副機長は、手を汗ばんで操縦し続けた…
隣の機長席は物言わぬ遺体があるからだ……

やがて機体は、順安空港へと着陸する…

周りには北朝鮮軍、またサベージが飛行機をとりかこみ、
警戒にあたっている。

さてっと…カオルは抜け出し、サベージに近づき、
同化、解除

サベージの情報をゲットした…
（と、おつぎは…）

カオルは基地内をうろうろし始める…

（これじゃない、これでもない、これか?）

カオルは目的のトレーラーを見つけだした。

トレーラーの中は、何かの実験施設を思わせる構造になっている。

（さてっと寝ますか……）

２２時４０分

「きゃあーーっ！ど、どこ触ってんのよ！？」
「だから違うと言ってるだろう」
「あっちいけ！痴漢！変態！レイパーっ！」
「いい加減にしてくれ！」
で眼が覚めた…
「きゃあ！お尻さわんないでよ！」
「しかし、頭あげると弾がくるぞ！」
宗谷はかなめを壁面のほうに押しやり、転がって立ち体制になる。
「ねぇ、あんた！なんか服かしてよ！」
「むぅ、そういわれてもだなぁ……」
「詰め襟、それでいいから！じゃないと個々からでない！」
「……わかった」
宗介が詰め襟を脱ぎ渡すと、
かなめは掻っ攫うように着た。
「これでいいのか？」

「え、ええ…しょうがないけど」

バラララララ
サブマシンガンをうち、牽制すると、

「はやく！！」
とかなめの手を握り、
宗介と、かなめが銃撃のさなかにトレーラーからでていった…

ので実態化し、女医を診てみる。

女医は虫の息だった…
少し気になってたので「アルミサエル」

精神をのぞく…

（ふうん…誘拐、協力強制か…逃げ出せずだったんか…
この任務に失敗したら射殺…だからひっしだったんだね）

彼女を助ける事にした…

銃撃がカンカンカンとトレーラーのボディにあたる中、
医療カプセルをだし、作動させ、ロック

虚数空間に入れる。

「聞こえないのか、千鳥！……まだ危険だ下がってろ！」

少し離れたとこから聞こえる…

（さてと…Ｍ９、アーバレスト、ＴＤＤ－１まってろよ～）

カオルは再びジャンボへとむかう。

一機のサベージが基地の外へと、かけぬけていったのが遠くに見えた…

カオルはジャンボの下に隠れると…しばしの時をまつ…

ヒューーー　ドドドドドドドーン

多弾装ミサイルが着だん、

ジャンボの周りの基地施設に多大な被害を与えるワルツになる…

（きたな）

バラララ…ボン……ガシーンズズズズ

Ｍ９がフリーフォールで戦車を沈黙させ、着地し勢いをころす。

あと４機のＭ９がパラシュートを切り離し、基地内に分散し、制圧にかかっているのが見えた…

バラララララ

輸送ヘリ、攻撃ヘリが大地をローター音を響かせてこちらに向かってくる。

「全員窓から離れろ！！」

Ｍ９がそう外部スピーカーで叫ぶ…

（マオ姉さんね…取り付くか♪）

マオ機に取り付いた…

マオ機は、背中から刃渡り６メートルの単分子カッターをすらりと抜く…

マオ機は刀を容赦なく飛行機に突き刺す！！

ギィィィィィィン

火花をあげ飛行機の外壁をグリグリと切り裂いて、

えぐって隔壁をひきちぎると…

「あった！」

コンテナを取り出すと、そばに控えていた僚機に手渡す。

そのまま助走し、コンテナを投擲する。

そのコンテナが５００メートル以上はなれた地面に落下すると…

ドーーーーーーン！！

強い衝撃とともに爆発音が響く

「こちらウルズ２！！　爆弾の処理は完了、直ちに交戦」

『外部スピーカー！！』

「って、おっと」

カチ

「すまないね…さぁ行くよ！」

ガチャガチャ
すぐ脇を黒ずくめの兵士達が、飛行機に突入しようとしているのが見えた。

カオルは外に集中した…

ヒュン　戦車の砲弾が掠めた…
マオ機はジャベリンを構えると…
ボシュー　ドーン
敵戦車は爆散した。

後ろでは強行着陸した、２機のＣ－１７に向かって列をなし走っているのが見える…

ガインガイン
マオ機はしばらくすると警戒しながら、輸送機のそばで片膝をつく…
付近は制圧しきって、いたためだ。

「そこのセンセー、カナメは別の便で帰るよ」

「べ、別の便？あなた、なんで、わたしの生徒の名前を……」

「いいから、早く飛行機のって！！」

人質達が飛行機に収容されると、
後部ハッチは閉じられ、輸送機はガタガタいいながら飛び立つ。

人質のせた飛行機に向け、敵の援軍の歩兵だろうか？対空ミサイルがはなたれた…
が電磁迷彩により透明化した輸送機はそのまま離れていき、目標を見失ったミサイルは迷走し落着する。

ババババ
大型ヘリが降下してきた…しばらくしたあと、
マオ機は伏せ姿勢になり、大型ヘリが背後から包み込む形でドッキングし、マオ機を固定する。

ババババババ
マオ機は空へと飛び上がった…

２３３０

ヘリは黄海にでると…洋上に浮かぶ、巨大な潜水艦の飛行甲板に着陸した…

ＴＤＤ－１、トゥアハー・デ・ダナン…ミスリル西太平洋地区所属、強襲揚陸型潜水艦だ…

カオルは早速同化しはじめた。

しばらく時間がかかるが、アーバレストも確認した為ついでに取得

した。

取得した時には、ＴＤＤ－１は既に潜水していたため離脱は不能……
次の時をまつ…
艦内？至るところに人がいて、
実体化する暇が見つからないからだ…
さすが、
長期間実動部隊を艦内で過ごせるように、
いや生活できるようにしただけの事はある…

０４：００

ＴＤＤ－１は全長２１２ｍの巨体を海上に急速浮上し、弾道ミサイルを撃ち出す。

その合間をぬって、カオルは艦外に実態化し、
「”世界扉”」

次の時間帯へ…

……

カオル報告
サベージ
Ｍ９
アーバレスト
トゥアハー・デ・ダナン

ＡＳ用武装

３２００万円程、軍資金確保済み

第６５話　フルメタルパニックの世界へ…　投稿日２０１１０２０７（後書き）

作者「新たな世界の登場っすね～」

ナギ少尉「久しぶりのナギです～…作者わりゃ、わしを本編だせやゴラァ！！」

「し、しまって……そんなに怒ると、顔が博士みたくふけてくるから…」

「……まぁいいわ……本編だしてね♪作者」

「正直、ゲーム内で死んで下さい…でないとカオルは出さないつもりです」

「はぁ……なんでそんな制限いれたのよ！！だからオリキャラがヒロインの座を争うはめになったんでしょ！」

「むぅ……まりもちゃん頑張らせないとなぁ…」

「ここまでみて、本来のＡ－０１のメンツ、あんまりいい場面がないしさ…」

「まぁ死なさない工夫はしてるし…ね」

「……で、この世界は？」

「ご存じかと思いますが、フルメタルパニックの世界になります。
この世界はウィスパードによるブラックテクノロジーで
８０年代から本来の歴史軸と変わってきてますね…という設定だよな？？」

作者小説見直し中…

「まぁ小説版の設定を利用する…と思って下さい」

ナギ少尉「あたしは軽く見たんだけど…何を1番の目的でいってるの？
正直、何故軍資金を稼いでいるかわからない…」

作者「まぁ後程のお楽しみに…」

ナギ少尉「？あ、ゴン太君は？」

作者「ボン太君！！ゴン太君はＮＨＫのできるかなの出演の着ぐる

みだよ」

ナギ少尉「中の人は誰？」

作者「中の人はいないさw……まぁ正直辛いんだよあれは…」

ナギ少尉「やった事あるの？」

作者「ウルトラマンなら、団地のイベントで着たよ」

ナギ少尉「入った感想を」

作者「俺が着たのは、テレビに実際に出たスーツだったんだけど、
まず視界が悪い…正直よくあれでアクションできたなと思う。
目の下の部分に薄く切り込みがあってそこのみしか視界がない。
あと呼吸するところが口の中央の切り込みのみ。

着て注意する事は…
子供を蹴飛ばすな、
必ずしゃがんで応対しろ、
脱水にきをつけろ…
以上」

ナギ少尉「……何キロ減った？」

作者「俺は3日間、通算9時間着用で、４ｋｇは減ったな…正直良いサウナスーツさ…」

本人暴露ネタが続くのでまた次回～

第６６話　フルメタルパニック編０２　＆ｑｕｏｔ；仁義なきファンシー＆ｑｕｏｔ；

三日目

東京都調布市

世界扉からでて、けすと…

（さぁ～ってと……陣代高校か…）

カオルは幻影をかけ飛び上がると、高校に向かっていく…

都立神代高校がモデルだからおんなじ場所にあるはずである…

（ビンゴ）

カオルは午前の授業終了後までまった…

生徒達が多数下校し始める…

（いたいた…）

カオルは、目的の生徒をつけるように飛びはじめた。

その生徒二人は、途中、ヤクザらしい人と合流し、歩いている。

かなめ、蓮、組員の柴田だ…

もう少し近寄ってみると…

（お、もうそろか…）

かなめと、蓮達の前方、後方から、
黒塗りの車がちかよってくる。

隠れて襲うつもりだろう……

そして、かなめと蓮、迎えの柴田の正面を覆面した男達が、
いきなり飛び出てきた…

かなめの背後も、既に囲まれている…
車道には黒塗りのベンツ、１ＢＯＸが急ブレーキでもってとまる。

「なんだぁてめぇらは、このお方をど」
ズギャ！
口上を述べる前に、ナックルで殴られる。
「ぐはぁ…おうまて」

「柴田さん！！」

ゲシッ
ガッス！
ドゴッ！
かなめは蓮を背後に…

「て、てめえらぁ…」
バコボコバコボコ

柴田は、一方的に殴られ蹴られ、沈黙したようだ…

「はなしなさいよ、あんたたち!!」

「柴田さん……」

黒塗りのベンツに無言で押し込まれ…

カオルはベンツに軟着陸し、同化すると…
ベンツは走りだす。

「ねぇあんたたち、龍神会?」

かなめがそういうと、覆面した男が、銃を押し付けてくる…

「……わかったわよ…黙るわ…」

ベンツは街はずれの大きな屋敷にへと入っていく…

玄関前につくと、ドアが開かれ、
「ほら降りろ!!」
と覆面の男が、やっとしゃべり促される。

渋々、二人は降り、玄関内にはいっていく…

カオルは同化を解除し、ついていく…

警備は厳重だった…

屋敷内では堂々とサブマシンガンを下げている…

（……警察はなにやってんだか……）

二人が小突かれ、地下室に押し込まれた。

同化し、地下室内に入る。

ここでまてば、ボン太君と出会えるからだ。

「……こう悪党に捕われる事が多いのかしら」

「まぁ……。かなめさんは、こういう経験が豊富なのですか？」

「うん。どこの馬鹿のせいだか見当はついているけど……」

「大変ですねぇ……。どうか、これからもお気をつけて」

「人の心配している場合じゃないでしょ……」

1時間後

「おぉ……。なるほど。綺麗なお嬢さん達だ」

「あのー。あなたは？」

「龍神会の組長、菅沼です。ちなみに祖父は、なぜか英軍の駆逐艦にのってました。まぁ、誰にもわからないネタなんだけどね」

手にしたビール瓶をラッパのみにした。

「はあ……。一応聞きますが、あたし達を、どうするおつもりで？」
「決まっています。お約束です。美樹原組の皆さんに、縄張りから手を引いてもらう材料になっていただこうと。……ふふ」
「材料。それって、もしかして……」

「……！」
「まずは彼らに、我々が本気だということを、知ってもらう事が必要と思いましてね。ふふふ……。おい、工藤、清野！」

「ちょ……ちょっと？」
「あの。これは一体……？」

ドーンぱらぱらぱら
「なんだ…？……おい、様子を見てこい」

「へぃ！」

「まぁこちらは、こちらで進めますか…」

「いやぁ！あんたたち、麗しきピチピチの女子高生に、そんな事していいと思ってんの！？」

「それがしたくって、わざわざ地下室にじゃないですか…」

「あのかなめさん？？」

「蓮さん!!ちょっとは抵抗しなさいよ、意味わかってるの?」

「えっと、フォークダンスをしたいという事なんですよね?」
ズコー
と擬音が聞こえそうなずっこけぶりを、
部屋にいる組員やかなめがしている。

「お、お嬢さん?」

「蓮さん!!あのね、この人達はね、わたし達の制服を剥ぎ取って、
真っ裸にして、穴という穴にバ○ブやチ○コを突っ込んで、
あたし達の処女を奪うばかりか、三角木馬や、縄で縛りつけ調教うして、
薬つけにして、海外に売り飛ばすつもりなのよ!!」

「……お嬢さん、そこまでしたら人質の意味が…」

「で、売り飛ばされた、海外で、両手両足を切り取られ、
達磨にされ一生ヤクや、セッ○ス奴隷となり、使えなくなったら棄てられ、命を失うのよ!!」

「あの…お嬢さん??」
工藤、清野は、
「最近の女子高生って妄想激しいんだなぁ…」な感じで見合わせて

いた…

「でもって、命を失うばかりか、野犬に肉体はかまれ、白骨死体になり、家族も捜索願いだされても、一生あえないんだわぁ～～」

「お嬢さん！！」

「？組長さん？」

「いや、そこまでやると、さすが人質の意味がなくなりますので…」

「どこまで？」

「いや、まぁバ〇ブツッコミビデオまでを」

「そこから薬つけて海外に…」

「もういい！！おい、剥ぎ取っ」

「組長！！」

「ちっ……なんだ？」

「カチコミです！！戦力が必要です！！」

「……おい、いけ！！」

カチャリ

「お嬢さん達は、少しまってて頂きたい…なぁに、すぐにおいしいのが味わえるさ…」

ドーンぱらぱらぱら

バラララララ

最初は余裕の表情だった組長、
妄想で、あんなこと、こんな事を考えていたが、銃声が近づくにつれ…表情が硬くなる。

ドアの鍵を閉め……

「おぃ！！こい！」

部屋の奥へと二人をつれていく……
そして……ドン！！

ドアが中に吹き飛んで来て…突入してきたものは！！

＝＝少し前、屋敷正面＝＝

ネズミだか、犬だかわからない頭、
らんらんと輝く赤い二つの目、
ライフル、サブマシンガン、ガトリング砲、グレネードランチャー
等で重武装している。

もっさもっさした手…指どこにあるの？
をさっと真ん中のがあげ、
「ふもぉ……」
両脇の6体の着ぐるみが各々の武装をさっと構え、やくざに向ける…
指どこにあるの？なんで構えられるの？ねぇ…

「ふもっふ！！」
重武装の武器から催涙弾、ゴム弾、電気銃などがやくざへと襲い掛かる。
「がっ！！」「ぐへぇ！！」「グボ！」「ごほっ…ごほっ…」次々と倒れるやくざたち…

ねぇぇぇ！トリガーどう引いてんだよぅ！！

修羅のごとく次々とやくざを無力化していく…

「死ねやぁ！！おんどりやぁぁぁぁぁぁ！」

パンパンパンパンパンパンパン！！
やくざがトカレフを着ぐるみに向かって全弾打ち込む…
しかし、
「ふもふも……ふもっふ」

着ぐるみは、笑い、ゴム弾をしこたまそのやくざに打ち込む…
「そんなぁぁぁぁ」

やくざは泣きながら吹き飛んでいった…

「ふもふも、ふも」
さっきの中央の着ぐるみが左を指しながらいうと、

「ふもっ！！」×2
二体の着ぐるみがうなずき左廊下のほうへ…

右を指しながら
「ふもふも、ふも」

「ふもっ！！」×2
2体の着ぐるみが右手の廊下にむかってく…

「ふもふぅ」

「ふもっ！！」×２

３体の着ぐるみが中央階段を上ってく…

途中とまり、

「ふも、ふも、ふもっふ」

「ふも」×２

敏速に見えてる扉脇に２体が、壁に張り付く、

真ん中の着ぐるみが扉を蹴破り、

催涙弾を中に打ち込む。

「ごほっ、ごほっ」と何人かの咳が部屋内から聞こえ…

着ぐるみは中に突入し、ゴム弾を打ち込み気絶させ無力化する。

「ふも」

「ふもっ！！」

着ぐるみは廊下をすすみ途中でとまる……

一気に角にでると、

ダンダンダン！！バタバタバタ

ゴム弾打ち込まれ、気絶したやくざ三人が倒れた…

「ふも～」

着ぐるみは前にすすむ…

両開きのドアが開いて中は広そうな部屋が見える…

「ふもっ」

「ふもっ！！」

セオリー通り催涙弾を打ち込む……が咳の音が聞こえない…

着ぐるみは一気に突入すると、

バリケードの向こうでは…

ガスマスクをつけたやくざ達が重武装していた。

ブロロロロ

旧日本陸軍の一式重機関砲が火を放つ、

しかし、

「ふも！！」

機関銃弾をうけても、着ぐるみ達はゴム弾を打ち込み、

うっていたやくざを沈黙させる…

「ゴン太くんこわい……」

部屋を制圧したあと廊下にでる着ぐるみ…

「おんどりやぁぁ、妖ドス、たばてんうけてみやがれぃぃぃ」

変な名前のドスを構えたやくざが突進、突き刺そうとするが…

「ふもふもふも。ふもっふ！！」

もふもふした手で左右にふり、指があったら、

「チッチッチッあめーなぁ」だろう…

をすると、殴りつけた…

「ば、ばかな…ダイヤモンドさえ…貫通した、妖ドスを……がく」

…勿体ない試しをしたんだね…罰があたったよ……

も～とにかく、着ぐるみに歯がたたない、やくざ…

鉄砲を撃とうが、貫通すらしない、

刀きりつけりゃ切れない…

あ、こういった場面ありました…

金属バットで着ぐるみ殴打したやくざが、

反対にケツの穴に突っ込まれて、悶絶し…床に転がってます。

屋敷を制圧した着ぐるみ、が正面ホールに集まり、

「ふもふ？」

「ふ～も」
首をふる…

「ふも？」

うち一体が、はなれてズルズル引っ張ってくる…

どがっ！！

やくざが気絶じょうたいから目をさます。

「ふもふ、ふもふ！」「ふもふもふも！」
「ふもふもふも！」「ふっふっふも！」

「やめてくれぃ、ゴン太君、なにいってるかわからねぇ…」

「ふもぅ」
両手をうちつけなる程～な感じで…

「ふもふも？」
キョロキョロし…

「ふもっ！！」
「ひっ！！」
と、むんずとヤクザをつかんで、
空中で右手を左右にふる。
「？か、かくもの？」
「ふも♪」

「あ、は、はい…正面に……」

着ぐるみにヤクザが吊されながら……

「あ、こ、ここっす」

着ぐるみがカキカキし、
「お、おんなですかい？ししりませ…グボッ」
脇腹をシュールに一発…

「は、はひ、ち地下室です」

本当にか？とかかれてる。
「へ、へい」

ヤクザがおろされる…

「み、見逃して…」
首をフリフリする着ぐるみ…
至近距離からゴム弾一発…
「やってられるかぁぁぁ……」
崩れおちるヤクザ…
地下室へ…
「ふもっふ、ふも！」
ばぁん！
扉が試行性爆薬により吹き飛ばされ、室内に踏み込んだ。
中では竜神会会長がかなめと蓮を、盾にしてたっていた。
手には拳銃を握っている…
「ば、馬鹿な。ボン太君だと？俺の部下が、ボン太君で全滅……」
（さすがボン太君…）
カオルはボン太君と同化し、情報をゲットした。
突入してきた着ぐるみをみて恐怖の悲鳴をあげる。その額には銃口がむけられて…

「ふぅも、ふぅも。ふもっふ」

「……多分、降参しろっといってますけど」
妙に淡白にかなめが告げると…
「ふ、ふざけるな！ぬいぐるみ衆に負けたとあっちゃあ、
他の極道になめられる。この渡世、凌いでいけねえんだよ！？」

「ふもっふ……」

バァン

「ぐはっ……！！」
ゴム弾が組長の顔面に直撃し…倒れた。
その組長をみおろし、
「ふもふも、ふもっふ。ふぅも、ふもっ」

「な、なにいってるか、わかんねぇ―……」
つぶやいて龍神会組長は悶絶した…

（うむ、同意だな…）

「さ、帰りましょ、ありがとうねボン太君」

「ふもっ！！」

地上へとでていった。

「さて、とりあえず家捜しか…」

同化し、廊下にでると、階段を上っていく…

（ん～金庫は？っと……）

「バルディエル！」

カオルは屋敷と同化しはじめた…

（お、あったあった♪）

カオル、金庫をみつけ、前に立つ…

ファンファンファン

遠くからサイレンが聞こえる。

電子ロックキータイプの金庫なので…

「イロウル」

解読、解除し…

開けると……

携帯と、札束があった。

（♪）

札束取得し、

携帯手に取り…

「イロウル」

ほお…取引リストか…

携帯も有効だと思うので取得。

（とりあえずはこんなもんかな？）

「”世界扉”」

カオルは世界扉をくぐる…

……

カオル報告

量産型ボン太君

裏取引リスト携帯（フルメタルパニック）

資金５０００万円程（平政）

第６６話　フルメタルパニック編０２　＆ｑｕｏｔ；仁義なきファンシー＆ｑｕｏｔ；

ナギ少尉「……カオル空き巣してるね」

作者「……うん」

ナギ少尉「……いいのかな？」

作者「……まぁ、ヤクや、銃がみつかり、ボン太君に制圧され、本家から破門されたからいいんでない？」

ナギ少尉「そっか……で、このボン太君？」

作者「ああ、結構このサイズだと強いよ～武器さえありゃ、敵ＭＳ位のしちゃうし」

ナギ少尉「１番威力あるのってガンパレ世界のだよね？人サイズが使うのって、今のところ…」

作者「零式ミサイルだよな。まぁ扱えるだろう。人型サイズのＡＳだし」

ナギ少尉「けど強いの？本当に…」

作者「強いよ♪これ以上だとガンダムファイター？？
後は特戦隊やライダーだろうけど、量産型ボン太君の敵ではない！
！」

「ふもー」×1万ボン太君

第67話　フルメタルパニックより帰還　投稿日20110209

2001年7月28日深夜…「ただいまぁ～」

［マスターお帰り～］

カオルは世界扉をけし、時間確認した…
もうかなり遅い…

「明日か…うんじゃ風呂入って寝るわ」

［お休みなさい～］

2001年7月29日

カオル起きて、医療カプセルを交換をまずはしておいた。

でハンガーにいくと、とりあえず資材から、再現をしはじめた。

4時間後…

M9ガーンズバック

全高8．4m
重量9．5t

パラジウムリアクター、常温核融合炉使用で出力３３００ｋｗ

［マスターまたまた、小さい機体だね～…
けど、出力からするとかなり高いか…］

「まぁな…けど駆動部分にもってかれるのと、燃料投下が必要なのがなぁ…」

作動時間、燃料ペレット投下で１５０時間…
まぁ要するに、燃料が重量を重くする一方で、
出力でとるか、継続性でとるかの二択問題になる。

一時的な出力は常温核融合炉が勝る…

大型化すりゃあ、まぁわかる話だが、
このサイズでの話ととって下さい。

アームスレイブの特徴として、人の動きを再現する、
マッスルパッケージ、人工筋肉による駆動、及び再現操縦方法があげられる。

第二世代までは、人工筋肉の問題で油圧補佐だったけど、
コスト度外視｛メンテナンス｝で人工筋肉を取り入れた第三世代の
Ｍ９ガーンズバックは、
特殊部隊の格闘専門家の動きを再現できる…といって良いだろう。

いやこれかなり重要だよ。
兵士か、特殊部隊員かは…

でその動きを再現するのに必要なのが、
セミ・マスター・スレイブという操縦方法…まぁ後述し、進めましょう。

［マスターこのコクピットかなり異様だねぇ］

「うん？ああ、そうだよなぁ」

１番の特徴的なのが、操縦方法である。

人間の動きを特長的に出すため、
人間自体を包み、その動きを機体に反映する。
それがセミ・マスター・スレイブという操縦方法であった。
セミは、バイラテラル角での補佐や、
無用な部分はコンピュータ補佐、等を行う為。

まぁ要は、８m前後では、スペースに余裕がないって事だ……

今までのシート系は操縦スティックで操る。
アームスレイブは体で機体を動かすっう事の違いでもある。

「うんじゃあ、少し起動してみますか♪」

［は～い］

カオルは、コクピット内の人型スーツ内に、体を上から滑りこます。
親指レバーを押し込むと、
コクピットが閉まり、起動準備にはいる。

正面スクリーンに文字が浮かび、
スーツがゆっくり締め付けられる。
《初期設定しますか？》
「初期設定キャンセル。テストモードで起動」

《イエス、マスター》

メインジュネレーター起動
コンデンサー電荷上昇
ヴェトロニクスチェック通常起動中
アクチュエイター通常起動中

……

最終起動チェック中

間接ロック解除中

コンバットマニューバオープン

カオルは、右足から踏み出す。

通常設定バイラライル角2．5倍に設定になっている。

続いて左足…

『マスター、演習場許可とれたけどいく?』

「そうだなぁ、いってみるか」

『了解、第一演習場ね』

カオルはメインシャフトの方へ進める。

シャフトエレベーターに乗り込むと、集積場に上がる。

集積場から、第一演習場に向かう間、奇異の視線を送っくる衛士や、

兵士達がいた。

まぁそうでしょう、いつものより小さいし…

カオルは演出場にでると…

準備体操をしはじめた。

マススレイブモードにしているので、そういった動きも可能って訳だ。

（さてと…）

全力疾走をはじめた。

跳躍、前転、後転、倒立、等、

人間にできない動きでアームスレイブに、できない動きはない。

きくと、モビルスーツより強いんじゃないの?と思うだろう…

けど、ファンダジー系で、

ゴーレムと自衛隊の特殊部隊員が1対1でであえば…の状態だ。

ゴーレムがしかも、ブースター、ビームライフルを装備したら…

ゴーレムの動きが素早くなったら…

あともう一つ重大な問題が…Gがもろにシートからくるのであった。
Gキャンセラーがサイズ的にそなわってない…のがASだった。

まぁでもゴーレムでないこの世界の戦術機なら十分、
このアームスレイブは脅威になりえる話だった。

とにかく、動きが異常なのである。

カオルは、一通り動作を終え、ハンガーデッキに戻ってくると、
水月中尉や石橋達がいた。

「カオルさん」「カオル～」

「おう、ちっとまってなぁ～」

ハンガースペースに入れ、停止モードを選択、
コクピットブロックをオープンし、

シートからでると、飛び降りた。

「カオルさん、この機体あたしに頂戴！！」「あ～先任ずっこ～い」

「あ、でも今の機体の方が強いですよ」

「あんな動きをして？」「え？そうなの」

「ええ、こいつは、駆動部分にほぼもってかれるんすよね…
なので、鎧をきてるロボットか、きてない人間か？
の違いがある…ってもいいかもしれません」

「へぇ」「ん～」

「なので、こいつは重大な問題が、マッスルパッケージ、人工筋肉の劣化等ありますし、
また燃料ペレットを使用する都合上、最大１５０時間までしか稼動できないてすしね…
まぁ、とりあえず乗りたいならどうぞ、あ、操縦方法は全く違いますからきいつけて下さいね～」

ジャンケンしている二人をおいといて、デスクに向かう…

（まぁＭ９使うとしたら、装甲材の強化で、鎧を着た人間になるからなぁ…
あと、網膜投射か…

けどまぁあの操縦方法はありか…）

カオルはGガンダムを思い出した…
（ん～あそこまで自由にうごければなぁ…）

［マスター！！］

ドーン

（あ……）

見ると、M９が見事に転倒してた…

マススレイブ…

つまり、彼女は、足を大きく踏み出して
…律儀にM９は大きく再現して…

と、いう事だった。

カオルは機体に取り付き、操縦系を奪うと、
立て直し、半自動制御モードにして、改めて離れた。

転倒の衝撃で目を回していた、水月中尉を覚醒させたのも忘れてはいない。

初心者向けモードにしておいた。

カオルは戻ると、
トゥアハー・デ・ダナンのデーターを呼び出した…

マッドアングラーよりも高性能だなぁ…
なので水中専門に仕立てあげる。

パラジウムリアクターから、宇宙世紀時代の核融合炉に変更
飛行甲版オミット
気密チェンバー拡大
格納デッキ拡大
ＴＡＲＯＳオミット
推進装置に、熱核水流ジェット
（ん～ＢＥＴＡは、水中じゃあおとなしいからなぁ…装甲はまぁいいか…）

ＶＬＳオミット
無限弾薬装填装置部分組み入れて、

新音速酸素魚雷５連装を格納式にして…２門
（こんなもんか…）

「１１号どんなもんでできる？」

「ん～～６日」

「じゃあ、よろしく」

（あとは、ハイゴックか）

ハンガーにあるハイゴックを取り付き改造、

Z時代の構造に変えたあと、
メガ粒子砲オミット
ネイルを高周波、ロングに伸縮対応し、

とりあえず完。

（あんまり魔改造できんなぁ……）

もともとが完成度かなり高いし、水中戦だとね…

（あとは、ＡＳの操縦方法か…グフに入れようか、ＡＳの強化が早いか…
ん～武装共通化計るならグフのＡＳ化かな？）

グフを、Z時代の換装したあと、
シートをＡＳ式に変更してみた…注文

（マッスルパッケージ式にしてみるかな？？）

もう一機作成注文、

こっちは駆動方式をマッスルパッケージ式にしてみた。

後で比較か…

（あと…）

量産型ボン太君のデーター呼び出し、
網膜投射システム、
パラジウムリアクターから、パワーセルに変更し注文した。

２００１年７月３０日

ボン太君起動…

目の前にはボン太君がいる…

後ろに回りハッチから身体を潜りこます。

ちなみにこのボン太君、パワーアシストタイプなので、電子装備をものともしない。

電源をスタンバイさせるとハッチが閉まる。

キラーン

「ふもっふ（起動したな）」

「ふも、ふもっふ、ふっふるふもふっも…（けど、このボイスチェンジャー、全ての電源に関係してるとは…）」

ボン太君は軽く身体を動かしてみる。

「ふもふも（快調快調）」

とりあえず一通り動作は終了し、停止

（後は実践テストだな～）

となる。

（そういえば、個人兵装か…
短滑空砲を携帯できるようにすりゃあいい？ふむ……）

［あ、マスター、帝国から、
マスドライバー及び空港施設の承認おりたよ］

「お、そうか…じゃあ藤沢、茅ヶ崎の沿岸沿いに建設だな…」

［イエスマイロード］

「これで、シャトル足せば一日１０万人の４１６便はクリアできるか……」

［５００便なら２４時間稼動で、３分切るよね］

「定員数２４０人乗りだからなぁ…まぁ一日１０万人でやっと、一年以内に日本の難民
それ以外の国の難民も考えると頭痛いや…」

［他になんかないの？］

「軌道エレベーターも考えたけど、はっきりいって太平洋と、南極の間にしか今の段階は無理だしな…」

［でも５００便か…最低１７００機はシャトル必要だね］

「ああ、だな…」

夜はふけてく…

……

カオル報告

世界中の難民どうするか？

第67話　フルメタルパニックより帰還　投稿日20110209（後書き）

作者「横浜基地がどんどんかわってくなぁ…」

カオル「プロット通りじゃないの？」

作者「うむ」

カオル「……」

作者「スペースコロニーでの、避難民の安全な生活は入ってたんだよ…それ以外は後付け」

カオル「マスドライバーは？」

作者「入ってなかった……」

カオル「……」

作者「まぁばらしちゃうけど、どうすっかなぁ～で、マスドライバーで良いか…までだったんだよね…でもって、

調べたら…加速Gで百キロ以上必要とかさ…
うはっと思ったよ…

で、実際に構想中のから引っ張りだしーの、加速G計算しーの…
すこし執筆スピードがおちたね～」

ヒルダ「だから、あたしが最近でてないんすね…折角仕掛けてるのに…」

作者「あ、ヒルダさん…カオル食って下さい」

カオル「うぉい！！」

ヒルダ「いっただきま～す」

取り付かれるカオル、手際の良い脱がせっぷり……

作者「さて、次回はある大物をかな…」

第６８話　７月３１日　ガンダム、ア・バオア・クーへ　投稿日２０１１０２１

２００１年７月３１日

旨い蜜を吸いにいく事にした…

ア・バオア・クー戦辺りの時間に行き、
ジャブローで情報取得後にア・バオア・クー戦に行き、
資材大量取得しようと考えたのだ…

でもさ、カオル、内政というかＢ－０１すら放置してるよね…

「作者の執筆速度が遅いからじゃん」

それいうなよ…努力してんだからさ…

「で作者ついでに確認だけど、恋愛フラグは石橋と桜井でいいんだね？」

おま…まぁ…だな（まりもちゃんと殿下は、まだしられてないし）

「さて、１１号いってくるね。帰りは、６日後の予定で」

［いってらっしゃ～い］

「”世界扉”」

＝＝　ガンダムの世界　＝＝

宇宙歴００７９、１２月２８日
ジャブロー

世界扉をでて、幻影かけて扉を消すと
…記録を確認しに、作戦記録室に向かう。

場所は以前ティターンズ時代に確認してたから大丈夫かな？
と思ったら……

大丈夫だった…
移動はしてないようだ。
同化し、室内に入る…
人が居ないようなので早速確認。
ヘリウム３輸送任務ミデア…帰還機
５月２１日全滅
６月６日１／５
７月１５日１／４
８月１８日１／４
９月１日３／４
１０月２５日４／６
…墜落原因と、飛行ルートとか調べて…

確認のちカオルはジャブローを出て、飛び立っていった…

カオルは急いでＬ５のコンペイ島に…

日付変わる前に潜りこみ、コンペイ島と時間かけて同化、レビル将軍の乗艦のマゼランを確認した。

１２月２９日

確認できた辺りで日付が変わり、

第１艦隊が出撃し始める…カオルは発進する艦隊に取り付いた。

（このマゼランかな？）

同化した…

（ビンゴ）

「将軍！！」

頷くレビル将軍…

「第一艦隊出陣する！！各艦、微速前進、陣形を編成せよ！！」

ソロモンいや、名前を変えたコンペイ島から、

第一艦隊に属する艦艇が前進し始める。

船の上には、ジムが固定され、前進していく…

終戦を目指して……

１２月３０日、
カオルは艦内のパブリク、ランチを取得していた。
「将軍、第１３独立艦隊が敵艦隊と遭遇しました」
「ふむ…」
「将軍！！報告にありました、トンガリ帽子がいました！！」
「むぅ…ガンダムはどうなっておる？」
「今のところまだ報告は上がってません」
「密にな…そのＭＡが残ると、被害が更に増えるからの」
「は！！」
「第二、第三艦隊は？」

「第二からは、順調との報告です。第三艦隊は、接敵、撃破との報告です」

しばらく時間経過すると……

「第十三独立艦隊、敵を壊滅させました」

「例のは？」

「はっ！撃破と報告あがっております」

「ふむ…後背は確保できそうだの」

「将軍、作戦会議のお時間です」

「わかった」

レビル将軍が作戦会議の為、移動した…

「さて、今回の星一号作戦は、防衛ラインにあるア・バオア・クーを強襲、そのままア・バオア・クーに戦力を引き付けながら、ジオン本国に進み、占拠する事となる」

……

「グレートデギンが和平交渉に…」

「ほう」

（そろそろか……）

カオルは加速を二重かけすると他の人も含め、
性格調査に乗り出した。
１６人程問題のなさそうな人がいたのでマークする。

２１：０５

「デギン公の様で」

「うむ」

「し、将軍！熱源しょ」

カオルは全力でマーキングしてた人を引き込み…

「うぉ！！」
帽子が剥ぎ取られたのを確認し、レビル将軍を引き込んだ…
光の奔流の中、艦を離脱し、急いで離れる。

（あちぃあちぃ！）

光の帯からぬけ……一息ついた…

手短な生きている艦に取り付き、空気がある室内にはいる。

レビル将軍をだすと…酷い火傷をおっていた…
医療カプセルをだし、レビル将軍を入れる。
カプセルを作動させロックし、虚数空間においた。

第一艦隊のなれはてを取得しながら……
12月31日

変わった辺りに、ア・バオア・クーに侵入した…

1：17
「我が忠勇なるジオン軍兵士達よ……
今や地球連邦艦隊の半数が我がソーラーレイによって宇宙に消えた。
この輝きこそ我等ジオンの正義のあかしである。
決定的打撃を受けた地球連邦軍に、いかほどの戦力が残っていようと、それは既に形骸である！

あえて言おう…カスであると！！

それら軟弱の集団が、このア・バオア・クーを抜く事は出来ないと私は断言する。
人類は、我等優良種たるジオン国国民によって管理運営されて、初めて永久に生き延びる事ができる。
これ以上戦い続けては、人類そのものの危機である。
地球連邦の無能なる者どもに思い知らせてやらねばならん。
今こそ、

人類は明日の未来に向かって立たねばならぬ時である！
ジーク・ジオン！」

「ジーク・ジオン！！
ジーク・ジオン！！
ジーク・ジオン！！
ジーク・ジオン！！
ジーク・ジオン！！」

叫び疲れてしまった……
カオルは勿論生でギレン総帥を見、
演説をきく為にジオン軍兵士に幻影でなり、紛れこんでいた。

わざわざと…

ボソッ「作者も行った癖に…」

ああ行ったよ、録音されたよ♪

（さてっと…ドロワ～）

ドロワに同化し、格納庫にある、ジオングとゲルググをコピーした。
離れ、格納庫にあるザンジバルも同化し取得する。

（ビグ・ラング～いた）
調整中のビグ・ラング、

側にヨーツンヘイムがいたので取得…
オッゴも取得。
（ドラム缶だな…まさに）

そして、戦闘が始まる……
８：１０第１次攻撃隊、パブリクが突入してきた…

ビーム撹乱膜が戦場に展開される。

対空ミサイルがジオン側から打ち出される。

カオルはしばらくア・バオア・クーの外殻部にて観戦している…

（あれにキシリアか…）
グワジンが見えてきた。

８：４０連邦ＭＳ隊が出撃してきた…

戦場には命が咲き乱れる……
一つ一つの光の花が命をけしている。

そして……ジオングが出撃していった…

（お、指揮が？…ギレン総帥しんだか…）

統制とれていた防衛ラインが、押し込まれているのがわかる。
そして…ドロス撃沈が撃沈した…

連邦のモビルスーツがア・バオア・クーに取り付いてきた

ドロワが撃沈し別方向からも…

（あ、）

WBが被弾し…着艇していくのが見えた。

外は…ほぼ連邦の優先になってきた。（そろそろか…）
残骸を集めに翻弄し始めた…
ア・バオア・クー内外で拾いまくる…
特に最優先が内部及び、外殻部…爆発で焼失しそうな場所のだ。

要塞内では、いたるところで爆発が起きている…

「退避だ！！」

「爆発が激しくなったぞ。後は周辺空域制圧で良いそうだ！！」

「犬死にすんな！」

更に激しい振動がおき…

電力が落ちたみたいだ……
要塞の照明がおちる。

（うおっ）

ＡＴフィールドが展開され、壁にたたき付けられた…
（いたたた……そろそろやばいか？）

ア・バオア・クーから離脱すると……

（あ、あれか？）

ザンジバルがサラミスに打ち抜かれて、爆沈していくのが見えた…

カオル、周辺での回収はあきらめて、敗残兵狙いの
Ｅフィールドに進む。
そこは、退路となり、敗軍が撤退しつつある

（ビグ・ラングが支えてるんだよな……）

背後では、爆発するア・バオア・クーが見える……

そして、停戦命令を無視し、逆襲する、連邦とビグ・ラングの戦いがはじまった…

カオルは他のフィールドの回収作業に勤しむ。

1月1日終戦…

カオルは拾い終わると、死者を宇宙空間に浮かべ、黙想をする。

爆発のおさまっている、ゼダンの門に入り、気密があるエリアを探しあてて…

「”世界扉”」

扉を潜る…

宇宙歴００７９　９月１日
カナダ、木星輸送船団基地…

カオルは爆散による墜落する機体に潜りこんだ…
パイロットも救出しようかな?

と思ったが…

「この間よぅ、村娘美味しく頂こうとしてよ」

「おお、どうだった？」

「抵抗したからさ、ぶん殴ってやったら失神しやがってよ…興がそれたさ」

「お前は駄目だなぁ～
そんな時は失神する前にぶち込めばいいんさ」

「あ～そうかぁ」

（無理、嫌いなタイプ）

荷物のヘリウム3タンクだけに集中する事にした。

同化し、空中監視してると……

「ちぃ、お客さんが着やがったぜ…」

「あちゃ、マジかよ…護衛はなにやってんの！？」

ヒュー

直撃弾きたので…

「”加速”」

輸送タンクをまるごと頂き、離脱…

ジェット燃料に引火し、爆散、落下していくミデアを背にしながら、

アメリカの大地に落着する。

「”世界扉”」

カオルは世界扉を潜る…

……

カオル報告

ジオング

ドロス級

ゲルググ

ビグラング

オッゴ

パブリク

ヘリウム3タンクゲット

第６８話　７月３１日　ガンダム、ア・バオア・クーへ　投稿日２０１１０２１

作者「レビル将軍がきたね～」

カオル「初期プロットには…」

作者「ないよ…けど必然に…になっちゃったんだよ」

カオル「……初期プロットから逸脱して…」

作者「あ、そこは大丈夫、ラインに沿ってる。細かいところでプロット脱線だね…」

カオル「マスドライバーとか、ヒルダさんとか？」

作者「ああ、細かいところでだね」

カオル「……ところでレビル将軍の口大丈夫なん？」

作者「……1番出てるのがギレンの野望…でだっけ？…多分大丈夫かなぁ～と…」

カオル「まぁ…良いけど、
で宣言している日まで後６０日近く投稿か…ながいんじゃ？」

作者「まぁ…なんとか続けるさ…武ちゃんの驚く顔みたいし」

第６９話アバオアクーより帰還　投稿日２０１１０２１１

２００１年８月５日夜

＝Ｂ５５ハンガー＝

世界扉からカオルがでてきた…

カオルは、資材置場にいくと、燃料タンクを吐き出す。

（もう一層資材置場が必要かな？）

とすこし思いはじめた…

その後ジオフロントの医局へといき、カプセルの交換をし、

寝床につく…

８月６日

シェルターに引き込んだ１６名を案内するので、

戦艦ドックにて、シェルターをだし、扉をつけて、２５号に案内を

頼んだ。

［マスター、できたよ～］

「何が？」

［テスト型のビックトレー］

「ああ、だったな…了解…と先にかたつける事やっちゃおう」

［あのタンクが全部無事なら、１２００基分だね］

「じゃあ、まずはシャトルだな…」

［ただシャトルほぼ２４時間運行だから、ヘリウム３の消費が激しくなると思うよ…］

「だよなぁ…半年後には…か…まぁ９月まで持てば良いけどさ……とりあえずシャトル２００機造船してくれ…
あと、燃料くうが、サラミス改を順次造船で１０隻分、
後は…陸戦強襲型ガンタンクとを…２個連隊分２１６機とカバー用のホバートラック１８両で…」

［５１６基分のヘリウム３つかうね］

「ああ、よろしく……あと約１２００か…ん～後は、製造終わり次

第かな？
あ、そうそう、資材置場用のブロック、もう一層拡張しといて、あと戦艦ブロックも」

［了解～。ところで、避難民の移送方法メデューシンたのみ？］

「これからの海外も目に入れると…
それしかないだろうなぁ…2番機もつくっとくか…」

［陸上輸送に頼らないの？］

「ん？ああ、新幹線に頼ればいいんじゃ？」

［ないよ］

「は？」

［あったと言えばいいかもね～
東海道山陽新幹線は破壊等で、なくなった…］

「東北や上越新幹線は？」

［何処の路線？］

「東京から新潟と、東京から盛岡、八戸まで行く新幹線」

［東海道延伸線、北陸新幹線かな？
東海道延ばして仙台までと、京都から新潟間結ぶ…］

「あ、京都が首都だったんだっけ…」

［北陸新幹線は放棄破壊された、
延伸線は建設中だったけど、大宮通る為中断になったよ］

「あ～そうか……じゃあ今は動いてないって事なんか…」

［今も帝都方面で運行してるのが常磐線、京浜東北は運休になったし破壊されたって…
総武線は２３区内から東の運行、
東北線は疎開対象地域以外は動いてる］

「あ、俺の世界の路線図データーあったな…ちとまってて」

［へぇ…ＪＲになったんだ…廃止路線がこっちではまだ動いてるよね］

「ふむ……」

［あと勿論ここまでは、鉄道でなく、道路、しかも荒れたね…整備する能力がなくなっているって］

「つまり交通インフラも手を加えないと？」

［うん］

「む～新幹線か……」

［あ、新幹線は不可だと思うよ。作っても維持する能力が帝国にはなくなってる］

「……リニアチューブか？」

［なにそれ？］

「いくつかのＳＦ物であるけど、
真空にしたチューブの中をリニアモーターが通るっうもんなんだよね。
これで衝撃波をなくすっうもの」

［……いいんじゃない？…けど速度どのくらい？］

「マッハ越えてたような…」

［マスター…それ大陸間用だよ…通常のリニアでいいと思う］

「か…ん～あ、上海リニアか、ＪＲ東海のリニアかな？」

現在、上海では磁気浮上式、
日本ではＪＲマグレブ式山梨試験線がある。

「まぁ……取得してからの話かな…とりあえずは、道路の整備が先か…
整備できそうなのあったかな？」

［コロニー用のはあるけど、地球には適さないよ～］

「だよなぁ…第一ＭＳは重いから、アスファルト荒れるし…」

ＭＳで日本の道路歩くと荒れます。
キャタピラが道路走行すると……の状態になるので…
宇宙世紀のコロニー道路は重さに強化対応してる為、大丈夫なんです。

「ＡＳは重量は全然大丈夫だけど、軍事用つうか、なぁ…民生用には強力過ぎだし…
エステバリスは、動力や操縦方法の問題だな…」

（まぁ…民生用というか、工業や農墾用あってもいいな…
軍事用しか作れてないし、余裕でたら増えるだろ……）

「ふむ……次に行くところが決まりかな…あとは…
初のＮＴ専用機作ってみるか…」

［ＮＴ？］

「オールレンジやファンネル操作し、いろんな事できる人たち」

［ファンネル？］

「こういったやつさ」

ジオングのデーターを鯖に入れた。

［こういったの？、ヤドカリ君もう一人つければ操れるよ～］

「へぇ…パイロットに一人、ファンネル操作一人ですむわけね…」

［うん］

「わかった……と……あとは…ない？」

［特には…ところで学兵さんとかの進路は？］

「う……今、学兵はどうなってるん？」

［今のところは貰ったカリキュラム参考にすすめてる。
けど、歩兵志望とか、パイロット志望とか、
戦車兵志望とか、色々いるみたいだし］

「ふ～む…まぁとりあえず見に行くのと、志望別にわける必要あるかな…
まぁ、才能でなく、適性条件がなくなったのがリニアシート＋Ｇキャンセラーだからなぁ」

［あとそろそろＢ－０１の隊長決まりそうだよ］

「ほう…やっとか…」

［途中参戦もあったしね～］

「あ～…ミデア組か…」

［あと今朝の人達もいるでしょ？］

「うん……まぁあとでだね…と、演習場は今日あいてる？」

［……あいてない～］

「明日は？」

［第二ならあいてる～］

「じゃあ、いれといて」

この日はこれ以降特別にはなかった。

8月7日

今日はビックトレーのテスト艦における兵器テスト、魔グフ2種によるテストになる。

目標物は横１００ｍ＊高さ１００ｍ＊厚さ５０ｍの強化コンクリート、ダイヤモンド以上の強度、
勿論撃ったあと治すの繰り返しだ

最初の物は、鋼鉄の咆哮の１６０ｃｍ砲

［マスター…このでかぶつなんなの？］

「ん？１６０ｃｍ砲だけど？」

［常識外れ…］

試射に入る。

［マスター…何故上に砲身が向くの？］

「そういった仕様さ、撃てばわかるよ」

ドン！！

テスト艦が大きく揺れる。うちだされた火の玉は、
垂直に目標を捕らえると、コンクリートの塊を文字通り爆散させる。

「た～まや～」

［……何故？？１００ｍ１００ｍ５０ｍのコンクリなんだよね？？非常識だよ…］

「コーエークオリティなのさ」

［なにそれ…意味不明］

次の武装に変え、
コンクリートを治しにいった…
（コンクリートだけでなくねぇ…）

２０ｍ程のクレーターができている。
治したあと、艦橋にもどった。

鋼鉄の咆哮製１６０ｃｍ砲の評価…一発の威力絶大、だけど弾装填に時間がかかる。発射時の衝撃大、の為船を揃える必要あり。

次の武装は鋼鉄の咆哮製レールガン１だ…

［普通の形だねぇ］

試射…

爆散はしないもの…

５０ｍのコンクリートの２０ｍ近辺まで食い込んでいた…

鋼鉄の咆哮製レールガン１の評価

威力絶大なるも、充電、冷却にわずかながら時間の必要あり、１秒間に１発の射出速度。
弾速ありの為、レーザー同様の必中性あり。

（あとは、レーザー兵器か…うん…魔グフの評定にうつるか）

プラズマ砲もあったけど、飛ばしますた…

作者的には充電にかかる、射程短い、誤射の危険あり…っすもん。

テスト艦を戻し、
魔グフ2種の評定に入る。

両方とも操縦席はＡＳ式…ながら、片方は駆動方法を変え、マッスルパッケージにしてある。

まずは通常のＡＳ式の魔グフへ…

イジェクションポットを採用しながら、網膜投射を優先してある。

コクピットに余裕があるため、かなりの運動スペースといったらいいのかな?
をとれていた。

評価的にはGキャンセラーも有効的でまぁまぁか…

次の機種、魔グフマッスルパッケージ仕様にうつる…

（ぐ……Gキャンセラーが効かない程??）
かなりの速度で動き回れるが、Gがかかりすぎる。

乗り手を選ぶ仕様になってしまった……

評価が終わり……

（ん～～……片方は乗り手選ぶか……）

ヤドカリ君達は射撃が好みらしいので、
これには乗りたくないと、言われてしまった…
ので、近接したがりの、適正次第で…の形になる。
金色のビームコーティングは忘れない。

そして夜になると…

［マスター…一応耳に入れた方が良い話が出てきたんだけど］

「どうした？」

［情報室にちょっと着てもらえる？］

「ああ…」
情報室に移動。

「で？」
衛星映像が映し出される。

［カムチャッカ半島で侵攻の気配があって…］

「ソ連か…こっちには来る事はないだろ？」

［地下のスパイからはないからね～…
一応現地軍で対応できるレベルなんだけど…ね］

「そっちも戦線あるんだよな…あとは、シンガポールの方は抑えきれてるんだよな？」

［そっちは細いからね～］

「いざとなればフライングアーマーでか…」

［あ、無理だよ～］

「ん？」

［東京から、ソ連の要塞都市アナディリまでが、４０６８ｋｍ直線でね］

「あ、航続距離か…増槽が必要だな…」

魔フライングアーマーをハンガーに持ってこさせた。

「つけられそうな箇所はっと…」

［マスター、ここどう？］

「そこね……うん…よさ気かな？
じゃあ明日テスト入れといてな」

［了解～…マスターおねむ？］

「ああ、明日な」

［お休みなさい～］

……

カオル報告

特には？

第６９話アバオアクーより帰還　投稿日２０１１０２１１（後書き）

あ号「作者、読者から指摘うけたが、いつわしを攻略しにくるんだ？」

作者「そうっすね…最低１万機でないと、ハイブ内のＢＥＴＡのお掃除不可能とみてます…
あとハイブ再利用の拠点化ですかね…
正直、５００：１だと、きついとみますから…」

あ号「他のように、反応炉攻略を目指すのでなく？」

作者「ハイブ内の完全制圧、後々の禍根を絶つ…
当初のハイブ攻略戦に沿っての流れです。
それができなかったのが、今まで、異世界軍はそれを可能にさせる…というプロットです」

あ号「わしのとこまで…９０話くらいあるかなぁ…？」

第７０話　パトレイバーの世界へ…　投稿日２０１１０２１２

２００１年８月８日

［マスター、アステロイドベルトに、
チューリップが到着したって～］

「おっそうか♪」
朝一ハンガーにつくなり１１号から報告がはいった…
で、心配の…

「セレスはどうなん？」

［セレスにはＢＥＴＡの拠点なしだって～］

アステロイドベルトにある衛星セレス。
直径１０００ｋｍ未満クラスの衛星だ。
それなりに大きいから命名はされている。

「ふう…まぁ…一つ懸念はなくなったか…」

［で、これからは残骸集めはしなくっても鉄は精製可能だよ～］

「ヘリウム３タンクだけに絞ればいいか…

まぁあと5，6回分回収すれば精製できるからな…」

［だね…あ、レビルおじさんはどうする？
って25号からきてるけど…］

「映像は見せた後だよね？」

［うん］

「なら、少し話にいくか……」

レビル将軍の元を訪れた。

「はじめまして、レビル将軍」

「おぬしは、映像にでてた…」

「はい、若輩ながら、異世界軍の責任者をしている、渚カオル国連軍大将です」

「地球連邦軍大将、ヨハン・イブラヒム・レビルだ…よろしくのう」

右手を差し出してくるレビル将軍。

「よろしくお願いします」
握手をする。

「で、レビル将軍、スカウトを受けていただければ、嬉しいのですが…」

「この、侵略生物から、人類を救う為にか」

「はい」

「まぁ、よいが…一つ聞きたいのだが、
わしが死んだ後の世界はどうなったのだ？」

「あのタイミングで将軍が死なれたのが痛かったですね…
ジャミトフや、無能高官達の暴走で、
その後もスペースノイドとの関係が改善できなかったので…」

「ふむ……」

「その後軋轢による大きな戦いが、００８３、００８７から８８、００９３ですね。
後は別問題での戦いですので…」

「ジャブロー陥落された方が良かったのかのう？」

「ですが、将軍の手腕で、地球連邦軍は勝ったので……
できればこの地球でも手腕を発揮して下さい」

「うむ。してわしはどのような仕事を？」

「自分が不在時の指揮や、
主に宇宙における避難民の安全確保の為の、
防宙軍の指揮をお願いします。
まだヘリウム３の自己精製能力がないので、
規模が小さいのですが、９月になればの見込みです。
あと階級は中将でお願いします」

「ふむ……わかった」

「で、今のところなんですが……」

長くなるので略になります。

レビル将軍と別れ、増槽テストの結果を聞くと、
スピードが若干落ちるものの、５０００ｋｍまでの高速移動可能となった。

「カムチャッカは現地軍で対応可能なんだね？」

［の模様、テスト部隊もいるようだし］

「じゃあ、一応は問題ないか……じゃあとりあえず行ってくる」

［了解、マスター］

「”世界扉”」

＝＝パトレイバーの世界へ＝＝

このパトレイバーの世界は、汎用多足歩行型作業機械、レイバーは急速に発展、普及し、
軍事・民用、問わずあらゆる分野で使用されるようになった…

特に首都圏では、９５年の東京南沖大地震、
及び、土地拡大を兼ねた、国家事業バビロンプロジェクトで一般的になってきた…
という世界である。

また民間人が操作するのに必要な法的手段も整ってあり、
特種車両として扱われ、各車にはナンバープレート、
操縦には多脚制御機の免許が必要…

運転免許に欄が増えるっうわけだった。

そんな訳でおりたったカオルが見た世界は……

工事現場で、土管運んだり、シャベルで掘ったり、
オプションでショベルアームつけたり、

至るところでレイバーが作業していた…

まぁあと何故レイバーかというと…
民生用の生活にこれ程多目的にレイバーが、
食い込んでいる世界からの発想だった。

（ほほっ♪…多分バビロンプロジェクトの工事現場？）

カオルはナビをだそうとすると…

「ごぅらぁぁ～、おめ～そんなとこにいると危ないだっぺよ！！
早くどきんしゃい」

（あ、やべ…見つかったか）
「あ～すんません、見学しようと、迷っちゃって…」

「ほれ、出口はあっちだべ、さっさといな！！」

「へ～い」

（出た場所が悪かったなぁ……）

てくてく歩きながらすこし反省…

（それに人多いしなぁ…）

さすがに衆人監視の中いきなり飛んだり、消えたりできない。

すると…

「ちょっと僕～駄目じゃないはいっちゃ～」

警備員のお姉さんが声かけてきた。

「あははは…すんません。海が見たくってきたら、迷っちゃって…」

「どっから入ってきたの？立入禁止看板あったでしょ？」

「ん～あったかなぁ…見落としたみたいっす」

「ふ～ん……ちょっと所持品だけ確認させてね？

最近地球防衛軍、テロリスト達が本当うざいからさ」

「なんにも持ってないっすが、ここで？」

「ま、一応ね…詰所に来てね…こっちよ」

「へーい」

逆らわずついてくと…

レイバーが横にたっている詰め所に…

「警備員さんもレイバー操縦できるの？」

「レイバー喧嘩の仲裁等にね～…一々警察呼んで、被害だすよりましって判断らしいわ…僕は操縦資格もってるの？」

「運転免許もってないっすからね～」

「え？未成年？」

「17っすよ」

「確かに資格とれないわねぇ……さ、とりあえず所持品あったら、ここにおいてね」

「ないっすよ～」

（全部虚数空間だし）

で、金属探知器とりだして、ボディチェックをやりはじめる。

ペタペタペタ

「あ、ふん…そんなとこ触っちゃ」

「こらこら誤解をまねく声あげんじゃないの、ぼーや」

「ちぇ…」

「うん。何ももってないわね…近所なの？お金も持たずに」

「そうっすね～」

「ふ～ん…じゃあいいわ、次入る時は見学申請してね」

「うい～っす」

おとなしく詰め所をでると、ゲートからでた…

（とりあえず活動資金だな…）

近場のパチンコを探そうとしたが……

（ねぇなぁ…）

まさに陸の孤島だった……

カオルは都内のターミナル駅を目指した。

「〝幻影〟シャムシェル」

カオルは駅そばのパチンコ店に入り、
床に転がっている玉を２０玉程集めると、

ＣＲスピンドール３の台に座る…

「イロウル」

ｃｐｕ操作して…入賞させ、大当り。

その日は１０万円換金した。

ビジネスホテルに泊まり…翌日

二日目

今日は真面目に民生用のレイバーを取得しようと考えていた…

農家にいき、豊作君、
消防署にいきレスキューレイバー、
パイロバスター
レスキュークラブマン、
警察にいき、イングラム、ロードモビル、
あと建設現場にいき、ブルドック、
レックス２５００、
シードック…辺りを

アタッチメントの道路建設用のも忘れずに…

ってところかな?

（ん～建設現場が先か…）

端末だして、衛星を打ち上げ…

でもって、
「レイバー、ロボットを使って道路舗装工事している現場は?」

A「1時の方向距離2，1ｋｍナビしますか?」

「Y」

飛んでった…

作注　あの世界にあってもおかしくないレイバーかなと思いましたので、
オリをだしました。

カオルはすこし考えていた…　アタッチメントかな?
と思ったら専用レイバーがあったらしい…

通常道路アスファルト設営は、

フィッシャー
プレート、
振動ローラー、
コンパインドローラー、
タイヤローラー等

多数の機械があり、
精々アタッチメントで、ローラーとプッシャーかな?
と思ってたら…

斜め上にいってたらしい…

全部を兼ねるレイバー、

しかもレイキマン、スコップマンを兼用するロボットがいる。

（都合1人または2人でチームか…）

勿論取得した…

（さてと次の現場か…工事用なら、
バビロンプロジェクトの建設現場だな）

昨日注意された工事現場にむかった…

（より取り見取りだなぁ～）

まさに建築現場では花形、

完全に今までの重機になり変わっている。

土管を運ぶレイバー、
高所の溶接作業をするレイバー、
土をならしているレイバー、
鉄骨を組み合わせているレイバー、
高所作業に鉄骨にひっかけ昇っているレイバー、
高所で鉄骨をうけとり溶接にはいろうとするレイバー…

至るところでレイバーによる建設作業が行われてる。

けどさすがに作業中は近寄って、ＡＴフィールドでもでようなら大騒ぎになる…
からアタッチメントを先に取得しておくか…で、

レイバー置き場を見回る事にした…

杭打ちアーム、
ショベルアーム、
ブレード｛排土板｝アーム、
ブレードアタッチメント、
リッパアーム、
散水アーム、
ボーリングアーム、
ローラーアーム、
牽引アーム、
ドリルアーム、
掘削ホイールアーム、
不整地運搬ようアタッチメント
ウォータージェットアタッチメント、
穴掘建柱アーム、
汚泥吸排アタッチメント、
深層混合処理アーム、高圧噴射攪拌用地盤改良アーム、
薬液注入施工アーム、
ボーリングマシン、
ダウンザホールハンマアーム、
さく岩アーム
タンパアーム、
コンクリートポンプアーム、

アジテータユニット、
圧砕アーム、
コンクリート仕上げアーム兼カッタ、
アスファルトスプレーヤアーム、
ジョイントシーラアーム、
スリップフォームベーパアタッチメント、
キュアリングアーム

等などありとあらゆる建築、トンネル、土木に使えそうなアーム、
アタッチメントが置いてある。

レイバーはアタッチメントや手をかえれば大体共用に使える。
というか、特殊化なのをのそけば共用にしないと、
建築現場等成り立っていかないからだ…

取得しまくってるなか…

「レイバー同士の喧嘩だぁ〜！！」
（お、面白そうだなぁ）
野次馬気分で、見に行くとした……

現場は、まだ殴りあいには発展してないのか、口喧嘩と仲裁に入ってるのだろう…
明らかに作業でないレイバーが仲裁に入ってる。
「止めてくれるな、警備員！」

「その通りだ、今日こそ決着をつけてやる！」

「そう、頭に血をのぼらせないで、いいから説明しなさい」

「ほっといてくれ第三者には関係ないんだよ」

「プライベートな問題なんだよ」

「おう、口出ししないで貰おうか」

「すっこんでろ!!」

「なら、頼むから、レイバーから降りて、生身でやってよ…回りへ被害でたら百万単位すぐ飛ぶよ、自分で払える?」

「う〝」「あ…」
動きを止めはじめる作業レイバー

「そこの後ろ足元のパイプぶち抜いたらいくらだっけ?」

「……」

「生身ならぶち抜くや、被害でるような馬鹿できないよね？
…二人とも降りるまでちゃんとみるから」

「……」

「ね？」

プシュー片方がカバー上げて降りる。
それをみたもう一方も…

（うむ……お金だよな現実は……）

興が覚めたのか、喧嘩してた当人同士は、駆け付けた監督からの説教を受けていた。
後始末に翻弄する警備員達。
レイバーを動かし邪魔にならない場所に移動等をしていた。

夜間作業切り替わる時間までしばらくまち…

その後、作業用や警備用のレイバーを取得しまくった。

……
カオル報告

色々な建築作業系レイバー、
警備用レイバー

型番不明なレイバーも取得しました。

第７０話　パトレイバーの世界へ…　投稿日２０１１０２１２（後書き）

ナギ少尉「後書きは乗っ取ったぁぁぁ～って事で艦長～かっこハートかっことじ」

艦長「かっこハートかっことじって、わざわざいうもんか？」

ナギ少尉「そんな事気にしない～ね♪」

艦長「まぁ良いが…作者はどうなってるんだ？」

ナギ少尉「縄でグルグル巻きにして、雪の中に捨てておきましたよ」

艦長「……何時間前？」

ナギ少尉「昨日の夜からです♪」

作者「なーぎー」

ナギ少尉「きゃあ♪このお化けめ」

博士「全く出張するなり問題起こさないでくれる？
わたしが縄とかなかったら、明日がなかったわよ」

艦長「博士…ありがとうございます」

ナギ少尉「あ～こんなおばさんと盛り上がっちゃ駄目～」

作者「…先進めていい？」

艦長「作者さんどうぞ」

作者「まぁ今回は、レビル将軍加入と、
パトレイバーの世界に…ですね」

艦長「軍事的には1番劣っているような世界ですが？」

作者「ですね。けどこんだけ生活に密着している世界なので、多様性をもって来ようかな？と」

艦長「なるほど…」

作者「まぁあとは他に民間に使われている…のが、わからないのもあるんですけどね」

艦長「自分も知りませんからねぇ」

作者「ところで後ろの二人…どうします？」

艦長「カオル君にあげましょうか？」

後ろでは衣服をちぎりながら、取っ組みあいの喧嘩に発展していた…

第７１話　レイバーの世界２話目　投稿日２０１１０２１３

３日目

ビジネスホテルをでると、
米の台所、新潟、秋田に向かう。
農作業のレイバー取得目的でだ…

まぁそこら辺だったらあるよなぁ～の発想からだった…

稲刈り作業中の豊作君が見えた。

動きはそれ程素早くないので、取り付いて取得。

（アタッチメントだよな…）で、農作業終了までまち、
倉庫に機体が入ったので家捜しした。

トラクターや、田植、防除、コンバイン、除草等のアタッチメント
があったのでコピーした。

山岳作業レイバーのピッケルくんが、レンタルやさん？
においてあったので、覗いてみた…

アタッチメントが、山岳作業に関わる、
林業、
トンネル設営、
高圧電線作業、
等おいてあったので取得…

都内へと戻る。

四日目

目の前をＪＡＦだったか？ロードモビルっぽいのが通過していったので、
「”幻影”シャムシェル」
で、直ちに追跡にはいる。

（ＪＡＦ仕様か、なきゃおかしいよなぁ）
このロードモビルっうレイバー、
普段は少し長い４輪の車両という状態から、
緊急時には４脚装輪の状態になり、
一般車両の渋滞も何のその、
事故現場に急行するレイバーだった。

警察用にとの情報だったが、それだけで済ますまい。
緊急時に必要…はごまんとある。現実日本では、警察以外でも、消防、ＪＲ、東京ガスまぁ、
道路交通法では、色々な所が緊急車両が認められている。

法律適用上でなくとも欲しい所は沢山ある。

機械警備対象物件から発報があり、
警察に電話する前にとりあえず現場確認する、
セコム等…

他にはＪＡＦ等渋滞の元になっている事故車への急行したい車両等だ…

かなり政財界に食い込んだ篠原重工だ。
そうあってほしい…いや顧客を増やすのには最適だろう。

まぁ、そんなわけで、渋滞なんのその、、
事故渋滞をすいすいとかわすと、
車道真ん中でボンネットを開けた状態で停車している車両があり、
それによって渋滞が発生しているのが一目でわかった。

ロードモビルは車載クレーンを使い、傷つけないように車両を掴むと、どっかに車両をつれていく。

勿論作業中に取得すると…
消防署に向かう。

消防署に着くと…
車両は出払ってた…

ｏｒｚ

レイバーを探しに端末を起動させる。

「この付近のレイバーが出てる火災現場は？」

A「検索中……西南西約１０ｋｍ地点、ナビしますか？」

「ｙ」

カオルは火災現場へと飛び立った。

ボーン！！
現場は工場火災だった…
跳ね上がるドラム缶、
天高く８０ｍ程火柱があがる…
濛々と黒煙があがっている…

◎〇化成とかかれている。
門の看板に危険物取扱や、産業廃棄物取扱、石油精製業等が見える。

ヒューグワッシャ

工場から打ち上げられたドラム缶が、付近の駐車場にとめてあった車の屋根に落下し、
車のフロントガラスはバリバリに砕けちった…

付近では、住民の避難が行われ、大規模火災になっている。

消防の各レイバーは火元へかなり近寄って放水等してるが、

燃えやすいものが、まだ中にはたんとある…

ボン！！

また５０ｍ程火柱があがる…

そんな中、

「要救助者確保～！！各員正面広場に放水強化！！」

各レイバーや、消防車もそれに反応して、正面広場にむけ放水を強化する…

ガッシガッシ

レスキューレイバーが救助者を手に隠しながら、出てきた。

レスキューレイバーは門を越えると付近に待機してた、

ロードモビル救急タイプに要救助者を載せた。

勿論その間に救急タイプは取得済み。

救助者を載せたロードモビルはサイレンを慣らしながら病院へと向

かう…

レスキューレイバーは、科学消防車よりホースを受け取ると、
消化作業に参加しにいった…

消化作業は順調にすすみ、

大きな火柱もあがらなくなり、
生身の消防隊員も中に入り、残り火の消化、確認に入るようになった…

各レイバーは大半がキャリアに搭乗しはじめた為、
取得に回る。

レスキューレイバー、
パイロバスター、
レスキュークラブマン、
消防レイバー
をコピーした。

現場から離れ、首都高速の道路公団によってみると、
道路保守用のレイバーと、
アタッチメントがあったので取得しておいた。

五日目…
ホテルからでると、

水中用のレイバーを取得しようと、横須賀の米軍基地及び海保にむかった…

海保からはのりしお、及び運用艦、

米軍から、特務艦及び潜水レイバーを取得した…

最後に原点の９８式ＡＶ　篠原重工製のイングラムを取得しようと、台場に向かう…
特車２課には、第１小隊の機体しかなかった…ので、ＡＶＳ－９８をコピーすると、
建物の屋上にでて、検索をし始めた…

「この現在地の建物からでたトレーラーの現在地は?」

「検索中……現在、北東方向に移動中、ナビしますか?」

「Ｙ」
飛翔し追跡にはいった。

現場付近では、車両が踏み潰され、

住宅が倒壊、散々な被害が出ているのがわかる。

９８式が丁度リフトアップされ、動きだした。

警察車両が相手のレイバーに潰されないよう、近寄りながら説得交渉は続けている…

「酔っ払い運転やめなさい」

や

「レイバーから降りなさい！」

等など

しかし、相手はガン無視を続け、

また一軒家を潰す…

「あたしの家がぁぁぁ」

その家の住民だろう…へたりこんだおばさんがいる。

片方のイングラムは白、

（こっちが泉ノア機か…）

主人公機だ。

太田機が、酔っ払い運転の機体の注意をひくように、

「あーそこの酔っ払い運転の搭乗員、おとなしく降りろ！！」

しかし、酔っ払いレイバーはガン無視

「こら、そこのレイバー、聞こえないのか？」

……無視

「ごうらぁ！！！聞こえんのかといっとるだろうが！！！！！」

外部スピーカーから大音量…

やっと酔っ払いレイバーの向きが変わる。

それをみた泉機は背後から近寄ろうとしている…

「そこの酔っ払い運転手、この太田様がじっくり相手してやるから覚悟」

泉機が酔っ払いレイバーに背後から飛び掛かり、

ガシィ！！

片側を機体の手を潜りこませてロックする。

それと同時に太田機も機体に飛び掛かり、片側を同様にロック。
うまい具合に重量ありそうなレイバーの動きをとめる。

チュウウゥンチュウウゥン

酔っ払いレイバーからモーター音が聞こえるが、イングラムに押さえられ、動けない。

太田機が、指をさして指示を出している。

泉機はそれを見て、
人間の手であける乗降ハッチの回転レバー部分を、
イングラムの人差し指、親指で器用につまむと、
クルッと回転さす。

プシューと、頭にあるハッチがあくと、
中には酔っ払いが酒瓶を口にくわえたまま、
レイバーを操縦している姿が見えた。

「よし、そこまでだ、降りろ酔っ払い」
太田機がクシャと左手でコントローラーだけを器用に潰す。

「はいはいはい、お酒のんで運転するもんじゃないんですよ！！」

泉機が顔を近づけた。

「泉！！つまんでおろしたれ」

「わかった」
泉機、機体の右手のマニピュレーターで器用に、酔っ払いの両肩を摘むと、
勿論酔っ払いは抵抗しているが、
席から浮かび上がらせ、
左手は落ちないように添えて、地上まで降ろす。
地上に近寄ってきた警察官に酔っ払いを引き渡した。

太田機は、その間に酔っ払いの回収にきたトレーラーに、
機体の向きを合わせて、クレーンのフックを背後から頭越しに前にひっかけていた…

「泉、手伝え」

「わかったぁ」

二機で、レイバーの調整、荷台あげたトラックに合わせて、

「運転手さん～いいですよ～」

荷台が少しずつ横になる。

荷台に無事に酔っ払いレイバーを載せた。

「そのレイバーの事、よろしくお願いします」

器用にお辞儀をするイングラム。

「よ～し、撤収だ～」

拡声器で、篠原だろう…声がかかる。

両機はスムーズに荷台からリフトアップしているハンガーの足台に片足をひっかけ、
機体を回転させるとのこりの足も足台におさまる。

「泉さ～ん、倒します」

泉機右腕のサムズアップで答えると、腕をおさめた。
ウィィィィ

倒しながら、固定用のフックがかかる。

完全に倒れると、機体前方のハッチが開き、泉巡査が出てきた。

「お疲れ様～」

カオルは取り付き、機体のデーターを取得、

その場を離れた。

カオルはしばらくいき人気のない公園で、世界扉を唱えた。

……

カオル報告

色々な民間のレイバーを取得しました

第７１話　レイバーの世界２話目　投稿日２０１１０２１３（後書き）

作者「あん時は凄かったよなぁ……」

カオル「どの時？」

作者「いやさ、この火災はモデルがあるんだよ…
実際は重傷者２名で奇跡的にすんだ工場火災なんだけどね」

カオル「語り始めたなｗ」

作者「俺が徹夜して、次の日も休みだから、
地元のセブンイレブンに朝飯てがら買いに行ったらさ、
買物して店でたら濛々と煙が上がってたんだよ」

作者「で朝６時前だろ？方角的に駅の火災か？ともおもったね…
で１１９に電話して火災の通報入ってる？と聞いて、入ってますだったから…
まぁ暇だし見物いくか…で自転車こいでいったんだよね」

作者「あとにしてみれば直線距離１．１ｋｍの廃油等の産業廃棄物等の再生化学の工場火災だったんだよね…
廃油からシンナーを取り出す時に床にぶちまけて着火、

なったとか…

近場にいくと凄まじさが…ドラム缶の中身が燃え、空高く火柱がボンとともに上がり、付近には幹線道路もあって…だったんだよ。

でまだ消防車が一台も来てない状態だったから、
また１１９番に電話して、石油系ドラム缶らしいのの中身が爆発し、
火柱が天高く上がってる旨を伝えてたんだよね」

カオル「ドラム缶はふってきたの？」

作者「あ、それはなかったね…けどその工場の向かいが道路挟んで、
駐車場で、
朝６時の時点だったから車とまってたよ。
…ちなみに熱すぎて前にいけなかった……」

カオル「レイバーで救助は？」

作者「ん～あのなかにいたら死亡確実…そこは付け足した」

カオル「なんか画像とかとった？」

作者「携帯が前の機種の方にあるはずなんだよね…
なので後程…」

とりあえず読売新聞さんからの転載
＞ｉ１８２００―１９０９＜
もっと火柱が高いのあったんだよなぁ…
動画はどうのせるんだろう??

第７２話　パトレイバーから帰還　投稿日２０１１０２１４

２００１年８月１２日深夜

「ただいま～っと」

［マスターお帰り～］

「と、状況の変化は？」

［とりあえず情報室へ…］

＝＝情報室＝＝

［まだ戦端は開いてない状態だけど、ソ連軍は迎撃体制を整え、また国連軍のプロミネンス計画の部隊も参加して迎撃にあたるみたいよ］

「規模は？」

［師団規模強けど集中ではなく分散的にね］

「とりあえずは大丈夫なん？」

［ただ先月こっちの体制が整う前に一回侵攻があって、その回復をソ連軍がちゃんとやってた…らだけどね］

「らってどういった事よ…」

［あの国って情報には隠して、本質は違うって往々にあるから…］

「あ～そうなんか…いやそうだったよな…
確か更迭がどうたらこうたらで、
俺の世界でもあったけど、ここでものこってるんだね…」

［だから、ソ連情報に関しては、流れている情報鵜呑みにできないから、
他国の対ソ連情報の方が真実味があるくらい…］

「……」

［そんなわけで映像から分析する位しか、
ソ連はわからないの］

「分析したん？」

［入手してないから不可］

「今回は、……リアルタイムで見て判断しかないか……
あとプロミネンス計画か…」

［そうだね。あ、プロミネンス計画説明いる？］

「よろしく」

［先進戦術機技術開発計画……
国連軍がアラスカにあるユーコン基地で進めている、
各国間の情報・技術交換を主目的とした国際共同計画で、
通称プロミネンス計画というもの。

他の国からの新技術流入によるブレイクスルー、
設計思想の硬化防止、世界的な技術水準の向上などのメリットがあるんだけど、
水面下では情報流出・機密漏洩の危険性、
対ＢＥＴＡ戦後を睨んだ参加国の政治的介入や、
利益獲得を優先させる企業同士の妨害工作などのデメリットも生じているよ」

「なんかデメリットが…引っ張りあいというか……

なにやってるんだか」

［で帝国からも参加してて、ＸＦＪ計画だね。説明いる？］

「それもよろしく」

［ＸＦＪ計画……
撃震の耐用年数が迫ってて、次期主力機の完成を待つ時間的余裕もない中、
日本単独で改修を実施した９４式「不知火・壱型丙」も、満足できる成果が得られなかったんだよ。
で、日本帝国軍がプロミネンス計画に参加することで、
技術的な行き詰まりの解決を目指した計画の事。
米国のボーニング社を主にしたノウハウの吸収を計り、
フェニックス構想と同様の手法で不知火の、
性能向上を図る機体改修計画をメインに進め、
ＸＦＪ－０１ａ、不知火・弐型を開発しようとしている計画なんだよね］
画面上には不知火・弐型が表示されている…

「不知火の改修型か…確かに不知火は切り詰めて、
基本、現有技術だと、発展の余地ない設計だもんなぁ…」

［まぁマスターが魔改造した機体もあるけど、現地生産ができないのがね…］

「現地生産できる技術の発展か……」

［で、その機体達が、実戦検証目的で、
今ペトロパブロフスク・カムチャツキー基地にいるんだよね］

「なるほどね…まぁ実験の邪魔しちゃわるいか……明日は待機状態
で、ＢＥＴＡ接触１０分前から、即応体制でよろしく」

［イエス・マイロード］

「じゃあ、あとはないよな?…一眠りするわ」

２００１年８月１３日

昨日発令した待機状態になってる為、
Ｂ－０１は訓練行わず、ハンガーに来ていた。
まぁレビル将軍は来てないけど…

パトレイバー世界で取得したアタッチメント類を制作している。
レイバーは、適当な作業レイバーをバッテリー式にして色々作った。

「どう?使えそうなのある?」

［結構あるよね～］

「カオルさんこれは？」
ドリルをさし、最近Ｂ－０１に加入したミリアさんが聞いてきた。

「トンネル掘り用のアタッチメントかな？」

正直色々なものを取得しまくった為、
どれがどの用途につかうかわからない位な分量になっている。
「ふう…いい仕事した」

「検証だれがやるんだろ？」「これ武器になりそう～」
「指がきれたぁぁ」「モップ？」「農作？」

「ん～～……１１号どうしよう？」

［マスター、僕に聞かれても…］

「だよな…まぁいずれもレイバー用ので工事や、保守用のだし…まぁすぐに使うそうなのが豊作君か…」

［結構でかいあれ？］

「ああ、あんだけでかいから農業用コロニーで使えるだろ」
ふよふよよってく１１号。

［つかえそう～…効率良くなるかな？多分］

「じゃあ、農業用コロニーには送っておいてくれ」

［了解…あ、マスター、いよいよ始まるよ］

「おう、そうか…」

情報室のモニターは、上空からの全体映像になっている。
艦船が爆雷投下している映像が見えている。

「まずは爆雷で減らすのか…」

［効果的といえば効果的だよね］

（鋼鉄の咆哮で使えそうな対潜武器はっと……）

［もう間もなく、上陸、した瞬間に支援砲撃するみたいだね］

画面上では上陸を目指そうとするＢＥＴＡ群、
上陸ポイントにむけ微調整中の戦車、重砲陣地、向かっている爆撃機が見える。

（そういえば、何故か光線級をあんまり出さないんだよな…）

「きたよ」

画面上では、砲弾の集中豪雨をうけた海岸線になっている。
沢山の火柱、土砂の柱がうめつくす。
爆撃機も進入してきて爆発の列を作った。

「クラスター爆弾か」

……しばらくすると…

［あ、やっぱり…］

「ん？」

［砲撃密度が薄いね…］

「となると？」

［戦車部隊に取り付かれるよ…］

（ん～～）

［戦術機が戦車の援護に入ったみたい…混戦状態になりつつあるね］

画面みると、支援砲撃が打てなくなっているのがわかる。

「でた方がいいか……Ｂ－０１、出るぞ！！１１号あと頼む」

［イエスマスター］

（今から1時間後か……）

滑り棒で、一気にハンガースペースまで降りると、

ビービービー

「緊急発進、緊急発進、Ｂ－０１各員は搭乗、各個出撃せよ」

各パイロット達が魔ドムをつんだ、フライングアーマーに乗り込んでいるのが見えた。

カオルも飛翔し、魔グフに乗り込む。

合図を送ると、駆動音を出し、フライングアーマーは浮かび上がる。

戦艦ハッチから浮かび上がり、ブースター点火、Gがかかり、一気にマッハを越え、3．0…3．1… 3．2… 3．3 トップを越えたところで…

「マスター、こちら情報室、カムチャッカ情勢優勢になり、救援の必要無し」

「何があった??こっちは房総半島回ったところだぞ…」

「詳しくは、情報室で…」

「わかった……各機、転進、横浜基地に戻るぞ」

「了解」多数「え～空振り?」「もっとG味わいたい～」

「誰だ?スピード狂は…生身でロケットバギー乗ってみるか?」

「肌が痛そう…」

「まぁでたついでだ、慣らしたい者は慣らせ、とりあえず戻るぞ」

各機はスピードを落とし転進、５機程、転進後スピードをあげ小笠原方面に向かった。

１時間後…ハンガーに機体を入れ、情報室に入る。

「何があった？」

［うん。これね］

映像は、一機の機体にズームされる。

（不知火？）

［不知火弐型なんだけど、この持っている武器をみてね］

重たそうな銃から、レーザーらしきものが見える。

「レーザー？」

［いや、違うよスローモーションにするね］

弾が光ってプラズマ化しているのが見えた。

「レールガンか」

［ご明答］

「けどレーザーに見えたっうことは……」

［映像からは、毎分８００発の弾を射出してるね］

「弾の口径は？」

［１２０ｍｍ弾］

「給弾ベルトで弾を補給か…背後に背負ったのが弾槽だね」

映像は全体に引き戻されると、レールガンによって肉片、体液の霧

になる。
水平方向に銃身を向け、ほんの十数秒で全弾を発射しおわったのだろう。
その十数秒の出来事で、海岸線をうめつくしてたＢＥＴＡの８割は無力化されていた。

この後は転進した戦術機や、戦車、航空機等で、残的掃討されていった…
残ったＢＥＴＡも少なからずの被害を受けていたのだ…

［このレールガン射出後に、マスターに通信したんだよ］

「しかし、レールガン実用化されてたとはなぁ…」

［いや実用には無理みたい］

「ん？」

［実用化の条件わかる？］

「前線で、整備でき、長時間使いこなせるだっけ？」

［その条件をみたしてなさそうなんだよね～］

もっていたレールガンが映し出される。

［僕の入手した情報だと、一射毎に完全分解整備と、
数多くの損耗部品の交換が必要なんだよ…］

「それって使えないじゃん…」

［それに機関部、構造材にG元素を使っているの］

「数多く揃えられないね……

ん？あんなオーバーキルの必要ないんじゃ？単発とかさ射出速度を
抑えるとかさ」

［バッテリーや機関部が持たないらしいよ長時間運用に…
だから、一発で薙ぎ払う使い捨て的運用しかとれないの］

「問題ありありなんだな…」

（鋼鉄の咆哮のに、あの射出速度求めると…やっぱ冷却問題が出て
くるな、
冷却剤を強制ぶち込みか…あと弾装ね…

正直ＣＩＷＳの一銃身の射出速度だすって…ねぇ
しかも１２０ｍｍ弾か…）

「うん、問題ありのオーバーキルだね」

［同じく…そう思う、けど今回の戦場ではうまく作用した…ね。
で、なんだけど…］

画面がまたカムチャッカ半島を映す。

［この残っているのがまたきそうなんだよね］

「規模は？」

［今回同様師団規模強…ただやはり拡散するみたい］

「ふむ…いつ頃？」

［１８から１９辺り］

「……わかった…そんころにはいるわ…あとはないよな？」

［うん］

「じゃあお休み」

……

カオル報告

からぶった

第７２話　パトレイバーから帰還　投稿日２０１１０２１４（後書き）

作者「いよいよレールガン登場っすなぁ…」

カオル「だねぇ…でＴＥ編？」

作者「お前、基本横浜から離れたくないんだろ？」

カオル「勿論！！」

作者「だから、あんまり絡まないよな…
唯衣姫は、ユウヤにとられるかな～？」

カオル「いいんじゃないの？正直腰が持たないよ…何人もだと…」

作者「ヒルダさんだろ、ヒルダさんだろ、ヒルダさんだろ」

カオル「……なぜに…ビダンさん？？」

作者「だって彼女、サッキュバス因子打ち込んだし」

カオル「はぁ？？ちょ作者なにしてんだよ！！」

作者「なので本編で犠牲になってくれい」

カオル「……マジに打ち込んだの？」

作者「……次回、カオルチェリー喪失、お楽しみに」

カオル「マジか！？！？」

第７３話　また、ガンダムの世界へ…ソロモン戦　投稿日　２０１２０２１５

２００１年８月１４日
翌日朝…
（１８から、１９にかけてまたくる…か…）

「とりあえず燃料あと3回は取得できそうだから、
製造命令出しちゃうよ。
サラミス改はどう？」

［1ドックしか使ってないから、昨日2隻目があがったところ］

「…じゃあ、もう1ドック使って製造ペース上げてくれ。更に１０隻追加で」

［１００頂きます］

「で、陸戦強襲型ガンタンク2個連隊、ホバートラック１８両と、シャトル２００機だね」

［４１６頂きます］

「あとは下駄も必要だから２００で」

［２００頂きます］

「残量どのくらい？」

［５７１基分］

「ヘリウム３使うのはそんなものか…」［あ、マスター、帝国さんから、撃震のパーツくれってきてるよ～］

「じゃあ、それも製造して送りだそう。
旧装甲は作り変えるから回収って言付けてね」

第６２話に長崎戦後出したの返答がやっときた。

（あとは…ガンパレ製煙幕のＡＬ弾頭用の開発してなかったなぁ…
一応現地生産含めて考えるか…）

ただガンパレの煙幕は吹き出すタイプだけどね…
ＡＬ弾頭は迎撃された時点で展開だけど大丈夫なん？

（時限式に切り替えればなんとかなるんじゃ？弾頭を一つ一つ調整する必要あるけど…ビダンさんに相談かな？

と、あとは…サポートＡＩを各機に入れるか…
でもって、民間用のか）

「なぁ１１号、避難民今どのくらいなんだ？」

［約６０万人程］

「なんか生産できる余力ある？」

［まだ無理みたい…けど生産したいって］

「農業と、レイバーをコロニーの生産物にしたらどうかな？」

［……うん頂き］

「こっちで生産はあくまでもデモストレーション、広報用や必要な時のみで」

［レイバー技術なら、現地生産可能だと思うよＡＶ系は難しいかもだけど］

「手のところ？」

［うん］

「まぁ、頑張ってもらいますか…フリーで情報提供しておいてね」

［了解…地球への納品はどうするの？］

「ザンジバルを強化して、貨物船化に仕立あげれば良いかもね。マスドライバー使えばブースター要らないだろ…で、チューリップ経由で、鉄資源提供かな」

［了解…チューリップを宇宙港にしたてるの？］

「ついでそうだな、サラミス等の整備用にもね」

［了解］

「あとコロニーも新規そろそろ作るか？新規だと何ヶ月かかる？」

［3ヶ月］

「なら丁度良いか？」

［6ヶ月は空き家のままだけど？］

「調整もかねてな…あ、別口で核パルス付きのも作りはじめてくれ…大気は必要ないよ」

［？？了解～］

とりあえず、サポートＡＩをＢ－０１の有人各機に入れた。
Ａ－０１は帰ってきたあとでいいか…

あと帝国さんに道路の整備を打診…

ビダンさんに相談しに向かった。

＝＝ジオフロントヒルダさん執務室＝＝

コンコン「ヒルダさん～」

反応無し…

（あれいないのかな？）
プシュー
ロックはかからず扉が開く…
中を確認しようと部屋に入った途端…アームで捕まれたのですが…
「あの～ビダンさん？」

「うふふ、若い男性エキス…」
すみの方から……迫ってくるヒルダさん……

「エキスって……」
ガチガチ
やっぱり動かしてもとれない…

「俺一人と若い人４人、どっちをとりますか？」

ワキワキしてた手がとまったな……
「そんなに欲しいなら、連れて来ますよ…見逃してくれるなら…」

「ま、まぁ…ちゅれてくる人ちだいかしら…」

「ご期待下さい…とりあえずアーム外して貰えます？」
プシュー

「で、お仕事の話なのですが、よろしいです？」

「え、えええいいわ…約束よ」

「はい…実はこれなんですが…」

と、ガンパレ製の煙幕手榴弾現物と、データーの入ったＭＯを机の上に出す。

「噴射機？」

「煙幕手榴弾ですね。これを弾頭にして、ミサイルや砲弾用に時限式にできないかな？と」

「ん～そうね…できない事もないわね」

「あ、じゃあできるだけ早めにお願いできます？」

「わかったわ」

「じゃあとりあえずは…」

「約束破ったら問答無用に食べちゃうからね」

「……はい。早めに…」

ヒルダさんの執務室から退出する。

とりあえず3日間ほどっうことで再びガンダムの世界へ…

＝＝　ガンダムの世界　＝＝

宇宙歴００７９　１２月２４日
ソロモンにでて「”幻影”」世界扉を消す。

脱出ロケットが見える…

「ゼナはいるか？」

「あなた、いけないのですか？」
丁度、永遠の別れの場面にでたようだ…

「馬鹿を言うな、ソロモンは落ちはせんて」
（落ちるんだよね…）

「では」

「いや、脱出して姉上のグラナダへでも行ってくれ」

「いけないのですか？」

「大丈夫、案ずるな。ミネバを頼む。強い子に育ててくれ、ゼナ」
キスをするドズル…

（強い子に育ちましたよ…）

「…あなた」

「私は軍人だ。ザビ家の伝統を創る軍人だ。
死にはせん。行け、ゼナ、ミネバと共に」

「モビルスーツ隊の編成を急げ、敵は上陸しつつある。
決戦用リック・ドム、ザク、出動用意。ガトル戦闘隊、ミサイルの
補給のすんだものから発進させい。
ビグザムの用意はどうか？決戦はこれからである」
ドズル格納庫を進みながら叫んでいた。

「ほう、あれがビグザムか」（でっかいよなぁ……）
閣下についていき、ビグザムに取り付く。

そしてコクピット内…
「閣下！！お待ちしてました！！」

「マイヤー、サブローよろしく頼むぞ」

「「はっ！」」

「起動状況は？」

「主機ともにアイドリング状態です。いつでも出れます」

「よおうし、ビグザム、始動せよ！！」

ウィィィブーン

ドーン

「閣下、連邦のＭＳ前方より複数接近です」

「主砲発射」

ジムボールが消える…

「前方に突出してくる敵ＭＳ群」

「来るぞ、木っ端ども。このビグザムがそこらのモビルアーマーや、モビルスーツと違うところを見せてやれ」

「は」
メガ粒子砲で消滅するジム、ボール達…
「たわいもないな」

コクピット画面には、圧倒的な力にのけ反っているジムが映っている。
「このビグザム、無双ではないか?」

「ジオンの結集ですから」
メガ粒子砲うけて溶けるジム…

「兄貴の言った言葉、ハッタリではなさそうだな…確かに師団に相当するな…」

『こちら司令室です、閣下は?』
ラコックより映像通信が入った。

「なんだ?」

『閣下はどちらに?』

「ビグザムで打って出る。モビルスーツにこうも入り込まれたら」

『し、しかし残存艦隊も発進しつつあります、閣下みずから出ることは』

「甘いな、すべての戦力を叩き込まねばならんところまで来ておる」

遠くにいった者を思い浮かべたのだろう…

「ゼナ、ミネバ、無事に逃げおおせたか？」

次々にジム、ボール達にメガ粒子砲を与えてはいる…が…

要塞隔壁等も同時にとけだしているしまつだった……

「うーむ、こいつが強力なのはいいが、このままでは基地の損害も馬鹿にはならん。司令室」

『は、閣下』

「艦艇は何隻残っている？」

『敵の新兵器とモビルスーツの為に四分の三は破壊、または稼動不能であります』

「よし、敵の主力艦隊の中央を突破させろ」

『は』

「私も生き残りのリック・ドムとザクを率いてソロモンを出る」

『は、閣下も御武運を』

「おう、貴様もな」

「外殻部に出る箇所まで前進せい」

「は！」
ズシンズシン
巨体なビグザムは前進す。
途中いたジム達を蒸発させながら…

「よし、ブースター吹かせい」

「は！！」
ブオオオー
ジムがしたからビームを撃つが、
ブースターに巻き込まれ爆散する。

浮かび上がる時にガンキャノンが頭上で滑らせた…

第二射目のソーラーレイがきた…

「敵新兵器の二射目です！！」

「むう…」

「残存艦艇の半数が壊滅です！！」

「あの新兵器をなんとかしないといかんな…」

「残った艦は敵主力に特攻を掛けます」

「ようし」

「ビグザムの目標は？」

「後方指揮艦を狙う。雑魚には目もくれるな」

「は！！最大戦速！！」

ビグザムの巨体が敵主力部隊にむけ、体を進める…

「サラミスです」

「構わん。前部ビーム撃て」
サラミスからの主砲はiフィールドであらぬ方向へ弾きとばした…
メガ粒子砲一発で溶解するサラミス…

「ビグザムは主力艦隊に特攻する。その前に各自脱出命令の発光信号を上げろ」

「は。し、しかし」

「戦力をズタズタにされすぎた。遺憾ながらソロモンを放棄する」
操縦席に座っている二名のジオン兵は顔をみあわせた…

「操縦系を切り替え私の所へまわせ。お前らも各個に脱出しろ」

「し、しかし閣下」

「無駄死にはするな。ドムとザクがいる。
それに引いてもらえば戦場から抜けられるぞ」

「は、はい」

「ようし、発光信号上げい。ビグザムは私が預かる」

「閣下……ご無事を」

「おう、いけい！」

「閣下の指揮の元、機体を操縦できた事を、一族の語りにします」

「貴様も無事にな」

「はっ！」
敬礼後退出する二名…

「フフフ、こうも簡単にソロモンが落ちるとはな」

画面は、ＭＳにひかれ、去っていくパイロット達が見える。
「さて…逝くか…」

コントロールスロットを全速力に入れる。

「わははは、なめるなよ。このビグザムは長距離ビームなどどうと

いうことはない。
私の道連れに一人でも多く地獄に引きずり込んでやるわ」

（さてそろそろか……）
コクピットから機体の外にでると、「〝加速〟〝加速〟」二乗かけティアンムの乗艦を目指す。

あれか？取り付いてみた…
「巨大モビルスーツ、強力な磁界を発生させています」

「ミサイルだ、ミサイルで迎撃だ」
（ビンゴ）
ミサイルがマゼランから打ち出される。
加速をかけている間に艦内の人員を調査する。
６名か…
どんどん迫ってくるビグザム、
砲門がこちらを向き、光った瞬間、６名の女性連邦兵を引き込む。
そして…
「うわあーっ」
ティアンム将軍を引き込み、急速離脱した。

（手短な…無事なのビグザムしかねえか？）
ビグザムに取り付き、ハッチ内で一回医療カプセルをだし、
瀕死となっているティアンム将軍をいれ、カプセルを作動させる。
カプセルを虚数空間に引き込んだ。

ビグザムの外にでてみると、
レッグアームがＧアーマーを掴んでいた…

Gアーマーのガンダム部分からビームライフルが打ち出される。
ビグザムの足の根本に亀裂が入り、爆発…
iフィールド発生装置が損傷した模様だ…

圧迫されるコクピット部分…
そして…
バキィ
潰され宇宙にほうり出されるスレッガー中尉……

ガンダムが直接ビームライフルをブースター部に打ち込む。
その間に、空間に医療カプセルをだし、
スレッガー中尉を回収…
（助かるのかな？この状態で）

とりあえず作動させ、虚数空間に急いで引き込む。

ガンダムは正面からビームサーベルで切り付け…

そしてビームサーベルを突き立てる。

もう一降り…
（ビグザムもう駄目だな）
小爆発が起こっている。

ドズルがハッチからライフルを構えはい出てきた…
「やられはせんぞ、やられはせんぞ、貴様ごときに。やられはせん」

「ジオンの栄光、この俺のプライド、やらせはせん、やらせはせん、やらせはせんぞーっ」

大爆発がおきる。ドズルを引き込み急速離脱。

ビグザムが落ちると…戦場は、
光を発する事はなくなった…
手短な艦の内部に入り、
「”世界扉”」
一度現実世界へと戻る。

……
カオル報告

ビグザム
大物人物救助

第73話　また、ガンダムの世界へ…ソロモン戦　投稿日　2012021５

作者「とうとう、ザビ家か…」

ドズル閣下「ぐわっはっはっ気にするな！！」

作者「あ、閣下…早速後書き登場ですね」

ドズル「まぁな、このわしがきたからには、連邦なんぞ敵ではないぞ、
ビグザムを量産せい！！地球進行作戦再びじゃぁ！」

プス

「う、ぐ……Ｚｚｚ」

ナギ少尉「あんたうるさい…かっこおこりかっことじ」

作者「な……ナギ少尉？？」

ナギ少尉「この人のうるささで、
艦長が興さめたで逃げちゃったのよ…だから、あんたも」

プス

作者「Ｚｚｚｚ」

ナギ少尉「な、わけで次回、ナギ少尉と艦長のラブラブ旅行お楽しみに～」

作者が文字を書いている…

そんなわけありません…次回は００８……

までしかみえない。

第７４話　００８０編　投稿日２０１１０２１６

二日目
宇宙歴００７９　１２月１５日朝

世界扉を消すと幻影をかけ、リボー内を飛行し探し出す……

（学校そばの森林公園って……あれか？）
森林公園付近に差し掛かると…
（あった）

行動不能になっているザク改が見えた。

コロニーミラーの外では戦闘のきらめきが見える。

（たしかアルがもう中にいるんだよな……）
しばらくすると…
パシュー

アルフレッド・イズルハがでてきた。
タタタタ

シャャャと手摺りをすべり
タタタタ

「寝ちゃったよ～
母さんに知れるとやばいなー」」

プァプァーきぃぃギギギギギー
「うわぁぁ、びっくりしたー…」

「バカヤローしにてえのかこのガキ！！」
トレーラーの運転席からバーニィが叫び声をあげた。

「あっ」

「うっ」

急いでバーニィは姿勢をなおし、発進させる…
ブロロロー
「やば…あのガキだ」

『バーニィ、何やってんだ注意しなきゃ駄目だろ。
子供ひいて、警察の厄介になるつもりか？』
無線スピーカーから声が流れた。隊長の声だ。

「すんません。おやっさん…しかし、いきなり飛び出してきて…」
本来なら隊長と呼ぶべきだが、民間レンタルトレーラーの無線だ。
傍受されて当たり前の前提で話している。
なので隊長をおやっさんと呼ぶようにとの話だった。

『なぁバーニィ、あの餓鬼知り合いなのか？しばらく追ってきたみたいだが…』
最後尾のガルシアの声だ。
「あ、まぁ……とりあえず後程」

『事故起こすなよ、安全運転でいけ、法定速度はまもれ。大事な荷物だからな』

カチャリ…無線マイクを置くと…
「はぁ～どう説明するかな……けど、本当、ひかなくてよかったよ……
たしかアルフレッド＝イズルハ…だったよな…」

トレーラーの無線機等はどう発達しても、プレストーク式の一方通行はなおらないらしい…
第一…話途中で別の話が紛れこんだら、訳わからなくなるし、同時複数通話程、うざいものはない…

トレーラーは街中をすすみ、工場が見えてきた。

『ここだ、トレーラーとめて先頭車両から荷降ろしをする。誘導に皆きてくれ』

カチャリ、バン

バーニィはきくと、キーを抜き、外にでて、
先頭車両にかけよる。他のサイクロプス隊の面々も…
ガガガガピーピーピー「オーライ、オーライ」
工場のシャッターがあくと、トレーラーがバックで工場内に入り始める。

（ここね…）

カオルは離脱し、手近なビルの屋上にでると、端末に記録し…
「”世界扉”」
世界扉を潜る…

宇宙歴００７９　１２月１６日夕刻…

世界扉を潜り抜け扉を消すと…
勿論別世界経由出ないと、時系列移動もできない訳だが…

カオルは工場内に侵入をする。
ケンプファーを取得するためだ…

中では、

コンテナ毎に、丁度割り振ったらしい…扉が閉められていた

勿論回収しまくり、…
「”世界扉”」

カオルは一回現実世界へと離脱する。
精神力回復の為、そうそうリラックスインの部屋のベットにバフン

と寝込み始めた。

三日目
チェックアウトの前に、
スレッガー中尉のカプセルステータス確認の為にだすと…
（お♪）
あんなにぷらぷらだった腕が修復し、回復している。
チェックすると、順調に回復中となっている。
カプセルをしまうと、チェックアウトし、路地裏で「”世界扉”」
＝＝ガンダムの世界＝＝
宇宙歴００７９　１２月１９日夜

幻影をかけ、工場にいくと、面々が、
「いくぞ！！」

「了解！！」＊３

で丁度出ていくとこだった…
「隊長！！気をつけて」

「ミーシャ、酒は程々にな」

隊長達はまずは作業服の状態でバンにのる。

ミラーそばのところに路駐すると、荷物を背負い、
堤防を降りはじめた。
コロニー公社の整備用トンネル前につき、ＢＯＸをつけ
カチピピピピピ　ピーガコン

扉があくと素早く中に入り、…

「よし、着替えるぞ」
もってきた荷物から、連邦軍服を出すと手早く着替えだす。
着てた作業服はバックにひとまとめすると、
脇に隠した。

前にすすむとオレンジ色の扉が見える…

「へっへっへ」
バーナーを取り出すと、ジュュュュ

「警戒」
隊長とバーニィは、銃をとりだし、警戒体勢に入る。
ガコン　バタン
扉の内側が焼き切れ、少し大きめの音をたて、外れ、床に落ちる。
ハァハァハァハァ
バーニィが緊張のあまり銃を構えたまま固まっている。
隊長は軽く肩を叩き、
「いくぞ」

中に歩みを進める。

カツカツカツ
「お疲れ～」

「ああ、お疲れ」

カツカツカツ
「バーニィもっと自然体にいけ…」

「は、はい」

「ここだな…扉前に歩哨なし…ガルシア、内部に二名だ…うまくやれ」

プシュー

ガルシアが中に入っていった…

カツカツカツ「隊長」

「廊下で騒ぎ起こすのはまだ早い…うまくきりかえせ」

「了解」

「あれ?お疲れ、中の巡回だが…」

「中ですか?、見回りましたよ、異常なしです」

「ああ、そうかい…おたくら新入りかい?」

「ああ、1週間前についたばかりで」

「あんたは？」

「俺も着任したばかりだ」

「おたく訛りあるけどどこの出身だ？
オーストラリア辺りの出か？」

「そう、シドニー生まれのシドニー育ちなんだ」

「シドニーねいいところかい？」

「最高だね、今頃街は雪で真っ白だろうな」

「いいな…今度いってみるとするよ…」
カツカツカツ

「ふぅ…」
コンコンココン
プシュー
隊長が扉を叩くと中からガルシアがでてきた。
頷くと目で合図し、歩みを進める。

カツカツカツ

見えた…

内部には歩哨が数名、アレックスの周囲についている。
カオルはとっとこ同化し、機体情報を抜き取る。

ガルシアは左の方へ別れてむかっていった。

……たたた
「おいシドニー生まれ!!」
銃を構えられている。

「クッ」

「オーストラリアは今は夏だぞ!!」

「なんだ?どうした?」

「不審者だ!!」
カチャカチャカチャ

「銃を床に置き両手を後頭部へつけろ」

「聞こえないのか!!もう一度いうぞ、銃を床に置き、両手を後頭部につけろ!!」

「バーニィ大人しく従え…」

「わかりました」

ゆっくりと肩に引っ掛けていた銃を床に置き、
腰のピストルもホルスターから取り出し、床に置く。
隊長も同様に武器をおいてる。

「他に武器になるようなのないな？」

「ああ」「ええ」

「よーし、そのまま後ろに下がれ」
一歩、二歩、三歩、四歩、
兵士は床に追いてある銃を後ろに蹴飛ばし…

「そのままゆっくり後ろを振り向け…」
隊長とバーニィはゆっくり後ろを向く。

「よし、そのまま動くなよ…」
兵士に緊張の緩みが見えた。
武装している不審者との対峙は、ここまでが1番危険だからだ……

フィーイフィーイフィーイ

「おい、この警報はなんだ?」

「ジオンのMSがコロニー内部に侵入したらしい」

「ちっ…さっさとチェックすますぞ」

二人が銃を手放し、ボディチェックに入る。

「ジオンの銃だぜ見ろよ」
コンコン
隊長がつま先で床を叩くと…
ピス「うわ」ピス「うわ」バシ「うわぁぁ」バシ「ぐおぉ」ピスピスピス「うわぁ」
ガルシアからの銃で、頭射殺3名、手刀や、顔面裏拳で殴られ気絶が二名でた…

隊長武器ボックスに駆け寄り…
「バーニィ!!」

ショットガンをほおりなげ…
バーン「ぐわぁぁ」

「あああ……クソー」
カチバン!「うわ」
ショットガンを放ち、連邦兵を射殺と同時に下がらせる

ガガガガガガ
カカカカカカ

遮蔽物へ隊長ひきつずっていくバーニィ…

ガガガ「うわぁぐわ」ガガガガガガ
階段からガルシアが両手うちで銃撃している。
あ、喰らっても両手うちつづけて…
管制室で、ロッキングアームを外し、

階段銃を乱射しながら、陣地と化した、制御台の中に飛び込んでくるガルシア。

「隊長の様子は?」

「出血が酷くて、殆ど意識がありません」

バンダナしめなおし…爆弾もって
「バーニィもう奪取は不可能だ。
お前は、隊長連れてこっから脱出しろ。

俺はうっう…
あいつを爆破する。

辿り着くまで援護を頼むぞ」

ガルシア胸を討たれ…
「うう」
ガルシア…手にもってた爆弾の手動スイッチを押し
ドカーン
あたり一面黒煙が吹き荒れる。

「中尉まだ危険です！！」

クリスが、コクピットへのリフトへかけより、リフトを上昇させている。
ハッチを手動解放し、乗り込んだ。

その間にバーニィは隊長を肩に担ぎ……離脱……

コクピットハッチが閉まると同時に
ドカーンばらばらウイイイン

格納庫の屋根の上にのったケンプファーのバズーカが、
屋根をぶちぬいた。
ショットガンを構えなおすと…

シャアアガーン
アレックスが、バーニアふかして、
シャッターを頭からぶち抜き脱出した。

（うし、ぬけられるか…）

「加速」戦闘の最中、抜けだし…
「”世界扉”」

宇宙歴００７９　１２月２５日
別世界経由でリボーの大地に降り立つと、
宇宙空間にでて、衛星を打ち上げ…いや置くか正確だね…

そのそばで端末を起動させる…

宇宙空間をさ迷っているジオン兵の死体を検索する為だった…

（おっし、ビンゴ）

ジオン兵士の死体を一体回収できたので、
リボーに戻る途中、衛星を回収し、コロニー内にもどった。

そして…１４００頃

シィィィ
コロニーミラーを進むザク改を発見すると…
軟着陸し、うまく取り付く。

右方向からガンダムが見えてきた

「来たな」

バラララ
アレックスの右腕ガトリングガンが火を放つが…

うまくかわし、
「まだその距離なら……」
実際に向かってこない、横移動の機体に当てるのは難しい…
橋があるのをブースターふかしジャンプしてかわす。
バルカンがやみ…

「どうした、追ってこないのか」
後方カメラ画面を気にしてバーニィがつぶやく…

後方カメラでアレックスも追跡にはいるのが見えた。
「よーしいい子だ」
シャヤャブァー
橋のたもとで滑走から、ブースターをふかし、森林地帯へと、着地する。

ガシガシガシ
「しっ、とりあえずはついてきてるな…」
煙幕の中に入った…
ガシガシガシ歩みをすすめる。

ビーロックオン警告がなるとともに、
ガン
機体をしゃがみさせ…敵ガトリングガンをかわす。

ロックオン警告はなくなり…

ヒートホークを構え、熱を持たせる。

「あと、すこし、あと、すこし……」

カチ　カチ
バルーンに釣られ、ハルーンを撃っているアレックスがちらっと見える。

「今だ！！」

滑走しヒートホークを切り付けようとアレックスの右半身をめがけて…

アレックスの右腕ガトリングガンがこちらに銃口をむけ…
バラララビシビシビシ「うっは…」

何発か機体に命中し、コクピットの左上部分を一発突き抜けて、バーニィは流血するが、
ガキイイン

アレックスの右腕カドリングガンを切り付け、破壊、無力化に成功する。
ガシ、ブンキィィン
構え直してきりつけ…
胴体部だが浅いかった。
全力でザクが切り付けた為、体勢をくずしてしまった。

「くぅ」
必殺の一撃だったのだろう…

そして、ザクはふりかぶり

ガキィィン「ウグ」
ガンダムのビームサーベルと競り合い、弾き返され…

「なろ！」
ファァァ…ガイン！！ズサー

ブースターをふかし、アレックスにタックルをかまし、
両機ともども斜面を滑走する。

そして木にしかけてあったワイヤーをはずし…
ドカーン

グレネードが炸裂する。
ガイン

大きなきにとまり、
先にガンダムがバーニアふかし体勢たてなおそうとするが、

ブウウンブワァズズズズカズカズカ

ヒートサーベルを切り付けられそうになり、ブースターをふかしてかわすが、
斜面の為バランスくずし、後ろに体勢くずれたアレックス。
それを歩いて追うザク

画面には、体勢をたてなおしたアレックスが見えた。

「クハァハァハァ」

ビィィィ…
ヒートホークの熱を溜め込んで最高出力になっていく…
ガシイ
ヒートホークを強く握り直すザク改。
「クゥ！！」

ウァァァン
おおきくふりかぶり…ザク改ヒートサーベルで切り付け、
るが…アレックスのビームサーベルが…コクピットを狙い、当たる
瞬間、
カオルは死体と差し替え急速離脱…

「バーニィィー！！」

ビシュードカン！ドカーン！
ビームサーベルはコクピットを貫き、背後の燃料推進材タンクを貫
いたため、爆発を起こし、
その爆発でアレックスも吹っ飛ばされる…
バチバチバチ
あたりには爆発したザク改の破片から火がでている。

カオルはその場をはなれると、

バーニィをだした。
「う…」
「アルミサエル」
睡眠状態にすると、医療カプセルをだし、中にいれ、
カプセルを自動解除の設定にし、シェルターへと引き込む。

これで頭の治療が終わると自動に映像が流れる事となる。

「”世界扉”」

カオルは扉を潜る

四日目

宇宙歴００７９　８月１８日

カオルは世界扉を消し、幻影をかけると、定番化となった燃料回収にいこうとしてた。

（今回は、女性パイロット達か…）

比較的ミデアは女性パイロットが多い…

情報の航路で張っていると、見えたので取り付く。

（さてと…どうかな？）

「ねぇお姉様、ジャブローに無事ついたらまた、あれして下さいね」

「ああ、可愛いミリア、楽しもうな♪」

（……ゆ、百合？？……救助するぞ）

「”加速”、”加速”」

カオルはその時をまつ…

「キャアア、お姉様ー」

「くぅ……駄目か…ミリア…」

「お姉様…」

諦めた二人はシートから乗り出すと、口づけを急いでしようと…

「あーはいはい、続きはあとでね」

引き込みました。

燃料タンクも忘れずに、そのまま離脱し、地上に…

ミデアは爆散してた…

（しっかし、ジェット燃料で本当爆散しやすいのになぁ…
けど百合か…初遭遇だけど大丈夫かな？）

「”世界扉”」

カオルは世界扉で潜った

……

カオル報告

ケンプファー

フルーアーマーアレックス

燃料タンク

バーニィ

百合学園パイロット2名

第７４話　００８０編　投稿日２０１１０２１６（後書き）

作者「あ～酷い目にあった…」

カオル「作者、お疲れ～」

作者「おう、カオル…バーニィか……クリスと永遠のわかれか…
ガルシアは無理だったな」

カオル「まぁね…ガルシアは、あの状態だとな…
後の他の面々は死体回収されたり、検査されたりで…無理だったし
…」

作者「ミーシャは？あれだったら、差し替え技で助けられたかもよ。
」

カオル「あ、差し替えれば…だったか…くぅ惜しい事した。
でも、バーニィは幸せになってほしいし、
これから色々とね…」

作者「…ふふふ…おぬしもわるのよう…」

カオル「代官様こそ……」

さて、大体想像つくとおもいますが……あれです。

次回お楽しみに

第７５話　頑張れバーニィ　投稿日２０１１０２１７（前書き）

題名通り…あの人とあの人が！！になります…

カオルあくどい

第７５話　頑張れバーニィ　投稿日２０１１０２１７

トータルイクスプリスに関しまして、
自分は小説版しかおさえてませんので、
５巻からの９月辺りにつきましては、時系列が正確にわかりません。
また独自展開になる事をお詫びします。
というか、一年以上刊行に間隔あくって…ｏｒｚ
ラトロワタソ…

２００１年８月１７日夜
世界扉から帰ってくる…

「ただいまっと…状況は？」

［状況は１９日に確定、上陸地点は拡散して、旅団規模になってるね］

「ふむ……あのレールガンは出れないんだよな？」

［うん…今回は積極的に実験部隊、
プロミネンス計画機が主体に戦闘するって］

「となると……一応明後日待機体制にして見学しておくか……
とりあえず寝る」

［おやすみぃマスター］

２００１年８月１８日

（さて、勢いでドズル閣下を拉致ったけど…）

「あ、レビルさん」

「カオル殿、おはよう」

「おはようございます…丁度言っておきたいんすが、ドズル・ザビ知ってますよね？」

「あの武人ですな……まさか？」

「ええ、まさかです」

「あの者をですか……ますます面白くなりそうですのう」

「まぁ勧誘できるかどうか、これからなので付き合ってもらえます？」

「いいですぞ」

レビル将軍ともなって、戦艦ドックの空きスペースへ…

「あ、ティアンムさんも救助しましたので」

「ほう、ティアンム君もか」

「ええ、まだカプセルの中ですけどね」

「彼が消えた時の喪失感…なんともいえんかったからのう…
またチェスがうてるわい」

「さて、だしますので…」

ティアンムの船に乗ってた女性兵士達のシェルター、
ドズル中将のシェルター、
バーニィのシェルター、
ミデア組のシェルターをだし
それぞれに扉をつけ…

「異世界へようこそ。案内しますので、準備できた方から表にお願いします」

真っ先に出てきたのはバーニィだった…

「バーニィが先か……」

ちかよって…

「バーナード・ワイズマン伍長、異世界へようこそ、異世界軍の渚カオル大将です。加入の意思問いますが、いかがされます？」

「一つ質問が…ガンダムはどうなりました？」

「クリス・マッケンジー操縦のガンダムですね」

「！！ま、まさか…」

「真です」

「か、彼女は？」

「ここにいないですよね？…彼女はその後地球へ赴任、その後軍をやめ、アナハイムの技術者になりました」

「そうか…」

「ガンダムは中破、行動不能になりましたね…
もっともリボーコロニーへの核搭載船は連邦軍へ投降した為、アルも戦後健やかに育ってます」

「……なら、いいか。……と、
バーナード・ワイズマン伍長、異世界軍への所属希望いたします！！」

「喜んで歓迎します。バーナード・ワイズマン中尉」

「いい？中尉？」

「ＭＳパイロットは異世界軍では、国連少尉から始まりますので、
あと、ガンダムを倒した勇者には中尉からってね…
よろしくねバーニィ、あ、カオルでいいから」

「あ、ああ…よろしく……な、カオル」

「と、宿舎はこのこが案内するんでついてって～ね、あと後程～」

「ああ……」

ティアンムの船に乗ってた人達は、レビル将軍に驚いたみたいだったが、
加入って事で…そのままご案内。

ドズル中将がでてきた…

「レビルっ！！……むう貴様がそうか…」

「お初にお目にかかります、自分がここの責任者の渚カオル大将です」

「……ところで、ミネバやゼナは…」

「奥様のゼナさんは、００８１心労により、
娘さんのミネバは、ニンジンを嫌いに」

「わしそっくりだのう」

「…に成長し、シャア、ハマーン、シャアに育てられ」

「何故シャアが二回？」

「戦乱がまたおきるんですよ００８３、００８７から８９、００９３、
００９６と…で９６に相思相愛になります」

「相手は？どんなやつだ？」
ガシガシガシ
肩を掴んで前後に…

「落ち　着いて　下さい。…ユニコーンガンダムのパイロット、バナージというものです。
…まぁその後は、０１２３まで戦乱があき、名前も聞かなくなるんで幸せな生活送ると思いますよ」
手を離させて…普通に喋った…

「いいのうドズルは、わしには……はぁ…」

「……そこまで聞ければ十分だ、このドズル、喜んで異世界軍に加入するぞ！！
ところで兄貴や、ガルマやらは？」

「あ～…それなんすけど…ギレンは…やめた方が…」

「なんでだ？」

「ドズルさんが死んだあと、
デギン公王をレビル将軍と一緒にソーラーレイで殺します」

「あれじゃな…」「なに？兄貴が？…」

「ええ、ギレンに相談なしに和平交渉にいったのがでしょう…」

「……」

「そのギレンは、キシリアにア・バオア・クー戦時に頭バーンと討
たれます」

「姉貴が……」

「キシリアさんにとっては親父殺しが許せないのでしょう…
でもって、キシリアは、逃げだそうとする時にシャアに討たれます」

「……」

「シャアはジオン＝ズム＝ダイクンの息子さんでしたので」

「！！」「なに！？あの人の？」

「まぁ…なので、ガルマさんはともかくとして…っすね」

「ふむそういった事だったら……」

「じゃあ、詳しい現状推移などはレビルさんから伺って下さい」

「ああ、よろしくな、カオル殿」

二人して移動し始めた…

（はて？）

百合組パイロットが出てこない…今だに…

コンコン「すみませ～ん３０分位たってますが…」

あはん…うふん…聞こえる…

コンコン「あと３０秒したら入りますよ～」

ガタンバタン

「１０・９・２・１」

カチャリ
突入した。

中では女性特有の甘いかほり…
また、乱れた格好の女性兵が二人いる。

というか…9時間はたってるよな?

「事中すんません……異世界軍には加入されます?」

「あ、はい!!二人一緒が条件ですが…」

「わかりました……ですが程々に…」

で、カオルは、医療カプセルの交換を行い…

ハンガーにいく。

とりあえずフルアーマーアレックスとケンプファーを作り…

(高速スラスター、姿勢制御ブースターねぇ…
なんかとミックスしたらまた面白い事になるかも…)

ある意味、ケンプのは萌えにたっすると、カオルは悶えていた…

（さて、特殊任務をか…）
バーニィの部屋にいく…

「バーニィ？」

「ん？カオル？」

「ちっと来て～」

「ああ…？」

「来てそうそう悪いんだけど特殊任務あるんだ～」

「！！拝命いたします」

「ん♪じゃあ、ついて来て」

「して、大将殿、任務内容は？」

「来ればわかるよ」

＝＝ヒルダさん執務室＝＝

コンコン「ビダンさんいる～？」

ビダン「入って頂戴」

シュン

ヒルダ「彼が？」

カオル「ん…００７９から連れて来た、バーナード・ワイズマン中尉だよ。元ジオン軍特務隊伍長」

バーニィ「はっ！！バーナード・ワイズマンであります！！」

カオル「で、彼女が、００８７での技術士官、ヒルダ・ビダンさん。今回の任務は彼女に協力すること」

バーニィ「わかりました！！」

カオル「じゃあ、あとよろしく…」

シュン

（バーニィ…頑張れよ…ファイト♪）

「バーナード君、何歳なの？」

「はっ！！１９……」

カツカツカツ

「な、なにす……」

アーーー！

２００１年８月１９日

翌日…

ヒルダ「おっはよぅ～カオル君」

顔がつやつやして、若返っているヒルダさんがきた。

「おはようございます」

「あ、これ……いわれてたのね」

MOを渡された。

「ん？煙幕弾頭っすか？」

「ええそうよ、あと新型蒸散被膜…これひとぬりで、重光線級のレーザーに更に２５秒持つわ」

「おお」

「若い子連れてきたお礼よ。
また彼みたいな子いたらよろしくね。
カオル君でも良いんだけど…」

「あははは…」

「さて、今日も頑張ってエキス吸収しなきゃ…たまってた分頑張るぞ～♪」

しばらくすると…

「カオル…」

「あ、バーニィお疲れ」

蝮ドリンク飲みながら千鳥足でバーニィがきた。

「お前…知ってたな？」

「ン？ナンノコト？」

「……まぁ…ああいった人も良いんだが……

カオル！！、新しい人材連れて来い！！

俺一人じゃ、正直もたないよ…」

「う、うん……一人は確保済みなんだけど、まだ治療中…」

「確保してるか…ほんと命は繋がったな…」

ボフ

とソファーにバーニィが腰を落とす。

「バーニィって19なんだよね？そんなに持たないの？」

「ああ、初めてを奪われたばかりか、6時間ずーっと、

相手させられたんだぜ…視界が黄色なったさ…
しかもさ、うまいんだよ…まさに魔性の女だな。
何回だした事か…
一気にあれやそれも仕込まれたし…」

「どんな事しこまれたん？」

「例えば……」

え～作者よりお知らせです、
しばらくＲ１８ネタが続きますので時間経過したと思って下さい。

「うん、すごいわ…もし、今日ＭＳに乗れったら？」

「特攻してこいと同様だよ、今日明日は役に立たないね……正直……
特に腰がさ…」

（ビダンさん…自重しないなぁ……あ、）

「……ところでバーニィ、乗りたい機体あるん？」

「ん？ああ、ザク以外は乗りたくないな」

「外見上？中身？」

「外見上。ザク以外は好きに慣れないよ」
（ふむ…）

「こういった機体もあるけど？」
ハイザックをだす。
バーニィが画面覗きこんできた。

「見たことないザクだなぁ…」

「バーニィの後の時代のだからね…これどう？改造もするよ」

「うん。これにしてくれ」

（あとは…）

「バーニィは、別部隊のＣ－０１所属って事にした方が良いね…」
（穴兄弟部隊と…）

「りょうかい…とりあえず今日は休めるのかな？」

「うん良いよ。待機はＢ－０１だから」

「イチチチ」
腰を痛そうにあげる…

「まぁこんな調子だから、風呂にいってくるわ…」

とりあえずバーニィ用に、
ハイザックの強化で、
Ｚ仕様に変更…
ジュネレーター強化、
外装式バルカンポット、
レッグブレード…

なもので…
注文。

（そろそろカムチャッカで戦闘始まるかな？）

［マスター情報室に来て～］

……

カオル報告

ビダンさんに春がきたみたいです。

第７５話　頑張れバーニィ　投稿日２０１１０２１７（後書き）

バーニィ「ねぇ作者……俺をどうしたい？」

作者「とりあえずヒルダさん抑えで…」

バーニィ「カオルをあてろよ……」

作者「カオルあてると、戦闘参加が難しくなるからねぇ…
バーニィもチェリー脱出したし、うれしいんじゃ？」

バーニィ「作者はどうなんよ」

作者「人妻キラーってＲ１８ネタにはしるからやめい…
で、クリスと会えないけどいいよね？」

バーニィ「……あの味をしったらしょうがないさ…」

作者「かもな……」

バーニィ「ところで作者、しばらく作中だと……？」

作者「ヒルダさんのお相手して、死ぬ予定だからよろしく」

バーニィ「まじっすか！！次回…殉職バーニィ｛泣｝…」

作者「あ、大丈夫しばらくはならないよ…次回カムチャッカ戦闘編、その後バーニィ編ね」

第７６話　カムチャッカ動静　投稿日２０１２０２１８

（そろそろ始まるか、あの武器なしでの、
おてなみ拝見といきますか…）

情報室のモニターにはカムチャッカ半島が映しだされて、
かつ拡大映像で各プロミネンス計画機が映し出されている。

殲撃１０型、
Ｓｕ－３７ＵＢ
Ｆ－１５・ＡＣＴＶ
不知火・弐型
等など…がそれらの機体が動く前、
迎撃開始して、しばらくすると…

［マスター！！］

「ん？」

［大規模地下侵行探知、規模軍団規模］

「現地軍や国連軍は？」

［探知してないよ］

「対応可能か？」

［現地の規模で無理］

「Ｂ－０１でるぞ！！あと現地に警戒警報だせ、追軍で陸戦強襲型ガンタンク４個連隊！！」

陸戦強襲型ガンタンクは、フライングアーマーに乗れないのが辛かった。

滑り棒で格納庫エリアに降り
ビービービー

「Ｂ－０１緊急発進、準備出来次第、出撃せよ」

前回と違い、ハンガーに固定してある状態からの出撃だった…

時間がかかる。

カオルは魔撃震に飛び同化させ、
機体を前進させる事ができるが、

他の機体はジュネレーター起動からになってしまう…
どうしても、3から6分はかかってしまうのだ…
で武装を受け取り、
フライングアーマーに搭乗するのに4分程…

「マスター、ドズル中将がわしもつれてけ…ってうるさいんだけど」

「操縦系統違うが魔グフか、Z未改造に乗らせろ…
予備機つくっておくべきだったかな…」

ガシガシ
前にすすみ、フライングアーマーにのり、合図して、2分で戦艦ハッチからでた…

ブースター点火し、一気にトップへ…

（時間が惜しいな…）

太平洋沿岸を一気にすすみぬける。

『カオルさん』
Ｂ－０１隊長になったミーリティシァから…
略してミーリ大尉から通信が入った。

「ん？」

『全機発進完了です。カオルさんに遅れて４分って所で編隊を組めてます』

「おう、わかった」

『で、ドズルさん…どうするんですか？一応中将ですし…』

『一応とはなんだ！！』

割り込みっすね…

『あ、すみません』

「まぁ階級が上ですし、今回は好きなようにドズルさんやって下さい」

『わかった』『了解』

「ところで、ドズルさん、その操縦装置どうです？」

『なんか奇妙な感触だ…が操縦できない程には…』

「まぁZもあったんですが…」

『ガンダムやジムにはのりとうない！！』

『マスター』
情報室からだ

『ソ連軍に警告だしてるけど、
対応します…ってだけで動きないよ』

「はぁ？」

『囮にしてるように思える』

「現地の軍にはつたわってないと？」

『うん、ここ３０分そう思える』

今機体は、新知島の北緯４８度５分を通り過ぎたところだ…

「現地の国連軍及びソ連軍に警告を伝えるようにしろ、
失うのは命なんだからな…」

『了解…あと、マスターまだ現地でのんきにテストしてるよ…』

「どこで、こっちの警告とまってんだ？クソッ」

ｓｉｄｅ　戦闘司令室

迎撃開始より約７２分

「――バオフェン試験小隊の試験項目は現在消化率６４％。ＢＥＴＡ撃破数約４７５……」

「――イーダル試験小隊の試験項目は現在消化率１００％。ＢＥＴＡ撃破数約８５２……」

「――アルゴス試験小隊の試験項目は現在消化率６９％。ＢＥＴＡ撃破数約４２０……」

「司令！！異世界軍から入電、軍団規模の地下侵行ありと情報！！」
無線オペレーターが

「追加情報、当基地の北西１３ｋｍに約１０分後に出現予定！！……」

「観測班どうなっている！！？」

「いえ、予兆探知できません」

「当基地は異世界軍の情報を信じ、光線級の有無の確認後、当基地は放棄します！！」

「サンダーク中尉！！」

「国連軍の各試験小隊は後方に即時退避、部隊関係者も、各試験小隊退避地点への移動を我が軍としては要請したいのですが」

「しかし、この最前線基地を放棄ですか？」

「ここは最前線であり、上陸頻発期です。このような水際作戦ができない場合の、危機管理マニュアルに沿っての行動になります。前線で無理に対応し、全滅だけは避けなければならないなです。それがユーラシア大陸で我が軍が学んだ事です」

「確かに、我が国も痛い目にあってますからなぁ…」

「つきましては、このように…」
プロジェクターに表示される
「ＢＥＴＡの狙いがわからない為、退避地点を分散し危険をさけるようにお願いします」

「ふむ」「しかし…」

「我が軍としては、国連遠征部隊の安全には万全を期する所存です。祖国の名誉に懸けて、ひとりも負傷者をだしたくないのです。残念ながら装備品を運搬する手段がありませんので、放棄になりますが…
なぁにいずれ取り返せますよ」

「致し方ありませんな。むしろ貴重な実証実験機が無事であることを喜ぶべきか…」

「さぁ、第二発着情場に数機のＭｉ－２６を待機させてます。全国連部隊に退避を。誘導は我が警備部隊が行います」
と言い切ったと同時に、完全武装の警備兵十数人が戦闘指揮所内に雪崩こんできた。

「さぁ、一刻を争います。全部隊に退避命令を」

「ＸＦＪ計画関係者に即時退去命令を出せ。９９型付きの連中にも伝えろ――放棄は斯衛軍の手順に任せる、と」

伝え終わると同時に…
ゴゴゴゴゴゴ
「振動波検知、情報通りの地点の模様！！」

「現地ＵＡＶモニター映ります」

「光線級来るなよ…」
これによっては陸路での撤退となりえるから、死活問題だった…

「来ます！！」

大地に穴が空き、そこから湧き出てくるＢＥＴＡ群が画面に映し出された…
「ＢＥＴＡ群に光線級の存在認めず。繰り返す光線級の存在認めず」
ＵＡＶは引き続き穴から出て来るＢＥＴＡ群を映し出している。
マグマの噴火のように穴から湧き出てくる…

照射地帯警報が消えると、戦闘指揮所ないに安堵の空気が流れた。

「さぁさぁ…退避急ぎませんと……はて…ところで篁中尉は？」
周りではソ連軍オペレーター達も退避準備を急いで進めていた…

ｓｉｄｅ　戦闘指揮所内　ｅｎｄ

カオルの機体は音速をこえ、マッハを越えていた。

『マスター、ソ連からは、当方で対処可能、救援要らずってきたよ』

「はぁ？軍団規模出現なのに？…何処から？」

『中央軍令部』

「国連遠征軍の現地は？」

『それが通信途絶…強力なジャミング入って…』

「何やってんだ？？……いいや、現地基地所在の国連軍の確認の為急行すっといっとけ」

『了解…』

……

『マスター、現地基地、ＢＥＴＡの侵入あり』

「基地要員は？」

『ほぼ撤退』

「ほぼ？」

『現在1名取り残されてる』

「まだ生きているんだな？」

『うん』

「データー転送してくれ…クソッ、取り残されかよ」

『いや、機密保持の為もどったね』

「何処の馬鹿だ？」

『帝国軍、篁中尉だね』

「……わかった救助に向かう。あと1分」

（格納庫内部か……ボン大君もだすかな）

機体にしがみつく形で、ボン太君をだし、アクティブにさせておく。

「見えた！！」

最大戦速で、飛ばしているなか、ぐんぐん補給基地が見えてきた。

戦車級、要撃級が見える。

キィィィィィン

バシュグンバシバシバシ

フライングアーマーから降下両手に装備したザクマシンガンが唸る。

単発で的確に当該がいる格納庫周辺のを始末する。

「アル、自立モードでＢＥＴＡを近づけるな」

「イエス・マスター・ジェネラル」

機体を格納庫出入口に着地させると同時に、体をボン太君に移し、

ぷに！ぷにぷにぷに

機体から離れて着地し、格納庫内に突入する。

左手にはカトラス、右手には９７式軽機関銃をもちながら…

ｓｉｄｅ～篁中尉～

唯依は９９式にたたき付けられ、その度絶叫を…
「うあああああぁぁッ！！！！」
ガガガガガガ

「はぁッはぁッ……」
朦朧とする視界…が、その後の衝撃がこなくなった…
意識を集中すると、唯依を襲っていた戦車級が見えない…

バン！
銃声が聞こえる。
（だ、だれ…かきたのか…）

……ぷにぷに
「ふもっ！！」

「…はぁはぁ…ふ、ふも？」
正面に、犬だかネズミだかわからない、蝶ネクタイに、
くりくりとした大きな瞳、なんとも可愛らしいのが、
銃を構えて左手をあげてた。
（ま…まさか…せ、戦場でこんな可愛らしい…）ずきゅーん
「ふもっ！！」バンバン
その愛くるしいのは、手にした銃をうっている
（はぁぁぁ…も、もえ）

断っておこう、戦争にひっしなこの世界ではディズニーランドもないのだ…
ゴン太君もいないのだ……
よって……堕ちた…

どこからともなく…人が入れるサイズのカプセルみたいのをだし…
「ふもっふ。もっふる」

愛くるしい左手が、カプセルを指す。

「この…ハァハァ…カプセ…ルに入れと?」

バン「ふもっ」
頷きながら、射撃をしていた。

「だが……あれを破壊しな…くては…」
（９９式を破壊しなければ…）

「ふもっふる!!」と、左手で愛くるしい胸を叩く。

「任せろ?か?」

「ふもっ」
（わたしを助けにきたから…
それくらいはできそうだな…）

「……わかった…よろしく頼む」

ｓｉｄｅ～篁中尉～ｅｎｄ

＝しばらく時を戻す＝

ぷにぷにぷに
「うあああああぁぁッ！！！！」
ガガガガガガ
叫び声が聞こえ、正面でターゲットの篁中尉が、打ち付けられて、
整備パレットに戦車級が５匹たかってるのが見えた。
正確な射撃で戦車級５匹をミンチにする。

ぷにぷにバン！
近寄りながら、こっちに近づいてきた戦車級を一匹無力化…　ぷに
ぷにぷに

「ふもっ！！」

「…はぁはぁ…ふ、ふも？」

目の前には国連軍の制服を身に纏った篁中尉がいた。
左腕の金属片がささった刺傷が痛々しい。
「ふもっ！！」バンバン
隅から見えた戦車級を無力化させると、
医療カプセルを虚数空間から取り出し、

「ふもっふ。もっふる」

怪我している。治療の為入れ！といいながら医療カプセルを指す。

「この…ハァハァ…カプセ…ルに入れと？」

バン「ふもっ」
うなづきながら、戦車級を射殺。

「だが……あれを破壊しな…くては…」

「ふもっふる！！」と、カトラスを腰にさしながら左手で胸を叩く。

「任せろ？か？」

「ふもっ」

「……わかった…よろしく頼む」

カプセルの中に篁中尉が入ったのを確認し、作動させ、虚数空間に引き込む。

その間にも１０体ばかり射殺、切殺し、パレットから降り、
９９式電磁投射砲を同化しながら引き込んだ。

（後は…）　大型弾倉、、データー類と思えるのも引き込んで…

（後でみてもらうか…）

『マスター、当機へ戦術機が二機接近中』
魔撃震の元に戻ろうとした時、フシューンと言う音とともに、不知火・弐型、Ｆ－１５・ＡＣＴＶが見えた。
外部スピーカーから、『こちら、国連軍アルゴス小隊です。女性士官が取り残されてたのですが、見かけましたか？』

「ふもっふふも、ふもふっふる！」

当方で保護した、医療カプセルにいれている…
としゃべった。

『ふ、ふもっふ？？…』

「ふも！！」
待てのジェスチャーし、ボン太君から、魔撃震へと身を移した。

「いや、失礼、さっきの強化服は、ふもしかしゃべれない仕様なのでね。篁中尉なら無事に回収した」

ボン太君を虚数空間に回収。

『で、何処に？』

「ああ、今医療カプセルに入ってもらい、虚数空間にいる…それ以上の説明は長くなるから、あとでな」

『わかりました。ところであなたは？』

「異世界軍大将、渚カオルだ…ま、この戦況に救援に来たんだよ」

キィィィィン

複数の衝撃音が聞こえてきた。

Ｂ－０１も低空進入で、空挺降下し、補給資材を積んだフライングアーマーが、
スピードを落として着地してくる。

『陸戦強襲型がくるまでの２時間、戦況を立て直すぞ！！』

『ガーはっはっはっ敵は何処だぁ～』

「ほら、あれらだ」

『金色？』

「ところでどうする？俺らは戦況を立て直すが…ついてくるか？」

『残弾こころもたないですので』『いや、俺はついてきます』『ユウヤ！？』

『近接戦闘をこの機体経験してないので、残弾はほぼありますし』

「わかったついてこい」

『感謝します』『はぁ…わたしもついてくよ』

「よし、準備出来次第行くぞ」

『了解』

（しかし、我が軍の通信は機能しているものの、強力なジャミングねぇ…
で、G元素か…初めて触ったけど精製できるのかな？）

手近な鋼材を掴み、変換してみる。

（ふむ…質量は重いのか）

『マスター！！』

「なんだ？」

『この半島に上陸している全てのＢＥＴＡが、
その基地に向かいだした！！撤退したほうが』

（……この基地になんの価値が？？流石に１０００：１は辛いな…）

「わかった、各機聞いたな、ＢＥＴＡの進路が全て此処に来るそうだ、順次救援しつつ後退するぞ！！」

『了解！！』

『マスター！』

「次はなんだ？」

『ＢＥＴＡの行動が変…一心不乱に戦術機等無視しているの』

「はぁ？」

『正面にいる機体は邪魔だとばかり攻撃されるけど、
横にそれた機体には見向きもしない』

「むぅ……」

丁度向かってきた要撃級がいたので、
「アルミサエル」
精神浸蝕してみると…

ソレガホシイソレガホシイ

（ほう……）

「あ～すまん…多分原因がわかった…確かめるわ…
各機、撤退中止、基地４時方向、３００ｍの地点で戦闘待機」

そういうと、俺の機体めがけてくるＢＥＴＡどもに、

ザシュ、グシャッ、ザシュ、ザシュ、ザシュ、シュラシュラ、ザシュ

ブレードで切る、ナックルで殴る、切る、切る、切る、足のブレードで切断、切るをしばらくして、

右手に持っているG元素を投擲すると…

一斉に向きを変え…そっちの方向へ殺到する。

「11号」

『はい、マスター』

「BETAの進行方向変わったか?」

『若干変わったよ…何したの?』

「精製し、持ってたG元素を投擲してみた」

『それって…』

「ああ、ある意味餌を投擲した…といっても良いかもな…デコイに向かうBETAへ一斉射!!」

『不満だぁ！！わしにも斬らせろぅ』

ドズル閣下が不満げに一方的射撃をしている…

（けど残弾たりたかな？）

と残弾の心配をすると…Ｓｕ－３７Ｍ２の編隊がこちらに向かっている…と情報が入る。

ソ連軍、ジャール大隊との事だ…

（ふむ…）

「各機前線を押し戻せ、ここはデコイに集中してるから良いだろう。」

『了解』『うおおおー』『俺らも行くぞ！！』

前線へ向かう、Ｆ－１５ＡＣＴＶ、不知火弐型、魔ドム、魔グフ及び接地追従するフライングアーマー。

そして、いれ変わりに、ジャール大隊機が着地してきた。

『見慣れぬ機体ですが…』

通信が入ってきた…ジャミング装置を破壊したらしい。

「ああ、国連、異世界軍の渚カオルだ」

『わかりました。当、ジャール大隊は基地の施設の保護を命じられています』

「撤退したこの基地をか？」

『人命大事で撤退指示をおこなったが、破壊は好ましくない…との事を言われてる』

「ふむ…きみらの大隊だけでか？」

『爆撃編隊が向かってきてるので、それまでの繋ぎですね』

喋ってると、爆撃機接近の情報が入る。
Ｔｕ－２２，Ｔｕ－９５のマーキングが表示された。
後数分で基地上空にかかる。

「ほう、ベア…レプシロ重爆撃か……」

『旧式ですがね』

「そうか？俺的には良い機体だと思うぞ」

射撃しながら、通信していると…

『な、なにぃ！！』

基地の東端から爆炎があがる。

G元素を投擲した辺りもＢＥＴＡ共々吹っ飛んでる。

「おいおい…、守るんじゃないのか？」

『……まさか……奴らは……！？』

『総員退避！！』

爆撃を避ける為、基地の西側へと機体を向けると…

突然空に幾条もの稲妻が空にはしる。

『マスター、光線級！！』

基地破壊に入っていた爆撃編隊が墜落しまくる。

（爆撃機は間に合わないか…）

「ああ…各機光線級を優先に叩け！！」

『了解』『うおおお～』

光線級の出現により、爆撃機という手段を失ったが、
Ｂ－０１により、支えきれている状態に見える。

（あと、２０分か……）
現在の陸戦強襲型ガンタンクの進路状況を確かめると…

『マスター未確認機接近、ＩＦＦ及びデーターリンク切ってるよ』

「怪しいなぁ…機体分析できる？」

『Ｓｕ－４７かな？アタックしてみるからまっててね』

『ジャール１より各機に告ぐ。殿は私が努める。
ジャール１９を先頭に各機先行せよ――行け！』

７機のＳｕ－３７Ｍ２がＮＯＥで飛び立ち、北西にきえていった…
『カオル殿、あなたも…』

「いや、怪しいので付き合いますよ…」

『わかった…』

ラトロワ機は格納庫へ狙撃を、警戒して遮蔽されるように機体を隠しにいった。

『マスター確定Ｓｕ－４７、ソ連の親衛隊用に使われている機体だね』

「ラトロワさん、Ｓｕ－４７、親衛隊用に使われている機体だそうですよ」

『なに？…わかった用心しよう…』

『マスター、彼女達このままだと、生き残っても消されそうだね』

「ふむ……ジャール大隊か……戦績はどうなん？」

『うん…極めて優秀』

「引き抜くか…撃墜を欺瞞できる？」

『もっちろん』

「あ～ラトロワさん」
『なんだ？』

「保身の為、消されそうですよね？
ジャール大隊ごと、死んだ事にして、我が異世界軍に入りません？」

『……』

「明らかにあの機体、あなたを狙っている挙動ですよね？やばい事に関わったのでは？
またジャール大隊各機にもログが残ってるんすよね？」

『……わかった、その申し出を受けよう。その為には…』

「ええ、無力化ですね。じゃあ、自分が相手しちゃいます」

と通信を送ると、
Ｂダッシュで未確認機のＳｕ－４７に近づく。
相手のＳｕ－４７は気がつきこちらに銃口を向けはじめるが、
（遅い遅い）
そのまま、左側面を抜け、全身で踏ん張り相手の機体の足を掴み、
転倒させつつ…
「アルミサエル」

搭乗員の精神を乗っとった。

「ラトロワさん終わりましたが、この機体どうします？」

『な…なにを？？』

「禁則事項です」

『す、すきにして下さい……』

頭弄って、任務の事忘れさせて、帰すことにした。
ふらふらＮＯＥしてくＳｕ－４７。

「ラトロワさん、ジャール大隊各機は、この基地に引き上げさせて下さい。
こちらで欺瞞情報うって、戦死扱いにします。
皆さんへの説明お願いしますね。
１１号、切り離し、秘匿化できるか？」

『わかった』『ちっとまってね…ほい、どうぞ』

ラトロワさんがジャール大隊への説明を行っている。

で各機当基地に集合しろ…と

十数分後、ジャール大隊が揃った。勿論前線から後退した辺りで、戦死として欺瞞できている。

「じゃあ、一人一人誘導しますね…アル、自立モードで警戒」

「イエス・マスター・ジェネラル」

で機体の外に飛び出し、機体に取り付き、中の衛士をシェルターに、機体は主機を停止させ引き込むを繰り返した。

最初は驚いてたようだが、ラトロワさんが説得してたみたいで、おとなしく全員を引き込む事ができた。

全員引き込んで機体に戻ると、遅れてきた陸戦強襲型ガンタンク４個連隊が下駄に乗りながら、ホバリング進入してくるのが情報に入ってきた…

（よし…勝ったな…）

陸戦強襲型ガンタンクは下駄から飛び出ると、突撃形態で前線へと殺到する。

均衡だった戦線は突如乱入してきた陸戦強襲型ガンタンクの集中突撃により、

戦車級は曳かれ、
要撃級は、腕部バルカンにより貫かれ、
突撃級はＢ－０１が狩っていてすくない、
光線級は同じくＢ－０１により見えない、
要塞級は２４０ｍｍキャノンに貫かれ、
重光線級はＢ－０１によってかられ…
駆け抜ける傍から、ＢＥＴＡが消えうせ、まさに蹂躙が相応しいだろう…

戦線での決着が付きそうだったので、
カオルは空いている下駄に搭乗し、
ＸＦＪ計画の退避地点を目指した。

まだ不知火弐型は前線で頑張ってるとの事だ…

カオルは、退避地点につくと、
虚数空間から医療カプセルをだす。

ステータスを確認し、ロックを外すと、
篁中尉が目をさました。

「あれ？ここは？」

「篁中尉！！」
日本人スタッフが駆け寄ってきた…

「感激の再開中悪いんだけど……９９式電磁投射砲回収したんだけど、どうすればいい？」

「え？回収できたのですか？」

「回収したよ」

現物をにょきにょきっとだした。

「それなんだが…日本国内に届けた方が安全かもしれんな」

「そうですね…マスターコードエラーも出てますので、
メーカーの方が来ない事には…
わかりました開発局に届けをお願いいたします。」

「じゃあ…異世界軍の、渚カオルが責任持ってお届けしますね」

といってしまう。また篁中尉の入っていたカプセルもしまった。

「あのところで…」

「ん？」
もじもじしている。

たったったっとよってきて…
「あの……ふも…は？」
小声で…以下ヒソヒソＭｏｄｅ。
「あ～ボン太君ね……かわいかった？」

こくりと頷く篁中尉。
「ぬいぐるみや現物欲しい？」
頷きまくる篁中尉。

「じゃあ後でお届けします」

「秘密でお願いしますね」

「了解…」
ヒソヒソＭｏｄｅ終了。

「じゃあ、戦況確認するのでこの辺で…」

機体に戻ると、戦況はほぼ押し戻したとの報告をうけた。

戦闘終了後に、余分にきた下駄に、
フライングアーマー各機を
その隣に、Ｂ－０１機が乗って帰還、
各下駄に陸戦強襲型ガンタンクがのり、
補給物資も整理して載せ、
約3時間強の道のりを帰りだす。下駄の休憩室で、シャワーを浴び、
ベットに横になった。

……
カオル報告

ジャール大隊まるごと参入

第７６話　カムチャッカ動静　投稿日２０１２０２１８（後書き）

作者「カムチャッカ半島か……かなり動きだすなぁ…」

ナギ小尉「みたいですね～で…原作での事件もですか？」

作者「仕組まれてたのはそのままだろうな…そっちにいってないし。
ただその後が更に関心が高まるから、
近々事がおきそうになるかな？
まぁ、あの段階だとソ連はある程度の予定調和だったが…だね」

ナギ小尉「あとみてたんだけど…ドスル閣下うざかったけど戦闘描写は？」

作者「閣下の戦闘描写は次回かな…あんまり期待するなよ駄作者に」

ナギ小尉「で…篁中尉…堕ちたの？」

作者「実物見れば堕ちるだろ…お～いボン太君～」

ぷにぷにぷに
「ふもっ！！」

ナギ小尉「あ～あたしも♪おちる…♪」

女性キャラキラーだね

ネズミーマウスの中の人はいません。

作者「しかし…結構時間くったなぁ……」

第７７話　カムチャッカ事後処理等　投稿日２０１１０２１９

２００１年８月１９日夜…

横浜基地に着いた各機体は、
洗浄オーバーホールの為、ハンガーに入る。

カオルは、まずはジャール大隊のシェルターを戦艦ドックでだし、
扉をつけ、
着いた旨を告げた。

「ラトロワさん」

「カオル殿」

「と、ジャール大隊の面々は宇宙歴の世界からきた…
という扱いでお願いしますね。で、はい」

ガンダムＤＶＤ－ＢＯＸの全巻集、イグル、０８小隊を渡す。

「と……これは？」

「このＤＶＤの世界からきた…でお願いします。５日間の休暇で皆さんで学習して下さい…あと詳しい話は…

空いてる人…11号、宇宙歴について空いてる人いた?」

［ティアンムの船の人〜なら］

「あ、じゃあ専属先生としてつけてくれ」

［了解］

「先生がつくのでお願いしますね」

「わかりました」

＝＝　アメリカ軍情報局　＝＝

「むう…金色か…」

「あの戦術機、欲しいですな…」

「なんとか引っ張ってこれないか?あの基地から…」

「潜入を試みているわが諜報員は、ことごとく…」

「ふむ……計画は？」

「は！！もうしばし…お待ちを」

「急げよ」

「は！」

＝＝ソ連某所＝＝

「ふむ…」

サラサラサラ

サインを書いた。

「さてどうしようかのう？」

別の画像いり報告書が上がってきている。

金色の戦術機…

そしてサインした書類には降格、部隊除名、最前線送り等がかかれていた…

２００１年８月２０日

昨日の戦闘報告を見ようとしたら…

げっそりとしたバーニィ中尉がハンガーデスクにくる。

「カ…オ…ル」

「バーニィ？どうした？」

「精も根も…つ…きた」

バタリ

「ちょ…１１号！！」

［マスター？！！！なに人殺してんの？］

「悪いジョークはやめろ…容態は？」

［やばいよ、腎虚をおこしてる…大至急医療ポットに！！］

ウーウーウー
サイレン鳴らしながら、医療ポットに担ぎ込まれたバーニィ…

「バーニィ中尉、本当どうしたの？」

「こころあたりあるから、聞いてくるわ……」

＝＝ヒルダさん執務室＝＝

コンコン「ビダンさん」

「ど～ぞ～」

シュン
肌がつやつやと一段と若返ってる。
「バーニィの件なんですが、解放したの何時です？」

「朝だけど？」

「どの位やったんすか…」

「え～と…」

両手が折り返しにはいったので…

「ヒルダさん…やり過ぎです。彼倒れちゃいましたよ」

「あら……あたしったら…ついつい夫とやった感覚でやっちゃったわね…」

「夫、フランクリンさんと？」

「ええ、あなたに救出された頃、あんまりやってなかったから、持て余して愛人に走ったのよ。
わたしは忙しいかったからねぇ……」

（早めに加えないとバーニィ死ぬわこりゃ……）

「わかりました…ちょっと後程……」

カオルは退室すると、医務室にむかった…

ティアンム提督、スレッガー中尉の様子を見に行くためだ…

（さてと……）

「どうっすか～？」

「あ、カオルさん、ちょうどお二人ともＤＶＤルームにご案内しました……
あと…スレッガーさんに口説かれたんですが…」

「早速ですか…なんて？」

「おお、麗しの天使よ、天国なら是非僕と一発でもって」

「ストレートだなぁ…まぁ、映像見終わって、落ち着いたら俺とレビルさんをよんで下さい」

「はい」

＝＝　Ｂ－５５　ハンガーディスク＝＝

昨日の戦闘報告書をやっと読みはじめた。

Ｂ－０１被害なし…
（キター♪）
どうやら、サポートＡＩがうまく機能したらしい。

そりゃそうだろ単純に二人のりになるんだし。

しかも片方は優秀な監視員、火器管制補佐等をしてくれる。

ドスル機は…小破
駆動疲労による。

（多分近接戦闘しすぎね。
機体稼動映像…見てみないとわからんな…
時間かかるか…後程）

（あとはボン太君だなぁ…
耐久実験できなかったなぁ…
それさえすれば…
あ、篁中尉宛てにぬいぐるみ生産しなきゃ…）

と、レポートを読んでると…

［マスター、医務室から呼び出しだよ～］

「ういっす～」

＝＝　医務室　＝＝

「カオル殿、ティアンム君が回復したと聞いたが…」

「ええ、行きましょう」

シュン

「ティアンム君」

「レビル「閣下」「将軍」！」

スレッガー中尉はカチコチに敬礼、
ひしっと抱き合う、ティアンム提督とレビル将軍…

「足付きに殺されたとおもった時、
やりかけだったチェス思い出しましたよ…」

「またうてるのう」

「将軍はこちらの軍に参加で？」

「ああ、そうじゃ」

「では、わたくしめも参加させて下さい。何処までもつきあいますぞ」

「おお」

「あ、カオル大将閣下、参加させていただきます」

「歓迎いたします。階級はそのままで、レビルさんが先任扱いで上格ですね」

「わかりました」

「してのう、ドズル・ザビもきとるのだよ」

「なんと!!」

カオルは、スレッガーの方に向くと…

「えーと、スレッガー・ロウ中尉、あなたは加入されます?」

「そうですなぁ〜……わかりました、加入させてください」

「はい。喜んで…ではこのものに部屋を案内させますので、早速ですが、特殊任務があります。準備出来次第ハンガーデスクにお願いします」

［こっちです〜］

「わかりました」

敬礼後２５号についてくスレッガー中尉。

まだ奥では、二人して談義をしているので…

（まぁあとはいっか…）

って事でハンガーデスクにへと戻りはじめた…

生産

「さてと…確か前回持ってきた分はまるまるあるよな？」

［マスター、９００基分だよ］

「え？……あ…」

そうだった…ミデアの改修前は、ペイロードが１６０ｔサイズなのだ。

「あ～そうか…なら仕方ないか…回収回数増やすしかないな……でっと」

シャトル２００機、

陸戦強襲型ガンタンク２個連隊セット、

（これで？）

「なぁ１１号、８個連隊になるんだよな？」

［だねぇ……あ、整備ハンガー増設しといたよ～、格納庫は勝手に増やしてるけど］

「あ、すまんな」

（ふむ、レビルさんから、ネモ隊増設か…１個大隊ね）

承認

（あとセイバーフィッシュもか１個連隊）

承認

（でっと…）

ボン太くんぬいぐるみの生産工場をジオフロント内に建設、ついでに制服等衣料工場を設営した。

（今度衛士強化服の工場見せてもらうか…あとは…？）

娯楽施設たらん！との要望が上がってきている。

（ふむ……）

「なぁ…１１号、娯楽だと？」

［何処から上がってきている話題？］

「内勤か…」

［スポーツ系もいいんじゃ？］

「ブリッツボールが１番いいよなぁ」

［なにそれ？］

「ファイナルファンタジー内でのスポーツ競技の一つさ…あれは燃えた」

［マスター、そのゲームとりにいけばいいじゃん］

「あ、そうか……候補に入れておこう♪…と今揃えられるのは…」

（ふむ少ないけど…後で増やすか…）

とりあえずダーツ、ビリヤード、チェス場等設置

あと、コロニーからの、バスケ場、フットサル場も設置。

ゲームは記録してなかった…

［そういえばマスター、宇宙でだったら相転移エンジン使えるけど？］

「あっ……そうだなぁ…ドックで付け替えできる？」

［まだ完成してないから無理～
今だと部品が浮かびまくってんわやんわになる］

カオルは光景を想像する。
部品はずす度にふよふよ空間に浮かび、
のかすとそのままなんかにぶつかるまで直進するボルト等など…

それの回収に翻弄するコバッタ達…
ろくに部品を運べる状態でない。

［ドックできれば、低重力でどっかにふよふよする事はなくなるから、
付け替えできるよ～］

「だな…できたら順次付け替え回収してくれ」

「了解～」

そうこうしている内に、スレッガー中尉がきた…
（うん生産指示はおしまいっと…）

「大将閣下、特殊任務の内容とは？」

「こっちに来て下さい。なに、中尉向きですよ」

……

コンコン「ビダンさん」

「どうぞ～」
シュン

「おお、これはお美しい…こんなとこに花がいるとは」
入るいなや、早速口説きにかかるスレッガー中尉…

「スレッガー中尉」

「あ、これは失礼を…」

「中尉、特殊任務の内容は、ヒルダ・ビダンさんに協力する事…以上」

「こちらのご婦人にですな?…拝命致しました!!」

「じゃあ、ビダンさん」

「ええ、わかりましたわ♪」

シュン　カツカツカツ

うほっうほっうほほ!

(さて、何処までもつかな??)

２００１年８月２１日

杖をついて移動しているスレッガー中尉をみかけた…

しんどいかんじだったから…声をかけれなかった…

とりあえずＣ－０１部隊いり。

Ｃ－０１の隊長はビダンさんにやってもらうとしよう。

「カオル君～」

ますます肌に磨きがかかっている、ビダンさんがきた…
ついでだ。
「ビダンさん、Ｃ－０１、男性部隊の隊長をやってください。
隊員はご自由に…けど程々に…」

「Ｃ－０１の所属隊員って？」

「ビダンさんが相手した方ですよ」

「わかったわ♪…けどまだまだ集めてね♪」

「あと…何人程？」

「そうねぇ…１８名かしら？」

「……善処します」
ビダンさん何処までいくつもりなんだろう？？

（残っている問題は…レールガンお届けか…）

帝都の開発局にお使い編ｗ

「シャムシェル」

カオルは飛び立つと一路帝都へ……

が、殿下に用がないのに、開発局に届けた後、

殿下の私室に呼ばれてしまった…

「殿下、お久しぶりです」

「おおカオル殿、朕はあいたかったでございます」

「……して、殿下なにようですか？」

「座って下さいな」

私室にあるソファーをさしたので、おとなしく座る。

けど…

（な、何故殿下が横に…）

ピトっと体を密着させて座ってきてる。

「実は、この書類に承認して貰いたいのです」

「え～っと？道路整備許可……あ～承認のサインですね？

結構ありますね～」

（書く欄が、所属、氏名か…）

「こちらのペンを…」

「ありがとうございます」
サラサラサラ
一枚、二枚、三枚、四枚、五枚、六枚、七枚、八枚、九枚……

おんなじ様な単純作業が続き…
サラサピタッ

「あの～殿下……」

「チッ」

「なんか、これだけ違うのですが……」

結婚届け……相手は殿下になっている。

「何故、これが、それにいつのまに？」

「カオル殿おしたいもうしあげますわ。結婚して下さいませ」

殿下の手がカオルの太股にそえられる。

（はえええ～）

殿下の手が太股を撫で…

（気持ちいい…た、たつ！！）

イッシーの顔がよぎる。

体をのかし…

「すみません殿下！！自分には決めた方が！」

全力で礼をする

「……でも心配いりませんわよ」

「へ？」

「議会には根回ししまして、近日中には時限立法で重婚が認められるようになりますわ」

「重婚……あ！！殿下まさか…」

「そう、まさかですの」

再び、身体を寄せてきて…

「なので、早くサインして、契りを結びましょ」

悪魔の誘惑である…

殿下の指先で…カオルの胸を撫で回し…

「……ん？近日中？？…今ここでサインすると？」

「……あ～もう、朕一人だけのものになるはずだったのにぃ～」

「すんません…殿下……」

「わかりましたわ……時限立法制定後ね」

チュ

「それまでは…婚前交渉もできませんので…おあずけで…」

「ははははは……」

カオル…くいそこねた模様だった…

その後殿下からは、許可の説明などに広間に移動して説明された…

その後平和日本にいき、

前回経由したさいにメールが入ってたので、

廃品回収と帝国あての荷物をうけとり、

山梨県にある、リニア実験線にいく…

もちろん、コピーした。

元の世界に戻る前に、セブンイレブンよって新商品みてると…
（おっ）
『チーズ香るクロックムッシュ』を発見した。

（なんか…良さそう…）
１４８円払って食べてみると…

（ほう、いけるじゃん。
もうひとつかってＰＸメニューに追加しとくか…）

カオルは世界扉をくぐり、元の世界へと戻る。

帰ってくると…

もちろん集積所にコンテナをはきだした後だが…

プロミネンス計画の方から機体を研究させてくれ…
と要請が入ってた。

（ふむ…）

魔ドムを2機追加生産し、パイロットにヤドカリをつけ、
改造型ボン太君を研究用に提供

警備員にＴ－８５０　６名、担当士官にティアンム提督、
技術士官に４名程

ボン太君ぬいぐるみをお土産に…

第７７話　カムチャッカ事後処理等　投稿日２０１１０２１９（後書き）

作者「ふう～ちとペース落ちたなぁ…」

ナギ少尉「どうしたの作者？」

作者「前回のあたりから、少し執筆スピードがな…」

ナギ少尉「ふ～ん…スランプ？」

作者「かもなぁ～～ま、頑張るさ」

ナギ少尉「ところでカオル君、食わなかったね～」

作者「……りちぎなやつだよ……俺だったら、喜んで～と食うけどさ」

ナギ少尉「えっちぃ」

作者「それは人間だれでもだろ～」

ナギ少尉「艦長は違うも～ん」

作者「いや、わかんね～ぞ…案外既に博士はてつきだったりして…」

ナギ少尉「違う～～！！」

作者「だから、艦長は博士に甘いんだよね」

ナギ少尉「！！！」

作者「じゃなかったら、あんな寄り道認める？」

ナギ少尉「ふっふっふっ……」

作者「あれ？ナギ少尉？……何故、そのハンマーは…」

ドカ！！

作者チーン

どうやら地雷をふんだようだった…

第７８話　ニューガンダム編　投稿日２０１１０２２０

２００１年８月２２日

今朝はスレッガー中尉が医療カプセルのお世話になっているのを…
さらりと聞いた…
（あの人は……）

頑張れＣ－０１、
（多分、今夜はカプセルからでたバーニィだろうな…）

とりあえず今回は人材確保にいくことにした…

（ガトーはなぁ……正直扱いづらい、下手したら、洗脳なんだよね…
オールドタイプでは最強の一角だけど……
もう少し作戦を練ろう…）
少し先の作品群を連想する…

（プルクローン達だろ、アムロやシャアもだろ…そういえば宇宙世
紀は宝庫だなぁ…ティターンズは基本除外か…
あとＭ９も動かす人材欲しいな…
あと二人程ビダンさん要員ほしいし…）

（うっし…）

「１１号いってくるわ」

［いってらっしゃーい］

宇宙歴　００９３　３月８日

世界扉を潜りぬけ、扉を消すと、幻影をかけ、宇宙空間にでて、衛星をコロニーにつけた。

端末をだすと検索…

（お、やはり、スイートウオータか……）

宇宙空間にはムサカ級があふれる程浮かんでいる。

手近なムサカに取り付き、コピー、艦内にある、

ギラドーガ、シャクルズＣＣＡをコピーする。

艦の外に出ると…

（レウルーラ…どうやって…あ、）

検索をかける。

「周囲にある宇宙艦で、よりいっそう大きい船は？」

「検索完了、ナビしますか？」

「Y」

無事にレウルーラに降り立ち、艦内にあるサザビーをコピーした。

そうすると…

「おい、総帥の演説が始まるぞ！」

「ああ、総帥……」

「はぁ…シャア大佐…抱かれたいわぁ…」

空間に浮かぶホログラムによる、シャアの演説がはじまった…

「このコロニー、スウィートウォーターは、
密閉型とオープン型を繋ぎ合わせて建造された、
きわめて不安定な物である。
それも、過去の宇宙戦争で生まれた難民の為に急遽、建造された物だからだ。

しかも、地球連邦政府が難民に対して行った施策はここまでで、
入れ物さえ作ればよしとして、彼らは地球に引きこもり、
我々に地球を解放することはしなかったのである。

私の父、ジオン・ダイクンが宇宙移民者、
すなわちスペースノイドの自治権を地球に要求した時、

父ジオンはザビ家に暗殺された。
そしてそのザビ家一統はジオン公国を騙り、
地球に独立戦争を仕掛けたのである。
その結果は諸君らが知っている通り、ザビ家の敗北に終わった。

それはいい。

しかしその結果、地球連邦政府は増長し、連邦軍の内部は腐敗し、
ティターンズのような反連邦政府運動を生み、
ザビ家の残党を騙るハマーンの跳梁ともなった。
これが、難民を生んだ歴史である。

ここに至って私は、人類が今後、
絶対に戦争を繰り返さないようにすべきだと確信したのである。
それが、アクシズを地球に落とす作戦の真の目的である。
これによって、地球圏の戦争の源である地球に居続ける人々を粛清する」

「おおーっ」
「大佐ーっ」
「ジーク、ジーク、ジーク、ジーク」

シャア、両手で歓声を制し、再び…

「諸君、みずからの道を拓く為、難民の為の政治を手に入れる為に、

あと一息、諸君らの力を私に貸していただきたい。
そして私は、父ジオンのもとに召されるであろう」
「おおーっ」「大佐ー」「あたしもー」
重大イベントを生で見てた…。

（さて…次は…）
衛星を回収し…

「”世界扉”」

宇宙歴００９３　３月１０日
再び衛星を設置すると…

ルナ２を検索し、回収して、急いで急行する。

ルナ２艦隊、ミサイル、モビルスーツ強襲により壊滅…まぁその中で人材いないかなぁ～と思いたったからだった…

クラップ級に取り付くと…

「隊長！！」

「お前なぁ…新任だからってこの成績はないだろう…」

「すみません…」
（ほう…ビダンさん好みの顔つきだなぁ…
うまく戦死してくれれば良いが…）
マーク対象を決めた。
（あと他には…っと…）
他の艦もまわり、何人かターゲットを決めたが…
（全滅でないからなぁ…あとは運だのみか…
とりあえず最優先候補は死人がでるまえにいけにえを…
だな…）
『ネオジオン艦隊接近、各員監視態勢に入れ』
「きたか…」
「緊張すんな、坊主」
「坊主はやめて下さいよ…僕にはミーシャ・チャイって名前あるんですから…」
（なるほど…ミーシャねぇ…）
『偵察機、ジオン艦隊へ接近』

「さーって鬼がでるか……」

待機室内に緊張感がはしる。
が時間経過につれ…安堵感がではじめ、

「どうやら無事にすみそうだぜ、坊主」

「ですからぁ～」

ビービービー
『ミサイル急速接近!!総員対ショック防御!!ＭＳパイロットは緊急発進いぞけ!!』

「う、マジかよ!!」

「ぼやぼやすんな!!搭乗急ぐぞ!!」

待機室からエアロックを抜け、格納庫無重力ブロックにでるて壁をけって乗機へと向かう。
手には無重力マグネットアンカーを使用して、機体のハッチへと潜りこむ。

そこへ整備士から、
「ジュネレーター起動してるぞ!!チェックは緊急ですませた!」

「すまん。アドル!!」

「良いって事よ、帰ったらステーキおごりな」

「たけえぞ！！機体だすぞー」

『カウント省略します、気をつけて！』

「ありがとう…ミーシャ・チャイ出ます！！」シャーーーボフ！！

「へ？」

カタパルトから打ち出されたと同時に…

ミサイルを食らって格納庫ないから爆発の炎が上がるクラップ級…

そして爆発は至るところでおき…

「み、みんなぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

大爆発……衝撃波がジェガンを襲う…

「うぅぅっ！」

「はぁはぁはぁ…た、隊長！！、タカヤ！！ドゥーンズ！！アデニア！！バスク！！」
通信に呼びかけるも誰も反応ない…

「チクショー！！」
手を座席に打ち付ける。

「ハァハァ……こちら、タイタニック所属、ミーシャ・チャイ伍長、所属艦を失いました。生存１機…編入を求めます」

『ミーシャ・チャイ伍長、こちらアドラス、我艦へ編入せよ…コード送る』

「了解……、アドラス」

『奇襲で、艦隊の７０％近くが失った、敵をとれ！！やり返すぞ！！』

「了解！！」

ミサイル、主砲攻撃がやむと、敵ＭＳによる突撃へとなった。

彼がのるジェガンは新人の割にはかなり善戦した。
中々死なないのだった…

（回収できないかな……）

『生き残り全機に告ぐ、全面撤退だ！！
ルナ２は完全放棄、０９０１８２へ撤退戦闘の上集結せよ』

「クソー」

『旗艦クラップは艦橋直撃の為指揮行動ができない、
よってアドラスが艦隊指揮をとる』

「うぉぉぉ～」

彼の機体は撤退指示を受けたのに、単機で突っ込み始めた。

『ミーシャ！！撤退だ！！聞いてなかったのか？』

「このやろう！！」

ギラ・ドーガのビームライフル直撃をうけ…
爆散する機体…

カオルは直撃寸前にミーシャをシェルターへと引き込んだ。
カオルは一路ロンデニオンへと急行する。

二日目…

宇宙歴００９３　３月１１日
ロンデニオン出港するロンドベル艦隊…
さっそく取り付き、艦全体に広げる。

そうすると格納庫では…
まだ作業中で…
（ふむ…取り付け作業はまだか……）

隅では…
（あ、あのイベントか…）
ケーラ「なんだよ？」

チェーン「スウィートウォーターの放送は嘘だって」

アストナージ　「ええっ」

アムロ　「これだ。カメラはロングサイズでしか撮影してないし、砲身もないように見える。ダミーだな」

チェーン　「ということは」

ブライト　「シャアはアクシズに着いている」

ケーラ「となると……戦闘ね」

アムロ「ああ、そうだな…」

アストナージ「よ～し、機体のチェックいそげー」
でアストナージが格納庫のＭＳに向かって…ケーラはリ・ガズィの調整に向かった。
ブライトは考えながら通路を進む。

「ふむ」

「あの、アムロ」

「なんだい？チェーン」

「私室にきてもらえます？」

「ん？」

「最近ご無沙汰だから…今の内に……」

「チェーンはえっちいな」

「うんもう…相手してくれないと、乗り換えちゃいますよ？」

「はは、冗談だよ…じゃあ、いくか…1時間程良いだろ」

「はい♪」
（成る程ね…こういったイベントがあったんか…うし…ついてこう♪）

プシュー
チェーンが部屋に入り、後を追うアムロ…
扉が閉まると…
「ン！！」
キスをし…

作者よりお知らせです。以後はＲ１８内容に抵触しかねる描写が続きます…
ですので期待してた方には申し訳ありませんが、略…になります。

事後…カオルはほてりあがっていた。
（すごかったなぁ……特にチェーンさん…
あそこまで乱れるとは…）

「チェーン……」

「なに？アムロ」

「この戦いおわったら…籍に入ってくれないかな？」
（う、プロポーズイベント？？）

「え？！？！……そ、それって…」

「ああ、言葉通りさ……チェーン、君が僕の人生において必要だと感じたのさ…
受けてくれるかい？」

「アムロ……」
クチュ…長いディープキス。

「これからの人生、一緒に……うれしいです。…入籍します」

「本当かい？」

「ええ…」

「ありがとう」
二人して裸で室内でずーっと抱き合っている。
あたりには、脱いだ衣服が浮遊してた…

チェーンの目にはうれし涙が流れてた…

アムロ、舌で涙をすくい…
「あん」

「さ、チェーン……そろそろ時間だ…」

「ええ……もっと結ばれてたいけど…」

「戦いが終わったら時間とれるさ」

「そうね…」

アムロは自分が脱いだ服を下着から着はじめる。

チェーンは下着制服類を階級章等外してから、ランドリーボックスに入れると、

新しいのをだして着はじめる。

「付けてあげるよ」

「ありがとう、あ・な・た」

ブラジャーのホックをとめるアムロ。

「まだ使うの早いよ…僕の可愛いチェーン」

「ふふゴメンなさいね…子供何人になるかなぁ？」

「そうだなぁ…3人かな？、男の子2人と女の子1人」

「あら、女の子2人男の子1人がいいわ」

「どうしてだ？」

「やっぱり、あたしみたく可愛い女の子ほしいじゃない」

「で、僕みたいのに貰われるわけか…」

「うふふ…そうねぇ」

チェーンは着終わると、部屋の換気スイッチを押す。
無重力内に浮遊している滴、埃などを気流を発生させクリアーにするのだ。

「準備できたわ…いきましょアムロ」

「ああ」

室内には意識を残させている、カオルが残ってた…

（チェーンさんね……、あそこでサイコフレーム始動イベントなければ……
はぁ……）
結末を知っている身はつらいのであった…

カオルは気を取り直し格納庫へと意識を向けると…

「オーライ、オーライ」リ・ガズィにＢＷＰが取り付けられた。

「よーし、これで自分ひとりでシャアを叩き潰せる」
ケーラだ。
（二人の最後のイチャイチャイベントなんだよね……
それとも出撃前にあるかな?）

「そういうのやめてください。中尉に怪我をされるのが心配で」

「アストナージ、言ってくれちゃって」
抱き合ってキスをするアストナージとケーラ……

『艦隊接近、連邦軍の艦隊確認』
格納庫内に、ブリッチからの艦内放送が入る。

「何処のだろ?今の時期だと…」

「さぁ?」

『告げる、接近中の連邦艦隊は、損傷艦多数、
各員作業一時中断、救命活動にあたれ』

「おい、マジかよ…」

「デッキにでるよ!!」

「ジェガン出せるか!?」

『各員ノーマルスーツ着用急げ!!これより5分後にハッチ解放する。未着用の者は至急エアロック内に退避せよ』

「救護班準備まだかー！！」

格納庫内が騒がしくなってきた……
その間にリ・ガズィ、ファンネル、ニューガンダム、ジェガン情報を回収する。

ジェガンが二回目なのは、取り付いてみてわかったが、
アストナージが改造をいれてたのがわかったからだ…

『接近中の艦隊は、所属はルナ２！！繰り返す所属はルナ２！！』

「ルナ２？おちたんか？」

（ふむ、連邦側は…こんなものか…
アストナージほしいんだけどなぁ……
さすがに死体回収されてるようじゃ…
すまん…）

目をつけていた小部屋内に入ると…
「”世界扉”」

……
カオル報告

まとめて行います。

第７８話　ニューガンダム編　投稿日２０１１０２２０（後書き）

作者「ふ～っあついあついぃ…」

ナギ少尉「作者お疲れ～…本編でプロポーズイベント始めて書いたね～しかも裸とか」

作者「まぁ具体的に書かなきゃ大丈夫だろ…途中は自粛したがな」

ナギ少尉「自粛した内容教えて～」

作者「こらこら、後書きでＲ１８指定にさす気か？…まぁ無重力は色々な技ができるって事よ」

ナギ少尉「……はぁ…私も艦長とかっこはぁーとかっことじ」

作者「……（無理だなは殺されるから言えないな）ところで、かっこはぁーとかっことじって、
やっぱり具体的に言わないと駄目なんか？」

ナギ少尉「じゃないと相手に伝わらないじゃない」

作者「まぁそうだなぁ…」

ナギ少尉「さて次回、ナギ少尉と艦長のイチャイチャエッチイベントの巻、お楽しみに」

作者「うぉい、ニューガンダム編2だろうが」

ナギ少尉「作者殺して乗っ取る」
ＳＭＧを背後から取り出し、撃ちまくる！！

作者「やっぱり……」チーン

第７９話　ニューガンダム編２　投稿日２０１１０２２１

宇宙歴００９３　３月１２日

日付かわったあたり…扉からでて、アクシズへと目指す。

アクシズにつくと、まず真っ先に稼動まちのα・アジールを…
そして、ギュネイのヤクトドーガに同化し、時を待つ…

『連邦艦隊接近中、総員戦闘配置急げ！！』

整備士が機体に取り付いた。

「ジュネレーター始動」

フィィィ

「ステータスチェック…よし」

指さし確認…

「推進材…よし」

「オーイどうだぁ？」
あけているコクピットの外から聞こえる。
「各部問題なし、次の機体いっていいぞ～さてと…」
外に整備士がでた。
機体付きなのだろう。機体の側でまっている。
『モビルスーツ部隊は艦隊の前に展開』
「ギュネイ」
（きたか…獲物君）
「ほら」
ギュネイが乗り込んできた。
「嘘か真か、すぐにわかるさ…」
ギュネイ、パラメータをだしアイドリング状態になってるのを確認すると。
「機体動かすぞ！！」
とスピーカーオンで外部に伝える。
整備士が離れたのを確認し…
ヤクトドーガを出口方向まで歩みを進める。
『ギュネイ准尉、進路クリアーです』
「ああ、ありがとう。ギュネイ・ガス、ヤクトドーガでる！！」

ブァァァァ
カタパルト使わずにブーストのみで出た。

『α・アジール発進用意。各員、第一戦闘配置へ』

スクリーンには、戦艦におさまりきらない巨大ＭＡが、アクシズのハッチから出始めるのがみえた。

「α・アジール？」

ステータスチェックし…
「あれにクェスがか…」

フライパスした後、ＭＡは発進し、

『ふふっ、来る来る』

コクピット内に配下登録しているクエスの声が聞こえる。
「うおっ！！」

クェスのα・アジールが猛スピードで通過していく

「加速、スピード、ダンチだな…追いつけないか……調子に乗るな、クェス」

『やることがいっぱいあるでしょ』

ミサイル迎撃するα・アジール…

「先手もってかれたか…」

『何？壁になる奴がいる』

α・アジールが、加速後ブースターを切り離したのが漂ってかわしながら

「クェス、そいつはニューガンダムだ、手ごわいぞ」

ミサイル迎撃しながら、追跡する。

『なにが』

「ちぃ…追いつけないな……見えた！！」

『なんでさ？』

「…ガンダムが避けてる？」

スクリーンには拡大映像でガンダムとα・アジールを移している。

『ううっ、邪魔すんじゃない』

「雑魚が絡んできたか…」

『なんなの？』

「チッ、まだまだか…」
α・アジールが、ジェガンに絡んでるのを確認しながらつぶやいた…
ガンダムとの距離は、離れていく。
こっちとの相対距離は縮まってはいるが…

『おっちろ、おっちろ、おっちろ』

「クェス、ガンダムはこっちだ」
ニューガンダムをターゲットロック…

「ううっ」
シールドビームを撃つがかわされ…

「そこまでだ、ガンダム」
ファンネルを放出し

「行けーっ」
ファンネルがガンダムに迫るが、
1個、2個、3個爆発する。

「ちぃ全部駄目か…逃がすか！！」

逃げるガンダムを追っかける。

「いつまで雑魚を相手にしているんだ」

『雑魚？』

「ガンダムがそっちにいった、ブラボー、止めてくれ頼む！！」

『了解！！はやくきてくれよ！！』

「ああ、…クェス、最大で来てくれ！！」

『そんなこといったって、時間かかるよ』

「わかってる。雑魚は後回し、まずはガンダムだ！
やつを落とせば、作戦は成功する」

「わかった！！」

「よし…おいついた…ありがとうブラボーリーダー」

『ブラボー１はやられました、変わりに１３が受けます』

「済まない…」

ガンダムを射程圏内におさめると…

「ぬけられるか」

残りファンネルを放出する

『大佐のところにはいかせないよ』

「クェスファンネルで援護を」

『わかった!!……いけぇ!!』

ガンダムがファンネルを展開し、

ピラミッドを形成する。

「なんだ?」

ファンネルのビームが弾き返し…

「なにぃ?iフィールドか…なら…」

ファンネルを突撃させるが…

「チィ…なんだ?あれは…」

『ううっ、ううう』

「内側から射撃可かよ…クェス、メガ粒子砲！！」

『わかった！！』

ファンネルによるビームシールドは突き抜けるが…ガンダムは避け…

「ちぃ逃げ出したか、だがファンネルは…クェス！！」

『ううっ、ギュネイ』

「くそ、なんなんだあれは…」

画面ではピラミッドを形成したガンダムが…

「わかっている。ファンネルがなんであんなにもつんだ？」

『そんなんで大佐を困らせないでよ』

「いったい何時になったら破けるんだ？

足を止めてる今がチャンスなのに…」

α・アジールのメガ粒子砲にビームシールドが再び破けるが、

ファンネルが再形成される。

「クッ戻れファンネル！！」

肩に戻ってきてリチャージに入る。

活動限界を超えたα・アジールのファンネルが活動停止…

「クェス、ファンネル交代させろ」

『わかった』

戻る瞬間に、チャンスだとばかりピラミッドを解除し、
ブースターをふかす。

「クッ…逃すか！！」

ガンダムのファンネルよりビームが照射され、
距離が詰まらない…

「なろ！！いけぇファンネル！！」
リチャージしたファンネルを再放出、

撃ち合うファンネル達、
そこへα・アジールのファンネルが追いつき、
またピラミッドを形成する。

『なんなのよ！！卑怯じゃない！！』

「クェスおちつけ、相手のファンネルはそろそろ活動限界のはずだ！」

『うんわかった！いっけー』

残りのファンネルを全て放出してるのが見える。
しばらくすると
「チッ、あのファンネルチートだな…」
ファンネルを拡大…
「先にガンダムよりも、ファンネルたたけ！！」
『うん！』
ピラミッドの頂点を形成するファンネルに攻撃をしかけるが…
『このこの！！』
反対に迎撃されるファンネルたち、
そして…
ギュネイのファンネルは…限界までいくと…活動をとめてしまった…
「ファンネルがもたないから」
クェスの機体がガンダムへと…
「クェス、無茶だ」
ブースター吹かし応援に駆け付けようと…

「なろっ！！」

『あっ』

「クェス！！」

「よしやっ…」
画面にはシールドとバズーカがうっていた。

「何？……あっ？」

ギュネイをビーム直撃の直前の瞬間に引き込む。
ヤクトドーガを離脱すると、爆散してるのがみえた……

（さてと次は……）

戦闘機動を行っているαアジールを追跡してるが、
衝突時にＡＴフィールドが展開されそうで、うまく接近できない…
しばらくすると…

ガンダムおっていたα・アジールに、ハサウェイのジェガンが取り付いた。

カオルも機動を止めたα・アジールに取り付いた。

「あんたもそんなことを言う。だからあんたみたいのを生んだ地球を壊さなくっちゃ、救われないんだよ」

ハサウェイのモビルスーツが正面にまわり、ハッチを開く。

「何？」

『クェス、そこにいるんだろ？わかっているよ、ハッチを開いて。顔を見れば、そんなイライラすぐに忘れるよ』

「子供は嫌いだ、ずうずうしいからっ」

『あっ』

ジェガンを振りほどき…

「嫌な女。お前がいなければアムロの所にいられたのに」

『クェス、降りて』

スクリーンにミサイルが発射されたのが映り……

「直撃!?どきなさい、ハサウェイ」

ハサウェイのジェガンに向かうミサイルから、シェガンを庇って押し退けると…

吸い込まれ……

直撃する寸前にクェスをシェルターに引き込み…

もちろん、ギュネイとは別シェルターだが…

直撃、爆散する。

（3人目…いや戦力としたら1人目か…あとはな…）

そしてカオルはアクシズへと向かう。

（ラーカイラムきたか…）

アクシズに接近中のラーカイラムがみえた。

（となると……）

ノズル方向へ急ぐと…

ドドーン！！

核搭載艦が爆破、巨大な閃光があがる。

（ほほーたまや～）

（いた！！）

切り合っているガンダム、サザビーを発見する。

（お～お～一方的だなぁ…）

アクシズから爆発が起こる……

（あ、動きが鈍く）

ガンダムが背後から襲いかかり…

サザビーはアクシズに打ち付けられ、
機動不能になったサザビーから
スクランブルポットが射出される。

カオルは…戦闘に負けた、
シャアのスクランブルポットに取り付くと、
同時にニューガンダムからのトリモチ弾がくっついた…

「捕まった？しかし、もう遅い」

外ではロンドベルによって爆破されたアクシズが、
デブリを撒き散らしながら分断されていく……

カオルはニューガンダムに移動し直すと…
「シャア、貴様の負けだ」『まだわからんさ』

「ふっ、負け惜しみを見ろ、アクシズは分断され、軽くなり地球には落下しない、どこが貴様の勝ちだ？」

『フフフ……フハハハハ』

「なにを笑っているんだ？」

ニューガンダムの手に持ったサザビーのスクランブルポットから、
シャアの嘲笑とも取れる笑い声が聞こえる

『私の勝ちだな。今計算してみたが、アクシズの後部は、
地球の引力に引かれて落ちる。貴様らの頑張りすぎだ』

「なにぃ？」
ラーカイラムからのデーターを転送してもらい…
顔が青ざめる…が、

「ふざけるな。たかが石っころひとつ、
ガンダムで押し出してやる！！」

『馬鹿な事はやめろ』

「やってみなければわからん」

『正気か？』

「貴様ほど急ぎすぎもしなければ、人類に絶望もしちゃいない」

『うわああっ…アクシズの落下は始まっているんだぞ』

アムロは、脱出ポットをアクシズへと押し付け、
ニューガンダムでアクシズを支えようとバーニアを噴かした。

（この位置で固定か…）
ワイヤーが繋がって触れ合い通信状態になってるのを確認すると…
ワイヤーに身体を伸ばし、ポット全体にも身体を引き延ばした。

「ニューガンダムは伊達じゃない」

限界までバーニアを噴出させるニューガンダムだが、
たかが一機……アクシズの落下は止まらない。

『やめろ、何やってんだ?』

「ガンダムでブースター最大でふかしてるんだよ!」

『たかがＭＳ一機の力でか?正気でないな』

「貴様は、黙ってろ!!」

『無駄だ、アムロ、君は離脱しろ』

「命がおしいのか?命ごいか?シャア!!」

そのうち摩擦熱でガンダム、アクシズが赤くそまる。

『命が惜しかったら、貴様にサイコフレームの情報など与えるものか』

「なんだと？」

『情けないモビルスーツと戦って勝つ意味があるのか？しかし、これはナンセンスだ』

「馬鹿にして。そうやって貴様は、永遠に他人を見下すことしかしないんだ」

サイコフレームの光が機体の外から、のびてくのを感じている。

『ふ、サイコフレームの力でもってしても無駄だということだったな…アムロ』

「いや、無駄じゃないさ、ガンダムならできる、いや、やってみせるさ！！」

『まだわからんのか！！もう重力の力に引かれている。いくらガンダムでも推力は限界はあるだろう』

「シャア！！ガンダムにはなぁ、奇跡の力があるんだよ！！」

『はっ？奇跡だと？君、とうとういかれたか？君の機体は何処で作られた？アナハイムだろう？所詮人間がつくったものさ』

「人間がつくったってなぁ！！……援軍？？」

『ふっ援軍か……今更遅いな』

「えっ？まさか…おい…」

『なんだ？アムロ、状況を教えてくれたまえ、こっちは君のガンダムに機体壊されて状況がわからんのだからな』

援軍にきた、ジェガン・ＧＭ？達が、ネオジオンを無視し、次々とアクシズに取り付きはじめ…

「なんだ？どういうんだ？」

更に次々アクシズに取り付く。

「やめてくれ、こんな事に付き合う必要はない。さがれ、来るんじゃない」

降下速度が次々落ちる。

身体で感じるぐらいだ。

『なんだ？何が起こっているんだ？
ええい、完全な作戦にはならんとは』
スクランブルポット内部のシャアは、
スクリーンが見えず…いらついているのよね…

『ロンド・ベルだけにいい思いはさせませんよ』

「しかし、その機体じゃあ」

そして……敵であるギラ・ドーガまでもが、
同じようにアクシズに取り付き、バーニアを噴出し始めた。

「ギラ・ドーガまで。無理だよ、みんな下がれ」

『地球が駄目になるかならないかなんだ。
やってみる価値ありますぜ』

「しかし、爆装している機体だってある」

「駄目だ、摩擦熱とオーバーロードで自爆するだけだぞ」
だが、アクシズは降下速度を緩めてはいる。

自爆覚悟ですればうまくいくかもしれない…

「もういいんだ。みんなやめろ」

しかし…ニューガンダムに劣る性能の機体は…摩擦熱に耐えられず、

真っ赤に染め上がり、ボン！！

爆散してしまった…

その爆発の光がちらほら見えはじめ…

「爆発する、もういいんだ！！離れろー！！」

『へっ、ここまできたら…うわぁ！！』

爆発した機体からだろう…

『ああ、命をとして、やれる……』

また通信が途絶…

しかし、あきらめる機体はいない…

『やれるだけやってみます！！』

『ああっ！！』

『命がけでな！！』

『そうだそうだ！！』

が、また跳ね飛ばされ、アクシズの岩壁にたたき付けられ爆発…

機体がリタイアする度にアクシズの降下速度の落ちは少しずつなくなる…

『結局、遅かれ早かれこんな悲しみだけが広がって地球を押しつぶすのだ』

「やめてくれーみんな！！」

また耐え切れず機体がふっとばされる。

『ならば人類は、自分の手で自分を裁いて自然に対し、地球に対して贖罪しなければならん。』

「頼む！！」

また一機爆散、いや三機…

『アムロ、なんでこれがわからん』

「離れろ、…ガンダムの力は」

そのとき！光の粒子がニューガンダムから噴出した…

その光は…コクピット内部にもあふれ…

『こ、これは、サイコフレームの共振。人の意思が集中しすぎてオーバーロードしているのか？

なのに、恐怖は感じない。むしろあたたかくて、安心を感じるとは』

アクシズに取り付いていたモビルスーツを優しく保護するように、跳ね飛ばし始めた。

「何もできないで、おあっ」

光のまくはモビルスーツをアクシズから離し、寄せつけない…
また、他の機体からの通信も途絶させてるようだ…

いくつものモビルスーツがアクシズにたかろうとするが…
たかれない

『そうか、しかしこのあたたかさを持った人間が、地球さえ破壊するんだ。
それをわかるんだよ、アムロ』

サイコフレームが暴走状態になり、コクピット内が赤い粒子が走りだす。

「わかってるよ。だから、世界に人の心の光を見せなけりゃならないんだろ」

（そろそろか…）

『ふん、そういう男にしてはクェスに冷たかったな、え?』

「俺はマシーンじゃない。クェスの父親代わりなどできない」

「だからか。貴様はクェスをマシーンとして扱って」

『ララァ・スンは私の母になってくれるかもしれなかった女性だ。
そのララァを殺したお前に言えたことか』

「お母さん?ララァが?うわっ」

機体が耐え切れず、爆発する瞬間、アムロ、また触れ合っていたシャアを引き抜いた。

シャアはクェスのシェルターへ…

サイコフレームが…意思の力が地球を包んでいく…

(ふぅ…)

カオルはサイコフレームの力に包まれているアクシズから離れ…

手近な艦へ…

艦内に入ると、

「やった!!やりやがった!!コンチクショー!!」

「地球は救えたんだ!!」

「英雄どもを迎えるぞ!!」

「ああ！！」

大勝利ムードにあふれる艦内…

手近な倉庫内部に見をだすと…

「”世界扉”」

カオルは世界扉を潜る

……

カオル報告

ニューガンダム編まとめ

ヤクト・ドーガ

ギラ・ドーガ

サザビー

ニューガンダム

ジェガン

リ・ガズィ

ラーカイラム

クラップ級

ムサカ

レウルーラ

第７９話　ニューガンダム編２　投稿日２０１１０２２１（後書き）

作者「最強のニュータイプ無事に取得できたなぁ～」

ナギ少尉「ねえ、カオル君狙われなかったの？」

作者「あの状態なら無理…と思う…セーフ…な場面に介入したんだよ」

ナギ少尉「ふ～ん……ずいぶんとギュネイが活躍してるんだ…」
ニューガンダムのＤＶＤを見ているナギ少尉

ナギ少尉「ずいぶん出番が増えたのね」

作者「あくまでも、取り付いている人物に集中してるからなぁ…」

ナギ少尉「で、クェスとシャアのフラグたて？」

作者「ギュネイは…決まってるな…帰ったらリタイヤが…」

ナギ少尉「次回、異世界軍初の死者、魂よ逝け…お楽しみにぃ」

作者「ちょ…確実なサブタイトルだすなぁぁ～修正！！ニューガンダムより帰還処理…お楽しみにぃ」

ナギ少尉「作者…つくづくだけとサブタイトルセンスない」

作者「うっせ…毎日サブタイトル考えるの大変なんだよ！」

第８０話　ニューガンダムの帰還処理　投稿日２０１１０２２２

帰ってきて…
バタンキューは定番…
［マスター、またぶっ倒れてる……］

［次は誰呼ぶ？］

［出遅れてるのまりもちゃんだよね？］

［プロポーズされてるから、それまでに済まさないと…］
というか、モニターしてるんだ君達…

［うん作者！！僕たちなめないでほしいなぁ］
えっへんと踏ん反り返るコバッタ達。

［とりあえずチャンスだよ］

［まずは、まりもちゃん、次にイッシーけしかけて…］

［ぼく、発情する眉薬呼吸系しかけてくる］

［さぁ…頑張るぞ！！］
［おー］［おー］

［えっほえっほ］［おいらはでっかいぞ～］［へいへほ～］［アイデアバッチリよ］［へいへほ～］
［ほっしいよほっしいよ］［赤ちゃんがぁ］［絶対みるんだ］［かわいいなぁ］

コバッタ達の歌とともに、私室へ運ばれていくカオル…

＝＝まりもちゃん私室＝＝

コンコン

「は～い、どうぞ～」

［失礼します～］

「あら、１１号ちゃん、どうしたの？」

［まりもちゃん、マスターの事好きなんだよね？］

「／／／え、ええ…」

［今日決めないと、マスター持ってかれちゃうよ］

「え？？どうして？」

［実は、マスター、プロポーズされてて、揺れ動いてるんだよ］

「ちょ…誰によ？」

［殿下］

「殿下～？」

［うん］

「……勝てないわねぇ」

［いやマスター責任感あるから、やっちゃえば勝てるって］

「やっちゃえば……か……え？なに？あなた達応援してくれるの？」

［うん！！］

熟考するまりもちゃん……まつ１１号…

「わかったわ…案内して」

［よっしゃぁ～じゃあ案内するね～］

案内する１１号に続く、覚悟を決めた表情のまりもちゃん…

カオル君の部屋に入り

［ごゆっくりぃぃ］

［どう？１１号案内した？］

［うん。眉薬は？］

［ばっちし！！］

［仕上げに…］

扉にセキュリティロック表示に変わる。
これで保安室からの遠隔操作のみになる。

［赤ちゃんがぁ］

夜はふける…

翌日２００１年８月２５日

（ん～～～むにゅ？）
カオルは、かなり気持ちよく睡眠状態から覚醒し始め…

（むにゅむにゅむにゅ）
夢心地ながら、右手の感触がいい……

カオルは目を覚ますと…
目の前に、まりもちゃんの寝顔が…

「！！！！」

ビックリして飛び起きるとシーツもはいでしまい…

まりもちゃんの素肌が眩しい…

そう裸だった…

カオルが下に目をうつすと…そそりたつ＜バキュン＞…

（……裸？？？……やっちゃったの？！？！あ、＜バキュン＞！！）

カオルはゴミ箱を急いであさると…

（ない……って事は？）

1…やってない

2…＜ばきゅん＞

3…＜ばきゅん＞で赤ちゃん…

（でも…2、3なら……責任とるべき…か…）

「クシュン」

くしゃみとともにまりもちゃんが目をさまし…ごしごしと目をこすって…

「あ、おはようございます…カオルさん」

「あ、おは…よう…まりもさん…」

「ふふ、まりもって呼んで下さい…昨日のように…」

「えっと…その…」

「昨日は気持ちよかったです」

「えっと＜バキュン＞…で？」

「ええ、いっぱいいただいちゃいました」と、まりもちゃんお腹をさする。

カオルは理解し…

「すんません責任とります！！」

「ふふ……とってね」

「はい！！……ただ…」

「ただ？」

「イッシー…石橋とも関係が…」

［マスター、それ大丈夫になるよ～］

「キャあ」

「う……11号」

［あ、それ隠してね～］

「お…う」

カオル、タオルで下半身をくるむ。

「うんで？」

［重婚の時限立法の話聞いたよね？］

「ああ…」

［成立する見込みだから、安心して二人、いや三人と関係続けてね、マスター」
というだけいったら、さっさと出ていく１１号

「ふふ…そうなんですね」

「はは…とりあえず着ましょうか」

「シャワーかしてね」

「はい……どうぞ」

シャワーを浴びにはいるまりもちゃん…

（あ～もう…俺は何人と結婚すんだ？？）

そうこう考えてる内に、シャワーからあがってきたまりもちゃん…
衣服を着はじめ、
「じゃあ、また…よろしく…ね」

「はい」

でシャワーを浴びにはいる……

（しっかし…二回とも記憶が無いときって……はぁ…ｏｒｚ）

シャワーを浴びたあと、下着をだしＰＸでご飯を食べたあと…

戦艦ドックに向かう。

シャア大佐とクェスの入ったシェルター、
アムロの入ったシェルター、ギュネイの入ったシェルター、
ミーシャの入ったシェルターをだす。

最初に出てきたのがアムロ・レイだった…
「初めましてアムロさん。異世界へようこそ…是非とも助けていただきたいのですが、よろしいですか？」

「ああ、僕のちからでよかったら貸してあげるよ」

「ありがとうございます」

次に出てきたのがギュネイだった

「初めましてギュネイさん、異世界へようこそ。異世界軍へ加入し

てもらいたいのですが、よろしいですか？」

「俺様が力をかすから、大船にのったつもりでな……
ガンダムなんか目じゃないさ！！」

「じゃあ、この者が宿舎に案内します。準備できたら、特殊任務がありますので、ハンガーデスクへお願いします」

「ああ、わかった」

（あと二組かぁ……）

コンコン「シャア大佐～クェス～」

無言…

「どうした？カオル君」

「反応なしなんすよ…」

「このシェルターは？」

「と、シャア大佐とクェスが入ってます」

「シャアとクェスが!?!?君、シャアは間違いをおかしてるとおもわなかったのか??」

「おかすように、仕組みました♪」
ちなみにシャアが発情ワインのむようにおいてたんだけど……

「しかし、クェスか…彼女も死んでたんだな……
過去に死んだ人物も既に加入済みなのか?」

「アムロさんが関わってる範囲なら、スレッガー中尉、レビル将軍などですね」

「スレッガーさんが!?!?…レビル将軍までもか……
10年以上前だと……」

「あ、つい最近なので、反対にアムロさんが年上のはずですよ」

「カオル君……つくづく君は異常だな」

「まぁよくいわれます……にしても、こう室内から反応ないと…どうしましょう?」

「シャアは、シスコン、マザコン、ロリコンだから、突入すべきと進言するが…」

「……すごい言われようですね。じゃあ…３０秒後に突入しますよ～」

３０秒後…

部屋にはいると

シャアが裸で床に転がっていた…

つんつんピクッ
（生きてるな）

クェスは…っと…
ベットで、すやすやしてたので、
「１１号」

とわたされたハリセンで…
パカーン

と叩くと…

「いったぁぁ～い」

とクェスがおきてきた。

「クェスさん、隠して下さいね。…準備できたら表に来て下さい」

で床に転がってるシャア大佐をふんで…

「ぐぇ！！」

とりあえず表にでる。

待っていたアムロさんに…

「間違いおきてますね～」

「あのロリコンめ……」

（ん…あとはミーシャか…）

ミーシャが表に出てきたので、

加入の意思をとい、特殊任務をとの処置になる。

改めて、クェスが腕にだきついてシャアが出てきた。

「アムロ！！何故貴様が？」

「アムロ？」

「クェスパラヤさん、シャア・アズナブルさん、加入の意思問いますがよろしいですか？力を貸して貰えます？」

「むう……わかった」
「大佐が加入するならついて行くよ♪」

「よろしくお願いいたします」

「シャア、中でどうなってたんだ？」

「……」「アムロには関係ないでしょ」

「貴様、散々能書きたれてたよな？」

「むう」「能書き？」

「いや……それは…」

「それなのにクェスさんと何でだ？」

「しって」「あたしが大佐襲ったの！！」

「クェスさん?!?!」「クェス!おま」

「大佐ったら逃げてばかりだったから、あたしからよ、
なら問題ないでしょ?」

「しかしだな…」

「いーの、大佐はわたしの物!!
近寄ってきたら蹴り飛ばしてやるんだから」「物…」

「……わかった…責任もって娶れよ」

「な!?」「娶れ……結婚!?!?…ねぇ大佐いつ結婚するの~?
赤ちゃん作りましょ」

「で…カオル君、次は?」

「シャアさん、クェスさん、アムロさんには、
それぞれ別動隊か、単独で…と思ったんですが…クェスさんはシャアさんの下に、ついてもらった方がよさそうですね」

「やったぁ♪」「だろうな」「僕もそう思う」

「アムロさんは、シャアさんと同格に大佐として、
クェスさんは…大尉として…ですね」

「ああ」「うん♪」

「で専用機案なんですが…」

「専用機?? わしも混ぜて貰おうか!」
ドズルさんがきた。

「な!!ドズル?」「え?僕が…」「ドズルって…ええっ?」

「あ~ソロモン戦から引き抜いてきました…シャアさん過去は忘れて下さい…」

「ガハハハハそうだぞシャア」

「……おい、後で話が…」
とカオルにささやくシャア…

「はい。……で専用機なんですが…」

ズラーッと取得情報を見せている。

「ほう…」「なっニューガンまで」「あ～ザクがある」「ワシはビグザムかなぁ」

「ビグザム？…すんません…制約があるので…勘弁を」

「制約」＊3「ビグザムじゃ」

「ビーム兵器がＢＥＴＡの親玉にしられると、対抗手段として発展を促しかねないので…
まぁそれと同様に各エネルギーシールド系統もですね」

「ふむ」「あたしαかな？」「ビグザムｏｒｚ」

「つまり、カオル君、ファンネルとかも禁止、ビームサーベルとかもか？」

「そうですね…あくまでも実弾兵器による、火力でと思って下さい。
…ファンネルもその条件なら…と…

解禁があ号攻略戦から…ですね」

「ね、ねぇ大佐これはぁ？」

「ん？？…カオル君、なんだね？小さいのは…」

「ん？エステバリスですか……これは操縦に条件いるので無理ですね…そいつの技術を使って、」
魔ドムをだす…

「これは強化してますが…」

「ほう…」「あたしこれかなぁ…きんきら♪」「ドムにてるな…いじったのか…」「わははは我が軍の技術は宇宙一」

「先に共通武装で、ビームサーベルの変わりに高周波ブレード、あとザクマシンガンを使ってます」

「で特殊な条件が…」
アーバレストをクリック。

「この注意事項のように表示されますので」

Λドライバ…薬剤による強化、

もしくは波形マッチング＝専用化の上、訓練が必要。
訓練時間目安７００時間

Λドライバをクリック…力場を形成、火力増強、シールド、等に使える。

「で、利用可能技術が…」

一覧がでる。

「こんな感じですね……標準魔ドムに使ってるのが…」

標準仕様がでる。

「なので…まぁ選んでいて下さい」

「ところでカオル君、ガンダリウムとか何処で製造するんだい？」

［ぼくたちぃぃぃ」

「可愛い♪大佐ほしいな」

「かれらコバッタたちと、ナデシコ技術の詰まったプラントで製造しますので、
その点は気にせずに…っすね」

「そうか……なら」「アムロ、貴様の機体ニューに」「シャア、聞いてなかったのか？殆ど使えなくなるぞ、サザビーだって」「ああ…」「ワシはビグ」「「しつこい」」

「あ、ギュネイ？」

「クェス！！？……大佐まで…」

「へへーん、ナナイがいないからあたしあげちゃった」

「な！！大佐」

「ああ…すまんな」

「大佐！！」
ポンとカオル君肩たたき…

「あきらめが肝心だよ…ギュネイ…
もっと素晴らしい事がまってるからさ…」

「……素晴らしい？」

「うん特殊任務さ…ついて来て…あ、後で聴きにきます。１１号アドバイス頼むよ」

［了解］「ああ」

「カオルさん」
ミーシャがきた。

「ミーシャさんも…っすね…じゃあいきましょう」

＝＝ヒルダさん執務室＝＝

「失礼します～」

「あら、いらっしゃい」
舌なめずりするヒルダさん。

「で特殊任務だけどＣ－０１部隊に配置のうえ、隊長であるビダン

さんに協力する事…いい？」

「は！！」「了解しました！」

「じゃあ…あとよろしくお願いします」

「ええ…さて…まずは身体検査ね…全部……」

（これであと１６人か？そういえば、
バーニィとスレッガーみてないなぁ…医務室か？）

＝＝医務室＝＝

医療カプセルには…想像とおり、二人がおさまっている…

「…この二人の状況は？」

「あ、はい……その…ようはあれで／／／」

「ああ、それはいいよ…どういったサイクルで？」

「二日でなんとか出たら、すぐに翌日朝イン…ですね…

正直、このカプセルがなかったら、死んでもおかしく無いです」

（ふむ……完全回復には3日入らなきゃいけないのか…
となると今のＣ－０１でギリギリか…）

ヒルダさん容赦ないね…

「ん…わかった。ありがとう」

ハンガー戻ると……
まだ決めかねてるみたいで…

「シャアさん～？」

「ああ、……あれ明日にしてくれ」

「あ、了解～」

「ここはこうか？」

「アムロ余計な事すんな！！」

「いいじゃんかよ」

……

カオル報告

いけにえ部隊に2名加入しました。

第８０話　ニューガンダムの帰還処理　投稿日２０１１０２２２（後書き）

作者「ふ～これなら大丈夫か…」

？？？「大丈夫じゃ無いわよぅぅ！！」
ドカッバキッぶっ倒して電気アンマ

「チョグボォいで…ギャアアア」

イッシー「あたしのがんばりはどうなるのよぅぅ」
ビビビ…離れて脇腹に強烈なトゥーキック

作者「……」死亡中の様だ

イッシー「このくそ作者！！」
顔面を踏みつけ……骨が砕け…

１１号［まぁまぁ…落ち着いて］

イッシー「あん？！？！…だいたいあんた達もねぇ」

１１号［けしかけなきゃ殿下にとられたよ？］

イッシー「？！？！殿下？！何それ？！」

１１号［ほらこの話……］

イッシー「……うそ…」

１１号［だから今度はイッシーの番だからね…頑張って］

イッシー「うん…」

１１号［さて、次回…作者がグロい状態になってるので復活してからになりますが、
時すすむ為には、整理が大切だお楽しみにぃ］

第８１話　状況整理　投稿日２０１１０２２３

２００１年８月２６日

（そういえば今ってどうなってるんだっけ？）

と思い始めて整理する事にした…
ようは現時点での設定資料……
っうわけだ…
今更かよ…は勘弁して下さい。

「１１号…今日はデスクワークだ…以外は明日ね」

［はーい♪］

（まずは…戦力情報から…か）

作注　多分見落とし無いとは思いますが、８０話以前の話についての見落としやらの場合、
追記しておいた方がよい場合は、随時変更あると思って下さい。

人員情報
●Ｂ－０１…女性部隊
隊長ミーリテシィア中尉以下　３１名…５５時点
●Ｃ－０１…いけにえ部隊

バーニィ専用機有、スレッガー、ギュネイ、その他１
●ジャール大隊
ラトロワ以下
●歩兵部隊
ガンパレ組から
桜井小隊２７名
●ビックネーム
アムロ、シャア、クェス、ドズル、ティアンム、レビル
航空兵６

●学兵
１７２名

レビル１６ティアンム６

◎後方支援
看護兵６
整備兵９
ＭＰ３
情報オペレーター５
コロニー公社８
コック３
開発室５
経理２

◎直接戦力
●地上

ベースジャバー改　７００　詳細５７
魔フライングアーマー５０　詳細５７
魔ドムＢ－０１分
魔グフ
魔グフ〔ＭＰ〕
陸戦強襲型ガンタンク　８６４
ザメル　８０
烈火改　ガンパレ歩兵組分
ビックトレーミサイル仕様　詳細５２，５３話
ハーベスト改　詳細５２トゥアハー・デ・ダナン　詳細６７
ハイゴック改　詳細６７

●宇宙
サラミス
サラミス改　２１隻
ムサイ
サラミス後期型
マゼラン
セイバーフィッシュ
ザク改
ネモ　２機

補充中ネモ３６機
セイバーフィッシュ１０８機

◎後方支援

多目的作業挺ＤＦ付き操縦席なし　７機

作業用ジム重力波アンテナ仕様１５機

作業用反重力多目的トラック２０両
テンプテーション　７６０隻
メデューシン改　２隻　詳細４９話　５７
魔ミデア２　詳細５７
●チューリップ
予備１
木星行中
アステロイドベルト
Ｌ３，Ｌ４，Ｌ５
◎施設系
●地上
マスドライバー５基
追加滑走路２本
新空港施設２
同滑走路２
港湾施設
●地下
戦艦ドック３層
資材エリア２層
格納エリア１層
ジオフロント１層
●コロニー

Ｌ５
密閉型農業コロニー
開放型農業コロニー
開放型自立コロニー４密閉型工業コロニー
建設中開放型自立コロニー　７３話
その他入れ物コロニー　７３話
補給ドック
◎資源入手先
鋼材その他系　アステロイド　在庫ほぼ無限
ヘリウム３　無し　在庫　ＭＳ１０１９機　半年連続稼動分〔生産時入れる量〕
◎提供済
撃震帝国仕様　詳細６２話
◎開発済技術情報
次に取得済技術情報…
機体別詳細に関しては後記
技術
１８話
プラント
無人兵器製造技術
テラフォーミング技術
重力波エネルギーアンテナ

グラビティブラスト
相転位エンジン

第３２話
ガンパレ世界の武器

第３８話
マスドライバー関連技術

第４０話
グラナダ技術

第４４話
ターミネーター生産技術

第５１話
鋼鉄の咆哮２ｐの技術

第７０話から７１話
レイバーアタッチメント系

第７７話
９９式

機種一覧
１５話取得
ＭＳ－０５
ＭＳ－０６Ｃ

ＭＳ－０６Ｆ
ＭＳ－０６Ｊ
ＭＳ－０６ＦＺ
ＲＧＭ－７９ジム
ザメル
ハイゴック
ホバートラック
量産型ガンタンク
ジムトレーナー
６１式戦車
マゼラアタック
ザクトレーナー
アッガイ
陸戦型ジム
陸戦用ジム
ジム・コマンド（宇宙・地上）ビックトレー
ギャロップ　カーゴ付き
サラミス、
サラミス後期生産型
マゼラン
ムサイ
ユーコン
マットアングラー
ザンジバル
ＨＬＶ
ガンキャノン量産型
ザク・デザートタイプ
ザクフリッパー
グフ

ドム
リック・ドム
ゴック
ズゴック
陸戦強襲型ガンタンク
グラブロ
セイバーフィッシュ

１８話
エステバリス
陸戦フレーム
空戦フレーム
０Ｇフレーム
重機動フレーム

２３話
アレキサンドリア
ハイザック
ガルバディベータ
アーガマ
リックディアス
サラミス改ｚ
ジム２
爆弾カプセル

第２４話
ジムカスタム
ジムキャノン２
百式、
フライングアーマー

グフ飛行試験型
ネモ
マラサイ
カンタンク2
ガンキャノン重装型
ジムスナイパーカスタム
作業用ジム
ザクタンク
アッグガイ
シャトル
アウドムラ

第25話
ベースジャバー
ドダイ改
アッシマー

第32話
アーリィFOX
スノーFOX
FOXキッド
テンダーFOX
可憐
武尊
栄光号（通常型）
可動式ウォードレス着用車両

第38話
テンプテーション級シャトル、
同貨物型

第３９話
ドゴスギア
ガブスレイ
ムサイ改
チベ改

第４０話
Ｚガンダム
メタス
Ｇディフェンサー
メッサーラ

第４３話
ハンターキラーエリアル
偵察用エアロスタット

第４４話
Ｔ－８５０－１０１
Ｔ－８５０－１１０
Ｔ－１０００
Ｔ－１１００－１０１　１０２
ハンターキラー四足
モトターミネーター
ハーヴェスト
トランスポート

第４６話
メデューシン

第５１話
ドック艦

第５５話
ミデア改修型
ザクスナイパー

第５９話
レールガン（砲台タイプなのでこっち）

第６５話
サベージ
アーバレスト
Ｍ９
トゥアハー・デ・ダナン

第６６話
量産型ボン太君

第６８話
ジオング
ザンジバル
ゲルググ
ドロス級
ビグラング
オッゴ
パブリク

第７０話から７１話

レイバー
第７３話
ビグザム
第７４話
ケンプファー
ＦＡアレックス
第７８話
ギラドーガ
ジェガン
クラップ級
ラーカイラム級
レウルーラ級
ムサカ級
リ・ガズィ
ニューガンダム
第７９話
ヤクト・ドーガ
α・アジール

第８１話　状況整理　投稿日２０１１０２２３（後書き）

カオル「本当に設定資料で終わらせたね…しかも手抜き、詳細は…とかさ」

作者「ふはは…は後悔はしてない……してます…はい…」

カオル「ねぇどうなん？」

作者「うっせぇ！！前と見比べて大変なんだよ！！」

カオル「おおぅ逆ギレ…で世間では？」

作者「明日の話に多少前後して埋め込む…で明日は、二日進める予定。
今回のは設定資料だ！！」

カオル「で？作注のは手抜きと言えない？」

作者「いえるなぁ……まぁ……次の話にいきましょう」

カオル「逃げたな」

第８２話　謀略始動　投稿日２０１１０２２４

２００１年８月２６日での
他の人の出来事は…

まだ専用機があーでもない、こーでもない。
で決まってない…って事だった。

シャアさんからは、すまんな明日…って事らしい。

２００１年８月２７日未明

＝＝アメリカ情報局＝＝

「例の戦術機はどうだ？」

「は！！研究者からの報告によると、素材、材質、技術共々、
現在の工場設備では開発生産不能の結果がきてます」

「むぅ……」

「唯一利用可能性があるのがＯＳ…という事でしょうか…
研究者からの話では生産施設に秘密があるとか…」

「やはり横浜を押さえなければか……」

「そうといえます」

「少々早いが計画進行させよ」

「は！！」

２００１年８月２７日

＝＝Ｂ５５ハンガー＝＝

昨日仕事放棄してたので、今日はいくつかの懸案を処理する事になる。

まずは、道路整備許可がおりたので……

「１１号、道路整備レイバー用意よろしくぅ」

「了解…そのまま？」

「ん？……バッテリー駆動に変えといて」

「了解～……ただ途中充電スタンドとかもつくってほしいな…」

「そっか……発電所作っちゃう？」

［リニアいれるなら必要だね～］

「ふむ……地上で作れるとしたら、ＭＳジュネレーターの拡大版？」

［が正直燃費がいいかも…必要出力は１０Ｇｗかな…］

「それつくると、どのくらい燃料くう？」

［えっとね…高性能ジュネレーター技術あるから４０００機分］

「たりね～よ」

［もちろん、いきなり１０Ｇｗ必要でないし、９月にはつく予定だから作っておくべきだよ］

「ふむ…わかった…じゃあつくっといてくれ…で規模は？」

［１００ｍ１００ｍ４０ｍあれば、足りるよ…あと制御室用地ね］

「資材エリアにつくる？」

［了解♪］

とりあえず大規模発電所、
及び道路建設用レイバー改の作成がきまった…

「カオル君いいかね？」

「あ、シャアさん…なんです？」

「ザビ家の事なんだが…」

「はい…」

「君はギレン、キシリア、ガルマ等も入れるつもりかね？」

「俺としたらガルマだけですね」

「あいつをか……」

「シャアさんは、どう思ってます？１０年近くたってから…」

「ザビ家に対する復讐で、１番真っ先に手をかけたが……
わたしとしては過去のすんだ事だ…
癌の二人がこないなら、この世界に連れてきても良いぞ」

「ありがとうございます」

「あ、ララァは生き返る事できないかね？」

「すんません、無理です。特にあなたや、別の方も影響受けるので……」

「…そうか……わかった」

「でも、ララァさん連れてきたら、クェスさんどうするんすか？」
ビグッと反応して…

「ク、クェスはまぁなんだその…一方的に襲われてだなぁ…」

「ふ～ん大佐そんな事いうんだ」

「ク、クェス」

「あ～あ、あんなに大佐から求めてきたのになぁ昨日も…」

「クェス！！」
うんロリコン決定ですな…

「とりあえず夫婦部屋作りますので…あとはそちらで…」

「君！！」「やったぁ～大佐、毎日できるよ♪」

「決定事項です♪」

「ありがとう♪カオル」
ため息つく大佐…

「あ、ところで、シャアさん、クェス、専用機の話、決まったんで

す？」

「まぁ私はな…」

「まだ～」

「どんなのになりました？」

「基本百式だが、強化案で、サイコフレーム、Λドライバをいれてもらおうかと…
あと、ローラーダッシュも面白そうだな。」

「ほうほう…Λドライバ使いこなせます？」

「使ってみなきゃわからんだろ？わたしにとって未知の力なんだし」

「ですね…わかりました。それで注文してきます。クェスは？」

「やっぱりαから離れられない～」

「う～ん……じゃあシャアさんとおんなじ機体にする？
…で赤みかかったゴールドにして…」

「あっ、それいいかも♪」

「ふむ、クェスそれにするか？」

「うん♪大佐と夫婦の機体だぁ～」

「じゃあ…お二人の愛の巣つくっておきますので」

所帯者用の寮をつくりにいきました。

一棟１２０部屋分
あとの二棟は独身寮…って事で

作りおわると、

「バーニィ」

がデスクにきてた。

「カオル、久しぶりに外でれたよ」

「あははは……」

「新しい人がはいったから何とか回るよ…けど、ギュネイ大丈夫なんかな?とおもう」

「ギュネイが?」

「ああ、一日で精根尽き果てて、すぐに医療カプセル行き。完全復活まちらしいね」

「……ふ~ん」

「おれらは、まぁ回復でカプセルに入る事になるが、半日強入ってればにおさまったからなぁ」

「ビダンさん…そんなに凄いんだ…」

「ああ、あの人本当に人間か?と思う位だよ…おまけにさ…もう…あの人なしでは生きていけないよ…本当にさ」

ヒルダさん、クレオパトラ並にレベルアップしました。

「まぁ…あとはギュネイのペア探してもらえれば…かな？
ただし、戦闘参加はまだ厳しいものがあるね」

「か…わかったよバーニィ……今日は？」

「俺の番さ…さてお相手してくるよ」

「頑張ってね～」
と、虚数空間からハンカチをだして見送りました。

２００１年８月２８日

［マスター…情報室に…］

「どっかで侵行気配か？」

［いや…もっと厄介なんだけど……］

＝＝情報室＝＝

「で？」

［帝国内でクーデターの気配あり…］

「はぁ？……何故に…」

［青年将校達による決起だね…で、ＣＩＡによる後押し］

「はぁ…何やってんだか…で参加しそうなのは？」

［帝都守備連隊や、富士教導隊等…］

「……人死にでるか？」

［間違いなくでるね…］

「で、いつおこる？」

［検討した結果、アメリカ第７艦隊が、日本近海にきてからが１番可能性が高いよ］

「具体的には？」

［約１０日後］

「９月６日頃か……
防げそうには？」

［もうないと思う…第一、外への工作できないから…
あとさ…今この時点で、逮捕等がおこると間違いなく…］

「先走って、未統率のクーデターがおこるか…」

［しかも、全員同時に逮捕等できればいいけど、統率力をかいたら
…］

「下手したら民間人にか…」

［だね…だから、クーデター起きる前提で、対策とった方が被害は
少ないと思うよ］

「そうだな…」

［そういった事だから未然には…あきらめてね］

「たく…対人戦術考えなきゃいけないのか……
なるべくなら捕縛考えたいな…」

［捕縛でいくの？］

「ああ…そりゃそうだろ…後で利用価値もある。
となると…歩兵用、車両用、戦術機用、あと航空機用か…
航空機は飛び立てさせないしか…無力化できないなぁ…」

［歩兵用は？］

「トリモチとか、放水銃だろうね」

［車両は？］

「キャタピラやタイヤさえなんとかすりゃあ良いだろ。
瞬間接着剤なんかぶち込めば」

［砲が残ってるよ］

「なんか詰めばいいんじゃ？」

［戦術機は？］

「スタンスティック位しかないだろうな…ブレードだと爆発の恐れあるし…
トリモチや接着剤じゃ動き鈍らせるしかないだろうな…」

［そこまで接近してスタンスティック打ち込める？］

「ん～…ＭＹのＥＣＳかなぁ…」

［うん…それならいいかも…ＭＳでもあそこまで静粛性ないし］

「Ｍ９を生産するか…装鋼はヒルダ合金に変えた方がいいんだよな？」

［うん］

「あとスタンスティックの先端に高周波ブレードつけて、

装甲の上からでも、ぶち込めるようにしよう」

［了解～機数は？］

「生産制限的なのある？」

［燃料はペレットだからないよ…燃料補給が面倒だけど］

「じゃあ…潜入工作分か…１００？…あと搭乗員の適性見繕っていて」

［イエス・マイ・ロード］

（ヤドカリは射撃タイプなので、ほぼ有人になりそうだな…隠密行動か……Ｔ－１０００もっと仕入れておくべきだったな……）

「あと、大至急開発部、ビダンさん等に無力化の武器、さっきの要望でよろしく…でさ」

［ん？］

「平行世界でパラドックスがどうのって解決つかないかな？」

［……正直ＤＮＡで検査すればかな？］

「それか……」

［案としたら…だけどね…］

「膨大だね」

［そのとおり］

えっへんと胸そらす１１号。

「でもなんとかしてくれるんだろ？」

［……軍属に関しては調査可能だね…民間はこの世界では正直お手上げ…

コロニーに移動した人は検査しちゃってるけどさ］

「まぁ検索マッチできる事はうれしいよ…やってくれる？」

［イエス・マイ・ロード］

……

カオル報告

クーデター勃発確定みたいです。

Ｍ９生産中１００機

下手したら総員ヤドカリ君…

発電所施設建築中

道路作業レイバーセット作成１機

第８２話　謀略始動　投稿日２０１１０２２４（後書き）

作者「いよいよ対人戦か…」

ナギ少尉「ねぇ、カオルのとこの諜報技術なら防げなかったの？」

作者「傍受はできるけど、妨害はできないね。
ましてや人と人との話合いとかさ」

ナギ少尉「なる…」

作者「それに血のつながりとかで、人間スパイになるだろ？副長みたくさ…」

ナギ少尉「……そうね……ねえ？宇宙世紀の核融合炉でなく、パラジウムリアクターにかえないの？」

作者「燃料のペレットが貴重、また投入作業が炉を露出してからだから…完全に面倒なんだよね」

ナギ少尉「どうせ精製するんでしょ？」

作者「だろうね…けど連続稼動できるのと、
いちいち炉を開放交換するんじゃ…どっちとる？」

ナギ少尉「……連続稼動ね」

作者「ということです」

第８３話　フルメタルパニック編３　ミスリル崩壊　２０１１０２２５　アスト

２００１年８月２９日

［マスター、端末かして］

「ああ、集めたん？」

［うん］

端末渡して…インストール中…

［できた…これで相手の人事データーあればチェックできるよ］

「インターネット回線あればそれでも？」

［うん！！］

「わかった…ありがとうな…じゃあいってくるよ～」

「いってらっしゃい～」

カオルは再び飛び立つ…フルメタルパニックの世界へ…

＝＝フルメタル・パニックの世界＝＝

１９９９年１月３０日

再びこの世界へ降り立つ…

まぁようはＭ９要員の確保の為に…

はっきりいってＭ９はピーキィ過ぎる。
というかＡＳの操縦シートのせいだが…

実際のところ、Ｇキャンセラーを組み込めばの意見もあると思うが…
正直、スペース的余裕ありません。

ＭＳに組み込めば?は…

一般生活している都市部等に、ＭＳサイズが見えなくて潜入しても
壊さないで動けますか?
１８ｍサイズ、重さ５０ｔ近いのが…

なので隠密行動とる為には、
Ｍ９を利用するしかない…との結論であった…

の愚痴はおいといて…

（さて……まずは検索するか…）

ミスリルでは、４つの戦隊及び基地に別れている

西大西洋戦隊、
地中海戦隊、
南太平洋戦隊、
インド洋戦隊、

それの統括に作戦部、
情報部、
研究部、
人事部等があるが…

そう、もうそろそろミスリルが壊滅する＝大量的雇用が期待できるのだった。

しかもＭ９を扱うスペシャリスト達が…

端末をだし、手短なインターネットカフェを検索する。

当該あり…

インターネットカフェに入店する。

「いらっしゃいませ～」

「初めてなんですが…」

「会員になります？ビジター利用にします？」

「あ、じゃあビジターで…」

「ではセット料金いただきます」

料金を支払い入店する。

ブースに入ると、端末をだし…世界へと接続する。

単語登録　ミスリル　南大西洋戦隊　場所

経過をみると作戦本部に侵入したようだ…

確定…

単語登録　ミスリル　西太平洋戦隊　場所

確定…

単語登録　ミスリル　インド洋戦隊

確定

単語登録　ミスリル　地中海戦隊

確定

（うっし…あとは人員パーソナルデーターかな）

昨日作っておいたＤＮＡ情報での検索を引き続きかけている。

（あちゃ…当該ありか…無作為はできんって事か…）

地中海、インド洋戦隊所属に現軍属がヒットしてしまった。

が南大西洋、西太平洋戦隊にはヒットは現兵士には無し…

の検索結果がでる。

（となると……まずは主人公達のメリダ島要員からか？）

しばらく…熟考…

（うっし……と…）

時間をみると検索で長い時間を使ってしまったようだ…

（ん…かなめちゃんちで接触のある時間だな…）

手短なホテルに入り、チェックインする。

（明日は忙しい…な…）

二日目

１９９９年１月３１日…

カオルは朝６：３０にチェックアウトすると、

「”幻影”シャムシェル」

一路飛び立つ

場所は調布市にある植物公園…上空…

（あれかな？）

駐車場内にぽつんと一台の車がとまっている…

時刻は８：００……

北東のしげみに何名か……

ビシビシビシ

（始まった！！）

防弾ガラスに銃弾が命中する音が響く…

サイレンサーで発砲音は押さえられても、ガラスに命中した音は防げない。

ギャギャギャギャ

撃たれた車が白煙をあげながら発進している。

ブロロロロ

機関銃の音もし始めた…

車は金網へと向かい…

黒い大男が車の正面に3人でた。

（アストラルだな…）

車はそのまま突進…

アストラル1体は跳ね飛ばされるが、2体が車に取り付き、

ガッシャーンギューーー

大きな音をたて、フェンスを突き破って市道にでる。

〝アストラルって何だ?は…

人間サイズの弱いターミネーター＝

人間サイズのロボットと理解してもらえれば良いでしょう。

勿論この世界での第三世代ＡＳの技術を加えての対人戦闘用ロボットになる。

ただし、頭が弱い…また人間サイズの為、

間接にでも拳銃を撃ち込めば、そこのところは動作不良をおこす。

ボン太君程強くない、ターミネーターと対戦なら負ける、

が対人なら特殊部隊員が束で何とか……になる。〟

車は左側面を民家のブロックに押し付け、アストラルを潰し落とそうとするが、

なかなか離れず…

もう一度勢いつけてあたると、

助手席側にいたアストラルは弾かれて、アスファルトに叩きつけられた。

車はボンネットに乗せたアストラルを振り落とそうとするが、

バーンギューーババババ
銃声が響き、急ブレーキをかけ、また銃声が響き、

車が左右に振られて、片腕を失ったアストラルはバランスを崩し振り落とされた。

アストラルを落とした車は加速するが、新たな追跡車両がくわわり…

「キャーな、なんなのよ!!」
赤信号無視して、引かれそうになり、それに怒ったＯＬ…
の前を追跡車が通りすぎ、泣きわめき始めた。

「おい!!警察を呼べ!!銃撃戦だ!!抗争だぞ!」

「もしもし、警察ですか？」

「うぉぉースゲーカースタントだ」

車を上空からそのまま追跡する…

緩やかな坂の頂点で車は宙にうき、
ガタン
着地する。その後ろの追跡車も頂点で、
ブォンガタン
やはり宙にうき着地し、追跡。

人々は見かけると様々な反応をしている。
パトカーもいないのに街中での、カーアクションが発生しているのだ。
平和な日本で……

そして、セダンがやっと横に近づき、
体当たりしてとめようとするが、車からマズルフラッシュが光り、
セダン側からも打ち返すが、
ギャギャギューギャ
車は急ブレーキ、慌てたセダンも急ブレーキかけ、

車から再びマズルフラッシュ、銃撃受けたセダンはよろめくき、

ドンキュキュ
車の後部に突っ込み、
車は大きくバランスを崩しなんとか立て直そうとするが、

ガッ!!　ガガガガ
対向のトラックに突っ込み、
大きく跳ね飛ばされ…
車体が天地逆にたたき付けられやっととまる。

「お、おい、いまのすごかったけど…」
「もしもし、救急お願いできます?」
「ねーまーくん今ねぇ」
野次馬が遠巻きに集まって来はじめた。

車体からはい出てきた高校生、相良宗介が心配して寄ってきた男を押しのけ、

銃を追跡車から出てきたやつに3連射命中させる。

「キャー！！」「こ、ころしだぁ」「ひっけ、け、」

事故現場にたまたま居合わせ野次馬となっていた人達が、
一斉に逃げはじめた。

相良は、車内にいた女性、ちどりを引き出すと、
路地内に逃げ込む。

（ここで見失ったらな…）

二人は路地、市道を走り抜け、出会ったアストラルに手榴弾をプレゼントするが、
「あ……あああーーー！　わああーー！！」
巻き込まれた中学生が泣き叫んでいる。
たまたま居合わせた…通学途中の一般市民だ。
ピーポピーポ
遠くで救急車の音が聞こえる。

二人は自然公園に入り込むと…

（もうそろそろ…おっ）
ローター音が聞こえ始めた。

（ターゲット……まだ見えないか…）

二人と追跡者の戦いは公園内へと続き……
先程の手榴弾喰らったアストラルに向け、宗介が射撃、

ガガガ
アストラルと3人の追跡者がその地点にむけ射撃、その間に2人が前進。
アストラルはぎこちない動きですすんでいる。

追跡者側は見失ったのだろうか?外側方向へと散開する。

カオルも宗介達が、木々に隠れた為見失ってたが……

そして広場では黄色発煙筒が煙を上げ、
また銃撃戦が側ではじまる。

「あ〝あ〝あ〝ーば」

腹を打たれた敵にようしゃなくとどめをさす。

プシュプシュ　プシュ
草木を貫く音が聞こえる…すると…

青白い発光とともに、ＭＨ－６７がみえた。

早速重たげな旋回中に取り付くと…

機内には６名いた。

「射撃援護！！エンジェル、ソースケまもるよ！」

「ああ！」

扉からつきでたミニガンが唸りをあげる。
分速６０００発ものライフル弾をうけ、
アストラルはズタズタになり、
人間の歩兵たちも凄まじい弾膜をあび血煙とかし、
装備品ごとばらばらになった肉片が舞い降りる。

「北側へ周りこめ！後部から収容する」

機体は発煙筒の位置目掛けて降下し…

「後部ハッチあけるよ！！」

「了解！」後部ハッチが開放されるとともに、
銃座補佐から離れ、
ハッチについたガンナーが銃撃準備がとる。

「ソースケ、エンジェル発見！こっちに向かってる」

しかし…
「ミサイル！！」
武装のついてない機首側、
パイロットから叫びに近い声があがる…

「回避！！」
スクランブルポットより、フレアチャフをはきだそうとら、
重い機体が、すこし反応するが…

「うわぁぁぁ！」

その瞬間、全員をシェルター内に引き込み離脱する。

ミサイルくらったヘリは、尻から墜落、ローターはあらぬ方向へ飛び、
木をまっぷたつにする。
そして、ジェット燃料へ引火し、爆発炎上しはじめた。

（さてと……メリダ島急ぐか！！）

「ファイルＸ１－０１の特別指令……」

カオルは、マスコミヘリ、警察ヘリ、パトカー等が急行している、
調布から離れると、音速を越え…メリダ島へと目指す。

……

カオル報告

ミスリル人事リストを取得しました

ＭＨ－６７改取得しました

第８３話　フルメタルパニック編３　ミスリル崩壊　２０１１０２２５　アスト

ナギ少尉「ね～宗介達どうなるの？」

作者「秘密です。禁則事項です」

ナギ少尉「え～いじわるぅ」

作者「まぁ助かるよ…ある事と引き返えにね…」

ナギ少尉「ある事？」

作者「さて次回はメリダ島編…お楽しみにい」

ナギ少尉「あ～逃げた！！」

第８４話　フルメタル編４　メリダ島襲撃　投稿日２０１１０２２６

同二日目、…

１時間程でメリダ島へと急行すると…

（少し遅かったか…）

ベヘモスが上陸し始めてるのがみえた。

（最初ウルズ８なんだよな戦死は…）

巨大なＡＳが重たい身体を前進させ、少しずつ前進させる。身体からナーパム弾や多目的ミサイルを発射させ、
また大口経の大砲を振り回し…

まさにガンポートの名に相応しいだろう。そのベヘモスに絡みにいったＭ６ブッシュネルから、
シュルルル

対戦車ミサイルが打ち出される。

命中するが、傷一つついてない…
ラムダドライバによる防壁が効いているのだ。

すぐさま重たい身体ににあわない速度で、

大口経大砲をＭ６ブッシュネルに向け、大砲をうちはなつ。
また頭部に設置してある機関砲もうちはなつ。
戦艦クラスの口径をくらったＭ６ブッシュネルは…
かわすこと出来ずに、燃料に引火し、爆発する。

一方的…ラムダドライバ搭載機との大きな壁がここにある。

そのベヘモスに絡みにいっているＭ９がみえた。
（Ｍ９とＭ６の組み合わせだから、マオ機か…）

この頃のマオ機は指揮官機として更新されている。

マオ機は大砲をかわすために跳躍し着地行動に入っているので…

速度を同調し、取り付いた。同化…
急激なＧがかかる…着地しようとした体制から木を蹴り飛ばし、
若干軌道をずらしてから着地後、横方向への水平ダッシュ。

着地予定地点へ、ベヘモスの大砲が打ち込まれ、クレーターとなっていた。

「フライデー！！ＥＣＳ作動、ＸＡ－５に移行」

機体が物陰に飛び込みながら、周囲と同化する。
「了解、ＥＣＳ作動。操縦システムをＸＡ－５に接続。”ベヘモス

A”を最優先ターゲットに指定」

（うっしこんなもんか…戦死者救助しなきゃ…）

カオルは離脱し、別の巨体へと向かう。

M９からジャベリンが1体のベヘモスに集中しているのがみえた。

（あれがベヘモスBね）

ジャベリンは音速以上のスピードをあげ、

ベヘモスへと殺到し、頭部へと命中。

白煙と衝撃破が広がる。

その直後に大きくよろめき…しばらく巨体の動きをとめるが…

大口径の大砲を右方向へ向けると、

大砲を放つ。

うった先では、M９が跳躍回避しているのがみえた。

かろうじて回避するも錐揉み状態になっているのが見える。

ラムダドライバは万能だが、意思の力。

集中するとその部分に力が強まり、それ以外が弱くなる…

カオルが見はじめる前に海面で嫌がらせ的攻撃があり、

そっちの方を警戒したため、

受けてしまった攻撃だった。

ベヘモスから無数の対地ミサイルが放たれ、海岸へと殺到する。

Ｍ９達が迎撃、回避しているのがみえた。

大口径大砲はクルツ機をしつこくねらい、その間にも海岸へ向け、ミサイルを射出している。

海の中からＭ９がロケット弾をうちこみながら、突進しているのがみえた。

（ターゲット発見）

ロケット弾は命中するも四散し、

そこにＭ９が突貫し、水中行動ユニットを外し身軽になると、左足に飛びついた。

ナイフを突き立てるとベヘモスの巨体を駆け上がり、

肩に取り付くと、ライフルを構え、うちはなつ。

が、ことごとくラムダドライバの防壁に弾き飛ばされる。

カオルは取り付くと…

「こういうの、柄じゃねえんだよな」

『もういい逃げろ！！』

「大佐に謝っといてくれ。別に本気じゃーー」

瞬間ベヘモスの攻勢的ラムダドライバの力が襲う。カオルは引き込むと、
攻勢的力にのり、離脱する。

スペック機は、腕はちぎれ、足はひしゃげ、胴体が砕け、
すべてがバラバラになりながら落下する。

ベヘモスは、その残骸に向かって、３０ｍｍ機関銃をうちはなっている。
よっぽど頭にきたのだろう…

瞬間…
巨体がふるえ、腕が垂れ下がり、大砲を海面に落とす。
装甲が崩れおち、
４千ｔもある自重に引きずられ、体がいびつな方向へとまがり…
垂直方向へと崩れ落ちた。

先程の解説通り、意識をスペック機の残骸に集中してしまった為に、
頭部での防壁が薄くなり、
ジャベリンで削られてた薄い装甲を尽きぬけ、
管制ユニットをつかぬいたからだ。

（さて…どの機体だ？あれかな？）

カオルは次のターゲット、キャステロ中尉の機体を探し…
とりあえず取り付くと…

「ウルズ５ウルズ１０は帰還しろ、そのダメージでは無理だ」

『し、しかし…』

「命令だ…帰還しろウルズ６行くぞ！！」

『了解！！』『り、了解』『すみません…』

「本部、戦況は？」

『ウルズ１の方は余裕あるようだ、
ウルズ２がまずい状況になっている』

「了解、ウルズ３、ウルズ６が救援に向かう。
ウルズ５ウルズ１０は、機体ダメージがひど過ぎで帰還命令をだした」

「本部了解」

「ウルズ6は狙撃地点確保」

『了解』

「むっ！！」

前方に行動不能になったのか、M9…もがいているマオ機にむかい、
巨大なベヘモスが接近している。

「間に合うか…クルツ！」

『射線確保中！！』

ベヘモスが右足をあげ…テニスコート程ある足から、
海水や泥が滴りおち……ゆっくりプレスするように足を下ろす…
「間に合った！！」
潰されそうになっているマオ機を抱え上げると、
その巨体の足から離脱する。

「生きてるかマオ」

『だめよ、中尉いますぐ』

ガガガガガ
「グッ！！」
何発もの機関銃弾が命中し、マオ機ごともつれこむ。

追い撃ちかけようとしたベヘモスに対し、クルツの砲撃が命中…
頭きたのか、その大砲をクルツにむけると…

ドーン！！
『へっ、またカマしてやったぜうすのろめ……』

クルツの狙撃銃が、大砲の砲身の中にあった弾に命中、
手元で大きな爆発をあげる。

フルパワーマオ機を手近な岩かげにほうり込むと…

「囮になる。機をすて基地に走れ！！」
反転跳躍した。

『無理です、それにー』

「命令だ！少尉」

キャステロ機は被害甚大だが…
「うおぉぉぉ！！」
ベヘモスへと飛び掛かり…

３０ミリ機銃が執拗に狙ってくる。

『おやじ、無理だ！！』

「あと少しだ、あと少し！！」
ベヘモスは、大砲は先程放棄されている。
残りはナーパムやミサイルランチャー、頭部搭載の３０ｍｍ機銃…
だけだが、残りの３０ｍｍ機銃だけみたいだった…

「あとやつの３０ｍｍを使い潰せば、こいつはただのデクの棒になグゥ！！」

『おやじ！！』
足が滑り、滑った箇所へ３０ミリが放たれ、食らって機体が悲鳴をあげる。

「損害報告。当機は、各部に甚大な被害うけ、機動不能になりました。脱出をお勧めします」

「ヘッ……ヤキが回ったか…」

『おやじにげろ！』

クルツの射撃援護が続くが、無視され…その巨体から伸びる手が、キャステロ中尉のＭ９を掴む。

『おやじぃ！！』

ベヘモスのもう片方の手が近づき…包むように…
「クルツすまんな…あとはグッ」

力強く押してきて、コクピットがひしゃげてきたので引き込む。

離脱すると…両手で機体を握り潰して…

手足はもうもげ…

両手をはなすと…プレス状態になった胴体部分が、地面におちた。

遠くではＡＳを積んだ強襲揚陸ヘリ、兵員を乗せた兵員輸送ヘリが見えている。

アムルガムのヘリが、まっすぐに地上出口へと向かってくる。

そこへ、ＰＲＴ隊員達がスティンガーを撃ち込み、追撃せずに地上出口内部へ避難した。

命中被弾したヘリからパラパラ人が落ちてく…

またＡＳも墜落気味だが持ち直したもようだ。

着地したＡＳは、地上出口へと銃を撃ち込む。

ＡＳ支援の間に　突撃兵が、中へと突入するが、

ドーン！

「クレイモア！」

対人地雷により、足どめされた…

アムルガム側はクレイモアを警戒しながら歩みをすすめる…
「うわぁ！！」
狙撃され、その方向へ多数の銃撃がはなたれる。

手信号で前進が指示され、
とにかく突入口は複数あるものの、兵士が安心して入れるのは数すくない…

前進狙撃、銃撃を撃ち込む…クレイモアを喰らうの繰り返しだった。

別の方向では…
ＡＳ出口の鉄扉をＣ４爆弾で、爆破し…ＡＳの力でこじ開け中に突入する。

その瞬間やはりクレイモアで爆発をうけ苦しむ突撃兵…

そして…
戦いは地下区画にいき…

「手榴弾！！」
ドカーン！

「うてぇ！」バラララ

制圧戦の真っ只中にいた。
カオルは加速の2乗かかっている状態で各所を見回っている。（パイロット少なかったなぁ…やっぱGキャンセラーないと辛いか…）

「絶対止めろ！！これ以上進入させんな！！」

「何としてでも突破だ！！制圧しろ！敵司令官を捕縛しろ！！」

の真っ只中になってる。

「グワァ」

右肩を貫かれ…

「衛生兵！！」
後方へ下げられるアムルガル兵…

（捨てて下さいよ……）

「クッ」

撃たれても、動ける限り頑張っているミスリル兵…

そこに　アムルガル兵からミスリル兵に対し、手榴弾が投げこまれ…
満足に動ける状態でないミスリル兵は……
カオルにシェルターに引き込まれ、すぐさま移動。

でっかい爆発が後ろで起きる。

煙がおさまり、室内にアムルガル兵が突入。

「クリア！！」

続けて進入してきた。

「まだいるぞ警戒しながら前へ進め！」

（引き込んじゃったけどね…）

カオルは、別の戦闘起こっている箇所を探しさ迷う。

『基地内に残っている皆さん、残念ながら当基地は現時点でもって放棄します。
所定の処置で退避してください。最優先です、所定の処置で退避してください』

ドーン！！

どっかのトラップに引っ掛かったのだろうか…
大爆発のあと悲鳴が響く。

またドドーン！

この振動はかなりでかい。

「なにぃ？……しょうがない強行突破だ！！」

近くを通ったアムルガル兵の指揮官らしき人が、
無線機に向かって怒鳴り付けてた。

（しかし、中々救助出来そうなのいないなぁ…）

だいたいは射殺であるため、不可…

最後の一人となる場所においても…

「ふっふっ…はやくしやがれ」
パン！

捕虜をとらずに射殺している。

カオルは手榴弾投げ込まれた先において、
かわしきれなさそうなのを回収し、
シェルターに避難させている。

「ここを突破しろ!!司令部はもうすぐだ!」

「へっ来やがったなボンクラどもが!!」

「機関銃だ!!手榴弾!」

「無理だ、近寄れねえ!」

「なろっ!!」

しばらくすると…

「当たった?」

機関銃が止む。

機関銃台座に近寄ると…

「へっ…ざまぁねえな…おらさっさとうてや!!」

パン

「いくぞ！あともう一区画だ！」

「いたぞあっちだ！！」

（そういえば…カリーニンさん…どう合流したんだろうか？）

気になり探すと…

カリーニンさんが、残って足止めしている。

「優先ターゲット確認、ツバイバル！」

「ツィータ」

「射撃やめぃ！！お迎えしろ！！」

射撃音は残ってるのにカリーニンが移動してきた。

カリーニン側は、トリガーをロックして、あらぬ方向へ銃を向けている。

そして死体が5体……

「ここは足止め扱いにしてくれ…
今は現れるとまずいからな」

「はっ！！上からもそう承っています。了解しました…おい、C4もってこい！」

カチャカチャ

「爆破するぞ！！」

ドーンパラパラパラ

通路は瓦礫で塞がれ…

「これでよろしいでしょうか？」

「うむ…ありがとう」

「ハッ！ミスターK…おい！！地上へと案内するぞ！！」

（成る程ね…一応足止めの仕事はしたんか…さてこんなものかな？）

カオルは地上に出ると…
燃え盛るジャングルをバックに、
医療カプセルをだし、怪我している一人一人を引き出し、
「アルミサエル」
何か言われる前に睡眠状態にし、体育館型シェルターに入れる。

（ん…やっぱり逃げれたから少ないな…
別の基地を見に行くか…）

「”世界扉”」

……
カオル報告

特に真新しいのは無し

第８４話　フルメタル編４　メリダ島襲撃　投稿日２０１１０２２６（後書き）

ナギ少尉「成る程…秘密基地襲撃なんですね…」

作者「だね」

ナギ少尉「ここで、また十数名ゲットして…まだどっかに？」

作者「またいくよ～」

ナギ少尉「でも固定基地って…私たちみたいなドック艦なら！！」

作者「発見されるね～」

ナギ少尉「え〝っ？……海底基地！！」

作者「それいいかもな……海底基地あったのどの作品だろ？？…」

ナギ少尉「で作者次回は？」

作者「次回……題名でばれるな…南大西洋戦隊お楽しみに」

第８５話　フルメタル編５　南大西洋戦隊　２０１１０２２７

確保人員が少なかったので…再び世界扉で過去へと飛ぶ…

３日目…
１９９９年１月３０日

カオルは出ると一路南大西洋戦隊、ネヴァダの拠点である、島へと向かう。

ミスリルは無人島を必ず戦隊拠点にしている。

カオルが無事密林に囲まれたしまにつき…同化し広げてくと……

「皆さん、このネヴァダに新しい仲間が加わり、初の反抗作戦となります。
壊滅、殲滅させましょう…アムルガルを！！」
潜水艦ドックで演説していた。

「オオッー」

「出港日時は、明日の標準時１０００、各員作戦に備えよ…解散！！」

各員がわかれていった…
（けどテッサもどきか……）

「フッフッフッ、テッサにはもう負けないわよ…このネヴァダ2がいるなら…」

「超電磁推進、高分子ポリマーですか……」

「ええ、それに短時間なら海面滑走が可能ですよ」

（ふーん…おもしろそうだなぁ…）

身体を伸ばし、同化してみた。

（ＴＡＲＯＳはないのか…）そして気がついた事だが…

（……基地のいたるところに爆弾が仕掛けられてるんだが……明日っぽいな…急ぐか）

性格調査を急いでおこなった。

４日目

南大西洋司令室内

現地時間１９９９年１月３０日

日本時間は１月３１日の朝方…

その日の日付変わる前…突如として爆発が鳴り響き、

司令室にも振動がはしる……

状況確認してた当直員は青ざめ、現場へと急行する。

そして…

「状況報告!!」

司令室にテッサもどきが駆け込んでくる。

「破壊工作です。対空対地レーダーシステム、通信システム、迎撃システムを司る、サーバールームをそれぞれやられました。航空機エレベーター、潜水艦ドック、そしてＡＳ格納庫、武器庫、各地上通路もいたるところで…です。Ａ－１地上通路だけは残ってます」

現場確認しおわった当直員達が、白煙被りながらまとめた、現状を報告した。

「ＡＳは無事なの?」

「通路自体が崩れ、中の様子が確認できません。また整備員待機室とも通信隔絶しています」

「そう…」

「基地内部の通信システムも途絶えていますので、直接伝令が走るしかない状況です」

「……復旧には?」

「相当な時間が予想されます」

「はやくしてね……他の基地に応援たのみたいから…」

「はっ！！」

「ふう…やられちゃったわね…破壊工作か…」

「とりあえず各サーバールームの修理が必要ですな…目がない事には…」

「そうね…明日の出撃もできなくなったし…作戦本部へと報告したいんだけど…」

「まったくですな…」

しばらく復旧作業の対応などをしていると…

ダ…ダ…ダダハァハァハァ

「だ、第2観測所から報告！！強襲上陸です」

伝令が青ざめた表情で駆け込んできた。

地上観測所からの報告員が駆け込んできた。

「なんですって！！…何処の誰？数は？」

「し、しょ所属不明です！数は数えきれません！」

「ＡＳ出せないの？」

別の復旧担当に聞いてみたが…

「さっき確認したところ、まだ通路が突破できてません。

まだしばらくかかるかと…」

「……総員陸戦用意！！基地内にて迎えうつわ！

非戦闘員はＣ－１エリアに！！

ＳＲＴ、ＰＲＴ各員はＡ－１通路にて迎撃準備。

潜水艦ドックの出口閉鎖してる、瓦礫の除去も急いで！！」

「イエス　マム！」

基地内は騒然となる…迎撃発令、また現状復旧……

そして…

「くるわよ……ＡＳ使えないと…こうもね」

「ですな……」

そのころ迎撃陣地を構築中のＡ－１地上通路では…
（…ここの爆弾いつ爆発するの??）
カオルの意識がいた…

「あたしらに盾突いたらどうなるか、思い知らせてやりなさい」

「イエス・マム」

「来たぞ!!総員戦闘配置!!」

通路の先端、地上出入口の先には強襲ヘリが……
途端に爆発の嵐が吹き荒れる。
破壊工作員の残した爆弾が爆発した。

通路で迎撃準備を整えていた各陣地は…爆風が吹き荒れ、
耐えきれなくなった天井は崩れおち通路は崩落した…
カオルは目をつけてた人を回収しまくった。

再び、司令室内に物語の場面がうつる。

「報告!!配置してたＳＲＴ要員、、ＰＲＴ要員の大半が生き埋め、
生存不明です!!」

状況確認に走らせた伝令が駆け込んできた。

「なっ！！」

「地上出口へとつなぐシャフト自体が爆発まきこまれ…崩落、中への捜索ができません」

「クッ…遭難者捜索！！傷病者救助急いで！」
再び出ていく伝令達…

「しかし、閉じ込められましたな…」

「そうね…けど、これで相手も手が出せないはずよ……
生き埋めになったみんなには悪いけど……
こっちも手も足もでない…脱出すらもできなくなった…」

しばらくすると…
「ほ、報告！！飛行場格納ハッチから敵ＡＳが侵入！ハッチ部分確保されました！
敵は進入路確保の為、瓦礫除去にかかっています！！」
また再び伝令が…１番走りまわってるね君……

「え！？…飛行場ハッチ通路に、生き残りのＰＲＴ要員まわして！！」

「はい！！」
汗かきながらまた伝令に…
「飛行場ハッチからですか…」

「やられたわ……けどね…ハリアー改を瓦礫側にむけ、迎撃準備！！
あと非戦闘員は潜水艦ドックへ待避！！」

「は！！」
別の者が外にでていく…

基地内がさらに騒がしくなる。
「あ！！…基地内通信復旧！！」
司令室にやっと朗報がはいった。
1番走りまわっていた伝令係になった要員が…
「もう……戦闘でないのに疲れた…」
と呟きながら座りこんだのも記載しておこう…

「各部署との通信確認！！他基地に応援頼んで！」

「駄目です。繋がりません！……商用回線もです！」

「テレビ局映像も駄目です」

「太陽風の嵐…ね…地球規模の…やられたわ、敵は何だかの方法を予測しその日に攻めてきた。
ただ者ではないわね…ＡＳの機種まだわからないの？」

「モニター回復します」

飛行機格納庫内部の画面が映る。

瓦礫が退けられ…
「まずいわ…特定の前なのに…」

退けられた瓦礫の向こうに向けホバリングして機種を向けた航空機から、

３０ｍｍガンポット２門が打ち込まれる。

流石のＡＳも計１０機の合計２０門の砲門を撃ち込まれれば……

しかし爆発がおき、ハリアーの一機が炎上…続いて二機目も…
「な！！…」

「敵の機映捕らえました！」

「あ、あれは……総員待避！！」

「駄目です！格納庫内へ通信途絶！」

ドーン！

カオルがまた回収しまくってます。

「つうろが……」

ＡＳから撃ち込まれたのだろう、砲弾が通路を直進し、破壊的な威力で突き抜けた。

「生存者の確認いそいで！！敵はアムルガム、コダールタイプよ！！」

「クッ……」

画面では最後の一機が降伏し…キャノピーをあげてたが、ＡＳが近寄って握り潰してるのがみえてる…

「みんな…見た？…捕虜はとらないみたいよ……」

「はい……」「ええ…」

「防衛線を下げます。通路の封鎖をここととここ」
と指をさす。

「コーキング材と投入して…潜水艦ドックの状況は？」

「あと３０分！！」

「急いで！」

「は！」

「くっ……長くは持たないわよ……」
彼女は親指の爪を噛みながら…つぶやいた。

……しばらくすると…
「通路封鎖完了！！」

「これで一方からの攻撃で耐えられるわね……」

「かろうじて持ってますが…」

しかしその１０分後には…
「突破されました！！」

「まずいです…その先は…」

「あと何分で除去？」

「あと１２分です！！」

「５分で済ませなさいと伝えて！！あと、司令室を放棄、潜水艦ドックで迎撃します！」

「イエス・マム！！」

「総員退去急いで！！」

「司令お先に……」

「私はいいから、潜水艦ドックに急いで！！取り残されないようにでないと…クッ」

画面では通路陣地で最後の一人となり、
抵抗できなく降伏の白旗を掲げてた者が、
容赦なく射殺されたのがみえてる…

「取り残しの無いようにいそいで！！」

……2分後…

「司令！！」

「わかったわ…今行く…ごめんね…マイホーム…」

通路でて確保している道を潜水艦ドックへとすすむが…

「敵兵！！司令をお守りしろ！！」

司令部要員の5名が別方向へと別れる。

「司令こっちです！！」

「けど！！」

「急いで！！」

「ええ…ごめんなさい……」

彼女は、敵兵に向かった5名に向かってつぶやく…

ハァハァハァ

ＰＲＴ隊員の二名に護られ潜水艦ドック目指して走っている…しかし…

「グワ」「ギャ」

先回りされた敵兵に護衛がいきなり倒された。
彼女は自分の銃をホルスターから抜くが
「つぅ！！」
接近してきた敵兵に手を蹴られ銃はおとしてしまった。

「おらぁ！！」

「きゃ！！」
確保されて部屋に引きずりこまれてしまった…

「はぁはぁ……早く撃ちなさいよ……捕虜はとらないんでしょ？…
覚悟はできたわ…」

「へっへっへ、いい女だなぁ」

「おい、これが敵司令官か？」

「ああ、そうだな」

「そうよ…でなに？」

「散々てこずらせやがって……この南大西洋戦隊も、もうおしまい

だなぁ～」

「ヘッヘッヘッ違いないね」

「他の戦隊がいるわ…あんた達アムルガムなんか……」

「おやしらねーの？」

「何をよ？」

「お前らのミスリルに対して同時攻撃おこなってるのをよ……」

「何いってるのよ！！」

「ほう…しらねーのか…おい、確かビデオとってたよな？持ってる？」

「ああ…勝ち気なねーちゃん…これみてみなよ」

ＣＮＮのニュース映像、オーストラリアの作戦本部となっているビルが、
爆撃をうけ崩壊しているのが流れてる。
「！！！」

「やっと理解したようだなぁ～他にも地中海戦隊、インド洋戦隊、
西太平洋戦隊の各基地、
他にも沢山のミスリルへの拠点への同時攻撃してるぜええ？
勝ち気なねーちゃんよ」

「あああ……うそっ…」

「へへ…理解したか…ひっひっひっ」

「くっ……早く殺しなさいよ…」

「ところでよう……こんな女…ただで殺すのもなんだな」

「そうだな…頂くか？」

「え？？」

「ああ！いいなぁ」
じゅるりと舌なめずるＣ

「おぃ、まずは見張りだ、誰も近寄らないようにしろよ」

「えぇ？」

「心配しんな、ちゃんとまわすからよ」

「ちょっと早くころしなさいよ！」

「おら抵抗すんじゃねぇよ！」

バシィ

「まずはてめぇの命は、おれらを楽しませてからだなぁ～イッヒッヒッ」

「な、なぁやっぱり」

「あん？」

「証拠が残ったらヤバイだろ…」

犯そうとした隊長…

「証拠のこらないようにしたら大丈夫だろ…事故で身体が吹っ飛んだ…
って事で嬢ちゃん、まずは楽しませてな」

「い、いやぁぁ」

ビリビリ

「へっ、やっぱ若いっていいなぁ…綺麗な素肌してんじゃん」

「や、やめて」

「おい、しっかり抑えろよ」

「へい」

ビリビリ

「いやぁぁぁ」

「ぐだぐだうっせえなぁ」

ガスン

「うっ」

「どうせてめえの命はあと少しなんだよ、
女の楽しみしってからでもいいじゃねえの？なぁ？」

「うっうっ…」

「あと一枚…へへへ」

「いやぁぁぁ」

「ほお綺麗な○○○だなぁ…初めてなんか？」

「うっ」

「ほうどれどれ？」「隊長俺にも」「てめえは見はってろ！」「はぁはぁはぁ」

「さて…おい、銃もってろ」

「へい」

「へっへっへっ」

「い、いやぁ」

カチャカチャ

「ヒッ」

「ほお、男性のみんの初めてか？」

「こりゃ犯しがいがありますね…」

「だなぁ……」

「ああ、加入してよかった…」

「じゃあよ…ちょっくら頂くとするか」

「ひっいやぁぁ、だ、誰か！助けてぇ！」

ｓｉｄｅ　カオル少し前

（収穫収穫♪）

カオルはかなり喜んでいた。

地上へのシャフト崩落によるＳＲＴ要員、全１２名、及びＰＲＴの目をつけてた約３０％を確保できたからだ…

（けどなぁ…あのハリヤーがなきゃ……ｏｒｚまぁしょうがないか…）

戦いを監視しながら…引き抜けそうなのをシェルターに避難させ、いない部屋にでて、睡眠状態にし、医療カプセルにいれるのを繰り返ししてると…

戦いが奥の方へと向かってしまったようだ…

（やべやべ…）

意識を奥にむけると…

（あ？）

「こりゃ犯しがいがありますね…」

制服を引き裂かれ、素肌をさらしまくっている少女…

「だなぁ……」

（あれは司令官??え?やば、付近にミスリルは…?）

「ああ、加入してよかった…」
サーチしたが…付近には生きてるのがいなく、
救援に駆け付けられそうなのもいない…

「じゃあよ…ちょっくら頂くとするか」
（ここで介入せずに…男はすたる…それに殺されるから…なら!!）
捕虜をとらずに射殺されるのをみてた。

「ひっいやぁぁ、だ、誰か!助けてぇ!」
男が身体を前に動かそうとする前に…引き込めました。

「へ??あ、あれ?」
犯そうとした兵士いきなり感触がなくなり…

「おい、何処にいった?」
みてた兵士も不思議そうに…

「え、えーとぉ……」
わけわからない…
いきなり人が闇に消えるように…質量ごと消えたからね……

カオルはアムルガル側の制圧済みの別の部屋に出て…
いま引き抜いた彼女をだす。

「ヒッ!!」

口を押さえて…
「シー」
頷いたので…手をはなした…

「うん…顔だけだね…あとは…」

虚数空間からナイフを出し
「イヤ！」

「と…大きな声ださない…手の縄きるからさ…」

ブチブチ

「まったく顔を殴らなくっても普通ならあとのこるじゃん…」

「あの…助けて？」

「ん～まぁ…ある意味ね…」

「ある意味？」

「そっようはスカウトなんだけどね…よっと」
医療カプセルを出す。

「顔に傷ついちゃね……と、スカウトうけるならこのカプセルに入ってくれるかな？」

「あのこれは？どこから？」

「この状況から助かるなら、おいおいわかるさ…うけてくれるかな？」

しばらく考え…頷く彼女…

「わかった。じゃあよろしく」

「あ、あの部下は？」

「ま…問題なさ気なのはたすけてるから…あとこの服を着て…裸のままだよ」

「キャ／／／」

やっと気がついたらしい…

「着たらこのカプセルに入ってね。早くね…助けにもどるからさ」

いそいそと着はじめる…ずるべたーんと引っかけ転ぶ…

（テッサもどき！！）

「みえてるよ……」

更ににあかくなり…やっと着てカプセルの中に自分ではいる。

「じゃあ…あとでね」

プシューカプセル作動させ引き込む。

さて…また同化し意識をいどうすると…

潜水艦区画に向かう…　もう残っているのはこの区画しかない…

非戦闘女性陣達が艦内の奥、

ＰＲＴのいき残りがドック出入口でバリケードをはっている。

整備兵等が崩れた出口を掘り返して…

「やった通れる！！」

の歓声があがった瞬間に…アストラルが突入してきて…

船外は、制圧された…

（うへ…アストラルここで導入かよ……無双…）

そして…艦内に入らずに、潜水艦ハッチに毒ガス…及び船体に爆薬をしかけている。

カオルは潜水艦内部に待避してた人をシェルターに引っ張り、

カオルは離脱し

部屋の中で世界扉を開く…

……

カオル報告

ネヴァダ２　取得

ついでにＭＨ－６０改

リヴァイアサンもどき取得

第85話　フルメタル編5　南大西洋戦隊　20110227（後書き）

作者「やってしまった……後悔はしてない…」

ナギ少尉「ん？また三桁？？」

作者「フッフッフッフッ…」

ナギ少尉「…一つの戦隊をつくるつもり？特殊部隊を…」

作者「かもなぁ…」

ナギ少尉「情報部は？研究部は？」

作者「カオルの方で用意してるじゃん」

ナギ少尉「あ……人事部！！」

作者「……そこがよわいよなぁ…」

ナギ少尉「あ、でもティアンムやレビルの人達割り振ってないし…
今だにいるじゃん…で次回は？」

作者「久々のイッ……おほん、帰還編帝国動乱その１お楽しみにぃ」

ナギ少尉「ねぇネタばらしたばらした？
で、そのネーミングセンスないサブタイトルいい加減にしたら？」

第８６話　帰還帝国動乱その１　投稿日２０１１０２２８　かなり修正１

２００１年９月１日深夜

「ただいまぁ～」

［お帰りなさい］

「状況は？」

［クーデター警告を司令、副司令にまわしずみ…
帝国は明日はなした後の方がいいね］

「で、Ｍ９適性は？」

［戦闘機動までだと…Ｂ－０１から９名程、他にアムロ、ドズル、シャア…が適性だしてるって］

「あとは新規加入組次第とヤドカリでか…」

［だね…あ、別の朗報。木星に向かってるチューリップから報告、あと１０日程でつくって～］

「おお…じゃあ？」

［うん…ただ採掘プラント作る予定だから、やっぱり９月１５日から稼動だね］

「となると…月末にはハイブ落とすか…」

［いける…ね］

「ま、先にクーデターの対応だな…さて…寝るわ。明日は加入問わないと……」

［おやすみぃぃマスター］

私室に向かうカオル。

［ね…しかけたの？］

［勿論］

［じゃあ早速話してくるね］

＝＝石橋の私室＝＝
勿論Ａ－０１は、ジオフロントに移っていた。
ピンポーン「はーい…１１号？良いわよ」
プシュー
「どうしたの？」

［イッシー、今日決めないと結婚でとられちゃうよ］

「どういった事なの？ねぇ！！」

［おちついて、おちついて、おちついて］
ガクガク１１号を揺らしてる…

［じつはかくかくしかじが］

「そ、そんな……」

［だからかくかくしかじか］

「…なら望みあるのね？」

［うん…どう？］

「初めてが記憶なしになるのはシャクだけど…やるわ…」

［じゃあ案内するね～］

石橋をつれていくあくどい１１号…

そして……

２００１年９月２日

むにゅ

「あっ」

（あ？）

カオルが目を開けると…

石橋の寝顔が目の前に見える。

（ああ、またやったんか……にしても記憶がないなぁ……

一回、記憶ありでやりたいけど…まっいいか……うっトイレ）

カオルは石橋を起こさないようにそーっとベットから抜け出し……

（起きないでよ…）

抜け出すと…抜き足差し足でそろーっとトイレに向かう。

傍からみると真っ裸てみっともないが……

トイレをすますと…

（まだ４時か…もうひとねむりしよ…）

ベットにそろーっと潜り…

（ん?赤??…まぁいいか…）

カオル再び寝に落ちる。

……

起床ラッパ前に…

ピピピッピピピッ

目覚ましが鳴り響く…

「う～ん」

「あふ…イッシーおは」

「カオル～エヘヘッ」

「ん？ん～～」

きすをしてきて受けるカオル…

「じゃあ、起きるぞ…」

「う、うん」

布団を剥ぐと…

シーツが赤い…

「へ？」

ペタペタ

（…血か？…）

「いやん」

「な…なぁ？イッシー……」

「ん？」

「あのさ…これ？」

「初めて……だよ」

「へ？２回目じゃ？」

「あれは、カ・オ・ルの勘違い」

「……は、初めてか……」

「そう。だから、お嫁さんにしてね♪」

「あ、ああ……」

「ほんとよ？」

「約束するよ……ただ…」

「ん？ただ？」

「他にも妻になりそうな人もいるんだが…」

「あ、11号ちゃんから聞いた。しょうがないよ…
だって、売れ残りの女性の人沢山でちゃうからなんでしょ？」

「……そこのとこ理解してくれれるなら……いいよ」

「ん♪」

「じゃあ先にシャワーでも浴びな…」

がに股でシャワー室へ向かうイッシー…

（11号…あとでおはなし…だな…）

シャワーから、がに股で出てきたイッシー…

入れ替わりに入る前に、

「着替えたら行かないと点呼間に合わないだろ？先に行ってな」

「うん。わかった」

シャワー浴びてる最中にイッシーはでていった。

＝＝Ｂ５５ハンガー＝＝

「１１号…」

［なにマスター］

「昨日、なにしたかじっくり話しなさい」

［えっと、マスターの赤ちゃんみたいから、
イッシーに子作りして！！と頼みこんだよ］

「……で？」

［イッシーはマスターの部屋に入っていって…あとはしらない～］

「……何人俺にけしかけるんだ？」

［殿下いれて三人～確定なの♪］

「……まぁ…いいか……とりあえず新人達だな…」

戦艦ドックへと向かう。

（えっと…医療カプセルが…沢山だから…
一回体育館ごとだすか…わけわからなくなったよ）

空いているスペースに出し中を確認する…
ついてく２５号…

（え～っと）

「マスター３７名だね」

「数えてたのに…ｏｒｚ」

各シェルターを出し…扉をつけてつきましたので準備出来次第お願いします。
……

出てきた…

「サントス?タケオ?シジン?ブリタニカ?」「スペック！キャステロ！」

（あっちが、西太平洋戦隊グループね）

「アンシェ大佐!!」
「皆さん…生きててくれたんですね…力になれずに…」

「大佐!!」

(こっちが南大西洋戦隊か…)

しばし…まって

「アンシェさん?」

「あ、はい…」

「ここにいない人員で救助できたのもいますので、
体育館、そこにある建物ないですがいますので確認願います?」

「はい!!」

西太平洋戦隊グループの方へ向かっていき…
「え~と…西太平洋戦隊の皆さん初めまして…
映像にでた当異世界軍責任者の渚カオルです」

「西太平洋戦隊ウルズ3、タビンス・キャステロ…中尉です」

「西太平洋戦隊の責任者としてでいいです？」
キャステロは周り見渡し異論なさ気なので…
「はっ！！」

「まずは…あなた方、トゥーハー・デ・ダナンはあなた達の頑張りで無事出港でき…後にアムルガムを壊滅する事ができました」

「うっし」「よっしゃ」「テッサたん…」「大佐…」

「その上で確認しますが、異世界軍への加入の意思をといます。力を貸して貰えますか？」

二人程手が上がる。

「はい？何でしょ？」

「グアムに妻と娘が……なのでその二人がこっちにくるなら…」

「わかりました。後ほど資料を…」

「同じく妻が…」

「同上ですね」

「あとは？」
しばしまち…

「では改めて加入の意思をといます。いかがでしょう？」

「ミスリル西太平洋戦隊トゥーハー・デ・ダナン所属キャステロ以下６名、異世界軍に移籍を希望します！！」

「ありがとうございます。２５号」

［はいはい～］

「空いてる子に宿舎等案内させて…」

［了解］

「では、配属やら詳しい事は後程…あ、キャステロさんだけは、体育館におんなじ戦隊の人いると思いますので、確認お願いしますね」

「はっ！」

（さて…）

戻ってきた南大西洋戦隊の方へ向かっていくと…

「カオル大将！！」

「あ～大将はやめて下さい。まぁ対外的にはしょうがないっすが…でどうです？」

「はい…約６０名程なんですが…」

「家族問題で帰り？」

「あ、はい…」

（少し多いなぁ…）

「ＳＲＴ要員です？」

「いえ…」

「ＰＲＴ要員？」

「が、半分以上…」

「フム…」

少し話を聞いてみると…
親一人…迎えいれられれば…
妻、娘、息子をうけいれれば…
兄弟を養うので…

等などだった…
ミスリル壊滅した、追撃ありえるけど、で、迎えいれられればどう？と聞くと、

全員が参加する…との事だった…

（お仕事増えた…Ｔ－１０００派遣するか…）

「ということになりました」

「わかりました。では…」

「はっ！…アテンション！！」

「当、ミスリル南大西洋戦隊ネヴァダ総員１６２名！！異世界軍に所属する事を宣言します」

ザッ！
一斉に各々の軍形式での敬礼を行う。

「ありがとうございます。
当、異世界軍は、直接火力はありますが、火が燃え上がる前の火消しは正直いって足りませんでした。
皆さんの参加を歓迎いたします…
ではこの者達が宿舎に案内しますので」

［ついてきてね～］＊多数

（あとでか…）

２５号にアンシェさん、キャステロさんに来てもらうように話しておいた。

＝＝情報室＝＝

「で、今回おこるクーデターの起因は？」

［内閣による政治なんだろうね…将軍を差し置いての…］

「あ～俺の世界の日本見たくなってるのかな？」
［それがこの世界では異常なんだよね……］

「ふむ…首謀者は誰？」

［沙霧　尚哉帝国軍、帝都守備連隊連隊長…で間が悪い事に……魔陽炎が…］

「は？？…マジですか？」

［マジネタ］

「ちなみにつおいの？」

［うん…京都防衛戦、横浜ハイブ攻略戦等でかなりの戦績をあげてるね…
エースといっていいかも］

「……エースをぶっつけないと駄目かもなぁ…
またはウルズ３と８コンビか…あ～でも起動したら……Ｍ９だときついかな……」

［まぁ…最大級の難関だろうね…］

「とりあえず対策後回し…で、ＣＩＡが協力してるの知ってるの？」

［ある程度は知ってるけど…ここまで食い込んでるのは知らないみたいね。
で、将軍による将軍の政治を求めてるみたい］

「は？」

［ようは、ＣＩＡによる日本乗っ取り、この基地乗っ取りに、担ぎあげられた…］

「……ちとまって、そのクーデター起こすほうに工作員でもいるの？」

［うん…この一覧にのってるのが、アメリカの工作員となって動いてるね…
で将軍による将軍への政治…となってるけど、
実質的には内閣抹殺…傀儡政権をたてるつもりみたい…
あとは横浜基地乗っ取りだね］

「ん～……あ、無力化の武器は？」

［言われたのが上がってきてるよ。とりもち留弾１２０ｍｍ用、瞬間接着材３６ｍｍ用、通常の戦術機用武装に使えるね。あとスタンバトン改１８ｍ級及びＡＳ用に…］

「ＡＳ用弾種は？」

［ボクサーのマガジン交換対応、基本は電気銃あるから、接着材マガジンがいいかも］

「か……あ、ＭＨ－６７改忘れてたよな…それも急ぎ目で作ってくれ…ＥＣＳ使えるし」

［燃料はそのまま？］

「パラジウムリアクターに変えた方がいいん？それともミノ核？」

［……ミノ核＋熱核ジェットにした方がいいかも…］

「じゃあそれで１１０機か？」

［イエス・マイロード…ところで具体的には？］

「基本おきた直後の無力化を目指す」

［だからＭ９か…］

「そういった事」

［起きそうなリストもっと詳しくだね…あとターゲットになってるリストいる？］

「みせて」

ズラズラとリストが流れる…

「結構狙われてる施設あるんだな…あ、やっぱり帝都城が？」

［殿下との対面、言葉を届けるのが目的みたいよ］

「なる…うんじゃああとはよろしく…」

「カオルさん「殿」」

「あ、はいはい…え～と…あなた方の配属になるのですけど…」

「我々がそのまま南大西洋戦隊に入る形が良いですね」

「そうですね～お願いできます？え～とキャラメルさん」

「キャステロです」

「はい、キャステロさん」

「とりあえずこの後なんですが、隠密作戦等があるので…3日後あたりに…」

「あら…」「そうですか…」

「11号」

「あいあい説明ね～」

「あとは、詳しくは１１号から…」

「わかりました」

「じゃ、すんません席外しますので…」

［いってら～」

＝＝副司令執務室＝＝

コンコン「カオルです～」

「あらいらっしゃい」

シュン

「どうっすか？研究は？」

「そうね……先に進まないのよ…」

最近Ｂ５５にビニールシートを、破きにきている回数が増えてるのを聞いてる。

「まぁ…なんか提供しましょうか？」

「そうね……半導体１５０億の並列処理できる、手の平サイズの演算処理ができるのがあればね…」

「ターミネーターのマイクロチップとか？」

「そうよ！それ！！……けどただ真似はシャクね……一応分析してみるわ…あとで使えるの調達ね」

「はい。あ、スカイネットは作らないで下さいね」

「ロボットによる反乱か…うふふ」

「あ～で…クーデターの話なんすが…」

「あ～あんたに任せるわ」

「と…一応横浜基地に内閣とか、避難させるつもりですが？」

「異世界軍で対応するつもりでしょ？」

「まっすね」

「なら横浜基地としては警備体制だけとる…になるから、別にいいわよ。任せるわ」

「Ａ－０１はかりても？」

「ええ。経験積ませてやってちょうだい」

「了解っす」

「あとはないわよ」

「じゃあ失礼しました」

カオルは帝都へと飛び立った…

＝＝　帝都城　＝＝

越権の間に通されると…早速

「殿下、お人払いを」

「な…」「ざわざわ」

「わかった…そなたら…」

「は…」

退出する高官たち…

「して…あなた…人払いしましたが?」「なっ殿下?」

盗聴探知機のスイッチをいれると…
探知箇所が二つ高官達がいた場所と殿下の座ってるイス…

(うへ…)
キーボードをだすと…
「実は…この間の重婚についてですが…」
[盗聴器あり演技続けてください」
と急いで空中ホログラムをだす。

月詠さん驚き、殿下頷きながら、
「なに?とうとう挙式をあげてくれるのか?」

「はい…なので愛を語らいませんか？」
［多分私室なら…とりあえず移動しましょう］

「わかった。急ぐぞ♪」

と私室へと移動する。
入ったあとに盗聴探知機…ないか…

「さすがに私室ではないですね」

「して人払いや探知器してまでの用件とは？」

「この国で、クーデターが起こります」

「まことか？」「なっ？」

「とりあえず、内閣総理大臣、あと斯衛の信頼のおけるものを…」

「わかった…月詠！！」「はっ！」
呼びに出てく月詠さん

すると

「ねぇ…式はイツデスノ？」

「殿下…今は迫らないで下さい…先にクーデターの対応でしょうが…」

「クーデター終わったら？」

「先に、重婚法案通したらです」

「……はい…」

そんなやり取りしていると、月詠さんにつれられ、

榊首相、紅蓮大将が入室してきた…

二人そろったところでかくかくしかじかと説明する…と

「やはり、権力侵害…がですか…」

「ですね…けど今更行ってもバックのアメリカは実行するつもりですよ…」

「フムム…」

「あのあなた」「ぶぉ」「ほう」
ゲホゲホ
榊首相むせています。
「殿下、あなたはいい加減に…」

「はい。榊以下内閣のものたちは、私の為によくしてくれてます」
涙目になりながら…
「殿下…」

「なので何とぞ護って下さいませんか？」

「ですね…わかりました。とりあえず発生直後に無力化する様にしますが、
万が一の為にボディーガードを付けましょう。
対人最強のね…クーデターが起こったら、
早急に家族共々、横浜基地に移動できるように手配しておきます」

「わかりました。ありがとうございます。
この者とかこの者、この者、この者等は、親米国派なので、大丈夫ですね…
しかも外遊の予定があったような…」

「ほぼ確定ですね…殿下の方は…」

「我が精鋭の斯衛が護り抜く所存なので安心せい」

「ですが帝都が戦場になりかねますよね？」

「……確かに…」

「いざという時は、当方の救助部隊が駆け付けますので、
広場は確保お願いします。
殿下が海上にいる…となれば戦場にはならないでしょう」

「むう…ところで海上にとは？」

「史上最強の強襲揚陸潜水艦、トゥーハー・デ・ダナンを用意してますので…
ま、用心の為です」

「わかりました…何とぞ…よろしくお願いいたします。あなた」

「だから殿下…」

「のうカオル殿」

「はい？」

「婚前交渉は厳禁だぞ…」

「それは殿下にいって下さい…」

帰還して１１号よりミスリルに関しての報告を受ける。

……

カオル報告

南大西洋戦隊よりアンシェ大佐以下１６２名
西太平洋戦隊よりキャステロ中尉以下６名
ただし、条件つきで６７名加入

医療カプセル３７名治療中…

内訳
ＳＲＴ隊員１６名ウルズ３，８　ネヴァダ側のミスト１から１４
ＰＲＴ隊員１０９名

内ＡＳＭ９操縦資格５名
第二世代操縦資格１２名

強襲輸送隊２４名

兵站グループ所属
１６名

支援グループ所属
１５名

施設グループ所属
２名

第８６話　帰還帝国動乱その１　投稿日２０１１０２２８　かなり修正１（後書

ナギ少尉「さぁさぁ、いよいよ始まりました、国家転覆に対しての暗躍。
はたして渚カオルはこの陰謀にたいして乗り切る事ができるのか？
次回、カオル死す！？
あ、お～たのしみにいいいいいい」

バコン

ナギ少尉「あ、いったぁ～作者、かんかんで殴らないでよ…
ドリフではないし…」

作者「かってにサブタイトル、しかもやばそうなのつけるな！！」

ナギ少尉「え～でもう…次回原稿みると…」

作者「あ、てめぇ…おいこら返せ！！」

ナギ少尉「やぁーー」

作者「こら……あっ！！」
ビリッ

ナギ少尉「……しーらない」

作者　白く燃え付きてます…

ナギ少尉「……どうするのかな？」

アンシェ大佐「どうしたんですか？」

ナギ少尉「あ、襲われかけてたすかったその1だ！」

アンシェ大佐「変なネーミング付けないで下さい！！怖かったんですからね…ヒック……それを……」

ナギ少尉「あ～ごめんなさい…ほら拭いて」

アンシェ大佐「ヒック……」

ナギ少尉「で、テスタロッサさん」

アンシェ大佐「アンシェです！」

ナギ少尉「作者がテスタロッサをだしたいからって、アンシェ大佐登場したみたいですけど…実際は？」

アンシェ大佐「そうですね～物語内部でも、全く他の戦隊の事触れてないんですよね…
だからこういった事あってもいいんじゃないか？らしいんですが……」

ナギ少尉「他の戦隊の特徴は？」

アンシェ大佐「インド洋はかなりの高齢の方と聞いてます…
地中海は男性の年上の方が…とは聞いてますが…」

ナギ少尉「まぁ…あんまりつめると作者が泣きますので…次回…帝国動乱編その2サブタイトルは不明です…お楽しみにぃ」

アンシェ大佐「あ、作者ひっしに書き直し中…」

第87話　帝国動乱その2　カオル天敵あらわる？　投稿日20110301

2001年9月3日

［マスター、機体の場所わかったぁ］

「よっしゃでかした!!データーくれ」

［はい］

「いってくる!!」

カオルは飛び出した

”幻影”シャムシェル」

＝＝帝国軍第一師団第一機甲連隊基地＝＝

カオルは降り立つと…データー渡された格納庫を目指す。

「バルディエル」

同化し、扉内部へ潜入…

（う……）

魔陽炎を護って6人の帝国軍兵士が立哨している。

（多分ばれない…とはいえ…なんか圧されるなぁ…）

軽く抜きあし差し足…

ブン！！

「どうした！！」

「いや…なにか気配したんだが…」

「むぅ…魔物？？総員気配を厳にしろ！！」

鼻先を真剣をかすめて…危うくＡＴフィールドが発動しかけました……

（ちょ……）

後ずさり、

ブン！！

「やはりなにかただならぬ者がいる！！」

「どこだ!?!?」

（ニュータイプがここにいるぅぅぅ…なら……）

「バルディエル」ボソッ

シュ!!

今まで身体があった空間を横なぎの真剣が空をきる。

「なにかいるぞ!!」

「警戒体制!!」

「待機中の者を呼び出せい!!」

（やばい…けどな…）

身体を魔陽炎の元へ床を伝っていくと…

ダッダッダッダッ

「大尉の機体の安全確認しろ!!」

（うぉ……）

床から足へと浸蝕、すると同時にリフトが動き出しました。

（取り付ければこっちのもんだ）

アイトリング状態なる前に、燃料タンクを虚数空間にまるごともっていき、
ついでに蓄積データーも貰いました。

「な！！……起動できません！！」

「馬鹿な！」

「無理です！！」

（燃料からっけつだし…予備バッテリーつけてないもん♪）

「整備兵を呼び出せ！！」

「はっ！！」

「それと……大尉に報告しろ！！」

（さて…最大の障害は無力化した…あとは補充されるだろうな……）

床を伝って…

ブン！！ドゴッ！！

（……これでもばれかねない……急いで離脱！！なんなんだよ！！）

「やはり魔物がいるぞ！！陰陽師をよべい！！」

（やばい！！）

バン

突如逃げてる前方に5人の人物が……

「いらっしゃいませいらっしゃいませ、ありがとうございます。」

（ぐぉぉか、身体が！！）

「本日も何かと忙しい中、娯楽の殿堂憩いのオアシス、当豪血寺会館、豪血寺会館へと、多数様御指名、御来店誠にありがとうございます。」

（金縛りにあったように動かぬ！）

「出ます出します勝たせますをモットーに、全機種全台煩悩解放、大開放、大出血大サービスとなっておりますので、じゃんじゃんばりばりとお取り下さいませ、お出し下さいませ。

はい又又出ました～矢部野彦摩様ラッキースタート！」

（こ…これが術というものか…）

「幸運招来幸運招来、リーチかかって当てたい時は、じゃんじゃんばりばりじゃんじゃんばりばり、すぐに呼びましょ陰陽師レッツゴー」

（けど…何としても逃げ出せねば……ぐぉぉぉ）

「打ちながら怨み憎しみ、つのりしは不運悪運、付き纏うその災いを、断ち切るも陰陽の道」

（ハァハァハァ）

「ま～けす～ぎ～て～、い～きつ～く～は～て～に～、や～むこ～こ～ろ～、な～ぐさ～め～よ～～」

（も、萌え…）

「辛い時、悲しい時、人はそんな時、こころの隙間に闇ができる。その心の闇に、ハズレ運は容赦なく入り込んでくるのだ！」

（うぉぉぉ動け俺の身体！！）

「だから外れても、くじけるな！おちこむな！クヨクヨするな！何事にも屈しない強靭なねばりこそが、最強の武器なのだから！」

（俺のソウルよ！燃え上がれ！）

「幸運招来幸運招来、単発地獄で困った時は、じゃんじゃんばりばりじゃんじゃんばりばり、はらってもらおう陰陽師レッツゴー！」

（ぐぅぅぅ！）

「やっぱ頼りになる陰陽師レッツゴー！

むんなのヒーロー陰！　陽！　師！　ええんちゃう？」
〜ｂｙＣＲレッツゴー陰陽師ショートＰＶ〜

（な、なぜに動けぬ……）

「ふむご苦労だったな……して下手人は？」

「そこにおる……カァツ」

（う、うぉ……か、身体が…なろぅ）
「”幻影”” 加速”” 加速”” 加速”」
化けて逃げようとするカオル。

「甘いわ！！カァツ」

（うぉ！）

「この魑魅魍魎め…久々の大物…成敗してくれるわ！」

（ヤバイヤバイヤバイ！！あっ）
「”瞬間移動”」

「ぬぅ！！」

カオル…視線の先へと転移し、

今まで縛っていた力の鎖が解き放たれるのを感じた……

「〝幻影〟」

（つうか……なに？あいつら……
ＢＥＴＡ要塞級縛れるんじゃないの？マジで……
甘くみてたなぁ……）

何とか無事に無力化できて、横浜基地に帰ってきた…

「ふも！！」「ふも！！」「マスターお帰りなさい」

「ただ～」

正門から入っていく……

＝＝　Ｂ５５ハンガー　＝＝

「ただいも…えれい目にあったよ…」

［どうしたん？マスター］

「この時代に陰陽師…まさかいるとは…」

［へぇ……］

「ん？ラトロワさん？」

「カオル殿、この機体でお願いできれば…」
「ん？ケンプファーか……これまたどうして？」

「滑走での強襲…まさに我が隊に…
というか実は部下からの要望もあったので…」

「元データーは装甲が前面しか受けれない…
からなぁ…ま強化すれば使えますか…
いいでしょ…設計して試してみます」

「ありがとうございます」

元データーを呼び出し…Z時代換装やルナチタニウムに変更等、装甲を全面的に施す。

（増えるとおもったが…まぁまぁあんまり位？）

とりあえず1機注文してみた。

帝国からリストまわってきたので、

Ｔ－８５０をボディガードとして派遣。

Ｔ－１０００が３人戻ってきたので…資金８０００万円もたせて、
ミスリルの家族回収に向かわせる。

で精神力は尽きたので就寝。

２００１年９月４日

［マスター、クーデター決行時刻わかったよ…］

「よし、じゃあ集めてくれ」

［イエス・マイ・ロード］

……

会議室に、

アムロ、シャア、ドズル、ミーリティシァ、アンシェ、キャステロ、
伊隅、桜井が集まってきてる。

伊「カオルさん……知らない人沢山なんですが……」

「了解自己紹介っすね…」

「それではクーデターに対する作戦会議の前に、初顔合わせの方々がいると思うので…」

「まずは、今回の中核となる、ミスリルチームのキャステロ大尉です」

「同じく、Ｂ－０１隊長のミーリテシィア大尉」

「また、チームではないですが、火消しとしてＭ９に乗ってもらうアムロ大佐、シャア大佐、ドズル中将です」

「ウォードレス小隊桜井隊長」

「でこちらが今回副司令からお借りしたＡ－０１イスミヴァキュリー隊長の伊隅大尉です」

互いに挨拶しまくる。

「では…１１号情報説明よろしく」

［はい。ほぼ確定的な情報として明日5日深夜2時に、帝都守備連隊を中心として、軍事クーデターが発生します］

スクリーンに表示される。

［またこれに呼応して、富士教導団所属の第一富士基地、木更津、目黒、市ヶ谷、習志野、
入間、朝霞、練馬、十条、、三宿、用賀、小平、立川、松戸等でも蜂起が確実です］

「帝都圏の殆どだな…」

［またそれ以外の基地でも可能性はあがっています］

スクリーン変わって

［クーデター側の目標は、帝都にある各行政機関、各大臣邸宅、首相官邸、
主要浄水施設、放送局、発電所…そして、帝都城へ…］

［目的としては、各大臣の抹殺、そして殿下への越権です。以上で状況説明終了です］

「で、こっちの手札はしっての通り…これだけ」

スクリーンに写される…

「なんだけど、今回は全員捕縛を目指しますので、そこのところは留意して下さい」

「了解」「おう」「殺しはないのか…つまらんのう」等など

「ドズルさん……」

「気にするでない」

「と、捕縛についてですが、無力化の武装としてこれら…」
スクリーンに表示

「を準備しました」

「質問、航空機の無力化は起動前でないと死人がでるが？」

「ええ…ですので最優先ターゲットが、入間、木更津基地への潜入、無力化」
スクリーンに丸が印される…

「次に、歩兵、車両、基地等の無力化」

「最後に、戦術機ですね…」

「優先ターゲット逆じゃないか？」

「対戦術機は、戦闘機動をせざるかもですので介入がばれる可能性あります。
なので、基地を襲撃後に、電波妨害をかけ、徐々に減らしていく形をとりたいかと…
また戦術機だけなら、施設の占領は脅迫か破壊しかできませんし」

「そうだね…」

「各優先までの移動手段は、ヤドカリ操作のＭＨ－６７改が…
また補佐にヤドカリ操作のＭ９もつきます」

「で、要人保護要領なのですが、起こった時点で各保護対象にはＴ－８５０をつけています。ＭＨ－６７改にて、回収、移送の手段をとります。
強襲輸送隊で行って下さい」

「はい。」

「Ｂ－０１のＭ９参加以外の隊員及び、Ａ－０１は横浜基地にて即応態勢で火消しになります。
多分強襲が予想されますので…」

「了解！」

「繰り返しますが、今回は一人も死人を出さない…その前提での作戦立案になりました。
そのための我が軍の兵器、兵士です。
そこのところ一つよろしくお願いいたします」

各隊長はそれぞれのチームへとちってゆき…ミーティングへとはいる。

そして夜はふけてゆく……

……

カオル報告

ケンプファーテスト機発注

第87話　帝国動乱その2　カオル天敵あらわる？　投稿日20110301

作者　「サブタイトル後悔しない～」

ナギ少尉「陰陽師ですか…」

作者「陰陽師を呼べぃから発展しすぎました♪」

ナギ少尉「彼等はゲスト？準レギュ？」

作者「まだ敵側じゃないか…なぜ準レギュに…」

ナギ少尉「だって、パチンコすきなんでしょ？」

作者「ぐっ……」

ナギ少尉「その世界からだしたなら…ただですますわけがない…よね？」

作者「ま…まぁ次回は、帝都動乱その3　勃発　お楽しみにぃ」

ナギ少尉「こら逃げんな作者、矢部野彦摩ｗｉｔｈ坊主ダンサーズどうすんのよ！！」

第８８話　帝国動乱その３　勃発　投稿日２０１１０３０２

２００１年９月５日　未明…
ザッザッザッザッ

彼等は隊の基地から歩ききだすと……

ヒューバシィ　ヒューバシィヒューバシィ
「な、なにぃ？」

トリモチ等に阻まれて…

「くぅ」「た、たすけてくれぇ」「は、はがれん」「まってろ」
「じ、銃が」「う、ズボン破けた」「素足にくっついた…いでぇ」

まだ隠密行動中で住民にさっせられても困るのに…
大きい声もたてられぬ…

ヒューバシィヒューバシィ

「うわ！」「きたぁ」「わしにもか」

次々どこからともなく動けなくなり…

「ぐぅ……無念」

翌朝……地域の住民により…
「隊長さん…なにやっとるのかや?」

「はっはっはっ…わけわかりませぬｏｒｚ」

という状態で見つかってしまった……

時間戻り……別の隊に…

ブロロロ

彼等はクーデターに参加の為に駐屯地をでて…しばらくすると…

パシャパシャ

「なんだ?水?雨?……うお」

ギギギシュー

「手が剥がれない」
「く…動かない…」

かかってないものが…車両に手をかけると…
「う!!接着材?」

「動きません!!……うわぁ」

パシャパシャ

「ギャーかかったぁ!」

「よるなくっつく!」

「あのー抱き着いたまま?」

接着材で阿鼻叫喚の世界となる…

「はがれん!!無線機で!」

「胴体からとれないっす!」

「ええーいわし……なんの!!……いでで!!誰かトークスイッチおせい!!」

周りには動けるものがいなかった…

「隊長…道路の真ん中でどうします?」

「しらん……」

「やべぇ…トイレ……」
「おま！！くっついてるのにやめろ！！」
「我慢できない…」
「やめろ！やめろ！」
「いいよね？」
「う！！…やりやがったな！！」
「あははは…」
「お返しだぁ！」
「濡れてるから関係ないさ…きもいけど…」

彼等は…翌朝、小水のにおいがする…とのクレームが帝国軍にはいった…
付近の住民から…

またまた戻り少し前…

「搭乗！！」

「おう！！」

彼等は自分の愛機のヘリコプターへと駆け出す…

しかし…

「と、扉が！！」

「なんで溶接してるんだぁぁぁ！」

「ぎゃぁローターが……」

屋外に駐機してあった機体はさんさんたる有様だった…

予備機に変更せねばと格納庫に向かうと

「な、なぜ……」

格納庫の扉が開かないばかりか、

隙間からみえた内部ではやはりずたぼろになっているヘリが見えた。

クーデター側で参加予定だった、ヘリコプター達は…

参加する前に既に無力化されていた……

またまた少し戻り別部隊…

ザッザッザッザッ

彼等は車両に乗らず、行進していた…

なので異世界軍内で優先ランクが下げられてたが…

しかし！

「ふも！！」

「た、隊長！なんか変なのが前にいます！」

「……着ぐるみじゃないか…構わん射殺しろ！大義の為だ！」

「いいんですか？」

「構わん…問答無用だ！！」

バンバン！

「な、なにぃ！！何故たっている…なに近距離で外してるのだ！帝都守備隊の名がなくぞ！」

バン！

「…ふがいない…私がやる！！」

バン

「……むう…」

近寄って

バン

更に近寄って

バン

密着して…というか…それを試そうとすると…

一瞬でスタンガン浴びて伸びている…

「う、うてぇ！！」

「ふもぅ！！」

ボン太君は銃撃の中、ゴム弾を撃ちまくる。

「やってられねぇ……」

「ありえねぇ……」

「ば、ばかなぁぁぁぁ」

結果…

「ふんもぅ！！」

手錠をかけて人を山にして旗をたてるボン太君の４人集。

また時間はもどり…
場所は市ヶ谷…

「いよいよ始まりましたな…」

「すべては皇武院殿下の為に！！」

「すべては煌武院殿下の為に！！」＊多数

そう…ここはクーデター側の後方司令になっていたが…

「て、敵襲！！」

「なにぃ？」

「敵は着ぐるみです？」

「はぁ？」

「ふんもぅ！！」「ふも！」「ふも！」「ふも！」「ふも！」＊多数

「ば、ばかな…1個歩兵大隊が警備にあたってたんだぞ……」

「ふもっ！」

「降参しろか……無念…」

時間はまたまたさかのり…

ガッシ…ガッシ…ガッシ

ＮＯＥせずに隠密にすすむ不知火たち…

不知火には日本帝国軍のマーキングが入っている。

そう不知火はクーデター参加部隊だった…

歩みを進んでいると…

後ろの機体の反応マーカーがいきなり消えた。

「ん！！何事？？」

列の先頭にいた機体が振り向くと…

白煙を上げてる機体、また、だらんとだらし無く武器を落としている機体等様々

「！！」

なんだかの攻撃？と思った瞬間…

「うぉ！！」

いきなり網膜投射が乱れて消えてしまった…

彼の目には…機体内部のコクピットしかうつってない…

「くっ…いきなり何なんだ!!」

カチカチ

「再起動不可か?…」

カチカチ

「ムウ……承った機体破棄せざるえない……のか?……無念…」

プシュー

ハッチを手動オープンで開いてみると…

部下達も外に居るのが見えた…

「おい!!どうなってるか誰かわかるか?」

「強力な電気的なもので電装系がいかれてますね…攻撃受けたのは確かみたいです」

「誰かその的みたか？」

「いえ」

「……強化装甲起動させるぞ！」

パシャパシャ

「うぉ！な、なんだ？水？」

拭おうとすると…

「ギャーくっついたぁぁ」「は、はなれねぇ」「隊長！あたしの胸に」

「ふんむ！」

朝方、オブジェとして固定された彼等がみつかった…

等など帝都に向かった歩兵、車両、戦術機の殆どが無力化されていた。

首相官邸前…ひっそりと闇になっている。

「むぅ……」

合流予定の別動隊がこなく焦っていた…

「致し方ない…時間はかなり過ぎている……突入」

彼の同士達とともに門に接近…

「やはり警備のものが居ません！！」

「都合がよくなっただけだ！」

彼等は官邸の中に突入する…

「むぅ…嵌められたか？」

官邸内には人の気配がない…

官邸の首相寝室へと目指し…

扉を蹴り上げ…

「われら日本を憂い、逆賊、榊!!覚悟せい!!」

布団はこんもりとなっているのがみえるが反応ないため…

「ええぃ!…くっ!!」

布団の中身はからだった…

「うわぁ!!」

廊下より音が聞こえる…

「何事だ!!」

「か、確認してきます!!」

…

「ガスです!!階下はガスで全滅です!」

「なにぃ！！」

コンコンコロコロ

「！！手榴弾！！」

物影に一斉にとびかくれると…

プシュー

「うっ」

ゴホゴホ

途端に強力な眠気が襲い始める…彼の目には…意識を手放すまえに、
ネズミだか犬だかわからないシルエットが…

さて、肝心の榊目線にもの語りは移そう…

ゆっさゆっさ

「むぅ？？」

「起きろ、クーデターだ5分でしたくしろ」

「！！わかった」

榊首相は急いで着替え始めた…

「準備できたか？」

「頼む…ところで、官邸の者達は？」

「すべて避難してもらった…いくぞ」

裏口にでると、用意してあった車に乗り込んだ…

車はすぐさま発進する…

「しかし…君はつくずく奇妙だね」

「何がだ？」

「いや…本当にロボットかね？と錯覚してしまうんだよ」

「正しくはターミネーターだ」

「そのロボットとターミネーターはどう違うのかね？」

……

車は日比谷公園につく…

何台かいる…閣僚の何人かだろう…

「おりろ…間もなく迎えがくる」

「うむ」

車両をおり…広場の方へ連れてかれる…

先行してきてたのだろう、閣僚とその家族も一緒だ。

「首相！！」

「おお、皆さん」

「いやはや…起きるとは聞いてたものの…実際におきてしまうとは

…」

（風？）

上空から、風がおりてくる。上を見上げても何も見えない…

「来たぞ迎えだ」「迎えだ」「迎えだ」「迎えだ」「迎えだ」「迎えだ」「迎えだ」

突如として青白い閃光とともにかなり大きめなヘリが姿を現した。

「こちらはミスリ…じゃなかった異世界軍だ…今から着陸します。着陸までは近寄らないで下さい」

ヘリが着陸してきて…扉があく。

「内閣官僚の皆さん！急いで乗機を！！」

その声とともに機内へと駆け込む。

護衛についてたターミネーター達は乗らず…

「君らは？」

「私達には任務があります…お急ぎを」

「ありがとう」

扉はしまり…

「当機へようこそ、横浜基地への直行便離陸します！！」

の声とともに機体は離陸し始めた。

（ほう…このヘリほしいな…）

揺れや振動など殆ど感じない…

「ＥＣＳ作動」「チェックＥＣＳ作動正常」等コクピットから聞こえてくる。

機体は２５分後…直接戦艦ハッチから内閣閣僚をのせ…はいっていく……

帝都守備隊第一機甲連隊所属衛士

「む…」

彼は焦っていた…帝都圏に発生した大規模的な電波障害の為にだ…

結局、連隊の内何機かが別れ、状況確認にいく事となり…
また彼の占領している国防省においても、
合流予定の同士達は来ないばかりか、抵抗らしい抵抗も受けてないのだ…

また最初の時にあった正体不明の機体も気になっていた…

回想

ガシィガシィ

彼の所属連隊は朝霞から出はじめた…

行進していると、突如として…最後尾のマーカーが消える。

即座に…
『敵襲！警戒せよ！』

しかし、それ以上は何も起こらず…

がしばらくするとやはり最後尾の機体が狙われ…

6度目の時に…『機体の右側うてぇ！！』

すると…
闇の中から青白い閃光とともに、機体が浮かびあがり、
レーダーに反応が返ってきた。

機体はかなり小さい……

『あの機体はなんだ！！』

『追撃せよ！！』

『おう！！』

しかし……

『すばしっこいやつ！！』

『なんだこのネバネバは…うざい！！』

『こっちのほうが機数は多いんだ！相手は1機、先行包囲しろ！！
それに相手は近接兵器しかもってない！！』

……

やっと包囲が完成しようとしたとき…

『むぅ煙幕！！』

『赤外線……ダメです！』

『なんだこの煙幕は！！』

『各機煙幕より離脱せよ…外周を固める』

『おう！！』

……

『間もなくはれるぞ…』

煙りが晴れると……いなくなっていた…

その後も何度か襲撃があり…

帝都につくころには機数は半減…修正せざるえなくなってしまった

……

その頃…アメリカ軍第６６機動大隊…

「横浜国連基地に迎えですと？」

「そうだウォーケン少佐、君の大隊でもって、

原因不明の電波障害がおきている中、横浜国連基地の防衛をとって

貰いたい。

これは仙台臨時政府の要請だ」

「横浜基地は受け入れ了承しているのでしょうか？」

「聞いてはおらぬが……なに、日本政府からの要請だ。国連軍に協力するで通してもらいたい」

「了解しました」

……

房総半島上空に差し掛かると…

『少佐、レーダーに感あり、前方から機体がきます』

『あの距離なら…いえまっすぐこちらに…』

「ばかな」

そうだろう…彼等ののる機体はＦＡ－２２最新型のステルス戦術機なのだ…

こっちの機体より向こうが先に感知する事はありえないのだ。

しかも電波障害中に…でもある。

「総員戦闘準備、正し命令あるまで絶対に発砲するなよ」

『了解』＊多数

『あ～そこの接近中のアメリカ軍第６６機動大隊に告ぐ』

「なに？…ばかな…」

『こちらは異世界軍だ、当地域への立ち入りは、
日本帝国の主権において認めない…直ちに領空外へと退出願いたい』

「こちらは第６６機動大隊だ…そちらが異世界軍である証拠がわからない…
よってそれには応じる事ができない」

『ふむ…そうだな…今、そちらの機体にデーターを送る』

機体データーがきた…確かに異世界軍のマーカーだ…
「確かに異世界軍所属機は確認した…しかし、我が隊は仙台臨時政府により、協力するように命じられている」

『当、横浜国連基地は、国連軍、及び異世界軍において管制下におかれている。
また日本の正当なる政府である榊首相以下閣僚を保護し正当な政府が機能している。
また我が異世界軍の独立統帥権に干渉する問題だ…
よって、こちらからの要請がない限り受け入れは認められない。

また先程警告した通り正式な内閣、榊首相以下の日本政府の要請ではない…
貴隊らは帝国主権を侵している…
これは警告だ、領空より退去せよ』

向こうの機体が周りを取り囲んできた。
（撃震？それにあの機体はなんだ？不知火にはにてそうなんだが……）

『繰り返す…』

「わかった…当大隊は帰艦する…総員、転身！！」

命令を下したとたんに……

『な、テスレフ少尉！』『ノベコフ！！』『スローネ！』

『発砲するな！！』

「どうした！」

『戦闘行為と見受けられる…全機、発砲機体を無力化せよ！』

「まった何かの……」

次の瞬間ありえない空力機動によって…
発砲した機体は行動不能にさせられ…
墜落か？とおもいきや捕縛状態で飛行を続けられている…

『当、異世界軍は、ただいまの戦闘行為により、
貴官ら、アメリカ軍第６６機動大隊対し、拘束を命じます。
離脱ある場合においては命を保障しません…いいですね？』

「クッ……しょうがない…貴官らの指示を受けよう」

『各機体の武装を解除します。俺が周りますので手渡しでお願いします』

「聞いたか？素直に武装解除に応じるぞ…」

アメリカ軍第６６機動大隊は捕縛拘束され、横浜基地の異世界軍エリアの牢屋にぶち込まれました。

場面は変わり…

「ふう…あとこの帝都守備連隊…
いやもう２８機程だから大隊未満か…」

『ですね…』

彼等に情報はリークし、この横浜基地へと向かっている。

勿論電波妨害は解除ずみだ…

迎えうつはＡ－０１、ビックネーム達…

Ｂ－０１やミスリルグループは富士教導隊を無力化し帰還中だった。

「わしも戦わせろ～のドズル閣下は、富士の方いったし」

『ふふ…似てるな』

『ああ…』

『ドズルのおじさんの口癖～～、うぉぉぉ斬りたい斬りたい斬らせろぅ！！』

（なにクェスに仕込んでんだよ…）

等と盛り上がって…

『ねぇカオル…』

「ん？」

『ばれちゃった…』

「え？」

『カオルとの初めての事～』

「……誰に？」

『カオルー！！おめでとう！』『いやーめでたい』『不潔です』『いいなぁ…あたしより早いし』『狙ってたのに』『今晩押しかける』『わたしいきおくれに…』『水月中尉はもうやりまくり』

『ちょっと！！』『と、河田先任から』『河田～！！』『わたしいってないです宗像！！』

『あはははは…』

「うんまぁしょうがないさ…」

『でね、アムロさん？ってひと強いの？』

「ああ、エースオブエースさ」

『速瀬中尉どうかな？』

「ふむ……いいんじゃ？」

『速瀬中尉の想い人…いっちゃってさ…
あと、同じく思ってたのが、涼宮中尉…
なので見てられなくて…』

「だな…セッティングしてみるか…」

『よろしくね♪』

『さぁさぁじゃれるのはおしまいだ…来たぞ！！』

「アムロさん、シャアさん、クェス」

『…』『なんだ？』『なーに？』

「要注意なのが、この沙霧尚哉、駒木になります。当たりにいきます？」

『僕が沙霧かな？』『アムロ速いぞ……じゃあ駒木』『あたしは…あそんじゃお』

「わかりましたお願いします。くれぐれも…」

『ああ捕縛するよ』『うむ』『えっへへ～、スタンスティックの舞…なんちゃって』

『そこの道を塞いでいる異世界軍、国連軍に告げる。我々は帝都守備第一戦術機甲連隊である。

ゆえあって横浜基地にいる逆賊、榊首相以下数名をもらい受けにきた…

通して貰いたい』

「こちらは、異世界軍、渚カオル国連大将です。内閣閣僚は当異世界軍の保護下にあります。
よって、正当な政府以外からの、その様な要望は受け付けられません。
また貴方方、クーデター軍においては日本帝国主権政府より、鎮圧の依頼がきています」

『名乗り遅れた…わたしは沙霧尚哉、日本帝国軍大尉だ…
その主権政府自体が売国奴の集団なのだ！
ゆえに我々は立ち上がった…
我々の大義…貫きさせてもらうぞ……総員抜刀！！』

「わかりました…受けて立ちましょう戦闘準備！！」

『押してまいる！！』

「いけぇ！！」

……

カオル報告

第８８話　帝国動乱その３　勃発　投稿日２０１１０３０２（後書き）

ナギ少尉「あ～ん…いいとこなのに…なんで作者この終わり方なの？」

作者「…長くなったからさ…で次回は決着、後始末だし…」

ナギ少尉「しかし、チートね…行動わかってちゃ…後だしジャンケンも良いとこ」

作者「だろうなぁ…奇襲や突発的がクーデター成功の元だし…」

ナギ少尉「他の国でもそうよね…外遊中とか…あとは民衆の力でとか…」

作者「最近だと…リビアか…」

ナギ少尉「カザフィね」

作者「しかし…なぜお前がしっている」

ナギ少尉「後書きだからきにしな～い…次回、帝都動乱その４　鎮圧　お楽しみにぃ～」

第８９話　帝国動乱その４　鎮圧後　投稿日２０１１０３０３

双方がぶつかりあう…

ウオオオォ！！

魔撃震より咆哮があがり、スタンスティクを握りしめ…右翼に向かう…

（アムロさん、シャアさん手筈通りだな…）

ウォォォォ！

跳躍し雄叫びをあげながら一気に…

（ちぃ）

ガァァァ！

かわされたので左手で相手の機体の足を掴み、

Ｇをころすとともに引き寄せ、突き刺し、電撃を相手の機体にながす。

（まずは一機）

ウォッフ！

すぐさま抜き、横移動し、別の機体へ突き刺し電撃を流しながら…

（二機目）

抜き、相手の身体を軸にしながら別の機体へ跳躍…

ウオオオォォ

（さすが帝都守備連隊第一機甲連隊…）

かわされながら…３６ｍｍ突撃砲当たる感触がする。

ウオオオオォォォ！

（ＡＴフィールド！！薙げ！！）

うった機体の膝部分を狙う…

切断されバランスを崩しはじめる。

ダッシュしてスタンスティクを突き刺し、電撃を流す。
抜き、周囲を見渡すと…
（次！！……ちととおいいか）

ガフガフガフ、ウォォォォ！！
（うぉりゃぁぁ）
誰かの機体と鍔ぜり合いの最中に横から突き刺し電撃を流す。

『ちょっと！！もってくなぁぁ！！』

ガオゥ！
「わりい！」
すぐさま抜き、

（次！！……あれか！）
ガフガフガフガフ！
かけるかけるかける…
ウオオオォォォ！！
大跳躍…

遠距離で、撃ち合ってた機体に真上から襲い掛かり…突き刺し電撃をながし…

（つぎ！！……くぅ…おしまい？？）

……戦場でたってるのは既に味方機だけになっていた……

（パワーバランス悪かったか……な？3分位？）

「各機状況報告」

『こちらアムロ、沙霧大尉捕縛ずみ』

『シャアだ同じく捕縛』

『クェス、なんであたしが人集めなきゃならないの！！』

「シャアさん、アムロさん」

『わかった』『ああ』

『伊隅だ…ものたりないな』

『水月よ……あとでカオル覚えてらっしゃい』

『西坂よ…水月中尉の相手よろしくたのむぞ』

『河田です…あとで肩もみましょうか？』

『高畑……異常なし』

『風間よ…この機体好きだな』

『宗像…今晩はイッシーと？』

『石橋…宗像さん…無事よ。カオルの機体のおかげね』

『小倉…はぁカオルあたしのボディにぃ』

『オグ！！』

「あははは…よっし、各機、クェスの事手伝ってくれ」

『了解』＊多数

行動不能に陥った機体から、
各パイロット達を後方から来た兵員輸送車に載せ…

……クーデター最後の部隊の抵抗は終わってしまった。

クーデターの結果…
機体の損失、ほとんどが電気系統の焼き切れによるもので、

人員的損失は０

という、この規模のクーデターにしては珍しい結果におさまった。

経済的損失は…かなりあったが……

日中……

各所でこんな光景が繰り広げられていた。

「隊長～トイレ……」

「わしも行きたい！！なぁお巡りさん…これ削れない？」

「そういわれましても……削ってもなんで、できてるんだか？」

「もれるぅぅ！」

「いつになったら……あ、きたぁ！！助けてくれ！」

除去作業部隊とかかれた旗をかかげボン太君、
コバッタ達がオブジェと化したクーデター軍によってきた。

クーデター兵士達は溶剤で接着材をとかされると、収容所へと兵員輸送車で運ばれていった…

同日夜…

各地で今だクーデターの後処理、特に接着材弾の使用及びトリモチの使用の、
除去に翻弄しているなか…

帝都城謁見の間では、首謀者の沙霧大尉、榊総理、殿下、俺の対面となっていた。

「そなたが沙霧か？」

「は。敗軍の将ながら、拝謁の栄誉を賜り、真に恐悦至極にございます。沙霧尚哉でありま す」

「面をあげるがよい」

「は」
沙霧大尉の顔が上がる。

「此度、このような形でそなたと顔を合わせねばならぬ事、誠に遺憾です」

「殿下に多大なるご心労をおかけいたしました事、塗炭の苦しみでございます」

「私は、そなた達をかような立場に追い込んでしまった、自らの不甲斐なさが口惜しいのです」

「殿下…この決起は、殿下のご尊名において遂行された軍の作戦の多くが、政府や軍にとっての効率や安全のみが優先され、本来まもるべき国民を蔑ろにしています。しかも国政をほしいままにする奸臣どもは、その事実を殿下にお伝えはしてないのです」

「このままでは、殿下の御心と国民は分断され、遠からず日本が滅びてしまう…の判断により今回の決起に至った経緯です」

「畏れながら、今この場にいるそこの榊も逆賊に連なる者。殿下がお心を痛める由は微塵もございません！」

「沙霧…榊は私の忠実なる臣下。榊を逆賊というならわたしも逆賊というのと同じですよ？」

「殿下…」

「榊達は彼の者なりに、国と民とそして世界を想い、それを救うために力を尽くしてきたのです」

「その想いが純粋であるが故に齟齬や対立が生まれるのは往々にしておこりうる事」

「そして、それを御し切れぬ我が不徳こそが責められるべきなのです」

「畏れながら殿下、将軍の御尊名において行われるべき政が、殿下の御意思っ違えているという現状こそが許されざる事なのです」

「無論、人のなす事に絶対はございません。ですが、それを正そうとする心を持たぬ輩は、殿下のそのような言葉ですら都合のよい隠れ簑に利用しているのです」

「齟齬が生じたならば、それを正すのは殿下でなく、政府や軍でありましょう」

「しかし残念ながら、今の彼らにそのような自浄作用はもはや望むべくもありません」

「先の戦いのおり、急遽仙台臨時政府が米軍の受け入れを殿下に伺わず発表したのがその証拠…」

「沙霧……そなたの申す事はわかります。されど今の帝国の有様……これは将軍である私の責任である由にはなんらかわりはない」

「故にそなた達が私の為に血を流す必要はないのです」

「殿下……畏れながら、殿下の潔く崇高な御心に触れ万感こもごも到り、心洗われる思いにございます。
しかしながら、かの米軍や、異世界軍の介入は重大な内政干渉でり国家主権を脅かす蛮行である事実は、けして変わる事ではありません」

「事ここに到り、潔く賜りましたこの機会……このような事態を招いた不面目を棚に上げても殿下にお伝えせねばならない事があります」

「申すがよい」

「こたびの件は米国の思惑を成就せんが為の謀にございます」

「極東での復権を望む米国政府は、米軍派遣の口実を作るため、帝都での騒乱を望んだのです。帝都の戦闘から、米軍が殿下を救出し保護し、
日本の騒乱を平定する……これが米国の当初描いた筋書です」

「そしてまた米軍をたやすく受け入れようとした、仙台臨時政府のもの達こそが、帝都を戦火にさらそうとした張本人なのです」

「米軍は、わたしの友である異世界軍の手で逮捕できたのですよね？」

「はい。横浜基地に進駐しようとした際に武力行使があり、逮捕した者より、ＣＩＡによる占拠等の計画を白状させました……あと、確認しますが、沙霧大尉……榊首相以下内閣閣僚を殺害する計画でしたか？」

「殺害！？！？いえ、幽閉の上、殿下に権利を返上させる計画でしたが」

「これも裏がとれてますが、内部におけるＣＩＡ工作員が命令を変更させてますね」

「そんな……榊殿…申し訳ない…命までは…」

「沙霧大尉、すんだ事ですし、わたしも無事でしたから…」

「殿下、さりとて、私が決起してしまった罪、ぬぐえるものではない事は重々承知しております」

「血は血をよび、争いは争いを生みます。そのような仕儀をもたらしたそなた達の此度のおこない……それは、私や民の心を汲んだものだと本当に言えるのでしょうか？」

「将軍の意志を民に正しく伝えることが、そなた達の本意であった

としても、それが伝わらぬ者、それを阻む者を排除することが許される道理であろうか」

「そのような行為をするものが、民の意志を語る資格が在ろう筈がない」

「国とは…日本という国は……民の心にあるもの。そして将軍とはそれを民の心にある日本を映す鏡のようなもの……私はそう考えています」

「もし、映すものがない鏡があったなら、それは何と儚い存在であろうか……」

「日本を守るというのは即ち、民を守るという事……民のない国など、在りはしないのです。そなたがそれを一番わかっていながら道を誤ったのです……」

「されどそなた達に残された道があります。日本の行く末を憂うそなたの想い……志は私がしかと受け取りました。これより後は、常に此度の件を戒めとし、民のため、日本のために尽瘁する所存です」

「煌武院悠陽の名にかけて……そなたに誓います」

「殿下ありがたきお言葉の数々我が身には過ぎる栄誉にございます

……」

「我が同士の処遇……くれぐれも宜しくお願いいたします」

「殿下」

「カオル殿なにか？」

「沙霧大尉についてですが、このままだと死罪に？」

「もとよりは覚悟の上」

「そうなるかと…」

「今回の騒動、幸いな事に死者は出ませんでした。
その上でのお願いですが、除隊に減刑お願いできませんでしょうか？
かの者達とて、殿下を思ってこその行動…その命役に立てずに散らすには惜しい…」

「しかし…」

「そこで我が軍にスカウトの上、殿下の矛としていえ、
世界の矛として活躍させたいと思いますが…」

「そなたの軍にか？しかし…」

「殿下、その根源となった、政治的権限ですが、新内閣設立時に、
権利を返上いたしたいと存じ上げます」

「……わかった…沙霧達の事よろしく頼むぞ」

「はっ！」

……
殿下の放送がはじまった…

「我が親愛なる日本国民の皆様。長きにわたり多大な苦難を強いている事、誠に申し訳なく思います。
此度の事件は、若き命が国の過ち、延いては私のいたらなさを正そうとしたが故の決起でありました」

「日本国民の皆様、民と国のため…数多の英霊の遺志を背負い、私は歩み続けます。
どうか、皆様のお力を今暫くおかし下さい。同じ過ちを繰り返さぬよう、各々が為すべきを為せるよう、
共に未来を見据え、歩んで参りましょう」

即日、異世界軍特殊部隊による、仙台臨時政府要員の逮捕、
国家反逆罪として処罰する事になった。

「何も知らない！！」と白々しくいってるが、
叩けば叩くほどホコリがでるようで…

また、クーデター兵内部のＣＩＡ工作員も逮捕監禁でき、
帝国軍内部の工作員も一掃できたのはいうこともなかった…

後日、榊首相以下保護した面々＋帝国派による、新内閣が組閣され、
煌武院悠陽殿下に政治的特権を含む権利の返上。

以後内閣は殿下の補佐的役割になり、殿下を助ける役目となる。

（ま、人死はでなかったし…万々歳かな??
……さて、アメリカどうしよう??ＣＩＡ癌すぎるよな……）

カオルは基地に帰りながら…思っていた。

……

カオル報告…

速瀬中尉？？……逃げるさ逃げきってやる

第８９話　帝国動乱その４　鎮圧後　投稿日２０１１０３０３（後書き）

作者「クーデター編終了～～～」

ナギ少尉「しかし、本編入る前に起こっちゃたね…」

作者「だなぁ…原因は異世界軍のプラントにあるけどな」

ナギ少尉「その技術というかそのものがほしかったの？」

作者「現状、プラントに生産できてないものは殆どない……まぁプラント自体は秘密だが、
ＣＩＡ工作員が多数逮捕され、現状横浜には絶対なんかある…
…がユーコン基地におくった魔ドムでわかっちゃったからね～」

ナギ少尉「ところでウォーケン少佐とかどうするの？
またすっぽんぽんの裸にして送り帰すの？」

作者「それは次回…のお楽しみに…サブタイトルは帝都動乱終了…
そして日常へ…」

ナギ少尉「なんか日常って何回でたの～？」

第９０話　帝都動乱後の日常　投稿日２０１１０３０４　修正１

２００１年９月６日

クーデターがあけ…翌日…

（とりあえず沙霧大尉は確実だとして…
あと誰がくるんだろ……？）

と思いつつ、ハンガーに来ると…

水月さんが鬼の様な形相でいた。

回れ～右駆け足…

「カオル！！」
と捕獲されました。

「え…えっと…？？」

「シュミレーターの相手しなさい！！あんたは未改造撃震だからね！！」

「１１号！アムロさん呼んできてぇぇぇぇ」

ドップラー効果で引きずられてくカオル…

11号アムロを探しにフヨフヨと…

［アムロさん］

「ん？11号か…なんだい？」

［マスターが呼んでます］

「何ようかな？」

［さぁ？…引きずられていかれたので、用件聞けなかったのですが…］

「カオル君がかい？…石橋にか？」

［いえ、水月にです］

「……ああ、あの娘ね……と、カオル君の処にいってくるか」

［よろしくお願いします］

アムロさんをアテンドしてマスターの処にいくと…
シュミレーター室で制限かけられてフルボッコにされいた。

管制台に行き、
「マスター、アムロさん連れて来たよ～」

『お、サンキュー…さて、どう負ける……？？』

暫くすると、マスターが出てきた。

「ちょっとカオル！！まだまだやるよ！！」

「勘弁して下さいよ……アムロさん、彼女を手なずけてもらえます？」

「ああ、しかしあんなに怒ってなければ…
可愛いのに…もったいない」

「アムロさんが相手してくれるってさ～
宇宙世紀におけるエースオブエースだよ」

「！！…相手になるわ！！」

「後は、よろしくっす」

「ああ」
アムロ大佐と入れ代わり……１１号の側へよってきた。

「１１号さんきゅ。まぁ後はアムロさんが水月の相手してくれるだろう…
にしても、昨日逃げてたからなぁ…俺も…」

その後カオルは、後始末が、まだすんでないアメリカ軍の件をすまそうとしていた…

向こうは夜だろうと関係ない。の強気だったが……

「こんばんは、大統領」
国際衛星電話…

『渚カオル殿、待ってたよ』

「では早速ですが、第６６機動大隊についてなのですが…」

『ああ、君のところが不当に拘束している部隊の事だね？』

「は？不当といいますと？」

『わたしは、君のところが、我が軍の機体を勝手に攻撃、
武力で脅迫して拘束した…と報告をうけとるんだが』

「は？？全く違いますが…」

『よって君のところに、
工場設備の技術提供請求をしようと思っていたところなんだよ』

「大統領！！それ本気で？」

『本気だが？』

「……この通信内容を聞いてもらえます？」

第６６機動大隊とであった時の通信内容を流した。

『ほう……これの出所は？』

「自分の機体からですが？」

『我がアメリカ軍機からでは無いのだね？
音声加工されてるのでは？』

「アメリカ軍機は…」

［マスター…アメリカ軍機はログが残って無い…］

（嵌められたか…）

『よってわたしとしては、
部下からの報告を信じてきみらに工場設備の技術提供請求をしようとしてるんだよ』

（ＣＩＡの密談とかも駄目っぽいな…なら）

「１１号、ファイルナンバーＺ－１を」

［使っちゃうの？］

「ああ…」

「今から流す内容をよく吟味して下さいね…大統領」

『まった…我がアメリカとしては』

回線を勝手に切り替えた。

「ふう……さてと…どう処分してやろうかフッフッフッ」

［マスター…怖い…］

暫くすると…回線呼び出しが…とると、

『き、きみぃ…な、なんだねあれは…』

「え？いやなに、選挙戦の不正の数々と、
不正献金の数々と、愛人とのやりとりとかですね～

勿論映像媒体、裏つけ証拠付きですよ。
かなりおさかんでしたね～」

『こ、これを…どうするのかね？』

「マスコミに公開したら面白い事になるでしょうねぇ～♪」

『や…やめてくれ…それだけは頼む…』

「言う事聞き続けるなら、いいですよ？」

『……わかった』

「えっとじゃあ第６６機甲大隊なんですが彼等をそのまま下さい」

『ああ…手配する』

「あとは、彼等の家族難民キャンプに入っているようですが、
市民にする事できません？」

『……多分すぐには無理だろう』

「…ならこっちで引き受けましょう」

『わかった手配する…』

「とりあえずは」

［マスターＸＧ－７０］

「ＸＧ－７０？」

［副司令がほしいっていってた］

「あと、ＸＧ－７０も下さい」

『わかった……』

「とりあえずそんな事です…あとはそうですね～
その報告書の出所疑ったほうがいいですよ。
でなきゃこの手使わなかったかもしれませんし」

『ああ…』

「では失礼～」
大統領との回線をきった。

「１１号、あと資料どれ程あったっけ？」

［愛人とのメイクラブ中と、もう一人の愛人とのメイクラブ、
あと企業からの不正献金、脱税、あと１４歳に対してのおさかん］

「引き続き情報収集頼むよ」

［イエス・マイ・ロード……ところでマスター第６６機甲大隊まるごともらうの？］

「後催眠とか仕込まれてて、使い捨て、可哀相じゃん」

［まぁ……マスターが決めたなら……］

「まぁっうことで２５号に案内させてね」

勿論、捕まえたあとアルミサエルの力でもって後催眠やＣＩＡの計画陰謀、
またその他色々なものを引き出し、また家族環境を考慮した上で、
洗脳解除は施した後だった。
テスレフ少尉の発砲は洗脳し、仕組まれていた……事だった。

アルフレッド・ウォーケン少佐は、
陰謀の数々を吹き込んだらうなだれてたので暫く放置中だった…

「カオル殿」

「あ、ラトロワさん」

「機体の話なんですが、我が隊にあのケンプファー合いますね」

「あ、じゃああれにしちゃいます？」

「お願いします」

ジャール大隊、総員２４名分の機体が決まりました。
因みに本編にはかかれてませんが、
高周波ブレードを、
足、腕の外側に装備したのはお約束。

「まぁ、これで決まった事ですし、やわい戦術機とはおさらばですね」

「ええ…今度の機体の装甲には目をみはるものがありますよ。これが戦術機にあったなら…」

「基本地上の重力では生産できないっすからね…」

「あったなら…今までいった部下達も逝かずにすんだのに…」

「ま、これからは死人出ないと思いますので…ジャール大隊の腕ならね」

「はい！！」

ラトロワさんが別れていって…

さて…明日いく予定だから、やり残した事はないかな？とおもってたら、

よれよれになったバーニィが来た。

「バーニィお疲れ」

「カオル……」
ヒョイッと、ユンケル皇帝液ロイヤル３０００を渡す。
「サンキュー」
一気に飲むバーニィ。
「プハー…病み付きになるね…この味」
「で、今解放されたん？」
「ああ、そうさ…本当ヒルダ様は、いつ寝てるんだ？なんだが…」
「俺の聞いた話を合わせると寝てないっう話だぞ」
「マジ？」
「ああ、Ｃ－０１が相手してた時間のあと、執務室はいっているのを確認してるし、
ある程度の時間のあと、また別のＣ－０１が相手してるってさ…」

「あの人ならありえるか……」

「なぁそんなに凄いの？」

「ん？カオルは相手になってないん？」

「まだね」

「あの人の凄さは味わってみないとわからねーよ…
まさにグリングリンな世界さ」

「……」

「けどなぁ」

「けどなぁ？」

「俺も戦場に出たかったな…」

「…どして？」

「まぁさ、まだ両手で数える位しか出てないんだぜ…」

「あ～うん」

「で、たまたま……さ、相打ちでクリスの乗るガンダム撃破したとはいえね…
やっぱり経験じゃん…やってけるかなぁ～の不安があるわけだ…」

「……」

「でもって昨日戦いにすら呼ばれなかった…
まぁ相手がヒルダ様であるからしょうがないけど…」

「……」

「戦いたかったんだよね…俺は…」

「やっぱり４人じゃ対応しきれない？」

「正直、うん！！と言わせてもらうよ…」

「まぁわかった……考えとくよ」

「うんじゃあ…医療カプセルいってくるわぁ～」
ひらひら振りながら…うん背中が煤けてみえる…

（さて、第６６機甲大隊の機体は……後でいいか…
まずはシュミレータ訓練からだからな…）
机を叩きながら…

（ふむ…先にいけにえか…となると無駄遣いはできないから…っと…）

シャトルの生産２００機、
あと魔ガルダ級の生産のみにとどめた。

魔ガルダ級の改造要点。
メデューシンを参考に、
エンジン構造をかえ、４発→８発に変化

また離陸、着陸距離の短距離化を目指した。

［一週間程、時間頂戴～］

「よろしくなぁ～」

……

カオル報告

ジャール大隊機体選定、魔ケンプファー２４機

人員吸収　第６６機甲大隊

魔ガルダ１機注文

シャトル２００機追加

第９０話　帝都動乱後の日常　投稿日２０１１０３０４　修正１（後書き）

作者「さて次の世界は……」

桜井隊長「作者さん、わたしの事忘れてませんか？」

作者「お、桜井さん…活躍しまくったじゃないですか、動乱では」

桜井「ミスリルにお株かなりとられたし…かかれてないし……」

作者「まぁまぁ…」

桜井「ねぇ、カオルといつ結ばせてくれるんです？」

作者「個人行動しないと無理じゃ？」

桜井「……コバッタ達に…」

作者「あ～かれらは赤ちゃんが欲しい！！
という原理だから無理だと思うよ」

桜井「作者…絞めるよ…」

作者「ちょ！！やめ…おま……グェ」

作者チーン

ダイニングメッセージ　ＳＥ…

第９１話　ＳＥＥＤ編　ヘリオポリス　投稿日２０１１０３０５

２００１年９月７日…

（さてと人材確保だなぁ～何処いくか……
とりあえずバーニィの俺も戦場でたかったな…か…ん～～
あ！！ＳＥＥＤ！！美形をいけにえにできるな…狙うは……）

「いってくるよぅ～」

［いってらっしゃい」

「”世界扉”」

＝＝　ヘリオポリス　＝＝

コズミック・イラ００７１　１月２４日

用心して一日余裕みたのが正解だったようだった…
（あちゃー座標間違えたっぽいな…）

衛星を打ち上げて…
ヘリオポリスへと向かう。

二日目
なんとか本編前にはつけるようだった。

幻影をかけ…
ヘリオポリスに到着する。
ヘリオポリス自体と同化してると…

兵装作業中のアークエンジェルを見つけた。
あと、アストレイも……

ヘリオポリス内のその他の重要拠点の場所を確認…
したのちに、意識をアークエンジェルへ…
勿論取り付くと……
艦内では……
「おう、この新造艦、アークエンジェルっう名前なんだろ?」
(作業員か…完全同化すむまで暇つぶしに聞くとしよう…)

「ああ。で?」

「実はよう二番艦の名前が、ドミニオンっうのが決定してるらしいんだ」

「アークエンジェルって確か天使の階級だったよな?」

「おうよ」

「で次はドミニオン…これも天使の階級だよな？」

「ああ」

「となると三番艦は……やはり天使の階級か…」

「な、賭になりえるだろ？」

「だな……じゃあ、ナタル少尉のシャワー写真」

「うぉ！！おめえ、良く手に入ったんだなぁ…」

「へへへっ…苦労したぜ…」

「なら……ナタル少尉の使用済み下着、真空パック保存」

「うっ！！あの騒ぎの犯人お前だったんか！」

「ふふふ…まぁあのお宝手に入れるの苦労したぜ…」

「賭は成立だな？」

「ああ！！次の三番艦の艦名だな…」

「俺は座天使…スローネやスローンだな…」

「俺は…力天使…ヴァーチュズやデュナメスだな」

「よっしゃ…じゃあ決まったら…」

「ああ、お前のお宝貰ってやるさ♪」

（ナタルさんの流出ものねぇ…）

カオルは同化が完了したので離脱し…
端末にアークエンジェルを覚えこませた。
次にアストレイの配置してあるハンガーに潜入した…
（ふうーん…やっぱり最高機密だから、誰もいねえか…）

無難にレッド、ブルー、ゴールドを取得。

おつぎは…民間船に偽装したマルセイユ三世級に向かう。

（確かドックに入港中だったな……あった）

艦と同化し、格納庫を目指す。

（メビウスゼロ　ガンバレルが有効なんだよな……見っけ）

メビウスゼロを取得し、

（さていくか…）

すぐに離脱し、ヘリオポリス内のモルゲンレーテの工場を目指す。

モルゲンレーテ工場に侵入すると…

まだ敵を察知してない為、まだ工場内にて、調整作業中のG達があった…

勿論喜んで取得…してると…

「なんですってぇ！！」

とマリューさんが叫んだ…

途端に空気が変わる工場内……

「はい、はい…わかりました…」

受話器を置くと…表情をかえ…

「みんな！！聞いて！！……
ザフトがこの中立のヘリオポリスに侵攻してたの…」

ザワザワ
「このヘリオポリスにか…」

「艦長からは、大至急Ｇを搬入…って事で、搬出作業にかかって！
！調整作業は打ち切り！！作業開始！！」

「おう！」「やったらぁ」「コンテナパケ急げ！」
途端にちりだす作業員達…
いかにこのＧ達が重要かわかっているのだろう。
マリューさんは表の方向へと駆け出していく……

…

ガガガガガ
「そこー！その武器はこっちだ！間違えんな！」

ピピーピピーピピーピッピッピッピー
「かかれー！」
たまかけしてた、ＭＳサイズの銃にかかる作業員達…
台座にちゃんと載ってるかの確認や、クレーンの玉外しにかかる。

「ＯＫだー！！」「次かかれー！！」

ピーピーピーピー

「よーしっコンテナハッチ閉鎖！！」

その頃、工場表のゲート付近では……

「１０２　３０４武装コンテナ搭載完了！！」

「だして頂戴！」
マリューさんが陣頭指揮をとっていた。

第一陣のトラックが出ていった…

「１０２コンテナ積み込み完了！」

「１０２も出して頂戴！！　アークエンジェルへ！急いで！」

その時……
ゴゴゴゴゴ
特殊部隊の仕掛けた爆弾の爆発によりコロニー全体が揺れる
「う、うわぁ！」

「な、なに？？」

「中！！無事なの？」

「負傷者一名出ました！！」

「程度は？」

「転落による骨折のみ、医務室へ搬送中！！」

「そう。さあさあ急いで！！」

「おう」！！

「２０７、１０３でます！！」

「３０３武装コンテナ車もでます！」

「気をつけて！アークエンジェルへ！」

「あと残りは…」

「奥にある３０３、１０５です！！」

「１０５は武装コンテナ車が別工場だから…厄介ね」

「ラミアス大尉！艦との交信途絶。状況不明」

その時…ジンが…飛行接近してきて…

「！？」

バラララララドドドーン！！

「…うわぁ！」

ジンの機関銃を受けた車両等が爆発し…また銃撃を避ける人々…

当たった人は、既に肉片へと化した……

「ザフトの！！Ｘ－１０３と３０３を起動させて！とにかく工区から出すわ！」

「分かりました！」

「負傷者いるぞー！！担架！！」

無事な者は、負傷者救護また、ガンダムを起動しようと散らばっていく…

「１０３起動してきます！！」

「気をつけて！！」

「Ｘ－１０５と３０３は？」

「今初期ＯＳを緊急でインストールしてます！！」

「テストＯＳが間に合えば……無いものねだりね…」

「対ＭＳ戦用意しますか？」

「ええ…して頂戴、残りの者は、工場内の１０５、３０３の起動を！！」

ラミアス大尉達が工場内に走りだしてく。

その後ろではミサイルジープにのった兵士達が、工場を護るように…

ラミアス大尉が駆け込んでくると……

「作業状況は！？」

「インストール中！！１０分です！！」

「１０５の各種武装コンテナ出たそうです！！」

「工場内で起動するわ、バッテリー状況！！」

「あと２０％！！」

「大丈夫ね…」

「他の作業はないのね？」

「はい！インストールだけです」

暫くすると……

「ラミアス大尉！！１０２、１０３、２０７が敵の手に墜ちました…」

「くっ奪取が目的なのね…総員陸戦用意！！
モルゲンレーテ関係者は避難して頂戴！！

工場のゲートを閉じて！
起動できるまで、立て篭もるわよ」

「はっ！！」

「プログラムインストール急いで！！」

「やってます！！暫く時間下さい！」

「ＯＳがないと、ただのデクの棒よ」
カオルは彼等に続いてゲートに向かうと…

「うわぁ！！」

「ゲートをなんとしても閉鎖しろ！」

「なろっ！！」

「ギャ！」
ゲートの閉鎖スイッチに取り付こうとした作業員が撃たれた…

バン！！
閉鎖パネルが、壊され…

「パネルやられた!!手動弁へいそげ!!
ゲートから入れるな!!」

バリケードを盾にザフト兵を向かえうつ作業員達…
しかし、所詮は作業員だ……
「ギャ!!」
また一人、

「グォ」
また一人、

カランカラン
手榴弾が投げ込まれドドーン!
また二人死亡…
一方的な侵攻になっている。

ゲートから赤服が2人、緑服が5人侵入、
ラスティンと、アスランだろう。
緑服が三人程別れていった…
(ん?人数あわないな……)

別れた二人人についてくと…また別方向へと別れてく。
(どっちかな?…こっち!!)

彼についてく事にした。
彼は、キョロキョロ探しものしてたようだが、タンクルームを見つけると…

爆弾をだし…セットしはじめた……設置しおわって…立ち上がりをバーン

作業員が見かけて撃ってきた。緑服は撃たれて倒れたので…
その作業員はすぐに移動しはじめ…

カオルは医療カプセルを出し、作業させ、虚数空間にほうりこんだ。
（うまくすりゃーなぁ～）

その頃ラミアス大尉周辺では……ちっと時間遡りますが……

「敵ザフトがゲートより侵入!!閉鎖間に合いません!!」

ドドーン

「クッ……時間稼いで頂戴!!１０５、３０３だけでも起動するわ!!」

「はい!!」

「ラミアス大尉!!」

「ありがとう」
パラララララ銃声が聞こえ始めた…

「物陰に隠れて!インストール状況は?」

「あと5分下さい！！」

「急いで、敵はザフトよ、Gがないと持たないわ！！」

ドトーン！！
大爆発がおき…
「うわぁぁ」「クッ」「うげぇ！」
爆風が１０５にもかかり、転落した人もいた…

「シェルターが！！」

「クッ…なんて事するのよ…民間人もいたのに…」
見ると…ドアだけになっているシェルターがあった…

「ザフト陸戦隊だ！！」
ババババババ
いよいよ工場区域まで侵入してきたザフト兵がみえた。

「クッ時間稼いで！！
タケル！ヤマダ！ウォーケン！前にいってちょうだい！」

「了解！！」

「うわぁ！」

「手榴弾！！」

「ふせて！！」

ドーン

「ザフトがなんだ！！ギャ！」

「敵の数は少ないわ！！落ち着いてねらって！！数は優勢よ！」

「大尉……ですが…」

「ええ……射撃の腕は…ね…後何分持ちそう？」

「増援がいなければ、ギリギリかと…」

「あなた達動かせる人はできるだけ、後方で援護射撃よ」

「はっ」＊４

その、一方的銃撃戦が続くなか３階デッキに……

「あー！？」
キラとカガリがみえた。
「こ、これって…」
「…やっぱり…地球軍の新型機動兵器…うっ…お父様の裏切り者ー！」
大きい声で……きづくよな…そりゃ…
「ちっ！」
背後を振り返りながら射撃するマリューさん。
「あっ…冗談じゃない！」
銃撃をやめたマリューさん…
「…子供！？」
キラとカガリが走ってく…
「泣いてちゃ駄目だよ！ほら走って！」
マリューさん振り返り…
「インストールは？」
「あと2半分下さい！！」

「なんとしても起動まで時間稼ぐわよ！！」

「はい！！」

「あそこの緑うって！！」
ババババババ！

「今のうちにブライアンダッシュ！」

キュンキュン
「なんとか命びろいしました！」
囲まれかけてたブライアンを包囲から救出した。

「ハマダ！！残弾！！」

「下さい！！」
マリューさん投擲するが、
キュイン
「なっ！」

あさっての方向へ…

「もう一つ！！」

もう一回投擲し

「ありがとうございます！」
キャッチできたようだ。

「うわぁ！」

「ジョンソン！！」

ババババババ
「なろぅ！！」

「あそこの赤！！」

「おう！」
ババババ
集中され、遮蔽物に引っ込むアスランかな？

「ハマダ！！こっちに！」

ハマダがダッシュし…遮蔽物に潜りこみ、再び射撃開始する。

……
カオルはこのころにやっと戻ってきた。
（ふへぇ…一気におしこまれてらぁ…）

「インストール完了です！！」

（……キラは？となると上のデッキか……）

「生き残ってるのはブライアンと誰？」

カオルは壁と同化し、３階のデッキへとのぼる。

「ハマダです！」

「ユズルハです！」

「カミーン！！」

手榴弾が投げ込まれ今叫んだカミーンが…

ドカーン

爆死する…

「うおぉ」

手榴弾が打ち込まれ…

ドカーン！

爆発しまた一人巻き込まれた。

「ラミアス大尉！」

「ハマダ！ブライアン！早く起動させるんだ！」

「あ！？危ない後ろ！」
マリューさんが3階デッキへうち放つ。
見事に手応えあって…倒れるザフト兵。

（イッタダキマース）
すぐさま引き込み…

「さっきの子？まだ！」
医療カプセルをだしいれ…

「うわぁ！！」

横にいた整備兵が撃たれ倒れた。
すぐさま、マリューさんが、機体をすべって、ピストルで、
パンパン！！
「うお！」
2連射！！胸に直撃うけ…倒れる緑ザフト兵…
（あれは無理だな……間に合わんし…）
カプセルを作動させ、虚数空間に引き込んだ。

「来い！」

「左ブロックのシェルターに行きます！お構いなく！」

「あそこはもうドアしかない！」

「え！？……うわぁ」

ドーン！ボフゥー

通路から爆風が吹きだし、間一髪さけたようだ……

みえねえんだよ！！この位置じゃ！！

「こっちへ！」

キラが、空中通路から飛び降り、

「あっ！」

それを見上げるマリューさん……

「はぁっ」

キラが、衝撃をなんとかころし、着地したのが見えた…

（そろそろか）

「うわぁ！」

「ラスティー！」

（イッタダキマース）

引き込んだ瞬間物陰にもうダッシュ…

医療カプセルを出し、ラスティンを医療カプセルに入れて…

「うおおお！！！」

「うお！」

「ハマダ！うわぁ！」

「あ！…」

作動させ、虚数空間へ……
の一連の作業の間に、アスランは突撃し、一人を射殺、
マリューさんをうち、それに気がついたキラが声あげた…

アスラン　「えーい」
（？）

キラはマリューさんへ
飛び上がりストライクの上を疾走しはじめるアスラン。

「うっう」

「はぁはぁ……アスラン！？」
「！？キラ？」
ナイフで切り掛かろうとしたが…
声がでた時、動きを止めるアスラン……

「くっ！」「　あー」
その隙に、ストライクのコクピットへ、ひきづりこまれるキラ…
アスランは、もういっきのイージスへと向かい、飛び渡っていく…

グレネードがうちけまれ、ドゴーン！！
爆発、炎上する
（もう逃げないとな……）

さらに通路から大爆発がおき、さらに炎上

なんとか逃げ出せた。

『ヘリオポリス全土にレベル８の避難命令が発令されました。住民は、すみやかに最寄りの退避シェルターに避難して下さい』

カオルは放送の最中、世界扉を潜る…

……

カオル報告

アークエンジェル級
メビウスゼロ

バスター
ブリッツ
デュエル
ストライク（未武装）
イージス
取得（要ＯＳ入れ替え）

アストレイレッド、ブルー、ゴールド

３５０ｍｍレールバズーカー

第９１話　ＳＥＥＤ編　ヘリオポリス　投稿日２０１１０３０５（後書き）

作者「という事でラスティンは無事に生き返るでしょうか？」

ナギ少尉「でＣ－０１部隊入りであんな事やこんな事を仕込まれるのね……
ヒルダサッキュバズの毒牙にかかって…」

作者「さすが、道筋わかっているね～」

ナギ少尉「あ～もうそうぞうしたら…艦長襲ってこよ～～かっこはーとかっことじ」

タッタッタッタ…

作者「お～い…後書き中……ううん…え～次回は…引き続きＳＥＥＤ編、サブタイトルは　大天使、流星がみゆ　お楽しみに～」

第９２話　ＳＥＥＤ編２　大天使、流星がみゆ　投稿日２０１１０３０６

三日目
コズミック・イラ００７１　２月１３日

カオルは世界扉からでた…
衛星を打ち上げ、アークエンジェルを検索し、宇宙に飛び出した。

その頃目指す目標の真横についている、
第八機動艦隊、メネラオスのブリッチでは……
「レーダーに感！！」

「ん？照合いそげ…」

「艦船クラス……３」

「合流予定は？」

「なかった筈…」

「艦船照合！！ナスカ級１、ローラシア級２、グリーン１８、距離５００。予測、１５分後です」

「なにぃ！！こちらへ向かってきているのか？」

「くっそー、こんな時に！」

「全艦につげよ！！」

「はっ！」

「総員、第一戦闘配備！繰り返す！総員、第一戦闘配備。当艦隊は、敵艦隊と間もなく会敵する！！」

「提督、気密服に…」

「うむ…先に着替えてくる」

「作戦陣形は密集陣形だ、二重に先陣列をとれ！！」

「ブリッチ要員も早く着替えろ」
半分程着替えに席を立つ。

「避難民ランチは？」

「まだアークエンジェルを発進してません」

「発進を急がせろ」

シュン

「遅くなりました！！」

ブリッチに気密服きたオペレーター達が入ってきた。

入れ代わりにまだ着替えてないブリッチ要員が出ていく。

「各武装チェック！！」

「オールグリン！」

提督が入ってきて、入れ代わりにホフマンが着替えにいく…

「迎撃スタンバイ完了です。弾薬補充率９８％」

「ランチ、アークエンジェルを発進しました」

「避難民は、ランチ収容しだい、シャトルへの移乗をすませよ」

ホフマンがもどってきて、戦闘準備が整った。

「格納庫、ランチ収容しだいハッチ閉鎖、避難民は速やかにシャトルへ誘導」

「各艦艇よりメビウス発進します！！」

「全艦、密集陣形にて、迎撃体勢！
アークエンジェルは動くな！そのまま本艦に付け！」

「ワルキューレワン、ワルキューレツー、
発進！Ｎジャマー、展開！アンチビーム爆雷、用意！」

「補給艦、離脱！」

「ランチ収容、ハッチ閉鎖！」

カオルはこの頃、アークエンジェルを目指して艦隊が見えてきた。
（え～と…アークエンジェルの横のでっかいのがメネラオス？？）
カオルは大気圏脱出速度の勢いをころすと、接触して同化しはじめた。

（お、当たり？）

「ママー」

「な～に？」

「あのおにいちゃんまたわたしを、まもりにいったの？」

「そうよ～エルをまもりにいったのよ～」

「すみません！！シャトルへの移動急いで下さい！！」

「やれやれ…ついたと思ったらまた移動かい…」

「あ、荷物～」

「ほれ」

「ありがとう♪」
とかのやりとりでぞろぞろと避難民たちが移動していた。

「シャトルはこっちです！！」

「速やかに乗船して下さい」

「ママーこれにのるの～？」

「ええ、そうよ～。これに乗って地球へ行くのよ」

「なんかちっちゃいね…もっとおっきいおふねにのりたいなぁ」

「あのね～エルちゃん、地球におりるにはこのちっちゃいお船しか駄目なのよ」

「う～～…わかったぁ～のるぅ」

「うん。いいこね。エルちゃんは」

「乗船しましたら、各座席につめてお座り下さい。
荷物は荷物棚に、シートベルトはしっかりとおしめ下さい」

またメネラオスブリッチの少し前では……

「敵艦隊より長距離ミサイル！！」

「迎撃せよ！！」

各艦艇よりパルスレーザーが上がる
宇宙に咲く火花……

「迎撃率１００％すべて撃ち落とせました！！」

「定石ならこの後、ＭＳどもがくるぞ……
各ＭＡ展開状況！」

「ＭＡ全機発進済みです！！」

「メビウス隊前進！！敵ＭＳを近づけるな！！」

……

「メビウス隊敵ＭＳ隊と接触！！……データー送られてきます…
ジンタイプが９の他に、
敵群にＸシリーズ機あり、Ｘ－３０３　Ｘ－１０３　Ｘ－２０７
Ｘ－１０２！！」

「ぇぇぃっ…イージス、バスター、ブリッツ、デュエルか…！」

「確かに…見事なモビルスーツですな。が、敵ではやっかないだけだ。
あの４機、なんとしても落とせよ！」

「メビウス隊、各艦はメインターゲットをXナンバーへ！！」
しかし、艦隊でもってしてもキルレシオメビウス：ジン＝１：３になる、
ジンだけでなく、Xナンバーを有したクルーゼ隊には叶う事がなく…

「セレウコス、被弾、戦闘不能！」

「カサンドロス、沈黙！」

「アンティゴノス、プトレマイオス撃沈！」

「なんだと！？戦闘開始たった６分で、４艦をか！」

「敵ナスカ級、及びローラシア級接近！」

「セレウコス、カサンドロスに突撃照準！」

「ぬぅ！？」

「メビウス隊損耗率１５％突破！！」

離脱中の船が、ビームに貫かれ爆沈……

「…ああ！」

「離脱中の艦を……おのれクルーゼ！」

「セレウコス、カサンドロス共に、爆沈です……」

ｓｉｄｅ～あるＭＡ乗り～

はぁはぁはぁはぁ

「ぬぅぅぅぅぅ！！」

強烈なＧが襲う…

がこのＧに負けた時、後ろについているジンが機関銃を撃ってくるのだ…

はぁはぁはぁはぁ

目の前が黒くなりはじめる。

まだジンを振り切れない…

（かぁさん……）

その時、追っていたジンが大きな火花となった。

『おい無事か？』

「あ、ああ…なんとかな……サンキュ」

相手のジンは追いかけっこに夢中になったのだろう。
横からの攻撃に気づかなかった模様だ…

「たく、コーディネーターめ…ざまぁみろ…ヴァ」

しかし彼の機体も…バスターが放ったビームで戦場の火花となった
……

ｓｉｄｅ～ＭＡ乗りｅｎｄ～

「駄目です！！メビウス隊損耗率３０％突破、敵ＭＳ群、特にＸナンバーに歯がたちません！！」

「クセルクセス、パリス、前へ出ます！」

「Ｘナンバー、接近！」

「ビームを使うんだ！落とせ！」

「アークエンジェルより、リアルタイム回線」

「…なんだ?」

上部スクリーンにマリューさんが映しだされた。

『本艦は、艦隊を離脱し、直ちに、降下シークエンスに入りたいと思います。許可を!』

「なんだと!?」

「自分達だけ逃げ出そうという気か!」

『敵の狙いは本艦です!本艦が離れなければ、このまま艦隊は全滅です!』

「うっ…」

『アラスカは無理ですが、この位置なら、地球軍制空権内へ降りられます!
突入限界点まで持ち堪えれば、ジンとザフト艦は振り切れます。…閣下!』

「ぬぅ……。」

考えてる間に爆沈する戦艦が映った……

「マリュー・ラミアス。

ふん！相変わらず無茶な奴だな」

『…部下は、上官に習うものですから…』

「いいだろう。アークエンジェルは直ちに降下準備に入れ。

限界点まではきっちり送ってやる。送り狼は、1機も通さんぞ！」

『はい！』

スクリーンからマリューさんアウト

「クセルクセス爆沈！！」

「ゲオルク、艦内にて誘爆発生！！沈黙です…いえ、豪沈！！」

「Xシリーズによるビームです！！ヘンデル爆沈！！」

一方その頃カオルは…船内の救助予定の要員をさがしていた。

第八艦隊は、全滅しなければ…ＭＳがあればかなり優秀、
しかも良識派だったので…まぁいるかなぁ～と思っていたのだ。
やはり艦内に何人か女性の後方勤務にあたるべき女性兵士がいた。

一人一人意識をたしかめ…目処をつける。

（ふむ…ターゲットだな…）

カオルは意識を艦内隅々まで延ばし、要員を選定していた。

さてブリッチに戻ると……

スクリーンに映しだされてるマリューさん。
『閣下！』

「うむ。アークエンジェル、降下開始！」
スクリーンよりマリューさんアウト

「メネラオスより、各艦コントロール。ハルバートンだ！
本艦隊はこれより、大気圏突入限界点までの、アークエンジェル援護防衛戦に移行する。
厳しい戦闘であるとは思うが、彼の艦は、明日の戦局の為に決して失ってなぬ艦である。
陣形を立て直せ！第８艦隊の意地に懸けて、１機たりとも我らの後ろに敵を通すな！

地球軍の底力を見せてやれ！」

「マリアナ中破！！戦闘不能！！」

「メビウス隊損耗率６０％突破」

「シェフィールド、爆沈！！」

「コモドア、爆沈！！」

「主砲、てぇ！」

「敵艦隊より主砲きます！！」

「バスター、デュエル先陣隊列突破してきます！！」

「落とせぇ！なんとしても、ここから先へ、通すな！」

「メビウス隊損耗率７０％限界です！！」

「カサンドラ爆沈！！」

「ベルグラーノ、撃沈！」

「限界点まで、あと５分！」

「閣下！これ以上は…これでは本艦も持ちません！」

「まだだ！」

「クロッカス爆沈！！」

「フィードル豪沈！！」

「アークエンジェルより、Ｘ－１０５ストライク、メビウスゼロ発進！」

「なんだとっ！？」

スクリーンにはストライクが出始めてきた。

「ラミアス大尉につなげ……ラミアス大尉！！」

『申し訳ありません…パイロットが聞かずに…』

「フム彼がか…いや彼ならやってくれよう…正直、敵に渡ったＭＳの被害大きすぎた…
盾にもならんとはな……」
スクリーンよりマリューさんアウト

「陣形確認！！」

「直援本艦含め２隻！先陣隊、残り１０隻！」

「先陣隊の様子は？」

「ストライク、ゼロにＸナンバーがいき、かろうじて右翼、左翼にいます！」

「ジン及び敵艦を通すな！！」

「はっ！！」

「敵を押し戻せ！！」

「メビウス隊、損耗率おちてきます！！」

「かろうじて立て直せるか…」

「ですな閣下…」

「やはり、ガンダム…正解だったといえたが……
敵に奪われた機体がいたかったな…」

「閣下…」

「時代はＭＳにやはりなってるのだよ…ＭＡではな…」

「あの機体がアラスカに届けば……」

「ああ、ストライクダガー…間もなく見える日がくるな…」

「敵艦隊より、ローラシア級進路アークエンジェルへとって、
突出してくる船あります！！」

「ん！！……あの速度…特攻か！！」

「何としてでも止めろ！！」

「進路上には我が艦と、クロッセウスのみ。他の艦は間に合いません！！」

「ぬうぁ！」

接近してくるローラシア級

「敵ローラシア級引き続きアークエンジェルへ進路とっています。直援クロッセウスより、ワレトッカンス！！」

「バージィ……」

クロッセウスが突っ込んでくるガモフと、撃ち合い、
そして爆散してく…敵のガモフは今だ健在だった。

「クロッセウス…爆沈、敵ローラシア級、被害中、突っ込んできます！！」

「むぅ」

「ぬうっ！」

「主砲！！何としてでも当てろ！！」

「……指揮を先陣隊に渡せ！！当艦は何としてでも止める！！」

「了解！ベルセウスへ指揮移譲します！」

「敵ローラシア級、進路引き続きアークエンジェルへ！！」

「差し違えるつもりかっ！？」

「すぐに避難民のシャトルを、脱出させろ！」

「…あぁ…」

「ここまで来て、あれに落とされて、たまるかっ！」

「避難民をのせたシャトルでました！！」
カオルは艦全体に広げ監視をしていた。
「オープンチャンネルで避難民シャトルと警告はしたか？」
「はい！！」
「よし、後は敵艦を撃って撃って撃ちまくれ！！」
ゴゴゴゴゴ
「被害甚大！！」
敵ローラシア級とのガチの撃ち合いによる振動がブリッチを襲う。
「うちかえせ！！敵艦を通すな！！」
そして、
「敵ローラシア級爆沈！！」
スクリーン及び艦橋から、撃ち合ってた、ガモフが爆沈する
「うおっし！！」
…が…
「エンジン出力あがりません！！」
ガモフからのビーム射撃により、エンジンブロックからの整備兵の
反応がないばかりか、

ブリッチからの反応も無くなっていた……

「これまでか……皆すまぬ…」

「提督…」「提督」「旦那さん…」

「アークエンジェルにつなげい」

『提督!!』

「ラミアス…後は頼むぞ、アークエンジェル、ストライクをアラスカに…」

『提督!!脱出を!!』

カオルは、監視していた対象を次々と引き込み始めた。

「もう無理だな……それよりラミアス、
わしの最高の部下と話してたほうが有益だわい…」

『ハルバートン提督……』

「くれぐれも、重ねて頼むが、希望の光を…」

爆炎がブリッチを襲う。
その寸前にハルバートン提督をシェルターにいれ、離脱。
メリセウスは、大気圏離脱するに推力が撃ち合いでたりなくなり…
爆沈、となる…

カオルは離脱後、シャトルへと同化する。

「ママ～火花きれい～」

「……ええ、そうねエルちゃん」

「神様仏様…頼みますから地球へ」

「……」

「あ～ままぁ～、ガンダム～光だしあってる～」

「エルちゃん…」

デュエルとストライクの射線上を通りぬけ…
通りすぎたあとに射撃…が再開する。
（そろそろか…）
「”加速””加速””加速””加速”」
「ママ～なんか筒をこっちむけてるよ？」
「エルちゃん！！神様助けてくだ…」
エルまま我が子を抱きながら…
そして…ゆっくりとビームライフルの光がちかよってくる。
シャトル、デュエルのビームに撃ち抜かれる手前に…
カオルは乗客のベルトを切り刻み、一人一人をシェルターに引き込む。
加速の４乗をかけているからできる技だった。
乗客８９名全員シェルターに引き込んで、荷物棚においてある荷物を蓋を剥がしながら、
シェルターへと…すべての荷物を引き込んで、離脱…
大気圏に引かれかけている爆沈した戦艦から適当な死体を二つ程回

収、
虚数空間内の保冷庫に引き込んだ。
そして、カオルは、手短なザフト艦に潜り込むと、世界扉を唱えてまた世界を渡る。

……
カオル報告
アガメムノン級戦艦
精神力使い、疲れたので富山のリラックスインで

第９２話　ＳＥＥＤ編２　大天使、流星がみゆ　投稿日２０１１０３０６（後書

作者「ＳＥＥＤ編２話目をお送りしました～」

エル「ままぁ～あの人だれぇ～」

エルママ「エルちゃん、知らない人についてっちゃ駄目よ～」

エル「は～いママ」

エルママ「最近もね、エルちゃん位の年がデパートに一人で行って、誘拐、殺されたんですからね、注意してね？」

エル「ゆうかい？ころされ？ちゅうい？なんなの～？」

エルママ「ママとず～～っと会えなくなっちゃう事よ…いやでしょエルちゃん」

エル「いやぁぁ…あの人についてかない～」

作者「俺を指さんでも……ｏｒｚ」

作者、ＭＰダメージ１００００越えた…
再起不能におちいった…

エルママ「次回の内容いえる～？エルちゃん」

エル「はぁ～い、いぇるぅ」

エルママ「あの人が起き上がらないうちにいうのよ～」

エル「……ままぁこれよめない～」

エルママ「あ、ひらがなふるわね～」
カキカキ

エル「ちかいはぁ～くさひぃたちきゅるときぃ」

エルママ「よくいえましたぁ～」

エル「おちゃのちみにぃ」

第９３話　ＳＥＥＤ編その３　楔断ち切る時　投稿日　２０１１０３０７　修正

四日目
ホテルからチェックアウトの前、
おとおとい助けたザフトの救命カプセルを、
それぞれ出し作動状態を確かめた。

ラスティン…回復中明日まで
緑１…回復中明日まで
緑２…回復中明日まで

（うっし…いけにえ要員が三人か…けどね…
イケメンシネ！！つう感じだよな…
バーニィの頼みだからしょうがないけど…）

とりあえず彼らを同じシェルターに引き込んでおいた。

チェックアウト後、
世界扉でまた世界を渡る。

コズミック・イラ００７１　４月１５日

世界扉からでると…早速衛星を打ち上げ端末で、
アークエンジェルの現在地を検索する。

今の時期はオーブにいるからだ…
というよりコズミック・イラ独自の地形で、ソロモン諸島に属して
いるのはわかるが…

だった為だ。

アークエンジェルの現在地へと向かうと…
（へぇ…これがオーブか……）
いかにも大都会な大きな島へとたどりつく。
端末にオーブ…ヤラファス島と記録しておいた。

（で、この先がオノゴロ島ね……）
ナビの方向はそっちを指していた。

端末検索に戻り、
周囲、北側、２７０ｍ、潜水艦
と検索してみたら…
複数の検索結果が戻ってきた…
（ん～～～搭載ＭＳでわかるかなぁ？）

サブフライトシステム多数搭載、ガンダムタイプ
と絞りこむと…当該あり。
端末に案内させて飛び出す。

（あれか……）
艦に着陸すると、同化した。

「おぃ！アスラン、いい加減いつまでまてばいいんだよ！」

「イザークおちつけって」

「確証があるといったろ？」

「その確証は何なんだ！！」

「……それは言えない…」

「はっ！！その言えない確証の為に俺達は、はっているのかよ……
これでアラスカに足付きがいったらお笑い草だ！！」

「なぁ……賭けしないか？」

「賭けぇ？」「賭け？」

「ああ、そうだなぁ…イザーク、お前裸踊りでどうだ？」

「デ…ディィアッカ！！」

「まぁおちつけって…でアスラン、お前さんは一週間イザークの命令を聞くってのはどうだ？
軍や、命に関する事以外な」

「のった！！アスラン！一週間メイド服きさせてやる！！」

「いいのか？裸踊りで……」

「ああ、受けてたってやる！！賭けは勝ちだな！！アッハッハ」
ツカツカとイザークは休憩室をあとにしていった…
肩をすくめてあとに続くディアッカ。

「アスランさんのメイド服ですか…イマジネーションが沸きますね～♪」

「おいおい…変な想像しないでくれよ…全く…それよりニコルも俺が負けると？」

「ここまで待たされると、そう思いたくもなりますよ…約１５日以上音沙汰もないんですし…」

その時…

『レーダーに感あり、オーブ軍港からのレーダーに感あり、至急アスラン・ザラ隊長はブリッチへ』

「行ってくる」

「当たるといいですね♪」

アスランがブリッチに歩いて行くので、そのままついていった。

ブリッチに入りしだい…

「演習ですか？」

「スケジュールにはないがな。北東へ向かっている。艦の特定まだか！」

「戦闘準備入ります。特定、急いで下さい」

「オーブ軍とは事は構えたくはないですから、慎重にお願いしますよ」

「わかってます領空をかなり離れた時点で戦闘をしかけます。また前回のように逃げ込まれたら面倒ですからね……」

というと格納庫へ進みはじめた…

『総員につぐ…オーブ軍港より艦隊が出港した。
隊長より戦闘準備がだされた。
総員第二戦闘配備につけ』

カオルは、格納庫に意識をむけると…
グゥンと、デュエルアサルトシュラウドに取り付き、取得したあと…
今回のメインターゲットのブリッツへと向かう。

「アスラーン足付きですか?」

「だとおもうな…結果まちだ…搭乗しといて何時でもでられるようにな」

「ふん!どうせ足付きはアラスカさ」

「まぁ隊長様の命令には従おうぜ、イザーク」

「早くメイド服きさせてやる!!」

「機体の準備完了です」

「ありがとうございます」

『敵艦隊より、離脱艦あり。艦特定、足つきです！』

『え！？』

『ひゅ～～♪』

「当たりましたね、アスラン」

『出撃する！今日こそ足つきを落とすぞ！』

『は…裸踊り……』

『スマンイザーク…あきらめな』

『…ディアッカ…後で…』

『おれは賭けを提案しただけだぞ』

「はいはい…後で裸踊りスケッチさせてくださいね」

『ニコル！』

『三人ともそこまでだ…行くぞ！』

「バラスト注水確認よろし！ハッチ開放！進路クリア射出始め！」

『イザーク、デュエルいきま…す』

『ディアッカ、バスター　行くぜ！』

「ニコル、ブリッツ出撃します」

シュゴ！！とともに打ち出され…
遅れて打ち出されたグゥルに同調し着地する。

『アスラン・ザラ　イージス、出る！』

全機揃って編隊を組み直すと…
『アスランより各機へ…ボズゴロフは何時も通り誘導管制後は潜水退避し、

また各機は領海から足付きが２０ｋｍ離れた地点で攻撃を仕掛ける。
今日こそ足付きを沈めるぞ！』

『ああ』『…はい』「了解」

『ボズゴロフ、誘導管制たのむ』

『了解しました』

「イザークさん、戦闘ですよシャキッとして」

『裸踊り……』

『フッ、イザーク艦内一周らしいぞ』

『ディアッカ～』

『あ～まぁなんだその……裸踊りは無しでもいいぞ…』

『アスラン！！ホントか！？』

「え～」『はぁ…面白そうだったのに…』

『そのかわし、メイド服をだな』

『……』『ひでぇ』「鬼ですね」

『がいやだったら、足つきを今回で落とす事…だったら無しでいいぞ』

『うぉぉ足付きめぇ！俺は絶対おとしたる！！』

「単純」『だな…』

そうこうしているうちに……

「アスラン、あれ」

『ああ…』

『煙幕！？』

『チェッ！姑息な真似を！』

アークエンジェルがいると思われる地域に煙幕がもうもうとあり…
艦影が見えない。
その中から、スカイグラスパーが踊りでた。

『2機?』

「逃げた?」

『雑魚にはかまうな、足付き、ストライクの場所がわからないんだぞ!』

『煙幕うざいな…』

その時、煙幕の中からアグニが打ち出され…
『うっ!』『うっ!』『くっ!』「くっ!」
幸い中央を貫いた…

『散開!』

煙幕の中からアグニで各機が狙われて…

『あ!』

『くっ！ストライクっ！！』
バスター、デュエルが別れていった方向へ、ストライクが向かった。
「アスラン」
『ああ、ストライクはイザーク、ディアッカに任せる、足付きを探すぞ』
「はい！」
『こっから先へは行かせねぇよ！…』
『うわぁ！…あっ！』
グゥルに命中し、蹴落とされるバスター…
「ディアッカが…」
『なに?グゥルをやられた?ちぃ…足付きは後だ！』
バスターはグゥルが無いと行動が海上ではかなり制限される…
下手したらエネルギー切れで水没もありえるのだ…
『くぉのぉ！！』

ストライクに絡みにいくデュエルだが…
『うわぁぁ！！』
機関銃でグゥルのミサイル部分が破壊され…
地上へと黒煙をはきながら墜落してゆく…

「アスランそっちに！！」

『イザーク！チィ！』

「こいつぅ！」

ビームライフルを降下中のストライクに向け射撃をすると…
『ええい！…』

「アスラン足付き！！」

煙幕の下からアークエンジェルが見えはじめ、
『うっ！』
ゴットフリートが放たれる。
流石にあのクラスの主砲直撃は辛い…
『距離をとる』

「了解！！」

ヘルダートからミサイルが打ち出され…
『チィ！』
全弾迎撃に…
「アスラン！」

『ああ立て直すぞディアッカ、イザーク！』

『すまん水中に落ちた…』

『同じく、暫く無理だ…』

「……ここは自分らだけでしか…」

『だな…ん？』

スクリーン上ではストライクがアークエンジェル上で、
ランチャーをパージして…

「え？ＰＳ装甲をきった？」

『何をする気だ？……キラ』

空中に飛び出すストライク、
そこにスカイグラスパーからのエールパックが接続され…
シールド、ビームライフルを装備し、
エールストライクとなった。

「あいつ、空中で換装を！？」

『くぅぅ…』

ブリッツに迫ってくるストライク、
「うおおおお」
左腕のグレイプニールを打ち出すが、ビームで一閃され、真っ二つに…
「ちぃ！」
右腕を振り上げビームサーベルをだすと、迎えうち、鍔ぜり合い状態になる。

『チィ、雑魚は俺がやる！！ニコルはストライクを！』

切り合いになっている中…イージスはスカイグラスパーへ…
「わかりました！！クゥ」

上の方から切り掛かってきて受けるが…
「くっそー！」
グゥルがストライクの体重のせられた為に不安定になり、

一回制動をかけたところに…
「うわぁ！こいつ！」
スカイグラスパーが射撃してきて、右腕被弾してしまった…
「邪魔なんだよ……！！」

目がスカイグラスパー追ってしまい…
スクリーンには正面より切り掛かってくるストライク…
コントロールスティックを動かすが…右腕を切断され…
「うわぁぁぁ!!」
落下して…

『くっそー!ええい!』
「ぐぅぅぅ」
ブリッツは不時着し、衝撃をころしきれなかった
「ちぃハイドロ消失…再起動かかれ!」
『うおおお!!

「かかれ!…かかれ!…かかれ!!!かかった…ストライクは??」

『くぅっ!キラ　あぁ!』
「バッテリー残量……残りわずかか…」

『くっ!ぁ!チィ!なに!?』

「アスラン!?」
アークエンジェルから撃ち込まれるイージスが見える。
「…武装は……ランサーダートしかないか…」
ぎこちなく左腕から、爆発しないようにランサーダートを出しはじめる。

『何を!』
ランサーダートを結合し…結合部を絞め…

「アスラン待っててください」

『何を今更！討てばいいだろう！』
左手にランサーダートをもって一降り…
「よし！！これなら…
『お前もそう言ったはずだ！』
ブリッツは走りだし、
「アスラン…」

『お前も俺を討つと！言ったはずだ！』
ミラージュコロイドを作動させ…

『くっ！』

スクリーンでは殴られＰＳ装甲が、
バッテリー切れで解除されたイージスがみえた。

「アスラン！！間に合え！」ブリッツを走らせて、ランサーダートを握りしめ…
『！？』

「アスラン下がって！」
ミラージュコロイドがバッテリー減少の為自動解除になり…
「うあああぁ！！」
左腕にスピアを構えて串刺しにしようと繰り出すが…

かわされ……
「ぐわあ〝あ〝あ〝あ〝あ〝……」

ビームサーベルがコクピット内…ニコルの腹まで達し、
内臓を焼いている…
『！！　あぁ…ぁ…』

「アスラン…えげっ！」
吐血し…

「母さん…僕の…ピアノ…」

爆発する瞬間ニコルを引き抜き、緊急離脱…
医療カプセルにぶち込み…作動させるが…

（今度は駄目かな？）

とりあえず作動させるが、
ニコルの内臓は焼き切られ…
吐血する位になっている。

背骨までいかなかったのが珍しい……

心肺停止の状態にもう既になっていた……

やっと、デュエル、バスターがストライクを射程圏内におさめ、射撃するが、
上空よりアークエンジェルが援護してきて…

イージスはバッテリー切れの為、撤退し、
ストライクもアークエンジェルへ撤退していった。

カオルは世界扉で世界をわたった。

……

カオル報告

ボズゴロフ級潜水母艦

グゥル
デュエルアサルトシュラウド

ニコル助かれよ…

第９３話　ＳＥＥＤ編その３　楔断ち切る時　投稿日　２０１１０３０７　修正

ナギ少尉「……助かるの？」
医療カプセルみながら…

作者「といいんだがチートでもこれが限界かもなぁ…
吐血までは覚えて無かったし…」

ナギ少尉「ねぇ他に方法は無かったの？」

作者「まぁ無いことも無いだろうが…下準備が必要だろうだし…
で今回無理だとしたら、次回は無い。パラドックスの関係ね」

ナギ少尉「パラドックスねぇ…作者はおこるとどうなるって見てる？」

作者「映画タイムコップで同一人物が接触、互いの人物形成が崩れて、消滅する。ってね」

ナギ少尉「あと作者はＭｕｖ－Ｌｕｖでの時空間移動については？」

作者「誰かが死んだ、その事実を元に、過去に戻って変えた、元の

時間に戻ろうとすると……
別の自分がいる…パラドックス発生！！の考えです」

第９４話　ＳＥＥＤ編その４　閃光きえゆく者へ…　投稿日２０１１０３０８

五日目

ホテルをチェックアウトするまえに、
ニコルの医療カプセルを確認してみた…

カプセルは正常に作動して、順調に回復中だが一週間かかる…との事だった。

（ニコルをどう食うのかなぁ？？ビダンさんは…）

少し想像をしながら…チェックアウトし、朝飯を食べて世界扉を潜った。

コズミックイラ００７１　４月１７日

世界扉をでてまだ夜深いなか、アークエンジェルを検索し旅だつ…

まだ夜のうちに、アークエンジェルに着艦すると早速同化しはじめた。

格納庫内でウトウトしているキラの側で、

スカイグラスパーと、ストライクの各ストライカーパックもついでに取得した。

（……今なら肉ってかけるかな？？
……か、かき、かきたい…）

がカオルは自重し、ロッカールームへ意識を移動する…

ロッカールーム内部に入ると…

（えーっと…これがトールのか…）

扉を同化し、中のパイロットスーツ一式と同化すると、
死体をだし、死体の着てるパイロットスーツを変化させる。

（仕込み万端。あとは時間まで格納庫でまつか…）

死体を保冷庫に戻し…
時になるまで待つことにした。

そして朝方…場面はブリッチ

「ん？センサーに感！ボズゴロフ級潜水空母です！」

「えっ？」

「総員、第一戦闘配備！総員、第一戦闘配備！」

まずは最初に入ってきたのがノイマン、
ほぼ同時にチャンドラ?世が入ってくる。
「コントロール回してくれ」「渡した」

次にマリューさんが…
「状況は?」

「例のXナンバーの母艦とみえる、敵ボズゴロフ級潜水空母をキャッチしましたが反応消失、が小型熱源が3接近中です。」

「ほぼ間違いなく、イージス、バスター、デュエルね…ナタル、このまま寝ずにいける?」

「大丈夫です艦長」

暫くすると…
「「「「遅くなりました!!」」」」
トール、ミリアリア、サイ、カズイの面々も入ってきた。

「例の敵くるわよ」

「またですか」「しつこいですね」「……」「キラ…」

「さぁ戦闘準備ついて頂戴」

「「「「はい！！」」」」

……

「敵影３、５時方向、距離３０００」

「同方向より熱源接近！」

「回避！取り舵！」

「回避成功」

「艦尾ミサイル発射管、ウォンバット装填、バリアント、イーゲルシュテルン起動！」

「各兵装、起動スタンバイ、弾装装填問題なし！」

「１号機、フラガ少佐、出ます。ストライクは後部デッキへ！」

「ストライク後部デッキで迎撃体制」

「1号機でました」

「敵ビームきます!!…外しました」

「やり返すぞ!!バリアント、てぇ!」

「上空に避けた一機、デュエルです」

「目標デュエル!!コリントス、てぇ!!」

「左舷後装甲被弾、排熱20%許容範囲です」

「左舷よりバスター!!」

「ストライクは?」

「イージス、デュエルの牽制してます!!」

「少佐を!」

「うっ」「きゃ」「うわっ」

「左舷プラズマタンブラー部ラミネート装甲損傷！！次受けると危険です」

「少佐！！」

『あいよ！！』

「バスター、フラガ機へと向かいました」

「きゃぁ！」「うわぁ！」多数

「排熱率６０％突破」

「デュエルからです！！」

「イーゲルシュテイン回せ！！」

「後方よりイージス！！」

「ストライク、イージスへと向かいます！
ヘルダート発射可能！」

「ストライク、イージスとデュエルの二機と交戦中！」

「所現目標、イージス、デュエル！！、ヘルダート！てぇ！」

「全弾バスターに迎撃されました！！」

「まだまだ、ヘルダートてぇ！！、続けてヘルダートてぇ！！コリントスもてぇ！！」

「装弾間に合いません！」

振動！！

「うわぁ」＊多数

「排熱率８０％突破危険です！！」

「どっからだ？」

「右舷前方のイージスからです！！」

「近寄らせるな、目標イージス、コリントス、てぇ！」

「駄目です！引き続きちかよってきます！」

「イーゲルシュテルンを回せ！」

一つ、更に大きな爆発振動とともに…

「うわぁ！」＊多数

電撃がＣＩＣ内部を走る。

その後更なる振動…

「ヘルダート弾薬誘爆です！」

「隔壁閉鎖しろ！！」

「はい！」

「イーゲルシュテルン、４番５番、被弾！」

「ヘルダート発射管、隔壁閉鎖！」

「アラスカは？」

「駄目です！応答ありません！」

「ゴットフリート照準、当てろよ！てぇ！！」

「かわされました…がイージスはなれていきます」

「後方よりデュエル！」

「ストライク迎撃にいきます！」

「直上イージス！」

「なに！」

「面舵！」

「くっ！」「あぁっ！」「ああっ！」

「被害甚大！！」

「プラズマタンブラー損傷！レミテイターダウン！」
「揚力が維持できません！」
「姿勢制御を優先して！」
「緊急パワーは補助レミテイターに接続！」
「スカイグラスパーで出ます！」
「「「え！？」」」
「トール…！」
「危ないですよ、このままじゃぁ！」
トールは席から駆け出すと…
「ま、待ちなさい！ケーニヒ二等兵！あぁっ！」
マリューさんが呼びとめようとするが…
ブリッチから出たトールは、
「はぁはぁはぁ……ぼくが…ぼくがみんなをまもるんだ…はぁはぁはぁはぁ」
トールはロッカールームに駆け込むと、制服を急いで脱ぎ、

パイロットスーツを着はじめた。

ブーツをはき、グローブをつけると、ロッカーを閉めて、ヘルメットは掴み、
格納庫へと駆け出す。

格納庫内に入ると、

「坊主!!でるんか!?」

（お、きたか…まってたよぅ～トール君♪）

「はい!!出ます!機体は!?」

「準備出来てる!!換装は!?」

「時間ないのでそのままでます!!」

「わかった!!坊主がでるぞぅ!!」

トールはスカイグラスパーにタラップから駆け乗ると、
掴んでいたヘルメットを被り、
「スターターまわすぞぅ!」
（この機体ね…）
カオルは機体に取り付いた。

「どうぞ！」

「コンタック！」
エンジンがまわり始めた。
「エンジン始動確認」

「スカイグラスパーだすぞぅ！！」
機体を微速前進させ、カパタルトエリアまで進めさせる。

「無茶はすんじゃねぇぞぉ！」

「大丈夫です！」

『トールいいの？』

「ああ、ミリアリア出してくれ！！」

（ミリアリアごめんな…彼は貰ってくよ……）

『わかった……スカイグラスパー2号機、カウントダウン5，4，3，2，1』
リニアカパタルトの電圧が高まり…
「うっ！」
強烈なGとともに射出される。

トールは無意識にスロットルを最大に合わせ、
大空へと舞い上がる。あいにく天候は崩れ雷雨になった……

スカイグラスパーででると…
黒煙をあげているアークエンジェルがみえる。

外がらみるとかなりヤバい状況がわかる。
「やはり外からみると……敵のXナンバー落とさないと…」

『こちらアークエンジェル…敵デュエルは無力化、繰り返す敵デュエルは無力化』

「ミリアリア……後、敵はイージスとバスターか…」

だんだん海面に近寄るアークエンジェルが見える。

『ほうず！ストライクはイージスと格闘戦に入っている！
この間にバスターを叩くぞ！
そうすれば1対3だ！！』

「はい！！」

トールのスカイグラスパーがバスターに狙いを定め、砲塔ビームを

放つがかわされ、
逆に打ち返してきた。
「うわわわぁ！」
スティックを右に倒しすぎ、急激なＧがかかる。

『坊主無事か？』

「は、はい！！」

『坊主は正面から打ち込もうとするな、
背後や横などから隙を狙え…クッ』

「で、でも少佐…バスターを早く倒さないと、アークエンジェルが…」

『ああ、わかってる！！が、バスターもエースパイロットがのってんだ！
正面からかましたら、反対に討たれるぞ！』

「は、はい！！」

『いいか、仕掛けるから、隙を狙え！』

フラガ少佐のスカイグラスパーが、バスターに襲いかかる。
トールは上空高く上がると、上のほうから襲いかかり、
「あたれ！！」
しかし、バスターはうまく機動をとり、フラガ少佐の機体へと襲いかかる。
少佐の機体は旋回し、距離をとり、バスターは諦めると…
中々決着がつかないドックファイトになる。
『クッ、ＭＳだったら……やはりスカイグラスパーだときつ！！なろぅ！！』
トールは中々、ドックファイトに絡みにいけない。
「隙ったって…みつからないよ…」
すると……
『間もなく当艦は不時着します！！』
「アークエンジェルが！！」
盛大に土を掘り巻き上げながら、不時着する。
「ミリアリア！！」

『トール、ブリッチは全員無事よ…』

そこに、不時着したアークエンジェルを狙うバスターが…

『やらせるかっ！！』

フラガ機がバスターと相打ち状態になるのがみえた。『クッ！』

『大尉！！』

『アークエンジェル！バスターが正面に落ちる！ゴットフリートで狙え！！』

『えっは、はい！！』

『俺は海上に不時着する！！坊主！キラ！後は頼んだぞ！！』

「わかりました！！」

機体を旋回しバスターへと機体を向け…

「グゥゥゥ！」

強烈なGが襲う…

『大尉！大尉！』

『だいじょ……ぐぅぅぅ！』

『大尉！』

『ぶ…じだ……とりあえずリタイアだあとは頼むぜ…クソッ！』

「大尉がやったんだ！あとは！」
機体の主砲をバスターへと向けようとするが……

『敵バスター、投降の模様！コクピット開いてます』
（ディアッカ…後のミリアリアの彼氏に…
トール寝とられちゃうんだよな…）

「えっ？……のこるはイージスだけ？…いける！！」
（ごめんな…無理なんだ…）

「イージスは何処だ？…あそこか！！」
トールは、遠方で繰り広げられてる、
イージスとストライクの闘いに向け、機首をむける…

「キラ！」
叫び声と共にトールはキャノン砲をうちはなち、キラを援護あわよくば残る1機を損傷させねばの勢いだった。

『あぁ！トール！駄目だ！来るな！』
しかし、トールは耳を貸さず…
「当てる！！」
対艦ミサイルを発射した…
そのミサイルはかわされ…
「ちぃ……イージスは？……！！」

視界から見失ったイージスを探すと、正面にうつり、盾を投擲してきた。
回転しながら接近する盾…
「はぁっ！」
彼の表情は、ヤバいという状態だった…
手は、どうしたら良いか動かず……
「”加速””加速””加速””加速”」
時が止まり…
盾が串刺しになる瞬間、人を入れ替え…
死体の硬直を力任せに体勢をととのえさせ……
離脱…

加速を解除する。

爆発するスカイグラスパーをバックに飛び出し…かなりの距離をはなれた。

なにしろこの後イージスの自爆があるからだ。

（ここら辺でいいか…）

砂浜に着地し、世界扉を唱えようとしたら…

上空よりイージスとストライクが降ってきたので慌てて、離脱…

背後で、でっかい爆発音が聞こえた……

（もうないよな？？）

改めて世界扉をとなえて…元の世界へと戻る。

……

カオル報告

ストライカーパック

スカイグラスパー

第９４話　ＳＥＥＤ編その４　閃光きえゆく者へ…　投稿日２０１１０３０８

トール「ここは？」

エル「あ～おにぃちゃん～」

トール「え？エルちゃん？？…あの時……」

エルママ「エルちゃん…あらまぁ…あなたも？」

トール「あ、エルちゃんのお母様…あなたもって？」

エルママ「まぁこれから映像が始まると思いますわ…
エルちゃん…お兄ちゃんね映像みるからこっちきてね」

「は～い」

映像途中…

「はぁはぁはぁ……気持ち悪かった…」

映像終了後

「アムロさんか…俺もキラみたくなれるのかな？」

「お兄ちゃ～ん」

「エルちゃん♪」

「映像終わったようですわね？」

「あなたもあの映像を？」

「人によっては違うみたいですけどね……皆さん、あの世界では死んだ…と理解してますわ」

「じゃあ、やっぱり…」

「そして、物語の世界であった事も…ね」

「ですね……あの後どうなったか気になりますが…」

「あ、あそこにＤＶＤありますから見てみては？」

「じゃあ…みてみます」

トールは翌日目にクマができた状態で…

第９５話　ＳＥＥＤの世界から帰還　投稿日２００１１０３０９

２００１年９月１１日

「ただいまぁ～」

［マスターお帰りなさい！！報告がいくつかあるんだけど…］

「ん…何？」

［え～とまずは、難民解放戦線という、
武装組織の交渉役の人と接触して、明日コロニーに見に行くって話
になってる］

「……難民解放戦線…ねぇ……まぁ文字通りか…」

［次にテロが起こりそうだったんだけど、
ミスリルを派遣して制圧に入るって～］

「テロ？…また物騒なネタだな…何処で？」

［ユーコン基地、プロミネンス計画の］

「ティアンム提督いってるところか……向こうには？」

［勿論うちの部隊には伝えたよ…けど、ユーコン基地には無理］

「内通者？」

［うん］

「…ミスリルの制圧待ちか…」

［であと、木星に無事到着、あと3日程で燃料収集プラントが稼動できる～］

「やっと、ヘリウム3については解決か…」

［増産体制をとれるよ～］

「内職しなきゃな…まぁ…あとは純粋に技術情報取得と、スカウトに絞りこめる…つうわけか…」

［だね～～］

「他には？」

［沙霧大尉以下、４８名が加入になったよ～］

「４８名？中途半端な……」

［帝国の方でもクーデター参加者全員丸投げは痛いって話だった。
なので配置換え等の措置等ですませたみたいよ。
で、今回加入組が中心的存在だったって話～］

「ふ～ん…であとは？」

［ないよ～］

「わかった……さてシャワー浴びて寝るよ…ＳＥＥＤ組の処理は明日だな…」

［おやすみ～］

カオルを見送る１１号。

見送ったあとふよふよ移動し始め、

コンコン

「は～い」

シュン

「あら１１号ちゃん…カオルさん帰ってきたの？」

［うん♪赤ちゃんお願いしますね。まりもちゃん］

「うふふ♪わかったわ。じゃあ準備するから」

［はーい］

夜はこれからだった…

２００１年９月１２日

「お…う……ざ…す」

ゆさゆさ

「カ…ル…ん……てくだ…い」

「ふぁーーおはぁ～」

「ふふふ、おはようございます。カオルさん。さぁ、シャワー浴びて下さい」

裸のままベットからでると、
シャワー室にだらしなくとぼとぼ歩いてく。

かなり遅くにねたのでまだ少し眠かった。

まりもちゃんは、服を既に着ていてビシッともう決まってる。

「カオルさん、着替え、だしておきますね～」

「あ～シャワーは？」

「先に浴びました」

「ん♪」

シャワーを浴び始め、眠気覚ましにあつい温水を浴びる…

「カオルさん～点呼に行かなきゃいけないので、お先に失礼しますね」

「ん～♪」

「昨日は、はげしかったです…また……」

ボッ

昨日の情事がうかびあがった…

煩悩退散、煩悩退散…

さすがにスボンにでるので…ひたすら…

おちついてきた。

シャワーから、タオルで拭きながらあがってくると、

制服、下着等が折り畳んでおいてあった。

着て、ＰＸにて朝飯を食ったあと、

戦艦ドックへと向かうと…

「シャアさん、アムロさんおはようございます」

「カオル君おはよう」

「ああ」

「ん？こちらに」

「いや、新しい人材がくるってきいてな」

「今回のスカウトは、ガンダムＳＥＥＤの世界からです」

「それはどういった世界なんだ？」

「コーディネーターとナチュラルとの闘いですね」

「コーディネーター？」

「遺伝子を弄って、優良化する…って事です」

「ふむそれは強化人間と…？」

「早くいっちゃえばそうっすね。ただ違うのが日常的に生活に…という事で、
戦闘に…って事ではないんですよ」

「ふむ…」

「でもって、あんまりにも多いから、差別されちゃって、
なら集まって国を作っちゃえ、独立を認めろ、
駄目だ認めない…がＳＥＥＤの戦争ですね」

「ジオンとにてるな…」「ある意味な」

「で先に、核をコロニーに打ち込んで過激になったのが…まぁＳＥＥＤの世界説明ですね」

「ふむ…でコーディネーターからまた話脱線してるんだが、強化人間と…」

「自分のしっている限りでは、肉体的強化、あと才能強化、外見的強化等ですね。主に親が望んで我が子を…だそうです」

「ふむ」

「恒常的に肉体的強化はサービスなのかな？ですね。
やはり我が子が死ぬのは…特に普通の人なんか3歳までの病気等が怖いですし…」

「確かにな…ミライなんか育児ノイローゼになりかけたって聞いたな」「ミライ…ブライト夫人？」「ああ」「ほうあの人が…」

「外見的強化も恒常的で、やっぱりイケメンシネェ…と作者も思ってるみたいです」

「大量にイケメンか……美女もいるんだろ？」

「あ、そうですね～…けど女性兵士は少ないですね、どっちも」

「ふむ」

「特殊とは？」

「でザフトの階級制度も特殊で…」

「服しかありません」

「服？」「……軍隊として…」

「緑、赤、白、黒、紫、青緑すね。
あと義勇軍なので職業軍人の国防軍とは違うって事です」

「それなら…」「なんか権限とかどうするんだ？」

「隊長＝白服で、赤が士官学校上位２０名、
緑がその他士官学校卒、
黒が副官、
紫が国防委員会所属武官、
青緑が文官ですね…
自分も、階級制度のほうがわかりやすくて、いいと思いますよ」

「だろうな…」「ところでその世界の兵器は？」

「えっと…大容量バッテリーで動くので、全体的にみれば、アムロさん達の世界が勝ってます。
あと、はっきりいってＧキャンセラーがないです」

「Ｇキャンセラー…リニアシート等が？」

「はい」

「機動とかで発生したGは？」

「コーディネーターの肉体で受け止めます」

「……地球軍側は？」

「えっと物量頼みで、一部強化したの以外は地球２：１ザフト位ですかね…後でつくりますから、わかるとおもいますよ」

「ふむ」「後でためしてみるか…」

「じゃあ、シェルターをだすんで下がって下さい」

あいているスペースにザフト兵のいるシェルター、
ハルバートン提督、
提督の乗っていたメネラオスクルー、
シャトルの民間人の体育館シェルターを出した。
トールは体育館シェルターにいれてた。

「ところで新しい人材はどのシェルターにいるんだい？」

「今回は、Ｃ－０１用のですね…体育館のは民間人なので…
あとはカプセルに入ってる人かな？」

「カプセル？ああ…じゃあ瀕死だったのか…」

「まぁっすね…じゃあ案内しにいきますので」

「ああ」「じゃましたな」

シェルターの方へ２５号代表にコバッタ達を引き連れてく。

（確か…全員入ると…残りぎりかな？新しい寮つくっておこう…）

結果だけ略しときます。

デュエイン・ハルバートン准将加入

部下達の艦隊司令部クルー加入２３名

トール・ケーニヒ加入Ｃ－０１入り

で、ザフト兵は、

タカノ・ブリビァント

ノース・バンリ
ラスティ・マッケンジー
３名ともＣ－０１入り。
階級は緑が少尉、ラスティが中尉になった。

民間人は…

「ままぁ、エルねエルね…このお兄ちゃんと一緒に仕事したい」

「まぁ？なんで？」

「エルがひつようって作者が騒いでるから」

……エルちゃん……作者はイエスロリータ、ノータッチの紳士協定だよ……

ってちゃうわ！秘技ちゃぶ台反し！！

「ままぁ～～作者がジョークなのに本気でおこったぁ～」

「まぁ作者さん！！ＰＴＡに訴えますわ！」

エルちゃんがいたら面白そうだからいてね…

「は～い作者～」

というキャラ打ち合わせがありましたが、物語になりますと…

「あの～」

「はい？あなたは？」

「このこの母親になります、ビアンノ・マデューです。
この度は娘共々、助けて頂きありがとうございます」

「ありがと～」

「いえいえ、賢いお嬢さんですね～」

「えっと、私をこの基地において働きたいのですが、よろしいでしょうか？」

「ご希望にそう形にしますが、何か特技でも？」

「わたくし、秘書課課長を勤めてまして、
主に人事部門等を担当しておりました」

「採用です。是非とも我が軍へ」

「はい。ありがとうございます」

「ままぁ～？」

「このおこさんの名前は？」

「エル・マデューといいます」

「エルですよろしくお願いします」
エルちゃんぺこりとかわいくお辞儀をした。

「うん。エルちゃん用にまぁ監視というか、危なくないようにコバッタをつけますので…
自由に基地内みていいよ～」
ビアンノさんに前半、後半をエルちゃんに向かって、喋った。
「２５号～」

［はい？マスター］

「エル・マデューちゃん専用にコバッタよろしく」

「わぁ～金属のバッタだぁ～…ラクスさんのハロちゃんみたい～」

［わかった。マスター２８号が専属につくよ～］

［エルちゃんよろしくね～ぼく、てつ〇〇２８号なんだ♪］

「てつじん２８号、よろしくぅ～エルです」

そんなやりとりがあり、結果、

救出した民間人は大多数が、コロニーに、

一部が当基地で…

コロニーにいく人の中には、技術的指導にあたる人もちらほら。

かれらの職先には事欠きません。

という結果になりました。

「１１号このあとは？」

［難民解放戦線の人が来て、コロニー視察しにいく…だけどあう？］

「あう必要あり？」

［今のところ無し］

「じゃレポートだけよろしく」

［あとは、ミスリルの制圧作戦が１時間後］

「じゃあそれは見るわ」

［了解～］

そして、ザフト３名と、トールがきた。

「じゃあ、君達なんだけどきて早々だけど、特殊任務があるんだよ…ついてきて～」

コンコン「ビダンさん～」

「どうぞ～」

シュン

「えっと、この４名がＣ－０１入りします」

「あらぁ～♪」

「で君達の任務は、彼女に協力する事」

「はい！」＊４

「じゃあ早速自己紹介して貰おうかなぁ～」

「あとよろしく～」

（ヒルダさん…

あれ、どうみても２０代前半だよな??）

と思いつつ、

そろそろ時間なので、情報室へと向かう。

ミスリルの作戦推移を見守る事になる。

（でも…見守らなくとも結果が見えるな）

と思ったのもわかるだろう。

まずは敵拠点にＥＣＳ装備のベイブメアで、Ｍ９非殺傷装備で輸送。
事前に戦術機が無いのもわかってたので、付近にて、ＥＣＳ作動のまま、Ｍ９が直接侵入。
まずは、車両を接着弾で無力化、

ボン太君装備の歩兵が、睡眠ガス弾による突入となった。

よって完全な不意打ちによる奇襲成功。

ユーコン基地をおそう予定だったキリスト教恭順派の拠点は潰す事ができた。

しかし、問題がやはりおきる。

そう、

「我々はまたユーコン基地を襲う！！
神の意思に逆らって、戦う等間違いの元だ！！」

ぶっちゃけ、こう思想が固まった形が相手だと、どう処理をしようか悩む。

はっきりいえば殺しちゃえば楽といえば楽なんだが…

（ん～～……）

どう処理するかを指示できない…

「ぶっちゃけ洗脳されてるか？
またはこっちから洗脳するしかない？」

［そうだねぇ……しかないのかな？］

「となると、連れてくるしかないか…」

［うん］

現地へ、兵員輸送コンテナ１０個搭載の下駄を、派遣する事になった。

またユーコン基地内部の恭順派も逮捕し、同様に送られてくる。

到着予定日が、約３日後…１５日の予定だ。

「ん……じゃあ寝るよ」

［マスターおやすみぃ］

……

カオル報告

加入　ハルバートン提督、艦隊司令スタッフ２３名

Ｃ－０１入り４名

エルママ他７名

恭順派　４８２名逮捕拘束、どうするか？

第９５話　ＳＥＥＤの世界から帰還　投稿日２０１１０３０９（後書き）

作者「小説発売しろ！！」

コバッタ達［小説発売しろ！！］多数

作者「一年以上完結してるのに長いぞ！！」

コバッタ達［一年以上完結してるのに長いぞ！］

カオル「デモ行進か……」

作者「うん。ね…設定利用しようとしても利用すらできない……」

カオル「まぁ今回襲撃グループの基地、
地名等すらでてないもんな」

作者「あははは……もう恭順派関連は、オリジナルでいいや、つうこと」

カオル「なる程な…」

作者「で本当なら一緒に襲撃する難民解放戦線は、
見事に接触できたから、ぶっちゃけ視察にご招待したから、
襲撃計画を白紙に戻した。
で強行するキリスト教恭順派と分離できた…が、この話の段階です
ね～
まぁ難民解放戦線の人達もオリジナルになりますから…」

カオル「というお知らせでしたぁ…作者次回は？」

作者「ヒルダさんからの要求が日に日に強まってきます。
エサを与えてるのに…
次回のサブタイトルはまだ未定です…」

第９６話　チート再開まであと二日…　投稿日２０１１０３１０

２００１年９月１３日

ハンガーに行くと…

［マスター、おはようございます］

「ああ、おはよぅ」

［まずは、報告から、難民解放戦線の方達や、
ＳＥＥＤ世界の民間人の人達がサイド１の１バンチへと向かったよ～
到着が今日の夜の予定］

「了解～引き続きよろしく。と…今どんなもんなんコロニー状況って？」

［今は、９６０機あるシャトルで、２４０便体制をとってる～
なので、５５０００人が一日ごとにおくられてるよ～］
で画面に、サイド１群が映る。

本来なら５７６００人だが…２６００席を行き来する分にあててるそうだ。

「今現在、１バンチコロニーに１２２万０６２４人。
１ファクトリーコロニーに２０万人、
１ファームコロニーに１８万人、合計１６０万０６２４人すんでる～」

安直だが、農業用コロニーをファーム、
工業用コロニーをファクトリー、
としている…
まぁようはわからなくなる為にわけたのだが…

推移データもついでに表示されている…

２００１年７月２３日の時点から入植開始…

２００１年８月５日の時点で約１３万人、シャトル発注の為、５０便翌日から増加。

２００１年８月１４日の時点で約３３万人、翌日よりシャトル発注の為、５０便またまた増加。

２００１年８月２０日の時点で、約５３万人、シャトル発注の為、またまた５０便増加。

２００１年の９月に、サイド１人口１００万人突破。

２００１年９月６日の時点で人口約１３０万人、またまた発注で５０便増加。

そして今にいたる…ということだった。

「ん？その３人…つてのは？」

［サイド１で生まれた子達だねぇ～］

「ものほんのスペースノイドか……新しい命守りたいな…」

［だね…］

「よし、じゃあ、新技術だな～♪」
まずは、鯖にデーターを入れ…

現物を資材から創り始めた。

ストライクガンダムエールパックの完成だ。
もちろんＯＳなどはコーディネーター対応。

［マスター、これって…］

「ああ、だなぁ…」

まず、コズミック・イラの特徴、バッテリーによる駆動だ。
その点、戦術機とにている。が遥かに容量は違うが…

なので、バッテリーに関しては、どこにでもつけられるので、

ストライクのストライカーパックというのがつけられるようになる。
宇宙世紀製品は、ランドセルもしくは、
そのすぐ内側辺りなどに核融合炉がある。
だから、ある意味固定武装で、追加つける際には、
フルアーマや、外装式になる事になる。

なので、コズミック・イラのは、自由性が高いともいえる。

が…

［この世界の戦術機が発展したらこうなるよね］

「かもな」

あとはバッテリーを食うフェイズシフト装甲…
喰らいつづけると、７６発のミサイルで、フェイズシフトダウン起こして、
駆動にも影響でるのは…はっきりいって悪手かもしれない。

フェイズシフト装甲を核融合搭載機に採用しちゃえば、
実弾系に関しては、ほぼ無敵になるが…

（けどフェイズシフトを採用すると、世界のレーザー化加速し、
下手したらオリジナル落とす前に、対応されかねないからなぁ…）

まぁそういった考えであった。

で、１番の問題点がコクピットとＯＳ、人だろう。

後々の、ナチュラル用のは制限した…
コーディネーター用のは制限解除した…
と単純に思って下さい。

だからジンを奪ってもそのままで操縦すると、
過去に魔撃震を操縦した人達のようになるはずであった。

で製造当初のＯＳは、何処までやればよいのか？から、
とりあえず動かして移動できるだけ…の糞ＯＳだった、

でナチュラルのパイロット達がのり、ここまで大丈夫を調整しながらＯＳを作っていくが、
当初の計画であったを付け加えておこう。

ようは手探り状態なのであった…

まぁあとは複雑な操縦系統…
神経接続によって補佐し始めたのが、地球側の機体だった。

G等に関して、ストライクを改造して、スクランブル等搭載しちゃえばいいじゃん！！

と思ったあなた…あなたですよ！！

バッテリー部分をけずらなければ無理です…

またはあの機動を削るか……

どちらにしろ機体的余裕が現段階のストライクにはない…のです。

作ってみてわかる事ってあるのですね…

「本当、コーディネーターって、ナチュラルからみたらチートだよなぁ…」

［それいうならマスターもチート］

「かもな」

［かもなでなく、モノホンのチート！］

「わかったわかった…とあとは…」

バスターを資材から作成した。

［へぇ～これまたヤドカリ君達が、喜びそうな砲戦使用だねぇ～］

実際つくったらヤドカリ達がわいのわいのよってきやがった…

「まぁこれもオミットするのは、結構あるけどなぁ…」

が、この機体は実践済のレールガンが特徴ともいえる。

［そういえばレールガンといえば、
９９式はどうするの？強化で…きないか…」

「９９式？ああ、あれはな…うんそうだなぁ…
制圧兵器としていいかもしれんが、
正直あの仕様による、砲身加熱により、
冷却材パックを何回も変えなきゃいけん、
弾の補充関係、あの弾装パック…
構造材変えても問題点は山積みだよ…
正直、仕様が欠陥…だな。
その点バスターの方が実用的だよな」

まぁ実際のところ…現代の１砲身分速８００発クラスをだす、ガトリングガン。
合計６つの砲身で分速４０００発、７２００発辺りをだすが、
２秒間以上の射撃は砲身加熱により禁止、
冷却材は？は熱衝撃等で使えない実情である。

ただの実弾銃でさえこんな調子なのに、
レールガンだと…わかりきる話だ。

まぁ長々とだが、正直９９式は、いくら構造材をいれようとしても、
冷却材はきってもきっても切れない話…になる

アサルトライフルは分速１２００発あるぞー！は、
マガジンに入っている限りでマガジン交換の時間あるから無問題…
というか、そんな使い方は軍ではしません。

まぁそういった問題があった。
なので…

「９９式仕様はボツ？」

「うん、ボツ」

という結果になりました。

「へぇ…ガンダムににてるなぁ」「ああ、そうだな…」

「アムロさん、シャアさん…こいつが、ストライク、バスターです」

「ガンダムではない？」

「ガンダムタイプといって、その世界の主人公、キラ・ヤマトが、地球側のＯＳをガンダムといって、それがどんどん広まった…っう話です」

「ふむ？となると何機もガンダムが？」

「ええ、出てきますね～」

「シャアガンダムあったりして」「おいおい」

「シャアさんじゃないっすが、ストライクルージュはありますね～」

「あったか…」

「まぁ…じゃあ乗ってみます？」

「ああ」「だな」

アムロさんは、ストライク、
シャアさんはバスターに乗ってみる事となった。

ＳＥＥＤのガンダムは、神経接続を端子に頼らず非接触にて行う。
シート、スティック部分にてだ…
よって…

『新しい世界が見える』『ほうおもしろいな…』

準グリフの状態になるのだ。

だからシートにＧキャンセラーをつけれないのもうなづけた。

でもって、アムロさん達は試行錯誤でコントロール方法を学んでいく…が…

降りたので感想を聞くと…
「やはり、ちっときついな」「ああ、リニアシートの恩恵わかる気がした」

コーディネーター用ＯＳでの神経接続は…

「少し疲れるな…常時は使いたくはない」「確かに、が使えと言われたら難なく使いこなせる」
「同じく」

との評価でした。

（ナチュラル用の神経接続いれたら良いかもしれんな…
落ちない前提だけど…）

神経接続は正直対応が遅れる。
ニコルが本編であんな事になったのは神経接続による…が起因している。

後は…
（アムロさん達だから異常かもしれんなぁ…バーニィに操縦してもらうか…）

とも考えてた…
そうしてモヤモヤとしてる内に…

「おや？カオル殿、この機体は？」

「あ、沙霧さん…ストライクとバスターっていいます。コズミック・イラの世界のＭＳですね」

「コズミック・イラとは？」

カクカクシカジカと説明し…

「ふむ…じゃあ操縦してみたいのだか？」

「沙霧さんでなく、１番できない部下の評価も聞きたいですね～…
とあと用件は？」

「ああ、そうだったな…
忘れるところだった…いかんいかん…
我々の隊についてだが…」

まぁようはぶっちゃけ編成が面倒になるから、
とりあえずの形で、沙霧連隊の形でとりました。
機体はまだ決まってません。の宙ぶらりんの形だった…
勿論第６６機甲大隊の話もある。

「他の世界の兵器も操縦してみてだが、私の意見としては、
やはり不知火、陽炎が忘れられないな」

「となると、そっち方面での機体選定の形が良いので？」

「うむ」

「ん～～……隊全体の意見として纏めてみてくれます？」

「わかった」

（さてと、生産かな？）

「あと残り燃料は？」

［５４３基分］

「となると…ん…機体はいいか、シャトルのみだな…」

シャトルを２００機注文した。

ちなみに本編にかかれてはないが、
藤沢方面のマスドライバーは順次稼動状態になっていて、

そっちへと空港も割り振っていた。

［シャトルの便数増やすなら、メデューシンも増やさないとそろそろ…］

「だろうな…２隻よろしく」

メデューシン２隻注文した。

……

カオル報告

シャトル２００機

メデューシン２隻

追加注文

第９６話　チート再開まであと二日…　投稿日２０１１０３１０（後書き）

作者「サブタイトルに苦労したなぁ…」

ナギ少尉「苦労じゃなく思いつかなかっただけでしょ？」

作者「ｏｒｚ…」

ナギ少尉「今回のはネタがないのか、
コロニーの話題がでたのね…しかも数字ばっかり」

作者「……」

ナギ少尉「けど、もう１００万人すんで…いえまだ？」

作者「ん～まだだろうね…」

ナギ少尉「１バンチでなく、天鴉市とかにしたら？」

作者「…地名も考えろと？……追いつかないよ…
まぁ…１０００万人近くすむ予定だから～県～市だろうな……普通

は…けど無理だ～
なので異世界軍では１バンチコロニーで統一します」

ナギ少尉「惰弱め！！」

作者「……ところで…ナギ少尉、キャラかわってない？」

ナギ少尉「へっ…こっちだってなぁ……ブツブツ」

作者「あ、艦長？」

ナギ少尉「艦長かっこはーとかっことじ、何処どこ？」

作者「猫かぶりか…」

ナギ少尉「……死にたいようね……」

作者「ちょ…な…なに？その手にどこからだしたか…わからない…
１００ｔハン……」

作者チーン

第９７話　ＭＳ　ＩＧＬＯＯ編１…光に輝く時に…　投稿日２０１１０３１１

また飛ばされた…

明日までゆっくりしてたかったのに…

いきなりヒルダさん、
「この子が欲しい！！」

だもんなぁ……

宇宙歴００７９　１２月３０日ヨーツンヘイム…

グラダナ周辺宙域

わあああぁぁぁぁぁ

出撃の為、搭乗機に向かう3名が声援に送られる。
彼ら学徒兵の名誉ある初出撃に選ばれたのである。

そう、ジオン公国では、戦況悪化の為、正規パイロットが足りず、
まだ養成中であった士官学校等から、急遽、
希望ながら前線へと…の学徒兵達だった。

勿論、通常であれば学徒兵は駄目だろう…がＭＳ操縦パイロット養成には時間がかかる。

戦況悪化で失う事が多くなったから、
そうそう、補充はきかないのであった。

勿論それ以外の部分でも養成に時間はかかる。
が、前線で1番損失があがったのが…ＭＳパイロット達であった…

彼ら、名誉ある出撃に選ばれたのは、
エルヴィン・キャディラック曹長
フランツ・ブラント伍長
フリードリッヒ・カッテル伍長
であった。

各々の搭乗機、決戦兵器オッゴへと向かう。

オッゴとは、全高７．８ｍ　全長１１．６ｍ　全幅１４．７ｍの、
駆逐モビルポッドであった…
地上の戦線縮小等により不要になった部品等を使い、開発された…
連邦のボールを彷彿させる兵器であった。

彼ら三名は、愛機に搭乗すると…

『本船は間もなく戦闘待機にはいる、
右舷格納庫、気密ブロックより、宇宙作業服きてないものは退避せ

よ。
繰り返す、右舷格納庫、気密ブロックより宇宙作業服きてないものは退避せよ。
間もなく、右舷格納庫は……』

エアーが抜かれると、オッゴが、右舷格納庫から、カタパルトデッキへと、
武装を装着されながら運ばれてゆく…
カオルかやっとこの頃に、ヨーツンヘイムに取り付き始めた…

「第二小隊発進準備完了」

『確認！発進命令まで待機されたし』

「了解」

「すみません、オリバーマイ技術中尉はおられますか？」

（やっと見つけた…この機体か…）
カオルは3機目でエルヴィンを見つけだした。

『わたしがオリバーマイだ』

「わぁ…やはり」

『なにかトラブルか？』
（やっぱり幼い感じだな…）

「え？いぇぇ…その…何時も姉がお世話になっています。
中尉の事は時折送られてくる姉からの手紙にかかれていて、始めて
お話する気がしません」

『ぼくの事が？』

「ええ！本当の技術馬鹿だって。へへっ」

『ん？』
スクリーンに映るオリバーが、変な顔に…

「あ、すみません。よけいな事を」

『…君がもどったら、大尉と一緒に食事でもしよう。済まないな、
そのような機体で出撃とは』

「いえ、僕達の訓練機関ではＭＳは…ですが、中尉…僕はオッゴを

信じます。」
（信じてもＭＳ戦だとつらいだろ…）
「……僕の命をかける兵器ですから…宇宙で１番大切な機体ですから……はっ！！」

衝撃波がヨーツンヘイム、搭載されているオッゴを襲う。

『うわぁぁぁ』
「な、なんなのでありますか？この衝撃は！？」
『エルヴィン！！早く出してくれるよう頼め！！』

『みんな落ち着け…ちょっと待ってろ…確認する…』
衝撃がおさまり…

『なぁ…エルヴィン今のってなんだった？』

『なんか、ガタガタ揺れたし…宇宙なのに…隕石じゃないよね？』

「今、中尉が確認してる…」

『ソーラー・レイだそうだ、
敵主力部隊を殲滅させたとの発表だ』

「ソーラー・レイでありますか？」

『ああ、大尉が、連邦のおもちゃ何かに！だって息巻いてたぞ』

「は、はぁ……はっ！！」

ビーゴンビーゴン

『あっ！』「！！…小隊、アクティブ！！」

オッゴのロケットエンジンが唸りを始める…

『０２２正常スタート異常なし！！』

『０２３同じ異常なし』

『敵は、サラミス２隻だそうだ…』

『まだか？』『母さん、俺やるぞ！』

まだハッチが開かない…

「まだでありますか？」

『ブリッチでまだどうするか……』

「なら……」

オッゴのアームで、船内操作パネルの開閉スイッチをおし…

右舷サイドのカタパルトハッチが開かれる。

（やはり器用だよなぁ……）

「発進許可を！この遭遇戦では先手をうった方が！！早く！！」

『わかった。第二小隊出撃してくれ！絶対生きて帰ってこい！』

「ありがとうございます！」
カウントダウンが表示され…
簡易カタパルトから、
「クッ！」
射出される。

「敵はどっちだ！！」

『１１時方向、光点二つ！！』

「ついて来い！！」

『了解！』『わかったぁ』

「クゥ…ゥウ…」
最大加速でオッゴを飛ばすと、サラミスを捕らえられた。

「自分のみ対艦ロケット使用する！！後は温存しろ！
対艦ロケット、制斉射！！」

ロケットが敵サラミスへ向けて飛び出す。
ロケットがサラミス周辺に爆炎をあげると…

『おい、まだ心の準備が！！』

『こんなところで戦うのか！俺達だけで！』

「誰の声？」『敵の通信？』

『おい、敵は何処だ敵は！』

敵のボールからの通信がオープンチャンネルのまま、
ただもれしていた。

『またとないチャンスだ。詳しいのを特定している…』

「ボールが６……か？」

『敵ボール６！近接戦闘型２機を含む！！』
使いおわったロケット弾をパージし…
更に突進する。

『敵も素人！それならばぁ！』

『ききたくなかった』

「やるだけだぁ!!……体勢整う前に撃ち込め!!」

僚機が、宇宙空間で体勢整う前のボール群へロケット弾を撃ち込み、

『ボール1撃破!!』

「初戦果だ!!突っ込むぞ!!」

体勢整い始めたボール群へ、そのままのトップスピードで、

「うぉぉぉぉ!!」

マシンガンをうちはなち、クロスをする。が…

「落ちなかったか…」

敵集団とクロスし、爆炎はあげてないのを確認すると…

『なんだぁあいつらは?』

『データにないぞ?』『ジオンのモビルポット?』

『助かったぜ~』

「編隊を維持しろー！！！」

『白帯のひよっこ、ちゃんとついて来い！』

『はい！』

敵のボールの数を減らす為、背後をとろうと加速すると…

「はっ！」

気がついた時には、逆に、編隊の後ろに敵のボールが迫っていた。

「ブレイク！！」

僚機が、それぞれの方向へ別れるが、敵ボール2機は、
エルヴィンの機体へとついてくる…

『くっはっはっはっはぁ！後ろをとったぞ～！！』

敵からのただもれの通信で挑発の声がきこえ…

「オッゴをなめるなぁぁ！」

右側に装備してある、ザクマシンガンを背後に回転させ、

『えっ！！』

「遅い！！」

射撃し、追跡中のボールへと、弾が当たり…

『うわあぁぁぁ』

追跡中だったボール二機とも、爆散していった。

「マイ中尉のいった通りです！報告を続けます！」

『エルビン、テストパイロットのまね事は止せ！』

「敵は残り3機！！自分らの機体を信じろ！！敵を追い詰めるぞ！各機追跡！！」

『了解！』『ああ！』

目をつけた敵を追跡する。

うまい具合に敵も散開し、追跡をかけるが…

「カッテル！！！！」

ベテランだろう、追跡してたら、

いつの間にか後ろをとられていた…形だった…

『クッ』

背後をとったボールに対し、アームを回転させようとするが　…

『あ、バズーカが動かない！トラブルだぁ！』

「いま行くぞ！」

『た、たすけてー！！』「落ち着け！！」『だれか、だれかぁー！！』「今向かってる逃げろ！！」『嫌だ嫌だぁ！！』
「とにかく振り切れ！」『だれかぁ』「もう少し」『だれ…バガゴ』
「カッテル！！」
スクリーンには爆炎をあげるオッゴが…
「カッテル！！おいカッテル！！」

爆散し…

「くぁ…くぁ……わぁぁぁぁぁ」

コントロールステックも離し……

「カッテル、カッテル、
なんだよ、どうして爆発したんだ？返事をしろよ……
もう一度、一からやり直しだ」
エルヴィンは…戦友をやられたショックからほうけてしまった…
『上方から敵機！！』

マシンガン掃射うけボールがクロスする。一発だけかすめてた。

「上？上ってどっちだ？」

『ひゃはははは！足をとめてる奴をやるぞ』

『エルビン、しっかりしなさい、公国の為、同胞の為、つくづくあなたは口ばっかり！』

「はっ！えぃ！」

両側のブースターを逆噴射し、かわし、
前方へのブースターダッシュ、敵のボールの砲身を右アームで掴みあげた。

『は、離せ！！げすやろう』

「離すもんか！！」

『隊長！』

「こいつの武器を剥ぎ取れば！！」

『うるせぇひよっこ！』

『エルビン！！』

そこに、フランツ機が、ザクマシンガン掃射し、
自分の側にいたボールへと襲いかかる。

『うわぁぁ！うわぁぁぁ！』

マシンガン掃射うけ、ボール1機爆発するが…
が、敵ボールの砲弾の直撃をうけ…バランスくずして…

爆散したボールに突っ込み、そのまま共に宇宙のチリとなった……

「うぉぉぉぉ！！」

ボールからはぎとった砲身で敵ボールを力強く殴り…

『ぐぉぉぉ』

コクピット内部も変形したろうが、

推進材にショートさせ、爆発した。

「あと一機！どこだぁぁ！！」

その直後！

「は！」

その探していたボールがオッゴの背後をとり…

「殺される！」

『逃げろ！すぐにぃ！』

敵ボールのマシンガンが…放たれない、

「くっ！」

オッゴを旋回させ、ザクマシンガンをはな…たれない。

「弾ぎれ！？」

互いに弾がなく…しばらく…間があく

「はぁはぁはぁはぁ…白帯？」

機体にかかれてあったペイントを発見したようだ…

『くくく、くっそぅぅぅ』

敵ボールが、アームをつかって、殴りにきた。
『ドラム缶の！』
また殴りにくる。
『ばけものめ！』
「くっ」
衝撃がシートにもろにくる。
「やめろぅ！お前は味方の船に捨てられたんだぞ！何をいまさら！」
ボールが回転し、タックルかましてきた
『なにがぁぁ』
エルヴィン今のタックルの衝撃で、ブチ切れ…
「こんのぅ～！！アジアのスイカー！！！」
おもいっきりブースト吹かしながら殴り、
相手はシェイク状態におちいった…
『うわぁぁぁぁ』
「はぁはぁはぁ…降伏しろ、さもないと」
しかし、体勢整えたボールがまた殴りくるが、
アームで止めて…鍔ぜり合い状態になる。
『さもないとなんだ！そっちも弾なしの癖に！』

「もう独力で母艦にもどれない、ここに置き去りにされたいのかぁ！」

『はぁぁぁ…スペースノイドめぇ…しょせん風前のともしびのジオンがぁ』

「無駄死にはよせよ！僕だって死にたくない！！
ややこしい理屈なんか、いらないじゃないかぁ」

そして、かかっていた力がなくなり……

『わかった……抵抗…しない』

「はぁ…はぁ…わかってくれてうれしいよ……母艦まで、曳航する」

『……わかった』

オッゴの右手のアームでボールのアームを掴む。

「おい、気密とか、怪我は大丈夫か？」

『……大丈夫』

オッゴのスラスターを調整し、
ヨーツンヘイムへと進路をとる。

『……なぁ、俺…どうなるのかな？』

「……僕の母艦には、士官に姉がいる、また中尉さんも優しいさ…大丈夫、ちゃんと条約にのっとった対応はしてくれるさ」

『…うん…』

「あ、見えてきた…もうちょいだよ…今交信するからな」

『……うん』

「ヨーツンヘイム、ボールをつれ帰還する。受け入れ準備を頼む」

『了解、右舷収容ハッチ』

「はぁ」

『こちらオリバーマイ技術中尉、駆逐ポット、オッゴの評価試験を終了する』

「中尉、ぼくは…いえ、わたくしは、公国のお役にたったのでしょうか？…この独立戦争の決戦で…」

（そろそろだな…）

『勿論だ』

「”加速””加速””加速”」

「……よかった…へ…今頃、手に奮えが…」

エルビンが顔を上げると目の前から光が迫る。

ボールからパイロットを引き入れ、

二発目を受ける寸前に引き入れた。

オッゴから離脱し、グラダナへ降下した。

グラダナ市内にはいると、カオルは世界を跨ぐ…

……

カオル報告

オッゴ

ヨーツンヘイム

近接戦闘型ボール

カスペン大佐用ゲルググ

ツダ

第９７話　ＭＳ　ＩＧＬＯＯ編１…光に輝く時に…　投稿日２０１１０３１１

ヒルダ「うふふ、楽しみだわぁ…早く食べちゃいたい」

作者「……あの～この間ＳＥＥＤの人達は？」

ヒルダ「駄目ね…直ぐにへばっちゃう」

作者「は？？……肉体強化され」

ヒルダ「みたいなんだけど、あそこは別みたいね…
まぁもう一人いるから期待はしてるけど…」

作者「ちなみにハーレムの中で満足度をあげると？」

ヒルダ「そうねぇ、教えがいがあるのがバーニィね、
スレッガーは、テクはあるんだけど…歳ね…
あとはそうねぇ…
ギュネイは毎回だけどへばるの早過ぎ…
ってところかしら？」

作者「はげしすぎます…ヒルダさん…」

ヒルダ「けど、エルママが、私にもわけて、
ってきてるんだけど…もっと増えないとねぇ…
でないとこの肌が維持できないのよ。みてぇ♪」

作者「…暴走しすぎです……ハイブ落とすまで何人Ｃ－０１入りするのやら……」

第９８話　ヘリウム解禁　投稿日２０１１０３２７（前書き）

大変お待たせ致しました。

東北地方太平洋沖大震災、
被害あわれました方に心よりお悔やみ申し上げます。

第９８話　ヘリウム解禁　投稿日２０１１０３２７

２００１年９月１５日
日付を回った辺りで帰還してきた。

［マスターお帰り～はやかったねぇ］

「そりゃそうさ、この日をどんなに、まちにまったか…グフフフ」

……いよいよまった…

祝、生産制限撤廃！！
の記念日だった。

燃料供給の目処がたつ日であった……

が…

［マスター、まだ出来てないから、おとなしく寝なさい］

「いや、完徹する」

［駄目寝なさい！！］
［寝るの！］
［寝る！］
［マスターと一緒に！］
［眠れよいこよ～］
［寝ないと精子が作られない］
［寝ないこは、悪いです］
［寝て！］

「わかったわかった…そんなによってたかるな…寝るよ…まったく…」

と根負けしたカオルだった…

［で、今日は回復日だよね？］

［うん、まだね］

［マスターの管理徹底するぞ～］

［おー］＊多数

だった…

朝方…

完徹しようとしたら、
素直に寝てしまったカオルが起きてきた…

「なぁ…11号？」

［マスター、何？］

「昨日いや、夜か、あのあと部屋入ったら眠気が着たんだが…」

［あ～回復の為に、眠気を誘因するフレグランスまいてたからね～
よくねれた？］

「なる程ね…ああ、バッチリさ…けど」

［木星の件でしょ？夜だから安心してね］

「ああ、そうなのか…わかった」

とコバッタ達のてのひらで踊るカオルだった…

「うんじゃあとりあえず、お供えものをだしますか…」

今日は、ハンガーにて一つのシェルターをだした。

扉をつけて、恒例の呼び出し…

「準備できたら出てきて下さい～」

すると、二人とも出てきた。

「カオル大将閣下でありますか？自分は、ジオン公国軍所属、エルヴィン・キャディラック曹長であります！！」

「僕は、地球連邦軍所属フレンリック・ショーン上等兵であります！！」

改めてみると、カオルと同年代位なのがわかった。

「えっと、二人とも年齢は？」

「はっ！１７歳です！」

「僕は１６歳です！」

（あり？？）

「フレンリック君って、徴兵？」

「いえ、連邦は志願制です。
研修中に今回の戦いにでるはめになっちゃったので…」

（なる程ね…）

「まぁいいや、じゃあ…とりあえず君達には特殊任務があるから、
準備出来次第、ハンガーにきてね」

「あの…」

「ん？」

「姉上は、自分が戦死したあと…どうなりましたでしょうか？」

「ん……モニク・キャディラックさんね…
お姉さんは、ヨーツンヘイムクルー共々最終決戦を生き延び、そっ
から先は語られてないけど、
多分、オリバー・マイさんと一緒になったと思うよ」

「そうですか…よかった……あとジオン公国は？」

「まぁ…想像通り負けちゃったね…けど自治権を獲得し、
まぁ…あの戦争で地球圏の工業が、かなりズタボロになったからね…
１００年まではジオン共和国として自治してたよ」

「そうでありますか…」

「まぁ生き証人のアムロさんや、シャアさんもいるし、
あとで話聞いてみるといいよ」

「わかりました。ありがとうございます」

エルヴィンは、２５号に案内され宿舎についていった。

さて…少しやる事がなくなったので、
カオルはコバッタ達の増産にかかる事にした。

（オッゴ？…あれは無理でしょ、決戦兵器とかいって……コロニー
作業用にはボールともども使えるかもだが…
今のところは、コバッタ達がやってくれるし…
まぁ艦船の有人作業用にはいいかもしれんが…
またはいずれコロニー作業用かもな…）

ポチポチ作られていたボディに、ＯＳとＣＰＵをいれてる…

（そういえばアムロさんとかＭＳどうすんだろ?…あと沙霧連隊と、ウォーケン大隊もか…
夜になったら…機体決めるか…）

と考えながら作業していると…
エルヴィンとフレンリックが来たので、
ヒルダさんへの生贄……ゴホン、いやＣ－０１への入隊手続きノタメに、
早速執務室へ案内する事にした。

「ビダンさん～」

「入っていいわよ」

シュン

「ご要望の人材連れて来ましたので、Ｃ－０１に入隊お願いしますね。
とこちらの方がわが軍の頭脳、で君達の隊長となるヒルダ・ビダンさんだ」

「エルヴィン・キャデラック曹長であります！」

「フレンリック・ショーン上等兵であります！」

「うふふ。よろしくね…じゃあ早速なんだけど…」

「あとの事はよろしくお願いしますね」

と退出をする。

暫くすると…

スバババババ

（何の音だ??）

……

さて夜になると、

［マスター、完成したよ～］

「おおぅ♪いよいよか…」

木星行きのチューリップが開きはじめた…

チューリップの中から、

ヘリウム3の入った金属樽がつまれた多目的輸送艇が出てきた。

「…どんだけまった事か……」

［マスター…］

柄にもなく、涙が出てきた。
涙を服で拭うと…
「うっし、じゃあ戦力強化だな！！」
まずは生産指示を出すことにした。
（けどコバッタ製造サボってたからなぁ…）
今は１日１１０機ＭＳなら製造できる状態だった…
（とりあえず…）
ミサイルビッグトレー４隻
シャトル…
（シャトルは５００便目標だよな？で…良かったんだっけ？）
１２００００人搭乗可能との結果になる…
（残り８６０機ね…予備いれて８７０機っと）
シャトル８７０機注文
（その二つを最優先で、残りが…）
陸戦強襲型ガンタンク、ホバートラック
の構成比率で無限｛余裕ある時｝

チューリップ２０組
と注文した。

そのあと、ウォーケンさんや、沙霧さん、アムロさんに話を聞きながら、

ウォーケン大隊にはＢ－０１同様の魔ドム
沙霧連隊にはＡ－０１同様の魔不知火。

アムロさんには、とりあえず魔グフ…

Ｃ－０１には魔ハイザック…
という形になった。

２００１年９年１６日

カオルは起きハンガーにいくと、

まずは世界扉を開く…

＝＝フルメタル・パニックの世界＝＝

カオルはフィリピンに設置された、
セーフハウスの扉をあけた。

「マスター！！」

「えーと、何号？」

「1号です」

「ん…状況は？」

「ほぼミッションは終了しました。いつでも移送可能です。後は、5日程いたければ……」

「わかった…じゃあ早速移送にかかろう。世界扉を形成するから、集めて、準備できたらよろしく」

「ハッ！！」T－1000の1号が、人を集めにいった…

ミスリルの人達の加入条件の殆どが家族をあげたので、交渉の為に派遣してたのだ。

もちろん、接触し、拒否された際の記憶については、1時間以内の出来事なら消去できる、便利な小道具を持たせたのは、お約束だった。

その装置を頭につけ、作動させると、気絶とともに、1時間以内の記憶を全て消し去る……というもの。

あんまり使いすぎると、頭がどうにかなるらしいが……

「マスター、準備できました」

「ご家族の方には説明済み？」

「はい」
と、連れられてセーフハウスのホールへと向かう。

「始めまして、自分は異世界軍の責任者となってます、渚カオルです。
しっての通り、彼、旦那さん、息子さん等は、この世界では、死んでしまいましたが、
死ぬ前にスカウトできたので別世界にていきています。
ここにおあつまりの皆様は、別世界にいる大事な人から、是非きてほしい…との事で接触がとられ、
その接触に応じた形…と伺ってます。

今から作るゲートを潜りますと、この世界には戻れないのをご承知して下さい」

世界扉を唱え、世界扉が形成される。

「では、異世界へ…ようこそ」

続々と家族の方々が異世界軍の世界へと潜っていく。
ただおっきい荷物ある方達もいるので、
それについては一回虚数空間に引き込む形にした。
無事、４３組の方々が潜り終わったので、一回世界扉をけした。
「でもって…1号、そんなに資金持たせたっけ俺？」
「犯罪組織からお金を奪いとり、
ここまでのセーフハウスを作りあげました」
（完全に介入した…なぁ…大丈夫なんか？
……まぁ…修正きかすようにするしかないか…）
とりあえず1号に、フルメタル・パニックの小説をわたし、
「命令を付け加えるよ。この筋書通りに行くように監視する事」
「はい！マスター」
（まぁ…こいつらなら大丈夫か…ただ、生産できないのが痛いなぁ…
再び取得かな？）
「さて、とりあえず1週間後にくるわ…〝世界扉〟」

＝＝現実世界＝＝

カオルは潜ると、いつもと変わらない…部屋にでた。

メールの着信が入る。

（そういえばそろそろか…ん？）

ロボット博覧会開催のお知らせ…というメールがきてた。

（一ヶ月後か…）

カオルは、いつもの集積所にいき、提供品、廃材等をうけとり、世界扉を潜る。

＝＝Ｂ５５ハンガー＝＝

カオルが元の世界に戻ると…

［マスター！！怒］

「ん？」

［いきなり人だけを送らないで下さい！！］

「え……あ…いってなかったなぁ…」

［大変だったんすからね！！まったく…］

「すまんすまん…」

といきなり怒られてた…

カオルは横浜基地の集積所に、
平和日本からの支援物資コンテナを出して、連絡を入れた。

で、Ｂ５５ハンガーの格納エリアにいくと、廃材のリサイクルの手
続きをとる。

一通りすむと……

［マスター、恭順派捕縛してきたよ～］

「さて、どうするかだよな…」

一人一人面談して結果を決める事にした。
はいるなり
「神よ、この者どもに天罰を！！」
アルミサエル…書き換え中
「おお神よ、わたし達はなんと罪深い事をしてしまったのだろうか…
何とぞ慈悲を」

はい次…

「ちょっとなんなのよ！さっさと殺しなさいよ！」

「……何で恭順派に？」

「神に逆らう冒涜よ！！」

アルミサエル…

（ほう、この子勇ましいなぁ……うっし）

カキカキ

「マスター！！忠誠を誓います。神なんかくそくらえですわ！！」

な感じで、有能かな？と感じたのを精神を書き換えて、１８名程強制加入してもらった。

ちょっと厄介だったのが、

指導者と呼ばれていた人物…

はいるなり、部下の事は冒涜するわ、本当に指導者？だったので、廃人にしておきました。

キリスト教恭順派は改心した…って事で、

加入以外の人達は白稜基地ＭＰに引き渡しておいた。

……

カオル報告

シャトル８７０機

ミサイルビッグトレー４隻
キリスト教恭順派１８名加入

陸戦強襲型ガンタンク及びホバートラック、余裕ある限り生産

チューリップ２０組

第９８話　ヘリウム解禁　投稿日２０１１０３２７（後書き）

作者「う～ん…１６歳か……」

カオル「ん？？なに悩んでるの？」

作者「いやヒルダさん捕まらないかなぁ～って…」

カオル「へ？」

作者「いや未成年なんたらに」

カオル「あ～……今いる世界だと…、
法律どうなってるんだっけ？？」

殿下「おこたえしますわ。１５歳から男女とも成人と認められ、１６歳になった時、男性はほぼすべて、独身の女性は徴兵となります。
ただし、良心的兵役忌避も認められ、清掃、介護、消防、警察、公務、
企業等従事する事を求められます」

作者「つまりニートは？」

殿下「認められませんので、
開発者になるのが引きこもりの道ですわね」

作者「で、ヒルダさんは？」

殿下「勿論、成人相手ですので、捕まりませんわ」

という事でヒルダさんは捕まりません。

第９９話　流動　投稿日２０１１０３２９

２００１年９月１７日

起きてくると…バーニィがいた。

黄昏れてる。

「バーニィおはようどうしたん？」

「ヒルダ様が、１７の餓鬼に夢中になって、昨日食べてくれなかった……」

「……食べ……今日は活動できるから良いじゃん」

「いや、食べてもらわないと！！」

「戦場に出るのと、食べてもらうのどっちが優先？」

「食べてもらうのだろ？勿論」

（ビダンさん…どんな洗脳してんだ？）

「ま、まぁ……今日は食べてくれると思うよ…頑張れ」

「ああ…」

「ところでバーニィ、乗ってもらいたい機体あるんだけど…どう?」

「ザク以外のらないよ」

「そんな事言わずにさ…ビダンさんへ、進言するから」

「どの機体だ?何でものるよ」

(はやぁ…)

「と、この機体なんだけど…」

と、バスターを紹介した。

「ガンダ?ジム?…どっちの系統だか?」

「別世界のMSだね」

「ふ〜ん…まぁ乗って見ればわかるか…」
カオルを伴ってコクピットへ向かう。

コクピットを覗くと…
「…リニアシートでないのか…
どっちかといえば俺らの時代のににてるなぁ…」

「だね〜…ま、じゃあ起動してみてよ。それがスターターだよ」

「ああ、わかった」

フィィィィ

ＯＳが起動し始める…

「え?どえええええぇぇーー!!な、な、な、なんだぁぁぁ?」

「ん?どうしたの?」

「じょ、じょうほうつうか…あ、あたまいた…」

「動かせそう?」

「無理無理！！」
横からスイッチを切ってあげ…
フィィィン
駆動音がさがってく…

「はぁはぁはぁ……何なんだ？今の…」

「単方向の分散型神経接続つうの…きつかった？」

「ああ、なんかぶわぁぁって一気に情報がはいって…
俺が俺でなくなるというか…」

「ふむ…やっぱりナチュラル用のＯＳは必要かな？」

「そのナチュラル用って？」

「まぁ普通の人用のだね…まだないから今度ね」

「ああ、頭また痛くなる事ないんだよな？」

「多分…ね」

「わかった」

カオルはバーニィとわかれ、
ハンガーディスクに向かい、先程のレポートをあげると…

（さてと…宇宙は楽したいけど……）

「月って、ハイブの数どの位あったっけ？」
［ん～と…５個ね］

（５か…ぶっちゃけ…やってみる価値はある？）

「うし、じゃあ…いってくる」

［いってらっしゃい～］

「”世界扉”」
カオルは世界を渡る

宇宙歴　００８７　１２月６日

カオルはＺの世界にやってきた…

グリプス２を取得するために…

ぶっちゃけると、人が住んでいるところには使えない、
で星を壊さない、
連射がきく…

そのクラスを考えて、コロニーレーザーで良くない？
の考えだった。星を壊すならもっと強力な兵器で、楽だけど、
重力変動等絶対ありえるから、太陽圏では使えない話だった…

月を壊したら…
単純に地球の重力がかわり、また…今あるコロニー群も怖い事になるのは想像できる話である。

カオルが、世界扉を出ると、
（ここは何処？）

鬱蒼としたジャングルにでた。

（ま、地球には間違いないし……）

カオルは衛星をうちだし、位置を確認すると、
グリプス２のある、ラグランジュ３へと急行する。

2日目

宙域に移動すると…
ア・バオア・クーいや、ゼダンの門もみえてくる。

（……あれがグリプス2ねぇ…）

巨大なシリンダー…片方に大きな穴が空いている。
カオルは早速取り付くと、同化し始めた。
しばらく時間がかかる…
コロニーの内部のシリンダー底部には、巨大な真空管のようなレーザー発振機が沢山ある。

（これを増幅させて、あの巨大なエネルギーを射出するのか…）

カオルは広げながらグリプス2を内部観察していたが、
おもしろそうなのがないので……
時間がすぎてった。

カオルは取り付き終わると…

（まだこの頃は目新しい機体なかったよなぁ……）

空気のある部屋にでて、世界扉を唱え、
元の世界へと戻る…

＝＝Ｂ５５ハンガー＝＝
２００１年９月１９日夜

「ただいまぁ～っと…」

［マスターお帰りなさい！！ちょっと報告があるんだけど…］

「ん？」

［実は佐渡島ハイブ飽和しかけて、このままだと…］

「侵攻の恐れありか…」

［うん］

「ん～～ついでに煙幕弾のテストもするか……
よっし、間引き作戦といきますか…ミサイルビッグトレーは？」

［この間の注文から1隻完成、今1隻建造中明日完成予定］

「帝国に独自での砲撃による間引きを行うって、通達しといて」

［了解］

「ザメル連隊と補給1個小隊で田の浦海岸へ下駄で輸送、展開…ミサイルビッグトレーは準備出来次第全力斉射」

ビービービー

『ミサイルビッグトレー、発進準備かかれ、
ザメル連隊、１０１補給小隊、１０１施設小隊、出撃準備』

途端に基地内部が騒がしくなる。

戦艦ドックの出入口のエレベーターに、
ミサイルビッグトレーが歩みを進めると、
地上にエレベーターが上り始める。

カオルは情報室にきていた。

「そういえばシャトルには影響は?」

［ないように、演習場の北側、町田に近いところに展開予定。そこまでは既にルートが整ってる］

エレベーターが上下移動してるのがモニターに映っている。

（ん～構造失敗したかなぁ…戦艦が出撃するのに時間かかる…で、戦艦出入口を使用しないと、出れないし……）

一応エレベーターは、往復2分で上下移動可能だったが…

「2号艇、地上出入口からでました…射出エリアに向かいます」

「エレベーター下がり、ザメル連隊以下出撃します」

下駄に乗ったザメルや搭載されたチューリップ、兵員輸送コンテナが、
出入口ハッチから浮き上がり、新潟県に向け進んでいく。

「各ミサイルビッグトレー、射撃準備整いました」

「よし、連続全力斉射」

「はっ！！」

スクリーンに映るモニターからは、夜の闇のなか、
４２０本の光が、連なって光の帯がうきあがるのが確認できる。
今回のトマホークは座標での振り分けしている。

「１射目発射完了、弾着予定時刻００２８。続いて２射目射出されます」

前のミサイルの噴煙等に影響されないよう、１分後に２セル目が発射される。

「目標座標同一、弾着予定時刻００２９。
続けて３射目射出されます」

やはり噴煙の影響を受けないように、
３セル目が発射する。

「目標座標同一…」

のを…ずーっと繰り返してた…
トマホーク弾着予定時刻までに…１２６００本近くのミサイルが射出される予定だ。

２００１年９月２０日

やはりＢＥＴＡはただものではなかった…

「１射目、迎撃されてます……５０％突破、６０％、７０％、２射目も迎撃されてます！！
…１射目全弾壊滅！」

「やはり届かないか…ザメル連隊は？」

「約３０分後到着、それから施設展開予定です」

……３０分経過

ミサイルは続けて射出されるが、全弾撃墜されている。

未改造だと噴煙で環境破壊も良いところだろう。

もちろん燃焼時、噴煙等も自然界に影響ないようにしてある。

そして待ちに待った…

「ザメル連隊到着しました！施設小隊展開開始しました」

モニターには、チューリップを中心にコバッタ達が、
ドームを作成しはじめて、
そのまわりをＴ－８５０が警備をしている様子が映し出されていた。
資材が次々とチューリップから運ばれてきて、約３０分後には組み
立て式ドームが形成できた。

「施設設営作業終了！！
射撃準備態勢整いました！」

「時間設定Ｔ２０」

弾頭設定をし終えた煙幕弾が、ザメルに次々と装填されていく…

「煙幕弾、一斉斉射！！」

ザメル８０機の６８０ｍｍキャノンから煙幕弾が一斉に放たれる。
ザメル連隊の放った弾は、約２０秒後から煙幕を出しながら佐渡島
に撃ち込まれてく…

もちろん、一射目は迎撃はされる。
が、そこまで展開した煙幕の中から次弾が出てきて…
結果的に佐渡島に到達に５射ですんでしまった。
そこにトマホークミサイルが襲い掛かる。
更にザメル達は座標をずらしながら煙幕弾を展開させていく…

しばらくすると…佐渡島全域が煙幕につつまれ…
迎撃の為のレーザーが上がらなくなってきた。

「煙幕弾……いいんでないの？」

［効果抜群だね♪］

全土を包むと、２分ごとに座標をずらして、煙幕弾を撃ち込まれるようになった。

次々とトマホークミサイルが全弾命中し…

約３時間後には佐渡島ハイブの地上部分にはＢＥＴＡの反応がなくなってしまった…

［トマホーク蹂躙～］

「煙幕弾様々、無限装置様々だな～」

［ところでマスター、このままハイブ攻略しない？］

「ん？……ん～」

現状ＭＳの日産がシャトル等とは別口で、１１０機…で、陸戦強襲

型ガンタンク１２９４機。
まだ痛い事には痛い…が…

［今、情報からすると、ハイブ内部には光線級すくなく、残り１６万匹…
他のハイブからの増援予定もなし、絶好のチャンスだよ］

「ふむ……そうだな…佐渡島ハイブをそのまま貰い受けたいし、帝国に打診しておいてくれ」

［了解、マスター］

「ミサイルビッグトレーは津軽海峡から日本海側へ回せ。
佐渡島ハイブ攻略戦、２３日を目処に発動する」

［イエス・マイ・ロード！！］

「偵察用エアロスタットを佐渡島ハイブに派遣、
地上部分を監視させておけ」

カオルは必要な指示を飛ばすと、
コバッタ達の増産にかかった。

＝＝アメリカ情報局＝＝

「な、何なのだね…これは…」

「おそらくミサイルによる噴煙かと思われますが……」

「計測上、何本記録できたのかね?」

「約１２万本近くのミサイルです。しかもこの２隻の戦艦からうたれてます」

「たった2隻で……か?」

「はい……」

「ナンセンスだ!!非常識だ!!」

「確かに……」

……

カオル報告

2013

２３日目処…早過ぎたかな？

第９９話　流動　投稿日２０１１０３２９（後書き）

作者「なし崩しに佐渡島ハイブ攻略になったなぁ……」

ナギ少尉「初期プロットは？」

作者「ん～～もう少し機体数が、そろってからだったが……ま、いいか」

ナギ少尉「どっかの部隊は全滅したよね～、ありえる？」

作者「補給届かず、間に合わずに…だろ？
まぁ異世界軍の突入部隊も、補給届かずなら有り得るね」

ナギ少尉「なるほど……さて次回予告は、佐渡島ハイブ攻略戦…地上戦…お楽しみにぃ」

第１００話佐渡島ハイブ攻略戦…地上編　投稿日２０１１０３３１

２００１年９月２１日

引き続き増産中…だったのだが、帝都城に呼ばれた。

「異世界軍、渚カオル参上しました。殿下、何事ですか？」

「カオル殿、佐渡島ハイブを攻略するとか…」

「はい、２３日より上陸作戦を行います」

「私達、帝国臣民の悲願であります。何とぞ…ハイブ攻略、よろしくお願いいたします」

「はっ！」

「ところでカオル殿、ハイブ攻略後、佐渡島ハイブを異世界軍の基地にしたいとか…真か？」

「ええ、日本を護る拠点にしたいと思います。
またその先別のハイブを落とした時にも同様にするつもりですが…」

「帝国としては異論はありません。
が、軍の方から攻略作戦混ぜて欲しい…
悲願の攻略に…との事です」

「更新した機体の属する部隊でならと、
ご返答お願いします」

「そのように伝えますわ…月詠」

「はっ！！」

「土地権利上の手続き等、あとの事頼みます」

佐渡島のG元素と交換という形で、ハイブ攻略後の佐渡島全土の権利を手に入れるようになる。
佐渡島は…避難できた人が一人もいなかった為、解放できたとしても、無人の島になるからのであった。

（あ、そういやぁ……）
カオルは帰り際に足りない機体に気がつき、ハンガーに戻ると追加注文に入る。

ザクタンクを作業用として、タンク部分を延長、キャタピラ、モーター強化、荷台を追加、

また各種レイバー用のアタッチメント装着、使用可…

有人機でないため、コクピットは改造せずに、…
作業用ザクタンクとして２０機ほど注文した。

２００１年９月２２日

ひたすら生産しつつもまずは……

会議室の中には、伊隅、沙霧、ウォーケン、ミーリィ、
ラトロワ、バーニィ、桜井、アムロ、シャア、ヒルダが集まっていた。

「おはようございます。では早速、佐渡島ハイブに対しての攻略会議を始めます……」

※作注ネタバレになるよな…という事で、
場面は略させていただきます。

２００１年９月２３日

佐渡島作戦当日…

ビービービー
戦艦出入口より次々と下駄にのり、陸戦強襲型ガンタンクが飛び立っていく。
陸戦強襲型ガンタンクは、１７００機を越えた機数となって、

今生産中の機体以外は全部出撃となる。

続いて、１４１機のホバートラック達、
中隊単位に索敵専用としてつけられている…

続いて、今回のいやこれからも中核となるだろう、チューリップが５組…
とにかく弾薬供給源の元になるので、最重要守備対象となる。

それを護衛するＴ－８５０隊が兵員輸送コンテナに搭乗して続いてく…

続いて作業用ザクタンク２０機…突入時に活躍するであろう。

最後に有人機である、
Ｂ－０１の魔ドム、
Ａ－０１魔不知火、
ウォーケン大隊の魔ドム、
沙霧連隊の魔不知火、
Ｃ－０１の魔ハイザックと続く…

カオル達異世界軍の大群が新潟に着いた…

そして…

「この戦いにより、人類はまた一歩前進するであろう……
オペレーション佐渡島、開始せよ！！」

秋田県、鼠ケ関沖にまわされた3隻のビックトレーから、

６３０本ものトマホークミサイルが放たれる。
トマホークが目指す目標は、ハイブ構造物…
３日前の間引きの際殆どの光線級は死滅した為、迎撃されることなく、一斉に命中、爆発し、構造物は崩れてゆく…
そこに更に次弾が撃ち込まれ次々と崩落していく。
崩落しきると…でっかい主縦坑が映っていた。
そのまま、主縦坑に向け、トマホークミサイルを引き続きぶち込む。
縦穴周囲も削る為だった…
１００m程削れると……
光線級がでてきたのだろう、
『到達率０，５%!!』
カオルは魔撃震と一体となってる状態で指揮をとってるが、
横浜基地からの報告がリアルタイムではいる。
「よし、煙幕弾てぇ!!３斉射後、光線級に向け、トマホークミサイルてぇ!」
再び主縦坑周辺地域が途中で迎撃うけるも、煙幕に覆われる…
そこに撃ち込まれるトマホークミサイル…

『到達率１００％全弾命中の模様！！』

「様子見だな…」

煙幕がはれると更にえぐられ、
クレーターだらけになっていた…

（もう流石に出尽くしたかな？）

「主縦坑に５発程トマホークぶち込め…ピンポイントでだ…」

射出されるトマホーク……

『着弾まで、１分』

「これが、着弾したら、フェイズ３へ移行する」

『了解しました』

……

『着弾！！到達率１００％光線級認められません』

「ようし、フェイズ3移行だ」

『はっ！』

新潟県沿岸で、下駄にのって待機してた異世界軍が、
一斉に佐渡島を目指し最大戦速に加速し始める。

下駄には陸戦強襲型ガンタンクが2機乗っていて、
またそれ以外にもホバートラック、チューリップ、兵員輸送コンテナ等搭載した下駄も見える。

『いっけぇぇぇ！！』

『わくわくしますわ』

『カオル！！いよいよね』

「あんまり無理すんなよ」

カオルは、戦乙女達に語りかける…

『大将、この機体の力みせてやりますよ！』

『カオル君、この僕を侮らないでほしいな』

2022

『カオルさん…今までの鬱憤はらしますから、ご心配に及びません』

『佐渡島ハイブ、反応なし』
HQから報告が入る。

「そのまま上陸、陣地展開、作戦行動範囲を広げろ!!」

『イヤッハー!!』

指令がとび、
佐渡島からのBETAの反撃を受けずに、クレーターだらけになって、
BETAの死骸だらけの島に上陸した異世界軍は、

直ぐさま展開し始めると…

BETAの大群が島の各所にある門から沸き上がってきた!

「きやがった!!各機陣地形成を支援、蹂躙せよ!!」

下駄から降りた、陸戦強襲型ガンタンクが、障害物となる死骸を焼きながら、陣地の場所を確保する。

また手のあいてる機体は、戦線をはりはじめる。

兵員輸送コンテナから飛び出したコバッタ達が、
チューリップを中心とする組み立て式コンクリート陣地の形成にとりかかる。

主縦坑から、南南東９ｋｍの地点に陣地をもうけようとしていた。

ビックトレーから撃ち込まれるミサイル、
ザメルから撃ち込まれる６８０ｍｍ砲、
陸戦強襲型ガンタンクによる砲撃の中、

チューリップから、次々と輸送挺で運びだされる資材。

ドームがまたたくまに形成される。

島に上陸した陸戦強襲型ガンタンク約１７００機、
有人機、支援砲撃、ミサイルでＢＥＴＡの圧力を押し返している。

次々と死骸にかわるＢＥＴＡ、弾切れした陸戦強襲型ガンタンクが、
陣地に戻り抜けた穴を別の機体が埋める。
そして、新潟県沿岸部に待機していた帝国軍を載せた揚陸艦が、
抵抗も受けずに、富岡から、大群の上陸を成功させていた。

『斬りたいけど…我慢我慢』

火力戦では、前にでると射撃ができなくなるから…

十分言い聞かせてあったのだが……

『まだ斬る機会じゃありませんわ…
今は戦線形成ですわよ』

『わかってるわよ！！
ヴァルキリー０２弾切れ、後退する！』

『ヴァルキリー０８入ります！！』

（戦線構築うまくいってるな……）

富岡から上陸してきた、帝国軍３個師団規模も戦線に合流し始めた。

帝国軍にも、火力戦を…とお願いしているので、
結果的に戦線が更に火力が上昇しつつあった…

……

同日２１時２４分

『地上部焼却除去完了、障害物等認められません。ＢＥＴＡの迎撃もなし』

「うし…フェイズ４へ移行」

ここからまだまだ長丁場であったため、
ウォーケン大隊、ジャール大隊、Ｃ－０１以外の有人機は横浜基地で休養をとる為に、既に下駄に乗って帰還していた。

帝国軍も突入部隊込みで半数以上が母艦でメンテや休憩の為に戻っている。

中破や擱座したガンタンク（勿論脱出済み）もザクタンクが回収してきて、
陣地では修理中であった。

陸戦強襲型ガンタンク、ホバートラックが、門や主縦坑周辺に集まり始めた。

そしてチューリップから出てきた輸送艇にのっていた、
エアロスタット達が展開し始める。

エアロスタット達は、それぞれの担当する門に突入しはじめた…

しばらくすると、
『Ａ－１ゲート１２５０！！Ｃ－１ゲート２１２３！！Ａ－８ゲート６３８！！～～』
等報告があがると、
突入した門からエアロスタット達が飛び出してきた。

すると……それを追ってきたＢＥＴＡの大群が湧き出はじめる。
それを待ち構えて幾重にも門を囲んでいた、
陸戦強襲型ガンタンクから大量の砲火があがる…

門によって湧き出たＢＥＴＡの量は違うが…
ものの１分から１５分程で沸きどまり、
弾薬の減った陸戦強襲型ガンタンク達が交代交代で陣地へと補給に向かう。

そして、戦力が揃った門にまたエアロスタットが突入し、
再びＢＥＴＡを釣ってくるの繰り返しを行っている光景が、
そこらじゅうで見えていた。

異変は時たま起きる。

『振動探知！！地下よりＢＥＴＡの侵攻あります！！』
ホバートラックが地下進行を探知したようだ…

「待機部隊を向かわせろ！」

警戒エリアに向け、待機していた陸戦強襲型ガンタンク達、Ｂ－０１が急行する。

『警戒エリア到着……門形成エリア狭まります……』

陸戦強襲型ガンタンクが段々狭まる警戒区域に砲身をむけ……

『出現までもなく…5、4、3、2、1』

土砂吹き上げれとともに、湧き出てくるＢＥＴＡ群…

幾重にも包囲した陸戦強襲型ガンタンクによる射撃により、またたくまに勢いは減り…

ただの門にとなる。

地上は、陸戦強襲型ガンタンクの蹂躙する世界となっていた。

＝＝アメリカ軍情報局＝＝

「むむむ……」

「時間はかかりますが優勢のもようです」

「ＢＥＴＡを引きずりだすか……考えてはなかったな」

「ええ、この画像に写っているこの機体、かなりの重要な役目をもってますね」

「開発局にこの画像を回せ！！
なんとしてでも……」

……

カオル報告

ただいま戦闘中……

忙しいっす、後ほど…

第１００話佐渡島ハイブ攻略戦…地上編　投稿日２０１１０３３１（後書き）

オリジナルハイブ最下層

あ号「……２１から救援要請か……よし送るか……到達できるまで持たせろ…
フム…光線級をもっと比率あげないと駄目か…
２０、１６はまだ足りないな…」

ただいま対策をねっている模様です。

「１４、１８、１９に命ずる２１に救援送れ。
０３、０４、０６、１５に命ずる、増産、２０、１６に援軍を」

第二部

作者「いよいよハイブ攻略地上編か…」

ナギ少尉「あたしも加わりたかったなぁ……」

作者「お前はこっちに拉致されてないじゃん」

ナギ少尉「まぁそうだけどね～…

空母からミサイルとアヒルちゃんの生活送ってると、飽きるのよ」

作者「ミサイルっていえば、お前のところの無限弾薬装填装置大活躍だなぁ」

ナギ少尉「あ～ミサイルビックトレーのね？……3隻で６４０本ってチートでしょ…
私のところでさえ、同時ロックオンで8発が限度なのに…」

作者「が、1秒間隔でうてるだろ？」

ナギ少尉「う……そうね…」

作者「そのてん頭脳はこっちのヤドカリ等が凄いんだって、事さ…」

ナギ少尉「そういった意味ではチートね…
あとエアロスタット君大活躍してるし…」

作者「見事にＢＥＴＡを引き寄せる擬似餌になってるなぁ……」

ナギ少尉「みたいね……さて、次回予告！佐渡島ハイブ攻略戦…突入編……お楽しみにぃ」

第１０１話　佐渡島ハイブ攻略戦…突入編　投稿日２０１１０４０２　修正１

２００１年９月２４日午前１１時頃

夜を徹して釣り針でＢＥＴＡを引きずりだし、地上にて迎撃は、一定の成果をあげていた…が…

『エアロスタットより報告、追跡してきません』

「やっとここまできたか……長かったな……と残存予想は？」

『約５万体、最下層にて防衛行動をしているとの事です』

「うっし、フェイズ６に移行、突入準備にかかれ」

陸戦強襲型ガンタンクが門付近の、死骸の焼却除去にはいる

『では大将われわれは』

「ああ、お疲れウォーケン・ラトロワ」

徹夜して、即応対応してた第６６機甲大隊、ジャール大隊、Ｃ－０１が下駄にのって横浜基地に帰還し始める

入れ替わりに釣り天秤中は、新潟陣地にて休憩してた、
Ａ－０１、沙霧連隊、Ｂ－０１、アムロ達がくる予定になっている。

……約２時間後

『地上部分、各門付近とも焼却除去完了…障害除去できました』

「おっし、じゃあ、上層、中層とも確保し、突入部隊準備できるまでにクリアリングを」

『はっ！！』

指令をうけた陸戦強襲型ガンタンク、ザクタンクは門に突入する。

まずは最上層の広間につくと、エアロスタットもいるが、
陸戦強襲型ガンタンクが警戒するなか、
ザクタンクが有線で無線中継機、監視装置等を引っ張ってきて設営し始める。

その間に別動隊がさらに横坑へと突入する。

今のところ抵抗すらない状態だった。

程なく上層に近い広間は、

異世界軍の監視下に落ちた。

一旦地上に戻ってきたザクタンクは、また資材を積み込むとまた門へと突入する。

更に下層の広間へと陸戦強襲型ガンタンク、ザクタンクは進んでいく…

スパイ情報から寄せられた佐渡島ハイブのＢＥＴＡ総数は２５万匹、今までの駆逐ＢＥＴＡは約２０万匹…

まだ釣り天秤に釣られる事なく、最下層に潜むＢＥＴＡは約５万匹いる事になる。

程なく各広間を確保してると、帝国軍より、揚陸艦にて休養、補給していた突入部隊が準備整ったとの連絡が入った。

『カオル』

『カオル君準備整ってるぞ』

『はっはっは！！斬るぞ斬るぞー！！』

『この日をどんなに待ち望んだ事か……』

『大将どの、われわれに名誉ある栄光を!!』

「各隊、佐渡島ハイブに突入!!ＢＥＴＡを駆逐せよ!!」

『了解』＊多数

午後２時２１分佐渡島ハイブ攻略部隊は、各門よりハイブ内部に突入する。

……

突入部隊は、チューリップを中心として、陸戦強襲型ガンタンク及び、
有人機及び帝国軍によって構成されている５部隊によって進んでいた。

『ヴァルキリー０８より、マスター１』

「こちらマスター１、どうした?」

『コバッタ達、何やってるのです?』

「通路の強化だね…擬装横坑対策もかねて」

擬装横坑の場所もわかっているが、この先の利用もかねて、メイン通路とし、強化してるのだった。

気が早いもんである。

『しっかし、ここまで無抵抗だと……』

『確かに…拍子ぬけしますね』

「まぁそんだけ釣れた…って事だよ」

そうしているうちに、どんどん地下深く侵攻し…

途中の下層の広間や横道も既に、監視、連絡網構築が整っていた。

そして、ＢＥＴＡが潜んでいる広間の一つ手前の広間まですすむ。

偵察用エアロスタットがどうしようと、横坑から先に釣れて来られないので、

反応炉をまもる近衛隊ともいえよう…

この先、反応炉のある大広間、
及びＢＥＴＡが生産される部屋まで最低でも３つの広間を通る事になる、
また周囲を固める３つの広間がある。

まずは、周囲の広間をクリアにする事になる。

「行くぞ！ＢＥＴＡを蹂躙せよ！」

横坑に突入し、広間に入ると、天上までびっちりとＢＥＴＡどもが待っていた。

「ファイアー！！」

横坑から進入してきた陸戦強襲型ガンタンクから、一斉射撃が放たれる。

その隙間をぬって有人機がザクマシンガンの火を放つ。

天上からぼとぼとと、襲撃してくるＢＥＴＡには、控えている機体がブレードをなぎ、肉片とかす。

機体に取り付かれようが、きかないが、対応する時間はあるのであった。

弾薬が切れた陸戦強襲型ガンタンクは、後方にさがり、
すぐにその隙間を控えの陸戦強襲型ガンタンクがうめる。

『マガジン！！』

控えの機体よりマガジンが渡され、
その控えの機体に、補給より戻ってきた陸戦強襲型ガンタンクが、
マガジンを積んでるので渡される。

大量の火力の前に、次々と肉片と化すＢＥＴＡ…
段々と、陸戦強襲型ガンタンクの壁は前進していって……

突入から４５分後この広間は制圧下となった。

「ふぅ…今ので５０００か？」

『みたいですわね…』

『けど、弾薬が尽きる事のないのは良いですね』

『そうね～』

本当、チューリップ様々であった。

『こちらブラボー０１、広間Ｄ－４－１０制圧、これより進行ルート外の横坑の駆逐に入る』

『こちらアーム０１…』

次々と報告がはいり、横坑の駆逐へとうつる。

「この先、各広間から合流するが、残り３００００匹控えてるな…」

『ですようね…あと二つの広間なんですよね？』

「ああ、合流する広間、主広間を突破すれば…大広間、反応炉のあるな…」

ＢＥＴＡにとっても最重要施設を守っている。

各広間を結んでいる横坑の駆逐が終了したので、

いよいよ合流ルートになる広間へと足を進める。

広間にすすむと、足元びっちり、天上ぎっしり…

レーダーには赤い光点だらけ…

まさにＢＥＴＡが９分地面が１分であった…

突入と同時に、陸戦強襲型ガンタンクの砲身が火を放つ。

見ると、別広間から進入してきた突入隊も同様に火をはなっている。

ＢＥＴＡの絨毯を少しずつ削りとっていく。

陸戦強襲型ガンタンクが補給に戻る回数多くなるが、
補給から戻ってきたガンタンクが穴を埋める。

後方組の陸戦強襲型ガンタンクの２４０ｍｍキャノンから、
留弾がほぼ水平で発射され、
後ろにいるＢＥＴＡを数十匹死滅させる。

壁組の陸戦強襲型ガンタンクの腕部ポップガン、３０ｍｍ機銃が絶えずに唸りをあげ、
命中する小型ＢＥＴＡを片っ端から肉片にかえる。
中型ＢＥＴＡは倒れ壁になるが、構わず打ち抜きそのうち肉片になる。

それが３方向から総数１６００もの、実際に撃ち込んでるのが８００位だが、撃ち込まれているからたまらないだろう。

そして陸戦強襲型ガンタンクの壁がじりじりと前進し、
開いたスペースに控えが入り火力がます……

約１００００匹いたこの広間もとうとう駆逐された。

（こいつが門級か……）

目のまえには横杭を塞ぐような形でＢＥＴＡがいる。

もっとも隔壁としているＢＥＴＡであるので無害ともいえよう。

ＢＥＴＡの死骸を排土板つけた、補給済みの陸戦強襲型ガンタンクが、

除去作業＝壁に死骸を寄せ広間のスペースを広げる中、

チューリップを呼び寄せ、

次の広間を目指す為に、隔壁である門級の破壊作業にはいる。

カオルは、撃震の両腕を高周波ブレードに変え、

一気に門級の天井近くの部分に突き刺すと、そのまま円をかくように門級の壁側ふきんを３６０度切り込みをいれ…

また天井まで切り込みが繋なげ…

機体で少しおすと…

門級のくり抜いた部分が奥に倒れていく…

すると、横坑内部にＢＥＴＡが詰まっていたが、門級の身体に潰されていく……

そこに控えていた陸戦強襲型ガンタンク達が砲火をはなつ。

横坑には大体２０００あまりのＢＥＴＡがつめていたが、程なく駆逐され…

そして主広間入口の門級をまたもやくり抜き作業に入る。

「次の広間を突破し、横坑をぬけると、目指す目標の反応炉だ！！
いいか…ここまで来たんだ…凡ミスで死ぬ事は赦されない。
各機、突入、砲撃準備！！」

３６０度円くり抜いた隔壁をおす……
ゆっくりと隔壁が奥に倒れてく…

主広間に突入した。
そこには地面をうめつくすＢＥＴＡ、約２００００匹がつめていた。
いっせいに突入、ラインを形成し陸戦強襲型ガンタンクが砲火をはなつ…
そこに襲い掛かるＢＥＴＡども…

流石に最後の広間だけであって、つめているＢＥＴＡの数は多い。
対してこちらは門級が倒れたスペースしかない。
ラインを形成できたのが５００機、残りは横杭の中から出れない…
というか、補給に戻る通路部分は絶対に空けておかないと……だった。
また頭上から、どんどんＢＥＴＡが落ちてきて襲撃してくる。
片っ端からブレードで肉片に切り刻む。

（対空車両作っておくべきだったか……）

それ程頭上からの襲撃が多かった。

が幸い、帝国軍機は横杭内対応、横杭内部に処理仕切れず侵入してくるＢＥＴＡに対しては、
対応し処理しきれている。

広間内に突入した有人機はルナチタニウム合金製の機体なのでたかられても機動に支障がでる程度、
それ程心配はしないが、流石に視界が埋まる程降ってくるＢＥＴＡはうざかった。
各々の機体のブレード、ザクマシンガンで駆逐していく。

壁組の陸戦強襲型ガンタンクは、天井に張り付けない、
中型以上のＢＥＴＡをメインターゲットとして、両腕からの砲火を絶やさずに少しずつ前進している。

１両分のスペースが空き、そこに中列の陸戦強襲型ガンタンクが機体を滑りこませる。

壁組の陸戦強襲型ガンタンクが弾切れになり、
高速バックで小型ＢＥＴＡをキャタピラで踏み潰しながら横杭内部に潜りこむ。

すぐに空いたスペースに中列から別の陸戦強襲型ガンタンクが入り

込む。

中列の空いたスペースに後列のがはいりこみ、
その後列のスペースに横杭内に待機してたのが入り込む。

だんだん壁組が前にすすみ、火力が増す。
だんだん頭上からの襲撃してくるＢＥＴＡの数が減ってくる。

そして、とうとう主広間内のＢＥＴＡの最後の１匹が死滅した。

すぐさま排土板を装備した陸戦強襲型ガンタンクが除去作業に入る。
陸戦強襲型ガンタンクは殆どＢＥＴＡの返り血を浴び、
また広間内に突入した有人機も紫色に染め上がっていた。

「ふう……これで２万か…帰ったら少し戦略見直しかな…」
思わずぼやく位だった。
やはり頭上から襲ってくるＢＥＴＡがウザいすぎた。
（横杭内に、対応機がいなければ、怖いことになったな…）

主広間のＢＥＴＡ除去状況を確認しながら、大広間へ繋がる横坑の
門級のくり抜き作業にはいる。

機体をおし、横坑に突入するがＢＥＴＡがさほどいない…

「主広間が最後の砦だったようだな…」

『みたいですわね』

陸戦強襲型ガンタンクも警戒していたが、
１００匹程度、まぁ生産したばっかりなのだろう…すぐに切られて駆逐する。

そして、大広間に突入するとそこには反応炉、
いや頭脳級が鎮座していた。

『マスター１』

カオルは機体を反応炉に近寄らせ、
機体の同化を解除し、反応炉に対し、

「イロウル」

反応炉を支配下においた。

「バルディエル」反応炉のスパイ作成した……

（うっし…完璧……）

「諸君！！佐渡島ハイブは、勢力下におさめた！！」

ウォオオオオ

外部スピーカーより勝鬨の咆哮が上がる。

２００１年９月２４日午後２０時３５分

甲２１号、佐渡島ハイブ異世界軍により制圧

……

カオル報告

佐渡島ハイブを入手しました。

第１０１話　佐渡島ハイブ攻略戦…突入編　投稿日２０１１０４０２　修正１

作者「やっと佐渡島ハイブ攻略だなぁ…」

あ号「……とられた…か…」

作者「あ、あ号、本編ではとられたの知らないからな、注意しろよ」

あ号「……わかって…る……が……すぐに…元に…戻る」

作者「あ～前回の後書きのか…でも結局間に合わないだろ？」

あ号「……ふ……ふ……ふ…」

作者「まぁカオルが救援送られてるのしらないからなぁ……」

ナギ少尉「？なに？このきもいやつ」

あ号「……キモイ……ｏｒｚ」

作者「あ、こいつあ号つう地球上のラスボス」

ナギ少尉「ふ～ん…ま、次回予告～佐渡島ハイブ攻略後。……作者サブタイトルセンスない！！」

第１０２話　佐渡島ハイブ攻略後　投稿日２０１１０４０４

２００１年９月２４日２２時

「親愛なる日本国民の皆様、皇武院　悠陽であります。長きにわたり多大な苦難を強いている事、誠に申し訳なく思います。
ですが、本日はうれしいお知らせがあります。
長く私たちを苦しめていた佐渡島ハイブが陥落、人類の勢力下にはいりました！！」
放送を聞いていた各所で喜声があがる。

「まだまだ長く苦しい時は続くと思われますが、この放送でもって、９月２４日をハイブ陥落できた日の国民の祝日といたします。
なをこの時間ですので、明日は臨時的に振替休日とします。
明日は一日お祝い致しましょう。私たちの友に対して…」

日本帝国全土に、お祝いの嵐が吹き荒れた。
普段ではそろそろ店仕舞いをしてた店もシャッターをあけ、ただ酒を振る舞うしまつ。
夜なのに、街はいきなり徹夜の祭騒ぎになった。
そして眠らない祭はまだまだ続く……

佐渡島ハイブでは撤収作業、また施設設営準備、
ハイブ内から運び出されたＢＥＴＡの死骸焼却作業が続けられていた。

帝国軍機が、海上で待機していた揚陸艦に、

続々と歓迎されながら乗り込んでいく。

異世界軍の方は、
戦闘で使われた機体は一回横浜白稜基地に帰還、
戦闘未参加の１個連隊の陸戦強襲型ガンタンクが、
横浜白稜基地より下駄で飛来してきて、陸上部分の警備にあたる。
またミサイルビックトレー４隻及びザメル連隊、Ｔ－８５０連隊も
警備にあたる。

「ではレビル将軍」

「うむ、あとの警備は任しておけ」

「よろしくお願い致します」

カオルは最後の便として横浜基地へと帰還する。

２００１年９月２５日午前2時過ぎ…

カオル達が横浜白凌基地につくと、
真夜中にも関わらず、数多くの職員や兵士達が歓声をあげ、出迎えてくれた。

何しろ通常兵器による初のハイブ攻略、占拠を成し遂げたのだから

だった…

カオルは戦艦出入口から格納庫に機体をとめ、ハンガーに向かうと、

「カオルさん」「大将」「カオル！！」「やったねぇ」「いやぁあんた偉い！」

等多数の歓声に迎えられて抱き着かれた。

［マスター！！めでたいからとっておきの日本酒でも］

酒が配られ…

「え～では僭越ながら、佐渡島ハイブ攻略を祝しまして…乾杯ー！」

「乾杯ー！！」＊多数

みんな喜び旨そうにコップに配られた日本酒を飲む。中にはちびちびと…

まりもさんも旨そうに…

その後が、戦闘では負傷してなかった人員が負傷し、

一転して修羅場となった事になる。

勿論全力で押さえ込みにかかり……

（こんなに酒癖わるかったのか…）

と反省するひと幕がありました。

そして日中…
基地内部被害報告書及び戦闘報告書を受け取り、
また佐渡島の基地化を進めようとしていた。
先に、多目的輸送挺で佐渡島ハイブにチューリップで移動し、
作業事務所をたちあげる。

まずは、仮設核融合炉プラス重力波アンテナを設営し、
エステバリスで、
主縦坑を拡張し、戦艦エレベーターを3基６００ｍ＊４００ｍ＊４００ｍをできるように拡張を命令をする。

作業用ザクタンク、コバッタ等は、不必要な横坑を埋め、また…広間の戦艦ドック用に、拡張、
警戒用地上設備、飛行場、ＭＳ用地下格納庫、地下ハンガー、等など横浜基地を参照にすすめる。

勿論、地上の地面をならす事も忘れてない。

また地下のG元素を約束通り帝国に渡すため採掘作業に、作業用ザクタンクをまわしておく。

（けど作業用のがやっぱり足りないかな?…）

一通り命令したあと、輸送挺で戻り、
エステバリスを追加で１９機、作業用ザクタンクを２０機注文しておく。

とりあえず手配を終え、
戦闘報告書を確認し始めた。

陸戦強襲型ガンタンクは修復済みだが、撹座、中破が流石に目立った…

タンク式の宿命だが、駆動部分に真横から突っ込まれると、
ＢＥＴＡ自身を巻き込み駆動不能→撹座や、
撹座後に集中攻撃、砲身が曲がる等戦闘不能中破、
等がやはり数十機単位であった。

勿論ヤドカリが脱出後、別の機体が後ろに押し出し、邪魔にならないようにし、
暫くしてから作業用ザクタンクにより回収、後方修理、再出撃の流れになったとの事だ。

なので、機体数の実質的ロスは、今回はなし。

その他弾薬等の在庫が、
煙幕弾残り
陸戦強襲型ガンタンク用セット
ザクマシンガン弾装

また帝国軍からの報告書もあがってきてる。

今回の戦死者０

負傷者はいるものの、陸戦強襲型ガンタンクが庇ったりした為、
戦死者０…という数字があがってきたのだった。

また報告書には庇ってくれたパイロットに対してのお礼も…
と記載されている…

（とりあえず反省事は、頭上への対応だよな…対空型でなく、垂直方向ねぇ……
確かドイツの戦車参照にできそうだなぁ…
が急降下爆撃は第二次世界対戦で既に役目おえちゃったからなぁ…
自作するしか…または、ティエレン対空型かな？
…ま、次のハイブ攻略までに仕上げりゃいいか…）

…ハイブ内頭上対応型は後回しになった模様です。

２００１年９月２６日

カオルは機上の人になっていた…国連緊急会議に出るために…
報告とオルタネイティブ４の続行、
またこの後の方針についてだった。

「あ～っはっはっは♪こんなにワインが美味いの始めてだわ」

「副司令……飲み過ぎっすよ…会議でるんすから」

「大丈夫～～ヒルダからもらった、アルコール揮発剤飲めば一発よ。

それに００ユニットも目処がたったしぃ～」

「お、半導体の件解決したんです？」

「そうよ～♪
ターミネーターの世界のって優秀だったわねぇ」

「楽しみにしてますよ」

「♪オルタ５…どうしようかなぁ～」
と鼻歌をだす程かなり上機嫌な副司令だった……

＝＝国連緊急会議＝＝

「異世界軍、渚カオル大将」

カオルは呼ばれて壇上にあがる
「既に皆様にはニュースが流れておりますが、
２００１年９月２４日佐渡島ハイブを攻略、
我が軍の勢力下におきました事を報告致します」

オオオザワザワ
会議場内がどよめきにあふれる。

「議長、つきましては、以前の会議決議通りにオルタネイティブ５の永久凍結、及びオルタネイティブ５施設の接収を提案致します」

「わかりました。決をとりたいと思います。
渚カオル大将からの提案、オルタネイティブ５の凍結、及び施設の接収…賛成の方々は起立お願いいたします」

続々と、席から立ち上がり、アメリカ以外満場一致の結果になる。

「賛成多数の為、オルタネイティブ５関連施設は、異世界軍の管理下になります」

「皆様ありがとうございます」

深々と礼をするカオル…

「この後の我が軍の展開予定ですが、まずは鉄原ハイブ攻略で大陸への足場とし、重慶ハイブ、敦煌ハイブとオリジナルハイブを目指してのばしていきます。
そこで提案なのですが、各ハイブを攻略後、前線基地、中継基地として、使いたいと思っておりますので、
ハイブ周囲１５ｋｍの土地を攻略後我が軍への委譲を提案いたします」

ザワザワ議場が騒がしくなる。

フランス代表が質問挙手してきた。

「フランス代表」

「カオル大将、ハイブの前線基地化によるメリットは？」

「基本ＢＥＴＡは、各ハイブにある反応炉で、エネルギーをもらい行動をします。
また、ハイブが生存してるなら、すぐ隣りにハイブを作りません。
この事から、各ハイブを破壊せずに、再利用し、ＢＥＴＡを誘引、殲滅する基地化を目指すつもりです」

「成る程わかりました」

統一中華代表が挙手してきた。

「統一中華代表」

「ハイブ内部にあるＧ元素は…？」

「我が軍には必要ありませんので、それについては…？」

「Ｇ元素の権利を放棄するなら、国連軍の管理下におかれます」

「当該国にも渡すように提案いたします」

「それについては後ほどですね」

「はい」

統一中華代表の質問は以上だった。

「議長」

大東亜連合代表が挙手してきた。

(次の鉄原ハイブの所有国だよな)

「大東亜連合代表」

「地球平定できた以降の話もしてもよろしいでしょうか?」

「カオル大将」

「ですね、所有国についての権利ですから、どうぞ」

「地球平定以後、各前線や中継基地はどうされるのです?」

「自分としては、ある程度撤収、数を減らして太陽系戦にシフトするつもりです。
ですので、残ってもらいたいなどは、各国間の調整になります」

ザワザワ会議場内がざわめき始めた。

「まぁ基地化移譲を承認いただいたあと、次のハイブ攻略までに決まっていれば問題ないかと」

「鉄原ハイブですよね？」

「はい」

「時期は？」

「最短一ヶ月後、長くっても三ヶ月後の目処です」

大東亜連合の質問は以上だった。

質問は出揃った模様だった。

「各ハイブ攻略後の基地化の為の異世界軍への土地権利移譲、永久使用か戦後撤収かは次回ハイブ攻略までの調整…
決議をとりたいと思います賛成の代表は立席にてお願いいたします」

アメリカも賛成に回り、満場一致となる。

「議長、難民問題について異世界軍に質問ありますが、よろしいですか？」

「どうぞ」

「いつ頃我が国内の難民が……になりますでしょうか？」

「カオル大将」

「現状、毎日５００便のシャトルを飛ばして毎日１１万人移住してますが、
神奈川の管制は、これ以上は無理ですので、
新規シャトル施設を作らないと駄目です。
コロニー自体はできてますが、輸送面で…ですね」

「新規施設ですか？」

「空港整備関係施設含めて２５ｋｍ＊２５ｋｍの更地、また高層物件の存在でしょうか…」

「わたしの所に用地がありますが？」

オーストラリア代表が発言してきた。
「我が連合に是非とも」
アフリカ連合代表が…
「我が国にも」
アメリカ代表が…

「とりあえず佐渡島の基地化すんでからの話になりますので、
…後ほどにでも」

いきなり収集つかなくなりそうだったので…カオルの番を終わらしてもらった。

２００１年９月２７日夜

横浜基地に着陸する再突入駆逐艦より、カオルは降り立ち、

ハンガーに向かうと…
［マスター医務室より、ニコル・アマルフィさんの準備整ったって～］

（お、復活したか）

「うっし、じゃあ…いくわ」

と医務室に向かう。

室内にはいり…
「始めましてニコルさん」

「カオル大将ですね？こちらこそ、よろしくお願いいたします」

いってる合間に諸々手続きはすんでた模様だった。

「じゃあ早速ですが、特殊任務として協力をお願いしたいのですが…ちょっと待って下さいね」

で内線でヒルダさんを呼びだすと…

『あん…こらぁ駄目じゃない……電話中なんだから……えっと、新しい子ね？……あっ……明日にして……』
ツーツーツー

（確認してよかったぁぁ）
吸収中だった模様だったので、
ニコル君には悪いが、明日入隊という形になりました。

……
カオル報告

作業用ザクタンク２０機追加
作業用エステバリス１９機追加

オルタ5接収
余計な誘致フラグたった模様

絶対にまりもさんには酒のまさない！！

第１０２話　佐渡島ハイブ攻略後　投稿日２０１１０４０４（後書き）

カオル「ふ～つかれた」

作者「お疲れ～とりあえず後始末が大変だね」

カオル「だな…あと酒癖もわかったし…」

作者「聞いてなかったん？」

カオル「ああ……しかしまぁ全力で押さえ込む事になるとは…
結婚したあと晩酌は禁止だな…」

作者「要注意だね～」

カオル「……」

作者「でもって、まりもちゃんの目の前に一升瓶をおいとくと…」

カオル「やめてくれ！！まじで」

作者「ん…やめとくわ」

カオル「作者なんかやりそうだなぁ…」

作者「ふふふ…」

カオル「と次回は？」

作者「……ちとサブタイトルどうしようかなぁ？で悩んでます。あるものが、なんかメインになりそうな…」

カオル「つうわけで次回、題名未定！！ｌｅｔ’ｓ”世界扉”」

第１０３話　また別世界へ　フルメタルパニック及びＳＥＥＤ　投稿日２０１

２００１年９月２８日

朝起きて、ベットに寝てるまりもちゃんを起こさないように抜けだす。

そそうで嫌われた！

と、泣き出したので慰めている内にインした訳だった。

シャワーを浴び汗を流して出ると、

まだスヤスヤかわいい寝顔だったので、

軽く顔を髪でくすぐって起こした。

クシュン

むずがりながら起きたので、軽くキスをして部屋を出る。

ハンガーにいき、１１号にピックアップの件を質問して早速世界扉を唱える。

＝＝フルメタル・パニックの世界＝＝

セーフハウスにいき、

ピックアップ対象の家族の方を世界扉を唱えて送りだした。

「今のとこ推移は？」

「まだナムサクで当該人物は現れてません。ＡＳアリーナは開催されてます」
３号と思われるが答えてくれた。〔正直彼らは見分けがつかないため…〕

東南アジア、３国の国境にある町…ナムサク。
フルメタル・パニックの世界でのみ発展した町だ。
カンボシア、ラオス、タイの国境に面するこの町は交通の要所にあり、
国連主導のもと停戦合意したが、出鱈目な停戦条約の為、
今だにこの町はどの国の軍も条約の為入ってこれず、実質的な支配はうけてない。
が交通要所の為、人や金はどんどん入ってくる…
金が支配する…そんな町だった。

「ＡＳアリーナねぇ……」

ＡＳアリーナ、軍用から払い下げられたアームズスレイブによる格闘バトル。
火器は一切つかわないガチンコバトルだ。

勿論軍用のアームズスレイブをそんなバトルに使うなど、到底認められない。
あくまでも非合法バトルだが、ナムサクの町の警察も黙認し、
一躍町の観光資源となっている。

（ついでだから見てみるかな？参考に……）

「と、じゃあナムサクよってから帰るとするわ…じゃ、引き続き監視よろしく」

「イエス・マイロード」

カオルはフィリピンにあるセーフハウスをでると、一路ナムサクへと向かう。

ナムサクの町、じわじわとする熱帯の町……

「あぢぃぃ～」

ブワッと汗が出る。

たまらず露天にある服をかって、近くの安宿に休憩ではいり、シャワーを浴び着替えて、チェックアウトして、ビアバーでシンハーを頼む。

グビッグビッグビッグビッ

「プハー、やっぱシンハーはうます♪」

露天で冷やタオルを買い、一路町の中心にある旧サッカースタジアムを目指し、歩いていく。

前の方から、民間に払いさげ、武装ではなくクレーンをつけたサベージが接近してきたので、道中からよけた。

そこに……

ムニュ

「はーい、お兄さん。よってってぇ」

「ん？」

「チン〇ンうまいよ」

（あ、あれ系か…）

彼女が出てきた店をみると、女性達が手招きをしていた。

「すまんね～また今度なぁ～」

「え～そんな事いわずぅ～」

「すまんね」

その女性は渋々と胸を押し付けていた腕から離れる。

まりもちゃんや、イッシーと経験した事により耐性できてたから良いものの…

耐性なかったら誘われるままに…だったろう。

と、いい臭いがしてきた…

（へぇバーガーあるんか…）

看板をみると、ビーフバーガーとかかれている。

（旨そうだなぁ…かってくか…）

「おばちゃん一つ！」

「５０セント」

「あいよ」

観光客だったのでアメリカ$で要求されたので支払った。

屋台の鉄板の上でビーフパテがジューっと焼く。

出来立てを野菜とパンで挟み、

「まいど～」

と手渡された。

カオルは食べ歩きながら、アリーナに向かう。

市場には、アームズスレイブのパーツが見えはじめた。

世界各地からとりよせた新旧いろいろなパーツ…

チェコ製のマッスルパッケージ、

アメリカ製冷却ユニット、

フランス製コアプロセッサ、

イスラエル製ＡＳ操縦シート、

またＡＳ手首等…

まさにお金を出せばオリジナルＡＳつくれまっせ状態の市場だった…

（ほぉ～やっぱり生の市場は迫力が違うなぁ……）

よりどりみどり…中には、どっかの軍だろう。
制服姿で店主とひっしに交渉している姿もみえる。

ここに並んでないＡＳパーツは、火器や弾丸位なものだった。
（稼いで、次暇あったらくるかな？）

まさにＡＳアリーナを中心とした異様な町だった。

そしてお目当てのＡＳアリーナが見えてきた。

カオルは観客席に入ると、そろそろ第二試合が始まるとの事で、賭け屋前では真剣に殺気だっていた。
（オッズは赤：青が１，５：１３，６か…）
頻繁にオッズボードが書き直されてるが、
賭けチケットを買うシステムらしい。

（青が新チームか…）

という事で２０$の１００枚束を５つを青チームにはると…
オッズが変わり、１，６：１０，０になった。
賭けチケットを受け取り、スタンド席にいく。

場内はほぼ満席の状態で、第２試合を今か今かと待ちわびている観客ばかりであった。

「レディースアンドジェントルメン、大変お待たせしました。
それでは第二試合、両選手の入場です」

ウォォォー
割れんばかりの歓声が鳴り響き、観客は立ちはじめた。

アリーナの青に塗られたコーナーから塗装がはげ、ぼろっちいサベージがはいってくる。
（げっ……）
カオルはお金がパーになるのを感じたろう…

「殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！」
のコール、凄まじい歓声とともに、赤コーナーより虎縞のサベージがはいってくる。

場内スピーカーよりアナウンスが流れてくる。
「青コーナー、当競技場初参戦のニューフェイス！
チーム、ライトニング！　パイロット、アキラー・ヒビキ！」
ウォォォ

「チームは初参戦、パイロットのデーターはなし。全くのダークホース！
何処まで食いつけるか？健闘を祈りましょう！」

そして、赤コーナーの紹介に移る。
「赤コーナー、チーム、タイガー！パイロット、タガー・ジョー！」
ウォォォ

「殺せ！殺せ！殺せ！」
のコールが盛り上がる。

「お客様方の知っての通り、前回は殺人による反則負けがありました。
対戦成績は5勝2敗。さぁ今回はどうなるか？」

両機がアリーナのスタートラインに対峙する。

エンジンの出力があがり、唸るような排気音をあげだす。
両機が排気口からの排気で巻き上げられた砂埃のなか、姿勢を下げ…

サイレンが鳴り響き、街中で使用されてるタイマー式の信号が点灯し、カウントダウンを告げ始めた。

虎縞の機体から、
「初試合で俺とは不運だなっ！！勝ち星は頂くぜベイビィ～」
と挑発してくる。もう一方の機体は無言だ…
「殺せ！！殺せ！！殺せ！！殺せ！！」
ゼロになり一際大きなサイレンが鳴り響き、
電光掲示板にはスタート！！の文字を表示させた。

二機のサベージが瞬発力使い互いに突っ込んでいく。
ガァン！！
虎縞のサベージのタックルが塗装剥がれまみれのサベージのキックをかわしきまる。

塗装剥がれは後ろに吹っ飛ぶが勢いを殺し、再び突っ込んで八文字キックをかまそうとするが、
虎縞にかわされ、体勢を崩されたところに横からハイキックが決まり、
盛大な音を立てて倒された。

（チョットオオオ！！）

まさに試合は初っ端から一方的、ある意味鉄板のオッズの意味を打ちつけられた。
何しろ、戦闘機動に入ってからの動きが違う…
虎縞はかなりの良い状態のパーツを使っているのが一目でわかった。

つまりあて試合…
（オワタ…）
とお金をあきらめていると…

ウワァァァァ
「おっ！！」
かなりでかい音がし、マグレあたりだったキックが決まった部分から、白い水蒸気がブワッと大量に吹き出す。

虎縞はラジエーターが損傷し、温度超過に陥り…自動停止モードになったのだろう膝をつく。

それを見た審判が、勝者を告げる試合終了のサイレンを鳴り響かせ、
「勝者、ライトニング！」
審判はつげる。
飛び交う罵声と動揺、

賭けチケットが宙を…大穴だったのでかなり舞う。

（あぶなかったぁ…けどもうけもうけ♪）

換金すると、まだまだ試合が続くスタジアムを後にし…

「”世界扉”」

＝＝Ｂ５５ハンガー＝＝

カオルは、元の世界にもどると、ハンガーディスクに戻った。
別世界に取得しに行く前に、佐渡島ハイブへの防衛配置プランをやっておいく。

主力の陸戦強襲型ガンタンク２個師団をとりあえず移動し、
格納庫拡張次第、随時増援を送る体制にし、
常駐２０００機にする予定だ。

（コキブリホイホイだと…あと小型種用かな？烈火は…まだ人員が足りない、卒業もしてないし…Ｔ－８５０は通路内警備等に回すから…あっ！）

忘れてました４足ハンターキラー君。すっかり放置してたもよう…

さっそく呼び出して調整作業にはいる。

現状Ｍ６１Ａ１（ガトリング）から、ガンパレ世界＋ＳＥＥＤ技術入れたレールガンに変更。
これにより、装弾数に余裕がでた。弾はブリット為に火薬部分か、いらないからだ。

（……手というかアームガンつけるか…）

ガトリングガンだと面には心配はなかったのだが…
心配出てきたのでアームレールガンを追加しときました。

「どう？」

大丈夫の意をかえしてきたので、さっそく生産、とりあえず５００匹を送るように整えます。

仕様…
正式名称ハンターキラーレッグＴＬ－５改

装甲ヒルダ装甲に変更
武装２０ｍｍレールガン１門
６ｍｍサイドアームレールガン４門
いずれも１秒間２発

パワーセル、変更なし
ＯＳ調教済み、変更なし

（ん……こんなもんかな？）

一通り手続き済んだ後…
ニコル君を呼び出してもらった。

「じゃあ１１号、ニコル君を隊長に紹介したら、また別世界いくからよろしくな～」

［いってらっしゃい～］

とニコル君をヒルダさんの執務室に案内をする。

「ところで隊長さんって…」

「女性技術士官だね～ヒルダ・ビダンさんっうんだけど、我が軍の頭脳っう存在だね。
ま、Ｃ－０１自体も実験中隊つう感じだし」

「は、はぁ……」

「おっ、ついた」
コンコン
「ヒルダさん～」

「いいわよ～はいって頂戴」

シュン
ニコル君を連れてはいってく。
「こちらが君の隊長にあたる、ヒルダ・ビダンさん。君の任務は隊長さんに協力する事。いい？」
「はいっ！！わかりました。ヒルダ・ビダンさん始めまして。ニコル・アマルフィといいます」
「よろしくねぇ。じゃあ早速だけど……」
「じゃああとよろしくお願いしますね」
と…部屋を出る。
（ニコル君Ｃｈｅｒｒｙ卒業式だな……）
後ろから「あっそんなぁぁ！！」
（もう始まってる……）
「さてと…”世界扉”」
カオルは世界をわたる。
＝＝ガンダムＳＥＥＤの世界＝＝

ＣＥ００７２　３月１５日

日付からみてわかる通り…
戦後ユニウス条約が結ばれた後あたりだった。
まずはカオルは戦死者リストをダウンロードしようとしていた。

何しろ、これからいく場所がほぼ全滅…な戦場ばっかりで少しでも有能なのを…
と考えてたからだ。

まずはアイルランド島にある地球連合軍本部、ヘブンズベースを目指す。

カオルは基地内部に侵入、無事に人事局からデーターをダウンロードする。

そして、地球上からでも見えるプラント群の首都、アプリリウス・ワンを目指した。
二日目
まだ到着はしてない…けど段々とでっかくなっていく砂時計が見える。

三日目

カオルは、Ｌ５にある、プラントの首都につく…
地球上からでも目視できる大きさのコロニー群からなる中での首都だった。

勿論、最初に違うコロニーに取り付いたのは内緒だった。

プラントのコロニーは円筒形でなく、砂時計…
中心にある宇宙港を軸として、両端を回転させ重力を発生させる。
（円筒形の方が使う資材すくないんだけどなぁ……）

その為両端しか居住できなくなり、コロニーの数に比べ総人口約１５００万人…
約地球７５億人…
よく戦争をふっかけたな…とある意味感心はしている。

さて人事局にはいり…データーをダウンロードして……

「”世界扉”」

別世界経由で時間軸を移動する。

Ｃ．Ｅ．００７１　５月７日
カオルは衛星を打ち上げると、ザフトの宇宙艦隊を探し始めた。

ほどなく…総数１５０隻越えにも及ぶ宇宙艦隊、他降下カプセル輸送艦が１０隻同行していたのが見えてきた。

（お～壮観だなぁ～さて…どれだ？）

片っ端から艦艇に取り付き、目指すターゲットを探しまくる。
さがしているうちに、四日目になってしまった…

ＣＥ００７１　５月８日

宇宙空間にいるジン、シグーが次々と降下カプセル輸送艦の下部にある、
突入カプセルに乗り込み、カプセルが閉まっていく。
一方、オストヴァルトでは…
『総員、格納庫切り離し準備。メンテナンスクルーは、エアロック内部に退避せよ』

ローラシア級の機能、格納庫の大気圏突入機能を作動しようとしていた。

『オペレーション・スピットブレイク、大気圏突入部隊、突入開始時間まで残り１０分』

…

「艦長さん。ここまでありがとうございました」

『貴官らが地上におりるとさみしくなるのぅ』

「くすっ。お尻さわれなくなるからです？」

『なっ！！ここで言うことなかろうにぃ！！』

「隊のみんなからもセクハラじじいって呼ばれてますよ～」

『くぅ～……間もなく降下だ！健闘をいのる！』

「はい！！」

『格納庫切り離します、貴官らに天の加護を！！』

ガコッ

振動が伝わる。

…

『第一外装剥離、減速マッハ、角度良好、強制冷却停止まで２８秒。空力制御開始』

「アルファワンより、各機、薬室装填を確認」

『ブラボーツー』

『チャーリースリー』

『デルタフォー』

『エコーファイブ』

『フォックストロットシックス』

「第二外装剥離。地べたをはいずる奴等に、思いっきりキツイのかましてやるのよ。

暖流層突破。減速、０．９マッハ。冷却停止。姿勢良好。

我らに天の加護を。降下点、座標追尾固定。

さあ、行くよ！」

『ザフトの為に！』『ザフトの為に！』『ザフトの為に！』『ザフトの為に！』『ザフトの為に！』

ガコン
格納庫の扉が跳ね上がり各機空中に踊りでる。
……
カオル報告
ハンターキラーレッグＴＬ－５改　５００機…佐渡島配備予定

第１０３話　また別世界へ　フルメタルパニック及びＳＥＥＤ　投稿日２０１

カオル「もうけもうけ～♪」

作者「ＡＳアリーナかぁ…いいなぁ」

カオル「ムエタイがあじゃない」

作者「ムエタイか、あれチケットじゃないんだよね……」

カオル「へっ？」

作者「オッズでやりとりして、口約束…よく覚えてられるな…って…」

カオル「口約束？マジ？」

作者「マジ……」

カオル「どの位はったの？」

作者「……チキンだからガイドさんの説明のみだったさ…」

カオル「なる……」

作者「やっぱりパチンコや競馬が良いね～…東京カジノいつになるやら…」

カオル「東京カジノかぁ…」

作者「こっちのリアルは今大変だからなぁ…」

カオル「俺がリアルにいけたらねぇ…」

作者「ザクCが欲しいね～、あとベースジャバーも…」

カオル「ま、気を落とすネタはやめといて次回予告?」

作者「作者、投稿で使っている携帯根元から、ポッキリ逝き慣れない携帯借りてます」

カオル「それ説明してたじゃん」

作者「なので、次回タイトルは未定ながら、オペレーションスピットブレイクに参戦8日までに仕上がるか!?
頑張れ作者!の巻」

カオル「自分でいってるし…」

作者「うるせぇ!お前のシーン作っててシャワー浴びようと置いたら、ひゅーんパキッとなったんだぞぅ!」

カオル「作者が逆ギレ暴走気味なので…再見」

第１０４話　ＳＥＥＤ編５　ジョシュア崩壊　投稿日２０１１０４０８

ジョシュア……無人の司令部の観測モニターに、接近する反応が多数映ってる……

そして防空圏内に反応が入り込み、自動的にアラートが鳴り響く。

ザフト軍輸送機ヴァルファウからの空挺で多数のシグー、ジンが舞い降りる。

迎撃せんと、ジョシュアの自動即応砲台群が砲台シャッターより上がる。

揚陸潜水艦より、バクゥ、ザウートが踊りでる。

即応体制とっていた連合の水上艦船がゲートから出港し、迎撃にはいった。

そこに、制海空権を握ろうとカーペンタリア基地からでたディンの大群、
グゥルにのったジンが襲いかかろうとしている。

そして…カオルがとりついてるザフト軍大気圏突入部隊の大群が、
大地を目指して連合地上軍に襲い掛かる。

各種砲台がそれを迎撃せんとす。

また地球連合軍のブルドック、リニアタンクがゲートより飛び出して対空攻撃にはいる。

アークエンジェルでは…

「これで戦えと言うのも酷な話だけど、本部をやらせるわけにはいかないわ。」

「艦長！」

「総員第一戦闘配備。アークエンジェルは防衛任務の為、発進します！」

「そんなぁ、キラも少佐も居ないのにどうやって…」

「補給状況は？」

「弾倉、燃料ともに予定量搭載されてます！」

「船外に通告、アークエンジェル発進準備！」

「主動力オンライン、出力上昇問題なし定格まで２０秒、生命維持装置問題なし」

「ＣＩＣオンライン」

「武器システム、オンラインＦＣＳ、コンタクト。磁場チェンバー及びペレットディスペンサー、アイドリング、正常」

「外装衝撃ダンパー、最大出力でホールド」

「主動力、コンタクト」

「エンジン、異常なし。アークエンジェル全システム、オンライン。発進準備完了！」

「総員、衝撃及び突発的な艦体の破壊に備えよ」

「前進微速。アークエンジェル、発進！」

船体に繋がってるブリッジがあげられ、アークエンジェルは進み出す。

「メインゲートへ回頭」

少し進むと右旋回し、水路をすすむ。本流にでると左旋回。

このままゲート出口を目指す。

「ゲート外に敵機反応」

「イーゲルシュテイン起動準備、ゲートドア交わせ次第射撃開始」

そして、アークエンジェルがイーゲルシュテインを撃ちながら、メ

インゲートから出てくる。
「ウォンバット、バリアントてぇ！」

「ディン2撃墜！」

しかし、メインゲートの外では更に敵機が襲いかかってくる。
「ミサイル6接近！」

「イーゲルシュテイン！」

「頼むよぅ…」

「ミサイル撃墜しました！」

「他艦は？」

「ゲートより追加でてきます。またゲートをまもる対空陣形です！」

「対空戦闘メインに！！」

「敵機接近！」

「ウォンバット、てぇ！」

「ミサイル、来ます！」

「回避！」

「うわぁ！」＊多数
被弾し衝撃がはしる。

「右舷フライトデッキ、被弾！」

「くっ状況！！」

「カタパルト使用不可、装甲剥離以外は大丈夫です」

アークエンジェルは、ザフト優勢の戦場の中、
持ちこたえようとして奮戦をしている。

「オレーグ、轟沈！
」

「取り舵！オレーグの抜けた穴を埋める！」

「正面ジン、ディン！」

「ゴットフリート、てぇ！」

「尚もディン接近！数６！」

「この陣容じゃ、対抗し切れませんよ！」

「くっそー！やられたもんだぜ司令部も！」

「主力部隊は全部パナマなんですか！？」

「ああ、そう言うことだね！」

「戻ってきて、くれるんですよね！？」

「こっちが全滅する前に、来てくれりゃぁいいけどな！」

「ミサイル接近！」

「くぅぅ！」＊多数

一方カオルは、戦場を飛び回っていた。

ターゲットの部隊には発信機を取り付けていた為、見失う事はない。

まずは、アラスカ基地内部に侵入し、まだ出てない自走リニア留弾砲、リニアガン・タンクを発見し、同化していた。

自走リニア留弾砲…ニュートロンジャマーさえなければ、かなり活躍できたろうに…

不遇の車両であった。

（次は…っと…）

海上ゲートの方へ向かうと、繋留されてる高速潜水艦を見つけた…

（お♪ラッキー♪）

何しろ、プラントの包囲網を二度も、切り抜けているのだからさぞかし優秀なんだろう…

とある意味期待していた部分もあったのだ。

まだ繋留してあったのは偶然に等しい…という事で同化。

同化後、ゲートに向かうと、今まさに出航しようとしていたイージス艦ダニロフ級をみつけたので被害を被る前に同化した。

（ふーん）

同化してるとわかるが、一番最新型…水上艦では…と感じた。

まぁ宇宙艦船に比べれば…だが…

（確かあとオーブ戦でファントムペイン用の、空母タイプがあったよな？）

とりあえず今現時点での連合はこんなものなので、離脱しようとすると…

ゾノが襲いかかってきたのでついでに、何人か取得し撃沈間際に離脱した。

でたゲートはメインゲートで、まだアークエンジェルが奮戦しているのが見える。
（まだ時間あるよな？……うっし）

ゲート内部に突入し、地下深く潜ってゆく…
目の前には、でっかい円筒形のマイクロ波発生装置、サイクロプスがあった。

サイクロプス…原理は西暦１９４０年代の第二次大戦の殺人光線になる。

当時のレーダーアンテナの前を通ったら沸騰、死亡した事により、馬鹿らしくも研究を開始した訳だ。
結局射程等で失敗、

今ではマイクロ波は電子レンジや、レーダー等で使われ、
飛行場で時たま焼き鳥が発見されることになる。

ちなみに電子レンジに動物達を入れて作動しないで下さい！！
真面目に死にます！！
そこのあなた、なに猫を入れようと！！

猫ちゃんの体内の水分が熱をもち破裂する前に死んじゃう！！
え？濡れてるから乾かす為？
ドライヤーで乾かせ～～

と作者が解説暴走している内にカオルはサイクロプスを取得、とっとこ地上を目指していた。

お次は、ザフト地上軍をゲットしようとしていた。

（確かこの時期は…水中はいいか、バクゥ系かな）

外にでてバクゥを探し始めた。

（ゾイド～ゾイド～っと…いた！！）

足を止めてミサイルをゲート防衛隊に撃ち込んでる。

（チャーンス♪）

バクゥを難なく同化離脱した。

すると、一回り大きな四つ脚がかけていく…

（えっ！？ラゴゥ！！いたんかよ！）

カオルはもちろん取得するために追いかけてゆく……

＝＝アークエンジェル少し前＝＝

「第４ゲートに続いて、第３ゲート突破されました！！」

「そっちの防衛隊は？」

「……艦船撃沈、防衛部隊も沈黙、全滅だと思われます」

「吸収できないのね…基地内防衛隊に警告、生きていればね」

「了解」

「ミサイル多数接近！」

「イーゲルシュテイン！」

「間に合わないません！来ます！」

「ううっ！」＊多数

「バリアント、１番２番沈黙！」

ミサイルが被弾し貴重な武装がまた一つ反応なくなる。

「艦の損害率、３０％を超えます！」

「イエルマーク、ヤノスラフ、轟沈！
」

「司令部とのコンタクトは？」

「取れません！どのチャンネルもずっと同じ電文が返って来るだけ

ですよ！
各自防衛線を維持しつつ、臨機応変に応戦せよ、って…」

「既に、指揮系統が分断されています！艦長…これでは…」
「うわぁぁ！」＊多数閃光がはしる。

「パナマからの救援隊は？」

「全然何にも見えねぇよ！」

「ミサイル来ます！」

ダメージアラートが鳴り響く…

そして…
「友軍機接近！被弾している模様！」

「え！？……着艦しようとしているの！？」
スクリーンに被弾した友軍機が映し出される。
「そんな無茶な…」

「整備班！どっかのバカが一機突っ込んで来ようとしているわ！退避！」

「友軍機、カタパルト侵入！！」

「とりあえず大丈夫みたいね？パイきゃぁ」

またもや振動がはしる。

「後方のディンからです！」

「イーゲルシュテイン！！」

すると……

「艦長！」

とフラガがブリッジに飛び込んできた。

「ぅ…少佐！あ、貴方一体何を！？転属は…？」

「そんなことはどうだっていい！それより、すぐに撤退だ！」

「え？」「はい？」

ブリッジクルーが一斉にプラガ少佐をみる。

「こいつはとんだ作戦だぜ！守備軍は、一体どういう命令受けてんだ！」

「ええ…？」

「ミサイル来ます！」

「ちょとまって！イーゲルシュテイン！」

「駄目です！」

「ううっ！」＊多数

「いいか！よく聞けよ！本部の地下に、サイクロプスが仕掛けられている！

作動したら、基地から半径１０ｋｍは溶鉱炉になるってサイズの代物が！」

「ええ！？」

プラガ少佐のヤバい話が続く…

「この戦力では、防衛は不可能だ！パナマからの救援は間に合わない！

やがて守備軍は全滅し、ゲートは突破され、

本部は施設の破棄を兼ねて、サイクロプスを作動させる！

それで、ザフトの戦力の大半を奪う気なんだよ！それがお偉いさんの書いた、この戦闘のシナリオだ！」

「…うわぁ！」＊多数対ミサイル管制もできないほど…

「そんなっ！！」

「俺はこの目で見てきたんだ。司令本部は、もう蛻けの殻さ。

残って戦ってるのは、ユーラシアの部隊と、アークエンジェルのように、

あっちの都合で切り捨てられた奴等ばかりさ！」

「ぇっ！あ…あぁ…」

「俺達はここで死ねと！？そう言うことですか！？」

「撤退したことを悟られないように、奮戦してな」

「えぇぇ！」「くっ…」「ぁぁ…」

「こ、こういうのが作戦なの…？」

「え？」

「戦争だから…私達軍人だから…
そう言われたら…そうやって死ななきゃいけないの…？」
「…ミリィ…」
「くっぅぅ…」
『こちら第１４戦車隊！援軍を請う！
援軍を！ぁ…うわぁ！』

マリュー艦長の顔つきがかわる。
「ザフト軍を誘い込むのが、この戦闘の目的だと言うのなら、
本艦は既に、その任を果たしたものと判断致します！
尚これは、アークエンジェル艦長、マリュー・ラミアスの独断であり、
乗員には、一切この判断に責任はありません！」

「そう気張るなって」
立ち上がると…
「本艦はこれより、現戦闘海域を放棄、離脱します！僚艦に打電！
我ニ続ケ。
機関全速、取り舵、湾部の左翼を突破します！」

「脱出もかなり厳しいが、諦めるな。俺も出る」
「少佐…」

「心配しなさんな、忘れた？俺は不可能を可能にする男だってこと」

フラガ少佐が格納庫に走りだす。
「整備班！フラガ少佐が出る。スカイグラスパー用意して！」

『もうやってますぜ！』

…

「スカイグラスパー、発進どうぞ！」

左舷カタパルトからスカイグラスパーが空に踊りでる。

「なんとしても突破するわよ！！」

アークエンジェルがメインゲートから離れ、

またゲートを守備していた艦艇の多数がアークエンジェルに続いた。

その為…

「メインゲート！！陥落です！」

「ミサイル接近！」

「回避！」

「っ！後方より、デュエル！」

「ぇぇ！」「やぁ…」

ブリッジ内に天敵デュエル接近に緊張がはしる。

「デュエルからミサイル！」

「イーゲルシュテイン！」

しかし被弾し

「ううぅ…」＊多数

「艦長！」

「取り舵２０！回り込んで！」
「１０時の方向にモビルスーツ群！」
「クーリク、自走不能！」
「ドロ、轟沈！」
「うわぁ…」「あーっ！」
「６４から７２ブロック閉鎖！艦稼働率、４３％に低下！」
深刻なダメージを食らう。
「ううわぁぁもう駄目だぁぁ！！」
「落ち着け！バカやろう！」
「ウォンバット！てぇ！機関最大！振り切れぇ！！」

「推力低下…艦の姿勢、維持できません！」
艦のブリッジを狙い…ジンの突撃砲が…
「ぁ！…ぃ」「ぅぁ！」「ぁ…ぁあうぅ…」「くっ！」

カオルが、ラゴゥとの追いかけっこし、なんとか取得したあと、時間を確認する為にアークエンジェルを探しにくると…
大天使が、白い巨体から噴煙をあげながら…沈みかけている様子が見えた。（うわぁ間に合うんかよ……）
注目してなかった為、今更目についたのだが、その巨体はあと一息で墜ちるだろう…
そこにとどめををさそうと……

バシューーー

上空からビームが打ち込まれ、とどめをさそうとしてた、
ザフトのＭＳの武装を吹き飛ばした。
ブリッジを守るように舞い降りるフリーダム。

（間に合ったか…ストーリー変わったかとヒヤヒヤしたよ……さてそろそろか）
カオルはサイクロプスに備え、ターゲットを確認し、取り付く為急いだ。

＝＝アークエンジェルブリッジ＝＝

『こちらキラ・ヤマト！援護します。今のうちに退艦を！』

フリーダムより、アークエンジェルに呼びかけがはいった。

「ああ？」「キラ…」「キラだよ！」「キラ…君…？」

そこにジンが襲いかかってくるが…
フリーダムのハイマットブーストで、次々とザフト側の武装等が吹き飛ぶ。

『マリューさん！早く退艦を！』
威力に呆けてたマリューさんが…
「ぁ…いえ…あ…本部の地下に、サイクロプスがあって、私達は…囮にっ…！
作戦のなの！知らなかったのよ！
だからここでは退艦出来ないわ！もっと基地から離れなくては！」
涙ながしながら…今この場でキラに出会えた事に安心したのだろう。
が必要な事はきっちり伝え…

『分かりました！』

その頃カオルはターゲットのシグーにとりついて今か、今かと備えていた。

『ザフト、連合、両軍に伝えます』

国際用緊急オープンチャンネルチャンネルを使い声が流れる。

「なに？」『緊急コール？』

『アラスカ基地は、間もなくサイクロプスを作動させ、自爆します！』

「はい？」『サイクロプス？』

『両軍とも、直ちに戦闘を停止し、撤退して下さい！繰り返します！アラスカ基地は間もなくサイクロプスを作動させ自爆します！両軍とも直ちに戦闘を停止し、撤退して下さい』

『隊長！！』『やばいよ』『とけちゃうんだよね』『けど…』

「各員聞け」

一斉に無言になる。

「かなり戦力は掃討できたはずだ……我が隊は、緊急コールを信じ、一旦離脱する。各機ついて来い！」

『了解！！』＊多数

侵入したゲートからでるため、ブースターをふかし高速移動をし始める。

『隊長前方！！』

地球連合の非武装と思える女性兵士達が、ひっしにゲートを目指し走っている。

外部スピーカースイッチを入れながら

「乗れ！！」

と手を差し出しすぐそばに着地する。

「おまえら見捨てられたんだろ？命惜しいならのれ」

手の平に次々のる。

乗ったのを確認すると、またブースターをふかしゲートを目指す。

目指すゲートが見えてきた。ゲートにつっこみ……

ズン

「っ！！ブースター最大推力！！」

後ろからおってくるピンク色の壁……

『隊長！！』

「あきらめるなぁぁ！」

そして…カオルは加速の４乗かけで、次々とターゲット兵士を、虚

数空間のシェルターに引き込み始めた。

ターゲットのジュリア隊を引き込み、他にも女性士官を引き込み、
全速力で迫ってくるピンクのマイクロ波の壁から離脱し…
次のターゲットの隊にとりつき、引き込み…
また迫ってきたので離脱…
（流石に俺でもマイクロ波は試す気はないな…）

フリーダムを追い越し、アークエンジェルを追い越した。

アークエンジェルがサイクロプスの効果範囲を、なんとか振り切り
小島に不時着した。

連合軍は足が遅く壊滅、特に船舶は文字通り全滅し、
ザフト軍も地上部隊や大気圏突入部隊は全滅…離脱できたのが水中
部隊、
ディン等足が速い部隊という有り様だった…

カオルは着陸しているフリーダムにそっと近づき…同化し離脱する。

……

カオル報告

ジュリア隊より

ジンM

シグー
ジン長距離強行偵察複座型

ラゴゥ
バクゥ
ジン

ダニロフ級
自走リニア留弾砲
リニアガン・タンク
対空陣地等要塞兵器
フリーダム
高速潜水艦

第１０４話　ＳＥＥＤ編５　ジョシュア崩壊　投稿日２０１１０４０８（後書き

作者「猫～猫～」

カオル「ん？作者何してるん？」

作者「いやね、ＹｏｕＴｕｂｅで電子レンジ猫を検索してさ……」

カオル「ま、まさか！！」

作者「幸い、生きている猫のチンは無かったね…で、何故かまたたび猫が出てきてさ」

カオル「あ～狂いだすよなぁ…」

作者「富岡タマもかわいかったけどね」

カオル「誰よ？それ」

作者「評論家副島さんが、富岡町で拾ってきたネコなんだよね～」

カオル「ん?ちょっとまて…」

作者「福島第一の二十キロ圏内かな?」

カオル「このページか……未改造でこの放射能受けるって…生身で……」

作者「で、猫レンジは絶対駄目だよ~あ、卵も穴あけないと危険だよ」

カオル「作者なんか壊れ気味だな…で次回は?」

作者「まだ題名未定ながら、猫レンジが登場……しません。次の回はカオル未登場で話が進みます。お楽しみに」

カオル「俺出ない?……猫検索するか…」

第１０５話　主人公不在の中、第一次佐渡島防衛戦　１戦目　投稿日　２０１

２００１年９月２９日
物語の筋は主人公不在のマブラヴの世界に戻りまして……
皆様は佐渡島ハイブ攻略戦のおり、佐渡島ハイブの頭脳級からの救援要請に、
あ号が対応したの覚えていますでしょうか？

＝＝横浜白凌基地　異世界軍情報室＝＝

「偵察衛星より入電、大規模進行あり、目標佐渡島基地の模様、全軍第一種警戒体制発令」

「カオル大将不在、レビル中将につなげ」

「レビル中将より入電、地下反応炉より、救援要請が、陥落前にいったとの事」

「カオル大将不在により、次点レビル中将の指揮の元、防衛行動を！！」

カオルがＳＥＥＤの世界にいってる間にブラゴエスチェンスクハイブからの、
元佐渡島ハイブへの救援部隊が向かってるとの報告が入った。

総数５万…１個軍団規模…主人公が不在の防衛作戦になる模様だ。
通常は樺太を目指す軍勢が、一路佐渡島基地へと向かっている。

「佐渡島基地、工事予定３０％、侵入されたら迎撃難との事」

「全軍、佐渡島基地防衛に回ります。上陸予定時刻、翌日１２００の模様」

カオルが水軍をさほど強化及び防衛装備を強化してなかったのが痛かったろう……

一方、佐渡島基地建設中にいるレビル将軍は、
ビックトレーのブリッジに上がっていた。

「水際防衛戦、及び万が一の基地内防衛戦だろうな…」

［将軍どうするの？］

「現状の佐渡島戦力は？」

［え～と…今佐渡島基地には陸戦強襲型ガンタンク７個連隊と、
ビックトレーミサイル型４隻、ザメル連隊Ｔ－８５０警備連隊だよ］

続いて基地施設建築中の画面が出てくる。

［構造的には、各主要通路とも、元の横坑を埋め、
分断して壁材もルナチタニウム合金で作った為、
地下からの直接侵入は無し。
ただ地上がしっての通りまだ全然仕上がってないから、
侵入ルートがメインシャフトおよび５，７，９，１０番通路から侵
入されるね］

「明日までには？」

［メインシャフト以外は間に合う…けど、メインシャフトの隔壁が
間に合わないよ］

「とすると、メインシャフト侵入されると駄目だのう」

［シャフト到達で、壁伝いで反応炉までいけちゃうからね…］

「佐渡島基地の再度バイブ化か…防がねばのう…
さて、こっちにまわせる戦力は？」

［横浜白稜基地より、陸戦強襲型ザクタンク１３個連隊、有人機各
部隊、
対小型種用としてハンターキラーレッグ改が３個連隊、Ｔ－８５０
が３個連隊くるよ］

「ハンターキラーレッグ改とな？」

［マスターが対小型種用にと増やしておいてくれっといわれてたの。
レールガン三門装備で的確な射撃でもって打ち抜く、
原型がターミネーターの世界からきた、自動機械戦車だよ～］

「なる程、カオル殿が……なら期待してよいかな？」

［あっ！将軍！横浜白稜基地より今入電情報。
さらに後方に援軍らしき存在、その数１０万。到着予定４日後］

「ほぅ…」

［更なる援軍の存在も認められるとの事］

「ほっほっほっ。よっぽど佐渡島を取り戻したいんじゃな」

［将軍…どうする？］

「何にせよ小型種対策じゃのう…」

異世界軍は、対中型以上には優秀であるが、

小型種は踏み潰すや燃やす、レッグブレードで切り刻む等で、半分無視する形て強化をとってきた。そのツケが出てきた…ともいえよう。

「ハンターキラーレッグ改は増やせないか？」

［増やせて3個連隊なの…無理］

「そうか…現有戦力でやるしかないか…引き続きたのむぞ」

翌日……

ＢＥＴＡの上陸に備えて、陸戦強襲型ガンタンクが、ラインを整えて迎撃体制をとっていた。

『カオルが居ない状態で大丈夫かなぁ？』

『あの人、カオルさんが連れてきたどっかの大艦隊の将軍だったらしいよ。信じましょう』

『そうね…』

『はっ！はっ！はっ！切る切る切り刻むぞぅ』

ビッグトレー艦内……

スクリーンには佐渡島を一心不乱に目指している、水中にいるＢＥＴＡ群が映し出されている。
ＢＥＴＡは長距離移動してきたので、
まずはエネルギーを反応炉から貰わないといけない。

「間もなく敵ＢＥＴＡ群上陸…ゼロアワーマイナス６０」

一緒に消える運命だったオペレーターが艦内ブリッジにつめていた。

「間もなくか…」

スクリーンは上陸ポイントを映し出している。

「一次防衛ラインオールウェポンフリー」

「ビッグトレー、トマホーク発射まで…Ｔマイナス３、２、１、ナウ！」

振動が若干はしりブリッジ背後からミサイルが一斉に撃ち出される。
ゼロアワーに合わせミサイルが射出される。

「ゼロアワーマイナス６、５、４、３、２、１、ゼロ！」
巨大な爆炎と土砂の柱が画面を埋め尽くす。

海岸線一帯は灼熱の地獄と化した。

火球の中で無数のＢＥＴＡが破裂し、その破片が爆煙とともに舞い上がる。

炎と光のスペクタルが画面を映し出す。

２２００門もの２４０ｍｍキャノン水平射および、８４０ものミサイルの一斉着弾、また６８０ｍｍキャノンの支援砲撃だ…そうそう無事なものはない。

第一次防衛ラインは総勢２２００もの異世界軍の主力である、陸戦強襲型ガンタンク、
また支援砲撃でザメル、ビックトレーが加えている。

しかし、そのような一斉射撃のなかも隙間を縫ってＢＥＴＡは抜け出してくる。
爆炎で死亡した突撃級の死骸を盾に、小型クラスのＢＥＴＡが噴煙の中から踊り出してくる。

その群に陸戦強襲型ガンタンクの両腕のポップガンが放たれ肉をえぐられ…死骸となる。

爆炎の中から光が放たれ、到達する前のミサイルが爆発する。光線級が迎撃をし始める。
が、その発射地点には陸戦強襲型ガンタンクの主砲からはなたれた弾が、
的確に命中させる。

しかし、一機二機と補給の為にラインを抜けると、
段々と爆炎が薄まり抜け出してくる小型ＢＥＴＡが多くなってくる。
生き残っている光線級は迎撃に忙しい為、相変わらず足が遅く抜け出してこれない。

抜け出してきた小型級に陸戦強襲型ガンタンクのポップガンが放たれるが、
さすがに半分以上補給後退したので弾幕が薄くなり…

ビックトレー艦内では
「敵小型ＢＥＴＡ群第一次防衛ライン突破されました！」

「やはり第一次防衛ラインだけだと無理だのう」

「的がちっちゃすぎるからねぇ…やっぱり踏みつぶしにいく？」

「第二次防衛ラインに期待しよう。
引き続き、敵中型以上及び光線級を絶対に第二次防衛ラインに行かすな！！」

戦車級を主力とした小型ＢＥＴＡ群第二防衛ラインに到達し始めた。

第二防衛ラインには、ハンターキラーレッグ改及び有人機部隊が控えていた。

「最終防衛ラインまで行かすなっ！！てぇー！」

ハンターキラーレッグ改のレールガン、ザクマシンガンがうなりあげる。

ハンターキラーレッグ改は的確な精密射撃によるピンポイントショットで戦車級、闘士級、兵士級を打ち抜く。

プラズマ光がひかり、ブリットがＢＥＴＡの弱点である臓器を貫き…貫かれたＢＥＴＡ…戦車級は動きをとめ、地面に倒れる。

ザクマシンガンからはなたれた弾が、えぐるように小型ＢＥＴＡの肉体をもっていく。

ただでさえ個体数を減らしている小型ＢＥＴＡ群はじりじりと近寄りながらも、
次々と倒れ、削られ…
死滅して逝った。

その頃、重光線級や要塞級は、容赦なく降り注ぐトマホークミサイル、２４０ｍｍキャノン等の前に、
光線級、重光線級の迎撃が間に合わず…
第一次防衛ラインで早々死滅して逝った。
的が大きく、障害物もある、足の進みが遅い。
良い的であった……

最後の光線級が死滅する。

「将軍！！敵ＢＥＴＡ群反応ありません」

「うむ。諸君戦闘終了だ！！次の軍勢に備えるぞ！」

『切れなかった……』

ＢＥＴＡのまず第１陣約５万の軍勢を迎撃でき、
その死骸の焼却除去に各陸戦強襲型ガンタンクが走り回り始めた。

水際は作業用ザクタンクが総出で、水没しながら排土板で死骸を押し上げ、土を整えてる。

時間の開いている次のＢＥＴＡ第２陣に備えて順次洗浄完全オーバーホール受ける為に、
佐渡島基地や横浜白稜基地に急いで、帰還し始めてる陸戦強襲型ガンタンク…

佐渡島の戦いはまだまだ続く…

＝＝アメリカ情報局＝＝

「ほう……」

「圧巻ですなぁ…」

「あの４脚の兵器、レーザーか？」

「画像からはなんとも言えないですが、
帝国がもっていた、レールガンでないかと…」

「あそこまで破壊力はないようだが？」

「あれは異常です。ですが小型種相手には有効ですし、
ましてや人間相手でも、戦車は…
どうかと思いますが、軽装甲やヘリには天敵といえましょう」

「わが方のレールガンは…？」

「小銃サイズでの高威力はありませんね。
軍艦搭載型は鋭意開発中だとは伺ってます」

「是非ともほしいのう……あとマスドライバー基地誘致の件頼むぞ」

「はっ！！」

……

カオル報告

別世界にいます。
何が起こっているのかわかりません～

第１０５話　主人公不在の中、第一次佐渡島防衛戦　１戦目　投稿日　２０１

カオル「さてと…」

作者「お前は今回は出てくるな！！バシルーラ！」

カオル「あっれ～～……」

あ号「お～……とんでくのう…」

ナギ少尉「今回はいたらだめなのよね～」

作者「たく、いる世界が違うだろうが……であ号、この後の打ち合わせな……サイレス！……」

あ号と作者の密談中…

ナギ少尉「あたしは蚊帳のそとかぁ……なにしよう？」

ピコピコピコ

ナギ少尉「なに？〇〇〇…台本？これの通りやれって？」

見始めるナギ少尉

「えっへん!!作者の近況暴露コーナー!!
さて作者が携帯壊して遅延報告をしたと思いますが、
落とした場所が洗面所にて歯をみがこうとした時でした。
携帯をタオル掛けの上において歯を磨こうとした時…
ヒューと落ち見事に付け根が割れ…
携帯の画面とダイヤル部分のが見事に二分割…ケーブルだけで繋がってたそうです。
かなりのショックを受けたそうで…
……暴露ネタか…苦しいんすね…作者…

さて次回はまだまだ帰ってこないカオル…佐渡島が落ちちゃうよ?…
オーブ解放作戦、お楽しみにぃ~~。
…結局わたし一人で後書きってなんだろ?」

第１０６話　ＳＥＥＤ編６　オーブ解放作戦　投稿日２０１１０４１２（前書き

もう…ゆっさゆっさ勘弁シテクダサイ…

携帯おとしたの地震のせいにすれば良かった?

第１０６話　ＳＥＥＤ編６　オーブ解放作戦　投稿日２０１１０４１２

Ｃ．Ｅ．００７１　６月１３日

オーブ…ガンダムＳＥＥＤの世界において、プラント、地球連合どちらの陣営にも属さない、武装中立の国。

陣営を決めずまた他の国からの避難民…
主にコーディネーターを積極的に受け入れている。
またザフトの侵攻での戦災一時的難民も積極的に受け入れてきた。
それが中立的立場を貫いてきたオーブの理念だったからだ…
しかし…その平和を崩す暗雲がひたひたと迫ってきた……

「間もなく、政府より重大な発表があります。
国民の皆様はどうか、どなたもこの放送をお聞き逃しのないようご注意下さい」

街頭テレビでニュースキャスターが告げ、
また今テレビみてない国民にも、スピーカーでテレビをみるように促してる。
しばらくすると、オーブ国代表がテレビ画面に出てきた。
「オーブ国民の皆様、如何おすごしでしょうか？
残念ながら大変な重要な事態を告げざるえない事が迫っております。
我が国に対し、大西洋連邦より以下の通告が有りました。
原文のままお伝えいたします。

現在の世界情勢を鑑みず、地球の一国家としての責務を放棄し、
頑なに自国の安寧のみを追求し、あまつさえ、再三の協力要請にも
拒否の姿勢を崩さぬオーブ連合首長国に対し、
地球連合軍はその構成国を代表して、以下の要求を通告する。

一、オーブ首長国現政権の即時退陣、
二、国軍の武装解除、並びに解体、
……４８時間以内に以上の要求が実行されない場合、地球連合はオーブ首長国をザフト支援国家と見なし、武力を以て対峙するものである。

残念ながら、大西洋連邦は敵か味方かの要求をわが国に告げています。
そしてオーブは、その理念と法を捨て、命じられるままに、与えられた敵と戦う国となるのが最終的な今回の要求と見受けられます。

連合と組めば、プラントは敵。プラントと組めば、連合は敵。
例え連合に降り、今日の争いを避けられたとしても、明日はパナマの二の舞になりえます。
陣営を定めれば、どのみち戦火は免れません。

よってわが政府の対応としては、オーブの理念に基づき、
あくまで中立の立場を貫くといたします。
現在も外交努力を継続中ですが、
しかし残念ながら、現状の地球軍の対応を見る限りにおいて、戦闘回避の可能性は、
非常に低いものと言わざるを得ません。

全国民の皆様、都市部、及び軍関係施設周辺から避難退去を行って下さい。
また不測の事態に備えて、防衛態勢に入ります。

戦闘回避不能となれば、明後日０９００、戦闘が開始されます。

繰り返しますが要求は不当なものであり従うことは出来なく、
オーブ連合首長国は今後も中立を貫く意志に変わりはありません。

国民の皆様、各役場職員の指示に従い、
落ち着いて指定避難所へのご移動をお願い致します」

市内各所で緊急放送を聞いた人々が、一斉に行動を起こす。

まずは職場や家族等に公衆電話で連絡、
今の件について確認をとろうとする。

案の定…電話前が並びすぎて渋滞が発生する。

とりあえず職場に戻ろうとする会社員、自宅に帰る主婦?とみられる女性。

市内は軽いパニック状態に化す。

街頭に映っているテレビでは急遽特番体制になり、
各公共交通機関の状況等を伝え始めていた。

「メトロは明日いっぱいで、明後日は始発から運休となります。
道電は……」

……

翌日、オーブ領海沖に見え始めた地球連合艦隊。

各テレビ局もオーブ艦船にのりその光景を映し出している。

いよいよ国民もただの脅しではないのを実感し、都市部からの避難に加速がかかる。

そんななか、続々と不意打ちに備え防衛準備を行っているオーブ国軍。
街中ではキャリアに載せられ海岸線防衛に向かうリニアガン・タンク…
また、高射砲の設置などがすすめられている。

6月15日未明…

カオルが世界扉から出る。
（ここは……？）
とりあえず手近なコンピューター端末に接続をする。

（オーブ本島か）
しかし、島の住民殆どが避難したのか、明かりが殆どない。
道にはチラシが風をまい…しばらくあるくと道に配置された対空車両が、
上空にミサイルを向け待機していた。

（やはり平和な生活を…いきなり壊されるとね…）

カオルは幻影をかけ、沖に陣を構える地球連合軍艦隊に向かい、
でっかい空母…いや強襲揚陸艦複数いるなかで、片っ端からとりついて探していた。

約二時間後…数わからないほど接触して、

やっとお目当てを見つけ出した。

（カラミティ、フォンビィドン、レイダーあいたかったよヴヴ～～）

ストライクダガーばっかりですこし飽きてきた中だった。

連合３馬鹿の機体をそれぞれ同化し離脱する。

カオルは、連合から離れて、防衛待機しているオーブ国軍に接触同化しはじめた。

まずは、洋上で警戒中のイージス艦を取得し、

そのまま陸上に向かい、基地ハンガーに待機しているＭ１アストレイも取得した。

その後時間があったので近くに打ち込まれてるニュートロンジャマーを見学しにいく。

（こいつがねぇ…）

地中深く同化しながらもぐっていったカオルは現物と対面している。

中性子を阻害、全ての核分裂を抑制する装置だ。

その副産物として電波を阻害、有視界戦闘のみになり、ＭＳ有利の元となる。

勿論カオルは同化して取得をする。

そして…午前九時きっかり、

地球連合軍の艦隊群より、先制ミサイル攻撃が開始される。

それに対しオーブ軍艦船は自衛行動をし、反撃のミサイルも撃ち出される。

しかし数が違う。物量に勝る連合艦隊のミサイルは地上にも到達し、地上で迎撃するも追いつかず次々と地上に命中する。

ニュートロンジャマーの効果で対空攻撃も目視で行わざるえない。
レーダーが効かないからだ。

となるとひたすら弾を当てるしかない。
が前記のように音速近くで誘導なしに物量に任せ飛んでくるミサイル群。
次々と命中する。

大空に鳥が見える。そこから飛び出てくる何か…
そう、上空から空挺で陸地を目指してくるストライクタガー、
海上からの接近してたストライクダガーに警戒してたオーブ軍戦車隊は、
次々と脆い上部を撃ち抜かれ沈黙する。

M1アストレイ隊がストライクに襲いかかる。

ハードで勝るオーブ、練度物量で勝る連合のMS…少し連合の物量力がまさるの戦いの中、

そこに一騎当千のフリーダムが襲撃してきて、ストライクダガーの武器、手や頭部をハイマットブーストで吹き飛ばす。

ただやられっぱなしの連合ではない。秘蔵っ子の連合3馬鹿がアークエンジェルに襲いかかる。

それをみたフリーダムが救援に向かい、
物量で押されるオーブ、肝心のフリーダムが連合の3馬鹿の対応に追われ、

M1アストレイも十分な数は用意してなかった為、
個々ではストライクタガーには増すものの全体的には攻められつつあった。

そこにアークエンジェル対応のバスターも加わるが……

カオルはその頃ある一家を追跡していた。

避難所にいたがこのオノゴロ島住民は、全員島外退去の形になった。
オーブ本島には見向きしてない為、連合の目標がオノゴロ島、
カグヤ島の軍事施設、マスドライバーとわかったからだ。

山道を避難民を乗せるための港湾施設にむかってひたすら走ってる。
「父さん！」
「あなた！」
「大丈夫だ。目標は軍の施設だろ。急げシン」
その一家の名前は、
シン・アスカ、マユ・アスカ、ダイゴロウ・アスカ、アヤ・アスカだった。

ひっしに船を目指している。
何故遅れたかというと、この両親がついていた仕事が問題だったのだ…

上空をレイダーに乗ったカラミティが通り過ぎる。

「うわぁぁぁ〜」

一家はしゃがみこんで風圧に抵抗する。

カラミティが着地し、Ｍ１アストレイを撃ち抜いた爆風が襲う。

「キャー」

近くにカラミティがきたため、更に急ぐが…

マユの携帯電話がポシェットから崖下へ転がり落ちる。

「あっマユの携帯ー！」

「そんなのいいから」

「いやぁ！んっん〜！」

らちがあかないとおもいシン・アスカが崖を滑って携帯電話を拾いに向かう。

（そろそろか…）

シンを除くアスカ一家をシェルターにいれ、

爆発で吹き飛んだ現場に「〝幻影〟」

死体となったアスカ一家を再現する。

近寄ってきたトダカがシンを助けだし…

シンが、マユの手を見つけ出し…しかし、手がぶちきれて本体が離れて血だらけになっている。

近寄ったトダカも…惨状をみて動きがとまる。
シンは力なく座りこみ、そしてこの惨劇を引き起こしたストライク、カラミティに対して…
「うぉぉぉぉ!!!」怨みをこめてほえてた。

ボッボッボー
輸送船からまもなくの汽笛が流れる。

「さぁ…君」

「マユを…家族を」

「残念だが、君…生きている人間だけなんだ…」

「!!…ならここに残ります!!」

「馬鹿やろう!!君の両親はそんな事望んだか?
ここは戦場になるんだ。あの船に乗らなければ生き延びられない。
それはわかるな!」

「……」

「とにかく生き延び何が何でも生き延びて復讐でもすればいい!まずは生き延びなきゃ始まらんだろうが!」

「っ!……分かりました」

「わかってくれたか。さっ…急ぐぞ」

シン・アスカは避難民船に向かう。

上空ではフリーダムと連合3馬鹿の戦いが続いていた。
この戦いを制すると増大な突出戦力が加わる…

そして…アスランのかるジャスティスがキラの救援に駆けつけた。

連合3馬鹿が、突如として動きをとめ…撤退する。

連合3馬鹿がフリーダム、ジャスティスに対抗できたのは、いわゆる強化人間だったからだ…
しかし持続力に薬が必要だった為、その薬が切れた結果……
という事だった。

その撤退に合わせ、地球連合旗艦パウエルから撤退信号が打ち出された。

オーブは貴重な時間が稼げた。

戦闘で美しい街並みはいたる所で瓦礫と化している。

ハードでは勝っていても、経験がないオーブ軍兵士達…
かなりの被害が出て、
また生き残っているものも初の戦闘で疲れ果て、

休息が必要となっていた。
実情あのまま力押ししてたら、オーブ軍は力尽きたかもしれない。
三機とアークエンジェルだけになり…
護るものがある…というのはかなり不利なのだった…

ミサイルをかわすだけなら容易だったろう。
しかしかわせば後ろの母国の街並みにあたる。
そのため何としてでもミサイルを撃ち落とす。
で、無理をして迎撃できず、ミサイルをかわす時間がなくなり……や

こいつらを倒さなければ俺等の国がぁ～で無理に突出し…

等々…護るべき土地に攻められた時点で，戦力計算は一気に変わってくるものである。
せめて砦などあればまた別であったろう……

ストライク…この激戦を生き延びた…今は鋭気を養う時だった。
フラガがワイヤーロープでもってコクピットから降りてくる。
勿論近寄り同化する。

夕日がジャスティスを照らしている。
キラとアスランの再会だ。

この止まっている機会を逃すわけはない。
ジャスティスに近寄り同化する。

そしてカオルは離れ「”世界扉”」
世界を渡る。

……
カオル報告

ジャスティス
フリーダム
オーブ軍イージス艦
ストライクダガー
M1アストレイ
ストライクナチュラル仕様
ニュートロンジャマー

第１０６話　ＳＥＥＤ編６　オーブ解放作戦　投稿日２０１１０４１２（後書き

作者「これでカオルもどって…こなさそうだなぁ…」

ナギ少尉「えっ？まだＳＥＥＤで遊ぶの？」

作者「で、帰ってきたら佐渡島ハイブ再建築と……」

ナギ少尉「と…なると？」

作者「オルタネイティブ？の再発動……」

ナギ少尉「きゃぁ…大変じゃない」

作者「大丈夫さ…レビル将軍がなんとかシテクレルサ…」

ナギ少尉「な…何故にカタカナ…」

作者「ネタばらしするが第三陣は二十万の進行予定だよ～」

ナギ少尉「佐渡島ハイブの総戦力じゃないの！！」

作者「さ…カオル戻ってオルタ？フラグ断ち切れい！！」

ナギ少尉「え～と次回は……第一次佐渡島防衛戦　第二戦目…お楽しみにぃ」

作者「カオル～メインシャフト突入でハイブ再建築フラグだよぅ」

第１０７話　第一次佐渡島防衛戦　第２戦目　投稿日２０１１０４１４

２００１年９月３１日

［いよいよ明日だね］

「明日じゃのぅ…この間の２倍の１０万との上陸は…
して状況は？」

［工事がすすんで、メインシャフト侵入は避ける状態。
ルナチタニウム合金製のエレベータープレートが隔壁代わりになる
よ～］

「ほっ…そうか最悪の事態だけは避けれるようになったか…」

［で、陸戦強襲型が前回４個連隊増強、ハンターキラーレッグ改も
５個連隊増強］

「ふむふむ」

［ただ基地内部に関して、やはり隔壁突破されると迎撃不能だから、
隔壁防衛をね］

「だの……」

２００１年１０月１日昼間…

佐渡島にＢＥＴＡの第二陣、約１０万が接近してくる。

それに前回同様に防衛ラインをひき対応しようとする異世界軍。

上陸開始とともに砲撃、ミサイルによる爆発がおき、

中型種以上のである突撃級、要撃級は的が大きい為、
前回同様に第一次防衛ラインから進めなくなっている。

……が第一次防衛防衛ラインから抜け出す小型種の数が多すぎて、
増強した第二防衛ラインで対応するも…
一心不乱に佐渡島基地の反応炉を目指す個体が多く突破…

ライン上での射撃が間に合わず、有人機のレッグブレードによる蹂躙をするも…

かなりの個体数が一路反応炉を目指し侵攻をしていた。

それを迎えうつ最終防衛ライン…

最終防衛ラインにはＴ－８５０がシャフトを守っていた。

彼らは上半身裸で戦陣をととのえてた。
彼らが声を発してたらこうとなえてたろう…
「やつらはなんだ?」

「ただのチ○コチ○コチ○コ」

「我らのけつの穴を犯すものを切り刻め」
「やらないか、やらないか、やらないか」

「抜刀！！」

現実には無言で抜刀時の抜く音だけが聞こえる。

シュラ

背中に担いでいた１８００ｍｍサイズの長剣２対を一斉に両手に持ち始める。

以前門あったところから侵入できなかった為、
小型種ＢＡＴＡはメインシャフトを目指していた。

そこに一斉に襲いかかるＴ－８５０達。

忘れてはいないと思うが、ターミネーターだ。
人間では格闘戦ではどうあっても殆ど勝てない。

それが強化され小型種ＢＡＴＡに襲いかかっている。

高周波ブレードの長剣サイズ、戦車級がよこなぎされ…動きを止める。

闘士級が長い鼻でもって横殴りするが、パワーでもって抵抗し、真っ二つに袈裟切りにする。

兵士級がかじろうとするが、その前に真っ二つに袈裟切り…

ターミネーター達はＢＥＴＡの体液を浴びながらも、くる敵くる敵を片っ端から切り刻んでゆく。

そんな乱戦の中抜け出した小型種ＢＡＴＡが飛び込んだ先は、ルナチタニウム合金製のエレベータープレート。

かじるが歯がたたない…なんとかかじろうとする。

それを切ったばっかりで手があいているターミネーターが駆け寄り真っ二つにする。

戦いはエレベーターシャフト上にも及ぶ…

戦車級があるターミネーターに頭からなんとかかじりついた。

ターミネーターは抵抗し、長剣を背後に突き刺した。

顔表面の肉体がもってかれる。が…

内部骨格であるロボット部分がむき出しになる。

そのまま顔むき出しのターミネーターは別のＢＥＴＡに切りかかりにいく…

そんな中……

＝＝　横浜白稜基地Ｂ５５ハンガー　＝＝

世界扉が開きカオルが降り立つ。

（あれ？？）

コバッタ達が見えない…いやいたエルちゃん付きのだ。

「あ～お兄ちゃんだぁ～」

「ただいま」

［マスターお帰りなさい］

「お兄ちゃん暇？遊ぼー」

「ん～かえったばっかりなんだぁ…他の人達は？」

と３１号に聞こうとすると…

「なんかね～なんかね～戦いがある～って乗ってたよ～
すごかったんだからぁ～♪」

［マスター佐渡島基地防衛戦中］

「お兄ちゃんね、少し忙しくなるから、また後であそぼうね～」

「う～～…うん、わかったぁ…後でキスしてね～」

「ああ……うぇ？！？！え、え、エルちゃん！！ちょっと！」

［あ～マスター…最近キスを意味わからず使い始めて……
多分ギュネイさんの言葉が…］

「とりあえずエルママさんに報告した？」

［うん……何回か注意したみたいだけど…
一向に…］

「はぁ……まりもさんに相談か？まぁちっといくから引き続きな」

［あ～～エルちゃんそれだめ～］

情報室に向かうと…

［マスター！！］「大将閣下！！」

［ただいま。状況は？］

［佐渡島基地襲撃されてて、今メインシャフトのエレベータープレート上まで小型種が進行。
中型、光線級以上は第一次でなんとかとめてる状態～］

「各通路は？」

［隔壁作動してるから侵入はないよ］

「よっし……今のところ、被害は？」

［まだ入ってないよ～］

「おっし……と、援軍いくひつようあるか…」

［送れるとしたら、烈火小隊のみ］

「うむ…まだチューリップ施設が外なんだよね？」

［うん］

「じゃあ警備はＴ－８５０警備小隊に任せて……一応魔撃震ももっ

てくか…多目的輸送挺予備あるよな？」

［うんあるよ～、じゃあいってらっしゃい］

格納フロアにいき、虚数空間に魔撃震をいれ、
対小型種用の高周波ブレード及びカートリッジをつかむ。

待機してる多目的輸送挺に飛び乗ると、烈火小隊の何名かが乗ってた。

「大将閣下、生身で？」
「ああ、小型種には魔法で十分だしな」

「……返り血受けないで下さいよ」

「了解」

輸送挺が動きだし、ＤＦ作動させてチューリップに突っ込んでゆく…

佐渡島チューリップにでると、あたりは砲音が聞こえてくる。

「大将」桜井少尉の烈火だ。

「よっし！！格闘戦を堪能するぞ！いくぞぅ！」

「了解！！」＊多数

烈火は反重力推進で全速力でシャフトに向かう。

カオルは「〝加速〟」の２乗かけすると、空に飛び出した。

程なくシャフトに近づくと高周波ブレードを飛行しながら縦に構えて…

戦車級に近寄り…
すーー　パカッ
兵士級に近寄り…
すーー　パカッ
闘士級に近寄り…
すーー　パカッ

と飛行しながら二枚におろしてゆく。
返り血を浴びる前に加速のスピードで抜けていく…

烈火の参加しているほうではグシャメシャボコッゥという音が聞こえる。

物量の圧力に耐えてたＴ－８５０連隊は、カオル、烈火の参戦により押し返して程なく、
第二次防衛ラインから漏れてくる小型種も少なくなり、
第三次防衛ライン手前まで駆逐できた。

未だに乱戦模様だが、もう抜け出してシャフトまでいける小型種はいない。

（さて、どんな状況なんだ？）

防衛ラインから抜け出して魔撃震をだし同化する。

戦場データーがなだれ込む。

『カオル殿』

「レビルさん、戦況は？」

『もうそろそろ駆逐できそうですじゃ。カオル殿はエレベータープレートに？』

「ああ」

『あそこさえ片付けば問題ないのう』

「うんじゃあ……ブリッジにあがるわ」

『わかった、まっとるのう』

カオルが魔撃震をしまい、ビックトレーブリッジにあがると…
第2戦目は終了し、後片付け部隊が導入されようとしていた。

「レビルさんお疲れ」

「カオル殿、何処にいかれてたので？」

「あれ？聞いてなかったです？ガンダムＳＥＥＤという世界に…」
とその時

「カオル大将！！横浜基地より入電４日後の軍勢総数２５万！！」

「２５万？」

「はい間違いありません…」

ザワザワ
いつもと違いいっぺんに押し寄せてくる。
流石にビックトレー内部は騒がしくなった。

「カオル殿…どうしますか？」

「なんとかしましょう。放棄はしません」

「……ふむ…勝算は？」

「あります」

「……カオル殿、信じますぞ」

「ええ……ちょうどその候補になりそうなのを取得してて……
運が良かったですね。
じゃあ…後処理で基地に帰りますんで、明後日にでも…」

「わかった。あとの事はまかせてくれい」

カオルは一路輸送挺を使いチューリップで他のより先に、横浜基地へと帰ってく。

佐渡島基地で防衛してた各機体も隔壁があき、地下ハンガーに向かう機体、
また下駄にのり一路横浜基地へと帰ってく機体。

佐渡島ではＢＥＴＡ焼却処分が続いていた……

＝＝　アメリカ軍情報司令部　＝＝

「……な、なんだね…この映像は本当の事か？修正はしてないのか？」

「は、はい……我が軍の偵察衛星が捉えた映像です」

「……この人間達が生身で、ＢＥＴＡに勝ったのだと？戦車級に…」

「人間というのは違うと思いますが、
この物達が生身で勝ったのは事実です。」

「人間とは違う？」

「まずこれらは同じ容姿してます」

「ふむ…」

「あと、こちらをどうぞ」

とＴ－８５０とツーショットしている写真が渡された。

「これは！」

「ＣＩＡの天敵…通称ガーディアンです。この映像のと同一容姿です」

「ふむ」

「ＣＩＡからの報告をまとめますと、高性能自立ロボットと思われます」

「ロボットだと？００ユニットなのか？」

「の技術を流用した戦闘用とは思われます」

「……わが軍の方のロボット開発は？」

「ＣＰＵの件および小型化、高出力化で手間取ってます」

「ふむ…手には入れたいが…」

「無理でしょうな…何百人再起不能に追い込まれたか…」

「開発局に開発を急がせろ」

……

カオル報告

ヤバいヤバいヤベーどうしようか？

第１０７話　第一次佐渡島防衛戦　第２戦目　投稿日２０１１０４１４（後書き

ナギ少尉「作者～どうすんの？このままだと佐渡島おちるんじゃない？」

作者「落ちて、オルタ？再発動か……」

ナギ少尉「２５万って自重しなよ！！」

作者「まぁこれが最初期１９７７年にできたフェイズ５で６になりかけが、
一回で出せる数だろうなぁ…つて事さ…ま、ようするに大規模侵攻。
勿論ブランチェスコバイブで一回補給後の大規模侵攻…つてわけだ」

ナギ少尉「ねえ…作者このままオルタ？再発動したらどうなるの？」

作者「ん？まぁ……一斉投入だろうなぁ…」

ナギ少尉「武ちゃんがくる前におわるじゃない！！」

作者「まぁ…カオルがなんとかするさ」

ナギ少尉「あっ?!カオル、カオル何処〜〜」

作者「ありゃりゃ……さて次回は最終回なるか??第一次佐渡島基地防衛戦　第三戦目　お楽しみにぃ」

第１０８話　第一次佐渡島防衛戦　第３戦目　投稿日２０１１０４１６

２００１年１０月２日

朝起き、とりあえずＳＥＥＤ世界の救助者が入ったシェルターを出す。

定例パターンで広報し、やはり加入。

ユーラシア連邦所属女性士官達は事務方だったので、そっちに回ってもらう。

今回救助したザフトのジュリア隊総勢１８名は、数少ない女性パイロットだけを集めた部隊だ。

そして、アスカ一家…

「お兄ちゃんは…？」

「シンは？」「あなた…」

「えっと…すみません。シン・アスカ君とは……一生あえなくなりました」

「そんな…！」「…」

「実は彼は、あなた方家族が死んだ事に対し、復讐の為にザフトに入隊、そして、

エースオブエース…ザフトを象徴するパイロットになり、

この後の戦いも生き延び結婚していきます。

ですのですみませんが…」

「お兄ちゃんがエースパイロットに？」

「ああ、種もちでね」

「種？」

「えっと…ダイゴロウさんですよね？マユちゃんもコーディネーターです？」

「ああ、そうだが…」

「マユちゃんの適性みたいのですがよろしいですか？」

マユちゃんが不安そうな顔を浮かべるが…決心して…

「お願い！」

「マユ」「わかったやってくれ」

「アルミサエル」

（……ほう…これだな…）

種パリーン

「えっえっえ？」

「ダイゴロウさん。マユちゃんもエースパイロット適性ありますね。お兄さん同様に種もちです」

「して…種とは？」

「おもにパイロット適性をさしますが、マユちゃんみたく覚醒すると、認識力や情報処理能力、運動能力やらが大幅にあがりますね」

「…わかった」

「でこの後の事なんですが、できればお二方とも、協力して頂ければ嬉しいのですが…」

「シンとは……」

「先ほどもいいましたが、シン君の運命が変わると…
世界そのものが変わる事になる重要人物になってるので…
すみませんが…でご協力のほうは？」

「わかった」「協力しよう」「マユも～」

「えっとマユちゃんは？」

「パイロットやるぅ～」

「やらしてやってくれ。この世界なら一騎当千なんだよな？」

「わかりました。我が軍のエースパイロットに鍛えさせます」

という事でコーディネーターの開発者二人…
ダイゴロウさんおよびマヤさんはモルゲンレーテ社の開発部所属の方と、
種もちパイロット候補の一人をゲットしました。
しばらくはアムロさん、シャアさんの指導の元訓練生としてですが……

（さて…あとは大量処理兵器の開発か…）

そう、約２５万もの軍勢を迎えうつものが必要だったのだ…
（サイクロプスか…？）
ハンガーデスクに座りながら考える。

［マスターなに考えてるの？］

「ん？大量虐殺兵器をな…」

［マスター……］

「ああ、対ＢＥＴＡ用のな…でこいつが一番候補にあがってくるんだわ…」

［あ～マイクロ波で水分消滅？］

「ただ元々のが暴走して爆発まで引き起こすから、それまでしないようになぁ…」

［ならここをこうして…］

「ふむふむ」

という事で完成しましたサイクロプス改。
ニュートロンジャマーとのセットで半径１０ｋｍの限定的範囲内において、水分をもつ生物、
機械などを水分を沸騰させ消失させる兵器となりました。

勿論膨大な電力が必要な為発電施設とセットになりますが…
宇宙世紀の核融合炉はフィールドで保護されてるので、
ニュートロンジャマー作動時でも影響なし…

ただし作動は一回のみで要修理…及び地中埋設、地上だと攻撃される？
ので、大規模工事が必要にはなりますが……
ニュートロンジャマーは勿論効果範囲を狭めた。
作動時には半径５０ｋｍ範囲内、起動及び停止はサイクロプス改とのセットになる。

「大至急１セットよろしく明日までには佐渡島に設置したいからな」

［了解～］

「あとはそこまでの誘導か…」

前回までの上陸方向からだと…どうしても基地が１０ｋｍ圏内に入る為、誘導する必要があった。
佐渡島基地を自爆させるなら必要ではないが、現状それはしたくはない。

で…

「あっ！！」
思い出したカオルは９９式電磁投射砲を引き出した。
そう…そのコアモジュールのＧ元素を複製したときの食いつきっぷり…誘導できるんじゃないかと…

という事で試作誘導棒…
遮断材はとりあえずコアモジュールの設計を流用。
作動時にはシャッターが開き、Ｇ元素が全露出。
食いついてくる…という設計だ。

これも一本テスト用に注文をする。
というか、外側だけで、カオル自身がＧ元素精製する必要あるが……

２００１年１０月３日

明日の上陸に備えて佐渡島基地では急ピッチに工事が進む。

勿論サイクロプス改の設置工事だ。
旧湯の峰山…メインシャフトから北北東２０ｋｍ地点に設置…
万が一の暴走時にも基地には被害が及ばないように…の前提に……
作業用ザクタンクのショベルカーアタッチメントで穴を掘っている。
カオルは魔撃震にてシャベルを使い穴を掘る。

まずは中央に半径１００ｍの円状に穴をほり、サイクロプス改を入れるスペースを作る。

そこから外側に地下ケーブル用のスペースを掘っていき、約１５ｋｍの地点まで掘っていった。
２００１年１０月４日

上陸前に工事を終わらすべく急ぐ…
掘った地点は片っ端からルナチタニウム合金製の壁、床に変えてく。
手のあいてるコバッタ達も総出だ。

変わった地点からサイクロプス改、ケーブルをはわせ、天井をはめ込む。

最後に外側の核融合炉およびニュートロンジャマースペースが完成し、土の下にうめた時には、
上陸予定時刻の１時間前だった。

「まにあったぁぁぁ……さっ撤収！！」

コバッタ達、作業用ザクタンクが撤収してゆく。

撤収がギリギリ間に合った。

２０：４６

佐渡島に第３陣総数２５万の先鋒、突撃級が上陸してきた。

カオルは最後の仕上げ、誘導棒内部のG元素精製を行っている。

前方の空が明るい…

夜の闇が辺りを覆ってる時間だが、前方の爆炎で明るくなっている。

精製が終わりしばらくすると……

『ＢＥＴＡ群中衛、要撃級抑えられません！！第一次防衛ラインより抜け出してきます！！』

やはり物量圧力に対する火力が足らないのだ。

「マスター１より全軍、試作誘導棒を作動させる」

魔撃震の持つ誘導棒のシャッターが落ち精製ホヤホヤの内容物、G元素が露出する。

すると…

『ＢＥＴＡ群、勢い落ちてます！！……ＨＱよりマスター１！全ＢＥＴＡの進行方向かわりそちらに向かいます！！

誘導兵器作動成功です』

「こちらマスター1、ＢＥＴＡどもをサイクロプス効果範囲内に誘導する」

魔撃震の持つ誘導棒に導かれるように、
全ＢＥＴＡが一心不乱に進行方向をかえ目指している。

彼らの大好物…G元素がそこにあるからだ。
しかもはらへってる状態で露出してる…

我先に我先にと……
魔撃震の背中に出現させたアタッチメントに誘導棒を装着、固定させる。

『ＨＱよりマスター1、総数２３万強がそちら向かってます。
末端が効果範囲内にはいるのに現時刻から３０分必要になります』

「マスター1了解」

（なるだけはじまでいき…時間を稼ぐ…が最終的には中心部か…）

両腕を高周波ブレードに変化する。

ワシャワシャＢＥＴＡが接近してきてる。

（さて…イッツ・ア・ショータイム！！）

敵ＢＥＴＡ群の中に切り込んでゆく…約１０ｋｍの道のり…

なるだけ兵器効果範囲内に多くのＢＥＴＡを留める為に奮戦するカオル操る魔撃震。

Ｇ元素食わせろ！とばかり飛びかかってくるのを、

片っ端から高周波ブレードで切り落とす。

そして…中心点到達し…

『全ＢＥＴＡ効果範囲内に入りました！！』

「離脱する！！カウント５でサイクロプス改始動！！」

カオルは誘導棒のシャッターを閉じ、魔撃震を空へと踊りだした。

それを追っていくつものレーザーが空にあがる。

魔撃震はギリギリの動作でかわしながらまたレーザーがあがりかわしながら…

効果範囲外を目指し…

ゾクリ

サイクロプス改が始動する。

途端にレーダーが作動しなくなる。

ニュートロンジャマーが作動したのだ。

同時にデーターリンク、通信もダウンする。

まだ交換出力までは時間がある。
レーザーかわしながら効果範囲外へと急ぐ。
一万もの光の筋をギリギリの範囲で時には直撃するがかわしながら…効果範囲外へと離脱するとともに、
サイクロプス改のマイクロ波の出力が効果出力に達っする。

動きを止めるＢＥＴＡ達…体内の体液が沸騰し始め…
パンパンパンパン
次々と破裂し始める。

サイクロプス改は…暴走せずに…最高出力に達し……
効果範囲内には生きているＢＥＴＡはいなくなり、出力を停止し始める。

（う～効果絶大♪）

『て、敵ＢＥＴＡ群大部分反応消失…残存…５５００程…』

（あ～やっぱり生き延びたのいたか…）

誘導棒作動終了し、そこから効果範囲外に逃げ出す間に、
効果範囲外へでた数であろう。

「マスター１より、全軍！！残存は少ない…殲滅せよ！！」

程なくして…殲滅しここに第一次佐渡島防衛戦、第三戦目は終了する。

＝＝　アメリカ軍情報司令室　＝＝

「な……か、核かね？あんな一掃するとは…」

「…いえ、核では無さそうですが……」

「……問い合わせするしか無さそうだな。
大至急問い合わせしろ」

＝＝　ＥＵ統合本部　＝＝

「ありえん……」
本部内に討議してた者たちは、呆気にとらわれていた。

当初過去に数度あった２０万規模の大規模進行、
その度に人類は大陸から追い出される、陸地で惨殺される。
そのような佐渡島が陥落結果後の話し合い最中に、
偵察衛星のＬＩＶＥをみはじめ、
結果…大勝利の模様であったからだった。

しばらくして再開した議論は、何故進行方向が変わったか？
あの秘密兵器はなんだ？
の議論にかわっていった。

……

カオル報告

きつかった……
次は囮やりたくないなぁ…

サイクロプス改効果的♪

第１０８話　第一次佐渡島防衛戦　第３戦目　投稿日２０１１０４１６（後書き

作者「という最終回フラグをぶち壊した結果になりました」

ナギ少尉「……レンジでチンねぇ……そんなに効果的なの？」

作者「効果的だよ～ＹｏｕＴｕｂｅでレンジ　猫と検索すると……」

ナギ少尉「キャー！？！？こ、これ……」

作者「あ、それは実はヌイグルミだから安心してね」

ナギ少尉「ほ、ほんと？」

作者「真実は闇のなかさ……まぁレンジに生卵をやると…でわかるよ。
ただし、命に危険及ぶ可能性大だからやらないように！」

ナギ少尉「え？」
レンジに生卵を入れようとして止まってる…

作者「……生卵は、わって、爪楊枝で黄身を突き刺して中の水蒸気

がでるようにしないと…で５００wなら４５秒で…」

チーン

作者「温泉卵の出来上がり～…ラップはしないでね」

とナギ少尉に渡す。

作者「まぁ…ナギ少尉さぁ君んとこの軍艦でレーダーどこにツイてる？」

ナギ少尉「えーと、艦橋の上と、フリーゲートタイプなら艦橋自体にかなぁ」

作者「フリーゲートタイプは、レーダー作動中にデッキにでるの禁止でしょ？」

ナギ少尉「あ…そういえば…」

作者「つまりそういった事……さて次回予告いくか」

ナギ少尉「さて次回は、ひねってないサブタイトルで、第一次佐渡島基地防衛戦終了後。お楽しみにぃ～」

第１０９話　第一次佐渡島基地防衛戦終了後　投稿日２０１１０４１８

２００１年１０月５日

各国からの問い合わせがかなり昨日多かったので

国連総会に臨時でテレビ回線での説明となった。

「え～昨日問い合わせのありました、殲滅兵器サイクロプスについてご説明します。
まず原理は簡単です。皆様がつかっているレーダーを、高出力化させたマイクロ波による破壊兵器と思ってください」

『あの艦船のですか？』

「ええ、そうです。単純な理屈でですね…人間同様にＢＥＴＡも水分があります。
それを一気に沸騰させ、破裂させる…単純明快な兵器です」

ザワザワ

「それを昨日は暴走させず、効果を狭めて殲滅できた…といえましょう…
あんまり多様はできないですが…」

『多様できないとは？環境被害とか？』

「環境被害は現時点ではありません。

が…効果範囲を抑える部分にニュートロンジャマーという、核分裂を抑制する装置を使います。
これの効果により全ての電波を抑制し、効果範囲をより狭く限定的とする…
つまり人間側の利点であるレーダーを使用不可にし…
電波通信ができなくなりデーターリンク使用不可になり…
また原子力発電も使えなくなるので潜水艦などが効果範囲に入ったら……自沈する可能性が…」
ザワザワ
『確かに…』
『不利になるばかりの話だ…』

「まぁそれでも地雷と同様に設置、引き込みし一気に殲滅には使えますし、抑制せずに暴走させ爆発する事もできます。
防御的兵器としては有能ですので、膨大な電力使いますが、
ご希望あれば設計図をお渡しします」

前線国家が一回使ってみたいと希望してきたので…
オーバーテクノロジーでなく、現有技術で製造可能だったので、
国連経由で配布する事になった。

「あ、人間に対しては使用不可にお願いします。洒落にはなりませんので…
また必ずニュートロンジャマーとセット使用でお願いします。
単独使用だと計算上ですが１８０ｋｍ範囲内におよびますので…
また設置箇所は共有化で…」

などの取り決めも行う。

「次に誘導についてですよね？…これにつきましては、G元素を使用しました」

ザワザワザワザワ

『G元素ですと？』

アメリカ代表が口を出してきた。

「はい。ＢＥＴＡの習性でG元素に殺到する…
効果は二度程体験しましたので間違いないでしょう」

『…なんたる事だ……』

それはそうだろう。

オルタネイティブ計画３の根本である進行の誘導…

それが図らくも既に人類がもっていた物質に効果があったからだ。

「こちらも単純明快、G元素を全露出するか、遮蔽するか…の誘導する誘導棒…

こちらもまぁ作り方や構成配分などの設計図だけなら、配布する事が可能です。

あとは所有国から買うとかですね…」

こちらも国連経由で設計図が配られる事になる。

「とりあえず自分からの報告は以上になります」

『カオル殿』

「はい？なにか？」

『この総数には間違いないのかね？』

「間違いないと思いますね。どっからきたかは、
ブランチェスコハイブを経由した…としかわかりませんが」

ザワザワ

『総数５０万か……』

テレビ回線での国連会議が終了した。

あと提出もとめられたのが、魔撃震の戦闘記録だったので、
誘導棒作動後の反転突入時からのを、
外部記録映像もつけて提出の形にしておいた。

後日談になるが、この記録が衛士シュミレーターに後に使われ、
シェイキングダンスとして、吐かずに耐えた衛士は１％にも満たない、
壮絶なシュミレーターになった事になる。

「んん～～っと…じゃあ検証と生産かぁ…」

とわけでハンガーに向かった。

（今回いったとこのは…）

Ｍ１アストレイ新造、
ストライクナチュラル仕様新造。
フリーダムは核分裂炉が怖いので核融合炉に変更し新造。
ブルーフレームナチュラル仕様。

（さてっと～バーニィきてもらうか…）

とハンガーに放置でバーニィに向かいにいく。

「ん？ガンダムが４機か？」
その隙にアムロさんがきた。
「……ん。乗ってみるか…」

アムロさんが乗ろうとしている機体はフリーダム。

「ほう…前のったバスターだっけ？ににてるなぁ…
となると頭痛覚悟か？」
苦笑しながらシートに座る。
イグニッションによりジュネレーターが作動する。
「へぇ…８２６０ｋｗか…なんに使うんだ？」

とコンソールを操作すると…
「大出力ビーム兵器搭載ね……まぁいいか…

アムロ、名称不明ガンダム、テストにでる」

フリーダムが動き出す。

「やはり頭が痛くなるか…この系統のコクピットの特徴だな…」

アムロさん違いますよ…

テストなのでメインエレベーターを使用しゲートをでる。

「単独浮遊可能なのか…」

膨大なるジュネレーター出力で、スラスターに力任せに飛ぶことができるのがわかった。

空中浮遊もできるとの事…

ミノ粉や、ホバーシステム、揚力等使わずにである。

これだけで物凄い無駄な能力使っているのがわかる。

「さて…管制、出てもいいか？標的は用意してある？」

『あ、はいどうぞ。準備できてます。アムロ大佐その機体って…？』

「カオル君が作ったなんかの機体だろう。

たしかＳＥＥＤの世界の系統ににてるな……アムロ、いくぞ」

高出力のブースターで浮遊し始め、演習上上空を自由自在に飛びまくる。

そして…
「ふむ……これか？」
ピ、ピ、ピピピピピ
マルチロックオン機能を試しだし……
バシューン
「面白いなぁ…」

『アムロさん！何かってにのってんですか！』

「お、カオル君面白いなぁこの機体、頭痛するのがいただけないが…」

『コーディネーター向けＯＳですからね…まったく…後でレポートお願いしますね』

＝＝　ジオフロント情報室　＝＝

「全く……一言ほしかったっすよ……さてバーニィいこ」

ということで他の機体の試乗も済ませてもらいました。

バーニィの感想的には半分身体が、
同化的になる感覚がいまいちなれない…との事だった。

（けどなれたら楽かな？
手で掴んだりする、精密操作のマニュピレーター必要ないし…）

よう参考との事で…

その他には、

高性能バッテリー
ストライカーパックシステム、
ＰＳ装甲システム、
ラミネート装甲、ナチュラル仕様ＯＳ＋特殊操縦システム
アストレイ用のオプションデーター
ＭＳサイズ用レールガン

主な技術的はというところだろうか？

（けどＰＳ装甲システムも難だよなぁ…）

核融合炉搭載機なら活用あるが、半年連続稼働で一本が１ヶ月になり、
被弾などすれば更に下がってくる。
（連続稼働には向かないっうわけだ…ＶＰＳ装甲まちかな？
あと被弾でガリガリバッテリーもってかれるというのも…ね
確かミサイル７６発当たればフェイズシフトダウンするけど、核融合機でやったらどうなるんだろ？

ただ補給が厄介になるなぁ…）

核融合機のヘリウム３は冷却した状態での注入が必要であり、
半分専用施設で注入しなければならない。
勿論普通のハンガーでも施設を作れば可能だが…
だから連続稼働が一年近くのタンクをもっているわけだ。

（ま、駆動部分の負荷軽減には使えるか）

ＰＳ装甲は衝撃を無効化にする事ができる。
つまり無茶な機動ができるっうわけた。

人間なら関節が粉砕骨折してもおかしくない動き等…

（さてと生産か…）

戦闘報告書を見ながら……
（あ～対海中戦か…つくってなかったなぁ…）

現状対水中に使えるのはトゥーハーデ・ダナン2隻と、ハイゴックのみ…

（となると…爆雷、対水中ミサイル搭載艦か？あと港湾施設か…）

船体はオーブ軍イージス艦の三胴船体
動力源は核融合炉

そこに兵装に噴式爆雷砲、アスロックを詰め込んで、あとＣＩＷＳを８門、

とりあえず無限弾薬自動装填装置、謎の装置等を積む前提の為、最終調整が必要あり。

とりあえず試作の一隻を注文。

佐渡島基地の海軍港湾施設を旧両津港に設定しておく。
基地工事の邪魔にならない程度に……

（とあとは、現有戦力強化か…あと万が一の侵入対策ね…
侵入対策は工事済んでからで問題ないかな～？）
で後回し。

戦力強化はビックトレーミサイル型を１５隻追加注文。
最終調整後佐渡島基地に配置予定。
またターミネーターレッグ改をこの間の時点で１０００匹だったのを４０００匹に増強。

宇宙においては、
コロニーレーザー四機の生産を注文しておいた。追加で自立型コロニーの注文。

またこの三連戦での被害報告も受け取ってた。
直接戦闘を行ったＴ－８５０に被害はでてるものの、
基本中距離砲撃戦を行った為、その他の機体に被害なし。

という結果だった。

Ｔ－８５０の肉はプラントでの修理の形になる。

とすすめた所で……

「お兄ちゃん！！」

「ん？エルちゃん何？」

「キスして～」「え、エルちゃん！！…キ・キス？……なにかわかって話してる？」

「え？え～と気持ちいいことなんだよね？」
（……助けてまりもさん）
「…教えてくれる先生のとこいこ」

「うん♪」

わかるだろうか…わずか小学生にも満たない可愛い女の子から、キスして～ともとめられる悲劇を…

（ギュネイ……）
キスを何だかわかってないなら、それはしちゃいけない事だと教えるのが良い大人のマナーだろ…
が、どう教えるべきかを相談しにまりもちゃんのところへ向かってた。

という事でまりもちゃんのところについた。

「まりもさん…実はカクカクシカジカで…」

「ん～～そうね…エルちゃん、キスは確かに気持ち良いものだけど、好きな人以外にしちゃ駄目なのよ」

「え～なんで～？」

「愛を交換する事だから……こんなふうにね」

と、いきなりまりもちゃん俺の顔を手で固定して、唇をうばって舌が進入してきた。

クチュクチュ

みるみるうちにエルちゃんが顔を赤らめていくのが見えた。

なんかしちゃいけない事を求めていたのを理解したのだろうか？

プハー

少し息が苦しくなった辺りでまりもちゃんが口を離してくれた。

糸をひいてる……

「ね？だから好きな人と意外はキスしちゃ駄目なの…わかった」

「うん」

茹で蛸のように真っ赤な顔をしながらエルちゃんが頷いた。

「キスってなんなのかもわかった？」

「はい……」

「エルちゃんあとはな～い？」

「えっと…あとフェ○って気持ち良いことって、
ギュネイにいちゃんがいってたのだけど…今度俺にもしてくれと…」

（ギュネイーー！！）
真性ロリータ疑惑発生。
「エルちゃん、それも好きな人以外にはしちゃ駄目なのよ？
あとまだ早い事……お酒が飲めるようになったらね」

「はい。わかりました」

「他にはない？エルちゃん」

「ないです。ありぁとうございました」
とお辞儀して急いで出て行った。

「うふふ…可愛い子ね…ちょっと刺激強すぎたかしら？」
（強すぎだと思います）

「さっ…続きしましょ」
と、そのままもちゃんに襲われて……

……
カオル報告
お察し下さい

明日ギュネイ裁判発生プラグたちました

第１０９話　第一次佐渡島基地防衛戦終了後　投稿日２０１１０４１８（後書き

ナギ少尉「サイクロプスと、ニュートロンジャマーと、誘導棒配布～」

作者「まぁこれでＢＥＴＡ戦楽にはなるかな？っと…」

ナギ少尉「でもさ、サイクロプスは可能かもしれないけど、ニュートロンジャマーって現有技術で製造可能なの？」

作者「一応調べたんだが、まぁそういったご都合主義にしておいてくれ。
でないとその度に４００ｋｍ退避し、退避できなかったら自爆兵器にしか使えん」

ナギ少尉「元は自爆兵器だからいいんじゃ？」

作者「次はイングランドでやるかもしれんぞ……」

ナギ少尉「ロンドン廃墟ねぇ…やだな…」

作者「つうことだ」

ナギ少尉「話変わるけどアムロ大佐、相変わらずのチートぶりねぇ…
あとエルちゃん…食われちゃうの？」

作者「エルちゃんというかギュネイの運命は次回にお楽しみかな？」

ナギ少尉「さて、次回は……まだサブタイトル用意できてないの？
作者…
新しい世界へいきま～す、お楽しみにぃ」

第１１０話　００の世界へ…　投稿日２０１１０４２０

２００１年１０月６日

まりもさんの部屋から出てきて…
照明が黄色だ…

（まずはギュネイの件か…）
ほっとくと、エルちゃん５歳が食われるかもしれない…
というのが昨日発覚したので…
（イエスロリータ、ノータッチだろ！）
あ、カオルそれ紳士協定だから、真性には通用しないよ…

（……とりあえず…）

ヒルダさんへとまずは相談で、執務室をノックする。

「ちょっとまっててね～」

シュン
４人ばかりＣ－１の隊員が疲れた顔してでてきた。
ランディ等だ…
かなり着崩れしていて…ランディなんかは上半身裸の状態で、キスマークが目だっている……
ヌボーと廃人のように、多分各々の部屋を目指しているのだろう…

……
「いいわよ～」

シュン
入ると、二十才位に見えるビダンさんがいる。
「どおですか？調子は？」

「まぁまぁね。けどまだもの足りないわ……
ところでわざわざ来た要件は？」

「実はギュネイの事なんですが…」

「ギュネイちゃん？どうしたの？」

「エルちゃん5歳にフェ○してと…」

「え？？……フェ○をエルちゃんに？…」

「したがってるみたいですね……なのでご相談なのですが…」

「ん～そうね…使う事なかったから使おうかしら？」

「はい？」

「例えば…」
机の上にでてくるでてくるデテクル…
鞭、蝋燭、首輪、アナ○ホール、
手足枷、ギャグボール、ボディクリップ、
革拘束具、カテーテル、浣腸……
「あとあっちの部屋みてみる？アイアンメイデンとかあるわよ」

「……いや…遠慮しておきます」

「調教してロリータ治しておくわ」

「よろしくお願いします」
……カオル青ざめて退出した。
ギュネイの運命はこの瞬間、きまった事はいうまい…。

その後、ハンガーデスクに向かい…

「できてる？」

［うん］

と引き出されたのは培養ポット…と人とみえる物体…

［急増クローン培養装置対照のＤＮＡをいれると、その人自身になる死体…
本来は代替え重要部位の交換に使うんだけどね］

「人そのもののクローンはできないんだろ？」

［魂のコピーはできないからね…もしできても別人になる。
ま、一週間かければ、魂の移植ならできて蘇生可能だよ。
末期癌で転移しまくりならその治療もありだね～」

「まぁ…これで取得できる選択幅が増えるから…な」

［マスターには適したものだね～」

「それじゃあいってくるわ」

［いってらっしゃ～」

＝＝　ガンダム００の世界　＝＝

ガンダム００……この世界は化石燃料が枯渇、
太陽光発電を大気圏外に設置、宇宙太陽光発電システムとして電力、
軌道エレベーターにて宇宙開発を行っていた。

その宇宙太陽光発電システムおよび、軌道エレベーターを所有して
いるのが、
ＡＥＵ、ユニオン、人類革新連盟の三大国家連盟になる。

世界は、その所有してる裕福な恩恵を受ける三大国家連盟…とそれ
に属さない貧しい国にわかれていた。

三大国家連盟は互いに互いを牽制し、熾烈な軍備開発競争による冷戦状態が継続し、
それ以外の国々は紛争、内戦にあけくれていた。
その流れを変えるべく、ソレスタルビーイングが介入している。

タクラマカン地域、長い間砲撃されつつある４機の機体がそこにいた。
ソレスタルビーイングに所属するガンダムだ。
絶え間なく撃ち込まれる砲弾、
繰り返し補給し交代し、また遠距離攻撃を行う。
それをＧＮフィールドを張りつづけ耐えていた。
カオルはその撃ち続けている機体達に同化した。

（沢山あるなぁ…）

まずはユニオンが撃ち込んでいる陣中から、警備のリアルド　、
射撃しているリアルドホバータンクとフラッグ陸戦重装甲型　。
ＡＥＵは爆撃を担当しているヘリオンがいる。

警備のティエレンとティエレン対空型、　撃ち込んでるティエレン
長距離射撃型。　また様々なトレーラーベース…

それぞれを同化取得すると…

『第２３ＭＳ隊は交代せよ。現在作戦経過時刻は１４時間半だ。最終捕獲作戦まで約３０分…ガンダムのパイロット達を疲れ果てさせろ』

（動けないって…つかれるよなぁ…）

既に夜の闇が辺りをおおっている…
しかし、この辺りは爆炎で明るい。

そして…突如として砲撃がやむ。

（今だ！）

カオルはガンダムエクシアに向かい急いでとりつく。

エクシア、ヴァーチェ…
ヴァーチェについてくと後ろからパトリックのイナクトが襲いかかる。

『おおっとぅ……どおした?動きが鈍いぜガンダム！！…やれ！！』
ヘリオンの捕獲型が陣形を組ながら…
動きが鈍く対応できてない。疲れがでてるのだろう…
捕獲されるヴァーチェ。

『ガンダム確保！！』

『よくやったぁ！俺のおかげだなぁ』

カオルは、ヘリオン捕獲型とイナクト指揮型と同化したあと、キュリオスへと向かうと…

ティエレンがキュリオスをすでに捕獲、移送していた。

ティエレンの高機動型及び指揮官型、超兵型、キュリオスと同化して…離脱。

次にデュナメスに向かう。

オーバーフラッグに捕獲されてたので同化、
フラッグカスタム、オーバーフラッグ、デュナメスを同化した。

朝日が見え始める。
ガンダム達は捕獲され、研究され、拷問される運命であろう…

が、赤いビームがはしり、オーバーフラッグが背後から打ち抜かれる。

また一機…捕獲してた機体も手放して、散会し離脱するオーバーフラッグ。

赤いビームを撃ち込んだ機体が目の前にあらわれ…

カオルはガンダムスローネアインに同化した。

「君の仲間のマイスターの所にも既にわたしの兄弟達が救出に向かえにいってる」

『どういう事だ？』

『ヨハンにぃ』

「ネーナか」

『こっちのミッションはクリアーしたわ』

「そっか、ネーナ、ＧＮ粒子最大領域で散布、現空域より離脱する」

『了解ね』

『ＧＮ粒子最大散布？何をする気だ？』

「ああ、君らの機体にはそういった機能は、ついてなかったんだね。ＧＮ粒子にはレーダー無効の効果あるだろぅ？」

『ああ』

「そのＧＮ粒子が広範囲に散布できれば？このようにね」

ガンダムスローネドライが、ＧＮ粒子を広域散布しはじめ、赤い粒子が空を覆う。

「こうする事によって、有視界でしか僕らを発見できなくなる範囲が広くなり、
結局は見つからなくなるわけだ」

『なる程…』

「さっ自力脱出できるかい？」

『……問題ないな』

「じゃあこちらも撤退するから」

『まて！！君らは』

「後程会いにいくよ」

『ヨハンにぃ』

『こっちも問題ないぞ』

「ネーナ、ミハエル帰逗するぞ」

しばらくすると合流してきた。カオルは機体から離れると、スローネツヴァイ、ドライにそれぞれ同化し離脱する。
ついでに電磁ナイフも取得しておいた。

「”世界扉”」

世界扉で世界を渡る

2日目…既に半ばだが…
カオルは世界扉から出てくる。

ユニオンのアメリカＭＳＷＡＤ基地…
目指して、幻影かけ飛び立つ。

カオルは基地につくと、ついでに研究技術等々も取得しちゃえ～とばかり、
基地と同化し始める。
結構おもしろげなのも見つかってるようだ。

さてそのころ…
研究施設の塔の最上階の執務室で、
一人の老人がパソコンに向かっている。
そのご老人はエルフマン教授…
ＭＳの開発のユニオンの権威者だ。

「あっ…」
手の動きがとまった。
考えがまとまったようだ。

基地に接続していたパソコンが突如ハッキングされる。
「な、なんだ?」

画面には…Ｙｏｕ　ｈａｖｅ　ｗｉｔｎｅｓｓｅｄ　ｔｏｏ　ｍｕｃｈ・・・
あなたは知りすぎた…と表示された。

「なに?」

突如としてサイレンが鳴り響く。
「あっっ、何事じゃ」

『アラバマシティより通達、ガンダムと思われるＭＳが三機、
ＥＷ９８７７方面から当基地にむけて進行中全ＭＳ部隊「なんと」
スクランブル』

サイレンが鳴り響くなかパソコンを操作しようとして諦め…
『敵ガンダム主砲らしきものを当基地にむけてる!!総員退避』

「なにぃ!…まさか狙いはこのわたしか?」

（ご名答です。俺も狙ってます……さてそろそろか…）
カオルはサイレン鳴り響いたと同時に執務室へと同化をしていた…

「はじめまして、エルフマン教授」

「き、君は？」

「残された時間はございません」

「つ、つまり？」

「ええ、あなたの運命を知って異世界へのお誘いに来ました。知識の探求、研究に有能な頭脳をいかしては如何でしょうか？」

「ふむ…名残惜しいが興味あるの…のったぞ」

「わかりました」
とエルフマン教授を引き込む。

「”幻影”」
カオルの一部をのばして伸ばした部分に幻影をかけた。
本体は外壁と同化させる。
そして、赤い光が建物を焼き払い、

「うわぁぁぁぁ」
幻影がかかったエルフマン教授が叫びながらとけて……
いや伸ばした部分を吸収し離脱した。

（さて一仕事終了…次はっと…）

外にでると、オーバーフラッグが救援にかけつけてくる瞬間だった。

そこにガンダムスローネツヴァイがファングだしながら迎撃しにいく。

キレているグラハムに交わされ、集中攻撃をうけるツヴァイ。
足がとまった。
そこに切り込んでいくオーバーフラッグ、

鍔迫り合い状態に陥いる。
その瞬間同化して、

「これがフラッグのちからだぁ！！」

『このままではやられる……わけねぇだろぅ！』
接触回線で聞こえてきた瞬間、
フラッグがいくつもハワード、俺が同化している機体につきささる。
「ぐぁぁぁ」
コクピットの左側を見事に貫いてる。
（あっ…助かる？）
制御系がことごとくきれ、浮力をうしない……

「隊長……フラッグを…」

瞬間引き抜いて、離脱爆発するフラッグ。
急いで無事な建物に向かい、同化して入り込みハワードをだす。

（うわぁぁぁ……）
左半身が肩からがなく、腹も大きくえぐられている。
重要な臓器も焼き切れていて、ほっといたら死亡、いや即死だろう…

ゴフッ
「き…きみ……は？」
吐血しながら聞いてきた。幻影を解除してた為だった。
医療ポットをだしながら、
「とりあえず助かったら全てわかりますよ」
ハワードを医療ポットにいれて作動させる。

（血だらけ…だなぁ……一回洗濯、着替えるか…）
「”世界扉”」

カオルは世界を渡る。

……
カオル報告

ガンダムエクシア
ガンダムデュナメス　ガンダムキュリオス　ガンダムヴァーチェ
ガンダムスローネ全機種
リアルド
リアルドホバータンク
フラッグカスタム
オーバーフラッグ

フラッグ陸戦重装甲型
ヘリオン
ヘリオン捕獲型
イナクト
イナクト指揮型
ティエレン
ティエレン長距離射撃型
ティエレン対空型
ティエレン高機動Ｂ型
ティエレン高機動Ｂ指揮官型
ティエレン高機動超兵型
トレーラーベース
オプション
射撃管制
キャリア
輸送

第１１０話　００の世界へ…　投稿日２０１１０４２０（後書き）

作者「という事で初登場の００の世界になります」

ナギ少尉「えっとガンダム００だと…美少年が沢山の美味しい世界だっけ？」

作者「はい、腐に入らない……まぁ…確かに…前２年程前かな？ゲームショーで００の２ｎｄシーズンの発表ステージイベントあったんだけど、
声優目的なのか、キャラ目的なのか…女子率がめっちゃ高かったなぁ…」

ナギ少尉「作者は何目的？」

作者「ガンダム目的以外にとらない！！つうかゲーム全般なんだけどね…
アイレムのバンピートロット２まだでないかな？と毎年通ってる」

ナギ少尉「皆勤賞？」

作者「いや、一回だけ交通事故で入院してていけなかった……あとは通ってるよ～」

ナギ少尉「……あきない？」

作者「祭りだからあきない♪参加する事に意義あり」

ナギ少尉「脱線したけど…この世界の特徴でＧＮ粒子なのよね…
前のＳＥＥＤの世界はニュートロンジャマーだったけど…」

作者「ま、そういった意味では人類が不利になる条件あるから使いづらかったよな…
けどそれ以外は化石燃料枯渇したら枯渇したなりに、かなり発展はしてるから、そこにね」

ナギ少尉「みたいね～…さて次回予告いっちゃいますか！　さて次回は……引き続き００の世界、題名不明ながらも、
皆さん予測できそうな、あの人が！！…お楽しみにぃ」

第１１１話　ガンダム００編２　ターゲットは…？　投稿日２０１１０４２２

３日目…

天極市…ガンダム００の人類革新連盟の軌道エレベーターのある都市の事である。

カオルはその近辺で技術取得に励んでいた。

人類革新連盟は他陣営とは遅れて水素内燃がメインであった。
というか、水素を極めているといってもおかしくない。
同時期の他陣営が宇宙太陽光発電の電力利用によるバッテリーに既に移行したのに、
いまだに水素内燃にあるのはそういった意味合いがあるだろう…
なので…
（フォー水素精製プラント！！）
や、
（はぅー水素ガソリンスタンド）
とか、
（水素内燃自動車だぁ）
等々、電力でなく水素をメインに発展してたので取得しがいがあった。

あとは一応軌道エレベーターと、
リニアトレイン、
宇宙太陽光発電所も取得し、ついでに他陣営の太陽光発電や、ユニオンの軌道エレベーターにまでいってしまった。

予備で１日とってて正解であった……

翌日…

リニアトレイン公社会長別宅付近ではっていた。

門のところにターゲットの絹江・クロスロードさんが来た。

インターフォンに向かい、

「ＪＮＮ特派員の絹江クロスロードと申します。

リニアトレイン公社総帥のラグナ・ハーヴェイさん御在宅とお聞きしております。

是非とも取材させて頂きたいのですが…」

『総帥に伺ってまいります。しばらくお待ちください』

……

『申し訳ございません。只今ご面会中につき、取材は受けれないとの事です』

「あ、でしたら面会終了後にでもお時間取らせて頂ければ…」

『申し訳ございません。総帥はこの後ご多忙ですので…』

「わかりました。ありがとうございました…」

とほとぼと離れ黄昏れている…
「はぁ…取材は空振り…どうすれば」

フィン
電動車の軌道音が聞こえる。
「あっ」

フィィィーン
赤い車が出ていく
「さっき総裁は面会中だって…」
たたたた
車の前にでて立ちはだかり前に立ちはだかった
（死亡ふらぐぅぅぅ）
キィィ
車がとまる。
「あの」

「何かごようかな?」
窓をあけながらサーシェスが答える。
「わたし、ＪＮＮの特派員なんですが、２、３お聞きしたいことがあるのです。
よろしいでしょうか?」
と身分証明に記者パスをだしながら…

「ＪＮＮの記者さんねぇ…構いませんが、私は急いでまして、車中でよれしければ…」

「あっ…いえそれは…」

「やめておきますか？」

「……ではお言葉にあまえまして」

「助手席にどうぞ」
サーシェス手を席にふりながら…
そう言われると後部座席にはすわりにくいだろう。

「失礼します」

絹江さんが助手席にすわり、ドアを閉め、シートベルトをしたのを軽くみて、
サーシェスは車を発進させる。
もちろんカオルはとりつき済みだ。

「お忙しい中取材お受けしてありがとうございます。
では、このレコーダー使わせて頂きますので…」

「構いませんよ」

「まずは、お名前お伺いしてもよろしいでしょうか？」

「ゲイリー・ビアッヂといいます。記者さんは？…さっき軽く聞き流したので」

「あ、失礼しました。改めまして、ＪＮＮ特派員の絹江・クロスロードといいます」

「絹江・クロスロードさんですが…いいですね。あなたのような美人の記者さんがいて」

「そんな…」

「で、私にききたい事とは？」

「間違っていたらあやまりますが、ゲイリーさんは先程、トレイン公社総裁ラグナ・ハーデン氏とあわれていませんでしたか？」

「ええ、あいましたよ」

「どのような話を？」

「わたしは流通業を営んでましてねぇ…物資の流通確認に総裁に報告にきたんです」

「わざわざ総裁に？」

「ええ」

「それは私用ですか？」

「ええ私用です」

「差し障りなければ、その物資が何か教えて頂けないでしょうか？」

「ふっ…ＧＮドライブ」

「ＧＮドライブ？リニアトレイン関係の機材か何かですか？」

「いえ、ＭＳを動かすエンジンです」

「ＭＳ？」

「ガンダムですよ」

「はっ！？」

「知っているでしょう？ソレスタルビーイングの所有する、あのクルジスの少年兵がパイロットをしている、あのガンダムですよ」

「クルジスの…少年兵…」

「その餓鬼をですね…誘拐して洗脳して戦闘訓練受けさせゲリラ兵に仕立て上げたのは、何を隠そうこのわたしなんです」

「あっ…あなたは…？」

脅え始めた…やばい話になったと感じたのだろう。

「戦争屋です。戦争が好きで好きでたまらない。人間のプリニティブな衝動に準じていきる最低最悪の人間ですよ…」

「あ…あぁ…」

「さて…あと何か知りたい事ありますか？

あ、あと私の本名はアリーアルサーシェスといいます。

その分野では有名でしてねぇ……

…なに、此処まで知ってしまっては、わかりますでしょう？」

「な、何故？」

「世の中には知ってはいけない秘密ってのは沢山あるのですよ。

その一線を越えてしまった。ただそれだけですよ…」

「ひっ…」
ガチャガチャ
「無駄ですよ。何の備えもなしにあなたを乗せますか？おっと…」
と携帯電話を取り上げられた。

「駄目ですね～連絡をとろうとするなんて…」

フィィィン
「さて…つきましたよ」
カチャリ
と銃を構えた。
「さて、ゆっくり降りてもらいましょうか…」
と降車をうながしたが…

絹江さんはダッシュで飛び出したが、
ターン！！
銃声が響き渡って、絹江さんが前めりに倒れた。

「逃げなければ一瞬で苦しまずにしてあげたものの…」
とサーシェスは撃った痕跡を手袋をはめながら確認し、

「気絶してるが、もう助からんな…さてと…」

携帯電話を壊したあと物取りの犯行にみせる為にあさりはじめ…
「名前は偽っては無いようだな…あとは…」
取材メモリらしいのを探して処分するためにもらう。

「さて…こんなものか…」
サーシェスは車のって去っていった。

そのうち夜の闇が訪れ、雨に濡れながら…
「う、あ……と、父さん…サジ…」
写真に伸ばした手が落ちる。

急いで救急ポットにいれ、髪を抜く。
ポットを作動させ同時にポットにコマンドを打ち込み、
衣服を脱がし始めて素っ裸にさせ、衣服を回収した。

培養ポットにむかい、衣服を入口に入れる。
髪の毛をＤＮＡ投入装置にいれ、医療ポットとリンクさせる。
コマンド…医療ポット投入時の状態…

培養ポットが作動し始めた…
みるみる人体らしきものが形をかえてゆく。

ものの１０分…衣服が着せられて、
腹にあなのあいた絹江・クロスロードの死体が出来上がった。
血だまりの中に死体を置き直す。

（よし…絹江・クロスロードさん救出っと…）

「”世界扉”」

世界を渡る。

カオルは衛星を打ち上げると、ラグランジュ１を目指した。

目指しているうちに５日目になる。

そして、ラグランジュ１で補給しているプトレマイオスを発見。

同化すると格納庫で艦装作業作業している三機を発見、

各種オプションパーツ、テイルブースターとか等も勿論取得した。

『Ｅセンサーに反応敵部隊を補足しました相対……』

（始まったか…さてと…）

カオルは館内放送をききながらデュナメスにとりついた。

『接近する三隻はユニオンのヴァージニア級と推定』

『有視界戦闘領域まてあと４２００』

『資源衛星を利用しながらトレミーは後退、キュリオス、ヴァーチェ防衛戦用意、デュナメスはトレミーで待機』

『キュリオスをリニアフィールドに固定しました』

『敵輸送艦からＭＳが発進』

『ヴァーチェをリニアフィールドに固定』

『敵ＭＳ擬似ＧＮ搭載型２６機』

『敵ＭＳ部隊の中にスローネがいます！』

ロックオンは未だに解除に戸惑っているようだった。

そしてやっと…ロックオンが入ってきてコクピットに乗り込んできた。

『キュリオス、テイルブースター破損。超兵と思われるＭＳと好戦中』

「急がないと…な…」

ＧＮドライブが起動し始める。

『ヴァーチェ、敵ＭＳの集中攻撃をうけてます』

『ガンダムに後退命令を』

「デュナメス出撃する！」

『ロックオン』

「ＧＮアーマーで対艦攻撃をしかける。あんたの戦術通りにやるって事だ」

『でもその身体で…』

「ハロ、悪いが付き合ってもらうぜ」

「リョウカイリョウカイ」

「アリーアル・サーシェス」

『わかったわ…コンテナより直接でて頂戴、ＧＮアーマー射出、ドッキングシークエンス自動制御スタンバイ』

「ありがとうよ」

デュナメスがコンテナより直接宇宙空間にでる。

「ガッタイガッタイ」

ＧＮアーマーとドッキングし…

「ＧＮアーマー、ロックオンいくぜっ！」

一路戦場を目指し始めた。

……

『ヴァーチェ、キュリオス、トランザム起動』

「あの光は……おいおい使いきったんじゃ？…」

進路をヴァーチェの方に向け…

『ＧＮアーマー…ロックオン・ストラトス！』

「悪いが狙い撃てないんでね…圧倒させてもらうぜっ！」

「ホウゲキカイシ・ホウゲキカイシ」

左腕に装備されたＧＮミサイルの大群がジンクスに襲いかかる。

ほぼ撃墜し…

「このまま対艦攻撃に移行する」

『ロックオンそんな身体で…』

「ふっ気遣い感謝するよ…だがなぁ…今は戦う！！」

まもなくデュナメスは敵艦の手前にたどり着き…

「一気に本丸を狙いうつ！！」

ＧＮツインライフルが起動し、敵バージニア級を一隻貫く。

「メイチュウメイチュウ」

「次ぃ」

次弾も命中、轟沈させ残るは一隻…

「これで終わりだぁ！！」
ガガーン
エネルギーチャージャー中のツインライフルに命中弾が貫き…
「なに？」
爆発するライフル。
「クッ、しまったぁ」
アーマーが制御不能に陥りさらに敵から…
「グァ」
命中弾がＧＮアーマーに命中。
「くそぅ」
とＧＮアーマーから離脱、そこにバージニア級から更なる命中弾で、
爆散するアーマー。

「くっ…あれはスローネ…アリーアルサーシェスッ！！」
スローネを追跡しはじめた。
「くっ利き目のせいで」
命中弾が当てられない…
スローネがビームサーベルを出してきたので、
こっちもビームサーベルをだし切りかかるが受け止められ、鍔迫り合いに陥る。
「ＫＰＳＡのサーシェスだなぁ」

「へっクルジスのガキにきいたかぁ？」

「アイルランドで自爆テロを指示したのはお前かぁ！？何故あんな事を！？」

「俺は傭兵だせ…それになぁ！」
押し返えされるがすぐに切りかかり、
「なろっ！」

再び鍔迫り合いの状態におちいり、
「ＡＥＵの軌道エレベーター建設計画に、中東が反発するの当たり前じゃないかぁ！！」

「関係ない人間までまきこんで」

「てめぇだって頃合じゃねぇか。紛争根絶を目指すテロリストさんよぅ！！」

「咎はうけるさぁ…お前を倒したあとでなぁ！！」

ミサイルを打ち出すがかわされた。
距離が離れた為すぐさま、ＧＮピストル撃ちながら追跡をする。

「絶対許さねぇ！！」
追いつき、ビームサーベル切りかかりる。
「みてろぉ…平和を乱す根源が！！」
再び鍔迫り合いに陥り…
「なめんなよ！同じ穴のむじながぁ」

「てめえと一緒にすんじゃねぇ！！」
スローネが逃げ出したので再び追いかけるが…

「俺はこの世界を「テッキセッキンテッキセッキン」」
遠距離からジンクスが割り込もうとしていた。

「邪魔すんじゃねぇ！！」
GNミサイルを打ち出す。
「なっ！」
ジンクスがミサイルかわさずに突っ込んできて、右手に回り込んできて…
「しまったぁ」
右目が怪我の為視覚がなく反応が遅れて、
右腕を肩からもってかれる。

「ぐっ…サーベルもっかれたか…なろっ」
ファングが襲いかかってきた。
それに対してピストルで迎撃するが……
「ロックオンロックオン「みえねぇ！ぐわぁ」」

ファングが連続して突き刺さり…
「ぐわぁぁぁぁ」

「ソンショウジンダイソンショウジンダイソンショウジンダイ、セントウフノウセントウフノウセントウフノウ」
機体最小限出力に抑え隕石の影に隠した。
照準マピュレーターを外し、コクピットハッチを解放する。

「ハロ…デュナメスをトレミーに戻せ…」

「ロックオンロックオン」
「命令だぁ」
「ロックオンロックオン」
「心配すんな…生きてかえるさ…」

「ロックオンロックオン…

ロックオンロックオン…
ロックオンロックオン」

外にでるロックオン…
カオルも機体から離脱し少し離れて追跡する……

ロックオンは、ＧＮアーマーのキャノンにたどり着くと、

キャノンの端末からケーブル伸ばして照準マピュレーターに接続した。

ロックオンが狙っている。スローネも気がつき、とどめをさそうと……

ロックオンの手動操作によりＧＮキャノンが最後の一発を撃ち放つ。
スローネを見事貫き破壊するが……
最後のあがきのビームが、キャノンの砲身を貫き爆風で押し出される。

何かつぶやいてる…が接触してないからわからない…

遠くから刹那ののるエクシアが近づいてくる。
（ソロソロか…）
砲身がスパークしている…
小爆発がおき…

ロックオンが地球に向け指で銃を作り、
「俺はやだね…」
そして爆風が……　襲う瞬間引き込み、押し出されるように隕石を

目指す。

隕石につき、医療ポットを出し、ロックオンを引き出し…

「き……きみは……？」

「後程説明しますから…」

医療ポットを作動させ、空気が充満したのを確認すると、
コマンドを入れパイロットスーツを溶かし始めた。

ロックオン、いやニール・ディランディィは強制的に眠らされた。

医療ポットを引き込み…バージニア級の館内に入り、世界扉を唱える。

カオルは世界を渡る……

……
カオル報告

プトレマイオス
ＧＮアームタイプＤ
オプションパーツ
水素関連
宇宙太陽光発電システム
軌道エレベーター

第１１１話　ガンダム００編２　ターゲットは…？　投稿日２０１１０４２２

作者「主役級がこれで三人目だなぁ～♪」

ナギ少尉「ロックオン・ストラトスねぇ……
確かロリコンでしょ？フェルト狙ってたから」

作者「へ？ロリコン？」

ナギ少尉「だって他のＳＳでもそうだけど、フェルト１４歳よ」

作者「……ほんとだ…ロリ…つうかあんなバインバインな１４いるかぁ？
グラビアアイドルでもやってけるわ」

ナギ少尉「霞ちゃんなんか狙われそうよね～」

作者「あ～……ありえそうだな…」

ナギ少尉「で霞ちゃんも大人の階段登っちゃうの」

作者「いやいや…純粋なままでいてほしいさ…」

ナギ少尉「さて、次回は…霞ちゃん危機一発！！お楽しみにぃ」

作者「まて～サブタイトル勝手にきめんなぁぁぁ」

次回サブタイトルは普通に　００より帰還です。

ロックオン暴走するか？

第１１２話　ガンダム００より帰還と２０７Ａ小隊　投稿日２０１１０４２４

２００１年１０月１１日

深夜未明に帰ってきて、そのまま就寝。

で朝になりハンガーにいこうとすると……

（ギュネイ？？）

犬耳としっぽをつけて首輪から鎖で杭に繋がれています……

「なぁ…ギュネイ…なにしてん？」

「わん」

「いや…わんじゃなく……そういった趣味？」

「わんわん」

首を振っている…

「誰の命令？ヒルダさん？」

「わん」

首を縦に…

（……あ、調教か…）

「ん…じゃあ頑張れよ」
と、いこうとすると…

「カオル大将助けて下さいよ…エルちゃんと遊ぼうとしたら…」
勿論足をとめて、

「……どう遊ぼうとしたの？」

「え？えっと…それは…」

「人に言えない遊び？」

「えーと……ウインナーさん遊びを…」

「ウインナーさん遊びってなに？」

「……ま、まぁ…」

ヒ「ギュネイ！！」

とヒルダさんが鞭をもって…

「ヒィッ」

「誰が人間の言葉話して良いっていったの?? まだ、しつけが足りないようね…」

と囁きで…

「まだ反省はしてないようです」

「今日の朝飯は抜き、昼間はドックフードよ」

「そんな殺生な!」

「あ、昼飯も抜き?」

「ワンワン!!」

「よろしい。昼飯は抜かさずドックフードよ」

(反省するまでこの調子かな?)

「じゃ、頑張ってください…」

とハンガーデスクにむかって、
ハンガー内にシェルターを一つだけだした。

そう、最高年齢のエイフマン教授７２歳だ。
しばらくすると扉を開けて出てくる教授…
開発部へと配属してもらう事となった。

他には、医療室にロックオン、ハワード、絹江さんの医療カプセルをおいておく。

その後ハンガーにいき、一通り作ってみる事にする。
まずはイナクト……

（あちゃー）

そのままだと動かない事が判明したというか忘れてた。
イナクトは主動力を太陽光発電システムから受信して行動を行ってる。
つまり受信し続けている限り無限動力なのだが、ないと動かないデカブツ…
なので基地内核融合炉からの受信に変えました。

ティエレンとフラッグは無事に作成。
スローネは……今回は作製せず。
擬似ＧＮ粒子の毒性がまだ解決ついてない為だ。
ガンダムデュナメスを作製してみた……

うごきません

（やっぱりな…）

ようするに燃料というかモノポールがからっけつなのだ…

（ん～～電力だけは代用できるが……）

なんかビームライフルとかすべてＧＮドライブから直結回路がある…つまりＧＮ粒子が必要みたいなので、

（中身をかなり作り替えなきゃ無理！！）

の結論がでて、とりあえず使用不能の札をかけて、ハンガーに保管しておきました。

さて他の作製した、ティエレンは水素内燃が主動力、

フラッグはバッテリー＋水素ジェットという事だった。

（けど水素エンジン車サイズのがあったのは幸いだな）

取得した中にあった。

バッテリーを主動力にするには電力が必要…つまり大規模施設、

が水素エンジンを主動力にするには、スタンドや、補給施設さえ整えれば…との形。

リアルの水素エンジンはまだ窒素酸化物が発生する為、

もちろんガソリン車よりかは少ないが…の問題もある。

また燃料タンクの問題もある。

他にはエネルギー率…

まだまだ発展途上の燃料であった。

が、今回取得しにいった水素関連技術や、施設はそのような問題もクリアしている。

エネルギー効率が自家太陽光発電を使って海水から触媒なしでの取得により、
クリーンエネルギーとして成立、

また水素エンジンに関して窒素酸化物も発生せず、
高圧超低温燃料タンクがあり…

また長い間実績も積み重ねて信頼性も増していた。

その為、現状北海道の人工石油精製に頼りきっている帝国には、朗報の技術であろう。

また世界的にみても中東がＢＥＴＡの占領下にある今、
海上施設によるサイクル燃料として開発、利用が進んでいる中、
欲しい技術の一つであるのも明白だった。

コロニーは水が貴重なためひろまっても、電動車メインになるが…

（あと宇宙太陽光発電システムねぇ）
核融合炉には発電効率負けるものの、この西暦のは、
劣化スピードが遥に現有のよりも遅いのだ。
（あとでスペースコロニーのパネルを変えよう）

と思うくらいＵＣのと比べて発電効率が違った。

技術的には大きく躍進し、
宇宙太陽光発電システム、
水素エンジン、
水素精製プラント
水素ジェットエンジン、
水素発電、
リニア、
エネルギー送受信システム、

また装甲材浸透システム

なところだった。

ＧＮドライブが載ってない？
確かに半永久的大出力は美味しい。
また浮力が発生できるのも…

が、有害である、生産をとるかワンオフをとるか…

また特性が問題であった。
ニュートロンジャマー同様、　レーダー阻害、通信阻害があるのが痛かった…

全戦術機に搭載すると、有視界戦闘のみに陥り、人間不利フラグ発

生の為、
できて一機、または少数だろう…

（まぁガンダム００は対人間だから、有視界戦闘にする必要あったんだよなぁ…
けど疑似太陽炉が量産されて…優位が覆された。
レーダー阻害の特性を逆利用で探知に使われだした…と）

あと現状は有害である赤いＧＮ粒子が発生する擬似ＧＮドライブか、生産にえらく時間のかかる真性ＧＮドライブか？の２択になる。

（どちらも現状ではないな…）

真性ＧＮドライブが何故ないな？は燃料製造特性で駄目なのだ。
モスポールを収集し、精製する必要がある。しかもレア物質なのでえらく収集に時間がかかるということだ。

…とやってる内に時間になった…

（後回しで明日かな？）

なんの時間かって…？それは……
今日の午前９時、場面は講堂……

「気をつけ！！」

「分隊、整れーつっ！」

「ただ今より、国連大平洋方面第１１軍、横浜基地衛士訓練学校、第２０７Ａ衛士訓練小隊解体式を行う」

そう、Ａ－０１の候補生達が半年間の厳しい実技訓練をおえ、衛士として改めて戦場に出れる日となった。

「本日付けをもって諸君は、人類防衛の前衛たる国連軍衛士の資格を得た。
その栄誉と名誉をかみしめ、必勝の気概をもって、勝利と未来を掴み取る為に、その持てる力を尽くして欲しい」

「引き続き衛士徽章の授与をおこなう」

「涼宮茜訓練兵！」
「はい！」

「ただ今をもって、貴官は国連軍衛士となった。……おめでとう少尉」
「ありがとうございます」

つつがなく徽章授与はすすみ…

「ラダビノッド司令官に対し－－敬礼っ！」

「これを以て、国連大平洋方面第１１軍、横浜基地衛士訓練学校、

第２０７Ａ衛士訓練小隊解体式を終わる」
「２０７Ａ衛士訓練小隊――解散ッ！」
「「「「「「ありがとうございましたっ！！」」」」」」

セレモニーが終わり…

予定では、まりもちゃんが、手続き一般、後に伊隅隊長の後に機体関係に関してハンガーに来る予定だった。

部下に任せるという手もあるが、石橋達の部下になり、力になるわけだ…
やっぱり手渡ししたい…つうものがある。

なので、彼女らに渡す魔撃震をＡ－０１の専用ハンガーに納品する作業になる。
コバッタに操られ移動する魔撃震、
無事にハンガーに収まった。

（さてそろそろかな？）

伊隅に引きつられて、ハンガーに入ってくる新人５名がみえてきた。

「わぁ」「すご」「茜た…」「強そう」「きれい…」
彼女らが魔撃震を始めてみかけた感想だ。

「整れーつっ！！大将に対しー－敬礼っ」
答礼で答え、

「なおれっ」

「楽にしていいよ…改めて、異世界軍の責任者である渚カオル大将だ。
まぁでも君らに対しては年齢もちかいしざっくばらんにね…」
と彼女らを見渡す。
「さて俺がきたのは、この魔撃震の引き渡し、パーソナルデーターの登録と軽く説明なんだけど…
改めて、自己紹介もしてくれるかな？」

「はっ！！涼宮　茜少尉といいます。コールサインヴァルキリー１０です」

「柏木　晴子少尉。コールサインヴァルキリー１１よろしくお願いいたします」

「築地　多恵少尉。コールサインヴァルキリー１２だど」

「麻倉　美桜〔みお〕少尉。コールサインヴァルキリー１３です」

「高原　由希少尉。コールサインヴァルキリー１４です」

「よろしくな。じゃ、パーソナルデーターの登録をすましちゃうから、まずは涼宮から…
シートにすわってくれ…強化服はまだいいよ」

網膜スキャン開始……
生体ＤＮＡ登録…

「よっし…これで君らの一人一人の専用機となったわけだ…」

「私達の専用機…」

「さて、こいつが今まで乗っていた吹雪と違う点を、いくつか説明しておく…
まずは耐久性…戦車級にたかられても安全だから、パニックに陥らないように。
次に出力…今までのと違い核融合炉を使っているから、また燃料も心配なくなってる。
あとは乗って慣れろかな？」

「カオルさん、戦車級にたかられても、大丈夫って本当にですか？」

「俺が身体はって検証してるから大丈夫さ、保証するよ」

等々質問こなして…
最後の締めに…
「君らはこの魔撃震をかって、戦場を駆け抜ける乙女になる。
力となり槍となり、ＢＥＴＡを刈る刃となれ、異世界の力でもってなぎ祓うのだ…いいな！！」

「「「「「はいっ！！」」」」」

第１１２話　ガンダム００より帰還と２０７Ａ小隊　投稿日２０１１０４２４

ナギ少尉「兄貴まだ出てこないです？」

作者「まだ重体だからね～一週間後か…」

ナギ少尉「勿論Ｃ－０１入り？」

作者「ん～まだ未定……あ、前回のロリコン疑惑な…
あれ調べたらオールワンダーっぽいね」

ナギ少尉「オールワンダー？」

作者「下は十二歳から上は五十歳まで…」

ナギ少尉「なるほど…なら霞ちゃんの純潔は守られそうね～
あ、ギュネイ君は治りそう？」

作者「ありゃ……無理かもな…クェスにはしったんだけど、振られて傷心でさらに幼年に……
ヒルダさんの技では治らなかったと…」

ナギ少尉「犬型ＭＳつくったら?調度いいのあるし」

作者「コクピットの操縦シートも犬型か…」

ナギ少尉「それで骨をあたえると、ちっこい工作特殊メカをだすの」

作者「タイムボカンシリーズね」

ナギ少尉「ばれちゃったか…さ、次回は……カオル人生の節目!!
お楽しみにぃ」

第113話　カオル、人生の節目　投稿日時20110426

2001年10月12日

昨晩、イッシーが最近さみしい…ってすねてたので、
イッシーの部屋で一晩すごしていて…

朝方、……

（……？下が……あっ）

…

モソモソ

「おはよう…ケフ」

布団の中から出てくるイッシー…口もとが白い…

「ああ、おはよ…」

「美味しい…ってきいてたんだけど……なんか…」

「え…？のん…だん？」

「うん」

顔を真っ赤に…

ギュッと抱きしめちゃう程可愛く…
我慢できずに抱きしめ…
「ありがとう…気持ちよかったよ」

「うん……」

しばらく抱きしめていて…

「あ、時間……シャワー浴びるね、カオルはゆっくりしてって」

（まぁ…呼ばれてるのが１１時だしな…）

今日は帝都城に登城するようにとの事で呼ばれていた。

「ああ、そうするよ」

と、シャワーの音を子守唄にしもう一休み……

……

のっそり起きて、服をきたあと、イッシーの部屋を後にする。

スパの朝風呂に入ったあと身嗜みを整え、カオルは飛びたち帝都城に向かう。

つくと……いきなり殿下の私室に案内された。
（……何故？）

「殿下、何ようでしょうか？」

「カオル殿、夜の営みを…」

「え？、いや、殿下と結婚したら…」

「結婚、いや婚約したら可能ですね？」

「ええ…まぁ……」

「言質とりましたわ。ききましたね？月詠」

「はっ確かに…」

と、書類を出された。婚姻届けだ。

「いや、まりもさんや、石橋がいるので…」

「よくみて下さいまし」

と言われてみると…重婚届けとかかれてる。

「重婚届け??」

「実はこんな時限律法を作りましたの」

とまたまた書類を出された。

ざっと見、要約してみると…

ＢＥＡＴの侵攻による国難に対し、男性減少による人口増加を目的とした重婚制度。

ただし優良である旨である事。

具体的には戦果をあげる、または表彰を受ける等など…

「……」

「さ、これて結婚できますわね?」

「え、え～と……」

よく重婚時限律法を見直すと…

（あっ…）

重婚できる要因の一つに現時点の妻の承認がいる事となっている。

「殿下、この部分ですが…」

「……さぁ？どの部分さしてますの？見えません」

（すっとぼける気満々だったな…）

「とりあえず、自分としては今の恋人の二人が一番大切なので呼ばないと…」

との事で渋々、イッシーとまりもちゃんが登城する形になりました。

それまでに重婚制度における財産等々の問題も説明をうけていた。

基本この制度を利用する場合、妻の財産は独立したものとし、統合はしない。

そもそもそのような夫に財力がない限り重婚も成立できないだろう…との事だった。生まれた子供に関しては、重婚した人数分を割り、その妻と合計して計算をする。

また夫の収入に関しては基本的に等分が好ましいが、きちんと話し合いを推奨する。

等々

と説明をうけている内に二人が来たので、

殿下とともに…三人と婚約、１０月２０日に合同結婚…の形になりました。

二人が先に基地に帰えされ……

「さぁ…これで初の契りを結べますわね…勉強はしましたけど、初めてです。優しくしてくだいませ」

（まだ午後3時なのに…）
と思いつつ…

殿下の床間に…

（日本式だな…）
薄暗く、布団がひかれていて、テッシュがおいてある。

そして……

２００１年１０月１３日

赤いシミがある床の間を後にし、一泊し満足させた翌日、帝都城から帰ってた。

（初めてなのに…勉強しすぎだよ…殿下…
なんで顔〇希望いたしますだよ…
間違った方向に勉強しすぎ！！）

くる途中整備済みの第一京浜をフライパスする。

ＢＥＴＡ進行の際に壊され放棄された第一京浜、
高架高速道こそないものの、広い片側５車線、制限速度は１００ｋｍ／ｈにまで引き上げられ、
電動１５０人乗り３連節大型バス、電動トラックが行き交う。
乗用車はガソリン規制され、まだ走ってない…
大型バスは移住者をのせたり迎えにいく最中だろう。

横浜白凌基地周辺は訓練等にかかる為地下トンネルに入り、
地下３階部分を通りぬけ、
藤沢の第二空港ターミナルにいくルート、
桜木町第一空港ターミナルにいく方向へと分離する。

付近の瓦礫等は除去され、横浜近辺は、重力偏差の影響をうけ植生等はないものの、
かなり見通しが良くなっている。

（大分整備できたな……あとは大量輸送トレインもかな？）

と考え飛行してると、基地につくので、
ゲート前に着地し、
ポン太衛兵に挨拶し、ハンガーに向かう。

＝＝ハンガーデスク＝＝

昨日途中だった、水素関連施設の製造に関して…考えつく。

（とりあえず一つ作ってあとは広まれば…か？）
との事で、まずは中規模水素燃料精製プラント、貯蔵プラント、水

素ガスステーションを、
横浜基地の出島に作る事に…で注文。

（プラント稼動したら、試乗車やテスト車両を走らせ、
車メーカーにライセンス販売かな？）

五日程で稼動まで持ち込めるとの結果があがる。

（あとはそうだな…）

ティエレン対空型を参照にハイブの頭上対策をとる事にする。
ベース機は…ティエレン対空型、そこにコクピット以外をZ技術等
をぶち込んで…

対空速射砲４門は長すぎ、ＭＳ用の為小型化及び砲身半分程に…
弾種等も小型種｛戦車級以下｝対策用特化なので、
小口径化…

魔ティエレン対空型の出来上がりだ。
３個連隊分注文した。もちろん操縦はヤドカリが担当。

（あとは～っと…）

有人機のバージョン強化を考えていた。

とりあえず変更点バイタルパートをＴＰ装甲＋ラミネート装甲化へ…
二重装甲の外側をラミネート装甲、内側をＴＰ装甲。
スクランブルポットとエンジン及びタンクブロック、

反重力コアモジュールがより安全になる。

またジュネレーター出力増加による関節負担に関して、
関節部にＰＳ装甲負荷型を導入する事にした。

（操縦系は人のより好みがあるからなぁ…）
全体的変更は無しにはしておく。

次に放置してあったジュリア小隊についてだ。

ここ放置期間の間に各種操縦方法の、シュミレーターを試して貰ってた。

やはりＳＥＥＤ系の操縦方法が１番あってると…
しかも要処理能力が必要なコーディネータ用のが…
彼女らにいわせると、ナチュラル連邦用のは、改善前の旧ＯＳに似ているそうで…

検証してみると…
（成る程ね…）
と改めて思ってしまった。
オーブＯＳがまだ良いけど物足りない…
つう事で、

彼女らに用意する機体は、異世界軍標準技術に、ＳＥＥＤ系操縦方法をミックスした、
魔グフを注文する。

（接近特性が偉い高いからなぁ…あ、そういえば……）

次攻撃するのは、鉄原ハイブである。
周囲の陸地はＢＥＴＡ勢力下、安全地帯は海上しかない…

（とするとザメルは使えないから、砲艦が必要か…）

ビックトレーテストバージョンを画面上に引き出し…

（ん～……）

直線射でなく、水平線外への自然曲射が必要な為、
６１ｃｍ３連装を甲板に並べてみる。
計３６門＊３で、１０８発の砲弾…
自動装填装置等で、０．５秒で撃ちまくる事ができる。
勿論無限弾薬装填装置も忘れずに…。
ｃｉｗｓも１６門をつける。

最後の調整必要だが、１０隻注文しておく。

（こんなもんか……）

直接戦力関係はとりあえず終了した。

（と…時間あるな…
鉄原ハイブ攻撃しようにも、まだ足らないし…
まだ間引きする必要なさそうだから、
余計な刺激はやらないほうがいいな…
となると…トリップ一回分時間はあるな…）

カオルは鉄原ハイブに佐渡島の防御力の
陸戦強襲型ガンタンク、
及びハンターキラーレッグは回さず、
新規補充分で対応するつもりのようだ。

なので今絶賛増産中につき、もうちょっとかかる。

（ん～現状足らないのは……戦力だけであとはないか…
じゃあ人材と更なる技術だな…
あっ、軌道エレベーター……）

考えが軌道エレベーターにいく…

地上から伸びていく軌道エレベーターには、いくつか建設方法があり、
地上から塔を作り始める固定型、
宇宙空間にある固定物を利用するデザートサテライト、
宇宙のネックレス方式などなど…

取得できたガンダム００のは先に、低軌道リングを宇宙のネックレスで基盤を作り、

エレベーターは蜘蛛の糸方式で、
アフリカ、
オセアニア、
南アメリカ、
の赤道上に各一基づつ、
劇中登場したというか取得した人革連の軌道エレベータの地上側には、

空港に似た施設が設けられ、
民間人がリニアを利用する形で交通機関が運用されていた。

全長５万ｋｍにも及ぶ軌道エレベーターの構成は、
低軌道ステーション、
低軌道リング
、
高軌道ステーションによって、
構成されている。

そして、エレベーターを通して、地上の各地域へ配電するシステムだ。

低軌道環リングが何故必要かは、
リング内に磁性流体を流して遠心力を作り、ステーション全体を軌道高度に留めている働きをもっているからであった。

本来なら、低軌道リングのあるリングの位置は秒速５ｋｍが必要…
足りないのを磁性流体を流しているわけだ。

つまりＯＲＳ…オービタルリング。

またに低軌道には、重力ブロックがあり、軌道エレベーターを中心軸にした、
円環型宇宙ステーションのような、回転式の人工重力ブロックが、
低軌道ステーション・真柱に設置されていた。

取得でき、建設はできるものの…

データーを入れたあと建設試算の結果みてみると…
（五年規模か…）

かなりの大規模工事におちいると表示された。
五年ですむ技術も凄いが……
ＯＲＳ、オービタルリングの建設に時間がやっぱりかかる。という結果がでてる。

静止軌道上にある衛星を数珠繋ぎの後、
段々と高度を落とし、高度一万ｋｍで固定。

その後低軌道リングとして補強しながら、中心ケーブルを建設予定となる赤道直下の地点に下ろしながら、
反対方向にも伸ばし軌道を安定させる。

地上に固定して、中心ケーブルを伝って資材を地上から送れるようにし、
低軌道リング付近から中心ケーブルの補強をし始め、
より重い資材を送れるようにする。

を段階的に繰り返して軌道エレベーターが完成をする…って形だった。

（むぅ～～時間かかるなぁ……）
と考えたところで、（他の軌道エレベーターはどうだっけ？）
と考えはじめた。

どの物語にでてるか不明だが、一つ面白い軌道エレベーターもあっ

た。

軌道上にフック付きの回転するシャフトがあり、
シャトル等を引っ掛けそのまま宇宙に持ち上げるものだ。

ようは巨大な観覧車の発想…スカイフック。

それを改良した極超音速スカイフック。

あとは完全に吊り下げ型で自重中心等は宇宙空間にあるもの…等もある。

怖い方法で宇宙空間で建設した軌道エレベーターを大気圏に突入させ、
強引に縦穴に突っ込んで穴の壁を爆破し、岩雪崩で強引に固定する。
つうのもある……

等など考えふけってると…

［マスターもう日付変わるよ～］

とせかされ、一休みする事にした。

……

カオル報告

人生の節目を迎えそうです…

ジュリア中隊機体確定しました

第１１３話　カオル、人生の節目　投稿日時２０１１０４２６（後書き）

作者「婚約おめでとう～」

ナギ少尉「おめでと～」

カオル「ありがと～」

作者「まりもちゃんを幸せにしろよ、イッシーからかえよ、殿下とはっちゃけろよ」

ナギ少尉「イッシーだけ扱いかるい？」

作者「まぁ…オリキャラだからなぁ…」

ナギ少尉「ところでタケルちゃんは誰と結婚するの？」

作者「するとしたら、今だに本編に登場してないのと…かな？」

ナギ少尉「しかし、本編まで１１０話かかるって…」

作者「後悔はしてない…いや…大変でした」

ナギ少尉「あ、軌道エレベーターどうするの？」

作者「スカイフックの作品探してもいいかもね～…面白そうだしさ」

カオル「時間ある？」

作者「……ないな」

ナギ少尉「ま、まぁ…次回予告で……作者、また新しい世界に行かすのね……
次回、新たなる世界へ、たゆ～ん…お楽しみにぃ」

作者「たゆ～んはついてないぞー」

第１１４話　またまた新たなる世界へ　投稿日２０１１０４２８

２００１年１０月１４日

散々悩んだが…いく世界を決めた。

（まぁ安全ちゃあ安全か……）

今度いく世界は争いらしい争いは……
相手にしてないのにちょっかいをかける種族はいる。

一応対策はしているようだが……

「うんじゃあいってくるよ～」

［いってらっしゃい～］

＝＝　あそびにいくヨ！の世界　＝＝

さてこの世界はどういった世界であるかというと…

ぶっちゃけ猫耳人間たゆーんが人間に恋してしまって、
アハーン、ウフーンな世界である。

「それだけか！？」

…まぁあんまりＳＳ小説があがらないのが、
ぶっちゃけストーリーに不満がでず、サイドストーリー的なものしかできそうにない…
からなんですよね…

と世界観は…

猫耳人間はキャーティア人と名乗っていて、
３００億光年もかなたから、地球人と友好を結びたいと思い、とりあえずあそびにきちゃいました…
が、実は犬耳人間の三国同盟が先にアメリカに接触していて、
アメリカとしては我が国だけが！！の享受がなくなるのが困る！！
ただし三国同盟が表にでると、
銀河知性連盟、特にオルソニア人に三国同盟が処罰うける…等々。

三国同盟は神の様に導く＝裏で操るのが問題…
キャーティア人は、お友達になりましょう♪
お友達になって私達の星にも来て下さいね。
その為の助力はしたいです。
の違いらしい…

技術的には、地球はリアル現代レベル……が所々犬耳人間達の技術でアップしている。
犬耳人間はやはり星間光年レベル、
猫耳人間はその上…という感じだ。

外見は、猫耳人間達はぶっちゃけハァハァレベル。
…主人公の騎央…かわれやコノヤロウ…
が、その世界の若い男どもの総意でもあった…
猫耳人間のエリスを狙ってや、アシストロイドを狙ってや…
誘拐事件、パパラッチ、ストーカー等など…
表に出てないが、犬耳人間もハァハァレベルがいる。

（人材は誰もあんだけドンパチしてて死んでない…んだよな…）

さてカオルがスネークしに行こうとした時間枠は……

２０１６年２月１４日朝…

「…この軌道エレベーターを巡って現在、各国間の緊張が走っています。

繰り返します。本日軌道エレベーター近海にて振動が走り、
各国空母より偵察機が飛ぶ事態へと発展しました。
その為、この軌道エレベーターを巡って現在、各国間の緊張が走っています。

……あ、はい…はい。
只今情報が入りました。当方がキャーティア臨時大使館に問い合わせたところ、
軌道エレベーターの一時保管の為の移設を行う作業を開始したとの事です。

移動先は機密、現在国連も日本も受け取りにこず、
宙にういた存在の為、周辺に悪影響をおよぼしかねないとの解答がえられました」

（お～お、始まってるなぁ）

カオルは冬ながらあったかい沖縄から、幻影をかけ、一路国境ギリギリに置かれて、
沖縄からも見える一筋に天空まで伸びるガラスの塔…

赤道直下にない軌道エレベーターを目指して飛び立っていった。

この見えている軌道エレベーターは、
地球人類が自力で作ったのではなく、

キャーティアから『地球人類皆さん』への、クリスマス、正月プレゼントとして、
送られてきたものだ。
到底地球人類には手の及ばない…夢のある技術が使われている。

次第にガラスの塔の回りに、米粒のように海上に何かが見えてくる…

それがだんだん大きくなってくると、その上空を沢山の米粒が見え始めた。

そう、軌道エレベーター周囲には沢山の各国艦艇が、

自国の利権をえようと多数の艦艇を、派遣していたのである。
まず一番ちかい国日本を始めアメリカ、
中国、韓国、台湾、北朝鮮、ロシア、ＥＵ等々…
その数大小合わせて千二百隻近く…

約２ヶ月その軌道エレベーターの３ｋｍ外つまり公海上に駐留し警戒を行っていたのである。
互いに牽制しあわよくば取得する為に…
何しろ、どの政府とかも指定してない。
その言葉を拡大解釈として、我が国が！！
という事だった。

また派遣してない国であっても、
国交を結び軌道エレベーター等使わせてくれの打診等あった事も付け加えておく。

が…その日になるまでは、
アシストロイド達による海軍もどきが既に駐留していて、
特定の政府とかではなく、ほのぼのしていた。
現地派遣された軍はアシストロイドの愛くるしい銃を向けるのができず、
そんな状態が続いていたのだ。
上層部とは違って……

何しろ寸詰まりの船で帆船？みたいのもいれば、
寸詰まりの空母みたいのもいる。

その空母には甲板に寸詰まり飛行機が駐機していて、

アシストロイドがわたわたと乗ると、

機体から足が見えて、

てて〜

と駆け出し揚力でない力で空中に飛び出すしまつだ。

甲板をアシストロイド達が海水被りながら掃除をする。

そんな愛くるしいのを誰がうてようか！！

しかし振動のあった日に今までいたアシストロイド達が見えない為、前述の報道通りの事態に陥ったのである。

……

カオルがついてしばらくすると、

沖縄本島の方から三機の飛行物体が軌道エレベーターに向かって飛んできた。

その三機に対してアメリカ空軍機が無警告で空対空ミサイルを撃ち込む…

みごと着弾、爆発炎上し海に向かって墜落してく三機…

着水するとともに爆発がおき、盛大な水柱が上がり海水が付近に降り注いだ。

もちろんアメリカ空軍以外の各国はただぬぼーとしていた訳でない。

制止を聞かずに回収しようとヘリをと向かわす。と…
そこには巨大なアシストロイドの、
愛くるしい顔がみるも無惨に破壊されていたのが見えた……

各国がその墜落した巨大アシストロイドに気をとられてた隙に、
海中からシャンパンゴールドの葉巻が浮上し、空中に制止した。

キャーティア人のエリスが使う連絡宇宙挺、ルーロス改…
側面が開き大人数のメイドさんが海に飛び込んでいく。

カオルはその隙にとりつき同化すると…
船内では尻尾付き猫耳人間のエリスが、
愛くるしい声で各国艦艇に説明中であった。

「驚かせてすみません。
移動用クレーンが不幸な行き違いで撃墜されちゃたんで、これから手で動かします。
今の飛び込みはその為のものです。驚かないで下さいね」

カオルは同化が終わり離脱すると、
エリスの説明が終わりルーロス改は、さっさと水平線のかなたへ見えなくなってしまった。

（衝撃波なしにマッハ１０以上超えてるよ……
帰ったらすこし楽しみかもしれないなぁ）

カオルは魚に化けると海中に没する。

海の中の軌道エレベーターの基部は派手な電飾に飾られていた…
巨大なネオン看板もとりつけられ…おいでませ、と…
往年の風俗街の一歩手前であった…

周囲ではアシストロイド達の潜水艦がいて、
潜水艦ハッチから水中にも関わらず顔をだし、
［こちらてす］
［ゆうとうちます］
とプラカードを出しながらメイドさんを案内している。

潜っているメイドさんは、キャーティア謹製パワードスーツ…
顔面球体付き、重りで海中作業可能のスーツをきている。
勿論外見上は冥土服という特殊性。

主人公の騎央が水中に潜ってきた。

「皆さん大丈夫でしたか？」

『大丈夫です。一人も欠けてません』

「では……そろそろ引っ越しを開始します！」

約三百名程の人員が軌道エレベーターの周囲３，１４ｋｍを囲む…

『全員配置に着きました』

軌道エレベーターの基部に備え付けた持手を掴む…

「じゃあいきます。いっち、にの、さん」
あっさりと軌道エレベーターの基部は人力で持ち上がった。

この軌道エレベーター、完全な吊り下げ式で、構造物の質量の殆どすべてが、衛星軌道上にある。

あとは基部の重り部分だけ…も本体の方に吸収してる状態なので、人力による移動が可能…というわけだ。
今はあんまり重くないという非常識ぶり……
「皆さんの行き先はヘルメットのＨＵＤに表示されます。その指示に従って下さい」

〔作注…ＨＵＤ＝ヘッドアップディスプレイの略。
この場合はヘルメットに写した透化の情報…
わかりやすくいえば現代空戦ゲームの、ターゲットサイト等の事です〕

『ではテンポをとる。皆の物、音にあわせよ』

どおん、どおん
ティンパニの音が聞こえて、それにあわせて全員の足並みがそろって進み始める。

海面では波しぶきを上げながら５０ｋｍまで加速し進んでいく…
そのスピードは、簡易装甲服を兼ねる、キャーティアパワードスーツの力によるもので増幅されていた。

一方カオル…
（さて…あ、あれか）

アメリカ海軍潜水艦、ボーグシップ…

カオルは急いでとりつき同化し離脱した。

この潜水艦は、犬耳人間の手が加えられた人工知能による自立型魚雷発射ステーションというべきものだった。
空母から遠隔操作で作戦を行うものである。

カオルが離脱すると…
いきなり犬耳のコマンドを受け自爆し衝撃波が広がる。
内側からいくつも爆発がおき…

海底にしず……いや…突如として巨大なアシストロイド…
撃墜されたのとおんなじ大きさのが現れて、
みとん状の手で潜水艦をすくいあげると海面目指していく。
背中には今はなき巨大なマブチモーター、顔には水中メガネ、シュノーケールを装備していた。

海上にお届け物をした巨大アシストロイド、
守礼皇5号はアシストロイド潜水艦部隊と合流すると先導するように泳ぎ始めた。

犬耳の作戦としたら、今の自沈で、
「攻撃を受けた。未確認敵性体がいる!!対潜攻撃!!」
で、軌道エレベーターの移動場所にミサイルを撃ち込みまくって、
衝撃でメイドさん排除、
軌道エレベーターバランス崩して落とす…大惨事か、
または大惨事ならずとも退去させ移動を阻止。
もう触らせない＝関係悪化…

を狙っていた。
しかし、守礼皇がかえした為…なんにもできずに…
というわけだった。

カオルはアシストロイド潜水艦にとりつき同化し離脱すると、
本命の移動中である軌道エレベーターにとりついた。

全高３８千ｋｍ、直径１ｋｍ周囲３，１４ｋｍの巨大な特殊ガラスの塔だ。
そして、１０キロのカウンターウエイト…質量や慣性をコントロールしているもので構成されている。
二日目……
ガラスの塔動き始めてから約１２時間後…

海を割って海岸から陸上にあがってきた。
マスコミがフラッシュや投光機でその光景を映し出している。

三百名程の人達によって持ち運ばれてきたのだ。

興奮気味に中継しているマスコミが騒いでいる。
どの民放各局も報道特番を組み、それに釣られてＮＨＫも特番体制に、
海外からもキャーティア番が特番要請をし、ほぼ全世界的に注目していた。

砂浜から道路にさしかかり、幸いガードレールや並木林等なく、
持ち運んでいた中から数名が交通整理の為に離れる以外トラブルも

なく、
圧倒的質感を誇る軌道エレベーターは、
キャーティアの協力者モルフェノス財団が買った、
普天間基地のゲート前の土地に無事につき、

「え～と、右に一歩、前にニ歩進んで下さい。それでどんぴしゃです」
エリスが言うと騎央が、
「じゃあ動くよ～いち、にの、さん！はい右一歩、前に一、ニ歩！」
騎央の言葉通りにガラスの塔は動き、
感動とどよめきがおきる中、位置決めは終わり…

「じゃあ降ろします……ゆっくり、ゆっくり、ゆっくり…」
騎央の指示通り腰をかがめ…地面との間が指一本ほどになり…

「じゃあ着停させます……いち、にの、さん！」

その言葉通りに、全世界に放映されるなか、
軌道エレベーターは地面に振動もなく接地し、持手より手が離された。

こうして、人力による軌道エレベーターのお引越しは終了したのであった…

詰めかけたマスコミ対応に追われる騎央をバックに、
完全同化終了したカオルは離脱し、

「”世界扉”」

世界を渡る。

……

カオル報告

ルーロス改

ボーグシップ

ぬこ艦＝アシストロイド潜水艦

キャーティア製軌道エレベーター

第１１４話　またまた新たなる世界へ　投稿日２０１１０４２８（後書き）

作者「ゲストきゃら、あそびにいくヨ！のエリスたんです～」

エリス「キャーティア大使館上陸員のエリスといいます。よろしくお願いしますね」
ゆさり

ナギ少尉「が、がいこく産……」

作者「あ～平均乙」

イッシー「むむっっ胸がなんなのよ～！！つくりもんじゃないの！きぃぃーー」

エリス「きゃん…あ、そんなに…発情期じゃ…ない…あふ…んで…すから」

イッシー「それになによ！このネコミミと尻尾はっ！！
世の中の男の願望みたくして……えっ？」
もふもふ

エリス「くすぐったいですぅ」

もふもふ

イッシー「気持ちいい……」

作者「イッシー…諦めな…すべて本物だよ…」

イッシー「……っ！！」

ナギ少尉「異星人なの？」

エリス「はいっ！あそびにきました！！」

ナギ少尉「ところでその猫耳って？」

エリス「あ、副耳ですか？
私達猫から進化して人間になりましたので本物ですよ～」

ナギ少尉「あと発情期って…？」

エリス「え～と……まぁ……その……種族的習性なもので……
大体、私位の年齢になると…そうなるものです。
本当は初めてのを騎央さんと…だったのですが…」

デュレル「任務上、今回は問題があるから薬でお流れになったのさ」

作者「キャーティアシップの医師、デュレルさん。薬下さい」

デュレル「国交結べたらな」

エリス「……まぁ、お猿さんから進化した人と、私達のように猫から進化した人と、
いつかは子供沢山作りますから♪」

作者「そこに悪運紅葉がくわわ……」

作者瞬殺される。

ナギ少尉「え、えっと次回予告ね……次回あそびにいくヨ編２　大使館開設の日……
このサブタイトルでいい?? あ、死んでるか……
じゃあみんな一緒にぃ」

「「「「お楽しみにぃ～～」」」」だぜ」

第１１５話　あそびにいくヨ！編２　大使館開設の日　投稿日２０１１０４３０

「おはようございます。只今午前7時３０分を過ぎました。ごらんください。この大渋滞」

「高橋さん、すごいですね～普段そこは？」

「はい、普段は渋滞も発生しない一般国道です。では何が目的なのか聞いてみます」

と美人アナウンサーが手近な車に聞きにいく…

「すみませーんＴＢＳですが、取材よろしいでしょうか？」

「いいですよ」

「えっとどちらにいかれる予定なんです？」

「キャーティア大使館の開設記念式典にいくんですよ…で」

「「アシストロイド～」」

「を会いに行きたい…って子供達がね～」

「可愛いですものね～」

「ええ…けど間に合うか正直心配になって…
何時もはこんなに酷いんです？十分間で１００ｍしか動かなくって…」

「いつもはこんなに酷くはないんですよ～」

等街頭テレビが流している。

二日目の続き…

カオルは一休みしたあと、
この時間枠の、東京郊外の貸し倉庫のある一室に侵入する。
寝袋からもそもそ出てくる尻尾付き犬耳人間…スキンタイトな服をきていた。
（持ち帰りしたいなぁ……なんかふわっというか…耳が萌え上がるんだよね…
まりもちゃんやイッシーに犬耳、猫耳…ん～）
いけない想像をし始めた……

犬アシストロイドの軍団が起きてきた人物に対し、軍靴をならし陸軍式敬礼をする。
犬耳人間、リュンヌは頷きで答え、
「システム起動」
声と同時に倉庫中央に備えられたリング状の門に電源が入る。

二重のリングはそれぞれ違う方向へ回転し、リングの内側が放電し、真っ白い空間になる。
カオルはとりついて取得する。
このリングは一方通行の転送装置…犬の突入作戦に使われる。

「こ……これより作戦行動を開始します。
不慣れな指揮官ですがよろしくお願いいたします」

リュンヌは一人一人アシストロイド達を見渡している……

そして進行監視の為テレビをつけ始めた。

カオルはリングの同化が終わったので犬耳アシストロイドに取り付き始めた。

テレビは式典の生中継……
日本政府代表、沖縄県知事の挨拶をこなし粛々と退屈に進行していた。

画面が上空にスパンされ、
と同時にどよめきが起き始める。

上空からジリジリするほどゆっくり…
それでもかなりの速さで大気圏をゆっくりくぐり、拳大からフライパン、
テーブル、運動場まで広がり、画面からはみ出て辺りは宇宙船の影

に包まれた。

「そろそろよ…」

宇宙船から光の筋が演台まで伸び…

誰もいない演台上に1人の人影を生み出す。

『みなさん、こんにちわ！』

人影はみっしりとした重いふたつの水蜜桃をもったキャーティア人の美女だった。

地球人類にはシリコンの偽物か矯正下着などの補正がないかぎりありえない、

張りと大きさをもつふたつのふくらみを強調するように堂々と、

キャーティアシップの艦長クーネが挨拶をしてた。

「とらえた？」

操作してた犬アシストロイドが頷く…

「よし……、突入！」

なだらかな傾斜のついたタラップを駆け上がり犬アシストロイド達がゲートに突入する。

カオルも続いて飛び込む……

カオルは分子に分解され…空間を移動し、大広間に出現し実体化する。

すぐさまキャーティアシップと同化し始める。

先に突入してた犬アシストロイド達は、手にパルスレーザーガンをもち数体ずつにわかれ散解する。

続いてリュンヌが実体化してきた。

予想してなかった部屋の広さに戸惑いながら、背中にまわしたレーザーガンを手にとっている。

急に広大な部屋の照明が落ちる。

『無駄な抵抗はやめてください』

幼い感じの声が響く…

『艦長の転送波動域から、こちらへの進入ルートを確保する手際、その後の作戦展開共に素晴らしいものがありますが、我々はすでに対策してます。武装を解除して投降して下さい』

「パターンX！」

次の瞬間犬アシストロイドが腰から物をつかみ投擲する。

周囲の空間が真っ白に光り別の青白い力場が現れてひび割れた。

投擲したのは閃光手榴弾と、

エネルギー障壁を破壊する指向性波動爆弾である。

犬アシストロイドは４体１組で突撃し、背中に背負った簡易塹壕を前にだし、

組み合わせ半球状の巨大な盾を形成する。

そこへ天井から自動防衛システムが降りてきて、攻撃をするが巨大な盾に防がれる。
リュンヌがヘルメットをかぶり、
高く跳躍をし自動防衛システムに後ろ回し蹴りを決める。

かかとから刈るように決めた力に対抗できず、
自動防衛システムは吹っ飛び横壁にぶつかり大破した。

着地するとともにレーザーライフルのトリガーを絞り、
レーザーを扉に向け発射する。

扉に当たって消失するレーザー…
貫通はできないが扉から進入はできなくなる。

「許可します」
犬アシストロイドの1隊が銃口に羽根付きロケットを装備し、扉の両脇に向け発射する。
まっすぐ着弾し、羽根がアーム状になり壁から本体を引き剥がす。
本体とアームの間に超小型の反応弾による数十万度の熱量が発生し、
それが本体奥にある絶対零度物質を展開させ、
瞬時に一転してマイナスになる。

本体もアームも霜がはしり…バラバラになる。
金属疲労を狙った構造物破壊ロケットだった。

だが……命中した箇所は僅かに破壊されただけであった…

それでもよかったのだろう、
工作部隊が液体ナノマシンを注射型ランチャーで撃ち込む。

『無駄です』

突如として、金属球が光の収束とともに転がっていた。
『ここの液化配線は順路をかえ壁の外側を走っています。
あなた達の装備ではそこまで到達することは不可能です。
またシステムは現在全て区間独立による休眠状態を保持しており、
相互関与はできなくなっております……
艦長も完全転送で向こう側にいますから、
ここには人質になる情報はありませんよ』

リュンヌは動きをとめた…
『あなた達の計画は、既に手元にきていて、対策は万全に取っています……
事前に判明していなければ、私達のまけでした。
ですが、事前にことは判明し、万全の対策をとってます……
どうか、投降して下さい』

リュンヌは既に攻撃体制をといて考えているようだった…

数秒の躊躇のあと、突如としてその金属球を2本のパルスレーザーが貫く。
「えっ！？」

犬アシストロイドが発砲をしていたのだ…主人であるリュンヌの命令無しに…

あり得ない話であった。

「ニルメア？アシストロイドの全指揮権は私に…」

と奥の方に隠れていた犬アシストロイドが2体進み出てきて…
頭部が四散すると片方はタイマーが表示されてるディスプレイ、
片方は明らかに対艦反応弾の弾頭が見えた。
『この2体はアシストロイドに偽装した爆弾なんだものぉ♪』

「ニルメア……あなた！」

悲鳴のような叫び声をあげよろめき、壁に寄りかかる…
『大ぁい丈夫ぅ、あなたたちの死は無駄にしないわ、
そう、二階級特進、
リュンヌ、あなたの遺影は私が選んであげるわネ！
ああ、そうそう、あなたのお姉さんは死んだわ！
あなたと同じように私を信用してね！きゃあはははははは！
あ～楽しい、リュンヌ、リュンヌ！
あなたの顔がみえるわ、愕然としているわね。
きゃあはははは！あ、俯いた？ねぇ、悔しい？悔しい？
アヒャハハハハ！
今からスイッチおすわ、
一微少周期で爆発するから顔をあげてちょうだい……
最後のあなたの顔をみたいのよ！
それじゃあ……いくわよ……せえ……きゃああっ！』

「……え？…！」
覚悟を決めてた表情のリュンヌが疑問の声をだした後…
ニルメアとの通信が途絶えた為状況が掴めなくなった。

今爆弾を抑えにいけば監視されてた場合すぐに爆発するだろう…
じれったい時間が過ぎる。

そして……
『リュンヌ……リュンヌ曹長』
別人からの呼びかけだ…
『起爆装置は無効にした……君は誠に言いにくいが投降しろ。キャーティア側に話はつけてある。生きて虜囚の辱めを受けるのは辛かろうが』
「お姉様」

スピーカーから声がとまる。
「お姉様すね？」

『い、いや、違う、わたしは…』
？『あーら。よくわかったわねぇ』
別人の声が流れた。『ぐ、軍曹！』
軍『なーにつっぱらかってるの中尉。単に私達がこの格好してるのは、襲撃のインパクトを増やすだけでしょうが…それとも何ぃ？…妹さんを放り出すの？』

中『い、いや、だが、しかし…』
軍『いいじゃないの。妹を思って姉が駆けつける。いい話じゃないの～』
「やっぱりそうなんですね、お姉様」
既に涙をながしている。
死んだと聞かされてた姉が駆けつけたのだ…
『そうだ、私だ、リュンヌ。お前の姉だ……すまない』

「いいえ、リュンヌは嬉しいですお姉様」
『では、私のいうことを聞いてくれるか？』
「もちろんです、お姉様」

『よし！撤収だ！』

「キャーティアの方、投降します！！」

『…投降してくれてうれしいです』

「あと大至急センサーを稼動してください。多分まだ爆弾があるはずです」

『わかりました。部屋内部に入ります』

扉が開き部屋に警備スタッフが突入してきた。
武装解除とともに、
まずは一個の反応弾が廃棄転送される。

「ありました！」
「こっちもです！」

犬アシストロイドを調査してるとやはり見つけ出し…

「廃棄転送！！」

転送すると同時に……

ドウ！！

「きゃあああああ」

「うわぁ」

「くっ」

振動とともに多数の悲鳴が流れる…

「なに？どうしたの？」

『廃棄転送処理中に爆発がおこりました！！システムに重大なエラー！！

エンジンより火災発生！！

緊急措置を行います！！』

「承認する」

『了解！！』

メルウィン、この艦の副長が、艦のモニターを出すと少し険しい表情をしたが、

振動が少なくなり、表情が和らいだ。

リュ「大丈夫なのです？」

メル「かろうじて…かしら…皮肉にも燃料が足りなくなって、最初の計画通りになっちゃうけど……」

武装解除される最中だった犬耳は途中で止まってたが…

メル「では、少し落ち着くまで個室に軟禁させてもらいます」

リュ「わかりました」

と犬耳アシストロイドとともに転送ルームをでていった。

メルウィン達も続いて出ていく…

艦は着水前に復旧、燃料使いすぎて自力精製、

定数確保まで大気圏外にでれなくなってしまった。

四日目…終わりぎわ

カオルはジワジワとキャーティアシップと同化して、

丸2日かけてやっとこさ掌握できた。

複雑すぎるからだ。

（しっかし…まぁ……）

キャーティア人の技術はすごいものである。

科学を極め、これ以上発展する要素がなく、衰退していく道を辿る…

といった意味もわかる。

再現できれば御の字だろう。とりついたキャーティアシップの中には独立長距離中規模調査船として、

約三万人のキャーティア人が町を作って生活している。

カオルはクーネ艦長の居室に進入した。
強化パワードスーツの役割をする鈴をゲットする為だ。

「ふにゃ～～す～す～」

二つの水蜜桃が重力に負けずに上に張っている。

触ってみたい…衝動を起きながら、
色々な機能をもつ鈴を同化し、取得した。
銀色に黒いラインがはいった艦長用の鈴だ…

「ふにぃ～～」

「！！」
抱き着かれた。

「にゃ～♪」

引き寄せられ抱きまくら状態に…
顔が胸の谷間に……
（く、くるし……）

抵抗しようにも起きたらヤバい…

カオルはベットに同化して肉体ハグから抜け出した。

（あぶなかったぁ……）

さて、この2日間でキャーティアシップの交流はかなり違ってきた。
地球人を抽選で当たった方を毎日2千人ずつ船に招いてキャーティアシップの見学会を行い、
大使館のほうでもアシストロイドとの触れ合い広場…というのを開設したからだ。

（まぁ…ちょい寄ってくかな？）
五日目……

大使館の触れ合い広場では…
［いらつしやいませ］
［あそひましよう］

とプラカードで来訪者をもてなしている、
二頭身のアシストロイド達がいた。

額には大１９などとマーキングされている。

プラカードは回転する度に新しい文字、
まぁ発言がかかれていて楽しいものがある♪

子供達、若い女性に人気いっぱいのアシストロイド達、
彼らと触れ合う為に沢山の人が訪れ、
また大使館とキャーティアシップ、を目的とした取材村、
お客狙いの店舗が建ちはじめたからだ。

（いつかは成果みのるといいねエリス）
「”世界扉”」

カオルは世界を渡る

……
カオル報告

キャーティアシップ
キャーティアシップ搭載技術全般、
猫アシストロイド

犬アシストロイド＋装備
空間転送装置
剛柔スーツ

第１１５話　あそびにいくヨ！編２　大使館開設の日　投稿日２０１１０４３０

エリス「また後書きにとうじょうしちゃいました♪」

作者「いらっしゃい～」

エリス「今回は私でないんですね……」

作者「ん～まぁそうだねぇ。大使館のシーンでも出てないし」

エリス「でも犬の方は活躍されたみたいですね～」

作者「そのあとリリースしちゃうんだよね」

エリス「ええ、かわいそうでしたので…」

作者「で犬耳人間のかたの姉妹で…と」

ナギ少尉「ね～エリスさん、質問いい？」

エリス「あ、はい。どうぞ～」

ナギ少尉「艦長さんが抱き引き寄せた…
シーンがあったよね？そういうもんなの？」

エリス「種族的習性ですね～男女問わず寝る時には抱き着く等しますので」

ナギ少尉「えっと……エッチな事とは別に？」

エリス「あ…は、はい。それとは別ですね。普通の事ですよ～」

作者「猫鍋とかあるもんね～」

ナギ少尉「なに？それ」

作者「ああ、これだよ」
ＹｏｕＴｕｂｅで猫鍋検索し、それを見せる。

ナギ少尉「きゃわいい～」

エリス「保育園の昼寝カゴですね～」

ナギ少尉「ね、ね、あとでみにいっていい？」

エリス「いいですよ～」

と女子が盛り上がりはじめたので…

作者「え～っと……次回予告はあそびにいくヨ！からの帰還です。
お楽しみに」

第１１６話　あそびにいくヨ！からの帰還　投稿日２０１１０５０２

２００１年１０月１８日昼頃…

世界扉が開き、カオルが出てくる。

［マスターおかえりなさい］

「ただいま」

［……あれ？今回人材はいないの？］

いつもならハンガーでシェルターだしたり、
医療室に向かうはずがデスクに向かったのに１１号が疑問もって問い掛ける。

「ああ、今回いった世界は派手なドンパチするも人死にがあんまりなくってさ……
段ボール積めとか、無力化はあるんだが…」

（そういえば裏側であったような……
けど非合法職員のほうだしなぁ…）

［となると技術なの？］

「ああ、鯖に入れるからちとまってな…」

と鯖に同化し、情報をイレ込む。

途端に挙動不審になり…

［マスター！！凄いよこれ！！研究許可もらえる？］

「ああ……いいが…」

［いつかはうちらでつくる！！］

「いつかは？ってやっぱり直ぐには？」

［うん…できないね…残念ながら、古代技術をもっても別の進化形態だから、
研究すればいつかは…だけど、
長いスパンがかかるよ］

「ふむ……やはりそうか…」

［現物ができれば加速はできると思うけど…］

「現物ね…」

手近の鉄板をとり、同化、キャーティアシップの外装材を精製する。

ちっこいから一分位ですんだ。

チルソナイト９１２２と、硬化テクタイトの複合装甲だ。

「ほい」

１１号受け取ると検査しまくって…

レーザートーチを取り出した。

ジジジジ

焼き切れない。

［やっぱりマスター、チートだよ…堅すぎ……

研究用で貰っておくね］

キャーティア位までくると技術形態やらなにやらで別の進化をとげ、

要はすぐには作製できない、研究が必要なレベルになる。

という事だった…

カオルはなんとなくで構成できる。

プラントは完全理解しないと不可…

その違いだった。

「ん～となると…軌道エレベーターは？今回入手した」

［……だい……うん大丈夫だね。
ある程度は作製可能、
けどカウンターウエイト部はマスターの調整必要だね］

「あの１０ｋｍのところか…の、どこら辺？」

［利用可能技術だと、この設計で…接地質量がゼロにはできないから…
その部分のコントロールのところ］

「なる…となると最後のしめね、……作製にはどの位かかりそう？」

［……注文うけて三ヶ月だね］

「ＯＯのよりかは早いレベルか…」

［あっちは環リングのおかげで、大規模になるからね…
どうしても時間がかかるの］

「だよな…災害も怖そうだし…
その点キャーティアのは考えたものだよ…
この特殊ガラス、重大事故がおき、パージすると昇華し気体になるしさ、
エレベーター部分がドーム形成して軟着陸するし」

［あ～ＯＲＳリングや、中心ワイヤー保護の為のオートパージ機能だよね…
燃え尽きず、地上に降り注ぐ鉄板…こわいね～」

「だな…パージ鉄板にトレース機能ついて、住宅密集地に落ちないように計算してても、
空気抵抗で衝突して、進行方向が変わり、
一つでもその現象があるとドミノ形式で連鎖的に…」

［うん。こわいよね～
その点キャーティアのは、重要物体がカウンターウエイトとエレベーター板と基部だけだし、
その部分だけ保護すれば再建可能…
一からでも作れるってのがね」

そんなこんなで、キャーティア製軌道エレベーターだけは、
キャーティアでは、はるかに遅れた技術により建築可能。

が、カオルによる要調整が必要との事だ……

ちなみにＯＯのはＯＲＳありなので、それ程天高く作る必要がない…という利点はある。
キャーティアの軌道エレベーターが、３８０００ｋｍの高さですんでるのが異常なだけであった…

［あ、注文するなら先に無重力工場が必要だね］

「あ、そうか…」

地球上では作れず、ラグランジュポイントでの作製後、移動の形になる。
地球上で作るのはカウンターウエイトが質量を司る物である以上、不可能だった。

「ま、後々か…な？後は…俺自身が作るしかないか…」

（キャーティアシップはどれ程時間がかかるだろう？？
鉄板で一分だから…想像できないな…
キャーティアシップはしばらく諦めかな？）

取り付き変化期間で諦めたようだ…

（ま、構成技術等おいしいのはたんとあるんだけどね…）

例えば３００億光年を三ヶ月でワープ旅行可能とか、

経済活動範囲は基本は２０万光年範囲、
あとは中継ステーション技術とか…

（あ、……ルーロスや鈴位なら……早めにできるかな？）

という事で作製してみる。
鉄板をもち…まずは艦長用の鈴を作ってみる…
２０分後…どうやらできたようだ。

携帯万能工作機でもある艦長用の鈴である。

次にルーロス改を作って見ようとする。

同サイズ材料を集めて……

［マスター時間かかってるね…］

［１１号、マスター何作ってるの？］

［ＵＦＯらしいよ…これ］

［ふえ～…ますます魑魅魍魎になるなぁ…そのうち宇宙人作りだしたりして…］

［あ、かなり汗かいてる］

［ふくべしふくべし］

［浣腸してみようか？……アレー］

ズルズル

等言われてる位時間がかかっていた。

（こりゃ難儀だ）

夜遅くなり…ルーロス改を作るのに8時間かかって…

「できたぁぁぁぁ」

［お疲れ様マスター…難産でしたね］

「ああ、お腹痛めたかいあったよ…」

ルーロス改が完成する。

（このサイズでこれだけ時間かかるとはなぁ……）

［ところで、これ動力とか見かけないけど…どう動くの？］

「……さあ？」

［動く？］

「現物コピーだから、多分……動かなかったら悲しいわ…さて…」

カオル乗り込もうとするが……

「入れないな…」

ハッチが見当たらないのであった。

しかたがないので、同化し、船内にはいるけど、起動しない…

「イロウル」

システムに侵入し、起動方法を探す。

（あ、鈴が必要なんだ…）

起動方法がわかったので、鈴を装着しようとすると……

鈴からスルッと紐が伸び、カオルの首に巻き付く…

さながら首輪のように。

リン

と鈴を軽く弾くと…

空中に二等身の熊だか猫だかわからない物があらわれた。

「初期セットアップ」

「はいでし、型番ＧＰＧＡ－１１０１連絡挺中枢端末起動しますでし。
名前を付けてくださいでし」

「ルーロス」

「了解しまちた。ルーロス起動しますでち」

葉巻がたのＵＦＯ、ルーロスが若干振るえ、初期セットアップにはいる。

「初期セットアップ終了ちまちたでし。
各種異常なちでし」

（ふむ…夜遅いからなぁ……）

「じゃあ、ハンガーで待機。また次回呼び出すよ」

「はいでち。ルーロス待機しますでち」

と空中投影は消え、すすす～と、
待機出来そうなところへゆっくり進んでいく。

（あと水素関係できてたよな？）

という事でまずは水素エンジンコピー車、トヨタＧＰ－２０１を作りあげる。
最高速度２５０ｋｍの５人乗り一般大衆車だ。
一回の給水素で１０００ｋｍはし…るか？
とりあえずリッター５５ｋｍの性能で、
超低温液体タンク容量が３０リットルというとこ。

（そういえば……６１式戦車に使えないかな？）

バッテリーだと充電に時間かかる。
また補給しに戻る必要もある。
かといって…前線には補給基地をそうそうに作る事もできないだろう。

なので専用トレーラーさえあれば補給できる水素は良いかなぁ？とも考えていた。
モンスターマシンに水素エンジン……

６１式改を作製した。
（明日試運転たのんでおこ…）

最後に鈴…
艦長クラスの鈴は…
物体の原子構成をいじったり、空気中の元素を固定したり、

武器にもなる携帯万能機…のはず。

（ふ～んおもしろいな…）

首の鈴を弄り空間に投影した棚を、横に動かしたり縦に動かしたり…

厳密には虚数空間とは違うが、
のような収納機能もある。

ディスクの上においてあるペンに網膜投射のターゲットサイトを合わせ…

（収納）（実行）

と思うと…光とともに空間内の棚に収納された。

（おもれ～）

……

［マスター、今……何時？］

（あ、やば…）

網膜投影スクリーンの機能を切替ると、時計が３時を過ぎていた、

寝るために自室へと向かう。

２００１年１０月１９日

ＯＯ組が全員医療カプセルからでてきた。

結果からいうと

ハワードはＣ－０１入り、

絹江さんは広報担当官、

ニール・ディランディは……ビックネームに配属になった。

そして…昨日出来上がったばっかりの水素自動車を運転し、
帝都城に向かっていた。

ナンバー？異世界軍所有車を示すフラッグを付けてるが、
帝国のナンバーは間に合わなかった。

試運転をかね快調に飛ばしてる。

そして帝都城につき、駐車スペースに車両を回す。

衛兵達がもの珍しそうに見ていたのを後ろ目に、
城内に入り、会議室へと進む。

結婚式の前日につき、
打ち合わせの為に登城した。

（3人とか……）

前世でだと重婚すら考えた事もなかった。
彼女らを幸せにする…よりいっそうちかって部屋の扉をくぐった……

……

帰り道…
カオルは疲れ果て、自動運転で走行させてた……

……

カオル報告

疲れました…

第１１６話　あそびにいくヨ！からの帰還　投稿日２０１１０５０２（後書き）

ナギ少尉「あらためてチートぶりがでたわねぇ…」

作者「だな…」

ナギ少尉「ところでルーロスの動力ってなに？」

作者「……」

ナギ少尉「ねぇ作者～」

作者「理解できない推進装置っう事で…」

ナギ少尉「え～」

作者「だってさ…地球から土星まで半日以下でいくんだよ…通常推進でさ」

ナギ少尉「え～と……」

作者「超空間ジャンプなんか１０分で…」

ナギ少尉「重引力があるところで？」

作者「そうそう」

ナギ少尉「キャーティア～」

作者「まぁだから…自分自身も理解不能だから、
コピーは可でもそこから派生は難しい…つう制限はある…かな。
けどまぁちまちま技術はもらうつもりだね」

ナギ少尉「が鈴？」

作者「も、あるけどさ」

ナギ少尉「…成る程ね…
さて次回はいよいよ人生の拘束、結婚式と、何か忘れているのが登場。
彼女がいないと、タケルちゃんぽいされるから割り込んだと噂…
次回　結婚、そして……　お楽しみにぃ」

作者「あはははは…暴露されちったよ……ｏｒｚ」

第１１７話　結婚、そして……　投稿日２０１１０５０４

２００１年１０月２０日…
朝から忙しくなった…そう結婚式の為だ。
しかも重婚制度適用１号。

全国的に放送され、民需にやっと力が入いった街中の街頭テレビでは、
４名の合同重婚結婚式が流れる。

そして誓いの接吻…
この日でもって、
石橋屡伊は、渚屡伊に…
神宮寺まりもは渚まりもに…

煌武院は姓は代わらずに…の形になった。

そして初夜４人とともに過ごす…

２００１年１０月２１日朝

帝都城の客間から帰ってきて、
［マスターおめでとう♪］［おめ～］［赤ちゃんＰＬＺ］
［早く孕ませ］［おめでとう］［いよ!すけこまし］［おめでとうっす］
コバッタ達に迎えられた。

「おう、ありがとうなぁ～」
［さ、みんな仕事にもどる…とマスター部屋なんだけど…こう移動したから］
俺の部屋の向かい側及び両隣にまりもちゃん、屡伊、殿下の部屋となった。
俺の部屋は４Ｐも可能なようにキングサイズベットなど…
「手回ししすぎだろ…」
［僕も赤ちゃん見たいし～］
「エルちゃんいるだろ」
［マスターの赤ちゃんが良いの～］
「……」
（まぁ殿下はこっちに来たらになるか……）
［あ、そうそう、呼び出し来てるよ副司令から］
「ん？わかった…いってくるわ」
……
（執務入るの久々だな……）
と執務室に入室する。

「結婚おめでとう。とうとう将軍をも動かせる立場になったわね」

「そんな事考えてもないですよ…で用件はなんです？」

「あなたからもらったＣＰＵ利用して００ユニットができたんだけど…ね」

「おめでとうございます」

「めでたくないのよ…肝心の思考回路がうまくいかなくて……ず～～っと難航中なのよ」

「どんな感じで？」

「来ればわかるわ……」

ついていった先には、一人の女性がいた。

「これが００ユニットよ…起動して頂戴」

起動した…とおもうが…

「……殺してやる」

（ん？）

「……皆殺しに、してやる」

「どう反応は？」

ふるふる振って…

「……だめです」

「ま、こんな調子なのよね…で…ＢＥＴＡ」

「ＢＥＴＡっ！敵だっ！！」

苦しそうに頭を押さえ…

「殺す……殺す……殺してやる！！皆殺しにしてやるっ！！」

（ふむ）

「あああぁっ！！ＢＥＴＡッー殺してやるっ！！殺す、殺すぅ」

「こんな状態になって落ち着くまで時間がかかるのよ」

「私が、殺す……ＢＥＴＡ、殺すっ！！」

「あなたの力でなんとかなる？」

「ま、やってみましょう……

とりあえずまずは固定しないと接触すら……」

「ま、そうね…やっていいわよ」

と奥に固定用ベットがあった。

暴れる００ユニットをベットに固定して、手足も固定する。

「さて……イロウル！！」

同化し…身体を調査し始める。

（……ハード面は大丈夫か…だとすると…）

「アルミサエル」

（ああ、やっぱり…）

思考の渦が襲いかかる。

地下にある薄暗いホールの中、

「大丈夫だ、オレが守るから」

と寄り添う人の少年…

顔がよくは見えない。

ホールの中にいた人がまた一人また一人つれてかれ…

帰ってこれない。

そして最後の二人になり……

「うおおおー！！純夏を離せー！！」

しかしあっさり捕まり…

「純夏に…げ…ぎ…ぎゃあ……」

肩から真っ二つに引き裂かれ、事切れる少年…

（タケルつうのか…）

それをバリバリ食う兵士級…

（ここいらで精神が壊れちゃったんだな……）

純夏はそれをショックで眺めていた。
食べ終わった兵士級に連れてかれ…
その先には触手の群れがある部屋だった。
触手に捕まり、服が裂かれ、真っ裸になる。

うまれたままの姿で、変な溶液に浸しれ、
拘束され、触手が穴という穴に入ってきて蹂躙され…
「いやだ…いやだ…」
（タケルちゃんと以外エッチしたくない…か…ＢＥＴＡとは、じゃ無くなったんだな…）

「やめて……あふ」
触手が体中をしらべあげどこがいいのか反応を調べているようだった。
（身体が勝手に反応する……か…）

そして心は…凌辱を喜んで受けはじめ…
「タケルちゃん助けてぇ！」
と叫びながら快楽に悶え始め…

快楽を与えすぎて、ショックで心臓が止まっても、
強制的に生き返らせ、悪魔のような実験は続き…

鑑のこころは自ら望んで、汚辱を受けはじめるようになり…

肉体改造され…人間の身体でなくなり、
そして…

身体から快楽に関係ない箇所は切り取られ、
最終的には脳髄だけになってしまった。

それが目の前のロボットでもある、また少女でもある精神を、崩壊させていたのだ。

（ふむ……となると、ここはこうしてっと…）
ほつれた糸を繋げ治し…

リアルに戻ってきた。

「終わりましたよ」

目の前にいる００ユニットいや、鑑純夏か…は精神繋げなおし等で、自閉モードに陥ってた。が安定はしている。

「成る程…一段落ついた…かしら？
次の起動が楽しみね…霞、頼むわ」

「はい」

Ｔ－８５０に抱えられ、純夏は浄化装置のある部屋へと運ばれてゆく。

「まぁ、明日には結果がわかるとおもいますよ。精神面では安定してますから…」

「ところで何が００ユニットを、ああいった事にさせてたの？
機能は万全だったのよね？」

「アクセスしてわかったんですが、元は確かシリンダーにいた脳髄だけの人ですよね？
…鑑純夏という…」

「ええ…そうよ」

「何故脳髄だけで、生きていたかわかります？」

「……実験？」

「ご明答……覗いた結果からすると、
人間をどう生きさせるか？みたいですね……
まぁその結果精神が……いくら適性があってもでしたよ。
俺がいなければ…」

「……でもなにがそこまで？」

「副司令、快楽感じた事あります？」

「そうね…いけ好かないやつを捩じ伏せた時や、研究成果がでた時とか快感よ」

「……いや、女としての快感です」

「……」

赤くなりはじめた。

「まぁ…想像できたと思いますが、それがずーっと……永遠に…続くとしたら？」

「え？……まさか…」

「ええ…3か月間…従順になるように、ずーっとあたえてましたね」

「……それって…死亡するわよ」

「はい。彼女は死にました…が生き返らせ、また……」

顔色が悪くなってくる副司令。

「でそのうちに肉体的でなく、神経に直接快感をおくるようになり…」

「最終的に脳随だけになり生かされた……のね」

「ええ、いきたままそぎおとしですね」

「ふう……聞かなきゃよかったかしら？……ま、わかったわ。ありがとうね」

「じゃ、しつれ……」

戻ろうとすると、服を引っ張られとめられた。

「ん？」

霞ちゃんに問い掛ける。

「ロックオンさんに…渡して下さい」

とアクセサリーを渡される。

「これは？」

「ロックオンさんにお返しです」

「ああ、わかった。渡しておくよ」

「おねがいします……」

その日の夜…
＝ジオフロント司令室＝

作戦地域の拡大により新設された部屋から…指令をくだす。

「第一ミサイル艦隊攻撃開始」

ビックトレーミサイルバージョンの、全２１００発のトマホークが、セルより撃ち出される。

目標……鉄原ハイブ周辺地域。

３０秒後…
「第二セル射出されました」

そのまた３０秒後。
「第三セル射出されました。
間もなく着弾予定、第一射目迎撃されつつあります。
消失率５０％…６０％…７０％…８０％…９０％…着弾率０，１％です」

（２発だけか…）

「第二射目、迎撃中、消失率８０％…９０％…着弾率０，１５％」

（一発増えたか…）

「第三射目着弾率０，１％…第四射目着弾率０，２％…第五射目着弾率０，１５％」

さすがに一射毎に２１００発のミサイルの全弾迎撃は難しかったといえる結果に、
わずかながら口は緩んでた。

時間はかかるが、圧倒的物量ならそれを越える物量で対抗する。
（ん～…さらに１０隻作ればいいかな？
そしたらもうちょい到達率あがりそうだなぁ…）

じわじわとあがったり、また下がったり、到達できなかったりの繰り返しを行い…
到達率が一桁にあがったのが攻撃開始から約１０時間後、
日付が１０月２２日になって午前中になった時であった。

「お、あがったか。よしよし…このままミサイルどんどん撃ち込め」

この頃には迎撃率も読み上げは行わず。オペレーター達も三交替の通常勤務にもどっていた。
何しろ休む事なくトマホークが撃ちつづけられ、
既に１０００射目を越えていてる…

ヤドカリ達ならともかく、生身の人間には…疲れが蓄積するので、到達率が激変する場合のみ、報告するように変えてる。

そして、１%の、２１発が迎撃をされずに撃ち込まれ…
その綻びは徐々に広がり……

その約３時間後には５０発着弾確認…

その約３時間後には１００発の着弾確認…

さらに約４時間後…３０%の着弾率を越えた。
ハイブ周辺地域に６３０発のミサイルが到達する事になった。

「グリッド変更、未着弾率の高いところを狙え」

一時的に着弾率は下がるもののじわじわと上がり……

約２時間後には…待望の報告が入った。
「佐渡島反応炉より入電、あ号目標より救援部隊送れとの事」

「二万規模送ると伝えろ」

程なく、

「増援規模確認、総数３８万規模、最終到着日時１０月２６日の模様」

と待望の情報が寄せられた。

「３８万か…すぐに飽和状態になるよな？」

［だね…ほっとくと５日位で１５万規模の侵行が予測されるよ］

「となると２６日か、２７日か……参加部隊に通達しとくか…」

そして、約２時間後…着弾率が５０％越え…

更に約２時間後…

「３６１２射目迎撃率０％…全弾着弾です！！続いて３６１３射目…迎撃率０％…全弾着弾！！」

「やっとか…うし、エアロスタット飛ばして観測射撃に移行」

ビックトレーミサイルバージョンから飛びたち、

程なく迎撃されずにエアロスタットが鉄原ハイブ周辺地域の観測にはいる。

そのデーターをもとに残存ＢＥＴＡの駆逐にトマホークが正確に撃ち込まれ…

約２時間後…

鉄原ハイブ周辺では地上にＢＥＴＡの姿が無くなっていた……
累計…７８１２４６発のトマホークがぶち込まれた。

なお、その間司令室に詰めていたわけではない。

基地の異世界軍エリアから離れられないものの、
戦力強化に勤めてはいた。

戦闘開始の１５時間頃…
６１戦車改の性能に満足したので、
フレームを流用した対戦車級以下用のをできないかな?とも思いはじめていた。

（ふむ…）

この世界では対空戦車が対小型ＢＥＴＡ用に活躍はしている。

ただやはり展開が遅く予測進路外になると被害が甚大になる等、の問題が含まれていた。
そこで戦術機が高機動性をいかし……

が、そこで６１式戦車改の高機動性、高量産の、基本フレームを流用した…
装甲の生産は除外しての条件だが…を作ってもいいんではないか?

と思い始める。

画面上に呼び出した、６１式戦車改の砲塔を撤去。

２０ｍｍ機銃砲塔と２０ｍｍ機関銃、
車内にてターゲット操作。

の形を整えてみました。
（とりあえず試乗と…テストか…）
６１式軽戦車…試作機を注文する。

２８時間頃…ビックトレー砲艦仕様の１０隻目が最終調整して出来上がり、
第一打撃艦隊として攻略作戦に参加する為に、
佐渡島基地へと津軽海峡周りで進軍する。

そして…日付は、
２００１年１０月２３日…
気分転換に地上に向かう。

……
カオル報告

鉄原ハイブ攻略準備中です。

ちと試作機つくってみました。

第１１７話　結婚、そして……　投稿日２０１１０５０４（後書き）

ナギ少尉「ね～初夜の様子これですましちゃうの」

作者「……１８禁の内容まで発展したから、その部分削除しました」

ナギ少尉「え～」

作者「あんな事こんな事…まぁ何処までいいか考えはじめて……
あ、やべ～なぁ……で…」

ナギ少尉「例えば？」

作者「え～……後書きで１８禁にさしちゃうんかよ！！いわすきか
！」

ナギ少尉「えへへ」

作者「だから初夜の内容は禁止な」

ナギ少尉「…で、鑑ちゃんが出てきたね～」

作者「ギリギリな～」

ナギ少尉「でも本編だと２２日スルーしているみたいだけど？」

作者「地下にこもってるからね。地上の事はわからんさ」

ナギ少尉「という事は？」

作者「やっと武ちゃん登場～♪」

ナギ少尉「けど……やっぱり本編関連つけて、ここまででないのって…」

作者「ゼロ魔ＳＳでは当たり前だぞ～」

ナギ少尉「…そういえば、おり主からみだと…
大概が初回あたりだよね～」

作者「だなぁ…さてどう驚くか？」

ナギ少尉「さて、次回はいよいよ…たけるちゃん登場！！タイトルはそのまま、お楽しみにぃ」

第１１８話　タケルちゃん登場　投稿日２０１１０５０６　修正１

２００１年１０月２２日
ｓｉｄｅ～タケル～

「つぅ」
武は薄目を開けて時計を見た……
つもりだったが、そこに時計は存在しなかった。
部屋の配置を思い返して、天井近くの壁掛け時計を見る。

「こ、ここは…戻ってきたのか??」

暫くぶりだが覚えている自分の部屋…
ベッドに机にコンポにポスター何時も通り…
冥夜も……、

（冥夜……？）

「う……いつつつ…」

記憶の流入といえるのだろうか…本来体験した筈のない記憶も入ってくる。

（……やはり……もどって来たのか？）

タケルは意を決してカーテンを開けた。

「あは……ははは……戻ってきた……戻ってきたぞー！！うぉぉ

おぉっ！！」

そこにはお隣りの純夏の家に突っ込んで半壊している撃震がいた。

「はぁ…はぁ…はぁ……今回こそは今回こそはっ！！」

まりもちゃん、純夏、冥夜、たま、美琴、彩峰、委員長……そして伊隅隊長、水月先任……

顔がどんどん思い浮かぶ…そして最後も…

「絶対にしなせるものか！！！」

タケルは決意をこめ絶叫した……

３０分位叫んでただろうか……

（行動しなきゃな……っと…証拠をまずは持ってかないと…）

３ＷＡＹバック、ボストンバックをだし、その中にゲームガイ、ＭＤ等など証拠になりそうな私物を詰め込んでいった。

この部屋は廃墟になる……

なので自重はしない。

「おもいか……」

ボストンバックがビキビキいき始めたので…

（と、カートは……あった）

カートの上に載せる事にする。

「いってきます」

玄関をあけ…外にでていく。
二度と戻れない家に別れを告げて…

１０時…国連軍横浜基地正門へと続く坂道の中程に植えられた、１本の桜の木の前に武の姿があった。

苦労して引っ張ってきたカート、バックは傍らにおき、
桜の木に向かって深々と頭を下げる。

（前の世界の、まりもちゃん、純夏、冥夜、たま、美琴、彩峰、委員長、伊隅隊長、水月先任…
そしてこの世界での名前の知らない先任達…
俺は誓います。経験をいかし、皆を幸せにする事を…）

頭を上げると、武は視線を転じて坂を下った先に見える廃墟と化した町を見た。

（町の壊れ具合や、この桜の木にまりもちゃんの墓標が並んでないことからすると、時間はちゃんと巻き戻ってそうだな。
細かい確認は、夕呼先生と接触を果たしてからだ。
さ、これからが正念場だな…）

武は『前の世界』と呼ばねばならなくなってしまった、残してきた人達を想い、また逝ってしまった人達を想い、誓いを新たにした。

そして、踵を返して横浜基地正門へと、堂々と歩みを進め……歩

みを……

（え？？）

正門の前に辿り着くと、

２人？の着ぐるみ？？が、声かけていや、サインボードに文字をかいてくる。

鼠だか熊だかパンダだかわからないのが……

ただ頭の上においてあるだけ？のハーフヘルメットにＭＰとはかいてある。

「ふも、ふもふも？」

［こんなところで何をしてるんだ？］

「ふうもふも？ふもっふ。ふふふもふもふ」

［外出していたのか？　物好きな奴だな。どこまで行っても廃墟だけだろうに。］

書き直してる。

（テンポく、くるう…）

「ふもふも？ふふっもふふも」

［隊に戻るんだろう？　許可証と認識票を提示してくれ］

（かいてある内容だけは前とおんなじか…）

でも、俺は許可証も認識票も持ってはいない。

「ああ、すまない。俺は許可証も認識表も持ってない。」

俺がそう言うと、２人？は一歩退がって銃を構えた。

詰め所からあたらな人物があらわれた。

（なっ…！！）

「動くな。両足を開いて両手を頭の上につけろ。ゆっくりだ。妙な真似はするな」

即座に指示を出して来る新たな人物。

「…落ち着いて話を聞いてくれ」

「早くしろ」

「…わかった」

それをとりなすようにかけた声もやはり届きはしない。
そしてそいつが、俺を拘束しようとする。

「スキャン結果、当該データーなし。所属、氏名をいえ」

（ようやくしゃべれるのか。なら、先生に会わなくては何も始まらない）

「とにかく香月博士に会わせてくれ！
この基地には香月夕呼博士がいるはずだ。博士に会いにきた。」

「香月夕呼博士にか？」

「ああ、そうだ合わせてくれ」

「最初の質問に戻る…名前は？」

「白銀武だ。だが夕呼先…博士は俺のことを知らない。
だから俺に連絡をさせてほしい」

俺の要求は普通なら論外のはずだ。
だが、夕呼先生にはその普通というものが意味をなさないことは学習済みだ。

「わかった、電話でのまずは応対となるがとりつごう…」

着ぐるみの方が、
「ふも！！ふも」

「問題ない、異世界軍の方で責任もとう」
「ふ…ふもぅ」
（異世界軍？）

俺はは拘束されたまま、先生の執務室を呼び出した人物から受話器を受け取った。

受話器を受け取り、耳に当てた途端、

『で、あんた誰？』

いきなり不機嫌な声が耳に飛び込んでくる。
（うわっ、これはまずい。先生が不機嫌だといい展開になったためしはない。
…いや、多分ない）

「白銀武です。一応、初めましてになりますかね」

『あたしに何の用？』

（ここで興味をひかなきゃならない。そうじゃないといきなり……三度目があったとしても四度目があるとはかぎらんし……先生相手に興味を持たせるには、１発目に強烈なのをお見舞いする必要があるな）

「オルタネイティブ計画について話したいことがあります」

『！！』

「たぶん……空の上では……造っているんでしょうね？」

オルタネイティブ５にて地球を脱出するための宇宙船を指して、言ってみる。

『……』

「急がないと……手遅れになりますよ？」

今度はオルタネイティブ４に関する情報だ。

『……あれね……解決ついたんだけど、今更なに？』

（は？）

「え？か、解決？」

『あと他には？』

「え……あ、か、解剖してシリンダーの中に入れますか？」

『…もういい。電話切る……！！えっ？』

ガチャツーツーツー

電話を切られてしまった……

「終わったか？」

「ちょっとまった！もう一度、もう一度でん…」

ゴゴゴゴゥゥゥ…

突如として少し離れた場所からシャトルらしいのが、
轟音をあげ天高く上がって行くのがみえた。

（な……な…）

「貴様を身分査証の嫌疑で拘留する」

「……あ、あ……ところであれ…なに？」

「マスドライバーだ」

（は、は、は……別の世界に……？……！！）

建物の方から人物が走ってくるのがみえた。

（ま、ま……まさか……）

見覚えのある黄色のリボン…

「……ル……ん　タ…ルち……」

「すみかっ！！すみかぁー！！」

あらんかぎりの声で叫びかえした。

「タ…ルちゃ…！！タケ…ちゃん！！」

「すみかぁーー！！すみかぁーー！！」

着ぐるみ二体は状況の変化についていってないようだった。

純夏が走ってきて、飛びついてきた。

「タケルちゃん！！」

「純夏！！」

拘束がいつのまにかとかれ、自由になった腕でしっかり抱きしめ合う。

「タケルちゃん！！タケルちゃん！！」

「純夏！！純夏！！」

そして……長いキスを…
口の中に純夏の舌が入ってくる。
（ああ、純夏、間違いなく純夏の舌だ！！）
貪るように舌にからませ……

「ふう……二人ともいい加減にして説明しなさい」

「あっ…」

「は、はい」

正門に夕呼博士がきてたのだ。
霞ちゃんも…顔を真っ赤にして、
正門にいた衛兵みたいのの肩に座ってきていた。

「とりあえずこの子、あたしのお客さんで登録しておいてね」

「了解しました。博士」

「ついてらっしゃい」

聞きたい事は山ほどあったが…おとなしくついていって検査をこなす。

そして、前回と変わらない検査を受け……

4時間後…

「さて、鑑から聞いたんだけど……あなたがシロガネタケルね？」

「はい、そうです」

「で、この機械、あなた世界を渡ってきたの？」

「？世界を渡る？」

「……違うみたいね…」

「あっ！！いえ俺はやり直しに戻ってきたんです！先生！」

「先生？あたしは生徒をもった覚えはないわ…

ところでやり直しって？」

「実は…」
最初ＢＥＴＡのいない平穏な世界の日本にいた事、
一度目…オルタネイティブ５の実行の世界にいた事、
二度目…オルタネイティブ４が成果をあげ、最終目標あ号を倒した事。
しかし、あまりの戦死者の多さ、まりもちゃん、純夏、そのた仲間達…で、やり直したいと思った事。
とまらず全てを話した。

「なる程ね……私達はそれで幸運を掴んだ可能性もあるわね…」

「へ？幸運？」

「あなた、この基地にきて違和感なかった？」

「あ、正門の衛兵達…着ぐるみみたいなのとか、
霞ちゃんが乗ってた人とか、あとは知らない言葉で、
異世界軍とか、
マスドライバーとか」

「……一つ聞くわ。あなたがここに前回きた当日、佐渡島ハイブはＢＥＴＡの勢力下にあった？」

「当たり前じゃないですか。…えっと前回は12月23日に甲21号攻略作戦が発動、25日に落としました」

「……白銀…佐渡島ハイブは、もう人類の勢力下にあって、次は鉄原ハイブ攻略の段階に入ってるわ」

「はぁ??ま、まじですか?」

「まじ?なにそれ…」

「あ、すみません。本当ですか?の意味です」

「異世界語の一種かしら?…まぁいいわ……あとこの話を聞いた後は後戻りできないわよ?いい?」

「はい!!そのつもりで俺はきました」

「あなた、渚カオルという人物しってる?」

「いえ。知りません」

「やっぱりね…渚カオルという人物が、

あなたの知ってる前の世界と大きく違う事になる要因になったのよ」

「先生、その渚カオルって…？」

「世界を渡るわ」

「せ、世界を？」

「ええ、異世界にいけるのよ」

「……」

「そのおかげで人類は持ち直し始め、佐渡島ハイブは攻略、私は０
０ユニットを完成、
次は鉄原ハイブ攻略ってところね」

「変わりすぎてる……」

「ま、もどってきてこれから起こる事の対策をねってても、無駄に
なっちゃったわね。
ところであんた衛士の腕は確かなの？」

「あ、はっ、はい！！最終階級は小尉。あ号目標を撃破しました！！」

「ふ～ん……ま、いいわ…腕をみてからの判断するわ」

「シュミレーターですね。あとお目がねにかかったら２０７Ｂ訓練小隊に入隊したいんですが」

「あとの話ね」

という事でシュミレーターに行く事になった。

（よ～し……）

『じゃ、ヴォールク・データ単機突入ね』

「なっ！！無茶ですよ！」

『それくらい証明しなさい、ＣＰは鑑がつくわ…鑑、全能力使わないようにね』

『は～い。タケルちゃんがんば～』

「お、おう…」

ヴォールク・データで潜る。

（お？？……ＸＭ３？いや、コンボがないか……その前のバージョンか？…けど、これなら…）

八捜飛びの要領でどんどん奥にすすんでいく…

硬直がないから動き易い。

そして……

『タケルちゃんすごーい♪』

『やるじゃないの』

「よっしゃ～！！」

ヴォールク・データの反応炉まで単機到達していた。

『お疲れ様、降りてきて頂戴』

「で、先生入れてくれるんすよね？」

「そうね……あんた教官しなさい」

「はぁ？？教官ですか？」

「あんたの腕で訓練小隊にいれるのもったいないじゃないの」

「ですけど…」

「けどそこまでこだわるのは、何か重要なことがあるんでしょ？だから教官よ教官」

「わかりました…」

「あと階級はそうね…中尉でね…所属はＡ－０１よ」

「え？……はっはい！！」

「さて…おそくなっちゃったわね…
詳しい話は明日にして頂戴。夜は鑑とじっくりお話したいんでしょ？」

「せ、せんせい……」

「馬にけられたくないしじゃまはしないわ……あ、そうそうＩＤカードよ。
セキュリティレベルはかなり高く設定してあるわ…じゃ、おやすみぃ～」

……
カオル報告
ただいま攻撃中

第１１８話　タケルちゃん登場　投稿日２０１１０５０６　修正１（後書き）

ナギ少尉「カオル君一回もでてないよね？」

作者「うん…今回はね～…うらで攻撃の指示をしているだけだし…
遭遇すらしないしさ」

ナギ少尉「けどこれで本編に突入ね～やっと……
２次小説で本来の主人公がここまででるの遅いって…結構珍しいよね～」

作者「だなぁ……完全にオリか、またはメイン主人公ルートか、またはでても早めにが多いしなぁ…」

ナギ少尉「なんにせよ…これで物語は加速する？」

作者「いや…無理かな？カオルの考えが変わらん限り…
まぁ月が先に攻略するかもしれんが…」

ナギ少尉「さて、次回予告は…２０７Ｂ訓練少隊…お楽しみにぃ」

第119話　207B訓練小隊　投稿日20110508

2001年10月23日
side～タケル～

この世界でも純夏と結ばれた…

「タケルちゃん…痛かった…」

「ごめん」

「でもうれしい…この世界でも結ばれて」

「ところでさ、純夏……この世界っていうと…
前の世界の事も覚えてるのか？」

「うん。で、悲しかったから、カオルって人を呼び込んじゃったみたいなの」

「そうか……」

「でも呼び込んでよかったぁ……タケルちゃんとこんなに早く…」

「純夏…」

キス…舌を絡め……

「あ、純夏」

「なに？」

「２０７Ｂの皆についてなんだけど…」

「いいよ」

「何にもいってない…」

確かにリーディングすると読者がわからなくなるよな……
ブロックの流れにしますか…

「私だけでなく、皆を救いたいんでしょ？確かに嫉妬はしちゃうけど…
タケルちゃんと結ばれたから、後は結婚で我慢するね」

朝方…先生の執務室に連れだっていった。

「入ります」

「来たわね…とりあえず午後から教官としてついて頂戴。Ａ－０１の皆は…明日ね」

「了解しました。で先生重要な事なんですが、反応炉から人類兵器の情報が」

「ああ、それ？カオルが対策しちゃったみたいよ」

「は？」

「それなんだけど、逆スパイにしたてあげたってお話」

「は…はぁ…」

「ま、この世界に来たばっかりだから、説明に私の時間を使うんだから感謝しなさいね」

「は、はい…」

この世界で５月以降に起きた出来事を説明してくれてる。

（異世界軍…かぁ…）

国連軍の独立統帥権をもった集団として、

独自に動いている事。
宇宙開発、スペースコロニーの開発をして、難民環境改善に取り組んでる事。

そして…

「え?? マジですか? 先生」

「また異世界語をつかって…本当よ本当」

クーデターは起こったものの、人的損害が0…
それぱかりか沙霧さんやウォーケンさんが異世界軍に……

「あら?? こら白銀……鑑…」

「は〜い」
グワシャ

「ヒブゥ」
ピクピク…

「なにほうけてんのよ…しっかり聞きなさい」

(だってよだってよ…)

殿下が結婚済みだって事。しかも相手がカオルという人物…

（変わりすぎてるだろ～～！！）

「まぁこんなところかしらね……質問は？」

「で異世界軍に関してなんですが…」

「そうね…Ａ－０１入隊時に説明うけた方がわかりやすいわ。だからパス」

「はい…」

「そろそろ時間ね…
じゃ、昼飯とったら教練に参加しちゃって」

「はいっ！」「は～い」

（まりもちゃん……）

「うわ…そうだったんだ…」

「純夏…リーディング？」

「うん……今の消す…きぼちわるくなる…」

「だな…今でも…さ……ところで純夏、お前の仕事は？」

「博士の助手、その内Ａ－０１入隊なのかな？」

「成る程な…お互いがんばろうな」

「うん♪」

ＰＸ…

２０７Ｂ訓練小隊は見えない…

「はい、あ～ん」

「あ～」

パク

「おいしい？」

「うんめぇぇぇ…しかも天然物かよ」

「そういえばそうね～」

京塚のおばちゃんの腕もあり、至福の味…

ほどなく食べおわり、純夏とわかれ、
午後の教練に参加する前に、教官室に立ち寄る事にした。

（まりもちゃん……）

「失礼します」

部屋の中には…

「白銀武中尉、お待ちしておりました」
（まりもちゃん……生きている……）
なみだが…
「私は渚まりも軍曹であります」

「は？？……神宮寺軍曹でな…く？」

「神宮寺は旧姓ですので、渚まりもであります」

（き、き、旧姓？……）
涙が一瞬でひき……

ウ、ウン
咳ばらいをし…
「じ……渚まりも軍曹、つかぬ事を伺うが…いつ？」

「つい三日程前、式をあげ、変わりました。連絡渡ってなかったでしょうか？」

「あ…いや…」

（く、くる前にか…）

「おめでとう…祝福を……」

「ありがとうございます」

「と…、まりも…ちゃん年上ですから階級抜きに敬語はやめて下さい」

「は…？まりも…ちゃんですか？…あと軍にいる以上は…」

「命令です」

「上官命令ね…わかったわ…
けど、人妻だから、まりもちゃんはちょっと…」

「昔の恩人にまりもちゃんという方がいるんですよ。
だから、言いそうなのでそういった呼び方に…」

「はぁ…わかった…良いわよそれで、けど他の人がいる時には階級でよんでね」

「はい。まりもちゃん」

「で…白銀君、午後の指導の事？」

「ええ、俺が主にみるのは戦術機の事になるので、
総戦技演習まではまりもちゃんが見てください。
俺はあくまでも補佐的な役割で口だす程度になります」

「わかったわ…じゃあ行きましょ？白銀君」

ｓｉｄｅ～タケル～ｅｎｄ

（ん…ん～疲れた。やっぱり早いとこ砲撃艦回すべきだなぁ…
時間かかってたわ…）

前準備のミサイル攻撃が終わり、ＢＥＴＡの増援の集結まちだったので…

（前回は増援到着前に制圧して苦労したからなぁ～）

久々に地上にでて身体をほぐす事にした。

（やっぱり太陽の下がいいや……っと？）

「まりも～」

「あ、あな……カオル大将閣下」

連れだって歩いてた人物がいたので、

あなたと言いかけたのを訂正したっぽかった。

「と、こちらの方は？」

「今日から教官として指導される、白銀武中尉であります」

「ああ、君がＡ－０１に入隊予定のね…私は渚カオル。

異世界軍の責任者にして、まりもの夫さ。よろしく頼むよ」

ｓｉｄｅ～タケル～

（おっと～～！？！？）

しばらくほうけていた。

俺がいるのに、目の前でラブラブ光線というか…
新婚ほやほやの雰囲気にあてられ固まって…

（……まりもちゃん……幸せになったんだな…
前の世界でも前々でも、元の世界でも……）

ン、ンン
咳ばらいをし、
「白銀武中尉であります。閣下…よろしくおねがいいたします」

「ああ、よろしく頼むよ。あと閣下はやめてくれ。普通にカオルでいいからさ」

「わかりました。俺の事もタケルでよんで下さい」

といって、別れ２０７Ｂ訓練小隊の方へと向かう。

「はぁ……」

「どうしたの白銀君？」

「い、いえ…」

（なんか未練たれるな……知ってる人が結婚するとな～）

グラウンドに着き視線を感じながら…

「小隊集合！！」

駆け寄ってくる委員長、彩峰、たま、そして…冥夜……

…

あ号に侵食され…

『頼む……』

「……なんだ…冥夜？」

『撃ってくれ……タケル……』

「……冥……夜……」

『影として生を受けた私が……斯様な死に場所を得ることは……

身に過ぐる栄誉だ』

「冥…夜…」

『今ここで果てるのに、何の迷いがあるだろう……

だが…ひとつだけ…この世に未練があるのだ…

お願いだ…タケル…いまわの際の我儘…どうか…聴き入れてくれ……
せめて…せめて…最後は…』

「ああ…なんだ、冥夜？」

涙をこぼしながら…
『愛する者の手で…そなたに撃たれていきたいのだ…』

「…冥…夜…」

『私の生涯が…たとえ…影としての生でしかなかったとしても…
そなたが…そなたが生き続け…私という人間が存在したことを…
御剣冥夜がこの世にあった事を…覚えていてくれさえすれば…
私は…幸せなのだ……
墓まで持って逝く…つもりだったのに…私の…弱さを…ゆるせ…鑑
…』

独白に躊躇してると…
『うあああぁぁぁぁ！』

「冥夜！」

『あぁぁぁぁっ―撃ってくれタケルッ……
私を……奴らの慰みものに……するでない……ッ！！』

「ぅぅ―…ぅっぅ―…冥夜ーーーーぁ！！」
トリガーを引き発射される荷電粒子砲…
そのかがやきは冥夜の乗る武御雷ごとあ号目標を……

「２０７小隊集合しました」

「よし、紹介しよう。新しく教官に就任された白銀武中尉だ。
これよりしばらく貴様らの教練の補佐をして頂く事となっている。
…白銀中尉、ご紹介し……どうされました？」

「ああ、すまん目に埃が入ったようだ…」
涙が出てた…ポッケより出したハンドタオルで拭う。

「大丈夫ですか？」

「ああ…中断させてすまんな」

「ではご紹介しま―」

「あっ、大丈夫です。せん……副司令より聞いていますから。
こちらから榊　千鶴、御剣　冥夜、珠瀬　壬姫、彩峰　慧ですね？」

「はい」

「あとここにいない、鎧衣　美琴ですよね？」

「はい。ただ今入院中です」

小隊の方に向き直り…
「今紹介にあずかった白銀武中尉だ。俺が直接指導するのは総戦技演習後となる。
それまでは渚教官の補佐をすることとなる。……と仕事の話はここまで…」

「実は、俺は君らと同い年で、教官というのも今回が初めて。
渚教官を手本にするっうのは君らと一緒だ。
だからさ、固くでなく気楽にさ頼むよ」

「中尉…他の者にしめしが…」

「まぁ公の場ではなく、訓練やプライベートの場ではそういった態度で接します。
でないとチームの信頼感得られませんしね…
というわけでよろしくな」

「「「「はい!!」」」」

「さて、…俺の実力みて見たいと思うかもしれんよな?
あと君らの実力もみてみたいしな…
挨拶てがら白兵戦といこうじゃないか」

一戦目…たま…

「ひゃう…」

「まぁ…頑張れよ」

「はい」

二戦目…委員長…

「ふ……負けたわ」

「精進しろよ」

三戦目…冥夜…

「なっ！！くっ！！」

「あの冥夜さんが押されてる…」「これは夢？」「やるね」

「すごい…中尉」

「ぐっ」

「勝負ありだな」

刃引きナイフが冥夜の首元に当てられている……

ナイフを引き、

「ありがとうございました」

一礼をし戻っていく冥夜…

列に戻り際に二人が交差するまに…何か会話をしていく。

ぼそっとで聴こえはしないが、読唇から…多分、

「彩峰…油断するでないぞ…」

「承知…」

の会話が交わされたろう……

四戦目……

「彩峰は得物つかうより徒手格闘技の方が、得意分野だよな？」
今までつかっていた刃引きナイフを渚教官に渡しながら、問い掛けると…

「それでいいの？強いよ」

「ああ、得物はなしでな」

「本気でいく」

「ああ、本気で来い！！」
彩峰、一礼し…

「始め！！」

彩峰との組み手が始まる。
前回のループでも彩峰には中々勝てなかった。
が……それは互いに更に高みを目指して、吸収しあう事。

今回はそのアドバンテージ分がある。
そのため…

（そこ！！癖はこの頃はなおってないなぁ！！）

隙をとり、腕をきめてると…
たまらず彩峰からタップがくる。
「そこまで！！」

「まいった。強すぎ」

「彩峰もな」

「ありがとう。惚れないけど、ぽっ」

「あがっ！」

「ショックだった？」

「はぁ…彩峰……整列！」
並び始める。

「俺の実力はわかったろ？
総戦技演習後覚悟しとくようにな…特に彩峰」

「かんべん」

「俺からは以上だ」

「「「「ありがとうございました!!」」」」

「じゃ、渚教官」

「はい」

と午後の訓練は続く…

……

夜ＰＸにて…

「よう。ここいいか？」

「あ、敬礼!!」

「いい、いい。堅苦しいことするなったろ？」

突然現れた上官に驚く皆…

訓練兵は士官とは違う時間帯にＰＸを利用しているのだから、

驚くのは仕方がない。

委員長の号令といともに、立ち上がり敬礼をしてかけてくるのを制止する。

一応は俺も返礼するが、そんな面倒なことはこれからはしたくない。

「これからは、いちいち敬礼とかしなくてもいいぞ」

「は」

「委員長固いぞ」

「は？い……委員長？？」

「ああ、なんかな…前の知り合いの雰囲気にいててな…という事で愛称は委員長ということでね。いいだろ」

「委員長か…良い愛称をもらったではないか榊」

「みきは？みきは？」

「球瀬はたまだ」

「たま？……えへへ～可愛いのもらっちゃったぁ♪」

「猫みたい」

「ああ、そうだな」

「で、御剣は…冥夜、彩峰のことを彩峰だな」

「おおっ…良いな…」「僕だけ変わらず…」

「ところで教官、ひ」

「あ～タンマ」

「たんま？」

「あ、までの事だ。教官はやめてくれないか？
紹介の時にいったと思うが…そんな呼び方は禁止。
白銀でも武でもいいからさ。同じ年齢なんだし…な？」

「ふむ。わかった武」

「了解～武さん」

「はぁ…さすが博士の部下なのね…白銀は」

「焼きそば」

「俺の事さしてない呼び方があるぞ～」

彩峰…俺の事を指さし、

「やきそば……好きだからそれが１番」

「彩峰～」

「冗談、白銀でよぶ」

「で、委員長質問しかけたのなんだ？」

「白銀はここにくる前までどんな感じだったの？」

（…お前らと一緒だったさ…そして…お前らは…逝った…）

「……前の部隊か……負傷者3名で、動ける衛士5名で望んだ作戦は……

まだ俺が教えられる事もあった…

俺自身の力が足りない部分もあった…

その為、一人二人と欠落し……

最後は俺の事好きだという人物を俺の手で撃ち抜く事になった…」

（冥夜……）

「だが最高の部隊でもあった。……ちょうどきみらのようにな…

まだまだ粗削り、磨けば伸びる…

最高のチームになるように戦術機面では教えるらな」

「期待してるわ」「ベットの上で手取り足取り」「更なる高みを」

「もっと頑張る」

「これからもよろしくな。

あ、そうそう飯も一緒に食って、質問やらも受け付けるよ」

「わ〜い」

タケル達のよるはふけてく…

……

カオル報告

今回の出番これだけ??

第１１９話　２０７Ｂ訓練小隊　投稿日２０１１０５０８（後書き）

ナギ少尉「また今回もカオルがあんまりでて来ないね～」

作者「殆ど武側だしなぁ～ま、最初は説明と…あとはまりもちゃん系か…」

ナギ少尉「結婚？が未練たらたら…で君つけしちゃって…もう奥様いや、愛妻っう感じね。
ラブラブシーンは？」

作者「あんまりやり過ぎると１８禁やラブノベネタになりそうだから、……
つうかラブノベ系も甘いの好きだし…他作者さん宣伝になるかもしれんが、鳶王とかね」

ナギ少尉「もっとｋｗｓｋ」

作者「…そりゃ男だから、色々嗜んでるよ。がＳＭだけは受けようややろうはなぁ
……目の前でやってるのは連れられて見に行ったが、イマイチっう感じ。
勿論海外のもあるし～…まそんなとこでこのネタおしまい」

ナギ少尉「そういえば海外にいくの？」

作者「……後書きで聞くか？まぁ、二泊三日でちょこっとね。次回投稿分はなんとか今から仕上げるさ」

ナギ少尉「さ、缶詰ね。頑張って！！次回、タケルＡ－０１配属＋未知との遭遇お楽しみにぃ～」

第１２０話　タケル　Ａ－０１配属＋未知との遭遇　投稿日２０１１０５１２

２００１年１０月２４日

ｓｉｄｅ～タケル～

（今日はＡ－０１とか……伊隅隊長、水月中尉、涼宮遥先任、柏木…
やば、涙ださないようにな…）
曲がり角で誰かとぶつかってしまった。
「と、失礼…」

（あっ……）
その顔は……

～～回想～～

『……さて。長くなってしまったな。皆にもお別れさせてもらおう』

「大尉ッ！お世話になりましたっ！！」

『泣くな…男だろう』
返礼をする伊隅は、姉のような優しい笑顔を浮かべていた。

「す…すみませ…ッ…俺は…もっと大尉に…
色んなことを…教えてもらいたかった…のにっ…」

『私も多くの先達と同じく、基地に咲く桜となって貴様たちを見守

る。
何かあったら、桜並木にあいに来い』
「…はい！！」
『人類をたのんだぞ』
「必ず…俺が必ず守ります！」
『さらばだ…白銀』
「さようなら…大尉…」
～～
「おい大丈夫か？何処か怪我でも？」
「あっ失礼……大丈夫です」
（油断してたぁぁ）
とハンドタオルで涙を拭う。
「そうか……？」
「と、失礼ですが伊隅大尉ですか？」
「あ、そうだが…」

「今度Ａ－０１に配属になりました白銀武中尉です」
と敬礼を行う。

「おお貴様が副司令から推薦された白銀か…ふむ…歓迎するぞ。ようこそ伊隅ヴァリキュリーズへ」
と答礼しながら歓迎された。
そのまま連れ添ってブリーフィングルームへと向かう。

ブリーフィングルーム内にはいると、見知らぬ顔と、思い出の顔が…

（速瀬中尉…）

「中尉！何やってるんですか！？隔壁を開けてください！！」

『ダメよ！あんたは格納庫に戻って凄乃皇を守りなさい！！』
自決装置作動の警告音が聞こえる。
「やめてください中尉！！」
『バカ！早く離れろ！』
「まだ他に方法はあるはずです！自決装置を止めてください！！」

『もう…直接起爆しか方法がないのよ！』
「諦めないでください中尉！」
ザッ…

『遥や大尉…神宮司軍曹…柏木。
それだけじゃない…今ここで時間を無駄にして、
人類の未来を信じて逝った人達の命が無駄になるなんて…

絶対に許せない！！』
ザッ…
「速瀬中尉！反応炉を…よろしくお願いします！
人類の未来は…任せてください！」

『よく言った…白銀。やっと一人前の衛士になったわね』
速瀬の顔は穏和な表情で微笑んでた…

『白銀。あんた、結構いい指揮官になると思うわ。私なんかよりずっと…ね』

「…ありがとうございます！！」

『私のこと、あんたの部下たちに誇らしく語ってちょうだい。
頼んだわよ？……
さぁ、もう行きなさい！時間を無駄にできないわ…
伊隅ヴァルキリーズを頼んだわよ。みんなによろしく！』

「速瀬中尉…お世話になりました！」

『じゃあね、白銀』

（涼宮中尉…）

窓ガラスに血がべったりつき、

叩き付けられた涼宮遥中尉…

変な方向に曲がっている…

（柏木…）

『了解。御剣も大尉の護衛があった方がいいっていってたんだから、納得してよ。ね？』

「大尉の機体…推進剤残量の計算だけは気をつけろよ」

『そうだね。私がのせてもらう分、重量がふえるし』

「ああ」

『柏木。必ず戻れ』

「というわけで、本日より入隊する事になった白銀武中尉だ…白銀、自己紹介しろ……白銀？」

「あ、はい！！」

「ん～？きてそうそう、誰ねらってたの～？」

「こらちゃかすでない…白銀」

「はい、白銀武中尉です。年齢は１７の若輩ですが、前の隊では突撃前衛をこなしてました」

「ほう…水月、高畑…ライバルだなぁ」
「突撃前衛のポジションは渡さないわよ！！」

「ライバル」

「とりあえず白銀、この女性だけの特殊部隊、伊隅ヴァルキュリーズへようこそ。
久々の男性衛士だ、歓迎するぞ。コールサインはヴァルキュリー１だ」

「速瀬　水月。階級は中尉してるわ、コールサイン、ヴァルキュリー２。
前の隊じゃどうだったかわからないけどでかい顔させないからね！！」

「西坂　舞よ。ヴァルキュリー３、階級は中尉。ポジションは強襲前衛してるわ」

「河田　瞳ていうわ。ヴァルキュリー４、階級は少尉。強襲前衛を担当してますの」

「高畑　貴美、ヴァルキュリー５、突撃前衛……」

「風間　美冴と申します。コールサインは、ヴァルキュリー６制圧支援してますわ」

「宗像　椿子よ、ヴァルキュリー７で担当は迎撃後衛。よろしくね」

「渚　屡伊、「我が隊唯一の人妻」もう…途中で入れない。ヴァルキュリー８で打撃支援担当よ」

「小倉　九琉華、コールサインはヴァルキュリー９、強襲前衛担当しているわ」

「食べられないようにね」

「涼「ここからは新人だ。隊全体で教育してるところだな…続けていいぞ」はっ！
涼宮茜ヴァルキュリー１０です強襲掃討を担当してます」

「柏木　晴子、ヴァルキュリー１１で砲撃支援ね」

「築地　多恵だど。ヴァルキュリー１２、強襲掃討よろずく」

「麻倉　美桜よ。ヴァルキュリー１３担当は制圧支援ね」

「高原　由希。ヴァルキュリー１４、打撃支援してるわ」

「以上が我が隊の人員すべてだ…
幸い、今年の五月から脱落者が０の為、
すべてのポジションにおいて、エレメントが組める状態になっている。
…だが、当初は連隊規模で発足されたんがな…
さて、私は白銀に我が隊の機体説明にいく」

（不知火だよな…懐かしいなぁ…）
「お前らは、新人に対してのハイブ攻略戦の教導をしとくように」

「了解！」＊多数。

ハンガーに向かいはじめている。

「隊長、新人５人連れてですか？流石に無謀では…？」

「白銀、前の部隊で乗っていた機体は？」

「す…じゃなく、不知火です」

「不知火か…結構良いの乗ってたな」

「ええ。良い機体でした」

「で、我が隊は異世界軍の協力により、魔不知火、魔撃震という二機種を運用している」

「は？魔……ですか？」

「ああ、魔がつくな」

破顔する伊隅隊長…

「まぁカオルの話だと改造を自重しないと魔になるそうだ…
だから魔不知火、魔撃震という話だな」

「は、はぁ……」

「現物をみてもらった方が早いだろ……
だから無謀という言葉がなくなる…というものだ」

ハンガーに差し掛かり…
（こ、これは……）
「正面に見えるのが魔「Ｚガンダム！！」

「Ｚガンダム？」

「あ、いえ……頭だけですね…それ以外…うわぁ…変わりすぎだよ」

「続けていいか？」

「あ、すみません…」

「魔不知火だ。不知火と違うところは核融合炉で動いてる」

「まさかミノフスキー型核融合炉じゃ」

「白銀…いつ知ったんだ？」

「当たりなんです？」

「ああ…」

「となると、あれ…ザクマシンガンっすか？」

「あたりだ…」

「……まさかシャアやアムロまでいたりして…」

「白銀…何処まで知ってるんだ？お前は……」

「ちょっと…っすね」

「まぁいい続けるぞ」

（おいおいマジかよ～ガンダムだよガンダム…ザクマシンガンあったりとか、
Zの頭部とか時代設定ごっちゃだけどさ…）

（ん？あれは……まさか！？！？）

「隊長…あのフワフワ浮いているバッタ見たいなの…コバッタです？」

「ああ、そうだが？よく知ってるな」

「あはははは…」

「おい、白銀？大丈夫か？」

「大丈夫です…」

（なんで機動戦艦のナデシコが？ガンダムに続いてか？）

「で、説明続けたいが…大丈夫か?今までの部隊とかなり違うから、大変だろうが…」

「あ、はい…」

「核融合炉からずれたな…機体のフレームも今までの不知火と全く違うし、
ある意味別物ともいえる。詳しくは乗ってみてみろとしかいえないな…
その向こうにあるのが、魔撃震だ。新人に充てたやはり魔改造機だな」

「今までの鈍重な撃震とは…」

「勿論全くの別物。しかも装甲が厚い、また追加武装もある…対ＢＥＴＡ戦の安全面では上と聞いている」

「隊長、自分の機体は…?」

「多分魔不知火だと思うが……まだ異世界軍エリアで組み立て中と聞いている。見に行ってきても良いぞ」

「では見てきます」

許可をもらい、Ｂ５５ハンガーのに自分の機体を探しに、見学しにきている。

（ん？……この機体はなんだろう？）

武はＭ９ガーンズバックを見上げながら考えこんでいた。

（ん～～～……多分どっかのだろうけどなぁ…）

と考えながら移動すると…

「え？パトレイバー？？」

目の前にはパトランプが両肩について、白黒のカラーリングの付いた、

桜田門エンブレムが眩しい機体がある。

「……作品枠飛び越えてるよ……どうなってんだよ…

そのうち宇宙戦艦ヤマトやマクロスがでたりして…」

［白銀中尉～］

「えっと君は？」

［２５号です。始めまして…で白銀中尉なにやってるの？］

「ああ、自分の機体見に来たんだけど…
ところでこれ…パトレイバー？？」

［うんそうだよ～。
マスターがその世界からコピーし、作製した機体だよ。勿論僕らもね～］

「マスターというと？」

［渚カオル大将～ね］

「その世界って…アニメの世界の機体だろ？」

［うん。マスターはそういった世界をわたれるんだよ～］

「あははは…」

（だから隊長、あんなに自信あふれるわけだ…）

「な、なぁひょっとして月もおとす」

［月はまだだよ。準備中だけどね…マスターもえげつない方法考えてるけどね～］

「えげつないって？」

［人が住んでいる場所ではできない、大規模出力レーザーによる殲滅］

「はぁ？そ、そんなのって……あっ！ガンダムの！！」

［ソーラーレイ・システムね…ねぇ白銀中尉…なんで知ってるの？］

「え？知ってるもなにもみ…」

（あっ…そういや…アニメってこの世界…）

［あ～そういえば白銀中尉も元々は異世界人だったよね］

「え？……な、何故それを…」

［大丈夫、副司令からそう入力されてるし、ここには千人以上異世界人いるしさ～］

「あ、アムロさんとかだよね？会いたいけどさ」

［あってみる？］

「マジで？いいの？」

［今の時間ならアムロ大佐はフリーだから大丈夫だよ…こっちぃ～］

「…なぁ２５号」

［なにぃ？］

「君らはコバッタだよね？ナデシコの」

［うん。そうだよ～］

「沢山いるけど、全員ナデシコの世界から？」

［えっと１号以外はすべてこの世界生まれだよ～。マスターに作ら

れたの」

（渚カオルか…純夏すごい人物を引き込んだよな…）

［アムロ大佐～］

「ん？なんだい？」

（ア、アムロさん！！）

武は生ではみてはないが、丁度ガンダム２０周年で、
発売されたばかりのＰｌａｙＳｔａｔｉｏｎ２に、ＤＶＤを借りて
脳裏に焼き付けた人物が目の前にいた。

［新しくＡ－０１に入った元異世界人の白銀武中尉だよ］

「始めまして、白銀武中尉、国連軍第１１方面軍Ａ－０１中隊所属
であります！」

「異世界軍所属、アムロ・レイ大佐だ。よろしくな」

（ニューガンダムの容姿にそっくりだな…）

「あのつかぬ事伺いますが…アクシズの戦いの頃ですか？」

「君は、僕の事を知ってるみたいだね……
そうさ、シャアと戦ってた時期だよ。
彼も一緒にスカウトされた口さ」

「ニューガンダムは作られて…？」

「いや、まだ地上戦メインだからニューガンダムは作ってもらってはないな」

「そうですか…」

「これから見る機会はあると思うよ。いや、機会を作るさ…」
「はい期待してます。ところでアムロ大佐、他に異世界軍には…どんな方が？」

「スレッガーさんや、ドズル中将、
レビル将軍や、シャア、クェス君とかもいるな」

「え？ドズル中将ですか？」

「ああ、最近ビグザム解禁してくれと、煩いんだがな…」

話は続いていく……

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

＝＝アメリカ軍情報司令室＝＝

「ふむ…この船から容量以上のミサイルがでているのか…」

「そこに何かの秘密があるもようです。
また同系の砲撃戦仕様だと思いますが、今現在このような艦が…」
スクリーンにビックトレー砲撃仕様が映しだされる。
「……何インチ砲か？」

「画像分析結果から２４インチ砲との結果がでてます」

「砲艦主義か……」

「正直、どこから原材料を仕入れてるのか、
もうわからない、お手上げと…」

「前任者が失敗したツケがきついな…」

……

カオル報告

また出番なし　主人公外されたの？俺…

作者注

しょうがないよ…作戦準備中だろ　裏で…

第１２０話　タケル　Ａ－０１配属＋未知との遭遇　投稿日２０１１０５１２

ナギ少尉「作者～主人公変わったの？」

作者「……しょうがないだろ、
ここの描写はそういったシーンなんだからさ」

ナギ少尉「カオルは何やってるの？」

作者「ちちくりあってる」

ナギ少尉「え？」

作者「だから、殿下とちちくりあって１８禁になってる…かけないよ…」

ナギ少尉「そ、そうね……確かに…」

作者「最近１８禁をかけって殿下が迫ってくるんさ…」

ナギ少尉「外伝で１８禁で投稿しちゃえば？ついでに、わたしと艦

長のも～」

作者「……ふむ……」

ナギ少尉「ついでに作者の海外での体験も～」

作者「……話変えよう…武メインがもう二話ほど続くかな…鉄原ハイブ攻略含めてね」

ナギ少尉「そういえばそろそろあ号も危険感じないの？」

作者「感じはじめてるなぁ…だから対抗種、いやこの場合は模索か…でてもおかしくはないな。
何しろ物量、遠距離で負けてるから…
が、鉄原ハイブ戦には間に合わないな」

ナギ少尉「さて……いよいよ次回は、鉄原ハイブ攻略地上編…お楽しみにぃ」

第１２１話　鉄原ハイブ攻略戦　投稿日２０１１０５１４

２００１年１０月２５日

タケルはシュミレーターの中にいた。

（腕は前回の世界よりか若干あがってる?位なのか…
けどハードに頼ってるよなこれは…）

ＯＳがあったとしても、ハードがここまで発達してなければ、
戦死者でてもおかしくないな…と、
対ＢＥＴＡ戦に関しては、タケルは判断していた。

機体に関しては、
（身体にかかる負担もあんまりないし、機動も想うように動く!!
ストレス感じね～!!）

タケルは湯水をえたごとくすぐに新型機体、魔不知火に馴染み、
実機をテスト始動後、対人シュミレーターに入ってる…とのわけだ。

武の歓迎をかねて、１ｏｎ１のＡ－０１内対人戦を開いていた…
勿論、武は勝ち続け…

伊隅隊長にも三次元機動を用いて勝ち、
速瀬と良い勝負をしていた。

そして……
「よっしゃー！！」

『もうなんなのよ！！この変態機動！！』

見事にコクピットブロックに高周波ブレードを突き刺し、
スクランブルポット排出の判定を与えた。

『我が隊が事々くやられるとはな……白銀、しばらく休憩のち別の者と対戦だ』

「了解です」
（けど別の者？？Ａ－０１の皆とはあたったよな…）

しばらくすると…
「白銀、出番だぞ」

「ういっす」

シュミレーターに乗り込み、起動する…

市街地戦…１ｏｎ１…

（相手はまだ反応なしか……）

『ウォォォォン』

外部センサーが音を拾い、咄嗟に音の方向へと機体を向ける。

（な、何？今の狼のような叫び声は…）

機体レーダーに感。

（なっ…！！）

ターゲットは、物凄いスピードで地上を接近してくる。
隠れようともせずに…

（嘗めやがって！！一斉射で決めてやる）

武の機体は、予測地点にむけ…
（今っ！）
ザクマシンガンを斉射するも…
（ちぃっ）

相手の機体はビルを蹴り、影に隠れる。

（なろっ！！）
上空に踊りで三次元機動をかますも…

（なっ！どこだ？）

捕らえたはずの敵機がいなく…

アムロさんも……
シャアさんも……

魔撃震カオル仕様がずっこいと二人していいはじめたので、
同一機体にして再戦

負け

カオル仕様に興味もち…
チートを理解し、（なろっ！！）
上空に踊りで三次元機動をかますも…

（なっ！どこ？）

ビィー

機体を滑らすか、接近警報がなり響くかどっちが早いか…

滑らしながら牽制しようとマシンガンを向け…

（撃震！いや四足？）

撃ち放つ。

撃震はまたもさけ…
更に接近し大きな口で噛み付いて…

『白銀機コクピットブロック損傷甚大、大破。状況終了』

「なんなんだよ!!あれ!」

思わずこぼれでた…

「四足?いやゴリラか……こっちの反応速度遥かに上回りやがって」

「白銀でも無理だったか…」

「隊長、あれなんすか?」

「魔撃震カオル仕様だそうだ…」

「お疲れ～」

(あ、あのまりもちゃんの…)

「カオル殿、ありがとうございました」

「いやいや、結構楽しめたよ」

「カオルさん、一つ質問なんですが、あの機体は…」

「エヴァ仕様…生体駆動だね」

「！！…筋肉ついてるんすか？」

「あ、知ってるか…ま、中身はまるっきり違うね」

「乗せてもらえません？」

「コクピット改修とかしてないからＧがなぁ……ハイブ戦後ならいいよ」

「わかりました。そういえば、ＯＳ改修したのカオルと聞いたんですが、マジですか？」

「ああマジだよ」

（なら…先生に頼むよりリスクなさそうだな…）

「実は…」

コンボについて提案してみて、
追加実装をお願いし、約束まで取り付けた。

２００１年１０月２６日

日本海洋上……鉄原ハイブから８０ｋｍ遠方…
ビックトレー砲艦仕様が海の上に浮かんでいる。
膨大な出力によるエアーの力で洋上にうかんでいるのだ…

甲板に設置されている６１ｃｍ砲が、
グリン
と砲身の向きを変え…
『グリン』とまさに１秒もかかってない…
そして、

「全主砲、勢力射…てぇ！！」

一斉に１０隻のビックトレー砲艦仕様から一隻３６砲塔の３連装、
１０８発の砲弾…
合計１０８０発の６１ｃｍ砲弾が放たれる……。

射程に関しては、衛星によるＧＰＳ補助で直視しなくとも、
弾の届く限り可能…といっておこう。

辺りは０．５秒毎に連続して発射される主砲からの発射炎で、

朝日の様に明るくなる。

０．５秒毎に６１ｃｍ砲が撃ち出され、エアーの力で浮いてる場合…
普通膨大な衝撃が襲い掛かり、たちまち艦体が反転するだろう…
ましてや衝撃で人間はクリームの如く溶けるであろう…

あの大和でさえ主砲発射の衝撃を完全に消すために数秒ほど必要なのであった。
ましてやそれが連続して襲い掛かるのである…

が、鋼鉄の咆哮技術でつくられた６１ｃｍ及びそれを支える技術…

自動装填装置により、仰角戻し、薬莢排出、
再装填、再度仰角までの主砲発射工程が０．５秒…

…因みに大和型は約３５秒から４０秒かかる。

また襲い掛かる衝撃については、装備してある、防御重力場の恩恵により、海に逃がしているのである。

よって……毎分１２９６００発もの６１ｃｍ主砲弾が発射可能となり、
膨大な弾数が、嵐のようにＢＥＴＡにおそいかかる。

対して、それを迎撃せんとするＢＥＴＡ…

しかし…インターバ

ルが１２秒、照射３秒と仮定しよう…
その数の弾を迎撃するためには最低でも、
単純計算で、照準照射時間なし、インターバル計算で、
最低でも２５９２０匹もの膨大な数の光線級、
及び重光線級の数が必要だった。

しかも生体レーザーは照射し、あっためて高温にして破壊するもの。
照準反応があり、蒸散塗膜の恩恵とはいえ、逃げる時間があるのもわかるだろう。
ましてや、薙ぎ払うなど光線級はできないのである。
単一目標に対して僅かに仰角等をずらして追尾する事は可能だが…
そう狙撃手なのである。

よってこの襲い掛かる主砲弾を全弾迎撃には破壊照射時間をいれると…
数は膨れ上がり…
最低でも３５０００匹の光線級は必要になってくる…

現状鉄原ハイブには２万を越える光線級の数はいない模様のうえ、
また迎撃すべきはミサイルもある……

確かに光線級及び重光線級は、狙撃手であり、
正確無比な遠距離直線攻撃を得意としていた。

しかし、目標定めて破壊し次の目標定めて破壊するのに最低でも１

２秒はかかるのである…
全弾攻撃するのに、最低この弾数及びミサイル群の数には、
６万の光線級は必要であろう……

基本、光線級は生産にG元素を要し、数は全体の約１%前後…ハイブ防衛要員がいたとしても…２%位、
鉄原ハイブは現状４０万匹のＢＥＴＡがいる…

主力構成はやはり小型種の戦車級がメインにしめている…

鉄原ハイブの光線級がすべて迎撃にでていて、
襲い掛かる弾、ミサイルを迎撃せんと光の矢を空にあげる。

しかし、現状数は光線級は光源からしても万を下って、７０００位だった…

結果的に光線級が、音速近くで襲い掛かる主砲弾及びミサイル群の、全弾を迎撃出来ずに、光線級自身の回りに着弾し、

命中させる必要はないのである…

その６１ｃｍ主砲弾は１５ｍ範囲のＢＥＴＡを肉片と化し…
その弾の破砕威力でもって次々と光線、また釣られて地上に出ている、
絨毯の如く湧き出た他の種も沈黙し……

瞬くまにＢＥＴＡを示す光点がきえてき、
主砲弾射撃開始後…ミサイルでの正確さも含め、

ものの２０分でハイブ周辺は光の矢どころか、
赤い光点すらなく、沈黙していった。

地形をかえるが如く撃ち込まれた膨大な数の艦砲射撃…
過去の戦いにおいてもせいぜい数千発、
よくて万発…

アメリカ海軍の全戦艦を合わせてやっと毎分１５００発を出せるのが精々だった…

それが覆される膨大な砲弾…
まさにＢＥＴＡにとっての大災害…

それ程異常な弾数が使われ…前哨戦は終わり…
作戦はフェイズ2、上陸に移行する。

ｓｉｄｅ～武～

武はまだシュミレーターの中にいた。ハイブ攻略の最終調整の為だった…

（うへぇ…）

異世界軍の攻略情報は流され、
Ａ－０１が属する突入部隊の出撃は明日となっていた。

「隊長」

『どうした？白銀』

「前回佐渡島ハイブ攻略のときに、このモンスター戦艦いました？」

情報が流され、武は６１ｃｍを発射するビックトレー砲艦仕様にマーカーをあててた。

『こいつははじめてみるタイプだな…
ハリネズミの如く、ミサイルを射出するのは知ってるが…』

「この射撃間隔の０．５秒って…なんなんですかね？
確か帝国軍の大和で４０秒だったと思ったんですが…」

『カオルが導入した異世界の技術でしょ…どうせ…
一々反応してたら頭がおかしくなっちゃうよ』

『そうそう、私たちの魔不知火に使われてる武器だって…
入れられた当初なにこれ！だったもの』

『という事だ、武…深く考えたら負けだぞ。あの副司令も一回壊れ

た事もあってなぁ…』

「うへぇ…先生がっすか…」

『そういった事だ…さっ、続きをするぞ！』

（そういえばチューリップとか、
回りを囲んでいるガンタンク？？かなぁ？とかワケワカメだしなぁ…
これで戦死者が減るなら歓迎だけどな……物足りない…）

……
カオル報告

コンボねぇ…セミオート、ショートカット…

第１２１話　鉄原ハイブ攻略戦　投稿日２０１１０５１４（後書き）

ナギ少尉「作者大丈夫？」

作者「ゲフゲフ」
リアルに風邪ひいてます…いきなり寒かったんすもん…
１２日でしたっけ…関東地方に雨が降って気温が１５度以下になって…

そこまで下がると思ってませんでした。

ナギ少尉「ん～作者がこれだと…相手は無理そうね」

屡伊「わたしでいいんじゃない？」

ナギ少尉「ルイズちゃん」

屡伊「渚屡伊よ、屡伊」

ナギ少尉「えへへ…ごめんね…で、新しく加入した武について一言」

屡伊「カオルがいなかったら…なびいたかも…が第一印象」

ナギ少尉「成る程ね～作者とは？」

屡伊「そこで咳して寝込んでるクズよりか武やカオルがいいわ」

ナギ少尉「だそうよ…早く風邪治して次話にとりかかりましょ」

［なんとか…が完全油断した］
ゲフゲフ
チーン

水っぱなをかむ作者

ナギ少尉「作者…この後二日間夜勤なのに…
１６日分仕上がるの？…とりあえず次回予告ね…次回鉄原ハイブ攻略戦地上戦及び突入　せーの「おたのしみにぃぃ」」

第１２２話　鉄原ハイヴ攻略戦地上編　投稿日２０１１０５１６（前書き）

当初地下攻略も…でしたが、その部分仕上がりませんでしたので、
予告では地下と入ってましたが変更となります。

ご了承を

第１２２話　鉄原ハイヴ攻略戦地上編　投稿日２０１１０５１６

２００１年１０月２６日、日中

場面は異世界軍以外の軍隊にうつそう…

是非とも大東亜連合が、悲願の朝鮮半島攻略に加わりたいと、
特に元韓国、北朝鮮の軍人達の要望があり、

彼らは今回参加する、日本帝国軍と同様に福岡湾に集結した揚陸艦に乗船し、

一路釜山上陸を目指して既に出港していた。

そして…

『ＨＱより各部隊、光線級確認できず！！上陸せよ！！ｇｏ！ｇｏ！ｇｏ！』

既に異世界軍の砲撃や、ミサイルによる遠距離射撃により地上部分に関しては反応なしの為、
容易に上陸できる状態だった…

一斉にスーパータンカー改装型揚陸艦から飛び立つ戦術機達…

我先に陸地を目指す大東亜連合軍機…
だれもが１番乗りを目指し…

そして、
『よっしゃ、１番乗り！！サンダー１１、上陸したぞ！！』

『くっ負けた…』

『先は長いんだぞ、支援部隊上陸の警戒展開急げ』

本格的上陸の為、警戒ラインを広げ支援車両、及び戦車等の上陸をまった。

そこに、今では旧型と言えるビーチヨーイング式戦車揚陸艦の、
雲峰級揚陸艦及び高峻峰級揚陸艦等が、
ぐんぐんと砂浜海岸に接近し、頭から突っ込んできた。

砂浜海岸部分に開口部を開き、橋げたを地面に下ろして、

そこから大量に戦車及び支援車両を吐き出してきた。

日本帝国軍だけは、ＬＣＡＣ－１エアクッション上陸艇が母艦としきりなしに往復している。

数台だが自力生産し始めた６１式戦車改も見えはじめた。

本来なら海神が先に橋堡塔になるべく切り込むはずだが…

『隊長俺らは…？』

『待機解除になった…今回は出番無しだな…』

『え～……』

海の中で待ちぼうけ、無駄な燃料をくってた事を付け加えておこう。

１番燃料をくうのが海神とセットされている潜水艇なのに、
約３００隻もの大群を待機させていた…

港湾部分に大規模輸送できる輸送艦の直接接岸上陸は、
岸壁施設がＢＥＴＡにより完全に破壊され、
修復しないと望めない為、今回は見送りとなる。

無抵抗のまま上陸を無事終え、展開を終えた集団は、
一路鉄原ハイブのある方向、北北西に進路をとり検索てがら進軍してゆく…

海岸部分はまだ残骸…光州作戦での撤退しきれなかった機体、
建物の崩壊跡等があったが、

内陸部にすすむにつれ、人工物はなくなり、

険しい山は削られなだらかな山となってる……、
が、ハイブに近づくにつれ…異世界軍の砲撃の後のクレーターが増えてくる。

ミサイルの場合なら正確にＢＥＴＡに直撃はする。
が…艦砲射撃は正確には直撃できず、
付近に着弾し爆発による殺戮を目的とされていた。

「おいおい…やり過ぎだろ…」

「これ…ｃｍ砲弾の跡なんだ？」

「ブラボー１２こっち引き上げてくれ！！」

『ＨＱ、これ以上凹凸がひど過ぎて補修なしでは、
装輪車両ではすすめない。
拠点構築地点にしたいが良いか？』

『こちらＨＱ、検討する』

タイヤ付きの弾薬補給トラック、兵員輸送車両等タイヤのが足がとられ始める。

それにより、支援火器車両等が弾薬トラックが引き離されるとただの一発屋になってしまう…

の為、工作部隊で足場を治さないと進めなくなる車両が出始めたので、
この付近を拠点とし、土地をならしながら支援車両部隊は進む事となり、

戦術機部隊及び踏破可能なわずかな６１式戦車改部隊と、
戦術機随伴のホバートラックは、
支援部隊の護衛を残し、ラインをハイブ方向へと進みはじめる。

一方　異世界軍の上陸部隊はというと…

前回同様、佐渡島ハイブ攻略時の流れ同様に海上からの上陸となった。

上陸待機場所の選定だが、最初対馬も候補にあがったが、
過去の日本本土強襲時に壊滅的被害をこおむり、
撤退もままならず、民間人全滅の憂き目にあったため、
対馬は軍事としても放棄、無人の島になって荒れ果てていたため、
選定漏れしていた。

竹島は小さすぎて勿論除外。

その為佐渡島基地からの出撃となる。

大東亜連合軍の上陸に合わせ…
佐渡島基地待機場所から飛び立つベースジャバー。

それに乗っている陸戦強襲型ガンタンク、チューリップ、兵員輸送トランク、ザメル、
またＢ－０１等有人部隊の半数が参加している。

異世界軍が海岸からそのままベースジャバーで上陸し、
ハイブを視認しはじめた辺りで、

大東亜連合軍、日本帝国軍の大群がハイブを遠距離ながら視界に入れた……その時、

ビックトレーの６１ｃｍ砲の１０８０発にも及ぶ主砲弾の一斉射撃により…
直撃をうけ崩れ落ちるハイブモニュメント。

『ウオオオッッッ！！』

『モニュメントが崩れ落ちたぞ！！』

（やはりこのタイミングだよなぁ～）
カオルは横浜基地の司令室において、指揮をとっていた。

「各隊は割り振られた門を確保急ぐように」
オペレーターが指示を飛ばしている。

ベースジャバーから降り立った陸戦強襲型ガンタンクや、魔ドム、
魔不知火等異世界軍機や、
日本帝国軍の更新済みの撃震、不知火、

大東亜連合のＦ－１８、Ｆ－１６等が警戒しながら門の確保へとすすむ。

またチューリップを中心とした、支援部隊はドームを作り、仮設前線基地をまたたくまに構築し始める。

仮設前線基地が約１５分で完成し、ドーム内部のチューリップから、エアロスタットが飛び立ち始めた。

「各機、門より噴出するＢＥＴＡに備えよ」

釣り天秤が開始された。

エアロスタットを潰そうとひっしにおいかけてくるＢＥＴＡ達、地上の門に差し掛かりブレーキをかけずに地上にでると…膨大な火線にさらされ、力つきる…

その作業の繰り返しになる。

前回と同様だが、この殲滅作業は、いかに負担を減らすのが重要だった。

何故突入が失敗するのか……

四方八方からの膨大な物量に潰される。

まさにその一言だから、それを減らすには重要な作業の一つである。

しばらく安定した作業が続いて、１時間程たった時であろう…

異常事態を知らせるコールがはいったので、

部屋から外れていたカオルは司令室に急行した。

「現地ホバートラックより入電、大規模地下振動感知、地上へ近いてる模様、
警戒警報発令中」

「どのような規模かの情報は？」

「……巨大な筒？…以前報告あった母艦級と確定！！」

「ほう……いつ見えるか？とおもったが、
やっとお目見えか…な？」

「出現予定地の解析急ぎます…範囲でました。
…出現予定３箇所、内２箇所にドームがあります」

「ドーム近辺に出現だと厄介だな…どれ位後だ？」

「約２０分後になります」

「門の辺りではないな？」

「はい」

「出現予測地域に待機中の部隊をむけろ、出現後1分以内に掃討する!!」

…

「むう……やはり狙ってるか?」

2体の出現予測範囲がどんどん確定してきて、ドーム中心部を目指しているようであった……

「まもなく、3体とも地上到達!!」

「まぁいい……ドーム外にでる残りの1体の出現位置に集中しろ」

「Tマイナス10、9、8、7、6、5、4、3、2、1」

〜〜現地〜〜

段々と高まる振動…

出現予測範囲が急激に狭まり、待機部隊が出現位置にむけ銃口をむける。

★
★

『Ｔマイナス１０、９、８、７、６、５、４、３、２、１』

振動が消え、
土煙をあげ、巨大な円筒系の巨大なＢＥＴＡ母艦級が出現した。

その巨大な胴体および開き始めた、開口部にむけ火線が集中される。

開口部から体内にいたＢＥＴＡ達が踊り出ようとするが、
集中砲火に阻まれ、開口部から出れずに崩れ落ちる。

胴体部のほうでは投擲されたＳ－１１ドリルミサイルが取り付き、
垂直に体内にドリル部分が入っていく……

火線が集中し、３０秒後……
体内でＳ－１１が爆発し、
開口部から爆炎があがる…
崩れ落ちる母艦級であった。

さて他の２体の母艦級はというと……

ｓｉｄｅ～母艦級ＢＥＴＡ～

異常反応を感知し、そこを突き破ろうと地上を目指していたが…
地上に敷き詰められた固いものにぶつかったため、それ以上進めなくなってしまった。
ひっしに削ろうとするも異常に固い物体に阻まれたため、
体内にいた光線級に指令をだしたのだろう…
開口部から光を発した。
が……今だ２０分たっても溶けず進めずの状態になっていたため、
逆走し別の箇所から地上にでようと判断したのか、
動きだそうとした瞬間…
いきなり大爆発をおこして…体内にいたＢＥＴＡ共々死滅していった。
ｓｉｄｅ～母艦級ＢＥＴＡ～ｅｎｄ
ドームを形成する際に地下進行を予想し、
足場もルナチタニウム合金の３ｍプレートに、
交換して組み合わせ敷き詰めていた為、
母艦級は合金のプレートを突き破れずに地上にでれなかった。
で、プレートの一部をコバッタが外し、投下できる穴をあけると、
Ｓ－１１ドリルミサイルを穴からいれ、即プレートをはめ込む。
爆発するが、その爆風はプレートに跳ね返り、
掘っていた穴の方向へ…

との流れであった。

ドームのチューリップに引かれたのかはわからないが、
奇襲せんと掘り進んできた母艦級も程なく退治され…

その後殲滅作業は続き…

『ハイブ攻略作戦はフェイズ４へ移行する』

Ａ－０１やらの突入部隊が横浜白凌基地から出撃していく。

……

カオル報告

いよいよ出撃

第１２２話　鉄原ハイヴ攻略戦地上編　投稿日２０１１０５１６（後書き）

ナギ少尉「まだ作者駄目みたいね」

布団で寝込んでいる作者…

二日間夜勤だったので今日から二日間お休みです。

ナギ少尉「相方がいないと…カオルは忙しそうだし…艦長はきてないし～」

屡伊「わたしが空いてるよ～」

ナギ少尉「ダンナさんとの相手はいいの?昨日おさかんだったんでしょ?」

屡伊「豪沈してあげたわ♪だから元気いっぱいね～」

ナギ少尉「あたしも艦長とそうなりたい…」

屡伊「既成事実さえ作っちゃえば良いのよ。作っちゃえば…責任感ある男性なら…ね」

ナギ少尉「そうねぇ……さて本編の感想に戻らなきゃ…
６１式戦車改初お披露目ね～」

屡伊「あ、日本帝国軍が作った車両ね。ホバートラックも見えてるし」

ナギ少尉「車両としてはやはり優秀といえばこの二車両よね～」

屡伊「他は足止め食ってるみたいだから、何かしら開発アクションおこすのかしら？」

ナギ少尉「かもしれないわね……あっ！！」

布団で寝ている作者が唸り始めた。
熱が上がり始めたようだ……

ナギ少尉「ちょっと……大変になりそうだから…」
と白衣を纏うナギ少尉。

「とりあえず次回予告ね…鉄原ハイブ攻略戦突入編
良い子にしてないとお注射しちゃうぞ♪」

「ぎゃ～～」

「あ～血管ずれたぁぁ」

「屡伊！！素人が注射器弄るんじゃないの！！あっ空気おくっちゃ……」

第１２３話　鉄原ハイブ突入編　投稿日２０１１０５１８

２００１年１０月２７日未明…

ｓｉｄｅ～武～

（ベースジャバーの船体内部の休憩室って結構良いよな～）

武は奇数となり、エレメントを組む相手がいない為に、
一機でベースジャバーを利用してた為、
本来二人用の休憩室を一人で利用していた。

二人用といっても、長距離運用および、
遠征先での臨時拠点も想定されている作りだ。

仮眠ベット、簡易シャワー、ドリンクバー、トイレ等、
身体を休める施設がついている。

約２時間後

『各員へつぐ、まもなく作戦空域だ。搭乗し出撃にそなえよ』

武はそれを聞くと、係留中の機体に搭乗すべく、ハッチから甲板にでる。

ハッチから機体には移動中でも搭乗できるように、エアシールドの役目をはたす、

チューブが直接解放してあるコクピットへと繋がっている。
チューブ通路をへて機体へ搭乗し、ハッチを閉め始動しはじめる。
自動的にベースジャバーとつながってたチューブが収納され、各係留用ジョイントが解放…

『武、右前方気になってた艦が見えるぞ』

まもなく陸地に到達する辺りで、海面近く、１０m近辺を飛行中していたので、
話にでた艦影が朝の薄い光のなか、ぐんぐん大きくなってくるのが見えた。

砂浜海岸に上陸済み、増援に警戒中のビッグトレー砲艦仕様がはっきりと見えてきた。

「大和や紀伊よりでっかいんすね…」

『間違いなくな…』

（レビル将軍が乗ってるシーンだけだったかな?、でて来なかったんだけど…
こんなに砲をつけたら、かなり無敵じゃ?
しかも１０隻か……）

一隻で大和の４倍の広さ…甲板にハリネズミのように６１ｃｍ砲３連装が備わってるのが視認できた。

（単純に１隻で、大和型の４から６隻分の火力あるんだよな…しかも地上に乗り込んでいけるし…スゲーよなぁ…前の世界でこれあったらかなり楽だったかも…）

通過し、朝日がバックに入った為即座に修正がはいる。

そのまま、突入する門の近くに着陸、機体を降機させた。

突入予定部隊が集結する。

陸戦強襲型ガンタンク、魔ティエレン対空型、チューリップ、その他有人部隊のＡ－０１以外にも、魔不知火、魔ドム等もいる。

『各機！これよりハイブ内部に突入する……大陸への足掛かりになる重要なハイブだ。陥落させるぞ！！』

『了解』＊多数。

『Ａ－０１続け！！』

門より、カオルのる魔撃震に続いてＡ－０１各機が、またチューリップ、陸戦強襲型ガンタンク等が続いて突入する。

武は門に突入すると…違う印象をうけた。
既に補修作業入って構造物が変更されていたのだ。

（まだ占拠すらしてないのに……
しかし、こうまでお膳立てされてるとはなぁ…）

データーリンクが正常なら、ほぼ最深部までのＢＥＴＡが居ない…
という事だった。

（まえの世界だとハイブ突入でウジャウジャいたＢＥＴＡがなぁ…
あんなに釣られて地上で狩られるとは…
囮…いや危険だよな…）

武は一瞬、釣りを考えたが即座に否定…

（戦術機だと、囮になるにしても大きすぎる的だし、
沙霧大尉位の技量がないと常に成功するとは限らない…よな）
視界にエアロスタットが入る。ハイブ内部を監視中の模様だ。

（その点あれは優秀だよな…
かなり小さいくせに素早いし、人的被害もまずはない……
ＢＥＴＡに対して有効な武装はないとはいえ、もの凄い勢いで釣れ
てくるし…
何処の世界のもんだろう？）

武はターミネーター４は勿論知らないため、それの派生する兵器は知らなかった。

（ん～宇宙大戦？？）

な考えをできる程、ＢＥＴＡは駆逐されクリアなエリアが続いていたのでしばらくまだ続く。

（けど陸戦強襲型ガンタンクか……見た事ないんだよな…大量にいるこれはさ…
多分ガンダムの世界の機体なんだろうけど…何時のだろ？
Ｆ９１以降？けどビームメインの筈だから……）

陸戦強襲型ガンタンクに視線を武は合わせていた…
そして魔対空型ティエレンにも…
最後にチューリップ…

（極めつけはこれだよなぁ…
まさかあのチューリップだったとはさ…
確かに殲滅しながら進む考えもあったろうけど…
補給拠点をもってくるとはなぁ…）

セミオートモードの状態て追従設定だとそんな考えもできる…
普通は警戒する為のモードなんだが…

『まもなくＢＥＴＡどものいる一つ手間の広間だ…

今回も3つの広間を突破すれば…目指す目標の反応炉がある…
いいな新人ども、無理はせずに殲滅するぞ』

『了解』＊5名。

（いよいよか…この火力重視の編成の力みてみっか）

『突入!!』

編隊をくみながら、陸戦強襲型ガンタンクを先頭に、横坑に突入しはじめた。

横坑ににじみでたＢＥＴＡを駆逐しながら、約2分後…
陸戦強襲型ガンタンクがＢＥＴＡのいる広間に突入し、砲火をあげる。

片っ端から砲撃を浴びさせ、貫通、肉片にさせる。
魔対空型ティエレンが、頭上にぶら下がる小型種に対して弾幕をはり、
近寄らせずに肉片と化す。

（最初は圧倒的なんだよな……）

弾薬の切れた陸戦強襲型ガンタンクや、魔対空型ティエレンが後方に下がり、
その空いた穴を待機していた機体が埋める。

有人機のザクマシンガンの空ドラムマガジンが吐き出され、

新たなドラムマガジンが装着され火線が再び火を放つ。
弾薬ストックに、横にきた陸戦強襲型ガンタンクから撃ちながら、
ドラムマガジンをうけとり、補充する。
弾を絶やさず、補充する必要のある機体は直ぐに交替し補給地点に
後退する。
その際にマガジンを搭載し前線にもどる。
武は、機動する事なく、近寄らせない弾幕のなか……
（俺の囮の必要もないな……）
と少し落ち込みながら着実にキルスコアをあげていた。
広間突入後…約５千のＢＥＴＡがいる広間は１５分たらずで確保さ
れた。
確保後排土板付きの陸戦強襲型ガンタンクが除去作業を行い、
チューリップが前進をしてきた。
『次は合流する広間、主広間の一つ手前だ…、
Ｔマイナス６００に突入をする。時間合わせ３、２、１』
他の経路での広間の占拠が落ち着いてきた為に、
次の広間突入のタイミングがとられたようだ。
（他の部隊は…アムロさんとか、沙霧大尉とかか…）

データーを呼び出し、確認していた。

『突入！！』

門級の巨体がくり抜かれ、横坑に突入…
駆逐しながら広間に突入した。

広間を埋めつくすＢＥＴＡ達に弾薬を食らわせ隙間を広げる。

ＢＥＴＡ達も突入してきた災害に反応し駆逐せんと接近してくるが、
仲間の死骸に邪魔され、その間に息絶える弾丸をくらう…

小型種が隙間をぬって接近するが、
火炎放射器の炎を浴び燃え尽きる、
レッグブレードに触れ真っ二つにされる。

今回は陸戦強襲型ガンタンクのキャタピラに潰されたりは、
いない模様だった。

『ワッハッハッハッ、食らえ食らえＢＥＴＡどもぉ』

誰かがオープンチャンネルで叫んでいる……

（どの部隊の人だ？…これか発信源は…）

見ると魔グフに更に個別に改造を施したのだろう……

１４？いや、１５丁のザクマシンを増設マニピュレーターでとり扱い、
阿修羅の如く弾幕をはっているのがいた。

（……）

武の身体は自然とＢＥＴＡに対して銃口を向け弾を放つが、
それに対しては思考が停止した模様だ。

からのドラムマガジンが放出され、
更に空いてるマニピュレーターからドラムマガジンが装着され…
ものの０．５秒位で再び銃火をあげる。

（阿修羅か…）
やっと思考が再開した模様だった。

（戦いが終わったら聞こう）
武はそう決めた。

門から突入した広間の占拠は…合流した事もあり、２０分たらずで、
約１万２千のＢＥＴＡは駆逐される。

再び排土板付けた陸戦強襲型ガンタンク等が、
活躍している間に補充を完了させている。

ものの１５分程で完了し…

『次の主広間突破するとラストだ。準備はいいな？……いくぞ』

カオルの乗った魔撃震の右側に、
光輝く巨大な剣が出現した。

「隊長…あれは？」

『理解不能だ…気にするな、本人に聞け』

『人間じゃないわよ～本当に…
じゃないと屡伊の胸のサイズがアップするわけないじゃないの』

『なっ…中尉！！』

『え？サイズアップしたの？』

『AからBにね…間違いないわ。もんだ感触からね』

『こらこらお前ら、ここに顔真っ赤にするのがいるんだ…自重しろ』

妙な話になりかけたので隊長が自制させた。

『まぁ…疑問は、本人に聞くのが1番だな』

門級の巨体がくり抜かれ…
『突入！！』

押し出され向こう側にいたＢＥＴＡが潰される。
横坑内部に突入し駆逐しながら広間に…
ＢＥＴＡが９地面が１な程しきつまっている主広間にスペースを作りながら突入する。

主広間内部には、約２万匹のＢＥＴＡが詰めていた。
要塞級が駆逐せんと近寄ろうとするが、
真っ先に中央部に弾をくらい、
その巨体を沈める。

要撃級が叩こうと近寄よろうと試みるが、
近寄る前にザクマシンの弾に撃ち抜かれ身体を横たえる。

突撃級は味方の死骸に邪魔され、
戸惑っているうちに盾となる甲殻が貫かれそのまま鎮座する。

更に後方にいたＢＥＴＡは、２２０ｍｍキャノンから放たれた榴弾の破裂により肉片と化す。

天井からは近寄ろうとぶら下がっている小型種がよってくるが、対空砲火により近寄る前に命たたれ、ぼたぼたとおちてくる。

主広間突入後…４０分、
火力を集中し…主広間内部最後の一匹を駆逐…

そのまま横坑に侵入し、
『抜刀！！銃器使用禁止！』

近接格闘で、残りすくないＢＥＴＡを駆逐しながら反応炉の鎮座する大広間に突入…

生まれたばかりのＢＥＴＡを切り捨て、反応炉を確保した。

Ａ－０１の皆が警戒するなか、取り付いてる機体から解除し、生身を反応炉の前にさらしだす。そして右手を反応炉にせっし……

武には何かをしているようには見えた。

「隊長、カオルわざわざ機体の外に生身で出て、何してるんですか？」

『ああいった事をして、頭脳級を支配下におさめ、スパイに仕立てあげると聞いてる。
カオルが言うにはコンピューターだから可能…との話だな』

「は、はぁ…」

（……使徒の力か…
あ～…だから渚カオルか……
渚カヲル本人ではないよな…）

『諸君、当鉄原ハイブは現時点でもって占領下におさめた。

鉄原ハイブ改め、鉄原基地とする！！』

『大将閣下バンザーイ』

『ウォォォッ！！』

２００１年１０月２７日午後１時０２分…
鉄原ハイブは陥落した。

（宣言通りなら…もう反応炉は人類側なのか…
外見はかわらないけどなぁ……
しかし、この調子なら月も落とすんじゃね？
早く行ってみたいな…）

歓喜にあふれる友軍機をみながら、
武は前の世界では叶いそうになかった事を思いはじめた……

前の世界でそのままいたとしても生きている間は叶わなかったろう…
人類の大反抗を……

……

カオル報告

鉄原ハイブ攻略成功しました。

第１２３話　鉄原ハイブ突入編　投稿日２０１１０５１８（後書き）

作者「おはおう…」

ナギ少尉「作者風邪は？」

作者「なんとか治りかけかな？まだ喉がイガイガするが…
あとリアルネタだがレンタルビデオ返却しなきゃ…」

ナギ少尉「延滞金だもんね～」

作者「１０００円さ…アハハは…ｏｒｚ」

ナギ少尉「…せこ」

作者「ん～なんとなくこういったのでお金使うのはやじゃん…」

ナギ少尉「で、なんのＤＶＤ？」

作者「ＧＡＭＥつう米映画…まぁ面白い？？」

ナギ少尉「何故に疑問形？」

作者「好きな人は好き、嫌いな人は嫌いだからなぁ…操られてっうのがね」

ナギ少尉「なる程ねぇ…さ、作者リアル近況は無事に復活って事でいきましょ♪
さ、鉄原ハイブ攻略したわねぇ…次は月に攻略武ちゃんつれてくの？」

作者「まだ攻略部隊が作製中…まだ早いよ」

ナギ少尉「じゃトリップを挟むのかしら？」

作者「その前に鉄原ハイブの後処理とかだろうな…
まだ人材は増やすから行くとして…」

ナギ少尉「作者、あと誰つれてくるの？また他の世界にも？」

作者「あれは是非ともほしいし、武の壊れっぷりも見たいし…
あとロマンもつれてきたい」

ナギ少尉「ん？なにか聞こえる……どうは～はるかなり～…何の曲？」

作者「……ヒントにつき秘密だ」

ナギ少尉「ちぇ…えっと次回予告は……あ号の対策会議…鉄原ハイブ攻略後じゃないの？」

作者「ああ、サブタイトルは間違えてないよ…次回おたのしみに」

ナギ少尉「まったね～」

第１２４話　あ号の対策会議　投稿日２０１１０５２０

ｓｉｄｅ～あ号～

（ここ最近の災害対策について考察）
あ号の脳内会議の模様だ。
本来ならもう少し単語だけで飛び交っているが、
わけわからなくなるため、
フィルターをかけて訳されているのをご了承頂きたい。

（つい先日の　２０号ハイブの戦力減少について、
戦力追加増援するかどうか…

現状救援要請もなし…
これ以上の増援は不要との判断）
鉄原ハイブの件についてまとめたようだった。

（が、不安要素増大は事実…
とくに、長距離飛来して壊してくる物体について…
なんだかの対策は必要と考えられる）
大量にトマホークミサイルが飛来してくる中、
生き延びた個体からの情報が入った模様だ。

（試作型必要か？

考え中考え中考え中……

必要と思われる）

さすがに…延べ約８０万発くらうと対策を考えはじめる。
少しやり過ぎた模様だった…

（試作候補策定……

遠距離に投擲できるのが必要。

何かないか？

災害どもは筒をつかってこちらを壊してくる）
脳内は、欧州や東アジア進行の際の記録から、
離れた箇所から撃ち込む自走砲を見ていた。

（それを流用しよう。丸型の試作型を、それを長距離投擲する試作型を選定してみよう）

弾も作るようだった……

その後、各ハイブの個体数の配置調整に入り、
中心部から少し東側への移動を命じた。

ｓｉｄｅ～あ号～

＝＝鉄原基地＝＝

鉄原ハイブを占領後直ぐに前線基地化に取り掛かりにはいった。
またもやレビル将軍が佐渡島基地から転任してきて、
基地司令官として赴任してくる。

高速移動できるルーロス改に乗せてきたので、スタッフが降りるとともに、
そのまま拉致し現地の視察にむかった。

ちなみに今回はＢＥＴＡ迎撃ルート上に余裕があるため、
従来兵器の発想をそのまま流用しようと考えてた。

旧北朝鮮と中国の国境部分図們江…
川は山が削られ、森林がなくなっていたため、海抜の高いところは
水の流入がなくなり、干からびていた。

その黄海に流れる河口部分、
朝鮮側の部分最短部のつけねに、
今回は建設しようと現地視察にきていた。

ルーロス改の機体を透化させ、スクリーンに設計図を浮かべている。

「ここになにを設置するのですかの？」

「巨大な掘りさ…焼却場のね…」

高さ８０×横８０の巨大な掘を川沿いに建設し、その先に移動する際は板わたしにはなるが…
進行をその部分で止められるようにはしておくつもりだった。

「この基地の主な防御兵器は、やっぱりこれにしようと思ってる。
まぁそれを１０層も重なれば飛び込んでくる、焼却場にはなるさ…」

「あるいみＢＥＴＡの特性をついた兵器ですのう…」

全長約８００ｋｍの大工事となるが、この掘りを作る事により朝鮮半島の元韓国側が安全、北朝鮮側は…まだまだだが…
一応鉄原基地より北西側は戦場にもなる為である。

ただし……
機体をそのまま黄海の方にむけた…
横断経路できた際には…
（浅い水深が問題なんだよなぁ…）

平均水深４４ｍ…光州作戦時にはＢＥＴＡは陸路を伝って来たため幸いにも…
であったが、容易に渡ってくる事が懸念される為、
（朝鮮半島自体が安全になるには、重慶ハイブ攻略後になるかな？）

と予想をたてていた。
（要塞級が渡航してくると、頭が出るし…
うまい水上兵器はないよなぁ…
一応は専門の防衛設備つくるか…）

視察を終え基地に機体を向ける。

ｓｉｄｅ～武～

（やっぱあれレビル将軍だよな？ＵＦＯらしいの乗っていったけど…）

撤収、引き継ぎ作業てがら、
基地内部の駆逐は既にすんで、除去作業はまだまだ進行中であった。
ＵＦＯらしい機体がきて新任スタッフらしいのを降ろしていくと、
カオルが一回は降りたレビル将軍を乗せ再びどっかに飛んでいった。

「そういえば隊長…さっきの飛行物体は？」

『まだ説明すらない…
情報は一応きて友軍機登録はされてるようだが…』

（あ、どれどれ？）

友軍機情報から外見を選択し、検索基準を当鉄原基地で探しはじめた。

（あ、これか……ルーロス改？……

どうみてもＵＦＯだよなぁ…あんな葉巻みたいな形…）

『まぁカオルがどっかからもって来たんでしょ。あとで乗らないとね』

『突進中尉には乗せないってましたよ～』

『むなかた～』

『って白銀がいってましたぁ～』

「うえっ？」

『しろがね～』

「勘弁してくださいよ～」

『ほらほらお前ら、撤収、設営作業の邪魔だ。基地に戻ったら続きをしろ』

「げっ」

『あっ戻ってきた』

『え？もう？…ほんとだぁ…かなりの速度出てるんじゃない？』

『のようね…通過しちゃ……え？とまった…』

「うえ…あんな急制動…あ、でもＵＦＯならありえるな…」

『ＵＦＯ？なんだそれは？』

『白銀～なにを指してるの？』

「あ～、ああいったのをＵＦＯっていうんすよ」

（そうだよな…そういえばこの世界ではそんな単語なかったよなぁ…）

『なるほど…』

ルーロス改からレビル将軍とカオルが降りてきたら、
ルーロス改は横浜白凌基地へと帰っていった。

「じゃ、レビル将軍」

「ああ、任せられたぞ」

「カオル～」

「屡伊」

機体から降りていた渚屡伊少尉が、カオルに抱き着いた。

（へっ？）

『あ～あ……リア充め』

『あとで扱いてやるんだから』

『うらやま』

『ふむ…あ～いった感じで抱き着けば…と…』

「隊長…」

『ん?? な、なんだ?』

「屡伊さんの旦那さんって…まさかなんすが…」

『ああ、今抱き合って熱いキスをかましている彼、カオル大将だが、クッ…羨ましい…』

「あれ?まりもちゃんとじゃ?」

『まりもちゃん?…まりも軍曹か?ああそうだが』

「えっとお二人の妻?」

『なにいってんだ白銀…三人、殿下がいるだろう』

「えっ?えええっ?」

『あんだけ放送されたのに知ってないのか?』

「え…えっと…あ、特殊任務で離れてたので副司令の」

『ああ、博士のでか…それはすまなかったな…
重大なイベントを伝えなかった博士が悪い』

「まぁしょうがないですよ…ところで、なんで複数名と、結婚できるんすか？」

『時限立法の重婚法というものだ…詳しくは基地に戻って調べたらどうだ？』

「……そうですね」

『いいなぁ…あんな濃厚なディープキスしたいわ』

『絶対夜が燃え上がるわね…リア充め』

カオルと屡伊が別れてそれぞれの機体に戻ってくる。

『屡伊、あとで機動特訓よ』

『えっ？…勘弁して下さいよ～』

『いーや許さん。彼氏いない組の前で熱々ぶりを見せた罰ね』

『え～……』

なんて事をしながら基地に帰還するためベースジャバーに機体を乗せ…帰逗していく…

ｓｉｄｅ～武ｅｎｄ～

……

基地に帰還して、戦勝パーティーが開かれているが…

まずはハンガーデスクに向かう。

（とりあえずやる事やっとかないと、忘れるしなぁ…）

まずは鉄原ハイブの防衛部隊について、

現状最前線なので、

今回攻撃部隊の陸戦強襲型ガンタンク部隊６個師団をそのまま配置、ビッグトレー砲艦仕様を５隻転属配置、

追加増産でＴ－８５０部隊の警備連隊。

ハンターキラーレッグ５個連隊。

（と、遠浅の海だよな…）

現状、鋼鉄の咆哮の武器を流用した方が早い為、
思い浮かべていると…

（あ、そういえば……あったなぁ…）

潜水艦潜入時に魚雷発射基地からのをかわせずに、
沈没してリプレイしたシーンを思い浮かべていた。

（魚雷発射基地か、サメ型？トゥーハー・デ・ダナン？）

しばらく考えてたが…

水上走行も可能なトゥーハー・デ・ダナン級に船体を決め、
動力を変更後、
そこに鋼鉄の咆哮技術、遊びにいくヨ！の技術もぶち込む。

格納庫は必要無しなのでオミット。

武装は、５連装潜航新音速酸素魚雷の砲塔型を２門、

８０ｃｍ誘導魚雷の５連装備砲塔型と、船体型の各２門、合計４門。
小型機雷掃討魚雷を２門、

元々水中６０ｋｔを叩き出すトゥーハー・デ・ダナン級は、補助兵
装の力をかり、１２０ｋｔ、水上２４０ｋｔの滑空できる脅威の速
度をだす、
打撃潜水艦として新たに生まれる。

（ダナン級打撃型かな？）

とりあえずテスト注文で１０隻を頼んでおく…

で、転属で減ったビッグトレー５隻分の増産＋１０隻分の追加増産…

（今回の地上はこれがよかったし～♪）

（あとは鉄原基地までの交通手段だよなぁ…ガルダつくるか）

入手してながらつくってなかった巨大輸送飛行機ガルダを注文する。

改造面はＳＴＯＬの強化、及び防御力の強化、主に対光線級にだ…

（ん～……）

実験的な意味で、

ファンネルを盾として、反重力システムを組み込み、

ガンダリウム合金γで２００枚搭載するように作ってみた。

（ま、四撃耐えれば戻して補修すれば再利用可だろうし…）

勿論ヤドカリ、コバッタ達頑張れ！！にはなるが…

（ま、こんなとこか…）

カオルはデスクを離れ戦勝パーティーに向かう

……

カオル報告

とりあえず朝鮮半島と、西日本の安全確保の為、
重慶ハイブ攻略まち

第１２４話　あ号の対策会議　投稿日２０１１０５２０（後書き）

ナギ小尉「で～でんはなんで出さないんですかっ！！」

作者「…サメ型潜水艦？」

ナギ小尉「そうですっ！！」

作者「…サメが水上を滑空する姿もよかったけどさ…」

ナギ小尉「あ～……確かに…」

作者「ま、そんなわけで船体はフルメタル・パニックからの流用さ」

ナギ小尉「わかりました。それについてはもう言いません…けどいよいよ、あ号も対策とって来ましたね…」

作者「だなぁ…遅すぎ感もあるが…」

ナギ小尉「まだスパイには情報が？」

作者「行き渡ってない…帰ったらわかってるかな？」

ナギ小尉「え？また更に？」

作者「勿論、更に戦力拡大だ」

ナギ小尉「次は人材？技術？」

作者「次回のお楽しみって事で…ね」

ナギ小尉「ところであとどの位の世界を渡るの？」

作者「……カオルが満足するまでだ…
が、まだまだ、遊びにいくヨ！！以外は星系内技術レベルだからなぁ…」

ナギ小尉「そういえばそうねぇ……っとさて次回予告は…
サブタイトルは秘密ね……お楽しみにぃ」

第125話　新たなる世界へ　投稿日2011052２

２００１年１０月２８日

「ん……」

カオルは目覚め、屡伊の可愛い寝顔が見えた…

（……赤ちゃんって…いつでき…んかな？）

ふと考えた。

神様に飛ばされる前は勿論子供もいない、彼女もいない……

だから赤ちゃんが正直どのタイミングで誕生するか、わからなかった…

（……中に満足させてれば…何時かはかな？）

けど、中にはぶち込んでてもできない夫婦もあるが…

男性側の疾患とか、女性側の疾患とか…

正直生命の誕生は難しい…

今の異世界軍の技術力では、クローンで創ったほうがたやすい状態には、なってるが……

（着床ってどういうシステムなんだろうなぁ……
けど直ぐにわかるわけでもないし…）

妊娠すれば…わかるらしい。

女性の身体はよくわからんで地の文は切り上げで…

（何時かは俺と屡伊、殿下、まりもちゃんの間の子がか……
早いとこＢＥＴＡを駆逐しないとな…さてと…）

カオルは起こさないように抜け出して、脱衣所へと入る。

素っ裸のままだったので、バスタオルをとれる位置にもってきて、
シャワールームへと…
蛇口を捻り、冷たい水から、温水に変わる。

（そういやあ、昨日気になる事いってたなぁ…）

シャワー浴びながら…

……

回想…

「武は俺と同様ＢＥＴＡのいない世界からきたんか…
時間はずれてるみたいだがな…」

「そうだよ。
ところで、ガンダムの人とかＭＳとか、
世界を渡って連れて来たり、取得してるのか？」

「ああ。ただし、世界に影響ないように死が確定している人のみだけどな…」

「……ブライトさんがいないのはそのせい？」

「そういう事だ…」

「…ならバルジャーノンの世界もいける？同じように」

「バルジャーノン？なんだそれ？」

「ゲーセンでの大ヒットロボット格闘ゲームじゃないですか」

「武は２００１年だよな？」

「ああ」

「あったかなぁ……？メーカー何処？」

「ヒットメーカー、発売元がセガ」

「セガ？…バーチャファイターとバーチャロンじゃなく？」

「バルジャーファイターでしょ？」

「ん～？…なんか微妙に違うな…」

「柊町のゲーセンにあるじゃないですか大型筐体型のでの」

「ちとまて大型筐体型？」

「ああ、複座型もあるじゃないか…」

「……ん～微妙に平行世界かもなぁ…」

「へっ？」

「俺の元の世界の２００１年には、
バルジャーノンという大型筐体型ゲームはないな」

「あんな大ヒットなのに？」

「多分バーチャロンだろうが、通常筐体での対戦ゲームだ」

「それも興味あるなぁ…」

「あと、俺の世界には柊町はない。
からどっちかと言えば、この世界がより近いかもな…」

「はぁ～…」

「ま、とりあえず明日だ、今は飲むぞ、食うぜ」

「ああ」

……
といういきさつがあったのだ。

（少し貯まっていた交易と、武の世界の検証かな？

またはいってみてもいいが…）

と思ってはいた。

シャワーからバスタオルで全身を拭きながら洗い、
先に屡伊の部屋からでて、自分の部屋にいく。

着替えて朝飯くったあと、Ｂ５５ハンガーデスクにむかった。

一回声かけてから、平和日本へと世界扉を開く。

俺の部屋にはチョコがおいてあった…
（お返ししなきゃな……）

向こうはバレンタインデーを過ぎ、二月下旬だった。

作戦の為遅れる旨は既にやり取りをしていた。

何時もの取引場所にて食品、医療品を引取、
再生した資源を納品、産業廃棄物をひきとった。

その後帰還し、集積所に食品及び医療品等をおく。

（ん～…そろそろ日本帝国分は、無くても大丈夫な具合にはなってきたな…

別の物に切替ようかな？）

スペースコロニーでの生産拠点稼動が上手くいってる為、帝国内部に関しては自給率も向上している。

（が、他の国の避難民の方にはまだ手が回らないか…）

日本向けの食料品援助、医薬品援助は既に他の国の避難民キャンプに回ってはいるが…

（農業用、食料品コロニーの稼動もう少し早めるか……）

で産業廃棄物をおき、デスクに戻ると、武と純夏がきていた。

「はよ～」

「おはよ～」

「おっはぁ～」

「早速だけど武、ちと記憶見させて貰っていいかな？」

「へっ？記憶？」

「私たちのラブラブの記憶??」

「いくら世界を渡れるったって、俺が認識しないとわたれないからな…」

「そういうものなのか…わかった、やってくれ」

「カオルちゃん…ひょっとしてあれもわかるの?」

「ん?あれ?」

「……えっと…奥さんとしてる事…／／／」

「ああ、まぁ…極力みないようにはするよ…じゃ、失礼して…アルミサエル」

武の頭に手をのせながら記憶をのぞきにかかる。

「はぇぇ～～…面白い覗きかた～」

二人が反応無くなってるので、純夏は武を横から抓ったりプニプニ

はしていたが…

「んっと……やっぱり平行世界か…多分これでいけるな…」

「ふが……純夏！！」

「えへへ～」

「”世界扉”」

二人に背をむけ世界扉を開く。

「ほぇぇ…これが？」

「ああ、武の元の世界に繋げた世界扉だな…」

「……！！」

「いってみるか？」

「いや……いい、こっちに純夏がいるし…責任は果たす」

「そっか…」

世界扉を消す。

「まぁ…じゃ、ちと覗きにいく世界があるんだけど、そっちはどうだ？」

「？どんな世界だ？」

「ま、３時間あれば戻れる一般的な世界だな…一つ用事があるんだ」

「いきたいぃぃ～～…けど仕事……」

「あ～純夏君、今度武と一緒に休みの日にでも…」

「うん♪…じゃいってきていいよ」

「あ、じゃあいってみる」

「了解。３分まってな…」

鈴をつけ、
「ネコ？それともプレイ？」

「そういった趣味はない。結構高性能ツールなんだぞこれは…」

と鈴について説明しながら、
ルーロス改を呼び出してきて、虚数空間に引き込む。

「じゃ…”世界扉”」

「武ちゃん、カオルちゃんいってらっしゃ～い」

＝＝フルメタル・パニック＝＝

「あちぃ～海、目の前にある…何処だぁ？」

「この世界のフィリピンにある拠点だな」

ドアをあけ室内にはいる。

「あ～涼しい～」
ガンガンにクーラーが聞いている。

「あっマスター」

「よっ経過はどうだ？」

「この人は？」

「ターミネーターだ。まぁロボットだな…」

「ターゲット発見間もなく今日ナムサクに入ります」

「無事に進んでるか…変異は？」

「確認できてません」

「わかったもう一ヶ月程たのむぞ。武、いくよ？」

「了解、マスター」

「あとすこしすずみたい……」

「たく…じゃあ…ちっとまてな…」

鈴の物質転換を起動させ、空間倉庫から材料を引き出し…作製し始めた。

「何してるん？」

「簡易空調首輪つくってんの……ほいできた……首につけてみ」

鈴ができたので、武に渡す。さっそく武は首に近づけると巻き付き…

「へぇ…これで大丈夫なの？」

「じゃいこうか」

と外にでてルーロス改をだした。

武と一緒に乗り込み、不認識モードにし、一路ナムサクへ……

……

「いやぁ早かったなぁ…」

「だろ？」

「ああ……であれが闘技場か…」

「さっ、いこうぜ」

「おにいさん～マッサー？」

「うぉっ！！」
武が捕まった。

……何やら話てて、
「あ～武…はいマニーね…、
そこのビアバーで摘んでるから、終わったら声かけてな～」

と武はピンク色の看板を掲げた、マッサージやさんへとつれてかれた…

「あ、ゴムわたしそびれた……
まっ、なっても治るからいいか…」

ナデシコ世界ではＨＩＶは既に死滅している病気であった。

（さて…俺は…）
同じマッサでも男性施術師もいる健全なほうで…

……

「ギャーーっ！ギブギブっ！」

「ここが痛いと肩凝ってる証拠…もっとやるね～」

「ギャーっ！！」

……

2時間後…

（武おそいなぁ……）

少しビールで出来上がっていて、姉ちゃん相手にゲームをしていた。

（おっ！）

「じゃ、チェックビン」

で清算して１０００バーツをだし、釣りはチップとした。

「武、どうだった？」

「あははは…天国だった…」

「そりゃ良かったな。ま、ばれんようにその部分カバーしとくよ」

「ああ…頼む」

精神操作し、隠しておきました。

「じゃ、いこうぜソロソロお目当てが始まるし」

「ああ…」

と闘技場内部にはいる。

チームクロスボウＶＳチームオーガ…

（間に合ったな）

まだ締め切りされてはなかった。

オッズは５１．２：１．２…かなりの鉄板試合だが…

オッズレート上のパイロット名が書き換えられた。

チームクロスボウ…ソウスケ・サガラ。

（しゃ）

チームクロスボウに１億ドルを注ぎ込んだ。

一気にレートが変わる。

「ははは…１億$…負けたらどうすんだよ…」

「どうせ、あぶく銭だしな…まぁみてなって」

スタンドのＶＩＰ席に移動となった。
空調及びシートが整った部屋だ。
バニーガール達が飲物を提供している。
まぁ…万$以上のチケット買った人や事前に認められた人が入れるスペースだったが…

そのまま部屋の前のバルコニーにでる。

「ウォォー」
「殺せ殺せ殺せ殺せ」
試合開始には間に合ったようだ…

「あのボロいのが？」

「ああ、クロスボウのサガラだ…」

「あれが勝つのか？」

見た目にもかなり状態が悪く…
一挙動程度が精一杯、ダメージ受けたらそく…だろう。

カウントダウンが開始する。

『よくもまあぬけぬけと出て来やがったもんだな！

どいつが乗ってるかしらねえが、いまさら命ごいはもう遅いぜ』
オーガからの挑発の音声が流れる。クロスボウからは沈黙。

カウントダウンが5，4，3，2，1ファー一際大きなサイレンが鳴り響く。

試合結果は…チームクロスボウが勝つ大荒れとなった。
取っ組み合いしようとしたところ、
サガラ機が両手刈からオーガの機体を空中にほうり投げ、
衝撃によるパイロット気絶との結果だ。

換金後帰還した。

「また連れてってな～」

「ま、安全が確認できた世界はな」

「了解」

と武とわかれて……

デスクで、農業用コロニーを2つ、追加注文をしておく。

（さて…いきますか…）

「じゃ、いってくるわ」

［いってらぁぁ〜］

＝＝銀河鉄道物語の世界＝＝

世界扉からでて、早速衛星を打ち上げる。
（長閑な星だな……何処に出たかわからないが…）
少なくとも目的地であるディステニィーではないだろう…とあたりはつけていた。
衛星がこの星の情報を検索する。
駅を見つけだした。
（銀河鉄道が知れ渡っている星ならいいがな……）

駅まで近いので…幻影かけて飛行していく。

駅近くで解除し、歩いて駅舎に近寄ってく…

文字が読めないので、鈴の翻訳機能を起動させた…文字がみえてくる。
（惑星ヘンゼねぇ…ま、駅名に惑星名が使われてるなら、少なくとも銀河鉄道は公認つう事か…
えーと料金地図はっと…）

切符を買うのにのっている料金地図を見はじめる。

見やすく平面地図でかかれていた。

（この赤が惑星ヘンゼルか…
ディステニィーは…あった…直接はいけないか。乗り換えがトレーダーね…
４星で乗り換え、８星目か…１０日以上かかるんか？）

カオルは９９９の停車時間は一日の設定を思い出していた。

（聞くのが１番か…）
鈴の口語翻訳機能を起動させながら……

「すみません～」

「はい？何でしょう？」

「ディステニィーに行きたいのですが、
時間どれくらいかかります？」

「ディステニィーですね？トレーダーのりかえで、３日かかります。
トレーダーまで３時間、
トレーダーからディステニィーまでは車内一泊ですが、
トレーダーで特急乗車待ちで１日半かかりますので…」

「その位かかるんですか…わかりましたまた今度お願いします」

カオルは離れて…”幻影”をかけて、ホームへと進入する。

（ダイヤは…あった。へぇ…1時間に2本、ピークタイムに3本か…通勤路線かな?通過設定は…ないんか）

この路線をみると…約１０の駅を結んでいる路線で、終点にまた分岐駅に繋がっていた。

「まもなく、トレーダー行き普通列車がはいります。危ないですので黄色い線の内側にお下がり下さい」

ホームアナウンスが流れた。

ピー

天から光の筋がみえてくる。

段々と接近してきて、

銀河鉄道の普通列車が見え、見えているレールにのり、進入してきた。

静かに止まる。

「惑星ヘンゼル～惑星ヘンゼル～。ご乗車ありがとうございます。お乗り過ごしのないようにご注意お願いします。

停車時間は１５分となります」

「惑星ヘンゼル名物駅弁いかがでしょうか～？
美味しい美味しいヒョットコドモ入ってます～」

「エネルギータンク～エネルギータンク～いかがっすかぁ？
惑星ヘンゼルのは極上の味ですよ～」

等売り子達がホームで販売しているなか…
カオルは機関車と同化し始めた。

（うぉ…時間かかりそうだなぁ…）

そしてトレーダー行き普通列車は発進し…次の目的地へと旅立つ…

……
カオル報告

行ける世界が増えました。
超技術取得中です

第１２５話　新たなる世界へ　投稿日２０１１０５２２（後書き）

作者「汽車は～闇をぬ～けて～、ひか～りのう～みへぇ♪」

ナギ小尉「何歌ってるの～？」

作者「初期の９９９の曲さ」

ナギ小尉「銀河鉄道９９９ね～…
でも厳密には銀河鉄道物語と銀河鉄道９９９は設定違うんじゃないの？」

作者「だなぁ…例えば６６６とかさ…片方はＳＰＧに割り振られてるしさ…」

ナギ小尉「ま、そこら辺は勘弁してほしいって事ね～
…けどそのまま武装とか使うの？」

作者「惑星が破壊するから使えないよ…とってもさ…
それに手持銃でも飛行機クラスなら落とせるんだぜ…
まぁビーム系統の銃だから禁止にはなるけどな…」

ナギ小尉「??じゃ、なんでこの世界に?」

作者「まぁ惑星間や、星系間交通システムを…だね」

ナギ小尉「月侵攻後の事?」

作者「ま、そういった事だ。銀河鉄道のは基本的に戦闘には使用ができないな」

ナギ小尉「ハイブ攻略とかでなく?」

作者「だから惑星破壊レベルのビームだって、なんべん…
まぁ出力調整が難しいという設定で…
でなきゃ列車ハイジャックをわざわざ突入しません」

ナギ小尉「…そうね……とさて次回は…まぁ流れが見えてると思うけど、銀河鉄道物語編その2　シリウス小隊　お楽しみにぃ」

第１２６話　銀河鉄道物語編その２　ビッグワン出動　投稿日２０１１０５２４

カオルは旅路の間、
トレーダー分岐点の駅舎及び軌道リング、また特急列車等を取得し…
４日目に目的地惑星ディステニィーにたどり着いた。

（ここか…）

ディステニィーに本部がある空間機動警備隊…

銀河鉄道の安全をまもり、事故や犯罪、場合によっては宇宙海賊の対応をも行う。
色々な小隊があるが全ては運命の始発駅、惑星ディステニィーから現場へ出動する。

（さてと…とりあえず1番の目的の…）
幻影をかけ鉄道警備隊本部へと潜入する。
といっても…一般人の入れるところから、建物の材質と同化し、進んでいた。

流石に人間外の潜入方法でないと察知され、
相手を支配下におかなければならなくなる。

トレーダーで何体の監視ポットを支配下にした事やら…

とりあえずは、全体にカオル自身を広げないで、地下深くへとすす

む。

そして、途中端末から取得した情報と照らし合わせ、
地下専用車両整備場に係留している、目的の銀河鉄道００１号、
鉄道警備隊シリウス小隊専用車両、通称『ビッグワン』が目の前に
あった。

整備は一通りすんであったのだろう…騒がしさはない。

（さてと……）

ビッグワンと同化し始めた。

ビッグワンのオペレートルームには、
セクサロイドのユキが何かの作業をしていた。

カオルはビッグワン本体に取り付きながらユキを見ていた。

（メーテルＴｙｐｅというか…美人なんだよね～）

と…見ていると…
ユキの表情が険しくなり、手の動きが一層はげしくなる。

（ん？どうしたんだろ？）

いきなり席を蹴り立ち、銃を抜き構えた。
「誰ですか？姿を現しなさい」

（へ？）

「このビッグワンに何をしようとしてるのですか？」

ユキはまっすぐ銃を、ビッグワンに取り付いているカオルに向けてた。

カオルは移動するとユキの銃口も移動する。

「姿を現しなさい。警告します！！」

（ばれてんか……なんでわかってんの？…ならとるべきは…）

ユキの接している足から…

「イロウル」

「キャァッ……失礼しましたマスター」

銃を床におきユキが片膝をつき頭を垂れた。

セクサロイドのユキを支配下におく。

ついでなので同化し、ユキ自身の情報取得…

取得終了後、命令で俺を認識しない、無視するように…

を埋め込む。

カオルの支配下から抜けたユキは…

「あら？何をしてたのかしら？」

内部サーチをしたようだ。

「変ね？……あっチェックの途中だった…」

元いた席に着座し、作業の続きにもどったようだった。

そんな一通騒動がおきたのち…

ビーオンビーオンビーオン

緊急事態発生のサイレンが鳴り響く…

『プロキオン本線において走行中の特急３９０号のシグナルロスト、緊急事態発令』

ディステニィー全土に設置してある緊急放送用スピーカーより、通達が流れる。

『シリウス小隊、スピカ小隊に出動要請発令。直ちに急行願います』

（ゲッ…まだおわってないよ…）

カンカンカン

ものの5分もしない内に、続々と隊員達が乗り込んでくる。
有紀学、デイビット・ヤング、
キリアン・ブラック、
ルイ・フォート・ドレイク、
続々と各々の席につき、出場準備を整える。

最後に…シュワンヘルト・バルジが乗り込んできて…

「システムチェック！」

「システムチェック、スタンバイ！」

「素粒子ワープ走行発生機関異常なし」

「軌道通信レーダー異常なし」

「重力ブレーキ異常なし」

ギギィギィィィィ
ビッグワンが係留されているレールが上昇しはじめる。
地下のＳＤＦ専用整備場から引き上げられ、
装備車両と連結する形だ。

「全武装システム異常なし」

「ミッションデータダウンロード完了」

「メインボイラー接続点火」

「人工重力発生開始」

「ビッグワン、第６装備で出動」

ゴウゥゥン
上昇がとまって…

「第６装備にてスタンバイ」

ゴン
レールが延伸し、接続された振動が伝わる。

「上昇フロート固定確認」

ガイン
兵装車両が連結、軽く衝撃が伝わり、車間幌が自動で繋がる。

「コスモセイバークルー、搭乗完了」

「微速進行、発進位置へ」

「微速進行」

「磁力シールド発生機関正常値へ」

「エネルギー正常、ボイラー内圧力上昇、
シリンダーへの閉鎖弁オープン、
臨界まであと０２」

『３８番線からの発進スタンバイ』

『３８番線からの旅客列車、退避確認しました』

『３８番線よりの発進を許可します』

「３８番線からの発進許可確認」

「ボイラー内圧力１２０％！！」

デビットが宣言とともに、レバーを押し込む。

「メイン回路接続」

「接続」

「システム、オールグリーン」

「ビッグワン、発進!!」

ボオォーーー
汽笛が鳴り、

ガッシュ……ガッシュ…ガッシュガッシュ
ガッシュガシュガシュガシュ

巨大な動輪が動きだし、力強い音をたて、スピードがます。

ディステニィー始発駅構内３８番線ホームに進入する待機線にスタンバイしてたビッグワンは、
ホームを通過し、構内路線にすすむ。
レールが分岐、合流等をし…力強くすすむ。
そして…外が見え始め、すすみゆくその先にはレールが途切れてるようにみえるが、
不可視のレールが天空に向けのび、
ビッグワンはレールに導かれながら、その編成を天空へと向けてい

く……

（事件解決まで戻れなさそう……）

ボォー

警笛をならしながら、瞬く間に惑星ディステニーから離れていくビッグワン…

警報が流れてからここまで約１０分間の内に現場へ急行しているのだ…

カオルはビッグワンの取り付きが終了したので、ついでに編成車両側にも触手をのばしはじめた。

「長距離ワープに入る、空間位置座標固定」

機体のボイラー出力が上がりはじめる。

「目標固定よし」

「ワープ開始」

「ワープ」

（おいおい…どこに行くんだよ……）

瞬くまに光が包み空間転移する…

ものの１０秒位だろう…通常空間に復帰、レールを噛んでいる感触が伝わる。

「前方５宇宙キロにて当該車両発見」

「シグナルロストの原因は？」

「まだ特定できてません…スピカ小隊、待避支線にて接近してきます」

「減速して接近しろ」

（当該車両を見つけ出したか……意外に早めに解決？？）

因みに宇宙キロと見慣れない単位が出てきたので、説明しよう。

銀河超特急である９９９は最高速３０００宇宙キロ／ｈのスピードで通常空間を出せる機関車だ。

そして地球ーアンドロメダ間は約２３０万光年、それを宇宙キロで２２０万宇宙キロの営業距離…ということだった。

つまり1光年＝約1宇宙キロ…
膨大な速度を銀河鉄道は出す…ということだった。

「スピカ小隊より入電、生体反応あり、活動反応あり、機関車よりの反応が無しとの事です」

「了解した引き続きサーチを頼むと送れ」

「了解」

「隊長、どう考えられます?」

「機関車の故障か、何だかの原因で壊されたか…どちらかだろうな…警戒を怠るな」

「了解」

更に減速しつつ近寄り途中に…

「スピカ小隊より入電、搭乗名簿分の人数確認」

「ふむ……よし、横より進入する。デイビットは待機、キリアン、学は、第一分隊を指揮し機関車の状態確認。ルイ、ユキは第二分隊を指揮し乗客の状態確認」

「了解！！」

ビッグワンは近づくと、減速し特急３９０号に横ならびになる。

ビッグワンより車両連結チューブが繋がれ…

「やはり反応ありませんね…動力、電力ロストしてます」

「バッテリーもか……ビッグワンより供給急げ」

「はい」

「扉、開きました」

「よし…いくぞ！」

バルジ隊長達がビッグワンより離れていく…

……

一人ビッグワンに残り黙々とデーター収集及び監視を行っているデイビット…

「ん～……」

ガシガシ

何かわからない事があるのか頭をかいていた。

「全動力喪失、全電力喪失、しかも非常用バッテリーもなぁ…」

外見上車両には異常はない…が…

「しかも軌道空間シールドの方もか……難儀だな」

通常空間シールドでレール内部の予圧等も保たれていて、乗客が窓を開ける事もできる。

しかし、3層のシールドを発生する、軌道空間シールドも機能をロストしていたわけだ……

重大な事故、原因究明が急がなければならなかった。

『ジュリア隊長』

バルジから直接通信が入る。

『なに？』

『乗客、車掌の話だといきなり電気がきれたとの証言でほぼまちがいないと思われる。
機関車のログが出すのが難航している…何人かまわしてくれないか？』

『わかったわ…機関車復旧できそうにないの？』

『ああ、内部のＣＰＵ等焼き切れてて連結しないとムリそうだな…
外部からのなんだかの要因だと思われる。
あと死者２１名…いずれも機械化人、半機械化人達だ』

『電気が奪われた…』

『ああ、そうだな』

『厄介ね…わかったわ…こちらは要因を探索するわ』

『乗客移乗すみしだい、３９０号を連結する。原因調査よろしく頼む…以上』

所定作業を行い、ビッグワンは手短の星へと乗客、３９０号を引き連れていく…

……

無事に３９０号の乗客を送り届け、
帰還の途に着いていた。

また、スピカ小隊の調査により、
次元断層からのエネルギーを奪う物体が流入した事による、
シールドロスト、エネルギーロストの重大事故に繋がった…

との報告が入った。

本社は直ちに当該路線の経路変更及び、軌道リングシールド強化、
また次元断層監視及び封鎖の措置をとる流れになった。

惑星ディステニィーに帰還するビッグワン。

完全同化しカオルを乗せたまま惑星へと進入する…

……

カオル報告

駅舎設備（惑星設置型）

空間軌道リング

一般型車両3種

ビッグワン

監視ポット

セクサロイド

第１２６話　銀河鉄道物語編その２　ビッグワン出動　投稿日２０１１０５２４

ナギ小尉「カオルばれかけたねぇ～」

作者「さすがセクサロイドメーテル。愛人にしたい候補…」

ナギ小尉「作者露骨過ぎ」

作者「……自重しないよ～」

ナギ小尉「ところで武ちゃんは何やってるの？」

作者「……次回って事で」

ナギ小尉「作者の執筆速度遅すぎだからね～」

作者「うるへぇ」

ナギ小尉「で次回サブタイトルもまだ決まってないのね？」

作者「うん。まぁだいたいのあらずじは決まってるが…ね。まぁ無難に日常にするか？つうとこ」

ナギ小尉「で今から書き出すのね？」

作者「そそ。この話が投稿しおわってからね～」

ナギ小尉「ま、次回予告…いけないけど…また次回お楽しみにぃ～」

第１２７話　カオル不在中　投稿日　２０１１０５２６

さて本編はカオルが銀河鉄道に飛び立ったあたりの日常に話を戻そう。

２０１１年１０月２８日の夜…
武自室…

「武ちゃん…スンスン…何かいい匂い。どこ行ってきたの？」

「ああ、マッサージを受けてきたのさ」
（普通のな……）

「へ～どれどれ？？」

（のぞいてきてるな…）

「うわぁ…うらやましい…まるでお姫様というか、王様みたいね～…肌がスベスベになるんだぁ…」

（カオルＧＪ！！）

「あとが闘技場だなぁ…でこれが、お土産」

「あっ石鹸？」

「ああ、これで純夏と洗いっこしようぜ」

「うん！／／／」

２００１年１０月２９日…

「先生よろしいでしょうか？」

「なに？」

「実は２０７Ｂ分隊の鎧依の事なんですが」

「ああ、入院中のね？」

「退院を早めて、戦術機総合実技演習を前倒ししてもらいたいのです」

「……そうね……わかったわ」

副司令がパソコンに向かって…

「どの位早めればいいの？」

「できる限り」

「……１０月３０日には検査省略で、退院できるわねそれでいい？」

「…そうですね。それでお願いします」

「となると…１１月２日には可能だけど…
別の所じゃないと駄目ね……探しておくわ」

「よろしくお願いします。用件は以上ですので失礼します」

武は執務室からでていった。

「そうね…この日だと……」

……

「よ～し…実弾射撃始めっ！！」

ダダダッダダダッ

（よく目標にあてているが…）

「ちょっといいか？」

「小隊集合！！」

駆け足で実弾訓練を切り上げ整列してくる。

「今見てて気がついたんだが、みんな訓練が間違った意識にむいてるな」

「間違った意識？」

「教官それは？」

「君らはなんだ？」

「衛士を目指す訓練生です！！」

「君らは将来的には何にのる？」

「戦術機でありますっ！！」

「だな…で今のままのタイミングだと自動ロックオンの時間中に無駄弾をうつ事になるんだ。
戦術機だと君らの身体でなく、機体の取り回しの時間がある」

「あっ」

「まっ、だから今の時点で変な癖は修正した上で戦術機操縦にはあがってもらいたい。
具体的には戦術機を操縦している感じでの射撃タイミング等だな…」

と武は銃をもち…

「命中精度を高めるように一呼吸おき、それでうつ」

と射撃する。

「このように一呼吸遅らす事により状況判断もでき、戦術機に乗った時に違和感も感じなくなる」

「はいっ！」

「あ、他にも格闘技訓練だと体当たりしていないか？
あれも戦術機ではありえない、機体を壊す行為だからやめたほうがいいな」

「あっ…」

委員長があかくなってくる。

（へぇ…以外だな）

「いいか、機体のダメージを考えての行動を、
格闘技訓練にも心がけるようにな」

「はいっ」

「じゃ、訓練に戻れ…解散!!」

射撃訓練にもどっていった…

……

その日の夜。

「はぁ～」

「どうしたの？」

「あなたの旦那が持ち込む技術はすごいんだけどね…
こっちの生産技術が追いつかないから生かせてないのよ…」

「またとうとつに」

「それなのに何とかしろって馬っ鹿じゃないの？
解析データーは提供できてるんだから、後はそっちの問題なのにね
～」

久々のコーヒータイムを親友の二人がとっている。
勿論天然物のコーヒー。
まだ異世界軍の農業コロニー産のみだが、
来年頭には帝国農業コロニー産のが出回る予定だった。

結局のところ技術ブレイクスルーが追いついてきてない愚痴だったが…

勿論コーヒーの農業コロニーの話題もでる。

「ところでまりも、コロニーいった事ある？」

「わたしはまだないわね～」

「そう…残念……あ、今度カオルに新婚旅行で連れてってもらえば？」

「そうね～頼んじゃおうかしら？」

「それいい……あっ、総戦技演習の件頼んじゃおうかしら？」

「えっ？」

「そういえばいってなかったわねぇ…実は…」

……

２００１年１０月３０日

人間犬…最近話題になっている話だった。

何やら５才の幼女に手をだした人がいて、それの罰らしい。

の噂が流れていた。

（ま…実物みれば…わかった話だが…）

武はあんな風にはなりたくないな…と思っていた。

「こんにちわ～お兄ちゃん」

「こんにちは、と…君は？」

武には見慣れない5才位の女の子がコバッタ28号つれてたが、挨拶してきた。

「エル・マデューです。よろしくお願いします」

「白銀武だ…ところでエルちゃん…民間人がここにいちゃ駄目じゃないか。
怖いお兄さんが食べようと狙ってるよ～」

「ママがここで働いてるの～」

「ここって、この基地でかい？」

「うんっ！！」
［異世界軍エリア職員です］

「じゃ、エルちゃんも立派な職員だね」

「うん！！だから見回ってるの～」

「えらいね～」

「お兄ちゃん。エルね、見回りつつけるから、またね～」

とことこ歩いていった後を、手足で犬のような格好をしたのが、
距離をあけてついていってる……

…

さて、帝国軍側では…

佐渡島ハイブが人類側に落ちた時にも配置転換は進んでいたが、
鉄原ハイブが人類側に落ちた事により帝国軍では、より一層本土守
備隊の配置転換の移動及び、
機種更新等進んでいた。

完全に後方に下がっての機種更新である。

西日本も九州地方への集中、
東日本は北海道及び樺太への集中ができるようになり、

機種更新の為の休暇も進み、数少なくなっている男性軍人達も、
交代で家に戻り子作りに励む事となる。

また６１式戦車改の配備製造もすすみ、

インフラ面では、水素燃料精製プラントの増設がすすんでいる。

他にも異世界軍の協力のもと、常磐線ラインでのリニア新線の新設がきまった。
異世界軍の核融合発電所の建設もすすんでいた。

２００１年１０月３１日

ユサユサ

「ん…ん～～」

ユサユサ

「あと5分…」

「霞ちゃん…こう起こすのよ」

ばさぁ、

「おきぃぃろぅぅ」

ドン

「いつつつ……純夏もっと優しく起こしてくれよ…」

「…おはよう」

「武ちゃんがお寝坊さんなのが悪い！！」

「おはよう霞、純夏うるさいっ、もっと恋人のようにだ」

「博士がよんでます」

「先生が？…わかったありがとうな」

「……またね」

「武ちゃんあとでね」

（何だろ？）

……

先生との用事が終わり…

射撃訓練に合流した。

パァン

「お、相変わらずやるなぁ…」

たまの射撃に声かた。

「えへへ…そんな事ないですよ。みんなもあててますよ？」

「……なぁ…たま、あれ当てれるか？」

「３００ｍのですか？」

「いや隣の５００ｍのだ」

「うーん、どうでしょう？」

「３００ってそいつの有効射程ギリギリだろ？
なら俺でもあてられるんだ。でもたまは射撃の腕がいいんだろ？」

「えっ？誰から聞いたんですか？」

「おいおい、俺はお前らの臨時教官だぞ」

「あっ、そうですね」

「で、ここで１つ極東最高のスナイパーの腕前をみせてもらおうかな？と」

「極東最高！？…み、みきはそんなもんじゃないですよ！
師匠には追いつきませんもん」

「師匠？」

「へっ…あっ…／／」
途端に顔が赤くなる。

「なぁ…たま師匠って？」

「えっと…その…凄腕のスナイパーさんです……こ、これ以上は…」
（たまに師匠って…いたか？）

「珠瀬、あなたの腕みせてあげなさいよ」

「教官になにか一ついいところみせないとな」

「……珠瀬、がんはれ」

「おいおい、何か一つって…
みんな俺より優れているとこあるじゃないか。
例えばたまの狙撃には勝てないし…」

「えへへ～」

委員長に向く。

「委員長は絶対俺より冷静にもの事をみることができる。指揮官向きだな」

「えっ…」

冥夜に向き、

「冥夜の居合で、対戦はしたくはないし…」

「そ、そうか…」

彩峰にむき、

「彩峰の格闘能力と思考の瞬発力、発想力は驚くべきものがある」

「……」

「勿論まだまだあるさ、でもこれらだけでもすごいじゃん。俺を目標にしてもいいが、そんなに自分を卑下するなよ」

「…はいっ！！」＊４

「じゃ、たま。狙撃してみてくれよ」

「わかりました。伏射姿勢でも？」

「ああ、構わないよ。好きにしていいぞ」

「それじゃ…」

たまが風をはかりながら…

（あれ??前の世界とかなり技量違くないか？心の使い方というか…）

「狙い撃ちますっ！！」

パァン

「さすがど真ん中かよ…」

パァン……パァン……パァン

「終了しました」

「よろしい。すごいな、たまは…」

「えへへへ～」

（しかし…師匠って誰なんだ?…気になるな…）

……

カオル報告

只今銀河鉄道物語の世界にいってて不在です。

第１２７話　カオル不在中　投稿日　２０１１０５２６（後書き）

作者「という日常を過ごす話なんだな…」

ナギ小尉「本来の主人公がいるわけだしね～」

作者「ま、元々武がやろうとしていた事の消化と」

ナギ小尉「ね、重慶ハイブはいついくの？」

作者「一ヶ月に一度のペースみたいだよ。今のところ」

ナギ小尉「オリジナル到達が？」

作者「カオルの考えだと２００２年の１月かな？でビーム兵器解禁っと…」

ナギ小尉「で、ビグザム投入ね」

作者「大気圏外から真っ赤になりながら……
ってちゃうわ。あれは宇宙用。

確かに量産型が地上侵攻用だったけど…アプサラスの方がいいね」

ナギ小尉「そういえばさ、武ちゃんきたんだし、
反応炉だけ落としちゃえばいいんじゃないの？」

作者「あれ？前はなしてなかったかな？…
まぁ横浜基地壊滅フラグを消したんだよね」

ナギ小尉「えっと？」

作者「ほらハイブ消滅後所属していたＢＥＴＡが大規模侵攻してきて…」

ナギ小尉「あ～…なるほどね」

作者「お掃除しないと周りに迷惑がかかるから…つう事なんだ。だからペースが早まらない…ね」

ナギ小尉「成る程ね～……さて次回は…帰還後（仮）…サブタイトルきまってないのね」

作者「今からかくんだよ」

ナギ小尉「頑張ってね～…次回お楽しみにぃ～」

第１２８話（仮）帰還　投稿日２０１１０５２８

５日目

カオルはディステニィーにビッグワンが帰還後、
すぐさまディステニィー駅や、コスモ燃料生産施設、
空間軌道警備隊本部を取得していた。

なんとか夜には取得がおわり…

世界扉を唱える。

２００１年１１月１日

「ただいまぁ～」

［おかえりなさい～］

早速デスクの鯖に落とそうと…

［あれ？今回加入者は？］

「ん？今回はなしだよ」

［前回に引き続いて、死者いない世界？］

「いや、いっぱいしんでるが…列車衝突、爆破、爆破、爆破、事故、事故…あと…」

［な、なんか物騒だねぇ…］

「ま、実際宇宙にいく列車だからなぁ…」

［へ？宇宙？］

「ああ、これだ…」

と画面にだす。

［……一言、何故列車なの？］

「ロマンだからさ…まぁ、利用はしやすいかもな」

［そうだね…これならマスドライバーシステムもいらなそうだし…増結もできそうだし］

「軌道レールの敷設は必要だけどな…けどこいつなら…」

と近くの資材を集めて…
カオルは作り始めた。

［マスター作っている間に…コロニーで総戦技演習したいって、副司令からきたんだけど］

「ん?…いいよ」

［で、内容がこれになったんだけど…］

「どれどれ?」
カオルは資材に取付きながら変化させてるので、ろくろ首のごとくにょろんと伸ばして、ファイルをのぞきみた。人をまさにやめている……

「……甘くないか?もっと数増やさないと」

［あ～そうだね～］

「落としても構わないんだよな?ならもっと数増やしてだなぁ…」

［じゃ数もっと増やすね。守備隊からも回す？］

「そうだな…佐渡島基地からは回していいかもしれんな」

［了解～］

そして約３時間後……

「出来たぁ～時間かかったな…」

［マスター…ビッグワン早速作ったの？］

「ああ、こいつなら軌道敷設しなくっても走れるからな…」

目の前には旧ユニオンパシフィック４０００型がモデルとなった、ビッグワン及び客車編成が完成していた。
黒光りする車体のなかにボイラー部分が銀色がトレードマークとなっている。

［ねぇ武装はどうなってるの？］

「武装客車は今回はつけてないな…
星一つ破壊するから加減がな…」

［星破壊レベルね…］

「ま、今はおもに無限軌道モードで行き来できるからな」

［ところでマスター、これ量産するの？］

「できるか？」

［無理……一緒にきた旅客タイプのなら主動力以外なら可能だけど…］

「ビッグワンだと、主動力以外のどこらへん？」

［客車を除いて…機関車部分の材質とかね～
…しばらく研究しないと無理だって］

「キャーティアシップとどっちが早くできそう？」

［……わからないよ～］

「まぁ…宇宙全体で３０編成位しか活動しなかったからな…」

［３０編成も…］

「旅客タイプは宇宙全体で７５０編成位だったな～」

カオルはディステニィーのを思いだしてた。
結構あなあきや、事故欠番再生中等もある。

［そんなにあるんじゃ…端から端までひとっとびだよね］

「だな…」

［…ねえマスター…この軌道リングはエネルギー発生原あれば作れるけど、
自転はどうするの？］

「基本的に伸縮できる物質で接合部はできてるけど、
レールが一致する時に進入する形だな」

［…一日一回？］

「ああ、けど繁盛路線などは惑星近くで分岐し、
いくつかの進入路をもつわけだ」

［公転とかは？］

「軌道リングの方で修正するな。レールは鉄ではないし」

［あ～そうだね～］

「さてっと…午前3時か…寝るわ」

［お休み～］

２００１年１１月２日

流石による遅かった為、一人で朝はおき、朝飯をくってハンガーデスクに向かった。

すると嫌な報告が…

［マスター、佐渡島のスパイから報告がはいってきてるけど…
新型種うまれるみたいだよ］

「えっ？新型？」

［こいつなんだけど…］

と画面にだしてくれた。

「こいつは……大砲と弾？」

［うん］

「遠距離に直接ＢＥＴＡを撃ち込んで破壊活動する…ってコンセプトみたいだな…」

［そのとおり…しかも…］

「強酸を撒き散らすか…迂闊に接近戦すると、ルナチタニウムなら問題なさそうだけど…」

［今までの装甲なら問題あるね］

「かぁ…今になって新型ＢＥＴＡか…ところでどの位打ち出す？」

［ん～まだスパイもわかってないみたいだよ。とりあえず作って実地で確かめるみたい］

「結局開発でやる事は一緒なんだな……
じゃ、こっちも1セット支配下において確かめますか」

［了解、佐渡島基地にいこ～。ガルダなら運べるから］

「お、出来たかんか」

［テスト場は横浜基地演習場でね。多分はみ出ると思うけど…］

地上の滑走路に向かう。

実はガルダ級に関しては…横浜基地の戦艦エレベーターでは搬入出不可になっていたので、
横浜基地の地上第三滑走路隣接エリアに、
建造兼整備ハンガーで2機作れるようにはしていた。
その反省で、佐渡島基地や鉄原基地では、
メインシャフトエレベーターの内1基をガルダ級等1ｋｍサイズに拡大、
エレベーター直上ゲートにも、１ｋｍ級サイズが対応できるようにはしている。

その３００ｍ強、翼幅５００ｍ強の巨体が姿を現す。

艦内に入りエレベーター１０階のコクピットエリアに昇る。
コクピットではシールド操作要員のヤドカリ２名、
機体操作・通信・レーダー管制１名、火器艦内管制１名が専属についてる。

「じゃ、よろしく頼むわ」

巨大な機体が振動し始める。
ホバー走行により滑走路上まで進み…
巨大なフラップを下方へ曲げる。

エンジンが全開になり、揚力がうまれ…機体は短距離で空中に浮かびあがる。

進路をとり、一路佐渡島基地へと向かう。

佐渡島基地はほぼ完成していて、対空機能、対ＢＥＴＡ戦もこなすようになっていた。

時たま補充目的でくる旅団クラス編成程度のＢＥＴＡは、
日本海に入った時点で察知され、
まず急行する、佐渡島基地所属の対潜に特化した、
オーブ型イージス艦２０隻による、爆雷やアスロック等により徹底

的に駆逐され、
海岸にも到達できなくなっている。

到達できても…待ち構える陸戦強襲型ガンタンク達…

基地防衛システムの活躍の場もない状態だった。

そんな訳で、陸上主要施設となる、滑走路も完成。日本海側の一大拠点となっている。

もっともあの佐渡島基地防衛戦の後、自力生産可能とスパイがあ号に報告してる為、
大規模侵攻…いや大規模援軍がないのが実情なのだが…

旅団規模程度は補給の為にくる程度だった。

その佐渡島基地の滑走路にガルダが着陸する。

早速直上ゲートに向かい、直接エレベーターに乗り上げ…

エレベーターが下がり始めた。

「さてっと…生産したらガルダに搬入か…」

ＢＥＴＡ生産関連施設をそのまま残しているので反応炉に命令して１セット生産するようにした。

出来た直後に洗脳しないと…えらい事にはなるが…

「アルミサエル」

まずは弾となる団子虫みたいな多脚系のＢＥＴＡを洗脳する。

「まんま団子虫だな…」

［固く大きいけどね…］

ガルダに乗るように命令する。

２０脚ある足をせわしなく動かしてガルダに乗っていく…

次に生産……Ｇ元素が少し必要との事で補充し…

改めて生産したのが、大砲みたいなワームみたいな種だ。

母艦級のようにでかくはないが…

「ミミズ？」

［空洞がなければかな？］

洗脳後感想をのべるが…はっきりいって巨大ミミズだ。

ガルダに乗るように命令すると蠕動運動でガルダの格納庫に乗って

いく。

カオル達もガルダにのり再び飛び立ち、横浜基地へ空路を進む。

その頃横浜基地では武とまりもが、明日の総戦技演習の件に説明していた。

「……というわけで明日からの総戦技演習は、前回とは全く違うものとなる」

「……」「大丈夫かな？」「次は落ちないよ…みんな」「みき、頑張る！」

「因みに……喜べ宇宙にいくぞ」

「宇宙ですか？」「まだいった事ない…」

「ああ、観光用のスペースコロニーを使用するらしいな」

「はぁ～」「いった事は」「ないよ～」

「まぁ…そういったわけで明日０９００ブリーフィングルームに集合だ。受かれよお前ら」

「はいっ！！」

説明しおわったところで、腕輪型コミューターの通信内容を空間に浮かべ確認する。

これも異世界軍技術で採用されてるとの事だった。

相手先は先生から…

（新型種ＢＥＴＡ？）

新型種の調査実験をするとの事で、

１４：００に演習場管制室にきなさいとの事だった。

管制室へ行くと…丁度ガルダが着陸しハッチをあけるところだった。

（Ｚガンダムのガルダ級もあるんだ…あれなら戦術機も、そんまま乗っかれるよなぁ～

けど光線級対策どうすんだろ？）

「きたわね、白銀」

「先生、新型ＢＥＴＡですか？」

「ええ、何やらあ号が作成命令だしたみたいよ」

「あれに積まれてるんですか……ところで警備の機体見えないんですが…？」

「洗脳してるからいらないみたいよ」

「ああ、そうですね」
（反応炉も洗脳するからなぁ…カオル…）

ガルダの格納庫から団子虫のようなＢＥＴＡとミミズのようなＢＥＴＡが出てくるのが見えた。
あとほかに突撃級も１匹みえる。

「名称未定ね…最初のは大砲の弾の働きね…
ミミズみたいのが大砲…と」
「えっ？先生弾と大砲ですか？」

「ええ、間接遠距離攻撃をＢＥＴＡが取得したみたいね。しかも直接ＢＥＴＡを撃ち込んでくるという……」

「嫌なものが…」
ビー
会話の途中でブザーがなり、実射が開始されるので場の雰囲気がそちらに向く…

（仮）大砲型が前側にある口から（仮）弾型を吸い込んだ…

（仮）大砲型が目標にむけ身体を整える…

蠕動運動で勢いよく（仮）弾型を吐きだし…

ルーロス改が追っかけて画像をおくっていて…

（仮）弾型は勢いよく２０ｋｍ先に設置した標的の撃震に命中しばらばらに破壊する…

バウンドした（仮）弾型は身体を広げ着地した。

「正確に命中させるね…かなりの脅威だわ」

「数が揃えば厄介ですね」

ルーロス改からカオルが出て回収し、また射撃の為に戻ってきた。

ビー

再び射撃…次は遠距離限界まで…

再び（仮）大砲級が（仮）弾級を飲み込むと、吐き出した。

ルーロス改が追っかけてく…４０ｋｍを越え…４４ｋｍに弾着した。

「大和改の最大射程超えないけど…これかなり…」

「やばいですね…」

その後研究に（仮）弾級と（仮）大砲級は提供され…

名称が（仮）がとれそのままつく事となった。

進行スピードは弾級は４０ｋｍ、大砲級は１５ｋｍであるものの、
突撃級を最大１７ｋｍ飛ばす事も可能であり、
大砲級はかなり重要ターゲットとなる。

また弾級の甲殻は突撃級程ではないものの、対空迎撃をせずに、
前線うらの非武装支援部隊に向かうと大惨事になる事確実であった。

幸いといえるのは大砲級は、重光線級以下の個体数確実とスパイからの情報だった…

……

カオル報告

団子虫やばいよなぁ…

第１２８話（仮）帰還　投稿日２０１１０５２８（後書き）

作者「（仮）は間違えてないよ～」

ナギ少尉「はいはい」

作者「まぁ今回は帰還と、総戦技演習に向けて…の回だね～」

ナギ少尉「作者、なにやらカオルが余計な事をしてるけど？」

作者「……知らんカオルに言ってくれ」

ナギ少尉「ねぇ…受かるんだよね？」

作者「文官にすすんだ２０７Ｂ小隊のみながみえる…外交補佐官、総理大臣秘書、諜報局員、参謀、…等など」

ナギ少尉「ちょ…」

作者「ま、さておき次話は総戦技演習…前か…
総戦技演習自体は一話に纏めるつもりなのでその次ですね」

ナギ少尉「引っ張るね～」

作者「というか長くなりそうだからわけただけさ…まぁだからサブタイトルは」

ナギ少尉「２０７Ｂ小隊、宇宙へ！！どっきどっきの総戦技演習前お楽しみにぃ」

作者…ｏｒｚ

第１２９話　２０７Ｂ小隊、宇宙へ！！どっきどっきの総戦技演習前　投稿日２０２０年１１月３日

「準備いいか？」

「はい」＊５

「各員Ｂ５５ハンガーに移動。そこで用意されてるシャトルに搭乗する。小隊移動！！」

ザッザッザッ
小走りで移動してく。
途中すれ違ったひとから、
ああ、そんな時期か…で
「頑張れよ～」
等声援がくる。

Ｂ５５ハンガーのソファーで博士及びまりもちゃんが待機してた。

「全体～とまれ！！……整列…２０７Ｂ訓練小隊、総合戦闘技術評価演習参加いたします」

「せいぜい頑張ってね」

けだるそうに先生が答え…
（ん？）
目の前には前時代的機関車が１編成…
辺りを見回してもシャトルが用意されてない…

「先生ひょっとして戦艦用マスドライバーで打ち上げとか？」

「なわけないでしょ…身体がぺしゃんこになるわよ…
あれだって」
先生が指さす先は…
機関車。

「汽車？」「カッコイイです」「どっかのポートまで移動で？」

「せ、先生…あれです？」

「しつこいわねぇ…カオルに聞いたら？」

「おはよう～」

「ちょ、カオル」
聞く前にまりもちゃんが…

「ん？」

「これなの？宇宙いくの…」

「ああ、これだよ。武、９９９みた事ないか？」

「……ない…な。なんだそれ？」

「じゃあ、わからないな…世代か…ま、みんなのってのって」

「は、はぁ」「これに？」「レールにのってる…」

とまぁがやがやと乗り込んでく。

今回のビッグワン編成は貨車１客車１展望車１の短い編成となっている。

「みんなついた？…うし、ビッグワン、出場位置へ微速前進」

カオルが客車内でいうと…ガシュガシュと前進していく…

戦艦エレベーターにのり、エレベーターが上昇。

ゴウゥン

エレベーターがとまる。

「ビッグワン発進！！」

ボォーガシュガシュ

「わぁ～動いてる～」
「？武、線路空中で途切れておるが…」

「あ～そこの君達、窓を閉めてくれ、
宇宙にでるから吸い出されるぞ」

「はいっ？」
「ちょ本気でいってるの？」
「またなのね…」

「とにかく閉めてしばらくすればわかるから…」

ボォー

ビッグワンは上昇フロートが作動し、
無限軌道モード…レールなしの状態で空をかけぬけだした。

「お～」

「なっ♪…さて一回やってみたかったんだ…」
とカオル幻影をかけ車掌服になると…

「え～皆様、銀河鉄道００１号にご搭乗いただきまことにありがとうございます。

次の目的地は、観光コロニーメンデル～メンデル～。
２８分後に到着、停車時間は約１週間となっております」

「…あたま大丈夫？」「あなた……」

「／／いいじゃん男のロマンだよ、ロマン」

「車掌さん、２８分ってマジ？」

「ああ、加速減速でおわるからな～光速いく手前で減速だし」

「はぁ？…光速って？」

「あ、これ銀河系や星をわたる銀河鉄道ですから」

「……ところでこれ量産は？」

「今のとこ、これはつきっきりでなきゃ生産できないので…あと２編成位かな？
けど、普通列車クラスなら……
と軌道リング…まぁレールの敷設も必要ですけどね」

「これレール無しで走ってるじゃない」

「無限軌道モードです」

「……もういいわ……バカンスが頭痛くなりそう」

ボォー

「お、まもなく到着っすね」

「早い～」

「あ～トイレは後ろの展望車にもあるよ」

「トイレじゃないもん」

「ちょっとあなた…」

「からかい過ぎたかな？」

「もぅ」

ビッグワンはコロニーの中心部戦艦ハッチに向かっていた。

減速し、エアロックに進入…

コロニー内ハッチから、空中に踊りだす。

「ほわぁ～」「やっぱ実物でみると違うな」「地球と違う？」

「あの中央の島が今回の演習場の島だ…よく見ておいたほうがいいぞ」

途端に２０７の皆が被りつく…

「丘とジャングルが中央にある…」

ビッグワンは演習場と言われた島の上空を2周ほど旋回していた。

２０７Ｂ小隊はその間に頭にたたきこむべく、しんけんに下に広がる島をみている。

旋回しおわるとビッグワンは高度をさげ、海岸沿いに着陸、停車する。

「総員下車」

装備等を装着し、下車していく…

貨物車からホバートラックが下車してき、
コバッタ達が残りの装備などを荷台にのせてるなか、
総戦技演習の説明がはじまった。

「さて今回の総戦技演習だが、間引き作戦に参加したと想定、
生き延び帰還する事を目的とする…全滅は不合格だな」

「間引き作戦……」

「お前らは戦術機自身になり、間引き作戦を生き延び、帰還する。
それが任務だ。
期間は5日間、もちろん実際の間引き作戦同様規定数撃破で、
作戦終了時間を早める事も可能だ」

武は一息つき、
「使う装備等についてはカオル大将より説明がはいる」

カオルが説明変わり、
「じゃ、まずは装備等は前にあるのを装着してくれ」
机には人型サイズになっているザクマシンガン等がおかれていた。

「補給物資だが、ホバートラックがチューリップの役割、
あとコバッタ達が5名つく」

「よろしくお願いしま～す」

「で、ＢＥＴＡ役がＴ－８５０達だ。
彼らにはＢＥＴＡにふんしてもらって、罠とわかっていてもくるように等は伝えている。
彼らは、死亡判定うけると、銃の障害にならないように匍匐状態になり、
戦場からその状態で移動、戦場外にでると走る事が可能になり、
陣地に戻ったら再び攻撃に参加できるわけだ。
膨大な物量を再現しているわけだ」

銃をとりだし、
「今回使う演習専用銃はこれだ…ザクマシンガンを人体に合わせた形、
非殺傷レーザーガンの一種だが、装弾数も合わせている。
人に向けても大丈夫だが、演習中にやると破壊判定くらうからな…
で、今ちょっと撃ってみるから…」
パシュパシュパシュパシュパシュ

「かるくビリッときたろ？」

「はい」＊５

「それをセンサーが拾って破壊判定がでる…って事だ」

地雷や手留弾等だし…
「これも同一な働きをもつ。あとの機材等の説明はホバートラックに積んであるから、演習開始時間までに説明をうけてくれ」

「戦術機のレーダー等は？」

「ああ、このセンサーに内蔵してある。
また反重力フロートも装着する事になるが、光線級がいるとおもってくれよ」

「こちらの破壊判定は？」

武が変わり、
「タッチした種族により破壊度が違ってくる、
またチューリップ役のホバートラックは、もれなく破壊判定が降りるから注意しろよ。
その時点で補給できなくなるから、下手したらサバイバル生活になる」

「積んであるもの全て使用不可との事ですね？」

「ああそうだ。食料は…」

「椰子の実とかもあるから一応大丈夫だよ。毒ヘビなどの生物はいないが、魚釣りも可能だね」

「だ、そうだ…がそうならないように、ホバートラックは破壊判定

されるなよ」

一通り演習に関しての説明は終わり…

「以上だ何か質問はあるか？」

武は見渡し……なさそうなのを確認すると、

「では…」

時計を確認し、

「今から約２時間後の１１月３日１３００から１１月８日１３００まで、

総合戦闘技術評定演習を開始する。

総員、別れ！！」

号令に合わせ敬礼すると、一斉に装備装着すべく机にかけだしてく。

…

「じゃ、移動すっから頑張れよお前ら」

「中尉殿が発破かけてるんだ、合格しろよ」

「はいっ！！」

ビッグワンにのりとなりの島へ…

そこには管制室及びホテルガレージが出来ていた。

「けっこういいじゃない……おいしそうなお酒もあるし～」

「ところでカオル、気になってんだがあの光はなに？」

「ああ、あれ？人工太陽のチューブだが、実際の太陽同様に紫外線はでてる。
肌を焼きたい時はサンオイルを塗ってくれ」

「へぇ…成る程ね」

一通り満足したろう…
このコロニーは海もある閉鎖型の観光コロニー、
気温設定等は亜熱帯に合わせてある。

またスコールも毎日1回は人工的におき、島の植物等に水分を与える事になる。

スコールは毎日13時から30分の設定である。

演習場がある島および今渡った島、他にも3つ程島があり、
まだ建築途中で人は住んではないが、
身近な観光コロニーとして人の心を癒す事となるだろう…

もちろん海は最大水深２０ｍあり、魚釣りも可能になっている。

他にも高原農業コロニーでも、観光目的や、
一年中スキー、スノボーできる設定の観光コロニーも稼動する予定だ。

「あと足りたいのないっすか？」

「そうね…なさそうね～」

「何かあったら、そこにいる２１号にいってください。
Ｌ３宇宙ステーションから資材等きますので」

「わかったわ」

「じゃ俺は一回基地に戻るから五日後あたりにまたきます」

「いってらっしゃい」

ルーロス改に乗り込みエアロックからでると、一路地球へ……

……
カオル報告

２０７Ｂ小隊をお届けしました。

落ちるかな？…

第１２９話　２０７Ｂ小隊、宇宙へ！！どっきどっきの総戦技演習前　投稿日？

ナギ少尉「作者…落ちるの彼女達？」

作者「運命は神のみぞしる……ま、カオルは落ちるようにしたみたいだがな」

ナギ少尉「…で今回はスペースコロニーまでと、演習で使う武器類の設定ね」

作者「一応基本的にビームガンというか、赤い光線ジリオン系統のレーザーサバイバルガン？な設定で、彼女らには物足りないだろうけどね」

ナギ少尉「このドラムマガジンが電源になってるのね」

作者「ああ、そうだね。でセンサー部分にも電源があると…これが相手側のＴ－８５０にも装着してる状態だ」

ナギ少尉「それで死亡判定して陣地に戻って再出撃ね…」

作者「膨大な物量としてな」

ナギ少尉「ところでＢＥＴＡ役のＴ－８５０はどう判別してるの？」

作者「そこはリアルに人間サイズにした着ぐるみを来てもらってる。
ただサイズ制約上戦車級だけが大きくなるがな…」

ナギ少尉「膨大な無駄遣いね……えっと次回は作者？」

作者「……演習が先か、カオルが戻ってトリップか…
すみませんまだ仕上がってません…ｏｒｚ
なのでまだ題名は未定でお願いします」

ナギ少尉「だそうです。この駄目作者に変わってお詫びしますね。
次回も、お楽しみにぃ～」

第１３０話　総戦技演習の間……投稿日２０１１０６０１

今だ２００１年１１月３日

往復２時間程の行程で横浜基地にもどってきたカオル…

（やっぱりシャトルよりも早いよな～）

恒星間、銀河間レベルの技術である為、早いも当たり前であった。

（けど武装技術は使えないよな…）

実体弾でもっても、
一発で星を砕くレベルがある為使いずらいものである。
地球を破壊は……
光線系統も同様だ。

基本的には近未来的な世界に再びトリップする事になる。

カオルは基地につくと、異世界に行く前のやり残しをかたつける為に、
Ｂ５５ハンガーデスクへと向かう。

デスクにつくと、新型ＢＥＴＡの大砲級や弾級対策の為にレポートの仕上げにかかった。

（対空ミサイルの復活しかないのかな？かもしくは…）

異世界軍に限っていえば、無限弾薬装填装置による対貫通対空ミサイルや、

わざと着弾させ強酸浴びながら切り刻む方法でいくつもりだったので、

それ程脅威には考えてはなかったが、

異世界軍以外の防衛戦に限っては、使われ出すとかなり厄介な存在だろう…

大砲級でなく弾級が撃ち込まれた後が厄介…

今では生産が打ち切られて、さほど生産されてない対空ミサイル兵器を増やし迎撃するしか、

被害がでない方法がない…

という結論しかでないのであった。

（結局は、ビッグトレーミサイル型を増産し、対空ミサイルのっけて、急行するしかないのかな…

かもしくは…大気圏外からの強襲…）

とりあえずビッグトレーミサイル型の増産を注文し、

また国連に対しての大砲級及び弾級の警告のレポートを纏めあげた。

「ん～こんなもんかな？」

［マスター、仕上がった？］

「ああ、あとわすれは…」

［今のとこマスターが必要な事はないから大丈夫だよ］

「ん…そうか…」

カオルは一通り準備をすませ…

「じゃ、いってくるわ」

「いってらっしゃい～」

世界扉を潜る。

～～～

さて懲罰部隊…は皆さん存じているだろうか？

その起源は第二次大戦と言われる。

懲罰部隊は名誉回復の為、最前線で戦い、名誉回復か死か…

ナチス・ドイツでは、懲罰部隊には９９９の部隊番号がしばしばふられ、北アフリカ戦線では勇猛果敢に戦果をあげる事となる。

一方武装親衛隊ＳＳでの懲罰部隊は最悪で、
通常勤務の遅刻などの微罪でも送られ、

その身分を保障に、民間人処刑任務など…
大量虐殺を拒んだ場合には志願から命令に切り替われ、そして射殺される事となる。

一方対する旧ソ連の懲罰部隊なんぞ、武器を持たされず弾だけ持たされて、生身で戦場にだされ…
戦場で転がっている味方の死体から武器を奪い、それで攻略しろ。

また撤退も認められず臆病風で下がるものなら、
スパイと見なされ督戦隊に射殺される始末…

ボルガ川攻防戦では、約９００名強いた人員が３００名程となるしまつ。

一方、地球連邦では…

どちらかといえば名誉回復的なナチス・ドイツに似た懲罰部隊は存在している。

陸戦強襲型ガンタンクは、懲罰部隊に送られた3機だった。

アリーヌ・ネイズンは機密漏洩の罪で終身刑をくらい、仮釈放のち、懲罰部隊としてオデッサ戦線を戦い…天へ召されていった。

さてある懲罰部隊のある兵士のお話をしよう…

「いいのかい？ホイホイ俺に尻をみせちまって」

ひっしに基地の中を逃げていた…
俺はささいな事で上官をなぐってしまい、
懲罰部隊送りとなってしまったのだ…

最初もう人生終わった…と思ったさ…
何しろ最前線送り確定だから…がエースパイロットがいると聞いて、
まだ人生助かったとおもってた。

が……

着いた部隊の少隊長に身体を撫でるように触られ、
服を脱いで尻を向けろと命令された為、
危険を感じ、

隊長室から逃げて、自室の部屋のドアを閉じロッカー等をたてかけ塞いだ。
しかし……

「いけないなぁ。これ位で、この俺を止められると思ってるのかい？」

ありえない事だ…いとも簡単に扉が開かれ、
飴細工のようにロッカーごとわきによせられやつが部屋に侵入してきた。

そして扉が閉められ…

「もし、俺をとめるっていう時は、その時は……
お前、俺の腹の中に小便しろ」

（わけわからねぇ！！）

「俺の事を本気にさせるとは……
お前中々いい男だな」

部屋の中をひっしに逃げ回ったが捕まれベットに放り投げられた。

「お前のせいでＭＡＸになったシークレットソードを見てくれ。こいつをどう思う？」

「す、すごく大きいです」

（何言ってんだ俺はっ！！）

条件反射的に答えてしまった…

「だろう？けど、このままじゃ収まりつかないんだ……だから」

制服でなく、整備兵の青つなぎを何故かきている上官は…

ジッパーをおろして、６パックになった胸元をさらけだし…

「や　ら　な　い　か？」

「えっ？ちょ、まーー！！」

菊門に……

「アッーーーー！！」

……

しばらく時がたち、隊長の様子はというと…

ビービービー

『敵軍ＭＳ発見、構成ドム３６機規模、

当基地目指して進行中、阿部ＭＳ小隊は直ちに出撃しろ』

「やれやれまだまだなのに…あと４，５ラウンドはいけたがしょう

がない」

裸の肉体に青いつなぎを着込む。

「君は……しばらくそこでやすんでろ」

「……は…い」

何をしてたかご想像にお任せする。勿論部屋の中は男男だ。

「またあとでラウンド再開しよう」

「はい…お待ちしてます」

前まで逃げていた兵士は、既にシナをつくっている…

エースオブエースのこまった性癖の為の懲罰部隊。

菊門貫通され、何百人の男どもが開発されたろうか…

格納庫に歩みを進めると…

「阿部様!!機体の用意ができてます」

「ありがとう。帰ったら…」

「はいっ!バッチコーイです」

と尻を向ける整備兵。

この基地の男達、いや男だけしかいないが、全て目の前の人物、阿部高和の開発済みについさっきなった。

ノンケでも構わない、目の前に男がいれば開発をするあまりにも危険な男…

彼の上官は開発され、更に上が開発されそうだった為、隔離し、しかしエースだった為に恋人達の部隊と基地が設立され、今に至っている次第であった。

軍紀違反者特に女性兵士への違反行為が行われた際の懲罰部隊として機能し、
うまく運営されてる次第である。

彼は愛機であるジムストライカーに乗り込む。

「出撃準備完了」

『了解、ブラザー０１出撃お願いします』

「ブラザー０１出撃する。帰ったら菊門よろしく」

『洗ってまってます』

「可愛いやつめ」

彼は愛機ジムストライカーをかり戦場へと飛び出してく…

……

カオルは日時をどうも間違えたようで……

（やべぇな…日数無駄にしちゃったか…）

ついでだから適当にうろついてた。
そんななか……複数のドムと単機で戦っている、
ジムストライカーをたまたま見かけたのは行幸ともいえよう。
辺りには残骸が散らばっている。

（へぇ…エースクラスか…
そういえばジムストライカーは…確かなかったよなぁ…）

カオルは機体情報だけでも…との事で取り付いた。

取り付いたら…後悔した。

コクピット内には全裸の男がいて…

「はっ……むん……くはぁ」

（何故に全裸?!?!）

しかもシークレットソードがそそり立ち……何故か嬌声をあげている。

カオルはすぐに逃げたくなった…

しかし、ジムストライカーは貴重な機体であった為に我慢して情報を取得してた。

（うわわわ……）

マイサンなどガチンガチンなど大声だして…

とてもじゃないがドノーマル、妻をもつカオルにとっては耐えられない状態である。

作者も目の前にいたら逃げ出すだろう…

人間の闇にはいきたくない…

カオルは辛抱の時を越え…機体を離脱した。

（だぁぁ…エースだろうと無理なもんは無理だ!!）

隠れだったらわからなかったろう…
が流石に変態レベルなので少しの時間でも居たくなかった。

相手になってたドムがかわいそうになってきた…

そこへ…
（ん？対ＭＳ歩兵？）

ジオン側から一人の歩兵が武装もなしに…
途端にジムストライカーが動きをとめ、歩兵を凝視しているようだ。

ジオン歩兵は何故か上半身裸になると、乗ってきたジープをかり移動する。
それを追う変態ジムストライカー。

……
最後は呆気なかった。
罠とわかりつつもその歩兵を求めて、対ＭＳ地雷を踏んでしまい…

下半身を失い崩れおちるジムストライカー。

大地に上半身がつくと再度地雷に接触の為爆発。

第６４独立懲罰部隊長、阿部高和連邦軍中尉…総撃墜数１５６機。
１２月３日北米戦線にて戦死する…

（流石に無理だよ…）

「”世界扉”」

カオルは世界を渡る。

……

カオル報告

ジムストライカー

第１３０話　総戦技演習の間……投稿日２０１１０６０１（後書き）

ナギ少尉「阿部…救出しなかったわね…」

作者「彼は…流石に無理だな」

ナギ少尉「ゲスト？」

作者「…懲罰部隊からこの話が…というか何故……なった？」

ナギ少尉「総戦技の方どうなったの？」

作者「そっちが筆進まないんだよな…流れは…決まってるんだけどさ…難しい…。
なのでもう一話本来の人材ネタ挟むかも」

ナギ少尉「まぁ…作者頑張ってね…また次回お楽しみにぃ」

第１３１話　ガンダム編　ガルマ入隊す？　投稿日２０１１０６０３

三日目…

気をとりなおして…
（よけいなのを探しにいって…えらいもんみたな。
メジャーところを…）
カオルは改めてガンダムの世界に降り立つ。

宇宙歴００７９、１０月４日

場所はニューヨーク、カオルは……
（お、みっけ～）

ホワイトベースがドーム…いや屋根も建築材でできた球場へ、
後進ではいっていくのを確認できた。

（もうすこしか…）
この後の爆弾避ける為にホワイトベースの入ったドーム内に進入する。

遥か上空よりルッグンやドップが偵察の為におりてきた。

街上空から探すが見つからず…
そのうち、

ヒューンズガガガガガ

絨毯爆撃によるローラーでいぶりだしにかかった模様だ。
辺り一面爆弾が落ち炎があがる。

ホワイトベースのいるドームには…僅かにそれて爆弾が落着する。

さて、ターゲットのいる、ガウ艦橋では……

「爆弾の残り３０％となります」

「どうだ?木馬は出てきたか?」
ガルマがオペレーターにといかけてた。

「いえ、まだです」

「ど、どこだ?なぜ出てこない?」

シャアがガルマに、
「連中も戦いのコツを、呑みこんできているのさ」

苦虫を潰す表情のガルマ…

「こうなったら地上に降りて見つけ出すしかない」

「まあ待て。そういうことなら、私が自分の部下と降りてみる」

「やってくれるか？」

「当たり前だろう、私は君の部下だ」

「今はそうだが、もともと君はドズル兄さんの直属だ。私だって」

「いつになく興奮しているようだが、
女性の為に功を焦るのはよくない。落ち着くんだ」

「任せる」

「うん」
シャアが、モビルスーツへ乗るべくでていった。

「偵察にでるモビルスーツにあたる、爆撃中止だ。
各機主砲攻撃陣形に組み直せ。
偵察部隊より敵発見の報告ありしだい攻撃再開する。
それまで上空待機だ……
私がイセリナの為に焦っているだと？馬鹿な。私は冷静だ」

指摘を受けたが…納得しないながらも、
ガルマは、シャアを見送るべく、格納庫管制室へと移動した。

「ザク降下機動バランス調整スタンバイ」

「シャア、木馬なりモビルスーツを発見したらすぐにしらせろ。
ガウで仕留めてみせる」

「わざわざのお見送りには恐縮するよ。今回はそのつもりだ。
頼むよ、ガルマ」

「頼んだぞ、シャア」

「勝利の栄光を、君に」
敬礼ご颯爽とコクピットに乗り込む。

管制室にあるモビルスーツの気密確保告知のランプがつき、
エントリーデッキが収納される。

「よし、ハッチ開放しろ！！」

ゴウンゴウン
格納庫内部に空気が乱入してきた。
機械音をあけながらガウの前部ハッチが開放されてく。

ブゥゥン
ザクのモノアイが光り、ザクが踏みだし、ザクの親指を立て挨拶してくと、
ハッチより自由落下していった。

カオルは爆撃がやんだ為、戦場となる上空にいた…
（きたな…）

ガウからシャア機を含め、３機のザクが降下し地表をめざしていくのがみえた。

ホワイトベースからは、ガンタンク、ガンキャノンが、ホワイトベースの前へ出て待機し、
アムロののるガンダムが囮になるべく、降下したザクに向かって進んでいく。

ガンダムが囮の役割すべく、ブースターをふかして検索もかねてジャンプをする。
シャアザクが見つけ、部下のザクに合図しガンダムに接近してく。

シャアザクはビルへ取り付き、強度を確かめると…
タイミングみはからってブースターをふかして、
音をたてずにビル屋上に着地する。

まさに神業的芸当…

（そのシャアが今は我が軍にいるんだよなぁ……）

部下ザクを狙うガンダムへ対しバズーカー発射するが、壁にあたる。

（さてそろそろか…）

カオルは上空のガウへとむかった。

取り付いたガウ艦橋にて…

「シャア少佐からの呼び出しです」

「繋げ……待っていた、シャア」

『モビルスーツが逃げるぞ。その先に木馬がいるはずだ、追えるか？』

「追うさ…ありがとう、恩にきる」

『しとめろよ、ガルマ』

「ビーム砲を開け。全機、攻撃スタンバイ…全機降下！！進路はガンダムの逃走方向だ。見失うなよ！！」

「はっ！！」

メガ粒子砲の格納ハッチが開き砲身にエネルギーが充填される。
各種砲門も正面、進行方向へとむけ準備はととのう。

「攻撃準備完了！！」

「進路そのまま！！…イセリナ……もう少しだ…木馬を落とせばおまえと……」

突如として…

「うわーっ」

「うあっ…」

ガウが被弾し大きくぐらつく、
連続した爆発振動で艦橋内部では立ってられなくなる。

「…ど、どうした？」

「うしろから攻撃を受けました」

「うしろだと？」

「も、木馬です、木馬がうしろから」

その間にも装甲が薄く、攻撃方法がない後方からの射撃になすすべもなく、
次々と落ちてく。

「…上昇だ、上昇しろ」

「無理です」

「１８０度回頭だ……ガ、ガウを木馬にぶつけてやる」

回頭するも編隊機が既に次々ついらくしていき…

「二番艦音声途絶」

「生き残りの艦は？」

「三番四番六番七番艦既に爆沈、五番艦も操艦不能！！
残るは当艦のみ！」

「ぐぅ……」

『フフフフ、ガルマ、聞こえていたら君の生まれの不幸を呪うがいい』

「なに？不幸だと？」

『そう、不幸だ』

「シャ、シャア、お前は？」

『君はいい友人であったが、君の父上がいけないのだよ。フフフ、ハハハハハ』

「…シャア、謀ったな。シャア」

これ以上聞きたくないとばかり、インカムを投げ捨て、

「くそっ」

操縦しているパイロットを押しのけ操縦桿を取って代わり操る。

「…私とてザビ家の男だ、無駄死にはしない」

炎をあげながらホワイトベースに進路をとるガウ。

右翼はもげ、

「ぐぅぅぅ、まだだ、まだだだ」

操縦桿がとられようとするが、ひっしにガルマは操ってる。

滑空状態でガルマの目は、ホワイトベースを捕らえている。

正面に映るホワイトベースは、上昇しようと艦体をあげるが間に合

いそうもない。

ホワイトベースの主砲が命中振動がはしる。

「だあーっ…」

操縦桿を両腕でひっしに操り、

正面にうつるホワイトベースが広がる。

ホワイトベースから火線がカオルの取り付いてるガウにあたる。

そして……機体は限界に達し、左側主翼も脱落……

「くそっ…ここまでか……ジオン公国に栄光あれーっ」

カオルはガルマを引き込み、爆発し、四散するガウから抜け出した。

ガウはそのまま燃える塊となり、墜落、朝もやの中大炎上する。

「さて…ガルマ、お坊ちゃまを手なずけるにはなぁ…”世界扉”」

カオルは世界を渡り、鋭気をやしない翌朝再び世界扉を潜ってく…

四日目

宇宙歴００７９、１０月５日

カオルは再びニューヨークに降り立つとジオン軍基地へとむかった。

基地内部に幻影をかけ進入する。

「……ガルマ様のお使いになったお部屋でございます」

（あ、いた…）
ちょうど扉内にはいったところだったので、
一緒についてはいった。

「さぞ、ご無念でございましょう。
しかし、このままではすませません、イセリナ様。我々は必ず」

「ダロタ中尉」

「は」

「あたくしをガウに乗せてください」

「イセリナ様」

「ガルマ様を殺した憎い敵、せめて、せめて一矢なりとも報いたいのです」
カオルは近寄って、蚊の如く、イセリナの血液をを抜き出してた……

「いやしかし、それは」

「ダロタ中尉」

「……わかりました。イセリナ様にはまけました」

「ありがとうございます」

「お父上へのご連絡は…」

「しないで下さい。皆様にご迷惑をかける事になります」

「……わかりました。では出撃準備に取り掛かりますのでこちらへ」

「はい」

二人はでていった。

無人になる部屋の中、カオルは擬態カプセルをだした。

さっき吸い取った血液サンプルを投入する。

擬態が変形しはじめたのを確認すると虚数空間にしまい、おって部屋をでる。

カオルは出撃するガウにそのまま乗り込み…

「イセリナ様もうまもなくです。……見えました」
前方に米粒にホワイトベースがみえた。
「来たぞ。目標をモビルスーツに絞れ」
上空から降下してくるガンダムとガンキャノン…
「モビルスーツ、あれがガルマ様を」
「なんとしてもガルマ大佐の恨みを晴らしてご覧にいれますよ、イセリナ様」
しかし、ガンダムとガンキャノンが…前方をゆくガウの上にのり…
「ちぃ……二号機、三号機を援護しろ」
すると、
「あっ」
「ば、馬鹿めが……」
ガンダムが味方の放った主砲をよけ、それをくらい墜落していく1機のガウ……
「モ、モビルスーツめ」
ガウの巨体では小回りのきくＭＳの良い的だった……

が、撃墜されないのはガウ同士が、距離が離れているまた高空にいるおかげでもあった。

「戦闘機はないのですか？」

「ざ、残念ながら。この数回の戦いで実戦に出られるものは……お、あれは」

『こちらシャアだ。手を貸すぞ』

「シャア少佐、私です、ガルマ大佐直属のダロタ中尉です」

「誰でもいい、コクピットを狙え」

「コ、コクピットですか？」

「腹だ。ガンダムは腹が心臓だ」

「わ、わかりました」

「私は木馬を攻撃する。そこを突いて一気にケリをつけるんだ」

そして、シャアのかるルッグンの爆弾攻撃が、
見事にホワイトベースの左舷エンジンを命中させ、
白煙をあげながらホワイトベースは、戦線離脱…
墜落してく。

それに気をとられたろう、ガンキャノンが被弾し、
バランス崩してガウの翼の上からおち、
ガンダムも助けるべくガウの上から離脱してく。

「逃がさないでください。絶対、絶対に倒してください」

ガンダムをおって低空へとガウは舞い降りる。
低空飛行しているガウに飛び掛かるガンダム。
翼の上に見事にのるとジャベリンを突き刺し…

「今だ、モビルスーツに集中攻撃を掛けろ」

狙ったように銃撃が加わり、くぎつけとなるガンダム。

「いいぞ、もう一息だ」

ガンキャノンからの援護射撃が…

「ああっ」
命中し、衝撃がはしる。
「ああっ。ひるむな、一気にモビルスーツを」
ガンタンクからの援護射撃もはいり、
「ぐあっ」
「ああっ」
自由になったガンダムは、ガウを真っ二つに切り裂き尾翼も切り裂き…離脱、
爆発するガウ。
「うわっ」さらに被弾でダロタが…
「ダロタ」
「う、腕が、操縦できない…」
「代わります」
「イ、イセリナ様」
「…このままではガルマ様がおかわいそうです」

ガウを操縦し、正面にいるガンダムへ特攻する。

「モビルスーツ、ガルマ様の仇！！」

ガンダムに見事命中するも…

ドゴーン！！！

艦内に衝撃がはしり、人が宙を飛ぶ。

「グワァ」「ぎゃ」

バキボキ

警告なしの衝撃だった為、異様な音が響きわたる。

胴体着陸の衝撃で…沈黙する艦内。

カオルは姿を現し気絶しているイセリナを医療カプセルにいれ、

偽イセリナに状態をコピーさせる。

偽イセリナの身体に深手をおった傷ができる。

その間十秒…

思考リモコンで偽イセリナを起動させ…

偽イセリナがカプセルからでてきた。

カプセルを回収し自分自身に幻影をかけきえる…

座席にセットした。

「ダロタ中尉、中尉…」
座席から立ち上がりかけより……

ダロタは衝撃でこときれてるようだ…
（うまく動いてるな～）
外にガンダムがみえたので、艦の上にでる。

「ガルマ様の仇！！」
…適当なところで…

「…うっ」

ガウからバランスを崩して、一発うち…身を投げ出した。

地上に落下する偽イセリナ…
リモコンを切る。

（これで回収完了っと……）

この後偽イセリナはホワイトベースクルーにより手厚く埋葬される
運命となる…

勿論リモコン受信機等はとけ、ただの死体となる。

……

カオル報告

ガウ取得～♪

第１３１話　ガンダム編　ガルマ入隊す？　投稿日２０１１０６０３（後書き

作者「気を取り直して…ガルマ～」

ナギ少尉「ふっ呼んだかい？」

作者「ナギ、なにやってんの？」

ナギ少尉「後書きは私が主役なの～」

作者「……まぁいいか…次回…ぶつぶつ」

ナギ少尉「変えたら殺すよ」

作者「わ、わかった…」

ナギ少尉「で、今回はカップルさんなのね～」

作者「ああ、ジオン軍の身分をすててまで一緒になろうとしてるんだ。
イセリナはガルマを追って…」

ナギ少尉「じゃ、ヒルダさんには…」

作者「喰われるかもなぁ…あのひと際限ないし…なにしろサッキュバスだしさ」

ナギ少尉「……ま、まぁ…幸せになってねお二人さん…ですよね～」

作者「だな」

ナギ少尉「さていよいよ本編が進みます。
次回１３２話　どっき！おんなだらけの総戦技演習　寝起きもあるよお楽しみにぃ～」

作者「ちょ…寝起き??……書き直しだぁぁぁ…」

ナギ少尉「まったね～」

第１３２話　どっき！！おんなだらけの総戦技演習　投稿日２０１１０６０５

タイトルはナギ少尉　１３１話の後書きで発言したのをそのまま流用しました…
少し壊れて気味です…ｏｒｚ

第１３２話　どっき！！おんなだらけの総戦技演習　投稿日２０１１０６０５

２００１年１１月５日未明…

「彩峰、おきてる？」

「……」

反応がない…屍のようだ。

銃を撃ちながら返りみると…器用に銃のトリガーを引きながら彩峰は寝落ちしている…

「彩峰に、打ってちょうだい」

気付け剤をコバッタに打ってもらうようにいうと…

皮膚に接着した注射から薬剤が投入される。

１分もたたない内に彩峰はおき、

「おはよう…」

「よだれでてるわよ」

トリガーから離さずに左腕でかるく拭う彩峰…

「彩峰、落ちる前にいってね」

「ゴメン」

しかし、彩峰が落ちるのも無理もなかった…

休む間もなく押し寄せてくる着ぐるみＢＥＴＡ達。

何万匹の着ぐるみを撃ったのか数えるのも嫌になってきた。

２００１年１１月３日１３時

最初は激しいスコールとともに始まった。

時間きっかりに土砂降りで大地？には川ができる。

事前に聞いてて、スコールの時間前後１０分にはＢＥＴＡ役も戦闘中であっても、

引いてく休戦時間と、演習ルールにつけ加わっていた。

「凄いぃぃ～」

「え～なにぃぃ？？」

「大雨～」

なにしろ会話が成り立たないほど跳ね返り音がする。
簡易テントに雨が当たりその音がうるさいのだ。

そしてきっかり３０分、スコールはやみ、空には虹がかかった。

「はわわわぁ～綺麗ですぅ」

「本当ね」

「ああ…」

「あれも人工物？」

「武さんもみてるんだよね」

「そうね……さっみんな評定訓練の合格目指すわよ」

「了解っ！！」＊４

勢いよく罠等の武装をもち設置作業に散らばっていった。
時間とのたたかいだ……

その一方、監視側となる教官サイド……
いや夕呼さんはというと…

「はぁ～極楽極楽～生き返るわぁ♪」

雨が上がり、すぐに気温が上がってくる砂浜にいた。
マイクロビキニに着替えて、早速ビーチチェアーで日光浴をする先生…

「まったく夕呼……」

「な～に？まりも～あんたは着替えないの？」

「カオルさんが来るまで着替えません！！」

「浮気しても言い付けないわよ～」

「いいです！！」

カオルがルーロスに乗って帰ったあと、どっからともなく、ビーチチェア等をだしてリゾートまんきつ丸出しだった。

「まったく先生は……」

仮設コテージに設置されてるエアロスタットから送られてくる、
演習の映像モニターを見ながらぼやいた。

「まぁそういう俺もなぁ…」

コテージは、エアシールドがはられてて、
外とは気温が違って25度の快適温度に保たれていた。

「注文、コーヒー頼む、ミルク多め、砂糖抜きで」

武は空中に話すと目の前の机にカップが浮かびだす…

ぼやけてたカップが段々と輪郭がはっきりして、
あったかい液体、コーヒー、ミルクたっぷり入りが出現した。

「こんな設備みたら使いたく、だらけるも無理もないか……かゆうま……じゃなく美味いな～」

熱々のコーヒー、

(けど…どうやってこれ作られてるんだ??
後でカオルにきいてみるか…)

「白銀～あんたこっち来て、わたしにサンオイル塗りなさいよ～」

「先生！！そんなことできるわけないじゃないですか！！
純夏に殺されます！！」

「だまっといてあげるからぁ～」

「黙っても思考よまれたらおしまいです！！」

「……そうね…あ、浮気しても良いように、
思考ブロックあとで組み込んどくわね～」

「先生！！」

どうやら余計なフラグが立ちそうなひとこまだった…

同日夕方…

「美琴、そっちにいったわ！！」

「了解！！通さないよ！！」

ホバートラックを中心に陣地を形成し、防衛戦の形になっていた。

「マガジン！！」
コバッタ達が、忙しく電源パックを運ぶ。

撃っている横からタイミングを見計らい装着し直して、
そのまま火線？を切らさずに撃ち続けられる。

「通したら負けよ！！火線切らさないで！！」

次々と押し寄せてくる着ぐるみたち…

倒れては匍匐で移動はしてるが、
倒される以上の着ぐるみが押し寄せてくる。

「何千人いるの！？」

「知らないわよ！！ときかく途切らさないで！！」

その光景のモニター監視中の武…

「あいつら少しやばいかなぁ…」

罠等も突破され、ぎりぎりの線で耐えきってるのが、傍目でも見え

る。

「はぁ……カオル余計な事を」

手元の資料には、当初１０００人のＴ－８５０を要請してだったが…

「それ甘いだろ」

の一言で、

各基地に所属していたのも集まって総数１００００人のＴ－８５０

が参加していると、

かかれてた。

（こんなことになるなんて……なぁ…

先に資料みとけばよかった…）

その資料はおかしいとおもって、用意されてたのを取り出したもの

だった。

やられてハイブを想定した陣地にもどり、また再攻撃がまさに途切

れず、

まさに、物量でのＢＥＴＡの進攻を再現している。

結果…休憩時間が…

「スコールの時間のみにならないか？これ…」

２００１年１１月４日早朝…

薄暗い朝もやの中、２０７小隊は、

武の予想通り…最初から途切れなく攻めてくるＢＥＴＡ役のＴ－８

５０の為に、
段々と疲労が蓄積していく…

食事も自分たちでとる暇もなく…

「あ～ん」
パクパクモグモグ

コバッタ達に食べさせてもらっている次第だった。

押し寄せるＴ－８５０に対しての火線を絶やす事ができず、
銃のピストルグリップのトリガー及びフォアグリップから、手が離せない為だった。

コバッタ達は、射撃に参加できない…これが演習のルールであったため、
それ以外を手伝ってもらっている次第だった。
「あ～！！ういんな～がぁ～」

「……え～拾って食べさせてよ～」

「美琴あきらめなさい…」
夜間デジタル調整された網膜投射ごしに見なくても、
なにを頼んでいるかわかったため、そう告げた…

２００１年１１月４日夜

「あいつら、休みとれてないな…」

睡魔に負け、コバッタ達に監視を頼んで起きたあと、
モニターを見てみると…疲労の色が浮かんでいる２０７の皆が映っている。

「スコールの時間のかすと…３６時間はおきてないか？」

照準が甘くなったりしてるのが確認できる…

２００１年１１月５日１３時半過ぎ

「ねえ、みんな！！撤退できるわ！！」

榊は、スコールあけた後すぐに隣の島へと一時避難を提案した。

「ば、ばかな演習放棄だと？正気か？」

「……馬鹿？」

「いい、今回の演習ルールはなに？」

「間引き作戦」

「そう、間引き作戦ね…ＢＥＴＡ役との戦場はこの島、
私たちは戦術機…
けどね…制限エリアはあった？戦術機母艦はあった？」

「両方とも…ない」

「そう、本来なら交代休憩できる拠点、戦術機母艦がないのよ」

「……確かに設定されてないな」

「つまり、不利になったら撤退し補給等が普通はできるわけ…
死守命令はでてないでしょ？」

「確かに…」

「一回立て直すわ…そのための撤退よ」

どうやら、演習のある島は設定されてたが、
制限エリアが設定されてないのに気がついたようだ。

「わかったそなたに従おう」

「同じく」

「みきも〜」

「ぼくも…限界が…あふ」

「じゃあ、急いて撤収よ!着ぐるみがくる前に」

「……もう遅い、見えてきた」

「っ!!急ぐわよ!!」

押し寄せる着ぐるみを後に、なんとか突破し戦域となる島からぎりぎり離脱できた…

隣の島についた途端安全が確保できた安心感からか…
パタリ…スースー
と寝るものもでるしまつ…

「はぁはぁはぁ…」

「も、もうねむ……」

「な、なんとか無事ね…ホバートラックも健全だし…」

『みんな無事なようだな?』

「き、教官っ！！しょ」
『いや、いい。寝かしてやれ…まる三日程ねてないのだろう？演習のある島からの撤退できるのによく気がついてくれたな』
「は、はい！！」
『が…演習島外での休憩を挟む事により、ある条件が加わる事となる』
ある程度は予想してた模様の答えを聞く。
「……間引き作戦の成功ですか？」
『ああ…まぁその通りだな』
榊の中ではやはりと思っている。
それはそうだろう…演習エリア外にでてただ単に生き残れれば良い…ではすまないからだ。
「まだ間引き作戦のノルマをこなしてないのですね」

『まぁ…そうだな。…ノルマを越えたら撤収命令がでる。それまではときかく稼げそれだけだ。
…と、最後に一つ、期間中にこなすには今日の状態になるな。
とにかく休んで体力回復しろ。以上だ』

「はいっ！」

２００１年１１月６日午前中

「みんな準備いい？」

「うん！疲れとれたしバッチリ」

「任せよ」

「狩る」

「みき、元気回復ぅ！」

「じゃ、いくわよ！！」

再び戦場へと舞い降りる。

武側…

「この調子なら大丈夫そうだな」

一時はどうなる事やらとおもったが、無事に総戦技をこなせるようだった。

２００１年１１月７日夕方…

『ＨＱより２０７Ｂ小隊へ、間引き作戦の規定数に達した。速やかに方位９時の方向にある島へと撤退せよ』

「了解!!……皆撤収命令でたわ、最後まで気を抜かないようにね!!!

珠瀬、光線級潰して!!」

「うん!!」

いまだに押し寄せるＢＥＴＡ達の圧力を流しながら、たまが光線級を潰すと、

ホバートラック、２０７小隊の順で戦場となる島から離脱する。

安全域に達し、

「榊…撤収命令って事は」

「ノルマクリアしたからでた…」

「という事は～」

「多分ね……けど教官から通知されるまでは油断しないこと…
にやけるのもわかるけどね～」

「榊もにやけてる」

「えっえっうそっ」

「ふふふ」

……

「あはははは」

集合地点につき…

「２０７Ｂ小隊集まれ！！」

教官の前に整列する２０７Ｂ小隊のみな達。
表情はいきいきとしている。

「よくがんばった…さて評定訓練の結果をつたえる…
合格条件は、白銀中尉からある程度は伝えられたと思うが、
最終的には、撤退命令をうける事、
また初期条件として、生き延びる事、
あと一つチューリップ役のホバートラックを、
破壊されない事になる」
まりもの指が一本一本立ち、３本たった。

「もちろん条件というからにはチューリップが落とされると、もれなく不合格、
きさまらが一人でも戦死しても、不合格になる事になる」

ぎびし過ぎるでしょそれ…という表情が訓練生から見える。

「しかし、きさまらはそのような条件をこなし、
また見事に間引き作戦の規定数をクリアーした…
よって、よろこべ！！
きさまらは評定訓練を見事パスした！！」

「やったぁ！！」

「とうとう…クリアーしたのね！」

「ああ、これで、これで」

「戦術機だぁぁー！！」

「さて…きさまら後帰るまで二日はある…
ここは南国環境の観光コロニーだ…わかるな？」

「はいっ！！」

「あ～水着等はカオル大将が用意してくれた、ドレッシングルームで選べ」

「はい！！」

「では、バカンスを楽しめ…別れ！！」

敬礼後、一斉にかけだしてく２０７小隊のみな達…

……

カオル報告

今おれは何処にいるのかな？

第１３２話　どっき！！おんなだらけの総戦技演習　投稿日２０１１０６０５

ナギ少尉「２０７Ｂ小隊、突破おめでと～」

作者「やっとここまでこれたなぁ……１３２話目でか…
ま、ともかくおめでとう～」

ナギ少尉「リアルじゃ大変なのに、よくがんばったよね～
会社じゃ新システムいれるのにおおわらわなのに…
ネタがうかばね～といってたのが昨日のようね～」

作者「……ま、プロットにないのが結構はいったからな～」

ナギ少尉「このあとは？」

作者「最終的に太陽系より駆逐までさ…
ただもう何話になるかは正直わからないね…」

ナギ少尉「がんばってね～…じゃ次回題名勝手に決めるよ～
…どきっ！異世界軍初の死者？誰？　お楽しみにぃ」

作者「ちょ…その題名だけはだめ～～～」

第１３３話　帰還、シャアとガルマ　投稿日２０１１０６０７

２００１年１１月６日深夜
Ｂ５５ハンガー

「ただいまぁ～」

［マスターお帰りなさい］

「ふわぁ…今２３時か…変わった事あった？」

［鉄原基地に旅団規模の増援とみられるＢＥＴＡきたけど、うまく機能して、撃破したよ～…映像みる？］

「ん……そうだな…モニター室でみるか…」

少し眠いなか、コーヒーを入れると全天周モニター室へと向かう。

［基地自体の完成度は３５％なんだ～］

基地の各設備の完成度合いが立体画像ＣＧで再現されてく…

［けど最優先で防御兵器、今回はＢＥＴＡホイホイの敷設を急いでたから、
侵行前には完成してたよ］

通称ＢＥＴＡホイホイとなずけられた巨大な掘り、
それが１０層も続く…

１０層つづいて、光線級対策のなだらかな土手があり、
それで初めて基地がみえてくる形だ。

［考えたマスターもＢＥＴＡにとって悪虐非道だよね～♪
正直これだとＢＥＴＡホイホイを無効化しないと、被害甚大になるからさ］

「まぁ、飛行形態でなきゃ大丈夫だよな～
…後は弾級か…ま、鉄原基地での迎撃準備は整ってるし」

［報告続くね。マスターがいってるあいだ１１月５日に旅団規模が近寄ってきたから、
基地防衛部隊のみで対応、防衛態勢移行、
約６時間後、ＢＥＴＡの先陣第１次防衛ライン接触］

第１次防衛ラインはＢＥＴＡホイホイ、
第２次防衛ラインが陸戦強襲型ガンタンク、
以下第３、最終防衛ラインにビッグトレーミサイル型｛半分が対空ミサイルＲＩＭ－６６ＳＭ－２に変更｝
が配備とつづく。

［作動中のＢＥＴＡホイホイに旅団規模のＢＥＴＡたちが来て…突っ込んでくぅ～］

炎の壁をつくるＢＥＴＡホイホイ。そこに恐れも知らずに突っ込んでくＢＥＴＡ達、

最初に、突撃級が突っ込んでくる…

掘りにおち、死体となって焼けるも、固い甲羅が焼けきれず積み重なっていき、

第二層まで行くが、そこまでだった。

豪快に肉が焼ける。

［とりあえず前衛の突撃級はここまでだったね～

前面装甲殻が燃え尽きる前に積み重なって、橋のようにはなっちゃったけど、

そのうち崩れて焼却処理はできるよ］

中衛が到達、突撃級の死体が崩れないうちにわたる…

［要撃級だけだね…あとの光線級や、戦車級など小型種は…］

小型種はそのまま深い掘りに落ちたり、

壁づたいに降ろうとしたり…

そこに高温の炎が襲い掛かり、瞬くまに焼け炭化していく…

死体の足場にもならない状態だ。

要撃級は前腕触角が残るもそこまでだった…第三層に到達…

［とりあえずは数が足らないよね～］

後衛の要塞級、重光線級が到達…

要塞級が渡ろうとするも…

［甲羅が耐えられなかったみたいね～］

突撃級の甲羅をぶち抜き第一層に崩れおちる要塞級…

高温の炎が襲い掛かり動きがとまる。

重光線級はそのまま渡り…第三層にみずからおち…

同じくなんとか渡れた要塞級も第三層から燃え上がる炎に包まれ傷つき、第四層に崩れおちる。

［ま、旅団規模なら…焼却処分でかたついた…って事だね～。まだ、大砲級や弾級の生産配備間に合ってなかったようだし、地下進攻の反応もなし、で終わり］

「鉄原基地の護りはこれでほぼ完璧か…

次の重慶もこの形にするかな～」

［けど、レビル将軍から熱い！！ってクレームはきたよ～］

「あは、あは、あははは…確かに…」

１１月にもかかわらず、巨大焼却場かわりのＢＥＴＡホイホイの発する熱気で、
鉄原基地外部では４５度まで上昇との記録がでた。

［全包囲をかこんでＢＥＴＡホイホイはできないかもね～］

「規模を小さくするかか…まぁわかった…
後報告は？」

［ん…あとは…な…あ、
副司令からアムロ大佐呼んでときたよ～］

「副司令から？わかった…明日つれてくわ。後は？」

［今のとこないね～］

「うん。じゃ…おやすみ」

２００１年１１月７日

B５５ハンガーでシェルターをだす。

「おはようございます。ガルマ少将」

「君が…渚カオル大将か？…
私をもどしてくれ…イセリナがいない世界なぞ…」

「あ～まぁ…と思いまして…」

医療カプセルをだす。

「ん？？……これはなんだね？」

「とりあえず覗いて見てください」

「何をのぞ……イ…イセリナ！！イセリナ」

覗いた途端、カプセルに縋り付き…

「君！！イセリナは！？イセリナは！？」

「あ～落ち着いて下さい。カプセルで治療中です。
大丈夫です１００％治りますよ……えっとあと2日ですね」

「ああ、すまない……
イセリナがここにいるという事は…？」

「ええ、ガルマさんを追ってガウに乗って敵討ちにでて、
見事花をちらしました。ガンダムに体当たりを…」

「そうか…それで、ガンダムは？」

「中破し、一矢報いましたよ」

「ジオンはどうなった？」

「負けましたね…連邦の物量でＭＳつくられて」

「……兄さん達は？」

「ギレンさんはキシリアさんにうたれました」

「！！な、何故！！」

「父親殺しです。コロニーレーザー、後で開発された大出力ビーム

兵器ですが、
レビル将軍ごとデギン公王を…」

「と、父さんをか……ドズル兄さんは？」

「ドズルさんは、純正に戦場で散って、
その結果ここに…あ、きましたね」

「ガルマ、ガルマではないか！！」

「ドズル兄さん……う、ウグ……」
パンパン
タップしている

「ドズルさん、ガルマさんを絞め殺しますか？
苦しんでますが…」

「！！す、すまない。大丈夫かガルマ！」

「……イセリナがまた見えました……」

「危うく殺すとこでしたね…やめて下さいよ～基地内で」

「ドズル兄さん…戦死したんですか？」

「ガハハハ…ビグザム、お前が死んでから開発された重要塞攻略用巨大ＭＡで、
アムロ操るガンダムにやられたわい…
が、結果ここにいる事ができるし、面白いぞ～此処は」

「……面白いですか？」

「ああ、レビルやティアンムもきとるし、
わしを撃ったアムロも、ああそうだシャアもきとるな」

「シャア！！ドズル兄さん聞いて下さい、実は」

「ザビ家復讐の為に騙された…だろ？話聞いとるわ……
お前の事もな」

「……そ、そうですか」

「それに驚くなよ…お、きおったわい…此処だ」

「ドズル中将、何よう……き、君は！！」

「ガルマ少将を連れて来ちゃいました」

「……ドズル兄さん？」

「ああ、シャアはわしらが死んだ後、
宇宙歴００９３まで生き延び戦死しここにきおったのだ…
混乱するのもわかるが本人にきけい」

「ガ…ガルマ」

「…シャア！！」

「すまない」
深々と頭を下げる。

「シャア？」

「騙しうちというか、正々堂々とすべきだったな……
ジオン・ズム・ダイクンの息子として、
お前と対峙すべきだった」

「……」

「よって君にはこのわたしをうつ権利はあると思う。
煮るなり焼くなり好きにしてくれ」

「……」

「どうした？一思いにやってくれ」

「…やめとくよシャア…馬鹿らしくなった。
…それに君に撃たれた事で此処でイセリナとここで一緒になれそうだしね…
けどもう、シャアさんと呼ばなきゃいけないのかな…」

「ガルマ…君がよければシャアのままで良いが」

「わかったよシャア…にしても、年老いたな」

「いうな…とそうだ基地を案内しよう…いいかカオル君」

「いいっすよ～いってらっしゃ～い」

（ふー…どうにかなったかな？）

遠くで瞬間麻酔銃を構えていたＴ－８５０が銃を下ろして、通常シフトに戻っていく…

（やっぱりイセリナがキーだったなぁ…）

「あ、アムロさん」

「なんだい？」

「この後空いてます？」

「ああ」

「じゃあ二泊程つきあって下さい」

「わかった。今すぐかい？」

「準備出来次第で」

「わかった準備してくるよ。じゃあ、あとで」

イセリナさんはいった医療カプセルは既に医務室行きとなったので、

空き時間の間に…

新しい艦の注文をしておく。

（とりあえず基地間はチューリップで対応するも、

次はさらに内陸だからなぁ…陸上輸送兵器がほしいか…）

モニターにギャロップを出した。

（ま、一般的にこれだろうな…ギャロップは…

装甲と主動力と、エンジンだけ弄ればいいか）

核融合エンジンを強化、

装甲をルナチタニウム合金に変更、

外装式ジェットエンジンを内部からの熱ジェットに変更、

内部補助ジェットも熱ジェットに変更する。

★

★

カーゴは、トレイン式にしたいため、後部にも連結機を追加、

各カーゴにも補助制動水素ジェットエンジンをつけ、

ギャロップのエンジン変更で、１０連結可能になる。

（ま、陸上、海上輸送用だからこんなもんか…）

１編成、カーゴ１０両注文しておく。

「カオル君おまたせ」

「じゃあいきますか…」

ルーロス改を出し、

「つくづくおもうんだが…人間かい？」

「やめてます…さ、乗って下さい」

「ああ」

内部に入り鈴を一なで…

「マスター、何処いくでちか？」

「ハッチからコロニーメンデルへ」

「了解でち」

微速前進し、戦艦ハッチから浮かび上がり、メンデルへ目指す。

「ビッグワンにはまけないでち」

といって大気圏にでるとものの2分程度でメンデルについた。

「えっへん！！どうでちか」

「早過ぎだよ…安全運転でな」

「了解でち」
と反省のポーズをする。

メンデルのエアロックにはいり、ビッグワンの側に着陸すると…

「まってたわ……さ、アムロ大佐～」

「ああ」

わざわざ出迎えにきてた副司令が腕を絡ませる親密ぶり。

（いつの間に…
まぁあうと思ってたけどさ）

片方はいい男でよい開発技術屋でもある。彼女は死別…
もう片方も００ユニット開発に捧げてて、
男の噂も聞いた事がなかった。

（開発できた事により余裕が生まれたのかな？）

と思い、カオルはまりものもとへと向かう…

……
カオル報告

無事フラグがたたずになによりでした。

第１３３話　帰還、シャアとガルマ　投稿日２０１１０６０７（後書き）

ナギ少尉「……なんで殺さないの～？」

作者「シャアが更に大人になったのさ…
というか、あのあと色々あってしまいには、総帥の地位までいくわけだし…
第一ドズルとも既に和解済みだし」

ナギ少尉「ドズル中将が仲裁に入ってるからね…」

作者「だからガルマとしたらまだ坊やだから、ドズルさんに諭された…
第一これから望んだ恋人とのイチャイチャ生活…
壊したくないが１番に来たんだろうね」

ナギ少尉「残念～」

作者「カオルの方針で、基本的に死人はだしたくないしさ」

ナギ少尉「そういえば、まだ異世界軍は死人がでてないよね～…
他の戦線では日々死者が出てるのに、応援行かないの？」

作者「拠点と最優先でオリジナルハイブ攻略目指してるからな…
生産が追いついてないのもあるが、
まぁ銀河鉄道が手にはいったから、資材に関しては、増えると思うよ」

ナギ少尉「もっと増やしなさいよ！！」

作者「次回に横浜基地以外の様子をつけるとするよ」

ナギ少尉「ということで、また次回～タイトルはまた決めてないの？」

作者「お前が決めるの禁止！！クレームきたぞ」

ナギ少尉「え～～……わかった。次回のサブタイトルは未定で…お楽しみにぃ～」

第１３４話　総戦技演習終了後…　投稿日２００１０６０９

さてカオル達がリゾートでいちゃついてる間に、
各拠点の状況を説明しておこう。

まずは搾原地となる木星及びアステロイドベルト帯の様子だが…
まず木星にはチューリップに隣接した、
ヘリウム貯蔵用宇宙ステーションがあった。

そこから採取作業用シャトルが離れ、加速しながら木星に向かう。
突入角度をとりながら木星大気圏に突入するシャトル…

大気圏に突入すると採取用ハッチを開け圧縮収集しはじめる。
高温、高Ｇ、雷、嵐等が機体に襲い掛かるが、ものともせずに採取しおわり、
ハッチを閉め、上昇にはいる。

シャトルは大気圏を離脱し、無事に貯蔵宇宙ステーションにドッキングした…

そこから採取した圧縮大気の分離作業にはいる。

分離しおわり、液化した重水素及びヘリウム３等をタンクに注入作業にはいる。

注入しおわったタンクは多目的輸送挺につみこまれ…
チューリップを潜り横浜白稜基地へと運ばれる。

という日常が木星では見られた。

衛星ではハイブが確認できるが、
向こうも全く無関心の為、ある意味共存している環境だった。

アステロイドベルト帯は…チューリップにやはり採掘基地が作られ隣接している。

採掘基地に小惑星が運ばれドッキングすると、ガリガリと小惑星ごと削られ始める。

削られた部分が次々とコンテナにつめられ、多目的輸送挺で運ばれていく。

アステロイドベルト帯はＢＥＴＡのＢもなく、
ある意味安全に採掘できる環境ともいえよう。

次に地球ラグランジュポイントののコロニー群だが、
Ｌ５では、現在絶賛移民中の日本帝国領土のコロニーが自立型３つ
農業工業各１の他に、
観光コロニーメンデル、
異世界軍の工業コロニー、農業コロニー、

チューリップ内蔵の宇宙ステーションが健在している。
また建設中のコロニーもちらほらみれる。

コロニー内部の様子の様子は…

1番最初に移住してきた1バンチコロニー、愛称鳥栖では…

人々が活気あふれて新しい生活を過ごしているのがみえる。
移住してきて一ヶ月、新たな安全な土地に慣れてきたのだろう。
都市部では経済活動が活発に行われて、
また店舗もかなりの数がみえる。

コロニーの外側はリニアトレインが走って、人々を隅々まで運んでいる。

2バンチコロニー、愛称高知では…

まだ住民が70%程しかだが、移住してきた住民は積極的に立ち上がろうとしていた。

L3は一応コロニー予定群として、確保しており、
チューリップ内蔵宇宙ステーション他に、
L5から回航してきたコロニーレーザー4基が建造調整中であった。

L4においては、まだ余裕あるため、
チューリップ内蔵の宇宙ステーションのみの状態、コロニーは建設されてはない。

地球…拠点としては現状3箇所のみ、
まずは、佐渡島基地…
地下工事が終わり、今現在規模では1番でかく、
異世界地上軍の大規模駐留基地になっていた。

おもに陸戦強襲型ガンタンクや、無人兵器群が駐留、
整備補給基地として稼動して、
防衛部隊の他に、進攻部隊の集結地にもなっている。

また現状唯一のガルダが地下に収納可能な施設でもあった。

横浜白稜基地…

異世界軍においては、有人部隊の拠点、訓練施設、生産基地として
稼動中であり、
日々生産される機体が各基地へと配備される為に旅立っていく。

また、今だ宇宙コロニーとの唯一の宇宙港が存在しており、
日本各地から移住の為、
またコロニーからビジネスで来た人々が帝都に行く等、
交通面では賑わっていた。

宇宙港からは日々５００便ものシャトルが打ち上げ、着陸が繰り替
えされ、
今では移住以外にもビジネス、観光等でも行き来する人々もみえる
次第だ。

これから移住する人々は、コロニー内部の様子が日々映像として流

れ、
期待に満ちた表情の人が多い。
けど一部には未練の表情もみえるが、西日本が解放されるまで我慢と、
心の中で思う人もいる。

鉄原基地は前話でも話題にはなったが、
今だ基地施設は建設中、
直接防衛設備だけは体裁を整えた形だった。

駐留部隊半数以上は、基地後方地上にて整備を臨時に受ける状態であり、
早いところ地下施設の完成を望む状態であるが、
今月２０日には施設が仕上がり、重慶ハイブ攻略戦の重要な役割を果たす基地となる。

以上、各拠点の現時点での状況だった。

さて場面はご褒美の期間をすごした２０７Ｂ小隊が、
帰還の為にビッグワンに乗り込んだあたりになる。

２００１年１１月９日

「さてと…全員乗った？」

「大丈夫だね」

「楽しかった～」
「また来たいわね」
「師匠と絶対くる」
「僕も……と」
「満足した」

２０７Ｂ小隊の皆は爆睡したり、おもいおもいにご褒美を満喫したようだ。

「じゃ…ビッグワン発進」

ボー！！ガシュ…ガシュ

「と、副司令…イチャイチャしてなく…」

「ん～やっぱり呼んで良かったわぁ……なに？」

「月、火星遊覧してきます？」

途端に顔が引き締まり…
「そうね…時間どのくらいかかるの？」

「機関車」

『月経由火星周回１時間１５分、地球６０分行程です』

「だそうです」

「わかったわ。いってちょうだい」

「機関車、経路変更、月、火星上空経由へ」

ボー！！

ビッグワンは汽笛で答え、無限軌道の向きを変える。

「ところで前無限軌道でと言い切られたけど、
無限軌道ってなんなの？」

「ん～と…何処まで説明しましたっけ？」

「軌道リングだっけ？
常識に押し潰されそうで打ち切ったのよ…」

「とまず軌道リングですが、リング間をシールドと、
エネルギーでレールを形成して固定してます」

「エネルギーとなると常時電力かなにか必要なの？」

「シールド部分のみですね。
で、一回形成しちゃえば伸びたり縮んだりできる、ガイドウェイと思って結構です」

「軌道は、鉄等でないのね？」

「そうですね。なので公転には対応できます。
自転には対応出来にくいので、接続時に進入の形をとります」

「で、無限軌道モードって？」

「このビッグワン等特殊車両は、
無限軌道モードという、機関車自身がガイドウェイを形成し、
最後尾車両の車輪で吸収するモードがあります。
ま、なので軌道という概念にとらわれず何処でもいける…ということです」

「なるほどね…」

『月周回軌道に入ります』

「お、そろそろっすね」

「人類最悪の戦場…ね」

「ま、任しておいて下さい。とあれが」

「ムーン・ゼロかしら？」

かなり高いハイブ構造物が眼下にみえる。

「あと三つあるからどれかだとは思うけど…
まさか肉眼で見れる機会くるとは思ってなかったけどね」

月の地表には米粒のようなＢＥＴＡがみえる。
他にも３つのハイブが確認できた。
いずれも地球にあるオリジナルハイブよりでかいのも確認できる。

「ところで、月のハイブに関して情報はあるの？」

「いや、ないっすね～…地球のオリジナルハイブ以上のクラスか、

別系統なのか…
とりあえず惑星の指揮官の上司と思って貰えればいいと思います」

「そう…残念ね」

「お、月軌道離れますね」

ビッグワンは火星に向け無限軌道をとり、加速しはじめた。

……

まもなく火星周回軌道にはいる。

「そういえば初偵察も兼ねてるよな…機関車映像記録よろしく」

『了解…前方衛星ダイモス確認できます』

「機関車、ダイモスには生態反応、ハイブ等確認できるか？」

『サーチ結果、無人です』

「…基地には出来そうだな」

「ビッグワン優秀ね～」

「っすね…あとはフォボスか…
機関車フォボスも視認できたらサーチよろしく」

『了解』

「大気圏外だと…ハイブ見えにくいわね…」

「機関車、火星立体映像だせる？」

というと…丁度真下の映像がでてきた。

ハイブが一つ映像範囲内に写ってる。

「マーズ・何番かしら？」

「機関車、他にも確認できるよな？」

『ハイブの存在確認、現状計測中』

「いくつあるか、周回軌道で確認しましょう」

段々と火星の数が増えてくハイブ…
累計１５個のハイブが確認された。

「ん～１５個か…大気圏も厄介なんだよなぁ…」

「なにを考えてたの？」

「月は大規模出力ビームで楽して攻略しようかな？と思ってたんですよ。
けど火星は大気があるので減衰しちゃいそうで…
ん～質量兵器で攻略かな…？」

「質量兵器でいいんじゃない？」

「っすね。どうせ生物もいないですし…」

火星攻略の手順がきまったようだ…

ビッグワンは二周、周回軌道を回ると進路を地球へととりはじめた。

ボーー！！

程なくして地球の大気圏に突入するビッグワン。

重力に引っ張られずに赤くもならず汽車は進む。

横浜白稜基地が見えてきた。

ビッグワンは地上進入軌道に乗り…戦艦ハッチの上で歩みを止める。

エレベーターが下がり、戦艦ハンガーにおりきり、

待機位置へ微速前進し、停車する。

「お疲れ～」

「２０７Ｂ小隊、各自部屋に１６００にブリーフィングルームに集合、

明日の適性試験について説明する解散！！」

と別れていった…

……

カオル報告

適性試験？？

まだ彼女らはなんかあるのか…頑張れ

第１３４話　総戦技演習終了後…　投稿日２００１０６０９（後書き）

ナギ少尉「前半が拠点開発、後半が月、火星遊覧ね」

作者「まぁ今回はこうなったな…」

ナギ少尉「で、次回は適性試験ね。話が見えてるね～」

作者「いんや、またどっかにいくから、
適性試験はその話の間だな」

ナギ少尉「次は誰引き込むの？デビルガンダム？」

作者「さぁ～……ヒントは砂漠の虎…」

ナギ少尉「え？あの人死んでないでしょ？」

作者「ふふふ…」

ナギ少尉「あ、あ～なるほどね…美人だもんね～」

作者「確かにな…主人公がほれかけたし」

ナギ少尉「…さて次回のサブタイトルいきますか、ってまだ出来てないの？」

作者「執筆中だよ」

ナギ少尉「サブタイトル未定で、次回お楽しみにぃ～」

第１３５話　砂漠に消える命…　投稿日２００１０６１１

２００１年１１月９日のまま話は続く…

基地にビッグワンが到着したとともに２０７Ｂ小隊の引率は終了したとおもったら…

［ヒルダさんから伝言、新しい人材よろしくだって」

「はぁ…ま、じゃあいってくるか…と、
次の予定のところは…擬態製造ポットと、あとは…」

医療カプセルをとにかくたくさん虚数空間にしまい込む。

「じゃいってくるわ」

［いってらっしゃい～」

宇宙歴００７９　１０月２７日

再びガンダムの世界にでる…
（さて、確か中央アジアだったよな～…）

と思いつつ、ルーロス改を虚数空間からだし、
中に乗り込む。鈴を撫で…
「はい、ごちゆじんたま」

「ルーロス、ホワイトベースを探してくれ」

「ふぇ？ホワイトベース？なんでちかそれは？」

「と、あ、まだ接触してないのか……
あ～白い戦艦で四ツ足から敵側から木馬といえる…」

「サーチするでし……ごちゆじんたま、多分みつかったでち、
特殊な通信に木馬というのが流れたでち、
場所を特定ちたでち」

「チートだな…ま、いってくれ。不可視モードで」

「了解でち」

ものの１０分位で…

「あれでちか？」

「おー上出来だな…じゃ虚数空間に引き込むから待機で」

「了解でち」

と幻影をかけ外にでて引き込んで、

ホワイトベースに接触すると同時に同化する。
広げてくと格納庫に、ガンダム、ガンタンク、ガンキャノン、また
エアバギー等がある。
今更ながらＭＳを取得、あとエアバギーは…
（なかったなぁ）
で取得する。

（結構このエアバギーは劇中だと便利に利用されてたよな…）
通常時はタイヤ走行、
いざっというときエアカーに変更する。

こういった小型車両にはそれが便利かもしれない。
ホバークラフトは、風に弱い点があるからだ…
ビッグトレーサイズなら気にはならないが、
ホバートラックサイズは唯一それが弱点でもある。

もっともそんな時は視界もかなり悪い為、
無理に進行せずに防備を固める運用だったらしいが…

さて、他にもついでに取得しながら、艦を掌握してくると…
ブリッジが少し騒がしいので意識をむける。

「あ、湖が消えちゃったの？」

「確かに湖か何かあった跡らしいけど」
（なるほど…消える湖ねぇ…）

「そ、そんな」

「地図と照合しろ。間違いないのか？」

「はい、間違いありません」

「しかし、おかしいじゃないか」

「だ、駄目だ」

「タムラさん」

「塩がないばっかりにホワイトベースをうろうろさせてしまった。もうジオンに見つかっちまってる」

「マーカー、この湖のデーターってないものかしら？」

「探してみます……ロブ・レイク、鹹湖。五百年ごとに西と東に振り子の様に移動する」

「移動する？データーの地図っていつの？」

「戦前のでしょう。戦争からこっち、
地図を作る人工衛星なんてありはしませんから」
（丁度５００年の節目なのかな…？）

「ブライト」

「よし、移動だ。湖を追いかける」

「何か接近します」

「二時の方向、地上を一機で来ます。ただし、機種は不明です」
（きたな…ギャロップ…）

「相手がわからない？」

「速度とか高度とか質量から割り出せないのか？」

「マゼラアタックにしてはスピードが速すぎます。
ガウにしては小さすぎます」

「アムロ、行けるか？」

「戦力がわからないと辛いですよ。ガンダムで出ていいものかどうか」

「ホワイトベース、発進させます」

「全員、第一戦闘配置。ガンダム、ガンキャノン、ガンタンクはスタンバっておけ。
発進はもう少し様子を見てからだ」

了解とリュウとアムロが答えブリッジから格納庫へと向かう。

「さ、みんな、行こ。第一戦闘配備よ」

フラウに三人の小さな子供達が答え、ブリッジから出ていく。

「ガンダムでます！！」

ブリッジから発進する、実はセイラ機が見えた。

「いやに早いな…まぁいい、不明きに、うっ」
「あっ」

「左舷、応戦しろ。ビーム砲急げ。
ガンキャノン、ガンタンクはガンダムを援護しろ」

「格納庫からです！アムロがガンキャノンでます」

「はぁ？…あのガンダムは誰のってんの！」

「セイラさんです！」

「セイラが？…なにやってんの！！アムロに援護急げと伝えろ、リュウは？」

「今でます！！」

（…さて、そろそろか…）
離脱すると、戦場へと向かった。

コズンの乗るザクが、
セイラ乗るガンダムに接近しているのがみえる。
ガンダムは既に右足が中破してるため、
オートバランサー不調で、バランスを崩した。

（ガンキャノンは…あった）
目立つ赤がみえる。

ガンダムはバルカンで接近させないようにするも、
体重のかかった蹴りをくらいバランスをさらに崩され、
ザクにメインカメラを破壊され、後ろに回られ確保された。

ガンタンクはグフを近寄らせないように嫌がらせしていた。

ガンキャノンと対戦中のザク…

取り付いた。

『アコース、赤いやつを突破して、コズンに近寄れんか？』

「わかりましたやってみます！」
と同時にクラッカーをなげ、

「もう一発！！」
クラッカーを再度なげる。

「…この赤いやつを突破できれば…三階級は…」

ザクがガンキャノンを狙いうちはなち、
弾はあたるがガンキャノンの装甲は固い。
「固いな…なろ！！
あっ！し、しまった、弾がきれた。しまった」

正面からガンキャノンが構え、両肩のキャノンが火を放つ。
「だぁーっ」
虚数空間にほうり込んで、貫かれ爆発するザクから離脱した。
虜獲する為にザクマシンガンを手放してたコズンののるザクが、
撤退しようとすると、ガンキャノンに立ち塞がれた。
メインカメラを破壊され、格闘でパイロットを気絶させた。
動力パイプをカットし、動けなくし、
ザクの頭部に手をかけ、引きずっていく…
カオルは時間短縮の為に世界扉を形成する。
宇宙歴００７９　１０月２８日
再び虚数空間から出したルーロス改にのり、
ホワイトベースを追っかける。
「見えたでち」
「よーし、接触してくれ。乗り込む」
「はいでち、ＥＣＭ、対可視動作正常、欺瞞軟着陸まで…５、４、
３、２、１…着陸したでち」

「パーフェクトだね。じゃ出たあと虚数空間引き込むから、待機に」

「了解でち」

ホワイトベースの甲板におり、ルーロス改を引き込む。

（さてっと……）

ホワイトベースと探索の為に同化しはじめた。

（あ、いたいた丁度逃走か…）

ガンタンクが要塞に挑みに出撃する。

第二通信室にコズンが進入してきた。

扉をパイプでロックすると、

「カメラは…これか、」

防犯カメラのコードを無理矢理ひきちぎる。

あたりを見回し、他にはなさ気なので、逃走経路を確認しながら、

通信コンソロールに座り調整しはじめる。

「…ええい、なんて合わせにくいんだ、こいつは」

調整になんこうしてたが…

「き、来た」

喜び通信を試みる。

「ムスタング2、ムスタング2、こちらコズン。木馬より発信…

繰り返すこちらコズン。木馬より発進…」

『ムスタング2、おくれ』
握り拳をたてる。

「木馬、正式名称ホワイトベースと連邦内部では言われる。
浮力はミノフスキー粒子により浮かぶ新造戦艦、他にも随時生産中との事。

艦内にはガンダム、ガンタンク、ガンキャノンの三つのタイプが存在する。
木馬にはこいつが各一機ずつしかない。戦闘機の存在は不明だが整備用の機材は確認できる。

ガンダムは白いMS、近接格闘戦にたけ、ビームライフルを装備した機体、
先程の戦闘時には何故か素人が操縦した。
戦力評価は訂正するが是。

ガンキャノンは赤い中遠距離戦のMS。
先程の戦闘時には本来ガンダムのエースパイロットが搭乗してたとの情報。

ガンタンクは通称タンクモドキ。
こちらは遠距離専用のタンク。
先程の戦闘時にも本来のパイロット、なので戦力評価変更なし…

続いて艦内状況、人材は不足気味、白兵戦による占拠も可能と思われる。
補給状況は劣悪、資材も不足気味、…チッ、この野郎！」

インカムをコンソロールに投げつけた。

「気づかれたな…」

ロックを外し、通信室の外にでると、

「ああっ」「おっ」

セイラと対峙、即座に銃をはたき落とすが、足にあたり遠くに銃がいく。

コズンは逃走、セイラは銃を確保を選択。

「待ちなさい！！」

「だれがまつか…こっちか」

コズンはかけてく…

階段はすべるようにおりてく。

大分距離を稼いだが…

ハロが転がってきて、避けようとするが進路変更し、

「うわぁぁ～」

ドテッ

「イツ…チッ」

階段に飛び降り再び駆け出す。

「脱出場所変更した方がいいな…あっちにいくとおもわせて…」

（なるほどね…）
ブリッジでは１８番ハッチと思っているが実は…
「！！１２番ハッチです！」

「なにぃ！待ち伏せがばれたのか！」

「いえ、とにかく追跡させます」
とブリッジでやりとりされた。

「ここだ！」

エアロックをあけ、扉の中にはいり、ロックをかける。

（このエアロックね…）
「こいつさえあれば」
ガンガン
体当たりしてる音が聞こえる。

「ヘッ、エアロックは中からロックすると、開けれない構造だって説明書にかいてあったろ…
やはり人材不足気味だな…早く情報全部伝えなければな…」

カオルは離脱し急降下する。

上空みると…

「うごげほっ…うこけぇ！！」

落下しながら個人用ジェットを点火しようとしている。
が、完全にこわれて…

（そろそろか…）

コズンが地面にぶつかる前に、
衝撃なくやさしく虚数空間に引き込み、離脱する。

しばらくはなれ、コズンを虚数空間から出すと…
「ごふっごふっこふっ…はぁ…ここは？」

吐血し、血を吹き出し、息きあらく問い掛けてくる。
やはり扉に吹っ飛ばされ損傷をえてるみたいだ。

「あんまりしゃべらないで下さいね。助けますから…」

虚数空間から医療カプセルをだし、

「はぁ…き…ごふっ」

「はいはい喋らない…よっと」

抱き上げカプセルに入れる。

「なおったら説明ありますからね～」

カプセルが作動し、コズンは治療の為に強制睡眠状態におちいる。

（虚数空間にいれてっと…このあとは…血で汚れたし、一回休むか…）

「〝世界扉〟」

世界扉を形成し、潜る…

カオルは世界をまたわたる。

……

カオル報告

ホワイトベース
ガンタンク
ガンダム
ガンキャノン
エアバキー系３種
ガンペリー

第１３５話　砂漠に消える命…　投稿日２００１０６１１（後書き）

ナギ少尉「ね～作者、今回救出した二人が生贄なの？」

作者「ん？……ん～どうだろう？…ヒルダさん次第？」

ナギ少尉「へ？、じゃなんでこのやられ役救助したの？」

作者「アムロ達が異常なんだよアムロ達が…」

ナギ少尉「へぇ～」

作者「信じてないな…多分アムロ達がいなければ、
その後連邦攻略する要となり、
でジオン公国軍のドズル中将揮下の中心的部隊となるんだぞ～」

ナギ少尉「でもアムロにやられちゃうんだよね～」

作者「……ドムがくればアムロを撃退してたさ…
ＭＳの性能差だよ…」

ナギ少尉「まぁそういう事にしておきますか…
さて次回は、引き続きガンダム編…サブタイトルは未定で、お楽しみにぃ～」

第１３６話　ガンダム編　砂漠に消える命　投稿日２０１１０６１３

宇宙歴００７９　１０月３０日

「キシリア様到着だ…粗相のないようにな…」

「はっ！！…傾注、５分後にキシリア様が到着する。各員周囲警戒、…以上！！」

夜の闇の中、マ・クベ、キシリア・ザビののるアッザムが１０２採掘基地へと到着する。

二日目

ルーロス改にのりホワイトベースを追っかける。
ホワイトベースから脱走したガンダムを探査して…

「みつけたでち」

「じゃ追跡…」

「もう真下でち」
足元１０m下には、
廃墟となった町に、隠れるように係留しているガンダムが見えた。

（フラウに見つかる前か…）
朝日が昇り、ガンダムを照らし始める。

「……わかった…でこの先に採掘基地があるよね？」

「……みつけたでち前方３０ｋｍ」

「じゃ、そこに向かってくれ」

「了解でち……もうついたでち」

無音の状態で、１０秒位で３０ｋｍを加速し減速、
しかもＧを感じさせなかった…

「最近自重してないよな…」

「全開バリバリでち」
猫の技術は恐ろしいものがある。

「まぁ…また虚数空間に引き込むから待機で」

「了解でち」

カオルは空中に幻影だしながらでるとルーロス改をしまい、第１０２採掘基地に向かう。

この基地は、マゼラアタック隊全滅、最終的には強制爆破で、人員いるにもかかわらず味方もろともの基地であった。

（さて、どんな人材がいるんかな？）

カオルは基地に取り付くと、身体を広げ始めた。

「キシリア様、朝食は如何でしたか？」

「うむ。コックを呼べい」

「はっ！！」

キシリアの前に連れられてくるコック…

「お前、名をなんと呼ぶ？」

「だ、大和ナチルと言います。キシリア様」

「腕はよかったぞ、本土にくるか？」

「ありがたきお言葉です。是非ともお願いします」

「おい」

「はっ」

「手続きを進めろ」

「わかりました。キシリア様」

コックが退出していった。

「よろしいので？キシリア様」

「かまわん…マ・クベ、視察に行くぞ」

「はっ！！かしこまりました…おい」

「はっ…こちらに…」

キシリアはマ・クベのアテンドのもと基地の視察を行い、展望台に案内された。

「こちらの基地で採掘された鉱石からは、トンあたり2グラム。
予想通り良質のソリウム鉱床です。
あと五つもこの程度の鉱床を掘り当てれば我が軍は」

キシリアが言葉で遮り、
「ソリウムには限りません。連邦には貴重な資源を1グラムたりとも渡してはならないのです。
それがこの戦いを勝利に導き、ひいてはその後の支配の確立にもつながるわけだ」

「心得ております」
マ・クベが最大限の礼で答える。

「ところで、この周辺の未採掘鉱床でわかっているのは？」

「ここより北５０キロ辺りにも同じような鉱床があります」

「人員と機材は望み通り与えましょう」

「はっ、ありがとうございます…つきましてはおひとつお願いが」

「なんだ？申してみよ」

「はっ…北米大陸の基地を、指揮下にいれていただきたいのですが」

「ふむ…よかろう」

「はっありが」

ビームライフルが建設クレーンを貫いた。

「……何事です？」

「キシリア様こちらへ」

危ないとおもったマ・クベが、キシリアを避難させるべく、リニアカーにのせ、出す。

「アッザム、発進準備を急げ」

「マ・クベ、モビルスーツを前もって発見できなかった失敗、許しがたい」

「…キシリア様」

「アッザムの性能テストにはよい機会です。お前がやってみせよ」

「は、キシリア様、必ず」

「直接連邦軍のモビルスーツを相手にするのも、今後の作戦には役に立とう」

カオルはその頃、加速2乗かけで、事前に無難そうな人物を虚数空

間に引っ張りこんでいた。

全員とはいかないが、まぁまぁな人数、

あ、またマゼラアタックにビームが向かい直撃コースなので、
マゼラトップにとりつき…
「うわぁぁ」
虚数空間にほうりこみ離脱した。

また基地施設にビームが狙い定めて、射線先にまわりこみ…

ビームが襲い掛かかり、回りを見渡すと…
（いた）
虚数空間に引き込んだ。

そうしている内に、マゼラアタック隊は全滅、防衛設備も全滅した。
あとは非武装の施設のみとなる…

そのうち、
アッザムがビームでガンダムを攻撃、上空をとり、
アッザムリーダーでガンダムのエネルギーを吸収するのが見えた。

他機のエネルギー、つまり電力に干渉しゼロにさせる…効果的な対機動兵器だ。

（対ＢＥＴＡ戦には使えないけど、面白いよな…）

アッザムリーダーが弱まった隙に…

（これもう少ししっかりすればガンダムを打ち倒せたのにね…）

磁場照射機を破壊、ビームを発射するアッザムに、ガンダムが飛び掛かり、損傷を与え…

アッザムが背面浮遊しはじめガンダムを振り落とそうとし始める。

（そろそろか…）

めぼしい人材を取得し、
離脱直後に大爆発がおきた。

「”世界扉”」

カオルは満足しきって世界扉を潜る。

特殊なのでは軍楽隊がまるごと、騎兵、戦車兵、整備兵等、約１００名近く虚数空間にほうり込めたからだった…

宇宙歴００７９　１１月２日

三日目

カオルは精神力を回復し、ルーロス改に乗り込んで、移動している。

「ガンダムは捕らえて離さないでち」
隠匿しているガンダムがあっさりと見つかる。
「なぁルーロス、何故そうすぐに見つかるんだい？」
「聞きたいでちか？聞きたいでちか？」
「うん」
「それは、猫の最新技術の対物質透過レーダーで、惑星を捜査してるからでち」
「ほう…」
「一回捕らえた特徴ある機体等はぼくに記憶されるでち」
「となると、量産されると苦手か」
「そうでちね…特定のを探すのはむつかちくなるでち。けど方法はあるでちよ」
「通信からパイロットを特定すしかないか？」

「あたりでち」

「なるほどな…流石猫の技術…と、この付近の町は？」

「２時の方向３ｋｍでちね」

「よし、いってくる」

幻影をかけルーロスをしまうと、町の方向へと向かう。

「食事できますか？」

丁度アムロが食堂に声をかけるところだった。

「ああ、できるよ。席はカウンターでいいかい？」

「はい。構いません」

「オヤジ、休ませてもらうぞ、１３人だ」

「へえい、い、いらっしゃいませ」

「ハモン様、こちらへ」

「すまんな、サグレ、マイルは見張りだ。交代は急がせる」

「は、ランバ・ラル隊長」

「オヤジ、まずはうまい水をくれ…ハモン、すまんな。地球にこんな砂漠があるのは驚きだろう」

「自然の脅威です。星を見ているよりずっと面白い」

「ハハハハッ…みんな、座れ座れ。何を食ってもいいぞ。作戦前の最後の食事だ」

ランバ・ラルが部下達を促し席にすわらせた。

店主が恐る恐るメニューをもちながら近寄ってきて、

「メ、マニューでございます…

あ、あの、このソドンは中立地帯でございますので戦争は」

「ほかでやる、心配するな」

「何もないのね。できる物を１４人分ね」

「は、はい」

「一人多いぞ、ハモン」

「あの少年にも」

「ん?…フフ、あんな子が欲しいのか?」

「フ、そうね」

店主が厨房に下がり調理しはじめると、アムロがハモンに近寄り、
「あの、なんていうか、ご好意は嬉しいんですけど、僕にはいただけません」
「なぜ？」
「あなたに物を恵んでもらう理由がありませんので」
「フッ、ハハハハハッ。ハモン、一本やられたな、この小僧に」
「君の事をあたしが気に入ったからなんだけど、理由にならないかしら？」
「そんな」
「小僧、ハモンに気に入られるなぞ余程の事だぞ」
「まったくだ。遠慮したらバチが当たる」
クランプの声にあわせ、席にいたランバラル隊の皆が同意の声をあげ、
アムロを挙げる。が、
「僕、乞食じゃありませんし」
「気に入ったぞ、小僧。
それだけはっきりものを言うとはな」
「ハモンだけの奢りじゃない、わしからも奢らせてもらうよ。

なら食っていけるだろう？ん？」
「ええ、そんなんじゃ」
そんな雰囲気を変えた一言がきた。
「隊長、怪しい奴を捕まえました」
「スパイか？」
「は、行動不審の女が」
捕まったフラウボウが突き出される。
「なんだ、子供じゃないか」
「フラウ・ボゥ」
「あなたのお友達ね？」
「え、ええ」
「や、しかし、こいつの着ているのは連邦軍の制服です」
「そうかな？ちょっと違うぞ」
「間違いありません」
「そうなのか？ハモン」
「そうらしいけど。その子、この子のガールフレンドですって」

「ほう」

「アムロ」

「放してやれ」

「や、しかし」

「いいから」

そう命令するとアムロに正面から近寄り外套を少しめくる。

銃を握っているのを確認するラル。

「いい目をしているな…フフフ、それにしてもいい度胸だ。

ますます気に入ったよ。ア…アムロとかいったな？」

「はい」

「しかし、戦場で会ったらこうはいかんぞ。頑張れよ、アムロ君」

「は、はい、ラ、ランバ・ラルさんも、

ハモンさんも、ありがとうございました」

「アムロ」

「行こう」

アムロ達が逃げ出すようにでていった。ハモンはそれをみて微笑む。

「あとをつけろ、ゼイガン。

この近くにいる連邦軍となれば木馬ぐらいしかおらんはずだ」

「はっ」

「親父、２人分を弁当にしてくれ。すまんが１時間で食べるぞ」

「親父！飯急いでくれ！！」

腹が減っては戦が出来ぬばかりに、腹にたらふく貯めはじめる兵士達…

そして、

「美味かったぞ親父、またくるからな」

「は、はい！ありがとうございます」

釣りは要らぬとばかり多めに支払いをすませ、

ランバ・ラル隊はトラックにのり知らせに備える。すると…

「来たか」

「ゼイガンから暗号です。風はすぐ吹く。

木馬が発見できたようです」

「よし、出撃準備にかかれ」

グフとザクが起動し…

『調子はいい。ステッチ、そっちはどうだ？』

「はっ、良好であります」

『あなた、御無事で』

『うん、お前達は5キロ前進して待っていてくれ。これで無線を使うのは一時中止する』

『はい』

ブースター吹かし跳躍し砂丘を越えていく。

「隊長、捕らえました」

『ようし…食らわせてやれ！！』

ホワイトベースを狙ったミサイルが見事に命中、ガンタンクがそれをみて迎撃に入る。

「おっ戦車が」

『ステッチ、俺が飛び出す。その間にタンクをやれ』

「は、はい。ラル大尉」

「今だ」

脚部外付けポットからミサイルを飛ばす。

ガンタンクのキャタピラ部に見事命中、破壊する。

「ハハハ、隊長やりました、タンクをやりました。こいつにとどめを」

と、刺しにいこうとするステッチ機を、

『なに寝ぼけておるか、ステッチ。
木馬だ、木馬を討ち取らねば我々の、我々の戦いは終わらない』
「…そ、そうでありました。木馬は、あっちか」
とタンクを放置して跳躍し、ホワイトベースへと向かう。
途中で動きをとめ、ホワイトベースを観察しつぶやく…
「後ろから火線が上がってない??」
前を塞ごうとしてた方向から後ろに進路を変え、
「隊長!、後ろが無防備の模様です!援護お願いします」
『わかった』
つっかかりから、浮上し逃げようとするホワイトベース、
「いいぞ、真後ろからミサイルぶちこみゃいくら木馬だって」
トドメをさそうと、後方からちかよるが、
「おっ木馬め……」
最大出力にしたエンジンからでる炎が伸びザクを襲撃する。
「ああっー!!」
引き込み、炎の熱に耐えられなくなり、爆発するザクから離脱する。
しばらくすると、一回転してグフを振り落とすホワイトベースがみ

れ、
ガンダムが救援にかけつけてくる。

互いにきちつけあい、格闘戦にもちこんだが…
ラルの一降りがかわされ、両断される。
そしてトドメが背中にはいる。

ラルが、ガンダムに個人携行ワイヤーを巻き付け、爆発寸前のグフから、
「見事だな。しかし小僧、自分の力で勝ったのではないぞ。
そのモビルスーツの性能のおかげという事をわすれるな」
と、ワイヤーアクションをきめて爆発するグフから脱出する。

カオルは、
「やむえん。夜になってハモンと合流するか」

ブーンと、そろりと近寄り、チューと血液を採取する。

（よし、擬体ようはこれでいいな…）

はなれ、世界扉を唱えた。
……

カオル報告

リニアカー
アッザム
あとは目新しいの無し。

第１３６話　ガンダム編　砂漠に消える命　投稿日２０１１０６１３（後書き）

ナギ少尉「…第１０２採掘基地の人員、救助したはいいもの扱いあらいね…」

作者「あははは…ｏｒｚ」

ナギ少尉「まぁどんな人員がくるか楽しみだけど…軍楽隊？」

作者「ああ、今までいなかったなぁ～でちといれてみた。
キシリア様が視察にわざわざくるんだいてもおかしくないだろ？」

ナギ少尉「そうね…」

作者「という事さ」

ナギ少尉「ね、肝心のラ※バ・※ルさんや、ハ※ンさんはいつ？」

作者「おま！！…ねたばら…まぁ…次回だよ次回」

ナギ少尉「けど、あのイベントもあるんでしょ？」

作者「そっちも進めてるからなぁ…どっちが先に仕上がるか…」

ナギ「ということで、次回はまだ作者次第…でお楽しみにぃ」

第１３７話　２０７Ｂ小隊適性検査…そして　投稿日２０１１０６１５

さて、カオルがＴｒｉｐしている間の事に話をうつす事にしましょう。

２００１年１１月１０日

「あれ？カオルは？」

［マスターでしたら、今別世界いってますけど、何かありました？］

「いやなに…適性試験だからせっかく作ってもらったから、声かけにきたんだけど、
今日は居ないんだね？」

［ですね～。多分一週間位なので、１４日には？と思います］

「わかった。ありがとうな～」

武はハンガーを後にする。

～シュミレータールーム～

「あ、たけるさ～ん」

「たける、遅い」

「あれ？……すまんすまん」
（恥ずかしがって出てこないと思って、少し遅らしたんだがなぁ…）
「委員長や、冥夜、美琴は？」
「恥ずかしがって、まだあの中だよ～」

「追い出してくる」
と彩峰が更衣室にむかった。
扉をあけると中から声が聞こえる…

「なぁ…たま、訓練生用強化服恥ずかしくないのか？」

「ふぇ？ふぇぇぇ～、そ、そりゃ少しは恥ずかしいですよ～たけるさん～。
でも…もっと…その」

「お、お待たせしま…した！教官！」

更衣室室内に篭っていた榊、御剣が前を隠しながら恥ずかしいがってでてきた。
腹がぽっこり膨れて苦しがってるのは…鎧衣…
見事に伝統の犠牲となったようだった。
鎧依は羞恥心より、くるしさに耐えるほうがまさってるのだろう。

「小隊集合!!」

武がらちあかないとばかりに号令をかける。

整列するも、もじもじ恥ずかしがってるのは除いて、
すぐさま口を抑えぎみになる鎧衣…

「美琴、今日の昼飯、どのくらい食べたんだ?」

「うっぷ!!は、はい…うっぷ」

「教官、本人が答えるの無理そうなので、かわってお答えします。
特盛ともう一人前、あと私達のおかずから一品ずつです」

「……美琴、順番は最後にするから掃除は覚悟しとけよ」

「は、はい、ありが…うっ…とうございます」

「さて、これより戦術機操縦資格適性検査をおこなう。ま、しっての通り入学時に行った適性検査との比較だ…
赤い緊急スイッチも変わらず。が今回は復座型になる」

へ?な顔が浮かんでくる。
「前半は通常の適性検査、
追加でよろこべ、全力でGを体験させてやろう」

「き、教官！！」

「う…」

死刑宣告を受けた表情の鎧衣…

「まずは最初の搭乗は…出てきた順でいくか…たま！！」

「はわわわ…お、お願いちます」

たまとともに復座型のシュミレーターにのりこむ。

今までのはコンピュータプログラムによる適性検査だが、

カオルに話したらそれ採用！！とばかり、

復座型による教習専用シュミレーターを作ってくれた。

カオル曰く、

「訓練でならGをガンガン体験させてやってくれ！」

で、Gキャンセラー等一切載せてない恐怖の代物に仕上がった。

操縦は…もちろん今回は武側設定となっている。

コクピットカバーがしまり…

訓練生、たまの座席の目の前に虹対応の袋及び、横に赤い緊急スイ

ッチがある。

「説明うけてわかってると思うが、
横の緊急スイッチを押すとシュミレーターは停止する。
しかしそれは適性検査に不合格した事になるから注意しろよ」

「は、はい…」

『バイタルモニターオンライン、問題なしです。始めて下さい』

武はあらかじめ組み込まれた適性検査プログラムを起動する。
所定のプログラム終了後、追加として全力機動体験の流れになる。

（ほう…前週と比べて強化されてる？
…これなら適性検査は問題なさげだな）

その通り適性検査は無事にパスし…

「さ～ってここからはお楽しみの全力機動だ。イヤッホー」

「ひ、ひえぁわひ、ひぃぃーん」
何をいってるのかわからないたま。

…

「ふう。満足した…たまどうだ？」

「ひひゃいでふう」
ベロをだしながら…
「あ～舌かんだか…保険室いってこい」
「ひゃい」
「次！！彩峰！」
「……やさしくしてね…ポッ」
「擬音をいっても無駄だ覚悟しとけよ」
「ケチ」
……
彩峰は全力機動になんとか…
「おい、終了したぞ」
「……」
「駄目か…たく…御剣、榊手伝ってくれ」
「は、はい」
二人に手伝ってもらいベンチシートに寝かしつける。
「や、やきそば…」

「お、気がついたな…2号介抱よろしくな…」

（榊から手加減するか…）

５０％まで手加減したおかげで、
失神まではいかないも…グロッキー状態に陥る御剣、榊…

「さて、最後は美琴だな」

「は、はい！」

「鎧衣…ぶちまけてね」「虹がみたい」「……」「ひゃんばって」
グロッキー状態の御剣以外から声援？がかかる。

さて結果は…適性試験プログラム終了後、
追加の全力機動したら…見事に
「へぶぅぅぅ」
シュミレーター内にぶちまけた。

それでもやめない全力機動。
「わぁっはっは～」

「きょへぶ……きょうか…ぼふぅ」

……

「よ～し、全員問題なしだ…明日から模擬教習課程にすすむ。

入学時の検査と比べても大丈夫だな…以上解散!!
あ、そうそう、美琴、ちゃんと掃除しとけよ」

「……はい……おにぃぃ」
「はっはっは」

２００１年１１月１１日

「よし、今日から教習だな」

（ま、初めては何週やっても一緒だからな…）

まずは実機に乗る前にシュミレーターによる教習の形になる。
「とりあえず今日は歩くだけ、走るだけ、曲がる等の基本の動作教習をおこなう。
射撃操作に関わるC、Dは明日に行う。
実際に操縦するのが初めてだとおもうが、まぁようは慣れろだ。
全員搭乗!!」

シュミレーターに各々が乗り、起動する。
「では教習を開始する…まずは目標ポイントまであるくだな」

スタートからゴールまで、ただまっすぐあるくだけの事。
旧ＯＳからかわった時にはこけた人もいたらしいが…

「よ～し、歩く事はできたな…じゃ駆け足」

振動を我慢さえすれば問題なく失敗するはずもない。

「よし、動作教習課程Ａはクリアだ。続いてＢに行くぞ。
これは歩く走る以外に曲がる事になる。
歩行と走行はＢまでだ。
しっかり覚えておけよ」

教習は、きっかり2時間で終了する。
基本動作教習課程のＣ、Ｄ行く前に跳ねる、跳躍、飛行、持ち上げる等、
戦闘行為に関わる事以外をおしこんだ。

「まだ着地、飛行に難ありだが…おいおいだろうな…
よしお疲れ、十分休めよ」

「は、はい…」
グロッキー状態になる２０７Ｂ小隊…
特に着地が堪えたようで…

「や、やき、たべた」

「いつつつ…のば…いつ」

「はふぅ～ねるぅ～」

「みなさん起きて下さいほら、鎧衣さんもおきてぇ」

たまだけが元気だったようだ。
さすがに初日に2時間は身体に堪えた様子に見える。

２００１年１１月１２日

翌日同じ時間、シュミレーター室に再び集合する２０７小隊のみな。

「身体の調子はどうだ？」

「はい、あのあとマッサージや、光線治療うけたので良好です」

「お風呂もよかったですし～」

「夜寝る時もつきっきりで…」

「お薬もらって全快です」

「師匠に……」

「みんな快調だな…。
さて、今日は基本動作教習課程のC、Dを行う。
Cは射撃、まずは動かない目標に対して射撃をおこなう。
Dは、動いている目標に対しての射撃をおこなう。
では全員搭乗！！」

搭乗し、シュミレーター起動…
そして網膜投射に映ったのは…ビル街でなく、ＢＥＴＡ群だった。

『ひぃ！！』

『き、きょうかん！！あ、あれは』

『ＢＥＴＡか…』

『な、なにあれ』

『……』

「普通なら今日も街での教習開始となるが、おれはそんな甘い事はしない。

こわいか？お前らがいつか倒す必要になるものだ。
さ、動かない状態だ。安心して近寄ってみろ」

各機おそる恐る近寄ってみる。
「どうだ？」

『こいつが人類の敵なんですね』

『気持ち悪い外見』

『慣れない』

『食えるの？』

「食えないぞ…と、たまが近寄ってるのは要撃級だな…
こいつは前腕に固い甲殻を持っていて、それで殴りつけてくる。
それをかわせればどおって事もないんだが、
乱戦時に横から殴りつけられ…になる」

『教官、この小さいのは？』

「その少し小さめのは、もっとも衛士を生きながら食い殺した戦車級だ。
昨日の復習だ、そっと掴んで持ち上げてみろ」

『あ、はい…』

「下に大きな口があるだろ？
戦術機にたかると、その歯で装甲を食い破り、中の衛士を生きながら…というわけだ」

『取り付かせないようにすれば…』

「が、実際の編成数にあわせてるがどうだ？」

『……数が多いですね』

「その通り、乱戦時にはもっとも気をつけないと、いつの間にかたかられる」

『教官こいつは？』

「それは…」

……

CとDを終え…

「どうだ簡単だろ？」

『はい！！これならＢＥＴＡなぞおそれる事もありません！！』

『楽勝です』

『戦場でいきのびれます』

「よし、じゃあ次は襲ってくるから生き延びろ」

『は？』

いままでただ移動してたＢＥＴＡがいきなり彼女らに襲いかかってくる。

たかりにたかってたまぎれ、抜刀して抵抗したが…
たかられ戦死した。
武の乗る機体は見本とばかり、切って生き延び、１０分後にエリア外へと離脱し、
シュミレーターを終了する。

「どうだ？死んだ感想は？」

「おにぃぃ」
「よってたかってきた」
「あそこまで無力とは」
「何にもできなかったです」
「焼きそばやけ食い」

「ま、シュミレーターで何遍も死ね。が実践で死ぬとそれまでだ…
どうなったら死ぬかをきっちり教えてやる」

「はい」

２００１年１１月１３日

「みんなぁ～おはよ～」
「いい朝だな、おはよう」
「興奮してて眠い」

「珠瀬、おはよぅ」「おっはよ～う」

場所はＢ５５ハンガーの２０７Ｂ小隊用に、わりあてられたハンガーに集合してた。
彼女らの練習機が新造されてくるとの事で、
今まさに組み立て中で、仕上がってきてる最中だった。

「あの機体かぁ」

「お、みんな揃ってるな」

「はいっ！！」＊５

「しかし、実際に組み立て工程をみる事ができるとはなぁ…」

「たけるさんもはじめてなんです？」

「ああ」「エッチ…優しくして」

「こら彩峰！…まぁ俺も工場自体を見に行った事なかったからな…
まさかここが工場みたいなものになるとは思わなかったが…」

コバッタ達が作業し、組み立ててる機体が次々仕上がってくる。

そして…
「僕達の機体…」

［お待たせ～練習機吹雪改、完成したよ～］

「ん？改？」

［うん、仕様変更箇所いくつかあるからね…練習時は普通の吹雪と思っていいよ］

「ああ、わかった。ありがとうな…ところ」

［御剣訓練生、殿下が呼んでるよ］

「！！…こちらの基地に？」

［うん私室にいるから、白銀中尉、御剣訓練生をかりてくね～］

「あ、ああ…」

御剣がコバッタに連れられてどっかにいく。

（紫の武御雷は今回は…まぁいいか…）

「じゃ、お前ら…今日の午後の実習は応用課程にすすむ。早いとこ応用課程も終了し、実機に乗れるようにな」

「はい！！」

……

しばらく見ていると…

「白銀中尉…お話よろしいですか？」

「は、はい…」

（月詠中尉）

「私は、帝国斯衛軍の月詠中尉と申します。

お初にお目にかかれて光栄に存じあげます」

「国連軍、横浜白凌基地所属、白銀武中尉です」

「護衛担当の冥夜さまの事について、一度ご挨拶にまいりました。

…何とぞ、生きる為のご指導をよろしくお願いします」

「わかりました。自分の教えられる事すべて教えるつもりです。ご安心下さい」

「よろしくお願いします」

と本当に挨拶だけでいきそうになる…

「あ、あの…」

「何か？」

「自分のような身元が」

「ああ、異世界からの方でも、冥夜様が信頼したなら問いません。
殿下の殿方もそうですし、ここの人達もですから。
ですので…何とぞ冥夜様の事をよろしくお願いいたします」

「わかりました…」

……
カオル報告

時間からいうと、
行く前にいわれてた機体納品したみたいだね…

あとは帰ったら紫か…

第１３７話　２０７Ｂ小隊適性検査…そして　投稿日２０１１０６１５（後書き

ナギ小尉「適性検査合格ね～」

作者「で、見事に犠牲になったのは鎧衣と…」

ナギ小尉「伝統なの？」

作者「ああ、渚まりも軍曹もなったし…あとは……」

ナギ小尉「なるほどね。でリアルに聞くけど今何時？」

作者「と…１５日の１５：４７だな…仕事の出かける準備だ」

ナギ小尉「早く準備していってらっしゃい！！」

作者「あいよ…」

ナギ小尉「作者が遅れそうなのでこの辺で…次回、ガンダム編の続きですお楽しみにぃ～…
さ～って私も仕事にいかなきゃ」

第１３８話　ガンダム編　ランバ・ラル隊全滅す　投稿日２０１１０６２４（前

お待たせしました。

今日より再投稿します。

第１３８話　ガンダム編　ランバ・ラル隊全滅す　投稿日２０１１０６２４

宇宙歴００７９　１１月５日未明
４日目

先にギャロップに進入し、寝静まっている中、
ラン・バラル隊総員４０名の血液を採取しに潜入する。

ギャロップに同化し、壁から触手をだす…
チクッ…チュー
一人目採取完了、触手を引っ込め、別の人へ…

を隠密で繰り返して４０名分の血液採取完了した。

ギャロップから抜け出し、擬体が収まっているカプセルにそれぞれ血液を投入し、
擬体がそれぞれの個人を形成し始めるのを確認し虚数空間にしまった。

形成する時間の間、まったりと過ごしてた。

しばらく後、ギャロップ艦内では作戦会議が開かれていた。

「ギャロップは木馬の前面に出てギーンのザクと共におとりだ。
そこをうしろからキュイで木馬に突っ込む。

ハモンにギャロップの指揮を任せる。
そして私とクランプで第一キュイ、第二キュイの隊長を務める。いいな？」

各々声を上げ同意する。

「よし、ギャロップ発進。木馬をキャッチしたらザク、キュイはギャロップから離れて展開する」

ホバーが起動し、高速走行にはいる。
前方には深い谷があるが、
外部ジェットの力で問題なく谷をわたる。
しばらくすると…

「木馬です。推定位置より１０キロ移動しているだけです」

「良好です。ザク、キュイ、各隊３０秒後にギャロップ発進」

「よーしハモン、我々が木馬に取りついたら脱出していいぞ」

「あなたこそ、お気をつけて」

艦橋からラル、クラップが出撃準備の為、
下に下りてった。

「ザク、ギーン発進。続いてキュイ」

『ギーン、行きます』

ザクがホバー走行しているギャロップの前部ハッチに足をかける。

背中のブースターを全快にし、跳躍でギャロップの進路から外れた。
カオルは、ギーンのザクを追って取り付く。

ホワイトベースからギャロップが確認されたのだろう、砲撃戦が始まった。

ホワイトベースは起動し始め、巨大な船体を浮かび上がらせ、移動しはじめる。

そこに…

「よ～し…くらぇ！！」

脚部ミサイルで攻撃し、命中させた。

機銃が狙ってくのでギーン機はさけると…
「が、ガンダム！」ガンダムがでてきた、ザクマシンガンで射撃し、囮を慣行しようとする。

「おっ……当たらなければ…新人パイロットか？」
メインモニターにガンダムの挙動がぎこちなく映ってた。

「このガンダム、性能持て余しているみたいだな…よ～し」

ザクがホワイトベースからガンダムを釣ろうとしてたが、
やめて近接射撃戦に移行してく。

「ふはは、今日は運がいい、
このまま本来のパイロットがのる前に落とせば…」

面白いように命中していく、が…
「流石装甲は硬いな、しかし…これなら」

脚部に装備したミサイルを発射する。
かわしきれずに命中させた。
「ふはは、勝てる、勝てるぞ」
続けて発射したミサイルを命中。
しかし、そこに機銃が…
「うわっと…あっ！ちぃ逃げやがって…」
ホワイトベースからの機銃を避け、その隙に後退し始めたガンダム。

「逃がさねえぞ、あの不慣れなあいてなら」
と追いかけると…
ビームライフルを構えて待ち構えてるのがみえ、
ビームが……
「くぅ…」
直撃しなんとか頭部だけですんだ…
「ぐぅ！！…やられたか…モニターだけで……ん？」

ガチャガチャカチカチガンガン
コントロールレバー、スイッチ等操作していた表情がかなり焦ってくる。
かなり急激に気温が上がってくるコクピット内部。

（あ～…リタイアの原因は脱水症状によるか、蒸し焼きなんだ…）

イマイチ頭部を吹っ飛ばされただけで、
死亡した原因がわかってなかった。

「隊長!!ハモン様!!通じてくれ!!
いやだ、助けてくれぇ!!誰かあけてくれぇ!!」

コクピット内部は一分たらずに４５度以上にあがってくる。

頭部を吹っ飛ばされた際にメイン回路が吹っ飛び、
マーカーが発信されず、また外部と連絡取れず、
ハッチ手動でも開けられない状態になっているのだ。

空調はとまり、エンジンの熱気は流入……
あんまりほっておくのも可哀相なので、
死亡確定のギーンを引き込んだ。

（１番死にたくない死にかただよな…）

いくら死を覚悟した戦士であっても、
じわじわと苦しみが長続きをする方が耐えられない…
１番身近な想像は、サウナで鍵が締まったままドアノブが壊れ、
開かず閉じ込められた状態そのものと、思っていただければよいだろう…

さてカオルは、ホワイトベース後方から近寄ってくるキュイへと接近する。

「木馬が逃げにかかるぞ!!、射撃開始!!」

キュイからホワイトベースに対し射撃が始まる。

「おい、右手の山側だ、高さをおさえろ」

「はっ！！」

キュイが崖をのぼっていく。

高度をおさえ、接近しきって…

「掛かれ」

個人用ジェットをふかし飛び立つ戦士達、

が…最後の一人が飛びたとうとした時、

ビームが直撃し、ランバラルが乗ってたキュイが回転し始め、

吹き飛ばされ地面につく前に…引き込んだ。

なんとかキュイを制動しようと操縦士は…

しかし爆発し、巻き込ま…引き込む。

（二つ無駄になったな…）

イスラフェルの能力で分裂させ…

（もう一機のキュイとカプセルを頼むわ）

（あいよ）

と二手にわかれる。

「砲撃の少ないところへ突撃しろ！！」

との声がきこえる。

落下してくるジオン兵を虚数空間にほうり込んだ。

分裂体がすぐさま引き出し、カプセルにいれ作動させる。

また落下してくる連邦少年兵引き込み、の流れをとる。

甲板にて、
（2名か…）
幻影をかけ引き込み、
（作業よろしく）
（あいよ）
分裂体が2名引き出した。

その間に落下した人を虚数空間にほうり込み、
用意してあった擬体に弾痕がついたのを確認し、虚数空間にほうり込んで、
また虚数空間から人をだしカプセルにいれ、
先程の2死体を医療カプセルで蘇生作業にはいる。

（生き返るか不明だな…おくったよ）
（受け取る）
虚数空間から擬体を出し、元の位置におく。

ブリッジにクランプ隊が突入するのが見えた。

（あっちも大体全滅だよな…忙しい…もう一体分裂するか）

再度分裂し、
（クランプの方よろしく、俺はこのままラル隊についてくわ）
（了解）

分裂体したカオルCがブリッジの方へと飛んでいく…

そのまま中に入ったラルについていく。
途中で回収作業を進めながら行くと…

「急げ、サブブリッジを占領するぞ、おおっ」
フラウと遭遇したラル…フラウの銃をはたき落とし、
隠れてろと告げ、そのままいく。

「あの人レストランに…」

（結構連邦側の死者が多いなぁ…）

連邦側は擬体が用意してなかったので、
回収できないのが多数…

（練度はね…確か最終回でも白兵戦で結局は…だしなぁ）

と考えながらランバ・ラルを追跡していく。

「しかし、妙だとは思いませんか？
少年兵ばかりというのは、どうも…」
「どこも人手不足だからな。開くぞ」
開くと同時に発煙筒を投げる。
「敵だ、敵だ」
警告した人は撃たれ…
「まっすぐ行け」
どんどん艦内を制圧していく…
がまた一人また一人とランバ・ラル隊の突撃隊員の数がへってく…
「隊長！！」

「突入！！」

サブブリッジを警備してたホワイトベースクルーは射殺され、
なんとか占拠できた状態だった。
「わしが入口警戒する、クランプはどうだ？」

「……駄目です応答ありません！！」

「そうか…失敗か…ならばメインブリッジのコントロール回路を切るんだぞ」

その時ドアがあき、アルテシアさんが…
「あっ…」
「あっ、ひ、姫、ひ、姫様か？」
問い掛けに反応するセイラさん。
「…間違いない、アルテイシア様に違いないな。
私をお忘れか？あなたの父上ジオン・ダイクン様に御仕えした、
ジンバ・ラルの息子ランバ・ラルですぞ」

「アルテイシアと知ってなぜ銃を向けるか」

「はっ、やはり。で、ではなぜ？」

「セイラ、退け。うおーっ」
リュウが乱射しながら突っ込んでくる。

「不覚」
不意をつかれ、銃弾があたり反撃、リュウに命中させる。

「リュウ！…ランバ・ラル、退きなさい」

「ひ、姫様…」更に銃撃を受け、ドアをロックし…

「…ハモンと連絡は？」

「はっ、周波数は合わせました」

「お前達は退け。作戦は失敗だ」

『あなた』

「ハモン、すまぬ。木馬をギャロップで撃破してくれ。ランバ・ラル、戦いの中で戦いを忘れた…アルテイシア様が」

『どうなさったのです？』

外部からの攻撃により吹っ飛ばされる。

幻影をかけジオン兵を回収…

「……またモビルスーツのガンダムか。

…わしの戦っていた相手が皆、年端のいかぬ少年達とは皮肉なもんだ…」

再配置…

ガンダムに傷ついた身体で近寄るラン・バラル。

（そろそろだ…）

（虚数空間にあるよ準備ｋ）

（やる事なし。回収済み。艦内で好みそうなの探してる）

ドアロックを外してブリッジ内に侵入してくるブライト達…
「君達は立派に戦ってきた。
だが、兵士の定命がどういうものかよく見ておくんだな」

手榴弾のピンを口でとり外に駆け出し飛び降りる。
「うおーっ」

幻影かけながら、気絶させ手の手榴弾を抜き取る。
ランバ・ラルを虚数空間にいれ入れ代わりに擬体を出し、
手にもたせそのまま飛び降りさせ…

ガンダムの手が擬体に届き、
手榴弾が炸裂しばらばらに四肢が吹っ飛び、
原形をとどめなくなる。
カオルは離脱し…

（お疲れ）
（うんじゃ合体）
ぐにゃりと一体にまとまる。
思考が統合する。

（いつつ……お～追加の連邦兵でいいのいるか…）

「”世界扉”」
精神力回復の為、一回休憩をとりに向かう。

5日目

翌日…

ルーロス改でホワイトベース上空に待機し、引き込んだ後、

カオルは、砂嵐の中警戒任務中のガンキャノン、ガンタンク上空にいて、
接近してくるタチ機を発見していた。

（たしか、サムソン、サムソン、取り付いたガンダムに切り掛かるザクに、
マゼラ、ハモンさん、マゼラだよな?…
うん間違いない…まずはどっちのサムソンかか…）
分裂し、接近してくるサムソンに取り付きに向かう。

ザクが右手後方からマゼラントップ砲で攻撃してきた。

ガンキャノンが接近し攻撃をしかけるが…
避けられ、追って崖上にでる。
すると…カオルが取り付いたサムソンが…

「うらぁぁぁ」
「赤い奴だ!シャアじゃないぞ!」

機銃を食らわせていた。

「掻き回せ!!ハモン様を援護するのだ!」

サムソン内部には7名の兵士がつめていた。

ガンタンクは援護にでるも、不調を起こし、キャタピラが動作不良をおこし、
動けなくなっていた。

ザクが再びホワイトベースに攻撃をしかける。

「ハモン様が、発見されたもようです」

やっと浮上してくホワイトベース…がエンジン不調で中々浮かびきれない…

「あの赤い奴落とせるぞ！」

「上空より鉄機！！」

（こっちが先か？）

「かわせぇ！！」

「だ、だめで」

銃撃くらい、サムソンの人員を引き込み、離脱し直後に爆発する。

（そっちが後だねよろしく）

ガンダムが空中ドッキングしている。
（攻撃していい？いいよね？）
誰も合体中のガンダムに攻撃してこない。

合体し終わり、ガンダムが起動し、直後にサムソンをビームライフルで貫いた。

ガンダムがガーゴの爆薬に気づき、
特攻してくるカーゴを支えはじめた。

『タチ、ガンダムを後ろから倒しておしまい』

「はっハモン様！！」

ガンダムにむかって切り掛かる。
胴体に一撃、
「むう…ザクなら真っ二つなのに…流石ガンダぐぅ！」

肘鉄を一発くらい衝撃がくる。
更にもう一撃…

コクピットの装甲が歪んできた。

「ぐぅ…さすが、だがこの一撃で！！な、なにぃ！」

持ち上げられて…マゼラトップの主砲の盾に…
引き込こみ離脱する。

（こっちも引き込んだ）

マゼラトップには分裂体が取り付いてた。

（じゃ、リュウよろしく）
（ああ、丁度ガンタンクでなにかし始めたからチャンスだな）

（こっちはっと…）
接近してくるマゼラトップに取り付く。

「ガ、ガンダム、二人のパイロットを同時に討ち取るとは。さすが、私の見込んだ坊やだけのことはある。しかし」
カーゴに取り付いているガンダムの背後に、
ＶＯＴＬで０距離砲撃しようと…

「いくら装甲の厚いガンダムといっても、これだけ近ければ持ちはすまい。そしてガンダムとカーゴの爆発力は木馬をも」
動けない、援護もこない状態の無抵抗なガンダムに対して…

「ほんと、好きだったよ、坊や」
主砲が放たれ一発でシールドを破壊、
もう一発でランドセルを破壊し中の火花を放つ機械が見える。

「これでおしまい、…」
横からリュウの乗ったコアファイターが突っ込んできた。

面先がマゼラトップの装甲に突き刺さり、
ハモンさんの身体にせまって…引き込んだ。
（こっちも救助完了）

離脱すると背後でジェット燃料に引火し大爆発がおき、

炎を上げながら地面に崩れおちる両機がみえた。

最後にガンダムに撃ち抜かれるマゼラアタックのコクピットから、
虚数空間に引き込む…

（リュウ瀕死だから早くいれなければな…）
（ああ）

医療カプセルをだし、リュウを引き出し…
気絶しているようだった。
（痛みに耐え切れず？）
（だな…このステータスみてみなよ）
（うへ、良く操縦できたなぁ…）

カプセルを作動させ引き込んだ。

分裂体と統合し…

「”世界扉”」

世界を渡る

……

カオル報告

ランバ・ラル隊全員だよね？

第１３８話　ガンダム編　ランバ・ラル隊全滅す　投稿日２０１１０６２４（後

作者「大変お待たせしました」

ナギ少尉「まったく…何やってたの？」

作者「えっと、キャリストというコロプラ社のゲームに嵌まってて、ランキング目指そうとしたのが間違いだったんだよ…」

ナギ少尉「そのキャリストって？」

作者「……ようはネトゲー」

ナギ少尉「わかんないわよ…どういったのが出てくるの？」

作者「たとえば…、」

イフリータ「ふん！！べ、別に作者の為にきたんじゃないからね！！」

リュカオン「くきゅ？」

ナギ少尉「？妖精さんと…か、かわいいモフモフ～きゃ～♪」

リュカオンに抱き着くナギ少尉…

作者「あ～そいつ狼男なんだけど…まぁいいか…」

ナギ少尉が堕ちた模様…

イフリータ「で、作者、近況説明しなさいよ」

作者「まぁこいつらに嵌まってて執筆がすすみませんでした…一日１８時間ランキング維持の為に…
次回イベントはダメージトップだけで、ランキングは放棄します」

イフリータ「ナギ少尉がまだ復帰してないわ、作者後書きの続きしなさい」

作者「まぁ今回は散々指摘受けてた分裂が初活躍しました。
後はそうですね…久々の生贄ゲットですか」

イフリータ「作者、なんか物騒な単語がでたわね…
まぁいいわ。あとこのわたしも後書きに出てきてあげるから感謝しなさい」

作者「あ、デレ子、ゴメン…今回だけ」

イフリータ「そうなの？……まぁいいわじゃあね…行くわよリュカオン」

リュカオン「くきゅ～」

ナギ少尉「ああんまって、もっともふもふを～」

作者「え～ナギ少尉も崩壊したようで…さて次回は元の世界に、また大量の人数を引き連れて帰ってきます。
鋭意執筆中です、お楽しみにぃ」

第１３９話　砂漠より帰還　投稿日２０１１０６２６

２００１年１１月１３日夜（５日目）

「ん～ただいまっと」

［マスターお帰りなさい～］

「なにかかわった事は？」

［至って平和といいたいけど…ついさっき、マレー戦線が危ない兆候だったから、
ビッグトレー第一砲艦隊、第一ミサイル艦隊、
６１式改２００両と簡易水素燃料工場を乗せた、
トレインギャロップを派遣したよ。
だから重慶に砲艦隊が間に合わないから、急いでマスターの調整してね］

一個艦隊は２０隻で組んでいる為、
防衛艦隊以外の全砲撃艦隊だった。

「わかった…ミサイル型のほうは…ベトナム沖で？」

［そこから双方の戦場に狙うからね～］

「ベトナムのところのハイブも攻略したいな」

［二兎追うものは一兎えずだよ］

「か…まぁわかった…早いところ作ってくれ、調整したいからな」

［了解、マスター］

「けどまぁ…俺がいなくなっても、もう立ち回りできるわなぁ…」

［え～マスターおいてかないで！］

［責任とってよ］

「あ～うそうそ、ま、もう少し期間あけても大丈夫かな？と思っただけ」

［うん…そういった意味では…
ここまで軍備揃ってるならそうそうな事じゃ…
あと、佐渡島でないかぎりは、最悪サイクロプス暴走での手段も］

「おいおい…ひょっとして…」

［鉄原基地にはあるよ～
まだ帰還もはじまってないからね～］

思わず進行してきたＢＥＴＡに対して、鉄原基地が巻き込んで大爆発を想像してしまう。

「人が戻ってきたら絶対防衛線基地になるんだから…」

［その前に一回大爆発～］

「……駄目だ」

［う～わかった外す指示する］

「そんなに爆発させたいんか？」

［うん♪］

「月面のハイブで我慢しろ…な…」

［わかったぁ］

「他にはないな？」

［うんないよ、マスター］

「じゃおやすみ」

２００１年１１月１４日未明

基地内殿下私室

「カオル様」

「ん？なんだ夕陽」

「冥夜の紫の機体なにを考えてます？」

「正直、何にしようか考え中なんだよな…」

「冥夜が生き延びる為の機体お願いしますね」

「ああ、近接格闘に長け、厚い装甲だな…」

「うふふ……あら？いただ…」

布団の中に再び潜る殿下。

……

朝方

「アムロさん、おはよう～」

「カオル君、なんだい？ここにきて貰いたいようって…」

「まま、…ね」

とシェルターをだし始める。

「数が多いな…かなりの人数連れて来たんだな」

「そうっすね～…ん～百何人だろ？」

「おいおい、君は自分が連れて来た人数、はっきりわからないのか？」

「いや、爆発からの救出は忙しかったので…とさて…」
スピーカー接続をして出てきて貰うように促した。
シェルターの扉から続々と人が出てくる…
「ジオン軍が多いな…あれ?あいつは…」
「ええ、元同僚っすよね」
「懐かしいな～!!え?…まさか…」
「覚えてますか?ランバ・ラルさんを…」
「ああ、忘れるわけないよ…あ…ハモンさん…」
「じゃ、いきますか……ランバ・ラルさん始めまして」
アムロ大佐をともない、声をかけにいった。
「君は…映像に出ていた…」
「はい、異世界軍責任者の渚カオル大将です」

「ジオン公国軍、ランバ・ラル大尉であります」

「で加入の意思を問いますが…いかがでしょうか？」

「ハモンの生活が楽になるなら、わしは構いません」

「あなた…わたしはあなたについてきますわ」

ランバ・ラル隊今いる人員は、総員隊長についてくとの事で、
２２名の加入が決定した。

「ねえ、あなた…」

「うむ…なぁ…そこの隣の青年、尋ねるが、アムロ・レイという少年の身内かなにかかね？
非常ににてるんだが」

「自分ですよ…ラルさん、ハモンさん」

「ほう…これは面白い事だ、立派になったものだ…なぁハモン」

「ええ、見違えったわね。坊や…いえ、アムロ君」

「アムロ君はやめて下さいよ…」

「ふふ…じゃあアムロでいいわね？」

「はい、ハモンさん」

「わしらが死んでからどういった人生を過ごしたか、語って貰おうじゃないか、酒場はあるか？酒場は」

「この区間に作ってますよ。勿論タダ酒です」

「おお、さぁ飲むぞ～」

騒がしくでていった。

（次のグループはっ…と）

ホワイトベースクルーが隅で固まっていた。

無理もなかろう、周りはジオン公国の兵士ばかりの環境だからだ…

しかも、白兵戦で命を落とす事となった少年達…

ホワイトベースという殻に護られてたのが、

生身で戦闘を行う事となったのだ。

その命のやり取りの実感は拭えないだろう。

「始めまして」

「あ、この度は命を救っていただき感謝しております！！」

「まぁ、人材を探しに救ったんだけどね……
さて、加入の意思を問いますがどうですか？」

「ジオンとはやり取りしないのでしたら…」

「ぼくも…」「じぶんも…」

と、３名の初々しいばかりの少年兵達が加入してきた。

宿舎に案内するようにして、配属先はＣ－０１になるようにした。
あとは、鉱山基地から救出した沢山のジオン軍兵士達がいた。
（ん～自重しなかったなぁ……）

とりあえず兵種事に別れてもらった…

戦車兵…１１名

通信兵…４名

歩兵…１２名

騎兵…３名

航空兵…３名

輸送兵…５名

衛生科…2名
経理科…2名
軍楽科…61名

となった。
加入の意思は全員一歩前に出てくれたので無事にすみ、

歩兵と通信兵、輸送兵と経理科と衛生科…一人は歯科医師、もう一人は薬剤師…は、
それぞれの部署に…

騎兵の方は、航空兵と一緒にメデューシン級新造艦へ…

コバッタ達が割り振っていってもらった。

問題は加入は示したものの、
愛用の楽器と別れる事となった軍楽隊の皆さんだった…

（どんよりしてる…）

「愛用の楽器ですか…」

「そうですね、それぞれ思い入れがありますから…」

（ん～…あっ！！）

「記憶を見せてもらってもよろしいです？」

「あ、はい…」

記憶を見せてもらった。

（ドラム・アンド・ビューグル・コー編成なんだ）

「ん～……同化」

手短の材料を変換しはじめる。

（難しいなぁ…よっと）

フロントユーホニウムができはじめる。

「多分再現できたとおもいますが…」

手にとり、マウスピースの感覚を確かめ、恐る恐るふきはじめる。

一曲ふきおわると…

「ま、まさに自分のです！！」

「私にも作って下さい」

「よっし！！第１０１軍楽隊の再結成だ！！」

「ジーク・ジオン！！」

となって、それぞれの愛用のを再現していく…

再現しおわると喜んで地上エリアで練習するって事で、移動してった。

楽器のオイル等は、コバッタ達が製造して渡したのも付け加えておく。

（さて、一通りおわったか…）
医療カプセルにはいっているの人員総数３０人を医療室に運び終わると、
ハンガーデスクで鯖に取得した技術を入れてた…
（目新しいのはエアカーかな？）

モニターに出した。
ホワイトベースに搭載されていた、
オフロードタイプのバギータイプのエアカーだ。

通常時はタイヤで、
高速移動をともなう非常時にエアカーとして変形する。
というしろもろだった。

（もとの世界にあったエアカーとどっちがいいかな～）

元の世界にエアカーはない！！と突っ込んできたあなた、
実はありました。エアカーの定義は、空気の力でもって推進する車の事。

燃料にガソリンの変わりに圧縮空気をいれ、
圧縮空気の力でもって走行する車両があるのです。

まぁ空気の力で浮上して…ではないですけどね。

インドのタタ社、ワンキャット…
タンクに満載にした圧縮空気の力で４時間走行、
馬力は１５馬力と非力ながら、
カーボンファイバー製のボディで、

時速１００ｋｍ、ガソリンとのハイブリットなら、
リッター５０ｋｍで８００ｋｍ走行可能という…
日本円で５６万円で販売予定との事です。
タタ社といえば２８万円での販売も話題になりましたね…

で、実際に空気の力で浮いて走行するは、実験車ではありましたが…
制動に問題ありのため、開発頓挫、量産化にはいたりませんでした。
何しろ曲がれずに湖に侵入したり、壁に突き刺さったり…
またタイヤがないと実験させないと横槍もあったそうです。

（あとはリニアカーは……設備の方が問題だな…ホワイトベースは
…作れないな…）リニアカーはそこまで設備作らないとの事で却下、
ホワイトベースはミノフスキークラフトシステム、
つまりレーダー阻害散布ありきの為、
対人戦でないこの世界では…
（人類の手段のミサイルやレーダー阻害しちゃうしな～
レーザー阻害ならともかくね）

なので製作はされなそうであった。

ガンダムやガンキャノン、ガンタンクは…
（…コアブロックがな…）
一応制空権がまだＢＥＴＡ側にあるのに、
小型飛行機がコクピットなのは…であった為お流れに…

（まぁ、量産型に転用っう事か）

なので、試作品としてエアカーを作製してみる事となる。

（ん…まぁこんなもんか…）
試作品が出来上がったあたりで、
［マスター、頼まれてたの］
「おう、サンキュー」
（さて、お返しもったしもってく再生分もわすれてないよな？）
「”世界扉”」
＝＝平和日本＝＝
まずはホワイトデーのを妹の部屋においてきた。
で、いつもの廃品回収と、食料、医薬品等と交換に再生資材をおいてくる。
集積所では、
（レイバー？）
らしいのが作業していた…
見てみると稚拙さがまだあるが…
物資を交換して、帰還した。
＝＝ハンガーデスク＝＝

「あ、カオル」

「ん？どうした？」

「あいつらの報告だけどさ」

「ああ、……へぇもう実機にあがったのか」

「かなり腕は上がってる実感はするな。で、何処にいってたんだ？」

「ガンダムにいってランバ・ラル隊のスカウトな」

「ランバ・ラルさん？…まさか本物に出会えるとはなぁ…
なぁカオル今度…」

「だーめ。ストーリーの世界は、介入してストーリーが変わったら
どうすんだよ」

「……そうなのか？」

「だよ。こっちで作るならともかく、実際に生きてる世界に行くんだよ。
介入は死が確定した人のみ…これは曲げられないんだよ。
介入した結果、余計なフラグたって、処理しなきゃいけない結果もあったんだしさ…」

「難しいねぇ…」

「ま、だから実質的に武がいけるのは、俺の元な世界だけだね。
あとはルーロスで見学のみ…わかった？」

「ああ……ところでそのバギーは？」

「ああ、エアカーだよ」

「！！乗らしてくれ！！」

「ん？いいけど運転できた？」

「できるにきまってるだろ」

「じゃ、いいよ」

「おう、サンキューな」

いそいそのりこ…とまった。

「な、なぁカオル…これ…」

「ああ、マニュアル車だよ」

「……駄目だ運転できねぇわ改造できない？」

「ん…？……わかったちっとまってな」

同化し、ミッション部分を改造した。

「これで大丈夫、エアシフトはこいつだからね」

「サンキュー」

喜んで試乗していった…

……

カオル報告

初の軍楽隊♪

第１３９話　砂漠より帰還　投稿日２０１１０６２６（後書き）

ナギ少尉「マーチングバンドか～」

作者「ああ、バトン隊はいないけどな」

ナギ少尉「キシリアさんを出迎える設定で、
あの基地にいた…って事でいいのね？」

作者「ああ。そうだよ」

ナギ少尉「ところでコックさんは？」

作者「大和君か…爆発に巻き込まれて…未救出」

ナギ少尉「そう、残念…あ、マレー半島ね次は」

作者「まぁ…そうなるな…」

ナギ少尉「ところで弾級はいつからＢＥＴＡ側に加入してくるの？」

作者「……」

ナギ少尉「ねぇ作者～」

作者「ま、まぁ次回って事で…」

ナギ少尉「次回、マレー半島戦線壊滅？お楽しみにぃ～」

第１４０話　インドシナ戦線壊滅？　投稿日２０１１０６２８

２００１年１１月１４日深夜
インドシナ戦線

「ＨＱ、ＨＱ応答してくれ！！」

『こちら、ティーガ０３、ＢＥＴＡに阻まれ動きがとれない、指示を！！』

『ＨＱ、ＨＱ！！』

「くそっ！！駄目か…ＨＱが落ちた！退路も絶たれた……覚悟を決めろよ」

『はは、まさかこんな事になるとはね』

『ママ、ごめんなさい…先立つ不幸をお許し下さい』

『くそ、何なんだよ、何発くれば気が済むんだよ、あれはよ』

そう、今までにない新型ＢＥＴＡ、弾級が現れた為、戦況が一変してしまったのだ…

インドシナ戦線、
マレー半島の立地を利用した人類の重要抵抗戦線であった。
マレー半島の最短部であるクラ地峡に運河が建設され、
運河を利用した防衛戦線でる。

ＢＥＴＡは水に潜る前に何故か立ち止まる、
それを利用しまた、６０ｋｍという距離を利用した、
火力集中型の防衛戦線である。

インドシナ戦線の後ろには今や人類にとってなくてはならない、
マレーシアやら始まる東南アジアの諸島国、ミクロネシア、オーストラリアに対しての、
防衛戦線となっている。

運河の人類側に防衛火力砲台陣地、戦術機基地、
その後方に司令部、補給基地などが集中している。

人類の反抗の砦として、支えていた…が…

～～ある女性オペレーター～～

ハァハァハァハァ
息荒く、土埃まみれの女性制服兵がいた。
ドドーン

なにかが爆発したのだろう、振動が土および音の衝撃波で伝わってくる。

ギチギチギチギチ

「ひっ！！」

ギチギチギチギチ

「ひっ！！」

近くで異様な音がする…

～回想～

彼女は本来司令部につめていた管制オペコであった。

「弾級です。１０２対空ミサイル部隊迎撃入ります」

「対空ミサイルの残弾は？」

「約１０％残り１００発です…」

「くっ…間に合わないぞ…大本営に至急補給要請をだしてくれ」

「了解しました…が量産体制が…」

「なけなしのミサイル集めても…足りないか…」

人類は空に対する備えを忘れた…
まさにその通りだったとしかいいようもない。
ＢＥＴＡは地をはって、地を潜って物量にまかせて侵攻してくる。
だから人類は負けていた、
けどここでは、一方方向から、火力が集中できる等、地の利でなんとか押さえ込む事ができてた。
だが今度は空をＢＥＴＡが支配し、侵攻してきたのだ。

人類の対抗手段としては、地から空への攻撃、対空ミサイル、対空砲等しかない。
切りにいけないのだ。

空を飛んで切りにいくと光線級の餌食となる…

そして、対空ミサイルは生産中止してた…
そのラインを再稼動するのにどれ程時間がかかるだろうか…

上がるミサイルは最初はホークミサイルがあがってたが、
すぐに旧ベトナムのからのＳ－７５、Ｓ－１２５等、
大量保有してた対空ミサイルが打ち上げられていた。

だが、とうとう崩壊の予兆がきてしまった。

「対空ミサイル残弾ゼロです！！」

「対空砲火、火線絶やすな！
後方陣地に着弾すると補給できなくなるぞ！」

「は、はい！！」

しかし…

「駄目です！数が多過ぎます！着弾します！」

着弾の衝撃で司令部内に振動が走り女性制服組の悲鳴が上がる。

「着弾した弾級の迎撃に向かわせろ！被害を増やすな！」

「はっはい、フォト中隊、マリーシア中隊は大至急迎撃に向かって下さい」

了解が入り迎撃にでる基地防衛部隊。

しかし、次々と打ち込まれる弾級に防衛網は…

「高射砲車両群…全滅…」

「くっ…」

その時、建物自体に衝撃がはしる。

悲鳴があがる。

「諸君、現司令部は放棄、１０５補給基地へ移動する！いそべ」

天井から崩れてきた部材に頭が潰されてた…

ますます振動が酷くなり、とうとう壁が崩れ落ちると…

「キャー！！」

「Ｂ、ＢＥＴＡ！！」

壁を突き破ってきたのは、全長１２ｍの弾級であった。

勇猛に小銃で突撃する男性オペレーター、

しかし、小銃の弾では甲羅は貫通せず、

口わきから伸びている触手が巻き付き…
「は、はなせはなせ!!はなせはな…」
ミチャミチャ…

男性オペレーターは血が滴り落ちる下半身だけの存在になってしまった…

既に殆どの人が退出した司令部の建物を中から突き破ってく…
しばらくすると崩れ落ちる司令部建屋。

外は阿鼻叫喚の世界となっていた。
弾級が３０体以上活躍し、
車両は潰され、オペレーター達は徒歩で逃げ惑うしかなかった…

救援にかけつけ、対戦車ミサイルを射出する改造装甲輸送車、
甲羅を貫通し、一匹を絶命させ、そのミサイルの照準を別のに向ける。射出するがそこまでだった…

弾級が上空から飛来着弾し、改造装甲輸送車は爆発する。

直接高火力を持たない別の装甲輸送車には屋根の上にも人をのせ、
離脱しようとしてたが、弾級に乗っかられ…車体こと捕縛されていた。

彼女は、足をくじいてしまった為、走れずに廃墟となる建物沿いに
隠れながら移動していた…
それが命を長引かせたかもしれない。

同僚がまた一人また一人捕捉され、触手に捕まり、

助けてといいながら絶命していくのが聞こえる…
恐怖とともになんとしても生き延びねばと…
汚れるのも気にせずに見つからないよう心がけた。

しかし…

ギチギチギチギチ

「ひっ！！」

近くで異様な音がする…

息を潜め、身を隠し…
（早くいって！！）

と念じたが……

ニョキ
と、目？を伴う触手が伸びてきた。

それに見つからないように更に身を伏せる。
もう顔はあげられない……

静かに呼吸をし、音をたてずにじっとふせる。

心臓の音が脳に響く…
（静まって！静まって！！心臓！！）

……

どの位たったろう??

まだ爆発音がする…

（いつまでもここにいたら危ない…１０分位たったよね?）

恐る恐る顔をあげると……

目の前は何もいない…

ホッとし、早く司令部跡地をはなれようと、

ガラッ

足から瓦礫が崩れた瞬間、

シュ

「きゃぁぁぁ」

触手に巻き付かれ、

「いっ、離して離して!いたい!!」

がっがっと引きずられ、地面にあたったところから血がでる。

そのまま弾級の顔面に持ってかれ、

大きな口がくちをひらく…

「ひっ!!」

彼女の脳裡にいきながら咀嚼される光景が浮かぶ…

彼女が自由な手で触手を叩くがびくともしない。

が、固い物が手にあたる。腰のポシェット内にだ。
彼女の右手はポシェットを急いであけ…中身を取り出した。
左手でピンを外す。
「これでも喰らって!!」
彼女の手から投げた手榴弾は弾級の口に…入って、
ドウゥ!!
弾級の口内で爆発する手榴弾、しかし近かかった。爆炎は彼女に……
……
２００１年１１月１５日未明
次々飛来してくる弾級…
また周りはＢＥＴＡに囲まれて弾幕をはり、
かろうじて生き延びている部隊がいた。
「きやがった!!」
『くそっ、あれを撃ち落とさないと!!』
彼らの部隊に向かって飛来してくる弾級…
着弾計算結果が瞬時にでる…5時間程の戦闘で得られたものである。
「残弾撃ち込むぞ!!」

『落ちろ落ちろ！！』
『残弾０！！』
『こっちもです！！』

「くっ！」
円の内側の対空攻撃担当していた機体からの報告があがる。
その時…
『レーダー反応あり！！こ、これって…』
レーダーに出撃したアンノンの数々その数千以上…
「高度がある！！…ミサイルだ！！」
『馬鹿な…この数全てがミサイル？』
レーダーに映ったミサイルは頭上を通り越して飛来中の弾級、に突き刺さり爆発、
遅れて光線級のレーザーが上がり、迎撃されてくが、
かなりの数がＢＥＴＡ群に着弾した模様だった。
『シエラ０６』
「ああ…」
またもやレーダーに感…同じ位の量のミサイルが降り注ぐ模様だ。

「光線級のレーザーがミサイルにくぎ付けになる、その瞬間後退するぞ！」

ニ巡目のミサイルが、降り注ぎ、
幾多もの光が打ち上がる。

「今だ！！」

跳躍し離脱をはかる僚機達、しかし…

『シエラ０６！！』

「へっ、跳躍装置損傷うけてよ……てめえら生き延びろよ！！」

『シエラ０６！』

「いけ！！」

程なく彼の機体はＢＥＴＡの海の中にきえいった…

……

１０５補給基地を護っている部隊がいる…

海岸沿いだが、もちろん撤退できない。

かれらの後方にはまだ避難できてない民間人もいるのだ。

覚悟を決める整備兵、基地要員達…

そんな中、突如として前線方面に大爆発がおきる。

「どうした？」

『砲撃です！砲撃！！！大量の砲撃です！！！』

「ばかな…我が軍の艦船のは間に合わないのに…」

『大量にＢＥＴＡが消滅していきます！！！』

光線級のレーザーが上がる線量以上に物量にまかせた砲撃がＢＥＴＡに加えられる。

次々とＢＥＴＡを示す赤点が減っていく…

『とにかく援軍がどっかからきたんだ！！！踏ん張れ！！！』

＝＝派遣隊旗艦トレインギャロップ＝＝

「遅れた分砲撃支援絶やすな！最大戦速」

「出てます！！」

「あと上陸予定地点までは？」

「５ｋｍです！！」

「ハッチ開け！、上陸と同時に射出、援護体制をとる」

＝＝１０５補給基地＝＝

砲撃が加わり、侵攻していたＢＥＴＡが次々と消滅してき、
今相対しているところだけ支えれば…
が、限界をとっくに超えてた。
弾はなく、近接格闘に長けてる帝国軍ではないが為、
友軍マーカーが一つ一つ消えていく……

そんななか…
「あ、あれはなんだ？海上方向！」
海上から数珠繋ぎ状の物体がみえてくる。

海の上を爆走し、そのまま基地横の砂浜海岸に乗り上げると…
見たこともない戦車を吐き出してきた。

『こちら異世界軍派遣隊、救援しにきた！！
補給物資たんまりあるぞ！』
上半身裸の兵士がＭ６１らしきガトリングを持っておりて展開してく…

「た、助かったのか？」

『み、みたいだな…』

救援感謝する。が徐々にだが無線上でながれはじめた。

『とにかく補給物資あるなら補給してもらわんと』

「ああ…」

ボロボロの機体を数珠繋ぎの船らしきのに、
補給受けに向かった。

＝＝横浜基地情報室＝＝

「なんとか間に合った状態だったのか…？」

［だね］

「……正直遅れてたらやばかったな……」

［特に後方を掻き回す弾級が1番痛いね。撃ち込まれたら…だし］

現地からのリアルタイム状況があがってくる。
既に、砲撃開始時の大東亜連合軍の損失率は甚大なものになってい

た。

救援活動終了後…
残存有効兵力８％の壊滅状態に陥っていた。
死者は５万人を超えていて、内後方支援担当が約３５千人、
衛士の戦死者が８００人を超えていた。

［大東亜連合から、戦力を回すから、
それまで駐留してほしいって要請きたね］

「まぁ…だろうな…今大隊規模でも支えるの地獄だろうし…」

［増援おくるよ～あと６１式戦車改を、５００両無料納品しておくね］

「ああ。あ、そうそう…あと他には戦線いくつあったっけ？」

［ソ連、スエズ運河戦線、あとドーバー海峡、ジブラルタル海峡、
樺太も危険だね。
他は距離的に間引き作戦をしないかぎりは大丈夫かと。
侵攻時には完全に上がらないと駄目だから］

「ビッグトレーミサイル型を各戦線に、
対空ミサイルに詰め替えて、海上から支援しとかないとやばいか…」

［ここまで生産が落ち込んでたのを、見落としてたからね～」］

人類は長いＢＥＴＡ戦で、使う必要のなくなりつつあった対空ミサイルの生産を打ち切り、
より地上攻撃へシフトしていった結果がでてしまった…との事だった。

また対空ミサイル自体の生産コスト、材料も馬鹿にならないものがある。

まだ対小型ＢＥＴＡ攻撃に地上攻撃へシフトした対空車両を、
再び対空攻撃に転じた方が早いというものだった…

「とりあえずマレー戦線に派遣した、第一ミサイル艦隊から各戦線に抽出してくれ。
補充分はこっちで生産した方がはやいからな」

［了解、マスター」］

……

カオル報告

インドシナ戦線に派遣隊を貼付けるようになりました。

用心の為に各戦線に対空ミサイル装備のビッグトレーを手配する事に…

第１４０話　インドシナ戦線壊滅？　投稿日２０１１０６２８（後書き）

作者「おらはやっちまっただぁぁ、おらはやっちまっただぁ～、おらはやっちまっただぁ～、
おらはやっちまっただぁ♪」

え～久々に設定ミスでまだ途中にも関わらず投稿されてました。
後書き部分すね。

変な時間に感想ついてんな?で気がつきました。
まさかエスパーが…と…

では改訂版です。

ナギ少尉「久々の人類不利の戦場みたいね」

作者「だろうな～」

ナギ少尉「ね、作者はどのように考えてたの?」

作者「まず弾級の迎撃に旧式になった対空ミサイルは、２発は必要なときもある…一応今回は弾級が１５００匹な」

ナギ少尉「うん」

作者「で今回は師団規模総数１５０００、弾級は兵士級、戦車級、闘士級から１０％をもらった編成なんだよな」

ナギ少尉「ねえ作者それでいくの？」

作者「あ号に聞かなきゃな～あ号どうなんだい？」

あ号「……その……通り…に指示…した」

作者「サンキュー…というわけだ」

ナギ少尉「これ以上ＢＥＴＡの強化はまずくない？早くあ号を…との意見あるけど」

作者「現状あと考えられるのは、
物量的砲弾に対しての対策とるかなぁ…なんだけど、
まず考えても有効にはならないね…
考えてもいたんだけどね」

ナギ少尉「作者…」

作者「通称盾級…要塞級の改悪型で、
ボディの上に巨大な傘状の盾をつけてんの。
圧倒的砲弾で１分は耐えられるかな…
その間にしたを中型ＢＥＴＡ達が通りぬけるんだよ。
ただしおもすぎで時速１０ｋｍ、ウホッいい的。
あとは…ミサイルに対抗する型もまたでそうかもね…」

ナギ少尉「人類はどうなるのよ！！」

作者「ま、まぁこの次のＢＥＴＡの改良型が出た時が勝負？
カオルはとりあえずの対策をとったから安心して、
スパン通りだと２００２年１月下旬占拠目指しているみたいだし」

ナギ少尉「本当にハッピーエンドいくのかしら？？…さて次回はあ、
またいくの？」

頷く作者

ナギ少尉「次回、ＳＥＥＤ編にまたいきます。サブタイトルは不明
…とうとうあの人達が！！おたのしみにぃ」

第１４１話　ＳＥＥＤ編　ボアズ陥落、プラント本国へ…　投稿日２０１１０６

２００１年１１月１６日

前日よる遅くまで各戦線への対弾級に関する、
対策の打ち合わせを行ってて眠かった。

（ふわぁ～）
「あがっ」

「へへへ～」

「こら」

「大きなあくびが悪いんだぞ～」

「たく、この…」
屡伊の口を口で塞ぐ…

「……ごちそうさま、ねぇカオル、またいくの？」

「ああ、またいってくるよ」

「気をつけてね」

「ん…ありがとう」
再び口を塞いでわかれハンガーに向かう。

「おはよう…じゃ、いってくるから打ち合わせ通りよろしくな」

［マスターいってらっしゃい～］

打ち合わせでは、各戦線に、
ビッグトレーミサイル型を対空装備で２隻、
ビッグトレー砲艦型を２隻、
増産中のトレインギャロップ、１号車カーゴにチューリップを内蔵し、派遣。

これで弾級を含んだＢＥＴＡ侵攻に耐えられるように…

また、トレインギャロップの護衛に、
陸戦強襲型ガンタンク３０機、
Ｔ－８５０を１００人つける事が決定していた。

トレインギャロップが間に合わない場合はガルダによる空挺…
がなるだけはそれはしたくない考えだった。

これで行っている間、増援待ちで持つだろう…の打ち合わせの結果だった。

C．E　0071　9月23日

一日目

カオルはルーロスからでて虚数空間へとしまうと、ボアズへとりついてた。

宇宙要塞ボアズ、元は資源採掘用小惑星、新星だったが、
ザフトに接収されL5に改造しながら改装され、
プラント本国を護るの防衛ラインの要となっている。

カオルは取り付いてボアズの取得を勤しんでた。
もうまもなくボアズは……

ボアズに侵攻してくる地球連合軍第7、第8艦隊が感知され基地内部は慌ただしくなってきた。

ボアズ駐留MS部隊がスクランブル発進、

MS搭載母艦も順次出港し、陣形を整えようとして……

スクランブル発進したMSとの戦端がひらかれた。

『作戦コード、レッジオックワン。
展開フォーメーションはシシリアン3。以後、指示はゴーメンガスト暗号によって伝達される。

全機、ナチュラル共の細胞を真空にぶちまけてやれ』

～ボアズ司令部～

「敵艦、左翼に展開」

「ムーア隊、チェリーニ大尉より支援要請」

「砲火を左翼に展開させい！
支援にはネール隊を！中央はどうなっているか！」

「アイザー隊が防衛しております」

「ネール隊、発進は五番ゲート」

「ふ、このボアズ、抜けるものなら抜いてみろ！思い上がったナチュラル共め！」

ボアズ守備隊司令官殿は護りきる自信にあふれている。

ホアズの戦力は、駐留ＭＳ１００機の他に、
各独立戦隊所属のＭＳ合計３００機の戦力及び、戦艦火力等…
対する地球連合第６第７艦隊は、
ＭＳ４００機確認できていた。
数の上では地球連合に分があるが、練度ともに自信があるのだろう。

「インディゴ１３、マーク６６、ブラボーに新たな機影」

「モビルスーツです。数３、クルーゼ隊より報告があった例の三機です」

「その後方、アークエンジェル級１、アガメムノン級４、距離５００」

「あらたな数、総数２００機、機種確定メビウス、アガメヌノン級より発艦」

「今更メビウスだと？……多分、わがボアズの防衛施設破壊ようだな…
対空火線たやすなよ…
回せる隊はないか？」

「ジャン隊、イスラ隊が回ります」

「よし、回せ！！」

ここでボアズの命運が絶たれてしまった…
核搭載と予想してればだったろう…

「敵メビウス対要塞ミサイル射出その数１８０程」

「全部は無理か…着弾予測地域特定、
ダメージコントロール班の準備を急げ！！」

カオルは命中する直前から次々とつばをつけてた人を引き込んだ。

ボアズに吸い込まれる核魚雷、閃光を放ち始めた。
瞬くまに範囲は広がり、命中した箇所は溶け始めていた。

ドゥゥン、光に遅れて振動および爆音が聞こえ…

「こ…この熱量は…核…」

「ん？」

瞬くまに引き込まなかった人は熱量で蒸発し、原形をとどめず崩れていった…

ボアズ内部にあんだけ人がいたのに、光が収まったら無人と化した。

滞在時間が二日目になる。
（うへぇ…放射能まみれだわ）

ボアズから離脱したカオルは、ルーロス改を不可視モードのまま虚数空間からだし、
船内にはいる。
「ルーロス、除洗よろしく」

「了解でち……ごちゅじんたまよくちななないでちね」

「あと無線のワッチ、機体配置を投影頼む」

「あいあい」

除洗で動けない間、立体投影されている機体しめす、
青のマーカー、白のマーカーを眺めてる。
青がザフト、白が連邦…猫の技術により、レーダー阻害等ものともせずに、マーカーが戦場を把握していた。

ボアズを失った青は纏まって戦場の外にいったのが、ごくごく一部、
あとは白に突撃特効の如く消えたりしたり、
混乱しているのか?動き鈍いのを各個撃破されたり等されている。

「ごちゅじんたま除線終了したでち」

「サンキュー」
終了した2時間後にはもう青いマーカーは6個しか残ってなかった。
ただ単に宇宙空間を浮遊しているだけの存在と化しているのだろう。

(確かエアーも持たないし、連合に見つかったら虐殺だしな…ほぼ死亡確定と)

「じゃ、回収しにいくからルーロス青の場所巡ってくれ」

「あいあい」

マーカーを巡って回収しはじめると…

最後の青マーカーに白マーカーが接近してきた。
（あちゃ…）
消えるかな？とおもいきや…
青を白が囲んで移動しはじめた。
「ん？これ…」

「曳航してるみたいでちね」

「捕虜に？」

コルシカ条約適用されないのに珍しい…と思ってると…

「ごちゅじんたま、搭乗員データーだちます」
（レナ・ユウキか、これも女性ね…回りの連合は男性パイロットか…）

『ひっひっひっ。極上の便器がてにはいったなぁ』

『1番手おれだからな』

『どうだ？おとなしいよな？』

『ああ、ケロッと騙されてやんの』

『やったあと生かしておくかっつーの』

「あ、これって…」

「白の無線ワッチでち」

青と白のマーカーは、
少し大きめな白のマーカーに吸い込まれていく…

「とりあえず様子見、接近しておけ、まさかと思うが…」

「あい……並走したでち」

マーカー図が動き、中央の横に先程吸い込まれた大きいマーカーがうつっている。

『ほら、おりろ!!』

『乱暴に扱わないで!コルシカ条約まもるって』

『あ~ん?この雌なんていった?』

『コルシカ条約です!』
笑い声が響く

『そんなのダッチワイフにまもるってかぁ』

『え?…きゃぁぁ…な、何を』

『へっへっへ、いいこととしような』

『ひっ…た、きゃぁぁ』

『いい肌してんじゃん…あたりだな』

『人として…きゃぁぁ…い、いや…いやぁぁ』

「ごちゅじんたま、これひどいでち」

『いやぁぁ！！』

『へっへっへ、人生最後のお楽しみさ、
おらぁ、さっさとぶち込まさせろよ』

『コーディネーターは美女ばっかりだから良いダッチワイフだな』

『へっへっへっ』

「いくぞ」

「あいあい、ごちゅじんたま…」

ルーロス改の外に出、すぐさま駆逐艦に取り付いた。

（いた！！）
パイロットスーツは剥ぎ取られ、乳房がわしづかみされて赤く充血している。
「腰をそらすな雌豚め！！おい、後ろから支えてくれ」

「しょーがねーなぁー」

「いやぁぁぁぁぁぁぁ…」
彼女を引き込んだ。

「あ？いてぇ！！」
「へ？」
「きえた？」
そそりたった男のものが床に打ち付けられ、痛みで悶えてる。
（赦せないけど…どうもできないか…
まだ殺すならともかくさ…）

願わくば焼き殺されてる事をと心に願って離脱しルーロスの艦内にはいる。

「ルーロス、適当な衣服用意してくれ」

「あい、用意したでち」

彼女を虚数空間から引き出す。

「ひぃぃぃぃやぁぁぁ」

「落ち着いて…君を助けたんだから何もしないよ…」

「近寄らないでぇぇ！！」

「ん～……アルミサエル」

精神状態を落ち着かせた…

「へ…？キャッ」

自分が素っ裸にいる事に気がついたようだ。

「衣服用意したから奥できてきな…その後治療ね」

「は、はい」

衣服とって奥のブースに向かっていく。

「さて、ドミニオンのマーカー記録した？」

「あい」

（ならこっちでやる事はないな…）

「あ、あの…」

「ん？もう着たの？」

「は、はい…えっとあなたは？それにこの小型挺は？」

「ん～…まずは君が治ってからね…アルミサエル……よっと」

睡眠状態にし、支える。
医療カプセルを出し横たえ作動させ虚数空間にひきこんだ。

大きな欠伸…
「つかれたな…仮眠とるわ適当にながしててくれ」

「あい」

ベットがでてそのままこてんと寝おちた。

三日目

（ほお～これがジェネシスか…）

「ごちゅじんたま、いってらっしゃいでち」

ルーロスを引き込むとジェネシスと同化しはじめた。

（お次はっと…）
ヤキンドゥーエと同化しはじめると…
プロヴィデンスや、ゲイツ、火器運用型ゲイツ、
シグーディープアームズが居たため取得もしておく。

取得しおわると……

C．E　0071　9月26日
四日目

翌日となり…
ヤキン・ドゥーエ司令部が騒がしくなる。
いよいよプラント本国を目指し地球連合軍の侵攻が始まるのだ。
ボアズが落とされた事により、ヤキン・ドゥーエの横からの圧力を
交わせばプラント本国…
そこに核魚雷を打ち込まれると、実質的なプラントの敗北となる。
『血のバレンタインの折、核で報復しなかった我々の思いを、ナチ
ュラル共は再び裏切ったのだ！もはや、奴等を許すことは出来ない！
ナチュラル共の野蛮な核など、
もうただの一発とて我等の頭上に落とさせてはならない！
ザフトの勇敢なる兵士達よ！」
長距離ミサイルの束が襲い掛かり、迎撃されるも、幾つかは命中し、
宇宙に光が生まれる。
ザフトのＭＳ先遣隊が連合軍へと襲い掛かる。
『今こそその力を示せ！奴等に思い知らせてやるのだ！
この世界の、新たな担い手が誰かということを！』
「ジェネシス稼動までの時間を稼げ、
ナチュラルどもは絶対に核をうちこんでくる。
二度と血のバレインタインの悲劇を繰り替えさせるな！！」
「申し訳ありません議長」

「よい…だが二度とはないぞ二度とは…
プラントの人民の命がかかっているからな」

「はっ！」
ジェネシス起動シークエンスに不具合がみつかり、
配管の漏れとの事で発射が地球連合の侵攻に遅れてしまったのだ。

離れている戦場はますます激化する。
「核はまだ見つからんのか核は…
あの忌ま忌ましいアークエンジェル級の側に要るはずだ！」
「まだ発見の報告は…」

「一発でも打ち込まれたら…
何十万の命が消えるんだぞ！！わかってるのか！」

「インディゴ５、マーク１２、ブラボーに多数機影確認、ジュール隊より入電、核です！！」

「みつけたか！最優先ターゲット！！プラントにうちこませるな！！
ジェネシスは？」

「もうまもなく！最終調整です！！５分かかります！」

「２分ですませろ！全隊、核を迎撃しろ」

「ジュール隊も突撃します！！」

司令部内に心臓が締め付けられるような空気が流れる。
「頼むぞ……」
「１５０…１４０…１３０…１２０…１１０…」
「核搭載メビウス残存数１００を切りました…」
「９０…８……核魚雷射出確認!!」
「ジェネシスは!」
「駄目です!プラントを巻き込みます!」
「全部隊向かわせろ!!」
「プラントまで距離３００…２５０」
コロニーの前で広がる光、次々と発見された核魚雷ばかりか、反応がなかった地点での光が広がる。
「迎撃成功です!!全弾迎撃成功です!!」
司令部内が沸く…
「議長…今のうちに…」
「ああ…じぇ」

と声を出そうとした瞬間、全域無線がながれる。
『地球軍は直ちに攻撃を中止して下さい。』

「フリーダム、ジャステス！、反乱軍です」

『あなた方は何を討とうとしているのか本当にお解りですか？
もう一度言います。地球軍は直ちに攻撃を中止して下さい』

「核を迎撃したのが反乱軍の模様です…」

「あ？ラクス・クライン等が？ふん！小賢しいことを。
構わぬ、放っておけ！こちらの準備も完了した」

「ジェネシスは最終段階に入る。全艦、射線上から退避！」

「部隊を下がらせろエザリア！我等の真の力、今こそ見せてくれるわ！」
「ジェネシス、照準用ミラー展開」

「起動電圧確保。ミラージュコロイド解除」

「フェイズシフト展開」

「Nジャマー・キャンセラー起動。
ニュークリアカートリッジを撃発位置に設定。

全システム接続オールグリーン」

「思い知るがいいナチュラル共。
この一撃が我等コーディネーターの創世の光と成らんことを！発射！」

本体より一次ミラーへ光の柱がたつ。
一次ミラーから本体のミラーへレーザーが拡散し…

スペースデブリが燃え尽きる、光の渦が連合艦隊へと向かう。

光の渦は核魚雷ごと、連合艦隊に襲い掛かり…

瞬時に船体をとかしつくし…
光の渦が通ったあとには…なにもなくなっていた…

「ジェネシス、最大出力の６０％で照射」

「敵主力艦隊は半数が壊滅状態におちいりました」

「流石ですなザラ議長閣下。ジェネシスの威力、これ程のものとは」

「戦争は勝って終わらねば意味は無かろう」

クルーゼが微笑む。

「追撃をかけろ!!核をうったナチュラルどもを生かして帰すな!」

パトリックは追撃を命じ…

「議長、演説のお時間です」

演説台へと向かう。

『我等勇敢なるザフト軍兵士の諸君。
傲慢なるナチュラル共の暴挙を、これ以上許してはならない。
プラントに向かって放たれた核、これはもはや戦争ではない!虐殺だ!
このような行為を平然と行うナチュラル共を、
もはや我等は決して許すことは出来ない!
新たなる未来、創世の光は我等と共にある。
この光と共に今日という日を、我等新たなる人類のコーディネーターが、輝かしき歴史の始まりの日とするのだ!』

カオルはジェネシスが放たれたあと、離脱し、
撤退、体制を整えてる3隻同盟に接触してた。

(あれがエターナルね…)
ミーティアが着体してるのを確認し、同化し取得…
イザナギへいくと、I.W.S.Pとストライクルージュを取得し…
離脱する。

世界扉を唱え、精神力回復に一回帰還する。

……
カオル報告

エターナル
ミーティア
I・W・S・P
ストライクルージュ
ボアズ
ヤキンドゥーエ
ジェネシス
プロヴィデンス
ゲイツ
火器運用型ゲイツ
シグーディープアームズ
取得

その他ボアズ要員、

第１４１話　ＳＥＥＤ編　ボアズ陥落、プラント本国へ…　投稿日２０１１０６

作者「再び来ましたＳＥＥＤ編」

ナギ少尉「ボアズ陥落、でジェネシス発射ね～」

作者「次回は予想ついてると思いますが…あの人を救出します。
あの娘は残念ながら…」

ナギ少尉「思念体になっちゃうんだもんね…」

作者「残念です」

ナギ少尉「ね…ところで…ボアズ陥落後のシーンなんだけど」

作者「ああ、これですね」

ナギ少尉「こんな事って…」

作者「戦争は命が軽くみまれます。
いくら条約で結ばれてたって、闇は幾つもありますし、結ばれてな

い戦争は悲惨なものです。
現にビクトリア陥落の際にも投降の意思ありのを…射殺ですし」

ナギ少尉「えっとつまり…」

作者「ええ、プラント独立戦争は、コルシカ条約に批准してない戦争ですので、
モラル次第…って話ですね。
コーディネーターを友と思っている人もいれば、ロボットだろ…の人もいる。
典型的なのがキラが離脱後のフレイの態度ですね。
彼女の場合はブルーコスモスですけど」

ナギ少尉「……」

作者「先進国通しは比較的条約条約で、
捕虜に対しては案外守ってるんすけどね…ま、そんなわけで次回です」

ナギ少尉「えっと次回は…終末の光潰える時…お楽しみにぃ」

第１４２話　ＳＥＥＤ編　終末の光潰える時　投稿日２０１１０７０２

Ｃ．Ｅ　００７１　９月２７日

五日目

カオルは８つに分裂後統合し、５：１：１：１の構成の分裂体となった。

（オーブ三人娘にそれぞれついてくれ）

（うい～）（マユ嬢）（ジュリ～）

カオル本体はルーロスをだし乗り込み、

「月へ」

ルーロスを月へとむかわす。

月上空にくると一目でわかった。

続々とクレーター部分の港湾部分から出港していく地球連合軍艦艇。

「かなりの大規模基地なんでちね」

「そんなにでかいのか？」

「そうでちね～地下６ｋｍ周囲２０ｋｍに伸びているでち」

空中に基地全体図が投影された。

「なる程でかいな…、なら急いで同化しなきゃな…じゃいってくる」

「あい…虚数空間で寂しく待機ちてるでち」
ルーロスを引き込み、プトレマイオス基地と同化しはじめる。

「絶対に地球にくそ忌ま忌ましいのを向けさせるな!!」

「国をまもってくるぞ!!」

「いいか、この一戦の事を考えろ、出し惜しみするな!かき集めろ!」

基地内部では今だ出港できてない艦に補給、
乗り込むパイロット達でごったかえしていた。

「ドゥーバック発進完了、続いてキャンサー出港位置へ…」

「頼むぞ…」
(けど最短距離で向かうから……)
(基地を巻き込むんだよな…)
(あ、取り付いた?)
(大丈夫だ)(左に同じ)(同)

(彼女達をよろしくな)

続々と出港していく連合軍の艦艇。
しばらくすると、

「第6、第7残存艦隊戦闘状態に入りました」
の報告がオペレーターより入った。

「援軍の先頭は？」

「2時間かかります」

「ふう……やる事はやるだけやったんだ…
あとは神のみぞ知る…」
椅子に座り込む。

「司令…」

「君もありがとうな…わたしについて来てくれて」

「いえ……短い間でしたが、良い上司に恵まれました」
この基地に取り付いてみてわかったが、
基地に残っての命の保障はないとの説明はなされてた。
もっとも地球に避難しようが、ジェネシスに狙われたらおしまい…
との事で、
基地の要員は覚悟を決めている気配がしてた。

そして…

「当基地に向け」

「もういい…きたのだろ」

「はい…ありがとうございました」

「願わくば地球に向くまえに……」

司令官は最後のあのデカブツを潰してくれ…が言えなかった。

援軍の艦隊もろとも、プトレマイオス基地をγ線レーザーが焼き払う。

いや焼きは甘いだろう。瞬時に蒸発させている。

救助しなかった人物は、体内の水分を瞬時に気化させて、

破裂と同時にその肉片が蒸発してく。

カオルは救助しおわったあと、離脱した。

プトレマイオス基地だった箇所にはクレーターが多分あいてるだろう…

粉塵が噴火のように舞い上がり様子がみえなくなっていた。

虚数空間からルーロス改をだし、乗り込こみ…

「マーカーの位置に」

「除洗しとくでち」

（マユラ救助したよ）　（ドミニオンで合流な）

戦闘空域のなか、高速移動しドミニオンに接触する。

「ついたでち」

「じゃ虚数空間に引き込むから」

「了解でち」

外にでて引き込んだあとドミニオンに同化する。

ブリッジへ到達すると…

アズラエルがナタル艦長に向け銃口を向けていた。

「ブルー１１７、マーク５２アルファにアークエンジェル。接近してきます」

「アークエンジェル接近中！距離９０００」

「さあ！解ったらあんたもちゃんと自分の仕事しろよ。

あの裏切り者の艦を今度こそ沈めるんだ！」

『ドミニオン！どうかしたか？

ピースメーカー隊損失率が上がってるぞ！』

『ドミニオン！！フリーダムだ！フリーダムを落としてくれ！！』

「ドゥーリットルを討たせるな！前へ出ろ！何をやってる！」

「艦長…」

「くっ…」

「撃て！撃たなければ討たれるぞ！」
覚悟を決め責任に座るナタル艦長。即座に命令をだす。
「推力最大、回頭２０、アンチビーム爆雷発射！
ゴットフリート照準！」

「照準よし！」

「てぇ！！」

アークエンジェルの放ったゴットフリートのビームが艦体にあたり、
衝撃がはしる。

「ダメージコントロール！！」

「３３番から４３番まで反応途絶、隔壁シャッター閉鎖」

「戦闘行動には問題ありません。いけます！」

「救護班、右舷３３番通路に向かって下さい」

「ヘルダートン、てぇ」

アークエンジェルとドミニオン…
二つの天使が誰にも邪魔されずに、ガチンコの打ち合いに陥る。
互いに命中弾があたり疲弊していく…

また直撃弾がきて艦に衝撃がはしり…
「へっへっへ…」
アズラエルが変な反応をしはじめる…

（ジュリ救出完了）
（アサギも）

（じゃ、重体いくからルーロス内部でカプセルだして待機しててくれ）

（了解）

互いに命中弾をくらいながらも武はアークエンジェルに上がり…

「ローエングリン2番てぇ！」
発射直前の露出している砲身部分にヘルダートンが直撃し、
「ローエングリン2番被弾！！発射不能です！」

すると…
「艦長……ドゥートリル、豪沈…ピースメーカー隊全滅です…」
ジェネシスに対する切り札を失い…
「あっぁぁ…」

ブリッジ内に悲壮感がながれる。
ドミニオンの護衛してた地球軍艦艇は、次々と豪沈残るは…このドミニオン一隻…

しかも満身創痍…とてもではないが、
アークエンジェルに勝てる見込みがなかった。

トドメをさせるぞとばかり正対して静寂になる

そこに中破したストライクが接近してきて、
収容作業かかりっきりで無防備に陥る。

「今だ！撃て！」

アズラエルがそれをチャンスとばかりに声を上げる。

「　早くあいつを沈めろ！ローエングリン照準！」

火器管制オペレーターがナタル艦長をちらっと見て、
それから照準起動作業をすすめ始める。

「駄目！もう止めて！アークエンジェル逃げて！」
フレイがアークエンジェルに対して通信をおくり、
「お前！」
アズラエルが取り上げ、
「こら！なにを！！」
フレイをシートから叩きだす。
無重力のなか壁にうちつけられるフレイ。
フレイに銃口を向けるが、それにナタル艦長が止めに飛び掛かる。
銃弾が発射されブリッジ内を跳弾する。

「何をやっている！」

「貴様こそ何のつもりだ！」

ナタル艦長の首を締め上げるアズラエル。
「総員！退艦しろ！」

「バジルール！！」

艦長命令に従い、脱出挺に向かうブリッジクルー。

「貴様等！」

足をかけ身体を投げ、
「急げ！アークエンジェルへ行け！」
「ぇ…！」

頷き…

「くっそー！お前ぇ！！」

「　指揮官だと！？命令する立場だというのなら…う…」

ナタル艦長、脇腹を銃で撃たれ…流血し苦しみだす。

「僕にこんなことをして！どうなるか解ってるんだろうな！！」

この船はもう駄目だとばかり、脱出挺に向かおうとアズラエルはドアに向かうが、

ナタル艦長が気力絞り、艦長シートの非常用ボタンを押す…

シャッターがせりあがりドアにロックがかかる。

「あなたはここで死すべき人だ。私と共に！」

「なんだと…！」

身体に銃弾をうけるナタル艦長…

「巫山戯るんじゃないよ、ドアを開けろ！！」

動けないナタル艦長に向かい更に撃つぞとばかり、

銃口を向けるが…脅しは効かず…足に撃ち込む。

「うわぁぁ！！うぅぅ…」

「くっそー！こんなところで！！」

火器管制コンソロールにつき、

「　アズラエル！何を！」
ローエングリンを起動し…

「僕は勝つんだ」
照準ターゲット固定、エネルギーチャージ完了。
「そうさ、いつだって…」
「貴様ぁ！！」
発射されるローエングリン。

ストライク回収作業の為停船していたアークエンジェル、
脱出挺でドミニオンは無力化されたと思い、
無防備だった…
ローエングリンの直撃を避ける事は不可能だった…

が、ストライクがシールドでローエングリンの直撃を抑え…
爆散するストライクが見える…

「ぁ…」
勝ったと思って喜びの表情から一転…

「…あなたの負けです」
直ぐにもう一発のエネルギーは足らない…

「お前ぇぇ！！！」

既に動きがとれないナタル艦長を投げつけ、再び銃をだし、
銃弾がナタルの身体を貫く…
「撃てぇ！！マリュー・ラミアス！！！！」
被弾警報が鳴り響く、正面から光の奔流が…

「う〝わぁぁぁぁ！！！！」

おそう瞬間ナタルを引き込み離脱する。

艦橋を吹き飛ばし…それが引き金となり爆沈するドミニオン。

（と…次は脱出挺か…）

アークエンジェルの方へと向かうが…

（あれ？？何処いった？）

遠くで火線が上がってるのは見えるが見過ごしたようだった。

ルーロスを急いでだし、レーダーだよりで向かう。

接触し、同化すると…

「キラ！」

接近するキラのフリーダムが見える。

そこにクルーゼのビームが脱出挺をおそう…がキラがシールドで防ぐ…

「キラぁ」

しかし、無情にもドラグーンのビームが貫く…

フレイ以外を十四名程救出…離脱。

（ふぅ……あとは…）
ヤキン要員を救出すべく向かう。

（クルーゼ機に取り付いた）

「ジェネシス照準、目標、地球大西洋連邦首都、ワシントン！」

「何をしている！急げ！これで全てが終わるのだぞ！」

「議長！この戦闘、既に我等の勝利です。
撃てば、地球上の生物の半数が死滅します。もうこれ以上の犠牲は…」
パァン！
進言してた側近を銃で煩いとばかり撃つパトリック・ザラ。

「議長…」

「はぁ…奴等が敵はまだそこにいるのに、何故それを討つなと言う？
討たねばならんのだ！討たれる前に！敵は滅ぼさねばならん。何故それが解らん！！」

待てないとばかり、ジェネシスコントロールをオペレーターより奪い、入力していく。
「あ！議長！射線上にはまだ我が軍の部隊が！」

「勝つために戦っているのだ！皆！覚悟はあろう！」

撃たれたレイ・ユウキが意識を取り戻し、最後の力を絞って…
「議長！」

「この…」
タン！
「ぁぁ…」
丁度そこにアスラン達が進入してきたが…反撃を受ける事もなく…
オペレーター達が一人、二人と席を立ち、やがて流れとなる。
「撃て……ジェネシス……我等の…世界…奪っ…報い」
最後のパトリックの言葉は呪いに満ちていた…
コンピュータ合成音で総員退去命令が伝えられる。
（さて、ここでも十数名取得できたし…）
手短なコロニーに進入し、眺めながらまつ…
ヤキンの自爆とともにジェネシスの崩壊が始まった。
本来は発射し、地球を滅ぼすはずだったが、内部で核爆発が起こり、
2次ミラーが崩壊し、そこに自身が発射したレーザーがあたり、
崩壊していくのだ。
分裂体がクルーゼ回収しおわり、痛みを伴いながら合流し、

世界を渡る。

……

カオル報告

ガンバレルダガー見なかったなぁ…

第１４２話　ＳＥＥＤ編　終末の光潰える時　投稿日２０１１０７０２（後書き

ナギ少尉「ＳＥＥＤ編はこれで終了かぁ…」

作者「あまい、あまいよナギ少尉、まだ歌姫を救ってない！！」

ナギ少尉「歌姫？……」

作者「まぁ…あと一日行くらしいねカオルは…」

ナギ少尉「指摘うけたけとＭｕｖ－Ｌｕｖの世界は？」

作者「ん～次のハイブ攻略準備中、武達の日常以外はないぞ…
まだ実戦も早いし侵攻がないかぎりあんまり動きはないな…」

ナギ少尉「そういえば大体この時期って、
実験で武の平和な世界にいってる期間なのよね…」

作者「そう、今回はそれがないから、鬼教官ぶりを発揮してるな。
彼女らは今回はでないから武もみっちり鍛えられると、安心もしてるようだし」

ナギ少尉「それ書かないの～？」

作者「話数が増える……ただでさえ話が遅いと指摘もきてる…
この調子だと今年に終わるかどうか…だから構成見直し中～」

ナギ少尉「太陽系奪還までは？」

作者「続くかなぁ…完結まではもっていく！！
けど、地球以外が早くなるかもな…火星だけが問題だけどね…」

ナギ少尉「さて…次回は…Dが付く編に突入なのね…お楽しみにぃ」

第１４３話　ＳＥＥＤ　Ｄ編　戦いを呼ぶもの　投稿日２０１１０７０４

六日目
Ｃ．Ｅ．００７３　１０月２日

少し時間あったので新たな時間枠に…

「？前と若干違うでちね～」
と不思議がっていた。

「どんなふうに違うんだ？」

「いつの間にか巨大建設物、コロニーが増えてるでち、あとはなんか色々なのが…」

「まぁ…２年後のおんなじ世界だからなぁ…」

「！！異常でち、理解できないでち！！」

「俺は、そういったもんだよ」

「う～～わかりましたでち……ごちゅじんたま。
ところで目標はなんでちか？」

「アーモリーワンというコロニー内部にあるミネルバなんだよ。オールインワンの新造艦なんだ」

「……これでちかね？たぶんさわがちいでち」

『軍楽隊最終リハーサルは、一四〇〇より第三ヘリポートにて行う』

船内に音声がながれる。

「ああ…軍楽隊か…新造戦艦は確認できるか？形状が違う」

「ん～と…確認できるでち」

「製造工場とかも？」

「確認できるでち」

「ほぼ間違いないな…じゃ、そのコロニーで…」

「了解でち…コロニー解析完了、マップ投影するでち」

空中投影されるコロニー。

『ガトー大尉以下第二整備班は第六ハンガーへ集合せよ』

マップ移動してくと、ミネルバが確認できた。

「うん。間違いなし…」

「着いたでち」

「じゃ、引き込むから」

「何処に差し込んでもいいでち」

船外にでてルーロスを引き込み、コロニーアーモリーワンに接触、内部に浸透してく…

コロニーのＭＳ格納庫がある部分に広がってくと…

カオス、ガイヤ、アビス、ザクウォーリアー、ザクファントム、カズウート、バビ、ゲイツＲ、等を取得していく。

またウィザードシステムの数々…

ホスピタル、ライブ等。

（基本システムは成る程ね…こりゃ面白いや）

等取得してると…

（お、カガリ、アスランカップルか…）

身体の浸食範囲に、引っ掛かるものが反応した。

会談にのぞみ、移動中のカガリ達だ。

カガリ達はデュランダルがまつ執務室へと案内され、入室してく。

「やぁ、これは姫、遠路お越し頂き申し訳ありません」

「やぁ。議長にもご多忙の所お時間を頂き、有り難く思う」

握手をしながら前挨拶をし…

座席に促し、会談が始まってく。

「御国の方は如何ですか？

姫が代表となられてからは実に多くの問題も解決されて、

私も盟友として大変嬉しく、また羨ましく思っておりますが」

「まだまだ至らぬことばかりだ」

「で、この情勢下、代表はお忍びでそれも火急な御用件とは？

一体どうしたことでしょうか？

我が方の大使の伝えるところでは、だいぶ複雑な案件の御相談、ということすが…」

「…私にはそう複雑とも思えぬのだがな。

だが、未だにこの案件に対する貴国の明確な御返答が得られない…

ということは、

やはり複雑な問題なのか？

我が国は再三再四、彼のオーブ戦の折に流出した我が国の技術と人

的資源の、
そちらでの軍事利用を即座に止めて頂きたいと申し入れている。
どれ程貴国の大使へとお伝えしたしたか…
その度に本国へ問い合わせすると言われはぐらかして、その場は終了。

大使は職務に従い、実際に貴国に問い合わせしてるだろう…
なのに何故、未だに何らかの御回答さえ頂けない？
どれくらい私はまてばよろしいのか？！」

「姫、我がく…」

「議長申し訳ございません…お時間が…」

「ああ…そうだったな…姫、すまないが歩きながらでも構わないだろうか？
このあとの予定がずらせなくて」

「私は話を続けてくれるなら構わない」

「感謝いたします、姫。ではいきましょうか」

会談は歩きながら進んでいく…
執務室からでて、格納庫ブロックへと進む。

「姫は先の戦争でも自らモビルスーツに乗って戦われた勇敢な御方だ。
また最後まで圧力に屈せず、

自国の理念を貫かれたオーブの獅子、ウズミ様の後継者でもいらっしゃる。
ならば今のこの世界情勢の中、我々はどうあるべきか…」

アスランがハンガー内部で整備されてるザクウォーリァーに反応する。

「よくお解りのことと思いますが？」

「我等は自国の理念を守り抜く。それだけだ」

「他国を侵略せず、他国の侵略を許さず、他国の争いに介入しない？」

「そうだ」

「それは我々も無論同じです。そうであれたら一番良い。
だが、力無くばそれは叶わない。それは姫とて、いや姫の方がよくお解りでしょう？
だからこそオーブも軍備は整えていらっしゃるのでしょう？」

「…その姫というのは止めて頂けないか？」

「これは失礼しました、アスハ代表。
しかしならば何故、何を怖がってらっしゃるのです？あなたは…
大西洋連邦の圧力ですか？オーブが我々に条約違反の軍事供与をしていると？
だがそんな事実は無論ない。
彼のオーブ防衛戦の折、難民となったオーブの同胞達を、
我等が温かく迎え入れたことはありましたが。

その彼らが、此処で暮らしていくためにその持てる技術を活かそうとするのは、
仕方のないことではありませんか？」

「だが！強すぎる力はまた争いを呼ぶ！」

「いいえ、姫。争いが無くならぬから力が必要なのです。
争いをおさめる為の力、不必要だとお思いに？」

「だが強すぎる力ではないか？」

「争う力を抑えるのに強すぎはありません。新たな力を作らねば衰えていく…」

非常警報が鳴り響く。
付近にいた基地ＭＰが確認に向かいはじめる。
「なんだ？」

爆発が起こり、爆風が議長達にいる方向へと襲い掛かる。

「議長！」「カガリ！」
二人がかばわれて…
「周囲の安全確認しろ！！」

「お身体大丈夫ですか？」

「カガリ、大丈夫だな…」

「ああ…」

爆風がひき…

「議長お手を…」

「アスハ代表、申し訳ない…会談は後程で…」

「ああ…わかった…何事が…」

「六番ハンガーだ！」

「新型機が奪われたぞ！」

「大至急向かえ！」

「なんだと！？」

「新型？」

目の前の視界にアビスが入る。

「あれは！」

「ガンダム！」

アビスがハンガーの破壊活動を続けていく…

「姫をシェルターへ。エヴァンスは！？」

「こちらへ」

警備兵がカガリへ声かけ、

「カガリ！」

走って誘導にしたがってシェルターに向かってく。

「なんとしても抑えるんだ！ミネルバにも応援を頼め！」

その頃、カオルの意識はミネルバにあった。

『インパルス、発進スタンバイ。パイロットはコアスプレンダーへ。モジュールはソードを選択。シルエットハンガー2号を解放します』

インパルスの緊急発進の準備が進んでいた。

『シルエットフライヤー射出スタンバイ。

プラットホームのセットを完了。中央カタパルトオンライン。

気密シャッターを閉鎖します。発進区画、非常要員は待機して下さい。

中央カタパルト発進位置にリフトオフします。コアスプレイダー全システムオンライン。

発進シークエンスを開始します。

ハッチ開放。

射出システムのエンゲージを確認。カタパルト推力正常。進路クリアー。

コアスプレイダー、発進、どうぞ！』

中央カタパルトから轟音をたて、コアスプレンダーが発進していく…

『カタパルトエンゲージ。

シルエットフライヤー、射出、どうぞ！

続いてチェストフライヤー射出、どうぞ！

レッグフライヤー射出、どうぞ！』

カオルは、ミネルバから離脱し、コロニー外にでると、
ガディ・ルーを探して…
（あ、こいつは？）
黒塗装のＭＳ、ダガーＬが接近してくるのが確認できた。

（確か港湾内部での戦艦攻撃用か…）
もちろん軽く取り付いて、再び探しに…

（ミラージュコロイド…か…見つからないなぁ）

ナスカ級は確認できたが…

突如として目前のナスカ級が爆沈する。

ガディ・ルーが姿をあらわし、もう一隻のナスカ級に向かって、
攻撃を仕掛け始めてきた。

（完璧にわからんかったわ）
カオルは、急いでとりつきにかかる。

カタパルトから、ウィンダムが出撃してく…
（あったぁ♪）

予備機のウィンダムがあったのでついでに取得。
エグザスも見つけ取得した。

ガディ・ルー取得に時間がかかる。
艦橋に意識をむけると、

（ムウ…じゃなくネオなんだよな）
「彼らは？」
「まだです」

「失敗ですかねぇ？港をつぶしたとはいえ、あれは軍事工廠です。
長引けばこっちが持ちませんよ」

「わかってるよ。だが失敗するような連中なら、
俺だってこんな作戦最初っからやらせはせんしな…
でて時間を稼ぐ。船を頼むぞ」

「格納庫、エグザスでるぞ。いいか！」
ネオが格納庫に向かいだす。

（さて、とりあえずこの後は長くなるな…とるもんはとったし、
救出する人はしたし…）

かなりの死者がこの作戦でてた。

いきなりフル武装の味方機にまさか襲われるとは思ってなかったろう…

しかも明日が式典で控えていたのだ……

カオルはガディ・ルーの取得を終え一人の身体になると、世界扉を唱え世界をわたる。

……

カオル報告

カオス
ガイヤ
アビス
ザクウォーリアー
ザクファントム
カズウート
バビ
ゲイツR
ウィザードシステム各種
ミネルバ
インパルス
各アタッチメント

第１４３話　ＳＥＥＤ　Ｄ編　戦いを呼ぶもの　投稿日２０１１０７０４（後書き）

作者「ふう…あらたな時代か…」

ナギ少尉「なに黄昏てんの？」

作者「いやさ……おれ携帯で投稿してるの、わかってるだろ？」

ナギ少尉「そうねぇ。携帯投稿ってでてるわね」

作者「まぁＰＣで投稿してる人もいるし、人それぞれなんだよな」

ナギ少尉「確かにね」

作者「で、これなんだけどさ」

ナギ少尉「あ、スマートフォン買ったの？」

作者「ああ……けどさ……入力しずらい。何回後書きもなおしてるかわかりゃしない」

ナギ少尉「変えて失敗したのね…」

作者「完結まで、まてばよかったかなぁと思いっきり反省ぎみ」

ナギ少尉「後書きが愚痴になってるわね」

作者「ペース守るには差し替えてメール投稿しかないなぁ…とね」

ナギ少尉「ま、次回までなれるように頑張ってね」

作者「あいよ」

ナギ少尉「次回、サブタイトルは未定ながら帰還編でおたのしみにぃ」

第１４４話　ＳＥＥＤの世界より3度目の帰還　投稿日２０１１０７０６

２００１年１１月２１日

～横浜白凌基地Ｂ５５ハンガー～

世界扉が開き、カオルがでてきて、

「ただいま」

とコバッタ達に声をかけてきた。

［マスターお帰りなさい～］

「なんかあった？」

ハンガーテスクの椅子に座りながら居なかった間の事を聞きはじめる。

［侵攻も無しに順調、内部は…あ、この記録みたほうが早いね］

記録映像が投影されはじめた。

［リュウとアムロの対面～］

アムロがリュウをみて、一歩一歩近寄り、身体を触り…

泣き崩れた。

初めての心の許した人物の死者…それが生き返ってきたのだ。
年月がたっても、リュウの事を忘れなかったのだろう。

リュウのほうは、最初１０年の月日の差が埋められず、困惑気味にしてたが…

すぐに埋めたのだろう。
アムロを抱きしめてた。

リュウさんリュウさん～といつまでも泣き抱き着いている。

（マチルダさん、ウッディさん回収してきたら、どうなるか？）

暫く泣き崩れたのち、リュウに介抱され酒場に向かってった…

「成る程ね～…でその後は？」

［リュウさんは適性みて、配属する事になるね～。
まだ調子が優れないみたいだから回復後ね］

「そうか…わかった…あとは？」

［とくには…ないかな？］

「ところで生産の方はどうなってる？」

［マスターの調整待ちで、８隻新造艦、ビッグトレー砲艦型が明日１隻、
明後日１隻仕上がる予定だよ］

「なんとか前回分には出来上がるか…」

［６０ｃｍ砲あるとないとじゃ違う？］

「そりゃそうだよ…火力が違うよ火力が…」

第二次大戦当時でも、３ヶ月間アメリカ軍の艦砲射撃により沖縄の地形は変わり、
硫黄島でもたった４０ｃｍ砲４０００発程度でも地形が変わる。
たった４０００発だけであってもだ。

ましてや異世界軍では鋼鉄の咆哮から持ってきた、
無限装填装置という、チートの技術をもちいて、
弾薬は無限に供給…
１０隻あれば６０ｃｍ砲から放たれた弾数は１０万発も楽に越える。
爆薬も第二次大戦当時とは比較にもならない。

広い戦場の中、どんだけ撃ち落とされようが関係なく、
狭いピンポイント攻撃のビーム兵器用いるよりも、

爆風等による破壊力がある実弾兵器の効率がよく、
主力兵器にのし上がっていた。
例え、ビーム兵器が解禁になっても変わらないだろう…

大出力メガ粒子砲等もよいが、支える船体等も必要、
ある程度ばらまく＝散布界（通常は狭い方が良い）が、
あったほうがよいからだ。

「まぁ、基本的な作戦変わらずにできるようだしな…、
他には？」

［あと、いよいよちゅどーんが楽しみな、コロニーレーザー４基が
出来上がるよ～♪♪］

Ｌ４にて建設中だったコロニーレーザー…

「月侵攻の目処がたったな」

それを用いて、ハイブを潰すつもりだった。

［いつにする？いつにする？］

「いまのコロニー現在地から、
月上空の予定発射ポイントまでの移動時間、
どのくらいかかる？」

［えっとねぇ…座標固定、軸固定で…来月の５日だね］

「じゃ、それで攻略できるように進めておくか…あとは？」

［いまのところないよ～］

「ん、じゃあ明日処理してと…明後日からか…」

［いよいよ内陸部侵攻だね～］

「海の上と違うからな…ある意味じゃ、お休み～」

２００１年１１月２２日

まずは朝…定番化した救出した人達の加入確認等を行う。

（にしても自重しなかったな…）

今回は、

ボアズ基地要員、ヤキンドゥーエ要員、アーモリーワンの基地要員

…人数は百人以上…

（後で数えなきゃ…正直何人引き込んだ？）

地球連合からはプトレマイオス基地、ドミニオンクルー、
こちらは百人以下だが
（何人だろう？数えなきゃ…）

そしてネームがでてる、クルーゼ、オーブ三姉妹、ナタル艦長達だった。

とりあえず、今まで敵同士、
戦闘になると死者がでる恐れあったのでＭＰのＴ－８５０が１個中隊つめていた。

（条約まもってない同士の戦争だしなぁ…）

戦艦ドックにシェルターをだす。

シェルターにスピーカー端子を接続し、出てくるように伝える。

外に出はじめる人がでてきた。

連合、ザフトとも心配した初っ端乱闘等は起こらずとも、
それぞれの所属に固まり始めた。

１番人数が少ない、肩身の狭そうにしている、オーブ三人娘達に声をかけた。

「どうも」

「あ、はじめまして」
「ねぇ…映像にでてた人だよね？」
「みたいね」

「と、とりあえず加入して貰いたいんですがよろしいです？」

三人娘加入してくれるとの事…

開発室及びテストパイロットとして、所属してくれる事となる。

次にプトレマイオス基地要員に声をかけにいく…

プトレマイオス基地要員、総員５２名加入する事となる。

（ＭＳパイロットはいなかったなぁ…）
後方支援要員が主に…な形だった。

次にヤキンドゥーエ要員…ＭＳパイロット含め、
総員４３名加入が決まる。

（白兵戦要員が多かったなぁ…）

１番多いボアズ基地要員に声をかけにいった。

（そういえばレナは…いた）

違う服をきて見つけやすかった。

ボアズ基地要員、ＭＳ別動隊含め、１７２名の加入が加わる。

（ＭＳパイロット多いな）

「あ、あの」

「レナさん?話あるなら後で…時間とれたら呼びにいかせるよ」

「は、はい」

次にドミニオンクルーに…

そして、

「ナタル・バジルール以下、総員２１名。
異世界軍へと加入致します!!」

「歓迎致します…
同系艦は建造予定はありませんが、
なんだかの艦隊を率いて貰うつもりですので、
よろしくお願いします」

「はっ!!」

宿舎にコバッタが案内してく…

（さて、クルーゼだよな…）

最後のシェルターをだす…

「ラウ・ル・クルーゼさん準備できましたら出てきてもらえます？」

「ふっ…寿命が短い私を助けてなんになる？」

「その事を含めてちょっと…まぁどうにかできるんで…」

「聞こうではないか…」

「えっとまずは…」
擬体いり医療カプセルをだす。

「ほう…わたしがはいってたのに近いが、これは？」

「擬体入りカプセルですね。
重体に陥り、身体に甚大なる欠損を陥った時に、
この擬体に遺伝子情報をいれ、そのもの本人となり、魂を移植します」

「魂を移植する？遺伝子情報から作るならクローンではないか？」

「クルーゼさん、クローンとはなんだと考えます？」

「出来損ないだろ…このわたしみたいな」

「クローンは新たな命をつくる事、にてるかもしれませんが、
一つの命です。それぞれがにてるかもしれませんが、
別の考えをもち、別の行動結果をもちます。
だからあたなが、コピーにすぎない…と知った時には、
衝撃を受けたんですよね？」

「あ、ああ…」

「その衝撃を受けた…まさに新たな命の考えです。で世界を憎み、
コピー元をころした…」

「そうだな……そこまでしってるなら、
何か解決さくはあるのかね？」

「テロメア遺伝子の欠陥で老化がすすんだ…で間違いないですよね？」

「ああ」

「なら、この擬体に移植で解決つきます…だよな？」
老化した部分はもう既に治せない為、新たな身体を用意し、
欠陥部分を治し、歳相応の身体となり、移植手順になる。

［そうです。ぼくらにまかせて下さい］

「……ふむ、いいだろう。どうせ死ぬ運命だったんだ…
永遠の苦痛から解放されるなら、任せようではないか…」

「その後は？」

「解放してくれるなら好きに使ってくれ。豊かさを求めた歪んだ世界とは違うんだろ？」

「ありがとうございます…じゃ、移植任せたよ」

［了解しました。マスター、クルーゼさんこっちに…］
医務室へとすすんでいく。

その後、ハンガーデスクで、鯖にデーターを入れ込んでた。
終戦前の機体の、ゲイツ、火器運用型ゲイツ、シグーディープアー

ムズ、

と条約批准後の総量規制された、ニューミレミアムシリーズの
カオス、ガイヤ、アビス、インパルス、
ザクウォーリアー、ザクファントム、
及び戦前の後継である、
カズウート、ババ、ゲイツR。

またプロヴィデンス…

戦艦ではカディ・ルー、エターナル、ミネルバ。

施設ではボアズ、ヤキンドゥーエ、プトレマイオス、そしてジェネシス…

等が取得できてた。
（特別なのは、やっぱり技術的な面の躍進か？）

試作機をとりあえず作ってみようと、
（シンプルにザクウォーリアーがいいかな…）
部材を集め取り付こうとすると…

「カオル」

「ん？武どうした？」

「重慶ハイブ攻略作戦てまじか？」

「マジだよ」
とかけてきたので中断する…
「前回から一ヶ月もたってないんだぞ」

「一ヶ月近くたったから十分準備まにあっただよ」

「…そんなに余力あるんか?」

「いや…余力はないな」

「なら」

「生産力があるから準備に間に合うって事さ」

「生産力?」

「武にはいってなかったっけ?プラントの事」

「いや…」

「俺がわざわざつきっきりで生産しなくとも、やってけるのはプラントのおかげだからなぁ。
あとコバッタ達もな…」

「そうなのか…」

「あと攻略作戦自体に人的被害は未だないぞ。
それで一ヶ月で続けて無理なく攻略作戦できるんだよ」

「へっ？死者０？、機体も？」

「あ～機体は……回収修理して再利用はしているな。
破棄はない…よな？」

「もったいない神様がでちゃうからね～」

「だそうだ」

「ははは……本当、前回の時にカオルがいたら、どんだけ良かったか…」

「前回の世界ねぇ…俺的にはそれがイマイチ実感が…」

「いやいやそれいうなら、カオルの方だろ」

「かぁ」
と苦笑するカオル。

「ま、規格外の話は置いといて…武、重慶攻略に参加頼むな」

「ああ、わかった。懸念事項もなくなったしな」

「じゃ、明日から重慶攻略頑張れるな？」

「ああ、悪かったな手間をとらせて…」

よるは遅くなった…

（明日から作戦までこっちにいるし…
技術の続きは明日以降だな…）

……
カオル報告

ん？

あれ？加入以外あんま仕事してないぞ？

第１４４話　ＳＥＥＤの世界より３度目の帰還　投稿日２０１１０７０６（後書き）

作者「とりあえずこうしてあーして…」

ナギ少尉「作者なにしてん」

作者「ギャーＳＩＭカードがおちたぁぁ……そこ踏むな！！」

ナギ少尉「ひぅ！！」

作者「ふー…このカードがなくなったら大変な事になってんぞ」

ナギ少尉「えっと……そうなのね？」

作者「そうだよ…物語が未完成のまま終わるところだったさ…」

ナギ少尉「あははは…ゴメンねぇ」

作者「ＳＩＭカード入れ替え中には声かけない事！」

ナギ少尉「はーい…けどスマホやりずらい？」

作者「そうだなぁ…画面に文字入力がとくにな…ガラケーのほうが、ヘタルかもしれんが入力はしやすい」

ナギ少尉「成る程ね～」

作者「だからネットはスマホ、携帯小説作成専門にメール作成で、ガラケーから送信といれかえてるわけさ…」

ナギ少尉「ＰＣは？」

作者「入力早いが、つきっきりのまま、ノーパソはバッテリーもたない、落としたら悲惨だし…いや、落として悲惨は携帯も一緒か…」

ナギ少尉「だね…あ、と…内容の方は…明日から重慶攻略にシフト？」

作者「の流れだな…内陸部にあるし…」

ナギ少尉「では次回お楽しみにぃ～」

作者「う…まだ真っさら執筆急ぐぞ…」

第１４５話　重慶攻略戦　投稿日２０１１０７０８

内陸部、海岸から最短１５００ｋｍの距離にある重慶ハイブ…
この重慶ハイブを落とし、日本帝国を防衛する防衛線を構築するとともに、
敦煌、カシュガルへの道のりへと続く…

２００１年１１月２３日

鐵原基地臨時待機所にはトレインギャロップ４０編成及び、ビッグトレー砲撃型１０隻、
ビッグトレーミサイル型対空ミサイル換装、
魔ドム１２２機、ホバートラック６両、ホバートラック重火力型１００両が、
出陣の時を待っていた。

物語上後だしジャンケンとおもわれるかもしれないが、
ホバートラック重火力型は、鉄原ハイブの西に広がる黄海上の防衛担当し、
ホバー走行で、遠浅の海上から中、小型種に対し過剰火力を食らわす為に改造された、
現地武装改造型になる。

ＪＭ６１ＲＦＳを索敵装置の変わりにつみ毎分８００発の２０ｍｍ弾を食らわし、
継続射出時間５２分の性能となる。

あくまでも遠浅な黄海を担当するだけに生まれた、
苦肉の機種といえよう。

防衛部隊から、今回は、まわしたかたちだ。
本来なら６１式重機関型で対応すべきだが、ホバー走行はできなかった為だった。

「壮観壮観」

横浜基地の司令室でカオルは映像でみていた。

「じゃ、行くか…進軍せよ！！」

各艦が一斉に動きだし、魔ドム、ホバートラック等が艦隊を護衛すべく先行しすすみ始める。

編成された一群は、黄海に突入する。

穏やかな海上を疾走する一群、

「作戦群前方に中、小型種ＢＥＴＡ約１０００、
光線級確認できず、敵ＢＥＴＡ群、ボギー１と認定」

「プチッと蹂躙せよ」

ホバートラック重火力型がスピードをまし海上疾走する。

やがて沿岸部にみえるボギー1、
ホバートラック重火力型のスピードがおち、
備えつけられたＪＭ６１ＲＦＳが、砲身の向きを変え、一斉に火を放つ。

１００門のバルカン砲から出た弾は、沿岸につめていたボギー1に吸い込まれ、
肉を削りとり、破裂させ肉片と化す。

体液が散らばり、どんどん数を減らしてくボギー1、
突撃種が残るも、正面から銃撃を受け動けず、
手のあいた車両が上陸、背後に回り弱点を貫かれ、沈黙をする。

やがて、
「殲滅を確認、周辺部他反応なし、上陸可能です」

カオルは頷きかえし、艦隊は砂浜より続々と上陸、
突撃級の死骸を跳ね飛ばし、上陸しおわると、周囲警戒にはいる。

ホバートラック重火力型は周囲を警戒してたが、
やがて交替機がトレインギャロップから出てきた為、
海原を鉄原基地へと帰還していく。

トレインギャロップから出てきたのは陸戦強襲型ガンタンクや、６１式改、６１式重機関型達だった。

彼らは作戦艦隊を護衛すべく魔ドムと合流し、進軍していく…

「と、無事に展開はできたか…
これからしばらく俺の出番はないんだよな…」

［トレインギャロップにつまれた、中型チューリップがハイブ周辺到達まで出番ないしね～］

「で、到達予想時刻は？」

［三日かかるね～］

「そんなもんか」

［高速移動で一点突破でもいいけど、今回は殲滅なんでしょ？］

「ああ、予測不能の動きがこわいからな…」

［このボギー3、5、12の集団殲滅に時間かかりそうなんだよね…］

映像が縮小し、重慶ハイブのアイコンの他、ボギー2から18までのアイコンがうつる。

進路上に関わる、または近寄りつつあるのが１０個ほど、
あとは急には向かえない距離にある。
各アイコンの高さはその集団の戦力の高さを表してる。
その中でも3、5、１２のアイコンが一際高く表示されていた。

［まずは２５０ｋｍの距離の時点で、ボギー3が接触する予定で、
3万の軍団規模だね…］

「プチッとは行かないか…？」

［光線級が確認できてるから、少し時間がかかるね～
…でボギー４と１１がその間に接触する可能性あるし］

「まぁそうだな…」

［安全進行速度６０ｋｍでいくから、戦闘開始は2時間後だね］

「ふむ…」

［一応殲滅後、１００ｋｍ行軍、そこで警戒夜営の予定］

「ハイブ後方の帝国防衛線警戒基地になる予定箇所だな？」

［うん…で、翌朝進軍開始して、ボギー5と接触予測だね］

「夜営後はあくまでも予測だからな…
ハイブ到達までにボギー全滅が望ましいが…」

［進軍方向先にいっちゃうとね…くるように祈るしかないよね］

「だな…と、じゃああとは頼むぞ」

［了解マスター］

カオルは司令室からハンガーデスクに向かう。

（さて、昨日は中途半端だったからなぁ……取得一覧はいいとして…）

1番見所は2年の月日がたった数々の技術だろう。

ザクウォーリア、
ジンなどに比べ、基本機体性能もあがり、

更に高性能化したバッテリーにより稼動時間も上がっている。
また、ウィザードシステムの面でも面白いものがある。
（あ～戦術機もそういった面では更に向上できるよなぁ…）

アタッチメントの共通化、それによる多様化。
一つの道でもある。

今の戦術機は機体機体ごとに専用装備ホルダーを装着するような形であり、
別機種との共有化はされてない。

（こういった道もあるか…と提言するだけにするか…）

今のところ、異世界軍機では、空中戦に持ち込むわけではないし、
ビーム砲撃戦に持ち込むわけでもない。

（民生用に…がひかれてるが…
ま、後々の機種に関してかな？）

画面を切り替え、ミネルバ、インパルスからの技術は、
デュートリオンビーム送電システム。
からっけつの状態から大出力のビームをうけ、ものの数十秒でチャージ、
戦線復帰できる。

多いに魅力的である。
通常、着脱交換式もしくは固定直結し、充電時間をおく。

試しに作ってみた。

（あ、人死にでるなこれ…）

整備しながらだと、サイクロプス同様にビーム周囲に、高マイクロ波長がでる為危険であった。

なので、デュートリオン作動中は１０ｍ範囲に立入禁止区域が発生する。

（とりあえずこの三点かな？）

と決定したところで…

「あの…」

「あ、レンさん。あ…話あるってたね…ゴメンな」

「いえ、忙しそうならいいです。助けてくれたお礼を改めて言いたかったので…」

「ん…まぁあの世界では死んだ事にはなるんだけどね」

「それでもあんな死に方よりかは、はるかにましですよ。好きでもない人たちにレイプされ、こわされるよりも…」

「そうだな。あ、そうそう、あいつらは焼かれたからね」

「いい気味です。無理矢理なんてサイテーです。
……それをカオルさんが助けてくれたんですよね？」

「まぁな」

「カオルさんってフリ…」

「あ、妻が三人いるぞ」

「は？三人？」

「ああ、この世界はなぁ…」

～司令室～

カオルがレイと話している間にもは進んでいく…

予測時間より若干早めに…

ビッグトレー砲艦型の６１ｃｍ砲が口火を開き、
ボギー３のＢＥＴＡ集団へと砲弾を降り注ぐべく、連続的に砲火を

あげる。
光線級が察知して迎撃の生体レーザーをあげる。
空中で爆発し、周囲の弾を巻き込もうとするが、
誘爆はさほどおきずに、別の光線級の迎撃にあい、爆発をする。
が、たかが火線は６００本あまり、インターバル込みで、毎分３射、
１８００位しか集団からあがらない。

それ以上に合計毎分約１３万発と連続的に撃ち込まれる砲弾…
ＢＥＴＡの集団に着弾し、盛大な命の散華の花火が上がる。

ＢＥＴＡは突撃をしかけにくるが、
空中に爆風で死にながら打ち上げられる、兵士級もいれば、
数を減らしていく…

が、爆風の嵐をくぐり抜けた先には…別の爆風の嵐が待ち受けていた。

１５００位まで数を減らしていたＢＥＴＡは散らばりながら突撃をしかけると、

待ち構えていたのが陸戦強襲型ガンタンク、６１式改の混成集団だった。

一斉に火を放つ火門、
くぐり抜けた先は地獄であり、みるみるうちに数をへらし、
６１式重機関型が火をチロッと放つだけで、
ボギー３の集団は殲滅してしまった。

上空では別の集団に対しの砲撃を食らわす為に弾がとんでいた…

司令室オペレーター達は、忙しく指令を回しながら、状況報告しあっていた。

「ボギー3消滅確認、残存0」

「ボギー4に砲撃中、殲滅度87%、ボギー11射程圏内まもなく」

「第5大隊、ボギー4の殲滅行動へ移行」

「第1大隊トレインギャロップへ入庫、第6大隊が担当引き継ぎ」

「地下透過レーダーも異常なし、周囲近時接触集団なし、ボギー11殲滅後予定行動可能」

今のところすべて予定範囲内で推移してある模様だった…

……

カオル報告

陸路遥なりか……

第１４５話　重慶攻略戦　投稿日２０１１０７０８（後書き）

ナギ少尉「いよいよ重慶ハイブ攻略戦ですね～」

作者「しばらくの間続きます～」

ナギ少尉「ねえ、サクッと空挺降下で攻略できないの？」

作者「防衛線がまだ構築できてないのに、
大進行フラグ巻き起こすつもりか？」

ナギ少尉「え～だってぇ～」

作者「基本、殲滅、大進行フラグを叩き潰しておいて占拠が異世界軍のモットー。
ＢＥＴＡに不可解な動きされるよりかましさ」

ナギ少尉「そんなものかなぁ？」

作者「トップを潰せば終わりの人間同士の戦いではないんだぞ」

ナギ少尉「そうなのか～」

作者「ま、確かにハイブだけを潰すには、反応炉を襲撃すればいいんだけどね」

ナギ少尉「む～～……と次回予告ね、次回重慶ハイブ攻略戦その2、何処まで引っ張るのかお楽しみにぃ」

作者「引っ張るかは余計だ余計…確かにすすみおそいけどさぁ……」

第１４６話　重慶ハイブ攻略戦　その２　投稿日２０１１０７１０（前書き）

ギリギリセーフです。
リアルがシステム入れ替えの為、
忙しいです。

次回作１３日に投稿する予定です。
１２日は、間に合いません。ｏｒｚ

第１４６話　重慶ハイブ攻略戦　その２　投稿日２０１１０７１０

２００１年１１月２４日

朝方、ハンガーデスクにおいて、

「ん～やっぱりミサイル必要だよな…」

昨日の戦闘結果をみながらぼやいていた。

被害はゼロのものの、護衛の混成部隊の活躍がめだったからだ。

確かに数を削るというのは戦艦の主砲の弾の破砕力以上だと、
広範囲大規模ビーム兵器以外にはない。

大口径実弾による爆発力で着弾範囲に爆風を巻き起こして、
周囲を巻き込み、生命を削る事となる。

砲弾はビーム兵器と違い、５ｍ横にずれたからといって着弾爆風で、
安全ではないのだ…

なので実弾兵器とすると、最適なのだ…が、
何分精密命中率の問題がある。

はっきり言おう、４０ｋｍ程離れた距離での戦艦同士の命中率は１％以下位なものである。
どんなに精度をあげたとしてもだ…

まず互いに移動し、
進路を予測し、
予測した進路へ主砲を放つ。
…が弾道は、飛距離、初速を延ばす為の施条痕の影響で、着弾近辺
てはずれ、
まずは４０ｋｍ先の戦艦予測位置に着弾命中率が５％位なのである。
その為数多く主砲弾を放つ…が弾道は一つ一つずれ、
広がり着弾するのだ。
その広がりが散布界というものである。

その為、ある程度は集約するもの、ムラができる為、
その瞬間生き延びる個体が出てくる結果となる。
１０８発の散布具合は、最大有効射程である７０ｋｍにおいて、散
布界は実に２ｋｍに広がる。

ＢＥＴＡは恐れを知らず突撃してくるので、
障害物がないかぎりスピードは落としてこない。

その結果生き延びで到達する個体がでてくるのだ。

なので、どんだけ門数を増やしたとしても、
その精密命中の部分においては誘導される、
または瞬時に時間差なく命中しない限り解決はない…といえる。

誘導兵器であるミサイルがないかぎり、
艦砲射撃だけで殲滅はできないといえよう。

結果、より近距離での対応する部隊が最後の締めを担当する事になるのだ…

そっちは門数を増やせば増やすだけで解決はつくのだが…

当初ベトナム沖にてビッグトレーミサイル艦は対応する予定だったが、その艦も回してしまった為、

今日、この横浜基地から佐渡島へまわった2隻以外、自由に動けるビッグトレーミサイル艦、トマホーク換装型はいなかった。

「悩んでも、間に合わないか…来月の攻略時には、ミサイル艦がいないこと無いようにすんべ…」

一応タクティカルトマホークは、射程は３０００ｋｍをほこるが、速度は８８０ｋｍ…

佐渡島からミサイルを発射しても、

着弾まで3時間現在の戦場までにはかかる。

３時間後には別の戦闘をおこなってる為、実質的には２００ｋｍ圏内からの射出でないと間に合わないのだった…

報告を見終わった後作戦の進行状態を確かめるべく、

司令室に向かった。

司令室にはいると…

（2回戦闘終えたあとか？）

ボギーの数が減っていた。

「状況は？」

［ボギー13が戦闘で殲滅、ボギー17がハイブ内に入って吸収消滅、
現在60kmの速度で進行中、次回戦闘ボギー5の予定］

一際高いアイコンの色が変わる。

「規模は？」

［8万規模、大砲級が確認できてるよ］

「大砲級か…進行作戦であうのは初めてだな…」

［進みが遅く、大規模集団になりやすいから、
厄介なんだけどね］

「トマホークがないから先行は向こうか…」

［有効射程外から射撃命令だす？？］

「いや、速度が落ちるからやめとくわ」

［了解、先に向こうの先制攻撃が３０分後の予測ね］

「その後こっちの主砲攻撃が１０分後か…」

［うん。大砲級を潰さないとね］

「ボギー５との開戦中に予測される事は？」

［ボギー６、７、８の接触だね］

「各ボギー群は…」

［ボギー６は戦力６５００程、光線確認済み。
ボギー７は戦力１２５００程、同じく光線級確認済み。

ボギー８は戦力５０００程、光線級は確認できないよ」

「ボギー８が個体数多いか…」

「ちょっと厄介だね」

等と話していると…

「ボギー５に動きあり、大砲級が射撃態勢になります」

「はじまったか」「始まったね」

「そのまま主砲有効射程まで進軍、ビッグトレーミサイル艦、迎撃態勢にはいります」

「ビッグトレーミサイル艦、ＶＬＳハッチ開放、
全スタンダードミサイル、全ＲＩＭ－１６６ＥＳＳＭアクティブ、
ＲＩＭ－１６６ＲＡＭアクティブ。いつでも迎撃可能です」

「迎撃エリア１５ｋｍ設定」

迎撃ミサイルが光線級に撃ち落とされる事になるので、
なるだけ引き付ける必要がある。

「弾級が射出確認!!迎撃緒元入力、１から１２射出準備、
発射まで１０、９、８、７、６、５、４、３、２、１発射!」

それでも光線級に迎撃されてもいいように、
ＥＳＳＭ１２本が１個の弾級に向かい撃ち出される。

やはり、

「５番、８番、１２番レーザー受けてます!…消滅確認、弾級に着弾!
爆破撃沈確認しました!」

１発でも弾級を撃ち落とす事はできるが、用心には用心をかさねる。

「引き続き弾級が打ち出されます!」

大砲級の射出速度は1分間に2回ほど、個体数がボギー5に８０体
ほど確認できてた。

次々打ち出される対空ミサイル、対空ミサイルを迎撃する光線級の
火線、
毎分１６０体の飛来する弾級、光線級のレーザーにより、ＥＳＳＭ

の迎撃網も突破され、
ＲＡＭも次々と射出される。

が、ＣＩＷＳは稼動はせずにとうとう…

「ボギー５Ｂ有効射程圏内に納めました！」

「０３１のみ目標ボギー５Ｂ、０３２から０４０はボギー５Ａ本体！！」

このころになると、大砲級の回りに弾級、光線級がたかり、
それ以外のが前進し始めてボギー５は、二つに分離していた
ボギー５Ａが艦隊に向かってくる個体群、
ボギー５Ｂが大砲級を中心とした個体群に振り分けられていた。

「一斉斉射入ります！！」

艦隊は足を止め、一斉に主砲の口火が開く。

次々と目標ＢＥＴＡ群に砲撃が加わる。

「ボギー５Ａ着弾率９８％個体数減らしていきます、
最短射程まで残り１２００００、

ボギー５Ｂ現在着弾率５２％、着弾率上昇中です」

光線級が狙いをかえ、主砲弾に目標を変えた。
が嵐のように降り注ぐ６１ｃｍ弾、
着実に光線級の命を奪っていく。

他のボギーからの迎撃もくるが、到底全弾迎撃は不可能でありおいついてない。

そして…

「距離１００００主砲最短射程圏内です！
ボギー５、残り個体数約２０００！」

「混成部隊群砲撃開始します！」

護衛の陸戦強襲型ガンタンク、６１式改の主砲が火を放つ

「目標変更、０３１から０３８ボギー７Ａに射撃開始します。
約５分後０３６から０３８はボギー６Ａ、
０３９及び０４０は引き続きボギー８に砲撃続行します」

わかりやすくいえば…そろそろボギー６から８まで接触しますよですね。

６１式、陸戦強襲型ガンタンクの混成部隊は、傷ついたボギー５を難無く受け止め、駆逐していく。

それでも果敢に突撃してくるＢＥＴＡ群…
魔ドムのザクマシンガンが唸り始めた。

そして、
「ボギー５消滅！！第２、６大隊補給に入ります！」

「第１、３大隊ボギー６Ａに砲撃開始します！」

「第５、７、９大隊砲撃準備態勢に入ります！」

「第１１大隊まもなくボギー８を駆逐完了！」

戦闘の推移は足を止めた異世界軍に分があった。
嵐のような主砲弾で接触までにどうしても数を減らすはめに陥るＢＥＴＡ群…

そして…

「駆逐完了か…」

［ところでマスター、今は居なくともよかったのに…］

「……何かあったらさ」

［その時には引きずってくるよ♪］

「だろ？だからいた方がよいと…」

［でもレビル将軍が率いて異世界軍の艦隊を指示してるのに、
マスターがいってなんになる？］

「ん…そうだなぁ……どうにもならないか？
精々五百位を相手にする程度だもんな…」

［マスターのいる箇所は勝つけど、それ以外の箇所が瓦解するし～］

「だから、強化しまくったし、優秀な人材を連れてきたし…
それで崩れる様ならどうにもならないか…」

［かもね～…今日はこれまでかな？］

現地はそろそろ闇が覆ってきた。

接近してきそうなボギーは居ない為、
そのため補給洗浄をかねて、夜営の準備が進められていた……

２００１年１１月２５日

本来ならボギー１２と接触しておきたかったが…

［マスター、ボギー１２は重慶ハイブに進入し、消滅したよ］

「…確か大砲級が居たんだよな？」

［うん。そう］

「１番戦力数が高かったんだよな？」

［うん。そう］

はぁーとため息をつく…

「ハイブ周辺が激戦になりそうだな…」

［けど準備したから大丈夫♪］

この日は２５０Ｋｍの距離でボギー１５、１６と戦闘、
再び前進し始める重慶攻略部隊…

距離は１２５ｋｍに接近した時…

「攻略部隊から報告！！重慶ハイブに異常あり、
こちらを目指してＢＥＴＡが湧き出ています！」

「艦隊停止、戦闘態勢に移行します。ジャール大隊、スタンバイ、
射出態…」
司令室が騒がしくなってくる。
推定３０万が一気に襲い掛かってくるのだ…
「来たか…じゃぁ、いってくる」

［頑張って～マスター］

カオルは格納庫に待機していた多目的輸送挺に乗り込みにいく…

……
カオル報告

行ってきます！！

第１４６話　重慶ハイブ攻略戦　その２　投稿日２０１１０７１０（後書き）

作者「いよいよ重慶ハイブまで到達したか…」

ナギ少尉「ねぇ作者、文だけでＢＥＴＡ戦力把握してるの？」

作者「ああ、勿論だとも！！」

ナギ少尉「言いきったね？では現在残存ＢＥＴＡはボギー何？」

作者「と…えっとボギー３、５、１２がなくなって、１、４、１１が初日、二日目が６から８、と１３、１７がなくなって、三日目が１５、１６…だから２、９、１４、１８地上総数４万弱」

ナギ少尉「作者、その片手にもっている端末はなに？」

と奪うナギ少尉。

作者「ああん…それがないとそれがないと～～～」

ナギ少尉「次の回でわかりやすく説明してね？」

作者「は、はい…」

ナギ少尉「よろしい。じゃあかえすわ」

作者「お前ぇ、ほとんどの人にとって命より大切なものを…」

ナギ少尉「素直にしないからよ！！」

作者「…わかったよぅ」

ナギ少尉「さて、次回は…いよいよ１５００ｋｍの道のりを越えて、ハイブ本体との攻略です。次回、重慶ハイブ攻略編その３、お楽しみにぃ」

第１４７話　重慶ハイブ攻略戦その３　投稿日２０１１０７１４（前書き）

第１４７話　重慶ハイブ攻略戦その３　投稿日２０１１０７１４

ハイブ本体から湧き出てくる前に状況を説明しよう…

《※作注、ここらで入れないと、
残存兵力がわけわかめになります》

現状、重慶ハイブ周辺にはボギー２、９、１４、１８地上総数４万弱が残っている。

それだけならよかったが…

「マンダレーハイブ方面増援とおぼしき、
２万規模の新たなＢＥＴＡ群出現。
ボギー１９と認定します。到達予測時刻２６日午後１８時」

「今のところ他ハイブに動きなし」

……本格的な増援は始まってはないようだ…
合計約６万のＢＥＴＡが、周囲にはのこっていた。

また周辺環境は、核焦土作戦の影響により、
放射能汚染１００ＳＶという高い濃度の汚染地帯が広がっている。

なので異世界軍側としては基本ヤドカリ操縦機、
有人は、対ＮＢＣ防護を標準で備わっている魔改造ＭＳによる進行、
及び防護設備の整っている戦艦群による進行となっていた。

戦術機は改造をほどこした機体のみ参加、
割合はすくなかった。

カオルがチューリップを潜って、カーゴ内部に設置されたチューリップからでる。

『エアロック先、核汚染区域、ＮＢＣ防護確認して下さい』

のアナウンスが流れる。

カーゴの外が核汚染区域の為、エアロックにて除洗を行える設備になっている。

カオルは生身で表にでると魔撃震を出し、同化し戦線に加わっていく…

既に戦闘は始まっていた。

対空ミサイルが打ち上がり、
ビッグトレーの主砲弾がＢＥＴＡの進撃集団に対して撃ち込まれる。

効果的に最前線に撃ち込まれ、ＢＥＴＡの突撃級の死体が生まれ、
ＢＥＴＡの進軍速度が鈍る。

「敵ＢＥＴＡ群先頭距離６万！」

「今だに門から噴き出ています。現在総数８万越えました。内、３万駆逐！」

司令室のスクリーンは、重慶ハイブ周辺の様子が映し出されている。

大砲級はハイブ周辺での６１ｃｍ砲の射程外から、弾級を打ち出していて、

それをビッグトレーミサイル艦がスタンダード、スパロー、ＲＡＭを射出し、撃ち落としている。

が、数が多過ぎの為、ビッグトレー砲艦のＣＩＷＳが稼動している状態になっていた。

艦隊は、停止し陣形をビッグトレー砲撃艦が前にでて、

６１ｃｍ砲を２方向から接近してくる重慶ハイブ群に雨嵐の如く、

撃ち込んでいる間に、

トレインギャロップのカーゴから出撃してきた、

陸戦強襲型ガンタンク、６１式改が迎撃陣形を整える。

「現在門より湧き出て数、推定１５万！！まだ止まりません！」

「ねぇ…大丈夫なのかしら？」

「確か当初プランだと１８万のはずよね？」

「こら作戦中だぞ！！」

「は、はい！」

スクリーンではあふれるばかりに広がってくＢＥＴＡ群、

「先頭集団距離３万、敵ＢＥＴＡ群残存１０万！」

６１ｃｍでどんどん削れてくが、それでも数は膨れあがっていく…

が、まだ先頭に全ての数がいないのが幸いしているかもしれない…

「各大隊、迎撃準備整いました！」

「Ｔ－８５０陸戦隊も展開完了！」

迎撃陣形をととのえ、後は突き抜けてきた敵との相対まちであった。

「敵ＢＥＴＡ先頭距離１５０００、残存１３万です！！」

「まだ門から湧き出ています！累計２０万！」

重慶ハイブ、どの位のＢＥＴＡがハイブ内にいたのだか……

「敵戦闘集団、距離１００００、６１ｃｍ砲最短射程圏内です！
各大隊砲撃開始します！！」

６１ｃｍを抜けてきたＢＥＴＡに対して、
陸戦強襲型ガンタンクの２２０ｍｍキヤノン砲、６１式改の１５５ｍｍ滑空砲が火を放ち、
一斉に５０００の砲弾が襲い掛かってく。

陸戦強襲型ガンタンク１０００機、６１式改２０００両から放たれる砲撃…
１０ｋｍ先だと戦車弾の命中率は落ちてくるが、
それをカバーするが如く接近してくる集団に向け射撃をおこなう。

傷ついたＢＥＴＡが、圧倒的砲弾に堪えられるわけがなく…
数を減らしていく…

砲弾をうちつくした６１式改が下がっていき、待機してた別の６１式がその穴にはいる。

うちつくした６１式改は、艦隊中央後部にいるトレインギャロップのカーゴに、除洗を受けながら進入してく…
その間５分…

除洗が終了し、カーゴ内部に進入すると、
すぐさまコバッタが砲弾補給口をあけ、
１５５ｍｍ砲弾をガイドウェイを通して補給していく…

砲弾補給中の間、各部異常ないかをチェックしてまわり、

バッテリーも積み替えられた。
５分で砲弾を補給しおわり、
再びエアロックスペースを通り出撃していく…

それが、各カーゴ、総数５００両にて行われていた。

また、無くなってきた補給物資は、随時チューリップを搭載したカーゴから補給されてくる。

さて戦闘状況は…

「門からの出現終了した模様、総数２６万！！」

「残存ＢＥＴＡ約１４万！迎撃ライン保たれてます！」

異常がなければ勝てる勢いでＢＥＴＡの数は減らしていく…が…

「マンダレーハイブより、更なる増援と思われる群出現！、数増やしていきます」

「敦煌ハイブから同じく増援と思われる群出現、進行方向重慶ハイブ方面！」

「ウランバートルハイブからも同様です！」

「鉄原基地地下スパイより入電、
重慶ハイブへの増援送れとの事、１５万規模送ったと返信」

「各増援の数集計、到達時間を計算しろ、ボギー２１、２２、２３をあてる！」

やはりそうそう簡単には攻略させて貰えそうにはなかった。
そして…

「艦隊より入電、地下進行を感知、約３０分後、予測範囲に艦隊が含まれています！！」

「レビル将軍より、艦隊を後方２０ｋｍに移動すると入電」

すぐさま前線で指揮をとっている、レビル将軍からの指示が司令部にはいる。

予測範囲円は、現状半径１５ｋｍの膨大な円となっている為の指示であろう。

まずは、トレインギャロップが、護衛の機体とともに一斉に動きだす。

Ｔ－８５０達も外装の取手に取り付き、共に行動をする。

続いてビッグトレーが一斉にうちながら後進しだす。

多少弾道がずれても関係ないほど、ＢＥＴＡの集団は広がっているのでできる事だった…

最後に迎撃ライン上に残っていた陸戦強襲型ガンタンク、６１式改、魔ドム達がタイミングあわせて一斉にラインを後退させてく。

「各機後退完了！異常なし」

「各ハイブの増援到達予想でました。
第１派マンダレーハイブからのボギー２１、日本時間２８日午後２３時。
総数８万規模、大砲級確認できます。
第２波敦煌ハイブからのボギー２２、日本時間２９日午前４時。
総数１８万規模同じく大砲級確認できます。
第３波ウランバートルハイブからのボギー２３、日本時間２９日午前６時。
総数１２万規模同じく大砲級が確認できます」

「攻略中に到達はしないの？」

「はい、大丈夫です」

「あとはカオル殿やレビル将軍の判断次第か……」

「各迎撃ライン後退完了しました。敵大砲級も移動開始しました」

艦隊が下がった為、それにあわせて大砲級も移動開始する…

「約３分後地下進行出現します」

「ピンポイントで狙ってた模様ですね」

最初のトレインギャロップ達の中心点を狙って進行してた模様だった。

「残存６万！、地下進行合わせると８万！です！」

「レビル将軍より入電、地下進行出現、殲滅後進軍せよ！」

現地では、トレインギャロップがいた箇所に湧き出てきたＢＥＴＡに対しても、

砲撃が加わっていた。

度重なる砲撃にクレーターが至る所にでき、
死骸の塊が出来上がりそれがまた吹き飛ばされる。

母艦級が６１ｃｍ砲弾の直撃をくらい、身体が保てずに崩れ落ちてく…

２０ｋｍの距離なら命中率は２０％、１０８発の弾の内、
１０発位ならあの巨体に直撃し、爆発でもって削りとる。

１０分後あたりには
地下進行含めて残存５万になっていた。
直接襲撃する圧力は弱まってきた。

戦場にバラけてきたので、艦隊は前進し始める。

現状大砲級や光線級、重光線級、弾級のいる辺りの２万が１番固まっている。

射程圏内かつ、光線級の直線上に入らない４０ｋｍの距離まで、
残存ＢＥＴＡの襲撃を蹴散らし、
対空ミサイルは雨槍の様に打ち出し、
ひたすら堪えて艦隊は前進する。

４０ｋｍにはいると…
ビッグトレー砲艦型の１０８０門に及ぶ主砲弾が、連続的に打ち出され、

１０分後…約１００万発に及ぶ確認弾含めた砲撃により、
戦場から大砲級、光線級、重光線級は巨大なクレーターと引き換えに消滅していた…

２００１年１１月２６日午前６時２１分

（なんとかなるもんなんだな～）

地上での戦闘を行い、
今までの三次元機動での突撃以外にも、
解決策があったのに武は気がつかされた。

（圧倒的物量には、圧倒的火力と絶やさない補給か…）

武は、地下深くハイブ突入部隊にも参加していて、
まもなく反応炉到達前の主広間攻略までのカウントダウンを、思いふけっていた。

三次元機動を披露する事はなかった…

圧倒的火力の中では、反対に味方の弾に当たる可能性が大きいとの事で、
陸戦強襲型ガンタンク達の穴を埋める射撃戦または、接近してきたＢＥＴＡの対応に徹していた。

そして今も…

『突入！！』

隔壁が崩れ落ち、主広間に突入する陸戦強襲型ガンタンク、
それに続いて武の乗る魔不知火も突入する。

目の前に広がるＢＥＴＡ群へ向け射撃トリガーを引く。

（と…）

しばらくうつとＩＦＦが反応し始める。
うっていた隙間を陸戦強襲型ガンタンクがうめてきた。
その為ＩＦＦが反応し、ザクマシンガンの射撃をとめる。

すぐさま天井方向へと攻撃を切り替える。

水平方向はＩＦＦ反応しない隙間を探すのが無いくらい詰め寄って、
ラインを形成し始めてきたからだ。

天井に張り付き、こちらの確保した陣地へと無数の小型種が向かってくる。

対空型も接近させないように銃弾を浴びさせる。

程なく無心に撃ってると、生きているＢＥＴＡの数が減り…

陣地が広まり…主広間が異世界軍の手に落ちた。

（あははは…楽過ぎるなぁ…）

程なく、反応炉が落ちたとの情報が入り、駆逐作業へと移行する…

……

カオル報告

重慶ハイブ攻略、重慶基地へと変わります。

第147話　重慶ハイブ攻略戦その3　投稿日20110714（後書き）

ナギ少尉「重慶ハイブ攻略おめでとう～」

作者「けどまだ楽にはならないのがきてるね」

ナギ少尉「あと周辺地域環境？」

作者「だな」

ナギ少尉「放射能汚染酷いもんでしょ？」

作者「防護服無しでは生きてられない環境、
ヤドカリ達は除洗受ければ良いとして、人間にはきつい環境だね～」

ナギ少尉「けど機体は動かせるんでしょ？」

作者「作中には書いてないが、約6時間毎の補給つきでな」

ナギ少尉「へ…？」

作者「酸素の交換だよ」

ナギ少尉「ああ、…ってそんなもん？」

作者「万が一の脱出後何時間分の非常用酸素確保すべきかわかるだろう…
その分の比率が高いんだよ。あと疲労回復もかねてな」

ナギ少尉「なる程ね～なら、
作中に書いてないけど釣り天秤で出したあと突入のパターン？」

作者「そそ、ハイブ内部では４時間も戦闘は行ってないわけさ」

ナギ少尉「毎回おんなじパターンのは飽きちゃうから略？」

作者「……ま、まぁさて…三方向からの進軍をどう凌ぐかだな」

ナギ少尉「次回、ハイブ再び復活か？重慶基地防衛戦、お楽しみにぃ」

作者「おい、まだそこまでいかんぞ……前準備編ね」

第１４８話　重慶ハイブ改め重慶基地防衛準備　投稿日２０１１０７１６

２００１年１１月２６日１６時

重慶ハイブ攻略後、ビッグトレー艦内にて、
すぐさまレビル将軍と防衛作戦を協議していた。

司令室より届いた情報、三箇所よりの増援に関しての件についてだった。

「カオル殿、放棄は考えておらんのか？」

「ですね…なんとか護ってほしいものです」

「フムム…三方向からですか…」

重慶ハイブ改め、重慶基地（仮）予定は、西南北の方向からの進軍に晒されようとしていた。

すぐさま大群到達までに作業に入らねば…だが…

「ＢＥＴＡ側に有利過ぎる地形ですな」

重慶はハイブが建設されて…約８年の年月が経った。

元々重慶は、二つの川の合流地点にある４００万人を越える人口をようした都市であった。

第二次大戦のおり、国民党は、北京を落とされると、ここ重慶を政府拠点とし、
大日本帝国との戦いで戦いぬいた。

そう、元の中国では重要な都市の一つであった。

長江が都市部を流れ、河口からの船便が重慶の港につき、貨物を陸揚げする。

その貨物は都市部だけではなく、周囲を含めて２５００万人、
いやそれどころか、内陸部の各地に重慶から陸路ではこばれ、
約１億人近くの生活をつむぐ、内陸部にありながらの港湾都市になっていた。

ところが今はどうであろうか……
廃墟というかなんにもなくなるのは想像がつくと思うが、
進軍のときに長江の説明がなかったように…
重慶には長江が無くなっていた…勿論、嘉陵江もだ…

ハイブ建設時にＢＥＴＡは邪魔な地形は削り埋めたりしている。
勿論川であってもだ。

長江も９２年に敦煌にハイブが建設されてから、
上流にあたる金沙江からの流量が減り、
枯渇気味になる。

そして９３年重慶陥落…

重慶陥落後も、中国は大量の核による迎撃、間引きなどをおこなった。

そしてＢＥＴＡが占拠した土地は地形が変わる…
大地を削り、森林もなくなり、生物も居なくなり、死の世界が広がるのだ。
いやはてや人が核兵器を使い過ぎ変えたかもしれない…

重慶の人々は、８０年代に防衛政策により移動、元々激減していた。
が残っていた人々、比較的軍属や、それにかかわる民間人が多かったが、
９２年に放射能汚染が酷くなると退去していき、
９３年の重慶撤退時には民間人の死者は皆無であった…

９２年前の放射能汚染による死者の方がうわまっていた。

勿論、中国の代表ともいえるパンダ……
野生種は絶滅し、今やアメリカ、オーストラリアに居る個体のみ。
あれ？日本は？だが…
日本帝国では、西日本進行まではまだ各地の動物園にいたが、
上野動物園の個体が京都陥落後、
第二帝都移動の際に薬殺処分させられてしまったのを最後に居なくなってた。

そんな訳で…

重慶基地周辺は、まったいらな平地、それに砲撃によるクレーターだらけの地形が、
何処までも続いていた。

長江跡地すら見当たらない…
元重慶ハイブさえも主縦穴と、付近に駐留しているトレインギャロップ群や、
ビッグトレーが居ないと、上空から見ない限りわからないものとなっていた。

いつまでもまったいらに続く、山さえも地平線の先に見えない…
放射能に汚染された不毛な地、
それが今の重慶であった。

自然の要害はまったくなし、レビル将軍の言葉とおり攻めやすく守りにくい地形…

それが現在の重慶である。

増援は、中型チューリップによる輸送により陸戦強襲型ガンタンク３００機、
６１式改が６００両が決まっていた。

また佐渡島より、２８日にビッグトレーミサイル艦が2隻のみ回ってくる。

「ふむ……カオル殿、この群のみなんとかしてくれれば対応できなくともないが」

レビル将軍の指したのはボギー２２、
敦煌ハイブからの１８万の集団だった。

「それを持つとして…？」

「南北からくるボギー２１、２３を、あらかじめ門、横道を封鎖して対応、
主力でもってボギー２１を殲滅後、とってかえしてボギー２３に…
の形だがどうかのう？」

「敦煌からの１８万ですか…」

（サイクロプスか？やれない事もないな…）

「流石に２時間で１８万の殲滅はきついものじゃよ…
どっちか時間稼ぐ事できれば別じゃが…」

ボギー２１は南方向から日本時間２８日の２３時、
ボギー２２は日本時間の２９日午前４時、
ボギー２３は、日本時間の２９日午前６時。

特にボギー２２と２３は時間的に2時間、方向的にも西と北から…
おまけに両方合わせると３０万の大軍勢となる。
おまけに、クレーターだけのなんも自然の要害がない、
まったいらな地形である。

「ん～…時間稼ぎでなく、ボギー２２を殲滅しましょう…
となると、サイクロプス暴走してかな？
一箇所だけなら設営間に合うか…」

サイクロプス、佐渡島で使用した大規模殲滅型の自滅兵器だ。
佐渡島にはまだ設置してあり、予備が１セットある。
カオルは今回は予備の１セットを使用するつもりなのだろうか？
協議してたスクリーンに、効果範囲を表示させる。

ハイブ西、７０ｋｍの地点で半径４０ｋｍの円がでる。

しばらく、レビル将軍はみてたが…
「ふむ…では、今ボギー１９対応艦隊をそのまま、ボギー２１殲滅後転身。
ボギー２３にあたるでよろしいかな？」

「それでいきましょう…１１号！！
作業部隊に南北横道の充填、門の閉鎖、
西側７０ｋｍ地点にサイクロプス設営作業を急いでくれ」

［了解、マスター］

基本防衛方針はきまった模様だ…

指示が飛び、作業部隊が展開していく…

一息ついたとこで、

「ところでカオル殿、
この後、重慶ハイブを再利用本当にするのかね？」

「大変ですけどね…けどまさかここまで酷いとは、誤算でした」

カオルが見ながら話た方向には、ビッグトレーの外部放射能計測器…値は５００ＳＶを越している。

調査結果、地上ではかなり強い値をさしてるが、
地下ではさほど放射能汚染は深刻ではなく、
地下１．２ｋｍにある反応炉においては６０μＳＶの値、通常の環境下位にとどまっていた。

因みにＳＶとは人体に直接影響を与える放射能の値であり、
ｂｐやｇｙとは違った意味の放射能の値である。

つまり、外出には完全な遮蔽機能をもつ防護服が必要だが、
現状人間サイズでは異世界軍でも取扱いがない…
ＭＳが放射能防護服の扱いになっている環境下だ…

「この汚染の軽減なんとかならんかのう?
せめて人間が防護服ありで生体に影響なしな位に活動できるとか…」

「どうなん?」

［とりあえずクリーニング作業は開始したいけど安全にならないと始まらないよ…
大規模すぎるから…］

「となると…周辺地域の安全確保しないと現有技術での放射能除去は…」

［難しいね～］

「……密閉型都市というか基地には?」

［なら内部の完全除去は可能］

「…の形しかないか……でどうです?レビル将軍」

「それしかないかのう…」

［周囲の強い放射性物質を分解すれば、そのうちに下がってくるよ］

「あとはどっかからかもってくるか…」

［気長にまつよ～］

「早めにもってくるさ…あとはパワーローダータイプの完全遮断の作成と…
できるだけ小型ね…中継防衛基地か…」

［重慶基地はどうすんの？］

「地下型の密閉低層基地しかないんじゃ？」

［……そうかもね］

「防衛してからになるけど…1番外側が分厚いコンクリート製、
地下に潜る過程で除洗が基地としたら無難かな？」

［地下Ｌｖ１を１５０ｍ程とって除洗施設ね…それから主縦穴に進入、
完全に放射能遮断する形ね」

「ま、だな…中継基地も同様な形だろ」

［了解、マスターその形で建設準備を整えるよ」

「ん…重慶の地上部分はハリネズミみたいに、砲撃陣地になるかな？」

協議していた頃…

１７時頃に戦端を開いた2万のボギー１９との戦闘は、さしたる被害もなくつつがなくおわった。

情報ではボギー１９は途中二つにわかれ、
片方がボギー２１に吸収される動きにある。

連戦が終わり、トレインギャロップに帰還し、疲れを癒す有人機にのる１０２名の兵士達…

２００１年１１月２７日

重慶基地での防衛戦での作業は進んでいる…
一回横浜基地にチューリップ使用で、転移する。

重慶基地防衛後についてからだ…

まず現状進行中なのが、
月面ハイブ攻略…

アイランド1から4と名付けられたコロニーレーザーが異常なく移動中…

その他護衛の宇宙戦艦が各コロニーに20隻ついている状態だ。
艦隊司令にはティアンム提督がついて移動している。

（今のところは支障なしか…）

やはり全基移動まで、時間がかかり12月5日を目処に…とのレポートがあがってきてる。

（あとは…）
次の案件、天元山の噴火について。

武からもたらされた情報により正確な噴火時間がわかっていた。
また観測機器もその兆候をしめしていた。

マグマは良い資源であり、
残さず回収する様に指示は出している。

（と、次は…）

放射能、放射線完全遮蔽の防護服について…

（ん～……）

完全防護するには…間接が駄目だった。

間接部にまずは分厚い鉛が直線で入らず、
どうやっても被曝が避けれない状態だったのだ…

現状異世界軍の機体においては、間接がない部分＝胴体および、
脱出ポットにおいて完全遮蔽している段階だ。
実際のとこ、脱出ポットにおいても２ｔ近くの重量がある。
腐食等にもつよいガンダリウム合金も使用している状態だ。

なので間接部分を防護できる素材を頭かじって探していたが……

（いっその事ボール作るか??）

脱出ポット自体は完全遮蔽できている。
それに駆動部分、作業用マニュピレーター、
外部カメラをくっつければ良いだけの話になってくる。

（戦闘参加は無いんだし、あっても細かい作業用だし、コバッタ達もいるんだし…）

というので対核完全遮蔽防護服??
ボールの誕生となります。

基本脱出ポットに多脚、マニュピレーター、モノアイをくっつけたもの。
移動にはマゼラアタックのタンク部を流用した土台の上にのり移動の形になる。

（これしかないか…作業は基本はコバッタ達だからな…）

放射能は怖いです。

……

カオル報告

対核完全遮蔽防護服を作成しました。

第１４８話　重慶ハイブ改め重慶基地防衛準備　投稿日２０１１０７１６（後書

ナギ少尉「ねぇ作者…これ服なの？」

作者「何もいうな…」

ナギ少尉「明らかに機体に思えるだけど…」

作者「……突っ込まないでくれ」

ナギ少尉「しかも、重力下で活動させるのに多脚構造、
タンクつきって機体でしょ？」

作者「だぁぁぁ…え～え～わるうございましたよ…。新素材ご都合
主義つければいいんでしょ？つければ…
こんな事もあろうかと！」

ナギ少尉「いよっシゲさん！」

作者「……ま、放射能や放射線は本当に怖いですね。
放射能防護服、今原発で作業されてる片は、放射線を浴びながら作
業している訳です。
完全遮蔽するには作中のように、服では難しい問題がでてきます。
重量はもちろんですが、間接に鉛２ｍの厚さを現有技術ですと入れ

なければなりません。
そうなると間接曲げれますか?になってしまうんですよね…」

ナギ少尉「見えない恐怖ですよね…」

作者「核融合が試験で打ち切られず、実用化されてれば…あんな事故も…
事故がおこった事自体、東電の経営陣の責任ですけどね…
せめて東北電力が管理してればもっと対策いえ、防護を増設改築してたろうに……
まぁ一日も早い収束、放射能問題収まってというか、つきあわなければならないんすよね…
コスモクリーナーD本当にほしいです」

ナギ少尉「さて、次回は重慶防衛戦の回でいいのね?作者」

作者「はい、11月28日に突入ですからね」

ナギ少尉「お楽しみにぃ〜」

第１４９話　重慶基地防衛戦　投稿日２０１１０７１８

２００１年１１月２８日

ＢＥＴＡの大規模進行に対して準備に追われる重慶基地。

異世界軍のみでの対応となる。

統一中華連合が参加させろと煩かったが、

「放射能がひどくって、おたくの衛士の命無駄にはできません。

攻略作戦時に途中帰した部隊いましたよね？あんな放射能防護状態でどうすんですか！

せめて完全放射能防護する機体にするまで立入禁止です！！」

で追い返して今はいない。

はっきりいって衛士の命なんだと思ってるのか？と思いたい。

１００ＳＶどころか、１ＳＶあたりで衛士に影響がでて、活動限界にくるような機体なのだ。

宇宙活動も考え、ＮＢＣ環境下での気密性は一応確保されているのがわかる。

これにより放射能内部被曝は防げることにはなる。

が、放射線は別だった…

（β線防護も考えてないとはなぁ…）

β線は現有技術では鉛板で遮蔽をするものであり…
が鉛は非常に重いもので、
空を飛ぶ機体には到底使用素材として使われてなかった。
そのために外側に増設するか、内部に増設するしかないのだが、
その改造気配がなく、お帰り願った次第であった。
揚力で飛ぶ戦術機には重くする発想は、到底受け入れられないものである。

もっとも、改造できるとしたら、
コクピット内部だけの限定改造なら操縦ができなくなる事になるだろう。
外側に改造するとしたら１０ｔは自重が増える事は明白であった。

核戦争下を考えて発達した陸上兵器とは到底違うものである。
因みに、陸上を走る戦車は核汚染下を想定している車両が殆どである。
日本帝国軍では７４式から核戦争下での活動を想定した装備となっていた。
いわゆる第二世代と呼ばれる戦車である。
その為殆どの戦車は、第一世代に比べ自重が重くなっている。

さて、異世界軍の作業車両が基地周辺で急げや急げとばかり、
地下や地上で穴埋め、穴ほり、充填など、
ところせまし活動をしている。
勿論作業用車両の操縦席は露天等で遮蔽は考えられてなく、操縦者は被曝するが……

操縦しているのはコバッタ達である。

彼らは高濃度核汚染下でも関係なく、重機を扱い、
横道をうめ、門を封鎖し、内壁の材質変化を行っている。

彼らのおかげでいきなり穴が空き、陥没等はなくなるであろう。
作業はかなりの速度ですすんでいた。

同日２２時…

南北の門の閉鎖、スタブの充填、
基地の材質変化がかろうじてまにあった。
あとは西７０ｋｍで設置進めている作業終了次第、迎撃準備はとりあえずは完了する。

西の設営作業を進めている中、南の方向よりＢＥＴＡ群が接近してきた。

ボギー２１、約９万の大砲級を含むの勢力だ。
数が増えたのはボギー１９からの合流があったからだ。

「ボギー２１、７時の報告、距離１２０ｋｍまで接近」

「迎撃第一艦隊前進しました」

ビッグトレーミサイル型１隻のみ遠距離攻撃できる為、
主縦穴及び東西近接護衛の陸戦強襲型ガンタンク１００機、６１式改１００両、
Ｔ－８５０が２００人を残して進軍する迎撃艦隊。

内容は、
ビッグトレー砲艦型１０隻、
ビッグトレーミサイル艦対空換装２隻、
トレインギャロップ５編成、
陸戦強襲型ガンタンク２２００機、
６１式改４５００両、
６１式重機関砲１０００両、
魔ドム２１６機、
戦術機１０８機による迎撃となる。

「ボギー２１に動きあり、ＡＢ群にわかれます、
ボギー２１Ｂ、弾級射撃体制にはいる模様、
……弾級射出確認」

戦端を開いたのは、やはり大砲級による遠距離射撃から始まる。

弾級が飛来し、対空ミサイルで迎撃を行う。
前回のの２倍の対空ミサイルによる迎撃を行える事により、難無く迎撃がすすむ。

艦隊はそのまま進軍、ボギーＡとの距離が８０ｋｍに差し掛かり…
「艦隊停止、最大射程から砲撃を行います」

最大射程、文字通り弾が届きますの距離だ。

精密に目標命中は到底望めないが、１０８０発一回の射撃に打ち出され、
一分間で約１３万発打ち出されるのだ。
かなりずれても問題なかろう。

「諸元入力完了、目標ボギー２１Ａ距離８０ｋｍ」
因みに８０ｋｍの距離での散布界は６ｋｍとなる。

「射撃開始！」
カオルはその頃…
サイクロプスの設営調整作業を行っていた。
今回も暴走はさせずに、再利用の形になった。
その為の最終変更を行って居たため、天板は被せられてない。

（お、明るいなぁ…）
南の空が一部だけ、
真昼間のように明るくなっているのがみえた。
爆炎による明るさであろう。
その明るさの下ではいくつものＢＥＴＡの命が消えている。

（さてと…）

最終調整は終了し、
「終了だ、天板被せてくれ！」
サイクロプスを納めた通路に天板が被さっていく。
あとは２０ｍ程土を被せれば西のボギー２２に対しての迎撃準備は完了する。

翌日午前2時３０頃、
ボギー２１は、その後、大規模地下進行の軍勢４万とあわさったが、数は減らしていった。

数は減らしていったはいいが…

「5時１２分の方向距離８０５２個体数１０、２６分隊向かいます」
「7時３４分の方角、距離１０２５０個体数２１発見……２０６分隊が向かいます」
「１２５３分隊対応終了、４時０２分の個体への対応に向かいます」
このボギー２１が、大規模集団で戦闘は行わず、

少集団にバラけた為、対応が難しいものになってしまった。

こっちも陸戦強襲型ガンタンク２両、６１式改４両を基本とした分隊を編成、
個々の集団の対応を行う事になる。

わかれた事により、大砲級が固まってたボギー２１Ｂだけは殲滅するも、
この時点で約３万強がまだ生き残っていた。

レビル将軍は砲艦１隻のみボギー２１が再び集団になった時の対応、あとはボギー２３対応の為に転進する。

そして…

「ボギー２２確認、１０時の方向、
距離１３０ｋｍ、個体数２０万確認しました！！」

残敵掃討中ながら、ボギー２２が接近していた。

カオルはデコイを握り待ち受ける。
『ボキー２２、サイクロプス効果範囲に入りました』

カオルは引き付け、殺到するＢＥＴＡを待ち構えた。
十分引き付け突貫する。

先頭はカオルが通り過ぎると反転、食わせろばかりに追いかけはじめる。

約３０分後…

『間もなく効果範囲外にでます』

（……もう少し広げればよかったか…）

カオルはスクリーンを感じながら機体をあやつり、
単機で持ってＢＥＴＡ集団の中心部をかけぬけていった。

よつあしでもって、土台になりそうな要撃級、突撃級の頭上にのり、
ＡＴフィールドでもって光線級のビームを防ぎ、
正面に立ち塞がり、邪魔な要塞級は袈裟切りにし、沈黙させていった。

中央部を突き抜けてボギー２２をより多く効果範囲内におさめるべく、突貫した。
が、２０万の数が効果範囲外部にも広がっていて、
全部が入りきるまであと2往復位か必要に思えた。

タイムリミットも迫っている。
ボギー２３、総数１５万に増えたが戦闘エリア内に進入し始め砲撃を受けはじめていた。
しかも、デコイに引かれ進路を修正している模様だ。

またボギー２１の残敵もカオルのデコイに引かれているとの報告もある。

『カオル殿、残敵は陸戦強襲型ガンタンク達に対応するしかないと思うが？』

「ですね…ボギー２２の残敵予想は？」

『現状１万です』

『何とかなるのう』

「何とかなるか…わかりました。では起動します」

『総員、サイクロプス起動、衝撃に注意！！』

カオルはより集める為、デコイを天高く中心部に向かってなげ、効果範囲内から離脱すべく、空に駆け上がる。

光線級もデコイに引かれ、見向きもしなくなった。

サイクロプスを起動させる。

ゾク

まだ効果範囲内部にいる為、重力に異常を感じる。

機体を走らす。ＢＥＴＡの向きとは逆に…

『出力５０、６０、７０、８０、９０、１００効果臨界越えました』

効果範囲内にいるＢＥＴＡ達が動きを止め、体内の水分が一気に沸騰し爆ぜる。

まさに地獄の黙示祿、死のカーテンが広がる。

『出力１５０……カオル大将！！効果範囲が！！』

（っ！！）

が……作動効果範囲が当初設定よりも狭かった。

付設範囲は間違ってはない。

『……デコイのＧ元素に重力変位確認、

そのため設定より２０％効果範囲が狭まってます』

「推定残存は？」

『約５万５千……サイクロプスセーフティーストップかかりました』

端子を交換しなければ起動できない状態に…

二発目はない。

『総員突撃、残敵を掃討せよ！！』

レビル将軍の命令がすぐさま下りる。

ボギー２２の残敵に陸戦強襲型ガンタンク、６１式改が襲いかかる。
カオルも反転し、よりおおく殲滅すべく再び突貫する。

『あと２０分でボギー２３が最短射程距離に到達します！！』

（放棄か？……いや放棄はまずい、破壊か……）

残敵数の推移を見守り、近くのＢＥＴＡを切り付けながらそう判断しかけた。

効果範囲の外周部からＢＥＴＡは、
またもやあざ笑うかの様に、おもいおもいに拡散してく。

『最短射程距離まで残り１０分！！ボギー２２残存３万５千、ボギー２３Ａ残存６万』

カオルは決断を下す。
「マスター１よりぜ」

『マスター１、Ｔ－８５０より出陣要請がきてます！』

（Ｔ－８５０が？……６０００…いつの間に…）

数を確認すると、配備した数より遥かに多かった。
（チューリップか！！）

Ｔ－８５０達なら確かに小型チューリップでの移動は可能だった。

『俺達にまかせな』

（やってくれるか…）

『ボギー２３Ａ最短射程距離まで残り８分』

「わかった…頼む」

リテルゴルロケットもどきを背中に背負い、個々に武器を担ぐＴ－８５０達、

Ｍ６１ガトリング、零式ロケット、カトラス、高周波突撃槍等々を手に持ち、

いまかいまかと待ち構えている。

『ボギー２３Ａ最短射程距離まで残り１分、残存５万２千！』

『ＧｏＧｏＧｏ！！』

一斉にロケット点火させ、最短射程距離圏内に突入せんとする、

ボギー２３Ａへ向かい突撃する。

この戦いの行方はＴ－８５０達に委ねられた。

……

カオル報告

基地放棄でなく破壊するか迷いました。

破壊するとゴキブリホイホイができなくなり、
できるだけ破壊はしたくないです。

第１４９話　重慶基地防衛戦　投稿日２０１１０７１８（後書き）

ナギ少尉「……
何故こうなったの？なんで人間サイズのターミネーター達が相手する羽目になったの？
援軍は？」

作者「えっとまぁチューリップの設定に起因しますね。
チューリップは２０ｍ級のを小型、５０ｍ級のを中型と設定してます。
基本ＭＳや戦術機は横浜基地で生産すると、
ベースジャバーではこばれる事になります」

ナギ少尉「うんうん」

作者「今回重慶にはトレインギャロップで中型を運んでいるので、
横浜基地で新造したＭＳが迎撃増援で出現した事になります」

ナギ少尉「うんうん」

作者「が、基本的に各基地間は小型チューリップで結んでいて、
ばらした状態なら多目的輸送挺で運べるようになってます」

ナギ少尉「…小型でも２０ｍあるなら運べるじゃないの」

作者「外周が…なんで運べません」

ナギ少尉「そういう事なのね…
さて次回は重慶基地防衛戦その２、ターミネーター対ＢＥＴＡ５万、
勝てるのか？お楽しみにぃ」

第１５０話　重慶基地防衛戦その２　投稿日　２０１１０７２０

日本時間２００１年１１月２９日午前５時３０分
ビッグトレーの主砲の最短射程圏内に進入した、
ウランバートルハイブからの残存４万９千のＢＥＴＡ、ボギー２３。

対するは、背中に背負ったロケットから排煙をだし突貫しているタ
ーミネーターＴ－８５０達。
その数６０００人。

ターミネーター達の背後には、主砲が最短射程に入ったら使えなく
なる、巨体の甲板のＣＩＷＳ４門のみ…
いや相対できるのは１門のみだろうのビッグトレー砲艦９隻と、
今も遠距離にはミサイルをうち出しているビッグトレーミサイル艦
１隻と、
対空ミサイルをうち出しているビッグトレーミサイル艦対空換装２
隻、

各門及び主縦穴、各艦を護衛している、
陸戦強襲型ガンタンク１００機、
６１式改１００両…

しかいない。

文字通り抜けられたら、その数では個々では勝も、間違いなく反応

炉まで到達してしまうだろう。

この戦いの命運は人間サイズのアンドロイド、ターミネーター達が握る。

間もなく接敵というところで、ターミネーター達は背負っているロケットを切り離した。

衝撃を殺し着地、

ロケットはそのまま先頭にいる突撃級めがけて突っ込み、盛大な爆炎を数６０００をあげる。

おもいおもいの武装を手にもち、走り出す。
不整地なのに時速５０ｋｍ近くまで加速し、

あるものは零式ミサイルを構え、突撃級に向かって発射。

命中させノイマン効果により肉体を奪い、その命を貰う。

あるものは高周波突撃槍を１３０ｋｍの速度で突撃してきた突撃級に突き刺し、
衝撃をころして命を奪い抜き体液を浴びながら別のＢＥＴＡに向かう。

あるものは、両手に構えたカトラスでもって、突撃級の脇を通過してた戦車級を一旋、

胴体をずらして命を奪う。

また別のものは、手に構えたＭ６１でもって小型級を狙い、
通り抜けようとした突撃級を方向転換し、背後から弾を食らわせそ
の命を奪う。

あるものは、戦士級の長い鼻で殴りつけられたが素手でとめ、
反対に空いてる逆手で殴り、鼻をちぎりながら吹き飛ばしその命を
奪う。

しかしターミネーター達も無傷では居られなかった。

突撃級めがけて槍を突き刺し、衝撃を殺している間に、
真横から唸る空気が…
要撃級の腕に吹き飛ばされ、槍をはなしてしまうもの。

真横から戦車級に食いつかれ…上半身の肉をもってかれるもの。

ターミネーターの足はサイズの問題で、他の機動兵器にくらべ遅い
為、
弾をうちつくしたあとは補給にもどらず、カトラスに持ち替え接近
戦に挑む。

その為不意に被害を被ることがあるのだ…

ターミネーター達は、命を惜しまずになるだけ被害受けないように

闘う。

ＢＥＴＡは命惜しまずに被害無視で前に突き進もうとする。

その差がじわじわと出てきはじめた。

ターミネーター達は結構タフだ。

中々しぶとい。

吹き飛ばされ、地面にたたき付けられる前に体重移動で、体制を立て直し、

地面着地後殴りつけた要撃級に向かう。

高周波ナイフを出し、腰のポシェットから手榴弾を取り出すと、

殴りかかってくる腕をジャンプでかわし、

更にジャンプし、背中にナイフを突き刺し穴を空ける。

すぐさま抜き逆手にもった手榴弾を体内にぶち込んだ。

暴れる勢いで自ら振り落とされ着地する。

要撃級が殴りかかろうとするが…

体内に入った手榴弾が炸裂、

その身体を支え切れず横たえる。

戦車級に上半身の肉をもってかれ、内部の金属部が露出したのが、

肉をもってった戦車級を掴み、両手を力いっぱい広げると、

ミリメリメリ

戦車級の肉体が裂け、広げた箇所から真っ二つに体液をだしながら割れていく。

『ボギー２２残り２万、ボギー２３Ａ残り３万』

数を減らしていくＢＥＴＡ。

キノコ雲があがる。

ターミネーター達のパワーセルが損傷等で不安定になり、一つを投擲したのだろう。

小型の核爆発がおきる。

彼らは吹き飛ばされた位ならまだ大丈夫だ。

少しばかり損傷おっても自己修復プログラムが働き、最適化を行う。

が、さすがに腕をもがれたり、構造体を曲げられる等すると、行動に支障がでてくる事態にはなる。

行動不能になる…といえば首であろう。

パワーセルの入った胴体と、コアプロセッサの入った頭、

どちらかの接続が断たれる、損失等でないかぎり活動停止はない。

今も片腕を切断されたターミネーターが、切断された片腕を拾い、

両足を潰されたターミネーターを担ぎあげ、戦線から下がっていく。

修理再接合され、第二次戦線に参加するだろう。

さて、弾を使い切った後の零式ミサイルは再装填されるが、ミサイルの大きさの関係で１回分のみ、合計８発しか撃てない。

なのでその後は、突き刺したり、殴りつけたりなどの金属製のこん棒と化す。

こん棒といえば、要撃級の前腕だろう。

これはよい武器だとばかりに、殺した要撃級から引きちぎり再利用はかなりされている。

彼らの活躍で後方に抜けてくるＢＥＴＡは今のところいない…

『ボギー２２残り１万切りました、ボギー２３Ａ残り２万！！』

間もなく手のあいた陸戦強襲型ガンタンクが、装備弾薬等をのせ駆け付けよう。

今も要塞級に向かって高周波突撃槍で、突き刺さんとばかりに突撃している。

ターミネーターの体格よりもでかい触角による鞭撻をかわしながら近寄る。

２０ｍ程度の距離までちかよると、

その頭上２０ｍに、突撃槍の使い切り爆薬を使い突き刺さり体内に入る…
エネルギー解放、爆発する。
身体を支え切れなくなった要塞級が崩れおち、盛大な音をたて横たわる。
武器を使い切ったターミネーターは柄の部分をすてると要撃級を探しにいく…
別のターミネーターは、カトラスで要塞級に挑みかかっている。
要塞級はその自重を支える脚が１０本ある。
その内二本が先の部分がなくなり、バランスが少しとりずらく感じた。
三本目に切り掛かった際に鞭撃をかわしきれず、下半身と別れてしまった。
地面に打ち付けられ、ターミネーターに襲い掛かる踏撃。
生き残った上半身が、動きをとれずに踏み砕かれた…
が…その前にパワーセルが体外に投擲された。
臨界を向かえ真下から要塞級に襲い掛かる核爆発…
キノコ雲があがる…
三人で要塞級に挑みかかっている。

一人が囮として対峙注意を引き付ける。

もう一人が土台、そこに向かって走り乗り、ターミネーター自身が投擲される。

勢いよく８０ｍ近くまであがると、
対空ミサイル等の対応に追われてた光線級の光線はこず、
見事に要塞級の背中にとりついた。

二本あるカトラスを使い、穴をあけ体内に進入…
ドリル的一方的攻撃により１分後には要塞級は、命が奪われ横たわっていた…

要塞級の死体からくり抜き体外にでてくるターミネーター。

身体は臓器、体液で彩られていた。

戦車級の群れに襲い掛かり、旋風の如く命を奪っていく……

『ボギー２２残り１０００未満、ボギー２３残り１０００』

この頃になると６１式改や、陸戦強襲型ガンタンク達が武器をのせながら、
ボギー２３の対応に駆け付けてくる。

もちろん武やカオル達もだ。

武は要撃級に切り掛かりその命を奪う。

少し前には、陸戦強襲型と戦場交代した、ターミネーター達が色とりどりの格好で、
ホバートラックからの補給をしていたのをチラッとみかけた。

（生身で戦うか…すげえや、ターミネーター…）

武は前周回の横浜基地襲撃を思い出していた。

（ターミネーター達がいれば、あんな大惨事にはならなかったかもな…
シャフトや集積所で踏ん張ってくれてたかも…）

実際のところ、歩兵でＢＥＴＡに遭遇すると全滅もいいところだった…

武は残敵掃討に向かう。

同日、１２時１２分

戦闘は終了し、破損したターミネーター達が続々と回収されてきた。
タンカではこばれてくるターミネーター
ガーガー

右手にあたる部分がサムズアップをつくる。
両足はすでに破損、頭もかなり破損していた。

カオルは無言の敬礼で答える。

彼らの突撃がなければ、まだ近接防御が整ってない重慶基地は落ちていただろう。

「必ず治せ」

［わかった、マスター］

欠員４、大破１２、中破２９７、小破１２５６…
全てのターミネーター達の回収が終わり、損害がでた…

突撃した６０００人の内、実に２５％近くの損害がでた事になる。

その他の機体の損害は、
陸戦強襲型ガンタンク、中破１９機、小破８３機、
６１式改大破２両、中破８３両、小破２７両、

有人機では、
魔ドム中破１機小破３機、
魔不知火中破２機小破１機、
の内訳で負傷者０となっていた。

同日１５時　第一次重慶基地防衛戦は終了する……

除洗を終え、ビッグトレー艦内…

「よく勝てましたのう…」

「ターミネーター達のおかげですね」

「このわしも駄目かと思い撤退プラン考えておりましたわい」

「まぁ…デコイがあんな作用しただなんて…
思ってもいなかったですね」

「ふむ…それにのう…増援要請するとしても、この放射能下だとこれるのは限られてる訳ですしのう…」

ボン太君、烈火、ＡＳ等は対応外になる。
また戦術機も改造を施さないと…の結果に…

「とりあえず各基地間のチューリップを、いざという時の為に中型に…
またＮ環境下対応改造と、放射能除去ですね…
まぁ二週間は大規模進行はなさそうですし…」
失った分はＢＥＴＡも生産せざるえない。

「で、とりあえず重慶基地の設備ですが……」

同日午後８時、
重慶基地の防衛設備配置等建設計画をおえ、
横浜基地に戻ると、

カオルはこのあとのプラン及び、
再び戦力増強すべく考えていた。

（とりあえず、ハイブ攻略は、来月にまた１５００ｋｍ行軍で敦煌、
月面が来月頭、
あとは重慶含めた放射能対応と万が一の月面への戦力か…）

放射能はヤマト、アップルシード…
（あ、遊びに行くよのキャーティア本星もだよな？）

ルーロスを虚数空間からだして、鈴を撫で呼び出した。

「ごちゅちんたま、なんでちか？」

「ルーロス、確かキャーティア星って核戦争おきたんだよな？」

「はい。全滅しかかったでち」

「放射能汚染等どうしたんだ？」

「ナノテラフォーミング技術で乗り切ったでち」

「その技術出せるか？」

とたんにシュンとなるルーロス…

「マザーシップでないと出せないでち」

「あ～……わかったありがとうよ。じゃ待機で」

「了解でち」

（マザーシップか…作るの何日かかるんだっけ？……どっかいった方が早そうだな）

カオルは巨大なもの程作るのに時間かかるし、技術レベルでも時間かかる…

（まぁ…これはこれと…あとは…月面か…）

ＭＳは陸上ではかなり強いが、真空である宇宙空間では強制推進剤を使わざるえなく、
また月でも同様の為、戦力が落ちると考えていた。
実質的戦闘時間＝強制推進剤残量の為である。

（宇宙空間と閉鎖空間適したのねぇ…今だとエステバリス？）

高機動紙装甲になるが、そこはそれ材質変えれば…

因みに、
遊びにいくヨの技術及び銀河鉄道の無限軌道に関しては、
オーバーテクノロジーでプラントでは生産に至ってない。

（操縦系か…やっぱりもってくるか…となると…
来月中旬までにもってくればだから…先にいくか…
あとは敦煌制圧時だよな…）

敦煌ハイブ制圧時にはもれなく５方向からの援軍が、容易に予想が考えられた。

（ん……敦煌は潰してもいいか…の前提で動かないとな…
さてと）

「１１号いってくるわ」

［へ？マスター、今から？］

「ああ、なるだけ急いでもってきた方がよさ気だしな…
ピンポンで行き来するかもね。今回は」

［わかった、マスター…いってらっしゃい～］

世界扉を開き世界を渡る。

……

カオル報告

戦力増強に行きます。

第１５０話　重慶基地防衛戦その２　投稿日　２０１１０７２０（後書き）

ナギ少尉「やりきったのね～」

作者「とりあえずはな…損害も出たけど」

ナギ少尉「欠損４ね…これって…？」

作者「文字通り、頭のチップが破壊、損失等で再起不能。
原因は自爆的核爆発や、破壊等ね」

ナギ少尉「で大破は？」

作者「全体の７５％損傷、映画等でいうと、パワーセルが破壊され予備電力で動いている状態みたいな感じ。
首ちょんぱもこれに該当。
修理は通常は不可と定義されるけど、
プラントがあるし、コバッタ達がいるから可能だね」

ナギ少尉「中破が、サムズアップしたような状態？」

作者「そうだね」

ナギ少尉「文字通り踏ん張ったのねかれら…」

作者「まさに人型サイズでは最強の部類にはいるからな～」

ナギ少尉「烈火やボン太君は？」

作者「さすがに要塞級や中型以上を、
あの規模で相手すると損害がでる可能性あるから、遠距離からだな…
ボン太君のもふもふから次々でてくる銃火器の数々…」

ナギ少尉「…そうね～…ね、マスターアジアが１０００人だとどう？」

作者「マスターアジアが圧勝…人外だろ…
ターミネーターＶＳマスターアジアで２５人でかかればか？
いやサイズ的にむりか…」

ナギ少尉「さて、次回は…またしても新たなる世界、次は何処にいくのか？
ヤマトはまだか？コスモクリーナーはまだか？」

作者「焦らずに焦らずに…忘れたころに忘れたころに…」

第１５１話　新たなる世界へ　投稿日２０１１０７２２

～マクロスの世界～

カオルは世界扉をくぐり抜けたあと、
早速ルーロスをだし乗り込む。

「ルーロス」

「なんでちか？ごちゅじんたま」

「マクロスという船を探して貰いたいんだができる？」

「詳しい形状教えてくだちい」

「全長１２１０ｍ、全幅４６５ｍ、全高３３５ｍの宇宙戦艦だな」

「サーチするでち……地球にはいないでちね、星系探索遠距離サーチに切り替えるでち…
…でかいのが、いるでちね」

「ゼントラーディ軍ね。
で、見つかった？」

「……指定サイズは…見つからないでち似たようなのはみつけたでちが…」

「ん？ん～…宇宙戦艦なのに、空母と強襲揚陸艦をくっつけてるのは？」

「……？指定サイズと違うでちね…
似たようなのが土星に向かって航行中でちが…」

「どんな風に違う？」

「高さ１２１０ｍ」

「あ、そいつだ。トランスフォーメーションした形態か…」

「マークしたでち…2時間で近接するでち」

「よし、ステルスモードでいってくれ、見つかるなよ？」

「あいあい」

スクリーンから地上が遠さかり、みるみるまに高度があがり、大気圏外へと離脱する。

その間１０分…

そしてグングン地球は小さくなり…

「ところでルーロス、今かなりの数ってたよな?どのくらいなんだ?」

「７２隻、同一形態技術と思われる宇宙戦艦がいるでち」

「７２隻か…」

「かなりの戦力でちね、１番でっかいのが４ｋｍ級、次に３ｋｍ級とかいろいろいるでち」

（ん～作るとしたらどの位かかるんだか……ミニコロニーサイズだな…）

巨大なものはコピー作成には時間がかかる。

なのでプラントでできて欲しいが、

これぱっかりは持ち帰らないとわからないだろう。

「ごちゅじんたま、そろそろ目標のマクロスでち」

スクリーンに米粒から段々広がってみえてくる。

土星のリングにちかよってくマクロス。

接近するとその巨大さがわかる。

「全高１２１０m、マザーシップよりかはちっちゃいでちよ」

「ああ、そうだったな…キャーティアシップもあったか…じゃ、とりつくから待機な」

「あいあい」

ルーロスを引き込み、マクロスにとりつく。

地球統合軍所属、ＳＤＦ－１マクロス。

元々はゼントラーディに敵対する観察軍の砲艦であった。

西暦１９９９年、ノストラダムスの予言通りに地球に墜落してきた。

甚大なる被害をもたらしたこの艦は、接収研究のち、

巨人族の存在を認められ、地球の技術で修復し、ＳＤＦ－１マクロスとして１０年後に蘇った。

が、ブービートラップが働き、ゼントラーディと開戦。
フォールドの失敗により冥王星まで飛ばされる。
フォールドシステムは消失、
通常航行によりゼントラーディのちょっかいをしりぞけ、やっと土星までこれた次第だった。

（やっぱり…時間かかりそうだ…）
その巨大な艦内には空きスペースを利用して、街が広がっていた。
地上フォールドによる事故で巻き込まれた南アタリア島にいた民間人が、
その生活を立て直すべく街を作って生活している。
約５６０００人の人々、今現時点で艦内部で生活している民間人の数だった。

艦内の強行型の右脚にあたる部分に、
４００ｍクラスの街がある。
それが何層重なっていて、色々な区画が広がっているのだ。
映画館、ボーリング場、ディスコや、
スーパー、ブティク等いろいろある。

またまた公園等も……

そして夜の公園では、新米ほやほやの青白いヒョッコの一条輝がいる。

（お、見てくか…）

「ごめん、はあ。待った?」
息をきらせながらリン・ミンメイがきた。
「べつに」

「ねえ、急用っていったいなに?」

「明日の朝、出撃することになった」

「へえ、ほんと! 軍人になってはじめてのお仕事ね」

「ミンメイ…」

「あなたは優秀なパイロットだもん。きっと立派にやれるって、みんなで噂してんだから!……どうしたの?」

「いや、べつに…」
噴水の水が吹き上がる…幻想的だ。
「うわあ」

「ねえ輝、これ?」

「へえ、女の子みたいだ」

「ふ~んだ。せっかく一緒に買った服、着てきたのに!」

「ん、ごめんごめん。よく似あうよ」

「ほんとう?」

「ああ」

「あはっ、よかった！」

「記念写真、撮っとこうか？」

「ん、わたし、写真うつり悪いから…」

「そんなことないさ。さあ、こっちへ来て」

「カメラ！」

草むらからカメラロボットが出てきて、輝の前に来る。

「さあ、ならんで」

「ええ」

シャッターが落ちて、ロボットから写真が出てくる。

「まあまあね」

「よく撮れてるよ」

時間を気にしはじめたミンメイ。

「わたし、そろそろ帰んなくちゃ。

男の人とふたりきりであんまり長くいると、叔父さんたちが心配するのよ」

「そう」

「ええ。じゃ、気をつけてね。もっとお話ししたいけど、明日はがんばってね」

「またね、バイバイ！」

「バ～イ。俺、明日になったら、
もういないかもしれないんだよ、ミンメイ」
そう呟くのを聞き逃しはしなかった…

輝は公園をあとにし、宿舎方面へと足をすすめる…

（さてもうちょいか…明日はいっぱいゲット出来そうだしな…）

二日目

夜を徹して艦の把握に勤しむカオル。

格納庫は結構宝の山だった。
（フォー）
まずはデストロイド達、
トマホーク、ディフェンダー、モンスター…
オクトスもあった。

そしてバルキリー、
ＶＦ－１のＳ、Ｄ、Ａ、Ｊの各バージョン。

また巨大な艦の中には、

そのバルキリー達を生産する工場等も……
でなければ帰還までに戦力がつき、ろかくされたろう。

また、右腕は強襲揚陸艦ダイダロスが…
左腕は空母プロメテウスがドッキングされている。

ダイダロスは半潜水型強襲揚陸艦、水密区画で覆われており、
まぁ真空においても運用できるのはその為だった。

プロメテウスは半舷潜水型だが、格納庫等は水密区画ではない…
そのためフォールドに巻き込まれた際には多数の死者がでたという…
が、色々な改造を施し、無重力においても運用できるようにはなっていた。

半舷潜水型や半潜水型…聞き慣れないのがでたと思うが、
自らの力で潜水し、魚雷等を横で受ける事をいう…

水上をはしる船にとって、強化しても弱点といえる箇所が船底、
その部分をまもる答が半潜水や半舷潜水という事になる。

丈夫な箇所で受け止め、万が一浸水したとしても潜水をやめ排水し、
修理ができるからだ。

船底だと、流れこむ水圧により中々修理が進まない…為、
他の箇所に流れるのを防ぐのが水密隔壁等になる。
また二重底など…

またそれ以外にもレーダーに発見されずらい、
ミサイルに対する防御に水の壁が使える。
なども上げられる。

さて話をもとに戻すが、

そんな巨大な艦全体を取得し終わった頃には朝？
…艦内時間でだが…、になっていた。

『バルキリー隊に告ぐ。奇襲作戦は、カッシーニ空域において遂行する。
各部隊を7班に編成し、氷塊のなかで待機せよ。
繰りかえす。奇襲作戦はカッシーニ空域において遂行する』
艦内放送が入り、各バルキリーパイロット達が続々と自分の愛機へ搭乗せんと向かい始める。

カオルも分裂し…能力はかなりおちるが…グリーン、ブラウン、ローズ中隊の機体にとりつく…

『バルキリー隊各隊は、空母プロメテウス艦内で人員点呼、確認を急げ』

「バルキリー・スカル大隊2番機、タケシ・エンドウ。出る！！」
機体にGを感じる。プロメテウスのカタパルトしようし、発進してく…
（へぇ…タケシ・エンドウっうんだこの人…しかもスカル2か）
カオル本体もとりついてた。

『オレンジ、パープル、ローズのバルキリー各中隊は、前方のリン

グをぬけ、
カッシーニ空域Ｒ－１８ポイントに移動。
敵艦を主砲軸線上に誘いだせ』

『スカル２、スカル２３番機ですが…』

「ん？……ありゃ早瀬さんに怒られるぞ…新人の機体か…
あ～あんのじょうな…」

個別通信が入っている信号がでてる。
しばらくすると、スカル２３番機もリング内部に入った。

『スカルリーダーより各機へ、これより惑星の影のゾーンに突入する。
氷に気をつけろ。計器に気をくばれ』

途端に回りは何にも見えなくなる。
夜間バイザーをだした模様で、難無く氷の塊をさけてく。

『スカルリーダーより各機へ、
今接近中の艦の砲撃と共に奇襲をかける。
腹を決めろよ』

敵艦が土星のリングに近寄ってきた。
『きたぞ』
敵艦の砲撃が始まる。

氷塊に辺り、派手な爆発をあげる。

『攻撃開始！！』

影のゾーンから抜けミサイルをしかける。

カオルは離脱し、そのまま先行しているゼントラーディ艦にとりつくと、
艦に軽くひろげる。

（沈むまで時間がないしな…）

戦況はというと、主砲がトラブルにより撃てなくなったマクロスに、
攻撃が加わる。

しかし、ピンポイントバリアという、
マクロスに発生した時限断層をりようした、
異次元へエネルギーを逃がすクローディア曰く、セコいバリアシステムにより、

マクロスへの直撃弾をピンポイントバリアにより受け、
エネルギー転換、無傷な状態になる。

それを見たゼリル艦長が…怒って全軍突撃を命じた。

段々とマクロスに襲い掛かりピンポイントバリア…
セコいバリアは3つしか無いため、対応しきれず被害がではじめた。

バルキリー隊は、どんどんカオル本体に合流してくるのがわかるように、
ただ受けの時間が過ぎてくと、総戦力に劣るマクロスは不利になってくる。

バルキリーとリガードは宇宙空間戦闘ではいい勝負になるからだ…

バルキリー1機がカオルの取り付いている船に不時着、
バトロイドになり軟着陸する。

輝のかるバルキリーだ。

後方のエアロックに入り、ゼントラーディ兵と対峙する。

その頃、艦の外では…
マクロスがゼリル艦にビームを受けながらも無視し接近、

右腕を引き、ピンポイントバリアをドッキングしているダイダロス艦首に集中。

ゼリル艦にダイダロスアタック敢行、ダイダロスを艦首から突っ込ませた。

ピンポイントバリアに守られた艦首、
ゼリル艦の構造物を難無く突き破っていく…
そのまま右腕は伸びきって、艦中央部までダイダロス艦首は突き破ってく、

ダイダロスの艦首ハッチがあいた。
艦首ハッチ内部にはデストロイド達がミサイル発射体勢を整えている。
一斉に数百発のミサイルがゼリル艦内部に向け発射される。

ミサイルがゼリル艦内部の至るところで一斉に爆発…

外装部なら耐えられるかもしれないが外にくらべ脆い内部だ…
耐え切れず、マクロスがダイダロスを後進で抜いたところで…
ゼリル艦は大爆発。

ここに対艦戦で近接攻撃により撃破するという、
非常識な必殺攻撃が決まった。

元来船は外に対しては防御等行うが、内側から対しては加工しやすい等の理由でそこまで耐え切れない。

バリアで艦内部に入られた時点で勝負はきまった……

カオルは何人かゼントランを引き込み離脱。

そのまま、ゼントラーディ軍艦隊へと向かう…

……

カオル報告

ＳＤＦ－１マクロス
ダイダロス
プロメテウス
トマホーク
ディフェンダー
モンスター
オクトス
バルキリーＶＦ－１各種

取得

第１５１話　新たなる世界へ　投稿日２０１１０７２２（後書き）

ナギ少尉「ねえ、ヤマトは？コスモクリーナーは？
重慶基地はどうすんのよ！放射能汚染酷くしてぇ！」

作者「戦力増強を選択したんだから、多分次の攻略までにはじゃ？
１２月末なんだろうし」

ナギ少尉「……まぁいいわ…で今度の世界は超時空要塞マクロス？」

作者「そうそう」

ナギ少尉「今まで地球人通しの戦いの話なのに、異星人レベルねぇ
…」

作者「あ、遊びにいくよをぬいてるぞ…あと銀河鉄道物語」

ナギ少尉「えっと、巨大な船の中に生活する避難民船でもあるのね
～」

作者「まぁこの後の移民船団のシリーズに繋がるしな～」

ナギ少尉「でもオルタ5促進しない？」

作者「忘れてるかと思うが、永久凍結できたから、
反対に進行作戦の基地として…あ…ネタバラチャック」

ナギ少尉「……作者何処まで話広げるの？」

作者「まぁ一応、太陽系制圧までたよ…うん」

ナギ少尉「…本当かね～？さて次回は、ゼントラーディ軍の回ね？
…」

作者「もうちょい進めるよ…対応もね…」

ナギ少尉「じゃ、次回お楽しみにぃ」

作者「ヤック！デカルチャー」

第１５２話　マクロス編　あ～あ、俺のステーキ…　投稿日２０１１０７２４

四日目…
本当ならちゃっちゃと取得はしたかったが…

二日目から、丸一日かけてもブリタイ分岐艦隊の全ての、ゼントラーディの取得は無理だった。

いや系統が一緒で加速は感じるが、
何しろゼントラーディ軍の船は巨大だ…

今まで運用している船のサイズが最大３００ｍ級…戦艦大和も２５０ｍクラス。
なのでわかる通り、常識外れででっかいものだ。

確かに艦内に地球人が街をつくり、生活し、住む発想するのもわかる気がする。

の為に四日目に突入してやっと全艦取得できた状態になった。

さてまずは経過からになるが、
４０００ｍ級中型艦隊指揮用戦艦ノプティ・バガニス。

３０００ｍ級大型輸送艦キルトラ・ケルエール。

２０００ｍ級標準戦艦スヴァール・サラン。

５００ｍ級斥候艦トゥー・レディア。

リガードの小型ミサイル装備型、
大型ミサイル搭載型、偵察型、

また空戦ポットジナール、
大型降下ポット、
ケルカリア、
回収ポット、
等…
またマイクローン装置…
感応翻訳装置。
これがないとゼントラーディ勧誘が始まらない…
精神では感覚で話せるも言葉では通じないからだ…

艦隊を取得しおわったところで、一回帰還の為、
世界扉を開く…

２００１年１２月２日未明

「よっと…」

［マスター？あれ早いね］

「まぁちっとね…大至急やって欲しいのがあるんだが、

まずは医療カプセルの巨人族用のを作ってくれ」

［巨人族？具体的には？］

「１２ｍクラスだな」

［…わかった…明日試作品ができるよ。あとは？］

「その巨人族４名連れてきたから、
戦艦ドックに警備用ＭＳ３０機程スタンバイしておいてくれ…
鎮圧用のスタンバトンもな」

［へ？］

「まだ言語通じてないんだよ……」

［あ～了解、それ以外は？］

「まぁ問題ないかな？と…」

まずは統合軍パイロットの全４５名加入は無事にすんだ。

そして魔撃震と同化し、感応翻訳装置を再生し、機体に組み込んだ。
準備が整ったのでゼントラーディ兵の入ったシェルターをだす。
扉をつけ、
ゼントラーディ語で、出てきて来るように…と語りかけた。
扉が開かれ、兵士が外に出てくる。

（暴れないよな?）

注、以下ゼントラーディ語での会話を【】で表します。

【ここは何処だ?】

【ようこそ戦いのあふれる地球へ、わが異世界軍はマイクローン主体の軍ですが、
あなた方ゼントランの加入を希望します】

【戦いのあふれる世界だと?
それこそ我等の生きがいだ、相手はなんだ?監察軍か?】

【何処かの人ではありません。異種生命体との戦いです。
生存をかけた】

【ほう…異種生命体とな?どういったのだ?】

ＢＥＴＡを紹介すると…

【面白い！！是非とも同胞をどんどん誘ってくれ！】

無事に加入がきまりました。

とりあえず入ってた体育館サイズのを巨人族用に修復し直した。

が…

［マスター、大事な事忘れてるよ…あの人達の生活どうするの？］

「あっ……」

確かにとｏｒｚの格好になった。

ゼントラーディ兵士達はとりあえずコンテナに座ってもらっているが…

……しばし考え…

「とりあえずマイクローン化してもらって、生活環境ととのったら、巨人に戻ってもらうか…」

マイクローン化装置を設置し、

お願いしマイクローン化してもらった。

プライドが等言ってたが…生活環境がで、渋々同意してくれた。

「じゃ、いってくるわ」

［また？…まぁいってらっしゃい…天元山の対応で忙しいのに…］

「明日なんだよな？」

「うん明日。準備は万端にととのってるよ。マスターいない前提で動いてるけどね～」

「……まぁ…じゃ…」

世界扉を開き潜る。

カオルは再び地球に降り立ち、ルーロスをだして、マクロス艦を探して運んでもらう。

「地球にいるでつよ…みえたでち」

戦闘終了直後であろう…

接触し、艦内に侵入した。

マクロス艦内プロメテウスの格納庫では、新装備のアーマードパック、スーパーパック等があったのでついでに取得しておく。

「ひゃー、今回は派手に撃ち込まれたなぁ…」

「こっちもだ、みてみろよ」

スカル1、フォッカー機を点検している整備兵達だ…

コクピットを覗きこみ…

（さて急ぐか…）

カオルはクローディアの宿舎へと急ぐ…

クローディアの部屋の中では、
フォッカーがソファでくつろいで、ギターをつま弾いている。
クローディアはうしろを向いてパイン・サラダをつくっていた。

「輝も幸せなやつだ。腕のたつ部下を持って」

「なんかいった？」

「ふっふふふ。なんでもない」

「パイン・サラダ、もうすこしでできあがるわ。
それまでちょっと飲んでて」

「もう、飲んでるよ…」

「はい、できたわ。お待たせ。あら、…もう酔ったの？」

フォッカーがゆっくりと前に倒れてゆく…
倒れたフォッカーの背中に3箇所の銃創。血が染みだしていた…
「はっ、ああ…！…ロイ！　ロイ！！」

最初は取り乱してたが軍人でもある…
「ロイ！しっかりして！」

フォッカーを肩に担ぎ、表の軍用車に乗せ、
パトライトをボンネットに装着させ鳴らせながら走りだす。

車中から携帯で連絡し…
「ロイ、もうすぐよしっかり」

病院玄関に車を滑りこませると、連絡を受けてたスタッフがタンカにフォッカーをのせる。

「ロイ！しっかり！頑張って！」

「中尉、ここまでです。あとは私達に…」

「ロイを、ロイを、よろしくお願いします！」

手術室に運ばれてく、しばらく時が流れ…ライトが消える。

「先生」

「できる限りの処置はしました。
あとは本人の体力次第です…
しばらくはＩＣＵにて経過をみます」

「……」

そして1時間後…

「駄目か…」

心電図はフラット、電気ショック等全て試したが…

「１９時１８分死亡を確認、呼びにいくか…」

「はい…エンゼルメイクの準備をします」

ＩＣＵが無人になる。

カオルが医療カプセルをだし、フォッカー少佐入れ…作動、変わりに擬態をとりだし設置、管をさす。

看護師が入ってきて…見られたので、
精神乗っ取り、１０分間ぼーっとしてるように…と命令をしておいた。

こっちの処理が完了後運ばれて、
病院の死体安置室のベットに横たえられたフォッカー。
かたわらに医師と看護婦。
クローディアが信じられないといった顔つきで呆然と立っている。
医師と看護婦、一礼して立ちさる。クローディア、フォッカーの亡骸にすがりついて泣く。

（クローディアさん、
フォッカー少佐はこちらで活躍されると思います…）

カオルはその場を離れ、強襲揚陸艦ダイダロスに向かう。
すると前はなかった、デストロイドのファランクス、スパルタンを取得し、

世界扉を唱えた。

5日目

カオルは世界扉を使い時を跨ぐ…
勿論休憩を挟んだ為に時間は経過したが…

さほどマクロスは移動してなかった為に、マクロス艦内に出た。

そのころ艦内部では…

「柿崎、いいところって何処なんだ?」

「隊長、柿崎の案内に任せましょうよ。男が楽しめる場所ですよ」

「そそ、いいとこいいとこ♪」

「たくぅ…現金だなぁ…」

「けど…こっちにあったかな?」

しばらく車を進めると…

「ささ、隊長つきましたよ」

「ほぉ、いいにおいだ」

「あ……か、柿崎君…いいとこってここ？」

「そうですよ、ささ入っておいて下さい。駐車場にとめますから」

降りてほうけてるマックス。

「ん？どうしたマックス？」

「あは…はは…いや隊長、普通男がいいとこって、こういったのじゃ…」

「ん？なにいってんだ？」

「はぁ……まぁ次は隊長も含めて経験値アップさせますよ…駄目だこりゃ…」

諦めてステーキハウスの中に入ってく…

カウンターに座る三人、

「うほ～♪隊長の奢りだし、マスター、サーロインステーキの特大、ミディアムのガーリックソースで」

「か、柿崎くん……」

「いいっていいって…さ、マックスたのみな……

ＡＴＭあったよな？」
ＡＴＭからはボソボソっとつぶやいてた…

「じゃ…お言葉に甘えまして……
俵ハンバーグステーキのセット…、あ、野菜バーつきで」

「お飲みものは？」

「ブラックコーヒーでお願いします」

「マックスそれでいいん？隊長の奢りなのに」

「それでいいんですよ」

「じゃ、俺は３／４ポンドハンバーグいってみるかな？」

「畏まりました」

「隊長？…へえこれも旨そうですね」

「ちょっと表にでるから、すぐ戻るからな」

「わかりました隊長！」

輝、表にでてＡＴＭへと…

「ステーキ、ステーキ♪」

「たく柿崎君、大人だとおもったら…」

「ん？隊長の奢りだしここはステーキだろ～♪」

「大人のいいところはもっとあるだろ？」

「例えば？」

「美人な女性があれしてくれるとことか…」

「あれ？って…」

「ん？なに話してたんだ？」

「い、いえ隊長…早い戻りで」

「クレジットにしようかまよったが、現金おろすだけだしな…」

「柿崎君続きはあとでな…」

すると、

「ミディアムでサーロイン特大のお客さま」

ぶ厚いステーキが柿崎の前におかれた。

「来たきた！　う～、うまそう！」

確かに美味しそうだ。

２ポンド９００グラムは越えてそうなステーキ。

ジュージューと湯気があがってる。

「柿崎君、ほんとうにそれぜんぶ食べるの？」

「食えなかったら包んでもらうさ！　はっははは…」

『バルキリー隊、ドリンク少尉、注文の品がとどいている。至急もどるよう。

繰りかえす。バルキリー隊、ドリンク少尉、注文の品がとどいている。至急もどるよう』

「この放送は！」

「全機発進だ。柿崎、行くぞ！」

「あ～あ、俺のステーキが…」

柿崎、名残惜しげにステーキをひと切れだけ食べて席を立つ

続にいう、死亡フラグ…

完食すれば立たなかったろうに…

カオルが取り付いていたスカル３番機、柿崎機にパイロットが乗ってきた。

『スカル小隊１番機、発進します』

『了解』

『柿崎先いくぞ』

「了解であります」

スカル１が機体を滑らしてリフトデッキへと向かいはじめる。

追って整備兵に合図し、

スカル３、柿崎の機体もリフトデッキへと進ませる。

甲板にあがり、カタパルトが装着された。

「スカル３、柿崎出ます！！」

カタパルトに押し出され空に舞うバルキリー。

『スカル・リーダーより、２番機、３番機へ。
戦闘中はくれぐれも油断するな。死んじまったらおしまいだからな』

「了解了解」
『わかってます』

バルキリー隊が敵戦闘ポット群におそいかかる。
輝機敵空戦ポッド３機を背後に引きつけて、
スカル１がガウォークへ変形、急速反転し敵機３機を撃墜するのが見えた。

「さっすが隊長。これで少佐もうかばれますよ。
……うわ～！！」

横から至近距離にあらわれた敵機にねらわれるが、マックス機がこれを撃墜すれ。
『油断するなっていわれたばかりだろう！』
「すまんすまん」

『バルキリー隊各機は、敵第二波に注意するよう』

『バリアシステム、スタンバイ』

『スカルリーダーより各機へ、
マクロス近辺は他のに任せて周囲の警戒にまわる』

『「了解」』

『いくぞ！』

「ん？なんだ？」

『隊長…』

山間から姿をあらわしたカムジン艦隊を発見する。

『スカル1よりデルタ1、地上近くに敵の大型戦艦を発見。
至急他の隊も回してくれ』

『了解、パープル、シルバー、ブランピットはスカルの援護にまわれ。
これより本艦はバリアシステムを作動させる。
援護射撃できなくなるので注意せよ』

『バリア・システム、急速展開。全方位バリア、作動』

マクロス全艦が、緑色の球体につつまれ始める。
そこにカムジン艦隊から、砲撃がくる。

「ああ、マクロスが…」

『大丈夫さ…』

爆発のなかからマクロスが無傷であらわれる。

「ははは、すげえや、あれだけの攻撃をはねかえしたぜ」

『これであきらめてくれればいいけどな』

しかし、カムジン艦隊の砲撃がつづく…

『敵艦隊、イエロー・ゾーンに侵入。なおも接近中』

「諦めてくれないかよ…ステーキが…」

『まだ気にしてるのか?
そんな事いってたらステーキに食い殺されるぞ』

『隊長、ステーキに食い殺されるってどんな生物なんですか?』

『……ん…左手敵機たたくぞ!!』

『逃げましたね…』

空戦ポットを12機程撃墜…
しかし、今だに撤退しない敵戦艦。
そのうちに通信がはいってくる。

『こんどこそ敵は、本気かもしれないわ。
バリアが破られないうちに、すこしでも戦艦をたたいて!』

『やつらが本気なら、勝ち目ないかもしれませんよ』

『一条中尉！！フォッカー少佐ならそんな弱音は吐かなかったわよ！』

『了解。マックス、柿崎、聞いてのとおりだ。ポイントＡＲ－１１８１の戦艦をたたく、いいな！』

『いいも悪いも、マクロスがやられたらおしまいでしょ』

「そうですよ、隊長！」

『ようし、ふたりとも死なないていどにがんばれよ！…つづけ！』

敵艦甲板にとりついて砲門を攻撃を加える。

その間にもマクロスはバリアに負荷がかかり赤くなってく…

『バルキリー・ウィンザー中隊全滅』

『敵艦隊、レッド・ゾーンに侵入。なおも攻撃続行中！』

カムジン艦隊の砲撃がつづき…バリアがピンクになる。

『全バルキリー隊に告ぐ！　至急遠方に待避せよ。

繰りかえす、至急遠方に待避せよ！』

『待避だって！？』

『バリアが爆発するわ。あなたたちだけでも逃げて！』

『それじゃマクロスは！？』

バリアのエネルギーが膨張しはじめる。

『逃げて…！！』

「た、隊長！」

『急速退避！！』

バトロイドからファイターに変形し、行動に移る。

膨張したエネルギー波がカムジン艦隊とオンタリオ自治区を飲みこんでゆく…

『柿崎、遅れるな、柿崎！』

「ダメです、隊長、間にあいません！」

柿崎機、エネルギー波に飲まれて分解しかかる。

「ぐわあああ…！！」

カオルは柿崎を引き込み離脱した。

……

戦闘が終了する。その後にはマクロスを中心とした巨大なクレーターが出来上がっている。

敵味方全てを巻き込み、直径５０キロ以上にわたって壊滅状態に陥っていた…

バリアがささえていたエネルギーがいちどに爆発し全てを薙ぎ払った…
いや溶かしてしまったのだ。

カオルは廃墟をあとに合流して…世界扉を唱え世界を渡る。

……

カオル報告

ゼントラーディ軍各種
ファランクス
スパルタン

アーマードパック
スーパーパック

第１５２話　マクロス編　あ～あ、俺のステーキ…　投稿日２０１１０７２４

ナギ少尉「……なる程ね～」

作者「今回はサブタイトルは、有名な死亡フラグをつけてみましたが、
内容が予想できましたね～」

ナギ少尉「そんなに有名なの？」

作者「戦闘でる前にはサーロインステーキをくうな…とか、
オペレーターといちゃつくなとか…
妊娠発覚とか、かな？
あとは、背後をふらかえると…とか」

ナギ少尉「一つジャンルちがうのがあるけど…
ん……よしじゃぁ、おばさんにステーキ食わせてナキものに…」

作者「あ、一切れだぞ一切れ…」

ナギ少尉「う…難しいかも…がめついから、あのおばさんは…」

作者「あははは……まぁ、今回は主要メンツが二人はいったしな」

ナギ少尉「でもでかいのね…４ｋｍ級かぁ…と、あ次回予告の時間ね。

駆け足するマクロス編、次回血戦…お楽しみにぃ」

第153話　マクロス編　血戦　投稿日20110726

六日目

カオルが世界をでると…地球に出た。

（と、まずは…）

分裂し…

（アームドとグランドキャニオンよろしく～）

（焼かれないように頑張るわ）

と別れたあとルーロスを出し、一路マクロスへと向かう。

マクロスにつくと…戦艦が、正対近距離で停止されていた。

ここで更にわかれ…

（ラプラミス艦よろしく）

（了解）

マクロス艦内では…

「なんですと！　それはまことで？　はあ、はあ、

…するとわが艦隊は…、わかりました」

丁度エキセドルとマクロス主要メンバーとの会談が行われてた。

「マクロスだけでも地球を脱出しませんかな」

「マクロスに地球を見すてろと？」
「さよう」「それは受けいれられん。
マクロスは地球統合軍に所属する戦艦である以上」
「いや、とうぜんの返答ですな。
ならばわが艦隊の脱出がむずかしい以上、共通の敵に立ちむかうことになりますな」
「なに、それは！？」

「基幹艦隊がこの星系に向かったとの情報が、いま入りましたわい」

「……基幹艦隊が！」

「４７９万１２２隻の戦闘艦を擁するボドル基幹艦隊。
とうとう動きおった」

「覚悟を決めねばならんようだな。地球が生きのこるかどうかは、
運を天にまかせるしかないが…」

「できるかぎりのことは！」
「うむ」

「冗談じゃない。５００万の敵なんて、もう終わりだ。
こんなことになるなんて…」

ミリアとマックスがイチャイチャしはじめ…

「最後ではない」

「えっ！」「なに！？」

「マクロスはたった1隻で、われわれと戦ってきたではないか。
勝つ保証はないが、戦いかたはある……
なにか図を出せるものはあるかね？」

「おい」

「はっ！」

会談の場から一気に作戦会議の場へとなっていく…
……
ＰＣに入力しおわったボドル基幹艦隊の構成図をスクリーンに表示させながら、
エキセドルが戦略を説明している。

「まず分岐艦隊では旗艦が沈められた場合、
自動的に撤退措置をとる命令が出されていることが多い……
そしてもうひとつ」

「もうひとつ！？」

「もうひとつはベルナル級、すなわち上位3ランクまでの分岐艦隊旗艦にのみしか、
べつの基幹艦隊のポジションを知らされていない」
「なるほど。つまり蛇の頭をつぶすのか！」

「それだけでも重戦闘艦が２０００隻を超しますがな。
４８０万を相手に地球と１０００隻でやってみますかな？」

「エキセドル記録参謀」
「プロトカルチャーに毒されたわが艦隊の総意がこうなってしもうた」

エキセドル、グローバル艦長に手をさしだす。グローバル艦長、手をにぎりかえす。

「ミンメイさん、あなたの歌でわれわれは根底からかえられてしまいましたわい」
「えっ、あの…。あたし…」

「もはや避けることのできぬ基幹艦隊との戦いは、激烈なものになるでありましょう。ふたたびあなたの歌を聴いて感動することができなくなるかもしれん。
ミンメイさん、いまここで歌って聴かせてはもらえませんかな」

「はい」
ミンメイ、私の彼はパイロットを歌い始める。

歌い終わる頃…ボドル基幹艦隊、ぞくぞくとデフォールドしてきはじめた。
『デフォールド反応多数…計測はいります』

「きたのか?」

「きましたかな?」

地球周辺に、基幹艦隊の緑色の艦影がひろがってゆく…

クローディアが艦長に報告を入れる。

『デフォールド反応、計測限界を突破！』

モニタにボドル基幹艦隊が映る。

「おお、基幹艦隊が！」

マクロスの空襲警報が鳴りひびく。

『全艦、第一級戦闘配置』

「イエッサー。全艦、第一級戦闘配置。繰りかえす、全艦、第一級戦闘配置」

「各作業員は反応弾頭への換装作業いそげ！」

「トマホーク第４中隊は、センチネル外へ展開の上、待機」

マクロス・ブリッジにグローバル艦長とエキセドルが入室してきた。

「反応弾頭への換装作業は？」

「現在、７０パーセントまで完了しています」

「そっちは？」

「バルキリーへの装備が２０パーセントほど残っています」

「いそがせろ！」

「了解」
「反応兵器か」
「そちらの艦隊との決戦にと温存しておいた反応兵器を、
このようなかたちで使うことになろうとは…」

「まったくですな」

カオルはそのころ…
更に分裂していた。

（中型砲艦よろしく）

（了解）
艦の外に出てく分裂体…

そしていよいよ目の前に１４００ｋｍ級のボドル基幹艦隊旗艦、
フルブス・バレンスがデフォールド…姿を表した。

「ふぇ～でかいでちね～ごちゅじんたま…１４００ｋｍくらいありまちゅよ」

「だろうな…４ｋｍの船をその内部で運ぶ事もできるしな…」

「まーかーしたでち…ついたでち」

「ん…ありがとうな…記録とっといてくれ。
あとで回収よろしく」

「あいあい」

ルーロスの外にでると旗艦にとりつく。
ルーロスは安全圏へととっとこ離脱してく。
何しろ距離感が違う…
そうその構造は月をも飲み込む大きさなのだ。

カオルが取り付きはじめると…
ボドル基幹艦隊、砲撃準備が進みはじめる。

地球の命運は既に決まっていた。
地球上の全天を覆う形で現れたボトル基幹艦隊そのかず約４８０万隻、しかも全てがｋｍクラス…

地球に一斉射撃を開始する…
幾億ものビームが地球に降り注ぐ。
地表が真っ赤になり……

「全滅だと！」
「そんな…うそっでしょう…」

マクロスでは、各都市、各基地とも一斉に連絡途絶された結果による、
騒ぎとなっていた。

スクリーンに映る紅く染め上がった地球…
グローバル艦長は黙って見つめていた。

「地球上の各都市ともやはり…」

「地球人類はもはやマクロスにのる人々だけになったのか…」
「いまや目の前にいる基幹艦隊を退けなければ」

「滅びる…という事ですか…
なんとしてでも…」

そんな中、

「ん?……ふむ……成る程……良い案かもしれんな……
エキセドル記録参謀お話が…」
クローディアから耳打ちされた艦長が…

「なんですかな?」

「1番始めに歌を聞いた時如何でした?」

「……ふむ……デ・カルチャー!でしたなぁ」

「……いや、…聞き方がわるかったですか…何か行動は起こせましたか?」

「…何もしばらく起こせなかったですな…」

「……ふむ…勝率があがるかも知れませんね」

「グローバル艦長、勝率あがるとは？」

「はい、実は一条輝からの提案が上がってきて…」

……

「ブリタイ司令、そちらの艦隊でリン・ミンメイの歌を同時翻訳して、
全軍用周波数を使って発信していただきたい」

『それはかまわぬが、いったいなにを？』

「ボドル基幹艦隊の兵士たちは、プロトカルチャーの実態を知りません。
そこで彼女の歌をながせば、かれらはカルチャー・ショックをうけて一時的にせよ、
指揮系統を混乱させることができるはずです」

『その混乱に乗じて、ボドルの旗艦をたたくわけか』

「正面から戦って勝てる相手ではありません」

『よろしい。歌をながせば、わが兵士の士気もあがりましょう』

「うむ！」

ミンメイ、ブリッジに案内されて入ってきた。

「グローバル艦長」

「おお、ミンメイさん。連絡は一条中尉から聞きました。かれのアイデアをもとにして、作戦準備をすすめています」

「歌ってくれるのですな、われわれのために」

「ええ。わたしでお役にたてるなら」

「うむ」

「それともうひとつお願いがあるのだが、あの映画のなかに出ていた男と、例のキスというものをやってもらえませぬか？」

「ええ！？」

「ええ！？」

「す、すみません。でも、どうしてキスを？」

「われわれゼントラーディ人に心理的ショックをあたえるには、あれがいちばん効果的なのです」

「わたしからもお願いします」

「わかりました」

そんななか…全滅したと思われる地上より巨大なビームが発射され、ボドル基幹艦隊を飲みこんでゆく。

「地球北極上空に、高エネルギー反応。敵艦隊の一部が消滅していきます」
「消滅！？」

「最大望遠です」

「これは、グランド・キャノン！」
「グランド・キャノン！？」

「アラスカ基地が生きているんだ！」
「わあ！　やったあ！　うふふふ」

グランド・キャノンより発射されたビームは、ゼントラーディ８０万の艦艇を飲み込んで消滅させた。

「マクロスならびにブリタイ・アドクラス艦隊全戦闘員に告げる。我われはこれよりグランド・キャノンのあけた空域をとおって侵攻する。
リン・ミンメイの歌が中継発信されている艦、および戦闘機以外はすべて敵だ！
…諸君らの検討に期待する」

私の彼はパイロットのイントロがながれ、ミンメイが歌いはじめる。
歌に合わせ全バルキリー隊発進　、
続いてマクロス・ブリタイ艦隊が発進する。

ボドル基幹艦隊では、混乱の坩堝にあった。
【なんだ、この映像は！】
【わかりません。
われわれの使用周波数全域にわたってながされています】

「射程圏内突入。反撃ありません」
「成功だ！」「全艦撃てっ！」

マクロス・ブリタイ艦隊一斉砲撃開始。

私の彼はパイロットを歌いおわると、カイフンがあらわれ、ミンメイに近づく。

お互いに手をとりあう…そしてキス…

【おおお…！】【これは…】【男と女が！】【うわあああ！！】

キスをしているミンメイとカイフンが離れ、小白竜のイントロがはじまった。

このチャンスに全バルキリー及び全艦艇が突撃敢行をしかける。

血路が更に開け、その道をマクロスブリタイ艦隊は突き進む。

マクロスやブリタイ艦隊よりミサイル、ビームが艦に対して撃ち込まれ集中してうけ、轟沈してく…

また各バルキリー等から反応弾が船クラスには撃ち込まれ、純粋水爆により、巨大な火花があがり、爆沈してく。

それに対して動きが鈍いボトル基幹艦隊…少しは抵抗あるも、なずがままにされてく…

シルバームーン・レッドムーンが流れる。

だが数の差はいかんともしがたい、

４０００：１…

段々数が減るブリタイ艦隊、

愛は流れるが流れている…やっとカムジン艦隊も参戦、突撃敢行する。

勢いが増した。

この機を逃さず、ブリタイ艦隊、ラプ・ラミズ艦隊による果敢な砲撃…

マクロスから前包囲に弾薬を惜しまず次々と反応弾やミサイルが発射される。

（ああ、やっぱり間に合わないか……）
カオルはマクロスの接近をみてた。

「目標接近！」
「全反応兵器、スタンバイＯＫ」
「護衛機各隊はただちに散開」
「ピンポイント・バリア、艦首へ収束」

「いよいよですな」
「うむ。マクロス・アタック！」

マクロス、ボドル旗艦に突撃してく。
ピンポイントバリアで、外壁を突きやぶり内部に侵攻。
構造物が次々紙のように破られる。

そして、ボドル・ザーのいる中枢部に到達。
【プロトカルチャーめ！】

マクロス、デストロイドから全反応兵器発射…
それと同時に全方位バリア展開される。
【どわあああ！！】

ボドル・ザー、閃光につつまれる。
ボドル旗艦が爆発によって内部から変形し、
やがて大爆発を起こす。

１４００ｋｍに及ぶ構造物の大爆発、周りを巻き込み広がる…

旗艦を失ったボトル基幹艦隊、
また上位を失った艦隊は、

生き残った分岐艦隊クラスはフォールド敢行、
損傷をおった艦は地球の重力にひかれてく…

そして…マイ・ビューティフル・プレイスが流れるなか、
損傷をおったマクロスが地球に降下していく…

（はぁ……）
ルーロスを出し船内に入ってため息をついていた。
分裂体を回収する為だったが…

「ごちゅじんたま、どうちたでちか？」

「いやさぁ…機動要塞取得に間に合わなくってさ…
二日あれば確実だったんだけどな…
あとは１０日程フォールドしなきゃならないから…」

「フォールド？」

「ワープの一種なものさ…」

「ごちゅじんたま、１０日間もワープするでちか…
キャーティア星より遠いんでちね」

「あ、技術形態違うしなぁ…主観時間と客観時間のズレはある？」

「ないでち」

「な、キャーティアの技術だとワープ距離どれくらいかかるん？」

「しちゅりょうと、しつりょくに比例するでちが、３０００光万年は小型挺くらちゅならかのうでち、記録されたでち」

「ふ～む…」

（あとで組み込むか？）

「ま、いいか…今は回収して帰還が先だな」

「あいあい」

……

カオル報告

分裂体Ａにより
アームド級空母
駆逐艦等

分裂体Bにより
ラプラミズ艦
反応弾
リガード
クァドラン・ロー
ヌージャデル・ガー
等

分裂体Cにより
中型砲艦等

本体…
取得失敗

第１５３話　マクロス編　血戦　投稿日２０１１０７２６（後書き）

ナギ少尉「始めて取得失敗したね～」

作者「流石に１４００ｋｍ級はあの短時間では無理あるだろ…
の回という事で」

ナギ少尉「けど月よりでかい機動要塞か…」

作者「こっちの世界にもってきたら間違いなく、
落着ユニットを打ち込んでくるね」

ナギ少尉「ねぇ作者このサイズの機動要塞って、他にある？」

作者「ん～…サイズが小さいが、イゼルローン要塞がある意味有名だろうな…
あとはデススターか…
けど１４００ｋｍというふざけたサイズではないしなぁ…」

ナギ少尉「つまり、馬鹿みたいにでっかい要塞なのね」

作者「巨人、いわゆる人間の５倍サイズの人が運用するからそのサイズになる…

というのがあるよな。
まぁ…そこまでいかなきゃでかくする必要は…
イゼルローンはあるか…
ん～～」

ナギ少尉「作者が悩み始めたから…次回予告で…天元山はどうなった?、次回、マクロスより帰還…お楽しみにぃ♪」

第１５４話　マクロスの世界より帰還、そして…　投稿日２０１１０７２８

話は少し遡り、

２００１年１２月３日天元山午前３時

やはり天元山は噴火しようとしていた…

しようとしていたが…

噴火が未然に塞がれてしまった。

何故か？というと…

勢いよくマグマが上昇する傍ら、吸い取られているからだった。

異世界軍の作業により、天元山にできた溶岩ドームは破られ、

パイプが更に内側の火口にぶち込まれ、

パイプはマグマが内部で冷えてつまらないように、

温められて滞留所に導いてく、滞留所からマグマは冷やされて、

岩石資材として処理搬入されている。

武は…

（こんな楽でいいのかな？）

と最大望遠で作業を見つめながら、老婆のいる村を見つめていた。

一応は疎開注意をだされたが、もちろん老婆は従わなかった。

なので万が一を考え２０７Ｂ訓練小隊の実機行軍訓練、屋外野営訓練を兼ねて、
派遣はされてきたのだ…

だが、前述の通り噴火は未然に防がれ、
何事も今まで通りの生活を老婆は今後もおくる事ができるだろう。
何事も今まで通りが１番であろう…

（うん…これでいいんだよな？）

老婆達の村は鉄原ハイブ陥落後、
地域調査されＢＥＴＡの影響無しとの事で、
合法地域に指定された事も付け加えておこう。

２００１年１２月５日未明

「ただいまっと…」

［マスターお帰りなさい～］

「さてかわった事は？」

［天元山の資源回収ずみ、

あとは月面攻略作戦が7日午前0時に発動可能になるよ」

「お、そうか、いよいよだな…
1番準備が長かったかもな…月面攻略作戦」

「だね～軌道上からの高出力レーザーによる一斉射撃だもん。
しかもピンポイントに向けての…」

「ま、480万隻による地球壊滅はみてきたけどな」

「はい？地球壊滅？」

「今回いった世界だね。
まぁ地球自身が崩壊しなかったのが、信じられんが……」

「マスターみせて～」

「ん…」

ルーロスをだし、記録データを転送させる。

「うわぁ…えげつない過剰戦力だなぁ…」

「だろうな…普通そのサイズなら、
５万隻くらいで十分地球は滅びるのにさ…」

と、鯖にデーターを出力してくと…

［はい？マスター、マジですか？］

「マジだよ」

［あ、……巨人族の運用する船なのか…にしても指揮艦のでかいなぁ…］

４ｋｍ、人間の約５倍の大きさ１０ｍ前後の巨人族、
ゼントラーディが操る戦艦にしてもでかいほうだ。
単純に５倍の比率があるとおもってよい。
それでも８００ｍ級の通常世界でも巨大戦艦に匹敵する。

「なぁ…これらを作るのに時間どれ程かかる？」

［サイズからすると、４０００ｍ級ので最低２ヶ月はかかるよ～］

「やはりそんなにかかるか…」

［そのサイズの建造に対応してなかったから、
無重力での建造になるからね～］

「ん～…か…」

［プラットフォームができて、重力制御できてるならまだしも、
何もない空間での作業だから、
あっちいったりこっちいったり…だしぃ］

「だろうなぁ。
あ、もしこのクラスを建設するなら？」

［……コロニー型建造ドック造ったほうが、後々量産体制とるなら
早いよ～］

「そうか……まぁ…ん～……
とりあえず研究開発ようにマクロスと、４ｋｍ級を１隻ずつ造って
みてから考えるか」

［了解、量産体制は？］

「あとで考えよう。短縮方法はプラットフォームくらいしかないん

だろ？」

［そうだね～プラントを増設しても多分短縮はしないし…］

「となると…持ってくる必要があるか…な？
ルーロス改造が先か…ま、とりあえずもうねるよ」

［おやすみぃ～マスター］

ということで、Ｌ５の基地の側での建設作業が決定した事になる。

時間は経過し…

朝９時起きると、
マクロス組の人員をシェルターからだす事になる。

まずは、
フォッカー少佐、柿崎は治療中の為そのまま医務室送りに、
（治ったら柿崎君はｃ－０１入りか…）

その他統合軍は、
グランドキャニオン基地要員、後方支援の女性が比較的多かったが…

あとはウィンザー中隊、オプシロン中隊が柿崎加入時に。

その他ボトル艦隊との決戦時にも、

バルキリーパイロット２３名回収できた事を付け加え、
これによりバルキリー航空集団が結成できる事になる。
デストロイド、陸軍パイロット達は６名程入隊する形になった。
だが…

［マスター、統合軍パイロットの安田猛さんなんだけど…
帝国の斯衛に在籍認められたよ］

「あちゃ…じゃぁ統合軍というか地球側はこれ以上は無理か…」

マクロスは２０１１の話、この世界は２００１年…十分ありえる事だった。
ゼントランに関してはまずはないが…
条件解除できるのが混血等が進む７やＦの時代であろう。

さて…警備につく陸戦強襲型ガンタンクがつめかけてくる。
また研究用につくっていた、様々なＭＳが戦艦ハッチに詰めかけてきた。

カオルも魔撃震に同化する。
こっからがゼントラーディ勧誘の時間だった。

パワーでは通常警備につくターミネーター達が勝つであろう。
が、取り押さえられる？というのは別だった。
重量もないし、間接をキメるにもたらない…
殺すなら別だったが……

ゼントラーディ用に改造された、シェルターがをだしはじめる。
改造っても中の調度品とか食事とかを5倍に調整、また固定等を施したものだが…

警備につくMS達がスタンバトンを握る。

シェルターに扉をつけ、
【ご準備できたか…】

バン！！
【うらあぁぁぁ】

1番近いシェルターから女性ゼントラン達が襲い掛かってきた。

咄嗟にかわして、スタンバトンを打ち付ける。

その横からもゼントラーディが襲い掛かってきて、
戦艦ドック内部は大乱闘に陥った。

生身で約2倍の近くのモビルスーツに挑み掛かってくる。

がヤドカリ達が操るモビルスーツは的確に射出型スタンガンや、スタンバトンでもって鎮圧してく。

やがて１０分後…

数は多いものの、武器を持たない生身のゼントラーディ達は、鉄鎧のモビルスーツ達に鎮圧されてしまった。

（前回がうまく行き過ぎたんだよな…）

【殺せ！！生きて辱めは受けぬ！】

【隊長、諦めましょうよ…それに監察軍とは違ったバトルスーツみたいですし、
地球とかいう相手でもなさそうですし】

【直衛艦隊所属なのに、なによわねを！】

【え～よろしいっすか？】
と同化解除して話だす。

【！！マイクローン！……ここは地球か？】

【ま、そうですね…別の世界ですが】

【別の世界だと?】

【はい。是非とも戦闘にあふれるこの世界を救ってもらいたい…で、死が確定していた世界より引っ張ってきたわけです】

【ほう…戦闘にあふれるとな?それこそ生きがいだ!してその相手とは?監察軍か?】

【今から流れる異種生命体との生存競争です】

映像が流れる…

【ふむ、面白い…このミリア・ガード協力しようではないか】

【隊長が協力するならわたし達もね】

【ありがとうございます…で、すみませんこんなに大勢の美しい方々を、
勧誘するつもりはなかったので…
施設が整ってません。
今拡張工事中なので、今しばらくマイクローンになって頂きたいん

ですが…】

【期間はどれくらいだ?】

「11号?」

「2週間程で出来上がるよ」

【2週間程です】

【ふむ…まぁ良いだろう】

マイクローン化してもらいました。すると…

【か、可愛すぎる】

【ちびっこになったぁぁぁアアア】

【隊長、おちびさんですねぇ】

【マイクローンなんかきらいだぁぁぁぁぁ】

【あと、翻訳装置つくっておきましたので、つけて下さい】
とネコミミ型との口語翻訳装置、ブレスネット型網膜投射型翻訳装置を、
キャーティア謹製でつくっておいたので一人ずつにわたしていった。

「ふ～」

［おつかれさま～］

「早めにゼントラーディ用の勧誘ビデオをつくってな」

［了解…戦術機観点からのがいいかなぁ……］
と１１号が思考の渦に入っていった模様なので…

取得技術の具現化にはいる。
戦艦は今朝方作製を命じたので…

（まずはモンスターだな）

デストロイド　ＨＷＲ－００－Ｍｋ２モンスターの具現化にはいる。

１０分後…

その巨体を表したモンスター…
４０ｃｍ液体推薬キャノン砲４門、
両腕の３連対地ミサイルランチャーを備えいる。
そのフル装備重量は２８５ｔ、
実に二足歩行の機体としたらもの凄く重いものとなる。

（ん～だから甲板をぶち抜いたのか…）

都市部に配備されたら、その足で道路をぶち抜き、
下水道までいく重さと思えた。

（火力は満点なんだけどね…）

だが二足歩行にこだわった為機動力が劣悪過ぎ、
ホバー移動でも最大時速１５ｋｍの移動速度しかない。

（改修すべきでしょ♪で次回攻略の……）

下半身の脚部をタンク式に変える…
装甲もさほど重さ変わらないため、ルナチタニウム合金製に…

自重がその巨体を支える為２８ｔに増えたが、
モンスター改がここにうまれる。

６輪の無限軌道でその巨体を支え、
テストしてみないとわからないが、時速１００ｋｍまでは出せるか

な？と…
勿論沼地等対応のホバークラフトも装備ずみであった。
ホバークラフトの場合対接地面積が増えれば増える程安定する。
なので車両型のほうが都合がよかった。

「誰かテスト頼むわ」

［マスター了解～］

テスト場に引き出されていく…

（で次は…）
デトロイトシリーズではスパルタン、ファランクス、
ディフェンダー、トマホーク、を取得していた。

（肉弾格闘戦、対空ミサイルランチャー、対空戦車、主力戦車ねぇ…
肉弾格闘は興味あるけど…
あ、あとファランクスとディフェンダーか…）

今運用している対空直上系は別として、
対空が不足しているのは事実だった。

なのでとりあえず各1機ずつ生産を命じて、後ほど改修をうけるよ
うな形に…

（あとはバルキリーやゼントラーディ用のか…）

とりあえず実機、ＶＦ－１Ｓを精製し始めた。

バルキリーは宇宙空間戦闘強化を補う為に…

でいったが、実際のところ、

ゼントラーディの方が宇宙空間における機体性能は優れてる。

グラージ、ヌージャデル・ガーや、クアドラン・ローに限るが…

ＶＦ－１Ｓを精製し終えたので、リガードの精製にとりかかった…

限るが…の原因は…

（ん～……いいのこれ？）

できたリガードを、ゼントラーディの方にお願いして乗ってもらったが、

確かに環境というか操縦席が劣悪だった。

下手したら腹に膝があたる。

なので苦労して操縦する…というものだったのだ。

やはり別の機体が良いって事で言われてしまった。

２０ｍの大きさを誇るがもったいないない…

〜作注　ｗｉｋｉでは１６ｍとでてますが、どうかんがえても無理です〜

操縦性能の悪さにつきる…って事であった。

戦闘ポットでは、グラージ、
バトルスーツでは、
ヌージャデル・ガー、
それぞれの機体を精製すると、

クアドラン・ローの方が好評とは言えよう。

グラージは２５ｍを誇る戦闘ポットではある。
〔作注　同じくｗｉｋｉでは１６ｍとでてますが、
どうかんがえても無理です〕
が、クアドラン・ローの方が好評であった…

メルトランディが多数しめるから、
しょうがないといえばそうかもしれんが…

あと技術とすると、イナーシャル・キャンセラー、
純粋水爆による核反応弾といったところが目新しい。
純粋水爆による為、残留放射能がほぼ０になる。
（重慶で使われてたら、μＳＶクラスだったろうにな…
ま、しょうがないか…）

勿論その他ＯＴＭと呼ばれるフォールドや熱核エンジン等の技術もある。

（一通り検証したか…
とこんな時間だし明日の用意とりかかからないと…だな…ん～…）

月攻略作戦に対し、反応弾を、共通規格のミサイルとしてもっていこうとし…

今日明日の移動までに精製しておくことにした。

……

カオル報告

ノプティ・バガニス
ＳＤＦ－１マクロスアームド仕様
モンスター改テスト開始

その他機体は作製のみで後程…

第１５４話　マクロスの世界より帰還、そして…　投稿日２０１１０７２８（後

ナギ少尉「ミリア・ジーナスさんの登場です！」

作者「いや…ミリア・ガードさん…全くの別人だよ！！」

ナギ少尉「え～別人？」

作者「……オリの名前がその印象が強かったんだよ…
ま、それだけだ…」

ナギ少尉「作者のネタきれだね～」

作者「……はいそうです」

ナギ少尉「作者が苦しくなったので…
別の話にふってあげるわ…、
と…この話では、マクロスからは、モンスターをおしているみたいね」

「重砲撃タイプ、カオルの運用方法だと使わないわけがないので、改造を施す形になりました。

移動さえなんとかすれば…美味しい子です」

ナギ少尉「それで二足歩行から重量が分散できる、
車両タイプに下半身を変更したわけね…」

作者「モンスターの有効性はケーニッヒ・モンスターへと、
発展して行きましたのでわかると思います」

ナギ少尉「さて物語は、次は月に場面がいきますので…
次回、オペレーション・ムーンストライク、お楽しみにぃ」

第１５５話　オペレーション・ムーンストライク　投稿日２０１１０７３０

２００１年１２月６日
月面周回軌道

月を回る周回軌道近辺では、巨大な物体が所定位置に向け、ブースターを吹かし微調整をおこなっていた。

コロニーレーザー…

異世界軍ではアイランド１、２、３、４とつけられたこの巨大な構造物である高出力レーザー装置は、月面のハイヴ直上において、月の自転に合わせて同調作業に終われていた。

ラグランジュポイントでない箇所は、重力に若干引っ張られるが、反重力装置によりその引力は消され、完全に同調作業のみになる。

月面にはフェイズ７、８のハイヴが４つあり、それぞれをコロニーレーザーが狙っていた。

その周りを宇宙軍艦艇が護衛の為ついている状態になる。

もっとも軌道上に対する攻撃手段が落着ユニットでの突撃しかない

ＢＥＴＡだから、
それの迎撃用とも言えよう。

もうまもなく、この世界の人類が夢見た一幕があがる…

同日約６時間後…

国連ＮＹ本部の総会議場は騒がしくなっている。

人類の夢である月攻略作戦、
オペレーション・ムーンストライクの解説付き実況中継がおこなわれている最中であった。

異世界軍から解説者としてヒルダ女史が出席、
護衛にＣ－０１がついていた。

「まずは一射目で、ハイヴ構造物を破壊、主縦穴１ｋｍ近くまで貫通いたします。再チャージを行い２時間後に第２射目、繰り返し再チャージを行い、
第３射目で月のオリジナルハイヴ、サクロボスコ以外の反応炉を破壊、
第４射目でサクロボスコの反応炉を破壊、
月の攻略作戦を終了いたします」

「ハイヴを破壊して作戦終了というが、残ったＢＥＴＡはどうするのかね？」

「反応炉とそこにあるG元素を消滅させれば、後は断食になりますので餓死をまちますわ」

「それ地球のハイヴにできないのかね？」

「残念ながら大気による減衰がありますので、
軌道上からはさほど地下にたいしての効果が認められませんわ。
また生態系にどんな多大な影響与えるか計算できません。
地球人類を滅ぼしてよい…なら使えるかもしれませんが…
なのでこのコロニーレーザーによる攻撃は、大気がない、人類がいないのが条件になってますの」

「つまり火星は大気があるから…」

「はい、カオル大将から火星はコロニーレーザーでの攻略は行わず、次の第五惑星、木星の衛星攻略へと移動するとの言付けを承ってます」

ザワザワ

「むう火星は戦術機が必要って事か」

「今回の実況中継は、あくまでも月攻略作戦についてのになりますので、
後日火星についてはご説明があるとおもわれます。

そろそろお時間になりますのでよろしいでしょうか？」

時間は日本時間の、まもなく7日の0時をさそうとしていた。

「それでは皆様、お待たせ致しました。オペレーション・ムーンストライクの、
カウントダウン入ります」

スクリーン上にコロニーレーザーが映し出され、2分前からのカウントダウンが始まる。

「リアルタイムで流れてきてます」

コロニーレーザーの開口部から光がもれてきて、カウントダウンが0をさしたとき……
「おおおお！」
画面が明るくなり、コロニーから光の筋がでる。
中継カメラがスパンし、ハイヴ構造物が崩れていき…
光の筋が消えてくと…
その跡地には主縦穴があった…
主縦穴はコロニーレーザーにより更に広がっていた。

画面はしばらく写したあと、
他のハイヴにも切り替わり、同様に主縦穴を曝しているのが見える。

「それでは一射目について結果がでましたので、ご説明いたしますわ。
予定通りの出力で各ハイヴを直撃、構造物を崩壊させ、

ムーンハイヴ１の地下１．３ｋｍまで到達、
ムーンハイヴ２の地下１．５ｋｍまで到達、
ムーンハイヴ３の地下１．７ｋｍまで到達、
ムーンハイヴ４の地下１．８ｋｍまで到達いたしましたわ」

「いいかね？」

「はいどうぞ」

「すぐさまG弾の追加大量投入を提案するんだが」

「そんなに焦らずとも８時間後には月攻略の結果がでますわ。
また異世界軍ではそんなに、
後々影響が残るのは使いたくないですもの」

「……主縦穴広げてるくせに…」

「あら、後ほど恒久都市に使う等色々使い道ございますわ」

「……ふん」

「他にはございませんわね？約２時間後に第２射の発射の中継を行

います。
まだ先は長いですから、ひと時の休憩をとってください」
休憩を告げると、ヒルダ女史によってくる各国大使、
ご要望等だろう……

ルーロス改

船内部では、月のほぼ断面図を投影していた。
月の内部の様子はルーロス改、キャーティアの力によりまるわかりで、
各方面に情報を伝達していた。
カオルはルーロス改から、ティアンム提督の指示を聞いている。
『アイランド１、第１射目問題なし、エネルギーチャージ１０％』
『アイランド２、第１射目問題なし……』

「とりあえず問題なしと…」

「ごちゅじんたま、居なくっても大丈夫でちよ」

「ま、まぁとりあえずな……それにいざって時には反応弾を使うか

らさ…」

と後方に停車しているのビッグワンを見た。
貨物車両には反応弾がところせましと詰め込まれている。
１５両に積めるだけ同化して作ってきたので、５１０発積載されていた。

勿論共通規格はセイバーフィッシュからも発射可だ。

「まぁ…そうでちね…ならごちゅちんたま、
空いている時間でワープドライブつくってみないでちか？」

「ん…そうだなぁ」

さて、ワープドライブの作製のがでたので説明いれると…

まず常用的に使われているチューリップ…

ワームホールの一種で、
これは門と門を結ぶもので、本来はでる座標門を決める、
ジャンパーという演算装置の役割をする人が必要だった。
または純古代文明作品。

が、門を固定する事により演算ユニットは必要なくなり、
デストーションフィールドを形成し空間保護する事により、
門があるところならどんなに距離がはなれてもタイムラグ無しに…になる。

次にワープ。ワープアウトに事故が発生する確率があるが、主観時間及び客観時間が差がなく長距離移動できるものだった。
ワープドライブの性能じたいに因りけりともいえよう。
事故になるケースは、出現した場所になにか物体があるときに対消滅がおこる事になる。

なのでワープフィールド内部で、出現場所の探査可能なら、探査し、緻密な計算をし、ワープアウトをしなければならない。
または座標をずらす事にもなる。

次にフィールド航法…
これは周りの空間ごと移動し等価交換で入れ替える為、
ワープに比べて緻密な計算はいらない。
ただ座標を決めるのに演算能力は必要であり、
重力の影響を受けやすいので惑星近くは好ましくはない…
という事である。

今回提案してきたのがワープのメインエンジンである、
キャーティア製のワープドライブの作製であった。

「ん…じゃなんかあったらよんでな」

「がんばれ～ごちゅじんたま～」

船外に出て、虚数空間より資材をだした。
同化して、ワープドライブを形成しはじめる。

（ん？）

ルーロス船内に入り、

「なぁルーロス、大きさ等はどんなもん？」

「ごちゅじんたま、るーろすクラスあたりのワープドライブの、設計図みる？」

「多分みた方がはやいな、出してくれ」

設計図がでてきた。

「若干ボディを延ばさなきゃいけんな…で性能はどんなもん？」

「ぼくにつけるなら、一回のリチャージで、星図ありで１００万光年まで１時間の跳躍で可能でち。

リチャージ時間は２４時間でち」

「１００万光年か……」

「ごちゅじんたま、星図ありでちよ、ありで」

「？一緒だろ？」

「センサー内なら一緒と断言できるでちが、
センサー外は断言できないでち」

「…そうか…センサー有効距離はどのくらいだ？」

「１０光年でちね」

「１０光年か……ん？１０光年？？」

「そうでちよ…けど詳細まではわからないでちがね、
調査外でもワープ可能範囲とおもってくだちい」

「…わかった……とりあえずワープドライブ作るか…」

再び船外へでてワープドライブを作製し始めた。

（あれ？バーナード星系って…何光年だっけ？）

……

コロニーレーザーから2射目がハイブの主縦穴にそれぞれ突き刺さり、

穴を拡張させつつ更に奥へと入ってく…

月のＢＥＴＡには反撃手段がなかった…

光線級はいない。
人類の航空爆撃に対する防衛反応として進化したものであり、
原種はいるものの、まだ対応進化に追われているだろう…

しかし、１射目発射から3時間半経過する時ＢＥＴＡの行動に異変が起こりはじめる。

主縦穴を塞ぐように集まってきたのだ。
種族防衛犠牲的な予定外の行動をとってきた。

異世界軍では感知してたが、撃ってみない事にはわからず、
３射目が各ハイヴに突き刺さる。

すると…3射目には到達予定だったムーンハイヴ2が、
ＢＥＴＡの肉厚に阻害され、突き進むも残り５００ｍの地点で到達できなかった。

国連の総会議場は騒然となる…

「落ち着いて下さい…計測結果がでたでましたわ。
…プランに変更が入りました。アイランド2は再チャージ後４射目を発射いたします。

アイランド1は引き続き4射目以後、6射目まで行う予定になりましたわ」

「G弾の追加投入を！！」

「コロニーレーザーの出力なら問題ございません。
ただ、予想外の防衛反応がございました事は事実ではあります。
けど、それだけですわ」

予定外のアイランド2の4射目にてムーンハイヴ2の反応炉は破壊できた。
あとは、ムーンハイブ1がのこっている。
ひっしに盾になる為に主縦穴に詰めてくるＢＥＴＡ。

だが、その肉盾を焼き付くし溶かしながら、
5射目にて残り２００m地点に到達…
そして6射目にてムーンハイヴ1、サクロバスコハイヴの重頭脳級を溶かしきった。

「これにて、月面はハイヴが存在しなくなりました。
後はＢＥＴＡの活動停止を待つだけになりますの」

約５００万のＢＥＴＡを残して月攻略作戦は終了する。
国連総会議は閉会し、以後月面の経過報告がもとめられる事になる…
異世界軍は月面は監視体制に移行する。

ワープドライブを作製し終わり、ルーロス改を残して、

ビッグワンに乗車し帰還するカオル…

ルーロス改は月の内部まで監視できる唯一の機体の為、
今回は残していくことになった。

カオルは次のハイヴ攻略作戦に向け準備に動き出す。

……

カオル報告

月のハイヴの破壊を確認
月監視体制に移行
ルーロス改にワープドライブ搭載改造

第１５５話　オペレーション・ムーンストライク　投稿日２０１１０７３０（後

作者「オペレーション・ムーンストライクにより、
やっと月のハイヴは破壊できた状態ですね」

ナギ少尉「で、残ったＢＥＴＡがコアを持っていてハイヴを再建すると…」

作者「……多分大丈夫…ルーロスがすぐにみつけてくれるさ…」

ナギ少尉「けど、マクロスの世界に行かなくとも、
今回はよかった結果みたいね～
反応弾も使わなかったし」

作者「いざという時のメルトラン達だったけどな～…
彼女らは別の機会に…」

ナギ少尉「あ～…火星ね！」

作者「……え、えっとそうそう…次回のお知らせ」

ナギ少尉「作者にげないで。ネタ変えるから…

オルタ５フラグは消えてるけどバーナード星フラグ解禁みたいね」

作者「調べてみたら１０光年以内だったからびっくりしたわ…
まぁ…良いけどさ」

ナギ少尉「作者は他星系まで物語を広げるのか？
さて次回…やっとあるフラグを消化よてい…お楽しみにぃ」

第１５６話　月面監視の間に…　投稿日２０１１０８０１

２００１年１２月７日夕方、
カオルのったビッグワンが横浜基地へと帰還する。
ビッグワンが戦艦ドックへと停車すると、貨物車両との連結は解除され、
待機所へと進んでく。
貨物車両から核反応弾がリフトによって、
弾薬貯蔵庫まで運ばれていく。
勿論起爆信管は抜かれている状態である。
またミサイル自体も工夫はしており、万が一の撃墜爆発時においても、
ミサイル発射時に信管が発動位置に装着される為、
核反応は起こらず、
核燃料自体が反応おこるまでは自然界にあるものである為で出来ており、
暴発しても放射能はださずに、ミサイル燃料も開放露出で消えるようにはなる…
そのような防護策はとらなければ、
横浜基地にとても搬入できたものではない。
またマクロスにおいても詰め込めたものではなかった。

もし安全策がとらずに暴発誘爆したとしたら……
マクロス艦内部で誘爆と仮定すると、周囲５０ｋｍごと消滅する可能性もある。

そんなこわさもあるが…基本的に信管が接続されない限り、即応性にはかけるが、反応弾は反応弾ではないから安心して基地内で保管する事ができる。

（さて…）

少しレポートを見てからいくことになる。

二日前にテストを頼んだモンスター改において、

旋回能力は７度／１Ｓなるも、行軍能力が８０ｋｍ／ｈで一般的速度を有するのが確認とれた。

勿論……キャタピラによるものであり、
道路はほじくられるものではあるが…

少なくとも甲板をぶち抜く等はない。

（おっし良いんじゃないの？）

モンスター改、生産ラインにのる事が決定する。

（そういえば…）

統合軍パイロット達の存在がある。けどバルキリー隊編成には…

（ん～……）

と少し考えこみだした。

まずはマクロス世界のうりの、エネルギー転換装甲がバトロイド形態のみ…ということであった。

バルキリーの紙装甲をガンダムでいえばフェイズシフトさせ、ある程度の装甲、チタンセラミック合金並に引き上げる技術なのだ。

戦術機と比べても、紙装甲である。

もっとも、バルキリーＶＦ－１は戦闘機の進化した形態であり、遠距離レーダー範囲から叩く、

バトロイド形態は、巨人族に対抗するためのあくまでも進化中であった。

ＭＳは中距離＝視界内から叩くでコンセプトもちがうので問題は無いとはいえたが…

あと最大の難点、宇宙空間における熱核エンジンの燃費の悪さだ…

ＭＳ以上の機動力稼ぐのに強制推進剤をかなり消費する事になる。

ファストパックをつけてもその分稼ぐ事になるが…

結局は、（熱核バーストまちか…）とのことになった。

反対にクアドラン・ローは…

（結構完成度が高いな…オリジナルハイブ攻略あたりで使うか？）

レーザーが付いているので、敦煌ハイブ攻略には使えないが…
装甲素材をルナチタニウム合金に変更、耐久性をあげ、生産する事にした。
イナーシャルキャンセラーの整備稼動率を１００％にもってく事はたやすかった…

（ま、そんなとこか…あとは課題のだな…）
重慶基地の放射能と機動要塞取得失敗がある。

（……放射能汚染かたずけるか…となると…）

「じゃ、また取得いってくるわ」

［いってらっしゃい～…月は？］

「多分2、3日で帰ってくるよ。欲張りは今回しないし」

［は～い］

世界扉を形成し、わたる…

～～宇宙戦艦ヤマトの世界～～

ここは地球、
が……地面が露出し遊星爆弾の直撃で大地が焼けただれている。
地表は１０月だというのに気温５度をさしていて、
氷河期並の温度におちいって、海水は緯度が高いところで凍っていた。

ガラミスのはなつ遊星爆弾の影響でチリがまい、地球は今だ分厚い雲に覆われていた。

その為に太陽光線は遮れ、気温は上がらずどんどん下がり、
海水は緯度が高いところで固まり、大地は水がなくなり干上がっている。

宇宙から見れば赤く染め上がった地球が見えているだろう…

地表は遊星爆弾が来なくなったとはいえ、
高い残留放射能に覆われ、その放射能が地下へと浸透しつつあった。

刻一刻と地球人類は滅亡に向かいつつあり、
エクソダスしようにも、宇宙艦艇はことごとくガラミス帝国に破壊されていた。

そんな状態だったが、ヤマトの冥王星攻略により、遊星爆弾が去年の１１月以降こなくなり、
地球人類の命は若干延長された。

が放射能汚染は既に手遅れの領域にもなっていた。

汚染スピードの拡大は無くなったが、
地下都市にすむ人々は自分の命の期限が刻一刻とわかるようになり、
他の地下都市にすむ友人へ最後の通信をおくり…
途絶える日々を過ごしていた。

５月頃から地球にはガラミス帝国の偵察、襲撃はなくなりかろうじて延長された地下都市もある。

が、まだヤマトは帰還してない…

人々は地下深く、エクソダスしようにも宇宙船ドックにすら入れず、
刻一刻と…地球人類滅亡まであと…

カオルが降り立ったのはそんな地球であった…

時に西暦２２００年、宇宙より待ちに待った希望の光が舞い降りる。

ここは放射能防護服をきても１時間程しか持たない、
放射能汚染された沖縄近くの地下秘密ドック…

ヤマト発進後の遊星爆弾の集中投下により汚染された区域であった。

ドック内部は放射能汚染濃度高を表す緑のサイレンが自動で回っている。

カオルがたどりつき侵入してまつと…

（お…人がきたか…）

そこに、ガチガチの放射能高度防護服をきた人がドック内部に入ってきた。

ドック内部の管制室に向かうと、室内灯を点灯し、操作パネルを弄りはじめる。

ゴウン、ズズズズ…

地殻が割れはじめ放射能汚染大気の流入が始まる。

管制室の放射計の数値が１０メガＳＶを一瞬で振り切ったが…

直ぐに数字がありえない速度でおちてくる。

ドック内部の放射能警告サイレンの光がとまった。

ゴゴゴゴゴ

波動エンジンの音が鳴り響く…

「ヤマトだ！ヤマトがやりやがったぞ！！」

それまで放射能防護服に身を包んでいた人が、

被っていた面を投げ捨てマイクに向かって怒鳴っていた。

ヤマトが完全にオープンした隔壁からドックへとゆっくりと入ってくる。

コスモクリーナーＤを作動させ、周りの放射能汚染を除去しながら

……

ヤマトはゆっくり固定ブロックに接地し波動エンジンが停止する。
すぐにロックの外れた隔壁扉から、
人々がまちきれないとばかりに走って進入してきた。

「ヤマト！ヤマト！ヤマト！ヤマト！」

「救世主！メサイヤ！」

「おかえり！！ありがとう！！」

「ヤマト！ヤマト！ヤマト！」

まだ艦体が冷えきってないにも関わらず、
おわず艦体に抱き着き、余計な火傷をおう人々もいたぐらいだ。
ヤマトの進入したドックはお祭り騒ぎになる。

地球に残っていた人々の希望の船、宇宙戦艦ヤマト…9月6日、
日本秘密ドックに帰還した…

ヤマトの艦体の熱が覚めると艦のハッチが開く…

「ヤマト！！ヤマト！！」
艦のハッチから古代進を始めとして、
乗組員達が歓迎に答えておりてきた。

「雪！」

「お父さま、お母さま！！」

「おお…ゆき…」

「島にいちゃん！！」

「無事だったか！」

「にいちゃん会いたかったよ～～」

「ヤマト乗組員諸君！！やってくれたようだな」

「はっ！総司令官閣下！」

「して…このコスモクリーナーの効果の程は…？」

「閣下、わたしめからご説明いたします…」

さて、ヤマト帰還後なんにおいても最優先されたのは、
コスモクリーナーＤの量産になる。

コスモクリーナーＤは有効範囲内の放射能完全除去を行える。
が有効範囲内の話。

その為帰還時のプロトタイプ作成には生産の簡略化及び改良点が見つかっており、
地下ドックの隣には艦載機生産工場があり、すぐさまその使われてなかった工場機械でもってコスモクリーナーDの量産にはいる。

確かにコスモクリーナーDは複雑なシステムであったが、
作り方さえわかれば量産に向くたやすい装置であった。
勿論、ヤマトを作りあげた技術でもってたが…

なんにおいても設置稼動が急がれたのが、放射能が到達し、連絡が途絶えた地下都市群、またはギリギリで耐えている都市である。

今だ地上には防護服や宇宙船を用いても、近寄れない地域が多数いや殆どであった。

コスモクリーナーDの量産1号が1時間後には出来上がり、
（はやい！！）

すぐさま稼動させる為に輸送機につまれて飛びたっていった。

それからは、２０分1装置の割合でコスモクリーナーDが生産されてく…
まさに時間との戦いであった。

ここの秘密ドック地下にある地下都市の人々は放射能がまだ除去しきれてはないとはいえ、
被害が広まるのが収まった訳だが…
生き残りはたった１０００万人…

まさに時間との戦いだった。

しばらくするとまずは日本の地下都市が除洗された…

そしてアメリカの４都市、イギリス、フランス、ドイツ続々と各地下都市群から感謝の連絡がはいる。

手遅れ全滅の地下都市もわかってくる。

遊星爆弾が集中して狙われた地下都市もあったのだ…

二日目

カオルが取り付いて取得に翌日になる…

放射能除去以外にもコスモクリーナーＤの本領は発揮する。

天空に舞い上がるチリも吸収し始めたのだ。

それにより太陽が大地へと届き始め、気温があがりはじめてきたのだ。

地球は復興への第一歩を踏み出しているのだ…

放射能汚染区域にある各工作機器等も使いはじめられる様になる…

元々地球人類は３００億近くまでいたが、確認が続々とれ生存者は１０億人まで落ち込んでいた。

が、残された彼らには膨大な利用可能な土地、資材、機械等が残さ

れたのだ…

また…ヤマト乗組員の戦死者、殉職者の国葬が行われた。

沖田艦長を始め、尊い犠牲者のもとヤマトの航海は成功したのだ…

そんな中、カオルは技術を取得し終わり世界を渡る

……

カオル報告
宇宙戦艦ヤマト
コスモクリーナーD
イスカンダル技術

第１５６話　月面監視の間に…　投稿日２０１１０８０１（後書き）

作者「という事でヤマトフラグを消化しました」

ナギ少尉「…ガラミスは？デスラー総統どうしたのよ！」

作者「…多分というか距離感が１番長い戦闘にもなるしさ…」

ナギ少尉「ドリルミサイルで波動砲を突撃してくるじゃないの！」

作者「……楽な方法で取得できるならそれにこした事はない」

ナギ少尉「沖田艦長は？病死するじゃない！」

作者「ああ、あの人復活するし。国葬した後でな…
脳死にいたってないとかでさ」

ナギ少尉「え…？」

作者「まぁそういったワールドなんだよ。
放射能汚染あるのに、波動砲の砲門で大地の風をうけるとかさ…」

ナギ少尉「えっ……ＳＶの数値が低かったとか…」

作者「見えないんだよ？
放射能は…さ…住めない数値さしてるのにわざわざ生身でたつか？
普通」

ナギ少尉「カオルはたつよ」

作者「人外だからな」

ナギ少尉「沖田艦長も、古代君も島さんも人外だから…ね」

作者「……クッ」

ナギ少尉「さて、次回は…いよいよコスモクリーナーフラグ消化です。お楽しみにぃ」

作者「ふむ人外だとすると…ぶつぶつ」

第１５７話　ヤマトの世界より帰還　投稿日２０１１０８０３

２００１年１２月９日未明

「ただいまぁ」

［マスター～お帰りなさい」

ハンガーデスクに向かい、データーをいれ込み始める。
様子を見てた１１号から、

［マスター、とんでも技術手に入れたんだね～」

「コスモクリーナーＤの事？…結構すげえよな…」

ヤマトの波動エンジンもすごいが、コスモクリーナーＤの方がすごかった…

その実力も目の前でみた…

有効範囲内の放射能除去、及び有害と思える条件設定で除去が可能なのだ。

その距離半径５０ｋｍにも及ぶ。

たった５０ｋｍ？だと思うだろう…

いや５０ｋｍはすごい。
横は普通だが上下左右とわずの球形状が効果範囲なのだ。
遮断や、遮蔽などしてあってもだ。
その効能は、カオル自身が目にやきつけてきた。

また有効範囲内に流入してきた大気も浄化可能となっている。
浄化した空気が外にながれ、
効果範囲外においても流入流出により大気の浄化は可能だった。

そして…ＢＥＴＡの汚染によるものも除去できる可能性が大。

ここ重要ですね…

また、

重力が変になった場所も可能？

といった話になる。

さてはおき、

基本ＢＥＴＡの体液等に汚染された大地等は焼却…
つまり高熱による殺菌する必要がある。

黒ずむまで大地を焼く必要があるため、その焼却に使う燃料の代替も開発された位だった。
また焼却による二酸化炭素増加及び、気温上昇も問題になっていた。

異世界軍では土を運びプラントを使った浄化を行ってはいたが、
コスモクリーナーDを導入すると、
有効範囲内の浄化が可になると思われる為、その必要がなくなる事にもなる。

ついでに、BETAの汚染の話題になったので、
死骸についてだが、その大量の死骸の有効利用の研究も進んでいていて、
食用肉等に利用等も進んでいた。突撃級はワニ肉に似た味がしておいしい。流石に兵士級は処分されることにはなるが…

話をコスモクリーナーDに戻すが…やはりとんでも技術と思えよう。
なにはともあれ…

「とりあえず実機つくるよ…月はなんも進展なしだよね？」

［まだハイヴ破壊してから丸二日にならない位だからね～
そんなに動きはないってきてるよ］

材料の元になる鋼材と同化し始めた。

「そろそろ餓死してもよさ気なんだけどな…」

［人間も二、三日絶食しても餓死しないし、
最後に反応炉で補給したのもいるだろうし…］

形を形成する。
「まぁ、そうだな…気長にまつか…その間にやる事をやるとして…」

［まずは放射能汚染をだよね？］

内部機構を形作る。
「このコスモクリーナーDでだな…とあとちょい」

［つくづく思うけどマスター人外だよね…］

「それは認めるさ……と…できたてほやほやコスモクリーナーD量産型の完成！」

［おお～］

ヤマト本編にでた猛毒性のガスが出る点を改良、
生産性の向上をおこなったタイプになる。

本編終了後にいち早く全世界へと生産しばらまかれたタイプだ。

［マスター、実動検証は？］

「朝になったら重慶基地だな…」

［了解、お休み～］

翌日……

重慶基地内部にチューリップで直接転移し、
エアロックの外の地下一回汚染エリアにでて、
コスモクリーナーDを虚数空間からだし、電源を繋げ設置作業を終わらした。

「じゃ１１号、稼動してくれ」

［了解、マスター］

動作音をあげコスモクリーナーDが作動しはじめる。

するとガイガーカウンターの値がみるみる内に減ってくる。

３８０ＳＶ／毎時をさしてた数値がぐんぐんと下がっていき…
１ＳＶ／毎時を瞬くまに下回り、強度ガイガーカウンターでは計測不能になる。

低度ガイガーカウンターを変えると…
数値は自然界の数値辺りの０．０３μＳＶ／毎時に一気におちてた。

「改めてみると……凄いよな…」

［マスター、これどうゆう風に運用するの？］

「ん…そうだなぁ…」
ザメル並の大きさのコスモクリーナーＤをみて…

（ギャロップか？）

「とりあえず、ここにそのままと…あと中継基地にで二ヶ所だろ？
でその間の区間は移動できる艦船で放射能浄化してまわる形だろうな…」

［ギャロップ？］

「そそ…カーゴにのっけて、いざという時は逃げれば良いし…
重慶基地のはここでいいよな？」

［うん］

「じゃ…あとはＢＥＴＡ汚染のほうをみないとな…まだ浄化作業してなかったよな？」

［建築中の場所以外はね］

で、表にでてくると…以前はクレーターだらけだったハイヴ跡地の、平野部に作られた重慶基地の周りは、クレーター部は整地してあった。

「１１号、戦闘直後で汚染が酷い箇所は？整地されてない部分がいいな」

［記録からみるね……こっち］

基地から８Ｋｍ辺り離れた部分まできた。

この部分はまだクレーターが補修されてなく……

「うん…浄化されてるな」

土を掘って確かめていた。

ＢＥＴＡは死亡しその体液が外にでると、土に染み込んで、生物が育たなくなる死の大地になる。

その有毒な体液は量によって違うが、突撃級１体の死体からでも、むこう３０年分の量が大地にしみこむことになる。

その体液３０年分がコスモクリーナーＤの力で浄化されたのだ。

［重金属類は残ってるよ～］

光線級封じの重金属雲…その影響はやはり重金属中毒となってはでる。

が…コスモクリーナーＤでは資源として回収はされてはない。

「ま、こればっかりは地道に回収、ろ過、分離するしかないよな」

［だね…幸いシステム自体はできてるから、
現地で作業する形にもってけれるし］

プラント以外で、
単独で土壌中の重金属を分離回収するプラントもどきが出来上がってきたので、
あとは現地での作業まちとなっていた。

システムは簡単である。
土をプラントもどきの中にほうり込み浄化された土を戻すだけである。
また作業用ＭＳには重金属センサーが付いていて、汚染度が視覚で判断できるようにはなっている。

なので単純に色が濃くなっている土壌を、プラントもどきに大型シ

ヨベルでほうり込む形になる。
すると重金属が土から分離され資材となり、
有毒性がとれた土が出てくるわけだった。

また作業の補佐として、衛星画面でも重金属汚染濃度の、
大まかなのがわかるようになっていたため、
作業地域の選定の効率化にも役立つだろう。

「とりあえずカーゴに載せてお掃除タイムか…」

B55ハンガーの戦艦ドックに移動し、早速ギャロップのカーゴに
搭載の形を整える。

また関東以西いや、横浜ー新潟ライン以西の復旧についても、
重慶基地完成後には、避難地域からの指定解除の為の、
手助けしなくてはならない。

現在帝国臣民の難民2600万人は、5基のコロニーにすべて移動
し新たな生活を行い始めた。
自立型コロニー2基、工業用、農業用、観光用、これらがすべて帝
国の新たな領土となっている。

その何割かは元の生活に戻りたいだろう…
その為に汚染等は除去しておかなければならない。

［明日には3隻できるよ～］

「じゃ、中継基地設営に合流と、
中国浄化担当と、西日本浄化担当か…」

［了解、マスター］

「その次のから、重金属分解隊だな」

［了解マスター、西日本のＢＥＴＡ汚染除去すんだらそのまま大陸派遣？］

「朝鮮半島からだな…」

と浄化の話は進んでゆく…

コロニーの話題がでたのでついでに現在の状況をいれると…

現在メデューシン級を１０隻に増やし帝国海外の難民を、
コロニーに送り届けている形になっている。

現在統一中華戦線の約３１００万人の難民及び、
大東亜連合の約８４００万人の難民の受け入れている形になっている。

あの元中国では約６０００万人の難民が発生し、今は減って約３１００万人の難民になっている。

しかし、あの元中国には７３年当時には８億人を越える国内人口がいたのである。
しかしその１割にもみたない人口しか、難民が発生できなかったのである…
その撤退戦の凄惨さはおしてしるべきであろう。

またアフリカにマスドライバー施設及び駐留基地の建設が決まり、現在建設作業グループのせたトレインギャロップ群が、インド洋沖を行軍中だった。
ヒルダさんによると、アフリカ連合担当者は涙を流して、歓迎したという…

一通りコスモクリーナーＤを代表する浄化作業がきまった…

後は…
「ヤマトの建造か」

［ん～……１月位だね］

「波動エンジンは問題ない？」

［ちょっとてこずる程度かな？とりあえずは問題なさ気だよ」

「じゃ…頼むわ」

［了解、Ｌ５で建造するね～」

「ん？そっちの方がいいのか？」

［建造プラットフォームを作ったから、作業効率上がり始めたよ」

「なるほどな…了解」

ヤマトの建造も始まる。

……

カオル報告

コスモクリーナーＤ始まりました

ヤマトはじ……？

第157話　ヤマトの世界より帰還　投稿日20110803（後書き）

ナギ少尉「コスモクリーナーDの性能説明の回になっちゃいましたね～」

作者「…まぁある意味しょうがないか…とおもってます」

ナギ少尉「月も進行鈍いし…って事？」

作者「あの残りの数が一辺に押し寄せてくるなら、さすがに無事ではない…って事です」

ナギ少尉「ところで残りのハイヴ3箇所、何処にできてるの？」

作者「……」

ナギ少尉「ねぇ、占拠し再利用するんでしょ？都市にするんでしょ？」

作者「……」

ナギ少尉「さて、作者は本当に考えてたのでしょうか？
…次回いよいよ月面にはい…るよね？お楽しみにぃ」

第１５８話　ある人達…　投稿日２０１１０８０５

２００１年１２月１０日

（ん～……）

やっと月面において活動停止し始めたＢＥＴＡを確認し始めた…

との報告が昼過ぎにはいってきた。

午前中はコスモクリーナーＤの搭載及び送り出し等で過ごしてた。

（ちっと予想より遅めか？…）

幸いコアを持ち出しできた個体はいないようだとルーロスから報告はあった。

新たなハイヴは作られる様子もなし…

だが月面の安全確認には、強行偵察の必要があった。

いや強襲だろう。

（ん～……）

現状強行偵察に使えるのが、ＭＳ系、魔改造戦術機、ゼントラーディのバトルスーツである。

通常の戦術機は外気を利用するため、またさほど気密性がよくない。

使えてＡ－０６海神だろう。

異世界軍のＭＳの主力である陸戦強襲型ガンタンクおよび魔ドムは、
１Ｇ下での戦闘機動を想定している為０．１８Ｇ下の月面では使えず、
ましてや大気を利用するホバーはもっての他だ。
火星の大気は利用できても月には大気がない…

魔改造戦術機は反重力システムを利用している為、
わずかでも重力があれば問題ない。
が完全に０になる宇宙空間ではなんらかの推進システムが必要だった。

（低重力下と低大気または大気無しの想定だな…
ナデシコ技術による重力波発生推進もありかな？）
忘れているだろうが、反重力や重力波、コバッタ等はナデシコ技術である…

（コスモタイガーもありかな？）

多分現状宇宙空間戦闘で遠距離だと…
１番強いといえるのがコスモタイガーだが…

そんな時、フォッカー少佐と柿崎速雄少尉が、
医療システムがらでて研修にあたってると一報がはいる。

（あ、歴戦のバルキリー乗りフォッカー少佐か…）

「ＳＤＦ－１、マクロス護衛航空隊、スカル大隊隊長ロイフォッカー少佐だ。
これからはよろしくたのむ」

「同じＳＤＦ－１マクロス護衛航空隊、スカル小隊所属柿崎速雄少尉であります！！」

「柿崎、スカル小隊といったな？」

「はい、小佐死亡後のスカルの席に一条隊長がつきまして、
バーミリオンからスカルになりました。
自分は、その初戦闘で全包囲バリアの暴走？「あってるよ」で死亡した模様です。
心残りはステーキも食いかけでした」

「正確には死亡する直前においてなんですけどね……
とりあえず加入確認ですがお願いできます？」

「ちからをかそうではないか。よろしくたのむぞぅ」

「大船にのったつもりでいて下さい！」

「よろしくお願いしますね」

「ところで、いくつか質問だが」

「はい？」

「マクロスは…あの後どうなったんだ？」

「敵対してたゼントラーディの一部が、
リン・ミンメイの歌の力によりマクロス側になりました。
「ほう、あのミンメイちゃんがなぁ…」
…それに危惧したゼントラーディーの一軍司令官にあたる、ボドルザーにより、
地球は動けない分…全滅です。
「むっ」「なっ！」
が、マクロスは敵対してた司令官にあたる、
４８０万の艦を有する１４００ｋｍ級の機動要塞を撃破し、
見事地球人類は生き延びました。
ゼントラーディ人やそのたの異星人との友好混血化が進み、
２０６０年代にはマクロスをモデルとした１００万人規模の移民船団が、
銀河方々にいってる形ですね」

「地球全滅時には…何人生き延びたんだ？」

「確か…マクロス艦内で４万人強。
あと見逃し見落としの月面アポロ基地と、
グランドキャニオンは存じてます？」
「ああ…あれか」「なんです？」

「大地に大きな穴をあけた大規模高出力レーザーの一種ですね。
で、建設中のは存じてます？」

「ああ…確かいくつかあったと聞いてたな」

「そこをシェルターとして避難してた人達含めて約１００万人…
プラス地球についたゼントラーディ約８００万人ですね」

「たったそんだけか…」

「はい。そんだけになりました。
なのでマクロス船団による移民事業が、
地球の命題になった形です。
またクローンで増やしたんすが、
遺伝子異常もでて禁止にもなりましたし…」

「輝とミンメイはどうした？」

「えっと…あのあと早瀬さんと輝がくっついて」

「あのおばさんよばわりとか！？」

「はい」

「かぁ～輝もやるなぁ」

「で２０１２年のマクロス改級メガロード１、移民船第１号ですね…に早瀬さんと輝さん、ミンメイさんがのり銀河中央方面へと探索移民にでました。２０１６年、消息不明に…」

「！！原因は？」

「自分も行かないとわかりませんが、別世界へと転移という筋が有力ですね」

「……死亡ではないんだな？」

「多分…ときたまミンメイの歌が電波にのってというので…」

「わかった。ありがとうよ」

「いえいえ」

「ところで、俺がのるバルキリーはＳ型か？」「あ、自分の機体は？」

「ん～それなんすけど……」

紙装甲ぶり等今までの異世界軍の考察を…

「だがバルキリーはいい機体だぞ」

「大気圏内においてはですね…が光線級という天敵がいまして、それで後継機にあたるＶＦ－１１かＶＦ－１７１、ＶＦ－１９が適当かなぁ…と」

「ほう…何年後の機体だ？」

「確か、ＶＦ－１１サンダーボルトが２０３０年代から４０年代ですね。
ＶＦ－１９はその後で、ＶＦ－１７１はリファインですが２０５５年頃の主力機になります」

「乗って評価してみようじゃないか…何処にあるその機体は」

「あ、これからです」

「……そ、そうか…」

「ま、他の統合軍パイロット達も機体決まってないので」

「……何人つれてきた？」

「１１号リストお願い」

とリストをもってこさせ見せてる。

「ゼントラーディ人の加入者は期待きまって生産してますね～」

「二つ大隊ができるな……で、俺らのがきまってないと…」

「はい。ＭＳや戦術機等なら用意できますが…」

「ファイター乗りには…ファイターだろ？」

「戦術機が１番にてるんですが、苦労してると聞いてますね…なんでまぁ、用意しますので…」

「話はそれからだな」

「11号、ちゃっちゃといってくるから」

［できれば2日以内ね］

「月次第だしな…わかった…
フォッカーさん達のことよろしく」

［了解］

世界扉を形成しカオル再びマクロスの世界へ…

～～マクロスFの世界～～

カオルはマクロスFの世界を狙ったが…

（ここは何処？わたしは……やめよ
……けど船団内にこんなとこあったか？？）

辺りは密林に覆われていた。

（でるとこ間違えたかな？…空飛べばぶちあたるはずだから…）
幻影をかけ空高く目指す…

が…

（星だなぁ……ん～～）

考えてもらちあかないので、久々に衛星キットを出し、測定からはいる。

（地球？…でる時代間違えたか、世界間違えたか…）

と…近くの街にあるという事で、飛び端末に同化、情報を入手すると…

（物語や時代は間違えてないか…けど地球ね～…何故？）

物語中心のマクロスフロンティア船団……

今は地球から遠く離れぁいて座腕のビオス星系あたり、

約３２００光年先にいるはずである。

（ま、考えてもしゃ～まい…情報情報）

約３２００光年…いけない事もない。ルーロス改にとってなら…

が今回はつれて来なかったので、まずは星図等の情報を入手に勤しんだ。

が…

（ん～民間だとここまでか…基地にいくほうが早いな…）

と言うことで近くの統合軍基地へと飛ぶ…

結構距離はあった…地球からは巨大な惑星が夜になるとみえた。

（あれが自動生産惑星だっけ？）

月よりでっかく見える天体が見えてる。

軌道衛星に設置された工業衛星だ。

（…ま、あれは次回でいいか…制作に１年かな？

か…どっかから拾ってくるか……）

と考えながら基地つき…

二日目…

基地に稼動待機してたＶＦ－１１Ｃ、Ｄ、ＡＩＦ－７Ｓ、ＶＦ－１７１Ｃ、ＶＦ－１９Ｆがいたので順序取得にかかる。

（流石にＶＦ－２５あたりはいないか…）

ＶＢ－６も見つけだしたので取得にかかる。

（…ん～）

次回来た時ように詳細星図情報をいれこみ…
各種パックがあったので取得し…

ここでタイムリミットのようだ。

世界扉をとなえ帰還する…

２００１年１２月１２日未明…

「ただいまっと」

［マスター、約束通り早かったね～］

「ま…ね…と月の様子は？」

と鯖に落としながら…

［今のとこ、ほぼ半数が行動をやめてるって…
タヌキ眠りかは不明］

「ん～…衛星軌道上からは生体反応わからないか…」

［そりゃ体の中についてはね～］

「ま、今の時点で半数なら、
明後日には強行偵察、また上陸準備してても問題なさそうかな？」

おとしたので素材を集め始めた。

［……かもね］

「万が一生きてたとしても、
５０万も一気に相手するわけでもないか…」

材料に同化し取得したバルキリーを早速作り始めていた。

（作りおわったら寝るか…）

ｓｉｄｅ～？？～

「え、？……」

涙が目からこぼれ落ちてくる。
彼女はトイレの中である機械を手にもっていた。

その機械は反応するところが赤くなっていた。

「と……とうとう…やっ…たのね？」

歓喜の声をあげ、泣き崩れていた……

……
カオル報告
VF－11C
VF－11D
AIF－7S
VF－171C
VF－19F
VB－6
取得

第１５８話　ある人達…　投稿日２０１１０８０５（後書き）

ナギ少尉「作者～…なんか最近また短くなってない？」

作者「そ、そう？？」

ナギ少尉「今回の転移のシーンも、
何？基地にいってちゃっちゃと取得しちゃって、
ここはバジュラの襲撃でミシ〇ルをゲットするんじゃないの？」

作者「……何故？」

ナギ少尉「何故って物語の本流からはそうじゃないの～」

作者「ま、まぁしたら短期で戻ってこれないしさ…ねっ？」

ナギ少尉「う～……あっ、月面のクレーター！！ねぇ考えたの？」

作者「次回のネタになるんすが…まぁいいか…
とまずサクロボスコクレーターは月の表側の南西の方角にありますよね？」

ナギ少尉「私たちからみたら右下ね？」

作者「プラトーが月の表面の北側の方向」

ナギ少尉「うんうん」

作者「さて次回後書きに残りの二カ所がでます。お楽しみにぃ」

ナギ少尉「作者～～！！」

第１５９話　ムーンスパイプレーン　投稿日２０１１０８０７

２００１年１２月１２日　昼間
「バルキリーできたか！？」
「へぇ…こいつがか…」
「航空機なの？」
「自分ののるのはどれですか？」

途端にハンガーが騒がしくなる。
アムロさんを始めとしたガンダムのエースパイロット達や、
Ａ－０１の面々も見えたからだ。

「とりあえずフォッカー少佐、柿崎少尉どれでも乗って評定して下さい。
量産に入りたいので…」
「俺はこれかな？」「自分は…こいつで」
フォッカー少佐がＶＦ－１７１、柿崎少尉がＶＦ－１１を選択した。
「自分はいいのかな？」
「アムロさん、戦闘機操縦は…？」

「コアファイターぐらいか…戦闘機操縦形態なのか？」

戦艦ハッチへ移動してく二機。

「ですね、モビルスーツとはコンセプトが違いますし」

「ふむ…」

「ま、陸上戦限定についてはモビルスーツが有利すけどね。空対地攻撃でなくロボット形態でのに限定してますが…」

「可変戦闘機なのか？」

「はい、巨人のゼントラーディ人と戦う為のでしたから…」

司令室に向かいながら…

「コールサイン、スカル１、テスト空域は小笠原近海および、Ａ－０１宙域にてお願いします」

『スカル１了解、』

『スカル２了解であります』

ア「単独大気圏脱出能力あるんだな…」

「スカル１、００Ｒクリア進入どうぞ。スカル２、００Ｒ待機位置へ」

カ「ありますね。スペック通りならマッハ２１を越えますから」

『ゲーボ、発進位置へついたぞ』

「スカル１、進路クリア、発進どうぞ」

『柿崎ぃ、一足さきにいくぞーーっ！！』

いきなりアフターバーナーを吹かせて…

『イヤッホホー』

「スカル１、民間空域では！」

『一足さきにぬけるぜー』

ア「カオル君…」

「ううん…もう…スカル２、発進位置へ」

カ「まぁああいった人です…」

『了解であります』

カ「腕はいいですよ」

柿崎機は何事もなく発進してく…

「カオル君、空対空だと…」

「下駄だと良い的ですね…
基本的に視界外で、また高速でアウトレンジ攻撃をな機体ですし…
ましてや宇宙空間だと推進材の関係で」

「バルキリーか…」

「ですねあの世代の機体だと…
ＭＳは重装甲、高火力の道にいくか、別の道をしかなくなります。
もっともアムロさんクラスならファンネル等でもありますが…」

「あれで量産機か？」

「です」

「ふむ…」

テスト稼動でその日フォッカー少佐は繰り返しのり、
一般機はＶＦ－１７１Ｃに決まり量産に入る事となる。

ｓｉｄｅ～？？？～

「おめでとうございます。三週目ですね」

「本当にですか？」

「お子さんみますか？」

「はい！！」

先生が、エコーの画像を取り出してきた。

「この部分が、あなたのお子さんですよ」

「……あ、あ」

涙をながす？？？…よほど待ち望んだろう…

「軍規では、母体保護の為……」

……

「次の作戦後でお願いできますか？」

「……わかりました。

ですが、それ以降は流産の危険性がありますので、

相談の上でお願いします」

「はい、わかりました。ありがとうございました」

（カオル……わたしにとうとう…）

ｓｉｄｅ～？？？ｅｎｄ～

２００１年１２月１３日

フォッカー少佐機、および柿崎機について考えていた。

（フォッカー少佐はベースはＶＦ－１９Ｆとして…柿崎少尉はＶＦ－１７１Ｃか…）

柿崎少尉は、パワーをあげてくれ…との要望があった。

（となると…）

ＶＦ－１９Ｆはステージ２のエンジンを搭載しているタイプであり…

ＶＦ－１７１のエンジンを同系に換装を行った。

ＶＦ－１７１柿という安直な機体ナンバーをつけ…

（あとはＶＦ－１９Ｆの改良か…）

とおもったが…

（機体的要領もないから入れる要素が……）

なさそうだったのでそのまま機体に選定する。

（と…上陸設営部隊か…）

今のところバルキリーのスピードについてける艦船はない。

チューリップも既に発進させラグランジュ１に待機するようになる

が、
明日には間に合わないだろう…

今から間に合う艦船はない…

艦船はないが……

銀河鉄道はある。
よって明日バルキリー部隊と一緒に上陸設営部隊の運搬に、
銀河鉄道のビッグワン、ビッグツー、ビッグスリーが使われる事に…

銀河鉄道はバルキリー以上のスピードをだすが…

（流石に戦術機やＭＳサイズはきついな…）

貨車にそのまま積めるのがレイバー等８ｍサイズまでであり、
それ以上は車両限界に達する…
いやバランスが悪くなるのだ。
銀河鉄道のスピードで横転事故があっちゃ日には、
えらい惨状になるので、どうするかをなやんでる。

マゼラドリル等は積めるサイズにより、
バッテリータイプの作業車両は、
核融合発電機を貨車に積み充電する形になる。

あとはＭＳサイズの作業ＭＳをどうするか?になった。

（ん～）

［マスター何してるの？］

「ああ、作業用ザク改低重力仕様をどう貨車に積むかをなやんでるだよ」

［へ？ばらせばいいじゃん］

「は？ばらす？」

［ここはこうして、こうなって、こうすれば…］

見事に胴体部も外され分割になり、
タンク部分も問題なくおさまった。

［作業用だから急造組み立ての名残があるの。マスターしらなかった？］

「あははは…わすれてた」

（まぁ…これで大丈夫だな）

１編成２０両に及ぶ貨車および客車の編成を終え、
上陸部隊の積み込みはおわった。

２００１年１２月１４日

地球を飛び立ったバルキリー編隊は、
ビッグワンに遅れる事１時間後、
月面軌道上にいるサラミス改に着艦、強制推進材を補給後…

「いいか野郎ども、これから月面偵察にはいる。
５００万の内、どれが生きてるかわからん…用心しろよ！」

『了解』＊多数

「プラネットダンス！！」

ＶＦ－１７１を主とするバルキリー編隊が月面に舞い降りてく。

『こちらスカル１、月面は夥しいＢＥＴＡどもに埋めつくされてる…
動きはないが、ＢＥＴＡが３月面は７だ。繰り返すＢＥＴＡが３月
面が７だ』

「月面調べられそう？」

『ガウォーク形態だと引っ掛ける柿崎がいそうだな』

『なっ！！隊長～！！』

『ははは、すまんすまん。バトロイド形態なら問題ないだろ』

ガウォークで滑空着地すると引っ掛ける可能性がある位、
ＢＥＴＡがそこらじゅうにとまっていた…

『スカル４、５、６ついて来い、スカル２後のを引き連れで別の箇所偵察してこい』

『了解』＊多数

バトロイド形態で月面に着陸するフォッカー機。

そばには活動停止した突撃級がいた。

続けてスカル４番、５番、６番機が降り立ってくる。

『多分…死んでいるはずだな…』

フォッカー機が用心の為にガンポットを突撃級に撃ち込んだ。

反応なし…

『よ〜っし、じゃそこら辺偵察といきますか…ロッテを崩すなよ』

ガウォークに変形、滑走し始める。

死骸を見つける度に弾をうつや、殴る等をして反応をみるのを繰り返し…

『こちらスカル１２、サクロボスコクレーター、ムーンハイヴ１近辺では生体反応見つからず』

『こちらスカル２４、プラトークレーター、ムーンハイヴ４近辺では同じ生体反応見つからず、内部も同様です』

『こちらスカル３５、ベイアリンククレーター、ムーンハイヴ２近辺生体反応見つからず、これより内部調査にいきます』

月の裏側プラトーのほぼ反対側に位置するクレーターにできたハイヴだった。

『こちらアポロ０４、クリューガークレーター、ムーンハイヴ３の調査完了、生体反応見つからず』

月の東側に位置するクレーターだ…

次々と生体反応無しの報告が入ってくる。

「ん〜…ほぼ大丈夫かな？」

「だしゅ？」

「ああ、上陸設営隊にｇｏサインだ。
引き続きバルキリー隊は偵察任務を続行」

「あいでち」

ほぼ大丈夫だろう…って事で、
ビッグワン、ビッグツー、ビッグスリーが月面に向かって煙りをなびかせながら、サクロボスコクレーターを目指してきた。

着陸場所の確保が難しかった為、ビッグワンは月面に接地後、
ＢＥＴＡの死骸を前面シールド展開し、跳ね飛ばしながら停車する。

まさに谷間が出来るように跳ね飛ばされる死骸…

停車後客車からはコバッタ、Ｔ－８５０達がでてきた。
０．２Ｇ以下にも関わらず快活な行動をとるターミネーター達、
かれらのＯＳによって低重力でも修正して行動している。

宇宙服もきずにＢＥＴＡ同様生身で戦闘行為も可能だ。

ターミネーター達のもっている武器は、
地上同様カトラス、Ｍ６１等を装備している。

反動も大丈夫だと彼等はいっていたからだ。

ターミネーター達が警戒に展開し終えた頃、
貨車のロックが外れ、中には月面作業用に改造されたクレーン等小型作業機器が積まれてた。

早速貨車にばらさずに積めるサイズの機器は降ろされ、
ブルドーザー等が死骸除去作業を行い始めた。

作業スペースを確保されて、貨車から降ろされてきたのは、
ばらして積んであった作業用ザクタンク低重力仕様の部材だった。
コバッタ達の操縦する小型クレーンによって組み立てられてく。

空になった貨車が連結し直され、汽笛をあげビッグツー、スリーが、
死骸を跳ね飛ばし宇宙空間に昇ってく。

作業用ザクタンクが組み上がると作業効率はあがってきた。

どんどん死骸が運ばれて月面が確保され、
サクロボスコの門のほうもザクタンクが中にはいり、
死骸が運びだされ整理されてくるようになる。

約４時間後にはビッグツー、スリーが帰ってきて更に機材が搬入され効率があがってくるだろう…

……

カオル報告

月面のハイヴ跡地を利用し、
基地建設作業にはいります

第159話　ムーンスパイプレーン　投稿日20110807（後書き）

ナギ少尉「やっとここで場所がでたわね～
…どこまで引っ張るのよ！！」

作者「まぁまぁ…」

ナギ少尉「で？ほぼ反対側っていうと？
」

作者「ベイアリンククレーターの事か？
ベイエリンクとも表記されてて、どっちともとれるんだよな。
ま、プラトーとサクロボスコを結ぶとあとは、
必然的に裏側と月の表の東側…かな？ということでね」

ナギ少尉「で、あとが…」

作者「ああ、月の表側の東側にあるクリューガークレーターに…と
いうことで、
合計４つのハイヴ全部の紹介が終わったわけだ」

ナギ少尉「あっ、ターミネーター達はそのまま生身で活動してるけ
ど…大丈夫なの？」

作者「まぁ通常のなら皮膚が凍る可能性あるが、
強化された皮膚が使われてるから、絶対零度付近及び５００度まで
なら皮膚は大丈夫だぞ」

ナギ少尉「…液体窒素とか熔鉱炉内部とか？」

作者「ま、そういう事だな」

ナギ少尉「ところでサクッと占領しちゃったみたいだけど…」

作者「本当は新種が…だったんだが無理だぁぁになってな…」

ナギ少尉「？新種？」

作者「まぁある意味な…が、生物もいない、大気もないんじゃ…
無理だったんだよ…なのでまぁ…また今度登場まちって事で…」

ナギ少尉「じゃ、次回予告ね…敦煌攻略発動までの７日間…どうす
ごすの？カオル君…お楽しみにぃ」

第１６０話　更なる新たな世界へ…　投稿日２００１１０８０９

２００１年１２月１５日
月面サクロボスコクレーター…

長い間ＢＥＴＡの月面オリジナルハイヴ、サクロボスコハイヴとして、利用されていた。

しかし、今では…

ガウォークが地下偵察を行い、
生体反応なし完全無力化の安全確認がすべてとれると…

サクロボスコ基地と改名し、
アイランド１のあけた直径６ｋｍクラスの大きな穴を利用し、
４ｋｍ級戦艦対応ドック基地として、サクロボスコ基地建設計画はスタートする。

まず穴の周囲の部分に底までの螺旋状直通通路を作り、
戦艦格納庫および、
その他基地に必要な設備を整えるつもりだった。

また、明後日１７日にはチューリップがサクロボスコ基地に到着し、
地下深く入りこみ、本格的稼動する事になる。

しかしそのような巨大基地建造には、いくら穴が掘削されてても、

完全稼動までには約3ヶ月かかるだろうの見込みであった。

それまでは、月での対落着ユニットに対する防衛を、
仮設対空設備及び軌道上の戦艦で行う事になる。

プラトークレーターはまだ利用目的はきまってないものの大きな穴が空いている。

クリューガークレーターは月面都市としての建設予定だが、
まだ防衛システムが構築できる前につき、
工事は始まってはなかった。

さて、月面を狙っていたアイランド1から4はブースターをふかせて、
一路月面軌道上から離れていく。
一回ラグランジュ4ポイントに回航後フォールド設備の改修をこれから受ける事になる。

そしてこの後木星の衛星侵攻作戦へと向かう事になる。

また護衛船団もフォールド装置が搭載改修される事となり、
月防衛部隊と入れ替わりにドックにはいる事となる。

なを…キャーティア技術のワープドライブに関しては、
まだプラント設備では実現できずに搭載される見込みはたっていなかった。

また忘れていると思うが…

ラグランジュポイントで建設中だった地球脱出船、エンデミオンは異世界軍に接収された後大改装を受け、
更にフォールド装置等も積まれるようになり、
３ｋｍ級大気圏突入可の、
強襲空母として生まれ変わろうとしていた。

エンデミオンは木星侵攻時に旗艦となる予定だ。

さて、カオルは昼過ぎには、ルーロスをともなって横浜基地に帰還していた。

（改修で来月には木星侵攻できるし…
２２日開始で２５日辺りには敦煌…っと…）

ギシギシ
椅子を揺らしながら考えてた。

（ん～機動要塞……あれデーターだけでも欲しいなぁ……
あとは新マクロス級をもつくる工業衛星か…
つくるとなったら時間かかるだろうけど欲しいなぁ…
あの艦船建造能力はいいよな…
…人員はマクロスの７辺りやＦ辺りでも沢山いるし…まだまだガンダムの世界もねぇ…
あとあのあたりも行きたいし…
あ……と、わすれてた）

ルーロスを虚数空間より出し…

「ルーロス、マクロスでの星図情報」

と記録してあった端末をロードしてもらった。

「あいでち、ごちゅじんたま」

「フォールドだんちよう？？……」

「ああ、フォールドで突破しようとすると事故がおき、
１００万人規模でしぬことになるらしいな…
マクロス船団移民初期には事故あったらしいぞ」

マクロス移民船団があんまりフォールドを行わず、
通常空間を長い年月かけて航行する理由の一つである。

フォールド断層を探し、航路を開拓すると重大な役目も含まれている。

ゼントラーディの一部艦隊分のデーターだけでは、
活動範囲だけであり、大航海時代としては、とても足りないのである。

「こわいでちねぇ」

「なぁ…キャーティアではワープ禁止な場所とかはあったん？」

「えっと～聞いた事ないでち」

「ブラックホールとかは？」

「今のドライブならあっても別に関係ないでち。
２００長周期前のなら駄目でちたけどね」

「ならルーロスは心配なさそうだな…」

「大丈夫でち、影響あったら地球にこれなかったでちよ」

「だろうな…」

「ところでごちゅじんたま、なにを考えてるでちか？」

「ん？ああ、このあとというか、
月も軌道に乗るし、ハイヴ攻略に関わるまでの７日間どうしようかな～ってな」

「またどっかにお出かけでちか？」

「ああ、今、急にのもなさ気だしな」

とりあえず地球上では、関東以西のＢＥＴＡクリーニングに後一週間かかる見込みで、
とりあえず北陸東海地方は終わったとの報告がきてる。

重金属の除去に関してはまだまだ時間のかかる事業…気長に行ってる状態だ。
なにしろ現場でプラントもどきでろ過する必要ある為、分離は面倒な作業の一つである。

中国大陸では中継地点の随州において基地建設が始まった。

重慶基地においても放射能除去された事により、
防衛力が高まってそうそうはおちなくなるだろう。

宇宙は前に記述した通り…

こっち特にやる事がない。

「どこに行こうかなぁで悩んでるんだよな…」

「そういえばごちゅじんたま」

「ん？」

「一騎当千の…ってないでちね～」

「一騎当千か……スーパーロボットかな」

「スーパーロボット？」

「あ、まぁ一対一でものすごい力をだすロボット達だな。
…例えば…マジンガーZとか、グレートマジンガー等な」

「ちゅれてこないの？」

「マジンガー系はコクピットが頭にあって、直接視認での操縦だ…」

「光線級にやかれちょうでちね」

「ゲッターロボは…ゲッター線暴走が…とかだし、
イデオンは暴走が怖い…宇宙が滅びる…
そう考えてくると……」

「……と？」

「地球防衛企業ダイ・ガードかな？」

「……なんか弱そう…」

「いや、結構……弱いか…まぁ、武装は使えそうだがな」

「武装？」

「ノットパニッシャーは、
作薬式でないパイルバンカーだし、
アームで固定してるからパワーさえいければ、
貫けないのほぼないだろうな」

「面白そうでちね」

「が、1対1でないときつい武装だな…ドリルアームは定番か……ん～」

「あとは？」

「ん～…他のだと、エヴァンゲリオンか…」

「それはどんなのがいるでち？」

「おれのパワーの元ネタの世界。あとエヴァンゲリオン、決戦兵器がいるしなぁ」

「それに決めるでち」

「が、俺がいったら使徒認定されて駆除されそう…」

「使徒？」

「まぁいわゆる敵側のね…発見されるらしいよ。
神の使いというか……まぁサードインパクト起こす為に、
あの手この手の能力がついた使徒でね。
俺がいったら間違いなくエヴァが出てきそうって事さ」

「そういえばごちゅじんたま、少し他の人と波動が違うもんね」

「ん？波動」

「他の人はびいぃぃなのに、ごちゅじんたまはぶぃぃぃんなんだもん」

「……例えがわからん…」

「鈴の機能ちゅかえば、波動欺瞞はできるよ」

「ん？そんなのあるんか？」

「あるでちね。ここをこうするでち…」

「ほう…」

（エヴァ、生き残るのシンジ一人だけだしいいかもな……あっ、そういえばごっそり貰えそうな…のがあった）

「ルーロス、いく世界決まった。１１号あとよろしくな」

「準備万端でち引き込んでくだちい」

［いってらっしゃい～］

世界扉で世界をわたる……

～～ガオガイガーの世界～～

「ようこそGアイランドシティへ、ようこそ宇宙開発公団へ！！」

カオルは見学者となり東京湾に浮かぶ人工島、
Gアイランドシティに降り立ち、見学コースでもって中に入っていた。

ここGアイランドシティは宇宙開発公団の本拠地である。

シャトル打ち上げなどをかね…るが…

カオルは一人列を離れ開発公団の建物と同化し、その侵食を地下へもひろげていった。

地下はＧＧＧ秘密基地ベイタワー基地になっていた。

中央にはヘキサゴンがあり、
巨大ロボットが入るビッグオーダールームを始めとした中心施設がある。

そこから六方向に広がりさながら珊瑚礁の形にたとえられ、バリアリーフと呼ばれていた。

ヘキサゴンからは各種船が接続されていて、
三段飛行甲板空母、
強襲揚陸補給船、
弾丸X、
水陸両用整備装甲車、
多次元諜報潜水艦、
三式空中研究所、
等が繋がっている。

まだこの頃は対ゾンダー戦の真っ只中であり、
欠落している船等はなかった…

侵食をひろげ二日目にはいったところで…

「ハァハァハァ護隊員殿、クンカクンカスーハースーハースンスン」

（みちゃいけないものを、見たんだろうか？）

体操着らしい服を一生懸命に嗅ぐ紫色のロボットがいた。

そもそも嗅ぐ事ができるのだろうか？の疑問があるが……

（嗅ぐ機能をわざわざつけたのかな…？）

紫色の変態忍者ロボット…ボルフォッグのある一幕を見てしまったのも追記しておこう。

それ以外は特に特筆なく…取得は進む…

……

カオル報告

Gアイランドシティ
ベイタワー基地全般

第１６０話　更なる新たな世界へ…　投稿日２０１１０８０９（後書き）

ナギ少尉「あたらしいジャンルにいきましたね～」

作者「スーパーロボットの世界にだな…」

ナギ少尉「うまくカオルが理解して解説できるかが、
帰ってきてからのお楽しみね～」

作者「……まぁ…なんだその…」

ナギ少尉「でもボルフォッグって…
臭いセンサーついてないんじゃなかった？」

作者「彼等の超ＡＩには不可能がないのさ。
まぁようするに鼻炎でつまっている人がそうすると、
気分よくなってく…まぁ一種の病気と…」

ナギ少尉「作者は体操着嗅がないの？」

作者「俺は男だから嗅がないが？」

ナギ少尉「いや、女性の体操着をね～」

作者「ん……汗臭いんだろ？…イマイチなぁ…」

ナギ少尉「じゃぁ…どこを嗅ぎたいの？」

作者「そうだなぁ……やっぱポニーテールの髪の毛かなぁ…」

ナギ少尉「スンスンするわけ？」

作者「まぁ…ってなにいわせんだ！バリカンで刈るぞ！！」

ナギ少尉「きゃぁ…怒ったぁ…と、次回は変態ボルフォッグの最後…お楽しみにぃ」

作者「あ、そんなサブタイトルつけんなぁぁぁ」

第１６１話　ボルフォッグの最後？　投稿日２０１１０８１１

第三日目

世界を渡ってきたカオルは天空を見上げた。

そこには肉眼でも見える人工建築物が見える。
カオルは空にあがり、その人工建築物を目指した。

目指す目標物は、起動防衛艦繋留軌道衛星基地、オービットベース…

新生ＧＧＧの本部となり、ガオガイガー、いやガオファイガーのサポート本部でもある。

時期的には機械原種戦を終え、
国際犯罪シンジゲートバイオネットと争っている時期であった。

カオルはオービットベースと同化し侵食し始めた。

このオービットベースは機械原種との戦いにおいて破壊されたベイタワー基地に変わり、
新生ＧＧＧの本部として機能している。

旧ベイタワー基地から脱出し、オービットベースに接続されている

ヘキサゴン、
他にも、デビジョン2、万能力作工作艦カヤナゴ、
デビジョン7超翼射出司令艦ツクヨミ、
デビジョン8多撃多元燃導艦タケハヤ、
デビジョン9極輝覚醒複胴艦ヒルメが接続されていた。

もちろんカオルは最終的には消失する運命の各デビジョン艦、デビジョン2のカヤナゴはのぞくが…
の復元を目指しているのだろう。
じっくりと同化していく…

ガオガイガーの世界の凄いところは勇者ロボ達だけでなく、
各サポートマシン及びバックアップがしっかりしているところだった。

例えばカヤナゴ…

これは艦内部に修復マシンであるプライヤーズの量産型、
カーペンターズが３０００機近く搭載されており、
破壊活動や戦闘被害の後に速やかに出動し、
破壊された街を修復しする。

機械原種との戦いで破壊された世界文化遺産である、
万里の長城や、ピラミッド、スフィンクス、モアイ像を見事に再生した。

物質の破壊を空間修復ツールを用いて速やかに短時間で修復するの

だ…

再生でなく模倣だ…との否定的な意見もあるが、
バイオネットの破壊テロ活動が増えるなか、カーペンターズの役割は大きくなっている。

また、ヒルメ…

各種ツールを搭載している。
代表的なのがディバイングドライバー…
主な使用目的は、戦闘被害を防ぐ為の人工的な空間湾曲空間を作りだすものである。

これにより、わずか８０センチの空間をひろげ、
半径数十キロに及ぶ無人のバトルフィールドを作りだす事ができ、
その中での膨大な威力の力を使用しても周囲に被害を及ぼす事の無いツールである。

このような各サポート類をカオルは喜んで同化し、情報を取得していった…

さて、ここはカオルが取得している同時刻の地上ある地点…

一台のパトカーが疾走していく…

「システムチェーンジ」

白いパトカーが変形していき…

「ボルフォッグ！！」

人型のロボットが現れる。

ｓｉｄｅ～ボルフォッグ～

「さて…ここですね？バイオネットが潜伏しているビルというのは…」

外見上はまともなビルに見える。

「さて……ルネ捜査官準備はよろしいですか？」

『ああ、いつでも害虫駆除の準備はととのってるぞ』

「ルネ捜査官、今回は逮捕して情報吐き出させるのが目的であります。
けして殺さないで下さい」

『わかってる！！口だすなら先に駆除するよ！』

「はぁ……サポートの準備はととのいました…突入お願いします」

ボルフォックはいつバイオネットのＡＴが出てきても良いように、

身構えた。

ルネが建物の入口に張り付き、銃を構え…
ドアを蹴飛ばし内部に侵入する…

ガガガン

ガガガン

銃声が響く…

ルネが建物の入口から出てきた。

「ルネ捜査官?バイオネット工作員はどうされました?」

「ボルフォッグ…おとなしく的になりな…」

「はっ?」

ルネの両手に構えた銃がこっちへ向き…
(ま、まさか…)
「ぬぉぉぉっ」

ボルフォッグは銃撃から飛びのいた。

「ルネ捜査官!!」

「うるさい!!空振りだよ!この怒りどうしてくれるんだ!」

「ぐわぁぁぁ」
銃があたり、ボルフォッグにダメージがくらう…
（馬鹿な、ただの小銃なのに…いけない！）
「ルネ捜査官！」

「うるさい！この使えないポンコツショタコン！」

「ひぃぃぃぃ」

（わ、わたしの身が持たない！）

『あー、あー聞こえるかね？』

「長官！」

『現地捜査ご苦労だったね、当該情報員は、』

「ぬぉぉぉ！」

『獅子の女王とボルフォッグ君がきたというので』

「どわぁぁぁ」

『みずから、警察署にいき自首してくれたんだよ。
これにてルクセンブルクでのＤ－０５７の件は終了したよ』

「痛い痛い！！…長官、捜査は終了したんですね！」

『ああ、そうだねボルフォッグ君』

「ひぃぃぃぃ……は、早くルネ捜査官に引き上げ命令を！！」

『あ～その事だがね…ボルフォッグ君』

「だぁぁぁぁ」

『ルネ捜査官の通信機が壊れてる模様で、君から本人に伝えて欲しい』

「はぁぁぁ？」

『カーペンターズの出動は命じた…以上だ』

「どわぁぁぁ…長官!!長官!!凱隊長を!」

『凱君かね…今、命君と東京にいっとるから呼び出しは不可じゃ…健闘を祈る』

「ふっふっふっふっふっ…」

「ルネ…捜査官?手にもってるのは……」

「シャッセールで開発された荷電粒子砲さ…」

「なぜそれを…いや、銃口をこちらにむけ…流石に洒落に…ならないのですが…」

「ショタコンは害虫…凱はイチャイチャして…害虫、塵になりな…」

「ルネ…捜査…官ま、まって…」

「ひぃかぁりぃにぃなぁれぇぇぇぇぇぇ!!!」

「ぬぉぉぉぉぉ」

光の奔流がボルフォッグを襲う…
跡地には盛大なキノコ雲がたち…

カーペンターズが修復しにきた。

「ふん！！害虫駆除完了！」

……

超ＡＩが再起動する…

（護隊員、今回もなんとか生き延びました。
ルネ捜査官の鎌から逃げれたもようです！！
……はっ自己チェックを！）

ボルフォッグは身体を起こして、
外見からと内面のシステムチェックを行い始めた。

（…ここもダメ、ああ、ここもですか…うわぁ…ここも……
はぁぁ…護隊員のパンツなめなければ、やってられませんね…）

あんだけの事されても性癖はなおらないもようだった……
そもそも、舐める機能はついてないのに…

ｓｉｄｅ～ボルフォッグｅｎｄ～

五日目

カオルは世界扉をくぐりぬけると、再びオービットベースに…取り付いた。

その頃オービットベースでは…

『ステルスガオーまもなくドックにはいりまーす』

ステルスガオーがドックに入ってく…

護がコクピットから降りてきた。

「護！！」

「ガイ兄ちゃん！命お姉ちゃん！」

「護君……話を聞かせて」

「うん…あ、火馬長官…説明する人はこれだけでいいの？」

「ああ、この六人だな…」

「わかった…あ、ちょっとまってね…」

護がガオーマシンにもどって、Qパーツを持ち出してきた。

「護、そのQパーツ……」

「今宇宙では大変な事がおこっています。
その為にどうしてもこれが必要なんだ」

「いったいQパーツを何に使うんだい？」

「あと二つあるはずだけど…それはどこ？」

「それなら研究モジュールで調査中だがぁ…」

「そう…研究モジュールね…」

護が光ががやき…
囲んでいた人達を吹き飛ばした。
「護っ！！」

～～

「くるっ…」
パピヨンが待ち構えていた…
護が侵入してきた。

「それもらっていきます」

「バスキューマシン！」

バスキューマシンが光り、衝撃が走った。
爆風があたりを巻き込む…パピヨンは飛ばされていた…

「これさえあれば救われる」

護はパピヨンを見向きもせず、Qパーツを持ち出し、
光りで隔壁を破壊し突き進んでいった。

「護っ！…っパピヨン！！」

「救急隊！！大至急研究…」
「凱は護追って！パピヨンさんはわたしが診るから」

「っ……わかった…」

「パピヨンさん…しっっ！！」

「おい、パピヨン隊員の様子は…」

命の顔が横に交互に…
猿頭寺が入ってきて…
「パピヨン！、パピヨン、しっかり！！…容態は？」

命の首が横に動く…

「パピ…ヨン…」
「ううっ…」

「パピヨン！」

「わかった事があります…世界規模でおこっている異常気象…
Qパーツにも同じ磁場の流れを感じます」

「わかった…あとでゆっくり聞かせてくれ」

「いいえ…もう…私は…一足先に精霊の元へ帰ります」

「パピヨン？……パピヨン？……ううぅ」

「参謀、遅くなりました…要き……」

「ううううっ…ううう…」

「猿頭寺…、おまえの変わりはいねぇ…いくぞ…
いつまでもないてちゃパピヨンも」

「ううう…」

「猿頭寺さん…さぁ…」

「パピ…ヨンを…よろ…しくお願い…しま…す」

救急隊員に事きれたパピヨンをまかせ、
彼等は凱のサポートの為にでていった。

パピヨンは診断を受けた後遺体安置室へと運ばれた…

救急隊員がでていった後に姿を現したカオル。
（早くすまさなきゃな…）

医療カプセルをだし、
擬体にＤＮＡをプログラムし、変化確認後、
安置台に擬体、医療カプセルに本体をいれ…
（これで、魂は向こうにいってるんだよな）

カプセルの作業パネルが、擬体同様の反応をみせる。

虚数空間にいれ、世界扉を唱え、世界を渡る。

第六日目…
カオルは再び世界にでてくる。

（さて次が問題だよな…ここを突破できるかどうか……）

ギャレオリア彗星の軌跡…
既に彗星は消滅し、次元ゲートは閉じている…
世界扉を唱えた…

世界扉をくぐると…
再び地球が…見えた。

（成功かな？）

カオルはルーロスをだし…移動し始めた
しばらくすると、Ｊアークにドッキングしている、
クシナダにのりこみ、レプリ人パピヨンを探し始めた。
程なくみつけた。

「パピヨン」

「これでいいのです。物質に永遠はありませんから…」

「精霊達の元へいくのかい？」

「いいえ、こうすけ、あなたの中に……」

「パピヨン」

「永遠に…」

魂が……

（魂は健全なる肉体に宿る…同一な肉体であり、
器に値するなら…
入ってくれればいいが…）

カオルは同化した壁の後ろにだしている、
パピヨンの修復中の身体を見ながらそう考えてた。

Ｊアークでは、勇者ロボの回収作業が急がれてた。

この地球は崩壊する。
その前に仲間として、友と共に運命をすごすべく…

……
そして回収しおわってしばらくたった艦内。

「まも～る、気がついたですね？」

「ぼく…？」
「あまみ」

「今この次元宇宙はＥＳ空間ごと、消滅しようとしている」

「ギャレオリア彗星はもう存在しないからね」

「俺達は帰れねえって事だ」

「この次元が消滅」

「戻れないんだね？やっぱり」

「しか～し、わずかながら希望は残っておる」

「ザパワーを利用するだ。計算上ＪアークのＥＳミサイルで、木星軌道上に、直径一ｍの次元ゲートを二秒間つくる事ができる」

「直径１ｍ…」

「二秒間…」

「だが残ったＥＳミサイルは二発だけでな」

「だから我々は君達二人に未来をたくす」

「えっ？僕達に？」

「でも…」

「これは君達に与えられた君達にしかできない重要な任務なんだ。この宇宙でおこった出来事を報告してほしい」

「帰ったらただいまっていうのをわすれるなよ？」

「間もなく時間です！」

「ミサイル装填準備！！」

「頼んだぞ」

「あっま……」

「カプセル固定！ロック確認！生命維持装置正常作動確認」

「ミサイル射出位置へ！」

二人の載せたミサイルが発射装置の中に吸い込まれてく…

「ＥＳミサイル射出！！」

「護、かいどう…」

二人の載せたＥＳミサイルが、時空ウィンドウを開き、
姿が見えなくなっていった…

「さて、我々のほうもなんとかしなければな」

「まだまだぼくちゃん諦めないもんね～」

しかし…

「ノン！次元宇宙、収縮してきます！！」

「くっ、予想より早すぎる…打つ手はないのか！」

「諦めるな！」

「駄目です！空間が圧壊し……」
唐突に真っ暗闇の中に突入した。

「なっ！！何が起こった？」

「わかりまセン！！レーター、超空間センサー反応できません！」

『強大なパワーがわたしを固定している』

「なんなんだ？ここは……」

……
カオル報告

ｆｉｎａｌ時代のオービットベース
勇者ロボ達
ジェイアーク
各種ツール

第161話　ボルフォッグの最後？　投稿日20110811（後書き）

ナギ少尉「……勇者軍団まるごと…」

作者「そそ、いただきました」

ナギ少尉「続編作られないの？彼等の…」

作者「ん～みたいなんだよね…大人の事情で…」

ナギ少尉「大人の事情？」

作者「ガオガイガーは勇者ロボシリーズの８作目で、シリーズラストなんだよ。
実は打ち切りね」

ナギ少尉「え～なんで？面白いのに…」

作者「今みるとね～…けど当時は裏番組に視聴者がとられて、勇者ロボシリーズをやめないと全国ネットから外すぞ！と勧告されてさ…」

ナギ少尉「それでその後聞かないのね？」

作者「２００５年にリバイバルのような形で、
ガオガイガーＦｉｎａｌＧＧＧが東京ローカルで、あったのみ…
まぁあとは時代はポケモンとか…
になっていくんだよね～
で大人も熱中できるガンダムシリーズとかさ…」

ナギ少尉「…そう…残念…勇者ロボシリーズ復活して欲しいね」

作者「まぁ…当時は自分もガオガイガーは知らなくって、
スパロボからなにこれ…熱いじゃんではいりこんだ口ね」

ナギ少尉「あ、そういえばパチンコでてでるよね？今の時点で」

作者「あ～でてるね～打ちたいけど、書いたり、キャリーしたりし
てるとなかなか…」

ナギ少尉「早くうちなさいよ。で貯金してくるの」

作者「貯金はやめてくれ…」

ナギ少尉「さて予告ね…我等の勇者ロボは復活するのか？
次回、ガオガイガーの世界より帰還…
たて、たつんだ勇者ロボ達、我等のガオガイガー…ファイナルフージョン！！」

作者「ナギ…」

第１６２話　ガオガイガーの世界より帰還　投稿日２０１１０８１３

２００１年１２月２１日未明
～Ｂ５５ハンガー～

世界扉が開き転げるようにカオルが出てきた。

「ただ！！」

［マスター…？？なに慌ててんの］

「あとあと、またもどる…ルーロス！！」
虚数空間からルーロスだしながら乗り込むと、戦艦ハッチから緊急射出で飛び出していった。

［……マスターなにあわててた？］

［さぁ？？］

ｓｉｄｅ～カオル～

（くぅぅぅ…暴れんなぁ…）
虚数空間でＪアークをおさえつけてて…脂汗がでてくる。

ガオガイガーの世界の次元宇宙でＪアークを引き込んだカオルは、まずはガオガイガーの世界の通常宇宙にでて、
そこで世界扉をも突破する時空吸引力を体験した。

なんとか世界扉を閉め、更に世界扉を開きカオルの世界へと戻ってきたわけだ。

その間3分、
更にここまで12分…
カオルは限界に近かった。

「ついたでちよ」

「さ、さんきゅ」

艦の外に飛び出し…悪いものを吐き出すように……

side～Jアーク艦内～

「!!レーダー、センサー復旧しました!!」

「どうなっとる?」

「あ、あれを!!」

「月か??」

『太陽系に酷似しているが…我々の太陽系ではない』

「トモロ？」

『まず…我々の太陽系にない建造物が、いくつか確認できる』

「これは……？」

『中に人が沢山すんでいるようなステーション』

「人が生きてるのか…」

『あとこれもだ』

「見たことない艦船だな…」

「砲塔があるって事は…宇宙戦艦のようね？」

『あと月の表面だが…』

「っ！！」

「な…気色悪…」

『また、月には超高圧光線などで、直径７ｋｍあたりの穴が、確認できる』

「……ええ…そうね…」

「流石トモロですね」

『未承諾の人物が出現…不可解…シールド突破反応なし』

「き、君は？」

「どこからはいったのだね？」

「始めまして…皆さんをこの世界に招きました、国連異世界軍責任者、渚カオルともうします」

「この世界？」

「実は、この世界は皆さんのような異世界の力を借りないと、太刀打ちできない事態に陥ってるのです」

「その事態とは？」

「異星生物による人類絶滅」

「人類絶滅…」

「先程映像で見られたと思いますが、あの死骸が、ＢＥＴＡというものです。
月は異世界軍の手で取り戻しましたが、まだまだ地球にもいますし、また太陽系の各惑星、太陽系以外にも多数…１２０億をこえる司令塔がいる状態です」

「……」

「正直、この世界の人々は約３０年近く戦い続け、
総人口が４６億から１０数億にまで減り、
ヨーロッパ、アジア大陸からは人がいません…
正直皆さんの様な力がないと、希望も持てないのが実情です」

「１／４に……」

「ですので、連れてきた後になってしまうのですが……
ＧＧＧの皆さん、人類救済に力をかして下さい」

「いくつか聞いていいかね？」

「はい」

「我々は元の世界には…」

「戻れません」

「戻れないとは？」

「運命的にだと思いますが、その後あなた方の世界に遊星主みたいな危機は訪れず、
ＥＳウィンドウと共に消滅する形でした」

「…」

「その後地球に護君と、かいどう君がたどりつき、
復興とともに、あなたがたの石碑がたった…流れです」

「我々の世界には平和が…」

「はい。訪れました」

「そうか……よし、では我々ＧＧＧは君に協力しよう。いいな？みんな」

「まかせとんしゃい！」

「別の世界も救ってミマスネー」

「パピヨン…」

「ありがとうございます。では補修も致しますのでトモロさん、ラグランジュ４に向かって下さい」

『了解』

ラグランジュに進路変更するのを感じた…

（とそういえば…）

「ルネさん…達ダメージは…？」

艦内部でＪと寄り添うように休めているルネさんの事を思い出した。

「ああ、彼等は…機械部分、生体部分に深刻なダメージはきてるが…」

「とりあえず医療カプセルて、ダメージ回復ですね」

「医療カプセル？機械があっても大丈夫なのかね？」

「た、多分……キャーティア技術とナデシコ技術でなんとか……」

「我々以外にも、何だかの世界から？」

「はい…色々な世界から死の運命になる人を連れてきちゃって…」

「参考に聞くが、技術？人？」

「技術は色々な世界から勝手に学んでですね。
人は、あくまでもその世界で死の運命の人達です。
つまり長官達のように…」

「ふむ…おいおい教えてもらうとするか…」

「あ、命さんもいましたね…わすれてた…」
医療カプセルをだし…
「重体の方や、ルネさんを医療カプセルに…」

「おい、命隊員を！！」

……

「ではお預かりします」

「勇者達を頼んだぞ」

「はい……勇者達といえば…」

「ああ、彼等もな…」

視線はボロボロになり起動すらできてない炎龍、氷龍等に注がれる…

「彼等は…」

「デビジョン艦を失った今だと修理が不可能だが…
修理できれば…の話になるが、地球にもっていけばとりあえずは、
再起動する可能性がある筈だったんだが…」

「そうですね…とりあえずプラットフォームに着舷した後に、
自分らの修理できる施設に移送します」

「ああ…頼む」

「と…見えてきましたね…」

「ほう…これはまた…」

ラグランジュ４に浮かぶプラットフォーム…
そこには改修作業をうけているマゼラン級やサラミス級が接舷している。

コロニーレーザーは接舷はしてないものの側で改修作業に入っていた。

『マスター、８番ドックが空いてますのでそちらに』
通信が鈴から聞こえる。

「了解、トモロ左手からかぞえて３番目のドック確認できる？」

『確認した』

「そこにつけてな」

『了解』

ドックに接舷すると、ワイヤーで固定してあった勇者ロボにコバッタ達がたかり、
移送作業にはいる。

またＤＦ輸送挺がＪアークのハッチについた。
「では、皆さんは横浜基地へご案内しますので、輸送挺にのりひとまず逗留して下さい」

移乗中に…
「カオル君、横浜基地とは…宇宙にある基地かね？」

「あ、地球にありますよ」

「この形状で大気圏突入するのかね？」

「あ、いえしません。チューリップ…ワームホールを通ります」

「ワームホール技術？興味深いもんね～」
「なるほどワームホールか…」

先発輸送挺はＪアークの船体から離れ、
後発がドッキング作業しているなか…
チューリップを潜りぬけ横浜基地に到着する。

「ほう…これはまた…」

「未知の技術、燃えてきたもんね～」

「じゃ、皆さんお疲れでしょうので、今日一日はお休み下さい。
彼等コバッタ達が宿舎へとご案内いたします」

［ＧＧＧ一行様歓迎いたします］
［おいでやす］

ＧＧＧの人達は宿舎棟へと案内されていった…

「ただいまぁ」

［マスター…また多数連れてきたね～］

「まぁっね…と…明日からの前に、ちっと平和日本にいってくる」

［はいはい…いってら～、新人はこっちがやっとく～］

～現実日本～

（よっと……ん？見慣れない本だな…）

題名…奇想天外兵器という本がベットの上においてあった。

（プレゼントかな？もらっとくか…）

そしていつも通りの納品と廃材の受け取り、食材等日用品をうけとり帰還する。

Ｂ５５ハンガー

いつも通り集積所へ荷物置き…医務室へ…

パピヨン、凱、命、ルネ、ゾルダートJ達が入っている医療カプセルを虚数空間からだし、

空いているカプセルと交換する。

「カオルさん、この人達…」

「この4人はエヴォリュダーと、サイボーグと生体サイボーグだね。あと一人は……うんうまくいってそうだな」

「エヴォリュダーですか?」

「機械との完全融合した、超人的能力をもった人間だね。サイボーグとは違い完全融合一体化といえばいいか…」

「未知の分野ですね…
完全融合ですか……
あ、容態回復しましたらお知らせします…
けど…サイボーグもですよね?」

「まぁエヴォリュダーもサイボーグも、生体部分が回復しない事には…だしな」

「ですね…」

「よろしく頼むわ」

B55ハンガーにいき、一息つき、データーをいれこみながら…

「この七日間どうだった？」

［と…まず宇宙で改修工事の為プラットフォームを拡張、現在改修中…来月上旬にはそろうね～］

「とりあえず木星だな」

［だね～、惑星の詳細データー上がってるし……
あと、西日本のBETA汚染のクリーニングは完了］

「お…重金属取り除けば人が住めるようになるか…」

［……あと自然とかもね］

「あ～……ま、地道にかやっぱ…」

［あとは重慶基地完成度７２％…飛行場はまだだよね？］

「まぁ…な随州は？」

［ん…飛行場は先に完成、基地完成率５０％ってとこ。防衛施設は後回しにしてるよ］

「あと他には変わった動きあった？」

［月面の死骸収集率８２％ね］

（あの死骸山か…）

［あれどうする？腐敗もしないから保存可能だけど］

「……食料にしてもあれだけの量なぁ…肥料にできない？」

［…難しいかもね…いっそマスドライバーで太陽に撃ち込む？］

「１番現実的か…まぁ…寝て考えるわ…
正直処分以外の方法も考えたいし…」

［腐らないから期限はないからね～］

「これが地上だったらえらい腐敗臭が漂ってくるよな…」
その為、地上では火炎放射車両が大忙し……

［おまけに病原菌が発生して怖い事に…］

「真空でよかったよなぁ…」

［けど火星はどうするのもあるよ～腐敗するし］

「……酸素剤ないと火炎放射車使えないしな…
まぁシュミレーションと思えばいいか。じゃ、お休み」

［お休みなさい～］

……
カオル報告

GGGメンバー加入

第１６２話　ガオガイガーの世界より帰還　投稿日２０１１０８１３（後書き）

ナギ少尉「最新情報をお届けしよう…
我等の勇者王を異世界につれてきたカオル、
しかし、勇者達は遊星主との戦いに傷つき、深い眠りについていた。
勇者達を治し復活させる事ができるのか？
勇者達は敦煌ハイヴ攻略にまにあうことができるのか？
次回、敦煌ハイヴへ…進撃開始
…立て、立つんだ我等の勇者王！！…
ん～快感、やりたかったのよね～こういったナレーション」

作者「なぁ…ナギ、男性の方がそのナレーションしてるんだぞ…」

ナギ少尉「え～いいじゃない。たまには女性のわたしがやってもさ～」

作者「まぁ…いいけど…あ、ある兵器ネタが、次回大部分しめます。
お楽しみにぃ」

第１６３話　敦煌ハイヴへ…進撃開始　投稿日２０１１０８１５

２００１年１２月２２日未明、
場所は重慶基地…

続々と敦煌ハイヴ攻略の為の部隊があつまってきた。

昼過ぎ発動予定の敦煌ハイヴ攻略の為に、艦船では、
ビッグトレー砲艦型４０隻、
ビッグトレーミサイル艦２０隻、
ビッグトレー対空ミサイル換装艦５隻、
トレインギャロップ１００隻が集結しつつあり、
また同行にギャロップコスモクリーナー搭載艦を伴っている。

搭載機等…ヤドカリ操縦は、
対陸戦力機が、
モンスター改５００機、
陸戦強襲型ガンタンク４０００機、
６１式改１００００両、
６１式重機関銃型２０００両、
対空戦力機が、
魔対空型ティエレン５００機、
有人機は、魔ドム、魔不知火、魔撃震等を始めとした各部隊…
勿論Ａ－０１やＢ－０１も参加となる。
機体をトレインギャロップに載せて、
搭載小型チューリップで帰還してきた。

またもう活躍する場がさすがにないとは思うが…
ボン太君、ターミネーターの歩兵部隊も伴っていた。

明らかにフェイズ４強規模のハイヴ進行作戦といえば過剰戦力ともいえるが、
攻略時または攻略後に５方向からの増援が予想される為、
それに対応できるだけの戦力を…との用意で行っている。
本来であれば陸戦強襲型ガンタンクは約２４００機が限界だったが、
足りない分を、各基地防衛部隊より抽出している。

ｓｉｄｅ～？？？～

『いやに丁寧ね～』

「あ、さっきの着陸？」

『そうそう。なにかあったの？』

「うふふ…なんでもないわ」
？？？の左手はお腹をさすっている。
新しい命を…

『そう…トラブルかとおもったけど杞憂だったね』

「心配してありがと…さ、カーゴにおさめないと」

『わかったわ。あとでね』
個人通信が閉じられた。

もっとも丁寧に着陸しなくても、殆どこの機体は衝撃がこないのだが、
操縦にでてしまったようだ。

機体をハッチに歩行で乗り上げ、カーゴ内部のハンガーにおさめた。

???はこの後、先頭カーゴのチューリップで、コロニー経由、横浜基地へと帰還する。

ｓｉｄｅ～???ｅｎｄ～

さて…時は少し遡り、
カオルが就寝してた頃…

Ｂ５５ハンガーデスクの上におかれた本は、一コバッタ達によって読まれていた。

奇想天外兵器…という本である。

［ふ～う…読み終わった］

［内容中々おもしろかったよね］

［けど開発成功しなかったのか…］

開けているページには第二次大戦当時に開発失敗した兵器、
パンジャンドラムの紹介がかかれていた。
１９４３年イギリスではある兵器が開発されていた。

第二次世界大戦当時、ドイツは連合軍に対する備えとして、
大西洋の壁と呼ばれる抵抗拠点となる分厚い銃座コンクリートトーチカ、
対戦車対人地雷原、対上陸阻害用機雷杭等などを構築していた。

それらを破壊する為に考えられた奇想天外兵器がパンジャンドラム…である。

構想上は自走する大型爆弾兵器、
ロケット推進で９６ｋｍで爆走し、２ｔの爆薬をもち、
自らコンクリートトーチカ等に突貫して爆発し、トーチカを無力化する…という構想でもって練られ、
開発実行されました。

そして出来上がったのが１．８３ｔ炸薬入りの車軸に、
二つの高さ３ｍの車輪にロケットが９本ずつつけられた魔兵器パンジャンドラム。

早速実験となり上陸挺からイギリスの実験海岸にむけ、
爆音をあげながら発射されました。

しかし…
ロケットの取り付け部の強度不足により浅瀬で擱座。

翌日、倍の３６本のロケットを取り付けた姿で現したパンジャンド

ラム…
再び上陸挺から発射するもまたもや浅瀬で擱座。
その次は三輪にして更にロケット増やし実験するも…
ロケット点火せずに調べている内に水没。
ここで諦めないロイヤルネイビー魂。

四度目にはロケットを当初の４倍７２本に増やし実験開始…
見事浅瀬を疾走し目標物へ到達するかとおもいきや…
砂浜上陸したところで方向を変え海に戻ってロケット暴発で爆散…
今度は誘導しようと考えケーブル式にして発射…
しばらくするとコースから外れたので軌道修正を試みますが、
ケーブルがプチプチに断線しており…失敗…

その後いくたびと実験んし、
ロケット増やしたりケーブルを強化したり車輪を調整したり…
しかし失敗続き。

そして第二戦線となる5月1日発動予定の上陸に間に合わす為の最終期日…

時に１９４４年1月…
国家の威信がかかっていた超兵器パンジャンドラム…

それの最終評定試験が開かれた。

軍の高官、科学者、技術者達がみまもるなか、
試験開始…

パンジャンドラムは発射され浅瀬から砂浜上陸、
最高速度１６０ｋｍをマークし、これは合格か？とおもいきや…

スポーンスポーン

車輪から外れてあさっての方向へ飛ぶロケット…
推進力が片寄ったためバランスを崩すパンジャンドラム。
小さな穴に片輪がはまり、方向を変え海へと再侵入…
更に方向を変え再度砂浜に上陸するも、穴にツッコミ大爆発。

ものの見事に計画は打ち切りになりました。

その後トーチカに対する有効な攻撃手段を持たずに連合軍の攻撃は
開始され…

浜辺に到達、盾になっていたビギンズボートのバウランプが降ろさ
れた途端に銃撃をくらい、

公式記録の記述に、タラップがおりた瞬間、先導の中隊は活動不能、
指揮官不在、任務遂行不能となった。
指揮をとる全ての士官、下士官はほぼ死亡、または負傷した。
部隊は、生存と救出の為にもがいていた。
の記述の通り、壮絶な戦いに陥る事となる…

［僕らがつくったらどうなるのかな？］

［そうだね～ここをこうしたら使えるんじゃ？］

［それだと巨大ゴリアテだよ］

これも奇想天外兵器にのってあった。

ゴリアテ、第二次大戦時にドイツで開発運用された、
遠隔自走破壊兵器である。

有線式のバッテリーまたはガソリン駆動の、
爆薬満載の８０ｃｍサイズの無限軌道車とおもえばいいだろうか…

コンセプトは安全にトーチカや戦車、陣地を遠隔操作で破壊する。
といった兵器であった。

元はフランスの工業デザイナーが試作してたのをドイツが発見、
それを研究開発して兵器となしたのが元となる。

当時は無線は高く、使い捨ての為、有線式誘導になっていた。

最初は陣地にくる９ｋｍで迫ってくる爆薬満載の小型兵器、
到達するまえに重火器にて、兵器の装甲を貫き爆破…

まぁ到達されたら恐いものだから、そりゃ集中して狙うだろう。

その内、装甲とエンジン強化した改良型が投入…
こんどは有線の部分が徹底的に狙われた。
スコップ等でケーブルを切断する等の逸話もある。

結局多いに活躍できたのが、地雷原に突入し、
その爆薬自体で連鎖誘爆を引き起こす処理兵器としての使い道となった。

あと捕獲したアメリカ兵が、遊んでいて爆発、
死者がでるという逸話もあった。

［あ～それもいいかもね…
けどパンジャンドラムをなのれないよ］

［なら、こうして…］

さて、第二次世界大戦の奇天烈兵器達は、
ＢＥＴＡ戦において、どう生まれ変わる事になるやら……

時間は元に戻り…昼間、

「とりあえず集結は問題ないね」

［新造艦も問題なく集結中…明日の作戦開始時刻には問題ないよ］

「ん…ならいいか…と…
あとは…勇者ロボ達か…」

今朝方移送されてきた勇者ロボ達…未知なる技術の為、
取得情報と照らし合わせて修理計画をねっていた。

［あたらしく作り治したボディに移植の方が早いね。これは…］
赤の星の純粋技術で作られた、ジェイアーク、ジェイダーに関しては、
自動修理装甲が働いているのでほっといても問題はなかった。
だが、他の地球製勇者ロボはそうはいかなかった。

［よくここまでダメージくらって動けたね～
…だよ。駆動系がひっちゃかめっちゃか…
人間で例えるなら間接の骨が粉砕してるのに動いた状態］

「う…」

［あと、ボディ自体がもう破壊？な状態のもいるし…］

「ん～……正直修理見込みは？」

［2から8週間ってとこ～］

「ＡＩの機能回復の目処は？」

［それなら…全機2週間以内～］

「…とりあえずＡＩ回復優先で、ボディ修復でよろしく」

［で…いいの？］

「ま、彼等もいきなり別の身体じゃ嫌だろうし、
修復できるならできるだけしたいし…あとは希望を聞いてからだね」

［了解～…けどゴルディオンさんはどうするの？］

3つの船の合体ＡＩとなっているゴルディオン…

「彼か……彼は前の身体再現さしてあげたいね…」

［前の……？ああ、これね？］

「うん。そうそう」

［了解～］

「で、あとボルフォッグは…」

ボルフォッグに関してはボルフォッグのみは回収されてるものの、
パルバレイバーに操られた合体マシンは爆破により、
粉々となっていた…

「本体のみなんだよな…まぁガンクルーとかは新造かな？」

［了解～］

「で、ジェネシックは…自動修復中と」

凱を外にだすと、ギャレオンは合体を解き、
純粋緑の星製の各ガオーマシンは、備わっている機能の自動修復モードになって修復中であった。

「ファイガーを建造すべきかな？」

［マスター、そろそろ］

「ん？あ…わかった」

時計をみると作戦開始時刻前…

司令室へと向かう…

『諸君、我々は次なるハイヴ攻略の為にここ重慶基地に集った。
次なる目標は重慶から北西１５００ｋｍ程の距離にある敦煌ハイヴ。
敦煌を落とせば我々人類はカシュガルへの道が開ける…
物量には物量でかえす…我々の力を再び見せようではないか…』

スクリーンが、カオルを映し出す。

「進軍せよ」

「第一打撃艦隊発進」

「第二打撃艦隊発進」

「第三……」

司令室が騒がしくなる…

これより丸３日間移動、２５日朝には敦煌ハイヴ砲撃予定で作戦は開始された…

……

カオル報告

第１６３話　敦煌ハイヴへ…進撃開始　投稿日２０１１０８１５（後書き）

ナギ少尉「とうとうここまできたのね…」

作者「とうとうな…長かったなぁ…」

ナギ少尉「オリジナルハイヴまで…次の敦煌ハイヴを落とせば障壁はないのね」

作者「まぁ、この次のオリジナルハイヴおとしたとしても、まだ少し続くけどね。あと問題の火星もあるし」

ナギ少尉「ところで、今年中に終わりそう？太陽系完全攻略がこの物語のＥＮＤ目標でしょ？」

作者「ん～た、多分？…で再構築するだろ…う～…まぁ加入予定のも、まだまだ入れたいけど…ね」

ナギ少尉「さて、次回予告は戻して…次回、敦煌ハイヴへの道程…モンスター改の活躍もあるよ。お楽しみにぃ～」

第１６４話　敦煌ハイヴへの道程　投稿日２０１１０８１７

２００１年１２月２２日

モニターには進軍しつつある陸上艦隊が衛星映像でもって映しだされている。

大規模艦隊になった為、コスモクリーナー搭載艦を中心とした、艦隊が２個できていた。

５０ｋｍ範囲外はいまだ死の世界の為ともいえた為である…

艦隊の先頭部分には、
弓形陣に２重のラインでにビッグトレー砲艦型が２０隻すすんでいる。

その後方にコスモクリーナー搭載艦を挟んで、
ビッグトレー対空ミサイル換装艦が並び、
その両側にビッグトレーミサイル艦が単縦陣、
その外側にトレインギャロップが並ぶ…

先頭のビッグトレー砲艦型から、最後方のトレインギャロップまで約１０ｋｍに及ぶ、
大規模艦隊となっていた。

「これで敦煌ハイヴは落とせるとして…その後の増援対応だよな…」

［だね…敦煌ハイヴは最大戦力の7割弱、今の時期を逃さないで…だね～］

デスクのモニターに映像を出す。

ルーロスからのハイヴ内個体数調査情報が映し出された。

現在敦煌ハイヴは度重なる増援供出等の為、
来年にはフェイズ5に成長しようとしてたが、
現在フェイズ4強の飽和推定数の約75万を下回り、約52万となっていた。

「で、地上の集団は？」

［今のとこ脅威になる数はでてないけど敵集団、ボギー数は8］

「まぁそんなものか…」

［いずれも大砲級を含まず、旅団規模以下ね］

「モンスター改のテストも兼ねたいな…」

［となると……明日遭遇予測のボギー7が最初になりそうだね］

「明日何時頃？」

［昼過ぎ３０％＋－３時間４０％程、遭遇出来ず２７％…まだまだ予測範囲からでてないよ］

「……誘導しちゃえば楽かな」

［G元素棒？あれは誘引力強すぎだよ、エアロスタットは落ちちゃうよ］

「バルキリー小隊で誘引は？」

［あ、ガウォークで？］

「そそ」

［トラブルがないかぎり大丈夫かな？］

「いってるよね？」

［え～と…いってない…ね］

「あ…じゃあ…スカル大隊回して」

［了解］

「…あとは特に試したい機体はないよな…」

［今回攻略後が問題になりそうだから過剰戦力になったしね…
そうそう問題は起きなさそうだよ］

「じゃあ…」
時計を見上げ…
（まだ作業できるか…）

「技術の続きでもしますか…」

司令室を後にし、ハンガーデクスで続き作業を…

［マスター、今度は何？勇者ロボは修理計画きまったよね？］

「ああ、まだ技術をね…例えばカーペンターズとかさ」

［へぇ…面白い技術で物質を修復するんだね～」

「空間修復技術な」
（空間修復ツールね…いいじゃん♪）

カーペンターズ搭載の空間修復ツールをみていた。

戦闘被害により、破壊された物質を元の状態に戻せる加工ツール。
まぁ要するに爆弾等で飛び散った部材をかき集め、
もとの結合した状態に戻すツールと思っていれば大丈夫だった。
またある程度の物質変換もこなす万能修復ツールであった。

ただし、複雑な構造は修復できない為、
建築物等の修復に向いている。

カーペンターズにはこの空間修復ツールを3機一組で搭載していた。

カヤナゴに３０００機ものカーペンターズ搭載され、
被害発生後急行して、現場到着後一斉にとびだし、
修復作業にあたる…というものだ。

他のロボット物でも、
特に現場の後始末をするロボットが出てくるのは珍しい…

「とりあえず改造後…か…」

カーペンターズを再結成する方向でいくらしい…

［カーペンターズつくるの？］

「ああ、そのつもりだ。大仏とかつくるの苦手だろ？」

［うん……］

原作でも、カーペンターズは空間修復ツールを使い、
文化財を修復する作業にもあたる。

この世界においても文化財を再生してもらう考えだった。

街に関しては、一からつくる為、住む人々の考えがあるだろう。
なので文化財を現物の記録、映像や設計図等あり、
材料があれば修復できる彼等が必要でもあった。

「とりあえず…っと…」

カーペンターズは簡易ＡＩ、
壊れても変えがきくというコンセプトで設計されてた。

一組を同化で作り、
直接同化にて装甲材質変換、ＡＩ強化、言語表示能力等も施す。

［始め］［まして］［マスター］

「よろしくな♪早速実践で作ってもらいたいんだが…これをな…どれくらいでつくれる？」

鎌倉の大仏を引っ張ってきた。

［場所は］［ここで］［造るの？］

「そうだな…もとの場所は１１号」

［更地になってるよ～］

「じゃそこで作ってほしい」

［わかった］［けど］［移動方法は？］

「ふむ…」

下駄をだしてきて…搭載できるように施した。

「どう？」

［ありがと］［作業見込み］［５日程］

「ならもう少し作るようにしておくよ」

生産ラインに改造後で２９組注文する。

「３０組で１チームかな？」

［兄弟増える］［ワ～イ］［４時間で仕上げる］

（とりあえず文化財復興チームか…）

「あとは…ディバイディングドライバーか…」

［空間湾曲技術ねぇ…正直チートじみてきた］

「とりあえず作っておこう…危険すぎで、あんまり使う機会なさそうだけど…」

1セットの注文をする。

「とりあえずこんなもんかな？
で、会敵もしないしなぁ……一回仮眠とるよ」

［なんかあったらお越しにいく～］

「お休み」

２００１年１２月２３日
８時頃

朝食をかるくとりそろそろかな～と司令室へ…
しかし…

［会敵しないね…］

画面上でボギー７の集団はあさっての方向へといき、
ハイヴへ直進する艦隊にあたるＢＥＴＡの集団はいなく、
モンスター改のテストが兼ねられなくなってしまう事態になっていた。

「じゃぁ誘引するしかないか…スカル大隊はついてるよね？」

［うん］

「じゃ、偵察誘引命令を…」

［承認！！］

「……長官の真似？」

［えへへ、熱いんだもん♪あの人達］

スカル大隊の一部がガウォーク形態で発進していく…

「接敵は…何時頃に？」

［3時間後～］

「じゃぁ…それまでに、ＧＧＧの方々の割り振りだね」

［うん。加入の承認は貰ってるしさ］

救助したＧＧＧのメンツは艦の運用や整備、技術要員が殆どであり、艦の防空を取り扱う戦闘要員等は殆どいなかった。

ので大河長官、火麻参謀は司令参謀部へ、
スワンさん、猿頭寺さん、雷牙博士は開発部へ、
牛山さんは整備部への配属となる。

また他にも色々な部所への配属が決まってく…

ｓｉｄｅ～バルキリースカル２１～

『へっへっへっ…見えたっすね』

前方にはこちらに向きを変えようとしているＢＥＴＡ群がいた。

盛大な土埃をあげ…顔がこちらをとらえる。

「よ～し、お客さんをアテンドするぞ、あんまり離すなよ」

『了解』『おいさ』『腹減った～』

……

『友軍まだですか?腹減りましたよ。食べかけだったのに…』

「もうちょっとだ、頑張れ、あと出るのわかってたんだから、お前が悪い」

『まさかこんなに低速度で、
長距離接地飛行するとは…思いませんでしたよ』

「そういうな」

（オリジナルハイヴ落とすまでは、バリアの存在を秘密にしておきたい…か）
ブリーフイング時の説明を思い出していた。
ＶＦ－１７１はピンポイントバリアにより、
光線級の生体レーザーは無効にできる。
だが、それにより発展を促すのが怖い…
のが異世界軍における総意である。

後方にはバルキリーを潰そうと、必死に追いかけているＢＥＴＡの集団がいる。

「スカル２２前出過ぎだ、スロットル絞れ」

『とと…』

１５０ｋｍから２００ｋｍの低速で後ろについてきている突撃級との間隔を調整しながら、
彼等バルキリー小隊はガウォークで進んでいた。

あと少しだ…

『ディーポマムよりスカル２１へ』

「こちらスカル２１」

『ご苦労様、スピードあげて振り切って良いわよ』

その通信入ったとともにスロットルをＭａｘに入れ、
アフターバーナーふかしながらガウォーク加速していく。
７００ｋｍあたりまで加速すると、前方にモンスター改の戦列が段々と見えてきた。

軽く浮上してモンスター改の列をかわすと……

ｓｉｄｅ～バルキリースカル２１ｅｎｄ～

～司令室～

「モンスター改の射程まで、あと2分！！」

本来はＯＴＭ技術を使った砲身により、１６０ｋｍの脅威の射程距離を誇るモンスター改…

今回は殲滅戦テストの為、水平発射距離である１２ｋｍ設定にて発射される事となった。

「間もなくはいります！！１０、９、８、７、６、５、４、３、２、１」

画面に映し出されたモンスター改の液冷式４０ｃｍ液体推薬キャノン砲から砲弾が放たれる。
その数２０００発…

その衝撃は、モンスター改の接地してある土砂に減り込む程になる。
その弾丸はほぼ水平に飛び瞬くまに突撃級の身体に吸い込まれ、
一瞬でその爆炎により身体が爆散する。

先頭を走っていた突撃級は身体を散らし、
その後ろの突撃級に認識される事がなくなっていた。

その位の爆散であった…

続けて衝撃を殺し、照準をロックし次弾を撃ち放ち次の目標が爆散する。
高い威力なのに連射可能なのは、ＯＴＭ技術によりるものといえよう。

一斉射ごとに、５００以上のＢＥＴＡの華が散り、ものの１０斉射、２分足らずで、誘引してきた旅団規模のＢＥＴＡ群は、

要塞級を含めて体液と肉片をのこし消えていった…

「モンスター良いんじゃない？」

［確かにね～けど……］

「けど？」

［補給に時間がかかるよ…］

モンスター改の４０ｃｍの弾は２５斉射できれる。
弾を補充し再びでるのだが、
補充に戻るのに時間がかかる状態となっていた。

地面に減り込んだタンク部…
抜け出して旋回戻る形となる。

「あ～…まぁ…モンスター改の側に補給部隊か展開するか…
４部隊に分けるかだなぁ…」

［それしかないだろうね～］

突撃級は淘汰され、しばらくすると、中衛、後衛グループに入るＢＥＴＡ群も淘汰された。

モンスター改のデーターが上がってくる。

ＯＴＭ技術による砲身により、バロッティングと呼ばれる砲身内部振動は起きず、
また熱による砲身の歪みも、
現行の陸戦強襲型ガンタンクの２４０ｍｍキャノン砲よりも発生率がかなり低くなる…

またライフリングを施さない砲身であり、摩擦係数も少なく、
そのため長距離射程においてジャイロによる、
弾の軌道ズレが起きない等もある。

ただし、やはりその巨体からの長砲身、約５０ｍによる長い砲身、
巨体の為、
閉鎖空間内部ではまとまった運用が少し難しく思えていた。

２００１年１２月２４日

クリスマスイブ
要望があったが…現在進行中の部隊があったため、ミサは開かれなかった。

進行艦隊は特に遭遇する事もなく…ひたすら砂漠となる道程を進む。

本来であるなら青海湖のあたりであるが…

ＢＥＴＡに山々を削りとられ、平らにされ…砂漠化がすすむ事となり、
あたり一面砂漠の海となっていた。

自然がなくなると瞬くまに砂漠化が広がり…
青海湖も枯れ、砂漠の海となってしまった…

２００１年１２月２５日未明…

艦隊は敦煌ハイヴ１３０ｋｍに接近すると…

「敦煌ハイヴに動きあり！！大規模ＢＥＴＡ群出現してます！！」

モニター映像は敦煌ハイヴからマグマの如くＢＥＴＡが湧き出てきている。

「対攻略戦準備命令を発動せよ！！」

「今回は、おとなしく見学とくるか」

司令室配備となった長官、参謀がみえていた。

……

カオル報告

カーペンターズ
ディバイディングドライバー

作製

第１６４話　敦煌ハイヴへの道程　投稿日２０１１０８１７（後書き）

ナギ少尉「モンスター、良いじゃないですか～」

作者「だろ？」

ナギ少尉「けど１６０ｋｍの射程って本当です？」

作者「……正直疑いたいんだが公式でもだし…
公式設定からかんがえると、滑空砲しかないんだよなぁ…」

ナギ少尉「あ～神の目による１６０ｋｍ先でも１０ｍの誤差で着弾ってやつですよね」

作者「そそ、地平線越えて目視不可能な射撃ね」

ナギ少尉「現代では…可能？」

作者「単純に火薬などの推進力での砲身では不可能…といっておくね。
弾に加工を施すなら可能だけど」

ナギ少尉「ＡＧＳとかですね」

作者「そうそう…で戦車９０式等は３ｋｍあたりが有効射程距離だし」

ナギ少尉「３ｋｍ！！えっと突撃級にとったら2分で…」

作者「きちゃうね～」

ナギ少尉「むむむ…あ、次回ですね…
次回、敦煌ハイヴ攻略、そしてＢＥＴＡの逆「ぎゃーぎゃー」お楽しみにぃ」

作者「はぁはぁ…敦煌ハイヴ攻略だけです！その後はつきません！！」

第１６５話　敦煌ハイヴ攻略戦　投稿日２０１１０８１９

２００１年１２月２５日未明

衛星からの映像で、
敦煌ハイヴにある門より、
ＢＥＴＡが近寄ってくる異世界軍の艦隊へと、撃退せんと溢れ出してきた。

その数予測数は今までの最大規模で４０万…

対する異世界軍艦隊は動きを止め、
迎撃体制をとるべくトレインギャロップから搭載機を放出し始めた。

迎撃ラインにはいるのが、
モンスター改２５０機、
陸戦強襲型ガンタンク２０００機、
その戦線交代要員に同数が控えている。

そして最大戦力である…
ビッグトレー砲艦型、
ビッグトレーミサイル艦も戦列を整え始めた。

艦載機をだしたトレインギャロップは方向転換し、不足の事態に備えてる。

補給チーム搭載のトレインギャロップのみ戦線に合流する形になる。

～司令室～

「煙幕弾頭弾射撃開始します！」

モンスター改から勢いよく煙幕弾が放たれる。
こちらの砲艦型の最大有効距離までの間の空間に、
煙幕を張り巡らせ、光線級に対してのミサイルのアドバンテージを作る為に撃ち出される。

モンスター改は控えも含め、
砲弾庫に入っている砲弾をすべて煙幕弾に積載変更を行っていた。

１０秒間に１０００発ずつ射出される煙幕弾頭は撃ち落とされながらも、
着実に目的空間を煙幕で埋めていき、
敵の大砲級が自身の射程圏内に到達する頃には、
既に艦隊からハイヴまでの空間は煙幕弾頭の煙りに染まりあがった。

「衛星からの種族判別情報送られてきます！！」

続々と湧き出てくるＢＥＴＡを観測している衛星猫の目…

猫の目はキャーティア技術をいれた戦場観測衛星で、
煙幕越しでも戦場の中の１０００万兵士中の特定の一人を、

顔まで判別できる性能をもっていて、
まさにチート的技術がはいっている。

別に宇宙から露天風呂を覗き見や、
庭の中でトップレスで日光浴してる金髪美女を覗くのに、
作った衛星ではない。

猫の目情報により、
現在地上に出ているＢＥＴＡ群の中での重要ターゲットである、
大砲級、重光線級、光線級に続々とターゲット番号がふられ……

「緒元入力」

「トマホークミサイル！！、全セル発射ぁぁぁっ！！」

ビッグトレーミサイル艦より４２００発ものミサイルが射出される。

ミサイルは８００ｋｍまで加速し、５０ｍの低空をとび、
目標の５ｋｍ手前で空高く高度をとり、衛星からの誘導により、
設定された目標に１００％命中する。
迎撃される事なく…

この一撃で予測ＢＥＴＡ総数の１％が華となる。

光線級はミサイルを感知してて、迎撃の為に生体レーザーを照射するが…
煙幕により拡散され有効熱量を持たずにそのまま受けて爆散する。

煙幕により、でてきた大砲級、重光線級、光線級にミサイルが次々と突き刺さり爆炎をあげる。

４射目にて、現状表にでている重要ターゲットはいなくなり、まだ湧く中だけにいる状態になった。

そこからはちまちまと周辺部及び、湧いてくる重要ターゲットを狙いうつトマホーク…

トマホークがその推進力で要撃級に突き刺さり、
その爆発力で要撃級の肉体を肉片に変えるばかりでなく、
構成物質である鉄板で周囲に襲い掛かり、
小型種族である兵士級、戦士級、戦車級はえぐりとられる。

また要塞級に突き刺さったトマホークは、爆発し、要塞級の肉体の４０％近くをえぐりとり、
体力を奪われ死んだ要塞級はその身体を支え切れず横に倒れ、
肉体に小型種族がつぶされ体液をだす…

いたるところでＢＥＴＡに対する災害がおきて…
突撃級がビッグトレー砲撃艦の射程圏に入る頃には、
予測数の実に２０％強、約８万強のＢＥＴＡが死滅したり、肉片に姿を変えていた。

レーザー無効の煙幕弾及び、正確無比に着弾する、トマホークミサイル、

及びその誘導をサポートする猫の目で一方的攻撃は続く。

ある程度は沸きつづける中に光線級、重光線級、大砲級がいるものの、
地上にでて5分もしない内にミサイルにて消滅するなか…
「砲艦型の射程圏に突撃級が侵入！」

突撃級がビッグトレー砲撃艦の射程圏内に到達する…

「砲艦隊！！６１ｃｍ砲３連装、一斉せいしゃぁぁ開始せよぉぉ！！」

衛星モニターにうつるビッグトレー砲艦型４０隻、
６１ｃｍ砲３連３６基、１隻あたり１０８門の主砲、合計４３２０門が一斉に火を放つ。

その大量の砲弾が射程圏内に侵入してきた突撃級に襲い掛かり、
必中とはいかないものの、豪快な爆炎をあげる。
その０．５秒後にさらに４３２０発の砲弾が、次々と生き残ったまたは既に死んだＢＥＴＡに襲い掛かる。

ＢＥＴＡに直撃しなかった砲弾は地面で爆炎をあげ、破壊力でもってクレーターをうみ、
また破砕力で、周りのＢＥＴＡの体力を一気に刈り取ったり、奪ったり…

射程圏内に踏み込んだＢＥＴＡは、まずできた砲弾クレーターにすみこむ。
そこにから砲弾がきて至近距離にて爆発が起き、
上半身に爆風が襲い掛かり、肉がもげていく…

生き残ったＢＥＴＡはさらに前にいこうとするも、
またもや砲弾がきて、爆炎を浴び、いきたえる…

小型種においては砲弾がきて爆発するたびに、
その爆風威力により吹っ飛びたたき付けられる…

砲弾至近距離にいるのは、砲弾が爆発するとその砲弾構成物が破砕し、
瞬時に襲い掛かり、肉を削りとりＢＥＴＡは肉片とかす…
その為小型種は、まともにすすむ事もならない状態に陥っていた。

「ＢＥＴＡ、門より出現、終わりました！総数約３８万！」

「現在残存１５万です！」

時間が経過し、朝日がでて日がのぼる頃には…
６１ｃｍの砲弾の嵐を抜けてくるＢＥＴＡはいなかった…

第一次防衛ラインにつめてた陸戦強襲型ガンタンクは帰還してく…

実に約１億９千発の砲弾の嵐…
クレーターを作りすぎてまともに進めなさそうな地形を作ってしまった。
着弾エリアの砂漠の砂は既になくなり、地下層にあたる岩盤がみえてかつ、
えぐられてクレーターができていた。

異世界軍艦隊は大きく迂回し、敦煌ハイヴの門を目指して進む…

２００１年１２月２５日深夜

攻略作戦はもはや定番化した釣り天秤に入ってきた…
昼過ぎから始まった釣り天秤は、深夜に入っても引き続き行われてる。

予測数をわずかに下回る３８万のＢＥＴＡが地上で命を散らし、
残るはハイヴ内部にいる約１４万のＢＥＴＡがのこっている。

その地下に篭っているＢＥＴＡを引きずり出すべく、
エアロスタットが門に突入し…深層部あたりから釣られたＢＥＴＡ群を連れてきて、
殲滅する作業が進む。

至近距離では過剰な破壊力をうみ、
門を構成している構造物すら壊しかねないモンスター改は今は整備

をうけ、休息中。

門から湧き出るＢＥＴＡを陸戦強襲型ガンタンク、６１式改、６１式重機関型、２０７Ｂ小隊、Ｂ－０１、及びビッグトレーミサイル艦が殲滅を担当していた。

「現在残り６万５３００」

釣り天秤は、確実にかつ安全にハイヴを攻略する戦法として、異世界軍では鉄板となりつつある。

なにしろ今の状態で反応炉へと突入は、真横や後方に隠道からの出現がありえ、危険性が高くる。

反応炉防衛しているＢＥＴＡのみにする為の、大事な大事な戦法であった…

（翌日３時あたりには突入できそうだな…しかし…）

心配する事項があった。

未だ…オリジナルハイヴ及びボパール、エキバストゥズ、クラスノヤスクからの増援気配がなかったのだ。

増援がウランバートル及びマンダレーからしか出てない…

ボパール、エキバストゥズ、クラスノヤスク、各ハイヴからは、オリジナルハイヴへの中規模移動しか確認されてない状態であった。

ウランバートルからの４万はボギー１１、マンダレーからの９万はボギー１２と割り振られていた…

ボギー１１到達予定は２７日午後９時頃、
ボギー１２到達予定は２７日午後１１時頃…

いづれも釣り天秤に移行するあたりでの移動を確認していた。

ｓｉｄｅ～千鶴～

「ターゲットロックしてうつ、ターゲットロックしてうつ、
ターゲットロックしてうつ、ターゲットロックしてうつ」

つぶやきながら網膜投射にうつる、門から出てくるＢＥＴＡを、
絶え間なくザクマシンガンで命中させ、殺す射撃行動をおこなっている。

最初いきなり、
「実戦にいくぞ！！」
と言われた時にはびっくりしたが…

まだ訓練生の身でありながら、
ＢＥＴＡとの実戦を経験させてもらえてよかったと思う…

それというもの…

今はすこしなれたが、始めてＢＥＴＡを見た時、固まってしまったからだ…

通常戦場で固まると、
そのまま戦車級にたかられ食われる話を講義で聞いてたが…

この場は違った。

すぐに他機、多分陸戦強襲型ガンタンクにより前方のＢＥＴＡは破裂した。

なんどか見かけて慣れてからは、
他機に取られまいと射撃行動をおこなっている。

ｓｉｄｅ～千鶴ｅｎｄ～

釣り天秤により残り３万に減らされた敦煌ハイヴ残存ＢＥＴＡ。

突入してきた異世界軍を阻む事はできなかった。

同日午前７時２４分

陸戦強襲型ガンタンク、Ａ－０１、沙霧大隊を始めとする突入部隊が、
地下深く２ｋｍ地点にある反応炉に到達した。

生産施設から次々と生まれたてのＢＥＴＡが出てくるが、出口を制圧した為、
出た途端なます切りにされてく…
２０７Ｂ小隊を始めとした部隊がその処理を担当していた。

ｓｉｄｅ～珠瀬～

「はぅぅ～…えい！！」

生まれたての要撃級が行動にうつる前に、
珠瀬機の高周波ブレードにより、一刀両断にされた。

「はぅ～きれましたです」

『よし…約３０秒後にまた生まれてくるぞ…いけるな』

「はいっ！！」

接近戦は苦手な珠瀬であっても、切る事に慣れてはおかなくてはならない…

側にはフォローとして、沙霧大隊の魔不知火がスタンバイしていた。

ｓｉｄｅ～珠瀬ｅｎｄ～

しばらくすると、カオルの魔撃震が乗り込んできて、反応炉…頭脳

級に同化しハッキング…

敦煌ハイヴは異世界軍の手に落ちた。

が…

『カオル大将、大至急司令室におもどりを！！
ほぼ全ハイヴから大規模移動感知しましたっ！！』

そう、地球上にはまだ２１のハイヴがある…

……

カオル報告

敦煌ハイヴ攻略

第１６５話　敦煌ハイヴ攻略戦　投稿日２０１１０８１９（後書き）

ナギ少尉「呆気なくハイヴ攻略されちゃいましたね～」

作者「まぁそうだろ。おもにビッグトレー砲艦型のおかげでもな……
執筆してて計算してたんだが…
１億９千発をぶち込める無限弾薬装填装置チート過ぎる…とおもったね」

ナギ少尉「えへへへ～」

作者「通常なら…１門５０発から３００発だからなぁ…
１分２発で、回航補給してか、補給船から給弾してから、再射撃だからな」

ナギ少尉「もし無限弾薬装填装置がなかったら?」

作者「ん～給弾作業でコバッタ達が大変になるだろうが…
４３２０門だから…普通に勝つだろ。
ただその後が微妙だったがな」

ナギ少尉「あ、最後の大規模侵「だぁぁぁぁ」…けちぃ」

作者「ネタばらするな次々」

ナギ少尉「ちぇ…で、ハイヴについてなんだけど…」

作者「ん～これぱっかは正直独自というか…
計算が面倒だから2倍計算でだしてる。
フェイズ４が４０万規模、
フェイズ5が８０万、
フェイズ６が１６０万、
それ以後フェイズ7が２５０万…ってね」

ナギ少尉「じゃ、今まで異世界軍が相手してたのが…」

作者「そ、つまり４０万から８０万以下のフェイズ４ってわけ…
次が１６０万以上のフェイズ６オリジナルハイヴだけどね」

ナギ少尉「さて…次回は、ＢＥＴＡの逆襲の足音…
カオル大丈夫?、勇者はまだたたないのか?」

命「ゴォルゥディオンンハンマァァーー!!!」

長官「しょぉぉうにぃん!!!」

１６６話　大規模移動発生　投稿日２０１１０８２５（前書き）

再開します。
予告編消せない…どうすんだろう？

１６６話　大規模移動発生　投稿日２０１１０８２５

ｓｉｄｅ～あ号～

（何故？）

（何故？）

（どうして、ここに？）

あ号は悩んでいた。

拠点のすぐ横の下位存在から、災害により生産物が減少していると…

（ありえない）

災害に対する除去は順調なはずだった。

東の島まで進出し、そこの拠点を災害研究用として稼動させた。

もうまもなく、寒い土地からも災害を追い出そうとしていた。

それなのに…

（何故？ありえない）

自身の隣から援助要請がきた。

それに呼応し、二つの拠点から援助をまわした。

そして…おんなじように…

（災害は去った？…前とおんなじ…）

あ号は悩んだが脅威が迫っているのは同様だった。

（確かめるか…）

あ号は、地球上すべてのものに対し、我の元へ集結せよ…と指令をだす。

集まり次第、あ号は指示をだすつもりだ。

蹂躙せよ…と

ｓｉｄｅ～あ号終了～

～今の時間～

カオルは魔撃震をしまうと、主広間にきていた小型チューリップを使い、

横浜基地司令部へと中継コロニーを経由して入る。

「大規模移動ってどうした？」

「カオル殿！……あれを…」

モニターには世界地図がでている。
世界モニターには、中央アジア方面への大規模移動を表示する、
矢印が示されていた。その数１６…

「っ！！」

ヨーロッパ等直接到達できない距離にあるハイヴからの移動群は、
途中中継をするのだろう…若干方角が違っているが、
間違いなく中央アジア方面への移動ルートをとっていた。

「…ヤバいな…予測される事象は？」

聞きたくないが、確認の意味もこめて…

「大々規模侵攻の可能性があります。その数１０００万規模」

「１０００万…」

「はい」

ソ連の西側、及びヨーロッパに分布しているハイヴはフェイズ５規

模、
来年あたりにもフェイズ６へ成長するハイヴもある。

フェイズ５規模の構成要因に、８０万以上のＢＥＴＡ飽和定数個体数…があるのがスパイからの情報でわかっていた。
フェイズ６は１６０万以上…
フェイズ７は２５０万以上になるが…

その１２に及ぶフェイズ５規模のハイヴからの一斉大規模移動、
フェイズ４からもでている。

それも大規模移動群は最近なったボパールにしても５０万、
ヨーロッパ、ソ連方面は最低で６０万の移動群を放出している……

それだけの移動が中央アジアオリジナルハイヴを目指し、移動をしていた。

そして…

「佐渡スパイからの入電！！
オリジナルハイヴからの指令、切断されました。
鉄原、重慶も同様です」

「スパイ行為がばれて、敵対と認められたようだな…」

「カオル殿スパイとは？」

「横浜白凌基地の地下にもあるんですが、
頭脳級とよばれるエネルギー発生させる事のできるＢＥＴＡがいるんですよ、
それを自分がハッキングしてスパイに仕立て上げで、
誘引で各個ＢＥＴＡを殲滅してました。
まだ改良種がきたらテストできたんですが…」

「なるほどな…となると誘引はもう使えないと、考えた方がよろしいな」

「ですね…積極的防衛をとる形になると思います。
佐渡、鉄原に関しては…」

「ふむ…と、この移動群は…いつ頃くるのかな？」

「予想される侵攻日時は？」

「はい…１０００万規模に達する進行予測はリヨンハイヴから、の移動群到着以降、
来年１月１５日以降と考えられ、
一番可能性があるのが元敦煌ハイヴを経由しての侵攻。
目的地が重慶基地だと思われます」

「重慶がおちると再度九州に侵攻可能だからな…」

「その後に鉄原か佐渡島ですね」

「自分らが侵攻した逆のルートか…
１０００万か…けど乗り切れば…あとはオリジナル落とすまでだな」

少なくとも…１０００万規模を生産するには物量に優れたＢＥＴＡであっても、
１年はかかる…

大規模侵攻を乗り切れば…勝利の道筋がみえてくると思える。

だが１０００万である…
どんだけ優秀な機体、どんだけチートな機体をそろえても１０００万を迎えうつ事ができるか？

答えはノンである。

その機体自体が目標であるなら…イエスとはいえるが…

戦場の面でせめてくるＢＥＴＡにたいし、戦場の点で勝つとしても、
それ以外が突破され後方にいかれる。
その点は勝ち続けるのに移動できず…

負けになるのである。

例え、その機体から発する広域殲滅兵器があったとしよう。
だが、光線級と同様、地平線の問題もある。

地平線より下は地球を破壊しないかぎり無理である。

今までは誘引素材として各基地の反応炉があった、
侵攻作戦な時は艦隊そのものが誘引素材だった…
だから数十倍の単純数にも勝てたのだった。

１０００万にも及ぶ数をいっぺんに処理したのが月での餓死だったが、
地球上では到底無理な作戦でもある。

「……ん…とりあえず作戦としては…」

なので今回カオルがやろうとしている事は、
その膨大な数を時間をかけ、いかに効率よく減らす…
この一点にすぎないって事であった。

戦場になると予測されるのは、膨大な無人地域の広がる中国、
この膨大な広さを誇る中国において迎撃作戦を構築しようとしていた。

ウランバートルや北側への侵攻はない前提での作戦会議が続けられる。

何故ないか?は極東方面からの中央アジアへの移動群の存在だ…

これがなかったら異世界軍は極東方面侵攻も疑ったかもしれない。

万が一そうなったら…その移動の間にオリジナルハイヴ強襲の考えもとれるが、
今回はオリジナルハイヴにＢＥＴＡが集中している…からの予測である。

……しばらく時間が経ち

［マスター］

「ん？」

［各国大使から問い合わせがきてるけど…］

「事態が事態だから…説明しなきゃ駄目か…
２時間後に通信による国連会議をと、国連に要請しておいてくれる？」

［了解］

カオルは再び防衛プランの組み立ての協議に戻る。

……

「と、まぁ敦煌基地に関しては、

２７日の防衛戦終了後にこいつを敷設開始、
防衛ライン施設は敷設開始だね」

「問題はオリジナルハイヴ側がどれ程とれるかでしょうな」

「今までのケースからみると、１０００ｋｍまでは反応しなかったからだけどなぁ…」

［多分７５０ｋｍまでは大丈夫じゃないかな？］

「根拠は？」

［領域、１５００ｋｍあたりごとにつくるからね］

「……じゃ、その地点での敷設も行うとするか…」

「わかりました」［了解］

大まかな作戦きまったところで、
通信による国連緊急総会が開かれる…

「さて、皆様方の方でも情報は行き届いていると思われますが、
本日、日本時間１２時４７分頃、ほぼ全ハイヴより大規模移動を確認、
移動先はオリジナルハイヴ、カシュガル…

考えられる予測行動としては、１０００万規模での重慶、鉄原、佐渡島侵攻です」

『１０００万！！人類史上ありえない規模なのだが大丈夫なのかね？』

確かにそのような盛大な規模の侵攻はなかった…
精々５万から６万の侵攻で、異世界軍がくるまではその旅に勢力圏が後退してたのだ…

異世界軍ができるまでは、民間人が逃げる土地がない為、
そのような軍団規模の侵攻を受けると民間人を守る為に…
にっちもさっちも行かずに…結局撤退…
民間人にも多大な被害を受ける事となる。

民間人がいなければ…

民間人がいなければ、軍団規模の侵攻があっても耐えきる事ができる。

京都防衛戦のように約２０万にも及ぶ大規模侵攻にも一ヶ月たえきる事ができたのだ…

「我々異世界軍としましては、幸いな事にまだ侵攻予測地域は、無人地帯の為、
重慶基地を最終防衛ラインとして、迎えうつ予定です」

『重慶とすると敦煌はどうなるのだね？』

「敦煌は最終的には消滅する可能性が大きいです。
ですが再ハイヴ化にしません。
オリジナルハイヴ侵攻の際には移動距離は2倍になりますが、
なんとかなります」

『G弾使えば敦煌を失わずにすむぞ』

「またG弾ですか…万能でもないですのに…」

『我が国のG弾は世界一いいいいい』

「で、そのG弾何発使う予定なのですか？」

『1発で十分だ』

「効果範囲は？」

『半径２０ｋｍ』

「じゃ、1発ですみませんね…」

『……三発でも四発でも！！』

「で、解決つかない重力偏差を残すわけですね。統一中華さんに…」

『偉大なる大陸にそのような爪痕を残すのは赦せない』

『放射能汚染残したろうが』

『わが親愛なる友人が、我々の爪痕を除去してくれている…
感謝している。だから重力偏差は赦せない』

『なら…核を大量に！！』

「あ～有効範囲５０ｋｍなので…また除去しに回らなきゃいけないので、
勘弁して下さい。
わが異世界軍では通常兵器やサイクロプス等で作戦を行いますのでご了承を」

その後、国連軍及び統一中華戦線の後詰め派兵がきまり緊急総会は終了する。

緊急臨時総会が終わり…

「さてと…防衛設備敷設と明日の防衛戦だな…この規模なら…まぁまかせ…」

［マスター］

「ん？どうした？」

［明日の防衛戦なんだけど、僕らの考えた兵器使ってくれないかな？］

「どんなのだい？」

［それはね～これなんだけど…］

「ん？……ん～？これは…ドラム缶？」

［絶大な威力を誇るよ～］

「まぁ…いいが…」

「じゃあ、明日のボギー１１の防衛戦に投入するね～」

「ああ…」

カオルは再び思考を戻す。

（まぁ今敦煌にいる部隊で楽勝だな…問題はその後と…）

今現在敦煌にはビッグトレー砲艦型４０隻がいる。

なので基本的には現地にまかせて、
防衛施設の建設にかかる。
無限弾薬装填装置が入る器をつくらなければ、どうにもならない…

（破棄を考えると…）

近接戦闘も充実したものを、作らなければならないだろう。

（とりあえずはコンクリ土台のＣＩＷＳは外せないよな）

タングステン弾を無限に吐き出す３０ｍｍ自動迎撃機関砲…を基本とした設計を施すへく、
チューリップで敦煌基地へ再び移動する。

ｓｉｄｅ～命～

プシュー

（こ…ここは？）

見慣れない天井が見える…

（わたしは…確か…あっ凱！！）

「が…がいっ」
掠れた声がでる。

まだ力が入らないようだ…
身体が固まっていうことがきかない。

「が、がい…」

「あ、気づかれましたね？無理をしないで下さい。
目覚めたばっかりは力が入らないはずです」
白衣をきたナースが近寄ってきた。
「あ……あな…たは？」

「わたしは、異世界軍の一ナースです。ようこそ異世界へ…
えっと凱さんは、
あちらで現在機械部分の治療に入ってますよ」

「が…がい…」

「無理をせずに…」

起こすのを助けてもらい凱の入ったと、
言われたカプセルを見させてもらった。

「凱っ！！」

綺麗な顔で眠っている凱をみて思わず涙がでる。

「かなり酷い状態でしたが、順調に回復してます。
恋人なんですよね？もう少しお待ち下さいね」

「は…はい…」
カプセルに抱きついたまま泣きじゃくる命…

（凱…触れたい…早く触れたい…）

……

カオル報告

命さんが目覚めたようです。
敦煌基地周辺部含めて迎撃態勢をとる形になりました。

１６６話　大規模移動発生　投稿日２０１１０８２５（後書き）

ナギ少尉「作者～何してたのよ？」

作者「リアルトラブルさ…まぁあとイベントごととかさ」

ナギ少尉「キャリスト？」

作者「ん…それはたまたま。２４Ｈテレビで駆り出されただけさ」

ナギ少尉「徳光さんね～…けど島田紳助が引退は驚いたけど…」

作者「だなぁ…どうするんだろ？行列とかさ」

ナギ少尉「時期的には２４Ｈの生放送前だったらやばかったよね？」

作者「いえるな…」

ナギ少尉「リアルネタはここまでね。えっと関ケ原の戦いねぇ…
大袈裟と思うけどね…
どうせすぐ駆逐するでしょ？」

作者「あまいな…数の面では脅威無いかもしれんかが、
その数そろうとべつの事を心配する事になるぞ」

ナギ少尉「別のこと？」

作者「そう」

ナギ少尉「わかんない～」

作者「広さだよ広さ。広がると命中率さがるばかりか、後方突破されやすいだろうが…」

ナギ少尉「あっ」

作者「ということさ…さて次回ドラム缶が活躍します。お楽しみに」

第１６７話　第一次敦煌防衛拠点防衛戦　投稿日２０１１０８２７

２００１年１２月２７日午前５時

［いっけ～］

［僕達の考えた～］

［パンジャンドラム～］

整地しある程度平らにしてある砂漠の中を砂をまい上げながら、
ホバー走行により加速し始めるドラムのお化け。

１０００両のパンジャンドラムは、トップスピード１５０ｋｍにのりＢＥＴＡを目指した。

建設中である基地モニターからは、
遠くへ遠くへと疾走していくパンジャンドラムが見える…

［約１時間後に戦果がわかるね～］

［あとでこよ～、マスターつれて来なきゃ］

［だね～］

どやどやと司令室からでていくコバッタ達。

「つくづく色々なのが出てくるんですね…」

「そうね～…わたしも連れて来られてびっくりしたけど…」

……約１時間後

パンジャンドラムが１８０ｋｍの砂上を走行し、
今まさに約４万のＢＥＴＡ群に接敵しようとしていた。

パンジャンドラム…
第二次世界大戦にイギリスで開発、失敗した兵器は、
コバッタ達の手で形を大きくかえ甦った。

まず、ボビン状だった形は、
車輪をやめ、ホバークラフトに形を変える。

［砂漠対応となるとそれしかないよね～］

［タイヤもとられるし、海岸沿いだったら、
ボビンでもよかったけど］

［登場が遅すぎた］

ホバークラフトの上に爆薬のつまったドラム缶が、
縦に寝かされ固定されている。

進行方向、間隔等の調整は、猫の目が誘導をおこなっている。

［さすがに最大１０００ｋｍ進行するのに誘導無しじゃ］

［ジャイロは必須！］

パンジャンドラム達は、猫の目の誘導にしたがい、
長い間を４列になりながら走行してたが、

接敵前に突撃隊形に形を作り直す。

等間隔に広がり、また前列との距離をあけ、スピードを調整してる。

まずは５０両がロケットも点火し加速し始めた。

ＢＥＴＡは脅威と感じたろう、手短なパンジャンドラムへと少し向きをかえる。

突撃級がパンジャンドラムと正面から衝突、

途端に５ｔの爆薬が点火し、周囲に光の弾と爆風がふきあふれる。

その数５０、

「突撃級、約２０００死滅！！」

爆炎が止むと、硬い甲殻も粉砕され、跡地にはクレーターのみ、周囲に体液や甲殻がばらばらになった状態のがのこる。

まだうごめいている突撃級もいてそこに更に５０両が突っ込み、光の弾がまた生まれる。

「前列にいた突撃級、殲滅確認！」

約３０００の突撃級が消滅した。

中衛にロケット点火し突入し始める１００両のパンジャンドラム。

パンジャンドラムにわらわら進路を変更するＢＥＴＡ、

ある一両の正面に兵士級がみえた。

パンジャンドラムはロケットで突撃すると…

ホバー基礎部分のトリプルホーンに刺さり…もがく兵士級、

少しスピードが落ちるもそのまま突撃し、

戦車級に体当たりし盛大に爆ぜる。

内部にあるベアリング、ドラム缶外部が爆発とともに凶器となり周囲のＢＥＴＡに襲い掛かる。

近距離のＢＥＴＡは爆発力により肉片とかす。

パンジャンドラムが爆発した跡には、直径約２００ｍくらいのクレーターができ、
半径４００ｍ位の空間が
爆風により小型級ばかりか中型級もふき飛ばされあく。

そこに更に１００両のパンジャンドラムが突っ込んでくる。

要撃級に体当たりしまたもや爆ぜ…
更に数を減らすＢＥＴＡ…

次の１００両がきて、射程に仲間がいなくなった光線級から、
身体をふるわせレーザーが照射される。

パンジャンドラムのドラム部分の前面にあたる。

蒸発する対レーザー新型塗膜。

何層にも前面には塗られ二層分が蒸発する。残り六層。

パンジャンドラムの進路が若干かわり、光線級の元へ、
光線級の二射目が照射されながら突っ込み、
盛大に爆ぜる。

途中で横からレーザーを浴び、爆ぜるのもいるが、凶器が周囲に襲い掛かる。

更にまた１００両が突っ込んできて、

また１００両…

６００両が爆ぜた頃には、重光線級からの射線が通るようになる。
が、ＢＥＴＡの残りは既に５０００以下に…

重光線のレーザーを正面に受けながら重光線に突っ込み爆ぜる。
二、三匹重光線級を巻き込みながら光の弾が生まれ、

更に１００両が突っ込んできて、要塞級に突っ込んでく。

触角がパンジャンドラムにつきささり、爆発し、要塞級に襲い掛かる。

身体の構成物質をずたずたにされ、
要塞級だったものは大きくても３ｍ位の肉片に姿をかえる。

そして、最後のパンジャンドラム１００両が突っ込んできて残りの要塞級に…

４万の構成だったボギー１１は、

特攻自爆するパンジャンドラム１０００両に襲われ、
残存８１５、無事な個体少ない状態になる。

「ほう…、良いじゃないか」

［でしょ～］

「で生産ペースはどんなもん？」

［えっと日に１５００両可能だよ。単純な爆弾だからね～陸戦強襲型等の生産に影響なし］

「じゃあ作って大規模進行に備えてな」

［うん♪あ、あともう一つ作ったんだ～］

「それはどういったの？」

［これぇ］

スクリーンに映しだされたのが、巨大なスパイクボール。

直径１５ｍにもなる。

「こいつは？」

［ローリングボム！！］

「まんまだな…」

［転がって転がって、小型級は踏み潰す、
中型級にぶちあたり５０ｔの炸薬で爆ぜるって兵器なの］

「ほう…」

［最高速度１００ｋｍで突っ込んでくよ～勿論誘導可］

「射程は？」

［それ自身が転がるから２０ｋｍ位だよ］

「ん～近接主砲圏到達前か…」

陸戦強襲型や６１式改などの主砲圏が１０ｋｍに設定されている。
その外側で使う兵器といえよう。

「こいつは何処で投入するつもりだ？」

［まだ個数がすくないから、約2週間後にね］

「大規模侵攻にあわせてか…」

［うん］

「まぁ…使えそうならやってみてくれ」

［了解、マスター］

「あとは…秘密兵器などある？」

［今のところはなし～］

「ん、ありがとうな」

司令室で盛り上がっているコバッタ達を後に、ハンガーデスクへと向かう。

（さて…あと俺自身がやれる事は…？）

ハンガーデスクにいって進行状況を確認する。

防衛ライン設営部隊は出発、
護衛をともなって７５０ｋｍ地点での迎撃兵器の付設予定、…二日後。
また敦煌～重慶間にも迎撃施設を付設に展開し始めている。

（間に合うな…）

敦煌防衛拠点にも無限弾薬装填装置はつけ、ただ今鋭意建造中。
カーペンターズも作業加わっている。

またそろそろオリジナルハイヴ後を目指しビーム兵器の生産開始。
なるだけ早めに地球上よりハイヴ駆逐を…

ビッグトレー砲艦型の主砲へのＯＴＭ技術注入は進んでいる…
改造後には射程が１００ｋｍへとのびる結果となる。

勇者ロボットは…間に合わない…
かギリギリというところだろう。

宇宙は普通に改装作業が進行中…

（あとやる事はないか…
そういえば…格闘戦闘で耐えられる機体がないんだよな）

現在異世界軍は、物量によるな射撃戦のスタイルをとっているのは、

存じているとは思う。

が、今回はそれを上回る恐れのある侵攻の為、
ＢＥＴＡの有効範囲である格闘範囲に囲まれる可能性がある。

囲まれ弾ぎれになった機体は移動できない為、
特に陸戦強襲型が無力化する姿が浮かぶ。

（格闘戦で耐えられ離脱する時間を…
その盾に勇者ロボを期待したのだが、難しいとなると…
あれ引っ張ってくるか…）

何処か行くのを決めたようだ。

「じゃ、またいってくるよ」

［今回は、早めに帰ってきてね～］

「あいよ～」

カオル、世界扉を形成し、世界を渡ってく。

［マスターいっちゃった…］

［ま、早いとこ帰ってきてもいいように準備すすめなきゃ］

［あとボギー１２に対する防衛戦だね］

［負ける気しないけどさ］

午前１０時頃

ボギー１１の残存２７１匹が重機関型に消滅させられると、
３５隻からなるビッグトレー主砲型の一斉斉射、
５００機のモンスター改からも主砲がはなたれ、
そこに更に２０隻のビッグトレーミサイル艦からのトマホークが襲い掛かる。

５方向からの同時進行、１００万強を想定して集められた戦力。
１０万にみたないボギー１２にとっては耐えられないだろう。

事実、光線級が生体レーザーを迎撃にあげるも、
たかが９００本程度。

直撃すると判断した砲弾に照射している最中に、
わずか５０ｃｍズレたところに６１ｃｍ砲弾が着弾し、
その身体が肉片にかわる。

瞬く間に生体レーザーはあがらなくなり、その間にも砲弾が嵐のごとく降り注ぐ。

一分間に２７９８００発もの砲弾がボギー１２に降り注ぎ、
更に猫の目に誘導された、分あたり８４００発ものトマホークミサイルが、
はぐれたＢＥＴＡに正確に襲い掛かる。

戦闘開始から１５分後には、最後の１匹が消滅…

迎撃ラインに展開してた陸戦強襲型ガンタンクは砲火をはなつことなく、
警戒体制に移行する。

［終わったね～］

［とりあえず、進行艦隊は解散して、
陸戦強襲型を帰さないと…］

［えっとビッグトレー砲艦隊は張り付けで…
今だったら重慶間は安全だね］

［中型は敦煌には回さないんだよね？］

［うん］

敦煌ハイヴ攻略作戦は終了し、
大規模侵攻に対しての準備期間となる。

……
カオル報告
またいってきます

第１６７話　第一次敦煌防衛拠点防衛戦　投稿日２０１１０８２７（後書き）

ナギ少尉「またあらたな世界にいくのね」

作者「その通り、基本素手で無双できんし、
魔改造不知火でも、ナックルガードで保護をして殴るだな。
流石に真っ二つに残心で切るのはできないし…」

ナギ少尉「リアルでやると？」

作者「空振りする戦術機、そこによってたかってＢＥＴＡが…だろう」

ナギ少尉「あはははは…」

作者「手の部分は本当に脆いから、人間と同様にな…
だから人を殴るスポーツでも手を保護する意味でのグローブ等があるんさ。
人間で例えれば…瓦を素手で殴ったり、割ったり切ったり…なもんか」

ナギ少尉「いつかはこわれるね…」

作者「とくに間接部分がな…だからナックルガードは外せないが、殴るだけしかできん…というジレンマがあるんさ…」

ナギ少尉「格闘技のロボットの世界というと……？」

作者「格闘技とはいってないぞw」

ナギ少尉「……ま、で…今回の話の、パンジャンドラムね～」

作者「まぁ…周りが砂漠だから、ホバーじゃないと無理ポと思ったんだよな…」

ナギ少尉「だったらパンジャンドラムにこだわらなくても…」

作者「ドラム缶はロマンさ、ただ押す事に意義ある！！」

ナギ少尉「作者～～」

作者「さぁ、君もドラム缶押そうじゃないか！！」

ナギ少尉「作者～～……駄目ね、スイッチはいったみたい…

え～ドイツ・フランス製のゴリアテは登場は難しいとのコメントでした。

次回、サブタイトル不明な世界へ…妊婦さんどうするの？…お楽しみにぃ」

第１６８話　エヴァンゲリオンの世界へ　投稿日２０１１０８２９

～エヴァの世界～

第三新東京市…

この都市は２００３年着工、２０１０年に一応の形を整えた。

中央にはビル群が並ぶ。

しかし、ほぼそのビル群は、兵装ビル、電源ビル、集光ビルなどであり、
人が入るビルが新市街にはすくない。

この都市は対使徒迎撃戦に特化した要塞都市であった。

この新市街は、地下にあるジオフロントを護る天井都市群であり、
分厚い最大２８層もの装甲を重ね、５６０ｍの厚さを誇る。

その分厚い５６０ｍの装甲を使い、上下稼動式になっているビル群。

まずは数の多い攻撃型兵装ビル、
ミサイルサイロ、大口径自動砲塔、対空砲塔、
垂直発射型ミサイル、戦車等の発射支援駐車場、

地下のジオフロントに光を届ける為の集光ビル、
エヴァへの電源供給する為の電源ビル、
エヴァへの兵装を提供する武装搬出ビル、
等などがある。

地上施設への電気は地下区画で提供してあり、エヴァの行動の妨げにはならなる電線はない。

数少ない人の住居するビル等も高層、稼動式になっている。

（とりあえず波動を変えたから、探知はされないか…さて、侵入侵入）

第三新東京市に降り立ったカオルは、
他人と違う波動を指摘され、修練で人間の波動を会得、
それにより、使徒と探知されずに、地下へと同化していった。

天井都市群の２２層もの装甲、その間には約３００Ｍ程の施設群がある。

作戦２課、保安１課、２課、広報課、商務課等が詰めていて、
また訓練施設、
地下ハイウェイ、リニアトレイン等
またジオフロントとの交通を結ぶインクライン、外周道路、ケーブルカー、カーゴトレイン等もある。

もちろん、食堂、銭湯等リラクゼーション施設等もある。

分厚い装甲を潜ってくと…
黒い月の内部ジオフロントが見えてきた。

元は前史時代人の待避壕として建設されたノアの方舟、
それをネルフの前身組織が見つけ、利用し始めたものだった。

直径６ｋｍ、高さ０．９ｋｍの露出空間内部にピラミッド型のネルフ本部施設、
地底湖、また広大な緑が広がっている…

（やっときたぁぁぁん♪）

ピラミッド、本部建物に取り付くと、建物に同化し、その身を沈める。

（さてっと…ＬＣＬは…これか）

ＬＣＬ、リリスの体液である。

が非常に有能な成分であり、ガス交換神経接続も可能、
精神防壁、物理障壁もかねるものである。

（開発したくっても無理だったからなぁ～）
ＯＤＬではＬＣＬの変わりにはならない……

生命のスープ化にはならないように研究は必要だが、
必要な技術の一つを取得できた。

（とエントリープラグは…っと…）

人造人間たるエヴァと人とを結ぶインターフェイス…
コクピットブロックである。

現在異世界軍では神経操縦を標準導入してない。

何故か？技術的に人間を改造しなければできないからであった。

ナデシコ技術、ガンパレード技術ともに、
人間にインターフェイスを埋め込み操縦するという技術がとられて、
それによりより人間的な動きがとれるという流れである。

戦術機やＭＳはプログラム等により、人間の動きを再現しているにすぎないのだ。

より人間的な動きはフルメタルパニック技術による、モーション操縦もある。

が身体的体力が必要、でありドレン中将等鍛えている人でない限り、ぽっと出の中学生に操縦できるわけでもない。

という事だった…

エントリープラグ及びＬＣＬ、インターフェイスユニットが、エヴァ世界によるロボット操縦による革命的技術である。

そのエントリープラグが目の前にあり…喜んで同化し、取得した。

プラグ内部にインターフェイスユニットもありもちろん取得する。

（あとは…プラグスーツとエヴァか…）

更衣室を探し身体を広げる。
（ここか？）

ロッカーがならんでいるが…
とりあえず物色し始める。

（ブラ、ブラ、ブラ、パンツ、ブラ）

女子ロッカーを内部に顔をだしているようだった。

そりゃ…男子ロッカーは覗きたくはない。

男子ロッカー内部には仕事での帰宅難民者の、
使用済靴下、パンツ、シャツ等が一ヶ月分溜まっていて、
醸すにほいがしている…
使徒の攻撃で破壊された男子ロッカーの掃除には勇気がいる…
との話をどっかで聞いた事がある。

その点女子職員は、赤木リツコ博士を筆頭としてデモを起こし、
毎日帰宅する勤務条件になっている。
よってロッカー内部には洗濯後の良いにほいしかない…

女性はロッカー内部に使用済を、一日でもほうり込む事がゆるせない…
寝る時間以外でも色々と用事があるのだ…
という話を聞いたこともある。

と点々といくつもの更衣室を物色してると…

勿論、人がいないのをわかってたので自重はしてない。

（あ、ここか？）

空のロッカーが結構ある更衣室にでた。

案の定、赤いプラグスーツがある。

アスカのだ。

プラグスーツは身体を包み込むものである。

まぁでっかいといえばでっかい。

身体にフィットさせ、神経接続の補助、生命維持等を行う。

（おっし…次は…）

エヴァンゲリオン…

使徒に対抗する為の人のつくりしアダムの模造の決戦兵器…

目の前にあると…

（でけえなぁぁぁ…）

全長８０Ｍをほこる巨人である。

単純に今まで取り扱ったＭＳの４から５倍…

でっかすぎである。

とりあえずとりつく…

重力１０００ｔ…

その身体を支える人工筋肉の質は高い。

使徒を模したエヴァンゲリオン…その効能は高い。

（ただ、今のままだと俺以外はやばいからな…）

暴走があるとおり、制御しての兵器である。

今のままコピーしたものを作ると、
もれなく個体を維持できなく消滅する人物が出てしまうのが明白である。

（ごちそうさま）

カオルは初号機から離脱すると、
零号機、弐号機と次々と同化し取得する。

（Ｎ２爆弾はっと…あったこれね）

まわりの武装にもとりつく…

（あ、純粋水爆か…なるほど）

汚染がでない核＝純粋水爆であった。

（……マクロスの反応弾の方が効率いいか？）

とりあえず取得して離脱…

（あとは…ＭＡＧＩか…）

地上のインフラをすべてに引き受ける民主主義的コンピューターマギシステム。

結構有能ながら、その他研究内容の情報が蓄えられている。

勿論同化し取得した。

三日目…

カオルは再びエヴァの世界にでる。

時期的にはゼルエル戦の後…

そう目標の人物は…

崩れ落ちる冬月副司令…

その背後に立つのは加持だ。

ゼーレとネルフの二重スパイである加持は、

今回はゼーレの命令によりターミナルドグマ近くの西第八管区にて、

一人行動中だった冬月副司令を眠らせてた。

「おい…」

加持が合図するとゼーレ構成員が４人程ストレッチャーを持って駆け付け、
冬月副司令をのせ顔にシートらしきのをのせる。

顔に張り付き、別人が火傷をおったような顔になる。

構成員が合図すると5人はいかにも重傷者を運んでいるかのごとく、
エレベーターを目指し、
途中あったスタッフには
「どいてくれ！火傷だ！」
と叫びどかしてエレベーターに駆け込んだ。

駐車場にでると構成員の車の後部ドアがあき、
カーペット式の床に寝かすと、隣に構成員が一人はいり、
蓋がしまる。
その上に通常の座席があり、二重底の改造車だった。

徒歩組と別れた車はゲートでチェックされて、
異常が見つからずでていった。

加持も時間をおいてネルフからでていった。

……

『はい、ただいま留守にしています。発信音のあとにメッセージをどうぞ』

「葛城、俺だ。多分この話を聞いている時は多大な迷惑をかけてると思う。

すまない。りっちゃんにもすまないと謝っといてくれ。
後、迷惑ついでに俺の育てていた花がある。俺のかわりに水をやってくれれば嬉しい。
場所はシンジ君が知っている。
葛城、真実は君と共にある。迷わず進んでくれ。
もし、もう一度会えるような事があったら、
８年前にいえなかった言葉をいうよ…じゃ」
受話器をおき、カードを取り出す。

「最後の仕事か…まるで血の雨だな」

しばらくすると、電話ＢＯＸにコール音がなる。
受話器をとり…

「俺だ…ああ、そうかわかった。ありがとう」

フックをかけ、そのまま別の電話にかけはじめた…

「わたしです」

『何のようだ?』

「副司令ですが、今から3時間後にここのＢＯＸにあらわれます」
『本当か?』

「はい」

『わかった信用しよう』

「では…」

カチャ　ピピーピピー

「さていきますか…」

加持は冬月副司令の捕まっているゼーレ支部へと向かう。

「君か…」

「ご無沙汰です。外の見張りには暫く眠ってもらいました」

手錠を外しにかかる加持さん。

「この行動は君の命とりになるぞ」

「真実に近寄りたいだけなんです。僕の中のね。

それにアダムのサンプルを碇司令に横流ししたのがばれそうなんでね…

自己保身もかねてね、色々やばいんですよ」

通路に異常ないのを確認し、冬月副司令を連れ出す。

そして合流場所の電話ＢＯＸ…

「では冬月先生、おたっしゃで」

「ありがとう…この後、何処へいくのかね？」

「そうですね…とりあえずは隠れますよ」

「…元気でな」

「はい、先生も」

電話ＢＯＸに副司令をおいて離れる加持、

「さて…」

市街の銀行にはいり逃走資金を隠し口座から…

『ピーピーピーこのカードは故障されてます。係員がきますので』

「チッ！」

「あ、お客様～」

対応している間にゼーレ工作員がくるだろう。

車で第三新東京市から乗ろうとインターに向かうと…

「いるな…」

Ｕターンし駅駐車場に車をいれ、駅へ…

改札で、オレンジカードをいれたら…

『ピーピーピー』
「ここもまわったか…」

何処にも逃げ場がなくなった…
さっき止めた車にも人が…

加持はそれを見ると旧市街の工場街へと歩みをすすめる。

廃工場に入ると…
「死に場所には丁度いいか…」

「まだ死ぬのは早いと思いますよ」

つけてた影からでてくるカオル。

「き、君は？」

「他の世界の理…見てみたいと思いません？」

「……」

「自分について来ればまだまだ面白い事わかりますよ」

「…ふっ…死に行く身だ…のろうじゃないか」

「わかりました。じゃまずは血液下さい」

と擬体入りのカプセルをだす。
「ほう…何処に渡せば？」

「あ、採取しますので…であとは少しシェルターでやすんでくださいね」

採取したあと引き込むと擬体の血液いれに投入する。

瞬くまに加持が作られてく…

擬体に同化し、加持の抜け殻を操り始めた。
カプセルをしまって5分後くらい…

カツーンカツーンカツーン
音が聞こえる…
（たしか…）
「よう、遅かったじゃないか」

パーン

声かけたらいきなり男性に撃たれた。
擬体から抜け出した。

「裏切り者は始末した。掃除人を頼む」
無線機に声をとばすと、加持だった顔を見下ろす男性。

「馬鹿な事を…しやがって…お前は何なんだよ…」
振り返り殺害現場から離れていった。

すぐさま人が来て擬体を遺体袋にいれると、
おおきなゼリーを手でかき集め遺体袋の中に流し込む。

別の者が飛び散った細かいゼリーや肉片、血の後に薬品をかけてる
作業にはいった。

ゼリーや肉片、血等のみが溶けはじめ、床材を絆つけてはないよう
だ。

掃除人はかけわすれが無いかをチェックしはじめ、
その間に溶けたあとの液を掃除機で回収しはじめる。

そして…手際よく殺人のあとは…１０分足らずで殺人の痕跡を残さ
ずに撤収された…

（ふ～ん…人を殺しても１０分で証拠を処理か……
恐いね～諜報機関はさ…）

カオルは世界扉を唱えると世界を渡る。

……

カオル報告

エヴァンゲリオン各機
ＭＡＧＩ等

第１６８話　エヴァンゲリオンの世界へ　投稿日２０１１０８２９（後書き）

作者「と、言う事で、エヴァンゲリオンの世界にきました」

ナギ少尉「ひょっとしてセカンドインパクトの再現を起こすの？」

作者「オリジナルハイヴでか…が被害おおきすぎるよ…」

ナギ少尉「そうね…確かに大きすぎるわね」

作者「まぁ、要は使徒そのものをつくらなぁ良いわけだし…
作ったとしてもカオルも使徒そのものと同様だからな…」

ナギ少尉「ところで、旧新どっち？」

作者「次回おたのしみにね…まぁパラレルワールドありって、
公式でもコメントしてるからなぁ…」

ナギ少尉「だから鋼鉄のガールフレンドとかも新しいチルドレンが出てるのね？」

作者「そうそう。その点二次はやりやすいよな」

ナギ少尉「謎が多いのに？」

作者「今回のだと、加持さんの殺した相手は？か…
ゼーレ工作員にね…」

ナギ少尉「さて次回、カオルは？…おたのしみにぃ」

第１６９話　ＥＮＤｏｆＥＶＡ…その後　投稿日２０１１０８３１

湖と化した第三新東京市…
もはや人の気配はせずに蝉の音しかない。

カオルは大量に死に行く人員を受けるべく分体とわかれ、
ネルフ全体へと身体を浸食しはじめた。

～病室～

「アスカ…アスカ…アスカッ！
助けて…助けてよ…助けてよっ…助けてよっ…
またいつものように僕を馬鹿にしてよっ！ねぇ！！！」

仰向けに引っ張られる。バイタルモニターをだす吸盤がアスカの素肌についていてたため、
アスカの胸が大きく露出しピンク色の突起シンジの目に入る。

シンジの喉がなり…

病室のドアに行くと鍵をかけ、ベットに向きなおり、
スボンのチャックを下げ、自身をとりだすと…

「ハァッ…ハァッ…アスカ、アスカッ！！」

気づく事のないアスカをおかずに自慰を始め…

るのをカオルは感じてた。

（青春だな…最低だけど…）

翌日朝６時…

ビービービー

（始まったな）

ＭＡＧＩに対し外部ＭＡＧＩタイプ５基によるハッキングが始まる。

「先輩！！」

「マヤ、わたしは罪に問われた身、先輩と呼ばないでね」

「先輩は先輩です」

「ふう…時間がおしいわ、作業に入るわね」

「え？先輩…説明は…？」

「外部ＭＡＧＩタイプによる同時進行ハッキングでしょ？Ｂ－７形防壁を作るわ」

「さすが先輩！」

……

暫くするとプロテクトが間に合いビープ音がなりやむ。

そして…

低空飛行してきた攻撃ヘリにより、
レーダーサイトが破壊され、外部モニターも遮断、
数少なく生き残っていた自動防衛装置も作動するが、
無力化される。

「やはり最後の敵は同じ人間だったな」

「総員第一種戦闘配置」

ビービービー

『総員第一種戦闘配置、総員第一種戦闘配置、
保安１課、２課は対車両装備着用、１課２課は作戦１課支援、
保安３課対人装備で天井都市への増援せよ、
コードＤ－１にそって行動せよ』

「コードＤ－１…？」

「不特定軍事組織強襲だろうが急げ！」

ネルフ基地内が騒がしくなる。

ゲートの警戒にあたる保安1課当直守衛…
シャッター内部にいる為警戒が少し薄いようだ。
交替部隊到着をきにしている。

そこに後ろに黒い服の兵士が迫り…

ズリ

猛毒の刃を刺され、口を塞がれ悲鳴あげる間もなく絶命する。

シャッターが次々と上がり、完全武装を施した、戦略自衛隊員が侵入してきた。

彼等は迅速に発見増派される前に、
警報解除し無力化する為に天井都市群及び階層構造群へと進む。

天井都市施設群及びジオフロントの階層構造へは、完全に奇襲から始まった。

不意をつき次々と沈黙する歩哨…
対人監視施設はあって無いようなものだった。
ゼルエル来襲時に天井都市群はほぼ破壊された。
維持施設である集光ビル、兵装ビル等を優先した為、
対人戦闘設備自体も復旧すらしてない。

侵入警報がなった時には…各種ゲートからは車両群の流入も始まった。

侵入警報ブザーが鳴り響く時には多くの人員がゲートを突破、
各部所制圧に向かいはじめた。

『侵入部隊多数、非戦闘員は下層に待避、
対人有資格者は対人装備の上対応せよ』

当初非戦闘員は戦闘をさけ地上への避難の予定だったが、
戦略自衛隊は容赦はしない。
その為カオルは、次々救助できていた。

ネルフ本部の人員は通常より大きく下回り、
１万４千名程だった。

天井都市群に保安１課、２課が約３０００名はつめていたが、
奇襲から強襲と認知される時期が遅かったため、
瞬く間に戦略自衛隊の制圧下におかれる。
基地の利用等も考えて無いため、容赦はない。

自衛隊員が通路を自動小銃で制圧していく、
部屋が見えると、隊員に合図すると、
警告なしに対人手榴弾を部屋に投擲する。
「ギャァ」
爆発音とともに部屋に立て篭もっていた人の悲鳴が聞こえた。

部屋内部に突入、
「た…たす」
小銃を撃ち無力化、
クリアの合図をおくり次の制圧へと向かう。

火炎放射器をもった隊員が無線で呼ばれた部屋前にくる。
「投降する！！殺さないでくぎゃぁぁぁぁ」
部屋の扉をあけ火炎放射、
「ぁぁ……」
部屋内部は炎に包まれている。
扉が閉まり次の部屋へと目指す。

組織的な抵抗がとれてない、一方的な虐殺状態におちいってる。

戦略自衛隊員は突入前のミーティングで、
人類すべて消し去る、サードインパクトを起こそうと企むネルフを生かすなと…
サードインパクトは絶対に防がなくてはならない。
その為非戦闘員含み、全職員射殺せよと…
の命令が下っている。

所属がわからなくとも容赦はしない。
彼等は軍人であり、スイッチ入ると非情である。
自衛隊員以外には無差別に殺害、捕虜はとらなかった。

今も死亡した男性職員の恋人だろう…
引きずってる女性職員を躊躇なく射殺する。

手を上げて投降の意思のあるものを容赦なく射殺する。
部屋の片隅に震えていたものに対しても…
勿論託児所にいる少年達にたいしても…

『警告、第三層まで破棄、戦闘員は第四層まで待避、
繰り返す。第三層まで破棄、戦闘員は第四まで待避。
２０秒後にベークライト注入する』

たまらず、発令所から、ベークライトで通路封鎖に踏み切った。
通路に流し込まれるベークライトが死体を包み込んでいく…

ベークライトにうまった通路は固化しはじめ、
セラミック並の強度の壁になる。

待避が遅れた自衛隊員が片足が嵌まった。

すぐさまドリルをもった工兵隊が足の周りを削り始めた。
一時間位で救出できるだろう…

しばらくすると、主要通路がベークライトで封鎖された為に、
分断された部隊を救出すべく、Ｎ２爆雷が投入された。
Ｎ２兵器の衝撃とともに天井都市を中心とした部分が熱により融解してく。
都市が崩落し、爆発エネルギーが内部へと浸透する。

そこに更に豪雨の如くジオフロントにミサイルが降り注ぐ。

外周道路部分が地上より見えるようになった。
外周道路に向かい、地上からのショートカットの道が確保される。
次々と車両部隊が外周道路へと乗り込んでいく。
……
その後外周道路に展開した部隊から地底湖に鎮座している、
弐号機に攻撃を加えるべく展開しはじめる。
その間約一時間程、ネルフ本部は次々と新たな進入路から陥落していく…が、
ベークライトで生き埋めになった人員は少なくないため、
物理的封鎖の方針をとり始めていた。
攻撃していた地底湖より突如赤い光の柱が上がる。
戦艦をもちあげ浮上するエヴァ弐号機がうごきだす。
その頃…やっと緊急用エレベーター前にミサトさんが、シンジを連れ到着する。
「ここね…」
自動小銃の斉射、弾着の火花が散る
「クッ」
ゲートに逃げようとするが…
背面から右腹に被弾するもなんとか身体を押し込み、ゲートが閉じ、
間一髪でバズーカの着弾…ゲートドアが破壊されない。

「目標射殺出来ず。追跡の是非を問う」

『追跡不要。そこは爆破予定だ。至急戻れ』

「これで…時間、稼げるわね…大丈夫たいしたこと、ないわ…」

ゲート内部に逃げ込めたミサトさん達…

身体を起こしスイッチに触れると、

ブザーとともにエレベーターが姿を現す。

「電源は生きてる、行けるわね……

いいシンジ君。ここから先はあなた一人よ。

全て一人で決めなさい、誰の助けもなく」

「僕は…駄目だ…駄目なんですよ。人を傷つけてまで…

殺してまでエヴァに乗るなんて、そんな資格は無いんだ。

僕は、エヴァにのるし無いと思ってた。でもそんなのごまかしだ。

何も解ってない僕には、エヴァに乗る価値もない、

僕には人の為に出来る事なんて、なんにも無いんだ！

…アスカにひどいことしたんだ、カヲル君も殺してしまったんだ。

優しさなんかけらもない、ずるくて臆病なだけだ、

僕には人を傷つけることしか出来ないんだ。

だったら何もしない方がいい！」

「同情なんかしないわよ。自分が傷つくのがイヤだったら、何もせずに死になさい。

…今ないたってどうにもならないわ。

…自分がきらいなのね。だから人も傷つける。

自分が傷つくより、人を傷つけた方が心が痛いことを知っているから。
でも、どんな思いが待っていても、それはあなたが自分一人できめた事だわ、
価値のあることなのよシンジ君。
あなた自身のことなのよ、ごまかさずに…
自分に出来ることを考え、償いは自分でやりなさい」

「ミサトさんだって、他人のくせに、何も解ってないくせにぃ！」

「他人だからどうだって言うのよ！
あんたこのままやめるつもり？
今、ここで何もしなかったら…
私許さないからね、一生あんたを許さないからね…
今の自分が絶対じゃないわ。後で間違いに気付き、後悔する。
私はその繰り返しだった…ぬか喜びと自己嫌悪を重ねるだけ、
でも、そのたびに前に進めた気がする…
いいシンジ君…もう一度エヴァに乗ってけりを付けなさい。
エヴァに乗っていた自分に…何のためにここに来たのか、
何のためにここにいるのか、今の自分の答をみつけなさい。
そして、けりをつけたら、必ず戻ってくるのよ」

十字のペンダントを手渡す。
「約束よ……いってらっしゃい」

シンジの唇を奪い、舌を入れ…濃厚なディープキス…糸をひいてる。
「大人のキスよ。帰ったら続きをしましょ」

シンジをエレベーターに突き飛ばす。

ゲートが閉まり…その場に崩れ落ちる。
「こんな事なら…アスカの言う通り…カーペット、変えておきゃぁよかった…
ねぇ…ペンペン……加持君、アタシ、これで良かったわよね…」
レイの幻影が現れ、爆発がその身体に襲い掛かる寸前に虚数空間に…

（救助完了、カプセルに入れた）

（次は赤木博士だな…）

意識をドグマ最下層に…
丁度そのころは、

「作動しない…何故？」
コントーラーに一つ点滅する否決な文字…

「ぁ…カスパーが裏切った…？母さん…娘より自分の男を選ぶの…？」

碇から、銃をリツコに狙いつけ…

「赤木リツコ君…本当に愛してる」

「嘘つき…」
パーン

撃たれ背面に吹っ飛び、着水する間際に幻影をかけ擬体と入れ替える。

（…やはりレイが見てるなぁ…）

（救助完了）

（次だな…）

弐号機が暴れ始めたころから撤退気味になり、
ゼーレエヴァがくるころには物理的制圧をかけた事により、
戦略自衛隊は安全の為に一時撤退してたのだ。

使徒に勝ったエヴァ、それが１０体…
使徒に歯がたたない自衛隊にとってはエヴァと戦う事自体自殺行為であり、
アンビリカルケーブルを切断、
他のケーブルはペークライトで無力化、
初号機も同様に無力化した以上、

再度突入すれば占拠できる見解であり、
車両部隊及び航空部隊の被害が甚大になった為、
一時撤退していた。

（おい、そろそろ…）

（ん？あ、了解）

エヴァ初号機が覚醒した…

サードインパクトの前兆で、第三新東京市を中心とした５０ｋｍ半径は、

えぐりとられ何もなくなる爆発が起きる為、

異世界への待避を行う。

またその後人類補完計画始動による、個体崩壊も起きるから…

合流し、一回異世界に待避すると…

大爆発がその場を襲い掛かる。

……

再びカオルはエヴァの世界に出てきた…

エヴァ量産型が大地に突き刺さっている…

赤いＬＣＬの海に医療カプセルの端末のはじをいれ、

サルベージを試みはじめた。

（ふむ…やっぱりね）

前兆の爆発で死滅した人は無理だったが、

補完計画で一体化した人間ならず、生物は可能との表示が現れた。

呼び出しにはＤＮＡで探す形にはなる。
の為ＭＡＧＩデーターの流用の形になる。

人類はアスカとシンジをのこしＡＴフィールドが崩れて全員ＬＣＬの海の中に溶け込んみ、
この後導き手がないかぎり…ＬＣＬの中で過ごす事となる。

永遠に……

自力では人いや生物としては形成する事は出来ないのだ。

（じゃまず一号いってみよう…ペンペン！）
ＭＡＧＩは第三新東京市民含めての健康管理の記録もとっていたので、
ペンペンも呼び出す事も可能だった。

医療カプセルないにＬＣＬが吸い上げられ、
カプセル内部で固体が形成される…

排水が行われペンペンが姿を現した。

まだ意識は目覚めない…５日間程必要との表示がでた。

医療カプセルを交換し……

……

カオル報告

サードインパクト引き起こされた後の世界で、自重しません。

第１６９話　ＥＮＤｏｆＥＶＡ…その後　投稿日２０１１０８３１（後書き）

作者「という事で旧劇場版の世界にいったカオルは、
自重はしないで…だったと」

ナギ少尉「自重はしないでって…えっと作者、
サードインパクトでＬＣＬ化したネルフ職員は何人なの？」

作者「２００人に満たないんじゃないかな……？」

ナギ少尉「たった２００？…１４０００人近くいたのが？」

作者「ああ、ＬＣＬになった人ね。その前にサードインパクトの前
兆爆発があったでしょ…
それでもかなりを持ってかれたと…」

ナギ少尉「前兆爆発の前は？」

作者「多分１０００満たないかな…」

ナギ少尉「１０００ね…でも確かにそうね。
あれは凄かったというより一方的な蹂躙だもん」

作者「だろうね…」

ナギ少尉「ねえ作者他の二次みたく改編しないの？」

作者「まぁ考えてみたけどさ…カオルが巨大化してどったんばったんするか、
弐号機にとりついて早めに動かすか…
位しか思い付かん。
がそんな事はしないしなぁ…」

ナギ少尉「だからストーリー通りか…」

作者「前に前兆等わかってたら、
例えば少ない予算でも迎撃体制を整える事も可能だったろうにね」

ナギ少尉「例えば？」

作者「あらかじめペークライトを投入して通路封鎖、
数少ない通れる場所に兵力集中、
通路は三、四人位しか通れないしさ…
また通路を爆破して埋める等、トラップネタなら結構思い浮かぶね」

ナギ少尉「そのもってるソフトは影牢？」

作者「無限連鎖で稼いで、設置コンボかなり楽しみました」

ナギ少尉「……まぁ…トラップねぇ…」

作者「でＮ２爆雷は天井都市でシンジか、アスカが復活してないと難しいなぁ…
でＡＴフィールドで迎撃すると…
でもエヴァ量産型はシンジでダミープラグ抜いて、
コアをとる位しか、再起動防ぐ手段がないなぁ…」

ナギ少尉「なるほどね……さて、作者次回は帰還ね？」

作者「帰還が正月になるので新年会描写予定…うまくかけるかな？
お楽しみにぃ」

第１７０話　エヴァより帰還　投稿日２０１１０９０２（前書き）

台風なんか予想進路ずれてさいたまは良かったかな？と…

でも風が強いな…

第１７０話　エヴァより帰還　投稿日２０１１０９０２

２００２年１月１日未明

「ただいま」

［マスターおかえり～、新年あけましておめでとうございます］

「おう、おめでとう。どう？様子は」

［カシュガルは相変わらず集結中、
コロニーレーザー艦隊は明後日換装完了］

「じゃ、先に木星攻略か…」

［うん。ルーロスかしてね～］

「ビッグワン型にレーダーシステム改装して、
搭載しといた方がいいかな…あとは？」

［内緒～］

「ふぇ？」

［当人からきいてね］

「ん？？ん？」

［じゃ、マスター…もうおそいから…］

「……お休みな」

朝方…

「新年あけましておめでとうございます」

「新年あけましておめでとうございます！！！」＊多数

観光コロニーメンデルでの新年会をかねての挨拶となった。

「もうまもなく、木星に攻略艦隊が出発する予定で、
地上ではオリジナルハイヴからの大規模侵攻を迎撃いたします。
今年度中には太陽系からＢＥＴＡを追い出し、

来年度には良い年を世界中の皆さんが、過ごせるようにしたいと思っております。
何とぞこの若輩に引き続き力をかしてくれるよう、よろしくお願い致します」

挨拶がおわり、新年会となる…
色々な世界から人員が集まってる為交流会も兼ねていた。

明日には木星攻略部隊が出発する為、
こういった時間でないと、全員が集まる機会もない。

非戦闘員含めて約２０００あたりの人員で運用している為、
また年末近くに入隊した、ガオガイガーの世界の人達の交流も兼ねている。

それで６箇所の基地、防衛拠点及び宇宙や地上艦隊をまわしている。
つくづくコバッタやヤドカリ、ターミネーター達に依存しているのがわかる人数の少なさだろう。

「カオル殿」

「レビルさん、楽しんでますか？」

「ああ、ところでティアンム君探してるんだが見かけたかの？」

「ティアンムさん…？見てないですね～」

「はて？」

「宇宙と地上ではなかなかあわないですからね～」

「がっはっは！大将」

「ドズルさん、あ、ティアンムさんみました？」

「あっちで女子学兵に囲まれてたぞ」

「なぬ？うらや……んっん…けしからん、話にいってくるの」

「いってらっしゃい…そういえばドスルさん明日攻略艦隊指揮なんですから、
飲み過ぎないでくださいね」

「がっはっは、これぐらい飲んだうちには入らないわ、
わしを潰すならタンクローリーもってこい！！」

「中将閣下、タンクローリーなみとは、是非とも飲み比べいたしましょう」

「フォッカー、良いぞ」

「あの～フォッカーさんも…」

「大将閣下、自分めはアルコールで飛ぶのであります。心配いりませんよ！」

カオルの話も聞かずに飲み比べをはじめるドスル中将とフォッカー少佐…

（…まぁ酔っ払い運転でもよいか…フォッカー少佐は多分明後日以降、ドスル中将は多分指揮するだけだし…）

ブチュー

横から頬にいきなりキスを誰かがしてきた。

「アンシェさん？」

少し離れてみると、元南大西洋艦隊司令のアンシェさんだ。

「さいきん…でばん…ヒック…がないの…」

（あ～潜水艦艦長だからな…）

「宇宙か陸上艦の指揮します？」

「ヒック…きゃんぎゃえとく…ヒック…一緒にねてぇ～」

「大佐～…カオル大将失礼しました。ほら帰りますよ」

「ネムリラさん、アンシェさんって…
未成年で15歳でしたよね？なぜに酔って？」

「この子が間違えてワイン、いっき飲みしちゃったらしいのよ…
そしたら一発でこんなふうによっちゃってね…
寝かしつけてくるから」

千鳥足のアンシェさん…
酔っ払いを部屋に寝かしつけるだろう…連れてかれた。

「ママ～お酒頂戴～」

「エルちゃんにはまだまだ早いのよ」

「え～…どの位までばいいの？」

「そうね…大人の階段登ったらかしらね」

「大人の階段??」

（エルママさん……）

視線を変えるとシャアさんとガルマさんが、
利き酒をしている様子だった。

向こうでは沙霧さんと訓練生が良い感じに話している。

別の場所では極東一のスナイパーと推されている訓練生とロックオンが…
二人揃って会場を後にした。

（武は…純夏と3人の訓練生と話してるか…
たしか双子の妹がいるってたなぁ…）

「カオル…」

「ん?イッシーどうした?」

「うん。……できたの」

「へ？…」

「できたの」

（できたって…え～と……）

「だから、貴方の赤ちゃんが…」

「え？……お、俺の赤ちゃんが？…」

「うん」

「俺の赤ちゃんか…やった♪」

「えへへ…」

新年会の時に報告されるとは思わなかったようだが、
この世界にカオルの新たな家族がの芽吹きがでた。
カオルはよりいっそう世界をまもる決意を固める。

ちなみにその夜、まだできてないまりもちゃんと殿下に、
激しく求められたのは言うこともなかろう…

２００２年１月２日
午前９時…

虚数空間からエヴァの世界の人達が入ったシェルターを出した。

（万が一拒否されたら、戻すじゃなく民間にか…な？）

彼らには元の地球は既に滅んだと同等だった…
例えもどったとしても…
日本国内だとサードインパクトの前兆の破壊衝撃で自然等がもってかれ、ＬＣＬを飲むしかなく、
他の国だとしても自然があるかどうかの問題もある。
年月が経てば緑だけは復興するだろう。

が、生物に関してはほぼ絶滅した。
魚を釣れるかどうか？も疑わしい…

なので、元の世界に戻す事ができないと思う。

扉を作り、放送する。

「お疲れ様です。準備できた方から表にでてきて下さい」

ぞろぞろと表にでてくる人達、シェルターで救助できた人は、
非戦闘員だらけで、ドグマに逃げ遅れた人達だった。

部屋で表にでられず火炎放射を受ける運命だったり、
手榴弾が投げ込まれたり…

撃たれたり等の重傷者や蘇生者、ＬＣＬから分離者は後ろで医療カプセルで運ばれている…

「カオル君」

「加持さん？どうされました？」

「その…こんなにネルフの人員が…死ぬ運命だったのか…？」

「えっと…いいにくいんですが、
サードインパクトいわゆる人類補完計画が遂行されました」

「ゼーレによってか？」

「はい。で、今いる人達はその前段階、
ゼーレによって踊らされた戦略自衛隊の犠牲となる運命の人達です」

「リッちゃんやミサトは…？」

「後ろのカプセル群の中に居ますね。
リツコ博士は碇ゲンドウに、葛城さんは戦略自衛隊に殺されました。
勿論救助済みですけどね」

「チルドレン達は…？」

「今回は救助してませんが、唯一サードインパクトに抵抗して実体化を保ってますね。
シンジとアスカは…あとは補完計画通りＬＣＬの中です。
何人かＬＣＬの中からサルベージしました人物が、カプセル群にいますよ」

「ある意味世界は滅びたか…」

「ええ、ですね…ゼーレのシナリオ通りに…」

「こっちの世界はそんな事ならないんだよな？」

「させませんしません。エヴァもどきは作りますが」

「鍵となるものをか？」

「サイボーグの形になりますから大丈夫ですよ。自分自身が使徒のようなもんですから…」

「力によってか……ミサトのところにいくよ」

「はい」

（さて…）

「皆さんはじめまして、異世界軍最高責任者、渚カオルです。
ここにいる人達は全員戦略自衛隊に、殺される運命だったのはわかっておられますが、
加入の意思確認の前におひとつ、ＤＶＤの内容と違う点がありますのでお伝えします」

ザワザワ

「戦略自衛隊を操ってた組織、皆さんの上位にあったゼーレにより、人類補完計画が遂行されそれによるサードインパクトが発生し、皆さんのいた世界には地球人類が、個体として存在しなくなりました。
……１０億いた地球人類は一つのＬＣＬとなってしまったので、帰還を希望されても、何もない世界です。
ある意味自殺行為となりますので、
救助した以上帰す事が出来なくなりましたのでご了承を」

「あ、あのっ！サードインパクトおきたのは本当ですか！？！？」

「はい、証拠映像がこちらになります」

スクリーンに投影された…爆心地近く量産型エヴァが突き刺さり、
赤い海、黒い空を何処までも映している…

泣き崩れ、くそっと喚いたり…する人が大半だった…

それはそうだろう彼らは、
万が一のサードインパクトが起きても、
待避せず防ぐ覚悟のもとネルフにはいったのだ…
それを人の手で起こされたとなると…

ただ事実は事実…いずれわかる事だ。

「とりあえずすぐに加入確認はとりません。一ヶ月程猶予期間をとります。
拒否者にはこちらのスペースコロニー関係等の民間等の道もありますので、
よろしくお願いいたします」

「加入したい意思変わらない人は？」

「こちらのコバッタが受付しますので…」

といったら半数以上が移動してきた。

「ありがとうございます…では後はコバッタ達が案内します」

……

ネルフ戦略自衛隊犠牲者の内救助した１９５４名、
内１０１４名程が即日入隊希望者になる。

木星攻略艦隊は、既に出発済みの午後…

戦艦デッキを拡大し、

何日かかけてエヴァンゲリオンの製造にはいる。

勿論そのままだと、
誰かの魂を犠牲にする形となるので…できないが…

零号機と初号機がリリスから作られ、
弐号機以降がアダムから作られた。

製造工程は、人間のクローンと同様な方法、
純粋培養された卵から作られる。

培養による高速増殖で約５年の月日をかけそのコア及び身体を形成する

よって通常なら膨大な予算が製造にはかかる…
軽く世界が傾く位の…

勿論維持や、戦闘行動に関しても、かなりの予算がかかるが、

1番予算のとる、電力費用に関しては…
（核融合炉を内蔵かな？
またはこっちの余剰電力を…）

2番目に予算のかかる生体部分は、
同化でメンテナンス費用をうかし、リフレッシュさせるようだった。

3番目か4番目の装甲素材、弾薬等はプラントで作る考え…

これによりエヴァの予算はクリアになる。
カオルが居ないと…1戦闘ごとに1億は軽く飛ぶが…

カオルが製造するのは、いつも通り素材同化により、
エヴァもどきを作りあげようとしていた。

［生体系はプラントで無理だってば…］

「じゃ、作れるところだな…拘束具とかね」

［了解～］

これによりエヴァに関しては、カオルの従事が確定…

（数多くは作れないか…
頭脳に当たる部分のコアだけはＣＰＵ重視だな）

とにかく取り込まれるや、暴走が恐い為…コピーだけはやめとこう。
の気持ちだった。

エヴァの特徴として、精神同化による思考での操縦があげられるだろう。

ピース等の操作もエヴァは思考でできるのに、
モビルスーツ等は複雑なプログラム、
またはアームマニュピレーター等の操縦技術が必要だ。

よって格闘技術に秀でるのが神経接続であるガンパレード、エヴァ、ナデシコ、サブ神経接続のＳＥＥＤ、
モーション操縦によるまだ取得してないＧガンダム、
サブモーション操縦のフルメタルパニック…
と言えよう。

体力消耗度でいえばモーションより神経接続の方が優れている。
精神はともかくとして…

神経接続で、どんだけ思った通りに動けるか?またポイントの一つでもある。

そういった意味では人造人間…ガンパレードと、エヴァが他の世界より秀でている。

まずはエントリープラグ周りから…

コネクトから脊髄にかけて作り、コア周りを作る。

この部分が出来ると、起動する事ができるので最優先に作成する…

（ん…ちっと半日がかりか…）

エントリープラグ、コネクト、コア作ったところでこの日は終了した。

……

カオル報告

新年会で赤ちゃん報告されました

第１７０話　エヴァより帰還　投稿日２０１１０９０２（後書き）

ナギ少尉「本来なら桜花作戦結構日時だね～」

作者「だな」

ナギ少尉「で、この物語、リアルで年内には…？」

作者「完結できればいいな…」

ナギ少尉「目標は太陽系制覇なんだよね？」

作者「まぁ…その通りと」

ナギ少尉「その間に私達の東京遊覧はでるのかなぁ～？」

作者「ぐっ……」

○○「お兄ちゃんに会いたい」

作者「ぐっ……ま、ディズニーワールドは…一般人視点から遊んでいる描写ならセーフかな？
と思うが…ま、別のに変えてもよいか」

ナギ少尉「……大人の都合ね」

作者「まぁな…」

ナギ少尉「で新年会でおめでた報告で、ますますこの世界に縛り付けられたカオル…
エヴァを作りファーストインパクトを起こすのか？
次回…あ、木星攻略艦隊…？…お楽しみにぃ」

作者「そのものでないからインパクトは起きないよ……」

第１７１話　木星攻略艦隊始動　投稿日２０１１０９０４（前書き）

まだまだ台風の影響で大雨警戒ですね…

第１７１話　木星攻略艦隊始動　投稿日２０１１０９０４

２００１年１月２日　午前１１時
Ｌ４宇宙艦隊プラットフォーム

少し時間は巻き戻り、この時間にプラットフォームから船が一隻ずつ離れていく。

サラミス改級、マゼラン改級、エンデミオン、

が一足先にＬ４から離脱したアイランド級コロニーレーザーを目指してすすむ。

総数４１隻からなる護衛艦隊…
アイランド級４基のコロニーレーザーと合流した。

「これより当艦隊はフォールドを行う。目標地点…木星近海…各艦最終調整入れ」

『各艦フォールド準備、各艦フォールド準備…
フォールド開始までＴマイナス６０、目標地点木星近海』

警告アナウンスが流れる。

「フォールド開始！！」

艦から白いエネルギー場が広がる。
フォールドフィールド内部にあるすべてを転移先にある空間と入れ替える。
これがフォールド航行である。
例えデブリ内部でも、出現位置に物質があっても問題なく置き換わる為、
かなり安全な長距離移動手段である。

しかし、ゼントラーディ技術のフォールドは時間がズレが生じる。
１：１０の比率でずれ、例えるならフォールド航行に１日かかると、表時間では１０日かかってしまうのだ。

また一回のフォールドでは３００光年までとなる。
エネルギーチャージの容量の問題で…の事だ。

大体１００光年で１日フォールド航行にかかると思って貰えれば良い。

銀河鉄道の方がフォールド航行よりも、はるかにスピードがあるが、あくまでもシールド内部のデブリが無い安全な空間における速度、また速さに比重をおいてて、船等の大きさに制限がある。
といっておこう…

シールドなしに正面から、１０m位の隕石に銀河鉄道の毎時３０００光年の速度で衝突したものなら…
大惨事になる事は確実…

なのでシールド外の通常航行の速度は毎時1光年あたりまでしか、出せはしない…

さて、外側からみると…司令室の監視モニターでは、おおきなエネルギー場が4つ、そのまわりに41あるエネルギー場が見え…

エネルギー場が一瞬輝き、その後急激に小さくなり…後にはなんにもなくなった。

すぐにとなりの木星採掘基地の映像に遠くにエネルギー場が発生、エネルギー場が収束していくと小さいながらもコロニーレーザーが見える。
艦隊は映像からは確認できないが、問題なく転移できたろう。

星系内部の短距離フォールドではさほど時間のかかる事なく、無事にデフォールドした。

「デフォールド確認、各艦異常なしです。座標も誤差無し」

「各艦、加速開始…アイランド級に速度あわせぇ」

「了解」

スペースコロニー及び護衛艦隊は加速に入る。

ガリレオ衛星群の中では１番外側を１６日間で木星を一周する。
現在公転軌道からみて、後方に位置する場所にカリストがある。

そしてカリストの２箇所のハイヴへコロニーレーザーを撃ち込む為、
加速して、衛星の公転速度近辺まで速度をもってき、
最終加速で位置を合わせて射撃準備にはいる…
約３６時間後には射撃体制に移れる予定だ。

木星の４大衛星の一つカリスト、
直径約５０００ｋｍあるこの衛星は、本来ならもう少しハイヴの数
があってもよかったかもしれない…

が、このカリストには２つのハイヴしかない。

考えられる理由として天王星型惑星、巨大な氷に閉ざされたと理由
が考えられる。

厚さ２００ｋｍに及ぶ巨大な氷の大地、
太陽の光がもっと届けば豊かな水の惑星にもなったろう。

しかし光が届きにくく、永久氷土の衛星として存在していた。

ＢＥＴＡ的には大きさは条件を満たし落着したものの、
資源的には旨味がなく、活動限界近くに一箇所をつくり、
それでこの衛星カリストから手を引いたとの見解だ。

ほってもほっても氷しか資源が見つからない衛星…

勿論２００ｋｍより地下に資源が探査で、あるのは確認できるが…

さて、先に出発したビッグワンは既に衛星の輪に到達しており、
この二つのハイヴ状況及び他の衛星のハイヴの観察にはいっていた。

ビッグワンにはキャーティア製の透過レーダーが、
改装で積まれておりその威力を発揮して惑星の内部まで覗けていた。

後で、話を聞いたカオルは、
「木星にも落着ユニットが投入されてたのか…」

「はい。ですが、高重力に耐え切れず粉砕した形跡がとれます」

「対応してたら…今の機体では攻撃をかける事ができなかったな…」

同じ衛星の輪の中にある採掘プラントの、
宇宙世紀技術レーダーでは、重力の底の様子はわからなかった事実だ。

木星攻略艦隊はこの後ひたすら速度あわせるに３６時間程経過する……

２００１年1月3日

木星攻略艦隊から場面は横浜基地にうつそう。

カオルはエヴァに今だにつきっきりとなっている。

ろ過循環装置をプラントに作って貰い、ＬＣＬはカオル自身が同化で作っり、
プールを作っていた。
この中に非活性化させた生体部分を入れ、
最後に繋ぎ合わせ作る工程になる。

早く言えば、人間の間接ごとにあらかじめつくり、
同化で手術のように繋ぎあわせ、活性化する…

さすがに８０ｍもある人造人間…作るに苦労する話だった。

カオルはコア周りの完成とともに、起動テストに入る。

ロッカー室で、プラグスーツに着替えてきたカオル、
エントリープラグにはいり、シートに身体を固定する。

エントリープラグをコネクトに挿入…座席ごと一回転する。

ＬＣＬの注水コマンドを打ち込むと、ＬＣＬがはいってきた。
（ガボガボ…血の味だ…）

わかっているが体液である…

（味だけは変えるべきかな？）

エントリープラグ内部にＬＣＬが浸り、コンタントを開始…

無事に神経接続が繋がった。

まだ入力情報がないのでプラグ内部は明るいまま、
身体も動かせない状態にあってもどかしい思いになる。

起動テストを終了し、

「マスター、凱さん、ルネさん、ソルダートＪさんが目覚めたよ～」

「やっとか…長かったなぁ…」

「機械同化部分がね…ルネさんは廃熱処理の部分ついでに直したし、
ソルダートＪさんは意外に長引いたね」

「今ＤＶＤ中？」

「うん。あと報告だけど…
ルネさん目覚めたときターミネーターが３人小破判定くらったよ」

「……なんとなくわかる気がする。
確かにターミネーター達身内には甘い設定だしな…」

一応人間に対しては不殺不大傷と設定させ判断させている。

工作員の取り押さえの際にも、全身の骨を折ったり等で無力化せず、
投げつけたり、捕縛術で捕まえ、

捕まえたあとは、猫の様に垂らすや、全身ガムテープで拘束する…
また緊縛術でロープを使い見事に縛りあげる…という流れだが……

多分ルネが暴れた為に大怪我を負わす事を恐れた為だと思われる。
過剰な力を発揮する相手を押さえ付けるのは、壊す恐れがある……
なので捕まえきれず小破くらったのだろう。

見終わったとの事で、カオルはミーティングルームに…

「みなさん身体の調子はいかがですか？」

「きみが渚カオル君か…獅子王凱だよろしく。身体の調子はいいな」

「シャッセールのルネだ」

「Jだ…感謝する」

「ルネさん、回復中の間に廃熱処理の不具合は修正はしておきまし

た。
一応お聞きしますが、人間に戻れますがいかがです？」
「人間に？生身の身体にか？」
「ええ」
「……興味ある話だねぇ……何時でもできるんかい？」
「はい可能です」
「……考えとくよ…Ｊは可能かい？」
「Ｊさんも凱さんも可能ですね」
「俺はこのままでいい」「……わたしは戦士だからこのままだな」
「わかりました…と改めてよろしくお願いいたしますね」
「よろしくな」「フン」「ああ」
１月４日…
約３６時間かけ、加速及び衛星カリストの速度に同調したアイラン

ド1及びアイランド2は、
ハイヴ狙撃位置へとその砲身を固定した。

衛星カリストにある二つのハイヴは共にフェイズ5…

必要最低限の発展で打ち切ったのだろう…
そのフェイズ5規模のハイヴに対して、
人類の科学の力がいま振り下ろされようとしていた。

「カリストのハイヴに対してコロニーレーザー照射する」

「エネルギー充填率１００％いつでも発射できます」

「ジオンの威力をうけろ!!はっしゃぁぁ」

コロニーレーザーから照射されたレーザーが、
カリスト０１及び０２に突き刺さる。

ハイヴに直撃し、その周りの氷を溶かし一気に蒸発させる。
氷の大地がとけるが…まだハイヴの土台がしっかりしている為、照射に耐えていた…

「エネルギー再チャージ第二射目急げ!」

もう一度撃てばカリストのハイヴは、二つとも反応炉を消失する。

あとは飢え死にをまつだけであった……

……

カオル報告

引き続きエヴァ建造中…

第１７１話　木星攻略艦隊始動　投稿日２０１１０９０４（後書き）

ナギ少尉「とりあえずこの回は、カリストまでなのね」

作者「ああ…まぁね」

ナギ少尉「で、あと３っつあるんでしょ？ガニメデ、エウロパ、イオ」

作者「それぞれに一応星の大きさが達しているから、落着ユニットがうちこまれてるからね」

ナギ少尉「で、木星にもね…」

作者「そういった事。ただ、高重力に落着ユニットが粉砕された…のは本編の通りな」

ナギ少尉「でも、木星攻略一気にいかないの？」

作者「地球オリジナルハイヴの集結からんでるから、あっちに飛んだりこっちに飛んだりする羽目になって…まぁ…一気にはいかないんだよね」

ナギ少尉「木星の後は土星？」

作者「の前に、エンデミオン以外が推進剤を補充しに一回帰還するから」

ナギ少尉「エンデミオン以外？」

作者「エンデミオンは大改造で推進剤に余裕あり、ビッグワンも残るけどね」

ナギ少尉「で、次回はオリジナルハイヴ周辺の様子も？」

作者「ということだ…さて次回題名未定っすが…お楽しみにぃ」

第１７２話　勇者ロボ達…木星攻略進行…そして…　投稿日２０１１０９０６

２００１年１月４日

カリストへ２射目が撃ち込まれた後辺りの、
横浜白陵基地の異世界軍司令室。

モニターにはオリジナルハイヴ周辺の映像がでている。

続々とその数を増やしていき、
今だ集結前なのに既にオリジナルハイヴには、
１０００万を越えるＢＥＴＡが集まっていた。

その数により、ハイヴ内部ににおさまりきらず、
周囲１００ｋｍ四方に溢れかえっている。

通常溢れると大規模侵攻が発生するが、

あ号の命令だろう…まだ周囲に留まっていた。

いつ何時動き出してもいいように２４時間体制で監視が続けられ、
それに対応すべく改装済みのビッグトレー砲艦型４０隻と新造艦４隻が、
敦煌防衛拠点にて待機していた。

……

Ｂ５５ハンガー奥、格納エリア内部に作られた、ビッグオーダールーム。

勇者ロボット達のサイズに合わせてつくられた、オーダールームであった。

「隊長！」

「凱隊長殿」

「凱隊長！」

「おうみんな！元気みたいだな」

「早くボディが治ってほしいですけど…」

「わたしのは明日治ると伺ってます」

「はぁ…なぜ兄弟機なのに何故まだなんだ？」

「私たちもまだだって～」

「のわりには…なんか謳歌しているみたいだが？」

「人間サイズっていいよね～こんな可愛い服とか着れるし～」

「ケーキ美味しい♪」

「将棋というのを手で打つ…というものは、いいですな…王手！！」

パチン

「む……ならば…これでどうです？」

彼ら勇者ロボ達には、人間サイズで活動可能なように、
ターミネーター技術を流用したボディにＡＩの分体がインストールされていた。

本体は勇者ロボにはあるが、いざという時に退避可能なように…
また人間サイズと交互に活動可能なように改造されつつあった。

もちろん外見上はアイデンディティーを保つ為、同一的な外見をしている。
が、「人間サイズなら服を着てオシャレしたい！」という要望に応え、
シリコン性の外枠の形となった。
金属で服を引っ掛けない配慮だった。

誰の要望かは…わかるだろう…

また同時に、人間の食事にも興味ある！
でエネルギー転換炉をつけていた。

……エネルギー転換炉をつけないと、トイレに並ぶ勇者ロボ達…
そっちの方がおいしかったかもしれないが、
処理の問題の必然から飲食機能と同時に組み込まれた、
勇者ロボ達だけの人間サイズボディだった。

「おっ…そこ…」

「あっ！」「隊長ぉぅぅ」

「王手！これで摘みです！」

「隊長っ！酷いです！」

「ごめんごめん…とギャレオンは起動してないのか…？」

凱は見回してると…

「にゃーん」

「にゃーん？」

振り向くと膝位までの高さのライオンの子供…
いや失礼、ミニギャレオンらしいのが声をあげていた。

凱は…固まっていた。

「にゃーん」

「ギ、ギ、ギャレオン？」

「にゃーん」
肯定の意味だろう…首を上下に。

「……フュージョンできるのか？」

ミニギャレオンが口を開ける。

フュージョンできたら…物理的に不可能とおもうが…
甘い誘惑から凱は呟く。

「……フュージョン」

ミニギャレオンが飛び掛かってきた。

ミニギャレオンは甘噛んできた。

「ギャレオン、くすぐったい舐めるな～」

「にゃーん」

勇者王、ひと時の日常であった…

２００１年１月５日

前日のカリストでの２発目のコロニーレーザーの様子だが、
反応炉を貫き約５０ｋｍの深さまで到達した。

グズグズと茹だり液化がすすみ、また水蒸気を濛々とあげる。

が、カリストは－１５０度の世界、
水蒸気もかなり早めに冷やされ凝固し、大穴に落着する。
また回りからも溶けた氷が穴をふさぎ、
次々と内部からうまっていく……

次第に大穴は再び氷で塞がっていき…今では深さ８ｋｍの穴として
存在していた。

足りない分は回りに飛び散り、
若干盛り上がって氷となり、宇宙に拡散せずにカリスト自体の質量
はさほど変わらない…
を付け加えておこう。

カリストで無事二発目の照射を終え、
次なる衛星ガニメデをターゲットに捕らえて、
攻略艦隊は、減加速を終えて最終発射位置にアイランド０１及び０
２、０３は、
その巨体をハイヴに向けていた。

ガリレオ衛星の内の一つであるこのガニメデは、やはり太陽の力が届かずに、
地表は固い薄い氷の層で覆われている。

その下には軟弱な氷の層が１７０ｋｍあまり、中心部に行くほど水になるが…続いている。

直径約５２００ｋｍ、太陽系１大きい衛星にはやはり落着ユニットが到達していたが…
好みではなかったのだろう、ハイヴは3箇所のみしか作られてなかった。

活動距離限界で作られたハイヴであり、
またカリスト同様、発展は最小限にとどめられてた。

フェイズ5規模が3つ…
たったそれだけしかこの衛星にはない。

見捨てられた衛星である……

「はっしゃぁぁぁ！！」

コロニーレーザーがガニメデの各ハイヴに突き刺さる。

「っ！！中将！！ハイヴが沈降していきます！」

「なにぃ？」

ハイヴを支えていた薄い氷の大地がとけ、
ハイヴの重みに耐え切れず衛星の氷の地の中に沈下していく…
固い氷の層の下は軟弱な氷の層、ハイヴ自体の重みに耐え切れてなかったようだ。

「エネルギーチャージ急げ!!逃すな!」

「中将、ビッグワンからです!!沈下停止しました。
また同時にハイヴ内部に大規模浸水発生!」

「浸水だと…?」

「主縦穴ほぼ2／3以上浸水するようです」

「……エネルギーチャージ中止、02、03においてもか?」

「はい」

「勝ったな…」

主縦穴自体は重みに耐え切れず沈下するも、
繋がっている横道の存在が、しっかりと主縦穴を支えた。
門辺りの土台は溶けてなく、その構造物を支える。

そこに沈み込んだ及び主縦穴が消滅した分、
回りからの溶けた水が次々と流入してく…

ハイヴ内部に浸透しきった温水は急激にその温度を奪われてく…

次第に…

ハイヴ反応炉近辺にいたＢＥＴＡ達は、
今までなかった水に襲われ対応すべく身の動きを止めた。

しかしそれが彼らの命とりだった。

回りの水が固まってくる。
ここは氷点下１５０度の世界…

数ｍの氷の壁なら問題なかろう…しかしハイヴに流れこんだ水が全て氷と化した。

次第に身動きがとりにくくなり…
気がついた時には身体の自由もかなり奪われてた。

シャリシャリな内に移動できた個体もいたが、すぐに壁にぶちあた

る。

今までなかった壁とおもった次の瞬間。

ＢＥＴＡの氷漬けが完成した。

ハイヴ内部に浸水した溶かされた水は…

横道、広間、主縦穴をうめつくし、
そして、凍らせ壁となる。

門付近や地表に出ていたＢＥＴＡが、ひっしになって氷を掘りはじめてきた。

しかし反応炉まで分厚い氷の洞窟に阻まれている…

「地表から６００ｍ以下の部分が全て凍りつきました」

「残存６万が現在氷結部分を掘削してますが、
試算によると２週間かかる見込みです」

土なら掘りやすいが、氷である。
固い岩と同様なかなか掘りにくいものだった。
地球においても、母艦級は硬い岩は避ける傾向がある。

光線原種は確かにいるが、氷の大地…いや氷点下の世界では、
溶かすかたわらすぐに固まる為、
あんまり光線原種は使われない。

要撃原種による掘削が重宝されているようだった。

が、反応炉までの道のりは５ｋｍ以上…いくら掘削のプロでも…

「餓死まつのみ……か。次の衛星攻略に移行するぞ。
ガニメデは監視体制に」

「はっ！！」

次の衛星はエウロパ…

エウロパに向け、ガニメデ衛星軌道より離脱すると、
減速し始めた。

２００１年１月７日

この日はエウロパのハイヴにコロニーレーザーが撃ち込まれた。

衛星エウロパ…

木星の第二衛星で、約３日で木星を周回している。
直径は約３１００ｋｍの月よりやや小さめの衛星であった。

エウロパは、表面を薄い氷の層で囲まれた海洋惑星である…
そして更にビッグワンからの情報で、エウロパの深海の熱発生原には、
原生生物の存在が確認できていた。
太陽による光合成でなく、熱による化学合成でエネルギーを発生する生物であった。

「……やはり居たんだな」

カオルはその報告を後日聞き、そう呟いた。
元の世界ででも、太陽系で唯一地球以外で可能性がある…
として議論されていたのを覚えてたからだ。

さて…発射描写がかかれてないのは…
結果とてガニメデと同様、
水没し氷結…という結果になったからだ。

このエウロパはやはりＢＥＴＡ的には見捨てた星である。
なので月とほぼおんなじ大きさながらハイヴ数は2、フェイズ５でとどまっていた。
そこにコロニーレーザーが撃ち込まれると…

エウロパの大地は厚さ平均５ｋｍの氷の層で覆われている。

コロニーレーザーがハイヴに直撃、土台が溶けはじめその重みを支え切れず沈下、
門からの横道が主縦穴を支え受け止める…
そこに溶けた水が侵入、氷結し…
の流れは変わっていない。

「次の最内の衛星イオに向かうぞ…フェイズ9規模のが4つだな?」

「はい」

「木星の重力に捕われるな」

「はっ!!」

2001年1月8日
横浜基地演習場

「どうだ炎龍、風龍、雷龍、光龍、身体の調子は?」

『好調であります、隊長殿』

『問題なし、すこぶる快調だ』

『雷龍と同様。腕が良い』

『凱お兄ちゃん、快調だよ』

「はぁぁ…ルネ隊員何故……？」

修理ができた勇者ロボット達が身体の調子をみるべく、演習場で動かしたり、かるく模擬をおこなっていた。

修理状況で難航しているのが、氷龍とギャレオン及びジェネシックマシン各種…

なので、ガオファイガーを新造している最中であった。

また再び修理する羽目になったのがボルフォック…

何があったかは…想像にお任せする。

２００１年１月９日

この日は木星のイオの４箇所のハイヴに撃ち込む予定だが…

『総員第二種戦闘待機、繰り返す。総員第二種戦闘待機、

本日１１２９オリジナルハイヴより大規模侵攻発生。
各戦闘部隊所属人員はミーティングルームへ集合せよ』

異世界軍の各基地に警報が流れる。
また国連軍エリアでも警報流れているはずだった。

（きたか…）
カオルはエヴァの作成を途中で切り上げ、情報司令室に向かう…

……

カオル報告

いよいよ大規模侵攻発生です

第１７２話　勇者ロボ達…木星攻略進行…そして…　投稿日２０１１０９０６

ナギ少尉「いよいよね」

作者「いよいよ山場だな」

ナギ少尉「ねぇ…１０００万越えって…どの位なの？」

作者「まぁそれは秘密って事で…」

ナギ少尉「でも…今まで５から６万の進行で生存圏後退してるのよ？」

作者「それいったらハイヴ増援の１０万台受け止めてるしさ…」

ナギ少尉「……う～…」

作者「それに後方浸透が１番怖いんさ…
戦術機だけならまだ耐えたかもしれない。
が…補給部隊や司令部、民間人など護るものは沢山あった…
そこにいきなり小型級が出現したら？
音もなくいきなり兵士級がぱっくんちょしたら？

全てを通さないって殆ど不可能…
だからたった2から3万の規模でも戦線瓦解する事もある…」

ナギ少尉「そういえば…異世界軍って、
後方にもターミネーター達が警戒してるよね～」

作者「基本、整備兵は前線には行かないしな。
第一コバッタ達が活躍しまくってるから」

ナギ少尉「えっとあとは…氷漬けか…」

作者「エウロパとガニメデね？
まぁ表面温度氷点下１５０度の世界だからなぁ」

ナギ少尉「けどエウロパは、薄い氷の下に豊かな海があるのね」

作者「荒波らしいよ。あと海だから塩がある。
また循環も木星の引力にひかれてある。
だから全てが凍らず海が存在しているって学説だね」

ナギ少尉「実際にいってみないと…」

作者「その頃には生きてないよ俺らは…

なので、この物語上の設定ですので惑星描写についてはご勘弁を…
なるだけは学説に似せますが…」

ナギ少尉「精々月、までだもんね～今のところは…
火星は着陸はしてるけどね。さて次回はイオと大規模侵攻の話題に
なるの？」

作者「ま、その通りだな」

ナギ少尉「あとエヴァ今回描写ないね～」

作者「……」

ナギ少尉「次回、大規模侵攻編　敦煌防衛拠点防衛戦その１…お楽
しみにぃ」

大規模侵攻編　敦煌防衛拠点まで…１５００ｋｍ～

２００１年１月９日

横浜白陵基地異世界軍エリア司令室…

モニターでは衛星軌道上からの大規模侵攻群をとらえていた。

横幅がおよそ５０ｋｍ、３０ｋｍ程しかまだ移動してないが、３００ｋｍの長さになると予測される。

オリジナルハイヴに集結時から異常だった。

ハイヴ内部におさまりきらずに２００ｋｍ四方にあふれだしていた。

その中から突撃級があふれだし、進行方向を敦煌防衛拠点に向けていた。

「予測される規模は？」

「１３００万から１５００万の間です」

「かなり多いな…砲艦隊には出撃命令は？」

「だしました、第一、第二、第三砲艦隊が、

最大戦速で急行中です」

定数２０隻の砲艦隊、第三は定数満たさず８隻にて稼動していた。

「迎撃施設関係は？」

「迎撃ライン上は敷設率１００％、敦煌防衛拠点はもうまもなく完成、
重慶は基地設備ともに１００％です」

「各守備担当は？」

「滞りなく移動中、またミーティング中、欠員無しです」

「会敵まで３時間か…パンジャンドラムも？」

「はい、順次発進してます」

ビッグトレー砲艦型が、その巨体に似合わない速度３５０ｋｍを出して急行している。

～桜井小隊ミーティングルーム～

ガンパレードから引っ張ってきた、烈火…

その改造型を操る第六世代人で構成される桜井小隊がミーティングしてた。

「いいか、今回の目的は遅滞行動にある。
できるだけ多くのＢＥＴＡを引き付ける事にある。」

盤面の敦煌防衛拠点を指した。

「われわれの担当するところはこの部分、この部分において遅滞守勢し…
最後にはチューリップでもって撤退する。
ＨＵＤに表示される撤退指示を見逃すな」

「はいっ！」＊多数

その頃地球では慌ただしくなっていたが…

木星では…

「やっとフェイズ９クラスですな」

「やっとだわい、がははは」

衛星イオに存在する４つのハイヴに向け、
射撃準備に入っていた。

衛星イオ…木星の４大衛星の中で１番最内を回っている。

地表は大地に覆われていた。
また火山活動も頻繁に起きていて、
大気は極めて薄いながらも二酸化硫素が存在している。

この星はＢＥＴＡにとっては好物だったのだろう…
ハイヴ数が４、いづれもフェイズ９まで育っている。

なを木星の衛星にはカリスト、ガリレオ、エウロパ、イオ以外にも、
ＢＥＴＡが落着する可能性として直径約１８０ｋｍのアマルテア、
直径１７０ｋｍヒマリアがあるが…
その二つの衛星には地表には落着ユニットは到達してなかった。

木星がより魅力的だったのだろう…

このイオのハイヴを潰すと、木星の攻略は完了する事となる。

「エネルギーチャージ完了しました」

「コロニーレーザー発射ぁぁ」

イオに向かい楔が撃ち込まれる…

侵攻感知から約４時間後、場所は敦煌防衛拠点より１０００ｋｍ地点

４８隻からなるビッグトレー砲艦型は移動をやめ、
大地にしっかりと巨体を固定していた。

その狙う先は…まもなく有効射程１００ｋｍ範囲に到達する敵ＢＥＴＡ群の先頭突撃級。

ＢＥＴＡの移動速度は突撃級であっても約５０ｋｍの速度でハイヴ間を移動する。

要塞級等が引き離されすぎる為、
ある程度は調整していると見られるのだ。
要塞級は最大速度が５０ｋｍ、通常移動であっても３５ｋｍ…
その歩みは巨体にあうとおり遅いものである。

迎撃できる地点が敦煌防衛拠点よりオリジナルハイヴ側に食い込んだ、
この１０００ｋｍ地点においてビッグトレー砲艦型は既に展開ずみだった。

「各艦、砲撃開始！！」

一斉に６０ｃｍ３連装から主砲弾が放たれる…
その数５１８４発…続けて次発。
一分間に６２万２０８０発が放たれる…

光線級の迎撃が地平線に阻まれてＢＥＴＡ群の先頭には届かなかった。

ＢＥＴＡは一撃受けた後、その速度をあげ、密集隊形から若干広がり気味に、
一斉に敦煌へと目指し始めた。

ＢＥＴＡはその砲弾の雨の中も恐れずに走る速度をあげる。

突撃級の最大速度１７０ｋｍを目指して…

はっきりいって運の世界。
ＢＥＴＡにとったら、災害駆除すべくその出しているもとへと一斉に駆け付ける。
俺が逝っても他がいるさ…

の如くだった。

実際人間の兵士ならこんな砲弾の雨嵐の中行きたくない！
で躊躇し、それが損害を更に生むだろう。

がＢＥＴＡにはそんな感情はない。
速度をあげ耐えるのみ…

実際のところそれが損害を減らすコツといえばそういえる。

ビッグトレーの砲弾の多くは、突撃級の最前列に集中させる。

突撃級の速度を落とさないと、１００ｋｍの距離は、
約４０分程で到達してしまうからだ…

更にその幅が８０ｋｍにも及ぶ…

いくら一分間に６０万近くの砲弾を撃てても、
突破されて後方にいかれては…遅滞行動にもならない。

より多くの突撃級の死体をこさえて、最大速度を出させない…
まさに物量と物量のぶつかり合いだった。

砲弾が地面にあたり爆発する…
地面がえぐれクレーターとなる。
そのクレーターに曲がりきれずに突撃級が突っ込み若干速度がおちる。

更に上空から砲弾が突撃級の硬い甲羅にあたった瞬間に爆発。
爆発力が３ｍ位の穴を甲羅にあけ、中身を粉砕し、
突撃級のあいてる後ろに肉体を押し出す。

甲羅は真っ二つにわれ空中に浮かび上がり、そして地面におちる。

その甲羅を避けるべく速度を落として避ける。
そこに６０ｃｍ砲弾が直撃する…

突撃級にとって地獄絵図そのものだった…
１時間５分後…

ビッグトレー砲艦型から４０ｋｍ圏内とどこうとしてきた突撃級がいた為、
砲撃中止しその巨体のホバーを起動、転回し移動しはじめる。

接敵されると、艦体は初撃に耐えられるも、
ホバークラフト部分が耐えられなく固定砲台と化す羽目になるからだ。

砲撃中止し、移動し始めたビッグトレーの脇を、
トレインギャロップから展開した、パンジャンドラム１０００両がＢＥＴＡ群に向かい駆け抜けていった。

突撃級は６０ｋｍに及ぶの死の世界をくぐり抜けると…
災害の嵐がやみその歩みを遅らす要素が、
クレーターと仲間の死体のみになった突撃級…

避けながら忌ま忌ましい災害に向かって、突撃をしかけようとした時…
こちらに向かってくる物がある。

蹴散らそうと身体の向きを若干かえその物に突撃をしかけると、
若干進路がずらされ更に後ろへといく…

仲間がその物に突撃しかけた…

すると後ろから熱風が襲い掛かって…

パンジャンドラム達はまずは１００両、穴だらけになった戦線に広がりつつ特攻した。

先頭にはあたらずすぐに後ろの…突撃級に特攻し、
その爆発でもってより多くの突撃級を地獄へと誘う…

猫の目によりその進路はうまく誘導され、
２から５体を巻き込み華を咲かす。

更に１００両が突っ込んでいき…

先頭部分が死により揃いつつあったと判断した猫の目は、８００両を一斉に動かした。
一両が半径５０ｍを担当し、死骸という障害物をつくるべく特攻していくパンジャンドラム…

上空からみるとものみごとに列となり８００の華がみえる。

その華の後にはのたうちまわり重体となった突撃級もいれば、
死骸となり後方の突撃級を阻害する事となったのもいた……

そのころ…

～医務室～

「よっ！葛城、リッチャン」

「あら加持君」「あ…あ…」
加持の姿をみて涙を見せるミサトさん。

「わぁぁぁぁぁ～あんたぁ」

ミサトさんが加持さんに飛び掛かり…それを加持さんが受け止めて…

「あらあら……子供ね…」

リツコさんは長くなるな…とコーヒーのお変わりをとりにいった。

場面は敦煌周辺に戻る。

現在敦煌防衛拠点から８１０ｋｍ地点…

まずは増産されたモンスター改、その数２０００機が、
最大射程１６０ｋｍの距離で歓迎の砲火をあげた。

４門の長距離砲から一斉射撃が開始され、
６０００発の砲弾がパンジャンドラムの特攻を受け、
傷ついた突撃級やその後ろの無傷な突撃級に襲い掛かる。

最初のビッグトレーの射撃ポイントで射撃はしなかったのは、
その鈍重さにある。
８０ｋｍ近くの速度をだすも、
トレインギャロップからの展開及び搭載に時間かかると判断された
為だ…
何しろその巨体である。

なのでこの次の砲撃地点は３００ｋｍ地点と設定されていた。

モンスター改の受け持ち射撃範囲は１６０ｋｍから８０ｋｍの間、
それをすぎると射撃中止し、トレインギャロップに搭載、移動の形
となる。

そしてモンスター改から９０ｋｍに突撃級がかかると…
８００ｋｍ地点に展開し終えたビッグトレー砲艦隊より、砲撃開始
された。

しかし…異様な数の大規模進行群はなかなか勢いが止まらず、
まずはモンスター改が射撃中止し、トレインギャロップへ搭載、
後方へ移動開始する。

そしてまたもや４０ｋｍ圏内へ到達、
次なる射撃地点へとビッグトレー砲艦型も転進する事になる。

移動し始める脇を追従していたパンジャンドラム１０００両が、Ｂ
ＥＴＡ集団に向かいはじめる。

広い戦場を使い、削り削り殲滅できる戦力まで減らす…

それが１５００万に膨れあがった大規模侵攻群を、
打ち負かす方法であった。

パンジャンドラムが効率よく先頭集団に突っ込み、
その歩みを遅らせている間に、
ビッグトレーが７５０ｋｍ地点を敦煌防衛拠点へと疾走していく。

そこにはG元素がおかれていた…

パンジャンドラムの被害にあった傷つい突撃級…
その感覚はエネルギー源を捉らえていた。

腹減った…まわりの仲間もその進路をエネルギー源にかえ…
押し合いへしあいの状態になってくる。

ああ…美味しそうなエネルギー源…
とどく…いただきまぁ…

「サイクロプス始動!!」

ＢＥＴＡが引き付けられている、G元素がおかれている地下には、
サイクロプスが設置してあった。

電圧がかかり…超強力マイクロ派が、地上にいる範囲内の全てに襲い掛かる。

エネルギーカーテン内部は次々と破裂する。
そして…カーテンはさらに広がり地下のサイクロプスの電圧が更にあがり…
構造限界を越え、耐え切れなくなり…

その瞬間、サイクロプスは…大爆発を引き起こす。

横浜白陵基地異世界軍司令室

「先程のサイクロプスで、約１２万消失！！」

「現在突撃級約７３万撃破」

あれだけの砲弾幕の中でも意外と突撃級は残り、敦煌を目指して殺到している。

突撃級は大型種、他の小型種とは違い直撃弾または至近弾でない限り、
分厚い甲羅に身を護られ、その命を散らす事はすくないからだ。
意外と守備力は高い…
かつ、今回の大規模侵攻では数も多くなっていた…

そして、流石に８０ｋｍに広がると弾も疎らにはなる…

敦煌防衛拠点まで残り７００ｋｍ…

～医務室～

「……サードインパクトが起こっちゃったのね…」

「ああ、サルベージされたマヤちゃんの話だから間違いない」

「あら、マヤもきてるの？」

「ああ」

「エヴァによるエヴァでのサードインパクト…」

「結局はゼーレのシナリオ通りになってはしまった…
ネルフの力がたからなかった…
いや、碇司令がいたから負けた…」

「そうよ」

「……シンジ君は？」

「ここの責任者カオルの話だと「あの使徒おんなじ顔のね」
ああ、あの世界で個体として生存できたそうだ。アスカと一緒に」

「そう…」

「で、ここからが重要だ……エヴァンゲリオンがこの世界でも作られてる」

「うそっ！！」「えっ！！」

「この世界でもおこるかもしれんぞ」

……

カオル報告

現在大規模侵攻中…急いで建造してます

大規模侵攻編　敦煌防衛拠点まで…１５００ｋｍ～（後書き）

ナギ少尉「今日ちょっと遅れたね」

作者「……まぁリアルの都合と遅筆だな…」

ナギ少尉「遅筆の原因は？」

作者「新ギレンの野望と…単純にいえば山場だから、
もうちょっと完成度あげたいかなぁ…なんだけど」

ナギ少尉「でも仕事の都合上で…
寝て起きたら執筆するヒマがない…ということ？」

作者「はい…サーセン」

ナギ少尉「ということですね」

作者「次回１０日投稿分ができるだけ仕上げたいけど…
微妙なかんじです」

ナギ少尉「さて、本編だけど…イオ攻略中と大規模侵攻の受けが、
今進行中ね…で現在７５０ｋｍ地点でサイクロプスによる駆除と…」

作者「その通り」

ナギ少尉「そういえばトマホークはどうなったの？」

作者「今急行中だね。
敦煌には、張り付いてなかっただけの事」

ナギ少尉「張り付いてたのが…」

作者「ビッグトレー砲艦隊とモンスター改の部隊だね」

ナギ少尉「で…７５０ｋｍでサイクロプス作動させて、更に遅滞させて…なのね？」

作者「そういう事さ…」

ナギ少尉「さて…次回は、大規模侵攻編　敦煌防衛拠点まで…７００ｋｍ～
ね。お楽しみにぃ」

第１７４話　大規模侵攻編　敦煌防衛拠点まで…７００ｋｍ～　投稿日２０１

～横浜白陵基地異世界軍司令室～

現在モニターには猫の目よりの、
敦煌防衛拠点に向かっている大規模侵攻群の映像がうつっていた…

その数約…

「総数でたか？」

「はい、大規模侵攻群その数１５，１２９，７１４…繰り返します
１５，１２９，７１４です」

「総数約１５００万か…」

「構成数は、
大砲級が１，５２５、
弾級８５５，９４５、
要塞級２８０，０９５、
重光線級２５１，００１、
光線級２８２，９２４、
突撃級１，９６３，２０３、
要撃級２，２６５，０３５、
戦車級６，０４０，１４２、
闘士級１，７０１，６５５、
兵士級１，３１９，１８９…以上です」

「意外に大砲級が少ないな…」

「速度が問題ですから…」

「ああ…」

「この内現在死滅確認が、
突撃級７４９，１２５がおもですが、
光線級５３２、
要撃級４７３２、
闘士級８５４３、
兵士級１０２５１、
になります」

約１５００万の群勢…
内７０万近くを７５０ｋｍ地点のサイクロプスまでで消滅できたが、
まだまだＢＥＴＡにとっては５％の消失なだけであった…

その長さ実に約３００ｋｍのＢＥＴＡ群の流れ…
間隔はあくものの、確実に敦煌、重慶へと迫っている…

現在、重慶とオリジナルハイヴ間の２５％あたりの地点をＢＥＴＡ群は侵攻している…

７５０ｋｍでのサイクロプスの混乱から持ち直した突撃級を先頭とするＢＥＴＡ群は、
侵攻を続けると５００ｋｍ地点からの砲撃をうけることとなった。

突撃級が、再び戦列を整えたビッグトレー砲艦型の、
射程圏内に入りこみ射撃が始まる…

そしてその頃の異世界軍エリア医務室となりの談話室…

「建造スピードが違う？」

「ああ、リッチャン、エヴァンゲリオンが建造するとして、
どの位で完成できる？」

「そうね…卵からだとして…最短３年かしら」

「…だが、このままだと後５日以内には完成するみたいだ」

「ちょ…それ本当の事なの？」

ミサトが加持に問い掛け、それに肯定する加持。

「５日以内…擬装の段階ね」

「……いやそれがなぁ…なんていえばいいか…」

「ちょっとなんなのよ！」
はっきりしない加持にくってかかるミサト。

「…見にいって、現物みればわかるよ…擬装段階でもないし」

「擬装段階でもない？」「見れるの…」

「まぁな…じゃあいこうか」

「ありえないわねぇ」「機密高いのを…なんなのよこの組織…」

加持が二人を連れて部屋を出ようとすると…

「あっ、軽く検査させて下さいね～」
と看護兵に呼びとめられ…しばし時間をくうはめになる。

……

突撃級が４０ｋｍ圏内に到達すると…つまり敦煌防衛拠点から５４０ｋｍに到達すると、砲火がやみ、
拠点からの増援パンジャンドラムの特攻が始まる流れは一緒だった。
その間にビッグトレーは展開し最大戦速で次の砲撃地点へと目指す。

パンジャンドラムの特攻がやみ…
再び５００ｋｍ地点のサイクロプスの有効範囲に残存突撃級が入り込み、
また電子レンジによりその身体を破裂させる流れであった。

戦艦建造ドック内特設エリアへと続く…

「あれが紹介映像に出てたＭＳとかいう戦闘兵器なのね…」

ミサトが呟いた視線の先には、
Ｂ５５ハンガーエリアにおさまっている撃震がうつっていた。

「分厚い装甲に護られた陸上兵器のはずよね？
なにか説明と違うような気がするけど…」

「で、あれが戦術機かしら？」

ミサトの視線の先には……Ｚガンダムが駐機されてた。

「そうね…確かに空から発展した兵器のようね…」

「あ～葛城、リッチャン…逆だぞ…あのＭＳだけが特別なんだ…」

「あらそうなの？」

「無骨なデザインなのは？」

「あれはＦ－４、撃震だな…確か…まぁ装甲が厚いが、
未改造のままだと生きて食われるらしいから、
その次の世代から機動力をもとめて発展していったらしいぞ」

「生きて食われるねぇ…」「せめて食われる前に自決したいわね」

「でっと…このエリアだ…」
と加持が階段をのぼってくのをついていく二人…

「へぇ…あれ宇宙空間をいく戦艦でしょ？」

「映像にあった型のようね」

「ここで建造してるんだ…どうやってあげるのかしら？」

「確かに興味あるわね。あの質量あげるの膨大なエネルギー必要ですし」

「見えたな…」

階段をのぼりきると、眼下にみえるのは…
ＬＣＬの底に建造中のエヴァとみえるパーツが沈んでいた。

四肢がみえ、胴体の半分もみえる。頭部はみえてない。

「なっっ！なんなのよ～」「へぇなるほどね」

「ちょっとリツコ！これがエヴァの建造方法なの！？」

拘束具がなく、肉体があらわになっていた。

「まさか違うわよ…エヴァは卵からかえして大きく育てるの…
これはエヴァの建造方法ではないわ…
けど半年で一からつくるにはこれしかないわね…
あと五日ではなく…一ヶ月かかるでしょ？」

「リッチャン…半年もたってないよ…作られてから約1週間程だよ」

「はぁぁぁ？一週間ふっざけてんじゃないわよぉ！「ちょっ」加持
！！ＬＣＬに沈められたい？」

「リツコおちついて」「リッ…グゥ」

加持の襟元をつかみあげプールに全体重をかけで落とそうとしている…

「一週間でこんな生体構造作れるとおもってんのっ！？」

ザパァァ

空気よまずに、ＬＣＬのプールのそこからカオルが顔をだしてきた。

「ふ～～」
顔を振って髪についたＬＣＬの雫をとばす。
「ん？…潜りたいんですか？…と葛城ミサトさんに赤木リツコさん…始めまして」

「は…はじめまして」「ネルフＥ計画責任者、赤木リツコと申します。始めまして」

醜態の切替が早い人であった…

「カオル君自身がこれを作りあげてるそうだよ」
助かった表情の加持。

「渚カオルさん、お聞きしますが…エヴァンゲリオンを作り始めて一週間で、
この様な形になったと聞いてますが」

「モドキですねモドキ…流石にそのままは作ると危険ですから、改良はしてます。
第一人の魂を必要としませんし…
あと一週間目あたりですね…
まぁエヴァ組ならわかりやすく説明するなら、
自分は、使徒の力をもってるので、いや使徒そのものかもしれませんが、
製造方法が特殊なんですよ」

「特殊？」

「このように……同化で材質を変化させたり情報を取得させたり…」
手近な資材を生物、へと変化させた。

「第１３使徒ね」

「ええ、彼の能力です」

「エヴァンゲリオンでサードインパクトを起こすつもりなの？」

「自分はこの世界の生存を望んでますし、赤子もできるんで…」

「使徒と人間の？…いえ、使徒とは断定できないですよね。
失礼をお詫びしますわ」

「いえ、人外と自覚してますから…」

「エヴァは単純に戦力として？」

「まぁそうですね…守護の力として…とおもってます」

「……わかりました。わたしにもご協力させて下さい」

「ありがとうございます」

「ちょっとリツコ」

「ミサト、命助けられたんでしょ？あきらめて協力してあげなさいよ」

「……まぁわかったわ…加持君もね」

「はいはい」

「ありがとうございます」

その頃…再び２５０ｋｍ近辺に陣取った異世界からの砲撃が始まる…口火を開くのはモンスター改だが…更にトマホークミサイルが、僅かに迎撃されながらも撃ち込まれてくる。

現在の突撃級最前列と後方の光線級との隔たりは、その数によりかなり大きい…

通常なら煙幕弾を撃ち込んでからでないと到底届かないが、

迎撃レーザーの数がすくなく４０％あたりが到達する。

モンスター改に変わりビッグトレーの砲撃が始まる。

モンスター改…次は、敦煌防衛拠点の後方１３０ｋｍからの砲撃の為、

トレインギャロップに乗りはじめた。

そして…ビッグトレー砲艦型も移動し始め…

パンジャンドラムの特攻が終わり…

カシュガル一敦煌道程に仕掛けられた最後の3番目のサイクロプスが発動する。

いよいよ大規模侵攻が3発目のサイクロプスを抜け、敦煌防衛拠点の２００ｋｍへと進む…

敦煌防衛拠点にはある大砲と呼ばれる兵器が備わっていた…

２００ｃｍ臼砲型レールガン…

鋼鉄の咆哮の世界より入手した１６０ｃｍ臼砲にＯＴＭ技術を使い、発展開発したこの馬鹿でかい大砲…

その砲身が天高く仰角をとっていた。

ほぼ垂直と思える角度で砲身がＢＥＴＡ群を狙っていた。

「まもなくＢＥＴＡ群、有効射程圏内です」

「超巨大口径砲は男の浪漫…２００ｃｍ砲、トールハンマー…発射！」

ドオオン

盛大な空気をわる音をだしてその砲弾が打ち出される。

レールガンの要領で打ち出された弾体…
いやコーティングされた岩といった方がいいだろう。

音速は最初の時点て突破しており…天高く舞い上がる…

その岩は重力にひかれ…再び音速を越えて熱せられ…火の弾となり、狙ったＢＥＴＡ群を目指して地上へとちかずく。

光線級は迷っていた…学習していたものと違う…火の弾が降ってきたのだ。

その火の弾の進路は仲間に向けられていた…
迷っいながらも暫定脅威度をあげ、レーザーをあげる。

一匹の光線級がレーザーをあげると、続いてあげるが…

既に２００ｃｍ質量弾は、高度３０００を切っていて、
その衝撃とともに突撃級のど真ん中に落着し…

位置エネルギーを存分に吸収した火の弾は爆発し、衝撃破が大気を
震わし大型の火球がうまれる…

下手な火力兵器より威力が生まれた質量兵器…
本来であったら空中にて自身が生み出す衝撃に耐え切れず、
空中爆発するはずの大きさが生み出した衝撃破…

その衝撃破は爆心地点近辺では、
突撃級が音の壁と激突し、甲羅も粉砕され跡形もなくなる。

打ち出した２００ｋｍ手前の発射元においてもその音は聞こえる…

落着地点では…
半径１ｋｍのクレーターができ、

吹き飛ばされたり等で半径６ｋｍの空間が、
ぽっかりと突撃級の残存集団の中にあいた。

「約８万は逝ったか？」

「ただ今計測中です…ただ、突撃級はほぼ残存が壊滅状態だと思われます」

「第二射、目標地点中衛先頭…」
計測され角度微調整がはいるようだ…
砲身の温度が冷却装置により下がり…
「第二射、射出よし！！」

「はなてぇぇぇ！！」
再び衝撃波とともに打ち出される２００ｃｍ質量弾…
その間にも重傷をおい、行動に支障の出ている突撃級にミサイルが襲い掛かる。

当初ミサイルに迎撃レーザーが打ち出されていたが、
２００ｃｍ質量弾が火の弾となると、光線級、重光線が、
全力でもって迎撃火線をあげる。

仲間を狙うミサイルよりも脅威度をたかく設定し、
全力でもって迎撃レーザーを放つ。

そのかいあって…地上６０００ｍにて、質量弾は亀裂が入り空中爆発をおこす。

が、粉砕した細かい破片が、位置エネルギーを失うことなくＢＥＴＡ群へと襲い掛かる。
その破片は要撃級の全腕部の甲羅を貫き…光線級をもつらぬく…

「迎撃されました！」

「煙幕弾頭要請だせ、第三射射出用意！」

敦煌防衛拠点の後方１５０ｋｍ地点にたどりついてたビッグトレーミサイル艦より、
煙幕弾頭搭載のトマホーク２が射出された。

トマホーク２は巡航ミサイルの利点、低空ステルス性をすて、
超音速にて迎撃される為のミサイルである。

加速して音速を突破マッハ５を越えたところで次々と撃破され、
上空を煙幕で染めてく…
しまいには着弾し、地上で煙幕をだし、
要撃級などにミサイル本体を倒されてく…
ちょうど染まった煙幕の中に火の弾が落着し…

衝撃波が煙幕を押し出して２０ｋｍ程の空間があき、
瞬時にまわりから空気がその空間に雪崩こんできた。

２００ｃｍ砲による質量兵器の攻撃は、１１０ｋｍ到達まで続き、
計２０射続いた。

その後ビッグトレー砲艦型の射撃が引き継ぎ、２００ｃｍ砲は解体作業にはいる。

４０分後…砲身、基部それぞれに解体された２００ｃｍ砲は後方へと運ばれていった…

ビッグトレー砲艦型に対するは今だ、１１５０万近くの力を保つ大規模侵攻群…

それを抜けられると…敦煌防衛拠点であった…

……

カオル報告

質量弾ＬＯＶＥ

第１７４話　大規模侵攻編　敦煌防衛拠点まで…７００ｋｍ～　投稿日２０１

ナギ少尉「大口径砲は男の浪漫ね～」

作者「だろだろ」

ナギ少尉「ところで装填ってどうやってるの？」

作者「あれ？敦煌防衛拠点にそなえつけられた、
鋼鉄の咆哮の無限弾薬装填装置で供給してるから、
装填作業いらないんだよ」

ナギ少尉「あ、そうね…」

作者「まぁ２００ｃｍ臼型レールガンは、ビッグトレーをつかっても撃てないから…
次の活躍場所はどこだろ？」

ナギ少尉「案外第二次大規模侵攻？」

作者「ないない…さて次回が…」

ナギ少尉「大規模侵攻編、敦煌防衛拠点まであと５０ｋｍ～…
いよいよ敦煌防衛拠点が落ちちゃいます。お楽しみにぃ」

第１７５話　大規模侵攻編　敦煌防衛拠点まで…５０ｋｍ～　投稿日２０１１

「残存１１４２万、突撃級残存０」

主に２００ｃｍの２０射がきき、更に迎撃されないミサイルが突き刺さり、
突撃級は姿をけした。

しかし、ＢＥＴＡ群の中衛の勢いは留まらず、
砲艦型から４０ｋｍ圏内に届く距離に来たため、
再び後方へと移動するビッグトレー砲艦型…

その砲火の後を引き継ぐのは…

［いっけぇ～］

［僕らの考えた］

［ローリングボム！！］

トレインギャロップより一斉に吐き出された球体…
ＢＥＴＡ群へ向け一斉に転がりはじめていった。

直径１８ｍ、戦術機と同等の大きさの球体、
その球体からスパイクがでている…

ゴロゴロゴロゴロ
とにかくスピードが落ちる事なく転がっていく。
いやむしろあがってく…
内部に推進ギアがついてて、猫の目の誘導で進む…
より効率よく串刺しにする為に…

ローリングボムはそのスピード、進路を調整し、
こちらに向かってくるＢＥＴＡ群へと向かう…
突撃級がいないので遮るのがいない。

スパイクが…
めきょ
兵士級を押し潰した。
闘士級を押し潰した。

向かってくるローリングボムを災害脅威と認定、
その行動を阻害しようと各ＢＥＴＡは動くが、小型種は任が重そうだ。

戦車級が向かうが…１８ｍ…スパイクにたかれたが、かじりついてたら…
めきょ

一回転して串刺しになった。

そりゃそうだろう…火薬量含め自重１００ｔはある。下敷きになれば串刺しに…

仲間の死骸はかじれないため空いている部分にかじりつくが…串刺しになり、その歩みは止められない…

要撃級がとめようと踏ん張った…次の瞬間…

ローリングボムは大爆発を起こし、そのスパイクやら構成物を周囲にぶちかまし、串刺しにする。

パンジャンドラム同様特効兵器であった。

いやより凶悪だろう。巻き込む量が違う…

ローリングボムは５００球、１球につき、５０から８０辺りのＢＥＴＡをもってゆく…

ＢＥＴＡ群は、進撃の合間に敦煌ハイヴ時代の門に取り付いたが、充填により閉鎖されていた為、主縦穴を目指していた。

確かに主縦穴は空いていた。目指す反応炉はその奥にある…

が、主縦穴のあった箇所には特殊コンクリート製のトーチカができており、

針ねずみのようなＣＩＷＳから、絶え間無く３０ｍｍ弾が打ち出さ

れる。

段階構造をとられた構造により、その砲門数は正対する数が多くなっていた。

穴に突入するにはこの砲火を耐え、無力化しなければならなかった。

光線級が仲間の影から照射し一門、また一門と無力化してく…

しかし他の砲門が狙いをつけ光線級を撃ち抜き、

その間に大破した機銃座は外れると、台座が下がり新たな機銃座をだしてくる。

予備機銃は3セット程各銃座にあった。

直接叩こうにも、つるつるな油ののったコンクリート壁に、

取っ掛かれずに登れない…

接近しているＢＥＴＡに対して１５０ｋｍ離れた距離からモンスター改の射撃が続いていた。

ＢＥＴＡ群は被害無視で、コンクリートトーチカの地下行きのメインゲートに入り込み、

中へとすすんでいく。

突入から1時間後、最後の予備機銃が光線級に撃ち抜かれ沈黙した。

モンスター改の砲撃は引き続き続いている……

『敵ＢＥＴＡ群、メインゲートより侵入、
総員戦闘態勢整えよ！
繰り返す敵ＢＥＴＡ群、メインゲートより侵入、総員戦闘態勢整えよ！』

メインゲートを突破してきた個体が居たため、
拠点内部にアナウンスが流れる。

各防衛地点に配置ついていた烈火、ターミネーターが戦闘配置に備える。

『いい？せっかく助かった命なんだ…
こんなところで死ぬマヌケな馬鹿は、
地獄の底まで追いかけてくよ？』

『隊長がいうと冗談じゃ済まされませんね～』やんややんや

『私たちは何？』

『泣く子も黙る桜井中隊！』

『烈火はなに？』

『我等のウォードレスであり、最強の盾であり剣』

『敵が目の前に』

『撲殺！撲殺！撲殺！』

『目の前にー』

『撲殺！撲殺！撲殺！』

『我等の戦果を示せ！』

『ウォゥ！』

『各員戦闘配備！！』

烈火各体が戦闘準備を整えた…

烈火が布陣している通路は幅４ｍ、高さ４ｍ、
烈火が通路を通せんぼしている形だ…

その通路の先には、メイン通路の中空ブリッジに繋がっていて、
そこを銃火に曝されながら要撃級や光線級、戦車級等が進軍している。

その通路からガトリングマシンガンを、要塞級も通れる通路にばらまいていると、

戦車級や兵士級等が襲い掛かろうときたので、
ハンマーパンチで吹き飛ばしたり、
脳髄を貫いてぶちかましたりした。

２、３匹が登ってきた時は余裕で対応できるが、それ以上登ってくると、
烈火は通路に引っ込むと…正対するのは、人用通路では１匹、２匹程度になる。

かじり付かれようと小型種２匹程度や戦車級程度、烈火の敵ではない。

落ち着いて頭を握り潰して無力化し、その死骸を放り投げる。
ハンマーパンチが唸り潰す。
潰しに潰してると…ＢＥＴＡの死骸で通路が塞がってしまった。

塞がると仲間の死骸を越える事もなく、
これ以上押し寄せてこなくなる為、

その間にガトリングの弾装を整える。
体液まみれの第ニ右腕でボタンおすと…
ぽっかり穴があき死骸が通路地下に落下する。
また嫌がらせの為に烈火は通路からガトリングばらまくべく前にすすんでいった。

メイン通路をすすむＢＥＴＡ群は次々と仲間の死骸をよけながら、
長い長い道程をいく…

横道のあった箇所は封鎖され戦車級が掘るべく取り付いているが、
セラミック製の充填素材の為中々進まない…
後ろからどんどん押してくるから、開いている通路にすすむ…

すると自動機銃が前方や天井から弾を吐き出してきて、
次々とＢＥＴＡの死骸が生まれる。

その災害元を無力化すべく突進し、死骸が生まれながらも無力化する…
のデスロードを２０ｋｍ近く続いている…
本来であれば５ｋｍ位で反応炉に到達するが、
横道という横道が充填封鎖され、その道程しか移動できない…

ショートカットが人用通路だけ、となっていた。

ある程度戦ったウォードレス兵は、
人用通路封鎖の任務も言い渡されてた。

弾がきれるか、時間経過で通路の隔壁扉を下ろす。
降ろされた隔壁内部にベークライトが注入される。
これによりメイン通路からは入れなくなり、
ウォードレス兵は集合地点へと撤退してく…

カオルはチューリップを使い、
敦煌防衛拠点の地下深く…
反応炉手前の広間にて烈火を着込んで、
中型チューリップを管理していた。

人用小型通路は撤退がうまくいっており、
通路充填閉鎖が次々とすすみ、
人員が欠員なく撤退してきて、残り僅かとなっている。

撤退してきた人員は多目的輸送挺にのり、小型チューリップを潜ってく…

要撃級が見えてきた。こちらに向かって…次々とメイン通路に鎮座した中型チューリップを潜ってく…

チューリップの転移先は…

地球衛星軌道上に中型チューリップが、
その開口部を地球に向けただよっていた。

開口部から次々と凍りついたＢＥＴＡが出てきて、
その凍りの塊はほおりだされた勢いのまま、地球へとすすむ。

やがて重力に捕われた塊は、その身を地球の大気圏へと突入する。
摩擦と圧縮熱により凍りが溶けたＢＥＴＡはその身も赤くそまり…
やがて熱に耐え切れなくなりその身を分解させる…

生身ではＢＥＴＡは大気圏突入できなかった為、
チューリップ潜ったのは次々とその身を重力の井戸にやかれた。

カオルは、通路いっぱいに広がっている中型チューリップの、脇を
通りぬける小型種を、
次々と両手を変化させた光の槍で、串刺しにして殲滅していった。

やがて、
『ターミネーター、ウォードレス兵、ボン太君、全員撤退完了しました。
欠員０、充填封鎖１００％です』

「わかりました…こちらも撤収します。先にいって下さい」

『お気をつけて』

カオルは中型チューリップを虚数空間にしまい…
途端に襲い掛かってくるＢＥＴＡ群から避けるように、
後方へと下がる。

封鎖ドアが見えたのでハンマーパンチでうちぬき、
ドアを退かし通路内部へとはいった。

途中小型チューリップと多目的挺を虚数空間に回収し、ある区画へ
歩みをすすめる。

その区画は地下にある自爆装置サイクロプスの起爆を司る独立区画…

その手前のシェルタードア部分でウォードレスを着脱し、生体筋肉
も外しはじめた。

虚数空間へとしまい込むと…

カオルを追ってきた兵士級が追いついてきたので、光の槍でつらぬ
く…

そして、後方にあるシェルタードアに同化し、
戦場から離脱し通路内部に実態化した。

シェルタードアをガンガンたたき付ける音がするが、

２ｍの厚みがあるドアはそうそう破けるものではない…

通路のおくにいき、部屋内部に入いり、プラスチックケースを叩き
わり赤いボタンを押す…

『自爆シークエンス開始します。
基地要員は２０分以内に待避して下さい』

この自爆システムは、地下のサイクロプス始動の為の制御室であり、
一旦始動してしまうと地下深く潜り、
サイクロプス脇の制御室で停止しなくてはならない…

そこまでの通路も充填封鎖ずみである…

カオルは更に奥に進むと…カプセルがあり、その座席に座る。

青いボタンを押すとカプセルがしまり…
『脱出用リニアカタパルト射出します』
座席がゲル化しＧ吸収体型になる…

『カウント５、４、３、２、１』

ハイヴ射出体放出穴あとに作られた脱出装置。
直径１．５ｍの周囲は封鎖用のコンクリートで固められてた。

その穴を急加速し天高く打ち出される。

向かう先は加速誘導用静止衛星カプセルキャッチャー…

脱出カプセルがカプセルキャッチャーの膜に包まれると、
Gが加わり加速する。

次なる衛星が臨時避難ステーションになる。

同時刻敦煌防衛拠点…

地下深く潜ったＢＥＴＡ群は反応炉に到達、
反応炉からだされるエネルギーをもらい腹を満たしていた。

そこでＢＥＴＡを洗脳する者がいる重大情報をうけとり、
通信が遮断されあ号に届けなければならない個体がでてきた。
彼は地上を目指し逆流していた迂回に迂回させられた４０ｋｍの道程を…

『警告、サイクロプス始動まで残り１分』

災害の音がする…仲間がその音の方向へたかってた…

『サイクロプス始動まで１０、９、８、７、６、５、４、３、２、１、サイクロプス始動』

なにか身体が熱くなって…次の瞬間そのＢＥＴＡは意識がなくなってた。

通路という通路でＢＥＴＡが次々と爆ぜてく…
反応炉もエネルギー供給できずに爆ぜて通路は真っ暗になっていた。
地上でも赤いカーテンは広がり、
敦煌の反応炉を楽しみにしていたＢＥＴＡが、次々と爆ぜる。

まだ到着してない群の列にいたＢＥＴＡは赤いカーテンをかんじ危険と判断、
停止転回後進と提案する。

列は転回後進するが巻き込まれてく…
その赤いカーテンが途中でとまり…

地下から振動がおこり…土砂を巻き上げ、
盛大な大規模爆発がおきる。

かなりのＢＥＴＡを巻き込み…
この日、異世界軍から敦煌防衛拠点の名称が消えた。

……

カオル報告

敦煌防衛拠点サイクロプス始動により自爆です

第１７５話　大規模侵攻編　敦煌防衛拠点まで…５０ｋｍ～　投稿日２０１１０

ナギ少尉「敦煌防衛拠点消滅しましたよね～」

作者「シナリオ通りだ…問題ない」

ナギ少尉「……なに碇司令やってるんですか」

作者「やりたかっただけさ」

ナギ少尉「ところで母艦級でてこないですね～」

作者「撤退スピードに追いついてないからね～。ほら今までは絶対防衛戦じゃない？
だから地下進行が嫌なタイミングで出てきちゃうんだよ」

ナギ少尉「そうですね～」

作者「基本、突撃級の速度を遅滞させての撤退戦だったから、地下進行も間に合わない…ってかんじさ…
そりゃ１００ｋｍの速度ではほれんし、精々４０から５０ｋｍ位でしょ…

詳しいスピードもメカでてなかったしさ…
まぁ一応嫌なタイミングっうから中衛より若干遅めで考えてます」

ナギ少尉「となると長い戦域が…中々出す事なく…」

作者「今回の自爆で巻き込まれた可能性大と…」

ナギ少尉「…なる程ね～…あと一つ、これで終わりではないの？」

作者「１０％でも１５０万、２０％でも３００万、３０％でも４５０万の７桁台の大規模侵攻中、
１５００万時に列は３００ｋｍに伸びていたから、全部は消滅してないよ」

ナギ少尉「わかりました。
さて次回は…大規模侵攻編、敦煌自爆後残存ＢＥＴＡ数は？？…お楽しみにぃ」

作者（カオル重慶護りきれるかな？）

第１７６話　大規模侵攻編　敦煌爆発後　投稿日２０１１０９１４（前書き）

～休載のお知らせ～

明日９月１５日から毎年恒例の東京ゲームショウの為、
しばらく執筆投稿ができません。

ゲームショウ開催期間は１８日ですが、
一応一週間ほど２２日まで、２３日から再投稿をします。

ただし早まるかもしれませんが…
開催期間中は絶対ないと思って下さい。

第１７６話　大規模侵攻編　敦煌爆発後　投稿日２０１１０９１４

２００２年１月１１日午後１１時２５分
横浜基地異世界軍エリア司令室

「おお…」

「敦煌が…」

「たまやー」

［サイクロプス最高］

敦煌のあった箇所には盛大なキノコ雲が舞い上がり…跡形もなくなっている。

それはそうだろう…フェイズ５ハイヴとして、
地下至るところに張り巡らされた横道、
それらも爆発の勢いに生じ仕込まれた火薬ごと吹っ飛んでしまったからだ…

その地下がまるごと吹っ飛び、盛大な土砂が空中に舞い上がる。

「ＢＥＴＡ群の残存でたか？」

「もう少々お待ち下さい…でました。ＢＥＴＡ大規模侵攻群約２７％４２１万まで消失です」

「かなりへりましたな」

敦煌防衛拠点にそなえつけられたＣＩＷＳが作動する前には、１１００万をまだ越えてた。

それがやっと４２０万、この敦煌防衛拠点の防衛戦及び自爆で７００万近くをもっていくことができたのだ。

「敵ＢＥＴＡ群に混乱がみられますが、引き続き砲撃を加えます」

食事にいこうとしていた反応炉がいきなり消失したのだ…

命令は敦煌にて食事後重慶へというのだったろう…

混乱している残存ＢＥＴＡ群にモンスター改が引き続き砲撃をくわえてた。

敦煌元ハイヴごとの自爆と引き換えに７００万のＢＥＴＡ…

自爆無しでももう少し頑張れたのでは？の考えもあるだろう。

…いや限界にちかかった。

まずＢＥＴＡホイホイに使っていた中型チューリップ自体のエネルギーが１／４まで低下、

またチューリップ脇からの小型級を、全部削除できずに何十匹か後逸していた。

敦煌再ハイヴ化はあの兵力だと時間の問題であり、避けれなかった…

ハイヴ化すると、また攻略に時間かかる…
再ハイヴ化だけは絶対に阻止すべき問題だった…

「カオル殿は……」

「まもなくステーション到着です」

「この後の設置サイクロプスは…」

「１２５０ｋｍ、１０００ｋｍ、７５０ｋｍ地点の3箇所です」

「なんとか重慶までに２００万台にもってけそうですな…」

「それでも絶対防衛戦には膨大な戦力が相対すると…
早く勇者ロボやエヴァが稼動しなければ…ですな」

「最終防衛地点が重慶基地…ここは譲れませんのう…」

重慶は地下にサイクロプスは仕掛けられてない、防衛ライン上の死守基地の一つであった…

Ｓｉｄｅ～あ号～

（敦煌……消滅……）

敦煌からの信号が途絶えた。

信号の最後は、地下より高エネルギー反応の警告が流れてた。

自身を溶かしつくす高エネルギー反応…あるだろう。

よって敦煌消滅と判断した。

（敦煌…跡地に…コア…精製）

あ号はハイヴの元となるコアの精製にかかった。

これを運ばせて孵化すればハイヴの反応炉が生まれる。

あとは自身の子達がうまくやってくれるだろう…

そう確信していた。

ｓｉｄｅ～あ号ｅｎｄ～

「敵ＢＥＴＡ群、再移動開始しました…進行方向重慶変わらず！！」

「……もう少し混乱してくれれば嬉しかったですのう…」

「ですな」

モンスター改が撤退設定エリアに踏み込まれたので、
ビックトレー砲艦型と変わり撤退準備をし始めた。

敦煌が消滅してから2時間後、
敦煌跡地に漂ってる感じだったＢＥＴＡ群は、
残存が纏まり再び移動し始めた。

混乱のままだったら３００万台にいったかもしれなかった…

ＢＥＴＡ群の移動速度は、全体的として、後衛の通常時速３０ｋｍ程で進む…
戦闘機動をおこなっても４０ｋｍに及ぶかどうかだ…

要塞級はそのかわり俊敏な触手をもち攻撃をする。
重光線級は、光線の威力をもつ…
大砲級は…弾級を打ち出す能力だろう…

大砲級が弾級を撃ちだし初め、ビックトレー砲艦型に帯同してた、ビックトレー対空ミサイル艦が迎撃し始めた頃…

［マスターお帰り～］

［お疲れ様～］

衛星軌道上のステーションからカオルがチューリップ経由で戻ってきた。

ある程度の進行は脱出カプセル内部で聞いていた。

「にしても敦煌一つと引き換えに７００万近くか…案外けずれなかったな…」

［けずれたほうでしょ］

［そもそも１５００万近くをどうにかするのが、想定外なんだから…きいてませんの話だよぉ］

［今までの史上最高なんだしぃ］

「…聞いてません。知りませんでしたじゃすまいよ…
ＢＥＴＡ群の侵攻は人の命にかかわる話だしさ…
幸いまだ重慶周辺も無人地帯だから良いものの…
まぁともかく早くエヴァ仕上げないと、重慶基地まで失うはめになるかもな…」

［エヴァってそんなにすごいの？」

「走れば音速越すし、護ればＡＴフィールドだしな」

［あ、拘束具着用したよ～」

「…なら、明日には起動でなんとか間に合いそうだな…」

そして、約２０時間後…

敦煌－重慶間にしかけられた１０００ｋｍ地点、２箇所目のサイクロプスが作動した頃…

重慶防衛に間に合わすべく、
エヴァの最終稼動テストが行われる。

「カオル君、話聞いたんだけど、

このエヴァってパイロット誰でもいいの？」

「ミサトさん？…ええ、汎用決戦兵器を目指してますから…名の通りにね…」

ミサトさんと赤木博士がきた。

「ならわたしに乗らさせてちょうだい」

「ミサト？」

「わたしが操縦するわ」

「わかりました。良いですよ」

「カオル君？」

まさか即答するとは思わなかったろう…

赤木博士が本気なの？なかんじで問い掛けてきた。

「ありがとう…」

「ミサト、正気？……ああ、本気なのね…」

「ええ、リツコ…これは譲れないわ」

「カオル君、絶対に事故はないのね？魂をすわれないのね？」

「理論上は…ですね。一応同化して監視はしてますが…」

「ミサト、やめるなら今のいちよ」

「いいえ、やらさせて頂戴」

「…ふぅ……カオル君、ミサトの事よろしくね」

「はい」

［じゃあプラグスーツおきがえですね～
ロッカールームにご案内します」

ミサトさんがロッカールームへと案内されてく…

ｓｉｄｅ～葛城ミサト～

（過去にできなかった事が、こんな形で実現するとはね…）

まだエヴァンゲリオンのパイロットが公式に選定されてない時期に、
（私自身の手で父の敵をとる）と意気込んでゲヒルン入所時期に、
パイロット適性検査を受けた事があった…

しかしものの見事に不適合、自身の手で敵をとれなくなったミサトは、
自身の指揮で使徒を倒す道を目指した…

けど…今は彼女の見事な裸体の上にプラグスーツが着用された。
ミサトの左手のスイッチを押す。

キスマークがついていたのは置いとこう。

プラグスーツがミサトの身体にフィットした。

準備が整いロッカーを閉め、最終除菌室へ歩みを進め、
エントリープラグのエントリー室へと歩みを進める。

エヴァに乗るには1番の問題が感染症の問題がある。

普段肺の奥深く、血管内に侵入しない空気中にある雑菌がＬＣＬに溶け込み、
パイロットに感染するからだ…

いくら医療カプセルで治せるといってもわざわざ入る原因を作る事もなかろう。

のため、エヴァのエントリー手続き通りの形を、専用ハンガーと共に整えてた。

まずはエアシャワーを潜って、脱衣室で衣服を脱ぐ。
併設されたシャワーブースで雑菌を落とし、向かい側の出口からエアシャワーを潜り、
１０ｃｍほどの消毒液の廊下を消毒液のシャワーを浴びながら進み、
その廊下の最後で純水シャワーを浴びる。
二重扉をぬけエアシャワーを浴びながら着衣室にはいると、
気圧を高めに設定してあり、外気の侵入を防いでた。

パスボックスの扉からビニールパックされたプラグスーツを受け取り、初めてここできれる。

その後、５メートルの通路で紫外線とＬＣＬを浴びさせて、エントリー室にはいる。

壁に設置されたパネルを操作すると、
床の格納庫にエントリープラグがあった。

という流れであった。

さてミサトは、エントリープラグ内に潜りこみ、シートに座りこむ。

（あら？）

緊張してて気がついてなかったがレバーがない。

「レバーがないけど？」

『直接制御になりますので、レバーはありませんよ』

エントリープラグに同化しているカオルが答えてくれた。

まわりから反響している感じだった…

「直接制御？」

『ええ、完全に手足となるんですよ』

「手足となる…」

『はい。そのかわり自分の身体ががら空きになるので、エントリープラグ内で固定する形にはなりますけどね』

「体験しないとわからないものね…いいわコンタクトして頂戴」

『シート固定…エントリープラグ挿入』

シート裏から身体固定用のバーが出てきて、身体を固定する。
一回転してエントリープラグはコネクターに挿入された。
『ＬＣＬ注入開始』
エントリープラグ内部にＬＣＬが注水されてく。
しってても…
（良い感じはしないわね）
血の味は慣れなきゃしょうがない…
『それではコンタクト入ります。準備はよろしいですね？』
うなづくミサト…
『コンタ……』
途端に視界がくらくなり…明るくなる…
『ミサトさん…如何ですか？』
「これが直接制御？」
エヴァの口からはっせられる。
『ああ、思考するだけで大丈夫ですよ』

（こう？）

『ええ……良好のようですね、足は固定されてますが、頭と手は軽く動かせると思います』

右手、左手を下から掬い上げるようにゆっくりと…

（エヴァの手ね…）

そしてゆっくり回りを見渡し…

（大きさが変わると視点がかなり違うのね…）

『では、稼動テストいきましょう。足のロックを外します』

コバッタ達が足の固定具を作動させ、外してくれた。

『ではこの指示通りに…』

ＨＭＤのように視界上にマーカーが浮かび上がる…

（これは？）

『網膜投射システムを流用してます』

（網膜投射か…なんでもありなのね）

戦艦ハッチからエレベーターが上昇し、地上に８０ｍに及ぶ巨人、
エヴァンゲリオンが出現す…

Ｓｉｄｅ～葛城ミサトｅｎｄ～

さて…その後エヴァの稼動テスト中になるが、

とうとう最後のサイクロプス、７５０ｋｍ地点のが作動する…

この後の地点には、サイクロプスは設置されてない…

残り…

「残存でました、約３００万！！」

重慶までいかに減らすか…３００万でこられたら間違いなく重慶は
落ちるであろう…

……

カオル報告

エヴァ最終稼動テスト中

第１７６話　大規模侵攻編　敦煌爆発後　投稿日２０１１０９１４（後書き）

ナギ少尉「ミサトさんが…エヴァンゲリオンのパイロットに？？」

作者「まぁなるかもね…」

ナギ少尉「スーパーロボットの曰くつきを堂々と破壊してるわね…」

作者「ああ、チルドレンでない限り操縦不可…って事だろ？」

ナギ少尉「そこのところに一言」

作者「何故チルドレンか？になるんだが、
まずはエヴァと同じ歳…つうのがあるな」

ナギ少尉「えっと２０１５年で１４才でしたよね？」

作者「そうそう…で、チルドレンは全員両親がいないか片親だけ…」

ナギ少尉「セカンドインパクト以後の混乱した時期でしょ？」

作者「２－Ａ組全員がチルドレン候補者だぞ」

ナギ少尉「あっ……」

作者「全員、母親なり、父親なりを喰われた為、チルドレン候補者になったんだよ」

ナギ少尉「……意図的に……」

作者「そうそう、で親の保護欲、ん～まぁ親に訴えてエヴァを操る、間接神経接続という操縦方法になったと…唯一の例外が使徒でもあるレイだね」

ナギ少尉「なるほど…」

作者「ま、そういった事です。まぁ今回のエヴァは作り物、紛い物なので、エヴァを動かす魂がないから、喰われない、また勝手に動かない…から直接操縦って事です。擬体のように」

ナギ少尉「…さて…あとはサイクロプスがしかけられてない状態で、残り３００万だけど…勝てるの？」

作者「さぁ？…まぁ後２回程で重慶に到着しますので…お楽しみに」

ナギ少尉「次回、大規模侵攻編、重慶まで７００ｋｍ～、お楽しみにぃ」

第１７７話　大規模侵攻編　重慶基地手前７００ｋｍ～（前書き）

台風直撃しそうですね…

お待たせしました。再開します

第１７７話　大規模侵攻編　重慶基地手前７００ｋｍ～

残り３００万、
いかにサイクロプス頼らず減らすかが、ここからの戦いになる。
残る重慶まで…あと７００ｋｍ…

繰り返される、砲艦型及びモンスター改の砲撃が交互にくりかえされ
続々と敵ＢＥＴＡ群の数は減っていくが、このままだと削減スピー
ドが、重慶基地到達時点でも、
１００万をうわまわっている予想がたてられていた。

（なんてものを、このエヴァンゲリオンの世界の人は作ったのよ…）

報告香月副司令は新兵器エヴァンゲリオンに関しての報告書を手に
持っていた。

彼女はいかに異世界軍の技術のフィードバックできるか…の、
研究も着手しはじめた。

何しろわからないでは研究者的に気持ち悪い…

高さ８０ｍ…
（ふざけんじゃないわよ…重力制御かなにかやってるの？）

エヴァに関しては正解です…、

基本その位の高さになると、
その自重を支える力及び、土台が必要となる。

ＭＳや戦術機が８０ｍサイズになって、自重が４倍ってわけですまないし、
特にその自重を支える下半身が重要となってくる。

またその自重を支える大地…
１０００ｔが一気に二カ所にかかるわけである。

１００ｔ未満クラスのＭＳで、道路埋設の地下施設をぶち抜くだの、
ギャーギャー騒いでいるのに…

ましてや…その爆発的な力は…

（走れば音速突破の衝撃波で建物を薙ぎ倒す…
ふざけんじゃないわよ…どんだけの脚力よ）

今カーペンターズが復旧作業に従事してるが、
衝撃波で市街地演習場が半壊してしまった。

ソニックブームは音速突破時、ちょうどマッハ１越えた時に起こる衝撃波、
それを脚力だけの力で起こす。
桁外れのパワーを内臓している証拠でもある。

で…だ先ほどの自重１０００ｔのパワーで、脚力が音速こえる力で大地に踏み込むと…

瞬間加重がどえらいものになる…

を軽減してるのが重力制御であった。またＡＴフィールド事も報告書にはあがってきてた…

（唯一の救いってのが、カオル付き添いでないと国家予算超える話…だけね…
勝てる要素がみつかりやしないわ…）

「はぁ…はぁ…」

５時間に及ぶ連続稼動後ハンガーに戻ってきたエヴァンゲリオン。

エントリープラグ内から、動けなくなっているミサトをコバッタ達が助けだし、
ベンチに寝かしつけた。

直接制御の反動で、自分の肉体の神経同調がまだ戻らないのだ…
麻痺していると同様といえよう…

数分なら肉体がまだ動いてる感触を覚えているから、問題ない…筈…が、長時間にわたり動いていない状態により、
精神が元の肉体の動かし方を忘れてしまったのだ。

寝ている時にも人間の筋肉は常日頃動いている。夢見の中でも同様だ。

だが、精神もその肉体をはなれた為に自動的に動く、不随意筋肉以外がうまくはたらかないのだった。

「ミサトさん、まだお加減わるいようですね？」

「こ……な…は…うきい…な…わよ」

「こんな反動きいてないわよ？ですか？…確かにここまでとは…思ってなかったですね…
時間が経てば治りますが、アルミサエル」

精神に潜りこみ離れている箇所を繋げなおす。

「どうっすか？」

「…えびちゅ飲みたいわね」

「一声がそれですか…」

「おかずなのよ♪」

「…まぁ、あとで提供しますよ。
さて、これで初号機はミサトさん専用機になりましたね」

「私専用？」

「はい、パーソナルデーター等がコアに書き込まれるので…」

「そういえば何故間接制御じゃないの？」

「あのエヴァは魂やＡＩがないから、間接制御では無理なんですよ…
魂がある元のままなら反対に取り込まれる危険があるので…
のかわりにパイロットが、
エヴァ自身になり、その肉体を使う…という事になります」

「けど痛みとかあんまり感じなかったわね？」

「その部分は２０％に抑えてます。また、肉体へのフィードバック
は極力カットしてますから、
例え左腕がもがれたとしても、
同様な事がミサトさん自身の身体にはおきませんからご安心を」

「あれはね…正直どうにかならないの？…
ってちょっちおもってたけどね～
けどシンクロ率がそのまま操縦につながったし…
あと、正直慣れるまで動かすの疲れるわね…」

「厳密には人間の身体比分と違いますしね…」

さすがに人間の身体をそのままでっかくした…というわけではない。
というかその状態だと足が潰れる。
なので足の筋肉などのも大分違う…
その人間と違う箇所は慣れてもらうしかない。

「さて、ミサトさん…明日にでも出撃、ＢＥＴＡを迎えうちますが、
できそうですか？
できなそうなら自分が操りますが…」

「いきなり戦場にだされた民間人だったシンジ君にできて、
軍人の私にできないっていうのもね…いくわ」

「わかりました。明日重慶基地周辺区域にて、防衛戦となります。
今から１２時間後、空輸となりますので休んでいて下さい」

ミサトさんはＬＣＬを流すべくシャワールームへと向かう。

現在、ＢＥＴＡ群の進行速度が後衛中心になってきたため、時速３０ｋｍあたり、つまり２０時間は余裕がある…

その間にある出来事が…

「究極新型生物兵器？」

［帝国軍技術開発局がだしてきたんだけど…
実証実験に付き合ってくれってきたよ～
対ＢＥＴＡへの究極兵器だって～」

（ふむ…ちっと時間あるしな…）

「わかった…生物兵器か…確か実験区画があったよな？ＮＢＣ用の」

［うん」

３時間後…トラックのコンテナがＮＢＣ兵器実験区画に搬入された。

「それでは、我が新しい対ＢＥＴＡ兵器、Ｇ兵器のお披露目です！！」

（G兵器？）

コンテナのロックボルトが爆薬により外された。
前面の一角が重力に引かれて地面に落ちる。
その中から現れたのが大量の黒いゴキブリだった。

「ゴキブリ…」

「はい！！対ＢＥＴＡ用に新たに開発された生物兵器、通称、Ｇ兵器です」

コンテナから大量に…数は一万はくだらないだろう…
はい出てくる。

ゴキブリは一斉にＢＥＴＡに接近すると、足元からたかりはじめ、
数にものをいわせＢＥＴＡの全身をおおい始めた。

兵士級は抵抗してた。闘士級も抵抗した。戦車級も抵抗した。

しかし小型種は人間サイズにならともかく、
ゴキブリのような小さいサイズに対抗する手段がなかった。

光線級はレーザーをだし焼いたがすぐさまたかられた。

要撃級はその両腕を使い抵抗してたが、うまく機能せずにたかられた。

突撃級は抵抗できずにたかられた。

要塞級は触手ではらっていたもののたかられた。

「たかるだけなの？」

「本領はここからです」

身体にまといついたゴキブリは、その身を肉体の中に入り込んだ。

「うわぁ…」

ＢＥＴＡの肉体から体液が出るが構わずにその肉を食べどんどん中へと突き進む。

やがて兵士級や闘士級は耐え切れず横に倒れてしまった。

カオルは思わず自分の肉体に入り込む姿を想像してしまった。

戦車級も暴れてたが、やがて勢いをなくし始める。
光線級も横たわった。

倒れ絶命した兵士級はその肉片がＧ兵器により、最後の一欠けらが喰われてしまう…

突撃級は甲羅と肉体の間がどんどん喰われて、
甲羅が重力に支えきれずにずり落ちはじめた。

要塞級はさすがにまだ動きは鈍ってはない。

［マスターあれ］

「ん？……分裂？」

「くって栄養が行き渡った為、個体数が増加します。
じきに要塞級も喰われますよ」

その発言通り、分裂増殖したG兵器は、
増えた個体数分だけ要塞級にたかり始める。

やがて、最後まで抵抗してた要塞級が、足をくわれ、体重をささえきる事ができずに、
その身を横たえてしまった。

それにご馳走とばかりたかるG兵器…

「確かに、究極の生物兵器ですね…」

「でしょでしょ？どうです？我が軍の兵器は」

「いいですね…ではコンテナに収納して」

「あ、できません」

「は？」

「コンテナ収納することができません。
あれはコンテナ内部で培養してたので…」

「えっと…展開したGは？」

「BETAを食えば、また分裂し増えますよ」

「いや……人間も……」

「迂闊に近づくとくわれますね」

「……破棄します、焼却準備！！」

「あ、焼却しようとしても」

「焼却開始！！」

実験室内部が８００度の高温の炎に包まれる。

生物兵器や、ウイルス系統等の焼却処分手続きで室内が１分間炎が吹き荒れた。

『焼却終了』

無慈悲な電子音とともに炎が消える……が…

「Ｇ兵器は高温にびくともしません」

動きまくって、要塞級の栄養で分裂し始めていた…

「あ……まじかよ…あの高温たえきる生物って……なら冷却処分！！」

ウイルス等冷却処分で氷点下マイナス２００度に達する、

冷却ガスが室内に吹き付けられる。

「あ、閣下、冷却もたえきりますので…」

「は…？」

『冷却ガス散布終了』

言葉通り電子音がながれたあとも室内ではＧ兵器が、うごめいてい

た。

「ちょっ…なんてもの作るんですか…」

「いかがです？閣下」

「真空ももちろんたえき…」

「宇宙活動も考慮されてます」

「どう殺すんですか？あれを」

「物理的にしかありませんね」

「……」

監視カメラの視点を動かすと…確かにレーザーに焼かれて死んだGや、

兵士級の足に潰されたのもいる。

「物理的か……ならしょうがない…ベークライト注入」

実験施設にベークライトが注入され、次第にかたまっていく…

セラミック状に固まっり、G兵器の動きがなくなる。

流石にこの集団の中に物理的に殺す事のできる兵器を投入するのに、開口する事になる…

つまり一匹が逃げると…大災害が予想される為…

「破棄するはめになるなんて…そもそもどうするつもりだったんですか？
ＢＥＴＡ駆逐した後…」

「ＢＥＴＡを駆逐した後餓死させるつもりです」

「餓死するのに……」

「約１月程度です」

「……人のいる地球じゃ使えませんね…資料だけ頂きます。
破棄される事をお勧めしますよ」

「そうですか…」

（けどなぁ…ん～）

ほぼ同時刻頃、木星攻略艦隊が帰還し、
その身をメンテナンス及び推進材補充しはじめた。

イオのオリジナルハイヴの反応炉はコロニーレーザーにより貫ぬき、
貫通したレーザーは大地をとかし、
火山造成を誘発し、マグマに埋まった…

現在木星の衛星は監視体制になり、艦隊は推進材補給の為に帰還してきた。

つぎなる惑星、土星の攻略までしばらく時間がある。

『野郎ども、パーティーに遅れるぞ！！』

ＶＦ－２２Ｆを先頭とするＶＦ－１７１編隊が地球へと飛び立っていった。

またほぼ同時刻頃…

「出来上がったか…」

「いいな隊長…俺なんかまだだぜ」

「隊長～、ついてくもんね～」

「ああ…人類を護るため、今一度力を貸してくれ、みんな！！」

翌日…

ようやく防衛戦に投入の目処がたった、
兵器の積み込みがされている。

ガルダにつまれてくのはエヴァ初号機…

重慶ー横浜間は中型チューリップによる移動が可能だが、
ＭＳノーマルサイズまでと限定されている。

そこで白羽の矢がたったのがペイロード約１万ｔの巨大輸送機、ガルダ。

他の輸送機では標準自重１０００ｔのエヴァは積めないか、またはぎりぎりの為、
エントリー室一式を改造して積みこみ、
ガルダはエヴァ専用運用艦となり、
その巨体で３機まで運用可能な船となった。

『横浜ベース、こちらガルダ０１、積み込み終了し離陸準備完了』

『横浜ベース了解、１０Ｗでの離陸許可します、滑走路クリア進入どうぞ』

『１０Ｗ進入了解』

ガルダの巨体が滑走路に進入してき…

その大出力を誇る熱ジェットエンジンにより、空中に舞い上がった。

……

カオル報告

いよいよ重慶基地にエヴァが投入されます

第１７７話　大規模侵攻編　重慶基地手前７００ｋｍ～（後書き）

作者「いよいよ…世界の運命がきまるね…」

ナギ少尉「１００万くらいなんか、ちゃっちゃと消しなさいよ」

作者「あの…さ１００万だよ？１００万…そうちゃっちゃと消えないさ…」

ナギ少尉「え～」

作者「前もかいたと思うが、今までの１０万単位でさえ異常なんだよ…
それを受け止める身にもなりなよ」

ナギ少尉「う～」

作者「まぁ、でもここまで引っ張ってきた大規模侵攻編も、
次回で重慶は決着…といいたいけど…」

ナギ少尉「執筆が間に合うか？ね」

作者「……とりあえず間に合わします」

ナギ少尉「じゃ、サブタイトルは…大規模侵攻編、重慶基地決戦決着へ…ね」

作者「まぁ…ね、間に合ったようだし…」

ナギ少尉「次回、お楽しみにぃぃ」

第１７８話　大規模侵攻編　重慶基地まであと２２０ｋｍ～

２００１年１月１４日午前９時
重慶基地より２２０ｋｍ地点…

朝日を浴びながら地平線より、盛大な砂煙をあげＢＥＴＡの異様な姿があらわれてきた。

時速約３０ｋｍながらも、その列は８０ｋｍの幅にも及ぶ…
列の長さは４０ｋｍ…
総数約２００万のＢＥＴＡ群は重慶を目指していた。

対するは異世界軍は布陣を整え待ち構えていたが、
長い戦闘行動のおかげで要整備等に陥る機体もでてきた。

パンジャンドラムは既に使いきり、モンスター改も要整備と殆どの機体が降格した。

無限弾薬装填装置の恩恵で降格を免れたビッグトレー砲艦型とは違った。

大日本帝国軍、大東亜連合軍、統一中華連合も援軍として駆け付けてきた。

特に６１式戦車改はありがたい…
共通規格の砲弾ならたんまりと山積みとなっている。
後詰めの形で戦線を整えてもらう事としてもらった。

「繰り返す、我々のターゲットは光線級、重光線級、大砲級だ！それ以外は第二以降にまかせろ」

中継基地に補給拠点をおいたバルキリー編隊は、
マイクロミサイルによる光線級、重光線級、大砲級への打撃任務へと着いていた。

『隊長！！』

「野郎ども、見えたぞ！女神の髪の毛の中に飛び込め！
各機、レーダーで間隔確認をおこたるなよ」

煙幕の中に突入したＶＦ－１７１編隊とゴースト編隊、
煙幕により光線級のレーザーが届かず、２５０ｋｍの道程を護られた。

厚く展開された煙幕、その中を突き進むＶＦ－１７１及びゴースト、
ものの１０分程で、

「各機、宅配の時間だ、闇の中からだ、配達先ミスるなよ…さぁパーティーだ！！」

その声とともにＶＦ－１７１編隊及び追従ゴースト編隊より、
大量のマイクロミサイルが一斉に打ち出された。

その数２５万発…
ゴースト約２０００機から大量にマイクロミサイル放たれた。

煙幕を抜け出したマイクロミサイル群が面でもってＢＥＴＡ群に襲い掛かる。
重光線級、光線級も迎撃の火線をあげるが、マイクロミサイルへの命中率が悪い。

敵対生物の正確な迎撃を考え、
ランダム機動で直進せずに機動行動しながら目標に接近していくマイクロミサイル。
Ｇをものともしない行動により…

幾千もの花が咲く…

数少なくなっている光線級及び重光線級が更に少なくなる。

「イーヤッホッー」

煙幕の中からゴースト及びバルキリーが踊りでてきた。

光線級はバルキリーに正確に照射し撃墜しようとするが…

自動化されたピンポイントバリアでレーザーが防がれた。
そこに他機のガンポットが撃ち込まれ沈黙する。

ゴーストに照射しようとする光線級は有り得ない機動に翻弄され、
うまく当てられない状態が続いていた。
２０Ｇくらいの機動がかかっていて、
インターバルの時間にガンポットが撃ち込まれ沈められた。

そうゴーストは無人ＡＩ機である為、人の限界を超えた機動が可能であった……
また、たとえあたって帰還が不能になると、
ゴーストはその身を暴走させて突っ込んで爆ぜてく…

『全部隊に告ぐ、２００ｃｍ質量弾発射体制に入った。
至急影響エリア圏外に離脱せよ』

『聞いたな！全機離脱だ！ピザをとりにかえるぞ！』

再び煙幕の中に突入するバルキリー及びゴースト編隊…

上空より２００ｃｍ砲から発射された質量弾が大気圏外より迫ってくる。

ｓｉｄｅ～白銀～

（発射の衝撃波すげぇなぁ…）

白銀の後方には天にむけそそり立つ２００ｃｍ砲が、
重慶基地に設置され射撃をはじめた。

発射時にはすでに音速を突破している為、空気をわる衝撃波が発生する。

その為最終防衛線にいる機体は、簡易遮蔽トーチカで衝撃波を受け止めていた。

そして…

『２００ｃｍ質量弾着弾警告、総員衝撃波に注意せよ!!』

天から赤くなった隕石が降ってくるのを網膜投射が映し出していた。

幾分かその隕石に光線が上がってるのか、煌めきがみえるが…

地面に着弾し、赤い空気の輪が出来上がり広がってく…

ある意味隕石そのものとなる質量弾は巨大な衝撃をおこし、
遠くはなれた白銀の機体にも、振動が届いていた。

（……１００ｍ級隕石が地上に落っこちたら、こんなもんじゃすまないんだよな…）

擬似隕石だからこそ、戦術的につかえる状態であった…

地上に落下するには１００ｍは必要であり、
そうなってくると戦術で使えなくなってくる問題もある…

１０発うちおえると…

『２００ｃｍ砲射撃終了、解体作業へ移行。
ビッグトレー砲艦隊射撃位置へ』

待避していたビッグトレー砲艦隊が戦列を整え始めた。
これ以上近づいてくるのに２００ｃｍ質量弾は被害が被るし、
また生き残りの光線級の良い的になる為解体作業にはいった。

『ビッグトレー砲艦隊、主砲一斉射開始！！』

５０隻にもなるビッグトレー砲艦型から主砲弾が放たれる。

（これでも物量まかせのＢＥＴＡはくるんだろうな…）

Ｓｉｄｅ～白銀ｅｎｄ～

しばらく主砲斉射が続く…

『そろそろ見える頃だ。大丈夫、落ち着いて狙ってけよ』

「はい、師匠」『了解』＊多数

重慶基地の地上上層部にある狙撃台では、
ロックオン率いる狙撃部隊達、
ザクスナイパーが、狙撃用レールガンを構えていた。

ザクスナイパーの外見をしているが、中身は魔改造済みの別物。
狙撃のスペシャリストを目指して自重はしてなかった。

核融合炉の出力上昇やZ時代の構造は勿論の事、
狙撃に特化した改造を施され、
コクピットにはライフル型コントローラーが備えつけられていた。

そして、特筆すべきは狙撃用レールガン。
有り余る大出力電力を利用した狙撃銃で、
その射程は１００ｋｍ…実際は水平線あるから相応の高度をとる必要あるが、
を水平弾道で射撃可能であり、

５０ｍｍブリッドを毎分１２０発発射可能、その貫通力は絶大なものである。

また取り回しのきかない長さの砲身だが、
その長さにより熱がうまく逃げてき、
たとえ連射しても冷却材を必要としてなかった。

長さの問題は解決しないものの、フワジャンすればするほど射線がのびるが…
光線級がいるこの世界ではフワジャンはできないだろう…

彼等ののっている狙撃台は、光線級対策をとっていた。
分厚い強化コンクリート製の遮断壁、
そこに窪んだ台座にレールガンの銃身の先が水平線を狙っていた。
また狙われた際に遮蔽シールドがでる至れり尽くせりの設計であった。

６０ｋｍ先のＢＥＴＡの頭が見えはじめた…

『いいかぁ？小猫ちゃんを扱うように丁寧にねらって、撃ち抜くんだぞ』

『はい！！』
（落ち着いて…みきを扱ってくれてるように構えて……撃つ！！）

レールガンから弾が発射し……

見事、６０ｋｍ程先の要塞級を貫いた。
貫かれた要塞級はスコープから見えなくなり、
猫の目からの情報で沈黙を確認する。

その１０分後あたりに、
重慶上空３万ｍガルダが到達する…

残存光線級のレーザーがチマチマと照射されるが、
ファンネルシールドにより防がれ、ガルダ本体には被害がともわなかった。
『ミサト準備はいい？』

『何時でもいいわ』

『投下１０秒前…５、４、３、２、１、ｎｏｗ』

ガコン

開かれたハッチからエヴァが押し出されるように投下される。
地上に向かい重力に引かれ自由落下し始めた…

戦場付近を高速て飛来する飛行機がいた。
凱が操縦するファントムガオー…が変形してガオファーになり…

ｓｉｄｅ～異世界軍情報司令室～

「凱よりファイナルフュージョン要請！」

「ファイナルフュージョン！！承認！！」

「了解、ファイナルフュージョン、プログラムドラァァァァァァイブッ！！」

パキーン

プログラムがプラスチックケース叩き割られボタンがおされ起動する。

ｓｉｄｅ～異世界軍情報司令室ｅｎｄ～

「ファイナルフュージョン！！」

ナノマシンがガオファーを中心に竜巻のようなのを形成する。
本当に数すくない重光線級や光線級が脅威度をあげ、
生体レーザーを撃ち込むが、ナノマシンの嵐で防がれる。

ガオーマシンが各所からナノマシンの嵐を突っ切って、
変形しはじめる。

そして…

「ガオ　ファイ　ガー！！」

今ここに地球製勇者王が復活降臨する…

「ドリルニー！！」

側にいた重光線級をおりざまにドリルでだまらした。

またはるか上空から降下してきたエヴァがパラシュート無しに、

ＡＴフィールドで軽減させ着地する。

その勢いのまま、背中に背負った鉄こん棒をつかみ、

その８０ｍの長さを地面にふりぬきたたき付ける。

持ち上げると、１００匹以上の小型級が潰れていた…

今ここに2大のスーパーロボットが…

「私たちをわすれては」

「困ります！！」

遠くから風龍、雷龍が小型級をけちらし走ってきた…

「「シンメトリカルドッキング！！」」

二体のビーグルロボが合体し…

「撃龍神！」

ここに復活し、３大スーパーロボットがこの戦線で無双となる。

なにしろエヴァは８０ｍ、要塞級と同等の大きさをほこり、

今も要塞級の触手をＡＴフィールドで防ぎ、反対に触手をつかみひきちぎった。

そして、鉄こん棒をうちつけ両断する。

ＢＥＴＡが、その後ろのラインにいくには、避けていくしかない状態となり、

もともと減っていた個体数が更に激減する。

『大規模地下侵攻群発見！！地下約３ｋｍ地点』

ＢＥＴＡの切り札の一つ、地下侵攻が引っ掛かった。

『ディバイディングドライバー射出せよ！！』

『了解！！ディバイディングドライバー射出！』

後方待機していたガルダ2番艦からディバイディングドライバーと、調整されたカートリッジが射出された。

「よっしゃーぁぁぁぁぁ！！」

ガオファイガーの両腕部に装着され…

『凱、座標送るわ！』

「かなりピンポイントで難しいな…」

ディバイディングドライバーの湾曲部が、地下に向かって調整されてるが、

調度そのタイミングでないと、トンネルや母艦級に作用せずに押し退ける形になってしまうのだ。

『もうそろそろ…今よ！』

「いっけぇぇぇぇー、ディバイディングドライバーぁぁぁぁぁ！！」

地面に撃ち込まれたディバイディング・コアが作用し始めた。

レプリションフィールドが周りの土を押し退ける。

調整された力は地下にむけ延ばされ、地下侵攻中だった母艦級を巻き込んだ。

地下深く約５ｋｍの地点まで到達したレプリションフィールドは横にひろがり、
円筒形のフィールドを湾曲拡大させる…

するとディバイディングフィールド内にはいきなり大気中にほっぽりだされ、
とまどっている母艦級が…

『凱！！』

「よっしゃーぁぁぁ…ふんっ！！」

ガイファイガーが母艦級をつかみ…

「どおりゃぁぁぁぁぁ」

大出力にものをいわせ巨大な母艦級を抱き上げ空中に飛び上がった。

声がでたなら、「離せ～」か「キシャー」だろう。
母艦級は暴れるが、押さえ付け地上から高度をとるガオファイガー。

「はぁぁぁぁあああっ」

母艦級を空中に放り出すと…構え、

「ブロウクンマグナァァムゥ！！」

ガオファイガーの右腕が回転をもって飛び出し……見事に母艦級を貫いた…

『凱、あと5つよ』

「了解！！」

散々に減らされつつＢＥＴＡ群は前進する…

待ち受けるは陸戦強襲型ガンタンク、６１式改、戦術機、ＭＳ群…

残存の弾級、兵士級、戦車級、闘士級、要撃級がすすんできた。

『小型級は後ろにくれてやれ。
我々は中型級以上の殲滅が任務だ。

数はさほど多くはない、わかったか？』

『了解！！』＊多数

このラインまでくるのに…ＢＥＴＡは多大な被害をだしていた。
特にこの前のラインのガオ無双、エヴァ無双で…
その密度はかなりうすれ、全体的にも数はかなり減っていた…

異世界軍のビッグトレーの射撃は停止するも、
今だに狙撃、スーパーロボット無双は続いていて、

残存が１０万を下回り、更に後ろ側から無双、前から狙撃が続いていた。

そんなＢＥＴＡが防衛ライン到達し……

『攻撃開始！！』

更に陸戦強襲型ガンタンク、魔不知火を始めとした部隊から、
射撃開始された……
最後の突破してきた小型級を掃討するのは、
ボン太君やターミネーター、烈火を始めとした機動歩兵だった。

「ふうもっ！」
パァン
ボン太君がアサルトライフルで視界に入った闘士級を撃ち抜いた。

ＢＥＴＡ側は、もう数少なく、兵士級、闘士級以外は駆逐され…
５千規模の機動歩兵隊を突破するのは容易ではなく……

カオルは更に内側、メインゲートで待ち構えたが…

（来ないな…というかいる必要なし？）

基地自体のＣＩＷＳすら作動せずの状態だった。

そして…

『カオル大将、最後のＢＥＴＡ駆逐されました！！我々の勝利ですぞ！！』

「お疲れ様…各隊、帰還せよ」

大規模侵攻群を受け止め重慶基地も無事に残った。

……

カオル報告

反撃しなきゃね…

第１７８話　大規模侵攻編　重慶基地まであと２２０ｋｍ～（後書き）

作者「大変遅くなりました」

ナギ少尉「なりましたぁぁぁぁ」

作者「と…遅筆により…でした」

ナギ少尉「でも遅筆って…」

作者「戦闘シーンがうまくかけなくって…ｏｒｚ」

ナギ少尉「先に投稿してあとで修正でよかったんじゃ？」

作者「かもなぁ……」

ナギ少尉「で今回見直しした？」

作者「してない…時間ギリギリ今２３：５７」

ナギ少尉「あと3分で日付かわるじゃない！」

作者「本編ネタやりたかったけど…時間が…なんだよ…
なので投稿してから見直しになるか…ｏｒｚ」

ナギ少尉「いつも作者はギリギリだからね～」

作者「と、あと次回予告ですが、とりあえずいつも通り未定でお願いします！」

第１７９話　大規模侵攻編　防衛戦後　投稿日２０１１１００１

２００１年１月１５日午前８時

なんとか大規模侵攻を抑え、撃退する事ができた異世界軍…

カオルはとり急ぎ横浜基地に帰ってきて、
次々あがってくる今侵攻におけるダメージレポ及び、メンテナンス予定を流し読みしていた。

直ぐにでも反撃をおこないたいが…

「モンスター改は、殆ど砲身交換で、定数満たすのが１０日程かかるよ～
陸戦強襲型ガンタンクは守備隊と配置転換すればなんとかだね～」

という事であり直ぐにはうって出る事ができなかった。

大規模侵攻での被害報告で特に目立ったのが、虎の子面制圧に活躍が期待されたＡＩＦ－７Ｓゴースト、
バルキリー世界の無人戦闘機が、

「帰還率１３％か…」

原因は独自ＡＩモードにあった。

「調べてなかったからなぁ…」

艦が沈没または本拠地と連絡がとれない独自モード、
取得しコピーした元設定が…帰還優先でなく殲滅優先で設定してあった為だった。

（まぁそりゃマクロス世界の生産力なら些細な事だけど…さ）

わずかでもダメージくらうと特攻する設定を残りの機体分から修正、増産分からも修正する事となる。
そこさえ修正できればG限界を考える事なく、防御力無視で、限界までマイクロミサイルを搭載できる優秀な機体であった。
（まぁ、光線級射程圏を飛んでる以上当たらないってのはないんだけどね…）

有人機体であるバルキリーはピンポイントバリアで光線級を受けて、その防御力をいかしていた。
が、そのピンポイントバリア対応以上の集中攻撃をくらった機体もあったが、
エネルギー転換装甲の作用内ですんでいた為、すぐに煙幕内に突入し、帰還修理となる。
そのため人的損害は皆無であった。

光線級の射線がゴーストを落とそうと躍起になっていたのもあるようだが…

報告をみてると…

［マスター、大至急情報司令室にきて］

と呼ばれて移動する…

呼ばれた原因が、敦煌基地跡地に向かっているＢＥＴＡ群がいるとの報告であった。

「何をするんだ?このＢＥＴＡ群は…」

［さぁ?］

「とりあえず対応できそうなのが…」

即応リストを呼びだす。

重慶基地周辺で待機中や、チューリップ使用による二次即応可能な部隊リストが映し出された。

メンテナンスに入った部隊は映し出されてない。

無限弾薬装填装置の恩恵をえた砲撃艦やミサイル艦以外だと…

「バルキリースカル大隊、アポロ大隊と、モビルスーツ、戦術機かあとが機動歩兵隊ね…
とりあえず疲労度高そうな部隊は下げると…」

画面上の部隊マーカーを移動する…

「ふむ…」

敦煌にむかってるのが、２個師団規模に対抗…
ビッグトレー砲艦隊とミサイル艦隊、
烈火大隊及びターミネーター大隊を派遣する事となった。

対応を決めあとは問題なしとの事で、
引き続き報告の検証にはいる。

今回初実戦のＡＩＦ－７Ｓゴースト以外の機体、
エヴァンゲリオン及びガオガイガーら勇者ロボットらの方は…

エヴァンゲリオンはパイロット制限が外れて、しかも驚異的な性能をだしていた。

単純に８０ｍの巨体からの重力も加えた巨大な力を奮い、
８０ｍに似合わない抜群の機動性能をだしあげた。

（まさにＬＣＬ様々だな…）

そのような巨体があの機動を行うとなるとGの問題がかかってくる。
単純にいうと0からものの3秒程でマッハを超える脚力をもつ機体で、
それだけで12Gの力がかかっている。
単純にいえばミサトさんに600kg近くかかってるのだ。
そこにさらに横機動等加わり…
パイロットには18G近くが単純にかかってるといえた。
さて、航空機パイロットでも18Gかかったとして耐えられるだろうか?
答えはもちろんNO。
連続的に7Gかかるとして、レッドアウトまたはブラックアウトにかかるのがおち。
が、このエヴァンゲリオンは、
パイロットの身体に重力加重が全くかかってなかった。
すべて重力操作及びエントリープラグ及びLCLで吸収しきっていた。

そうでなければその巨体が第四使徒に捕まれたたき付けられて、
パイロットがその衝撃で潰される事になる…

三段階の構えでGを吸収する。
確かに最後の戦いでミサトさん曰く、
ネルフ本部にいるよりか、エントリープラグ内にいたほうが安全といえた。

すべてはＬＣＬ、体液によるもの…

また初戦闘なのにミサトさんがＢＥＴＡの醜態に怯んだ様子もなかったのも、
その巨体による恩恵と直接接続によるものと推測できた。

人間がＢＥＴＡと対時し、恐怖に感じてしまうのが、
まずはその巨体及び物量、また醜態さであった。

捕食される…やはり恐怖である。

戦術機にのっても、その最終目線は人間であり…
結局のところ巨大さに感じるとこであった。
勿論、ＭＳ等も同様である。

が、今回の直接接続は巨人自身になる為、

兵士級等は単純に少しでっかいゴキブリの印象…

戦車級は子供用の靴サイズ、
要撃級で長靴、
突撃級で女性用のブーツ、
要塞級でやっと人間サイズ…
と見えるといっていいだろう。
さて、そんな小さいものに先入観ない人が恐怖を感じるだろうか？
少なくとも恐怖は感じず気持ち悪い程度にしか見えないだろう。
また、シンジ君が来るまではゴキブリと同居していたミサトさんであり、
そんなちいさき虫に恐怖する、か弱い女性でもない。
むしろ掴んで包んでごみ箱に捨てられる人であった。
そのようにゴキブリと同居する人物が虫に恐怖するか？
まぁ蜘蛛等種族嫌悪等は除いて…
否である。
まさに対ＢＥＴＡ戦に最適な組み合わせ…意図してなかったが…
更にＡＴフィールドの恩恵もあり、まさに一機当千といえた。

（まぁこれで量産できればなぁ……）

つくづく思うところだったが…

生産方法及び補修にカオルがいないと駄目、
維持保守はいなくても起動までは問題はない。

（後々の課題だな…）

あとは、ガオガイガーら勇者ロボ達…

彼らもまさに一機当千。
ガオファイガーは一応有人?まぁ直接接続及び同化の類だが、
エボリューダーはまさに超進化人類といえ、Gをものともせずに耐えきってた。

撃龍神はコバッタ操縦機以上、Gをやはりものともせずに、その力を発揮していた。

（うん…被害なし、稼動疲労位か…）

機体にかかるGがやはり近接戦闘、特に格闘を主眼とした機体はかなり蓄積する為、
特に問題はなかったが１００％のコンデションを維持する為に、

数時間ばかりメンテナンス行きとなった。

（オリジナルで更に増やしたいけど…）

勇者ロボのコピーはＡＩのアイデンティティーの問題でできないので、新規につくる方向になるだろう…

特殊タイプのＡＩが基本使われて育成に時間がかかる為に…
これもまた難しい事となっていた。

（まぁおいおいだな…）

報告書をおき…

（とりあえずこの後だな…）

異世界軍の方針を考え始めた。
すべては大規模侵攻対応に注入していた…

（敦煌は今向かった部隊で対応可能だよな）

対応せずに再びハイヴを作られると、少し面倒な事にはなる。
その上での予防措置であった。

（オリジナルハイヴ攻略部隊は…）

まだ大規模侵攻時守備に加わった部隊のメンテナンスがすんでない為、
見積もったところ最短６日は必要だった。
その反対に太陽系攻略艦隊は…

（メンテナンス中、あと最短三日か…）

コロニーレーザーの出力発信器の交換中との事だった。

７０％台まで連続発射による低下がおきてたので、
一応５０％までは出力が保障されるが、バルキリー護衛部隊が外れた事により、
ついでとの事で交換作業に入ってた…

が予定通りで予定が崩れる程でもなかった。

（メンテナンス終了後に…攻略艦隊出陣だな）

太陽系攻略艦隊はこのあとにもまだまだ攻略して貰う惑星及び準惑星の部類がある。

太陽系だけでも、未調査の惑星、準惑星、衛星等は、
土星の衛星、　海王星の衛星、天王星の衛星及び、冥王星及びカロンの他、
太陽系外縁天体に属する、セドナ、ハウメア、マケマケ、エリス、
カイパーベルトの、クワオアー、ヴァルオナ、等など居る可能性あげるときりがない。

ＢＥＴＡの性質として１０００ｋｍ以上の星にはいる可能性があるからには調査も必要となる。

キャーティア製のレーダーで調査もやはり、
調査対象惑星の近くまで行かなければならない。

（とりあえず増強と、調査専門にあと１編成かな？）

ジェネシス及びコロニーレーザー、またビッグワンの増産がきまった。

（とりあえずこんなとこか…じゃ新しい人材を…
強化されたのがいいな…となると、あそこかな？）

「じゃ、オリジナルハイヴ攻略させるような人材ひろってくるわ」

［いってらっしゃい～あとは任せておいて～］

世界扉を唱えて世界を渡ってく…

……

カオル報告

事後処理終了、あとは放置で人材のみ？補給

第１７９話　大規模侵攻編　防衛戦後　投稿日２０１１１００１（後書き）

作者「またもや、ギリギリ…」

ナギ少尉「最近遅れ気味ね」

作者「……まぁもう大丈夫かな？日本国内にいるし…」

ナギ少尉「まぁいいわ。今回は戦後処理で、また新しい世界？」

作者「いや、以前の世界って事で…次回お楽しみに」

第１８０話　再びC．E．の世界へ　投稿日２０１１１００３

C．E．の世界

＝ロドニア＝

「被験５８１号は駄目だな…破棄と」

ズリズリズリと、少女が両脇から支えられながらも引きずられていく…

小水垂れ流しながら、あとを引いていく…

「薬物抵抗失敗か…」

「だな…次の被験体にはもう少し数量おとしてみよう」

少女は目ががんびらきのままキャスターに乱暴に寝かされた。

男たちはそのキャスターを押してしばらく進むと、ある一室におして入ってく…

途端に血の臭いが漂ってくる。

「チッいつもこの部屋の臭い、どうにかしろってんのに…」

「しょうがないさ…なんせここは」

解体室…と部屋のプレートにはかかれていた。

「せーのっ！」

台の上に少女は移された。

「いるんだろ！？破棄品もってきたぞ」

「ひっひっひっ…お～お～今日は二つ目だ…大量だ」

「薬物で拒否反応によりだ…いつも通りホルマリンつけ脳のみで頼むぞ」

「い～っひっひ、わかりました。さぁ解体ショーですなぁ…見てきます？」

「いや、後は任せた」

と男達は部屋からキャスターを押してでていった…

「さてと、まずは血抜きせんと…意識は」

ほほを叩き…瞳孔の反応をみて

「ないな…なら」

後ろの台からレーザーナイフをつかみ…

作動させ、少女の太股から下を一気に切り落とした。

途端にブシャーと血が吹き出し、

「イーッヒッヒッヒッヒッ」

そして…時間は流れ…

その少女は脳がホルマリンの瓶詰の形となり、

解体室から送られてきた。

瓶にはラベルが張られ…被験体５８１号破棄とかかれていた…

ここはロドニアのラボ…

人を人と思わず兵器として生産する為に

エクステンテッドを作りあげる研究所だった。

主に精神面での強化を主眼としていて、純粋、無垢である事は精神

的安定にも繋がる。
ブーステッドは肉体的強化を目的としてるがやはり投薬が定期的必要、
副作用に起因する不安定さやタイムリミット等がある。
なので今では主にエクステンディドを生産していた。

『戦って貰おう』

先日入所したばかりの少年少女達が１５人、ある一室の中に集められてそう告げられた。

「何とですか？」

『君らの目の前にいるものとだ。武器はおいてあるだろう』

ショートソード、サバイバルナイフ、鉄パイプ、
さながら剣戦士のような近接格闘武器ばかりがおいてあった。

ここに入所する人材にはこと欠かなかった。
先のプラントとの戦争で戦災孤児となった人は大量にいた。
そういった戦災孤児を孤児院経由等で大量に仕入れていたからだ。
先の大戦で活躍したブーデットマン生産の頃は犯罪者を仕入れてい

たが、
軽犯罪でも偽装する等しなければ人材が不足していた。

しかし、先の戦乱がこの施設の運命及び入ってくる幼い子供達の運命を決め付けた。

「ぐわぁぁ」「た、たすけ…ぎゃぁ」

武器をいち早くとったものから、近くの者へと戦いへと入り、
直前まで話し合っていた者は敵となった。

先の戦乱において、エイプリルクライシスにより、各国の電力が大幅に減少すると、
加工食品はもとより、食の流通がストップし、
都市部において大規模な餓死等発生、

またその後の戦乱において強制徴兵、強制労働等生き別れや、
またデーターが飛び戸籍確認がとれずに生き別れ等発生、

戦乱終了後には大量の戦災孤児が発生した。

それに悲鳴をあげたのが民間や各国の孤児院。
必然的にスポンサーを探し、大量に受け入れてくれるラボへと辿りついたわけになる。

『そこまで！！』

部屋の中には立ってたのが3人だけとなっていた。
部屋に武装したＭＰがはいり、横たわったのをチェック、
２人程生きていたので救助された。

残りの１０名は強化される前に死んでしまってた…

というふるい分けも可能な程になっていた。

そして、改造室…

カプセルの中に液体が充満されており、
その中に素体となる子供達が漬け込まれていた。

子供達はチューブをいたるところに付けられ、
薬剤を投与され、生体兵器へと改造されてく。

この子供達は入所時の選抜にたえ、改造されてく…

そんななか、カオルは再びガンダムＳＥＥＤの世界にでてきた。
時系列的にはガルナハン攻略される前あたりであった…

ナビにロドニアのラボを案内させ、ラボにつくと、分体とわかれ、
施設に同化してく…

そしてＤ－ｄａｙ…

「ガルナハンが陥落した!!、施設の処分命令が下ったぞ」

「本当だな?」

「ああ、まもなく確認が…」

「施設の処分命令が下った。大至急作業開始せよ」

施設の処分…完全な破壊の為、二人の別々な命令系統の確認作業をとる決まりだった。

『全職員に通達、当ラボは閉鎖する事となった。
緊急マニュアルＡ－０１にそって行動せよ』

～守衛室～

「おい、Ａ－０１って…」

「ああ、検体の処分、移動なしだな…」

「勿体ない…あんな美少女が…食いたかったな…」

「やめとけ、情がうつると辛くなる…やつらには人権はなく実験体

なんだから」

「そうか…」

「とりあえず撤退準備だ、私物は最低限にしとけよ」

「ああ、わかってるよ」

～ある部屋～

『入れ』

ある一室に実験体といわれている子供達がいれられた。

「ねぇ…マリ…どうなるの？」

「大丈夫だ、移動の為の避難だよ」

「後ろの扉がしまって密室になったようなんだけど…」

「すぐに終わるさ…」

シュー

白い煙が四方より吹き出してきた。

「な、なに？」

「ガ、ガスだ！！」

「う、うわぁたすけ…」
バタリ

「にゃー！！」

次々とガスに包まれると倒れてく子供達、
そして「吸うな！」
と一言はっし、口を塞いでたが、息苦しくなり、
とうとうガスを吸い込んで…

目がとろんとなり床に倒れこんでしまった。
胸はまだ上下に動いていた……

完全防音の操作室には処置室内部の音は聞こえてこない。

処置室内部は完全に動かなくなった１０人の子供達が横たわっていた。

「実験体１０体処置完了、溶剤処分室へ投下」

壁がせり出してきてものも言わなくなった子供達を押し出してきた。
横が狭まり、次に縦が壁にあいた穴へ押し込もうとしている。

次々と壁にあいた穴に投下される子供達、
重力に引かれ階下の設備である溶解液プールにむかって落下してく…が、
次々とネットに引っ掛かり虚数空間に引き込まれてく。

（１０名様ご案内～）

足から脱げた靴が溶解液プールに落下すると…
ジュ～
と白煙をあげてとけていった…

「処分完了、次のグループを部屋にいれろ」

押し出した壁が元に戻り処置室内部のセボフルランガスの回収が行われた。

この処置室で麻酔導入は処分室である、硫酸プールからの万が一の脱出を防いでいたのと、
万が一のガスの室外流出の重大事故予防をかねていたのだろう。
麻酔ガス程度なら、スタッフが死んだ等の大騒ぎもない。

また個々で麻酔導入し、そのまま解体室へといく事も可能だった…

そして次のグループが入室してくる……

子供らに教導していた軍人らは、施設の研究資料等を護衛し、
先に脱出するスタッフと共に護衛の任務となり、ラボからは既に移
動開始していた。

現在施設にはスタッフ及び最低限の警備要員しかいなかった。
なぜなら前記のように実験体は、処分が確定していたからである。

動かない実験体に対しては、ガスを使う事なく、
楽に処分する流れとなる。

パチ

「1号機から25号機の酸素供給スイッチをoff、…モニターは
…全素体に対し呼吸停止確認……
よし、処分終了。次の部屋いくぞ」

改造カプセルに供給していた酸素をカットするだけで、

人間、いやエクステンディドになりかけたのは生体の命をけす事となる…

カプセルの中の素体にはカプセルやチューブ保護の為、
また素体に悪影響を及ぼさないように、麻酔が常時投与されてて、
その苦しんでく様子も見られずに死んでく…
モニターからはそうだった。

が…　実はカプセルの中には酸素が続けて供給されていた。
施設のシステムを掌握していたカオルにとっては、
モニターに写る生体反応を偽装する事はたやすかった。

カットしたと思われた電源はバイパスにより、供給されていた状態になっている。

カオルの分体は幻影をかけ、次々と中の子供達を擬体と交換していった。

一番問題だったのが投与中の薬剤の問題だったが、
救急カプセルの能力で生体維持できるだろうとの事で、交換していった。

交換しおわった擬体のカプセルへの酸素はカットしてき、
また魂ももとともと入ってない為、
その身は液体腐敗していく……

～エクステンディドリクエーションルーム～

「あなた達、早く逃げなさい！！」

「お母さん？どうしたの？」

「いいから早く！！何処でもいいから遠くに行きなさい！！」

「お母さんと一緒じゃなきゃやだよぅ」

「一緒～」

「あなた達……わかったわ、ついてらっしゃい」

リクエーションルームにいた２０名の子供達は、
お母さんと呼ばれたスタッフに連れられ、
いつもは通れない職員用エリアへと入ってく…
しかし…

「おいっマリアンヌ！実験体連れて何処に行くんだ！」
ＭＰに発見されてしまった…

「お願い見逃してあげて」

「気が狂ったのか？やつらが世間にばれたら銃殺だぞ！」

「それでもいいの、この子達を閉鎖だから処分っておかしいわ…」
マリアンヌはＭＰに見えないよう手で子供達に、
遠くにゆっくりいくようにハンドサインを送る。
「俺らがこまる。大人しく処置室につれてくんだ」

「お願い…」

「おいっ！何処へいく止まれ！」

「やめて！」
パン

放たれた銃弾は銃口の前に踊りでたマリアンヌを貫いた。

「お母さん！！」

「マリアンヌ！」

遠くに下がっていた子供達が一斉に戻ってきて、
倒れたマリアンヌにかけよった。

「おいっ…どう責任をとるんだ？」

「あ、あなた達……」

「お母さん！」「いやだ死んじゃいやだ！」

「事故で大丈夫だとおもうが…」

「…ごめんね…生きてほし…い…カハッ」

「お母さん！！」

「本当に大丈夫だな？」

「……い……き…」

手がパタリとおちる。

「ああ」

「ううぅわぁぁぁぁ」「あぁあぁぁぁ」

「と、止まれ！！」

途端に襲い掛かってきたエクステンディド達に対して発砲をするが、職員を撃ってしまい責任問題で動揺したＭＰの銃口に正確さはなく、

「こ、こいつら」

「応援をよべ！」

「あ、ああ…グッ、カハァ…」「おい！ガァ」
奪ったナイフで胸をひとつき肺まで到達させ呼吸を奪う。
もう一方もナイフを奪い首をかっきった。

「はぁはぁはぁ」

「お母さん～」「あああああぁぁぁ」

「聞けっ！！お母さんを助ける装置がこの施設の何処かにあるはずだ」

「本当？」「見たことある」
「別人のように生き返ってきたのがいる！」

「お母さんをいきかえそう」「悪い大人をやっつけよう」

「大人をやっつけるんだ！お母さんを生き返らすんだ！！」

ＭＰの持っていたアサルトライフルを奪い構える……

「と、止まれっ！グアァ」

「撃てぇ！」

ラボ内部にいたＭＰや研究員が銃でもって応戦してくる。
研究員も一応軍人の端くれ、銃の訓練を行っていた。

それに外にかってに彼らの産物が統制されなくでてしまった事の方が怖い事になるため、
なんとしても制止する、また処分するの方向性だった…

「仲間を解放だぁ！！」

と当初は意気込んでたが、さほど仲間は増えずに殆ど処分されていた。

まだガス室送りになる前のグループもいたが、
暴動がおきた事を無線でうけ、その場で銃殺処分とグループもあった。

増えた人数含め、総数２５名による反乱である。

半分以上は組織だった抵抗、スタッフ、ＭＰ含め５００人以上の反撃に倒れるも、

「お、お前らなにをしてるのかわかってるのか？」

「お母さんを生き返えらして、外で一緒に暮らすんだ！！」

とほぼ施設ないを掌握し、所長室で所長と対峙していた。

「馬鹿か？死んだ人間は生き返らない、
第一外に出たとしても手配が回るぞ」

「嘘つくな！生き返ってきた」「そうだ生き返ってきたぞ」

「……ああ、クローン実験の事か？あれは破棄されたぞ」

「破棄…？」

「実験中止、クローン施設はなくなってる。第一死んだやつそのものにならなかったからな…」

「お母さん生き返らないの？」「嘘だ…」

「わかったろ…早く部屋にもど」「嘘だぁぁぁ」
ターン
ラボの所長が銃弾に撃たれ眉間から血ながし、後頭部が破裂し倒れた…

「みんな、くまなく探そう！」

……約1時間後…

施設をくまなく探したが、

「どう？」

「駄目、それっぽいのない」

「お母さん…」

「生き返らないの？」

「どうするアルフィ？」

「どうするったって……」

ボリボリ頭をかきながら…

「俺らを保護してくれそうなとこを探すか、自分達で暮らすかしかないだろうな…」

「……薬持ってきて暮らすしかないよね？」

「ああ」

「ねぇ？爆弾は解除しなくっていいの？」

「そんな時間ないだろ？」

「そうだな…とにかく急いででたほうがいい」

「だね…必要なものをかき集めたらすぐにでるぞ！」

こうして少年少女達１０人は人知れず東欧の森の中へとでていった。

後に残されたラボには大量の擬体の死体、スタッフやＭＰの死体、
子供達の死体が残された事になる。

（大量だな…さて…）

世界扉を唱えカオルは世界を渡る。

先にラボから移動したグループが、
移動先で連絡がとれずに、しばらくして命令をうけ、
ザフト勢力下の中様子を見に戻ったら、施設は無事でザフトがラボ
に突入した…
と発覚したのが2週間程たった後…

人間は2週間死んだまま放置されると腐敗し、かなりの異臭を放つ。
しかもラボは性質上他の生物等が入らず、…自然界ならまだ掃除屋
がいるものの、
突入したザフト兵士がその惨状にＰＴＳＤをおこすのも無理はなか

った……

……

カオル報告

3桁♪

第１８０話　再びＣ．Ｅ．の世界へ　投稿日２０１１１００３（後書き）

作者「オリジナルネタだとおもったら…」

ナギ少尉「おもったら？」

作者「ｗｉｋｉの生体ＣＰＵでガンダムＳＥＥＤアストレイで、
エクステンディドによる反乱だって見つけてしまった…」

ナギ少尉「あらら…」

作者「流石に反乱動機がお母さん射殺ではないよな？
と思うけど…」

ナギ少尉「オリジナルネタだと思ってそれがあるとへこむよね～」

作者「まぁ…ね…８０％以上完成していて、
設定の更に固める段階で…それだとね～」

ナギ少尉「まぁ…しょうがないよ…あのシーンは印象てきじゃないの」

作者「だよな…軍人が気持ち悪くなるってのはさ…」

ナギ少尉「だよね～…とこの後は？」

作者「今から（午前5時）かくけど、2話か1話か……
多分2話になりそうな…ＳＥＥＤ編がね」

ナギ少尉「ここまできたらあの…」

作者「ストップ！！」

ナギ少尉「……じゃ次回、アドリア海に散る…お楽しみにぃ」

第１８１話　ＳＥＥＤ　Ｄ編クレタ湾に沈む者　投稿日２０１１１００５（前書

前回の後書きの際に勘違いしていました…

第１８１話　ＳＥＥＤ　Ｄ編クレタ湾に沈む者　投稿日２０１１１００５

２日目、
カオルは再びでてくると、黒海及びエーゲ海の間の海峡、
ダーダネルス海峡を目指した。

そこはアジアとヨーロッパ文化をわける海峡である。
付近にはガルポリ、軍事的に重要な都市もある。

（絨毯でお世話になったなぁ…）
大航海時代シリーズで毎回よっていた箇所…とふと思い出していた。

（お、いたいた…♪）

海峡出口エーゲ海側に連合ーオーブ軍艦隊がおり、
カオルはかなり多数に分体して、艦隊へと取り付く。

カオル自身は一際でかいタケミカズチへと…

ブリッジでは…

「ダーダネルス海峡接近中の艦捕捉。ミネルバです！」

「きましたね」

「単艦で突破しようとしてくるとは…」

「よーし始めようか。ダルダノスの暁作戦開始！」

「は？」

「なんだ知らないの？ゼウスとエレクトラの子でこの海峡の名前の由来の。
ギリシャ神話だよ。ちょっとかっこいい作戦名だろ？」

「……モビルスーツ隊発進開始！」
このぼんぼんが…な顔をして…軍人として命令を下す。

「モビルスーツ隊発進開始！第一第二第四小隊、発進せよ！
イーゲルシュテルン起動、オールウェポンズフリー」

「まもなくモビルスーツ隊、到達します。敵艦モビルスーツ発艦、数２」

「よしよし、勝った！！」

「は？」

「２０対２だから勝てるじゃん。楽勝だよ」

「は、はぁ…」

「２、８、１１、シグナルロスト！！」

「はぁぁ？」

「敵艦射程圏内！」

「一斉斉射ぁ！」

「続いてシグナルロスト９、１４」

「何をしている！敵のモビルスーツはたったの二機だ！
どんどん追い込め！モビルスーツ隊全機発進！」

「いやそれは…」

「一機ずつ取り囲んで落とすんだよ！そうすればいくらあれだって落ちる。
これは命令だぞ！」

「……待機中ＭＳ全機発艦準備、進路風上にとれ！」

「進路固定！」

「それでいいんだよ、それで。これで敵ＭＳさえ落とせば、カガ…」

「敵艦陽電子砲発射態勢！」

「へぁ？」

「回避！面舵２０！発艦中のは緊急離艦せよ！！」

「駄目です間に合いません！！」

「いやだぁぁ～」

何処からともなく放たれたビームがタンホイザーの砲身を貫き、盛大な爆発をあげる。黒煙をあげ…

「敵艦、砲身大破、ダメージ甚大の模様、落下してきます！！」

「助かったのか…」

「あ、あれは…フリーダム！！」

「な、なにが？」

「敵艦、着水！！」

『私は、オーブ連合首長国代表、カガリ・ユラ・アスハ！』
「え！？」「カガリ様？」
『オーブ軍、直ちに戦闘を停止せよ！軍を退け！
現在、訳あって国もとを離れてはいるが、
このウズミ・ナラ・アスハの子、カガリ・ユラ・アスハが、オーブ
連合首長国の代表首長であることに変わりない！
その名において命ずる！オーブ軍はその理念にそぐわぬこの戦闘を
直ちに停止し、軍を退け！』

「ぅぅーく…」
オーブ軍はカガリの演説で動かなくなっていた。

『ユウナ・ロマ・セイラン』
ネオから通信が入った。

『これはどういうことです？』

「あ…ぁ…いやこれは…」

『あれは何です？本当に貴国の代表ですか？
ならば、それが何故今頃、あんなものに乗って現れて軍を退けと言
うんですかね？』
「ぅぅ…」
『これは今すぐきっちりお答えいただかないと、
お国もとをも含めていろいろと面倒なことになりそうですが？』

「こ…これは…いやだからあれは……ええい！
あんなもの私は知らない！」
といいきりインカムを置き通信終了する。

「ユウナ様！何を仰いますか！？」
「あれはストライク・ルージュ。あの紋章も、カガリ様のものですよ！？」

「…だ、だからといって何でカガリが乗ってるってことになる！？
そんなの判らないじゃないか！」
「しかしあのお声は…」

「偽物だあんなのは！僕には判る！僕には判る！
夫なんだぞ！僕は！」
「ユウナ様！」

「で、でなければ…操られてるんだ！
本当の、ちゃんとした僕のカガリなら、こんな馬鹿げた、
僕に恥をかかせるようなことをするはずがないだろ！！」
「ユウナ様！！」

「何をしている！早く撃て馬鹿者！
あの疫病神の船を撃つんだよ！合戦用意！」

「…貴方という方は…」

「でないきゃ！こっちが地球軍に撃たれる！国も！
僕等はオーブのためにここまで来たんだぞ！それを今更、はいやめますで済むか！」

「……ミサイル照準、アンノウンモビルスーツ」
苦渋の表情で命令を下す。仮にでも最高司令官だ…
「トダカ一佐！」
「我等を惑わす賊軍を討つ！」

「早く撃て！」

「てぇ！」

対空ミサイル群がルージュにむかって放たれ…
いち早くフリーダムが反応し、全弾撃墜する。
「あぁ…」
呆然とするユウナの横で安堵するトダカ…
『オーブ軍！何をする！私はオーブ連合首長国代表、カガリ・ユラ・アスハであるぞ！
何故軍を退かぬばかりか、敵対行動をとる？
オーブの理念を忘れたか？…』

「地球軍、ミネルバに攻撃しかけます！！」

「な、何やってるの！うちもさっさと攻撃させて！」

「はぁ？」

「モビルスーツ隊！ほら！」
「ぁいえ…しかし！」

「ミネルバを討つんだよ！また言われちゃうじゃないか！うちは地球軍なんだよ！
……それから！あの船！アークエンジェルも！」
「なんですと！？」

「あれがそもそも、我が国混乱の最大の原因でしょ？
いっつもいっつもいっつもいっつもいっつも…
だから一緒に片付けて！あの仮面男にちょっとはいいとこ見せなきゃまずいでしょ？」
「く……全軍、攻撃再開せよ」
「トダカ一佐！」

「くどい！これは最高司令官であるユウナ様の決定事項だ！
またあの機体はカガリ様でない…」
「……わかりました。全軍攻撃再開！！」

「オーブ軍、モビルスーツ各隊は地球軍と共にミネルバへの攻撃を再開せよ。
あれはカガリ様ではない。あれはカガリ様ではない」

「各機攻撃を行動にはいります！！」

『オーブ軍！私の声が聞こえないのか！言葉が解らないのか！オーブ軍！戦闘をやめろ！』

「クラミとイワサコを前に出せ！二隻一気に追い込むんだ！」

「兵装破壊機体多数！！帰艦してきます！」

「あのフリーダム、なんとかしろ！！」

「なんとかしろと言われましても…この時点では、」

「タイテントロンガ自走不能!!舵をやられました!」
波により持ってかれたのだろう…
「曳航させよ!…手のうちようがありません」
「何なんだあれは!一体どっちの味方なの!?」
(ハイネを救助完了したよ)
(幻影は?)
(勿論かけて両断されたよ)
『残念ながら戦況立て直す。全軍撤退する。』
「クッ……わかりました。損害大きいですしね…撤退信号うて!!」
『なに…相手もかなりの被害がでたさ…次は頼むよ。ユウナ・ロマ・セイラン』
カオルは離脱し、合流する。
(セイバーと、グフユナイデットハイネ機もか…
M1とムラサメも取得したし…うし)
次の時間へ世界扉を唱える。
……

カオルは世界を渡ってきて、
（ありゃ…場所ずれたっぽいな…）
あたり一面氷の世界だった…
（なら…）

虚数空間よりルーロス改を出して乗り込む。

「久しぶりでち～」
乗り込むいなやカオルに飛び込んでくるルーロス人形…
「おいおい…」

「ごちゅじんたま、ず～っと、しまったままで、寂しかったでち」

「あ～…ゴメンな…で早速いってもらいたい場所なんだが」

「どこでちか？」

「アドリア海ね」

「あいあい～」

ルーロスが高速移動してく…
「ごちゅじんたま、リピア海に水上艦母艦ほか、水上打撃艦を発見したでち」

「それが、今回取得対象者が沢山いるオーブ軍だな…ってリピア海？」

「ごちゅじんたま、場所間違えてるでちか？
アドリア海は、イタリアとバルカン半島に囲まれた部分でちよ」

「あ……じゃあ完全な勘違いか…リピア海でよろしく」

（となるとクレタ湾に沈んだのかなタケミカズチは…？）

「じゃ、分体を沢山わかれて…」

ほぼ全滅模様になる為、無限にわかれてく…
（俺達よ、よろしくな）

カオル本体はタケミカズチにとりついた。

ブリッジでは…

「艦影捕捉！」

「距離６０、１１時の方向です！」

「総員合戦用意。繰り返す、総員合戦用意」

艦内が途端に騒がしくなる…

「第二、第四小隊発進待機位置へ」
「第一、第三、第五小隊発進完了」

「目標、主砲射程まであと４０！」

「ミネルバからのモビルスーツの発進は？」

「まだです！」

「よーし勝った！八式弾のシャワーをたっぷりとお見舞いしてやれ！」

「砲術！八式弾一斉射！てぇ！」

一斉に対艦ミサイルが放たれた。

八式弾は迎撃してくれる事前提のミサイルであり…

「効力射！！敵艦ダメージあり！」

迎撃する事により自己鍛造弾のシャワーが浴びせられる。

「よ～しよ～し」

これにより表にでている兵器には、

かなりのダメージが加わった事を期待されてた。

「第二艦隊敵艦に接近、間もなく主砲射程圏です！！」

「第二、第四小隊、接敵！！」

「連合特殊部隊発艦！」

「敵艦よりＭＳ数１！及び分離体群１」

「いい加減に分離体群と呼ぶの変えようよ」

「それは連合さんにいって下さい…」

「でもぉ我が軍だけでも変えてもいいんじゃない？」

「第一、第三、第五小隊、敵ＭＳ群と接触します」

「敵ＭＳは連合軍に任せてミネルバをおとせ！！」

「第二艦群、対艦ミサイル射程圏内、発射します！！」

「ソコワダツミ、ミサイル発射口被弾」

「クラミズハ、前へ出ます」

「目標、針路を２－４－０に転進」

「ほら！第二群をもっと前へ出して！どんどん追い込むんだよ！」

「ミネルバの火器はまだ健在です。迂闊には出せません」

「ムラサメ隊は何をしてるの！何でさっさと落とさない…」

「実践はお得意のゲームとはわけが違います！そう簡単にはいきま

せんよ」

「ミネルバに対してムラサメ2個が突入敢行します！！」

「よ～し…落としてくれよ…」

「ダメージ与えるも、健在」

「ちっ…」

「敵ＭＳ、地球軍機から離れられません」

「チャンスだ！いっけ！」

「ムラサメ2個隊、再突入します！！」

「敵艦直前に！」

「勝った～」

「あっ……」

『オーブ軍！ただちに戦闘を停止して軍を退け！』

「フリーダム…またか…」

『オーブはこんな戦いをしてはいけない！…
これでは何も守れはしない！地球軍の言いなりになるな！
オーブの理念を思い出せ！それなくして何のための軍か！』

『何をぼんやりしている！ユウナ・ロマ！』

「ん！？」

『先の言葉を忘れたか？二艦とも叩き落とすんだ！』

「トダカ一佐！」

「…我等に…指揮権はない…」

「わ、分かってミネルバを！だから早くミネルバを！
あれさえ落とせばいいんだから俺達は！」

「カオス被弾撤退してきます」

（救助完了）

（幻影は？）

（勿論大丈夫）

「連合特殊部隊アビス墜落！！」

「はぁぁぁ！？！？」

「撤退の時期ですかね…」

「な～に馬鹿な事いってんの、ちゃっちゃとミネルバ落とせばいいんだよ落とせば」

「敵ＭＳ空中換装する模様！！」

「ほら早く全軍に命令を！」

「く…目標ミネルバ！！」

「オーブ全軍はミネルバを攻撃せよ。繰り返す、オーブ全軍はミネルバを攻撃せよ」

『やめろー！！…あの船を討つ理由がオーブのどこにある！…討ってはならない！自身の敵ではないものを！オーブは討ってはならない！！』

「カガリ様！やはり…」

「偽物だ！！無視しろとめい」

『そこをどけ……

これは命令なのだ。今の我が国の指導者、ユウナ・ロマ・セイランの！』

「わかってんじゃん…誰の機体？」

「馬場一尉です」

『ならばそれが国の意志。なれば我等オーブの軍人はそれに従うのが務め！』

『お前！』

『その道、いかに違おうとも難くとも、我等それだけは守らねばらなぬ！お解りか！！』

『だが…！』

『お下がりください！

国を出た折より我等ここが死に場所と、とうに覚悟は出来ております！』

『それは…』

『下がらぬと言うなら力を以て排除させていただく！！

……我等の涙と意地、とくとご覧あれ！』

『お前たちー！！』

残存機体が果敢にミネルバに突っ込んでいく…

フリーダム等にやられムラサメでそうそう無事な機体が、

少なくなっていくなか…

「1番機…と、特攻です！！」

「あ……」

馬場機がミネルバに体当たり攻撃し、自らの命と引き換えにミネルバの復旧中で露天してた兵装を奪い、

また多大なダメージを与える…

その覚悟めいた攻撃にタケミカズチのブリッジ一同ユウナも含め、
言葉を発する事ができなかった…

『あと一息だ！落とすぞ！』
「そ、そうだよ！それでいいんだよ僕等は！ミネルバさえ落とせば」

『やめろーー！！』

「よし。本艦も前に出る」
「機関最大！」
「はい！機関最大！」「機関最ー大！」
「いや…だけど…」

「ミネルバを落とすのでしょ？ならば行かねば」

「第二艦隊全滅！」」

「敵インパルス来ます！」

「と、とめろ！！」」

「ミサイル一斉斉射！残弾のこすな！！」

近寄り過ぎて…

「ダメージコントロール！！」

ミネルバの主砲があたり、艦に次々と振動がはしる。
『やめろ！やめるんだタケミカヅチ！』

「うわうわぁぁ！おま、お前！何をやっているんだトダカ！これでは…」
「ユウナ様はどうか脱出を！」
「えぇ？」
「総員退艦！」
「……は！」
「総員退艦。繰り返す、総員退艦」
『タケミカヅチやめろー！』

「ミネルバを落とせとのご命令は最期まで私が守ります！」
「ええ…」
「艦及び将兵を失った責任も全て私が！」
「え…ええ…」
「これでオーブの勇猛も世界中に轟くことでありましょう！くッぬぅ！」
「うわうわぁ！ぅ…」
「総司令官殿をお送りしろ！貴様等も総員退艦！」

「これは命令だ！ユウナ・ロマではない。国を守るために！」
「はい！」
「私は残らせていただきます」
「駄目だ」
「聞きません！」

「うわぁぁぁ」
大規模な振動がはしる。ブリッジにいるものはバランスを崩す。

「駄目だ！！これまでの責めは私が負う。貴様はこのあとだ」
「く…いえ！」
「既に無い命と思うのなら、想いを同じくする者を集めてアークエンジェルへ行け！」
「ぁ…」
「ええい！それがいつかきっと道を開く！」
「ぁ…トダカ一佐…」
「頼む！私と、今日無念に散った者達のためにも！」
「くく…」
「行け！」

護衛艦隊は全滅し、速力が大幅に低下したタケミカズチの艦橋にいるトダカ…
自爆特攻する速力すらすでになかった…
そこにソードインパルスが近寄り…両断！！
虚数空間に引き込み離脱する…

（かなりの人数引き込んだなぁ…）

オーブ軍黒海派遣隊タケミカズチ及び護衛艦群…
整備兵含めて四桁を越えていた。

……
カオル報告
次回にまとめて．．

第１８１話　ＳＥＥＤ　Ｄ編クレタ湾に沈む者　投稿日２０１１１００５（後書

作者「と、いうわけでオーブ軍黒海派遣隊壊滅しましたね…」

ナギ少尉「……千人以上ね～」

作者「まぁ主にタケミカズチからだけどさ」

ナギ少尉「ふ～ん」

作者「そっちも海上艦なら詳しいんじゃない？整備兵沢山必要だし」

ナギ少尉「あ、わたし達の船整備兵いらないから」

作者「オブッ…」

ナギ少尉「どんなに傷ついた機体でも数秒でリフレッシュしてあげる」

作者「……ま、まぁ…さて次回は…」

ナギ少尉「ステラね…お楽しみにぃ」

第１８２話　ＳＥＥＤ　Ｄ編　ステラ散る　投稿日２０１１１００９

ザフト守備隊の描写
３日目…

カオルは再びＣ．Ｅ．の世界にでて、ルーロスを出し乗り込む。

「ベルリンあたりにむかっている大型のＭＡ含む一群、いると思うけど探知できる？」

「ベルリンに接近中の大型なのは探知できまつね…
そこにいけばいいんでちか？」

「蹂躙される前か…ついでに救助するかな……間に合いそう？」

「間に合わせるでち」
というまにベルリンにつく…

ウ～～～～ゥ～～～
サイレンが鳴り響く…
都市に住む住民が、戦火を避けようと避難していた。

「このままだと５分後にくるでち」

「じゃ、待機で…いってくるわ」

ルーロスからでて、分体を沢山作り上げ、都市中にちらばらせる。

（避難民も積極的にお願いな）

（あいよ～）

ここベルリンに住むゲルマン民族を始祖にもつ旧ドイツ国民は、
カオルの住む世界においても撤退戦でかなり激減していた。
なのでその補填にできれば…とも思っていた。
勿論コロニーにおいて住む形にはなるだろう…

「ママーママー」
カオル本体が降り立った付近には迷子になった女の子が母親を泣き呼んでいた…
だが、周りの避難民達は自分の事でていいっぱいの為、
気の毒に…と表情だすが、誰も手を差し延べなかった…

「ママーー、ママーー」

「敵軍は西側から来ます!!都市の南方向へ避難してください」
拡声器で避難方向の広報が流れる…

『見えたよ…エネルギーチャージしてる…くるよ!!』

地平線上にデストロイが見えると、
アウフプラールドライツェーンの一撃がベルリンの都市を襲う。
ブランデンブルグ門が直撃を受け溶け、またザフト軍の都市守備隊

の軍人がＭＳごと認識できずに命を絶つ…

ベルリンを一撃で焼き払った…

（あちちち…救助はできたよ）

（まにあわねー）

（おい！！炭化したのを送ってきたの誰だ？

流石に無理だとカプセルからメッセージでたぞ！！）

１番下のが救助した人を、シェルターかカプセルかを振り分ける担当の叫び声だろう…

「キャー！！」

避難統制とれてた避難民が、今の一撃で固まってて、

叫び声で一気に恐慌状態におちいる。

前がつまっていたのを自分が行かせろや、

後ろから更におしてくる等、ドミノ倒しも発生しかかっていた。

「ママー」「どけぇ」「キャ」

迷子の女の子が突き飛ばされ転がる。

そこに前を見てない避難民の足が迫り…

虚数空間に引き込んだ。

（死亡確定だしな…）

都市守備隊が攻撃しかけようとするが、まだ射程外…

さらに射程外よりデストロイがもう一撃放ってきた！！

（あぢあぢあぢち！）

その一撃は避難民を直撃し、叫び声をあげる事なく、炭化する前に一気に肉体が蒸発、

骨ものこさなかった…

またその直撃を受けたカイザーヴィルヘルム教会が跡形もなくなる。
付近にいた避難民は跡形もなくなっていた。
（確かに直撃くらったら間に合わないなぁ…）
虚数空間に引き込めたのがほんの数人程度であった…

二発都市に大出力ビームをぶち込んだデストロイは更に接近してきて、
ベルリンを廃墟とすべく暴れ回りはじめる。

残存守備隊はデストロイを止めるべく、果敢に攻撃をしかけるが…
デストロイの前には攻撃が通じず反撃をうけ、
一方的蹂躙になり…
そして…都市守備隊や増援の主要ＭＳや陸上戦艦が壊滅し…
もはや止めるものがいなくなった…

（結構救助はできたね～）
（何人ほどだ？）
（避難民が４千人超えてたなぁ…大体が無傷でシェルター行き、詳しい数は途中で数えるのやめた。
ザフト兵は百超えたあたりだと思う。
それに救助カプセルも結構しようしたよ）（成る程なぁ）

デストロイが更に暴れようとする時、
フリーダムガンダムが駆け付けた…

アークエンジェルからゴットフリートが放たれ直撃するも、弾かれる。

遠くにアークエンジェルが見える。

デストロイがＭＳ形態へと変形してく…

カオルはその間に取り付いた。

（足が壊滅的に遅いから取り付くのは楽々なんだよな…）

コクピットでは重要ターゲットのステラが血ばしった目をはしらせていた。

「ヴァァァァ！！」

カオルが取り出したのは無痛吹付型注射器…

中身は液体型特殊ナノマシンであった。

吹き掛けるとパイロットスーツに侵食してく。

（よし、離脱っと…）

ゴットフリートが放たれるが、デストロイが弾き返す。

ハイマットブーストをも弾き返し、カオスがからんできてフリーダム押されてたが…

ルージュ、ムラサメ隊が応援にでてきて、

フリーダムにからんでくるカオスに挑みかかった。

自由になったフリーダムは再びデストロイを止めるべく挑みかかる…

デストロイから離れたカオルは避難民や、ザフト軍が付近にいなくなった為、
分体と合流しルーロスの中に引き篭った。
ベルリン市民で避難できたのが1割って良いとこだろう…

「ごちゅじんたまお帰り…いいの？」

「ああ、これで良いはず…ナノマシンは浸透したし…後は戦後だな」

「あ、浮遊戦艦…ミネルバだね、きちゃよ～」

「やっときたか…」

「まだＭＳでないでちね」

「確か確執を諭していたんだよな…」

「確執？」

「ほら、敵になったり等…プライドがどうたらみたいにさ…」

「やっと出てきたみたいでちよ」

全周スクリーンにデストロイのビームを交わし、
ビームサーベルで切り付けるインパルスが映っている。

「初ダメージでちね」

「ビーム兵器や実弾兵器じゃダメージ与えられんから、接近して切り掛かる。
接近できる機体でないと辛いな…」

「もち異世界軍がたたかうとちたら？」

「物量的実弾射撃主体だから、
位置エネルギーによるダメージ与えられる２００ｃｍ質量弾できめるか…
スーパーロボットによる近接戦しかないなぁ…
勿論殴る蹴るでフルボッコか…」

エヴァがデストロイに対して、
バックドロップを決めている姿を想像してた。

デストロイのビームが吹き荒れ、周囲の市街地がさらに焼け野原になる。

インパルスにウインダムが体当たりで止めた。

「ここでステラがパイロットって伝わるんだよな…」

「ステラって？」

「今回のターゲットだね」

両腕部から翼を奪われウィンダムが不時着してく…

そしてさらにカオスも…

連合軍機はデストロイだけになる…

するとデストロイから目標ないような主砲が発射され、

さらに市街地を薙ぎはらう。

デストロイにきりかかったフリーダムにインパルスがきりかかった。

『ステラ！ステラ！俺だ！シンだよ！』

外部スピーカーからシンが叫び、

両腕ビームを避けずに…接近するインパルス。

『ステラ！大丈夫だステラ！君は死なない！君は俺が！

俺が守るからー！！』

デストロイの銃口が下がる…
『ステ…ラ？』

しかし、しばらく動きを止めていたデストロイが、再び動きだし、
スーパースキュラのエネルギーがチャージされてく…
そこにフリーダムのビームサーベルが砲門につきささる。

もうひとふりを突き刺し…

砲門に貯まったエネルギーが暴走し、デストロイを内部から破壊する。

その巨体は支えきれずに背中から崩れおち、断末魔のツォーンが放たれた…
天にむかって伸びる……

「もう少し接近しても、大丈夫だな」

「あたっても痛くないでちが、いばちょばれちゃうでち」

インパルスが倒れたデストロイの上にのり、
コクピットハッチを広げ、シンがコクピット内部に飛び込む。
ステラを手にのせるとインパルスはまだ爆発が続くデストロイから離れ、
安全圏に着地する…

ステラにかけよるシン…

ステラから手を合わせてくる。
「声が聞こえない…」
「集音するでち」
『ステラ！』
『シン…好き…』
ちから尽きたろう、手がおちる。
『…ステラ！！』

呆然とし…泣き叫ぶシン。

「ごちゅじんたま生体反応０になったけど？」

「ナノマシンがうまく働いてるさ…」

出発前に渡されたナノマシンの注射器をみる。

～回想～

［マスター、以前いわれてたナノマシンできたよ～］

「なんのナノマシン？」

［死んでも復活できれば…ての］

「あ、あ～そういうの話してたよな～…でそれが？」

［消し炭になったりしたら無理だけど、

五体満足ならナノマシンが働き、本来死ぬはずのを仮死状態に引き止め、
救助ポットに入れれば復活するよ～」

「ほ～どんな状態でも？」

「重体におちいったり、銃撃で生命維持に必要な部分を損傷等、また病気等の死亡要因て作用するよ。
流石に脳等重要部位欠損や、壊死等引き起こす場合に対しては無理だけど」

「ありがとうさん。これで行き先きまったな…」

～回想ｅｎｄ～

「あ、動きあるでちよ～」

ステラの遺体に連絡の受けた残存ザフト歩兵隊が近寄るが…
シンは近寄せずに抱き抱えた。

インパルスのコクピットにステラごと乗り込み…

「追っかけて」

「あいでち」

インパルスが湖畔に着陸し、そのまま湖の中に歩みをすすめる…

「じゃ…寒いけど湖の中に潜るわ…」

「いってらっちゃい」

ルーロスから出て虚数空間に引き込み、静かに湖面から潜ってく…

ステラを抱き抱えながら、伸ばしたインパルスの手の上に、
シンが出てきた…

ステラの身体を湖面につけ…
しずかに名残惜しげにステラを離す…
湖の底にむかってステラが沈んでく…

（オーライ、オーライ…）
「…俺守るって言ったのに！…ステラごめん！」

湖底にも声が届いた…
ステラをキャッチし虚数空間にいれ、湖上に静かにでる。

今だ泣き叫んでいるシンを跡目に…陸に上がり森の中にはいる…

虚数空間より医療カプセルを出し、ステラを入れ、作動させると…

（おし、無事に作動したな…ナノマシン効力ありと…）

世界扉を作り時間を渡る……

……

カオル報告

次回にまとめて…

第１８２話　ＳＥＥＤ　Ｄ編　ステラ散る　投稿日２０１１１００９（後書き）

ナギ少尉「作者、まだどこかにいくの？」

作者「あははは……」

ナギ少尉「結局後半が仕上がってなく、二話の形になったのね…」

作者「……ｏｒｚ」

ナギ少尉「しても、今回も3千人以上？
…前回も感想でいわれてたけどオーブ軍人共々なんに？」

作者「まぁ単純にベルリン市民に関しては補填だね…
オーブ軍は本編で…
ザフト軍人はベルリン組は、
そのままＭＳ部隊強化と、お供えものだね～」

ナギ少尉「そういえば最近ヒルダさん暴れてないよね～」

作者「活躍するまえにカオルがあれやこれやこなしてて…フェードアウトにはならないさ…」

ナギ少尉「で次回がＳＥＥＤ編ラスト？」

作者「今回のトリップでのね…さて次回はヘブンズベース壊滅…そして…、お楽しみにぃ」

第183話　SEED　D編　ヘブンズベース壊滅　投稿日20111010

5日目
再びC．E．の世界に出てきたカオル。
ルーロスを出し、
「次はヘブンズベースだな…場所わかる？」

「わかるでち、いくでちよ～」

一路、アイスランド島にあるヘブンズベースへと向かう。

ヘブンズベースに近づくと数多くの船が、
その身をアイスランド島に向けて佇んでいた。
攻略艦隊のだろう…

「今回のターゲットは今通過中の艦隊でちか？」

「まぁ……あん中からもあるな…
重要ターゲットはこれから向かう基地内部にはいるけどね」

「なるほどでちね…」

対する連合艦隊も島に近づくと島を背にして対峙していた。

「じゃ、虚数空間で待機しててな…」

「テンプレでち」
カオルはしまうと分体をばらまき、基地へと向かう…

カオルが同化して基地内部に侵入すると…
ある一室から啜り泣きが聞こえた。
「おふくろ……ごめんよぅ」
気になったので室内に侵入すると、
一人の年若い兵士が泣いて、紙になにかをかいていた。

（ん……覗いてみるか…）
精神へと侵入する…

～ある兵士の記憶～

「あんた大丈夫なのかい？」

「お袋、大丈夫だよ。
なんたって本拠地だし、そうそうおちる事ないさ。
出世して楽にしてあげるよ」

「本当に大丈夫なんだね？
辞めて農地をだがやしても、充分に生活できるんだからね。
」

「大丈夫さ、お袋…戦争もおわってこれからは復興の時期なんだし

……
じゃあいってくるよ！！」

時間はズレ…

ザザザー通信端末は砂嵐のまま…ザ、ザ…
『マルコ！！』

「お袋！！大丈夫かい？そっちは」

『ああ、大丈夫だよ。いきなり空からコロニーの残骸が落ちてきて、驚いたけど畑共々無事よ。
連絡とるにも中々とれず、マルコが無事だか心配したわよ…』

「ごめんよ、災害派遣隊に従事してたからね」

『マルコ、また戦争が始まるって本当かい？』

「そうみたいだよ…けど大丈夫、本拠地の防衛隊だから心配ないよ」

『いつでも辞めても良いんだからね』

「いや…戦争になると任期満了まで徐隊できないよ…
なにあと二年さ、お袋すぐだよ」

『気をつけてね』

時期は流れ

「先日のザフトの親玉の放送をみた、見てないは問わない…
が、これより先わが軍を離反した反逆者と戦う事になる」

「まさかここをせめてくるのですか？」

「ほぼ確実だろう…だが、貴様らの知ってる通りここヘブンズベースは、
強大な守備力をもっている、また貴様らの忠実なる魂がある。おちはしない。
それでも不安だから除隊したい者は隊の前にでろ！！」
（ま、前にでたいが…）

「……貴様らの忠実さを見せつけてもらった！
他の隊では離反者がでて、事故として処理してもらったそうだ」
（じ、事故って…？）

「これより当ヘブンズベースは第２級戦闘待機にはいる…総員解散！！」

～記憶終了～

かいてあった紙は遺書だ…正式な様式のではないのか、
ただノートを切ってかいていた…

そのままばれないように離脱し分体をおいてくる…

また他の兵士は恋人が東アジア連合に属していて、
次の戦闘ではほぼ敵同士になるそうだ…

このように基地内を散歩し、
前回取得してなかったデストロイ等もとる時間もあったが…

『Ｃ１８から３１ゲートはこれより閉鎖されます。各員…急いでください』
時間がきたようだ…

『全区画、Ｆクラス施設の地下退避を開始する。防衛体制オメガ発令』

『第七機動軍、配置完了』

『ニーベルングへのパワー供給は３０分後に開始する』

（各デストロイは分体がとりついた、沖のほうでも分体はいった…
さてどうしよう？）

しばらく考えてたが…防衛等無事に監視できる、基地司令部に足が赴いた…

『デュランダル議長の示した要求への回答期限まであと3時間と少しを残すところとなりました。』

「このチャンネルがいいだろ…ほれそこに東アジアの馬鹿船がいる」

『…合軍側からは何のコメントもありません。このまま刻限を迎えるようなことになれば自ら陣頭指揮に立つデュランダル議長を最高司令官としたザフト、及び、

対ロゴス同盟軍によるヘブンズベースへの攻撃が開始されることになるわけすが、』

「ここらへん一掃するんで?デストロイで」

「ああ」

『…一大拠点です。

開始されればその戦闘はどちらにとっても熾烈なものになることが予想されます』

「全軍、配備完了しました」

「では始めましょう」

「…だが本当に…」

「先手必勝と言うでしょう?どうせ戦うのです。向こうは追い込んだつもりかもしれないが、実際そうではないのだから」

「わかりました……全軍攻撃開始!」

ヘブンズベース基地に配備してある艦対艦ミサイル、対艦砲塔、

その他地対艦ミサイル、リニアカノンが一斉に火を放つ。

「先制攻撃は成功です！敵海上艦隊１８％消滅確認！！」

（うひゃ～酷い目にあったわ…）

（どうした？）

（女子風呂にはいってたらボン！！だし…）（……）

（こっちも救助完了、完全にふいつかれたみたいよ）

「よし、追撃するぞ、機動部隊出撃！」

「攻撃開始！モビルアーマー隊、モビルスーツ隊発進せよ！第二、第三機動軍発進！オールウェポンズフリー！」

「第七、第十五防衛中隊発進！」

『これは一体どうしたことでしょうか。ヘブンズベースが攻撃を開始し致しました。この未だに何のコメントも宣誓すら発せられておりません。しかし攻撃が…』

「生体ＣＰＵ、リンケージ同調率８７％。システムオールグリーン。」

「Ｘ１デストロイ、発進スタンバイ」

「デストロイ、発進」

「まだ敵軍反撃行動にでてません」

「はっはっはっ、いけるではないかわが軍は！さぁ斉射で一掃しましょう！！」

「デストロイに敵群艦隊、斉射命令」

おおっ!!と司令部内がどよめく…

「て、敵海上艦隊７６％消滅…」

『現地中継カトーさん、どうされました?カトーさん?』

「一方的ではないか!まさにワンサイドゲーム!」

(でもここから覆すのがシンクオリティー)

「敵軍、戦闘行動にはいりました!!

敵ＭＳ増援出撃確認!」

「はっ今更か…」

シブリールにとっては勝ったも同然と思ってたろう…

「ふはははは。糾弾もよい、理想もよい。だが、全ては勝たねば意味がない。

古から全ては勝者のものと決まっているのですからね」

「直上にザフト軍降下ポット現出。ルート２６から３１に展開」

ザフト軍降下部隊が対空レーダーに引っ掛かった。

「ニーベルング発射用意」

「現時点を以てニーベルングシステムの安全装置を解除する。退避命令を発令せよ」

「偽装シャッター開放」

ザクウォーリア展開

「直上にザフト軍降下ポット現出。ルート２６から３１に展開」

「照射角、２０から３２。ニーベルング発射準備完了」

「発射！」

アイスランド島より空にむかい、レーザーの嵐がふきあれる。嵐が空気中にオーロラを生む。

上空降下していたＭＳ部隊が…

「効力射、降下部隊全部隊消滅！」

（大量大量！）

『別班の映像クルーからのライブ映像です。綺麗なカーテンがみえますが…』

「敵増援ＭＳ群、接近してきます！」

「デストロイに迎撃させろ！」

デストロイが、変形し切り込んできたザフト軍に対し対空射撃にて迎撃し始めた。

「敵機種不明２機およびインパルス、発見！」

「機種不明？新型か…モニターに出せるか？」

モニターにディステニィとレジェンドが映しだされる。

「性能とかわかるか？」

「不明ですが、ウィンダムが太刀打ちできません…
片方はしかも近接戦闘機だと思われます」

「厄介な…」

「第二防衛ライン破られました！」

「敵モビルスーツ、湾内に侵攻！」

「ええい！なんだあの三機は！デストロイを回せ！攻撃を集中しろ！」

『現在反ロゴス同盟がかなり優勢とみうけますが…』

「二号機、撃沈されました！」
（女の子救助したよ）
「なにっ！？」

「続いて五号機、撃破されました！」
（こっちは男のこだね）

「なにやってんだ！！」

「三号機、大破！」
（女の子だよー）
ジブリールが密かに退室してく…
『やはりこの、天使のような羽根を持つ新型の機体のおかげでしょうか…』
「一号機、撃墜！」
（スティング、幻影プレイ完了、救助ずみっと…）
「ジブリールこれでは…」
「ジブリール？」
「陸上専用機、上陸してきます！」
「第五、第七カメラ沈黙」
「第三機動軍、通信途絶」
「ここまできては…もう抵抗は無理だとおもわれます」
「ええい、まだ兵力はあるではないか！！」
「わしらのいのちがかかっているんだぞ！」

「わかりました…」

「ＭＰつれてきて拘束しろ…将兵の命にはかえられん」
と近くにいた部下にぼそぼそと、告げる…

『これによりロゴスの面々が』
バコン！
「えーい、忌々しい、わしらはまだこれからだ！」
放送してたテレビを壊していた…

しばらくすると…
「うわっ！」「なにをする！」
拘束されてくロゴスの面々とＳＰ…

「白旗だ、白旗をあげろ！当ヘブンズベースは全面降伏をする。国際緊急チャンネルでも流せ！」

白旗後最後の４号機が…
（女の子だったよ～）

（じゃ、全員合流だな…あ、そういえば…アルスだっけ？）

戦闘で戦死確定だったが、記憶を捏造して海岸に転がしておいた。
生身の兵士だった分、記憶の捏造は楽だった…

分体と合流後に、世界扉を潜り……

またもや再びC．E．の世界にでる…

ルーロスをだして乗り込み、

「月面都市コペルニクスへ…」

「あいあいでち」

月へと向かう…

（最終的にはこのような形にできればな…）眼下には月の直径９３ｋｍの中に建設された都市国家、コペルニクスが広がっていた。

この都市国家は中立に位置して、流通、政治的にも重要な立場となっていた。

ルーロスを一度虚数空間に引き込み、

ドーム部と同化して、内部へと不法侵入する。

ルーロスを再びだしてのりこんで…

「アークエンジェルは確認できる？」

「できるでち」

「えーと確か屋外劇場、ローマ型のは確認できる？」

「3箇所あるでちね～」

「ん～分体で張るか…場所は？」

「ここととここ、ここでち」

「かなり離れてるな…それぞれ送ってくれ、
迷子になりそうた…」

2箇所の上空で分体をまき、
最後の3箇所目でカオル自身は網をはる。

はってると、サラと一緒にミーアが野外劇場にきた。
観客側の階段をミーアがおりてく…

ミーアに近づき、後髪にナノマシンを吹き付けた。

（おし、ばれてないな…）

銃撃戦でＡＴフィールドがでると困るので上空に避難し、
分体にはアークエンジェルで合流すると伝えた…

野外劇場…舞台に一人立つミーア、そこに赤ハロが現れる。

『ハロ！ハロ！Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　ｖｅｒｙ　ｍｕｃｈ！』

赤ハロに気づき、座席に座っているミーアが…

「アスラン！」

はしってよってくる

「アスラン！貴方生きて…」

「そこで止まれ！」

何かいってるが生身では聞こえにくい…

劇場建屋からラクスがみえてきた。

「…しよ！あたしだわ！」

「ミーア！」

ミーアが一本下がり…

「あたしがラクスだわ！だってそうでしょ？

声も顔も同じなんだもの！あたしがラクスで何が悪いの！」

手に鞄から銃を構え、

「あっ！」

銃をアスランにうたれ落とされる。

ラクスに諭され泣き崩れ…

「トリィ！」

「ラクス！」

劇場の座席からサラが狙撃しようと狙ってたが、衝撃でだろう…弾がはずれ、
ラクスがキラにかばわれ建物の陰に隠れる。
サラがミーアにつれられて建物の陰に…
「キラ！こっち！」
サラが走りだしてきて、
それを契機に工作員が一斉にはしりだしてく…

あたりにはラクス一行をねらうサブマシンガンの音が響く、

アスランが拳銃で二名工作員を無力化する。

工作員は更に接近してきて、手榴弾を持ち出し建屋内部に投げこみ
「走って！」
キラ一行が女性陣とともに避難、キラが射殺する。

更に手榴弾がサラがなげてくるが、射撃によりサラのそばにおち…
爆発により無力化する。

アカツキが劇場上空に見えてきて、焦った最後の工作員が射殺され、

『大丈夫か坊主共！』
「遅いです、ムウさん」
『あ？』

「ラクス達を早く」

『ああ分かったよ』

キラ一行が警戒しながらアカツキの側によってくる。

『ほらお姫様』
ラクスがアカツキの差し出された手に乗って、
『さあ君も』
「危ない！」
身を投げ出してラクスをかばい、
撃たれ、独楽のように回り崩れる。
「ミーアさん！」
アスランとキラがサラを射殺すると同時だろう…

「ミーアさん！ミーアさん！」
ラクスが駆け寄り抱き上げる。
ポシェットの中から整形する前の写真をラクスに手わたされた。
「ミーア！」
アスランが側にしゃがみこみ…アスランに話かけるミーア…
「ミーア！」
「早くアークエンジェルに！ムウさん！」
力尽き…「ミーアさん！」「ミーア！」

「くっそー！！」
地面を殴り泣き続けるアスラン…

『ハロ？ハロ？ハロ？』
赤ハロが戸惑っている…

カオルはアカツキに同化し…様子を伺っていた。

しばらくして、キラに諭され、アカツキの手にキラ一行がミーアの遺体とともに乗り、
移動し始めた。

港にはいってくアカツキ…アークエンジェルの手前に着陸し、歩行で艦内に入ってく…
いつもなら騒がしいハンガーがこの時だけは静かだった…

アカツキの歩行音がハンガーに響く。
ラクスをかばったミーアに黙祷を捧げる整備士達一同、

アカツキが歩行を辞め、手を床につけると、
ミーアの遺体はアスランに抱えられ、
艦内通路へとはいってく…

通路では、整備士以外のクルー一同が整列し見送る…
ラクスを庇って身代わりとなったミーアに対して、
艦一同最上の敬意をはらってた。

「ラクスさんを庇って?」
「ああ。あの子だけが気付いたんだな。飛び出して…
俺の機体の手の上だったてのに…。情けないぜ」

ミーアの遺体は遺体安置室へと向かう…

カオルは合流し艦に同化しながらついていった。

遺体安置室にミーアがそっと寝台に寝かされ、

「ミーア…すまない…本当にすまない…
本来なら自分らがその役目だった、
けど君が身を呈して…本当に…う…う…」
泣き崩れるアスラン…
しばらくして、軍服に着替えたキラが入室してきて…
「着替えてきなよ」

「キラ…ああ」
と入れ代わりにでてく…

「僕らが気がつかない間に…ありがとう…
ラクスを護ってくれて…」
キラは感謝の黙祷を捧げた…

ラクスが入室してきて…
「ミーアさん……」

「ラクス…」
しばらくすると着替えたアスランが入室してきた。

「プラントの子だよね？名前の他は？」

「いや、分からない。何も聞かなかったんだ。俺も…」

「これは？」

ラクスの手にはポーチ内にあったディスクを取り出してた。

「何もかいてないね、中身は見ないと…」

「拝見いたします。ミーアさん」
ラクスが深々とお辞儀し、死体安置室から一同出ていく…

（おし…）

カオルは実態化すると、擬体と交換し、
救助カプセルにいれ作動させる。

カプセルが無事に作動するのを確認、

（さて帰るか…）

世界扉を唱え…

……
カオル報告

かなりの人員…
ＭＳＭＡ…まとめてドン！！
デストロイ
ユーグリット
フォビドゥンヴォーテスク

セイバー
バビ
ジンワプス改
ガズウート

アッシュ
ディステニィ
レジェンド
グフユナイデッド

ムラサメ
オオツキガタ
アカツキ
ストライクフリーダム
インフニットジャスティス
ドムトルーパー

艦船
タケミカズチ
コンプトン級

第１８３話　ＳＥＥＤ　Ｄ編　ヘブンズベース壊滅　投稿日２０１１１０１０

ナギ少尉「まとめてドン！！がきたわねぇ…でもこんだけ取得したの？」

作者「本当は描写もいれる…予定だったが入れたらえんらい長さになって…
まぁどうせ同化してコピーだ、分体にやらせとけ…
という流れに…」

ナギ少尉「当初は前話のステラ散ると一緒だったのよね？」

作者「まぁ…ね…」

ナギ少尉「で、削ってこの長さね…そりゃなかなか終わらないわよ」

作者「今回は見通しが甘かったと…」

ナギ少尉「でこのあと…何千人？」

作者「えっと…オーブが千強、避難民が3千強、ベルリン守備隊が約２００、

ヘブンズベース攻略隊から、ザフト約１００強反ロゴス５００強、守備隊６００強か…」

ナギ少尉「大丈夫よね？」

作者「後悔はしてない…というか足らなくなるからね。
の前に完結＝太陽系攻略になるか…ならないかか…
一応冥王星ラインまでいったら攻略でいいとは思っているけど…
土、海、天、冥、とベルトね後火もか…でも火と地がグズグズと長引いて、
先に太陽系外に行きそうだけどさ…」

ナギ少尉「生産ライン追いついてるの？人員は？になるのね…」

作者「まぁそういうこった。監視防衛基地だけでもおく方法はあるけどね…」

ナギ少尉「さて次回、帰還？サブタイトルかわるかもですが、お楽しみにぃ」

第１８４話　ＳＥＥＤの世界より帰還　投稿日２０１１１０１７

２００２年１月２２日
横浜白凌基地異世界軍エリアＢ５５ハンガー
「ただいまぁ～」
［マスターお帰り～］
「不在の間は？」
［えっとまず敦煌なんだけど、ハイヴが建築されたよ］
「はぁ？向かっていた部隊は？」
［勿論駆逐及びハイヴを破壊したよ～］
「びっくりさせないでよ…」
［コアが持ち込まれ、ハイヴが根付く、
フェイズ１未満っうの？の状態だったよ］
「縦穴が掘られる段階だったよな…？」

［そそそ］

「で、反応炉の卵のコアは？」

［破壊したと思う…捜索したけど、反応無し］

「一応部隊の被害報告は？」

［疲労度が若干上昇しただけ～］

「だろうな……」

ガンパレの第六世代の烈火部隊である…

初参戦した学兵卒もいるが、鍛えに鍛えあげた部隊であり、

そうそう被害はでるとは思わなかった。

「と、土星攻略艦隊は？」

［無事に出発したよ～一応攻略ルートが土星の衛星と、冥王星だね］

「まぁそうだろうな…」

［オルクスにむけてはビッグツーが向かったよ～］

「改造はすんだのか？」

［うん、月面との軌道レール敷設も終了したしね。ビッグスリーも間もなく、
でビッグワンと交代でいいんだよね？］

「ああ」

［ビッグフォーが明後日完成、ファイブとシックスがまだすこしかかるよ～］

「探索チームは揃いそうだし、探索区域内の軌道レールと、
長距離ワープ専用地域の確保したら、
後は打撃艦隊の増設まちだな…
とりあえず3個艦隊分は欲しいしなぁ…
あと木星への軌道レールの敷設も急ぎたいね」

前にも話がでたが、
ワープには何もない空間が必要であり、

出現位置が星系にちかければ近い程シビアになってくる。

出現位置にデブリがあったら……
言わなくともわかるだろう…

なので短くとも空間ごと移動できるフォールドシステムを搭載した船の方が安全面は高い。

が、フォールドシステムは時間のズレによる副作用も確かに存在する…
エネルギーチャージの問題点も…

両方搭載すれば解決だが艦の大型化は免れない状態になる…
またメンテナンス面でも…

太陽系内、外殻を含めて攻略したら、両方のシステム搭載型のハイブリットシステムが、
遠征艦には必要であろう…

が、軌道レールがあれば銀河鉄道車両は、光速以上にスピードが出せる。

また無理に重力脱出速度をGをかけて出さなくとも、
大気圏内軌道レールで大気圏外へと車両がすすむ事ができる。

ただ、軌道レールを付設すると、その付近は艦船の航行や、
飛行は禁止となる。

特に揚力で飛ぶ飛行機なんかが万が一軌道レールと接触すると…

翼がもげる等大惨事にはなるので注意が必要でもある。
それでも輸送力は宇宙船使うより格段にＵＰする事になるだろう…
必然的に必要となるものである。

チューリップはあくまでも軍事用用途、
常用使用できるシステムが銀河鉄道にはある。

［横須賀駅が明後日なくできるね］

「だな…これで輸送力アップするな」

輸送力が頭うちだった横浜マスドライバー施設、
それに変わり銀河鉄道を地球ーＬ５コロニー中央ステーション、交通局をかねているが…と開設の段取りとなっていた。

これにより、２０両編成で、１本につき１２００名以上輸送可能となる。

自転問題は、軌道上ステーションと、
宙空間側ステーション間でのガイドレール方式により解決をはかっていた。

［こけらおとしにはでてね］

「了解」

「その位か？」

［あと昨日なんだけど、嫌な情報が入って来たんだよね…］

「嫌な情報？」

［前、ＮＧだした生物兵器あるでしょ？］

「ああ…制御が効かないゴキブリだよな」

［そこの研究所で死人が出たんだよ…］

「は？……う、え～とまさか」

［まだあんまり流れてないけど…
まず間違いなく肉食の何かに食われて…］

「なにかというか…ゴキブリでない？」

［うん…みたいだけど…］

「前資料貰ったよね？
あれから計算すると、どうなるの？」

［えっと……行動範囲がこう広まって］
１０日で半径５０ｋｍ…１日５ｋｍの範囲で広がってく…

［で、範囲内部の住民がこう低下して…］

一ヶ月後には中心部から人がいなくなる凶悪さであった…

「……対抗措置が物理的にしかないんだよな……
蝿たたきで潰せる時もある…か…」

物理的には通常のゴキブリ並であったが、
肉を食い破る歯と口、及び分裂速度が異常であった…
その異常的分裂速度の為、ＮＢＣ実験室をベークライトで硬化させ、
動きを封じる事しか方法がなかった。

「……あと、普通のゴキブリサイズがいたいな…
家具の隙間等に篭られて、寝てる隙に接近されて食い殺されるか…」

研究所の死亡場所リストに仮眠室ベッドの上で、食い殺ろされてのもあった。

おちおち寝てられなくなる事は目に見えてる。

さらに薬物や青酸カリ等の劇物にも耐性があり、
これぱっかりはＢＥＴＡの肉を食うに主眼があった為の事だろうが…
市販のゴキブリ対策薬品は一切効かない…という事だった。

「その研究所から流出してると思う？」

［今のとこ情報集めてるけど確定ではないけど…してると推測されるよ」

「……なんで処分しなかったんやら…」

［開発主任が死亡リストにあるからわからないね～」

「対策としたら？」

［超小型対Ｇ兵器、自走式、独自判断型が理想的だね」

ふ～むと、唸る…
（ゴキブリ、ゴキブリ、ゴキブリほいほい…ほいほい？…あっ）
「ほいほいさんだぁ！」

［ほいほいさん？］

「身長１０ｃｍの対害虫駆除ロボット」

［へぇ…１０ｃｍねぇ…確かに駆除には最適かも…
で、どっかの世界にあるの？］

「勿論あるよ。確かコナミのゲーム、アニメとしてね…
ただなぁ…」

［ただ？］

「そこまでプレイしてないのど、手に入るかどうか？
になっちゃうんだよなぁ…現物が…」

［ん～…開発部に話もってく？］

「それが早いか…期限早めで出来次第量産体制に…ってね。
市販できるようにも付け加えておいて」

［了解、マスター…今ところはそんなもんだね］

「攻略部隊の準備は？」

［変わらないよ。全力投球中ね］

「ん…じゃあ明日救助した人のか…一日潰れそうだなぁ…」

［…何人？］

「６千人近く」

［……わかった、みなにつたえとく…マスター、お休みなさい］

「ああ、お休み」

午前９時、救助した人員総数…６千人？……の人員を何回かに分けてシェルターをだした。

因みに今横浜基地には前の様に大多数の人員はいない。
ほぼ人員は佐渡基地及びＬ５基地と、月面基地へと移っていた。

警備の為に多数のＴ－８５０が立っていた。
またカプセル収容する医務室がパンクし、急遽増設し始めてた。

まずはオーブ軍の総数、千人以上で正確な数が不明であったが…

「トダカ一佐ですね？自分が、異世界軍責任のカオル大将です」

「オーブ軍黒海派遣隊司令官、トダカ一佐であります！！」

「えっと異世界軍に加入を問いますがいかがでしょう？」

「その前にいくつか質問致したいのですが…よろしいでしょうか？」

「はい。どうぞ」

「国は、オーブはどうなりましたか？」

「あのあと、アマギ一尉達がアークエンジェルに合流しました。
で、オーブはユウナの悪手により再び戦火に晒されます」

クッと悔しげに表情になるオーブ兵士達…

「が、カガリ・ユラ・アスハが戻りユウナから実権をとりもどすと、
軍を掌握し、押し戻し国を護りきりました」

オオ

「世界はどうなりました？」

「皆さんが死んだあと、世界は戦争を司る連合の後ろ盾、武器商人のロゴスと反ロゴスに別れました。
そしてザフトが組みした反ロゴスが勝ち、
次にデュランダル議長ＶＳ反議長の流れになりました」

は？な表情…

「まぁ最終的にはオーブ、アークエンジェルが組みした反議長派が無事に勝ち残り、
戦争は終結した…事になりますね」

「そのデュランダル議長の話がわからなかったのですが…」

「ディステニィプラン…人の遺伝子を解析する事でその人の運命がきまり、それ以外の道はない、
徹底的な管理社会を全世界的に導入する…
を連合を弱体化したあとで提唱したわけです…」

「…カガリ様はそれに反対されましたね」

「はい。まぁそういった流れですね」

「わかりました。ありがとうございます。
ところで我々が参加するとして…どのような役割を？」

「自分としたら、どちらかといえばセルフディフェンスにあった戦い方がメインでしょうから、
宇宙攻略艦隊の護衛艦隊をお任せする事と考えてます」

「宇宙攻略艦隊？」

「この宇宙はＢＥＴＡによって支配されてるといっても過言ではありません。
その宇宙に楔をうち、生物のすめる地域を増やして、何時かはＢＥＴＡを駆逐する…
一世代ですむわけがないですが、それの先陣をお願いしたいと思います」

「すぐには答が出ませんが…個人的には参加したいと思います…否参加の場合は？」

「元の世界には残念ながら戦力が崩れると思いますので…
すぐには…はできないと思います。
終結後に記憶喪失の形か…
またはこちらの世界で民間人として…でしょうか」

「わかりました。後ほどご報告でよろしいでしょうか？」

「構いませんよ。まだまだ時間はありますから…」

仮宿舎にご案内の形になった。
救助したオーブ軍人は、ＭＳパイロットより遥かにタケミカズチの整備クルー等、
準戦闘要員が多かった。

オーブ軍の護衛艦はシステム化が進み、
最低限１３人で動かす事ができる。
そこに諸々含み、６０位の警護要員含めたクルーが一隻の船に乗り込んでた。

一方、タケミカズチはＭＳ運用前提の３胴艦で、今回運用していか機数が１２０機程搭載していた…
１機あたりの整備士も最低限５人以上必要であり、
またそれに伴う警備、衛生等の人員もまた増えまくる…
という事になったわけだ…

さて、戦艦ドックからオーブ兵が移動し、
その入れ代わりに避難民の入ったシェルターを出し、
そのままシェルターの中にはいる…

ドイツ語で翻訳しながら、スピーカーで語りかける…

「ベルリン市民の皆さん、振動がきて驚かれたかもしれませんが、避難先の世界につきました。
さて、皆さんも既に自覚あると思いますが、本来でしたらあの世界で死んでました…
身内の方と別れた方もいるでしょう…
ですが、皆さんは生き残りました。
さて皆さんのこれからについてですが、
こちらの世界のドイツ国民として暮らしてくれれば幸いなのですが、勿論廃墟となった元の世界に戻る選択もあります。
ですが、その選択は避難先のコロニーで一週間程暮らしてみてから……でご決断をお願いします。
詳しい事は自分の脇にいるコバッタ達が、１０人程のグループ単位でつきますので、
ご質問なり聞きたい事ありましたら聞いてください」

コバッタ達がわーっと入ってくる。

「避難先コロニーまでの期間の仮宿舎へご案内いたします」

で締めくくりシェルターからでる。

次に反ロゴス同盟に加入していた５００強、の人員を入ったシェルターをだす。

だいたいが、戦闘前の際に艦ごと撃沈され救助された口。

本人らが出たくとも艦長が出撃許可をだしてなく、また更に艦隊司令も出撃許可をだしてなく、

待機命令の状態に奇襲の一斉射撃により爆沈、
各々が出撃しようとしている最中にデストロイによる射撃で艦ごと溶かされた…

運不運か配置による運命と…

（比較的バランスはとれてるが、艦人員が多めだな…）

オーブの方々同様、後ほど新設の宇宙攻略艦隊の護衛艦隊に…
とご案内した。

さて、ヘブンズベース守備隊６００人…

彼等は所属している部隊等がヘブンズベースについてしまった為に、軍人として任務を果たし、心の中では間違っている…
が軍に属する以上、その職務を全うし、死亡した人が大多数であった。

救助した人員に関しては…だが。

狂信的なブルーコスモスたしかにだいぶいた。
勿論救助しかけたが、リリースした。

あと一部にジレンマ、恋人と敵対や、親等…も救助したが、
あの戦いの跡地に帰す目論みだ。

人員とするとタンクや歩兵要員、基地職員等が多かった。
比較的モビルスーツパイロットは少なめであった。

配備先が宙ぶらりんになったが、ご案内…
また未練がある等は記憶喪失して跡地に気絶状態でおいてきた。

後は、ベルリン守備隊が約２００、とヘブンズベース攻略隊約１００強…一くくりにしたのでわかるが、ザフト軍人だ。

ベルリン守備隊はデストロイに機体性能で…いや相性で蹂躙された。
実際のところ彼等は元々ジブラルタル基地所属の守備隊で、
優秀であり、デストロイ戦以前にはかなりの戦いをこなし、

その度、連合の進撃をはね返してきた。
その為にベルリン守備隊に選任され進駐してきたわけだったが……
ＭＳパイロットの比重が多く、配備先はまだ未定となる。

何人が赤卒の新兵をヒルダさんにまわしておくとしよう…

次にヘブンズベース攻略隊…
その中には女性だけで構成された中隊があった…
その他の降下部隊からもかなり救助できた。

まぁとりあえずどっかの部隊に入ってもらう事になるだろう…
最後に…

エクステンデット達が入っているシェルターを出して、中に入っていった。

「こんばんは」

一気に警戒の視線が集まる…

「しっての通り…いや皆さんは意識が無くなった後、どうなるかわからなかったわけですよね?」

疑問の表情が浮かぶ。
それを受け、ラボの地図をだす。

「君達が入った部屋はここ、でこの部屋の名前がガス処置室、麻酔ガスを使って動けなくする部屋…
そしてその部屋の下にあたるのが処分室…
君達をこうネットをはってこの部分で次々と救助したわけね」

何人かがえ?それって、と聞きかえす。

「気がついてる人が何人かいるみたいだけど、
君達はガルナハン陥落を受け、
ラボが閉鎖の際に殺害処分が決められてしまった…
ということなんだ」

ラボの方で入手したマニュアル、命令書等を出し…

「まぁそういった事なんだよね…で、

救助したからといって、別に君達にラボ同様に実験とかどうにかする…というわけではありません。
ただ人並に幸せになってほしいだけ…」

「人並に？」

「そう…。人並に…
あの世界は人一人の命が軽すぎというか、
扱いを間違ってる気がしましたから…

ただ、外で人並に暮らすには君達は強化されすぎました。
それは自覚して…る人もいればしてほしい人もいます」

互いにみて、やっぱり等の表情がみれる…

「そこで二つの道がありますが、強化した力を失って常人となり市井で暮らすと、
強化した力を失わずにわたし達の軍に協力して貰うか？になります」

「力を失う？できるの？」

「協力？どんな事？」

「力を失う事は異世界軍の生体工学で可能です。
カプセルに入って頂くだけ、
協力は対ＢＥＴＡ戦へのパイロットや陸戦隊等でしょう。
勿論すぐにという結論は求めません。考えが固まったらでお願いし

ます」

コバッタ達がきた。

「まぁ今日は約6千人救助加入等で対応に追われてるので…
後ほど君達の暮らす場所等の希望を伺います。
とりあえずコバッタ達が宿舎に案内するんで…あとよろしく」

「了解、マスター」
エクステンデット達がついてった…

（結局一日つかったか…ステラ達はあすかな？）

……
カオル報告

オリジナルハイヴ攻略後にむけ、
着々大規模人員加入か…な？

第１８４話　ＳＥＥＤの世界より帰還　投稿日２０１１１０１７（後書き）

作者「ＳＥＥＤ世界より帰還しました」

ナギ少尉「人類滅亡フラグ新たに立ちました」

作者「……多分ホイホイさんが間に合うさ…」

ナギ少尉「本当？というか何故とりにいかないの？」

作者「ん～ホイホイさんレベルならこっちで既にできるとおもうから…さ」

ナギ少尉「確かにねぇ…害虫駆除の小型ロボットだし…」

作者「重力がある地球では小型になればなるほど、
重力に対する影響がすくなくなるからね～
その分、ロボットは作りやすいんだよ」

ナギ少尉「ＡＳＩＭＯなどもそうよね～」

作者「……まぁそうだな。これから夏場にはホイホイさん！絶賛発売中！となるさ」

ナギ少尉「話かわるけど、今回加入はいないの？」

作者「さすがに当日加入するには規模がおおきすぎた…って事だよ。個々の希望をきいて…だね」

ナギ少尉「で、帰れるかもなのが、ヘブンズベース守備隊と、ベルリン避難民だけ？」

作者「だな…オーブはその後の守備に加わるとまずいし…」

ナギ少尉「馬場一尉は勿論？」

作者「救助済みだけど、上官が応対してるから発言がないだけだね」

ナギ少尉「なる程ね…さて次回は…間開かないよね？」

作者「今のとこ６０％くらいか…早めにしあげます」

ナギ少尉「次回、オリジナルハイヴ攻略作戦始動前…おたのしみにい」

第１８５話　オリジナルハイヴ攻略作戦始動前　投稿日２０１１１０１９

２００２年１月２４日

昨日は結局救助した人員の説明等で一日が潰れてしまった…

（今日の予定はこけらおとしがあるよな…）

銀河鉄道の開通式…

（あとは…攻略部隊は明後日にか…）

オリジナルハイヴ攻略へと準備は進む。

（にしても、まりもにも子供か…）

昨日一週間ぶりに自室に入ろうとすると、屡衣とまりもが揃ってまっていた。

屡衣はお腹が若干膨れてきはじめていた。

そして…「カオルさん、私にも…私にも子供ができました！！これで夕呼をおばさんと呼ばす事ができるわぁぁ！！」

と涙を流しながらカオルに抱き着いてきた…

（あとは殿下だけどなかなかできないよな…こればっかは）

受胎するかしないかは神のみぞ知る…

中に出してれば何時かは……であろう…

『本日は、銀河鉄道地球ステーション、横須賀駅の開業式、及び銀河鉄道本線開通式にご来場いただき誠にありがとうございます。
本日銀河鉄道始発の１番列車は午前１１時発Ｌ５中央ステーション行きです。
発番線は１１番線となります』

横須賀駅は混み合っていた。
常磐リニアの延長による始発駅化及び、横浜国際空港への横須賀新線の新設、
そしてコロニーへの銀河鉄道の新設…

地球でののターミナル駅の開業したからだ。

常磐リニアが１番から６番線、横須賀新線が７番から１０番線、
銀河鉄道が１１番から２０番線までのホームをもち、
銀河鉄道は地下ホーム、常磐リニア及び横須賀新線が高架ホームとなっている。

地上レベルは自由通路及びエキュートとなり、
これから旅立つまたは帰ってきた人を楽しませる事になるだろう…

横須賀新線だが、横浜白凌基地からの引き込み線の役割をもっていた。
白凌基地で作られた車両等は横須賀新線を経由して本線へとはいる。
また銀河鉄道の貨物列車操車場も兼ねる、横須賀東港駅への接続をしていた。

午前１０時、引き込み線から構内へ１番列車となる特急型の１１１号が入線してきた。

外観は４８５系を模したデザイン、
この世界にＬ特急がないと知ったカオルが外観変更させて作り上げた車種であった。
ボンネット型または気動車のが今だ主流となっていたからだ。

「ただいま入線してきた車両が、宇宙へといく夢の車両です。
今だわたくしも信じられません！地上を走る列車が、
そのまま空を飛び宇宙へと到達するこの事実を！」
ホーム上に陣取ったマスコミ各社、内一社のレポーターの発言だ。

日本帝国では重慶ハイヴ奪還後、比較的に統制等が緩められ、希望がでてきた。

勿論マスコミも同様であり、西日本大侵攻前程とは程遠いが、段々と復活、
日本コロニーでは、全国ネットのフジテレビ、ＴＢＳが移籍し復局した。
テレビ朝日は帝都で復局準備にかかっていた。

「この夢の車両はＬ５中央ステーションまで約2時間で結び、
我が国の領土の各コロニーまで乗り換え時間こみで、
３時間と大幅に短縮されます」

「いやぁ～3日間徹夜してかった買いがありましたよ、この一番列車は２００枚しか一般チケットでなかったらしいですよね？」

『Ｌ５中央ステーション行き～まもなく発車します。テープカット式がありますので乗車してお待ちください』
のホームアナウンスが流れる。

『それでは、１番列車のテープカットにご来賓の方々お願いいたします』

のアナウンスとともに、日本帝国首相、渚カオル、帝国国土交通省大臣等の面々、
またアメリカ国務省大臣、大東亜連合交通省大臣などがテープカットにあらわれる。

『それではご準備よろしいですね？ではテープカットお願いします！！』

フラッシュとともにテープが切り落とされた。
ファ～～ン
軽い警笛とともに銀河鉄道１番列車が出発する。

「１番列車が動きだしました！！
これより中継は高架階のテレビカメラを介して放映します！」

銀河鉄道が軌道レールにのり昇ってく……
（さて）

開通式も無事終わり、ハンガーに戻ってきたカオルは、
出来上がったばっかりのビッグフォーをみていた。

（こいつの行き先はまだ未定だったんだよな…）

基本宇宙攻略艦隊の偵察索敵専門として随伴していた。

また今回の反対側にそうたいするオクラルに、ビッグツーが派遣され、
そのまま外宇宙方面への先行偵察にはいる。

あとは攻略艦隊の完成まち…だったが…

（まだまだ宇宙に関して建造能力が足らないよなぁ…）

今攻略艦隊は、Ｌ５のプラットフォームにてサラミス改等護衛艦隊を、
Ｌ４にてコロニーレーザー及びジェネシスを建造している真っ最中である。

プラントから材料から加工した部品がだされ、
多目的輸送挺でチューリップ経由でプラットフォームまで運ばれ、
組み立て作業にはいる…

組み立て作業もそうだが、輸送もこれ以上ペースをあげられない状態にきてる為、
どうしても頭打ちになってはいた。

（マクロス世界の工業衛星ほしいなぁ…）

マクロス世界の古代人の残したゼントラーディや監察軍の工業衛星…
日産の世界である。

いやそもそも、おおきさが違う…

いっても一日で取得できるわけがない…

（……ほしい）

確かに完成すれば、建造能力が大幅にあがる。
またプラントを内部に増設でき、チューリップも大量にかこう事が
できよう。

（……ん～取得してつくりあげるにも…時間かかるよなぁ…）

多分目算で５から１０年位はかかると思う…
が価値はある。

（あっそういえば……）

破棄された工業衛星があるのを思い出した。
ゼントラーディは修理技術がない。
体型のおおきさで古代人が扱ってた部品の修理は不可能、

壊れたユニットの交換だけしかしない。
壊れたら使い捨ての世界だった。

（破棄された工業衛星回収しちゃえばいいじゃん）

幸いにもキャーティア技術によるステルス機能及び通信技術が、
ビッグワンシリーズにはついている。

（じゃあいかすか…）

「ちょっとビッグフォーをマクロス世界に送り込むよ」

［ん？なんで～？］

「破棄放棄された工業衛星の回収、修繕してこの世界での造船速度の加速させるんさ」

［へぇ～……放棄された工業衛星ね～…そんな都合よくあるの？］

「ああ、あるさ。
なにせ監察軍が２８万年前にも、ゼントラーディ軍のグラージ自動製造工場を破壊した事だし」

［その２８万年前のが残ってるかな～？］

「ま、それはポイントとして…大規模星間戦争のあとだ。記録から抹消されたのはあるはずさ…」

［なるほどね～］

「まぁ回収できればできたとして、できない前提でもコピーはして、建造開始しておくべきだけどな…けどコピーに何日かかるやら…がなぁ…」

［オリジナルハイブ攻略後だね、建造プランは…］

「まぁ…な…っとサクッといってくるわ」

［いってらぁ～…あＴ－１０００最近みてないけど？］

「あっ……後で回収してくる…」

ビッグフォーを虚数空間に入れ、

世界扉を唱えた。

～マクロスの世界～

マクロスの世界、時代はＦの少し前あたりの地球にでたカオルは、
ビッグフォーをだし…機関車内部で情報を受け渡していた。

ターゲットはロストし稼動してない全自動生産工場衛星…

また２８万年前に破棄されたグラージ生産工場衛星…

（よしっと…）

「機関車」

『マスターなんでしょ？』

「頼むな」

『了解しました』

ビッグフォーの外にでると…
光学迷彩がかかり、見えなくなったビッグフォーが発進していった。

（さてと次か…）

世界扉を唱える。

～フルメタルパニックの世界～

フィリピンにあるセーフハウスだ。

「マスター！！」「マスターだ！」「お会いしたかったです！」

「久しぶり、元気そうだな」

「報告が…この世界に対しての影響はありませんでした。
ここにかかれている通りになってます」

千鳥かなめは卒業式に無事に出席し、
相良ソウスケと校門で、あついキスをしていた映像がうつっていた。

「おつかれさん…じゃこの世界ではもうないな…撤収作業だ」

「了解！」

現金等はすべて資源にかえ、有能なエージェント3人と共に3時間後に撤収し、

世界扉で元の世界へと戻る。

翌日…

オリジナルハイブ攻略の為参加する人員に、
今だ訓練生という身分がいた…

彼女達は攻略作戦参加の為に卒業式を経験し、正式な軍人へと雛だつ…

午後のミーティングルームにて、訓練教官であったまりもの他に、国連軍士官が説明に同席していた。

「さてきみらの配属先だが…、榊少尉、球瀬少尉、鎧衣少尉、以上3名の者は同一部隊である、横浜基地司令部直轄の特殊任務部隊、Ａ－０１連隊への配属がきまった。おめでとう」

「はっ！拝命いたします！」「はいめいいたちっ…ます」「拝命いたします」

「御剣少尉、彩峰少尉以上二名の者は、異世界軍、特殊作戦群への編入要請がきている。
これは強制ではない。本人の任意によるものとするが、その返答はいかに？」

「……拝命いたします！」「…拝命いたします」

「では御剣少尉、彩峰少尉以上二名の者は諸手続き等あるので１３３０人事部へ出頭するように…
他の者は１３３０、このミーティングルームに待機、以上解散！！」
いちどまりもと士官が退室していった…

「……もうあえないのかな？」「彼等は殆どわれらと共に行動して

る…大丈夫だ」「みんなとヤキソバパンまた食べる」
「けどなんで?」「わからないけど前衛的だからかしら?」

「聞いた話、強化実験」「おぬしその話どこで?」「白銀から」「真か?」「うそ」
「……」「でもロケットパンチ生身でうてるらしい」「慧さん~」

「まぁ所属部隊は違う事になるけど…冥夜、慧…いつまでも私達一緒よ」

「ああ。そなた達と共に…」「うん。わかった」「慧さん」「御剣さん…」

「では行くぞ彩峰」「うん」

ミーティングルームより彩峰と御剣がでていった…

おなじ頃、医務室では…
まだかなりこんでいたが、空になったカプセルが少しずつでてきた。
先のオーブ軍の重体重傷者やベルリン市民、ラボでのカプセル入りが、
次々カプセルからでてきはじめたからだ…
そして医務室のある一部屋にはカプセルが7個ならんでいた…

カオルが操作し、カプセルの3つの蓋があく…

「ん…ん…」

「あたま…いって…」

「く…っう…」

「おめざめいかがかな？」

「うっぅ……だ、誰？…」

「あ、アウル？」

「ス……テラ？」

「おいおい、どうなってんだ？これは？」

「きみらが撃墜されかかった所を救助したり…でこの世界に連れてきたわけなんだよ」

「あのガンダム！」

「シン……」

「記憶ねぇなぁ…」

「でもって確かこんなの設定されてたんだよね、死、お母さん、夢」

「ヒッ！」「クッ！」「！！」

「あ、あれ？」「しぬ…？」「ん？」

「きみらに課せられてたブロックワードは、このカプセルで解除したよ、
後定期投薬等の必要もなくなったってね」

「……自由になったのか？」

「ああ、自由になったんだよ。きみらはね…
だけど自由になるには強すぎるでしょ？」

「むぅ…」

「いいじゃん？つよきゃさぁ」

「アウル？」

「まぁそういったわけにはいかないんだ…なんで選択肢が二つ、常人並に力を落とすか、
自分らの軍に入って対ＢＥＴＡ戦に協力してもらうか？だね」

「ＢＥＴＡってなんだ？」

「食べ物？」

「まぁ…これから見てもらう紹介映像でこの世界の事も含めね」

ＤＶＤを流しはじめた。

……

「とまぁこんな世界なんだよ」

「力かしたるよ…なんだい？あの気味悪い生物はさぁ」

「同じく…生き物ぶち殺す」

「二人に同じだな」

「ありがとう」

「ところで乗る機体はなんだ？」

「まぁおいおいと…ね。今はとりあえず学校にいってみない？」

「学校か…経験ないな…どうだい？アウル、ステラ」

３人とはなしこみ、夜はふけてく…

……

カオル報告

明日いよいよ攻略作戦始動…

第１８５話　オリジナルハイヴ攻略作戦始動前　投稿日２０１１１０１９（後書

ナギ少尉「あれ？技術検証は？」

作者「ＳＥＥＤの？」

ナギ少尉「そうよ、デストロイ出さないの？」

作者「あ～…間に合わないというか別件で動いてるからなぁカオル…」

ナギ少尉「何別件って？」

作者「ネタばらしになるから秘密、
まぁ技術検証はオリジナルハイヴ攻略中か、後だろうな」

ナギ少尉「オリジナルハイヴ攻略後ってチート過ぎると思うんだけど…
弱体化するんでしょ？」

作者「あ号がいなくなってだよな…が、
正直人類は追い詰められてたのをなんとかせき止めてた…

だから楽にしてあげたいんさ…」

ナギ少尉「まぁね…」

作者「それに宇宙、太陽系がまだまだあるよ…追いつかないし、そっちは今だね…」

ナギ少尉「バーナード星系もあるもんね。じゃあ、次回、オリジナルハイヴ攻略、桜花作戦始動おたのしみにぃ」

第１８６話　オリジナルハイヴ攻略　桜花作戦始動　投稿日２０１１１０２２

２００２年１月２６日未明…

場所は重慶基地

人類反撃の最前線である異世界軍の基地と化した、
ここ重慶基地に続々と陸上艦船が入っていく。

また中型チューリップが使えない大型機体群も、空輸にて運ばれていた。
エヴァンゲリオン、勇者ロボット等…がリフトや自走でメインゲートに入っていった。

元フェイズ５になりかけだったハイヴを再利用した基地では、
多数の大型艦船を収納できるスペースができてた。

またトレインギャロップがその編成を崩さずとも、
直接地上に出られる広大なスペースが確保されていた。

チューリップ場では、
多目的大型輸送挺に乗ってきた陸戦強襲型ガンタンクが、
接地、タラップが下りるとともに自走し、
目的のカーゴにおさまりにいく、

空になった輸送挺がチューリップにはいってく…

そんな光景がみられてた。

現在ここ重慶基地にはオリジナルハイヴ、
カシュガル攻略の為の艦隊が集結中であった……

土星近海にフォールドを終え、土星に近づく攻略艦隊…

ビッグワンの交換に、土星にきたビッグスリーによる探索の結果６４個の衛星の内、
ＢＥＴＡがハイヴを築いてたのが２つと判明した。

まずはタイタン、
そして土星の輪の中にある衛星ディオネ…

地球以上に濃い大気をもつ最大の衛星、タイタン。

直径５０００ｋｍ程の大きめの星であり、ＢＥＴＡは、８つのハイヴをつくりあげ、
タイタンを埋めつくしていた。

艦隊司令室では…

「タイタンは監視迎撃基地を作り上げるだけでしかないか」

「ですな……相性が悪すぎる」
ドズル閣下とその副官が話あっていた。

攻略艦隊の攻撃方法はコロニーレーザー主体による軌道上からの大規模出力攻撃。
このままタイタンのハイヴを攻撃すると、
タイタンの分厚い大気に阻まれ拡散し、
地表周囲８００ｋｍと数十ｍの岩盤を焼く程度の効果しかのぞめそうになかった。

それでは意味がないのである。

一度の一連の攻撃により反応炉を攻略…それがこの宇宙攻略艦隊に課せられた使命であった。

監視迎撃基地とは、これ以上設営された範囲、この場合タイタンからのＢＥＴＡ拡散防止による、
落着ユニットの宇宙空間上での迎撃基地になる。

基地要員は主にターミネーター達で、直接操縦されたＶＦ－１７１の迎撃部隊による、
反応弾による攻撃となる予定だった。

「当艦隊は、衛星ディオネを攻撃する！、
衛星タイタンは監視迎撃基地を設営のみにする！」

「地球へ報告」

「了解」

地球の司令室へフォールド通信でもって瞬時に内容が伝えられた。

衛星ディオネは直径１１００ｋｍ…

ギリギリＢＥＴＡが落着に選定するサイズの衛星である。

薄い大気が存在するながらも、さほどコロニーレーザーに影響しないレベルであった。

表面を氷で覆われており、内部構造に岩盤が存在している。

ディオネにあるただひとつのフェイズ９相当以上のハイヴへ、

土星攻略艦隊はコロニーレーザーを撃ち込むべく、

軌道修正をしはじめていた。

２００２年１月２６日正午

重慶基地

『われわれはこれより約３０００ｋｍの道程を制覇し、

目指す目標、オリジナルハイヴを攻略する。

敵ＢＥＴＡの戦力は激減している。今こそ攻略に最適な時期である

！！

われら異世界軍の力をみせつけよ！

そして、更なる進軍で地球上からＢＥＴＡを叩きだすのだ！！

これはその為の一歩である……

全軍、前進せよ！』

～横浜基地異世界軍司令室～

「第１砲撃艦隊前進！」

重慶基地のメインゲートより、ビッグトレー砲艦型が順次前進していく…

ここ司令室では演説をおえたカオルがスクリーンをみていた。

今回参加する戦力は、

ほぼ地上における攻略艦隊としての戦力すべてであり、

まず艦隊として、

トレインギャロップ１５０隻、

ビッグトレー砲艦型が６０隻、

ミサイルビッグトレー３０隻、

及び対空型１０隻、

コスモクリーナ搭載ギャロップが４隻。

以上の艦船が投入される。

各基地の護衛隊として残っているのが、
ミサイル型１０隻であり、
各戦線に貸し出ししている対空換装型、砲艦型以外には、
トレインギャロップが１０隻のこすのみだった。

異世界軍の現存する打撃艦隊戦力をほぼ投入してる。

毎回毎回そうだが……

メインゲートからすべてで終わり艦隊編成を組み、
進撃し始めた…

先頭を走るグループに砲艦隊、
その後ろにミサイル艦隊が追従している。
中心部に対空ミサイル艦、

左右にトレインギャロップがついてきていて、
トレインギャロップの護衛に６１式改、
全体的にホバートラックがカバーしている。

トレインギャロップに搭載されてるのは、
モンスター改１０００機、
陸戦強襲型ガンタンク６０００機、
６１式改１００００両、
６１式重機関型２０００両、
魔対空型ティエレン５００機、
ホバートラック、５００両、

有人部隊にＢ－０１連隊、沙霧連隊、Ｄ－０１連隊、ＳＰＲ群等がいる。
新しい機体は搭載はされてない…が、
物量には物量を、補給絶やさず撃ちまくれ！
が信条の異世界軍らしさの大規模陣容になっていた。

Ａ－０１は凄乃皇と同行の為後程合流予定となる。

また大東亜連合軍から１個機甲師団、
帝国から１個甲連隊、
国連軍から１個師団、
中華統一戦線から３個師団。
が搭載されている。

攻略艦隊は時速約８０ｋｍのスピードで、敦煌まで１日で踏破し、
進路をかえオリジナルハイヴへ向かう…

司令室からハンガーへ移動したカオル…

Ｇとタイタンの報告を受け取っていた。

「……初の民間人の死者か…」
研究所のあるそばの仙台市青葉区西公園にて小学１年の男子の白骨死体が発見された。
捜索願いがでてから丸１日目の事である。

世間ではまだ殺害方法なんだ？

と騒がれているが、ほぼ間違いなくGの仕業であるのは確定的だった。

BETAでない原因が骨が完全な形で見つかった。
また完全に勢力圏外である。

他の薬品等でないのは骨に薬品等で変色等ない面、

また他の肉食獣でないのが、
きっちり綺麗に骨をのこして喰われていた面であった。
軟骨等は残っている。

［今のとここの一件だけが発覚したけど、ほおっておくと…］

「仙台市が一ヶ月後にはか…」

［なる可能性大だね…］

「しかも世間様は冬場だからゴキブリ対策を怠ってると…
あと東北だし…」

［無人化がすすみそうだね］

実際の所、北に行けば行く程この世界においてもゴキブリ対策はしてなかった。

むしろ難民キャンプでは食料源としてから揚げが、闇市で高値取引されてたくらいだった…

難民キャンプ等は既になく、衛生、治安面ではるかに向上していたが…。

そんななかの不審死であった。

「……でホイホイさんはどうなってる？」

［試作品が一応はできあがってるね］

「さすがヒルダさんの開発部♪…もってこれる？」

［ちょっとまってね～］

（……早いとこなんとか手を打たないと、日本本土が滅亡するよな…）

［もってきたよ～］

「ホイホイさんそっくり♪」

こばったが１１５ｍｍの高さのインターセプタドール、ホイホイさんをもってきた。
［今回モデルがあったからね～］

コバッタのアームにはにはコナミのＰＳ２ソフト、初回盤があった。

「機能も？」

［えっと、うん、火災消化機能もついてるね～］

「…じゃ試してみるか…乱れてそうな場所は…っと…」

……

「夕呼さん～よろしいっすか？」

「いいわよ入ってらっしゃい」

「失礼します」

「で、何用？オリジナルハイヴ攻略前の忙しい時期に？」

「用って程じゃぁ無いんですが、相変わらず乱れてますね…」

「わかるからいいのよ……ん？何？そのお人形は？オママゴとでも始めるの？」

「ああ、こいつはインターセプタドール、ホイホイさんです。ちょっと実験させてください」

スイッチを入れ置くと早速動き始めた。

「実験？何なのよ？」

「ゴキブリとか居ますよね？この部屋」

「いるんじゃない？」

充電器のをコンセントに差し込んだ。
ホイホイさんがダッシュした。
右腕のブロードソードが唸る。
グチャ
「早速一匹かな？」

「ゴキブリ？」

「の…ようですね」

ホイホイさんが走り回っている。

「害虫駆除のロボットなの？」

「ま、そうです。収穫終了コマンドついてるよね？」

［本当は害虫が当該エリアにいなくなるまで…だけど、今回のはついてるよ。送る？］

「キリなさそうだからな。やってくれ」

ゴキをおっかけてたろうホイホイさんが動きを止め、装備を持ち替えると、
ほうきとちり取りをだし、収穫した害虫を一箇所に集め始めた。

中身がデロンデロンにでてるゴキ、等が集められ１０ｃｍの山となる。
ホイホイさんは殺害現場に戻り、跡を掃除し、終わると、

山の隣にきて山を指差し主人にアピールする。

純白のメイド服がかえり血で汚れながら…

「うん。いいね」
袋を差し出すと、その中に入れはじめた。

「この部屋にも一つ頂戴」

「用意できる？」

袋に入れ終わったホイホイさんは自分の汚れ掃除をし始めた。

［うん、明日には］

プラスチック制のメイド服の汚れはすぐにおち、

とことこあるくと充電器に自らおさまった。

「では、失礼しました」

「あ、明後日Ａ－０１は合流するけど大丈夫なのよね？」

「手配済みです」

「そう、わかったわ…じゃ、いいわ」

退室した…

「とりあえずＰＲイベントで大々的に仙台に送らないといけないな…」

［日産、とりあえず５００体はいけるよ］

「すべて駆逐できるとは思わないが、
仙台市でＰＲイベントでぶち込んでくれ」

［了解、マスター］

ハンガーに戻りコバッタが手配かけた。

［ところでマスター、タイタンはどうするの？］

「火星共々大気があるのがなぁ……」

思考の渦に入ってく…

「あ…そういえばＧって、元々対ＢＥＴＡ用だったんだよな？」

［うん。そうだね］

「どうせ火星、タイタンとも無人だし撃ち込んでみるかな？培養して、１万匹単位であたりで」

［ＢＥＴＡ駆逐し、Ｇが餓死するまで立入禁止になると思うけど？］

「まぁそれはしょうがないさ…」

［じゃあ、わかったその方針でいくね…］

Ｇ搭載輸送ミサイルの開発がはじまったようだ……

エクステンデット達も続々とカプセルから出てきて、

一勢力といえる人数になろうとしてる時、

最後のカプセルが動作しはじめる。

ミーア・キャンベル、ザフトにおけるラクス・クラインの変わりとなった人物だ…

カプセルの蓋があき、ミーアが覚醒しはじめる。

「ん……」

ミーアの目が開き…

「知らない天井…」

しばらくミーアはぼーっとしていたが、

（はっ……ここって……あっ、わたし…死んだのよね？…ラクス様庇って）

～回想～
「危ない！！」
ラクスの前に身体をだし、激痛が身体にはしる。
～～
（……じゃあ天国？）
手を動かしカプセルの淵を触る。
（ううぅん。天国じゃない…けどなんで？どうして？…あっ弾が…）
ミーアが、撃たれた記憶のある場所をめくってのぞきこむが…
（傷跡も…ない…けど服は血がついてるし…）
「あ～っもう…わけわかんない！！」

「おめざめですか？」
カオルが入室してきた。
「えっと…どちら様？」

「ラクス・クラインさん…
いいや、ミーア・キャンベルさん始めまして、異世界軍の責任者をしている渚カオルといいます」
（私の本名しってる……異世界軍？）
「失礼ですけど、異世界軍という勢力聞いた事ありません。
ここはプラントですか？それとも地球連合？」

「どちらでもない全くの異世界です…
あなたは一度死に異世界にて蘇りました」

「異世界？蘇った？」
（あっ…じゃあ別れの記憶も……）

「ええ、詳しくはこちらのＤＶＤにて…」

映像が流れる。

「……ようするにわたしをスカウトしたいってわけね？」

「ですね」

「でも歌う事しかできないわよ？操縦なんてムリムリ」

「歌って文化を広めたい為にスカウトです」

「本気なの？」

「はい。この世界はぎりぎりまで追い詰められました。
当然文化等も戦争の為、人ならず文化までも…

そんな中復活に手掛けて欲しいんです。
異世界から来た歌姫として…ミーア・キャンベルさん」

「ラクスよ」

「はい、ラクス・クラインさん」

「この世界にはラクス様はいない…からわたしがやるのね？
一日も早く平和を勝ち取る為に」

「はい。お願いできますか？」

「わかったわ。協力する」

「ありがとうございます。じゃぁ、とりあえずコバッタがご案内しますので」

ミーアがコバッタについていった。

カプセルを収納しまくるカオル。

２００２年１月２７日午前６時

『……それは全身全霊を捧げ絶望に立ち向かうことこそが、生ある者に課せられた責務であり、人類の勝利に殉じた輩への礼儀であれと心得ているからにほかならない』

ラダビノッド准将が、桜花作戦にむけ放送をいれている…
朝もやのなか５機のＨＬＶ、往復大量離昇機が打ち上げをまっていた。

『大地に眠る者たちの声を聞け……
海に果てた者たちの声を聞け……
空にちった者たちの声を聞け……

彼等の悲願に報いる刻が来た。そして今、若者達が飛び立つ……
鬼籍に入った輩と、我等の悲願を一身に背負い、敵地に赴こうとしているのだ。

歴史が彼等に脚光を浴びせる事がなくとも、我等は刻みつけよう。
名を明かすことすら許されぬ彼等の高潔を、我等の魂に刻みつけるのだ。

旅立つ若者達よ…諸君に戦う術しか教えられなかった、我等を許すな。
諸君を戦場に送り出す我等の無能を許すな。

願わくば、諸君の挺身が、若者を戦場に送ることなき世の礎とならんことを……』

ラダビノッド准将の言葉が終わり、５機のＨＬＶロケットエンジンのカウントダウンが１分を切る。

ＨＬＶにはＡ－０１所属機及び凄乃皇が搭載されている。

カウントダウンが１５秒になりエンジンに火がともり噴煙があがる…

カウントダウンが０をさし、炎が噴き出し、
ＨＬＶがその重い自重を重力に逆らい空へとのぼりはじめる。

衛星軌道上へと向かう武、伊隅達の姿をを、
国連軍所属の多くの人々が敬礼と共に見送った。

その中には渚まりも、身重になった渚屡伊の姿があった…

打ち上がるＨＬＶに搭載されている凄乃皇、コクピットには白銀が座っていた。

復座席には霞が着座、管制席には涼宮遥が着座している

打ち上げのＧが白銀にかかる…がシャトル搭載よりかは比重が低いと思えた。

ＨＬＶは一路宇宙へと飛び立つ…

しばらくすると体感Ｇがきえてき…

「うわぁ…綺麗…」

「涼宮中尉は…始めてでしたよね？」

「ええ…白銀大尉は？」

「二回目ですね。銀河鉄道で一回」

「わたしも何時かはのりたいです」

「休暇が１日でも取れればコロニー観光はできるとは思いますけどね…
あ、霞、作戦終わったらいってみるか？」

「はい……いってみたいです。」

「と…見えたか？…Ａ－０４より各機、
コロンブス確認、軌道修正プランを送ります」

『了解』＊多数

ＨＬＶは衛星軌道上に待機していたコロンブス改級に回収接舷され、
再突入用時軟着陸用推進剤を補給する手筈となる…

……

カオル報告

桜花作戦始動中、
まだ接敵はしてません。

第１８６話　オリジナルハイヴ攻略　桜花作戦始動　投稿日２０１１１０２２

ナギ少尉「いよいよ司令塔のあ号攻略ね」

作者「地球上はこれが転機にはなるな」

ナギ少尉「確かほうき型の指令システム、情報伝達だから？」

作者「まぁそういう事さ」

ナギ少尉「で火星とかタイタン用のフラグ消化も、さりげなくしてるね」

作者「無人なら活用方法はある…って事だな。
大気が本当に邪魔だったが…」

ナギ少尉「でも一方的にＢＥＴＡ最近やられてるよね～
それに対してＢＥＴＡ側、どう反応するんだろ？」

作者「まぁ…資源採取用の民間人レベルだからなぁ…
少なくとも太陽系にいるのはさ…
反応できるかどうか…ま、

ある程度異世界軍か今までののか？
に対応はしていてもおかしくはないかもな」

ナギ少尉「ＢＥＴＡにとってのベリーハードモードに突入中だもんね…
と、さて次回、桜花作戦発動中、カシュガルへ…おたのしみにぃ」

第１８７話　桜花作戦発動中　カシュガルへ…　投稿日２０１１１０２６（前書

風邪をひいてますので、投稿スピードが落ちます…

第１８７話　桜花作戦発動中　カシュガルへ…　投稿日２０１１１０２６

日本時間２００２年１月２８日　午前１０時、

朝もやの中朝日が昇りはじめ、その朝日を背にうけ、
異世界軍はオリジナルハイヴへ向け前進していた。

そして…

「オリジナルハイヴに動きあり！ＢＥＴＡが湧き出てきました！」

「きたか…総員戦闘配備！！
砲撃艦隊は最大戦速、３０ｋｍ前進し砲撃体制に移行！
ミサイル艦隊、停止し、射撃準備！！」

ハイヴまで４００ｋｍの地点にきたとき、１番敦煌よりの門からＢＥＴＡが湧き出てきた。

ハイヴ中心部から１０７ｋｍ地点の門から続々と湧き出はじめていた。

「煙幕弾頭ミサイル発射せよ！」

艦隊中央に位置するミサイルビックトレーから、
煙幕弾頭装備したトマホークが打ち出される。
続いて２射目、３射目……

時速８００ｋｍで飛行するトマホークが迎撃範囲にはいるのが、
ＢＥＴＡ群の３０から４０ｋｍあたり、そこまでに約１５分到達まで時間がかかる。

その間も無限にわいてくる煙幕弾頭ミサイルを休まずうちづつけると…

「戦域、煙幕濃度１００％越えました」

「通常弾頭弾、発射ぁ！」

ミサイルビックトレー１５隻から一斉にトマホークミサイルが射出される…

司令室から戦場となるカシュガル、オリジナルハイヴ戦域をみていた。

（遠距離戦に関しては、レーザー、ビーム兵器解禁だろうと変わらないだろうなぁ…）

地上では大気減衰の他に地平線というものが存在し、
ＢＥＴＡにも新型種族が出た通り、大地とゆう有効な遮蔽物を利用して長距離間接射撃を加える事ができる。

そこにビーム兵器が加わるとすると…大規模出力と射線を確保するための高度をとる、
または大地を地下４０ｋｍ程削って直線射撃を加える…

という非現実的な手段しかない。
または大気圏外からの高出力砲塔によるビームシャワーでも良いが、大気や地球自体に大規模的に悪影響を及ぼす為使えない手段であった。

「まもなくモンスター改の射程圏に入ります」

１６０ｋｍの射程を誇る実弾兵器は、
ＢＥＴＡの大砲級の射程約８０ｋｍをはるかに越える優秀な機体だった。

（マクロスの世界から持ってきた良兵器だよな…この機種のみ唯一発展してるし。
こっちの戦艦の主砲並、いや射程でいえば以上だしなぁ…）

「モンスター改射撃開始します！」

ＢＥＴＡの迎撃群に対し、２０００機の半分１０００機による一斉射撃が開始される。
４０００発、分あたり２４０００発の砲弾は、先頭を走る突撃級に突き刺さり、
着実に個体数をへらしてく。

また味方の死骸の為最高速を保てずに、
一方的に撃たれる時間が増えつつあった。

（相手が地上というスピードでくる限りは…
地球外でももちろん活躍できるよな…）

モンスター改２０００機、生産費用というのを度外視できる、
異世界軍だからこそだろう…
普通に発注すると…嫌な費用にはなる。

２０射目で弾薬補給の為交代し残りの１０００機が撃ちだす間に、
後ろ側の足元におりた給弾コンベアにコバッタ達が弾薬を補給する。

ＢＥＴＡにとって一方的に撃ち込まれる６０ｋｍの区間を、
的確に突撃級の最高速を出せずに約１時間程拘束させていた。

「ビッグトレー、射程圏内に入ります！！」
１００ｋｍ圏内にまもなくかかろうとしている。

（この陸上戦艦と、鋼鉄の咆哮の組み合わせが、やっぱりよかったよなぁ…）

『砲艦型、主砲塔一斉斉射ぁぁ！！』

６１ｃｍ砲、分あたり７７万７６００発の面制圧の射撃が始まる……

オリジナルハイヴまで攻略の道ができたのも、
一重に物量による補給なしの制圧が可能となった、
無限弾薬装填装置の恩恵によるものが大きい…

これにより通常５０発も撃てば補給の必要が出てくる大口径実体弾も、

補給の必要なく移動砲台としての役目が果たせる。

また通常ではありえない供給速度、発射速度、旋回速度を可能にした、自動装填装置…

そればかりか、砲身の命数無視できる点や、冷却効果が発生するのがおいしかった。

通常、砲身は弾が発する熱により熱をもち、それにより歪みが発生する。

その歪みが酷くなると弾道が安定しなくなり、

砲身を新しいのに交換しなくってはならない、

鋳造性能によるが、旧軍大和４６ｃｍ砲で２００発、改大和型で４００発での交換となる。

戦車砲になると、９０式で８００発、

陸戦強襲型ガンタンクの２２０ｍｍキヤノンで１５００発、

６１式改プラント製で１８００発、

四菱製で１２００発となる。

もちろん戦闘中にできないのであくまでも基準だが、

ほっておくと急激に命中率がさがり…

そのうちに砲身破裂等の重大事故に繋がるわけだ…

実体弾による宿命といっても良いだろう…

それを自動装填装置は回避してくれた。

また艦内に不調がでないか?と監視しているコバッタ達整備チームもいる。

偵察に出てたルーロス改からの確定情報がはった。

「個体総数約１１６９万の内約７８万が迎撃に出てきました」

（ルーロスも良かったな…）

遊びにいくヨの世界から取得した超技術の一端、ルーロス…

星間経済を確立し、彼女らにとって古い技術ながらも、
軌道エレベーターを無償でプレゼントするあたり、
高い技術力の一端が見えると思う。

その一部であるルーロスをつくるのさえ時間がかかり、
その技術の物質透過レーダー…今ではなくてはならないものになっていた。

「まもなくＢＥＴＡ群先頭、陸戦強襲型ガンタンク射程圏内にはいります。
残像個体数約６万」

（すべては陸戦強襲型ガンタンクからだよな…）
ＲＴＸ－４４陸戦強襲型ガンタンク…
異世界軍の道はこの機体からはじまった。

タンクにありがちな鈍重さがなく、多少の不整地はなんのその。
山を削り森林を薙ぎ倒し整地したＢＥＴＡ占領下の環境では、
まさに走る陸の王者とよべる程だった。

その彼等が待ち受ける射程圏内にＢＥＴＡ群の先頭が侵入しようとしてきた。

ＯＴＭ技術の導入が全機体に浸透し射程が１０ｋｍから約2倍の２０ｋｍに延びた、
２２０ｍｍ滑空砲がいまかいまかと待ち構える。

「陸戦強襲型ガンタンク射撃開始します！」

２０ｋｍ圏内に踏み込めたＢＥＴＡはさほど居なかった為、
一撃必中を陸戦強襲型ガンタンク操縦するヤドカリ達は選んだようだ。

２２０ｍｍ滑空砲から必中の砲弾が放たれる。

それが地獄の道のりを抜け出した要撃級に突き刺さり、
体内で爆発し、四肢が散乱する。

今だ６１ｃｍの放火は止まず、直に迎撃の為に出てきたＢＥＴＡ群は殲滅されるだろう…

「ルーロスより入電、第二次増援が出現しました！」

（おうおう…怖いねぇ…）

一次迎撃が不利としったのか、増援として迎撃に出てきたようだった。

「今迎撃中のをα群、門より出現中をβ群と命名。
煙幕ミサイル攻撃から再びしかける。
艦載各機の補給たやすな！！」

今までの国連軍等の失敗は、規模を見誤ってて、個体数を把握してなかった事…

一次迎撃をやっとの事で殲滅しかけ緩んだところを、
2次迎撃で絶望までたたき落とされて壊滅…
また補給等も滞り弾薬、武装もなくなり…
生きながら食われていく事となる。

無限ではない。何時かは途切れる時が物質ならありえるのだ…

その時を目指して砲撃は放たれる…

～同行している中華統一戦線の衛士～

殲撃8型から、機体に音の衝撃が届いてくる、
ビッグトレー砲艦型の方へと視線が行っていた。

迎撃群に対し第二次防衛ラインを任されたのだが…
ＢＥＴＡ群が押し寄せてくる前に殲滅させられ、
再び砲撃が始まったので必然的に視線がそっちの方へといってしまう。

「砲撃止んでないよなぁ…？」

『ああ…かれこれ2時間近くあの一番手前の砲門、砲撃止んでないぞ』

「俺らの突撃砲…2時間もたないよなぁ…」

『確かに…弾薬も2時間連射なんて、
何回補給しなきゃいけないか…』

「あの砲身一つでも欲しいよなぁ…」

『あの砲身を突撃砲につけるってか？』

「いい考えだろ？」

『俺らの機体の手で保てるか？』

「あっ……」

オリジナルハイヴを攻略してるとは、
おもえない程気がぬけていた。

まだ彼等の本格的な出番は少し先だった……

～Ｓｉｄｅある兵士ｅｎｄ～

～Ｓｉｄｅ白銀～

この宇宙空間で待機しているのは、２隻のコロンブス改とＨＬＶしかいなかった。
そのコロンブス改にて推進剤を補給したＨＬＶの５機は、司令室からの突入の合図をまっていた。

ＨＬＶの簡易仮眠室等で思い思いにまっている。

前の世界とは違い、多数の再突入艦はいない、Ａ－０１部隊単独による大気圏突入であった。

（この数で突入とはな…前の世界…突入でも多大な被害がでたよな…）

～回想～

大気圏に多数の再突入駆逐艦がオリジナルハイヴに対し、
軌道爆雷を慣行しようとしていた。

が、軌道投下された対ＡＬ弾を迎撃せず、重金属雲が発生しない…
ばかりか、ＳＷ１１５付近に展開していた味方を全滅させるという
最悪な事になってしまった…
の為に中間層に突入した駆逐艦に重光線級のレーザーが襲い掛かる。
駆逐艦は次々と爆散し大空に残華してく。

未だレーザー照射を浴びずに残存し先行していた駆逐艦が、
その機体をレーザー照射を遮る軌道へと移動する。

盾となり、わずかな時間で爆散する……

『人類をッーー頼むぞ……ッ！！』
新たな華が凄乃皇の前で生まれる。

次々と盾となり爆散、凄乃皇の後方に位置していた駆逐艦も、
再突入を分離し、凄乃皇の前に出て盾となる。

『貴様らを無傷でオリジナルハイヴに連れて行く事が我等の任務…
…！』
新たな華が…

『人類反撃の切り札となる決戦部隊を運んだ事は、駆逐艦乗りにと
って最大の名誉だ！』

『その名誉をけがさせはせんッ！そして貴様達にめ手出しはさせんッ！』

『フランスをーーユーラシアを取り戻してくれっ！！』

口々に叫びを残し華となる駆逐艦群…

爆散していく彼方に遂にオリジナルハイヴのモニュメントが視界にはいった。

地上を目指していく無傷の凄乃皇……

再突入殻から強行着陸をとる5機の武御雷がいた…

~回想ｅｎｄ~

ガコン

コロンブス改からＨＬＶのドッキングが解除され、

アームでもってＨＬＶが押し出される。

思い出していたら何時の間にかに合図がでたらしい。

『ユーハブコントロール』

「アイハブコントロール」

ＨＬＶが地球に向けフリーホール状態になってく…

（やっとか……結構手間取ったみたいだなぁ…）

時刻をみると、日本時間２９日翌午前３時…

宇宙にあがってドッキングしてから１７時間たっていた事になる。
予定時刻を大幅に上回ったが、司令室より合図が出たため、コロンブス改から離れ、大気圏突入する事となる。

『ヴァルキリー０１より各機へ、地上部は既に異世界軍の手に落ちた。
光線級のレーザーは上がってくる事はない筈だが、
万が一に備え、パージアウトに備えよ』

現状、成層圏中の高度１５ｋｍあたりでレーザーがあがってくる可能性がある。
白銀の経験では、９０ｋｍ中間層あたりの高度でも迎撃がきたのだが、
横浜にて情報が漏れた影響によるもの、またＭＬ機関臨界運転による誘引によるものとして、
報告済みの留意事項となった。

万が一…中間層でＨＬＶが迎撃されると、
機体の非常用のを使い単身突入にはなる。
が…やめといた方が精神的に健全であろう。

一応熱圏では迎撃されず、中間層あたり、９０ｋｍ以下では可能性はある…との事だ。

ＨＬＶ５機は重力にひかれ大気圏にまもなく突入しようとしている。

ＨＬＶの突入角度は通常よりやや浅め…

外部カメラが、ＨＬＶ自体が赤くなり始めているのを映しだす。
引力に捕われ熱圏に突入したのだ。

大気圏突入能力がない機体などは、この熱圏での強制減速の熱で一気に温度が急上昇し、
推進剤に引火するか、先にコクピット内部の高温に耐え切れずに命を絶つことになる。

ＨＬＶは安定して高度落しながら減速していき、中間層の途中あたりで、
段々と周りをおおってた輻射熱の幕がなくなってきた。

〖一次減速開始〗

女性声の電子音が告げ、ＨＬＶの外側にある空力ブレーキが展開しはじめる。
これにより秒速４ｋｍのにおちた速度を更におとし始める。

〖二次減速開始〗
空力ブレーキが更に展開し秒速１ｋｍ以下におとしていく。

「着地地点ズレなし……〖3次減速開始〗姿勢制御良好」

対流圏に突入し、高度５ｋｍに到達したＨＬＶのブースターから炎が出て急激に速度を落としてく。

着地予定地点のマーカーが近寄ってる。
移動用ブースターを吹かす程でもない。
眼下には門周辺部で釣り天秤を行っている異世界軍がみえてくる。

〘高度３００……２００……１００〙
５０メートルを告げた時よりいっそうブースターが唸りをあげる。

〘１０〙
ガイドロットが地面に接地、
着地用脚が伸ばされ、本体の傾きのレベルを合わせてく…

〘着地〙

『ヴァルキリー１から各機へ、ＨＬＶは陸上部隊に委ねる。
２０１号挺に移乗、出番まで待機だ』

「カーゴハッチ開放、ＭＬ機関始動」
凄乃皇の出番は近いだろう。

……

カオル報告
各門まで取り付いて、エアロスタットで釣ってます。
各ハイヴの増派は対応中です

第１８７話　桜花作戦発動中　カシュガルへ…　投稿日２０１１１０２６（後書

作者「今回は門での釣り作戦中までだね」

ナギ少尉「けど…凄い数よね…を、原作の桜花作戦では６機で突破したのね…」

作者「確かに突破だけならできるかもだが…その後大規模進行もあっただろうけどね」

ナギ少尉「で、今回は誰か死ぬの？」

作者「死なないようにはしたいけど……」

ナギ少尉「でちゃいそう？」

作者「まぁ次回って事で…」

ナギ少尉「次回、桜花作戦…完遂…おたのしみにぃ」

第１８８話　桜花作戦完遂…そして…　投稿日２０１１１０３０

日本時間２００２年1月３０日午前６時

「第１砲艦隊は、マシュハドハイヴから、
第２砲艦隊は、ボバールハイヴから、
第３砲艦隊はエキバストゥズからのＢＥＴＡ群に急行中」

「第１０１から１０５連隊及びアムロ大隊はＳＥ８５より突入して下さい。
第１１１から１１５連隊及び沙霧連隊はＳＷ１１５より突入して下さい。
第１２１から…」

「第１工作部隊はＳＥ７２の門を充填封鎖、護衛担当は１００１大隊。
第２工作部隊はＳ９２の門を充填封鎖護衛担当は１０２４大隊。
第３工作部隊はＷ９６の門を…」

桜花作戦発動から、四日目に突入しようとしてた３０日の午前６時…

やっと次の段階、ハイヴ内部への突入、
門や横道の充填封鎖による削減、
及び周辺からの増援対応等へと進む。

既に地上部及び門周辺は第７次迎撃を退け、また釣り天秤により、

異世界軍の手中にあった。

が今だ約６８１万個体がハイヴ内部に釣られずに存在している。

釣られずは語弊だった…門の外まで釣れないのである。

フェイズ６規模であるこのオリジナルハイヴは、

地下４４２１ｍ横に最大１１８ｋｍに広がる広大なものとなっている。

広間の数が大小合わせて３５７、横道が１５５３、門級が１５、門の数が３２となっている。

この広大なハイヴから、一匹のこらず６８１万体を殲滅しおいだそうとしていた。

ＳＷ１１５から突入した…

縦横無尽に巡らされるこのフェイズ６のハイヴ…

最初の広間は通過しながら工作部隊が横道を充填閉鎖し、

次の９層レベルの広間に進み横道を同じく充填閉鎖した後、

釣り天秤を行うべく広間内部に展開してた。

『右翼…準備はよいな？』

『はっ！！』

『左翼準備はよいな？』

『はっ！！』

『ズィマム、こちら沙霧０１、準備は整った』

『ズィマム了解、誘導０５を回します。……個体数５０９８、接敵まで６０』

広間では、沙霧連隊の魔不知火１０８機及び、
陸戦強襲型ガンタンク５４０機が迎撃の布陣を整えていた。

『３０』

ハイヴ内部を釣って逃げ回っていたエアロスタットが、
沙霧連隊が布陣している広間を目指してきた。
逃げ回りながら個体数を調整している。

『１０』

エアロスタットが横道より飛び出してそのまま沙霧連隊布陣箇所へ飛んでくる。

『５』

エアロスタットがとおりこした…横道のおくから…

『２、１』

『てぇ！！』

ＢＥＴＡ群が飛び出てくるとともに６４８機の機体から射撃が開始される。

次々とザクマシンガン、両腕ポップガン、２２０ｍｍ滑空砲等をうけ、肉片に変わるＢＥＴＡ群…

横道から出てはくるが、弾幕の為に中々進めずに次々と絶命してく。

『ズィマムから残り９８２』

『抜刀！！』

一斉に高周波ブレードを抜く魔不知火…

『突貫殲滅せよ！！』

陸戦強襲型ガンタンクを追い越し、魔不知火が残存ＢＥＴＡ群に襲い掛かる。

無駄弾撃つよりも近接格闘戦でＢＥＴＡ群を殲滅してく…

最後のＢＥＴＡ、要撃級が高周波ブレードで袈裟切りで真っ二つにわかれる。

最後のＢＥＴＡが絶命すると、魔不知火が下がり、

プレート付けた陸戦強襲型ガンタンクが、死骸を排除し始めた…

オリジナルハイヴ中心部より南１４０ｋｍ地点

『エコーマムより各機、まもなくボバールハイヴからのＢＥＴＡ群が到達する。
各機戦闘態勢ととのえよ』

待ち構えるは、大東亜連合１個師団。
機体はＦ－４、Ｆ－５Ｅ、Ｆ－１６、Ｍｉｇ－２３、ＭＳ－６ＪＹ等多彩にとみ、支援戦車は６１式改に統一されていた。

第２砲艦隊の後援が布陣する、大東亜連合軍を通り過ぎてから5分後…
先程まで上空を通り撃ち込まれていた砲弾は、
味方誤射を防ぐ為に撃ち込まれなくなった。

６１ｃｍ砲搭は弾道が最短射程距離２０ｋｍでも１ｍはズレてしまうからだ…

ボバールハイヴからのオリジナルハイヴへの増援約１００万強…
それを第２砲艦隊の２０隻はオリジナルハイヴ地上戦後、増援１００万に対応する為に、
３５０ｋｍの最大戦速で急行し、約１３００ｋｍの距離の区間を部隊を２つに分け、
砲弾を絶やさず撃ち込み続けた。

その結果…2日程遅滞拘束し、ＢＥＴＡ種族の内、
突撃級、光線級、重光線級、大砲級等は全滅が確認できてた。
数は…

『射程圏内まで…残り1分、残敵１０３８２』

「準軍団規模か…」

残りが1万強…砲弾の地獄をくぐり抜けた数である。

長距離砲撃においては、精密射撃は難しかった。なので砲弾数で飽和するが、
うまく隙間等で生き延びる個体がいる…

『１０』
視線の先には砲弾の嵐を抜け、傷だらけになっているＢＥＴＡ群がみえた。
だが…準軍団規模である…
『５』
トリガーに手をかけた…

『射撃開始!!』

大東亜連合軍1個師団による砲撃が始まった…

「ヴァルキリーマムから各機へ、まもなく交代部隊がきます。
今日の制圧はここまでとなります」

『今日は２６層までね…』

（……結構な数がオリジナルハイヴいたんだなぁ…）

白銀は最低限の戦闘であ号までたどり着いた前周のと比較していた。

凄乃皇は武装面でも充実して、前周を遥かに上回っている。

単独突入反応炉破壊は…というと、やれない事でもない…と判断していた。

（前はギリギリすぎたな…だから、あいつらが…）

武の視線は球瀬、鎧依に注がれた。

が今回とってる殲滅は…

（総弾数からすると、地上に補給部隊がいて８９往復か？

…が、純夏に負担かかり過ぎるよな…無理に等しいか…）

「引き継ぎ部隊がきました」

『よし、ヴァルキリー1より各機へ、２０１号挺にもどるぞ』

『了解！！』

途中の移動経路ではルーロス改により、オリジナルハイヴ内部の全ＢＥＴＡの動向を把握している為、
安全が確保されていた。

「う…眩しい…」

地下の薄暗い広間から太陽が注いでいる大地へとでて、
仮宿舎となっているトレインギャロップへと機体をすすめる……

～トレインギャロップの休憩エリア～

「当部隊は昨日と同様、翌６００集合となる。各員遅れるな…解散」
ザッ
敬礼の後各員がわかれ飯や風呂等にわかれてく…

コバッタ達は整備以外は２４時間戦えますか？だが、
こう長期にわたる作戦だと、有人部隊は疲労や睡眠の話になる…

３交代制でトレインギャロップにて休養をとり、
また戦場に出て貰う事に、この桜花作戦は組み立てられていた。

シフトが、戦闘時間が一日８時間、交代時間等含めて１２時間、
１２時間を休憩時間と組まれている。

まずは後方車両カーゴに戦術機やＭＳハンガー、
そこにてコバッタ達が戦場で疲労した機体のメンテナンスを行ってる。

機体から降りた衛士は前方カーゴの休憩カーゴへと連結通路を移動してもらう。

休憩カーゴ内部は……
～食堂～

「ど・れ・に・し・よ・う・か・な？」

「レイ、早くしなよ…好きなので良いじゃん」

「全メニュー制覇するのにぃ選んでるの」

「全メニュー制覇ってあんた何時までここにいるつもり？
百種類以上あるのに…」

「う～」

ここ食堂は様々な人種、国の限定にそった、
多様多彩なメニューが提供できるようになっていた。
もちろん作戦参加者には無料提供しているが、
食べ過ぎは自己管理でお願いしてます。

「ところで、こんな種類の材料どうしてるんだろうね？」

「仕入れるにしても…」

［材料は合成してますよ～］

「え？合成なの？にしては美味しくて、
ついつい食べ過ぎちゃうんだけど」

［今までのと違う技術が使われてますからね～］

キャーティア技術の一つである合成食品技術…
それがこの食堂には導入されている。
注文すると調理機の中で料理が精製されるのだ…
ただし、同じ栄養同じ味同じ焼き焦げ等で何時かはあきるのだが…

「じゃあ…私はバッタの唐揚げと、タガメの唐揚げと…」

「う…食わせないでよ…これだからタイ人は…」

「なによ～目の前で牛くわないでよ～？」

～スポーツジム～

衛士達が食後？食前？に、汗を流してバーベル等を持ち上げてる。

短時間で効率よく身体を保つ為に、

休憩カーゴにはスポーツジムが設置されてた。

～浴場～

カコーン

音が響きわたる…

「ふ～いい湯だな…日本式の大浴場もなかなかなもんだな」

「ですね、隊長」

「熱、中、小と3種類の温度の風呂か…

これなら東南アジア系の我らも入れるよな…」

「中だとまだ熱いですから…」

カコーン

勿論シャワーブース、サウナ室も併設してある。

～仮眠カプセル室～

静かだ…だれも起きてはない…そうカプセルはいると…

プシュードヤドヤ

一団が入ってきたようだ。

空いてるカプセルに行くと…

「じゃ、明日」

「ああ！」

カプセルの中に身体を入れ、タイマーを操作、スイッチを入れる。

カプセルが閉まると…

衛士はもう寝ていた。

この睡眠カプセルは作動すると強制的に精神に作用し、睡眠へと持ち込む…
不眠症を発生させない脅威的なキャーティア技術が使われていた。
勿論緊急時には外部からの干渉で覚醒する事はできるが…

～別のトレインギャロップの整備場～

「俺の機体が戻ってる！！」

「あら…あんたの機体中破だったよね？要撃級にフルボッコにされて…」

「ああ、機体交換しなきゃ駄目だったんだけど…」

「修理しておきました。
調整とバージョンアップもしましたので、前より性能アップしてますよ」

「ありがとう！！」

衛士の休憩の１２時間の内に壊れた機体の修理、
または代替え機を手配…は殆どないが、する時間はあった。
２００１年２月３日午前１時…

残敵のこすとこ…

『オリジナルハイヴ所属個体数、残り１５４０２１、あと主広間残すのみです！！』

長丁場となった攻略作戦もいよいよ終わりが見えてきたようだ…

現在地は主広間手前、地下４３層の広間で突入準備を整えていた。

小型チューリップから弾薬が運びだされ、陸戦強襲型ガンタンクに供給される。

また増援の有人機及び陸戦強襲型ガンタンクまちであった。

地上では度重なる他ハイヴからの増援の為、
勇者ロボット軍団も地上側にまわっていた。

～ｓｉｄｅあ号～

あ号はあせっていた。

要撃級なら日に１５０００個体を生産する勢いで増やしていったが、どんどん所属個体がへっていき、

他拠点からの増援も一向に届く気配もない…

（我……破壊…）

あ号は何かを決定したようだ。

（命令……）

命令を下す。

過去の情報を含めて対応の……

ｓｉｄｅ～あ号ｅｎｄ～

『くぅぅ～きっついわね…まだなの？』

約３万程を正面からＡＴフィールド展開して受け止めている初号機がいた。

その後ろには、凄乃皇に２０機の陸戦強襲型ガンタンクがケーブルを繋げている。

「…９０…１００」

霞が数値を読み上げていた。

「チャージ完了、ミサトさん、発射します！」

『了解！！』

凄乃皇の前で盾となっていた初号機が横にさけ、

「いっけーぇ！！」

白銀がトリガーを引き、荷電粒子砲が拡散モードで放たれた。

１０００ギガワットの出力で放たれた拡散ビームは、

集められたＢＥＴＡ群を一気に消滅し…

「残敵６２１！！」

程なく主広間は異世界軍の手に落ちた。

「ミサト機、交代きました。下がって下さい」

『５時間の制限なければ…わかったわ』

『白銀、援護にはいるぞ』

『白銀、守る度に焼きそばパン』

エヴァ初号機が交代していき、弐号機、参号機が凄乃皇の傍にきた。

（でもなんで初の後が弐や参なんだ?…わからねぇなぁ…）

武は、エヴァは軽く再放送で見ても、映画版まではみてなく、そこまではわからない口だった。

『各機、補給後あ号目標がいる主広間に突入する。
情報では触手による浸蝕、破壊が攻撃手段だ…
触手を切断し、攻撃手段を防いだあと、
俺が洗脳する。

突入は……１０分後だ』

カオルが突入部隊に向け発してた。

ゴウウン

横道に繋がる門級がくり抜かれて向こう側に倒れこんだ。

即座に２００個体程のＢＥＴＡが集中砲火により肉片と化す…

……

カオル機が主広間に繋がる門級へと手をかける。

くり抜かれ向こう側に倒れ…

即座に弐号機がＡＴフィールドを展開し触手攻撃を防いだ。

参号機が展開に加わり、主広間内部にに押し込んでいく…

主広間内部に雪崩込む異世界軍、

触手に集中攻撃を加え、

一つ、二つと無力化してく…

『はぁぁぁっ！！』

弐号機がソードで最後の触手を切り裂いた。

カオル機が抵抗できないあ号の前に立つ…

（悔しそうだな…）

今回は霞が浸蝕されてない為わからないが、
無抵抗になった為対処できないあ号をみてそう思ってた。

カオルが機体から離れ、一部をあ号に同化させ……

『洗脳終了、オリジナルハイヴはカシュガル基地へと変更する！！』

外部集音マイクが広いあげた。

『作戦終了だぁ！！』

ウォォォォ！！

……

カオル報告

カシュガル基地へとかわります

第１８８話　桜花作戦完遂…そして…　投稿日２０１１１０３０（後書き）

ナギ少尉「やっとあ号を洗脳できたのね」

作者「やっとだなぁ…」

ナギ少尉「１８８話、リアル一年かけて…か…
何はともあれ、このままラストに向けて！！」

作者「ところがギッチョン…そうはいかなくなった…のが…」

ナギ少尉「はっ？人類優勢じゃ？」

作者「まぁ優勢なんだけどね…次回、桜花作戦終了後…お楽しみにぃ」

第１８９話　桜花作戦終了後…　投稿日２０１１１１０３

日本時間２００２年２月４日午後８時

「横浜基地異世界軍司令室よりお知らせします。
日本時間４日午後７時５２分。桜花作戦は作戦終了し、
オリジナルハイヴは、異世界軍カシュガル基地へと名称を変更します。
作戦所用時間…」

横浜基地から全世界に向け、作戦終了を発信する。

……

それと同時に世界各地では…

「我が勇猛なる戦士らよ。汝らの勇戦は遂にアッラーに届けられた！
アッラーの思し召しにより、我らが仇敵である悪魔共の住家は陥落した！！
聖地奪回の日は近い！今こそ奮い立つのだ、我が戦士達よ！
神は偉大なり！！」

帝政イラン皇帝、パフラヴィ３世が、

エジプトにある中東連合軍前線基地において、所属兵士達に演説を行っていた。

歓喜にわく兵士達…彼らが祖国に帰れる希望がでてきたのだ…

『アメリカ国民の皆さん、これより１０分後に大統領より重大発表があります。
テレビ、ラジオ、等放送がきけるようにお願いします』

再任したアメリカ大統領第４２代大統領ジョージ・クリントンの放送が始まった…

『我が親愛なるアメリカ国民の皆さん。
再任早々に喜ばしい報告を皆さんに告げるこの幸運を、
神に感謝したいと思います。
十日程前、ＢＥＴＡの司令塔であるオリジナルハイヴを攻略する、
桜花作戦が敢行しますという、政権放送をしましたが、

つい先程…作戦成功に終わり、オリジナルハイヴは陥落いたしました。
これにより弱体化したＢＥＴＡから、
地球全土を取り戻す大きな大きな一歩を踏み出せました…
必ずや地球は人類の手に戻るでしょう』

歓喜にわくアメリカ国民。後方支援国で今だ被害はなくとも、
年々人類の寿命はあと…を感じていた。

だが、ここ三ヶ月程うまくいけばの風潮だったのが、決定的になっ

たのだ。
人類は生き延びる…と…

世界各地で寝静まってる者はたたき起こされ歓喜にわく。
人類は生き延びる、やったぞ！と…

元オリジナルハイヴ地下

撤収及びG元素搬出作業の中、
あ号にアクセスしていた。

『と…命令取り消しは？』

『不能……通信…断』

『断絶かな？』

『肯定』

（成る程ね…けど最後にすかしっぺをだしてくれるとは…）

あ号は、配下の全ハイヴに対してある命令を下してた。

個体数が５０万辺りで、
配下のハイヴ、横浜含めてだが…甲２号に指揮権をわたして、
甲２号に地球における上位存在になるように…
と、命令をだしていた。

むろんすぐに上位存在にはなれないのだが…

（横浜戻って確認か…
後は、対話等のバージョンアップとかだな…）

レビル将軍にまたまた臨時基地司令をお願いし、
基地方針、戦力の選定をすますと…

一足先にチューリップ使用し横浜基地へ戻ったカオル。

［マスターお疲れ様］

「ああ、ありがとうな…でこの後だが…
甲２号ハイヴにビッグ…ファイブはできてる？」

［完成してるよ］

「甲2号の監視をよろしく」

［了解…なんで？］

「洗脳前のあ号が命令出したんだよ…
で、何時かは上位存在にはなるけど時期が、
2週間以上かかる以外はわからないからな…」

横浜反応炉のログを確認したところ…やはりそういった命令がきてたが、
今のところ横浜と甲2号の通信も確保されてなく、
また反応炉自体の出力も少しずつだが上昇中なため、
研究経過観察してみるか…とカオルは判断した。

［わかったぁ。回すね…で、あ号を洗脳したんでしょ？］

「ああ」

［なんか上位存在だけの情報は？］

「あ号が落着ユニットとして飛ばされる前の、
上位存在の配置星系図だな」

［おっ、いいじゃない～］

「といっても…２０００年程前だが…」

［へ？３０年とかでなく？］

「３０年前じゃないな…火星からでなかったから…
太陽系外からあ号は飛来したんだよ。
発射元はオリオン座恒星ベテルギウスの第３惑星」

［あれ？確か…ベテルギウスって、もうそろそろ寿命がつきようとしてる？］

「多分尽きてるんじゃないかな？」

［へ？］

「オリジナルハイヴ、あ号が落着して、落着報告と、人類による攻撃での、
光線級の流用作成の報告ができなかったんだってさ」

［ＢＥＴＡの通信方法イマイチなんだけど光越えるの？］

「ああ、通信等は越えてる。
で、ここ３０年程繋げようと試みたけど繋がらない…
だから太陽系の他の惑星で光線級という種がまだでてなかったわけさ」

［司令塔がいないから？］

「そういった事…ま、超新星爆発が起きてその衝撃波がいつ太陽系に飛来するか？もだが…
それの対策もとる必要あるな」

［正確な時間もだね…ビッグシックスに向かわせる？］

「ああ、向かわせてくれ…」

［けど約２０００年前か…］

「予定図だがそれも一応あったぞ…
けどそれだと既に金星や水星、太陽もＢＥＴＡの支配下になってるけどな」

［…正確じゃないね…けど…その向かった残り３つは？］

「多分金星のが進路変更でカナダ？水星のが撃墜か、絶滅か…
太陽のは、突入時点で耐えられんだろ」

［確かに…片道切符だね…］

「まぁ…な、後は戦闘用の存在も…」

［はい？］

「…俺らがＢＥＴＡとよんでる存在は、
資源回収の為の非戦闘用のユニットにすぎない…って事なんだよな」

［あれが戦闘用でないの？］

「地上での資源採掘ユニットなんだってさ…
突撃級は元来ショベルカーの役割で険しい大地を平坦にし、活動しやすいようにする…
要撃級は掘削作業用、
戦車級はその口で大地などを削る。
闘士級は細かい資源集め、
光線級などは地中掘削から、
要塞級は運搬用なんだよな」

［あ～……うん。そうだよね…で戦闘用って？］

「創造主は対別宇宙生物を想定してて…
まぁ宇宙戦用のＢＥＴＡを作ったんだって」

［口開いて星破壊する光線発射！とか？］

「そこま……でのはいないか…で宇宙用のが…」

モニターに表示させる…

「まずは突貫型」
鏃のような形をしている。

「名の如く、突貫して宇宙大型宇宙怪物を串刺しにする特攻型だな…
最大速度が光速の３０％に到達するし、大きさが平均２００ｍ程だ」

［サラミス級並…］

「そっ…例え貫かなくてもその速さによる運動エネルギー及び質量で…」

［耐えられるの殆どないんじゃない？］

「だね…で、その機動性が殆どないというか避けられたら曲がれない弱点を補う小型兵隊型」

［小型の突貫型だね］

「５ｍ位の大きさで質量や速度エネルギー劣っている分機動力は高いね。
これも特攻が攻撃手段だな…次に」

［まだあるの？］

「要撃級の宇宙型というべきかな…」

「あとは、小型の星間移動ができない種を移動する母艦級…ややこしいから宇宙母艦級か…」

［う…でかいね…］

「３０ｋｍクラスの生物で体内に突貫型以下を飼ってるといえばいいか…」

［これでおしまい？］

「入手した中だとな」

［地上用のがやっぱりないの？］

「地上用は考えてなかったみたいだな。
戦闘種の区分だと」

［成る程ね…
で、これらって今の艦隊のだと…］

「宇宙母艦級だけなら、
先手必勝でコロニーレーザー１発で１隻が御の字だろうが…
まずむりだよな」

［ん～…］

「何千隻による集中砲火による殲滅でない限り、宇宙母艦級が１０
０体とか来たら…」

［あ、そりゃナデシコでもまずムリ］

「だろうな…
ま、幸いこの戦闘用が、太陽系周辺にはいない幸運だな…
殲滅は無理だが、逃げる分はビッグワンシリーズなら可能だし」

［対策は？］

「今は逃げると、強化するしかないだろう…
現行運用機だとビッグシリーズ以外は逃げ切れんし…
数が足りん。火力がね」

［ナデシコ１０００隻つくらにゃ？］

「だろうな…今は生産能力というか、
建造能力が足りんさ…建造能力がな…」

［うん…］

「せめて日産で、ナデシコ５０隻つくらにゃ…
正直勝てる見込みがないだろうなぁ…」

［資源も足りなくなってくるよね］

「だ～な…その位だと…太陽系外部も開発着手しないと…」

と、予定だったＢＥＴＡ勢力図をみる。

「まぁある程度あの図参照にもなるだろうし…
うまくいけば１０００光年以内に戦闘用いないだろうし…
ま、…これからだな」

カオルは別の報告書を手にとった。

「で、一週間近くカシュガルにかかりっきりだったけど…その間なんかあった？」

［まず冥王星攻略して、ただ今補給中…次はオルクスと海王星のトリトンね］

「やっぱりオルクスいた？」

［うん］

「ま、天王星とその衛星だけいなかったから、ましか…
で、残るがタイタンと火星とカイパーベルトのキュビワノ族系と…」

［散乱円盤系ね］

「ほんと、太陽系だけでも大変だよな…」

［天体を残しながらだしね～。
あと火星に撃ち込む、G兵器培養体制整ったよ］

「火星の全ハイヴに撃ち込める？」

［マーズハイヴ1から9までの分ね。もちそろったよ～］

「これで戦力減らせられれば御の字だよな…」

［だねぇ…あと、仙台だけど…一時期行方不明が増加傾向にあったんだけど、
今は減少傾向だね］

「ほう…」

［公共機関にホイホイさんが大量導入されて、
あとドールブーム？みたいなのがでて、売り切れし始めた］

「着せ替え人形みたく？」

［役に立つお人形さんみたく子供に人気でてね～、
で、アース製薬がＬ５の４バンチコロニーで増産中～］

「確か日本領工業コロニーだよな？」

［うん。最後に、月面都市の居住区画に移住始まったよ～
それにともなって、路線が月まで延長。地球～Ｌ５～月間の専用路線でね］

「後は火星を落として…人口増える待ちだろうな…」

［１００億位まで増えないと厳しいよね］

「だな…１０倍か……ん、とりあえずそんなもん？」

［うん］

「ま…あとは国連に報告すんでからだな…じゃ、お休み」

一日かけてカシュガルから陸路を敦煌跡地経由で、重慶基地に到着した異世界軍。

警戒監視施設を攻略作戦中から道中に広げていた為、
無警戒でも高速移動ができ、トレインギャロップの積載時での最高速度１３０ｋｍ／ｈでの移動ができた。

重慶基地滑走路から次々と帝国、統一中華戦線機が飛び立つ。
大東亜連合機は引き続き陸路、海路でフィリピン本土まで輸送になる。

２時間後…

「私達の、統一中華戦線の英雄達の帰還です！！」

清泉崗基地の滑走路に次々と着陸してくる戦術機を、
一目見ようと台湾在住の人々が基地周辺に詰めかけていた。
マスコミもこぞってこの瞬間を逃さないようにカメラを向けていた。

「我が中華統一戦線同胞、８億５千万の無念をはらしてくれました！！」

「息子よ、弟がやってくれたぞ！！」

「統一中華万歳!!統一中華万歳!!」

1ストップしなければならない日本帝国機と違い、
約2時間のフライトで直接台湾本土に降り立つ中華統一戦線機達。

彼らは英雄となった…

……

カオル報告

国連報告に向け準備中です。

第１８９話　桜花作戦終了後…　投稿日２０１１１１０３（後書き）

作者「難産というか…その部分が次話にいってしまった…」

ナギ少尉「それで遅かったの？…でどの部分？」

作者「中華統一戦線の描写があって今回の話にないもの」

ナギ少尉「あっ……なる程ね…」

作者「そこの部分でん～～と、難産中になってるさ…」

ナギ少尉「がんばってね…で、今回宇宙戦闘用のＢＥＴＡがでたわね」

作者「やっぱりいると思うし、いなきゃおかしいし、いたら人類全滅早まったな…」

ナギ少尉「確かにねぇ…衛星監視システムなども出来ないだろうし…あ、で、あ号の上位の話だけど…」

作者「ああ、６５０光年先の超新星爆発ね。
２０１２年頃に観測できるかもって話だよ。
今はその徴候の話」

ナギ少尉「衝撃波等大丈夫なの？リアルで」

作者「ん…数光年の距離の超新星爆発は人類滅亡フラグらしいけど、
６５０光年だと衝撃はこないって宇宙学者はいうね。
けど光よりかは遅いから…
まぁどうなるかは二百年以降先の話になるしさ」

ナギ少尉「生きてはないね～」

作者「ま、そういった事…」

ナギ少尉「さて、今年中に完結が危ぶまれますが、次回、国連報告
及び今後…お楽しみにぃ」

第　１９０話　国連報告、そして今後…　投稿日２０１１１１０７

日本帝国軍の桜花作戦に参加した兵士達は、
愛機を所属基地に休めるとすぐさま、帝都に向かった。

急遽きまった煌武院殿下による拝謁式の名誉を承るために…

帝都に集まる帝国軍人達…
その彼らを祝福せんと、千駄ヶ谷駅から東京体育館前の道は大混雑していた

「日本帝国万歳！！」
誰ともなく万歳三唱が始まると沿道の観衆が唱和する。

拝謁式は国立競技場で開かれる事になり、
９９年の明星作戦出兵式以来の国立競技場での大規模イベントであった。

出兵式は数多くの参加者が二度と戻ってくる事が叶わなかった…
今回は出兵式は開かれなかったが、数多くの兵士達が戻ってきて、
ここで再び見る事ができた家族達もいる。
何しろ西日本方面は復興が始まったばかりで、
まだ立入制限が解除はされてない…

二度と見る事ができないだろうと、
悲壮な覚悟を決めていた家族が戻ってきたのだ。
その喜び合う一面も号外にのる事となる。

さて、国立競技場のスタンドは既に大観衆で満員、
最上段でも立見がでている状態である。

『煌武院殿下御来場！！』

スタンドの大観衆が立ち上がり、
メインスタンドの将軍家専用席の方をみる。
大観衆の声に応え、座る煌武院殿下。

拝謁式が始まった…

アリーナに一人一人所属及び氏名が読み上げられ入場行進してくる。

一人一人殿下、観客に対して敬礼行進でもって入場してくる。

英霊となったものは、
代わりの者が遺影を掲げ入場行進で入ってきた。

入場行進が終わり、殿下の勅を拝謁する。

『此度の作戦、よくぞ生きて戻られ誠に大義でありました。
そなた達は、怨敵の本拠地に挑み陥落させし栄えある勇士達です。
政威大将軍として、従軍せし勇士達にはには、桜花作戦従軍章を…
英霊に対しては桜花作戦従軍獅子章の勲功を授与いたします』

殿下の感謝は続く…

『最後に重ねてそなた達の働きに万謝致します。誠に大儀でありました』

『総員、殿下に対しー敬礼！！』

アリーナに居並ぶ９１名の勇士達が乱れずに一斉に敬礼し、殿下が退出してく…

ニューヨークにある国連総会議場に立体画像が次々と浮かび上がる…バーチャルシステムを用いた緊急総会の始まりである…

「オリジナルハイヴを支配下におさめ、その取得した情報に重大性がありましたので緊急臨時総会を開かせて貰いました」

「なに…このバーチャルシステム利用なら何時でも何処でもだしのう…
では異世界軍渚カオル、オリジナルハイヴ攻略の巧勲により、元帥の位を授ける事を決定した」

意図せぬ昇進であった…
これにより形上、国連傘下とはいえ、完全な独立指揮系統と異世界軍はなる…

「さて…まずは報告事案の一つですが……
戦闘用ＢＥＴＡが存在します」

「な、なんだと…」
「ばかな！今までのが戦闘用でないのか！？！？」
「我々はなにと戦ってたんだ？」

「ただの資源採掘ユニットと人類は生存競争をしてました…」

「資源採掘ユニット…」
「あははは…人類おしまいだ…」
「今こそ地球脱出を！！」

「して、その戦闘用…というのは…？」

「今のところはっきり存在がわかってるのが、
宇宙戦闘用の種類です」

「地球脱出無理フラグ」
「宇宙大戦争…映画か…」
「おわた」

「その戦闘用やらは、現在稼動しているの異世界軍艦挺や、
ＨＳＳＴでは対応できないのかね？」

「武装搭載してないＨＳＳＴはもとより、

現在の編成艦艇、コロニーレーザー６基と護衛艦隊４０隻では…
出会えば間違いなく、全滅になりますね」

「全滅だと…？」
ザワザワ感が一層ます。

「それに対応した艦船の建造が必要ですが、
現在の能力では生産ラインにのるのに最短２０年かかる予測です…
また現行型のマゼラン級が相対するには…
一会戦やるにも１００００隻は必要でしょう」

「マゼラン級というと…」

「３００m級の砲艦型宇宙船です」
スペックをモニターに出す。

「これからは星系内型と付けますが…それが相対して、帰還率６０
%で御の字でしょう」

「一回の会戦で４０００隻も…かね…」
「人類おわた」
「資源が…」
「本当にそんなのが…」

「その宇宙戦闘用のＢＥＴＡが、こちらです」
モニターに出すと食い入るように見出す各国大使。

「２００ｍ級の突貫型ですが、これが宇宙母艦級から嫌って程でてきて、
最大光速の３０％で突っ込んできます」

「無理だ…終わった…」
「勝てる宇宙艦が思い付かん」
「全滅だな…」

「資源もそうだが…対策は…」

「資源ははっきりいって太陽系だけで賄えないと思われます。
なので他星系への進出は必然ですね…
資源確保及び生産能力向上の為にも…」

「異世界の方面でよい機体みたいなのはないかね?
あの巨人生体兵器みたいなのは?」

「エヴァのような一騎当千なのですか?」

「そう、なにかないかね?」

「前見せてもらった映像にあった」
「そうだ、巨大ロボット！！」

「一機で一戦闘こなしたとしても、
他に進行があればどうなります？
例えばハーナード星系で戦ったと同時に、地球や他の場所でもあるとしたら？」

「むぅ…」
「地球全滅…」

「物量には物量はかわりません。ですので数を揃え、勿論質もですが…必要です」

「地球内は国連軍で総力あげるしかないか…」

「あ、それについてなんですが…」

「まだなんかあるのかね？」
「ＨＰが…」

「はい…甲２号が新オリジナル ハイヴ化します」
「なぬ？」「トライデント作戦発動を！！」

「時期は未定です。今のとこ監視体制で観察中ですので間隔を計ってます」

「……今は弱体化は間違いないかね？」

「今はですね。甲2号がオリジナル化したらすぐに攻略し、その間隔を計って、弱体化を継続させます」

「……私の所は三番目か？」「開発する力ないから…」「大分後ろか…」

「最後の情報は…オリジナルハイヴが発射される２０００年程前の、上位存在分布予定図です」

「２０００年前！？」

「ええ、２０００年程前です……あ号を代表する上位存在は、２０００年程かけて地球に到達しました」

「ばかな！月から打ち上げてるだろ！？」
アメリカ大使の横槍。

「月ですか？…月から何が打ち上げてたかわかりませんが、
あ号は地球から６５０光年先の恒星系からやってきました」

「２０００年以上前の生物というか資材ユニットとか…」
「人類は…なにと戦ってたんだか…だなぁ…」

「報告は以上です。
我が異世界軍としては、甲2号観察及び攻略のち、
対宇宙戦闘にシフトしていく所存になります」
カオルの番が終わり…

「さて皆様方、国連軍としてはエヴェンスクハイヴ攻略を提案したいのだが」
アメリカ大使の発言。

「いやリヨンハイヴを是非とも！！
ＯＳのバージョンアップがすんで士気も高い。ヨーロッパ解放作戦を！！」
イギリス等ＥＵ諸国らが発言してきた。

アメリカとしては干渉地域があるとは言え、何時本土にくるか？もある。
ＥＵ諸国としては悲願のユーラシア大陸帰還を願っての事だ。

発言を求められたので、現状の状況を説明する…

度重なる増援の為、リヨンハイヴは定数を大幅に下回り、
３０万規模に落ちている。
エヴェンスクハイヴは定数が８万と攻略にはたやすい。

の為二方面作戦と戦力の足りない分は異世界軍から…
リヨンハイヴの基地化を提案し、

そのまま採決の形になり、臨時総会は締めくくられた。

武の自室…
行為が終わってベットの中に二人はいた。
武にとっては最後の思いで純夏としていたのだ…
そして、純夏に心に秘めていた事を聞く。
「ところで、オレはいつまでこの世界にいられるんだ?
あ号を倒した…いや洗脳したか…だろ?
はっきりしとかないとおまえにも悪いし…」

純夏が凍りついたように動かなくなった。
「どうした?おまえにもわかんねえのか?」

純夏は笑顔を凍りつかせたままで、
ぎこちなく武にから顔をそらしてく
「どうしたんだよ。顔をそらして…返事ぐらいしろって」

凍りついたまま…

「おまえ大丈夫か？」

「…武ちゃん…怒らない？」

純夏は顔を元に戻しながら武に…

「何をだよ。言わなくちゃわかんねえよ」

「…だから、怒らない？」

「聞いてみなきゃわかんねえよ」

「じゃあ、嫌だっ！武ちゃん絶～～っ対に怒るもん！」

「わかったよ…怒らねえから言ってみろよ」

「ホントに？！」

「ああ、本当だ」

「ホントにホント？！」

「くどいッ！　男に二言はない！」

「絶対おこらないでね……

それじゃあ言うね……武ちゃんはね、もう元の世界に戻ってるの」

「バカかおめえは！」

「あいたーっ！」

バシッといい音を立てて、景気の良い一撃が頭部に炸裂した。

「ひどいよ～～！　怒らないって約束したじゃないのよ～～！
武ちゃんの嘘つき！！」

「だまれ！！それより元の世界に戻ってるとはどういう意味だ？！
今ここにいるオレはなんなんだ？」

「それはね…元の世界から集められた、この世界の武ちゃんを構成
していた要素は、
もうとっくに元の世界に帰っているの。
だから今ここにいる武ちゃんは……残りかす？」

「バカやろう！！」

「あいたーっ！」

バシッといい音を立てて、再び頭に炸裂した。

「なにするんだよう！量子電導脳が壊れてバカになったらどうする
んだよぅ～」

「だまれ！オレにもわかるようにちゃんと説明しろ！」

「それは…前の世界で因果同体から解放されたのは、
武ちゃんわかってるよね？」

「ああ、わかってる」

「それなのにこの世界に武ちゃんは再び来た」

「ああ」

「この世界に来た武ちゃんの中に、今までループを繰り返した武ちゃんの中になかった新しい要素が、
武ちゃんの中に入っていきたの」

「なんだ、その新しい要素って言うのはっ！」

「多分なんだけど……」

「早く言えっ！」

「この世界で私を庇って死んだ武ちゃんの因果情報だと思うの……」

「この世界のオレの因果情報?!」

「……うん……この世界の私が知っている武ちゃんの匂いがしたから、
たぶんそうだと思うんだ……」

「この世界のオレ…」

「で、武ちゃん、ひょっとして……元の世界のこと……
前ほど思い出せないんじゃないかな?」

「……」

「この世界や前の世界等で経験した事しか思い出せないじゃない？」

「だって、おまえ……今までこの世界のオレの記憶なんて、
ＢＥＴＡのトラウマぐらいしかなかったんだぞ！なんで突然……」

「元の世界の武ちゃんの因果情報は、もう全部元の世界に帰ってい
て、今の武ちゃんの中にはないんだよ。
今の武ちゃんを構成している大部分は、武ちゃんがこの世界でルー
プし続け、経験した出来事の因果情報なの。
後の残りは、この世界に元々存在していた、
私をかばって死んだ武ちゃんの因果情報だけなの。
それに元の世界には…もう既に武ちゃんが存在しちゃってるの…」

「じゃあ、オレは本当に……元の世界には戻れないんだな？」

「ごめんね、武ちゃん……武ちゃんはもう……
私の力では元の世界に戻ることはできないの」

「今ここにいるこのオレはこの世界にずっといられるのか？
突然消えたり、別の世界に行っちまうことはないのか？」

「それは大丈夫だよ。
今の武ちゃんを構成しているのは、この世界等で経験した出来事や
記憶の因果情報だけだから、
消えたり、別の世界に行ったりする理由はないよ。
言ってみれば、今の武ちゃんは、この世界で誕生した…本当の武ち
ゃんなんだよ」

「……そうか」

「……武ちゃんは……この世界にいるのは嫌なの？」

純夏はそう言いながら、不安そうに武を見上げた。

「そんなことはねえよ。
正直、ＢＥＴＡを追い出さずに、みんなを置いてこのまま帰ることには…
気が引けてたしな」

「……せっかく、私と武ちゃんはの赤ちゃんが出来たんだし、
このままいてくれるのは嬉しいかな～なんて……あははっ……」

「ああ…そうだ……はぁぁぁぁぁ？」

去り際なく爆弾発言がでたのに気がついた武。

「ちょ…おまえ！赤ちゃんって！」

「うん…できたよ」

「００ユニットなんだろ？何故できるんだよ！」

「だって武ちゃんがあんだけ……出すんだもん…
できちゃうよ」

「いや、おまえ…そうじゃなく、赤ちゃんが何故？」

「それは私から説明するわ」

「先生！！」
二人の愛の巣に香月副司令が入ってくる。
ロックはかかってないも一緒だった…

「佐渡島ハイヴを制圧した際に、生体機能を部分的に復活させたのよ。
そのおかげで純夏は負担がとれて性能ＵＰしたわ。
その中に生殖機能もね」

「えへへ…」

「それで早速赤ちゃんができたのね…流石恋愛原子核」

「それとこれと違うっすよ！」

「あら関係あるわよ。１００発１００中じゃない」

「……武ちゃんは…私との間にできた子供…いやなの？…私をすてるの？」

「いやじゃないさ……一緒に一生育てよう…」

「武ちゃん！！」

「あ～どうでもいいけど二人ともいい加減に服着たら？」

「先生が勝手に入って来たんですよ！！」

「はいはい…ごゆっくり～」

……

カオル報告

この後の方針きまりました。

地球上と宇宙多方面に及びます。

第　１９０話　国連報告、そして今後…　投稿日２０１１１１０７（後書き）

ナギ少尉「これで武ちゃんにも子供ね～」

作者「やっとだな」

ナギ少尉「でもその間、凄乃皇の操縦どうするの？」

作者「…機動しないから、この世界の純夏は安定しまくりだし…
赤ちゃん抱えたままのるかもね」

ナギ少尉「でも生体反応０が００ユニットなんでしょ？
いいの？赤ちゃんできて…」

作者「元々はＢＥＴＡの意識調査等がメインの００ユニットなんだが…
カオルが出現したから意味は無くなってきたんだよな。
起動成功したから、今度は安定化をより進めるから、
半人間化を目指してに変えてきた最中…だね」

ナギ少尉「ふ～ん…でもこのルートだと…
瞑夜と、千鶴と鎧衣はいかずの後家？柏木も…」

作者「……さて次回は」
ナギ少尉「ごまかしたな」
作者「太陽系外への模索…お楽しみにぃ」

第１９０話　太陽系外への模索　投稿日２０１１１１１０（前書き）

第１９０話　太陽系外への模索　投稿日２０１１１１１０

第１９０話　太陽系外への模索　投稿日２０１１１１０

２００２年２月９日

「騒ぎ過ぎたなぁ…
とりあえず対策か…」

前日の国連臨時総会の後や連日の祝賀会等一通り落ち着き、
やっとハンガーで考えられていた。

［宇宙戦闘用に対してでしょ？］

「ああ、マゼラン級だけじゃ正直お話にもならないからな…」

ＵＣの熱核ロケットなどは光速度に及ばないが、
一応は光速度の４％までは加速し続ければ届く…
４３２０万ｋｍ／ｈまでは…

ただし加速し続ければ及び理論上においてだ。

マゼラン級をみてもわかるが、高速対策のとってない船が、
無理矢理高速度まで加速したとしよう……
その状態でデブリにあたるようなら…
光速度の１％あたりで半壊どこか、撃沈する嵌めになる…
１％でも、３０００ｋｍ／ｓ＝１０８０万ｋｍ／ｈの速度だし…

なのでお話にならないになる。

「改造すればそりゃ使えるようにはなるけど、
そこまでのを想定してなかったからね…」

想定してたのが、デブリや落着ユニット、射出体等の迎撃であった。
宇宙世紀時代の地球連合の装備は、基本デブリ屋から発展してった…
ので準じた状態でしかなかった…

「一から作りなおした方が早いといえば早いし…」

［ヤマトやノプティバガニスもあるから?］

「ああ、そうだな…とヤマト完成したん?」

ヤマトは外宇宙航行艦…３０万光年を妨害にあいながらも、
１年におよぶ単独航行で踏破した実績がある。
一日で８２２光年は踏破した実績のあるコピー艦であった。

一方、ノプティバガニス…ゼントラーディの分基幹艦隊の指揮軍艦だが、
こちらも外宇宙戦闘艦で、ヤマト同様亜光速戦闘に対応はしてあった。

［完成してるよ～、ヤマトは建造に手間取ってたけどね…
波動エンジンの充填とかさ…
ノプティバガニスは単純に大きさからもうちょいだね］

「ヤマトは２ヶ月か…」

ヤマト昨年１２月９日より技術習得目的の為に建造開始。
波動エンジンの作成に手間取ってたが、とうとう完成したのであった。

ゼントラーディ軍艦である、ノプティバガニスは、
単純に４ｋｍという今までの最高の大きさに手間取り、
まだ未完成、３月には…との事だった。

「短縮はできそう？」

［ヤマトで使ってる波動エンジンの充填が、どうしても４５日は貰わないと無理。
ノプティバガニス級は…短縮無理かな？］

「ん……そうか…」

むしろ４ｋｍ級を約４ヶ月で見込んでいるあたり、異世界軍建造能力の高さが伺える。

日本帝国の大和級１番艦をみてみよう…
起工から進水まで実に１００８日もかかっている。

アメリカのアイオワでも起工から進水まで７９１日…
実に二年強だ。

しかもノプティバガニスの１０分の１にしか満たない艦船でだ…

「ん～、月産１隻未満では対宙戦なんか話ならんし…
まぁ…うまくいけば、マクロス世界の廃棄自動工業衛星が、
持ってこれてなんだけどなぁ…」

［それをもってきて修繕して利用？］

「ああ」

［ところでその自動工業衛星って大きさはどの位なの？
何故コピーしないの？］

「そりゃ……１００ｋｍクラスっていえばコピーに時間かかるさ…
だから中々ね」

［コピーに時間かかるなら…ヒルダさん特製のシステムウイルスで、
自動工業衛星の技術情報取得できるよ～
自動工業衛星のノウハウ取得も美味しいし～
けど時間かかるけどね］

「ほう？なにそのウイルスって？」

［ヒルダさんが開発してきたんだけど、名前ヒルダ菌でいい？］

「ふふふふ…うんそれでいいわ……で、そのヒルダ菌って？」

［ナノマシンなんだけど、撃ち込まれた機械の機体情報を取得できるよ～

マスター弄った時にできないかな？でできた一品らしいね。

１００ｋｍクラスなら、一ヶ月はかかるけどね］

「俺弄った時…？？……あ～あの身体検査か…

なんか時間かけるなぁっと思ってたが…」

［この間のドーピングが効いたかもね］

「プラントって美形ばっかりだしな…

で、撃ち込んだらしばらくして回収？」

［その後、解析かけて…って流れだね］

「で、どの位の量を撃ち込めば？」

［え～とね……2リッターペットボトルの液体を、

染み込ませるように巻いて塗って下さい…だって］

「それだけ…いや手間取りそうだなぁ…」

［自己増殖型ナノマシンで、回収指示で自滅するだって］

「で、回収は？」

［専用の装置で情報吸い上げる形ね］

「成る程ね…」

［あとヒルダ菌について何かある？］

「実際にやらんと何ともいえないさ…」

「で、ノプティバガニス級作った、建造プラットフォームを増産し、日産２０隻造船できるようにするには？」

［フル稼働した前提で造船プラットフォームが２４００基必要だよ。あとプラントも５０基程追加してくれないと無理、またそんな数のプラットフォームの管理や制御、場所も大変だよＬ４使ってなんとかかな？］

「……大変な事になるなぁ……」

進宙したそばから、ルートの確保等で、
交通渋滞が発生する光景が目に見えてきた…

「となると…まとめて建造できる大型ドックか…」

［それしかないね～
大型施設なら制御も楽だし］

「けどまぁ…時間かかる…よな？」

［それなりにね～］

「短縮手段は…」

［多分１番手っ取り早いのが小惑星をくり抜いて、
外殻や内殻として利用する方法］

「あ～そういやぁ…マクロスの自動工業衛星も大概それだなぁ…」

地球から見上げた自動工業衛星をおもい浮かべていた…

［もってくる規模や大きさによりけりだけど、器を一からつくらない分だけ、
早めに建造ドックとして稼動はできるよ］

「くり抜いた分はそのまま資源として流用か…」

［もちろん］

「それもありか…な」

［今なら結構手頃な大きさの小惑星ごろごろしてるからね～］

「となると…、プラットフォームを増やしつつ、
小惑星もってきて、くり抜きつつ、ぶち込む…か？」

［機動制御系使い回せるね］

「じゃあそれでいくか…」

「艦船は…として、対宙戦闘機は……
ＶＦ－１は話にならんが、
ＶＦ－１７１あたり以降だな」

［地球上だと大気圏がじゃましてるだけだしね～］

「だな…」

地球上では大気が衝撃となり機体を襲う。
その衝撃の限界に挑み、ぶち抜くがいかに大変か…はわかると思う。
実際のところ高度１万メートルのところをマッハ５．０あたりで限界であり、
それ以上の速度は空気の壁による、
機体破壊の危険、及び耐熱限界がくる為、出せないのであった…

また地上に対しての衝撃波もえらい事になる為、
地球上ではマッハ以上は意外と出しにくいものである。

空気がある為地球上では、大気がある限り光速に到達するのはほぼ無理に近く、
宇宙空間にて光速近くいく船であっても、地球上では速度が落ちてしまうものである。

もっともルーロスはその原理が違う為に限界を超えていたが…

「後は生身のパイロット限界まで挑むＶＦ－１９か…」

更にパイロットにかかる機動Ｇの問題も加わってくる。

西暦２０００年代製のリアル世界のＦ－１５イーグルは、
戦闘機動で１０Ｇで機体の弱い部分にクラックが入り、
１２Ｇで永久変形がおき始め、
１３Ｇで外板のビスが飛びはじめ、
１５Ｇで羽がもげる加重である。

パイロット、人間がそこまで耐えられないので、
機体にそこまでの強度を付けないのがある。

人間はというと耐Ｇスーツ着用で、たった２Ｇ減の作用しかない。
つまり生身だと９Ｇしか耐えきれないというか、そんなものである。

９Ｇの戦闘機動を行うと、腰がいたくなり、酸素マスクの痕がのこり、
足裏、ふくらはぎ、二の腕等柔らかい部分は内出血をしている。

更にその上だと１０Ｇは緩めるとミサイルがくるから必死に逃げる…
１１Ｇで３０秒程で本当の限界がくる…

更にその上で瞬間的にはかかる事もあるが即、入院で精密検査行きで、
機体も分解整備になる。

だから機体はＦ－１５イーグルだと１２Ｇが設計上の限界機動であった。

因みにどの位人間が耐えられるかの人体実験が、
過去にアメリカでありました。

その人体実験に志願者が参加し…
眼球は飛び出て複雑骨折、辛うじて生きてはいました…
最大Gが２０Gを超えたそうです。

さて…バルキリー付属の耐Gスーツは、２０５０年代製で人体に負荷がかかるが、
戦闘機動で１６G等標準的に耐えられるように設計されている…

バルキリー用耐Gスーツは2倍減してくれる優秀な専用スーツであるが、

さらにその限界を追求したのがＶＦ－１９であり…
搭乗者のフォッカー少佐は生身換算すると…
肉体にうけるGが、１３G超えていた…

「…確かに生身まぁバルキリー耐Gパイロットスーツでだが…
フォッカー少佐は異常だよな」

［うん…あの人は異常］

フォッカー少佐の戦闘記録映像等をみてみると…

地球上で２５G機動を超え、光線級の光の速さで到達する正確無比

なレーザー照射等も、
かわしているのであった…

ピンポイントバリアを一切使わずに…

あの光線級が首というか眼球を右往左往して…

流石に単機でゼントラーディ基艦艦隊中枢までいき、
中枢をたたき生還する事が仕様として求められた機体であった。

それを難無くのりこなして、常人の限界を超えている…

この上を越えるとなると高性能無人か、ＶＦ－２２以降しかなくなってくる……

まさにパイロットを選ぶ機体といえよう。
入手した時はパトロール隊用のリミッターがついていたが、
少佐は、早々外した仕様として乗り回していた。

「ブラックタイガーもかなり良い機体だよな」

大気圏高度１万でマッハ７を出す、かなりの耐熱限界をもつ、
ヤマト世界の航空機で、
機動設計ＧはＶＦ－１９に負ける１２Ｇであるものの…速度はＶＦ－１９を上回っていた。

「機動力で人間の限界目指すマクロスか、速度で目指すヤマトか…

か…」

確かにヤマトの世界はガラミス帝国戦闘機に一方的にやられたから…だろう。

「とりあえずはマクロス系統と、ヤマト系統の機種で空間戦闘は固めるかな…
ガンダム系統は、空間戦闘は話にならん…」

［了解～］

「さて、ヤマト進宙は？」

［明日にでも～］

「じゃあ…明日テスト航海かねて、でるか…
えっとG兵器…
G弾と間際らしいからゴキブリ兵器を載せておいてくれ。
火星とタイタンに実験しにいくから」

［了解］

「あとは…小惑星は…」

［高出力フォールドシステムを表明にくっつけ、
連動できるようにすれば問題ないよ」］

「あ…そうか…」

……
カオル報告

対策、方針で今日は、一日つかいました。

第１９０話　太陽系外への模索　投稿日２０１１１１０（後書き）

ナギ少尉「今回は対空間戦闘に関しての方針みたいね」

作者「大気圏内でなく、最大光速の３０％で貫いてくる突貫級に対して、
わかったら対抗するべきだよな…だし」

ナギ少尉「でも、まんまトップをねらえ!!
の宇宙怪獣って話よ…特に突貫級は…」

作者「それ以外おもいつかんでしょ…生物系の生体兵器って…
トップをねらえって宇宙怪獣では完成してるしなぁ…

まぁでも、ＢＥＴＡの特徴の個体での恐怖心なしから発展するとさ…
突撃級の宇宙バージョンでもそういった発展なるよ…
だからレーザー等出さずにただ特攻し貫くだけ…
けど光速の３０％の威力で…ってわけさ」

ナギ少尉「成る程ね…
で、対するはヤマトとマクロス世界の艦船と…あ、マクロスＳＤＦ－１はどうなったの？」

作者「……次回おたのしみにぃぃぃ」

第１９２話　ヤマト進宙　　投稿日２０１１１１１６（前書き）

え～…副鼻腔にまた風邪菌が入り、
喉がヤラレマシタ

長引いてます。

第１９２話　ヤマト進宙　　投稿日２０１１１１１６

２００２年２月１１日

場所はＬ４に浮かぶ建造プラットフォーム…

今ここにヤマトがこの世界に誕生しようとしていた。

プラットフォームは重力制御付き宙間施設であり、
宇宙空間における艦船ドックとして、
日々艦船を建造していた。

現在プラットフォームは、修理補給専用等も含めると１３基Ｌ４に浮かんでおり、
拡張建造中のプラットフォームも日々増えていく状態にあった。

中心部にチューリップを添えた、
鳳仙花状にプラットフォームは広がっている。

ＤＦ付きの輸送艇でチューリップからでてきたカオル。

（やっぱりでっかいな…大和よりも…）

大和は２６３ｍだが、この恒星系航宙艦である宇宙戦艦ヤマトは…
全長５６６ｍ、全幅９２ｍとほぼ2倍強にあたる長さと幅を誇っていた。

大和サイズでないのは、艦載機の数で航空母艦並の容量が必要であ

り、
また恒星間を行き交うにあたっての乗員の生活水準をたもつ部分があり、
乗員の生活、護衛艦載機、人類が生き延びる研究部分をおさめる、
ノアの方舟として建造された曰くがある。

と思われた。

（公式設定は３００m以下なんだったけどなぁ…？？）

多分、ガラミス星人の目が悪いのでその様な数値がついた…
と思われる。

公式設定通りだと、とてもでないが、艦載機を５０機近く積載し、
コスモクリーナの研究施設など広大な施設が入るスペースがない。

絶対に無理です。

艦載機にしても、大和の艦載機数と同等の数しか入らない筈でり…

どっかの人の研究では、とりあえず移動スペース無しに敷き詰めれば、
艦載機２４機までは可能、という結果もあった次第である。

さて、艦のサイズ違いの話は置いといて…

波動エンジン等の取得目的で造船されたこの世界でのヤマト…

（確かヤマトの弱点下方からにめっちゃ弱いんだよな…
大気圏内突入で、水上着陸可能のせいでもあるけど…）

対空戦闘等で下方向への弱点等あるが、
対宙戦闘を建造開始した１２月には考えてなく、
よく下部の第三艦橋が破壊、死者が多数でる描写もある。
そこんところが引っ掛かっていた。

（まぁまさか対宙戦闘あるとおもってなかったからなぁ…
試験航海おわったら改装しなきゃいけんだろうし…
けど火力の集中もあるから…
ん～…複数艦での運用しかやっぱ考えられないな…）

結論的に、恒星戦闘艦の運用は単独では考えない方が無難であると考え、

下方については他の艦がカバーし、
弱点をなくす方向でいくことにした。

輸送艇がヤマトの下部ハッチから艦内に入り、エアシールドにより与圧区画にはいり着艇した。

輸送艇から艦内へと入る。

格納庫は５０機に及ぶバルキリーが積載可能スペースをとっていたが、

今回は内火艇を１６隻積載している。

艦内通路から艦橋へと向かう。
食堂はキャーティア技術導入により、合成技術が向上していて、
本来の保存スペースから４割減して、
また一回の補給で３年間は２００人の人員を養う事ができる。

農場スペースにとられてた分はリフレッシュ区画へと変更していた。

また艦内要員の睡眠等に睡眠カプセルを導入、
私室スペースをとる分を削減している。

といっても…今回は生身？の人員はカオル一人、
あとの要員はヤドカリ、コバッタ達で固められていた。
この世界での始めての進宙である。

第一艦橋に上ぼり、既に配置についているヤドカリやコバッタ達。

外部横浜司令部より通信がはいる。

『第１４プラットフォーム建造艦、ＳＢＢ－０２１へ、艦船名を登録お願いします』

「ヤマト級１番艦、艦船名ヤマト」

『艦船名ヤマト…登録されました。ＳＢＢ－２１ヤマト離床許可を与えます』

異世界軍における宇宙戦艦クラス２１番艦、ヤマトが認証された。

「了解、起動シークエンス」

［補助ジュネレーター点火］

サブ動力炉である、核融合炉に明かりが灯る。
エネルギーが波動エンジン起動に向け、
蓄積していく…

［スターターへのエネルギー充填率１００％］

「波動エンジン始動」

スターターに貯められた全てのエネルギーが、
波動エンジン動かす為に…エンジンの唸りが上がる。

［波動エンジン、出力上昇…起動しました］

「よし…プラットフォーム、固定アームをはずせ」

プラットフォームに対し、艦固定アームを外すように通信をおくる。

アームが艦から離れ…

［離床確認］

プラットフォームから離床用アームで艦を軽く前方へ押される。

プラットフォームから押し出された慣性でゆっくりと前へと進む。

「サブスラスター、点火、構内速度前進」

スラスターに火がともり、プラットフォームからゆるゆると艦はなれてく…

「回頭左舷９０」

プラットフォームにスラスターの排気炎が届かないように艦を回頭させ、
慣性でそのまま艦の右方向にながれる形になる。

「波動エンジン接続、メインスラスター微速前進」

メインスラスターに火がともり…ヤマトがその巨体を前へと進み始める。

地球のラグランジュ軌道より離れたヤマトは、
火星へとショートワープの準備にはいる。

短い区間だが、１Ｇ等加減速では、
現在１日の距離にあるので試運転にはやりやすかった。

［目標ポイントまでの障害物感知せず］

［座標固定］

［エネルギー充填率…６０％］

ヤマトに積まれているワープ機関は、
進路上に障害物があると…えらい事になる…

例えばガラミス艦隊…がいたとしよう…

ガラミス艦隊を通り越すようにワープ進路をとると、
運が良くなければガラミス艦上に出現し、
その時点でヤマトの質量とガラミス艦の質量がかけ合わさった対消滅爆発により、
ガラミス艦隊とヤマトごと周囲１光年あたりにわたり、
消滅してしまう事故がおきる…

なので進路上に障害物が無いかをサーチし、
障害物がないかを確認した上でワープを起動させなくてはならない…

という安全面での制約がある。

今だプラントで制作できないキャーティア技術のワープと、
違う点がそこだった…

［最終安全確認完了、ワープ始動１０秒前］

ヒヤヒヤする瞬間ともいえよう…

ワープ自体は、波動エンジンの出力に応じたワープ距離がとれ、
安全が確認できれば１０００万光年でも可能…
しかしそこまでくると、正直負が悪く、ほぼ９９．９９９９％なんかしらにぶつかり、
対消滅反応を起こして消えうせる事になる。
彗星でも駄目、小惑星でも駄目、宇宙船でも駄目、
サイズ的には１ｍの物体でも駄目…
という際どいものである。

１０ｃｍ以下の物質であれば対消滅反応起こさずに、
上書きできるのがまだ救いであったろう…

そんな危険極まりないが、長距離可能なのが、ヤマト世界のワープの売りの一つであった。

［ワープ］

瞬間ワープ空間に突入、光の速さを越えて…
体感２秒位で幕を飛び越えて通常空間へと復帰する。

［ワープアウト、座標確認…目標ポイント誤差コンマゼロ…
試運転終了します］

艦外窓の正面には、火星が見えていた。

「…ヤマト世界のワープって正直…対消滅反応起こすかもしれんから、
ヒヤヒヤドキドキだもんな…」

［安全確認とれてる場所意外ではやれないよね…］

「充電さえできれば連続跳躍は可能でもあるし…」

［そういった意味では機関的には複数搭載も可といえるね］

「ショートワープの連続か…敵の背後に直接出現かもね」

［計算がえらく手間取るけどね］

「だなぁ…」

［メインスラスター加速、火星軌道へと入ります］

「火星か……」

火星…しっての通りＢＥＴＡの搾原地になってるのがわかって、約３５年程…
ハイヴが１５個建設されていた。

そのうち親離れし、新たな司令塔になるかもしれない。

その親が連絡とれずにいたこの環境こそが、地球人類の命運を救ったとも…
今となってはそう判断できるかもしれない。

分厚い大気に阻まれ、地下深くまでビーム兵器が届きにくいこのＢＥＴＡの天国に…
黒い悪魔を送りこもうとしていた。

「ゴキブリ兵器投入用意」

「了解マスター、ゴキブリ兵器搭載機発進用意」

ヤマトの後部艦載デッキが開き、内火艇が１５隻発進してく…

内火艇にはゴキブリ兵器が搭載され、
軟着陸できる落着ユニットを積載していた。

ゴキブリ兵器が漏れたらホイホイさんで対策とらない限り、

重大事故に繋がる…

そのゴキブリがつまったカプセルは厳重な容器に、
密封されていた。

容器には腹減った、何か喰わせろと、ゴキブリがうじゃうじゃとうごめいている。

火星の大気圏に突入した15隻の内火艇より、
落着ユニットが地表に向け放出された。

落着ユニットは機体をまもるべく、地表から所定高度になると逆噴射し、
速度を落とし地表に軟着地したあと、
カプセルを切断しコキブリを放出する。

そういった動きをとる筈だったが…

大概の落着ユニットがたどった流れを記載しておこう。

落着ユニットの逆噴射を発見した要撃級が、
威嚇の為に空中にまだある落着ユニットに前腕を早くも伸ばしてた。

過去の学習であろう…
落着ユニットは地表に接地する前に、前腕部でたたき付けひしゃげた。

ひしゃげたユニットに更に前腕部をたたきつけ、破壊行動をとっていた。

また戦車級が資源として回収すべく歯をたてていた。

そうする事により…カプセルから隙間があき、
そこから衝撃に生き残ったゴキブリが、
一斉にユニットを攻撃していたＢＥＴＡに餌だ！の如く襲い掛かった。

まさにＢＥＴＡにとって未知なる生物に襲われる。

その大きい図体が小さいゴキブリには届かず、
前腕の死角の部分から体内に侵入される。

体内に侵入され組織を咀嚼され、その間に分裂増殖してく、

痛みを感じる器官があれば、体内で激痛がはしり苦しみ悶えてるだろう…
なんとか振りほどこうと暴れる要撃級…

しかし、段々と体内組織が喰われて行動が緩慢になっていき…

とうとう命が持たなくなり…
地面に崩れおちた。

しばらく皮の表面近くででゴソゴソとうごめいているゴキブリ…

その皮を突き破り、数を増殖したゴキブリは、
味方である個体の周囲にいた他のＢＥＴＡに襲い掛かり始める。

［内火艇全１５隻帰還、無事に投下済み］

「おうおう…」
スクリーンではＢＥＴＡに襲い掛かってくゴキブリが映ってた…

「これならこの兵器使えそうだなぁ…」

［だね…グロぃけど……］

「火星の状態は…」

［監視衛星で横浜基地でモニター中だよ］

「どんだけ変化なるか…かなり個体数へってほしいけどな…」

［だね］

「ほんと火星破壊しないと、攻略できないくらいいるしなぁ…」

火星はフェイズ９の規模のハイヴが１５個…
その個体数が１０億は越えていた。

［破壊した方が速いよ～地球に影響でちゃうけどね］

「だな…さて…次はタイタンに投入か…」

［目標座標、土星近海、フォールドシステム作動準備］

ワープは今度は使わない…というより使えない。
アステロイドベルトに引っ掛かってしまうからだ。
サーチしつづけ、タイミングを見計らえばワープは使用可能でもあるが…

障害物あっても跳躍可能なフォールドの方が楽ではあった。
時間が流れるが短距離なら問題はない。

フォールドの制約の重力の影響をうけてるが…
［重力障害除去、跳躍可能、エネルギー充填中…］

計算さえしっかりすれば地上でもフォールドができる点が、フォールドシステムの売りであった。

まだ跳躍可能距離が短距離すぎるのと、

時間軸のズレが１：１０でるが…

［充填率１００％…フォールドシステム作動］

艦のフォールドシステムからエネルギー空間が周囲へと広がる。

［フォールド空間固定…フォールドイン］

エネルギー空間が艦全体を包み込んだところて、広がりはとまり…
瞬間フォールド空間へと入れ代わる…

艦内時間１秒にも満たずに、通常空間へとヤマトは復帰する。
途端にエネルギー空間が収縮…システム内部にて消滅する。

［デフォールド…目標ポイントずれなし…土星近海］

艦外窓には土星が見えていた…

［これよりタイタンの衛星軌道へとはいります］

土星の衛星タイタン…
分厚い大気圏に阻まれ、
またも大気圏外からの大出力レーザーを撃ち込ませられずにＢＥＴＡの天下をゆるしていた。

「火星とここタイタンを下せば…
冥王星圏内はとりあえずの目処がたつのにな…」

「とはいっても2億を越えてる個体数がいるこのタイタンに、降下するつもり？」

「したくはないなぁ…」

ＢＥＴＡが完全占拠している星は、個体数が星サイズによるが億を越えてて、
１０億近くに到達する場合もある。

火星等が代表的であろう…
そんな星に降下で安全地帯となる拠点を構築するのは、
困難を極める死闘になるのは十分予測される事であり…

なので、対抗生物となるかもで、実験的にゴキブリ兵器がまた投入となる。

「タイタン衛星軌道到達、内火艇発進します」

火星軌道から移動中に再び落着ユニットを搭載した内火艇が、
下部ハッチからタイタンのハイヴに向けて発進した。

タイタンは約５千キロ、８つのハイヴを構築していて、
実に個体数５億の数をこたえていた。

内火艇は濃い大気圏に突入し、ハイヴ近辺にくると、
搭載している落着ユニットを投下した。

落着ユニットは全基軟着陸に成功し、カプセルを切断作業にはいった。

異物を観察しにきたＢＥＴＡ、この星では初遭遇の為情報が行き渡ってないのだろう…

資源として回収しようと…
カプセルから飛び出たゴキブリが襲い掛かる。

この星でも黒い悪魔は襲い掛かった。

［落着ユニット全基投入成功です］

「火星の情報伝わってなかったか…
襲われすらしなかったんだな…」

［火星では過去に度々人類が送ってたからね～］

「まぁ指揮系統が惑星内部とまり…って事の証明だろうな…」

［だね］

［監視体制を衛星に引き続き、土星軌道圏内から離脱します］

試験航海は、メインイベントを迎える。

「さて、亜光速へか…」

恒星間において、最大光速の３０％で襲撃してくる、
突貫級を迎撃できるようにしなければならない…

［メインエンジン最大加速］

［１０Ｇ…１００Ｇ…１０００…２０００…００…１０００…１２００…１４００…１６００…１８００…２０００Ｇ最大加速です］

ヤマトの巨体が亜光速度目指し最大加速にはいっる。

本来なら艦内部に２０００Ｇという凄まじい重圧がかかるが…

ヤマト搭載の重力拡散装置により、
艦の推進減速作用による前後の動きについてはかなりの低減ができ、
Ｇが艦内にかからずにいた。

銀河鉄道も加速は１００００Ｇを越えていて、同様なシステムを搭載

している。

1時間後には光速の23%に到達…まだまだ加速できるが…

［テスト終了、減速開始します］

流石にこれ以上加速しつづけると、減速に時間がかかる為、
テスト終了し減速にはいる。

「本来なら…1日と2時間24分か？ずれは…」

［シールドなしだとそうだね］

恒星間航海船であるヤマトは、光の速さを越す銀河鉄道と同様の空間シールドに包まれ、
時間のズレを回避できるシステムを搭載している。

その為、時間のズレなく巡航速が光速の99%になる。
また空間シールドの恩恵で光速を突破も可能であった。

先に銀河鉄道をコピーしたからこそ、搭載できたシステムといえよう。

［引き続き、最終目標地点、バーナード星系への中距離フォールドはいります］

今回はついでに地上探索もかねてのワープになる。
（ん？フォールド？）

「あれ？ワープじゃなく？」

［２０日近くにわたり、カイパーベルト群が進路上にあたります。
の為フォールドに切替ます］

「あ、了解」

空間探索がキャーティア技術で１０光年にわたり可能でも、
タイミングがシビアになりすぎるので、
フォールドに切替たようだった。

因みに約５．９光年離れているバーナード星系は、空間探索により
戦闘用は引っ掛かってなく、
恒星に６つの惑星からなっているのを確認できていた。

［目標座標バーナード星系近海］

今回は地上のＢＥＴＡ侵攻状況の確認をかねて直接星系内部に、デ
フォールドする。

［フォールド時間、艦内部経過時間１時間２４分５９秒します。
艦外時間１４時間９分３６秒］

ゼントラーディ技術では、１０光年で１日経過するフォールド…

［エネルギー充填率１００％…フォールドシステム作動します。
……フォールド空間固定…フォールドイン］

バーナード星系へと超空間転移にはいった。

……

カオル報告

始めて人類？が太陽系外へと進出します

タイタンと火星にゴキブリ兵器投入成功

ヤマト試験航海中

第１９２話　ヤマト進宙　投稿日２０１１１１１６（後書き）

ナギ少尉「とうとう太陽系外へもいくのね…」

作者「まぁ…話の流れ的にいってそうだなぁ…
資源搾原地を求めてでもあるね」

ナギ少尉「で、ケンタウルスアルファでなく、バーナード星系？」

作者「ケンタウルスアルファは……
どうしようかなぁと考えたんだけど…なんか複雑化してるので、
惑星なし恒星系として、異世界軍には認知ずみなので探査対象外としました。
なのでこの後も中継局でてるかもですが…」

ナギ少尉「うんうん」

作者「バーナード星系は、リアルでは惑星がある根拠が無し…といわれてます。
ですがＵＬでのエンディングがあるいじょう…惑星は存在すると設定しました。
なので惑星内部の探査対象となってます」

ナギ少尉「ほうほう…で？」

作者「詳しくは次回に…」

ナギ少尉「まぁ次回お楽しみって事ね…
あとヤマトの設定突っ込まれそうだけど？」

作者「まぁ…本文とおり艦載機やら、なにやらでとてもじゃないですが、地上艦と同様にはいきません。
設定の矛盾はヤマト原作者も認めてるので、そういった事にしました」

ナギ少尉「２６３ｍや２９３ｍだとね…」

作者「あとＧについては…１Ｇ加速で１年でやっと光速近くに到達と考えると…
とてもでなくイスカンダルへ到達できません。
ワープにたよりっきりになるでしょう…
なのでそういった艦全体的に加減速Ｇを、
キャンセルする装置が詰まれているとおもって下さい。
銀河鉄道も同様です」

ナギ少尉「さて作者の苦しい言い訳は個々までで…
次回、バーナード星系へ…お楽しみにぃ」

第１９３話　バーナード星系へ　投稿日２０１１１１２１

「ほぉ……」

「ん？何かあったんか？」

「武、このニュース見てないのか？」

「ん？どれどれ？」

異世界軍ホログラムニュースを覗き込んだ。

横浜基地は、オリジナルハイヴ攻略後、
太平洋総軍第１１軍としては規模を縮小、
異世界軍の基地と化し、
またオルタネイティヴ４は異世界軍内部に活動の場を移し、
Ａ－０１に関しては、異世界軍に身分を移していた。

その為冥夜ともこういってのんびり武もＰＸでデザートを、
つっついているようなものだった。

因みに、横浜基地所属の国連軍兵士達は、
前線により近い鉄原基地または、重慶基地へと移動している。

「バーナード星系への進出中？？」

ヤマトがフォールド航行によりバーナード星系へ向かっているニュースが流れている。

「バーナード星系か……前とは違うな」

〜〜

武はそっと胸を押さえる。
内ポケットの中の異動命令とＩＤカード。

これがあれば、明日この基地から打ち上げられる駆逐艦に乗る事ができる。
衛星軌道上のステーションを経由して、ラグランジュ点に集結している移民船団までの片道切符…

ーーオルタネイティヴ５ーー
人類種の生存を優先目的としたバーナード星域移住プランと、
米軍が開発したＧ弾の大量運用で、地球上のＢＥＴＡを殲滅する作戦が対になった計画。
だが移民船団に乗れる数はたった十数万人だった……

その最後の便となる駆逐艦、搭乗リストに名を連ねるのは、
様々な分野のエリート達であった。
人類という種の希望を、未来へとつなぎうる人々が…

そこに誰かが自分を選んで、このチケットがある。
しかしその誰かには悪いがーー

自分は行くつもりはなかった。

このチケットはー

……

地下のシリンダーには霞がしがみついていた。
「ここにいたら死んじゃうんだぞ？」

「いや！私いかない！
自分がいなくなるなら死んじゃう方がいい！」

「そんな事あるわけないだろ！死んだ方がましだというな！」

……

霞をたまに預けた。
霞は黙ったまま泣きそうな顔をしている。
「じゃあ、ここでお別れだ。霞」

黙ったままの霞の頭をなで…
「元気でな。向こういったらちゃんとニンジン食うんだぞ？」

「…はい」

「…じゃあな」

「…ばい…ばい」

「霞、こういった時はまたねって言うんだ」
霞の前にしゃがみこみ、

「もう一度あいたかったら……またねって言うんだよ」

「……また…ね」

「ああっ！またな」

霞は一度頭をさげ振り向かずに…

……

武は打ち上げられた最後の駆逐艦を見上げた。
（どんなに離れていても、おまえとオレの魂は一つだ。
どんなに離れていても、オレはおまえのものだ。
さようなら…）

この後地球残留組としての任務…
ＢＥＴＡ生息域への、Ｇ弾による無差別攻撃、
そしてその後に続く掃討戦、
勝利をしても半永久的に死滅した大地がのこる…

種を残す為に人類全体の命をベッドしての、
終わりのない作戦が開始される。

もう間もなく……

～～

「何だ?前とは…ほうけて…そなた…」

「ん？ああ、いや、小説で読んだだけだよ」

「ああ、図書資料室に入った新作か？
何か面白いのが？」

「ああ、宇宙開拓物がな」

「ふむ。そなたの薦めだ、後でみてみよう…
と、武、先に行くぞ」

「ああ、また後でな」

（バーナード星系か…オルタネイティヴ５が凍結したこの世界だと…
俺の意思で行くことできるんだろうか？
しっかし…太陽系外進出か……
人類に余裕ができたって事はいいけど…
この先どうなるんかな？）

と最後に不安に感じてると…
後ろの席から会話が聞こえてきた。

「太陽系外か…」

「アムロ大佐は行かれた事が？」

「いやないな…僕の世界は太陽系内だけだな…
フォッカー少佐なら…」

「いや、俺の世界も太陽系内どまりだぞ。
事故で冥王星軌道にはいったが。
帰還の道のりが大分かかったな」

「どれくらいかかったので？」

「通常航行だから９ヶ月」

「へぇ…通常航行でもそっちはそんなもんでか…」

「そちらさんは？」

「木星まで…ヘリウム燃料輸送する船でもあるんだが、
往復５年だな…」

「マゼラン級とかに使われてるエンジンですよね」

「ああ」

「宇宙人といえば…ゼントランでしたっけ？
あの人達は？」

「あいつらか？話聞いてなかったなぁ…
ああ、ほれ、基地には居ないな。
交代でカイパーベルトいってるようだ」

ホログラムを切替て、部隊マーカーから任務内容を表示させてた。

「あ、攻略艦隊にですね」

「そうかんがえると…恒星間を経験したのって、
この軍でもゼントランの人達だけなんですね」

「確かにそうだなぁ…オーブの世界の人達も地球圏だろうし…」

「あ～あいつらは？あのちっこい達は」

「学兵さん？」

「そうそう」

「あの人達は、地球上のみですね…確か」

「あとは…あ～…」

「バーナード星系か…私も早くいってみたいな…」

「ん？何でだ？」

「人類の革新を促す事もできる発見があるかもしれんし」

「発見ねぇ…まだそんな事考えてるのか？」

「けど、原生生物とか固有種あるんですよね？」

「だろうね…かじっただけだが、環境が違えば同じ遺伝子構造からでも発展する要素が違うし、
ましてや全く形態が違うだろう。
調査したら億の発見があるんじゃないかな？」

「バイオテクノロジー面でも発達が見込めそうね」

「確かに…一から組成も違うだろうし」

「問題は…人材がとにかく足らないだけになってくるわね」

「調査や研究面で？」

「それ以外もよ…入植とか、現地インフラとか…、
私達だけじゃ、到底やっていくほど数が居ないでしょうし」

「民間人を入れ数を揃えたとしても…」

「いきなりそんな環境下で、鍛えもしない人達が、
無事に使えるかどうか？ね」

「確かに…結局は、僕らから回すしかないでしょうね」

「ま、近々派遣任務もあるだろうし」

「バルキリー組は、ですね…
僕らはどうだろう？」

「地上任務ではＭＳ組にも話かかるんじゃ？」

そろそろ昼食の時間が終わりに近づき片付けながら、各々にトレイを返しに行きはじめた。

西暦２００２年２月１２日

［デフォールド］

フォールド空間が収縮すると…

［目標座標確認、バーナード星系です］

「とうとうきたのか……星系探査、地上状況確認しろ」

［横浜基地司令部とのリンク確認、時間軸治します。…異常認められません］

『おめでとうございます。カオル元帥殿』

「ティアンム提督」

『ついに太陽系外へと到達しましたな』

「ありがとうございます」

『それでは異世界軍にとっての、
人類にとっての吉報を頼みますぞ』

ヤマトの各種探知装置でもって、
バーナード星系の地上探査にはいった。
その結果…３０分後には…

［バーナード星系６つの惑星、及び１０００ｋｍ以上の衛星、
小惑星ともにＢＥＴＡの存在確認できません］

「おお…ＢＥＴＡが未踏か…」

つまり安全な資源がまるごと、
また可能性の段階だが、
居住可能な環境下の惑星が存在し、人類の手に入るかもしれない…
との事だ。

地球にある資源だけでは、宇宙戦行うには継戦能力に支障がでる。
その為には搾原地が必要なのは明白だった。

「よし…未踏なら搾原地にも問題ないだろう。
資材放出、通路を確保する。

地球横浜基地司令部にも通信送っておけ」

ヤマトの下部ハッチが開き、資材各種積まれた内火艇、輸送艇等が発進した。

それらの各艇は部品を積み込んでいて、
停船しているヤマトの右舷側にて、部品を放出、滞留させる。

宇宙空間でコバッタ達が、放出した部品をえんやこらえんやこらと合わせて、
接合させる。

何にもない宇宙空間での接合作業の為リベットで合わさってく…

そうしてヤマトが放出した部品が形になってくと…

チューリップと、巨大なレーダー、町工場みたいなのが組み上がってきた。

超空間ワームホールである小型チューリップと、
小型ながらの対星系外監視基地、
同じく小型ながらの宙間工場がバーナード星系に付設されたのだ。

その時間、バーナード星系到達後にして、１時間１０分後。

チューリップの核融合炉に火がともり電力が供給される。

監視基地が最終チェック入って、監視体制が整う…
工場に人工重力が発生し、作業環境が整ってきた。

チューリップのワームホールが、地球にあるＬ４中継コロニーの相方と繋がり、
多目的輸送艇が時差無く、バーナード星系に資材を運んできた。

バーナード星系の基地化へ一歩踏み出したのだった…

小型チューリップが稼動し始め、
監視基地が稼動し始めた。
資材がどんどんと太陽系より運ばれてくる。

監視基地は、キャーティア技術の恩恵で、
光年の距離を跨いでも、数百ｍサイズの物体まで検知でき、
太陽系、バーナード星系ともに２５光年の広大なる監視範囲を広げていた。

［超空間レーダーに感あり、何かが光速２０％の速度にてバーナード星系へ向かってます。
到着予定９３年後から順次…個体数８］

その監視基地が約２３光年先に、
バーナード星系へ到達しようとしているのを探知し、ヤマトに知らせてきた。

流石に光年の距離にわたると、探知もリアルタイムにはできず、
若干の遅れは生じるものの…

「まっすぐバーナード星系へ？」

［はい］

「どの方角から？」

［ベテルギウス方面から…個体の大きさが数ｋｍ級］

「ふむ…落着ユニットかな？」

監視基地のレーダーが、バーナード星系に向かう落着ユニットを捕らえ、
約２５光年の距離にわたるの監視範囲に引っ掛かったと判断される。

小惑星や彗星等とは判断はないだろう。

過去にオルタネイティブ５が発動し、地球脱出し目的地となっていたバーナード星系……

到着しても２０年後には…落着ユニットだとすると、
再びＢＥＴＡの脅威が襲い掛かってきただろう。

移民人口は１０００万人が移住対象だと過程して、赤子が生まれて

も、せいぜい１５００万に届くかどうか…
地球人類という種はさしたる手段なく、世界から消滅しただろう…

が、この世界では…

「８か…たたいておけば、ほぼ落着ユニットの追加はなさそうだし…
永久資源及び基地化には問題なさそうだな…
砲は問題ないよな？」

［擬装すんでるよ。問題なしぃ～］

「基地付設作業平行しながら当艦は、射撃テストを行う。
目標恒星間航行中のアンノン、落着ユニット予想。
総員第二種戦闘用意！！」

小型チューリップから、資材の再補給していたヤマトのハッチが閉じ、

サブスラスターにて各基地施設に影響でない位置まで移動すると、

メインスラスターにて転移位置まで移動…
「目標、２３光年…バーナード星系到達予定のアンノン近海、
フォールド展開準備」

「フォールドシステム作動、目標座標固定、
主観時間５．５時間、客観時間２日と７時間かかります…
充填率１００％」

「フォールド！！」

フォールド空間が展開し、ヤマトは遥か彼方へと旅だった。

……
カオル報告
バーナード星系基地化を行いながら、
ただ今防衛戦闘の為フォールドに入りました。

第193話　バーナード星系へ　投稿日20111121（後書き）

ナギ少尉「バーナード星系到達と、
落着ユニット迎撃に向かう回？」

作者「という事ですね」

ナギ少尉「…もうちょっとさくさくと星系だっしゅ、
いざどっかの世界へ～といかないの？」

作者「すみません次のシーンが完成してないので…」

ナギ少尉「あ、戦闘シーン？」

作者「なんでこの話の区切り方になりました…
多分次にはどっかの世界へ～まで…
行きたいなぁまでは思いますが…」

ナギ少尉「で副鼻炎どうなの？」

作者「まぁまぁっすね…ただ軽い慢性化が右のになっちゃった～
みたいっす」

ナギ少尉「あらら…お大事に…次の方～」

作者「さて次回、バーナード星系防衛戦闘…でいいかな？お楽しみにぃ」

ナギ少尉「２３日には投稿できるようにしなさいよ！！」

第１９４話　バーナード星系防衛戦　投稿日２０１１１１２７

横浜基地

「バーナード星系到達、基地化か…」

「カオルさん光年の距離越えちゃったんですね」

「はぁ…」

「更に恒星間戦闘行うべくフォールド中か…」

「どんどん新しい事が起きてるわねぇ…」

「ほんと、今まで何だったんだろうって思うわよ」

「確かにねぇ…」

「ＢＥＴＡにユーラシア大陸から追いやられて、佐渡も奪われて…」

「横浜も一時奪われたけど、先達の多大な犠牲で奪い返した」

「佐渡をとりかえすべく…力を蓄えていたけど、度重なるＢＥＴＡの上陸、
それを防ぐ為の間引き作戦でままならなかったのよね」

「ヴァルキリー隊もね…」

「けどカオルさんと出会ってから激変し始めたよね…」

「うん…宇宙進出、佐渡島奪還、そしてオリジナル ハイヴ攻略…」

「月の奪還、太陽系内の攻略作戦」

「残すは…地球に残る１９のハイヴと」

「冥王星圏内だと、火星とタイタンだけになっちゃったね」

「しかも、１９の内２つは攻略作戦発動間近ね」

「そして私達の戦死率０化…」

「新任が入って、次には居なくなる事も無くなったわよね…」

「来年度には完全に2個中隊になりそうよ」

「2個中隊化か…大隊規模になるのいつかしら？」

「案外、隊長が結婚する前じゃない？」

「言えてる～、あの彼氏さん、優柔不断ぽかったもんね」

「おまえら何を話してるんだ？」

「け、敬礼！！」

先任達と共に打ち合わせしていた、伊隅が入ってきた。

「隠し事か？」

「た、隊長…これ如何です？」

「ん…？これは…？」

「混浴温泉旅館のオープン記念無料招待状です」

「ほう…長野県か」

「ええ、戦場となる機会がなかったので、
早めに復興できたみたいです。
それで知り合いから頂いたので…
どなたかお誘いできればでしたが、
生憎いませんので…」

「ありがとう。もらっておこう」

「ＧＪ」と囁かれる高畑…

「さて諸君、わがヴァルキリーズは、
４日後にエヴェンスクハイヴ攻略作戦に後詰めで参加する事となった」

「いよいよね…」
「ソ連軍主体のですか？」

「ああ、その通りだ…
その後リヨンハイヴ攻略作戦にも参加となる。
こちらはチューリップによる輸送で現地へ移動との事だ」

「隊長、中型チューリップですが、
トレインギャップに積まれてました？」

「それだが別口に、マクロス級に中型を積んで直接大気圏外から、
集結地のレーケンヒース基地へ着陸後、
チューリップ使用となる」

「リヨンの作戦開始日時が出てませんが」

「わが軍の砲艦隊の到着次第でずれるから詳細はでてないが、
約2週間後の目処と聞いている」

「結構間隔がないわね…」

「エヴェンスク後詰だからじゃない？」

「エヴェンスクは我々がお客さんだから、
どちらかといえば移動スケジュールに、
時間がとられる感じになる」

一通り質問できったろう…

「もう質問はないな？……隊規斉唱！」

「死力を尽くして任務にあたれ、
生ある限り最善を尽くせ、

決して犬死にするな」＊多数

「解散！」

一斉に敬礼しわかれてく…

西暦２００２年２月１５日

［テフォールド、目標座標誤差修正なし。
時間軸修正…］

「総員第一種戦闘配置」

［空間レーダー補足、視認、スクリーン投影します］

修正された目標物が映し出された。

「落着ユニットか…」

［確認、ＢＥＴＡの落着ユニットです］

遥か約６５０光年の彼方から、ＢＥＴＡの新たなる拠点を構築する為に、
亜光速で恒星間を旅している落着ユニット、

その数が…８基デジタル補正され、スクリーンに確認できた。

［まもなく第一標的、主砲射程圏内にはいります］

「まずは、主砲による斉射テストを行う、回頭左舷９０！」

［回頭左舷９０］

ヤマトの巨体が左に回頭する。

「全主砲、ショックカノン斉射よ～～い！！」

艦首側に備わっている、第一主砲塔から、第三砲塔までと、後方の第四砲塔、第五砲塔が艦の右舷へと砲門を向ける。

［射程圏内へ…１０…５、４、３、２、１］

「てぇー！！」

ショックカノンが放たれ…

［弾着まで２０］

「副砲及び、対空兵装、破砕デブリに備えよ」

艦首側の第一副砲塔、第二副砲塔、
後方側の第三副砲塔、第四副砲塔が右舷を向き、
対空パルスレーザー各基が砲門稼動具合を確かめてた。

［弾着！！今！］

落着ユニットがショックカノンを受けバラバラに破砕された。
そのまま亜光速でヤマトに迫ってくる。

「破砕デブリを逃すな…全砲門てぇー！！」

落着ユニットの破片はヤマトの集中砲火を受け、どんどんと細かくなっていき……
ｍｍ以下の無害な空間物質へと変貌していった…

［第一標的、無力化］

「続いて、波動砲テストを行う、目標第二、標的」

艦首に備わる波動砲テスト発射テストに移行。

「波動エンジン圧力上昇、エネルギー弁閉鎖、非常弁全閉鎖」

「波動砲への回路オープン、エネルギー充填開始」

［波動砲、薬室内圧力上昇］

［全エネルギー波動砲へ、強制注入機作動］

［波動砲安全装置解除、セイフティーロック ゼロ地点へ、
圧力発射点へ上昇中、セイフティーロック解除、圧力限界へ］

「波動砲発射用意、右舷回頭９０」

ヤマトの巨体は右方向へと頭を向ける。

軸線上に落着ユニットが入り込み、波動砲発射シークエンスが開始する。

波動エンジンからスラスターに向かってたエネルギーの流れが変わり、
波動砲へとエネルギーが貯まる。

「ターゲットスコープ、オープン」

［電影クロスゲージ明度２０］

［効果範囲内に目標以外に、第三、第五、第六、第八標的確認］

［エネルギー充填１２０％］

［艦スクリーン光減モードへ］

「波動砲、発射まで１０秒前、
最終セイフティー解除位置、確認、
５、４、３、２、１、発射！！」

艦首の砲門より放たれた光の奔流、

落着ユニットを複数まきこみ…

［目標含め、射線上５標的消失、デブリ発生なし］
その構造を融解させ、跡形もなく熔かしきった。

「よし…残りの第四、第七標的に、
反応弾ミサイルテストを行う」

［艦首ミサイル第一から第六セル反応弾装填開始］

「反応弾セイフティーロック解除」

［反応弾装填完了］

「よ～し……目標、第四、第七標的、
発射後回頭１８０度、機関最大推進…」

回頭１８０度は、反応弾の効果範囲をまだ把握してない為の措置である。

［回頭１８０度、機関最大準備よーし］

「反応弾、発射！」

［反応弾発射！回頭左舷１８０度］

艦が１８０度旋回し、

［最大推力！！］

一気に加速し始め、２０００Ｇの推力で逃げる。

［弾着！］

スクリーンには弾着すると光がユニットを包み、消えうせると跡形もなく消え失せていた。

［デブリも存在なし…

一発でよかったね］

「みたいだな…さて、減速…他の移動反応さないな？」

減速し始めて…

［レーダー反応なし、

バーナード基地からも追加オーダーありません」

「戦闘及び試射テスト終了、バーナード星系に帰還する。

フォールド航行準備！」

……

ヤマトは試射終了し光の彼方へとフォールドしていった。

一方そのころ地球では…

エヴェンスクハイヴ攻略作戦が発動していた。

フェイズ2規模で拡張作業中であったこのハイヴは、

光線級がまだ存在しない若いハイヴであった。

ソ連がＢＥＴＡの物量に耐えていたのも、光線級の存在が殆ど確認できず、

航空戦力が使えたからにすぎない。

が、度重なる進行時に光線級がちょくちょく確認され、

去年の大規模進行時には、光線級の奇襲があった事でかなりの大打撃をうけいて、

救援がなかったら戦線崩壊していたかもしれなかった。

そんなギリギリの状態だったが…
今年2月の桜花作戦成功により全体的に弱体化された今、
ソ連の異世界軍の力を借りた逆襲がはじまった。

西暦２００２年2月１６日

エヴェンスクハイヴに、低空より飛来したミサイルが煙幕を出しながら上空をうめつつ、
一回ポップするとハイヴに向かって雨霰の如く、多数の煙幕が突き刺さってく。

煙幕弾頭ミサイルによる長距離射程距離からの撃ち込みから始まった。

迎撃反応は遅い…
瞬く間にハイヴ周辺が煙幕につつまれ、
まだ出てなく、数少なくい光線級が、
すぐに無力化され、右往左往してる。

しばらくすると煙幕の中ザワザワと、ハイヴ周辺から音がしはじめた。

何がおこっているのか、赤外線スコープで覗くと…
ハイヴの門から迎撃の為にＢＥＴＡが湧き出てきたのがみえていた。

各国の軍隊は、広まった煙幕弾の為に、少なからずの戦略の
変更も強いられてた。

暗視装置の搭載の必須である。
有害であった重金属雲は暗視装置は必要ではなかったが…

ＯＳの積み替えと同時にＣＰＵの積み替えがすすみ、
余裕できた部分で様々な暗視装置がひろまった。

最新のだと……

ヒュー

音が上空より飛来してくる。

赤外線で…赤々とうつる物体が…
ドドドドド

門から湧き出ていたＢＥＴＡに突き刺さったと同時に爆発、
炎を撒き散らし、高温により真っ赤にそまる。

次々と飛来する砲弾…

１２時間にわたるビッグトレー砲艦型の集中豪雨が始まった。

弱体化する前には周辺ハイヴからの応援がこの段階で既に動きがあったが、

弱体化された今…動きが確認されなかった。

他のハイヴとの通信を司る存在が倒されたからだ。

そして…１２時間後…

次々と追加される煙幕弾により、
今だにハイヴ周辺は煙幕に包まれたままだった。

スコープで覗くと…

地表が大きく削れ、地下構造物もかなり露見、崩壊しているのが確認できてた。

約５億にわたる砲弾による集中砲火の結果…
地表から地下深く迄存在する構造物の内、
構造物は、横道や広間にいたＢＥＴＡごと地下２００ｍ近辺まで削りとられた。
土砂はこの集中砲撃により巻き上げられ、
後には大きなクレーターとしてのこっていた。

残存個体数７１５１まで大幅に激減した。

迎撃に表にでるも砲火の露となった突撃級…
１番数多かったのが、崩落した横道に潰される個体だろう。

そこにソ連軍機が祖国を取り戻そうと迫ってくる…

迫るソ連軍機はＯＳバージョンアップ済みの８個機甲師団に及ぶ…

祖国奪回の一歩であった…
西暦２００２年２月１７日

「お、かなり形になりつつあるなぁ？」

ヤマトがバーナード星系外にて落着ユニット迎撃の恒星間戦闘を終え、
バーナード星系に帰還。

フォールド航行の影響で、
今回の戦闘と移動時間が…往復丸５日かかっていた。

中型チューリップが組み上がり、
より大型のワームホールが地球圏と繋がって、
地球より、設営資材が次々と多目的輸送艇で運ばれてきた。

ヤマトがバーナード星系防衛の為に出発したあたりに、
監視基地内部の人工重力工場ができあがると、

作業効率が上がってきはじめた。

ある意味ワンセットになる地球との通路が確保できれば、
その後の設営資材の搬入は速い。

小型チューリップで運べるサイズに分離された機材が、
工場で次々と組み立てられて形となる。

もちろん、中型チューリップを組み立てるべく部品が運ばれて、
工場で組み立て作業が始まり組み上がって、
中型チューリップが稼動し始めると…

更に基地化への建設速度が上がり始めた。

中型チューリップで運べる範囲１００ｍ以下の機材が、
太陽系から運ばれてくるようになったからだ。

対となる小型チューリップが運ばれてきて、
第二惑星地上へとコントロールユニットと共に運ばれていった。

そして、中型に続いて星系内艦船用の３００ｍ級が通行可能な、大型チューリップの部品を組み立てるべく、

作業用コロニーの部品が運ばれている段階だった。

更にその上は４ｋｍ級艦船でも通行可能な特大サイズを計画しているが、
現状太陽系にも作られてない。

「バーナード星系の調査はどうなってる？」

［えっとね…もうだいたい環境調査等はすんでるね。
第一惑星は、人が住むには熱すぎるんだけど、良資源がとれるね。
第二惑星は人が住める大気組成をもってるんだけど……、
まだ地球人類が住んでも問題がないかどうかまではいってないよ。
風土病等の調査は、まだ始まってないよ。

で、第三惑星は大地がある資源型。大気も存在してるけど、
人が住むには寒すぎてるね～
多分移住に適さないから資源採取かなと…

続く第四惑星はガス星型、
第五惑星は資源型、
第六惑星は…水資源型の惑星ね］

「第四移行はさくさくだな」

［大気や住める大地がないからね］

「で、この後は…」

［計画の通り、このバーナード星系中心基地を起点として、

各惑星、小惑星との通路を確保が第一段階。
資源採取、プラント建造での最適化及び、
太陽系への輸送開始が第二段階。
バーナード星系での造船等開始が第三段階。
バーナード入植開始が第四段階だね」

「最終的に人が住む保障できるまで約1年はかかるね～」

「やっぱそんなもんか」

「ただ単に人をほうり込むだけならすぐにでもだけど、
各種風土病、未知のウイルスの発見と、それに対してのテストとか
いっぱいやらなきゃいけないし…
人種だけでも…ね～」

「あ～白人にかかって日本人にかからないとか？」

「うん。遺伝子構造的な…のになるけどね。
だから、日本人に対して無害であっても白人に対して有害なウイルス
もあるし～」

「ハーフとかクォーターは？」

「もだと…個人的に遺伝子でみないとね。
どっちかの特徴は含まれるし」

「1番良いのは悪く作用しない、風土病も無しってならな」

［そんな良物件あればね～］

勿論地球にも風土病はある。

あのエイズも実はアメリカ奥地の風土病だとの話だった…

「じゃあ、あとの付設はヤマトに任せて…帰還するか。
ヤドカリＤ－８０５４任せたよ」

［了解っす］

カオルは格納庫の多目的輸送挺へと……

……
カオル報告

バーナード付設は任せて帰還します。

第１９４話　バーナード星系防衛戦　投稿日２０１１１２７（後書き）

ナギ少尉「ちょっと大分期間あいたじゃない」

作者「う、すまん…キャリストでのトラブルもあってなぁ…」

ナギ少尉「まぁ…しょうがないわね。で本編に戻るわね」

作者「まぁこの話でヤマトでの単独探索編は、終了の形となりました」

ナギ少尉「あれ？どっかの世界にいくまで行かなかったの？」

作者「フォールドの時間あるから、
その時間に動きがないのも変だし…
でなるとこの形になるんだよね」

ナギ少尉「エヴェンスク攻略作戦発動ね」

作者「まぁ異世界軍自体が既にカオルいなくとも稼動してるって事だな」

ナギ少尉「で、ヤマトは波動砲発射～ね♪」

作者「ロマンだよ」

ナギ少尉「ヤマトなら単艦で戦闘用に勝て…」

作者「あ～むりむり。でかぶつは波動砲で一撃でも、
突貫級やらが集中して突っ込んできたらな…
実際の大和同様になるよ」

ナギ少尉「う～…ならヤマト十隻」

作者「まぁ…対空防御の網が作れるよな…
母艦2から4辺りなら……だがそれ以上だと厳しいだろ。
ヤマト級が１００隻、間の網を戦闘機で埋めるだな」

ナギ少尉「でも…ガラミス帝国戦では単艦でしのいだよ～」

作者「自爆特攻がどんだけいた？ほぼ全部が全部、特攻隊だぞ」

ナギ少尉「う……」

作者「命を失う事を恐れないのは…普通よりも怖いもんさ。

別世界ものでもただの人間が狂戦士化すると怖いし…
ましてやゾンビとかさ…」

ナギ少尉「で、でも…」

作者「それに結構死人でてるぞ単艦で」

ナギ少尉「……」

作者「なので単艦は考えてはないな。
エクセリオンでも無傷はなかったし、
１０万隻辺りの殴り込み艦隊も確か８０％近くが沈没したしな…」

ナギ少尉「殴り込み艦隊って…」

作者「と字数の問題で次回、バーナード星系より帰還、
お楽しみ～」

第１９６話　バーナード星系より帰還　投稿日２０１１１１３０（前書き）

偽予告
地球に迫るベテルギウスからのガンマバーストフラッシュ

一瞬に地上は灰と化す日まであと１０年と少し…
マヤ歴予言通り地球は滅びるのか？

第１９６話　バーナード星系より帰還　投稿日２０１１１１３０

２００２年２月１７日夜…

チューリップによる転移で約６光年の距離を瞬時にもどってきた。

「チューリップ便利だけど不便だよな…」

一緒に戻ったコバッタが、光年先ではデーター更新ができてないので、
基地に戻り通信中と流れてた。
なので一人ぼやきだった。

確かにチューリップは時間のズレなく瞬時に、
今のところはいけた。

が、元はアドレス不定のワームホール。
演算ユニットがない為、
チューリップ自体にワームホールアドレスを固定した形になっている。

その為専用中継コロニー内部では、日に日にチューリップの数がふえてき…

「ちょっと整理する必要あっかなぁ…
アドレスユニットねぇ…
演算ユニットいれるだと…誰でもなる可能性が怖いし」

干渉できる者すべてに跳躍させる演算ユニット。
間違いなく平和になったあと…銀行窃盗等多発するのが予測できる話。

作者自身は女湯に跳躍したい。
勿論看護女子寮の女湯に…
はたまた女子学生寮の女湯でも…

あなたは跳躍できたら何処に跳躍します？
男性や女性アイドルの私室ですか？

はたまた金庫室ですか？
はたまた…

そういった事予測される為、個人跳躍システムは危険すぎた。
勿論、しずかちゃんのお風呂に故意にどこでもドアで飛び込むのび太君もだ。

「と…データー交換できた？」
しょうもない話を進めてると、
通信中表示が終わってた。

［できたよ～…結構色々あったみたいね］

「例えば？」

［エヴェンスクハイヴ攻略作戦成功］

「あ～まぁ楽勝だろ…あれは…」

まだ地下深く反応炉が届いてない為、
また砲火の嵐で十分に対応できる範囲であった。

［引き続き、ヴェルホヤンスク及びオリョミンスク、ハタンガをフェイズ２の内にして、
少しでも内部に行くって～」

「で、ソ連の前線基地は…どこにできるかな？」

［今のとこ…何処にできるかはわからないけど…
オリョミンスク跡地には異世界軍の飛び地がほしいよね］

「だな…」

流石にそこまで内部だと戦力を回すのが時間かかる為、
基地はほしいものがある。
海岸から直進して４５００ｋｍあたりだとすると、
鉄原から最大速力でとばして三日以上…

なため急行できるのが下駄に乗れる部隊のみになる。

「で、乙女達は？」

［出番なかったみたいで、ぶーたれてたみたいね］

「少しバージョンアップしたし…次のリヨンでは活躍するだろな」

［だよね～］

「ゼントラーディ兵も参加すると息巻いてたしな…」

［実際前の桜花作戦時も凄かったよね］

「他には？」

［火星とタイタンのレポートが上がってるよ］

「どうなってる？」

［個体数の大幅な減少を確認］

「培養してた数が数だし、餌はつきないからなぁ」

［で、期待通り対抗種…しかも小型のがではじめたって］

「お、うまくいったか？どんなのだ？」

［画面だすね］

前後ろが逆転した、
ハチの羽が無いような形のＢＥＴＡが写しだされる。

「ハチ？」

［みたいの様なんだけど…ハチでいうお尻が頭みたいね］

「大きさは？」

［全長１０ｃｍ程の本当に小型だね］

「かなり本格的な対抗種か…」

今までＢＥＴＡはその図体のでかさでいいようにされていた。

実在世界でいうと…

殺人蟻に襲われた人間であるに等しい。

群れて襲いかかるではないが、
タスマニア島では、ある蟻が有名である。

その名をジャック・ジャンパー・アントとして呼ばれる、

Ｍｙｒｍｅｃｉａ　ｐｉｌｏｓｕｌａ

和名トビキバアリです。

ジャック・ジャンパーはブルドックアリの中でも小柄で、体長１ｃｍ程、

ジャック・ジャンパー名前以外にも、ジャンピング・ジャック・アントやホッパーアントなど、
跳びはねる系として呼ばれてます。

ここまで跳びはねる系として言われて跳ねない訳ありません。

目の前に障害物があるとき…獲物に襲い掛かる時に、
最高２０ｃｍ程まで跳ねます。

また非常に視覚が良いと言われてます。

さて…何故タスマニア島で有名かというと…
毒蛇、毒蜘蛛、サメ等これら生物に攻撃され死ぬ死者の数を引っくるめても…

それ以上の死者を出すのがこのジャック・ジャンパー・アントです。

ＹｏｕＴｕｂｅで紹介されているのに、生きた昆虫を食べるの好きな、
アシダカグモＶＳジャック・ジャンパー
の戦いが紹介されてます。

大きさ比率にして実に３０：１くらいありそうな…
なのに無謀にも単独で真っ正面から襲い掛かります！！

端からみたら蜘蛛の圧勝になるでしょう。

しかし、ジャックジャンパーアントの攻撃により…
２０秒後には抵抗もできなくなり…

哀れ蜘蛛は、更なる増援の３匹目で凶悪な毒により…

餌として６匹にたかられ巣穴に運ばれていきます。

まさに凶悪そのもの…
それが人間にも襲い掛かって、刺されその毒により命を落とすのです。

スズメバチの毒強化型が小型化し、攻戦的だと思えば、
日本人にとって恐ろしさがより実感できると思います。

群れで襲うのは南米エクアドルのバーチェルグンタイアリです。

映画インディーズのソ連兵士を巣穴に引き込むアリのモデルになりました。
総勢１００万匹が、最大幅２０メートルに及び行進し、
行く手に潜む昆虫やサソリに手当たり次第襲い掛かり…
生態系を全滅させてしまいます。
の為定住はできずに常にさすらい続けるのです。
ただ人間を襲うのは異物と確認された時だけ…
上記のジャック・ジャンパー・アントよりかは、
人間に対しておとなしいといえましょう。

さて話を戻して…

とにかくＢＥＴＡとっての肉食ゴキブリは天敵すぎ、
１番小型の戦士級の長い手でもっても手にあまる状態であった為、
対抗できる種が誕生されたと思われた。

「攻撃手段は針で串刺し？」

［みたいね～確かにゴキブリの身体には１番有効みたいよけど…］

「パワー的には鉄等貫く力はないな」

［うん］

小型化故のパワー不足、硬い甲羅も持てずに最低限対抗できる力だ

ろう。

硬い甲羅はそこまで小型化すると、
動きに阻害が生まれるので生物としては、
実装できないとおもわれた。

貝の様にともいかないのだろう…

［多分、まだ推測段階だけど、毒でなく貫く力を優先してる為、
人間にたいしては…筋肉に刺さる程度じゃないかな？
宇宙服はやばそうだけどね。
けど刺さったら痛そうだけどね～］

「装甲平均全般にとっちゃ…痛くもなさそうだよな？」

［多分ね、隙間に入られなければ…］

「ＶＳゴキブリとのキルレシオは…」

［ん～１：１か、１：２…かもね。攻撃方法からだけど］

片方は針で突き刺す、片方は食らいつく…
これからだろう。

「で、このハチ級でいいか？」

［だね］

「は…どっちで確認できた？」

［火星、タイタンとも～］

「両方か…となると原種か原案が、既に存在してるって事だろうな」

月面で確認取れなかったのが、機械類を利用した為、
また災害認定にもされなかった為といえよう…

「まぁ…これで割合が変化すれば…うまくいくよな」

［だね］

異世界軍におけるゴキブリ兵器計画の全容は、
飛行機が邪魔だから光線級が生まれたように、
ＢＥＴＡ自身の適応能力に対して強烈に作用するのを期待した。

小型の肉食ゴキブリ…対抗するには小型化し、

より機動力及び隅々までいける様にするしかない。

ホイホイさんの様に……

そこの適応能力にかけていた。

無論より装甲化し小型迎撃できるように…
と考えもあったが、生物兵器の範疇において、
関節がないという事はできなかった。

母艦級のようなのを除いてだが…が、母艦級のようなミミズ型は、
行動が限られてくる為万能にはできないのも事実である。

小型化する分、装甲を厚くすると…行動に支障がでる。

さて、小型の繁殖というか分裂能力が脅威的な、
肉食ゴキブリが天敵認定された。

その後はどうなるだろう?

ＢＥＴＡ自身が小型のゴキブリに対して適応する為に、
それでより対抗できる様に種を増やすしかない。

で、今まで大型の種族は良い鴨だから、
必然的に少なくなると予想されていた。

小型化したＢＥＴＡ、そこにより大型の装甲兵器が投入されたら…
止められるだろうか?

勿論否。

反応炉破壊まで容易であろう。

ただし…その際チャンスは一回コッキリ。

その為にはまだ時間が必要であろう…

［あ、ベテルギウスの件だけど…］

ビッグシリーズを向かわせてた件であった。

［タイプ２－Ｐ型超新星爆発を確認、ニュートリノを検出、地球観測到達日時が…日本時間２０１２年２月１４日午前３時２５分ね］

「やっぱり……約６４０年前にか…」

［観測映像取得後、崩壊地点観測にいくって連絡がはいったよ］

「映像撮影期間どれぐらいだっけ？」

［えっと…多分１００日位じゃないかな？
リアルタイムで撮影してるからまだわからないけど…］

「…ビッグシリーズにはベテルギウスに直向かわせたいからなぁ…
マゼラン級に観測機器搭載させて向かわせるか」

［マゼラン級？？……多分積みきらないから、
ヨーツンヘイム級がよいかもよ。
戦闘ないしペイロード上の問題で］

「あ、じゃあそれで頼む…ところで」

［放射能とかでしょ？］

「ああ…」

［今のところ強烈なガンマバーストフラッシュはないね］

「なら一安心だな…
それがきたら…
１０年後には地上は一瞬で死の星になるからな…」

［コスモクリーナーでも追いつかないよね］

「ああ、残留放射を除去分解であって、
核爆発の直射は直ぐには無理だしな」

ちなみに地軸が地球に向いていてバーストフラッシュが起こった場合…
宇宙空間で３００ｋｊ／ｍ＾２が観測されるだろう。

［地軸が今回ずれてた為に、
バーストフラッシュは別方向にいったと推測はされるね］

強い指向性をもったガンマバーストフラッシュ…
１００ｋｅＶから１ＭＶの照射ビームであり、地球に到達すると、
６５０光年離れてても地上で原爆の爆心地を遥かにこえる輻射を浴びる事となる。

「で、通常のガンマ量は？」

［今のところ送られてくる観測だと…最大で５ｋｊ／ｍ＾２だね］

「あ～やっぱガンマ線等被曝に注意しなきゃな…」

その量だと、６０ｋｇ分の成人男性の場合、
遮断されるものがない宇宙空間では、
５０ＳＶの照射量が導きだされる計算である。

［コロニーや宇宙基地、月面基地等は対策とってるから大丈夫だけど、
シャトルや月面走行車レベルだとまず耐えられない量だからね…
あと宙間作業者もね…
放射レベルにおいて、事前にわかってるし、
航行禁止及び飛行禁止を出す話で進めとくよ」

地球にも勿論降り注ぐ、だが大気圏で減衰し、３０ｋｍの高さで問題なくなるレベルだろう。

が、当日付近においてより高空を飛ぶ機体は避けた方がよいのも事実である。

「あと衛星類だな」

［今の異世界軍以外の…だね…
確かに耐えられずに制御不能になるの沢山ありそうな…」

「そこは国連にて発表、改造してもらうしかないだろうな」

太陽フレアを確実にこえる照射の為、
通信衛星、ＧＰＳ、気象衛星、偵察衛星に被害が生じるのが見え見えであった。

「で、衝撃波の範囲だよな…」

［今回の規模だと２５光年にわたっては…かな？
と思うんだけど流石に現地観測みないとなんともね］

「最大で…？」

［精々１５０光年。物理的な衝撃は減衰するのが早いからね］

「ま、そっちは距離があるし、考えなくていいか…」

［けど人類史上初の体験にはなるね～］

「シリウスとかだと洒落にはならないからな…」

［あ～…８光年…うん。間違いなく、ガンマバーストでなく、通常放射能で滅亡レベル…
けどあそこまで重量ある星なら大丈夫だね］

「ベガは…？」

［重量あるから超新星おきない～］

「水瓶座ベータは？」

［……］

「ちょっ」

［ありえるし、２４光年程度だから…あったら怖いね～］

「ありえるんかよ……水瓶座ベータはとりあえず現時点では…」

［今のところ…兆候はないね。ただ２４年前の時点だけどね］

「なら…直接現地で観測をすれば…爆発の兆候は随時確認できるよな」

［うん。だね…現地で確認だね。開発は星の状態みないとだけど］

「水瓶座ベータで爆発したら…」

［２型ー Ｐだと…放射能は…滅亡レベルかわからないけど、

間違いなく衝撃波で大気圏がだし…
破砕的衝撃も、壊滅的レベルがくるだろうし」

大気圏を衝撃波が削りとり、太陽光が直接地上を焼くようになる。
そのご、星のかけらの小惑星群が地球にも到達するのだ…

「おきない事が大切だろうな…超新星対策は？」

「え～と…直接星のエネルギーをとるなどで延命措置のプランなどあるね」

「現地で質量をかるくする…か」

「そうそう」

「…確かあ…あったなぁ…まぁ後でいくか」

「ん？なんかあったの？」

「天文学的にいかないと駄目だから、キャーティアシップ復活が先か、
現地のシップを分捕るか…だろうなその後でだ…
で、話もどすぞ…ベテルギウスが超新星おこしたから…

ＢＥＴＡの分布が…あ～と…？？」

基本親であるベテルギウスのＢＥＴＡから落着ユニットが、全て発進していた。

その親である６５０光年先であるベテルギウス近辺に存在していた上位存在…

ベテルギウスＢＥＴＡと命名しておこう…が、

ベテルギウス超新星爆発の衝撃波により消滅、

地球のあ号が連絡をつけようにも取れない点から、

ほぼ確実だろう。

つまり今から６５０年前までの航行宙の落着ユニットを駆逐できれば、

ベテルギウスを中心とした約１０００光年の宙域における、

ＢＥＴＡのあらたな繁殖を防げるわけ…と言うことだった。

勿論他のＢＥＴＡがあらたな親化にならなければ…の大前提だったが…

「ふむ…競争だな…」

まごまごしていると、バーナード星系みたく手付かずの星系がＢＥＴＡに占拠され、

そのＢＥＴＡの対応で進行がますます遅れる。

ＢＥＴＡに占拠された星を破壊すれば、早いだろうが、重力崩壊による、
恒星の異常がおき、超新星爆発がおきるかもしれない…
おきると他の星系に破壊の余波が飛び火するのは間違いないので、
超新星爆発だけは避けなければいかなかった。

［報告は以上だね］

「じゃ…評定か」

今回試験航海で、宙間試射までおこなった宇宙戦艦ヤマト級…

「亜光速戦闘はバージョンアップした事により問題なし、
威力面でも問題はないな」

地球帰還時のヤマトである。
散々経験した事による現地改装がきいていた。
また演算処理面についても多数からのミックスの為、
処理が向上し、亜光速のデブリに対しても問題なく対応できた。

「武装面は…火力の集中からして下部は難しいな…」

現在ヤマトは回頭による水平プラス４０度マイナス１０度方向で、
最大火力を放てる状態となる。

下部につけると…最大火力をはなてる仰角がへり…
だったら単艦よりかは編隊でカバーの考えだった。

「となると…装甲強化だろうな…
ピンポイントバリアと…フェイズシフトもいれるか」

これにより武装がついてない船底部の心配事がへる。

「あとテスト型から弄れるところは……
ないかな…？」

現状思い付くところがない。
ヤマト自体かなり完成した技術でもあったからだ。

「じゃ、これで量産頼む」

「了解～…現状2月で2隻だから」

「やっと2隻か…もう少し増やさないとな」

「もってくる予定のルナ1がの設置と工事が終わるまでだね」

小惑星ルナ1、ラグランジュポイント4に、フォールド装置と、
ブースターをくっつけてもってくる予定の、

１１３ｋｍサイズの小惑星である。
小惑星帯にある２２０個の一つを選択した。
もともとは、小惑星帯において、
資源採掘採掘がかなり進んでいた為空洞化がすすんでいて、
大きさ的にも手頃。
それで選ばれて現在ブースター調整をしている段階だった。
資源として完全にくり抜いた中に、
プラットフォームをぶち込み、
造船数を増やしてく形をとる。
「まぁ…しょうがないな…」
報告書をひとまとめしてくと…
「ん？マクロスできたん？」
［あ、進宙したよ～］
「でもまぁ技術的にえるものは…」
［あんまりなかったけどね］

ゼントラーディ技術がふんだんに入り、
より発展した新マクロス級ならともかく…
ＶＦ－１９Ｖが生産できる今では…
初代マクロスは残念ながら時代遅れになる。

［ブースターとか、巨大化による主砲の影響とか、トランスフォーメーションとか、
建造技術のテストヘッドになった位かな？］

「それぐらいだろうな…」

重力制御はキャーティアやナデシコから既に取得済みであった。
「よし…じゃあ…ちょっくら見つかったかみてくるわ」

［帰還したそうそう…どこか行くの？］

「マクロス世界ね」

マクロス１ｓｔからマクロス今はＦまでの一連である。

［自動工業衛星？］

「そう、それ」

ビッグシリーズに破棄されたのを探索するように…
と頼んでいた。

［明日でいいんじゃない？…フォールドでの時間軸のズレの調子取り戻さないと…］

「ん…そうだな…」

実際眠くはない…が世間一般は深夜1時にあたる。
カオルの体内時計はお昼だった…

「ワープやフォールドの悪影響だよな…
まぁわかった調整するよ。
明日いってくる」

［じゃ仮眠室の強制睡眠カプセルね～］

こういった体内時間を世間一般時間に合わせる為の強制睡眠カプセル、
勿論仮眠室にも作られてた。

「あいよ。じゃ」

……

カオル報告

マクロス世界へは明日となりました。

第１９６話　バーナード星系より帰還　投稿日２０１１１１３０（後書き）

ナギ少尉「…まだいかないのね」

作者「まぁね…」

ナギ少尉「で、前書きでも悪のりしちゃって～」

作者「でも実際調べたら…６５０光年って近いんだなぁ…がさ…
バーストフラッシュって数千光年にわたり強烈な放射線で浄化してくってさ…」

ナギ少尉「でベテルギウスは大丈夫なのね？」

作者「マヤちからで地軸がずれない限り大丈夫だよ。
２０度ずれてるからまずおこってもこない。
けどまぁほかの天体の方がね…」

ナギ少尉「宇宙のスティルヴアのかに座ベーターね」

作者「感想でかかれてたけどやるんすか？ってね。
ちょっと調べたけど太陽より２５億年先の年齢らしいよね。
まぁそこで超新星爆発おこったら、まさに宇宙のスティルヴアだね」

ナギ少尉「確かにね…」

作者「既に超新星爆発してて襲い掛かる最中だったりして…」

ナギ少尉「ちょっと!!」

作者「でも観測してる限り、兆候はないっていってるからまだ大丈夫だよ。
今1番の関心がベテルギウスだよな…
人類史上初の近距離超新星爆発だしさ」

ナギ少尉「遠距離ならあるの？」

作者「かるく調べたけど、数千万光年先とか、ガンマバーストフラッシュの生き残りが地球到達した、別銀河のとかね」

ナギ少尉「へぇ……あ、あとゴキブリ兵器…そういった思惑だったの？」

作者「そういった事…全滅は無理だよ無理。
対抗手段は出てくる、そこを利用するんさ」

ナギ少尉「なる程ね…さて次回、マクロス世界再び…でいいのね？」

作者「でいくつもり」

ナギ少尉「おったのしみにぃ…
ところでいつ完結までもっていけるの？」

作者「……来年？」

ナギ少尉「もう２００話近いけど…」

作者「…第二部かなぁ…？進行おそいよなぁ…」

第196話　マクロス世界へ再び　投稿日20111204

2002年2月18日
「じゃぁ…いってくる」

［いってらっしゃい～］

～マクロスの世界へ～

マクロスの世界に降り立ったカオル。

（とりあえず…）

虚数空間からルーロス改をだしのりこむと……

ルーロスが角で背を向けて座り込んでいた。

「ルーロス？」

「いいもんいいもん、ぼくちゃんなんか忘れさられてるでち」

（え～っと…虚数空間にほうり込んで……）

指で数え始めた。

（あっ……桜花作戦以降だしてない…）

「すまないな…次はもっと出しとくよ…」

「前回といっちょでち！！」

「ほんとにほんと…忘れないよ」

「約束してでちね…」

「ああ、…じゃビッグシリーズとリンクを確立してくれ」

「あいでち」

1分後には…

『マスター、お待ちしてました』

「成果の程は？」

『破棄自動工業衛星が２基発見済みです』

「よっしゃ！！…で規模と状態は…？」

『１００ｋｍクラスのと２０ｋｍクラス、両方とも攻撃と思われますが、
によりかなりの損害をうけ破棄されたようです』

「あ～まぁ…それはしょうがないな…
でも１００ｋｍクラスか…でかした」
１００ｋｍクラス…艦隊のしかも基幹艦隊司令艦を製造するサイズだと思われた。

１番手に入れたがっていた工業衛星の一つだった。

「ありがとうございます」

「で…構造状態は…」

『崩壊レベルまではいかず、補修すれば大気圏へ突入も可能』
「ちょ、惑星破壊爆弾でないんだから…」

『失礼、も可能な状態にもっていけます』

「現状では？」

『片方が内部にデブリがある程酷い状態ですが、強度はとりあえず心配なしです。
もう一方は強度のGがなければ問題なしでしょう』

「……回収して太陽系外で放出、どっかの重力圏に捕まる前に補修…でいけそう？」

『微妙ですね』

「…外側から制御し力をかけるなら…」

『構造的に弱い箇所避けるなら可能でしょう』

「なら回収を先に手がけるとするか」

『了解しました、マスター。あとマスター』

「ん？」

『まだ報告前ですが１２００ｋｍの工場らしきのも確認でき、現在向かっております』

「……自動工業衛星製造衛星か？」

『まだ、どういったのかは不明なのですが…』

銀河にゼントラーディ軍が広まったには、訳がある。

そう…艦隊や軍隊、それらを作る自動工業衛星並びに、…工業衛星そのものを作る工業衛星の存在だった。

１０００ｋｍクラスの基幹艦隊司令艦を作る工業衛星は存在すると言われてるが、実際のところ数も少ないだろう。

そして、艦隊製造クラスかなといわれている１００ｋｍクラスの工業衛星。

かなりの存在が確認されている。

そのために、たかが一個基幹艦隊に４８０万隻もの艦を内包しているのだ。

また長年にわたりプロトデビルン側の監察軍とも…戦い続けている。
未だに…

さて、自動工業衛星を製造する巨大自動工業衛星かもしれない存在は、
かなりというかレアすぎたものだった。

「わかった。到達まであとどのくらいになる？」

『かなりの浮遊障害がおおく、ワープ使用不可の為シールド外戦速中です。
あと2週間程は…』

「そうか…また詳細わかったらよろしく」

『了解しましたマスター』

通信が切れ…

「さて…とりあえずは…上空に浮かぶあれをかな」

「了解でち」

ラグランジュポイントに浮かぶ自動工業衛星…

現在新統合軍は多数のゼントラーディ軍自動工業衛星を分捕り、修繕し、その勢力を増やしていった。

「ほぉ壮快だなぁ…」

「でちね…男の浪漫でち」

「え？ルーロス男の子？」

「ひっど～い…こちゅじんたま…性別忘れるなんてぇ」

「ごめんごめん」

「ぶ～～」

「で、センサーではどうなってる？」

「かなりの艦艇が建造されているね…
１番でっかいのが建造中で全容掴めないでちが、
ドーム型の全長１０ｋｍでちかね？」

「ほう…シティ建造中か…」

地球から多数でてるマクロス移民船団。

過去の第一次星間戦争において全滅の危機に陥ったマクロス世界の地球人類…

第一次星間後には、その数を月やシェルターで、生き延びた人をまとめても１００万をしたまわって、地球文明に参加したゼントラーディ含めても１０００万を下回っていた。

その数を激減していてクローン技術でわずかながら増やしても、遺伝子疾患が発生し、クローンも禁止された次第であった。

人類が全滅の危機を経験し、この５０年近く試行錯誤しながら、勢力をとりもどそうと、また一個の星系で留めず、銀河に人類の種を広げ始めた。

そう、大航宙時代の始まりだった。

一個の惑星にいては、基幹艦隊クラスの襲撃で惑星にいる住民は全滅してしまう。

どんなに戦力を整えたとしても、基幹艦隊の５％の砲撃が地上に降り注いだとしてもだ。

そういった危機を経験したが、惑星での発展は必要…

そのため地球人類が選択した道…

星間移民による人類種及び文化の拡散、
生存圏の拡大という手段である。

そうする事により、地球がまた再度壊滅しても、
基幹艦隊を壊滅させた後に、
他星系からの移民により迅速に復興ができるからだ。

前回の星間戦争後の復興は、主にマクロス艦内だけの製造能力、
また遠距離の月の製造能力、
また少ない人員だけに頼らざるえなかった…
その為かなりの苦労が復興する人員にかかった。
また時間も…その際に再び別基幹艦隊が再度襲撃したら…
間違いなく全滅したであろう。

ならば別星系が指揮をとり復興を支援し、戦力を補充させる。

そう上層部が思想が導くのも考えられる事だった。

さて移民船団の話に戻そう。

初期にはマクロス級のトランスフォーメーションをオミットした、
大型移民船メガロード級にて銀河へ人々は旅立った。

またそれ以外のメガロード級以外の個々の中小移民船での移住もあった。

そして…25隻のメガロード級をへて、

大規模長距離移民船は、２０３０年より新マクロス級大型移民船へと発展していく…

当初から都市型宇宙船として設計されるようになった新マクロス級…、
長距離移民に対応した、街をマクロス内部に内包しない形へと…

メガロード級等は艦内部に人が住み、戦闘行動にも影響がでた。
の為被害にあった移民も少なくはない…

はぐれゼントラーディと交戦時に艦内部の居住区画への流れ弾等…

その点新マクロス級は、居住部分のマクロスシティと、
純粋戦闘艦であるバトル艦とで分離構成され、
これにより戦闘行動に支障たさなくなった新マクロス級は、
純粋戦闘能力をよりましていった。

シティの方はより長距離長期間移民に対応できる形へと発展してく。

無補給時間がよりまし、長期間航行が可能なようになる形へと…

シティは、密閉型コロニーの形やドーム型等構造はコンセプトにより多様化していった。

主に主人公がすむドーム型のマクロスシティは、
亀の形の上に都市が存在していて、透明なドームにより宇宙空間という死の宙域から、

都市を護っている。

その透明ドームを護るのが貝殻のような天蓋…防護シェルであり、
戦闘時には、透明ドームに、防護シェルが被さるシェルダウン等で
住民自体をまもる設計となっている。

最終的にマクロスシティ自体は、水資源に富む大気環境の良い惑星
についた際には、
地上に着水し、開拓の中心都市となる。

そういった構造になった。

さて…年代が進んでいくと、２０１３年に発見された惑星エデンから
も、
シティの建造能力が整い第６次マクロス移民船団から、出発しはじ
めた。

２０３８年地球発の第７次新マクロス級移民船団、マクロス７辺り
になると、
マクロスシティ以外にも船団総人口が１００万人以上を数える事に
なる。

二桁代のマクロス船団になると、より探査目的の為に自由制になり、
目的地に惑星があってもより良い星を求める事が可能になった。

そしてまたラグランジュポイントでは…新たな長距離移民船団が建

造中のような状態であった。

（しかし…何番目なんだろ？）

「で、どれに取り付くでちか？」

「ん～…勿論全部技術取得するから…あ、取り付くでなくナノマシンの撃ち込みでね…
足りたよな…」

「ナノマシン？」

「こいつを撃ち込むと技術情報をあつめてくれる、便利なもんだよ～」

ナノマシンのカートリッジをみせて…

「のめるでちかね？」

「じゃ、ルーロス…手始めにあれからいこうか」

「ごちゅじんたま飲んでみる？」

「飲めるわけないだろ、早くとりつくぞ」

「あいでち」

……

改めて……

（でっかいわなぁ…）

何しろ今とりついてるのが、マクロスシティを建造する為の、
自動工業衛星と思われているものであった。

艦船クラスでなく、今現在は約５００万人以上が住める、
マクロスシティを作る為に改装された自動工業衛星…

小惑星サイズを誇っていた。

人からみたら遥かにでっかい天体…

（けど材質なはんだろ？）

軽く叩いてはいるがこれは天然惑星資材とは思えなかった。

虚数空間よりナノマシン機材を一式とりだし、
射出機にカートリッジをセットした。

銃口を自動工業衛星の表面に接触させ…

ゴボップシュ

カートリッジの液体が撃ち込まれからになる。

（これで回収は一ヶ月後か…な…？）

ナノマシンの状態がわからないので、
回収マシンのを翳した。

（ナノマシン増殖中ね…次いくか…）

今取り付いてた２００ｋｍクラスのをけって次のに向かった。

次に取り付いたのは、艦船建造クラスと思えた。

そうして幾つかの工業衛星を渡りあるいていると……

（あれ？）

見慣れない形状のバルキリーが宙域を横断していくのが目に入った。

（あ、あの形は…ＶＦ－２２か？）

釣られるように…

だが、この時代のバルキリーはカオルが移動するよりか遥かに早い。
早速見失い…
「ルーロス」
『あいでち』
「この付近で活動してたバルキリーどこいったかわかる?」
目の前にルーロスがついた。
『案内するでち。乗るでちね』
まもなく、見慣れない形状の船が単艦見えてきた。
「あの船に帰還したん?」
「そうでちよ〜」
ＶＦ－２２シュトルムフォーゲル…特殊作戦部隊用の高価な機体であり、レアモノといえていた。

ゼネラル・ギャラクシー社製品のＹＦ－２１の２０４２年採用の正式量産機である。

何故レアといえたかというと、形状が変化する複合素材の為であり、有機的変形を採用していた為、生産コスト高騰した為であった。

特に特徴的なのが、バトロイド形態の腕の部分であり、機体側面を構成していた部位が膨らみをまし腕へと変化しついく。

ファイター形態では、バトロイド形態の腕や脚、胸を収納し、機体断面を薄くする等画期的なコンセプトを採用し、機体性能をあげていた。

なをＹＦ－２１からの変更点はＢＤＩシステムの廃止という変更点である。

そして取り付いた艦内部にはＶＦ／Ｂ－２２Ａ複雑型も存在していた。

それらが沢山艦内部に存在するという事は…

（特殊作戦部隊艦だよな♪）

現状、

ＶＦ－２５は評定試験中、ＶＦ－１７１は性能不足。

ＶＦ－１９Ｆは継続戦闘能力では…

となると、必然的にＶＦ－２２が特殊作戦部隊の、採用機に選ばれる事となる。

またＶＦ－１９Ａ２も見え、
一般部隊でない特殊作戦部隊とより確認できた。
ＶＦ－１９Ａ２はＹＦ－１９の生産体制の整った性能同等型である、
ＶＦ－１９Ａの改修型、地球本国艦隊仕様だった。

元々、Ａ型自体がパイロットの限界を求め、一般兵用にＦ型がデチューンされた。

機体性能自体がパイロットに対してこれ以上負荷を与えられない為、
新規機体性能は頭うちな状態である。
そして年代が立ち…アビオニクス等の改修型でとして世にでてきた。

ＶＦ－１７１と違い、
機体性能が高いＶＦ－１９やＶＦ－２２自体が、
地球本国の開示許可が必要な機体であり、
移民船団によっては備わってないとこも…

そんな機体がこの船にはたんまりあった。

（満足満足♪）

これらの機体や艦船等直接取り付き…

地球圏外から遠ざかり…

「さて…次の場所が」

「破棄衛星でちね…１０１２光年先と、そこから５０６光年先でちね～」

「…どのくらいでいける？」

「ショートワープの連続でちね。一日で逝くようかんばるでち」

「連続って確か１０光年の？」

「そうでち。１０１回飛ぶでち。帰り道は探査済みでちから、１０回で可能でちが。
帰ったらジュネレーター容量強化してほしいでち」

「あいよ…じゃあ、よろしく頑張ってくれ」

「あいでち。ごちゅじんたま、仮眠しててでち」

ルーロスはワープの連続にはいった。

……

「ごしゅじんたま、ついたでち」
大音量アラームとともに叩き起こされ…

外側には破棄された自動工業衛星が見えていた。
船外壁を透過化処理しているのだろう。

「ありゃ…かなり……破棄されるのもわかる気がする…」

「でちね」

見るも無惨に砲撃による貫通箇所が多数あり、
内部損傷が多数みえるのが外側からでも確認できてた。

「……強度的に本当に大丈夫かなぁ…と思えるんだけど…
こっちが強度ある方なんだよね？」

「でちね」
スクリーンに探査データーがでた。

「この部分が破壊されてなかったのが幸いでち。
ここを破壊されたら、全体に衝撃がいったでち」

衛星全体に衝撃が伝わり、ひびがはいり…
崩壊してくシュミレート映像がながれた。

「逆にいうと、この部分が壊されてないでちから、
全体的強度を保っているでちね」

「成る程ね……ま、とりあえずお持ち帰りは、崩壊の心配なさそうだな」

ルーロスが衛星の周回にはいった。

「ブースターは…駄目か…サブスラスター生き残りはありそうだな…とルーロス内部入れそう？」

「駄目でちね…シールド干渉するほど破砕浮遊物があるでち、退けてくれないと内部破壊しちゃいそうでちね」

無重力で浮遊物をおすと、止まるエネルギーが加わらないと…何処までも移動してく。

つまり何かを押すかだ…

連鎖的に広がり余計な破壊活動に繋がりかねない。

「人とかなら」

「そのサイズなら…って感じでちね～」

「持ち替えって掃除してからだろうな、修繕は…ま、じゃ収納してくるわ」

「あいでち」

ルーロス外の宇宙空間にでると…
虚数空間に収納するイメージで自動工業衛星を掴みあげる。
虚数空間入口の輪が自動工業衛星を飲み込んでく…

「はたから見ると不思議でちね～」

船内にはいるなりルーロスに言われた。

「どうへん？」

「なんかこう…輪切りに空間入口が見えて、
衛星がなくなる点がでち」

「…あたり前の感覚なんだがなぁ…
じゃあ次にいってくれ」

「あいでち。半日程跳躍連続するでち」

「ん～いったあと一回置きに帰るかなぁ…」

今向かっている方向は銀河外延部方向の為、
中心方向に向かっているマクロスフロンティアとは逆方向だ。
なので回収してからだと最低で一日半更にかかり…

「１２時間でとりあえず、地球はいける筈でちよ」

訂正１５００光年を１２時間で踏破できるようだった。

「ん…まぁその時間ロスもだけど、世界扉のマーカー的なのも撃ち込みたいんだよな」

「そっちでちか…」

「で、更に外延部にビックシリーズ向かってるだろ」

「でちね」

「だからまぁ一回かえってついでにこの世界にマーカー２箇所目、で、先に回収衛星置いて作業進めながら、
身軽になってから改めてフロンティアに…かな？
この世界の１番の一つはとにかくゲットできたんだしな」

「了解でち」

……

カオル報告

捕獲したら一回置きに帰る方針にきまりました

第１９６話　マクロス世界へ再び　投稿日２０１１１２０４（後書き）

ナギ少尉「ねぇ作者、フロンティアってまだなの？」

作者「あとちょいだな」

シェリル「わたしの出番まだ？早くしなさい」

作者「は、はひぃ。じ、次回絶対に」

シェリル「こんな登場サービス、めったにしないんだからね」

ナギ少尉「なに、あの人…」

作者「銀河の妖精、シェリル・ノーム様だ！！頭が高い！
ああ…シェリル様…踏まれたい…」

ナギ少尉「ちょ…作者…そっちの趣向？」

作者「シェリル様だけは特別、生コンサートもいったし、今もいってるし」

ナギ少尉「あ～ぞっこんなのね」

作者「うむ」

ナギ少尉「これだから男ってのは……
話すすめるわよ。
で、次回やっとフロンティアに行けるのね」

作者「ああ、約束したからね」

ナギ少尉「で今回は工業衛星やＶＦ－２２等を取得よね」

作者「ああ、約束したからね」

ナギ少尉「……駄目ねこいつは…
駄作者がフリーズしたので、次回、フロンティアへ…お楽しみにぃ」

作者「ああ、約束したからね」

ナギ少尉「しつこい！！」

第197話　マクロスフロンティアへ　投稿日20111207

（結構容量あるよなぁ…どの位まで飲み込めるんだ？）

いざ自分でも…実行してわからなかった。

～横浜白凌基地～

「ただいま～、
手が空いてるのちょっと集合～」

［マスターなに？］
［いよいよ百人おとすの？］
［もげろって伝言～］
［いよいよ隕石落とし実行？］
［なんの騒ぎ？］

「こらっ隕石落としはしないっていってるだろ？
あともげろって誰がだ？
…と、破棄された自動工業衛星回収したんだけど、
修理調査つきあって」

［マスター了解～］［仕事だぁ仕事］
［一基だよね？チューリップももっていって～］

［お～いあと5人来て～］

「あ～2基」
空き中型チューリップを一個と、
多目的輸送挺を虚数空間にいれながら答えると…

［……あと１０人きてぇ～］
［忙しくなるぞぅ］
［マザー、兄弟をとりあえず１００増やして～］
［きたよ～］

ルーロスをだし、

「じゃ、設置にいくから乗り込んで」

［わーい］
［ルーロスおひさぁ］
［お仕事、お仕事］
「おひさでち」

ルーロスの内部に２０人のコバッタ達が乗り込み…
「うし…じゃ…カイパーベルトあたりなら問題ないよな？」

「でちね。いっきま～ち」

横浜基地の戦艦ドックをぬけると…

数十秒で大気圏外にでて…

「ショートレンジワープでち」

一瞬にてキャーティアワープインしアウトするルーロス、
ものの数秒でカウパーベルトにでた。

冥王星軌道のラグランジュポイントと言うべきカウパーベルト、
多数の小惑星が太陽の重力につかまり、
冥王星との均衡をたもちカウパーベルトを形成していた。

「ここいらでいいか？」

船外にでて…

［マスター人間なのかつくづく思うんだよね］
［普通の人ならパーンとなるのに］
［の前に凍ってじゃない？］

確かに水分がなくなり…

［マスター人間やめてたからいいんじゃない？］
［そっか…でも、じゃあなんで子供ができるの？］
［異人種間配合でしょ、米と麦の配合とか］
［あ～なっとく～］

「あ～お前ら、チューリップだすぞ、
固定作業よろしくな」

［マスター、了解！！］

チューリップを出すと、作業台にコバッタが上り、
重力を均衡させていく…

「ブースター挺だすぞ～」

まずは出した、外付けブースター挺、

現代日本でいえばタグボートみたいなものに、コバッタが取り付く。

［マスター、１号挺始動］［２号挺］……

「うっし、工業衛星だすぞ～」

虚数空間より、１００ｋｍ級の工業衛星をだす。

案の定…
［そっち！！］
［せーの！！］
［もうちょっと］

太陽の重力につかまり、
中心方面へと落ち始めたがブースター挺のひっしの作業により、均

衡を保ち始めた。

［マスター、軌道固定できたよ～。しばらくは安定］

「じゃ…調査入ってくれ。次２０ｋｍ級だすぞ」

２０ｋｍ級は出したとき押しすぎたようで、
太陽系から離れそうになる。
やはり押し止め…軌道固定された。

「固定できたようでちね」

「みたいだな…しばらくはブースター挺この二つから動かせないよな？」

［と思います］

「スラスター優先でまずはやってくれ…
と内部は…」

［酷い状態ですね…
修繕作業開始するまで暫くは時間かかります。マスター］

「予測は？」

［この量だと…最低で１０日は…かかりそうですね…］

「まずそっからか…」

固定作業で更に内部の破壊がすすんだ為…早めのデブリ除去作業が好ましい。

「とりあえず最優先で頼むわ」

［増援組ともども作業を進めます］

「じゃ、行こう」

「了解でち」

世界扉で再びマクロス世界へと渡る…
場所は地球。

「で、次は何処に逝くんでちか？」

「ここね」

空間パネルに表示されたこの世界の宙域を操作した。

銀河中心方向約３４００年先に表示されている…
射手座スパイラルアーム付近のマクロス２５を…

「了解でち、なんとか3日でいくでち」

「やっぱり3日かかるか…短縮できない？」

「できるでちよ。ジュネレーター強化で、
ワープチャージ時間が大幅に短縮できるでち」

「お…それ設計図とかある？」

「これでちね～」

さっそく改造にはいった。

暫く改造して…

「あと問題は…この世界がどっちに向かってるか、この時点じゃわからないんだよな…」

「どっち？正史じゃなくてでちか？」

「両方とも正史と言い切ったからなぁ…
あの監督は…可能性はなくないな」

片方の世界は主にミシェルが死亡、

もう片方は主にブレラが死亡、グレイスが狂気にならずに死亡、
ぷらすギャラクシー船団が本当に全滅等だった。

（シェリル様も連れてきたいんだがなぁ…）

両方の正史であっても死にはしない…
植物人間化してもアルトによって……

（ん～）

多分解決はつかないだろう…

日本時間２００２年２月２２日

場面はかわりＭｕｖ－Ｌｕｖ世界の地球…

南米周りで回航してた、第二砲撃艦隊をはじめとする、異世界軍の
到達日時が正式に決定し、

リヨンハイヴ攻略作戦の開始日時が日本時間の２４日と正式に決定

され、
続々と作戦参加機体がここ、イギリス本土にある各基地へと集結していた。

エヴェンスクはソ連が主体だったが、

フェイズの規模が違うリヨンには、
ＥＵの他、アメリカ、南米諸国連合、アフリカ連合、をはじめ、
ほぼ裏側の日本帝国も参加している。

勿論国連軍に常時参加戦力以外でもだ…

そしてそこに大気圏外よりマクロスが降下してきた。

「おい、あれ」

「ＨＳＳＴか？見慣れないタイプだな…」

……

「あ…」

……

「うそ…でかそう…」

……

「つ潰されるぞ！」

「機体うごかせ～」

……

「と、とまった？」

「た、助かった…」

「浮かんでる？」

重力制御による戦艦の為、空いている場所へと移動しはじめた。

ＳＤＦ－１マクロス、全長１ｋｍ強の巨大戦艦が、Ｍｕｖ－Ｌｕｖの世界に初披露となった。

戦艦とは聞いてても、
そんなサイズの船が降下してくると聞いてなかった為に、
発生したパニックであった…

場面はカオルにもどそう。

「ごちゅじんたまついたでちね」

「う、う～ん…やっとか…」
背伸びしながら…

ワープドライブのジュネレーターを1日かけて改修した事により、
３０００光年を３００回のショートジャンプ行ったが、
チャージ時間を短縮できた事により、
わずか1日でいけたという驚異的な踏破速度にあがっていた。

４分間隔で次のワープに入れたのである。

ショートワープくらいなら、３００万光年をわずか3ヶ月で渡れる
キャーテア技術の前では、
主観時間もさほどかからず…

結果的に1日得した事になる。

もっとも、２０mサイズの小型挺であるのが一番だが…

「あとはレーダー強化できればなんでちが…」

「そっちの方が難しいよな…」

「でちねぇ…船体を拡大するしかないでちからね～」

「更に時間かかるからなぁ…」

「ごちゅじんたま。視認可能距離にきたでち。みるでちか?」

「ああ」

ルーロスの外壁が透化してく…

「ほぉ…」

眼下にはマクロスフロンティア船団が見えていた。

マクロスフロンティア…
従来型の約２．５倍、１５ｋｍの大きさになるフロンティアシティは５００万人の人口をようし、
その他に環境艦とよばれる円筒型の艦を連結し、
閉鎖系バイオプラントによる、循環型のバイオテクノロジーで、
すべて船団内部において、自活できるようになっていた。

水、空気、食料循環…
それによる水の浄化、空気の浄化、人の排泄物の浄化等をこなして、
現在では１０００万人将来的には１億人まで船団内部で住める容量を保っていた。

このようなシティを核とした群島のようなものを形成するため、アイランド・クラスター級とも称されている。

こうして、長距離移民に対応し、長期間無補給で生活できる環境になっていた。

シティをアイランド１、接続している円筒型の環境艦を、アイランド２…
以後アイランド３…４とすすみ、２４艦接続されていた。

この円筒型の環境艦じたいも直結８ｋｍ幅３ｋｍの大きさを誇り、
今までの新マクロス級に比べてもかなりの大きさを誇っていた。

「ここまでデカブツだと…ナノマシンの仕事だろう。
どうせ何回もくる事だろうしな…
じゃあいってくるわ」

「いってらっしゃいでち～」

とりあえず撃ち込むターゲットは、
アイランド1、
環境艦のアイランド3、
バトルフロンティアの3艦を狙っていた。
環境艦は基本構造が一緒であり、細部が違ってくる形になっていた。
の為全部は狙う必要はない…

なにしろ…

『銀河の妖精、ファイナルツアーｉｎフロンティア本日開演！』

（かせがなきゃ…やばかったなぁ…）

『最高のステージにしてあげるわ！
わたしのステージに来なさい！』

時間がなかったからだ。

時に…２０５９年３月２日
天空門ホール前の広場では…

（お、いた）
勿論カオルは一連の作業すまして来て、幻影で見えなく浮かんでいる。

「…お礼するね。私ニャンニャンでバイトしてるから来て」
ランカが、ＥＸギアつけたアルトにお礼をいってるようだ。

「ニャンニャン？」

猫の様に手をまるめ、お尻を突き出しポーズをとり、
中華風のリズムにのせそのフレーズを口ずさみながら踊るランカ。
「～♪でかるちゃぁ～」
最後にあいくるしく両手を広げ、ゼントラーディ語のいわゆる信じられないで締めくくる。
「ってＣＭしらない？」

「え？」

（知ってる～買ったぞ～！！
美味かったよなぁ…復刻しないかなぁ…）

「うわ、もうこんな時間、必ずきてね～待ってるよ」

「フッ変なおん……」

ランカについていきながら…

「あ～まにあえ～」

ランカはホールの入口にかけこむ。

「間もなく開演です、お急ぎ下さい～。
正面入口では身体検査を行います。
録音、撮影機器の持ち込み、
ビン缶類はホール規約により持ち込みできません。
携帯にはこちらから制限ソフトを入れさせていただきます」

「ま、まにあったぁ……チケット」

「一名様ですね…続いて身体検査お願いします」
チケットもぎった女性係が検知ゲートに案内し…

「金属類はそちらのカゴにお願いします。
携帯には制限ソフト入れさせていただきます」
女性警備員が機器の操作をしながらはなし、
「はい」
ランカはゲートをくぐった。

館内での毒ガステロ防止などの為、
お客自身の安全確保に必要な措置であり、
また海賊版を防ぐ為にも必要な措置であった。

「くっくすぐったい…」

「申し訳ございません」

女性警備員による手によるボティチェックを終え、

「間もなく開演で～す。席番わからない方ご案内いたします～」

係員がホール内部で案内していた。

「まって閉めないで～」

ランカはギリギリで滑りこみ、彼女の指定席へとすすむ。

……

館内照明が暗くなり…

『ｉｎ　Ｔｈｅ　ｂｅｇｉｎｎｉｎｇ　ｗａｓ　ｔｈｅ　ｓｏｎｇ』

はじめに歌ありき…

『Ｓｔａｒｓ　ｓｉｎｇ　ａｓ　ｉｆ　ｔｈｅｙ're　ｐｌａｙｉｎｇ　ａ　ｂｅａｕｔｉｆｕｌ　ｔｕｎｅ　ｏｆ　ｈｅａｖｅｎ』

星ぼしは歌う、まるで天界の歌を奏でるように…

『Ｌｙｎｎ　Ｍｉｎｍａｙ２００９』

初代銀河の歌姫…

『Ｓｈａｌｏｎ　Ａｐｐｌｅ２０４０』

（彼女は救えるかな…？）

カオルはホールの壁となり、ステージをみていた。

チケット？

譲って下さいというたちんぼが出てるのに、
席が余っている訳がない。
プレミアムチケット化してるツアコンだ。
これを逃すと生シェリルを見るのが、
サヨナラコンしかない…
そうたった二回しかないわけだ。

『Ｆｉｒｅ　Ｂｏｍｂｅｒ２０４５』
（突撃ラブハート！）

『ａｎｄ　ｎｏｗ』

「あたしの歌をきけぇ！！」

～ユニバーサル・バニー～
（え？劇場版の流れか？）
舞台が発条仕掛けのステージにうつり変わる。
ホログラムを駆使した舞台だ。

機械的なロボット達がダンスを踊っている。
ロボット達がダイブし…

『３　２　１』

ステージ上にシェリル様が現れた。
間違いなくユニバーサル・バニー…
何回も聞いていた曲だから間違いない。

白の純情と黒の小悪魔の共演…

（シェリル様～歴史なんかいいや！）

生コンサートに夢中になりカオルは考えるのを放棄したようた。

～射手座☆午後九時　Ｄｏｎｔ　ｂｅ　ｌａｔｅ～

２ｎｄナンバーが射手座が流れ、

軍服をモチーフとした衣装にかわる。

ナンバー開始とともにアクロバット飛行が始まり、

アルト達が空から光の粒子を舞い降らし幻想的に演出する。

曲中によりセクシーに変わり…

アルトの無茶なアクロバットは披露されずに…

～Ｗｅｌｃｏｍｅ　Ｔｏ　Ｍｙ　Ｆｕｎｃｌｕｂ'ｓ　Ｎｉｇｈｔ～

３ｒｄナンバーがはじまる。

アルト達が上空を回り、シェリル様がカウガール衣装で狙いをつける。

アクロバット飛行続けていた一人がシェリル様横を飛び去ると…

「キャー」

「シェリル様～」

中央から走りステージの端からダイブしてく…

思わず声をあげてしまったカオル。

アルト姫に抱えられシェリル様が裾から空にあがり歌声を披露する。
思わずほっとしながら…
（アルトしねぇ！）
と殺意が目覚めていた。
（シェリル様の肉体を汚しやがってぇ！！）
シェリル様の策は、ミハエル達が隊列を整えて、見事に成功した。
観客はより熱中していく。

～Ｗｈａｔ-ｂｏｕｔ　ｍｙ　ｓｔａｒ～

４ｔｈナンバーが始まり、
コンサートが最高に盛り上がってきた最中…

突如コンサートの電源か切り替わる。
（あ、ここまでか…）

『マクロスフロンティア行政府よりお知らせします。
全艦に避難警報が発令されました。
市民の皆さんは速やかに最寄のシェルターに避難して下さい。
繰り返します…』

ステージ上のシェリル様が問答の末に、
キャッシーさんに舞台裏へ連れられてく。
客席が突然の事態に騒ぎだすが、
『主催者よりお知らせします。

本コンサートは行政府より中止命令がはいりました。
運営対応等は後日発表いたします。
チケットは必ずお手元にお持ち下さい。
規制退場行います。
係員の誘導に従い、順次退館後、シェルターへご移動お願いいたします。
では後方ブロック……』

一気に扉へ殺到するとそこで圧縮による死者がでてしまう。
現代日本でいえば、明石花火大会の歩道橋のように…

運営は不満あげてた客を静めて、勤めて冷静に退館を促していた。

（で、と…艦の外側で死亡したバジュラから回収しなきゃな…）

館内にいるお客さんが全員退館し、シェルターへ移動しはじめる頃、

「怪物ぅー」

「キャー」

（あれがバジュラね）

メインアイランドに侵入してきたバジュラが、
街に着地し破壊行動にうつしてきた。

古代プロトカルチャーがバジュラを研究対象として、
フォールド航行を生み出した。

そして現在のフォールド技術では頭うちになっている、
フォール航行でのズレや、時空断層突破能力、等を回避する為のフォールドクォーツ…
そのフォールドクォーツを体内に持ち、エネルギー源として、
各種生産行動をおこなうバジュラ。

（艦内に侵入したのは…回収されるんだよな…）

赤バジュラが、空中に手から体内で精製したガトリング弾を打ち出してる。

おそらくアルトを狙っているのだろう。

カオルは外へと…

（死骸死骸っと…）

戦闘空域を探すが…ＶＦ－１７１の残骸ばっかりで…

（一回目の襲撃だからな数すくない筈…
ギャラクシー救出作戦についていった方がいいか…）

カオルは諦めルーロスを呼び回収して、

マクロス艦内に戻ると、戦闘が続く中、
世界扉で渡った。

……

カオル報告

マクロスフロンティア船団にマーカー付けました。

第１９７話　マクロスフロンティアへ　投稿日２０１１１２０７（後書き）

シェリル「まぁまぁね」

作者「は、はひぃ」

シェリル「で、作者はわたしをどうしたいの？」

作者「え、えっと……い、いち、おう原作通りに」

シェリル「駄目よ駄目。わたしは銀河の妖精シェリル・ノームなのよ。そうね…作者、わたしをＭｕｖ－Ｌｕｖの世界に連れてきなさい」

作者「え？」

シェリル「歌でＢＥＴＡとやらを魅了してあげるわ！！」

作者「あ、あのアルトは…」

シェリル「勿論アルトもよ！！」

作者「あ、あの…フロンティアは…」

シェリル「それをどうにかするのが作者じゃない？
いいわね、言ったわよ！
わたしを連れていけなんてサービス、めったにないんだからね」

さっていく…シェリル様

ナギ少尉「作者～大丈夫？
……駄目ね反応なしか…
さてどう解決つけるんでしょうかね？

マクロスフロンティアのメインヒロインからつきつけられた難問を…
後々のフラグになるのか？

次回　救援…お楽しみにぃ」

第１９８話　ギャラクシー救援　投稿日２０１１１２１０

『番組の途中ですが、大統領の緊急声明を発表いたします』
フロンティアの公共テレビが一斉に各チャンネルとも切り替わる。
行政放送だ。

時に２０５９年５月１日…

『フロンティアの皆さん、ハワード・グラスです。
今日は皆さんに重大なお知らせがあります。ご覧ください』

バジュラの最初のメインアイランド上陸時の映像が流れる。

『見覚えのある方もいらっしゃるでしょう。
そう、これは先日、我がフロンティアを襲った生体兵器です。
我々はこの物体をバジュラと呼称することに致しました。

そしてバジュラによって、我が同胞であるマクロス・ギャラクシーが、
大規模な攻撃を受けたのです』
画面が切り替わり…
『メーデー、メーデー！
あのクソ蟲どもがメインランドに取りついた！頼む！ぁ…』

『この事態に伴い、我々が同胞ギャラクシーを救うため、
そして我々自身も守るため、
私は大統領権限において非常事態宣言を発令いたします。
救援部隊の派遣は…。』

カオルは会見放送の後辺りで、
S．M．S民間軍事プロバイダーのクォーターが停泊箇所へとむかっていた。

（テレビ版の流れね…）
時代が決定的になったと感じ、また残念にも…

（シェリル様ぁ…）
狙っていたのも事実のようだった…

さて、話を戻そう…
民間軍事プロバイダー…何だろうと思うものがいるかもしれない。

ようは傭兵…金で雇われるプロである。
ただ傭兵と違うのは会社組織に雇用され、
クライアントとは直接的に契約交渉はしないという点だ。
あくまでも、契約する相手が会社である点である事。
そういった違いがある。

さて、軍を動かすには色々と手続きをしなければならない…

その手続きの手間をかけるよりか、自由に動ける兵士達…

ちょっとした偵察、護衛、はたまた小規模戦闘…
お金がかかるが、素早くうごける。

そういった為、必然的に高い給料と厚い待遇、
そしてなにより兵器メーカーとの繋がりで、先行導入や実験依頼等…

そうすると凝り固まった軍よりか、
民間軍事プロバイダーに腕の覚えがあるものが集まり、
またスカウトされたり、また先行実験機目的に入隊したり…
質が更に高まる。

そしてメーカー側もその腕を見込んで軍よりも、より民間軍事プロバイダーへ依存する。
数や統制では軍だが、
人材の質、兵器の質という点では民間軍事プロバイダーに軍配がすでにあがっていた。

『続いて、先ほど行われた、
シェリル・ノームさんの会見の模様です』

『私はギャラクシー、私の故郷が無事だと信じます。
そしてこのフロンティアが、
彼らを助けるために行動を起こしてくれることに感謝を申し上げます』

『ですがフォールド断層のせいで、あの映像は5日前のものだと。』
『それどころか、いたずらに手を出せば、あの化け物、
バジュラの注意を引くだけという見方もありますが…』

『つまりこう仰りたいんですか？
ベッドにもぐって息を殺して、
バジュラが見逃してくれるのを待つべきじゃないのか。
ギャラクシーなんか見殺しにして』

『そうは言ってはませんが…』

『そうですよね。この艦も、二度もバジュラに襲われているんですから。
あとＳ．Ｍ．Ｓさんでしたよね？民間軍事プロバイダーの』

『は、はい？』

『彼らの協力がなければバジュラ撃退できなかったのでは？』

『Ｓ．Ｍ．Ｓが？』

『…と、ともかく、こういう事態です。
今夜のＬＩＶＥは中止だと思いますが、ファンに向けて…』

『中止！？誰がそんなことを決めたの？』

『…で、ですが』

『ＬＩＶＥはやるわ。そして私は、私はギャラクシーに帰る！』
ちょうどそのころクォーターにたどり着き、さぁ……とすると、

「バーミリオン４のＶＦ－１９は予備庫に移動だ」

「アポロ４のＲＶＦ－１９も予備庫行きだ」
（予備庫？）
「オーライオーライ」

カオルが今日の出撃にそなえ、

クオーターに来ると、
機種転換が終えたのだろう、搭乗機の変更作業の為の入れ替えの様だった。

予備庫と呼ばれるＳＭＳ内部にある、艦外格納庫についてくと…

ＳＭＳで役目終えたのだろう、
予備機となった様々なフロンティア仕様のＶＦ－１９シリーズが置かれていた。

片っ端から取得しまわっていた。
偵察型等も、勿論あるし…

一方艦橋では…
「新統合軍機、先行偵察に出ました」

「艦の状況は？」

「現在、チェックリストＥの１６２０まで消化、残りは１５％です」

「レーダーシステムは全面改装された。

慣れる時間を与えられずに心苦しいが、しっかり頼むぞモニカくん」

「ハイ！艦長」

「セクハラだよねぇ…アレ」

「本人が喜んでるから良いんじゃないですか？」

「艦長、例の件本当なんですか？」

「猫の鈴さ。この艦について、ビルラー氏と政府の話し合いは、
それで手打ちになったらしい」

「失礼します。新統合軍幕僚本部の命で着任いたしました、
キャサリン・グラス中尉です」

「お客様1名ごあんな～い」

カオルはクォーターの格納庫にやっと入り、
ＶＦ－２５やケーニッヒモンスター、クァドラン等を取得しにまわっていた…

（やはりここいらになると違うか…）

時代を実感していた。
最新鋭の評定にはいっている機体と、
実用化されている改造型の違いだろう…

取得し終わり…艦全体へと広げる。

意識が艦橋に到達すると…

「艦長、大統領府より最優先です」

「回してくれ…」

ジェフリーは、一読しながら…

「一級の管制免許をお持ちだそうですな、グラス中尉」

「キャシーと呼んでください。１３００時間の実務経験もあります」

「ではキャシー、早速だが働いてもらう事になった。
よろしいかな？」

「はい！」

「総員起こし、コンディション２を発令。
本艦はこれより発進準備を開始する！」

「Ｓ．Ｍ．Ｓ、マクロスクォーター全乗組員に伝達します。
当艦はコンディション２を発令、
発進準備に入ります。
各作業員は作業を行って下さい。

繰り返します。当艦はコンディション２を発令、発進準備に入ります。
各作業員は作業を行って下さい。

残存艦が現在バシュラの大群に襲われています。
バジュラ戦闘が想定されます。
兵装は対バジュラを選択してください。

繰り返します。
残存艦が現在バシュラの大群に襲われています。
対バジュラ戦闘が想定されます。
兵装は対バジュラを選択してください」

「チェックリスト消化急ぎます」

「乗組員の搭乗状態は？」

「完全休暇が２名、代替えシフトで問題ありません。
バルキリー搭乗員のスカル４のみ艦外にいますが、問題なさそうです」

「艦内設備、オールグリーン」

「反応炉、定格出力で安定」

「対バジュラアンチＥＳＡ仕様弾装填開始」

「チェックリスト消化、全乗組員乗船確認」

『スカル小隊、スタンバイ完了』

「了解しました、オズマ少佐」
『…キャシー！？何でお前が？』
「私語は慎んでください少佐」

『ふ、また親父さんの命令で貧乏くじか』
「大きなお世話よオズマ！！
…ったく。全小隊スタンバイ完了しました」

「新統合軍司令部より発進許可出ました」

「艦長、発進準備完了！」

そのころサヨナラコン会場では、
～ダイヤモンドクレパス～
オープニングナンバーがながれていた。

「総員に告げる。
当艦はこれより同胞ギャラクシー残存艦の救援に駆け付ける。
大統領からのオーダーはただ一つだ。
ギャラクシーの状況が生きたまま確認できる事…
すなわち残存艦を一隻でも多く救助する事だ…
S．M．S全小隊の日頃の訓練の成果に期待する…

フロンティアとの全コンジットをパージ。スタビライザー解除！」

「了解！」

「解除確認！」

「反応炉出力5分の1。微速前進！」

「微速前進」

「離床しました」
艦がドックから離れ前進していく……
「メインブースターアイランド影響外にでました」
「S．M．S、マクロスクォーター発進！」
ブースターが艦を前に押し出してく…
「告げる。フォールド安全エリアに到達次第、本艦は直ちに１２光年の短距離フォールドを行う。総員フォールドに備えよ！」
「目標座標確定、フォールドいけます」
「フォールド！」
フォールドエネルギーが艦前方に集中し、フォールドゲートが開く。
艦が超異次元空間へ突入した。
約客観時間８分後に通常空間に復帰した。
「船体各部、異常なし。デフォールド成功です」
「本艦前方０２にダルフィム、及びカイトスの反応を確認。映像出

ます」

「…酷い」

「艦長、我々の任務の第一は残存艦の救援ですが、それと同等、あるいはそれ以上にバジュラに関するデータ収集が、重要であることを忘れないでください」

「それは新統合軍ではなく、大統領からのオーダーと受け取るべきかな？」

「そうとって頂いて結構です」

「…微速前進」

「んもう」

「……心得ておこう。全艦、戦闘準備」

ぞくぞくとクォーターから飛び立つバルキリー…

カオルの分裂体も勿論スカル１、スカル３に取り付いていた。

サヨナラコンでは…

３ｒｄナンバーが終わり、

『いつも通りマスロススピードで突っ走るよ。

だからわたしの歌をきけぇ！』

～射手座☆午後九時Ｄｏｎ'ｔ　ｂｅ　ｌａｔｅ～

４ｔｈナンバーが流れだした。

「艦長、ダルフィム、カイトスから搭乗データーが届きました」

「カイトスが避難民多いですね」

「そして、より損傷をうけていると…」

「幸い、対大型バジュラのビームには抵抗できているようですが、それ程もちません」

「この断層も厄介よね」

「S．M．S全小隊並びに統合軍及び両艦に通達、
ダルフィム周辺にSMSは展開し、
カイトスを先行して逃がす。
迅速に行動せよ。
損傷の少ないダルフィムへ連絡、
内容は、モンスターの足場として貸して欲しい…以上だ」

「各小隊、出撃完了です」

「ダルフィムより、了承と帰ってきました」

『全機プラネットダンス！！』

「カイトス先行しました。フォールド可能まで約４０分」

「スカル小隊交戦宙域にはいりました！続いてピクシー、バーミリオン、アポロ、パープル、ブルー、グリーン、ラビット入ります」

「スカル２の先制射、命中！バジュラ反応きえます」

『カナリア、花道だ！』

『了解ッ！ラビット1よりダルフィムへ。甲板借りるぞ！』

『こちらダルフィム。お手柔らかに頼む！
ケーニッヒモンスター、B甲板に到達。対ショック防御！』

『ラビット1迎撃開始。死にたくない者は、私の視界から去れ！』

条約で使用制限されている反応弾、
それを除くと最大火力を保持するケーニッヒ・モンスターの火花が咲いた。

「ダルフィム周辺バジュラ反応減少します」

マクロス級の主砲以上の働きをするケーニッヒモンスターが取り付いた事により、
対空迎撃能力が大幅にアップしたダルフィム、
これでよっぽどの事がない限りだろう。

（カイトスに到達、こりゃひでぇわ…）

スカル1に取り付いてた分裂体が離脱しカイトスに取り付いた。

カイトス全体に急速に広げるように展開する。

間もなくこの艦は……

「ママー怖いよー」

「大丈夫よレイちゃん。フロンティアの軍隊さんが、助けにきてるわ」

「ひっくひっく」

「神様…お願いします。
どうかこの子の命を助けて下さい…」

艦内部は負傷者、避難民でごったかえしていた。
気密区画が少なくなっていたために館内部へ、
生き残った民間人や負傷者が集められていた。
……

ークォーター艦橋内部ー
約２０分程たっただろうか…

「敵バジュラ群、ダルフィムから突破できてません」

「優勢だな…」

カイトス周辺部には既にいなく、
ダルフィムに陣取ったケーニッヒ・モンスターやＳＭＳ、
統合軍機で優勢になっていた。

「バーミリオン2被弾、緊急着艦に備えて下さい。
予備機の起動準備お願いします」

被弾したが、パイロットの負傷者無しのようだった。
だが機動に不安定になってるようで、予備機の要請がはいてた。
着艦デッキでは緊急放水のワークスがスタンバイに入った。

「バーミリオン2着艦成功です」

『すまない』

「バーミリオン2再出撃してきます」

……

「カイトスは何とか無事に逃げれそうね」

「そうね…フォールド安全圏まで４５０と……
えっ！うそっ！艦長カイトス後方に、
未確認物体がフォールドアウトしてきます！！」

「アンノン高エネルギー反応！！」

「だめぇー！」
カオルが忙しく、
カイトスに乗っている人々を
虚数空間にほうりこんだ。

勿論インプラント通信を無効にして…
（うおおお～ひかりとなれぇぇぇ）

「カイトス轟沈…生存者は……」
「そんな…」
「フォールド断層をダイレクトに超えてきたっていうの？」
「なんという…」

（いちちち…何人救助できた…？）

（３９１４人だね）
救助を担当している分裂体集団から思考がはいる。

（そんなもんか…じゃダルフィムにデーターとりで、取り付くわ）

「スカル３から敵艦データー収集きてます」

「開口部にビーム発信機か…」

「スカル３、ロスト！」
「スカル１、何が」

『ルカが敵に食われた！』
「食われた？」
「撃墜されたの？」
『違う。あの船がルカを捕獲して飲み込みやがった』

ーサヨナラコンサートー

『ありがとう、みんな！愛してる！』

～インフィニティ～

まさに戦場に届けこの思い、この歌…
でラストナンバーが流れだした…

ークォーター艦橋ー

「スカル４突貫していきます！」

「スカル４突出しすぎよ！戻りなさい！」

「オーダー追加だ、スカル４を援護せよ」

「か、艦長？」

「了解、手隙の小隊は突出中のスカル４の援護にまわれ」

了解、ルカ君の為に等返答がはいる。

「えっ？えっ？」

「バーミリオン、１、２スカル４の９時方向のカバー入ります」

「スカル４、敵艦まで３０、２０……１５」

「艦長、アンノン反応ＩＦＦ反応ありません！あっ…反応途絶」

「むぅ…」

「…スカル４信号も途絶、
敵艦内部に侵入したと思われます」

「なんて無茶な」

「艦長」

「勝算は？」

「奴はノロマです。でしょ？ラム」

「はい。スカル３が収集したデータからシミュレートしました。
最大戦速ならこっちの勝ちです」

「ミーナ君」

「各部異常なし。改装後初となりますが、いけると判断します」

「モニカ君」

「砲撃パターンから、回避プログラムを組みました。ナビゲートはお任せください」

「ちょっ、待ってください、艦長！出るのは危険過ぎます。
パイロットが敵艦内にいるとはいえ」

「それだけではない。我々が逃げたらダルフィムの乗員は全滅し、
恐らくギャラクシーの安否も不明になる」

「ですが…」

「グラス中尉、君が伝えた大統領のオーダーは何だったかね？」

「え？」

「我々にはまだ、それを満たす手段がある」

「どの様な手段ですか？」

「このクォーターでのダイダロスアタック…近接格闘だ」

「あっ」

「やつはノロマだ、そしてこのクォーターは早い…
いけるだろ、キャシー君」

「で、ですが…」

「クォーターより出撃中の全部隊に告げる。
本艦はこれより、バジュラ空母艦との近接格闘戦に入る。
諸君等は、ダルフィムを全力で守れ。
最大の獲物はこちらで頂く。
全艦、トランスフォーメーション！！」

「本艦は、これよりトランスフォーメーションを開始します。
各位、強攻型シフトを開始してください」

「メイン反応炉、出力上昇！」
「フラクタルモジュールシステム、アクティベート」

「艦長。私はまだ完全に納得したわけ…」
「足元」
ヤバいところを掴まれたのだろう…悲鳴をあげながら…
「気をつけたまえ」
抗議する。

「ボビー。
このクォーターが、なぜ４００m級でありながらマクロスの名を冠されているのか。
いや、マクロスでありながら、なぜこのサイズなのか思い知らせてやれ」

「お～けぇい、ボォス…」
ボビーが髪をセットし直し気合いをいれると…
「んっ、いづげぇぇぇぇ！！」
だみ声で操舵竿を押し込むと、クォーターがありえない加速を始める。
「うぉるぅりゃぁぁぁぁぁぁ！！」
キャシーがそのGに振り回され悲鳴をあげ…

「敵艦、主砲発射シークエンス！」

遠目に開口し始めるのが確認できた。

「へへぇ…おらぁぁぁ！」
ボビーがレーダーをチラ見し、操縦桿をきる。

敵主砲が放たれた。

が、クォーターの機動力で隕石の後ろに回りこむと盾にし、
また艦全体にはったエネルギーシールドで、
はなたれた敵主砲は無力化した。

「おっしゃぁぁ！殺ったぁぁぁ！」

破砕隕石を煙幕とし、敵艦の開口部へとつっこむ。

「うぉりゃぁぁあぁぁ！！」
敵艦が開口部、弱点を閉じようとする力につっかえ棒の如く…
「スカル３、４、応答して！」
「４の機体信号ロスト『マクロス』３に４の信号確認」
「迎えに来たぜぇ、お姫様あぁぁぁぁ！」
「スカル３に要救助者２名いる事が確認しました」

「マクロスキャノン発射用意」

「スカル３、脱出確認！」

「マクロスキャノン、エネルギーチャージ」

「ぶちかませぇぇ！！　」

「往生しやがれぇぇえええええ！！！」

マクロスキャノンが近距離で放たれ、
敵バジュラ艦が無防備な内部構造をつかぬかれ、

耐え切れずに爆散する。

「敵艦爆沈、バジュラ、ダルフィム周辺にも確認できません。オーダー完了です」

「どう？これがＳ．Ｍ．Ｓの戦いよ」

「戦果は確かに評価します。
ですが、アルト准尉の行動や、
クォーターの強引な運用に関しては後で問題に…うっ……」

「あっら、おめでたぁ～？　おっほほほほほほ」

平然としているクルーの方が信じられない。
加速Ｇなら耐えられたろうが、横Ｇ、縦Ｇとシェイカーをくらいパイロットならまだしも…
対Ｇ訓練受けてない者が吐きにいくのはわかる気がした。

「艦長。ダルフィムから電文です。
貴艦、ならびにＳ．Ｍ．Ｓの奮闘に感謝する」

カオルはクォーターから離れると、戦場跡を探索しはじめた。

次々とフォールドしてく統合軍…

バジュラの回収業務にあたる船だろう…それと護衛船団をのこしてフォールドしていった。

（全部回収されたらやばいな…）
ルーロスを出し、速度をあげて探し始めた。
…
「これならありそうでちね」

「だな」

空間には赤バジュラの死骸があった。
赤バジュラの肉体と同化して調べはじめると…

（これか…）

赤バジュラの体内から取り出したのが高純度フォールドクォーツ。
紫色の綺麗な石である。

……

「じゃ、合流して帰るか…元の世界と、どの位たったっけ？」
フロンティアについた分裂体が合流して、こっちの本体をまっている状態だった。

「自動工業衛星わすれてるでちよ」

「あっ…どの位でいける？」

「ロング15回でちので…6時間でち」
3000光年をジュネレーター強化した結果、20分チャージ、跳躍時間に3分かかるとの事だった。
勿論、空間データー取得ずみで利用する話だったが…

「なら、休憩にあてるか…ちとつかれた」

「了解でちぃ～…その前にごちゅじんたま」

「ん？」

「細菌除去しないと駄目でちよ…
やっといたからいいものの」

「あっ」

「あとね～ビッグ…」

……

カオル報告

V型感染症になりませんでした。

第１９８話　ギャラクシー救援　投稿日２０１１１２１０（後書き）

ナギ少尉「今回はカイトス救助のお話なのね？」

作者「そうだね」

ナギ少尉「でも…４０００人近く乗るの？」

作者「詰め込めば…１００００はいけるだろう？
…スペックが出てはいないんだが、
巡洋艦いわゆる砲艦クラスだとして３００から４００辺りかなと。
普段は周囲に展開している護衛船団の一部だろうね」

ナギ少尉「で３０００人？」

作者「まぁ救助できなかったとか、ＳＭＳ来る前に死んだりとか…
な」

ナギ少尉「なるほどね…で、ダイダロスアタックね♪」

作者「つうか、マクロスであんなふうに、
こじ開けるとは思ってなかったよな…
あと隕石を盾にしたりとか…」

ナギ少尉「神回よね～本編は」

作者「うまく再現できたかな…と思うんだけどね」

ナギ少尉「ところで作者、
前回のシェリルさんの要望どうするの？」

作者「……どうしよう…あれしかおもいつかんよなぁ…」

ナギ少尉「あれ？」

作者「もうちっとまってな。とりあえず次回　マクロス世界より帰還　お楽しみにぃ」

第１９９話　マクロスＦより帰還　投稿日２０１１１２１３

２００２年２月２７日

今年は閏年ではないので、２８日しかないのを記載しておこう。

「ただいまぁ」

［マスターおかえりぃ］

マクロス世界から帰還してきた。

「と、変わった事は…？」

［リヨンハイヴ攻略成功したよ～］

「お…これで残るは１７か…」

［でヴェルホンヤスクハイヴ攻略作戦が３月１日ね］

「で１６になると…１４まではとりあえずはいけるよな…
リヨンハイヴ攻略部隊状況どうだったん？」

３４万のフェイズ５規模ＶＳ国連軍攻略部隊、

定番通り、異世界軍のセオリーの飽和攻撃から始まった。

まもなく地上が人類の手におち、

そして…

突撃命令がくだった。
この時点で約１０万に減らされてたＢＥＴＡ、
巣の中にて迎撃せんとしていた。

人類側にとっては、
ビッグシリーズの監視により、隠れ横道からの奇襲もわかる、
弾薬等規格があえば地上や中継地点で補充可能。
切れることのない通信網。

また機体のｏｓも更新されてる、
補給にもどると持ち帰りしたいのがいる。
超強力な突出した部隊Ａ－０１がいる。

という大甘設定により、被害を出しつつも…
ＥＵイギリス軍所属部隊が反応炉到達し破壊、
残敵掃討した。

というわけだった。

「乙女達は？」

［暴れまくって満足げだったよ～
で、次ね。ドズルさんから、太陽系外縁天体含めて全て終了、
現在帰還中。到着は明日だよ］

「ドズル中将にお疲れと伝言よろしく」
（ドックにもどったら改修だろうな…）

［了解。あ、ベテルギウスの件だけど］

「お…」
今現在、ビッグシリーズが放射能測定、
光学記録に入ってる段階だった。

［ヨークシン級に引き継いで、爆心地への探査へ向かったって～
到達が2から3週間後の見込み］

「ん～まぁそんなもんか…」
キャーティア製のワープドライブでないから、
調査しながら航路開拓の旅になる。
途中障害物あったら…の世界だからだ。

［あと甲2号マシュハドハイヴだけど、
4月初旬頃に発展しそうだって報告はいってるよ～］

「来月か…」

［とりあえず報告は以上だよ］

「じゃ…まずは避難民の方々だよな…」

［避難民？］

「そ」

確かにテレビ版では、ギャラクシーのＳＯＳは偽装だった。

バジュラに襲われたが、逃げ切れる手段及び防御はとっていたのだ。

ＶＦ－２７やＶ９等…

その為ギャラクシー統合軍司令部の命令を素直に聞き入れ、

付近住民を収納しいち早く避難した、

カイトス、ダルフィムはギャラクシー船団から、

欺瞞工作の囮として見捨てられた形となっていた。

が、劇場版では中々救援要請を受けないフロンティアに、演技で救援を求め続けてると、

更なる大集団に襲われ逃げる時期を完全に見失い、

本当にメインアイランド自体が壊滅し…難民船７隻をのこすのみになってしまった…

勿論カイトスやダルフィムはバジュラにに捕まり…

ともあれ失う命だった乗員乗客約４０００名を、連れてきたわけだ。

幸い横浜基地での戦艦製造は基本的に終了している。

戦艦ドックで避難民の入ったシェルターをだし、

［マスター、カプセル入ったのどれ？］

「あの体育館」

赤色灯をまわしながらコバッタが入っていく…

「救助感謝いたします。

新統合軍ギャラクシー船団所属、カイトス臨時艦長リン・カーラ大尉であります」

振り向くと若そうな長い髪の女性がいた。

「異世界軍最高責任者渚カオル元帥です。臨時艦長というと…」

「はい、先の逃亡戦のおり…メインブリッジに直撃ありまして…殉職されました。

わたしが残っていた士官の中で、最高階級でしたので…引き継ぐ形で…」

「それは残念です」

「それでやはり統合軍司令部とは…」

「それは申し訳ないのですが、

皆さんはあちらの世界では既に死亡されてますので…」

「ですね。わかりました」

「皆さんのご希望にそう形で、この後はなるだけ対応していきたいとは思います。
軍属ご希望の方は希望叶うと思いますよ」

「避難民の方々や部下にも伝えます。
救助ありがとうございました」

リンさんが敬礼をし部下のところへいく…

［マスター、軍に入れないの？］

「それよりか、民間人をとにかく増やさないと…まずは話にならないだろ…」

［あ～だよね～］

目標１００億人突破…

勿論開拓済み他恒星系人口も込みでだが…

少なくとも自力で宇宙船つくれるようにならなきゃ、
話にならない。ので、目指せマクロス世界の新統合軍！
をスローガンとしていたわけだ。

とりあえず今回の救助者がかたついたので…
鯖にデーターを入れ始めた。

［微妙に違うのもあるんだね］

「まぁ今回はフロンティア仕様ってか…ＶＦ－２５が納入する前の機体もだしな」

さて、今回入手したＶＦ－１９系統及びＶＦ－２２系統について説明だが…
Ｅという外輸出型番からすべて始まっている。

正式量産型との違いはアビオニクスを搭載してるかどうかの違いだ。
その為、入手した各拠点等は一から開発しなければならず、
開発できた型番が、ＥＦ　マクロスフロンティア仕様となっていた。
だが練度の低い統合軍パイロットでは到底取り扱う事ができず、約１８０機生産の内、１５６機と多くの機体がＳＭＳに納入されている。

更に操縦方法の変更及び対Ｇパイロットスーツの役割になる、ＥＸギアを導入した、ＶＦ－１９ＥＦＳ．Ｍ．Ｓ仕様。

そしてそれの偵察型である、ＲＶＦ－１９ＥＦ。

唯一ＳＭＳで入手した地球仕様の元チェルシー専用機、ＶＦ－１９ＡＣＴＩＶＥノートゥング。

そして、地球の特殊部隊で拾ったアビオニクス等向上改良型のＶＦ－１９Ａ２…となっていた。

ダルフィムの艦積機の中にＭＧ、

マクロスギャラクシー仕様もあったのも付け加えておこう。

［これ綺麗だね～］

「だよな…空力てきにな…」

ＶＦ－１９とＶＦ－２５の大きな違いとして、

パイロットに直接かかる負担の軽減化がまずあげられる。

フォールドクォーツ使用によるＩＳＣという、重力慣性吸収装置による恩恵だ。

機体やパイロットにかかる過重なＧを異次元に一時的に封じ込め、

Ｇがかかってない時に解放していくという夢の装置でもある。

ただし、フォールドクォーツ自体がバジュラの体内でしか精製されず、

数少なく貴重なものであり、

量産一般兵用のいわゆるＡ型には低純度の人工フォールドカーボンが搭載される事となっている。

しかし、過重なＧが吸収しきれなかった時、

戦闘行動中であると致命的な事になる。

リミッターの存在だ。
全ての機体は標準で、リミッターがかかっており、
かかってないと高速機動で過重なＧが機体にかかり空中分解の恐れもでてくる。

また機体が保っても同等のＧがパイロットにかかり、負担耐え切れずに、
目玉が飛び出たり潰れたりするのだ…
前にもかいたが、せいぜい鍛えた人間でも、
自分の体重１０人分がかかったら…話がわかるだろう。

パイロット保護や機体保護の為のリミッターを、
外しているのが信じられない行為である。

フォッカー少佐のリミッター外しは特別。
勿論出撃の度に毎回コバッタが交換修理をしていた。
身体が耐え切れてるのが信じられない話だった。

一応ＶＦ、バルキリーの通常の１８０度ターンは、減速、変形、方向転換、変形、加速の形だ。

高速機動ではターンの半径がどうしてもＧの関係上広がりすぎてしまう。

そこを場合によるが…
減速無し変形旋回や、
無理矢理Ｇに耐え旋回し速度を保つのが、フォッカー少佐の乗り方だった。

普通の人にはできない話だった…

さて話をＩＳＣ、フォールドクォーツに戻そう。

［このフォールドクォーツって？］

ＩＳＣのデーター内部にあるものを指してきた。

「こいつだな…」

手短な資材を手に握り、精製する…

紫色のフォールドクォーツができていた。

［へぇ…］

珍しい鉱石にみえる為、コバッタもマジマジと観察し、

［もらうね～…作れるのかな？］

「純度の低いフォールドクォーツ、
フォールドカーボンか…なら作れるみたいよ」

［うん。純度が低いのなら…多分大丈夫だね］

その他に熱核バーストエンジンの出力ＵＰ型、ステージ２仕様があ

げられる。

大気圏内は…これ以上のスピードアップは望めない。
耐熱の為に…

あとは如何に早く耐熱限界までたどり着くか？
に後発の機体もなるだろう。

もう一点、パイロット保護の面でもあるが、ＩＳＣの他に、ＥＸギアがある。

これは操縦桿、脱出シートを兼ねた耐Ｇスーツであり、
脱出後には宇宙空間兼用のパワードスーツを兼ねている。

また、外部入力でＶＦにトレース動作させたり、ＩＦＦで遠隔操作させたり等も可能であった。

［これ面白そうでちね］

「だろ？」

走行ローラー、飛行ユニットを備えているのが好感触だろう。

また各種バルキリーパックも更新できた。
バルキリー用のフォールドブースターが、
手に入ったのが嬉しい話でもある。

［こいつは珍しいでちね］

「インプラントサイボーグ専用だからな…使えて人間なら…第六世代か…？
まぁシュワちゃん専用になりそうだな」

ＶＦ－２７Ｓ　ブレラ機チェーン。

何処でゲットしたの？はスカル３がバジュラ艦に吸い込まれた後で、側にいたＶＦ－２７Ｓに取り付いた形だった。

ＶＦ－２７Ｓは生身の人間が乗る事を最初っから諦めて、身体強化したサイボーグ兵がのる前提となっている。

ブレラスターン少佐の強化部分の身体データーも入っているが…
（ほとんど生身がないな…）

加重Ｇを考慮する必要がないのもわかるが…

［このこは…モンスターの変形型？］

「ケーニッヒモンスターだね。
デストロイドモンスターの改良発展型だな」

第一次星間戦争において、ダイダロスアタックの決め技の中心的存在だったデストロイドモンスター、

しかし、それ以外においてはモンスターは活躍できなかった。

何故か？

……そう、移動力の無さ…の一言だ。

マクロスのダイダロスからとにかく離れなれない移動力の無さであった…

この世界においては、移動力は改良されたが、
それでも大地から離れられない点があった…

そこでデストロイドモンスターに宙間移動ができるように変形機能が付いたのが、
この可変爆撃機ケーニッヒモンスターである。

火力は絶大、戦艦の主砲以上の働きで、
ケーニッヒモンスターが展開した地点では、
制宙権、制空権、対地でも握られる次第だ。

その変わりその火力を維持するために鈍重さはさけられず、
移動力はあるものの機動力はない。

その後の人類同士の戦いにおいては、
いかにケーニッヒモンスターを守り抜き現地展開させるか？
がより重要になってきた…という可変爆撃機である。

「ま、シャトルで自力展開できるから…これからの主役級だろうな」

［確かにモンスターの活躍みてるとね～］

ケーニッヒモンスター…
現地展開可能な移動砲台、戦艦の主砲級を異世界軍は手にいれたのである……

スーパーディフェンダーとシャイアン2も手に入れたが…
［有効射程に入られたらおしまいかもね］

「だなぁ…デブリ除去や治安維持くらいだろう…
ミサイルにかんしてはマクロスアタックには使ってたが…」

そしてゼントランの搭乗機のクアドラン・レアも手に入れたのが大きい。

ローの統合軍技術をいれた改良、再生産型だ。

さて艦船では…

マクロスフロンティア、バトルフロンティア、環境艦、マクロスクォーター、
空母ダルフィム、
巡洋艦カイトス、
グァンタナモ級宇宙空母、

ウラガ級護衛宇宙空母、
ノーザンプテン級ステルスフリーゲート、
等が鯖に入った。

［…無駄あるような形に思えるんだよね…］

「地上に着水し、開拓都市拠点になるから、
コロニーの様に全面使うには無理だろ」

［あ～開拓拠点都市か…］

環境艦及びマクロスフロンティアをさして話していた。

確かにシティは…亀にのる都市といった構造が必要であろう。
環境艦は…地上につれてく必要あるのかな？
とおもう点が…あることはあるが…

「ま、環境艦はこれから多数入手できそうだしな」

［ほえ？］

「次々と破棄してるんだよ…確か最終的には1隻爆沈で6隻だったかな？」

［な、なぜ…］

「空気の流出が1番の原因だよな」

［そんな規模の船捨てるなんて勿体ない］

「まぁこの後は次回辺りにでも回収した環境艦の修復だな。
ただバジュラスキャンしなきゃいけんけどね」

［バジュラ？］

「ああ…データーにまだいれてないか。こういったのなんだよな」

［……生物兵器ですか。ＢＥＴＡ製造機なら……でもむりそう］

星間航行は単的にまとめると2種類ある。
超空間航行を使うか、時間を使うかだ。

ＢＥＴＡは落着ユニットの形で時間を選んだ。
遥か万年、原種はわからないが億年の世界だろう。

多分無理と判定したのが、フォールドクォーツによるフォールド航行の点だろう。

「ま、幼生体からなら可能かもしれんが…思考が違うからなぁ…」

基本単一シナプス思考により集中思考形態をとる。
個々のバジュラにおいて恐れは存在しない…

「で、後はフォールドシステムの全面更新できるよな」

［今からやるの？］

「……明日だね」

時間も遅い…

最後にまちにまった、
［これが自動工業衛星ですか…］

「ああ、こいつを何度もってきたかったか…」

そこには新統合軍によりレストアされずみの、
各種自動工業衛星がデーターに入っていた。

新統合軍では艦船の製造を地球及びエデンのラグランジュポイントに浮かべた、
自動工場衛星に頼っていた。

プログラミングされた動作を繰り返し、
無人で材料さえいれれば衛星内部で全て生産し、艦船等を組み上げてく…

［ぼくらのライバルだなぁ］

「けど、生産スピードはこっちが上だとおもうよ」

［ぐっ…］

劇中描写みてわかるが…リガード生産ラインなら２０秒で１機、
１分間で３機、
１時間で１８０機、
１日で４３２０機、
１月で約１５万機の生産スピードであった。

艦船においても同様…
１日に標準戦艦が、１隻仕上がる自動工業衛星…

常に監察軍と戦闘を繰り返しているゼントラーティ軍の基幹艦隊を、
生産して支え続けているのだ…

２０００ものの一つであるボトル基幹艦隊が４７０万隻、
それとは別に２０３７年にスピカ３で遭遇した基幹艦隊が、
当時の統合軍の総力戦でなんとか追い払う事ができた。

因みにスピカ３で６時間で壊滅した方面軍が、
巡洋艦１６駆逐艦４８軽空母９、ＶＦ－１１が６００機反応弾使用。
地球総力艦隊が、保持反応兵器９割使用した２５００機による対艦攻撃、
バトル級マクロスキャノン連続斉射…
でやっとだ。

新統合軍が運用するにあたっての問題点は、
総人口からくるパイロット数や艦船運営人員の不足であった。

「ここらへんがゴーストに走ったんだろうね」

［ぼくらみたくね］

「確かに」

あとは残念な事に…
「ゼントラン兵士自動工場衛星はなかったんだよなぁ…」

［文化からタブーになるからじゃ？］

「かもな…」

多分入手しても、一から調整し直すのが大変なんだろう。

というより、
（どうやって魂をいれるんかな？）
に興味をもっていたカオルだった。

……

カオル報告

入手情報
ＶＦ－１９全般
ＶＦ－２２
ＶＦ－２５
ＶＦ－２７ｓブレラ機
ケーニッヒ、
シャイアン２
マクロスフロンティア船団各船
ダルフィム、カイトス

注フロンティア情報はアイランド１だけであり、

船内のケーブルカーや都市所施設等は入手できてません。

第１９９話　マクロスＦより帰還　投稿日２０１１１２１３（後書き）

シェリル「作者！！何帰ってるのよ。わたしを連れて行きなさいの約束は、どうしたの？」

作者「は、はひぃ…もっか」

ナギ少尉「シェリルさん。少しよろしいですか？」

シェリル「あなた誰よ？」

ナギ少尉「ウォーシップガンナー２鋼鉄の咆哮にて副長を勤めている、
ウィルキア解放軍所属ナギ少尉です」

シェリル「その少尉さんが、このわたしに口出すのは、ちゃんと説明できるからなのよね？」

ナギ少尉「はい」

シェリル「説明してごらんなさい」

ナギ少尉「基本Ｍｕｖ－Ｌｕｖの世界に連れ帰っている人は、
その世界において弾き出された人々…
つまり死亡した人々だと、
カオルは考えてるそうです」

シェリル「何よぅ…いいじゃない。生きている人でも」

ナギ少尉「その物語の結末が変わるとしてもですか？」

シェリル「いいんじゃない」

ナギ少尉「余計な人が死んだりしますよ。
例えばグレイスさんとか、アルトさんとか」

シェリル「それは困るわ」
注釈　今出ているシェリルさんは１０話辺りです。

ナギ少尉「で、基本アルトさんとあなた、シェリルさんが死なないと、
Ｍｕｖ－Ｌｕｖの世界にこれないんですよね」

シェリル「えっ、そうなの…？」

作者「あ～その…ナギ少尉の例もあるから…な。
あとは完全な並行世界化…フラグが爆発すると…」

ナギ少尉「わたしの例もありましたね～。
あと並行世界化ですか…」

作者「あの原作者はそういってたからね」

シェリル「ねぇ作者」

作者「は、はひぃ」

シェリル「次回予告やるわよ」

顔を縦にシェイクして肯定する作者。

シェリル「次回、マクロスF技術反映、そして再び…
こんないい女連れて来なかったら、ひどいんだからね」

第２００話　マクロスF技術反映、そして再び…投稿日２０１１１２１６

２００２年２月２８日

「おはよぅ～」

［マスターおはです］

２月の最終日、３月に入る前にやっておくべき事はたんとあった。

昨日鯖にいれた、マクロスF技術による全面改修や更新である。

まずは…惑星攻略艦隊について、

攻略艦隊の主力、改造対象となるコロニーレーザーが１１基にふえていた。

（でフォールドと、ブースターか…
あとピンポイントバリアも入れとくか…）

現在使用している初代マクロス時代のフォールドシステムでは、周囲の空間を包む事で空間ごと移動する為の質量増加のロスが生じる。

また２４０倍も主観時間と客観時間のズレが生じてた。

が、Fの時代のフォールドになると技術発展によりズレが7倍に短

縮。

記録としては、ＶＦ－１９ＥＳというテスト機の分類になるだろう…の機体が、
地球の基地とエデンの基地の間１１光年を１時間５２分で結び、樹立した。

この記録の殆どが、地上停止状態からフォールド規定高度までと、大気圏突入から着地停止までであり、

フォールドの時間は、１４光年を客観時間にすると十数分までに短縮していた。

（あとはフォールド断層があるかどうかだな…）

フォールド断層、文字通り何もない空間であり、
その濃度により落ちたり、情報のみ、転移速度が落ちるのみになる。

これに関してはある前提で通常航行能力がＴＯＰである、
ビッグシリーズを増産して航路開拓探査するしかないだろう。

ブースターに関しては、ＵＣよりマクロスＦのが優れていた。
特に推進剤をほとんど使わない点に関してだ。

（さて、攻略艦隊の護衛艦について…だが）

現在ＵＣのマゼラン級１０隻とサラミス改Ｚ級３０隻が護衛任務についている。
それにバルキリー隊等が護衛任務にあたっているわけだ。

（入れ替えるとしても…）
航宙戦闘艦の分類だと…
マゼラン級５６隻、
サラミス改級２０３隻、
アームド級５隻、
現在の宇宙軍の守備艦艇一覧である。

この艦艇数で太陽系内及びバーナード星系を守備しているのであり、
任務外の予備艦に属するのが
ヤマト級１隻、
マクロス級１隻、
のみである。

ムサイ等は廃艦、
また旧サラミス等は改装された。
ビッグワン系は艦船とは別ジャンル、
ヨークシン級は貨物船に分類されてる。

建造中が、Ｌ４プラットフォームで、
ノプティバガニス級１、
ヤマト級２隻、
佐渡島基地にて、

マゼラン級３隻、
サラミス改級１４隻、
アームド級３隻であった。

（まだまだ基幹艦隊に蹴散らされる戦力だよなぁ…）

最低でも基幹艦隊とガチ戦できる戦力を整えないと、
戦闘用ＢＥＴＡとの戦いは厳しい認識である…

（まぁ…でも地上攻略艦隊の護衛だからなぁ…
出会う前に逃げろ…しかないか…）

サラミス改級では、
バルキリーはファイター形態での発着艦はできない。
緊急展開には難があるが…
生産性能の高さでとりあえず数が１番揃ってはいる。

ヤマト級をいっぱい作れ！
に関しては…確かに火力等はヤマト級が１番だが、
建造期間が長い為そうそう増産ができないものである。

（まぁ…数が揃ったら防空艦にかな…となると）

ヤマト技術による、射撃システム全面改装、対亜光速戦性能向上、
マクロスＦ技術による、フォールドシステム更新、重力制御システ

ム搭載、
ブースター及びスラスター改装。
の改造計画に落ち着いた。

ブースターはヤマトの方が技術的にはだが、
波動エンジンを利用しないといけない為…
プランに入らなかった。
（とりあえず現状の攻略艦隊は、良いとして…
これからの新造艦か…）

佐渡島は５００m以下の建造ドック多数の為、
サラミス改級や、マゼラン級等星系守備艦隊に建造枠を振っている。

鉄原基地は地上艦船、
重慶基地は駐留及びメンテ。

カシュガル基地は現在メンテのみの状態だ。

月面基地は現在建造枠拡張中で４km級対応のドック1だけは確保できてた。
（残ってる艦船建造枠が5だから…ヤマト級にもふるのは必然だが…）

ウラガ級護衛空母にも引かれる。

マクロスクォーターにも引かれる。

バトルフロンティアにも引かれる。

ウラガ級護衛空母は、新マクロス級船団でバルキリーを７０機展開可能な空母であり、
５５０ｍ級、主砲、対空レベルもまぁまぁの様であった。

そして何より自動工業衛星で建造されたもの…
つまりこれから自動量産体制が整うのも見所だった。

そしてマクロスクォーター及びバトルフロンティア…
両方とも建造しないわけがない。
何より自動量産体制を目指して…

［とりあえず、ウラガ級は１０日、マクロスクォーターは…３週間、マクロスフロンティアは２ヶ月かな～？］

「で、ノプティバニガスは？」

［あと４日で完成だよ］

（…とりあえずヤマト２で各１かな？）
テストヘッドをいれ後ほど改造する前提で、建造計画は選択した。

また後々増える地上基地防衛用に、
鉄原基地でビッグトレー砲艦型及びミサイル型の増産に入った。

「とりあえずいままで通り砲艦型５隻と、

対空ミサイルと長距離ミサイルで各1かな」

［進行おこんないんじゃないの？」

「でも留守をからっけつには怖いし…さ」

（でっと…艦載機は次回でいいか…建造施設だな…）

デスク画面の艦船建造枠０の数字をみていた。

前にも話たが、横浜白凌基地ではもう建造はしてない。

理由は幾つかあるが、

建造スペースが１ｋｍ四方しかとってない。

銀河鉄道や、飛行機の往来に支障きたし始めた。

異世界からきた人の専用受け入れスペースが必要。

以上の点であり、

今現在宇宙艦船生産拠点は佐渡島基地と、

Ｌ４プラットフォームに移していた。

月面基地も建造枠拡張中で、この間やっと４ｋｍ級建造ドックが１つ完成したばっかりだった。

とにかく生産能力向上の為…自動工業衛星だ。

材料さえ投入すれば、
自動工業衛星は艦艇や機械の組み立てをオートでやってくれて、
整備する必要がない。
まぁ２０万年も動かすと修理は必要だが…
まさか修理する人々が全滅するとは当時は思ってなかったのだろう…

とのコンセプトで古代プロトカルチャーは、
知能が制限されたゼントラーティ用に自動工業衛星を与えた。

その数、３億とも５億ともいわれる。

とりあえず、その内の破壊放棄された二つを、
マクロス世界より持ってきて、現在修繕中の自動工業衛星２基の状態だ。

（１２００ｋｍの自動工業衛星が取得できなかったのがなぁ…）

マクロス世界の１２００ｋｍ級の生産衛星…
調査の結果自動工業衛星を建造する施設だとわかったが、
構造物がもうもたない為、泣く泣く諦めた一品だ。

その巨体を支える為に押そうものなら、
その部分から崩壊が始まると…

監察軍か、ゼントラーディ軍かどっち側かわからないが、
かなり激しく戦闘が行われたらしい…

その報告後また探査の旅にビッグシリーズは出た。

とりあえず持ち込んだ２０ｋｍ級の修繕目処が3週間後、
１００ｋｍ級がまだわからないの返答はきてた。

「じゃ…新造だと…」

［どのサイズの？］

「１００ｋｍ級の艦船建造タイプ」

［え～と…6ヶ月かな？作ってみないとわからないね］

「まぁしょうがないか…とりあえず1基よろしく」

（あとは…）
リヨンハイヴ跡地基地化案をみてた。

ヨーロッパ方面にての異世界軍及び国連軍の拠点となる。

次にヨーロッパ攻略作戦が発動するまでの最前線基地であり、
また中型チューリップが常設される飛び地でもある。

（防御計画どうするかだな…）

本来ローヌ川とソーヌ川が流れこみ、
西側旧市街はサン・ジャン大教会があり、
またノートルダム大聖堂もある美しい街であった。

フランスの金融機関の本店が多数あり…
また光の祭典が有名だったという。

その他にも南西にあるピラ自然公園等を始め多数の自然公園が周囲にあり、
豊かな自然環境下にあった。

しかし今はどうだろう…
川はなくなり、
フルヴィエールの丘も削られ…

周囲には真っ赤な土が広がっていた。

（自然環境回復も考えながらかなぁ…）

とりあえず過去の跡を復旧しつつ、
それを利用した防衛構造をとるプランを考えだした。

（こんなもんかな～？あと忘れてる事はっと……ないな）

「おし、じゃあいってくるわ」

［環境艦を取得しに？］

「ああ、よろ［まって］え？」

［マスター、サイズが…だから1週間以内だと検査ができないからね］

新造プラットフォームができないと係留すらできない…って事らしい。

「ああわかった。後民間人も多数だと思うからよろしくな」

［多数って？］

「……百万かな？？」

［……居住コロニー直じゃないと対応できないよ］

「だよね……じゃあいってくるわ」

世界扉を開き、再びマクロスフロンティアへ…

―マクロス世界シティフロンティア内―
２０５９年８月２日

さっそく出るとクォーター格納庫目指して分裂体を…

ＶＦ―２５Ｇミハエル機を早速発見するが、
（まだついてないか…）
まだ新型フォールド装置がついてなかった。
とりついてしばらくすると…

「オーライオーライ」

「主任、今この機種に使える実働パックこれ一つだけですから」

「わかってます。パイロットには伝えます」

「接続オッケーです。稼動テスト入ります」

「１番ｏｋ、…２番ｏｋ…」

…

「ルカ」

「あ、先輩…えっとこれが携行型サウンドブースターのマニュアルです」

「ああ、わかった」

「ぶっつけ本番で、すみませんが…」

「ルカのところを信用するよ」
とコクピットに乗りながら…

「ミシェル、ランカを頼む」

「わかってますよ。隊長…ランカちゃんシートベルトつけてね」

「は、はい」

「スカル2からデルタ1へ発進準備整いました」

『スカル2、進入許可及び発進許可します。ランカさんを頼むわね』

「了解…進入許可がでた。出るぞ」

格納庫誘導員が発進エレベーターまで誘導する。

「スカル2発進します」

ランカちゃんを載せているので、リニアカタパルトは使用せずに発艦した。

「これからフォールドはいるけど、気分悪くなったらいうんだよ」

「うん」

「よし、…じゃ…フォールド」

フォールドに突入した。

「と…15分か…ランカちゃん、マイクのチェックお願い」

サウンドブースターのマニュアルを広げながら…

「あ～あ～…」

どうやらミハエルはサウンドブースターの取り扱いは、始めのようだった。

終始機器のチェックに追われ…フォールドアウトする。

「わぁぁぁ」

ランカが感動の声をあげる。

目の前には星がひろがってた。

フォールドブースターを着脱し静止衛星軌道上に浮かべると…

「じゃ、大気圏突入するよ。
スピード落ちたらフォールドブースターをつけるからね」

「うん。ところでミシェルくん…なんで機体起こすの？」

「角度が深いと、燃え付きちゃうからね～」

「へええ～」

翼から熱が上がり赤く周りがそまる。

熱圏を抜けると赤いのがおさまり、
ミハエルが操作してサウンドブースターを装着する。

「じゃ、ランカちゃん頼むよ」

「うん！！」
サウンドブースターの再生を押す。

～星間飛行～

「アルト！お前にバースデープレゼントの配達だー！！」

「みんな！抱きしめて！銀河のはてまで～！！」

「ブースト…レベル４」

着地してランカちゃんが下りてく…

「スクリーン展開…カメラポット展開…
たく、もうちっと研修受けてればよかったな」

バルキリー用サウンドブースターを慣れない手つきで操作する。

「アルト無事か？」

『助かった』

「反乱側はどうだ？」

『敵隊長以外は…ランカに聴き入っている』

鼻血を出し失神してしまうのも見えてた。

「アルト！」

『ああ！やらせるかよっ！諦めろ！貴様の負けだあ！！』

ステージを展開してる為無防備な状態になっているミハエル機に変わって、
敵クアドランにアルト機がつっかかっていく。

『うるせえうるせえ！俺に指図すんじゃねぇ！フハハハ文化だ？歌だ？…

笑わせるね。戦いこそが俺達の命！俺達の血なんだぁぁ！』

～アイモ～

『俺達はそう作られたものだ。そう生きて行かずにはいられないんだよ！！』

『えええ…』

「うぉっ…通信でどなるなよ…」

つまみを下げたようで聞こえない。

…

「終わったかな…」

レーダー反応が消失したのを確認してると…

「馬鹿かお前！スーツもけずに生身で戦場に出てくるなんて！」

アルトが駆け付けた。

「だって、あのくらいしなきゃみんな歌を聴いてくれないかな…って…」

「おいっ！」

「あれ…なんか気が抜けたら、足…」

「ランカ、お前どうしてここまでして」

「だって、伝えたかったんだもん。ハッピーバースデー、アルトくん！」

「ふっ…ありがとうな…ところでミシェル！」

「なんだ？」

「どうやって7日前に、この状態がわかったんだ？」

「ルカが実家から新装備を無理してかりてきたんだよ」

「ルカが？」

「ああ、礼をいっとけよ。でだ、原理はわからんがフォールド断層を気にせずに、
客観時間のズレもない」

「おい、それって…」

「ああ、画期的なゼロタイムフォールドだ。話聞いた時はおどろいたよ」

「ゼロタイムか…」

「ねぇアルト君…」

「ん？」

「兵隊さん達が…」
1列にならんでる。

「サイン会だろうな…」

手というか指先に器用にサイン色紙を摘んでならんでいた。

「ランカ殿、ご度の来訪感謝いたしますぞ。この後の警備は…」
オゴタイ司令が警備しながらサイン会が始まった。

それを見ながら…
「帰りはお前に任せたぜアルト」

「え？」

「忘れたのか？ランカちゃんの…」

（さて、こっちでは終わりだな…）

ひっそりと離脱し高速航宙船を取得したあと、ルーロスを出し…一路フロンティアへと帰還する。

（流石に33海兵隊や慰問スタッフはなぁ…）
救助したかったが、ディメンションイーターには、救助して離脱も間に合いそうもない。

ルーロスなら余裕だが…
乗船までの移動で、倍速何回かければいいかも検討つかなかった。

「ルーロス、フロンティアへ」

「了解、ワープ」

……
カオル報告
明日は…

第２００話　マクロスF技術反映、そして再び…投稿日２０１１１２１６（後書

シェリル「ちょっと作者!!ってあれ?どこに行ったのよ?」

ナギ少尉「遠い旅に出ました。えいちゃんとか何とかで…」

シェリル「はぁ?このわたし、
シェリルが不満をぶちまけにきたのよ!!」

ナギ少尉「あと作者から……」

引ったくるように読み上げるシェリル様。
シェリル「なになに?…きったない字ね～
…幼稚園がかいてんじゃないでしょうね?
え～と…拝啓シェリル様、今回の話はスーパーフォールドパック狙いなので外せません。
次回も狙いがあるので、シェリル様が活躍しない回です。申し訳ありません…
まぁ…そういった事ならしょうがないわね」

ナギ少尉「ちょうどシェリルさん人質でベットにでしたからね～」

シェリル「そうなのよ…ワースト3位の回ね…
まぁ作者がいないんじゃ次回予告は?」

ナギ少尉「はい、次回…フロンティア奇襲」

シェリル「わたしの活躍ないんだけど、
見なかったらひどいんだからね」

ナギ少尉「お楽しみにぃ」

第２０１話　フロンティア奇襲　投稿日２０１１１２１９

「ところでビッグシリーズからは情報入ってる？」

「えっと～…破棄持ち帰り可能なのを３個見つけたでちって～」

「全部回ると…どんなもん？」

「３日間の行程でちね」

「３日間か……短縮は…」

「これ以上だと、ぼてぃをいじくり回してくれないと、無理でち」

「だよな…」

２日目
２０５９年８月３日

『マクロスフロンティア行政府よりお知らせします。全艦に避難警報が発令されました。
市民の皆様は大至急シェルターに避難して下さい』
艦内にサイレンと共に、避難警報が発令される。

付近歩いていた人達がまたか…と最寄のシェルターへと向きを変え

た。

店も、
「すみませんお客様～」
とお客をだし、閉店作業をしはじめた。

『フロンティアシティ及び各アイランドはシェルダウンを行います。
繰り返しますフロンティアシティ及び各アイランドはシェルダウン
を行います。

公共交通機関は現時刻でもって軍専用運行となります。
市民の方はご利用できなくなりますのでご了承下さい。
電話回線の使用も制限されます。
安否確認の連絡は最寄のシェルターにてお願いいたします』
更に深刻に…シェルダウン、防護殻を下ろす事となる。

市民の足がよりいっそう早くなった。

『統合軍パイロットはコンディション１が発令されました。
大至急所属艦におもどり下さい』

なりふりかまってられない放送内容までとなる…

シティ第１連絡軍港では…

「グリプスへの連絡挺はまだか？」

『アーバへの連絡挺です。次の便は１０分後の予定です』

各艦艇への連絡挺待ちでごったかえしていた。
非番や公休でシティや各アイランドにいた統合軍兵士が所属艦へもどる為だった。
全員が全員バルキリーで移動しているわけでもない。

『クォーターへの連絡挺はゲート2番より出ます』

「すんません通して下さい！！」

ルカが人を掻き分け2番ゲートへと滑りこんでいった。

ビー　プシュー

「出すよ～席についてシートベルトつけてね」

連絡挺内部には座席４０席程あり、着席が5名だった。

「あ、はい」

「おやルカ君か？」

ガコン
固定フックが外れ、連絡挺が押し出され、
エアロック内部に侵入する。

「ケビンさん」

「ルカ君、状況きいてる？」

「艦隊規模進行しか…」

「艦隊規模か…今までにない規模だよな」

「ええ…」

グン　フィーン

エアロックが開き、箱型の連絡挺が宙にリニアの力で押し出され、進路をクォーターにとった。

連絡軍港では多数の連絡挺が出入りしていて、すぐに豆粒のように小さくなり…
そして見えなくなる。
３０ｍサイズの連絡挺だと、そんなもんであろう。

「クォーター、こちら連絡挺１５１挺、お客さん６名乗車、着艦許可を求む」

『こちらクォーター、着艦許可します。トラッキングビームいりますか？』

「お願いする」

クォーターから誘導ビームがだされ、連絡挺デッキへと吸い込まれてく。

「ありがとうございました！」

「頑張れよ」

「はい！」

ルカが勢いよく艦内へと…

ビー　プシュー

連絡挺１５１はシティ連絡軍港へと向かう。

……

さて分裂体の１つのカオルは…ララミア機に取り付いていた。

『いいか諸君。まさに背水の陣だ。防衛線の内側に一匹たりとも通してはならん。
全艦、トランスフォーメーション！』

『遅れるな！ネネ、ララミア！』
『はい！』

『スカルリーダーより各機。攻撃開始！』

戦闘準備整えた各艦から、主砲斉射が始まる。

バジュラ側も布陣を整えていたのだろう…

警報発令より３０分にて戦端が開始された。

―バトルフロンティアＣＩＣ―

もちろん戦況確認の為ここにもとりついている。

「クレイオス轟沈！」

「第１８中隊、壊滅状態です！」

「エルム７応答してください。エルム７」

「戦況は」

「閣下！」

「現状はほぼ互角。新統合憲章の特例事項を適用し、反応兵器の使用を許可頂ければ乗り切れるかと」

「…全面戦争をしろと言うのか」

キノコが大統領に囁いてた。

まだ各船団との数少ない交流があったフロンティア船団。

それが完全に絶たれる道…全面戦争だ。

特例事項を適用すると、民間安全保持の為、

この場合フロンティア広報及び地球本部に対してだが、
何と戦闘状態に陥ってるのか、その予測規模など詳細を公表しなければならない。

そうなると…人が来たがるわけがなくなり、観光で成り立っている産業どころか、
運送業、また航宙業界においても安全面からと大手中堅辺りが取り扱い停止となり、
他船団との航路や運輸がなくなる事にとなる…
あっても法外な値段取引となるなんでも屋や、
フロンティア拠点業者位だろう。

その決断を大統領は迫られていた…

一方、クォーター艦橋から、勿論そっちもとりついてたが…
ありえない情報が入っていた。

「艦長!!スカル3撃墜!!」

「なに?」
(は?ルカも?)

スカル2シェリル機を助けに向かったまでは原作通り、
しかし、あろう事か撃墜されてしまった。

「……無事です。パイロットは無事です!」

「スカル４反応！アルト准尉が戻ってきました！」
（ルカ…この場面で落とされたか？）
「おお…」
「スカル２、３の周囲のバジュラ反応減っていきます」
「スカル３、身体問題なし」
「よし、スカル３のゴーストを遠隔で戻せ、再出撃準備を整えておけ」
―バトルフロンティア艦橋―
「大統領」
「くどい、なんとか互角に持ちこたえてるんだろ？ならば押し返してみせたまえ」
「し、しかし…」
「なんの為の統合軍なんだ？」

「……わかりました…」

決断が下って司令が指示出そうとすると…

「フロンティア後方、６－４にデフォールド反応多数確認！」

「高エネルギー反応、攻撃来ますッ！！」

「リパルシブフィールド最大！！」

「くぅっ…もってくれ」

シールドへの直撃の振動がバトル艦の艦橋へ伝わる。

しかし祈りは届かず…

「きゃぁぁ」

艦橋に振動が伝わり揺らされる。

「どうした！？！？」

「アイランド１に直撃っ！」

「環境維持システム最大！最優先モード！」

ーフロンティアシティ内部ー

直撃の被害が及ばなく生き延びた人々が、

次々と空気がシールド貫通の穴を通り、

そこに吸い込まれてく…

（ひかりとなれぇ～）

真空へとほうり出される人々を次々と救出してく。

『メインアイランド内部に空気漏れ発生中です。
市民の皆様は付近のシェルターに避難して下さい。
繰り返します。
現在メインアイランド内に空気漏れが発生中です。
市民の皆様は付近のシェルターに避難して下さい』

おそらく気圧低下での自動放送だろう…

車、戦車なども次々と貫通した穴に空気と共に吸い出される中、
虚しく流れていた。

―バトルフロンティア艦橋―

「陽動作戦!?」

「馬鹿な。脳すら持たないような下等生物の分際で!」

「あの船です。バジュラとは思えないほどの組織だった攻撃。
ならば、指令を出している者がいる筈です。違いますか?」

「確証はあるのか?」
頷くキノコ。

「止むを得ん。全軍に反応弾の使用許可を。マクロスクォーターに

回線を繋げ！」

一方、ララミア機では…

『デルタ1より、S・M・S全部隊に告ぐ。プレジデントオーダーだ。
これより我々は、後方に現れた敵主力部隊に総攻撃を掛ける！
目標、敵超大型空母！』

『待ってくれ！奴の中にはランカがいる！
俺に救出の許可を！』
戦隊内回線にアルトが割り込んできた。

「ランカちゃんが…」

『アルト准尉、アーマードパック、並びに反応弾の使用を許可する。
ただし、こちらの攻撃の手は緩めん。力を見せろ！』

『了解！』

「そうこなくっちゃね♪
さぁ～ってお姉さんも気合いいれますか」

『ネネ、ララミア仕掛けるぞ』

『はい。お姉様』「了解」

後方に出現したバジュラ群へ攻撃を加える。

『デルタ1より各隊へ。１０－１２より敵機多数接近』

『アターック！』
反応弾使用合図が表示され、
後方で反応弾による火弾がひらいた。

『よし、いくぞネネ、ララミア』

「はい」「了解！」

その時だ、正面から赤バジュラのビームが…
「うあぁぅ…ッ！！」
機体直撃とともにララミアを虚数空間にいれ、
爆風とともに離脱した。

（さて…あとは…）

今のところ各環境艦に張り付いていた分裂体からも、
更に直撃したという音沙汰がない。

そうしてると…クォーターからマクロスキャノンが放たれ…
一撃のもとバジュラ司令艦が爆散した。

バジュラが個々に敗走始め…

（さて…環境艦取得まちかな…）

防衛戦の決着はついたようだ。

……

『フロンティア行政府よりお知らせします。
市民の皆様のご協力によりバジュラは撃退できました。
現在メインアイランド内部の与圧が０ですので、
今しばらくシェルター内部でお待ち下さい』

シェルターの外は空気が既に存在しなく、真空…死の空間となっていた。

アイランドに直撃したバジュラ戦艦主砲の規模はでかく、
被害も甚大だった。

そのため、通常エアフィルターが貫通した際に展開する硬化剤がうまくはたらかなかった。

遺体回収作業と同時進行で、
レスキュー隊や統合軍のバルキリーがあいた穴を横断するように、
鉄ワイヤーを仕掛ける。

網目状になって改めて硬化剤が流されてきた。

『フロンティア０１、こちらドックリーダー、開口部の仮充填作業終了、
与圧確認してくれ』

『フロンティア０１了解。……与圧確認です。作業続行してください』

『こちらドックリーダー了解』

充填箇所をより強固にしていく作業にうつる…。

―アイランド１４―

ウーーー

え～ん

何発もくらうもかろうじて与圧が確保できてたアイランド１４…
艦内は火災が発生し、次々と建物をおそってた。

アイランド１は空気が抜けた事により火災は鎮火してたが、
アイランド１４は空気が抜けてない為大規模火災が発生中である。

そして…

『フロンティア行政府からお知らせします。現在アイランド１４にて鎮火不能な規模の火災が発生しています。
その為、約１０分後に窒息消火をアイランド１４にて行います。
引き続きシェルター内でお待ち頂くようお願いいたします』

空気が別のアイランドに吸い込まれ…
火災は鎮火した。
シェルターに避難できてない人々は窒息する運命だったろう。

（約千人と数十万人の選択だとな…）

再び空気の流入が始まる。

『フロンティア行政府よりお知らせします。
火災は鎮火し、バジュラ群も撤退しました。
避難警報を解除いたします。ご協力ありがとうございました』

艦内では行方不明等の捜索が始まっていた。
（すんません。回収済みです）

そして住民にとって非情なアナウンスが…
『フロンティア行政府よりお知らせします。
アイランド１４、１５の被害が甚大および環境低下の為、
アイランド１４の放棄、
アイランド１５の凍結が決定しました。
各住民の方々の緊急避難先はアイランド１、エメラルドホールにてご案内いたします。
アイランド１５は４時間後に凍結作業開始します。
アイランド１４の放棄は、２日後の５日午前０時をもちまして行います。
繰り返します。
アイランド１５は４時間後に凍結作業開始、
アイランド１４の放棄は、２日後の５日午前０時をもちまして行います。
詳しいお問い合わせはお近くの市民の窓口にてお願いいたします』

（２日後か…じゃあ…）

今回のフロンティア船団襲撃で、数多くの人々が死者となっていた。
まずは船団直上方向からの主砲直撃により、
突き抜けた主砲によるシェルターごと溶解がアイランド含めて３３箇所。
シェルター破損が１０８箇所。
またアイランド１の空気流出による行方不明等など…

死者、行方不明者を数えると…全住民の１０％にあたる１００万人近くの人々が、
今回の襲撃でなくなっていた。

そのほとんどを回収したが、救助カプセルの空きが少なくなった為、
一回カプセルを交換して、再度帰還、環境艦を取得をまつ事に…

－Ｍｕｖ－Ｌｕｖ世界アメリカ大統領－

「ふむ…異世界軍からはなんと？」

「各々の国で独自で作れるように研究発展してほしいと…」

「ふむ…」

報告書には、
サラミス級１隻、
それに伴う技術情報提供。
とかかれていた。

「これは各国にか？」

「はい、わかっている限りＥＵ、ソ連、オーストラリア等などに」

「ふむ。少なくとも、あの巨大戦艦を作れるように、追いつかなければな。
研究機関に送れ」

「はっ！」

ヨーロッパ奪回作戦の経過報告書を読んでいた。

ハイヴ攻略時には全体で損害５割、損失１割だった派遣軍だが、
入れ替え等で定数補充し、
イベリア半島等リヨン西側の掃討作戦に移行していた。

ブタベストハイヴ攻略が、４月初め頃…

「４月初めか…終わったら復興支援で影響力強めなくてはな…」

４日目
２０５９年８月２５日

『さあ、いよいよこの日がやってまいりました！
我らが希望の歌姫ランカ・リーさんの活躍で、第７次超長距離フォールドは大成功を収め、
我が船団はついにあのバジュラたちから解放されました。

その成功を記念し、全会一致で議決された祝日が今日、
我々を自由に導いたあの曲「アイモ」にちなんで名づけられたアイモ記念日なのです。

そしてここブロードウェイでは、グラス大統領とランカさんのパレードが行われ、道行く人々に、あ…』

アナウンスしている人が絶句している。
肝心の主役のランカが…居ないからだ。

『大変失礼しました。
現在大統領によるアイモ記念日のパレードが行われてます。
ランカさんは午後の美星学園特設会場でのコンサートには出られるでしょう。
ではスタジオにかえします』

『ありがとうございました。……ではこのパレードによる交通規制の状況ですが…』

（大統領扱いかわいそす）

カオルは祭を楽しみながら…

……

カオル報告

アイモ記念日を楽しんでます。

第２０１話　フロンティア奇襲　投稿日２０１１１２１９（後書き）

シェリル「作者ー！！」

ナギ少尉「あ、シェリルさん。
作者まだえいちゃん行ってるそうで…帰ってきてないですよ」

シェリル「…あんたにいってもしょうがないわね。
じゃ、帰ってきたらお仕置き手伝ってね」

ナギ少尉「わかりました。けど…何故怒って？」

シェリル「わたしの華麗な飛行シーンがぬかされてるのよ！
それの文句を言いにきたのよ！」

ナギ少尉「あ、作者からメールきました…
カオルの分裂体がとりついてなかったそうです。
なので書きたくともかけなかったそうで…」

シェリル「……返信だしてね。
次回出さなきゃひどいんだからね」

ナギ少尉「わかりました。えっと次回予告…
フロンティア崩壊？お楽しみにぃ」

シェリル「あ、グレイス。えいちゃんってなに？」

グレイス「そうねぇ……矢沢永吉じゃないかしら？」

シェリル「誰それ？」

グレイス「有名なのがファンの方々が白いスーツ姿の、えいちゃんコスして、えいちゃんコール斉唱ね」

シェリル「へぇぇ面白そうね」

グレイス「ギャラクシーネットワークにコンサート映像あったからｕｓｂにおこしておくわね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3682p/

完全なる予定違い より予期せぬ未来を求めて…

2011年12月19日18時08分発行